

TALES OF CRYING —女神の涙と黒い翼—

ILY

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地の月 gran. 10 月の輝く晴れた夜に、二人は出会った。

これは強くなろうとする少年と、

強さ故に戦わなければいけなかった少女の

二人の絆の物語

2018/5/16 完結

12/28 新章スタート、及びそれに伴い必須タグ「クロスオーバー」を追加しました。

エッジ秘奥義カットイン

クロウ秘奥義カットイン

※所謂テイルズシリーズを原作とした「オリテイ」に属する小説です。オリジナルテイルズとか許せない！という方はすぐに回れ右して悪い夢だったと記憶から消すのを激しくお勧めします。そういうものを許せる人向け。

以前とある場所で連載していたものを加筆・修正・再編集して投稿しているものです。

当然ですが、バンダイナムコゲームス様とは何の関係もありません。

いわゆるシリーズの既存キャラは出ず、術技のみ共通のものが数多く出てきます。

設定・世界・キャラクター・シナリオは完全オリジナルです。

10年以上の連載の長期化で序盤と六十話前後でかなり文章に差があります……可能な限り修正を試みていますが前半部分読みにくかったら申し訳無いです。

pixiv版から人称などをきちんと直したものをこちらへ載せています。

← 最初期仲間内でメール連載していた頃のもの

【<http://x64.peps.jp/expiation>】
← pixiv版

【<http://www.pixiv.net/novel/show.php?id=7308490>】

※架空言語翻訳 Fafさん

【人工言語】リパライン語<https://sites.google.com/site/3tvalineparine/home>

目次

ゲームシステム・キャラクター解説	1
全キャラクター戦闘能力解説	10
カースメリア大陸編 主要登場人物	21
情報ステータス 世界観・用語1	25
序章 カースメリア大陸編	
第一話 はじまりの波音	29
第二話 でこぼこの旅路	41
第三話 無敵の賞金稼ぎ 漆黒の翼	53
第四話 紅い傘の少女	63
第五話 『孤氷』のルオン	76
情報ステータス 『スプラウツ』陣営・セブクローバース	87
第六話 スプラウツ	90
第七話 剣の決意	102
第八話 海の彼方へ	114
転章 宝珠編	
第九話 小さな暗雲	123
第十話 記憶呼び起こす災厄の町	133
第十一話 墓標	144
第十二話 If you're CRYING, I want to be beside you.	158
第十三話 リョウカ、雨の日の邂逅	168
第十四話 王都シントリア	181

第十五話	エッジ対アキ	190
宝珠編	主要登場人物	199
第十六話	アキの旅立ち	204
第十七話	サーカスの魔術師	213
第十八話	シンの一族	223
第十九話	強さ、増す思い	231
第二十話	コレクトバースト	243
情報ステータス	世界観・用語2	254
第二十一話	再びの旅立ち	257
第二十二話	港町スオール	266
第二十三話	牙を剥く海	276
第二十四話	色の水晶	285
※世界観・用語2	の情報が更新されました。	295
第二十五話	狂う心	298
第二十六話	少年の剣と王の剣	304
第二十七話	ラーク・テンネシア	312
第二十八話	目を覚ました現実	317
第二十九話	その剣は誰が為に	325
第三十話	蜘蛛の糸	332
第三十一話	共『逃』	339
第三十二話	水の都との別れ	347
※世界観・用語2	の情報が更新されました。	354
第三十三話	識別名を持つ子供達	358
※セブクロバーズの情報が更新されました。		368
第三十四話	追跡開始	371

第三十五話	友と意地にかけて	378
第三十六話	ラーク対クリフ	386
第三十七話	決着	394
第三十八話	立ち止まり、道は続く	401
第三十九話	日常という異常	408
※セブンクローバーズの情報が更新されました。		415
第四十話	『紅蓮』のセルフイー	419
第四十一話	『黒翼』対『巖岩』	427
第四十二話	どんなに離れても君に手を伸ばす	436
第四十三話	シンの一族対セブンクローバーズ	444
※セブンクローバーズの情報が更新されました。		452
第四十四話	眠りの王女	458
第四十五話	『願いの樹』	466
第四十六話	クロウの望み	473
第四十七話	白い狂気	480
※セブンクローバーズの情報が更新されました。		488
第四十八話	秘めたる奥義へ	494
第四十九話	王都脱走作戦	502
第五十話	「身」と「心」	510
第五十一話	心の郷 イノアザート	517
第五十二話	少女と射手	524
※セブンクローバーズの情報が更新されました。		531
第五十三話	騎士の誇り	538
第五十四話	炎の華と、麒麟菊	545
第五十五話	『混血児』	552

最終章 『共生体』編

最終章 主要登場人物

第五十六話 焼失する街

世界観・用語解説3

第五十七話 「秋」対「涼夏」

幕間の外伝く過ぎいく秋雨の記憶く

第五十八話 煉獄の炎

第五十九話 終息、それは

第六十話 目覚め

第六十一話 担い手なき深海の剣

第六十二話 建国の伝説

※世界観・用語3の情報ステータスが更新されました

第六十三話 『流連』のレパート

第六十四話 凍った記憶

※セブンクローバーズの情報が更新されました。

第六十五話 例え誰かを殺してでも

第六十六話 本能共鳴技

第六十七話 『共生体』

第六十八話 「クロウ」・グレイス

※世界観・用語3の情報ステータスが更新されました

第六十九話 動き出す運命

第七十話 七人目のクローバーズ

第七十一話 白ト、クロ

※セブンクローバーズの情報が更新されました。

第七十二話 止まれぬ魂

	第七十三話	兄の正義、弟の理想	761
	第七十四話	兄から弟へ	769
	第七十五話	漆黒の翼、再び	775
	第七十六話	水の宝珠の洞窟	783
	第七十七話	Instinct!	790
	第七十八話	鉱石砕きの氷獣	797
	第七十九話	蒼の力	805
	※世界観・用語3の情報ステータスが更新されました		813
	第八十話	世界の砂時計	824
	第八十一話	決着の再戦	831
	第八十二話	セルフィーの答え	841
	第八十三話	双雷激突	853
	第八十四話	其の雷の名前	864
	第八十五話	真っ直ぐな想い	877
	第八十六話	幻想の白、破壊の黒	886
	第八十七話	勝利の対価	897
	※世界観・用語3の情報ステータスが更新されました		907
	第八十八話	落葉	919
	第八十九話	At the lake, like last night.	928
	第九十話	始まりの場所、運命の地	937
	第九十一話	Wings of Hope.	950
	第九十二話	七重結界	963
	第九十三話	『この剣を使ってはならない』	973
	第九十四話	言えなかった言葉	991

最終話 君を想い続ける物語

1000

Another Ending

1011 Another Ending 君と生きる夢を見ていたい

1011

T A L E S O F C R Y I N G E X T R A 世界間記憶元素迷

宮サーキュライツライブラー編

第一頁 追想、無人の闘技場

1028

第二頁 神域

1045

第三頁 時空の剣と、深海の剣

1059

ゲームシステム・キャラクター解説

ダイヤモンドマルチライナーリアモーションバトルシステム（DML-LMBS）

ダイヤ型の盤上の点を三方向へのトライアングルステップで移動し、戦闘を行う3D戦闘システム。

味方同士が同じ点にいる事は可能だが、敵のいる点に移動する事はできない。

これによりアクションだけでなく、味方の陣形・配置も重要となってくる。

外周部から順にサードライン・セカンドライン・ファーストラインとなっておりどのラインにいるかによってトライアングルステップの方向が変化する。

中心点であるエネミースポットは敵専用の地点であり、ボスを初めとした敵が配置される。

ファーストラインは中心点へのステップが行え無い為、前方向へのステップ操作がパリティに変化しタイミングよく繰り出す事で敵の武器攻撃を弾き返す事が出来る。

また、ほぼ全ての深術には回避可能なステップ方向が設定されており、タイミングよく術に対応した方向に回避する事によってダメージをなくす事が出来る。

ただし、全てのラインで指定された方向へのステップが出来るとは限らず、最前線で戦っている時にフロントステップによる回避は出来ず、敵から最も離れたサードラインでの横ステップでしか回避できない術も存在する。回避困難な前線で敵の詠唱の妨害に努めるか、安全に後方から戦うかの判断が求められる。

フォーメーションボーナス

味方との距離によって発生するダメージ変化。

密集している味方の数と距離に応じてダメージが最大20%カットされ、離れている味方それぞれの攻撃・術攻が最大15%上昇する。

これにより、強力な攻撃に対してオート操作の味方が密集してしま

う事による全滅を防ぎやすくなり、通常戦闘での戦略的な各個撃破が狙いやすくなる。

意図的に仲間同士の距離を近づけてダメージを調整したり、仲間を2：2で分け安全に防御ボーナスを得たり、3：1で分け一人に攻撃力ボーナスを集中して、残りのメンバーを守る事も可能。

リコレクト RCゲージ

深術・詠技・属性技などの範囲内に居たキャラクターの武器に、自動的に溜まるディープスの量を示したゲージ。各属性ごとに独立しており、アクティ^活ブ^動状態で溜められるのは一属性だけ。

これのいずれかの属性が満タンになる事で強力なD・RC^{ディープス リコレクト}変化技を発動する事ができ、また、ストーリーが進むことによりもう一つの技の引き金になる。オープンモードと、クローズモードがあり両者を切り替える事でより効率的にゲージを溜める事が出来る。

・オープンモード

武器に最大の効率でディープスを溜める事が出来るモード。常にディープスを可能な限り取り込み、最後にリコレクトした属性のゲージがアクティブに切り替わる。

しかし、その分複数属性の相互干渉の影響が大きく、アクティブに切り替わった属性以外のゲージは減少してしまう。

火属性を使う敵ばかりの場所など一属性のみしか溜まらない環境であれば常にオープンモードでもそれほど問題は出ないものの、複数の属性の深術を使用する敵や味方が入り乱れている場合オープンモードだけでは溜める属性が切り替わり続け、いつまでもD・RC^{ディープス リコレクト}変化が使用できない可能性がある。

・クローズモード

一つの属性のみを溜めるモード。オープンモードと比べると効率は落ちるものの、アクティブとなつている属性以外の攻撃の効果範囲に入ってもゲージは切り替わらない。また、このモードの間はディープスを溜めても他の属性のゲージは減少しない。

初めのうちはオープンモードでD・RC^{ディープス リコレクト}変化を発動したい属性にゲージを切り替え、クローズモードで地道に溜めていくのが基本に

なる。

クリティカルリコレクト

・ C R C

リコレクトの瞬間にモードを切り替えることで発動できるテクニク、オープンからクローズ、クローズからオープンどちらの切り替えでも可能。成功すると他の属性のゲージを減少させる事なくオープンモード以上の効率でゲージを溜めることが可能。また、クリティカルリコレクト

C R Cは発動した瞬間にクローズモードに切り替わる為誤って不要な属性に切り替わる事はない。

・ インステインクティブ・リンクアーツ

最終章のイベント以降使用可能になる連携技。

リコレクト
R Cゲージが最大まで溜まっている時、同属性のゲージが半分以上溜まっている仲間のゲージを最大まで引き上げて二人同時に技を放つ事が可能になる。

この技を使用すると使用した二人のゲージの20%が再チャージされ、威力も通常のD・R C変化の倍以上と強力で戦況を一変させる可能性を持つ。

固有操作

深術士の切り札「コレクトバースト」を始めとしたキャラクター固有の操作。

キャラクターごとに操作の内容が異なるが、いずれも強力な「切り札」に相当する。

キャラ性能

エツジ

剣と術両方を使いこなす万能タイプ。

術防御が高い為術による不意打ちで倒される事が少なく、魔神剣による遠距離への牽制も可能で生存能力が高い。

反面瞬間的な火力では他の仲間には若干劣る。

固有操作『コレクトバースト』

専用のゲージが溜まっている場合深術士の切り札であるコレクトバーストを発動する。これを習得するまでの間はその前段階に当た

る「轟雷装」が発動する。

コレクトバースト発動中は全ての深術の詠唱時間が短縮され、威力が向上し、敵からの術の威力が減少する。また常時集束状態な為全てのRCゲージリコレクトが増加していく。

効果自体はリアトリスのものと同様だが、彼女と違い接近戦闘を行う為ディーフス・RC変化の使用に繋げる事ができ相対的に火力の上昇量は高い。

「轟雷装」しか使用できない段階では、効果は雷属性のRCゲージリコレクトが増加し続けるのみだが一属性に効果が集中している為増加量はコレクトバーストを上回る。(コレクトバースト習得後も通常の術技として使用可能)

『深海の一撃』ディーフスラッシュ

ストーリー終盤から使用可能。

通常攻撃の最終段、及び全ての技の最後に通常攻撃ボタンを長押しする事で高威力の追撃が発生する様になる。

追撃の斬撃はその場に残って多段ヒットする代わりに、発生までに若干のタメ時間を要する。

通常攻撃からの連携全てで使用すると圧倒的な拘束時間と威力を発揮するが、隙も大きい為状況を見て使用する必要がある。

クロウ

闇属性の深術を中心とする深術士だが、詠唱を破棄する事で強引に近距離戦もこなせる超高火力タイプ。最低限の治癒術も使用できる。極めて高いTPと術攻を持つが、TP消費が激しく耐久力は平均以下な為TPが尽きると危険に晒される。その為、適度にスローイングダガーを使った通常攻撃と近接戦闘を織り交ぜる事でそれを防ぐ必要がある。

固有操作『ブラックアウト・アイズ』

通常の倍のTPを消費して詠唱中の闇属性の深術を詠唱破棄して発動する。また、詠唱を挟まずに操作する事で牽制に適した「シャドウエッジ」を発動可能。

『ラーヴァン・ムーブセパレトリー』

長押しで詠唱が発動、黒い巨鳥ラーヴァンを実体化させる。

実体化後はラーヴァンが閻属性の深術を発動する。閻属性の深術の性能が変化し（ブラッディランスを例に挙げるとクロウ自身が使えない。その代わりにTPが常に減り続けTPが無くなるとラーヴァンは消える。また、この状態ではラーヴァンは自動的にクロウを追従し攻撃を行う為、クロウは個別に行動する事が可能になる。

『共生体過剰浸食』

ストーリー終盤から、クロウのHPが0になる瞬間に強制発動する状態。

鉤爪による接近戦闘が可能になり、ステップの速度が飛躍的に上昇。

物理攻撃の数値が術攻撃に置き換えられ、通常攻撃にターゲットへの瞬間移動効果が付与される。

術の詠唱時間も無く、TPの過剰な消費も無いが防御関係の能力は低いままで発動時にHPは全快ではなく最大値の30%までしか回復しない為注意が必要。

アキ

和傘を武器として使う高い攻撃力と、防御力を持つ近接型。

最高の物理攻撃力と広い攻撃範囲を持ち、固有操作により「敵のいる点には移動できない」という前提を崩した自由な位置取りが可能。

また、隙を見て詠唱時間を持った技「詠技」を発動する事で敵をまとめて倒す事が出来る。

固有操作『飛天翔』

攻撃判定を伴って上昇し、敵の上をとって回避・移動する事が出来る。レバーニュートラルで真上、レバー操作で任意の方向へ飛び上がり滞空中は一部の術技が変化する。これにより敵の包囲を破って挟撃をかける事も、離れた敵の詠唱を阻止する事も出来る。

クリフ

格闘術による素早い動きと手数ของ多さ、そして固有操作による様々なサポートを駆使した近接型。特に回復が出来るのは大きい。

ラークに次いで速度が速く、防御も高い。

固有操作『深錬体技』

押し続けている間体の周囲に青い「気」を練り続け、離す事で技として解放する。

この溜めには動作は無く、攻撃中に溜め始める事も可能。

解放のタイミングによって発動する技が変わり、連携の途中で解放すれば敵からの攻撃を防ぐ『殻』、連携終了時なら敵を吹き飛ばす『発』、移動中なら瞬間移動でターゲットとの間合いを詰める『瞬』、防御の瞬間の使用で敵の武器攻撃力を下げる『豪』、待機状態なら周囲の味方を治癒する『回』となる。

溜めた時間の長さによって性能が向上し、モーションが短くなったり効果が向上したりする。

○宝珠編追加メンバー

ラーク

神速の剣と遠距離への攻撃を得意とする高速型。

敵の背後へ回る技や、間合いを無視した攻撃が多く高い攻撃力を活かし素早く敵を倒す。

強力な治癒能力を持つ為常時HPが回復するが、耐久系の能力は軒並み低い為速度を活かして敵の攻撃を適切に回避し続けてこそ真価を發揮する。

固有操作『アクセルモーション』

全ての動作中に行う事が可能な固有操作。操作時に行っている移動・攻撃・ステップ全てのモーションを大幅に加速する。連続使用こそ出来ないものの、これにより移動距離の長い技で一気に間合いを詰めたり、身動きの出来ない連携中に動作を短縮して回避に移行したり出来る。味方との連携のタイミングを調整したり、単純なダメージ

アップ等応用の幅は広い。

リアトリス

回復術と光属性の攻撃術を使う典型的な術士タイプ。

全員の中で唯一近接技を持たず、武器の扱いは出来ないに等しい為
D・RC変化が使えない。なので、RCゲージを溜めた場合の効
果が他のメンバーと異なる。

敵の攻撃を防ぐ事に優れ、味方全員の生存能力を大きく高める。

固有操作『コレクトバースト』

エッジのものと共通。詠唱時間の短縮、術の威力向上、RCゲージ
の増加の効果が得られる。エッジと異なり近接戦闘が出来ず、使用可
能な術技全てが影響を受ける為使うタイミングの重要性はエッジ以
上。

『クリスタル・ジエネレイト』

最大まで溜まったRCゲージを使用して、一定時間敵の攻撃を完
全に退ける『色の水晶』の壁を作り出す。溜めたRCゲージの種類に
よって味方へのステータスアップ効果が発生。

『バースト・ジエネレイト』

クリスタル・ジエネレイトの長押しで発生、強制的に現在のアク
ティブRCゲージを最大まで引き上げて『色の水晶』を瞬間的に作り
出す。

ただし、元のRCゲージとの量の差に応じてTPが大幅に減少し、
『色の水晶』展開中もTPが減少し続ける。この操作でTPが0に
なった場合、ダウンが発生し一定時間リアトリスは行動不能になっ
てしまう。

あらゆる攻撃を瞬時に無効にする強力な技だが、同時に回復役が居
なくなるリスクを持ったハイリスクハイリターンな技。

○『共生体』編追加メンバー

リヨウカ

体の周囲を包む『宵の地衣』の二種類の形態を武器として、変幻自在の動きと手数で戦う近接型。特に武器を持った敵との対人戦に高い能力を発揮する。

『明の天傘』を持つアキと比べて攻撃力・防御力では多少劣るものの術攻で勝利機を見ての詠技の使用での爆発力は彼女を凌ぐ。

固有操作 制圧形態『鋒矢の型』

布を四つに束ねる事で、一撃の破壊力を重視した形態。

固有操作を行う毎にこの形態と『車掛の型』とが交互に切り替わる。

螺旋舞に敵を引き寄せる効果が付与され、双打衝に敵を離す効果が付与される等の効果が付与され、状況に応じて敵との間合いを調整しやすくなる。

連携の間は敵を引き寄せ、最後に吹き飛ばし、詠技に繋げる等の自己完結したヒット&アウェイをする事も、集団の突進を一箇所にとめる事で、後衛の詠唱時間の確保や味方との挟撃などの連携をする事も出来る。

正しく自在に戦いの流れを「制する」基本形態。

固有操作 対人形態『車掛の型』

束ねられた『宵の地衣』の先端が八つに分かれ蜘蛛の脚の様になる、手数と武器を絡め取る事に特化した形態。

ほぼ全てのヒット数が倍増し、近接技全てに『技の出始めに敵の武器攻撃を無効化する』効果が付与される。

これにより、武器攻撃をしてくる敵であればタイミングよくカウンターをする事で強敵相手でも鋼体を強引に削り取りながら一方的に攻撃する事が可能。

ただし、技の発生自体はそこまで早い訳ではなく発生の早い伸閃衝などは無効化時間も短く設定されている為、敵の攻撃ごとに適切な技を選択していかなければ真価を発揮できない。

また、ヒット数の増加により拘束時間が増えるものの、同時に足が止まる時間も増える為乱戦には不向き。

ルオン

弓での遠距離攻撃と、強力な深術による攻撃を得意とする後衛タイプ。

対冷弓「フレキシブルスナイプ」の長距離狙撃モードで直線状の敵をまとめて攻撃する事も可能で、最大の特徴は敵の能力を下げたり、氷柱を発生させる「扇氷閃」で一時的に移動不可のマスを作る事で戦場全体をコントロールする能力。

狙撃手らしく後方から味方全体をサポートする。

固有操作 フリツジド・ゾーン

弓を超低温状態に置き、長距離狙撃モードに切り替える。

発動時に冷気を広範囲から集める攻撃判定が発生し、一定時間フィールド全体の敵の移動速度を下げる。

この操作を行うと弓が若干の溜め時間と引き換えに威力が向上してフィールドの端まで貫通する様になり、確率で敵の物理攻撃力を下げることが付与される。

敵との距離が近くなつた時などは、同じ操作で発生の早いジャンプ攻撃と共に通常の中距離モードに戻り接近してきた敵への迎撃を行いながら隙の少ない通常状態へ移行できる。

全キャラクター戦闘能力解説

パワー……攻撃で扱えるエネルギーの強さ。Aが禁術使い以外の人間・シンの到達できる限界値。Eは最低ランク、全く期待できない。ディフェンス……防げるエネルギーの強さ。基本的にこの評価が同クラス以下までのパワーによる攻撃は防ぐ事が出来る。

スピード……最高速度、反射等総合的な速さ 戦闘に作用する総合評価なので、同ランクでも速度が同一とは限らない（ラークのスピード評価はクリフのものを上回っているが、これは反射と常時発揮できる速度による評価で、瞬間的な速度ではクリフが上回っている）。クリフの様な「気」によるブーストや、宝珠の力、身の一族の身体能力などの力無しではA以上に到達できるものは稀。

メンタル……戦闘に作用する精神、戦略等フィジカル面以外の総合評価。C以下でマイナスに作用する事が多く、B以上ではプラスに作用する事が多くなる。Sは最も戦闘に適したタイプとなるが、あくまで戦闘のみに着目した評価であり評価対象が真つ当な精神構造をしているとは限らない

エツジ

パワー B (物理攻撃力C 術攻撃力C+ デイープス感知B+ 詠唱破棄不可 術構成速度C)

ディフェンス D

スピード B-

メンタル A (やや異常)

深術の使用が出来ることによりパワーはやや高い。(基本的にパワーは扱えるエネルギーの最高値を主に基準としているので深術使いはそれだけで高めであり、術攻撃力Cでも物理攻撃力のAに相当する)

しかし、感覚だけで深術を習得し、一度も他の術士と戦った事が無かった為に防御としての術の使い方を習得しておらず防御能力は最低クラス。

個としての戦力は低いが味方の士気の維持と、戦場において自分自身の役割の適切な判断で無意識ながら戦局全体を優位に運ぶ事に長けており、様々な攻撃への対応手段を学ぶ事で物語が進むほど少しずつディフェンスとメンタルの評価は上昇している。が、同時に「味方が勝てれば良い、仲間が守れればいい」という考え方に偏重しすぎており少しずつ「自分」というものを大切にすることを失っている。

クロウ

パワー A (物理攻撃力D 術攻撃A デイープス感知C 詠唱破棄：闇属性のみ上級まで全て 術構成速度A)

ディフェンス B+

スピード C

メンタル B-

ラーヴァン騎乗時

パワー A+ (物理攻撃力E 術攻撃A+ デイープス感知A+

(※ディープミス展開時限定・ラーヴァンとの触覚共有によるものなので通常の感知とは意味合いが少し異なる) 詠唱破棄：闇属性のみ上級まで全て 術構成速度A+)

ディフェンス A-

スピード B+

メンタル B-

最高クラスの攻撃能力と、技術は稚拙ながら力の差で強引に相手の術を押しつぶす防御能力両方を持つ (技術的にはさほどでも無い為、『ジード』と対峙した時の様に普段の力押しが通じない相手と戦うとディフェンスのランクは一気に下がる。高い技術を持つリアトリスはある程度対応していた)。スピードは術士として平均的なやや低めのCであるものの、これはあくまでクロウ単体の数値でありラーヴァンに騎乗している場合事実上B+相当のスピードを得る。

反面、メンタル面は戦略の安定性で総合評価こそプラス補正のB-であるものの、精神面にはやや難があり相手の戦い方に合わせて後手に回りがちで、能力を十全に発揮できない事も、『ジード』の様な例外

を除いて基本的に力押しでどんな相手とも互角以上に戦えるポテンシャルを持つている為クロウの場合は特にこの精神面での相性の影響が顕著。(※バルロ戦でもクロウは初めから子供達を狙って範囲攻撃を使っていたら勝てたものを無意識に「反撃」という形だけに攻撃方法を限定してしまっており、フレット戦でも実力は互角以上であるにも拘わらず戦い方が不安定になる所が見受けられる)

アキ

パワー B+(物理攻撃力A 術攻撃B(詠技) デイープス感知D

詠唱破棄：—— 術構成速度——)

デイフェンス B

スピード B

メンタル C

攻防一体の『明の天傘』の力で、深術が使えない人間としてはかなり高めの攻撃・防御能力を誇る(パワー・デイフェンスは扱えるエネルギーの最高値を基準としているので、武器のみの数値としては異例の高さ)。前衛の中では攻守の合計が最も高い。

また、スピードの総合評価としてはやや高い程度のBであるものの、空中を翔る際にはB+相当のスピードとなる。

評価には含まれないものの、攻撃手段の限られる空中を戦闘の場と出来るアドバンテージから飛び道具以外の近接武器に対する回避能力は高め。

物理的な攻撃を防ぎつつ反撃する事が可能であるためエツジやクリフなどの近接戦闘寄りの相手に強い反面、デイープス感知の低さと術を防御しきれない事もあり単独での深術士の相手はやや不得手。味方に優秀な術士が居ればきっちり役割分担して渡り合える、良くも悪くも重装備タイプの前衛としての色が強い。

クリフ

パワー B(物理攻撃力B+ 術攻撃C(『発』等) デイープス感

知D 詠唱破棄：—— 術構成速度——)

デイフェンス B

スピード A

メンタル B

『発』によるパワー、『殻』によるディフェンス、『瞬』によるスピードと多彩な技を持ったため全体的に高めの評価を持ち、回復までこなす為サポート能力が高い。

特に『瞬』の速度は凄まじく、瞬間的な速度だけなら仲間達の中で最も速い。一方でこれらの技にはいずれも発動までのタイムラグがある為、地力のみで戦わなければいけない時間が延びると対ラーク戦の様に苦戦を強いられやすく、特に全体的な能力で劣る相手との戦いとなると良くも悪くも深錬体技に戦局を左右される。

派手さは無いが「負けない戦い」が得意な方であり、防御の固い半面速度が遅いアキや、速度はあっても防御手段そのものは少ないラーク等と異なり必要に応じて回避、防御、迎撃を選択し仲間の回復を行う事で全体の戦線維持に貢献する。

ラーク

パワー B―(物理攻撃力A+ 術攻撃―― ディープス感知E
(ほぼ感知できない) 詠唱破棄：―― 術構成速度――)

ディフェンス C+

スピード A+

メンタル A―

深術などの特殊な攻撃手段を一切使うことが出来ない為にパワーは低めながら単純な筋力は最も高い。

身の一族としての身体能力の高さと、軽い傷の回復能力から近接戦闘に絶大なアドバンテージを誇り、特に高速戦闘で敵の急所を狙い「人を殺す事」に特化している。

深術士の術の使える範囲は原則として視界の範囲内のみであり、(よほど遠くまで開けた場所でない限り) 詠唱の時間を与えずに即座に相手を仕留めるため深術士にとっては天敵に等しい。

反面、「接華浮灯の陣」によって感知領域を大幅に広げてラークの速度についてくる『紅蓮』のセルフイーや、接近戦闘でラークと渡り合う能力を持ち強力な深術も使いこなす『爪雷』のフレット等とは、純粋な攻撃力の勝負になってしまい相性が悪い。

良くも悪くも全ての能力が武器戦闘に特化しており、術士として高い能力を持つ半面接近戦が全く行えないリアトリスと組む事で、互いの欠点を補い長所を最大限発揮する。

リアトリス

パワー B＋(物理攻撃力E 術攻撃B― デイープス感知S 詠

唱破棄：防御術全般 術構成速度A―)

ディフェンス S―

スピード C

メンタル D

強力な防御術と、光属性を中心とした正確無比な攻撃術、そして回復術を扱う交深術士。
コンバッシヨナイザ

防御に特化した補助型の術士で、光属性を使う事が多いものの実は六属性全てを扱える。(※そもそも『色の水晶』は六属性のデイープスの結晶体)

全ての属性の特徴を熟知し、感覚的に瞬時に最適な方法を導き出してあらゆる術を防御する。

また、攻撃術の威力はエッジより少し高い程度で扱える種類こそ少ないものの交深術士としての特性により相手の防御の穴をすり抜けたり、術の弱い所をピンポイントで破壊する事に長けており、ラークが術士という「人」に強いのに対してリアトリスは「術」そのものに対して絶対的な優位を誇る。

弱点は防御術以外は全てに詠唱時間を要し、接近戦闘になってしまった瞬間(時間稼ぎは出来ても)勝ち目が全く無くなってしまいう事。武器による攻撃に対しても全くの素人であり、とっさに反応する事が出来ない。

この欠点をほぼ完全にカバーできるラークとは付き合いの長さもあつてとても相性が良く、作中でも屈指のコンビネーションを誇る。

リョウカ

パワー B＋(物理攻撃力B 術攻撃B＋(詠技) デイープス感知

C 詠唱破棄：― 術構成速度―)

ディフェンス B―

スピード B―

メンタル A―

武器とする『宵の地衣』が『明の天傘』と対になる事もあって、アキと近い能力を持つ。

単純な物理攻撃力と防御力ではアキが上回り、武器の回数と小回り、そして切り札である詠技の攻撃力では若干リョウカが上回る。

アキの方が大型のモンスター等を相手するのに向いており、対してリョウカは敵の武器を絡め取ったり拘束したりどちらかというところ一対一での武器戦闘に向いている。

伸縮する布は長大なリーチを誇り、最大限にまで伸ばすと5m近い射程を持つ。元々『宵の地衣』が護身用として作られている事もあり、殺傷能力に関してはあまり高くないが、自分自身の身を守る事に関しては非常に強力。

また『明の天傘』と『宵の地衣』は両方が揃う事でディープスの集束効率を引き上げ、動作速度・攻撃の威力を引き上げる為両者が揃った場合の詠技の最大威力は他の仲間達を圧倒し、理論上条件が揃えばクロウにも迫る勢いの力を発揮する事すら可能。

《爪雷》

パワー A (物理攻撃力A 術攻撃A― ディープス感知B 詠唱

破棄：雷属性初級 術構成速度B―)

ディフェンス B

スピード A

メンタル A+ (戦闘狂)

総合的に高い実力を持つ最強のクローバース。

身の一族の血からラークに迫るスピードと体力を持ち、それに加えて心の一族の血からヒトとして最高の術攻撃能力まで併せ持つ。

特筆すべきはその属性技の威力で、持ち前の筋力に加え大量の雷のディープスを一属性使用に特化した専雷爪「スペシャライジング」に上乗せする事で一撃一撃が詠唱を必要とする初級深術並の威力を出している。

また、集束効率を上げるコレクトバースト中の「デュアル・インディ

グネイション」を両鉤爪で重ねた「四電双爆破」はただの属性技ながらエッジ最強の剣技「真空蒼破塵」以上の威力を持つ。

強いて一番低い能力はディフェンスであるが、そもそもラーク同様ほとんどの攻撃手段を回避するスピードを持つ為ディフェンスC+の彼を遥かに上回る値は味方を守るには不向きなもの、個としては十分過ぎる防御能力である。

《巖岩》

パワー B (物理攻撃力B | 術攻撃B+ | ディープス感知B |

詠唱破棄：地属性防御術、地属性初級 術構成速度B)

ディフェンス A

スピード D

メンタル S (戦闘の専門家)

比較的高い感知能力と、詠唱破棄の種類から防御が得意な深術士。リアトリスの様に感覚で即座に相手の術を理解している訳では無く、積み重ねた経験と観察眼で相手の攻撃の弱点を把握しており、どちらかという土地属性の特性からも相手の術の「物理的な弱点」を攻撃する事で深術を破る傾向がある。

その為、不定形の水・火等の深術の対策は若干苦手。

また錬成手甲「岩堵」である程度接近戦にも対応する。

とはいえ、フレットの様に近接戦が得意な訳では無く、あくまで近接戦から術士として優位な間合いに持ち込むのが得意なだけであり、基本的に単独での戦闘能力はクローバーズの中では低め。

が、戦略をきちんと立てて動いており勝てない状況では退き、勝てる状況でしか戦場に姿を現さないため、ある意味では彼を倒すのは最も困難であるとも言える。

事実バルロはクローウ達三人をエッジの捨て身の行動が無ければ逆転出来ないところまで追い詰め、フレットは五対一の無謀な状況でも撤退を考える素振りも見せず結果として敗北している(言い換えればそういった敗北が確定した状況でも戦い続けられるのがフレットの強さであるともいえるが)。

《紅蓮》

パワー A―(物理攻撃力D 術攻撃A― ディープス感知S―
詠唱破棄：火属性上級『エクスポード』(炎熱鉱石の補助使用)、火
属性初級 術構成速度B十)

ディフェンス B十

スピード C

メンタル A―

最高クラスの感知能力により、普通ならば軽い日常生活の補助程度
の炎熱鉱石を「武器」として扱う。

鉱石の補助があるとはいえフレットと同レベルの深術を詠唱なし
で発動することが出来、その破壊力は初見の相手にとっては六人の中
で最も驚異になり得る。

また、防御と攻撃を兼ね備える切り札「接華浮灯の陣」により相手
の近接戦闘そのものを封じる為単独での戦闘能力も高いが、能力の大
部分を炎熱鉱石に依存している為攻防両面において、その弱点を見抜
かれると脆い。

「弱点を見抜かれる前に倒しきる」という攻撃偏重型の術士。

彼女の一番の武器である感知はリアトリスに及ばないが彼女はそ
の差を努力と工夫の積み重ねで埋めており、短期決戦を得意とする攻
撃型と、仲間の戦闘をサポートする防御型の差こそあるものの術士と
しての総合的な能力は彼女とほぼ互角。

《流連》

パワー B(物理攻撃力B十 術攻撃C十 ディープス感知C 詠

唱破棄：風属性初級 術構成速度B―)

ディフェンス D

スピード B

メンタル C

二丁の試作品の武器、深素銃「始」により広い攻撃範囲を持つ。

急所に当たれば対象を一撃で仕留められる威力の弾を連射出来る
為、空間の制圧能力が高い。実体の無い弾を打ち出しているので、射
程は10m強。鍊度の問題から実際に彼がきちんと狙ったものに当
てられるのは2m程。

初級深術の詠唱破棄と併せて相手の隊列を崩すのに向き、銃の攻撃に対して防御手段を持たない剣士等にはとても強い。

一方で、深術障壁を破る手段が無く、稼働時間は10分程度なので銃の攻撃を防げる相手には弱い。

戦闘能力の大部分が銃によるもので、彼自身の実力は「少し詠唱の早い術士」程度でしかない。

《弧氷》

パワー B＋（物理攻撃力A－ 術攻撃B デイープス感知C＋

詠唱破棄：氷属性初級 術構成速度B＋）

デイフェンス B

スピード B＋

メンタル A＋（感情欠落）

耐冷弓「フレキシブルスナイプ」で長射程を持つ狙撃手。矢の最大射程は長距離モードで200m程。

敵の視界外からの攻撃でも殺傷力を損なわない矢を放つ高い身体能力（単純な腕力でこの年齢で既にエッジヤクリフ達以上）と、接近されても跳躍で多少の攻撃は回避できる高い回避能力を持つ。

また術士としての能力も穴が無く平均的に高い為、状況対応力が高い。

氷と火の深術の組み合わせで敵の視界を奪って近距離戦を回避したりもできるものの、この戦闘方法は味方がいる場合味方の視界も奪ってしまう為やはり真価を発揮するのは遠距離戦。距離を空けられない為、自分以上のスピードを持つ相手との戦いはやや不得手。

遠距離の狙った位置に氷の壁を発生させて味方を守ったり、味方が危ない時に瞬時にフォローしたり、戦場全体のサポートをする事も得意とする。

《純白》

パワー B＋（物理攻撃力E 術攻撃B＋ デイープス感知A－

詠唱破棄：幻影（攻撃術不可） 術構成速度B）

デイフェンス A＋（※厳密には「防御」ではなく視界を奪うことによる「無効化」）

スピード C

メンタル S (異常)

極めて特殊な戦闘スタイルを持つ術士。

何重にも張り巡らせた幻影のスクリーンを次々に張り巡らし、その中で深術を詠唱する。

視認では彼女の位置を特定するのは困難であり、本人も移動を繰り返す間にも幻影を展開し続ける為セルフイーヤリアトリスの様な高い感知能力を持つ人間以外では彼女を発見する事すら難しい。

欠点は唯一の攻撃手段である攻撃術の詠唱速度はそれほど早い訳ではない事、幻影は分かっってしまうえば初級深術程度の威力で破壊できる事。

こと攻撃面に関しては深術士共通の弱点「詠唱時間が確保できなければ力を発揮できない」の傾向が七人の中で最も顕著。

その為戦闘開始時が一番無防備なのだが、彼女はこの欠点を「並列詠唱待機」で事前に術を詠唱しておく事で補っている。

基本的に幻影と詠唱待機で自分に有利な状況下からしか彼女は戦闘を始めないが、野生のモンスター等との不意の戦闘は苦手。

ブレイド

パワー A (物理攻撃力A) | 術攻撃A | デイープス感知B | 詠

唱破棄：特殊、剣術 | 術構成速度A)

デیفュンス B+

スピード A |

メンタル A |

アクシズIIワンド王国最強の騎士。

弟のエッジ同様「心」の一族の血を引いており深術と剣術両方に適正を持つ。扱える属性は火、水、風、光。

本来なら剣術、深術それぞれで個別の技術である所を、彼は一つのものとして扱う独自の技として昇華している。

その為、深術単独での能力評価が困難でありブレイド以上のポテンシャルを持つフレットと同等のパワー評価、同等以上の威力の属性技を持つ。

作中ではほぼ最強の接近戦の攻撃力を誇り深術を用いずに正面からの戦いで彼を打ち破るのはほぼ不可能、接近戦闘で渡り合うには彼を上回るスピードが必要になる。

この事から剣の師であるラークに対しては相性的に不利だがカンデラス火山麓での戦闘では部下との連携で彼のスピードを封じ、見知った彼の動きを読むことで互角以上に戦った。

《ジード》

パワー SS (物理攻撃力A) 術攻撃SS (宝珠クラス) デイ
プス感知A+ (※クロウと同様空気中の闇のデイープスを通じて周囲
を感知出来る) 詠唱破棄：闇属性全て 術構成速度A+

デイフェンス S

スピード S

メンタル B

闇の宝珠アスネイシスの残りと同化したジード・カルシートの精神
体。

宝珠の力を自らの意思で振るう、人の域を離れた災厄の類。

クロウと同様の力を有するが彼女のはあくまで小さな欠片による
力の一端でしかなく、その力は天地の差。

人の形を成してはいるものの、背部には鷹を思わせる大型の翼を持
ち『共生体過剰侵食』状態のクロウと同等の飛行速度を持つ。

また生物では無く宝珠を核とした闇のデイープスの集合体である
為空気中のデイープスを集束・再構成する事で再生する能力も所持す
る。

特に闇属性の深術で傷付けられた場合周囲のデイープス濃度の関
係でD・RC変化と同様の原理で術に使用されたデイープスを利用し
て即座に再生してしまう為、闇属性の術ではほとんど傷付ける事が出
来ない。

カースメリア大陸編 主要登場人物

キャラクター紹介1

エッジ・アラゴニート

「そばにいてあげるくらいならできかなと思っただから」

性別：男

武器：長剣

年齢：15才

身長：163cm

トレンツの村に暮らしていた少年。

母親は幼い頃に他界しており、父親も村にいない。

漁師の多い村にあつて、剣を使つて狩りを生業とし少々浮いた存在だったエッジは、クロウと出会い自分の中の『何か』を揺さぶられ旅に出る。

戦い方は我流なのでそれ程高い実力を持っている訳ではないが、見ず知らずの人間であっても、自分を犠牲にして助けようとする節がある。

旅の中で自分の弱さを見つめ、それと折り合いをつけながら成長していく。

この世界では比較的珍しく剣技と、風と雷の深術しんじゆつ両方を武器として戦い、一般人としては十分強力な能力を持っている。(素質としては火属性も持っているが一属性で術が使える程ではない為あまり使わない)

しかし、深術の専門集団である『スプラウツ』を相手するには術士として未熟であり、戦いを生業とする人々と比べると剣技も及ばない。

唯一他者に勝る長所があるとすれば、それは状況に応じて両方を使い分ける柔軟性である。

クロウ

「そんなに止めたかったなら私を斬れば良い！」

性別：女

武器：スローイングダガー

年齢：16才

身長：160cm

海岸でエッジが出会った少女。

物怖じせず、強気なところが目立つ。

また、なかなか他人に対して心を開かず、常に一人で抱え込もうとする。

闇のディープスの扱いに関して、集束コレクトの速度、扱えるディープスの量共に異常とも言える能力を持っているが、それを除けば普通の深術士セキコアラ。

闇のディープスを扱う能力は自身が生まれ持った能力ではない様で、使用時には目の色が本来の紫から黒に変わり、本人でも完全には力を制御できない。

その為、詠唱時間なしで中級以上の術を意のままに操れるが『術の威力と効果範囲が比例してしまう』という欠点を持つ。

市街地での戦闘などでは小回りが利かず、無闇に使えば周りの人々を無差別に巻き込む。

人目を避ける為もあり本人は極力この力を使用しない様にしていく。

なので、目立ちたくない時や、打ち解けるまでの間はエッジ達の前でも自分自身の使える術である水属性と風属性の深術と回復術、それにダガーを使用した戦闘スタイルを採っている。

心の奥底に、他人に裏切られる恐怖。

他人と関わる恐怖を持っており、他者を自分から遠ざける事でその気持ち在必死に覆い隠している。

ジェイン・アキ

「心配しないでください、ってさつきも言いましたよね？」

性別：女

武器：和傘

年齢：14才

身長：153cm

正体不明の少女。

シリアンでエッジ達と出会い、共に王都シントリアまで旅をするこ
とになる。

変わった服装をしており、どこか品の高さを感じさせる雰囲気があ
る。

何故かクロウに恨まれており、リョウカという少女とも何か因縁が
あるらしい。

一見すると武器にはなりそうもない和傘を岩の様な硬度に変え、攻
防一体の武器として扱う。

スイング中の遠心力に地のデーパープスの質量を足すことで石斧の
様な打撃を振るう。地属性の集束^{コレクト}を解除する事で軽い状態で構え直
し、そこから改めて集束状態にして硬度を上げ盾として使う。あるい
は軽いままの状態で風のデーパープスによって飛んだり、炎を纏って急
降下したりとトリッキーかつパワフルな戦い方をする。

その為、隙は大きいものの一撃一撃の破壊力と攻撃範囲ではエッジ
を上回る。

武器は比較的万能なもの、深術は使用できない。

クリフ・セイシャル

「俺……嫌われてんのか？」

性別：男

武器：格闘術

年齢：23才

身長：183cm

マーミンで勝手に旅に着いてきた青年。

根は優しいが、クロウに目の敵にされており、度々冷たくあしらわ
れる。

気と格闘術を武器とし、四人の中で一番戦いに慣れている。ろくに
料理が出来ない三人にとっては何だかんだ頼りになる存在。

手足を使った格闘術の他に、戦闘時は青い『気』を使用して戦う。
エッジの獅子戦吼などと違い、常時身体の周りに纏わせ一定時間ごと

にまとめて放出する形で技として扱う。この『気』の効果は多種多様で、「瞬間的な高速移動」、「対象に傷を付けずに意識を奪う」、「傷を短時間で癒す」……等々状況に応じて様々な技を使い分ける。

情報ステータス 世界観・用語1

ディープス

この世界を構成する物質の一つ。

空気中に多く存在し、様々な性質のものがあるが空気中ではそれが混在しており、単に「ディープス」と言った場合は一般にこの混ざりあつた状態のものをいう。

セキユアラ 深術士はこれを自らの力で変換し、術として扱う。

基本的には火・水・風・地・光・闇の六属性からなり、それ以外の雷や氷のディープス等はこれらから派生して生み出されたもの。

光のディープスは熱を、闇のディープスは冷気を伴い、他の属性と異なり空中でも硬度を持つて安定しやすい為、術として使用される場合は実体化させることによる打撃・斬撃・刺突として主に使われる。

また、その性質上術に対する防壁はこの二属性のどちらかで張られる事が多く、次いで大地から隆起させる事で安定する地属性、闇と水の複合属性である氷属性の順に使用頻度が高い。どの属性を用いるかは術者の資質による。

また、これらの闇・光・地・氷属性のいずれも適正を持たない術士の場合は火や水などの属性で防壁を張る場合もあるが、いずれも壁としては一長一短である為それらの術士が戦闘を行う場合は、

◎他の術士に壁の役目を任せ自分は攻撃のみに徹する。

◎何らかの武器を使用することで近接戦闘もこなす。

◎自分の得意な属性の術での敵の攻撃への妨害・相殺の技術を伸ばす……

等の対策をしている事が多い。

深術

ディープスから特定の性質を持つものを選別し集束し、コレクトそれらを炎や水等に一時的に変換し使役する術のこと。

基本的に長時間持続はせず、消費されなかつたディープスは使つた直後から大気に還つていくが、上級深術や攻撃に特化しない特殊な深術のみ発動後も残る場合がある。

治療系統のものは効果が半永久的に持続するため究めて高度な術である。

しかし、術士が体の構造まで把握した上でなければ使えない為、目に見える軽い外傷以上の傷を治せる者は限られる。

世界

エツジ達の暮らす世界には名前がある。

アエスラング、御伽噺おとぎばなしの女神の名前から取られた名前。

六つの宝珠ほうじゆの伝承があり、それによつて世界は守られているとされる。

火の宝珠シーブレイムス、水の宝珠フラツディルージュ、風の宝珠クレンティンド、地の宝珠グランディアス、光の宝珠サンクオーリス
ト、闇の宝珠アスネイシス。

名前こそ広く伝わっているものの見た物はなく、信じている者は少ない。

四つの大陸と三つの国があり、中央大陸とその南東——エツジが暮らすカースメリア大陸から成るアクシズⅡランド王国と、西のセオニア、東のレーシアに分けられる。

セオニアと中央大陸の間の海には海上都市ヴィツアナがあり、二国間の貿易の大半はここを経由している。

両国から海に隔てられている為事実上の中立地帯の様なものだが、一応セオニアの領土という事になっている。

詠技えいぎ

アキトリヨウカの使用する技。

王都シントリアを中心とした黒髪の一族の古い文化から生まれた独自の技で、動作・ディーパス・技に依じて専用で作られた武器・心・呼吸、の要素を一つにまとめる事で初めて成立するとされ、単に動作の直前に集めた少量のディーパスを使うだけの雷を纏った斬撃や、炎を纏った槍の一撃とは段違いの威力を誇る。

発動までに深術の様に若干の時間を要する。その為、「詠技」の語源は「詠唱」と元を同じくするというのが通説ではあるものの、この技の伝承者の中には「詩歌を詠む」の「詠」であるとされる者も多い。

ディープス リコレクト
D・RC変化技

深術を使えない人間がディープスを利用する為に生み出された技。専門的な訓練を経た一部の人間しか使えない深術と違い、武器を扱う人間の大半が習得している。

使用者はまず、深術の「使った直後から術を構成したディープスは大気に還っていく」性質と、「ディープスは空気中よりも物体に集めやすい」という性質を利用し、深術の使用直後の濃度の濃いディープスを武器に再集束させストックする。

それが一定量を超えた所で解放する事で本来使用者が一度に扱いきれない量のディープスを利用した強力な攻撃を放つ事が可能になる。

また、これにより使用者が深術を使えるほどの資質を持たない属性の技も発動する事が可能（例えば、地と風の属性しか使えない術者でも火属性のD・RC変化を使う事は可能）。

その性質上敵の深術を凌いだ後のカウンターとして使われる事が多いが、深術を自身で使える使用者の場合は攻め手を緩めず追撃する目的で使用する事もある。

変わったところでは、事前に一定量のディープスが武器に溜まっていく必要があるものの、詠技の使用から続けて使用する事も可能。

同等に近い威力の詠技と比べると主な相違点は……

◎発動時の準備動作は無いのでD・RC変化は通常の技と同様に扱えるが、詠技は足を止めて準備する必要がある。

◎D・RC変化は発動の条件がある為、深術の使える人間がない場合基本的に使えない。さらに再集束元となったのが初級術などであった場合複数回ストックしないとまともな威力にならない事もある。詠技はどんな場面でも使える。

◎詠技は専用の特異な武器が必要だが、ディープス・RC変化はおよそディープスが集められる物体なら何でも発動可能。極端な話その辺りに転がっている棒や石でも発動可能。

素材にもよるが、基本的にストックできるディープスの量は武器の体積に比例する。

また、概ね溜めておけるのは一属性。

二属性以上溜めておく事も可能だが、あまり利用されない（仮に剣に溜めておけるディープスの量を10とした場合。火のディープスを4、風のディープスを2、水のディープスを2溜めておく事は可能だが、大体的場合10近くまで同じ属性を溜めないと威力は発揮できず、複数の属性を溜めようとするると互いに干渉して効率が低下する為、使用目的の一属性だけを溜めておくのが一般的）。

なお、当然といえば当然だが「物体に集めやすい」、「使用者がもつとも力をコントロールしやすい」という条件を満たしている為、最もディープス リコレクト
D・RC変化がしやすいのは「使用者の身体」である。

しかし、ディープスを集めるだけならともかく、実際に技として使用する発動者自身に多大なダメージがあるのでまず使われる事は無い。

序章 カースメリア大陸編 第一話 はじまりの波音

暗い森の中を一人の少女が走っていた。

辺りは木はおろか地面さえ見えない位に暗い。

それは単に夜の闇の中の暗さではなく、木々の間から差し込むはずの月明かりさえ拒む暗幕の様な暗さだった。にも拘わらず彼女は木にもぶつからず、足元を石に取られることもなく走り続ける。

「ハア……ハア」

長く走り続けていた為か少女の息は上がり、足元はふらついていく。

いつ果てるとも分からぬ暗闇の中、不意に少女の目の前が明るく開けて森が終わり、急な崖が現れた。

森の終わりで速度を落としていなければ間違いなく落下していただろう。

しかし、少女の顔に疲労の色はあっても、今しがた死にかけたという焦りや追われている恐怖は微塵もなかった。

彼女の目の前には、青い海と夜空が広がっていた。

満月が彼女の紫の長髪に反射する。

その美しい光景には目もくれず、少女は息を整えながら下りられる場所を探して眼下の状況を確認する。

——と、少女が背後から迫る何かに気付き、振り向く。

「！」

突然、周囲が光に包まれ、それと同時に何かが弾ける様な音が響く。

一拍遅れての轟音が辺りにとどろき光が消えると、そこにあった筈の崖と共に少女は消えていた。

崖が崩れた直後、森の中から小さい人影が走ってくる。

「……」

その手の中にある金属製の鉤爪の間で、直前まで起こっていたらしき放電の残滓が消えた。

人影は崖があつた場所を見下ろすと無言で、再び森の中へ去っていった。

いつの間にか森には本来の月明かりが戻り、静寂の帳が降りていた。

海沿いの小さな漁村の中で一番高い建物——自警団の詰め所の屋上で手摺りにもたれ掛かつて、空を見上げている少年がいた。

髪はやや暗い橙色、首に黄金色の石がついたペンダントを下げている。

特に目的があるわけでも、夜空に浮かぶ星に詳しいわけでもなく、ただ遠く離れた場所に何か自分の探すものを求めるように彼は上を見つめ続けた。

少年の名は、エツジ。

主に周辺地域での凶暴な生物に対抗する為に組織された、この村の自警団に所属している。

今日は彼が夜回りの当番で、村の周囲を警戒する事になっていた。エツジはいつも村の外に出る前は、こうして詰め所の屋上に来る。

特にやることは無くとも漁村の他の男達と違い海に出ない彼は、夜風から海を身近に感じるこの時間を大切にしていた。

彼は村の中でも多少浮いた存在で両親がおらず、泳げない代わりに村の中ではあまり使い手がない剣を学んで、狩りで生計を立てている。

育ての親のボブと共に若いながらも自警団の一員として働くことで村の一員として認められてはいたが、彼自身が自分を認められていない様でもあり、そんなエツジの意識が自然と村の外に向き異変に村の誰より早く気が付いたのはごく自然なことかも知れなかった。

エツジが夜回りを始めようと屋上の手摺りから離れ、階段に向かうとしたその時、いきなり微かな光が辺りを一瞬明るくした。それに何か崩れたような音と振動が続く。

彼が咄嗟に音のした方を見ると、村から少し離れた岬が崩れたのが見えた。

(何だ、今の?)

音自体は小さなもので光を見ていなければ気付かなかったかもしれない。少なくとも村に直接影響がある程の自然災害では無さそうだった。

しかし、アクシズⅡワンド王国の端も端、立ち寄る者も少ないこの村で異変があること自体珍しい。

エツジは少し足早に建物全体を貫く螺旋階段を下り、外に出る前にこの自警団の詰め所にいつもいるボブに声をかける。

ボブはエツジの親代わりの様な人で、今は一緒に暮らしていないが小さい頃は同じ屋根の下で暮らした事もある。

両親がいない彼にとって、村で唯一家族に近いおじの様な人だった。

最近、少しお腹周りが気になるようになってきてはいたが、それでもエツジにとって大切な存在である事に変わりは無かった。

「じゃあ、行ってきます」

「ああ、そういえば今日はエツジ君の日か、気を付けてな」

「はい」

軽く頷くとエツジはボブに背を向け入り口の扉から外に出た。

扉を開けると、すかさず入り込む潮風が心地良く彼の顔を撫でる。

しばし、それを楽しむとエツジは再び岬の方へ目を向けた。

(調べに行ってみようかな)

ザザー……

エツジは波の音を聞きながら浜をさっきの岬に向かって歩いていった。

一歩踏み出すごとに、砂とブーツが擦れる音がして波の音と混ざ

る。
ザクツ、ザクツ、ザザーツ……

変わらずに規則正しく波と足音がリズムを刻み、その心地よさに彼は心を奪われそうになる。

と、不意に狩りや夜警の時に出くわすモンスターの気配に似たもの

を感じたエツジは足を止め、右手の森に目を走らせる。

「誰かいるのか？」

背負った長剣に手をかけ、エツジは警戒しながら声を掛ける。

彼の呼びかけに対して、木々の陰から紫の長髪の少女が姿を現した。

何処か鳥を思わせる肩衣が多少印象を緩和してはいるものの、旅人が好んで身につける様な革のコートや野生動物染みた鋭い目付きは十代半ばの少女とは少々不釣り合いだった。

エツジには一目で彼女が村の人間で無いことが分かる。

「誰？」

見つけられたことに少し驚いた様子で少女は少年に尋ねる。

エツジは手を長剣から離し、相手を安心させる為に丁寧に答えた。

「俺か？俺はエツジ・アラゴニート、この近くの村で自警団に入っていて、モンスターかと思って少し警戒してたんだ。それで、君は？」

「私は……私の名前はクロウ。あの、村がどこだか教えてくれない？」
クロウ、と名乗った少女は伏し目がちに村の場所を尋ねる。

「ああ、こつちだよ」

エツジは先に立って歩きだそうとするが、少女に止められる。

「あの、場所だけ教えてもらえれば一人で行けるから」

それは言外に「付いてくるな」と言っていた。

クロウはまだエツジを警戒している様でそれは当然といえば当然かもしれないが、だからといって放って置くのは危険すぎると判断しエツジが付け足す。

「この辺りは夜モンスターが出て危ないんだ、一緒に行くよ」

少女は考え込みしばらく黙っていたが、やがてエツジと目は合わせないまま口を開く。

「じゃあ、村までお願い」

「ああ」

エツジは頷き、先に歩きはじめる。少し間を置いて少女の砂を踏む足音が後ろから付いて来るのを聞いて、彼は振り向かずそのまま来た道を引き返した。

「仕方ない、か」

どこか苛立ちを含んだ眩きとため息をエツジが聞くことは無かった。

《漁の村 トレンツ》

「ここだよ」

エツジたちは幸いモンスター——狂暴な動物のことだが、特に人間に害をなすもの等を区別している——に出会うこともなく、村の入り口に來ることができた。

もつとも村といつても家は数十軒しかない。道もあまり整備されておらずあちこち雑草が生えていたり、途中まであつた道が突然消えていたりする。

エツジも正直何も無いのは分かっていたが、観光客が無いのは当然だろうなと苦笑いしてしまう。

「どこかに休める場所はない?」

少女の質問を聞いて、エツジは少し考えた。

「そうだな、この時間じゃ宿も閉まつてるし、泊めてくれる人も居るかどうか……俺達の住んでる自警団の詰め所位しかないと思うけど、それで良いかな?」

少女は黙って頷く。

なら、とエツジは身振りについてくる様うながした。

詰め所に戻るとまだボブおじさんは先程と同じ所にいた。

「まだ早いのに、どうしたんだい?……ん?……ここに居るのは?」

エツジが見知らぬ子を連れてきたことに気付き、おじさんは身を乗り出して興味を示す。

村への訪問者は勿論のこと、彼が誰かを連れてくる事自体も稀なのだ。

「この子はクロウ、休む場所を探してたんだけど、この時間じゃもう宿も開いてないから連れてきた。空いてるベッド借りても良いかな?」

エツジの説明にボブは納得し、暖かい笑顔を見せる。

「ああ、旅の人か。二階に空き部屋があるからそこを使つて下さい」

その言葉を聞いて、少女は軽く頭を下げる。

「ありがとうございます」

「階段を上がったところの部屋だから、すぐ分かる」

二人がそんなやりとりをしているのをぼんやり聞きながらエツジはクロウ、と名乗った少女を観察していた。

歳は自分と同じくらいか、少し上に見えた。

同年代の他の子と比べるとずいぶん無口で、単に内気で無口な子というのには村にも居るが彼女の場合はそれより冷たい印象だった。

ふと旅の人、という単語がエツジの中で引つ掛かり、彼の脳裏をかすかな疑問がよぎった。

……本当にこの少女は旅人なのだろうか、と。

だが、初対面であれこれ聞くのはエツジも流石に抵抗があり、彼には人の事情を詮索する趣味も無かった。

「じゃあ、俺は夜回りに行ってくださいませ」

疑問を振り払うようにそう言って再び扉をくぐると、エツジは詰め所を出た。

「……」

少女は一瞬だけ少年が去った扉の方を見ると改めてボブに礼を言い、すぐに二階への階段を上っていった。

程なくして、エツジは先程見えた崩れた崖の上についていた。

(これは……)

崖に生えていた苔や草といった物のほとんどが黒く焦げていた。

さつき見た光を合わせて考えたエツジは、何か強い人為的な力で崖は破壊されたのではないかと考える。

漁村であるトレンツの村の中に、こんな事ができるような者は居ない。

そもそもこれほどの破壊が出来る人間がいるのか疑問になる程だった。

(あの子が崖を崩した？だったら何故?)

こんな田舎で崖などを壊してメリットがあるとは考えにくく、そもそも少女が崖を壊したとは限らない。

エッジが気になる事は他にもあった。

この崖に出るまでの森の中で発見した、人が走った様な痕跡。

獣の痕跡と比べてはつきりしており、折れた草などを見るにかなり最近——下手をするとついさつき位のもの。

それに加えてここと同じようにいくつか地面が焦げたり、木が倒れたりしている場所もあった。

（誰かが何かを追いかけて攻撃していた？いや、だとしたら崖で追い詰めたはず。なのに崖の下には何の痕跡もない）

狩りの為の動物の痕跡ならともかく、この様に事件の調査じみたことは専門外でこの現場を見てもエッジの少ない知識では限界があった。

（狩りをしていたら死んだ動物を持ち帰った可能性もあるけど……そもそも、それだけならここまでの破壊をする必要もないだろうし、こんな辺境に出向いてまで狩る価値のある獲物なんていない筈だし）何かあったのは間違いなくとも、結局はつきりとは分からず疑問は増えるばかり。

ただ漠然とあの少女は無関係では無いのではないかとエッジは思う。

色々考えたい事はあってもとりあえず更なる崖崩れの心配は無さそうだとはつきりした為、彼は村の周囲の見回りに戻った。

エッジが村の周りの見回りをしている頃、クロウはベッドの上に座って部屋の窓から村を眺めている。

時間が時間とはいえ、彼女はここまで人気の無い村は見たことが無かった。

「トレンツカ」

田舎だと話で聞いたことはあったが、クロウはまさか自分が直接目にするとは思ひもなかった。

建物も今彼女がいる詰め所が石で造られているくらいで、ほとんどの家は木で造られている。

詰め所のすぐ隣には学校があるが、そこも一階建ての小さなもの。

決して恵まれた環境では無い。

しかし先程の男性も快く部屋を貸してくれ、浜辺で出会った少年もここまでクロウを案内してくれた。

良い村なのだろうと彼女は思う、しかし――

(私は、ここには居られない。まだ何も終わっていない)

すぐにでもここを出ていく準備をしようと思つたクロウは、ここからの不安で少し暗い気分になる。

「こういう所は、私には似合わない……そうでしょう？」

或いは何処か寂しさを感じたのか誰に言うわけでもないのに、彼女の口から自分の影に対してついそんな言葉が漏れた。

いつの間に眠ってしまったか、気が付くとクロウはベッドの上でちゃんと布団も掛けずに寝ていた。

「――朝か」

出来れば彼女は睡眠もせずに出て行くつもりだったが、身体は思った以上に疲労していて眠るしかなかった。

日はまだ昇ったばかりのようで薄暗い。

クロウにこれ以上長居する時間は無かった。

(もう、行かないと)

彼女が身の回りのものを確認していると、ノックの音がした。

どうぞ、とクロウが許可すると昨日の少年が入って来る。

「あ、おはよう……今忙しかったか？」

「何か用ですか？」

彼女は本当は無視して早く準備を済ませたい所だったが一応聞く。

「大したことじゃないけど、聞きたいことがあつて。何でこんな田舎に来たんだ？」

「そんな事聞いて何になるの？」

予想以上につまらない質問だった為、丁寧な対応を心がけながらもクロウの声にほんの少し苛立ちが滲んだ。

「いや、この辺に旅の人が来るのは珍しいからさ、何でだろうと思つて」

「それ、話す必要がある？」

少年は質問を繰り返してくるが、クロウは今度はそれをはっきり拒絶した。

「そうだな、邪魔してごめん」

まだ彼は何か聞きたそうに口を開きかけたがやめ、首を横に振って謝った。

「いいえ……」

エツジと名乗った少年はそれだけ言うとドアを閉めて出ていく。

クロウは軽く眉根を寄せたが、すぐに忘れることにした。

どうせもう会うことも無い相手だ、と。

(そういえば、食料の事を考えていなかった)

何とかして分けて貰えないか、交渉するだけしてみよう。

エツジはまつすぐ家に帰ると、ベッドに身体を投げ出した。

家といつても詰め所のすぐ近くで、彼の唯一の家族だった母が死んでからは他に誰もいない。

食事をしたり、日中生活の場としているのは基本的にボブの居る詰め所の方。

エツジがここに来るのは寝るとき位、それも時々。

家、というより『部屋』という方が正確かもしれない場所。

この建物にもうベッド以外ほとんど何も無くても、考え事したり一人になりたい時エツジにとってはここが一番良い場所だった。

昨日からエツジの頭を離れない疑問。

それを何とかするには直接聞きに行くしかない、と思つて少女の部屋まで行ったのは良かったがほとんどまともに質問することすら出来ず彼は帰ってくる結果になった。

先程の様子からすぐに彼女がこの村を出るつもりだと確信して、エツジは呆然と天井を見上げる。

「ダメだったか」

呟いて彼は頭の中を整理する。

(だけど、得体の知れない力を持った奴が近くにいるのは確かだ。あの子自身ならまだ良いけど、何か……胸騒ぎがする)

エツジが一人考えていると、突然誰かが家の扉をノックする音がした。

慌てて彼は玄関に行き扉を開ける。

(でも、誰だろう?)

空いてる事も多い彼の家には滅多に人は来ない筈だった。

ボブが呼びびに来たのだろうかと思いつながらエツジは扉を開く。

「今、開けます」

外に立っていたのはエツジが知らない男だった。

髪はあまり手入れされていない銀色で、年令は二十代後半というところだろうか。

服装だけは妙に整っており細身のあまり見たことの無い長い剣を下げて、隈のある目は険しい。

エツジは無意識に身を固くした。

「この辺りで紫の髪の子を見なかったか」

「えっと、クロウっていう名前の子ですか?」

兄弟か何かだろうか、エツジは推し量る。

顔はあまりにこやかではなかったが、銀髪の男の口調は意外に穏やかだった。

「どこにいるか教えてくれないか?」

「部屋、貸していただきありがとうございます。食べ物まで」

クロウは支度を済ませ、下の階に降りてきてボブに礼を言っていた。

「いや、気にしなくていい。どうせあの部屋は滅多に使わないんだ、じゃあ気を付けてな」

ボブはまだ眠そうだったが、笑顔でそう言う。

「お世話になりました」

軽く頭を下げるとクロウは、ボブと別れドアを開けて外に出る。
外にはエツジと銀髪の男が待っていた。

「やっと出てきたか……探したぞ」

先程エツジに話しかけた時とは違う、どこか冷たい喋り方で男が言った。

「！」

クロウは男を見ると僅かに驚いた表情をした、しかしすぐにそれは敵意に変わる。

「今すぐ俺と一緒に来い」

クロウは答えず腰のホルダーに挿してあった黒い羽の付いたダガーを抜く。

「ここで逃げても、あいつらが代わりにくるだけだ。おとなしく俺に捕まったほうがまだましだと思うがな」

クロウは黙って男を睨み、動かない。

突然の状況にエツジは困惑した。

(何なんだ、これは?)

案内してきた男が少女と知り合いなのは間違いなかったが、誰がどう鼻屑目に見てもこれは穏やかではない。

少女は武器を抜いており、男も剣は抜かないものの相手の出方を冷静に観察している。

このまま放っておけば危険なのは明らかだった。

(だけど、どうすれば良いんだ)

何がどうなっているのかエツジには分からなかった。

彼がどちらの味方をするのが正しいのかも判別がつかない内に両者は動き出す。

銀髪の男が痺れを切らしたのか剣の柄に手を掛けると、エツジは無意識に自分の剣を抜いて少女を庇う様に飛び出していた。

「いくらお前でもここなら——」

「ましんけん魔神剣！」

「！」

剣閃が空を裂いた。

声と共に、エッジの『気』によって剣から生み出された斬撃が空を駆け、銀髪の男に襲い掛かる。

突然の攻撃に男は驚いて背負っていた剣を砂に突き刺し、飛んできた斬撃を受けとめた。

と、同時に砂が舞い上がり男は咄嗟に腕で目をかばう。

「チッ……」

視界が晴れた時、二人はどこにもいなかった。

第二話 でこぼこの旅路

海からの追い風を背に受けながら、二人は走った。

最初はとにかく先程のシビルという男に見つからない様必死で、村の出口が見えてからはとにかく村から離れる事だけを考えて。

(俺は、何をしてるんだ?)

少女の手を引いて走りながら、エツジは自問を繰り返す。

彼自身何故だかよく分からなかった。

体が勝手に動き、気が付いたら少女に味方していたのだ。

エツジが混乱しながら走っていると、突然手を振り払われる。

彼が振り向くと、少女が怒った表情をしていた。

「何であんなことをしたの?」

「俺はただ……放っておけなかったから」

「そんな理由でいちいち人に干渉しないでくれる?逃げられたことには感謝するけど、これ以上私についてこないで」

拒絶の意を示すと、少女はエツジを置いて一人で歩き出した。

彼は引き止めかけたが突然明確な意志で否定された事に言葉が出て来ず、少女が去るのを見ている事しか出来なかった。

村の外にエツジは一人取り残される。

彼女自身求めているのはエツジも分かっていた。

ただ何故かエツジは、銀髪の男と対峙した時の少女の瞳の中に共感するものを、胸が締め付けられるような痛みを感じ、動かなければいけないという切迫した感情を払いのける事が出来なかった。

エツジは少女が見えなくなると村を振り返った。

見慣れた風景が彼の目には、急に何か物足りないように見える。

けれど、同時にここを後にするには一つだけ気になる事もあった。

この村にはエツジの家族は誰も居ない。

父親は物心ついたときには既に居らず、母親は彼が幼い時に病でこの世を去っていた。

しかし、ここには彼の家族同然だったボブがいる。

出来ればエツジは挨拶をきちんとしたかった。

しかし、エツジが今村に戻ればあの男と遭遇する。クロウの様な少女相手に剣を抜こうとする危険な男と。

戻れば戦闘になり、村の人にも危険が及ぶかもしれない。が、エツジがこのまま去れば、男はクロウを追うにしろ、エツジを追うにしろ村を出るしなくなる。

先延ばしする時間は無かった。

(俺はお人好しなんだか、それとも大馬鹿なのかもしれないな)

自分でもあまりに思い切りが良すぎるとは思いながら、それでもエツジはここでずっと立ち止まっていようとは思えなかった。

「ごめん、母さん、おじさん」

自分の家と詰め所の方を向いてそれだけ言葉にすると、エツジは村に背を向ける。

そして、もう振り返らずクロウの跡を追って走り始めた。

「…………ちだと思っただけだな」

背の高い草が視界を塞ぐ。

勢いよく飛び出したのも束の間、エツジは森で迷っていた。

少女はあの男から逃げているようで、二人の会話を聞くかぎり少女を探している人間は他にもいる様子だった。だとすれば街道をそのまま逃げるようなことはしないだろう——と、考えて人の痕跡をみつけ、森に踏み入ったまでは良かったがこの始末だった。

「参ったな、もう少して日も暮れ始めるし」

ため息混じりにエツジはつい独り言を言う。

と、彼が途方に暮れていると、何かが前方を走り抜ける音がした。

否、それは走り抜けるというより飛んでいく様に思えた。

(何だ?)

咄嗟にエツジは背中の中長剣に手を掛ける。

今のスピードはこの辺りに住む生き物では有り得なかった。

というより、どんなモンスターでも今の様なスピードが出せるとはエツジには思えなかった。

恐怖はあったが、今のが何なのかも彼は確かめておきたかった。
「よう」

エッジは拳を握り締めると、音を追って慎重に走った。
しかし、いくら走っても生き物の影すら見つけられない。

あきらめて立ち止まると、彼自身の荒い呼吸に変わって周囲の音が戻ってくる。

すると、前方から何かの声が聞こえた。

——グルルル……

(この低い唸り声、ウルフか!?)

もっと危険な未知のものを追跡していたことも忘れ、エッジは素早く背中の長剣を抜き茂みの向こうに目を凝らす。

五匹のウルフらしき赤々とした影が見えた。

シルエットこそ大型の狼だが、ウルフの人間に対する凶暴性はそれよりずっと上だった。そして、残念ながらこの辺りに普通の狼は生息していない。

ウルフ達は警戒態勢をとりながらも、いずれもエッジの方を見ていない。他の何かに気をとられているようだ。

と彼が思った直後、いきなり五つ見える影の内一つが倒れた。

(誰か戦ってる?)

よく見えるようにエッジが移動すると、戦っているのはクロウと名乗ったあの少女だった。

(……!)

エッジは急いで茂みを飛び出し、少女とウルフの間に割り込んだ。

「大丈夫か?」

突然の動きがウルフ達を刺激しないか警戒しながら、彼は背後にいる少女に声をかける。

少女は一瞬驚いた様だったが、すぐに戦闘態勢に戻って返事をした。

「ええ、大丈夫」

「とりあえず、ここいらを倒さないと!君は戦えるか?」

エッジが顔だけを僅かに背後へ向けると、少女が黙って頷いたのが

見えた。

一匹は倒したとはいえ、五匹を相手に戦っていたというのに割って入ったエツジより余程落ち着いている。

「よし、じゃあいくぞー！」

エツジは少女に、というより自分自身に気合いを入れる為に言った。

少女がどの位戦えるのかは分からなかったエツジは、彼女に代わり一歩前に出る。

彼は身体を左に捻った体勢から元に戻す勢いを乗せて剣を振り、空を斬った。

「魔神剣！」

その剣から放たれた「斬撃」は彼の気によって攻撃力のある程度保ったまま、手元を離れて飛ぶ。

左端のウルフの前足を直撃したそれは怯ませるが、倒すには至らない。エツジもそれは分かっていた。あくまで一度に四匹に攻撃されない為の牽制。

彼が技を放つのと同時に、右から別のウルフが技の隙を突いて彼に飛び掛かってきた。

エツジは辛うじて引き戻した剣の腹を左手で押さえてそれを受け止める。

四足で駆けていながら少年の胸の高さまで迫るモンスターの重みが、エツジの身体を後退させた。

さらに別の一匹が横をすり抜けて、クロウの方へ行こうとする。

(まずいー！)

エツジは押し合いになっていた正面の敵を力任せに蹴って怯ませ、横を振り向きながら剣を振り下ろす。

クロウの方を狙っていたウルフは無防備な胴にエツジの剣の直撃を受け、斬り伏せられた。

休むことなく更に前方から迫ってきた別の個体にエツジは続けて横薙ぎに斬りつけたが、そちらは掠って一瞬足止めする程度に留ま

る。

敵は残り三匹、大して強くはなくとも一人で相手するには距離が近すぎた。

狩りで日頃モンスターを相手にする事に慣れているエツジも本来なら避ける様な状況だ。

獲物を発見し孤立させ、より倒しやすい状態に持っていった上で最後の段階で行うのが狩りにおける戦闘であり、このような自衛の為の乱戦の経験は彼には殆ど無かった。

(このままじゃまずい、押しきられる)

エツジは再び剣を振るが、また避けられる。

野生動物の反射は決して油断できるものではなかった。

そこへ、彼の背後から少女の力強い声が響く。

「アクアエツジ！」

見えない微かな水飛沫が、エツジの頬を打った。

彼の視界の端を円盤のような水の塊が三つ、走り抜ける。

それは次々とウルフ達を弾き飛ばし、その全身をエツジの力では不可能な力強さで木に打ちつける。

(深術しんじゆつが使えたのか)

深術というのは大気や水に含まれている『ディープス』を集めて、術者がそれを自在に操る術。

ディープスを集めるくらいならほとんどの人間に出来るが、それを自在に操るにはある程度の訓練と適性が必要で誰でも簡単に使える物ではない。エツジの知る限り普通は今のような初級に分類される術を使うだけでも、一年は練習し続けないと使えるようにはならない筈だった。

今の一撃で三匹とも倒したのか、どのウルフも全く動かななくなる。

二人はようやく警戒を解く。

「終わった……」

こういった状況に慣れていないのか、大きく息をついた少女は力が抜けた様にエツジには見えた。

戦闘が終わって落ち着いてみると、クロウの頭にさつき現れた少年の事で疑問が湧く。

(何でこの人はここに居るの?)

ウルフに追い詰められた時に突然現れ、クロウに加勢してきたエツジと名乗った少年。

それ自体は確かに彼女にとっても有り難かったが追い掛けてくる事等彼女は全く頼んでおらず、それどころか街道ではつきりついてくるなど言った筈だった。

「何でついてきたの?」

クロウ自身実際に聞くつもりは無かったのだが、つい興味本位で口から疑問が漏れ出る。

「前から村を出たいと思ってたし……それに、何と無く心配だったから」

何だそれは、とはつきりした答えが返ってこないことにクロウは微かに苛立ちを覚えた。

彼女の表情の変化に気付いたのかエツジは慌てて付け足す。

「ほらー現に今みたいに群れに出くわす事もあるし」

少年の弁明にも、クロウの表情は険しいまま変わらない。

(何?この人は、何となくでこんな危険を犯すの?)

「じゃあこれからどこに行くつもり?」

なるべく感情を表に出さないように心がけながらクロウは尋ねる。

彼女の中で相手の答えは概ね予想がついていたが、案の定少年は少々困った顔になる。

「……決めてない」

「どこに行くかも考えないで村を出たの?」

クロウにはその行動が全く理解できなかつた。

何の理由もなくそこまで見ず知らずの人間を助けようとする人間などいる筈が無いのだから。

(こいつ、本当に馬鹿なの?)

彼女は怒りを通り越して呆れてしまった。

いきなり自分の家を捨て、行く宛もないまま危険な世界に飛び出してきた事になるのだから「それなら普通もう少し焦った方が良いんじゃないだろうか」と。

「ところで、君はどこに行くんだ？」

彼女の気持ちをよそに、エッジは話題を変えるように尋ねた。

「私は海を渡ってシントリアを目指すつもりだけど」

面倒臭かった為か即答したクロウとは反対に、言いにくそうにエッジが口を開く。

「あの、俺も連れていってくれないかな？さつきみたいな事があるなら二人の方が安全だろ？」

クロウはあまりにエッジの態度に怒りを覚えていた為、即座に断ろうかとも思った。

が、実際に助けられたのは事実であり、クロウはそんな人間に借りをそのままにするのはもつと癪だった。

それに少し冷静になった彼女は「旅をするのにも人手があった方が便利かもしれない」、と思い直す。

目的地であるこの国の王都シントリアまでは未だかなりの距離があった。

「どうせ他に行く宛もないんでしょう？放っておいたら死にそうだし、私もあなたに借りがあるから仕方ない、いいよ」

心の中で自分の決定のため息をつきながら、クロウはイエスの返答をする。

「じゃあ、ついて行って良いんだな？」

クロウは半ば諦めて軽く頷きながら、釘を刺す。

「その代わり、王都に着いたらそこでお別れだから。その先どうするかは自分で考えて」

その後のことは彼女の知ったことでは無かった。

「ああ、ありがとう！」

途端に子供っぽい笑顔に変わった少年を見て、クロウはもう一度心の中でだけため息をついた。

二人が話している間にも、日は確実に沈んでいく。

「そろそろ、野営の準備をするか？君も今の戦いで疲れてるだろうし……」

クロウも同意見だったが、一点だけ加減嫌気が差してきていた。

「旅についてくるのは構わないけど、『君』って呼ぶのとかやめてくれない？ずっと堅苦しい言葉を使ってくる人と一緒だと疲れるから」

「あ、ああ……分かった！じゃあ、俺のことも呼び捨てで良いから」

エツジの言葉を聞いてクロウは少しだけ微笑んだ。

「面倒なのは嫌いなもの、当然そのつもりだから」

エツジが喜ぶべきか笑うべきか、反応を決めかねている間にクロウは薪を探して森の中に分け入った。

間を置いて、エツジも探し始めたのをクロウは気配で感じた。

（少なくとも、二人なら薪探しは多少楽が出来そう、か）

とりあえず一つは良いことを見つけてクロウは多少表情を和らげた。

しばらくして、焚き火を間に挟んだ二人はこれからの旅について相談していた。

既に日は沈み、森は闇に覆われている。

凶暴な事を除けばモンスターは普通の動物とさほど変わらないので、十分食用になる。

夕食はウルフの肉を焼く事で何とか足りた（クロウが盛大に焦がしたが）。

が、食べ物があまり無い。

当然、村からいきなり飛び出してきたエツジが旅の用意をしている筈が無い。

クロウもその点に関しては、顔を曇らせた。

「二応、私が村で分けて貰った分はあるけど。二人で食べるには多分足りない」

「このまま補給無しで旅を続けるのも大変だし、どこかの町で食料を調達したほうが良いんじゃないか？」

エツジの提案に、クロウも頷く。

「ここから王都への道で次に着く町はシリアン。確か山門を越えて、そこから道なりに進んだ所にあるはず」

「山を越えてから……それまでは今ある分とモンスターの肉か」

「——で、さつきから気になってただけで何してるの？」

エツジは肉を剥いだウルフの皮を膝に乗せ、ナイフで少しずつ削っていた。

「ああ、腐り始める前に脂とか肉をなるべく取り除いておくんだ。油を塗ってちゃんと乾かせば簡易だけど多少のお金になるかもしれない」

(何でお金は持ってないのに、そんな油は持ってるのよ)

クロウはそう言おうかと思ったが、役に立つ事に変わりは無かったので飲み込んだ。

お金だっけいつ足りなくなるか分からない。

稼げるなら少しでも稼いでおくべきだ。

「山門の辺りに商人でも居れば良いけど」

クロウがため息をついてからは会話が途切れた。

エツジの方は聞きたいことが山の様にあった。

しかし、クロウは話す気が無いらしく、話は済んだと言わんばかりに直ぐに焚き火の傍で眠り始めた。

森の中で二人とも同時に眠るのは危険すぎるので、仕方なくエツジは先に見張りにつくことになった。

翌朝

「エツジ……」

(眠い……誰だ?)

目を閉じたままエツジが横になっていると声が聞こえてきたが、彼にはそれが誰だか判別できなかった。

とりあえずエツジは、薄く目を開け辺りの様子を確認する。

まだ、辺りは薄暗くやつと夜が明けたところだろうか、ぼんやりと木々の葉の輪郭が見える。

「……まだいいか」

エッジは再び目を閉じて、覚めかけた意識を休め再び深い眠りに――

「ふっー！」

グサツ

(何かが刺さったような音が)

嫌な予感を感じてエッジ目を開けると、彼の目の前の地面に鳥の羽のような飾りの付いたダガーが刺さっていた。

(!?)

エッジは無意識に上半身を跳ね起こした。

「おはよう」

凶器を投げつけてきた張本人がエッジに挨拶してくる。

「お、おはよう」

激しく混乱した頭でエッジは何とか言葉を返した。

クロウが彼の傍にきてダガーを抜くと、何事も無かったように元の位置に戻る。

「ぼーっとしてないで行くよ。早く山門を越えないと」

怒るでもなく、当たり前のようにそう急かす。

数秒前に人にダガーを投げ付けてきた人間の言葉とは思えない。

(クロウってこういう子だったのか?)

エッジはこの先の旅が少しだけ不安になってきた。

(明日から起きられなかったら)

それ以上のことをエッジは考えないことにした。

それから特に話もせず二人は森の中を歩き続けた。

既に二時間は歩いただろうか。

周りの景色ではどれだけ進んだか判断しにくかったが、そろそろ森が終わることは二人にも分かった。

「……」

「……」

無言の時間が続く。

「何か話さないの?」

ただでさえ静かな森の中である上、エッジが一切言葉を発しないのでクロウはイライラしていた。

これが一人で旅をしているのなら我慢できただろうが、エッジが隣に無言でいることが彼女には気まずかった。

「えっと、何か話すことあったか？」

「そういう事じゃないけど……何か、あるでしょうか？今後の事……とか？」

クロウ自身明確に具体例を示す事が出来ず、口にして正直八つ当たりのな事に気付いた。

エッジは頭の上に疑問符を浮かべ、それならと質問する。

「じゃあ、村に来たあの男の事とか聞いても良いか？」

「駄目」

彼女は即座に拒否する。

クロウはあまり自分の事は尋ねられなくなかった。夜の交替の見張りや、肉の調理等をやってくれる人間が居るのは彼女にとって楽ではあったが、仲良くするのは願い下げだった。

「じゃあ、何でトレンツに来たのか——」

「それも嫌」

余計な詮索しか飛んでこない事を悟ったクロウは結局黙って歩くのが一番、と割り切って少し疲れを感じながらも足を早める。

エッジは困惑している様子でも、彼女は大して気にしなかった。

(別に私を嫌いになるなら、嫌いになるで構わない)

「無事に抜けられた」

先に森を抜けたクロウが、目の前に続く街道を確認して安堵の声を漏らす。

早く森を抜けようとどんどん先に行ってしまうクロウに、エッジはついて行くのがやっとだった。

「疲れたな」

同意を求めたエッジをクロウが睨む。

エッジは理由が分からず、またも首を傾げる羽目になった。

「とにかく山門まではあと少し——」

「はーはっはっはっは！」

クロウが言い終える前に、誰かの笑い声が響く。

追っ手に見つかつたかと、二人は声のした方に向き直る。

立っていたのは上から下まで真っ黒な格好の、どこか芝居がかつた格好の三人組だつた。

「ふっ、驚いて声も出ないか。行くぞ、お前達！」

中央のリーダーらしき男が叫ぶ。

右側の斧を持った太めの男が、地面を踏み付ける。

「俺を敵に回したものはオノが不運を嘆く、バッド！」

左側の短剣を持った女が、一回転してポーズをとる。

「私の後に残るのは敵の嘆きだけ、サッド！」

中央の男も剣を高々と掲げ、叫ぶ。

「勝利の栄光、グローーリー！」

(……そこは雰囲気揃えなさいよ)

無言のまま心の中で突っ込むクロウ。

さらにそのポーズのまま三人が声を合わせて叫ぶ。

「我ら無敵の、漆黒の翼!!」

第三話 無敵の賞金稼ぎ 漆黒の翼

あまりに妙な登場で場の空気が一瞬にして固まる。

まずバッドとか、サッドとかいうのがただの掛け声なのか名前なのかも判別できない。

「我らは最強の賞金稼ぎ、漆黒の翼！クロウとかいう女はお前だな？」
(賞金稼ぎ?)

エッジの中で何かが引つかかる。

「……」

呼ばれたクロウが反応しないしていると、『バッド』と言っていた男が軽くキレた。

「おい、リーダーが聞いているんだぞー！」

「話さないというのなら、ガキ二人とはいえ容赦しないぞ」

『グローリー』と言っていたリーダーらしき男のガキ、という言葉にクロウがぴくりと指を動かす。

エッジはクロウの周囲に殺気が溢れだしているのに気付いて一歩引いた。

「ちよつとそこ聞いているの!？」

「吹き上がれ……奔流^{ほんりゅう}」

クロウはブツブツと何かを唱えている。

どう考えてもそれは深術の詠唱だ。

エッジは怪しい連中に警告するべきか迷う。

「まあいい、どうしても喋らないというのなら少し痛い目を見てもらうぞ。行くぞお前た——」

「スプレッドー！」

グローリーが言い終えないうちにクロウの声と轟音が響く。

大気中から小さな無数の青い粒子が集まり、瞬く間に水滴に、水球に、人間すら押し流す程の奔流へと変わっていく。

大量の水は三人を巻き込み、空に向かって吹き上がる。

「ぎゃあああー!!」

高々と浮き上がった彼らの様子、そして詠唱の長さ、水量……明ら

かにモンスターに使ったものより強かった。

(鬼か)

エツジは心の中で自称賞金稼ぎの怪しい連中に同情する。

術になった水が大気に還り、ドサツという音とともに漆黒の翼が落ちてきた。

「な、なかなかやるわね」

「ああ、なかなかやる」

斧の男性と、短剣の女性が何とか身を起こす。

「……」

リーダー格の男は白目を剥いて仰向けに倒れている。

「グローリー！起きるんだー！」

今更ながら、さっきのは名前だったらしい。

「……見えるか、お前達……あの川の向こうの……この世のものとは思えぬ花々が……」

「リーダー!!」

がくがくと肩を揺さぶって、元気な二人が必死に起こそうとする。その芝居がかった言動はどこまで本気なのか分からない。

「何か可哀相になってきた」

エツジとクロウは敵がすっかり戦闘態勢を解いてしまった事で、どうするべきか困り立ち尽くす。

と、サッドとバッドはいきなり二人の方を振り向いて叫んだ。

「次に会うときは覚悟しときなー！」

「か、覚悟しておけー！」

捨て台詞を吐くと二人がかりでリーダーらしき男を運んで、漆黒の翼は走り去った。

「何？今の」

クロウはまだ声に不機嫌さが残っている。

(でも、何で賞金稼ぎが襲ってくるんだ?)

この辺りは王都シントリアのある中央大陸より賞金稼ぎが多い。

街道の治安が元々はあまり良くないせいもあり、強盗や盗賊も少な

くないので、基本的に賞金稼ぎはそういった連中を狙っており。その結果として街の治安は何とか保たれている。

が、賞金稼ぎが意味もなく旅人を襲ったという話をエツジはほとんど聞いたことがなかった。

「クロウは追われてる理由に心当たりはないのか？」

「別がないよ」

少しだけ顔を逸らして、クロウは横を向く。

紫の長髪に隠れてその表情は見えない。

「じゃあ……二日前、崖が崩れたのも？」

「――！」

クロウが関係している確証はなかったがエツジが試しに聞くと、敵意のこもった目で彼を睨んできた。

「たまたま崖が崩れる瞬間を見ただけだよ。クロウの姿は見えない。ただ、あんな事村では滅多に無かったし関係があるかどうか聞きたかったんだ」

「そんな事今どうでも良いでしょう、あいつらとは関係ない。こんな所で無駄話をしてる暇があるなら早く山門に向かった方が良いと思うけど」

それは確かにその通りではあったが、何かを隠している気がしてエツジは食い下がる。

「別にクロウを責めたい訳じゃない。ただ出来るなら力になりたいんだ」

「頼んでない」

彼の言葉はクロウには微塵も届かなかった。

彼女の目はいよいよ敵意を増し、これ以上エツジは会話を続けることが出来そうに無かった。

「……そうだな、ごめん」

エツジが謝ると、クロウは彼に背を向けて黙って街道を歩き始める。

奇妙な遭遇から二日。

二人は街道を黙々と歩いていった。

森の時と違うのは、クロウがエツジを振り返りもせず前だけを見ていることだった。

エツジにも崖での事を尋ねた時から警戒されているのが、時々距離が近づいた時だけ彼の方を確認する素振りから分かった。

(やっぱりあの時、俺が見た光の出所にクロウが居たのか)

その反応からしてもクロウは、エツジが村で見た男以外にも誰かに追われているのは間違いない様だった。

それとあの時見た光は恐らくかなり強力な深術だと、色々考えた末にエツジは結論付けていた。

使い方を誤ればどんな被害を出すか分からないというのに、それを村のすぐ近くでたった一人を捕まえるために使うような人間に追われている。

勝手な推測ではあったが、エツジはそう思っていた。

(俺を信用できないのも当然、か)

なら、自分はどうすれば良いのだろうかと彼は考える。これでは何の為に付いてきたのか分からなくなってくる。

そんな事を考えながらも声をかけることは出来ず、エツジはクロウの後を歩き続けた。

《シリアン山門》

日が暮れる頃になって、ようやく二人は山門に着いた。

沈黙のままに歩き続ける時間は途方もなく長く感じたが、今エツジの中には微かな感動があった。

「これがシリアン山門……」

エツジは思わず呟いたものの、実際は門の大きさも馬車が一台通れる程度、見張りは一人だけという小さなものだ。

が、村からほとんど出たことが無い彼にとって、目の前にまるで巨大な壁のような山があるというのは不思議な気分だった。

夕日に染まるその光景は何処か幻想的で、今更ながら自分の慣れ親しんだ土地を離れたのだという実感が沸く。

「そこで止まってるなら置いていくよ」

今のクロウなら間違いないと実行するだろう、エッジは確信する。

「ごめん」

エッジは謝って後を追うが、返事も聞かずにクロウは歩き始めていた。

(また無視……いや、仕方ないか)

彼はほんの少しだけ寂しかったが何も言わず、すぐにクロウの後を追った。

「私の後ろにいる奴もです」

クロウが通行証を見せる。

何でそんな物を持っていたのか疑問は沸いたが、エッジはあえて何も聞かなかった。

「分かりました、道中お気を付けて」

その瞬間二人は空耳を聞いた。

「はーっはっはっはー」

上から響く聞き覚えのある高笑い。

「行こうか」

「ああ」

再び二人の頭上から声が降ってくる。

「待たんか貴様らー！」

黙々と歩き続けたせい、疲れが溜まっているらしい。早く先を急がなければ……二人がそう考えて進むうとすると、目の前に短剣が飛んできて刺さった。

「待てというのが聞こえないのか！」

仕方なく二人が見上げると門の上にグローリーが立っていた。

「……再編集のあおりなのは知ってるけど、一話で二回も出てこないでよ」

クロウがうんざりと呟く。

「そんなところで何をしているー」

山門を守る門番がグローリーに怒鳴る。

門の上に立っている人間を見れば普通はそう言うだろう。

しかし、二人は今更そんな事を指摘する気も起きなかった。

「ふふふ……この私に喧嘩を売るとはいい度胸だ」

(こいつは何をしに来たんだ?)

エツジは呆れた。

無意味な登場をした上に今も門番と喧嘩をしているグローリーは、門の上でまるで『私がこの世界の王だ』とでも言う程に不遜な態度で腕組みしている。

「しかし！今日のところはその勇氣に免じて見逃してやろう！」

そう叫ぶと彼は門の上から、山門の奥へと走り去った。

(逃げるのか……)

(逃げるんだ……)

「追い掛けるか？」

「正直放っておきたいんだけど、どちらにしてもあっち通らなきゃならないから」

相変わらずエツジと目は合わせないがクロウも仕方なく、という感じで賛成する。

「じゃあ、行くか……」

諦めのため息をついて二人は重い足取りで後を追い始めた。

「やつと来たか」

グローリーは思いの外足が速く、追い付くには時間がかかった。

山道は両側を崖に挟まれた道で、グローリーは右の崖の上にいる。

(逃げ足だけは一級品だな)

しかし、返り討ちになって何故また現れたのかエツジは疑問に思う。

クロウという少女を知ってまだ日が浅いエツジにも、下手に彼女を怒らせたら本気で怪我しかねない事は分かった。

「あの、一応言うけど逃げないと危ないぞ……」

エツジが警告する後ろでクロウは既に詠唱を開始している。

「ふっふっふ、私達に何度も同じ手を通じると思うなよ！行け、お前達
!!」

クロウが背後の気配に気付き振り向こうとする。
が、それより早く彼女は後ろから地面に押し倒される。

「くっ……」

(こんな単純な作戦に)

相手を侮るあまり敵の策にはまったことにクロウは苛立つ。

当然、詠唱は中断された。

「作戦成功だな」

「ここまで巧くいくとはね」

のしかかってきたバッドと背後から現われたサッドの声に勝ちを
確信した優越感が漂っている。

「はーはっはっはっは、私達の勝ちだな。お前もおとなしく剣を捨て
るのだ!」

確かにエッジの剣は崖の上にいるグローリーには届かず、どう動こ
うと全員を即座に倒す事はできない。

その上、クロウを人質にとられてしまっでは下手に動けない。

「さあ、どうする?」

グローリーは再び問い掛ける。

「……」

エッジは無言で剣を背中から外し、地面に置いた。

「勝ったな、リーダー!」

「はっはっはっは、さあ、こいつらを縛り上げろ」

「じゃあ、おとなしくしてもらおうよ」

サッドが縄を持ちエッジの方へ近づく。

(最悪……こんな、馬鹿な奴らに捕まるなんて)

自分はバッドの下敷きにされて捕まり、エッジも剣を捨ててしま
い既に下を向いている。これでエッジがサッドに縛られてしまえば自
分達の完全な負け——バッドに捕まったままのクロウはこの状況と、
それを招いた自分の油断に唇を噛み締める。

「……落ちよ」

エッジが下を向いたまま何かを呟く。

クロウはハッ、とした。

空気中のデイクープスに動きがある事に気づいたからだ。

「何だど!? もう一回ゆっくり言ってみろ!!」

エッジが何か話しかけて来たと勘違いしてグロリーが憤る。

「何だか分からないけど、とりあえず大人しくしているー!」

エッジの態度に焦ったのか、バッドがクロウから離れエッジに突進する——はずだった。

しかし、突如空から落ちてきた閃光に阻まれる。

「ぐああ」

バッドが悲鳴をあげて、倒れた。

(雷……?)

クロウの目には一瞬だが、確かに稲妻の折れ曲がった線が見えた。

「バーーーーッド!!」

漆黒の翼の二人が驚愕に目を見開き、倒れたバッドを見る。二人は何が起きたのか分からず混乱していた。

「ごめん、別に恨みは無いんだけど……」

謝るエッジにグロリーがまた、芝居掛かった大げさなりアクションで叫ぶ。

「貴様がやったのかあ!!」

その言葉には答えず、エッジは右手を崖の上のグロリーに向けてる。

「——ライトニング」

「ぐああーーーー!!」

今度は崖の上のグロリーに雷が落ちる。

「Σリーダー!!」

再びサッドが叫ぶ。

「俺は確かに剣を使うけど、だからって深術を使えないとは限らないだろ?」

「おのれ、絶対許さんぞー!」

雷を食らっておきながら、グロリーは何とか立ち上がる。

「それは良いけど……あの」

「『あの』、何だ!」

「そこ危ないよ」

エッジが言ったのとほぼ同時に、クロウの声が人気の無い山道に響く。

「——スプレッド」

さつきバッドがクロウから離れたとき、クロウはありつただけの怨みをこめて詠唱を開始していた。

グローリーの立っている崖からはるか下、エッジ達が立っている地面から巨大な水柱が吹き上がる。

「く、来るなあああー!!」

悲鳴は水の轟音にかき消され、グローリー自身も水に吞まれて見えなくなってしまう。

「だから言ったのに」

エッジは敵に同情しながら、落ちてくるグローリーの姿を見守る。

「……あああああ!!」

本気で生死が心配になるような土煙を上げてグローリーは落下する。

その姿はさながら、攻城用の投石の様だった。

「大丈夫か?」

エッジはグローリーに声をかけてみたが、落ちた衝撃で完全に意識を失っているようだった。目がうず巻きになり、ひよこが飛んでいる。

エッジが黙ってグローリーを担ごうとすると、クロウに制止された。

「何してるの」

反対されるのが分かったので、エッジはなるべく険しい表情を作つてクロウの方を見る。

「このまま放っておいたら危ないと思って」

「自分が何をしてるか分かってる? そんな奴、放っておけばいい」

エッジは彼女の勢いに気圧されて少し視線を逸らす。

「……でも」

口籠もるエッジにクロウがさらに追い打ちをかける。

「敵に情けをかけても何も得られないよ。わざわざ自分の身を危険にさらしたいなら別だけど」

「ごめん……」

仕方なく、どきつという音をたてて気絶したグローリーを降ろす。

「もうここに用はないし、行くよ」

エッジに向かってそう言うと、クロウは気絶したままのグローリー、そして唯一無事で立ち尽くすサッドに視線を移した。

「じゃあね」

ひどく不機嫌な声でクロウがそれだけ言い、二人はその場から去った。

「……結局また私が運ぶのね」

未だに倒れたままの二人を見てサッドはため息をついた。

第四話 紅い傘の少女

漆黒の翼を無事に退け、次の町が近付いて来た事でまた通常の街道に戻っても、相変わらず二人は何も言わずに旅を続けていた。

その沈黙は森を歩いた時のものとは違い、話す事が無いというよりも、むしろ会話を忌避して互いを警戒する様な重苦しい沈黙が続く。そんな旅が五日ほど過ぎた。

六日目の昼過ぎ、二人はようやく次の町の入り口についた。

エツジは噂で聞いたことがあるだけだったが、盗賊が頻繁に現れるようになったせいで最近カースメリア大陸の中央部に当たるこの周辺は大抵の町が柵や壁で囲まれているらしかった。勿論近年急速にモンスターが増えた事も関係あるだろうが。

この町もエツジの身長よりやや高い木の柵で囲まれている。

無論、本気でモンスターの群れが突破しようとするればこれだけでは足りなかったが、町を襲うのを忌避させるのには十分で費用対効果を考えれば比較的現実的な解決策だった。

町の入り口には兜をかぶり簡素な槍を持った門番らしい男が二人居る。

クロウが門番に話しかけると、意外にあっさり町の中へエツジとクロウを通してくれた。

『山門のときのようにクロウが通行証か何かを見せたのか。それとも警備兵が単にいい加減なのか』と、エツジがあれこれ考えているとまたクロウが一人で先に行ってしまったそうなので彼も少し早足で門をくぐった。

《菜の町 シリアン》

「ここがシリアン」

門をくぐって二人にまず見えたのは穀類や野菜が栽培されている畑と、その間に所々見える木で作られた民家だった。

視界の端から端までほとんどが穏やかな風に揺れる鮮緑に埋め尽くされており、畑毎に異なる作物を育てているのか白や黄の花がその景色の中に散っている。

町といっても広さ自体はほとんど都市と言っていい大きさで、人さえもつと多ければきつと本当に都市機能を備えていただろう。

「時間も早いから宿に行くより食料調達の方を先にしないか？」

思い切ってエツジが声をかけるとクロウは急に立ち止まる。

「そうだね」

それだけ言うとエツジの方を振り返りもせず、彼女は店が並んでい
る道の方へ歩いていった。

(ちゃんとついて来てる)

気付かれないように少しだけ振り向いて、クロウはエツジがついて
きていることを確認する。

(こいつはバカだけど信用できないから目を離さないようにしないと)

食材を扱っている店で手に野菜をもったまま、クロウはそう自分に
言い聞かせる。

そうしてずっと同じ食材を手にしている様を迷って居ると取った
らしい店員が、彼女に声をかける。

「——ここはカースメリア大陸の中でも特に良い野菜がとれるからね
どれもおいしいよ！悩まないで、いつそみんな買っていきな」

そんな売り子の女性の声も彼女の耳にはほとんど入らない。

(会って間もない他人なんだし、今は借りがあるから一緒にいるだけ)
クロウは何故まだ自分がエツジと行動を共にしているのか考えて
いた。

そうしている内にふと、彼女はまた借りが増えてしまったことに気
付く。

(でも、あの場合はあいつも漆黒の翼に捕まるからで、私を助けようと
か考えて動いたわけじゃない)

「そんなにトマトが好きなのか？」

いきなり背後から声をかけられたクロウが振り向くと、エツジが少
しおかしな物を見るような顔で彼女を見ていた。

その顔を見たクロウは、自分の中でエツジへの苛立ちが少し増した

様に感じる。

「……別に好きじゃない」

半ば八つ当たりの様にトマトを棚に戻し、クロウは彼を睨み付ける。

「ならいいけど、何かぼーっとしてたから」

その言葉にクロウは歯噛みした。

（あんたには言われたくない）

「それで、何を買うかは決まったか？」

クロウは本当は何も考えて居なかったが、とりあえず目に留まった食材を数個ずつ買って誤魔化した。

（こいつといると疲れる）

食材を買った後道具屋に行き、二人はほとんど持っていなかったグミやボトルを補充した。

「こんなのが本当に役に立つのか？」

はりずり 榛摺の瓢箪の様な容器に入った液体を不思議そうに眺めてエッジが疑問を口にする。

（パナシーアボトルも知らないなんてどんな田舎で生きてきたわけ？）

野生の生物と戦う事になれば当然傷を負う事もある。

そこから菌や或いは毒等人体に有害なものが入れば、その二次的なダメージは場合によっては傷そのものより危険なものにもなり得る。その対策として広くほぼ世界中に普及しているこの薬品は必須とも言えるものだった。

「それは痺れや毒、それから石化を治す薬。もし全員石になったりしたら全滅するよ、常識でしょう？」

説明を聞いたエッジはますます不思議そうな顔をする。

まだ何かあるのだろうか、とクロウは目を細める。

「何でこれがそんなに何でも効くんのだ？」

「知らない」

彼女が一刀両断すると、エッジは納得いかなそうに顔を顰めた。

クロウはそんな彼を置いてさっさと店を出る。

(本当に……こいつといると疲れる)

「買い物も終わったから今日はもう宿に行かないか？」

クロウはエッジとの会話にすっかり辟易していた為、何も言わずに頷く。

日が傾き徐々にオレンジの光に染まり始めたシリアンの町の中を二人が歩いていくと、すぐに宿が見えてきた。

漁村トレンツにあつた自警団の詰め所より一回り大きいものの、あちら程立派な石造りではなく木造の二階建てでまわりの民家と大差ない。重い荷物を持って疲れ切った二人が一も二も無く宿に入ろうとしていると、中から勢い良く出てきて小さな人影と前を歩いていたエッジがぶつかる。

「あつ、すみません！」

慌てた様子で宿の中から出てきたのは十三、四歳くらいの少女だった。

二大陸からなるアクシズⅡワンド王国の中でも辺境の田舎には少々不釣り合いに上品な格好で、珍しい黒髪を後ろで結んでおり、二人が見慣れない長くて柔らかそうな布で作られた服を着ている。

身に付けている物は髪 of 装身具から帯に至るまで上等な素材で出来ているようだったが、スカート部分にはスリットが入って全体的に動きやすさを重視して作られており正装じみた印象は幾分薄まっている。

「本当にすみません、急ぎ過ぎて目の前の注意が疎かになっていました。怪我はしませんでしたか？」

「あ……いや、大丈夫だよ！だから、頭上げて？」

黒髪の少女に頭を下げながら畳み掛けられ、エッジは慌てて「そんな事までしなくて良い」という様に両手を振った。

クロウはそんな様子を見ながら内心で毒づく。

(馬鹿。ぶつかってきた子の方がよっぽど落ち着いてるじゃない)

年下の子供とぶつかったくらいで何を慌てているのか、と彼女は呆

れた。

挙動不審気味のエツジの前で黒髪の少女は頭を上げる。

「では、すみません。私は急ぐのでこれで。本当に申し訳ありませんでした」

そう言つて少女は日の暮れかけた町の中に消えていつてしまった。そこでふと、エツジが引つかかった様に彼女の背中を目で追う。

「今の子、さ」

「何、今の子がどうかした？」

欠伸をしながらクロウが聞く。

彼女は既に宿を目前にして、休む事で頭が一杯だった。

「いや、こんな時間にあの子宿から外に出てどこに行くんだらうと思つて。この辺の子じゃ無さそうなのになつた一人で」

「知らない」

クロウ自身自覚するほど、エツジの疑問に対する彼女の返答は投げ遣りだった。

とはいえ、流石に考えすぎだと思つたのか彼も然程その疑問を引き摺らずにすぐ切り替える。

「まあ、気にする程のことじゃないか」

「そうそう、気にしない気にしない」

またもいい加減な返事をしながら、クロウは先に宿の扉をくぐつた。

シリアンの町外れ。

人気の無い民家——恐らく空き家であろうその家へ先程エツジとぶつかった少女が歩いて来た。

買い物をする様な店も、門も無い場所をしかし彼女は明らかに目的地として足を運び、立ち止まった。

足を止めた彼女へ、男の声が物陰から話し掛ける。

「今日はどうだった」

少女は突然声を掛けられた事に驚く事もなく、それに答える。

「見つけましたよ、シビルさんが言っていた人」

「へえ、随分簡単に見つかったな」

声は笑い交じりに感心した様子を見せるが、すぐに真剣な口調で続ける。

「ならここから先は手筈通りなるべく早くシントリアに連れていってくれ、その先はこつちで何とかする。ただし、あいつは警戒心が強い、少しでも疑われたりしたら無理はしなくていいからな」

声は事務的なやり取りの中で妙に少女を気遣う様子をみせながら、指示を出す。

「はい」

少女の方は落ち着いた様子で返事をしながら、あらかじめ示し合わせたように空き家の角に近づく。

物陰の男性の声も同じタイミングで少女の方に近づいて来た。

「もう一人余計な男がいたと思うが、そいつはどうでもいい。そのまま連れていってもいいし、どこかに置いてきても構わない」

「大丈夫なんですか？」

先程ぶつかったエッジの事を思い出し、指示の内容に違和を覚えて少女は疑問を口にする。

「どうせあいつは何もしゃべっていないだろう」

そこまで話して物陰の男は口元に笑みを浮かべた。

「うまくいけば、あのガキの力を借りなくても捕まえられるかもな」

「ガキ……？」

誰の事か分からず、少女は不思議そうな顔をする。

「いや、何でもなし。ただ気をつけろよ、クロウは他の奴とは別格だからな」

「はい、分かりました」

少女が了承すると男は物陰から姿を現した。

「じゃ幸運を、アキ」

ぼろぼろの服、あまり手入れされていないボサボサの髪、背中に背負った長剣。

その男はトレンツでエッジ達の前に現れた男だった。

「あのさ」

「ん？」

二人は夕食を終え、あとはそれぞれのベッドに入って寝るだけだった。……のだが、ガルドにあまり余裕が無い二人は一部屋しか借りられず、とても落ち着いて眠れる状態ではなかった。

「私の近くにいると落ち着かないっていうのは分かるけど……」
「けど？」

「いくらなんでもこれは距離置き過ぎじゃない？」

その距離約20メートル。

「いや、そんなにこの部屋広くないから」

「確かに——ってそういうことじゃなくて、ベッドを部屋の反対側までわざわざ運ぶのはやりすぎなんじゃない？」

距離が遠いので多少大きい声でクロウは言う。

「何で？」

心から不思議そうな顔をして尋ねるエッジ。

「ここまであからさまに距離置かれるとかえって嫌なんだけど」

「そうなのか」

「本当に私と一緒にシントリアを目指す気があるの？」

「あるけど」

それを聞いてクロウが深いため息をつく。

「じゃあ、せめて普通の距離にしてよ」

「あ……ああ、ごめん」

「じゃあ、おやすみ」

言いたいだけ言うとかロウは毛布を被って寝てしまう。

一人で起きていても仕方ないので、エッジもベッドにもぐりこんで寝ることにした。

「……おやすみ」

聞いていないだろうが、エッジも一応口にする。

翌朝

「朝だよ」

クロウが一度声をかけただけで、反射的に跳ね起きるエッジ。

「おはよう」

「今日は随分早く起きたね」

エツジはこの前起き抜けにダガーを目にしたことを忘れてはいなかった。

しかし、クロウは何故こんなに起きるのが早いのか。エツジは疑問を抱く。

エツジは漁こそしていなかったものの、漁村で育った分起きるのはそれほど遅くない。

それより早く起きる習慣がついているというのはどういう事なのだろう、と。単に早起きと言えば、それまでの事ではあったが。

「おはようございます」

「ん？……あ」

借りている部屋の前の廊下に座り、エツジが考え事をしていると昨日ぶつかった少女が話しかけてきた。

彼女も同じ宿に泊まっていたらしい。

(そういえば昨日ちゃんと謝れなかったな)

そう思い出し、エツジはまず謝る。

「おはよう。あの、昨日はごめん」

「いえ、ぶつかったのは私の方ですから。ところでどうして部屋の外に座っているんですか？」

丁寧に答え、ふと黒髪の少女は気がついたように聞く。

部屋に入るでも、外に出るでも無く廊下に座り込むエツジは確かに少々浮いていた。

「あー、それは」

クロウに『荷物の整理するから出て行って』と強引に追い出された事を説明しようかエツジは悩む。

そもそも同じ部屋に泊まっているとは言い辛かった。

「ちよつと気分が悪くて、長く歩いて来たから疲れたのかも」

「あなた達も旅をしているんですか？」

一瞬すれ違っただけで、少女はエツジ達が二人組だったのをちゃんと見ていたらしい。

「ああ。けど、『も』って?」

「そういえば自己紹介をしていませんでしたね、私はアキといいます」
そう言って少女はエッジに深く頭を下げる。

「私も今、少し旅をしているんです。私の父がシントリアに住んでいるんですけど、たまには会いに行こうかと。辺境でちよつと苦勞しますけど」

「でも、危なくないのか?一人で」

エッジの問いに困ったようにアキと名乗った少女は笑う。

「誰も一緒に旅できる人がいないので、仕方ないです」

そう言って、アキは顔を伏せる。

「俺達もシントリアを目指してるんだけど、良かったら途中まで一緒に行こうか?」

「え、でも良いんですか?連れの方に迷惑じゃありませんか?」

多分余計な道連れが増えたとクロウは怒るだろうとエッジは思ったが、それでも放っておけなかった。

「それは、俺が何とか言ってみるから」

「ありがとうございます!」

エッジの提案に、少女は感激した様子で再び頭を深く下げた。

「…………ふう」

宿を一足先に出て一人になってアキはため息をついた。

先程までの笑顔は欠片もなく、年齢不相応なひどく疲れた表情をしている。

しばらくそのまま宿の壁によりかかる。

道に行く人が時々アキの変わった服装を見たが、ほとんど彼女は気に留めなかった。

真紅の独特な布を重ねた服と、少女の気品はシリアンの様な田舎では浮く。

(何だかすごく疲れた)

感じたことのない様な脱力感がアキを襲う。

(今からまた旅に出るんだから、このままじゃいけない)

そう思い、必死に心を奮い立たせるが体にまるで力が入らず。

結局エツジ達が宿から出てくるまで、アキは壁に寄り掛かったままだった。

「ここにいたのか」

「あ、はい」

エツジはアキの様子に違和感を覚えるが、元気に返事をした彼女の様子を見て気のせいか、と思い直す。

「まだ自己紹介してなかったよな。俺の名前はエツジで、隣にいるのがクロウ」

エツジが話す間クロウはずっと無言で不機嫌な表情をしていた。

「クロウさん初めまして、私はアキといいます。これからよろしくお願いします」

アキが丁寧にクロウに頭を下げる。

「よろしく……」

クロウの方はそれだけ言うとは黙ってしまった。

「じゃあ、行きましようか？」

「ああ」

沈黙が続きそうだと悟ったのかアキが二人に声をかけて、三人は歩き始めた。

再び街道に出た頃、クロウが小声でエツジに話し掛ける。

「……このまま街道に行くのは危険だよ」

無理矢理エツジが説得したものの、クロウはアキに合わせて街道を歩いていくことには納得していなかった。

「あの子に俺達が追われていることを教えるわけにはいかないだろう？何も言わずに道を逸れれば怪しまれるし」

「このまま街道を行くなら、あの子だって私達と一緒にいたら危ないんじゃない？」

そう言いながらクロウは、鋭い目付きでエツジを見つめる。彼女はアキを連れてきたくなかったらしい。

「でも、もしあの子が一人の時にクロウを追ってる奴らや野党なんかに会って、危険な目にあったらどうするんだ？」

「別にどうもしない」

クロウはさらりと即答する。

「別にとって」

「他人の心配する余裕なんて無いし」

そこでクロウは一呼吸置いて続けた。

「あなたにはあるの？他人を心配しながら、その上自分を守るだけの強さが？ずいぶん余裕だね」

クロウの言葉にエツジは答えることが出来なかった。

「半端な強さで何かが守れるなら、守ってみてよ。そんな口先だけで何でも守れるとも思ってるの？」

今ので会話が終わったと見たのかクロウは少し早足になってエツジの側を離れていき、今度は前を歩いていたアキに話し掛けた。

「ところで、あなたにまだ聞いてなかったことがあるんだけど」

アキが不思議そうな表情で首をかしげる。

「何ですか？」

「あなたのファミリィネームは何？」

聞かれたアキの顔が僅かに曇った。

エツジには何故そんなことを気にするのかは分からなかったが、クロウの顔は冗談を言っている顔ではなかった。

「ジェイン、です」

一呼吸おいて、ゆっくり言う。

それを聞いて、クロウの表情が急変する。

「……ジェイン？」

クロウの声は心なしか震えていた。

怒りのせい——あるいは悲しみか、全く別な感情か。

この時のクロウの表情は、苛立ちとかそういうレベルの抑えた怒りではなく、今まで見たことが無いくらい憎しみに満ちた表情だったのだから。

「フラップダーツ」

何の警告もなくダガーを抜き、クロウはアキのいる方の地面へ向け、てそれを三本投げた。

地面に刺さると思われたそのダガーはギリギリのところまで急に上昇し、今度はアキの方へ向かう。

「――！」

アキは一瞬だけ驚いた表情を見せたが、すぐに冷静に後ろに跳びダガーをかわす。

「何してるんだよ、クロウ」

驚いて止めようとしたエツジは、自身の声も震えている事に気付く。

「うるさいー！」

クロウは静止したエツジの方を見ようともせず、再びダガーをアキの足へ向けて投げた。

アキも無言で後ろへ跳んでそれを避ける。

今度のダガーは急上昇せずにそのまま地面に刺さった。

エツジは見ていられなくなって、クロウに掴み掛かりダガーを握っている右手を押しえ付けた。

「離してー！」

激しく抵抗されながらも、エツジは必死で武器を持った右手だけは押しこえる。

「何でこんなことをするんだよー！」

「何故か？分からないなら邪魔をしないで！」

その瞬間、エツジは自分を包む空気が変わったのを感じた。

「アクアエツジ」

「ぐあっ!？」

空気が変わったのはクロウが水のディープスを集束コレクトしたせいだと分かったのは、水圧で吹き飛ばされた後だった。

そのまま受け身もとれず、エツジは背中から地面に落ちる。

深術を扱うときはまず、自分が使用する属性のディープスを集中させなければならぬ。

深術が使えるエツジにはそのディープスの動きがあれほど至近距離であれば感知できたが、クロウが自分を攻撃してくることは予想していなかったため、反応することが出来なかった。

「痛ッ……!」

エッジは痛みに顔をしかめるが、再びクロウの周囲にディープスが集まっていくのを感じて無理矢理体を起こす。

「やめろ、クロウ!!」

普段決して出さないような大声で必死に叫ぶが、クロウは耳を貸さずに詠唱を続ける。

アキはただ悲しそうにクロウを見つめる。

(……仕方ない)

エッジも急いで剣を抜く。

クロウに攻撃などしたくないエッジも、他に方法が思いつかず腰を落として魔神剣を放つ態勢に入る。

(でも、ダメだ)

間に合わない。クロウの周囲のディープスの動きから、このままだと攻撃が届くよりも早くクロウが深術を発動させてしまうことをエッジは感じ取る。

ビュン。

(ん?)

一瞬、エッジの意識の端に何かが素早く風を切るような音が届いた。

そして次の瞬間に目の前にいたクロウが、突如地面から出現した半透明の柱のようなものに突き飛ばされ、地面に転がる。

「ぐっ」

微かにクロウが呻いたのが聞こえ詠唱が中断されたのが分かる。

ひとまず最悪の事態は避けられた。

(でも、誰が?)

エッジではなく、当然クロウでもない。

彼がアキの方を見ると、彼女は全く別な方向を見ていた。

「誰か来ました」

視線をいま見ている方向から外さずに呟くように言う。

「見つけた」

ひどく感情の薄い、静かな少年の声でした。

第五話 『孤氷』のルオン

アキが見つめる方に、白髪の小柄な少年が大型の弓を構えて立っていた。

味方では無い事をエツジは本能的に感じ取る。エツジは恐らくアキよりも年下だろうその少年に、何か違和感を感じた。

弓を構えて自分達の方に向けているというのに全く殺気が感じられない、それどころか、顔から一切の感情を読み取ることが出来ない。

その姿にエツジは自然と背筋が寒くなった。

先程の攻撃で倒れていたクロウが、体を起こすと弓を持った少年を見て驚いた表情を浮かべる。

「ルオン……」

クロウが驚いた様子を見せても白髪の少年は無反応だった。

「エツジ」

珍しく名前で呼びかけられエツジが振り向くと、彼女は今まで怒っているとき以外見せたことが無い真剣な表情をしていた。

「この子は漆黒の翼の時とは違う、全力でやらないと死ぬよ」

「知り合いなのか？」

エツジは目を白髪の少年の挙動から離さずに聞く。クロウが無視しているアキの方にも警告を出そうか迷うものの、その余裕は無かった。

「後で話す、それより来るよ」

エツジたちの会話に興味を示さず弓を引くルオンの姿を見て、クロウが警告する。

彼女が言った直後に少年は矢を立て続けに三本、アキに向けて放つた。

「牙連閃」
がれんせん

一射してから、次の矢を放つまでがとてつもなく早い。

ほとんど連なるようにして、矢羽根の風を切る音がアキに迫る。

（避けきれない、『傘』を）

アキは手に持っていた筒状の布を纏った道具に手を掛け蛇腹に折

り畳まれていた部分を開いて円形に展開し、自分の前に盾の様にして構えた。

布で出来たそれは矢に貫かれると思われたが、実際に接触で発生したのは金属音で岩肌にでも接触したかの様に矢は彼女の武器に弾き返され地に落ちた。

「な……」

助けに入ろうと飛び出していたエツジは驚きながら足を止める。

そこへ、クロウの警告が飛ぶ。

「余所見してる暇はないよ!」

エツジの周囲で大気の温度が冬の様な冷たいもの変わった。

それと共にデュープスの流れも変わった事に気付いて、エツジも深術の発動を察知する。

「氷塊乱舞……アイスストーネード」
ひょうかいらんぶ

何時の間に詠唱していたのかルオンの言葉に従って大粒の氷が一瞬にして空気中に大量に出現し、そのまま強風と共に激しく回転する。細かく砕けたその氷片と巻き上げられた砂塵のよつて風がどの様な渦を作っているのかが見て取れた。

クロウとエツジに向けられたそれを、二人は思い切り跳躍してぎりのところであわした。

（深術のレベルが、全く違う）

自分とクロウを分断した冷気の渦に目を向けて、エツジは自身の呼吸が運動のせいだけでなく早まるのを感じた。

宙を舞っている氷一つ一つはエツジの頭くらいの大きさがあり、それが恐ろしい速度で回転している。

もし渦の内部に二人がいれば避けることも防御することも出来ずに、酷い打撲を負って即座に戦闘不能になっていた筈だった。

（でも、それなら!）

術が終わったのを確認してエツジは走りだす。

どれほど深術が強力でも、詠唱できなければ意味が無い。

武器が弓なら接近戦に持ち込めばエツジ達にも勝機はあった。アキもそれに気付いたらしく彼と同時に走りだす。

クロウも深術の詠唱を開始し、水のデイスプスが彼女の周囲に集まり始めた。

「扇氷閃」
せんひょうせん

それに対して少年は二本の矢を大きく放物線を描くように放ち、直後に詠唱を始める。

が、放たれた矢はエツジとアキまで届かずその一步手前の地面に刺さった。

(牽制のつもりか?)

エツジは疑問を持ったが構わず刺さった矢を越えようと走る。

すると直後、矢が刺さった地点に氷柱が出現し二人の行く手を阻んだ。慌てて急停止したエツジはぶつかる寸前で踏みとどまる。

気泡の少ない水晶染みたその氷柱は彼の背丈程もあり、飛び越えたり折ろうとするには少々頑丈すぎた。

(さっきクロウを止めたのもこれか!)

「エツジさん、危ない!」

氷柱のせいでエツジが無理矢理止まった瞬間、僅かな隙ができる。

少年はその一瞬の隙に術を発動させてきた。

「業火噴出……」
ごうかふんしゅつ

エツジは、自分を中心に周囲の地面が今度は急速に加熱していく事に気付く。

その範囲は直前で気付いて逃れるには広すぎた。

(くっ、詠唱が追い付かない!)

クロウは焦る。

先に詠唱を開始したにも拘わらず、向こうの術の発動の方が彼女より早かった。

「イラプシヨン」

平坦に口にされたその術の名前と共にエツジは自分の体の下で爆発が起きたのを感じ、なすすべもなく空中に吹き飛ばされる。

その様子を白髪の少年は何の感慨も無くただ見ていた。

「あつ、があ、あああああ!」

爆発は何度も続き、エツジの体を焼いた。

その度、糸の切れた人形のように彼の肢体は爆風に踊らされる。

何時の間に術が終わったのか、エツジは自分の体が地面に落ちた音を聞く。

(視界が、霞む……)

ダメージを受けすぎたせいかな、それとも他の要因なのかエツジの視界は白く霞む。

彼は何とか立とうとするものの、身体は動かない。

というより、頭が上手く働かないせいで体が動かせない様だった。

(俺だけが倒れたら、アキとクロウは)

ふと、エツジはクロウに言われた言葉を思い出す。

「半端な強さで何かが守れるなら、守ってみてよ」

(結局、クロウの言うとおりじゃないか。弱いままでは何も守れない。

他人を守るなんていうのは、自分がまず、強く——)

後悔の中に沈みながら、エツジの意識は少しずつ遠ざかって行った。

「吹き上がれ奔流^{ほんりゆう}——スプレッド！」

少年より少し遅れて詠唱を終え、クロウは術を放つ。

荒波同士がぶつかる様な音と、それが吹き上がる轟音が辺りに響く。

が、恐らくこの状況では当たっていない。

先程の少年が放った炎の深術は直前に作り出した二本の氷柱を蒸発させ、攻撃と同時に小規模な霧を生じさせていた。

氷を生み出す技での牽制、それによって稼いだ時間で炎の術による攻撃、霧によって視界を奪う事による間合いの維持。

弓と深術の遠距離攻撃で単独戦闘を行うルオンの基本戦闘スタイルだ。クロウはそれをよく知っていた。

(エツジは無事なの？あいつ馬鹿だから)

霧の発生とほとんど同時に炎の深術の中で姿が見えなかったエツジに、クロウは微かな不安を覚える。

もう一人のアキという少女もこの霧ではどうなったかクロウには

分からない。

(ジェイン……今はあいつのことなんて考えてる場合じゃない)
目の前の戦いに集中しなければ勝てない、とクロウは気を引き締める。

彼女が考えている間に霧は急にスーツと透けていき、消えた。

人間が扱えるレベルの深術のほとんどは、そんなに長い時間保つものではない。

一部の上級深術を除いて、一定の時間が経てば消える。

霧が消えてまず最初に彼女の目に飛び込んできたのは、炎に焼かれて倒れているエツジの姿だった。

(エツジはもう戦力としては期待できない、死んでないならいいけど。とにかく今は何とか巻き込まないように——)

「雪に覆われ、春へと眠れ……ハイバーネイト」

(しまった)

一瞬エツジの方に気をとられてしまい、クロウは少年の詠唱に気付かなかった。

彼女はどこから相手の術が飛んでくるかと警戒する。

「きゃー!」

だが、その術はクロウに向けられたものでは無かったらしい。

今の声からアキの方も無事だった事をクロウは理解する。

クロウが一瞥すると、アキが氷のドームに閉じ込められていく様子が見えた。

もとより加勢を期待していなかった彼女は気にも留めない。

クロウとルオンは一対一で対峙する。

「……」

相変わらずルオンの表情からは感情は読み取れない。

クロウの知る少年は以前から何も変わっていないかった。

できることなら戦いたくなど無い相手でも、彼女はもう後には退けなかった。

「フラップダーツ」

クロウは三本のダーツを低く投げ、急上昇させ少年を狙う。

少年は冷静に軌道を見切ると、ダーツが上昇する前に跳躍して飛び越える。

そして、そのまま空中で今度は彼女に向けて矢を放つ。

「くっー！」

不安定な態勢から放たれたにも関わらず、その矢は正確にクロウを狙う。

クロウはそれを体全体を大きく反らしてかわしたものの、少し遅れて動いた髪の毛が何本か矢によって切れる。

(武器での戦いじゃなかなか勝負が着かない、着いたとしても私の勝てる望みは薄い)

「無慈悲なる氷槍……」

どうやら相手も長引かせるつもりはないらしくかった、凄いい勢いで周囲のディープスがルオンの元へと集束されていく。

(同時に同レベルの深術を唱え始めたら向こうの方が早い……)

その時ディープスの集まり方から、クロウは深術の効果範囲にエッジが含まれてしまっていることに気付く。

(……！)

当然、今のエッジに回避することはできない。

死んでいるなら無視しても関係なかったが。しかし、

どうすれば良いかクロウが迷っている間に、相手の術が発動する。

「フリーズランサー」

ルオンの前の空中に円形の魔法陣が広がっていくのがクロウの目にスローモーションのように映った。

(くっ、もう、迷ってる場合じゃない。こいつらの前では使わないつもりだったけど)

クロウは目を閉じると、自分の『内側』に意識を集中させた。

それと同時に無数の氷の槍が魔法陣から高速で打ち出され、エッジとクロウを貫こうとする。

(応えて！)

その一瞬、クロウは目を開いた。

普段は紫のその瞳は、闇そのもののように黒く染まっていた。

——ごう、と空気が音を立てて動く。

「——ブラッディハウリング!!」

彼女の視界から氷の槍が消え、天を衝く様な黒に塗りつぶされた。振動が足元を揺らす。

地の底から響くような不気味な音をたてて、無数の黒い塊が地面から噴出していった。

それらは無数の狼の様な形をしており絶えずその顎で獲物を求めて、接触した氷の槍を粉々に噛み砕く。

相殺。

そんな言葉では済まされない。

氷の槍は黒い狼の群れに傷一つ与えられなかった。

それをクロウは詠唱さえせずに一瞬で発動させる。

「これ以上戦ってもあなたに私は捕まえられない。おとなしく退いてくれない?」

口調こそいつもどおりだったが、その目は恐ろしいほどの殺気を放っていた。

その目は怒りや憎しみなどの人間の感情に染まったものというより、獰猛な獣のそれだった。

ルオンと呼ばれた少年はしばらくクロウの殺気をまるで気にせず黙って彼女を見ていた。

クロウは威嚇を緩めず、相手を睨む。

二人はしばし、そのまま睨み合った。

が、しばらくすると諦めたのかルオンの方から彼女に背を向けて去っていった。

「……ふう」

少年がいなくなつて気が抜けたのか、クロウは軽くため息をつく。

「——ファーストエイド」

クロウが唱えると、薄く青い光がエッジの体を包む。

火傷が少しずつ消えていき、閉じていたエッジの目がゆっくり開く。

どうやら気が付いたらしかった。

「!?」

意識を取り戻すと、エッジは飛び上がる様に起き上がった。が、すぐに顔をしかめて膝をつく。

「くっ……」

「無理はしない方がいいよ、私の治療術はまだ初歩的なものしか使えないから」

その様子を見かねたクロウが忠告する。

「じゃあ、クロウが治してくれたのか? あいつは?」

「とりあえずいなくなつた」

それを聞いて、エッジがよく分からないという顔になる。

「いなくなつた? ……そうだ、アキは?」

アキがいないことに気付き、エッジの頭を不安がよぎつた。

「……あれ」

嫌々ながらという感じで、クロウはアキの居場所を指差した。

エッジが彼女の示した方を見ると、人の背丈くらいの球形の氷の塊があつた。

「え、あの中にいるのか!」

クロウが目を合わせずに頷くと、エッジは急いで氷の塊に近付き剣の柄で氷を叩く。

が、彼が思ったより氷は厚く、罅が入るものの割ることができない。

エッジは仕方なく、詠唱を開始する。

「——ウィンドエッジ」

風の刃を作り出し、氷の表面だけを切り裂く。そうして出来た割れ目からエッジは少しずつ剣で壊していく。

「エッジさん? 無事だったんですか?」

中のアキは無事だったらしく、氷を壊しているエッジに話し掛ける。

「ああ、大丈夫か?」

「はい、ここまで壊れていればあとは一人で大丈夫ですから、エッジさんは下がってください」

エッジはアキが無事で安心したものの、アキが一人でここから出ら

れるのかとも思った。

彼の剣でもまだ壊すのに時間がかかりそうだったからだ。

「良いですか？——裂れつくせん駆閃！」

その瞬間、氷のドームはいくつもの破片になり弾け飛んだ。

「！」

どう見ても丈夫には見えない傘を——もつともエッジはそんな名前は知らなかったが——突き出しただけでアキは分厚い氷を吹き飛ばしてしまった。

「何……う？」

「これは傘というものなんです、雨の日などに差して使うんですよ」

「そう、なのか」

まるで答えになっていない気がしたが、とりあえずエッジは頷いた。

そんなやり取りをしていると、エッジの背後から冷たい声が聞こえた。

「じゃあ話はすんだ？」

二人が振り返ると、再び憎しみに満ちた目でアキを睨み付けているクロウの姿があった。

「少し邪魔が入ったけど、覚悟はいい《ジエイン》？」

クロウは再び憎しみに満ちた目でダガーを抜いた。

「まだそんなこと言ってるのかよ！」

エッジにはそこまで人を憎むクロウの気持ち理解できなかった。「うるさい！あなたはそいつが——そいつらが今までどんなことをしてきたか知ってるの？」

そう言っただガーを構え、クロウはアキに向かって走りだす。

避けられないように、至近距離から投げるつもりらしい。

「分からないことに、口を出さないで！」

「やめろ!!」

エッジの叫びも空しく、ダガーは何のためらいもなく放たれた。

そして、ブスツという音と共に突き刺さる。

——直前で横からアキを庇うように飛び出してきたエッジに。

「！」

「え……」

エツジは飛び出した勢いのまま地面に落下した。

同時にダガーが刺さった腹部と、まだ火傷のダメージが残る全身に激しい痛みが走る。

「がっ、あ……」

「エツジさん！」

慌ててアキが助け起こす。

比較的深手らしく、何とか膝を立てたもののエツジは自分で立ち上がれなかった。

「何で……あなたはこんなことばかりするの」

「俺には……剣で攻撃を叩き落とすような技術なんてないし……こんなことするしかないだろ……」

「何で見ず知らずの他人の為にそこまでするのかって聞いているの！それにそんなに止めたかったなら私を斬れば良い！」

クロウの勢いにも負けず、エツジは荒い息で言葉を返す。

「俺はアキにも、クロウにも……いや、誰にも傷付いてほしくない……から」

そこで一呼吸おき、クロウの目を真正面から見つめる。

その目を見たクロウは、表情にこそ出さなかったが少し驚く。

その目は今まで見てきた迷いのある瞳ではなく、必死ささえ見え
た。

「強くなくても目の前の人を守るためにできることがあるなら、それをする。当たり前、だ」

そこでふっ、とエツジの目の鋭さが解けた。

そして、そのまま地面へと倒れこむ。

どうやら再び意識を失ったらしい。

「……全然答えになってないよ、馬鹿」

足元に倒れたエツジを見て呟く。

「ジェイン」

呆然としているアキに、クロウはまるで温かみのこもっていない声

をかけた。

アキがビクツと反応して彼女を見る。

「薪になりそうな木を探してきて」

「え？……あ、はい！」

アキは少し驚くが、すぐに近くの林へ走りだした。

この時のクロウはいつもの様に少し不機嫌そうな顔はしていたものの、先程までのような殺気が消えていた。

——少なくとも、アキにはそんな気がした。

情報ステータス 『スプラウツ』陣営・セブクロー バース

深術のエキスパートとして育てられた孤児の集団。

その中心的活動を担う精鋭にして、同時に味方同士の監視者でもある七人の深術士^{セキユアラ}。

人数が多いのは裏切りや命令違反を冒そうとしたメンバーが飛びぬけた実力を持っていても複数人で対処し、従わせる為。

各自がセブクローバースとしてそれぞれ識別名称を持っているがあくまでコードネームであり、成立してからそれほどの年月が経過していない為、本人の能力と名前が一致している者が多いが『流連^{リュウレン}』の様に二代目である場合は本人の能力等とは無関係に前任者の識別名称を引き継ぐ事になる。

また、全員が自身の最も得意な一属性の使用に特化している。

『爪雷^{ソウライ}』

名前：フレット

武器：鉄製の鉤爪

特化属性：雷

才能：並外れた身体能力

戦う事に喜びを見出し、誰よりも危険な少年。

術士としての素質もさることながら、近接戦闘のみでも正規の騎士を圧倒する年齢不相応の身体能力を持つ。

実力はともかくとして性格面に多大な問題があり、命令の有無に関わらず単独行動が多い。

また、戦いそのものに喜びを見出す性格ゆえに強敵との戦いをわざと引き延ばしたり、見逃す事もある。

それ故に実力とは反比例して仲間からの信頼は薄い。

『巖岩^{げんがん}』

名前：バルロ

武器：???

特化属性：地

才能：観察と経験による弱点の看破

子供達を鍛え上げた全員の師であり、統制者でもある老人。

元は軍人で、岩で殴られる恐怖をもって全ての子供をコントロールしている。

この人間なくしてスプラウツは集団として機能しない。スプラウツの中心と言っても過言ではない人物。

他のクローバーズと比べると突出した戦闘能力を持っている訳ではないが、全員の弱点を熟知し裏切りを想定して身内との戦いに特化している為、直接戦った場合クローバーズ全員を打倒しうる手段を用意している。

『紅蓮』

名前：???

武器：鞭、？

特化属性：火

才能：???

感情的で激し易く『爪雷』からは本来の識別名称を無視して『爆発』と呼ばれている。自身の実力が『爪雷』には及ばないと自覚しているものの、術士として一流であるというプライドを持っている。その為興味の無い事にはやる気を出さない『爪雷』とは反りが合わず、喧嘩が絶えない。

『』

名前：

武器：

特化属性：

才能：

『流連』

名前：???

武器：？

特化属性：風

才能：なし（武器との関係あり）

二代目。前任者とは属性以外共通点なし。

他のメンバーと比べ成ってから日が浅く、実力的にも劣るが、それ故認められた事を喜び調子に乗りすぎている所がある。

『弧氷』

名前：ルオン

武器：弓

特化属性：氷

才能：『爪雷』には劣るものの高い身体能力

感情の大部分を喪失した少年。

弓という単独戦闘を苦手とする武器を持ちながら、空中で正確に弓矢を操るボディバランスと素早い跳躍力を持ち、氷柱を発生させる属性技「扇氷閃」と合わせて単独行動でも十分詠唱時間を稼ぎ戦闘する能力を持つ。

術の詠唱速度・威力・弓の扱い全てにおいて安定した能力を持つもののクローバーズ全体の中では尖った能力を持たない様に見えるが……

スプラウツの中では監視無しでも命令違反をせず、単独行動もこなせる貴重な人材。

『

名前：???

武器：??

特化属性：光

才能：??

第六話 スプラウツ

クロウはアキが薪を探しに行ってから黙々とエツジの介抱を続けた。

治癒術には限界がある。目で見える範囲の傷は治せても消耗した体力までは戻らない。

彼女の手には血が付着している。エツジの血——彼女自身が傷つけ流させた血が。

(私に傷つけられたのに、私に傷ついてほしくない?)

クロウには訳が分からなかった。別にエツジは彼女と親しいわけでもなんでもない。

彼にしてみればたまたま出会った、それだけの人間のはずだ。

(だったら心配なんかせずに私を恨めば良い)

その方がエツジにとっても楽な筈だ。

「別に恨んでいいよ……私は気にしないから」

エツジの苦しげな顔を見つめながらクロウは呟いた。

「……」

エツジが気が付いて目を開けると、目の前に満天の星空があつた。

そこからずいぶん長い時間気絶していた事を、パチツという音と暖かいオレンジ色の光が辺りを照らしている事から焚き火をしている事を、エツジは悟る。

「気がついた?」

エツジが声をかけられた方に頭を向けると、クロウとアキが少し距離を空けて座っていた。

「何とか大丈夫だったみたいですね、安心しました」

エツジの体はまだ重く、彼はまだ体を起こす気にはなれなかった。

とりあえず、二人がまた戦ったりしていない事にエツジは安心する。

「火傷が治つてもいないのに、無理に動くからだよ」

不機嫌な声でエツジはクロウにそう言われた。

まだ邪魔されたことで怒っているのだろうか、とエッジは訝しむ。

「ああ、面倒かけてごめん」

「今更謝ることじゃない」

そもそも邪魔するなという意味だろう。

「いや、でも——」

エッジの言葉をイライラした様子でクロウがさえぎる。

「そんなことはどうでもいい。それより何で私やジェインに傷付いてほしくないなんて思ったの？」

クロウの顔が責めるように険しくなり、アキも少し真剣な顔になる。

「何で……傷付いてほしくないか？」

エッジはその言葉を反復するように呟く。

自分の身を投げ出してまで二人を助けようとする自分が異常に映るとは自覚していなかった様子だった。

彼の目は自然に夜空に向かった、何かを思い出そうとする様に。

「俺には随分前から親がいないんだ」

何故いきなりそんな話をするのかクロウは疑問に思ったが、とりあえずは話を聞くことにする。

「村でも俺は漁に行けないから一人で居る時間が長くて、閉じこもってる内に正真正銘一人になってき……そういうの嫌なんだ。自分でも他人でも」

そこでエッジはクロウの方へ顔を向けて、笑みを浮かべる。

「初めて海岸でクロウに会ったとき、クロウも何か寂しそうな顔してた」

「え?」

話に集中していたクロウは不意を突かれ、返答を返すのを忘れた。それから、会話が止まってしまった事に気付いてクロウが更に尋ねる。

「……じゃあ、ジェインを助けようとするのは何で？」

黙って聞いていたアキは、自分が話題に出て身を竦める。

そんなアキを安心させるようにエッジは彼女の方にも笑顔を見せ

て言った。

「困っている人がいたら必ず助ける、当たり前のことだろ？」

何も悪びれずにエツジはそう答えた。

（ふざけているのか、それとも本気でそんなこと思ってるのか…いずれにしてもこいつは本当に——）

「馬鹿」

「え？」

クロウが小声で呟いたのがエツジには聞こえなかったらしい。

彼女は顔をあげ、まっすぐ彼の顔を見てもう一度言った。

「他人の為に自分を犠牲にするなんて馬鹿じゃないの？」

「いや、でも」

「あーあー聞いて損した、すぐに放つといて寝とけば良かった」

「聞いてきたのはクロウの方だろ！」

だんだんエツジもムキになる。

「はいはい、そうでした、じゃあおやすみなさい」

「……実は、喧嘩売ってるのか？」

「さあ？そんなつもりは全然無いんだけど」

「流石に怒るぞ」

傍から見ているアキには、クロウが本気で言っただけではないことが分かる。

不器用なのだろう、彼女はそうやって茶化す事では少年の真っ直ぐすぎる思いと向き合えない様子だった。

アキはそれに巻き込まれないようにそつと距離をとり、微笑みながら二人を見つめる。

が、やがて少しだけ悲しそうな顔に変わり、静かにどこかに去っていった。

喧嘩を続ける二人がそれに気付くことはない。

二人がいる焚き火の側から離れ、アキは静かに近くの林まで歩いてきた。

「良かった！無事だったか」

近くの木の影から、シリアンでも彼女と密かに話していた銀髪の男

が出てくる。

その口調は真剣に心配そうだった。

「万が一、あの女がお前を襲ったりした場合の為にルオンをつけさせてたんだが、あいつでもあの女は手に余ってな……すまない、あの後大丈夫だったか？」

やや早口で質問してきた男に対して、アキは浮かない顔で返事をした。

「はい……シビルさん、あまり心配しないでください。私がちゃんとシントリアまで彼女を連れていきますから」

軽い拒絶を示され、シビルは幾分言葉の勢いを弱める。

「ああ、分かった。が、ただ無理だけはするなよ」

「分かっています」

シビルの方はまだ何か言いたそうだったが、これ以上言ってもアキは聞かないと判断したのか、そのまま背中を向けて去ろうとする。

「シビルさん」

その背中に向けて、アキが引き止めるように呼び掛けた。

「ん？」

軽く頭だけをアキの方に向けて相槌を打つ。

「私が——私達がしていることは人として正しいんでしょうか？」

しばらく沈黙があったが、やがて男が答えた。

「悪いとしたらそれはこんな事をお前にさせてる俺達の方だ、お前は悩まなくていい」

「でも、私だけが逃げるようなことはできません。彼らを騙そうとしているのは私ですから」

「すまん、こんなことを押しつけて」

男は申し訳なきように言った。

「……心配しないでください、ってさつきも言いましたよね？何もかも、元はといえば自分で選んだことです」

このままだと相手をさらに悩ませてしまうと気付いたのか、アキは無理に笑顔を作ってみせた。

「あとは私に任せてください」

「このカースメリア大陸を出るのもあと少しだ、次に会うのは中央大陸に着いてからになるからな」

「分かっています」

その言葉を最後に二人は別れた。

アキが焚き火のところまで戻ってみると、クロウは既に眠っておりエツジが一人で火を見つめて座っていた。

「どこへ行ってたんだ？」

別に怪しむ風でもなくエツジが尋ねた。

自分のことをまるで疑わない彼の様子に、アキは良心が痛む。

「すみません、少し一人になりたくて」

「捜しにいかうかとも思っただけどき、クロウが先に寝ちゃったから」

この時ばかりは、アキは心の中でクロウに感謝した。

「暗くなってからは危険だからあんまり離れない方が良い……俺が番してるから今日はもう寝ていいよ」

そう言いながらもエツジは軽くあくびをした。

「あの、私はまだ眠くないので私が番をします」

「良いのか？」

「はい」

「ごめん、じゃあ寝たくなったら俺を起こしてくれればいいから」

そう言うと、エツジは横になった。

すぐに聞こえる寝息が二つになる。

やはり無理をしていたのか、とアキは悲しくなる。

まだ怪我が全快したわけでもないだろうから、当然だろう。

(……貴方は関係無いのに、ごめんなさい)

アキは心の中でエツジに謝った。

声を出さなければ伝わるはずが無いことなんて分かっていたが、しかし、ここで声に出せるほどアキは大胆にはなれなかった。

逆に、謝らずに平気な顔をしていられるほど無神経にも。

(私がやらなきゃこの国は大混乱になる。私にはお二人の事はどうすることもできない……私は、なんて無力)

もし運命なんてものが存在しているなら、アキは運命を受け入れる
しかない自分を呪った。

クロウが気が付いて目を開けると朝だった。

エツジはまだ寝ている。

(ジエインが起きてるのはその代わり……か)

途中で交替したのか、あるいは早く目が覚めたのかは知らないが、
クロウにとってはそんなことはどうでも良かった。

「いつまで寝てるつもり？」

とりあえず彼女はエツジを起こしにかかる。

クロウは気持ちの整理がついていないアキとの会話を避けた。彼
女は声をかけたくらいでは起きないエツジの耳を、頭が持ち上がりそ
うなくらい引っ張る。

その様子にアキは何か言いたそうな顔をしたがクロウは無視する。

「？痛、痛いーやめろクロウー」

彼女の期待どおりのリアクションでエツジが跳ね起きる。

「おはよう」

当たり前のようにクロウはあいさつする。

「おはよう………っていうか毎回起こし方おかしいだろ」

「はいはい、ごめんごめん」

クロウはエツジの恨みがましい視線を感じたが、無視する。

「何食べる？パン？卵？ベーコン？」

「じゃあ、パンと卵で」

それを聞いて、クロウは荷物から材料を取り出して手渡す。

「分かった、はい作って」

「……作らせる気なら、聞くなよ」

「作って貰う人に決めてもらう方が良いでしょう？」

エツジはまだ何か言いたそうな顔をしていたが諦めた様子で離れ
ていたジエインにも声をかける。

「アキも同じで良いか？」

「あ、はいー」

そんな様子でエツジを間に挟みながら三人で会話し、出来た朝食を食べている内に朝焼けの光は徐々に昼の空へと変わっていった。

しばらくして、街道を歩き始めた頃。

会話することなく三人は歩いていたが、やがてエツジが沈黙を破った。

「クロウ、あの白い髪の子供のことそろそろ話してくれるか?」

エツジがその話題に触れると確実にクロウの顔が暗くなった。

「あの子の正体を知ればあなた達にも危害が及ぶ可能性があるけど、それでも聞きたい?」

エツジは無言で頷いた。

アキは歩きながら前を向いたまままで反応を示さなかったが、クロウはそれを肯定ととったのか、あるいは無視したのか話を始めた。

「あの子は《スプラウツ》という集団の一人だよ」

「スプラウツ……?」

エツジには聞き覚えの無い単語だった。

「知らなくても当然。スプラウツは表に出るような集団じゃないから」

「どういう意味だ?」

「スプラウツは、身寄りのない子供や深術の素質を認められた子供からなる集団なの。全員が深術の訓練を受けたエキスパートのね」

「子供?」

クロウが頷く。

「そう、例外も何人かいるけどほとんどは私より年下の子供ばかりだよ」

よく分からない、という表情でエツジが尋ねる。

「何で子供だけなんだ?」

「さあ?小さい時から言うこと聞くように徹底的に教育するから命令聞かせやすいのかもしれないし、単に集めやすいからかもね」

平静に話していたエツジの表情が徐々に崩れる。

「言うことを聞かない子供は……?」

「だから、聞くようにするんだよ。殴ってでも、肌を焼いてでも。そう

やって術を教えて、術を使わなきゃいけない状況におけば皆最後は大
人しくなる」

絶句するエツジとは対照的に、クロウは淡々と話し続ける。

まだクロウとはあまり話したくないのか、アキは口を開かなかつた
がその目はもう前を見ていなかった。

「そんなのおかしい、何でそんなに当たり前みたいに言えるんだよー」
思わず詰め寄ったエツジの顔を、無表情だったクロウが張り飛ば
す。

アキは驚いて振り返った。

「何であなたが怒るのよ、まるで関係ない上にルオンにも勝てなかつ
た癖に！」

エツジは尻餅をついてうな垂れたまま顔をあげなかった。

しばらくそのまま沈黙が続いたが、多少落ち着いていたクロウがやがて
口を開いた。

「言い忘れたけど、スプラウツには普通の子供たちの他にそれを統制
する『セブンクローバーズ』っていう実力者達がいる」

そこで一呼吸置いてエツジの目を正面から見様にして言った。

「その内の一人が『孤氷』こひょうのルオン、あの白髪の子だよ」

(……あんな強さの奴がまだいるのか)

エツジは全く攻撃することもできずに敗けたあの少年の実力を思
い出して寒気がした。

「私はそこを逃げ出してきた、それで追われてるの。分かった？」

そこまで聞いてエツジは疑問に思ったことを口にした。

「聞いたかぎりだと、あのルオンっていう子はスプラウツでもかなり
重要なんだよな……どうしてそんな奴が逃げ出したクロウ一人を捕
まえるためにわざわざ来るんだ？」

しばらく沈黙があつて、それからクロウは答えた。

「……王都の権力者が裏で絡んでるらしいから、多分そいつが絶対に
情報を漏らしたくないんだと思う。普通なら逃げ出そうとした子供
はその時点で死んでる予定だから」

「この国で高い地位にあるような人間が何故子供を捕まえてまで、そ

んなことをするんだ？」

「さあね、私には分からない——とところで」

今まで見向きもしなかったアキの方を向いて尋ねる。

「あなたは逆に反応が薄すぎない、『ジエイン』？」

射るようなクロウの視線を避けてアキは目を伏せる。

「い、いえ、あまりにひどい話だったので……シヨックで」

納得していない様子で、クロウはアキの顔を覗き込もうとする。

「やめろよ、考えすぎだ」

エツジが制止した事でクロウはそれ以上追及しようとしなかったが、まだ信用していない様子だった。やがて彼女は諦めたように軽く息を吐き、道の先へと向きを変え歩き出す。

「……もうこの話は終わりでいい？ここでのんびりしてるわけにはいかないって分かったでしょう」

そう言うときクロウは少し足を早めた。

アキも暗い表情のまま、その後が続く。

最後尾に一人取り残されたエツジも行き場の無い憤りや、子供達の境遇を想像しての悲しみ、様々な思いを内に抱えながら続く。

（あのルオンとかいう子の目……あんな風になったのもその『スプラウツ』とかいうもののせいなのか？）

エツジは今聞いた話を反芻する。

クロウは『教育』と言った。

そのせいなのだろうか？

だけどクロウは少なくとも感情は失っていない。

だったらいったい何があったというのだろうか？

まだあんな年端もいかない子供に何が。

そんなことをひとり考えていると、突然クロウの声がしてエツジは我に返った。

「——もうすぐマーミンに着くよ、多分もう見えてると思うけど」

言われてエツジが街道の先を見ると、確かに町があった。

シリアンよりやや大きく、建物の造りも木だけではなく石も合わせに使われていて、より立派な感じだ。

道の所々に何故か馬がいるのも見えた。

「マーミンは別名、馬の町とも呼ばれるくらいこのカーズメリア大陸の交易の中心として栄えている町だよ」

（それで馬があんなにいるのか……じゃあトレンツに居た頃、魚を買いに馬に乗ってきていた商人もここから？）

クロウの説明を聞いてそんなことを思いながら、エッジがふと何気なくアキに目をやると俯いて元気が無かった。

スプラウツの話をした時からずっとだった。

「大丈夫、か？」

エッジは少し近づいて横から声をかけてみる。

「え？……あ、はい、大丈夫です」

そうは言うもののやはり元気がなさそうだ。

「シヨックだよな、あんな話聞いたら……子供を道具みたいに扱うなんて」

「ええ、そう、ですね。すぐには無理でも、無くさなきゃいけない事だと、思います」

それを聞いてエッジは少し安心した。

アキも自分と同じ様に感じていたのだと分かって。

これ以上、今かけられる言葉は無いと判断してエッジはアキから離れ、また黙々と歩き始め——ようとした。

「止まれ」

突然の何者かの警告が三人に飛び、何時の間近づいてきていたのか四人の男が草陰から出てくる。

明らかに武装しており、殺気が普通の町の人間ではない。

エッジだけでなく、アキとクロウもそのことに気付いたらしく表情が鋭くなる。

「旅人か？悪いがこの先は通れないぜ」

「何で？」

クロウの口調から、苛立っているのがエッジにも分かる。

「そいつが武器を持つてるからだ」

答えた男がエッジの武器を指差す。

「それでも通るって言ったら?」

クロウは完全に喧嘩腰だ。

「そういうわけにはいかねえ」

そう言っつて男達は全員が軽く武器に手をかける。

「——ウインドエッジ」

何の警告も発せず、クロウは一番前にいた偉そうな男の周囲に風の刃を発生させた。

「ぐおあつー!」

体の表面に傷ができ怯んだが男は倒れない、多少ながら戦闘慣れしているようだ。クロウの方も流石に大怪我させるような本気は出していない。

「気を付けろ、こいつら深術を使うぞー!」

傷を押さえながら先頭の男が叫ぶ、同時に一人の男がエッジに向かって剣を抜いた。

「ここは私に任せてください」

アキは冷静にそう言うと、傘を開いた。

「裂駆閃」

剣を抜いた一人に向けて地面を強く蹴り飛び出し、同時に傘を相手に向けて最大限のリーチで突き出す。

「ぐほおつー!」

傘の勢いそのままに、剣を抜いた男は後方に吹き飛んでいく。

ズザザツという男が地面をすべる音に少し遅れて、男が立っていた場所に剣が落ちるカランという音が響いた。

「この野郎!!」

味方がやられたのを見て残りの三人も棍棒のような武器を持ってアキの方へ走りだす。

その落ち着きを無くした様子とは対照的に、アキはゆっくり深呼吸して傘に両手を添える。

男たちが目前に迫ってもアキはその態勢を崩さず、何かに意識を集中させているようだった。

男たちが武器を振り上げ、エッジが危ないと思った瞬間、アキが動

いた。

「詠技——」

両手で掴んだ傘を、素早い動きで自分の周囲を回転させるように振る。

同時に自身も回転しながら軌道を上へあげていき、傘で螺旋の軌道を描く。

その軌道を綺麗になぞるように白い光が傘からほとぼしり、その光は男たちを宙に吹き飛ばした。

「——白龍」

アキが動きを止め、再び深呼吸したときには男たちは全員地面で気絶してしまっていた。

第七話 剣の決意

(強い……)

エツジは初めてアキが戦っているところを見て、彼女の強さを認識させられた。

「この人たちは、何だったんでしょう?」

足元にのびている男たちを見回してアキは疑問を口にしたが、クロウはそれを無視して再び歩き始める。

「もう行くのか?」

「関係ない奴らにいちいち構う必要なんてない、こいつらは私たちを狙ってきてたんじやないみたいだし」

少し考えてからエツジも領いてクロウの後に続き、その後を追ってアキも歩き始めた。

《貿易拠点 マーミン》

門をくぐる時シリアンの時と似たやりとりがクロウと門番の間であり、今度も三人はあっさり通される。

「今、食料とかで足りないものは別に無いよね?」

クロウが二人に——というよりエツジに聞く。

「え? いや別にないと思う」

「はい、無いと思います」

唐突に聞かれたエツジは自信が無かったが、アキが同意をしてくれて安心する。

「なら先にあの宿に行つててくれる? 私は少しやることがあるから」
そう言うのと反論する暇も与えずに、クロウは町の中へ消えてしまった。

仕方なく二人は宿に向かい、部屋を借りるとそのまま中で待つことにした。

エツジは本当は今度こそ男女別々の部屋にしたかったが、アキとクロウを二人きりにするわけにもいかないので仕方なく一部屋だけ借りた。口喧嘩程度ならともかく、武器まで持ち出されては適わなかった。

「クロウさん、どこへ行ったんでしようか？」

部屋に入ってベッドに座ったアキが言う。

エツジもそれに習って別のベッドに座る。

「そうだな……」

クロウが一番、一人で離れたら危ないのではないかと二人は疑問に思う。

(初めから一人で旅するつもりだったから、俺達の助けを借りるつもりはないのかもな)

行動に賛成する訳ではなかったが如何にもクロウらしいと、エツジは納得する。

「エツジさん」

考え事にふけりかけた所で呼び掛けられ、エツジは我に返る。

今日はこれで二回目だった。

「何?」

「すみません、いつも邪魔になって……この間も私のせいで怪我までさせてしまった」

突然謝られた彼は少し戸惑った。

「別に邪魔じゃないし、怪我ならもう大体治ったから大丈夫だよ」

それでもアキは俯いたままだった。

「私がいなければあんなことには」

「そんなことないから。こつちこそ俺達のせいで危ない目に合わせてごめん」

「でも、それは……っ!」

アキが突然必死な表情で何か言おうとするが途中で言葉が詰まる。言おうとするが言えない、そんな風にエツジには見えた。

しかし、言葉の先は無くただ何かを耐えるように悲しそうに俯くアキに、彼はどんな言葉をかければいいのか分からなかった。

クロウはそれほど時間が経たない内に宿の部屋に入ってきた。

二人が受付にクロウの容姿を伝えていた為、特に問題なく入れたらしい。

アキはさっきの様に泣きだしそんな顔はしていないものの、まだ口数は少なかった。

「どこへ行ってたんだ？」

そんなアキの様子を隠す様に、エッジがクロウに話し掛ける。

「馬車を探してた。馬車なら街道をより速く進めるし人目にも付きにくい。今までは見つからなかったけどこの町なら見つかるんじゃないかと思って」

「それで、馬車は見つかったのか？」

クロウの面白くなさそうな顔を見れば大体想像はつくものの、一応質問はするエッジ。

「今は動かせないってさ」

「動かせない？」

「今この町はここより少し北に縄張りを置いてる賞金稼ぎ達に脅されてるらしいよ、この町の金品を全部渡せって」

奇妙な話だった。

賞金稼ぎは確かにあまりガラが良い連中ばかりとは言えなかったが、だからと言ってそんな盗賊まがいの事をする等誰も聞いた事が無かった。

「そんなやり方で生計が成り立つはずも無い。」

「町の周囲でそいつらが入りを見張っていて、この町から馬車どころか人間一人出入りできないらしいよ」

「じゃあ、さっきの奴らも？」

「そういうことみたいだね」

かなり面倒臭そうにクロウは答えた。

「仕方ないから馬車はあきらめて徒歩で港を目指すしかないね、面倒に巻き込まれる前にさっさと出る準備しないと」

「そう言っただけで立ち上がると、クロウは再び部屋を出ていこうとする。どこへ行くんだ、とエッジが止めようとしたがそれより早くアキが言葉を発した。」

「……待ってください」

クロウも彼女が止めるとは思わなかったのだろう、その場でアキに

背を向けたまま立ち止まる。

「何？『ジェイン』」

アキは相変わらず辛そうな表情のままだったが、それでも何とか声をしぼりだして言った。

「この町を……助けられませんか？」

その言葉にクロウの目が険しくなる。

「私達、他人に構ってる暇なんてないんだけど？」

表面には出さないようにしているものの、クロウがアキの言葉に対して苛立っているのはエツジにも分かった。

アキにもそれは分かっただろうが、彼女は引き下がろうとしない。

「でも、このまま放っておいたらこの町の人はどうなるんですか？」

「そんなことは自分達で何とかするんじゃない？ 私たちだって別に助けを求められたわけじゃないんだし」

クロウは態度を変えない。

「じゃあクロウさんは……他人ならどうなろうと構わないというんですか？」

（――！）

「クロウは……自分の為なら他人がどうなってもいいの？」

目の前の少女の姿が、クロウの記憶の中で別な少年の姿と重なった。

ほんの些細な一言が掘り起こした記憶は、クロウを全く動けなくしてしまった。

（私はまた同じことを――）

ずっと睨み合うだけで話し合いにならない二人の様子を見兼ねて、エツジが口を開く。

「今から無理矢理包围を突破して徒歩で港を目指すよりも、賞金稼ぎの奴らを何とかしてから馬車に乗ったほうが早いんじゃないか？」

しばらく沈黙が続いたが、やがてクロウの方がその沈黙を破った。

「一つだけ条件……今日中にそいつらを潰すよ」

「じゃあ、良いんだな？」

ほっとしたようにエツジが聞く。

クロウはそれに無言で頷いた。

「良かったな」

「はい」

アキも安心したようだったが、前髪で見えなかったクロウの表情が一瞬、悲しみと怒りとが混ざったような複雑な表情をしていたことに気付くことはなかった。

「で、とりあえずどうする?」

宿から外に出たものの、何からすれば良いのか分からずエッジは二人に聞いた。

「町の北に行つて、本拠地を潰す」

クロウは既にその方角を睨んでいた。

「まあ、ちよつと危険過ぎる気もするけど……それしかないか」

エッジは少し策が無さすぎる気もしたが、話し合いというのも難しいだろう。

「お前ら旅人か?こんなところで何してんだ?」

突然、誰か若い男の声がした。

エッジ達が声のしたほうを振り向くと、濃い水色の髪を長くのばした背の高い男がいた。

年齢的には、エッジ達より一回り位上だろうか。

武器は持っていないようだが、革と金属を組み合わせて作った防具を脚につけている。

形が左右でバラバラな所を見ると手作りなのかもしれない。

「もうすぐ賞金稼ぎの連中がこの町に来る、こんな所いると真っ先にカモにされちまうぞ?」

お世辞にも丁寧とはいえない喋り方は、人気の無くなった町の中では場違いに思えた。

「ああ、知ってる」

「知ってる?ああ、この町の誰かに聞いたのかだったら何でこんな所にいるんだ?」

話していいのかエッジが躊躇すると、クロウが代わりに答えた。

「そいつらの所に今から挨拶に行こうと思っていたから」
「へえ、じゃあ丁度良い、俺もそのつもりだったからな」

そこで男は疑うような顔になる。

「ていうかお前ら、戦闘できんのか？」

エツジは一瞬背後のクロウが立っている辺りから殺気を感じた気がしたが、気にせずには答えた。

「一応俺達も今まで旅してきたから、戦闘の経験は多少ある」

「そうか……まあやばくなったら、俺の後ろに隠れてれば守ってやるから」

笑顔で青年は言ったが、本心で言っているのか冗談なのか分からない。

だが、少なくとも悪い人間では無さそうだった。

「それと自己紹介まだだったな。俺の名前はクリフ・セイシャル、お前らと同じ自由気ままな旅人だ」

「俺はエツジ、それからこの子がアキで、こっちがクロウだ」

エツジが紹介するとアキは軽く頭を下げた。

クロウの時のこともあったのでアキと自分のフルネームは一応伏せるエツジ。

「じゃあ、行くか？」

そう言つて、クリフと名乗った青年は一人で先に立つて町の北に向かって歩きだす。

「あいつ、足手まといにならない？」

クロウのその顔は戦力としてどうかよりも信用できるかどうかを疑っているようだったが、その問いに答えるすべをエツジは持っていなかった。とはいえ戦力的に不安だったのも確かで、子供と言われても仕方ない年齢の自分達よりずっと年上の味方は確かに心強くはあった。

《ストレア洞窟》

マーミンの人達の話だと、賞金稼ぎ達は最近、町の北の方にある洞窟に住み着いたらしかった。

正面から入っていくのはあまりに無謀かともエツジは最初考えた

が、洞窟のように狭い場所なら人数差があっても何とかなるかもしれないと思ひ直す。

しばらく町の人に教わった通り道らしい道もないような木々の間を歩くと、彼らの目の前に尖った山頂が二つ見えてきた。

その二つの間に、大人二人が何とか並んで歩けるくらいの広さの洞窟があった。

「見張りがいない？」

「よほど自信があるのか、単に間抜けなのか……」

エッジとクロウが観察していると、クリフが割って入ってきた。

「まあ、いねえなら別に良いだら」

そう言って勝手に洞窟へ進んでいく。

「……大丈夫でしょうか」

誰に言うわけでもなくアキは呟いた。

今回だけはクロウも何も言わず、ただ苛立った様子でため息をついた。

「アキ、後ろを頼む」

エッジは仕方なく、辺りを警戒しながら数歩遅れてクリフの後を歩いていく。

それにさらにもう一步遅れて、アキ、クロウが続く。

クリフは洞窟の真正面に来ると、中に向かって叫んだ。

「おーい、誰かいるかあー！」

エッジが止める間もなく、クリフの声が洞窟に反響する。

「なっ……」

クロウとアキは呆れすぎて何も言えなかった。

すぐに洞窟の中が騒がしくなる。

こうなってしまうては、もうどうしようもない。

「おい、なんかガキが来たぞ」

中からやってきた男の一人がエッジ達を見つけると、後ろから来る仲間に向かってそう言った。

数は町の入り口で出会った者達の五倍以上で二十人近い。纏まりのないバラバラの服装は全体的に黒が目立つ。武器は剣や斧、棍棒と

様々だが全員が武装していた。

「ガキイ?……ガキが何しにきたんだ?金にならねえなら追い返せ」

最初の男の言葉に別な男が疑問を口にする。

「あなた達が賞金稼ぎの方ですか?」

男たちの喧騒に負けられないように可能なかぎり大きな声で叫んだ。

「だったら何なんだあ?」

「おい待て、こいつら町の入り口で攻撃してきた奴らだぜ」

賞金稼ぎ達の間で敵意が膨れ上がる。

それでもアキはまだ必死に彼らに叫ぶ。

「私の話を聞いて下さい!」

再び叫んでも笑い声は少しも小さくならなかった。

「どうして何もしていないマーミンの町の人からお金を奪うんですか!」

「奪うのに理由なんか要らねえ俺たちがしたいことをして何が悪い」

「退屈だったしな」

「何言ってるんだ、どうしても金が必要だったからだろう」

「いや、今日という日にやる事に意味があるんだ」

口々にバラバラの理由を喋りだす。

その様子は何か噛み合っていない様で、特に一つ明確な理由があるわけでもないようだ。

(そんなの自分勝手すぎる)

アキは強い憤りを覚えた。例え町の人々がどれほどの罪人であったとしても、自分達の都合で他人のものを取るなんて許されない事だと。

「考え直してください!あなた達にそんなことをする権利は無いはずです!」

それを聞いた男たちの顔が険しくなる。

「……うるさいガキだな」

「イライラするからこいつら全員殺しちまおうか?」

「そうだな」

「町の奴らも送った子供達が死んだとなれば考えを改めるかもしれ

ん」

「それで金が貰えるなら良いか」

そんなことを言いながら誰からとも無く全員が笑いだす。

「——どうして自分達がしようとしていることが分からないんですか！」

今までアキが発した言葉の中で一番強く叫んだが、もはや相手は完全に聞いていないようだった。

「アキ……もう、やめろ」

話をまったく聞かない相手でも、必死に語りかけ続けるアキの姿を見ていられなくなって、エツジはアキの前に立ちふさがるようにして制止した。

「くそ、黙って聞いてりや腐ってんのか！お前ら！」

クリフも今にも殴りかかりそうな勢いで怒鳴る。

「……さつきから思ってたんだけど」

今まで黙っていたクロウが急に言葉を発した。

その目はずっと男たちの顔から離れていない。

「こいつらの目……おかしくない？」

クロウの視線をたどり、エツジも男たちの目をよく見る。

——焦点が合っていない。

左右の目がまるで違う方向を向いている者もいる。

「確かに、何だこいつら」

クリフも気付いた様だ。

「……狂ってる？」

戸惑うエツジに、クロウは些細な事だというように返す。

「まだ喋ることはできるみたいだけどね」

すでに男たちの方は話を聞く気もないようで、顔に笑みを浮かべながら武器を構える。

「お前ら気を付けろ！来るぞ！」

クリフもエツジ達を守るように立ち、拳を構えた。

「死ねえええええ！」

洞窟内には狂った賞金稼ぎ達の怒号だけが響き渡った。

「はあああああー！」

上段から自分に振り下ろされた斧を軽く体を逸らすことでかわし、クリフは気合いと共に相手の顔面を殴り飛ばす。

「ぶはあっ!!」

殴られた男は刺さったままの斧をその場に残し、後方に吹き飛んでいく。

さらにクリフはしやがみながら地面に水平に蹴りを放つ。

足を元をすくわれた数人の男たちが後ろに倒れこみ、後から来た男たちにはぶつかり一時的に足止めする。

「轟裂破!」

そこへ、クリフは両掌を叩きつけた。

直撃した先頭の男は、アキの突き以上の勢いで吹き飛ばされ背後の人間達を巻き込んで将棋倒しにする。

「虚空を切り裂け——エアスラスト」

その隙を逃さずクロウがタイミングよく深術を発動させる。

「ぐわああああー！」

転倒した男達を次々に風の刃が切り裂いていく。

致命傷とはいかないが、戦闘不能にするには十分だった。

その一撃で六人ほどを倒すことが出来た。

「へえ」

クリフも少し感心したような表情をしながら、更に敵の集団を洞窟の奥へと追い込んでいく。

この狭い空間では、彼一人でも十分に狂った男達を圧倒していた。

(強い、クロウもクリフも。俺も負けてられない)

一時的に敵の流れが止まっている間にエッジも前進し、クリフと並んで剣を構えた。

後続の男たちが棍棒を持って突っ込んでくるのを見て、エッジも剣を大上段に振りかぶる。

「でやああああー！」

敵が気合と共に棍棒を思い切り横から振ってきたのを見て、エッジはそれを全力で振り下ろす。

「裂爪斬！」

エッジは目の前に獣の爪痕のような斬撃を三つ発生させ、棍棒を地に叩きつける。

男は棍棒への突然の衝撃でバランスを崩し、つんのめる。

すかさずエッジは振り下ろした剣を返し、切り上げを放った。

男の腕から鮮血が吹き出す。

村の周りでエツグベアと戦った時と同じ、何度もこの手で感じた肉を断つ感触。

エッジにはそれが急に初めて感じるもののように感じられた。

一瞬、彼の感覚が麻痺する。

男達の怒鳴り声など、耳に入らなくなった。

(……初めて人を斬った)

その事実が今更ながら、エッジの頭の中を支配する。

(でも駄目だ、こんなじゃ……もつと強くならなきゃ駄目だ)

エッジの頭の中に自分が負けた時のこと、そしてその瞬間さえ無表情だった少年の顔が蘇った。

(俺は弱い。こんなことじゃルオンはきつと顔色ひとつ変えないのに……)

それでも、立ち止まった人間は何もできない。

エッジは無理矢理体を回転させその勢いのまま斬撃を飛ばす。

「魔神剣！」

狭い通路で男たちは衝撃に阻まれ一時的に進めなくなる。

それを待つ事無く、彼は敵の集団に向けて走りだす。

「はあああつ！」

気合いと共に切り上げ、払い、切り下ろし……と次々に斬撃を放ち致命傷にならない程度に敵を倒す。

疲れも、周りの音も、エッジはもう何も感じなかった。

「——十分戦えるんじゃないか」

「え?……」

クリフの言葉で急に周りの音がエッジの耳に入ってきた。

彼が気が付くと、立っている敵はもう一人もいなくなっていた。

「洞窟はまだ奥まであるみたいですけど、一先ずこれで引き上げましょう」

エッジが気付かない内に、アキがクリフの横に並んで話していた。まだ敵の息はあるとはいえ、当分はこの狂った賞金稼ぎ達が町を荒らすことはないだろう。

「そうだな」

これ以上何もできることは無くなり、四人は洞窟を出た。

クロウは先を歩いているアキとクリフの背中を見てエッジが遅れていることに気付く。

後ろを振り向くとエッジが無言で洞窟の方を眺めていた。

「あいつらのことが気になるの?」

「いや……」

エッジは洞窟から目を離さずに答える。

(……?)

ふと、クロウはエッジの拳が必要以上に強く、握り締められていることに気付く。

——今は何も言わないほうがいいかもしれない。

何となくそう感じて、クロウは適当に流す。

「ならいいけど」

こいつが自分でそう決めたのなら私にできることは何もない、と。

立ち尽くすエッジを置いてクロウは歩き始めた。

(俺は……立ち止まらない)

心の中でそう決心すると、エッジは無理矢理視線を洞窟から外し、クロウ達のあとを歩きだした。

第八話 海の彼方へ

エッジ達はひとまずマーミンの町に戻り、馬車を出してくれるように頼むことにした。

正気を失っていたとはいえ怪我をさせてしまった以上、賞金稼ぎ達にはきちんと捕まえて貰った上で治療してもらう必要があった。

再びクロウは一人で行くと言いだし、太陽も傾きはじめていたので、エッジとアキそしてクリフは仕方なく宿屋で待つことになった。「……」

今エッジは部屋の中で壁によりかかりながら、深刻な顔をして塞ぎ込んでいる。

「どうかしたか？」

やや心配そうな顔でクリフがエッジの顔を覗き込んでくる。元はといえばクリフが勝手に部屋割りを決めてしまったせいなのだが、彼がそんな事を知る筈も無い。

エッジは、アキとクロウを二人きりにするのは今まで極力避けてきたが、ここに来てそれが裏目に出る。

二人きりにした場合どうなるのかエッジには分からなかった。

(かと言って俺が女部屋がいいとは言えないし……)

「ごめん、悪いけど、少し一人にしてもらえるかな？」

そう言つてエッジは、クリフを置いて部屋を出た。

「え、俺……嫌われてんのか？」

クリフは訳が分からずその場に立ち尽くした。

エッジが部屋を出たのは一人になりたかったからでもあった。

クリフから離れたことで、洞窟での光景が彼の前に再び蘇る。

エッジが覚えているのは二人目を斬ったあたりまでだった。自身の手をぼんやりと見つめながら彼は思う。

(俺は……一体何をしていたんだろう)

人を斬った。

言葉にするのは簡単だった。

だけど、それは本当に正しかったのだろうかと考えると、エッジは

今どうしても首を縦に振ることができかった。

自分が戦わずに、クリフたちだけに戦わせた方が相手の怪我は少なくて済んだのではないだろうか。

しかし、それで万が一クリフ達が負けたら、皆殺されていたのではないだろうか。

そうになったら、あの狂気はこの町全体に被害を出していたのではないか。

そう思うと、今度は他に選択肢は無かったのではないかとも思えてくる。

——同時にそうやって逃避している自分にもエツジは気付く。

何度もそんな問いを続けるエツジが気が付くと、クロウが宿に入ってきていた。

「どうかした?」

その声にはほんの少しだけ心配するような響きが含まれている様にエツジは感じた。

「!」

慌てて顔をあげたエツジはクロウの顔を見ると、いつも通りの冷やかな目をしたクロウだった事に安堵した。

他人にまで見透かされていたら、どんな顔をしていいのか彼には分からなかった。

「いや、何でもない……馬車はどうだった?」

「本当に賞金稼ぎが来ないのかどうか確かめてからだって。明日には行けると思うよ」

「そうか……」

そこでクロウが訝しむような表情に変わる。

「ところで何でこんな所で待ってたの?」

「実は……」

嫌々ながらエツジは（アキのことにはなるべく触れないように）クリフと一緒に二つの部屋をとってしまい、部屋分けをどうするか困っていることを話した。

「勝手について来ただけだし、あいつ一人にしておけば?」

「……いや、さすがにそれは可哀相じゃないか？」

微かにクロウはエツジを睨んだが、やがて投げ遣りな口調で答えた。

「じゃあ、もうくじ引きとかで良いんじゃない」

エツジはそんなと反抗しかかったが、今はどんないい加減なアイディアにも継らざるを得ないぐらい疲弊していた。

結果。

「何でこうなるんだ？」

不思議そうな顔をしてクリフが隣のベッドのクロウに聞く。

「……知らない」

不機嫌そうにクロウは答える。

「大体何で部屋割りわざわざくじ引きで決めるんだよ？ガキじやあるまいし」

「何？くじ引きで決めたら悪い？」

半ばキレ気味にクロウは隣の青年を睨み付ける。

「いや、部屋割り自体は俺は何でも良いけどな。ただ、そこまで悩むなら別に部屋訳無くても良いんじゃないかと思っただけだ」

まるで気にしていない様子で、クリフは両手を頭の後ろで組む。

(……鬱陶しい)

クロウはこういう喋ってばかりの人間が大嫌いだった。

心の中で毒づきながら、クロウは布団をかぶる。

「もう寝るのか？」

「うるさい」

一言で切り捨て、彼女は壁の方に寝返りを打った。

と、思うともう一度顔だけを捻るようにしてクリフの方を向き、言った。

「それと、私から五歩以内に入ったら殺すよ？おやすみ」

それだけ言うと言を元の方向に戻し、クロウは強制的に会話を終わらせた。

「……」

一方のエツジ達の部屋の雰囲気は重々しかった。

エツジがアキと二人になったのは、今日この町に着いて、突然謝られた時以来だった。

アキはベッドに腰掛けて俯いたままだ。

何と声をかけようかエツジが迷っていると、アキの方から視線を下に落としたまま話し掛けてくる。

「エツジさんは……大勢の人の為なら、数人に迷惑がかかっても良いと思いますか？」

突然すぎてエツジはアキの真意をはかりかねた。

今日の事を言っている様にも聞こえるし、そうでない様にもとれる。

エツジが答えないと、アキはさらに言葉を続けた。

「例えば……罪人を捕まえるためなら騙したり、罠にはめたりしても良いと思いますか？」

エツジはすぐには答えなかった。それはアキにとって、とても大事な問いのような気がしたからだ。

なるべく言葉を選んで慎重に答えるエツジ。

「俺は、もしその罪を犯した人を放っておいて、更に誰かが傷付くならそういう手段を使うのも仕方がないと思う……ただ」

『「ただ」、何ですか？』

興味を引かれたのか、アキは顔を上げてエツジの方を見る。

「俺はそれでも騙された人は可哀相だと思う。本当は間違っていないだろうけど」

しばらく沈黙があったが、やがて独り言のようにアキが呟いた。

「……優しいですね、エツジさんは」

そう呟いたアキはどこか寂しそうだった。

「——え？」

「いえ、何でもありません。おやすみなさい」

何を言ったのかエツジには分からなかったが、アキはそれだけ話すとベッドに潜り込みエツジに背中を向けてしまった。

「おやすみ」

仕方なくエツジもベッドに横になる。

横になると洞窟でのつかれのせいか、エツジはすぐに深い眠りに落ちていった。

「…………ごめんなさい」

眠ってしまったエツジの横顔に向かって、アキは何度目か分からない、届かない謝罪を呟いた。

翌朝。

エツジ達は宿で朝食を取ると、すぐに馬車を手配してもらった。

早く港に行くことができると思えば、喜ぶべきなのかもしれないがクロウもエツジも疲れでそんな気分では無かった。

思った以上に町は緊張状態だったようで、よく見れば昨日と人通りの量が全然違う。

感激した町長が礼を言ってきたが、その相手はクリフがしてくれたのでエツジ達は無理に笑顔を作って対応せずに済んだ。

馬車に乗ってからはしばらくして、ようやくエツジが口を開く。

「昨日はよく眠れたか？」

「誰かさんが邪魔だったくらいでよく眠れたよ。で」

エツジの質問に答え、クロウは隣の席に座っているクリフに目を向ける。

「何であんたついてきてるの？」

当然のように座っていたクリフが当たり前のように答える。

「行く方向が同じだから別に良いだろ？」

「駄目」

「まあ乗っちゃまつてるモンは仕方ねえし、気にするな」

そう言うところクリフは窓の外の景色に見入ってしまい、一言も話さなくなつた。

クロウは今にもクリフを馬車から突き落としかねないような不機嫌な表情で隣の席のクリフを睨む。

(…………しばらく騒がしくなりそうだな)

クリフは常に自分のペースで動いているようだ。

しかし、自分の隣でクリフと同じく窓の外を遠い目をして眺めてい

るアキを見てエツジは思った。悩みが打ち明けられなくても、束の間でもアキの気が紛れるならそれでも良いかもしれない、と。

クロウはかなりご立腹の様だが、少なくとも彼が一緒の間はアキと険悪な空気になることも減るだろう。何だかんだでクリフの存在は必要かもしれない、とエツジは結論付けた。

「まあ、それなら良いか」

「何か言った？」

思わず漏れた独り言をクロウは聞き逃さなかったらしい。

「いや、別に」

今のクロウがこの考えを聞いたらきつと怒るだろう、とエツジは思う。う。

クロウは一瞬腑に落ちないという顔をしたが、すぐにどうでも良くなったのか窓の外に目を向けた。

この狭い空間の中では出来ることも限られる。

エツジの目も自然に窓の外へと向けられた。

それからはクリフが時折する質問以外は話らしい話もせず馬車に揺られながら、四人は港に着くのをひたすら待った。

《クーバ港》

港に着くとエツジ達は馬車の御者に礼を言い、船を探した。

「どの船に乗れば良いんだ？」

港に停泊している船を見回しながらエツジが聞いた。

「王都シントリアを目指して中央大陸に行くなら確か、ブレカス港行きが一番近いはずですよ」

と、アキが答える。

「分かった」

とは言ったものの船に行く先は書かれていないので、四人はこの港で荷物の運搬をしている人達に聞いて探した。

そのせいかようやくブレカス港行きの船を見つけると、彼らの中には小さな達成感が生まれていた。

が、

「ブレカス港行きの船は四人で4800ガルドになります」

「……ある？」

「……いや、無い」

「……ええと」

エッジ達三人は誰か一人くらい持っていないのかと、互いに顔を見合わせる。

「えーっと、4800だよな、ほらよ」

三人が困っているとクリフがガルド通貨を男に手渡した。

「え」

「ん？どうかしたか？」

さも当然のように船に乗ろうとしながら、クリフは少し驚いている三人の顔を見回す。

「お金、良いんですか？」

アキに質問され、不思議そうな顔になる。

「良いも何もお前ら金無いんだろ？」

「それは、そうですけど……」

アキが三人分の戸惑いをクリフに示してくれる。

「まあいいって、気にすんなよ、別に後で金取ったりしねえからさ」

そう言うのと、クリフは一人で先に船に乗り込んでしまった。

「案外いい人なのかもな——あ、いやちよつと喋り方はいい加減だけど」

クロウがまた睨んできたので、あわててエッジは最後の文を付け足す。

「船、か」

どこか憂鬱そうにクロウが呟く。

「クロウは船に乗ったことがあるのか？」

「さあ」

やはり、どこか元気が無いというか投げ遣りだ。

「もしかして、船が苦手？」

エッジがそう言った瞬間、クロウはすごい勢いで彼を睨みつける。明らかに怒っていた。

「そんなわけないでしょう？悪いけど、船に乗ってる間は一人にしてくれる？」

それだけ言って、クリフに続き船に乗り込んでしまった。

どうやら凶星だったらしい。

(クロウ、船旅大丈夫か……)

「エッジさん……？」

彼女の後ろ姿を見ながらエッジが不安に思っていると、横から遠慮がちな声でアキに呼びかけられ振り向く。

「ん？」

アキは沈んだ表情で俯いていた。

「エッジさんは……クロウさんのことをどう思いますか？」

エッジはアキが何を意図しているのか分からず、困惑した。

「どういう意味で？」

「エッジさんはいつもクロウさんに突き放されてばかりなのにどうして信用したり、心配したりできるんですか？」

しばらく考え、それからエッジは答えた。

「……ルオンに襲われた時、俺はあいつの深術を受けて全く立ち上がれないくらいひどい火傷を負って。そのまま気絶したみたいなんだ」

アキがそれを聞いて、微かに驚いた表情をした。

あの時は霧も同時に発生していたので、アキ自身も閉じ込められていた事を考えると知らなくても無理はなかった。

「クロウは俺を置き去りにして一人で行くこともできたはずなのに、俺の傷を治療してくれた」

それは深く考えずにやったことかもしれない、だけどエッジはクロウの心の奥底には優しさがある、そう信じたかった。

「下らない理由だけど、クロウは本当は優しい人間だってそんな気がするんだ……少しの間だけ一緒にいてそう思った」

アキは目を伏せた。

「それだけかな、あんまり説明になってないけど」

話し終えてから少しだけ沈黙があった。

「わかりました。ありがとうございます」

最後に少しだけ微笑むと、アキはそのまま船に乗り込んでしまった。

(……やっぱりまだクロウのことは信用できないのか?)

アキの態度のことを気にしながらも、最後に残されたエツジも船に乗り込んだ。

エツジはこの大陸を初めて離れること、そして自分が旅に出てからあったことを。

クロウは船旅への不安とこの先に待つもののことを。

アキは自分がしていること、そしてそれ故の孤独を。

クリフは海を見ながら何か遠い日のことを思い出しているようだった。

それぞれの想いをのせて、船はカーメリア大陸を旅立つ。

転章 宝珠編

第九話 小さな暗雲

空の青、海の青。

外の世界全てが青かった。

船に乗っているのだから当たり前だが漁に出たこともなく、ましてや船に乗ったことすらほとんど無かったエツジにとってそれは違う世界に入り込んでしまったに等しかった。

その光景は自分が今まで生きてきた大陸を後にすることも示している。

(俺は……何をしようとしているんだろう?)

クロウという少女に出会って、村から二人で逃げ出してきたとき、エツジは何も考えていなかった。

正確には、何をしようとしているのか自分でも分かっていなかった。

今でも、はつきりした目標は何もない。

守りたい、クロウやアキに傷ついて欲しくない。

それだけを理由にして、衝動に突き動かされるままに、今まで彼はみんなと旅をしてきた。

だけどそこには『何故そうしたいのか』、『何の為なのか』という決定的な理由が欠けている。

(シントリアに着いたら、多分みんなとも別れなきやいけないんだろうな)

その後どうするか、エツジの中にはまだ何も浮かばなかった。

「ふう」

三人と別れ一人になるとアキはゆつくりと息を吐いて、水平線をぼんやりと見つめる。

船の外の景色にはアキの興味を引くものは何も無く、ただただ孤独だけが心の中に渦を巻いていた。

彼女はせめて今だけは自分のしてきたことも、これからしようとしていることも忘れていたかった——が、できなかった。

考えないようにしようとするほど、「エツジ達を騙している」、「裏切っている」という罪悪感がアキの頭を支配する。

(今までの三年間、こんなことは無かったのに)

アキは今まで自分のしていることに疑問を抱いた事はあまり無かった。

しかし、今になって彼女は急に自分のしていることに自信が持てなくなっていた。

(どうして?)

自問しても分からない。

今のアキにはこの『仕事』を最後までやるしか選択肢が無かった。

(迷っちゃいけない、私はもう戻れないから)

世界が、揺れている。

その感覚にクロウは吐き気がした。

(……最悪)

ひどい船酔いに悩まされていたクロウは、あまり人気のない場所を探し船の縁に体重を預ける様にして体を折っていた。

彼女は船が嫌いだった。

正直に言えば、人間の乗り物ではないと思っっている位に。

だからクロウにはこんなに揺れがひどく、同じ景色ばかりの物に乗りたがる人間の気が知れなかった。

とにかく早くこの悪夢が終わってくれるよう、クロウは祈った。

「こんな所にいたのか」

突然背後から声をかけられクロウは内心焦る。

が、そんな様子は表面に出さずに彼女はゆっくりと振り向く。

「なんだ、エツジか」

声をかけてきたのがエツジだと分かると、クロウの力が抜ける。

「なんだ、って。それより大丈夫か？」

「何が」

「船、苦手なんだろう？」

「別に」

そう言うと、この場を去るつもりでクロウは無理矢理身を起こす。船酔いで弱った身体は少しふらついた。

ちようど同じタイミングで船がかすかに揺れ、クロウはバランスを崩す。

(……あ)

船の縁から落ちる。

彼女はそう思った。

その瞬間、腕と肩をエツジがつかんでクロウを支える。

「大丈夫か？」

エツジはさつきと同じことを、また聞いた。

「大丈夫だって言ってるでしょ」

エツジに支えられたままでクロウは言葉を返す。

「じゃあ、離しても平気か？」

クロウは無言で頷く。

エツジが慎重に手を離すと、彼女はまたふらつと倒れそうになった。

慌てて再びクロウの肩を支えるエツジ。

彼女の船酔いは傍目に見てもひどい状態だった。

「クロウ、無理するなよ」

エツジは仕方なく彼女を近くの壁に寄り掛かせ、座らせる。

その間クロウは何も言わず、特に抵抗もしなかった。

「……」

その態度にいつもの様な冷たい感じは無く、おとなしいクロウはまるで別人のようでエツジはやりづらさを感じた。

エツジも特に話す様子も無く無言で立っていたので、しばらく沈黙が続いた。

「……どうしてあなたは私に構うの？」

まるで独り言のようにクロウが漏らした一言が、沈黙を破る。

「あなたは私の何なの？ どうせ私なんかと何の関係もないんだから

放っておけばいいのに」

エツジは何も言えなかった。

今の言葉には怒りや拒絶というより、何よりもあきらめの感情が最も強く現れていた。

それが、エツジに普段の冷たい態度以上に心の距離を感じさせる。彼にはその距離をどうすれば縮められるのか、まるで分からなかった。

(……みんないずれ私から離れていってしまうなら、初めからそばに誰もいないほうが楽なのに)

クリフは船の縁によりかかって、何をすることもなく船内の人の動きを眺めていた。

他の乗客が話したり、船員が忙しく働いていたりする様子を見ても暇つぶしにはならない。

昼寝でもしようかと思いたった彼は座ってはみたが、なかなか眠れない。

(昨日、寝すぎたか)

こうしてのんびり船に乗るのは何年ぶりだろうか、クリフは思いを巡らす。

以前はよくあちこちへ旅するのに使っていたが、

(今は、そんなことできる身分じゃないしな)

自分にのんびりと旅をしている時間などないのだと、彼は思う。

今もただ無意味に時間を過ごしているわけではなかった。

クリフはあるものを探していた。

エツジ達には何も言っていないが、もともと彼らに着いていくことにしたのもその為だ。

周囲の人間に警戒されないため、彼はエツジ達を少し利用させてもらうことにしていた。

(……あいつらには悪いことをしたな)

それでもクリフは探さなければならなかった。

それが、彼の唯一大切な事だったから。

(——もう少し待っている、フレア。必ず戻るからな)

《ブレカス港》

船は五日程で港に着いた。

ブレカス港に着くと、クロウは既に口も利けない程疲れ果てた様子でふらふらと船を降りてきた。

そのすぐ後にエツジが続き、さらに間を置いてアキとクリフが船を降りた。

顔色が悪いクロウは何も言わず、近くに積んである荷物らしき木箱に寄り掛かっていた。

クロウはしばらく歩けそうもない様子だった。

とはいえ、ここまで来てしまえば残りの道のりは三分の一程度。

ここからは陸続きで、治安も良い地方が多く最大の難所(特にクロウにとって)は越えたと言えた。

ただ、最も問題なのはスプラウツに見つかる可能性だった。

アキが加わってからは彼女への遠慮もあって普通に街道を通ることもあったが、人が多い場所に近づくほど見つかる危険性も増す。

再びルオンやスプラウツの残りのセブンクローバースクラスの者と戦闘になれば無事に凌げるとは限らなかった。

「……これからの進路のことなんだけど」

「ん？どうかしたか？」

重々しい雰囲気と遠慮がちに口を開いたエツジの様子を不審に思ったらしく、クリフが反応する。

この四人の中でスプラウツとクロウのことを知らないのはクリフだけだった。

「クリフ、シントリアまでの道はなるべく街道を通らないようにできないかな」

エツジの言葉を聞いたクリフは変な顔をした。

「何でだ？」

「あんまり目立ちたくないんだ」

アキもクロウも真っ直ぐ目を向けないものの、クリフの反応に緊張を見せる。

こんな言い訳では納得しないだろう、と。

普通の旅人がシントリアを目指すのに街道を通らないなど筋が通らない。

「別にいいぜ、野山を突っ切るのには慣れてるし」

「え？」

「だから、目立ちたくないんだろ？」

あまりにすんなり了承してくれたので、エッジは少し拍子抜けしてしまう。

「その代わり、歩くのはきつくなるから覚悟しとけよ」

それだけ言うとかリフは親指をぐつと立ててみせた。

「ああ……ありがとう」

そのややおどけているとも取れる仕草と安心感でエッジも思わず安堵の笑みをこぼし、アキも目を丸くし、クロウは再び気持ち悪そうに俯いた。

「ところで王都までは食料が保ちませんから、どこかで補給しないと」
「だったら多少遠回りになるかもしれないねえけど、キーラー山脈の方を通ってカトマスに寄ればいいんじゃないか？」

「そうですね、山脈に沿って行けば迷わずに王都まで着きますから」

エッジには分からなかったが、アキとかリフは中央大陸の地理に詳しいようだったのでエッジは二人に任せる事にした。

「クロウはそれで良いか？」

彼はさつきからずっと黙ったままのクロウにも一応意見を聞く。

彼女はまだ元気が無いように見えたが、一応話すことはできそうだった。

「……カトマスって前に土砂崩れで無くなったんじゃない？」

それを聞いたクリフが妙な顔をした。

「よく知ってるな。お前カースメリア大陸の人間じゃないのか？」

「たまたま話が耳に入っただけ」

「まあ確かにあれは大きい事件だったからな」

エッジはクリフの言い方に違和感を覚えた。

「事件？土砂崩れって天災じゃないのか？」

「ああ、そのカトマスって町はその頃ちようど町全体で大規模な国への反乱を計画していたんだ。それだけでもまあ結構な話題だったんだが」

反乱、その言葉には重い響きがあった。

「何で？」

エツジの質問にクリフが説明する。

「あの町はシントリアとカースメリア大陸の中継地点だったんだが、王都の貴族が無理矢理輸入品の値段を下げさせたんだ。だからそれに怒って反乱を計画していた」

そこでクリフは一呼吸おいた。

「元々あまり評判が良いヤツじゃなかったから当然といえば、当然だけど」

言いながら、彼は軽いため息を吐く。

「——だからそんな時に土砂崩れが起きて、人々は言った、あの事件はあいつの……『ジェインの呪い』だってな」

「え」

エツジが言葉を失い、アキは和らぎかけた表情を再び硬くする。

場の空気が一段と重くなり、しばらく沈黙が続いた。

「まあそんなことがあった町だけど、今はとりあえず復興に力を注いでるから反乱どころじゃねえはずだし、そんなに危険じゃないと思うぜ」

そう言うと、これで話は全部終わりだというように先頭に立って歩き始めた。

エツジ達もそれに倣って歩き始める。

(ジェインって……)

確かアキの家の名前もジェインだったと、エツジは思い出す。

(……クロウがアキにああいう風に接するようになったのも、ジェインだって聞いてからだだったよな)

クロウがアキを恨んでいることと何か関係があるのか、エツジは考える。

彼は二人の表情を伺ってみたが、その顔からは何も読み取る事は出

来なかった。

エツジ達は森の中に入った。

徐々に山に近づいているせいか、ますます草木を掻き分けて進むのが困難になってきている。

クリフは言葉通り野山を突っ切るのには慣れているようで、先頭で木やその根を楽々避けている。

エツジのすぐ後ろにはクロウが、その後ろにアキがいる。

普段も歩いている時はあまり明るい表情をしていることは無いのだが、エツジから見てもクロウもアキもいつも以上に暗い顔をしているような気がした。

(……この先に何かがある)

何か近づいてはいけないものに、近づいている。

杞憂だとは思っても、そんな言い様のない不安が彼の頭を離れなかった。

「多分、そろそろ見えるぞ」

クリフの言葉に全員が顔を上げ森の向こうを見ると山の斜面に生えている木々が一部全く無くなっており、土砂崩れがあった場所が見て取れる。

「土砂は大分片付いたらしいが、斜面に緑が戻るのはまだ先のことだろうな」

クリフの言い方は寂しそうだった。

それからまたしばらく会話もなく歩き続けると、町の様子が見えてくる。

山の麓に簡素な造りで木造の家々が、バラバラに立っている。

他の町ほどの数は無いが、少なくとも買い物は出来そうだった。

「じゃあ、買い物はどうする？」

町に着く前に決めておこうとエツジは三人に声をかけた。

「私は少し用があるから」

クロウはこの町でも変わらず単独行動する様子を見せる。

(でも、いつものクロウと何か違う気が……)

エツジは少し引つかかった。声にいつもの覇気が無かった事もそ

うだったが、

「用？この町に一体の何の用事があるんだ？」

不思議そうにクリフが質問する。

それだった。

普段のクロウは確かに一人を好むような所はあるが、意味もなく単独行動したりはしない。

「別に？たまには煩い奴から離れたいだけ」

確かに今度の彼女の口調には刺があった。

しかし、本当にそれだけだろうかとエツジは不安を覚えた。

「そうか、だったら俺達だけでいいな」

クリフも無理に誘う気はないようで、クロウ抜きで買い物話を進める。

結局、クリフが調味料と肉、エツジが野菜と薬、アキがその他消耗品を探してくることになった。

何だかクリフだけ楽をしているような気もするが『調味料は自分で探したい』、と言い張ったので仕方がない。

実際このメンバーの中ではクリフが最も料理が上手く、最近はクリフに頼りっぱなしだったので誰も文句は言えなかった。

《災厄の町 カトマス》

町——というよりバラバラに散らばっている家々の端に着くと、クロウはじゃあ、と言って町の中には向かわず山の方へと向かった。

「あいつ、どこ行くんだろうな？」

またもやクリフが不思議そうな声を出したが、他の二人に分かるはずも無かった。

「ま、それはさておき、二人とも買い物よろしくな」

クロウのことをさして気にする様子もなく、クリフは軽く手を振って一足先に町の中へ消えた。

「じゃあ、また後で」

「はい」

二人も後を追う様にそれぞれ町の中へと消えた。

クロウは一人、山の斜面に来ていた。
ちやうど土砂崩れで剥き出しになった地面と森との境目だ。
そこからなら町の様子を見渡すことも出来た。

(ここに来たの、何年ぶりだろう)

出来れば彼女は二度と来たくは無かった。

数年前にクロウがここに来た時とは町並みがかなり異なっている。
以前は住民達に使用されていた集会所や、武器を蓄えていたであろう倉庫も今は跡形も無かった。

それらと同様に、大きな建物はほとんど無くなっている。

代わりに以前より小さく簡素な造りの家々が無数に建っていた。

一度完成したものが失われ、不自然な形になっているのがありありと分かる

「……」

見れば見るほど気分が悪くなるので、クロウは町から視線を外す。
彼女はまるで自分の過去を目の前に突き付けられている様な気がした。

クロウにとっては今のこの町の存在そのものが、記憶の一部だった。

エツジ達とは宿で落ち合うことになっていた。

(……もうしばらく時間を置いてから宿に行こう)

あまり早く着いていては怪しまれる、それになるべく人目は避けた
い——そう考えて、クロウはその場にしばらく留まってから宿に向
かって歩き始めた。

町に入ってクロウが宿の場所を探していると、路地からアキくらの
年の少年が現れ彼女に向かって叫んだ。

「おい、待てよー!」

背後の声にクロウは返事もせず、無言でゆっくりと振り向いた。

「この……人殺し!!」

怒りの表情を浮かべて拳を握り締める少年を、クロウはどこか他人
事のような冷めた表情で見つめていた。

第十話 記憶呼び起こす災厄の町

エツジは少し膨れた革袋を持って、野菜を扱っている店を出た。

「これで……全部だよな」

袋の中身を確認して彼は呟く。

カトマスの品揃えは豊富とは言えなかったが、四人分の食料を揃えるのには十分だった。

(あれ?)

エツジは人通りがほとんど無い通りの中に、見慣れた濃い紫色の髪が見えた気がした。

「クロウ?」

はつきりとは見えなかったが、エツジには人影が彼女のものと思えなかった。一瞬見えた影は、さらに人気の無い道に入っていく。

(もう用は済んだのかな?)

何をしているのか微かな興味は沸いたものの、もし今まだ何か用事の途中だったらと思えばエツジは少し近付くのをためらった。

(でも……あんなに人気のない路地だとちよつと気になるな)

普通に近づけば後から余計な誤解を招く事もないと思えば直して、エツジは薄暗い路地に入ってしまった。

しばらく着いていくとクロウはこの辺りに用があるというより、ただ人気の無い道を選んでいるらしいということが分かった。

エツジはというと、相変わらず後を追っただけだった。

考えるのは簡単でも、こんな不自然な場所で堂々と近づくのは勇氣がいる。

どうしようかと悩んでいる内にクロウが視界から消えていることにエツジは気付いた。

慌てて左右の路地を確認しながら彼は走りだす。

ドサツ

走りだそうとした瞬間、何か重いものが地面に落ちたような鈍い音がエツジの耳に届く。

「ん？」

エッジは音がした角に近いた。

何か嫌な予感がエッジの脳をよぎる。この町に入る前からずっと感じていた嫌な感じが。

クロウのことが不安になって彼は思わず路地から飛び出した。

「——え？」

ほんの一瞬、エッジは目の前のことを理解するのに時間が掛かった。

見慣れない少年、恐らくこの町の少年が彼に背を向けて立っている。

その向こうにクロウが倒れていた。

なぜ倒れているのか？

この少年がやったのか？

普通の少年にしか見えない子がなぜクロウを？

疑問が無数に沸いたが少年がナイフを取り出し、クロウに向けたところでエッジの意識は覚醒した。

エッジは素早くナイフを握っている少年の手を掴む。

「——っ何してるんだ！」

こんな勢いで怒ったのは何年ぶりかエッジは自分でも思い出せなかった。

そのまま彼がクロウの様子を確認すると、彼女はエッジの出現に不意を突かれたような顔をしていた。

見たところ微かに唇から出血しているようだが、他に目立った傷は無く無事のようにだった。

「うるさい！離せよ！」

少年はエッジに目も暮れず暴れる。

今はクロウだけしか目に入らない様だった。

「俺は仇を討たなきゃいけないんだ！邪魔するな！」

（仇？……クロウが仇？）

少年の方に注意を向けていたエッジはふと、目の前の空気に異常なディープスの高まりを感じた。

「クロウ！やめろ!!」

本能的に彼女のやろうとしていることを察知したエツジは止める。途端に辺りの空気が普段のものに戻った。

僅かに嫌悪の表情を浮かべるとクロウは弾かれた様に立ち上がり、エツジと少年に背を向けて走りだした。

「クロウ！」

思わず少年の手を離し、後を追おうとするエツジ。

「待て!!」

背後から少年の声が響きエツジは振り向く。

（仕方ない）

振り向きざま、彼は一瞬で手に集束させた少量の雷のデイクラスを解放する。

全く殺傷能力は無いが、強烈な閃光が目の前に走った事に少年は驚いてその場に尻餅をついた。

「……………あ」

（良かった、やっぱりまだ子供なんだ）

相手がナイフを取り落としたことにほっと安心するエツジ。

「命は大事にした方が良いよ」

まだショック状態の少年にそれだけ言葉をかけると、クロウの後を追いはじめ。

（早くクロウを見つけないと）

さっきの少年と何があったかエツジは知らなかったが、あの状態のクロウを放っておいたら彼女はまた全てを一人で抱え込もうとするという確信があった。

エツジは、それは絶対に嫌だった。

次々に人気の無い路地を通り過ぎ、エツジは彼女を追い続けた。

「ハア……………ハア」

ひたすらクロウは町の中を走る。

人がいる道かない道かも考えず、人と人、建物と建物の間を走り抜ける。

（誰も、何も、ついてこないで！）

先程の子供も、ジエインも、クリフとかいう人間も、エツジも……みんな彼女とは違った。

決して重なることのない違う世界を生きてきた人間。

(なのに、皆私に構ってくる。怨みや、怒り、苛立ち、憐れみ……勝手に感情を私にぶつけてくる。——どうせみんな私から離れていくなら、私は一人でいい！)

四年前。

彼女は物心ついた時からずっとスプラウツにいた。

それ以前の記憶は何もない。

その時から彼女は既にクロウと呼ばれていた。

本当の名前なのかは分からなかったが、それ以外は他の人間と変わらない——彼女はこの頃はまだそう思っていた。

「クロウ？」

薄暗く狭い室内で少女が呼び掛ける。

「ん？」

その呼び声に応え、膝を抱えて座っていたクロウは顔を上げた。

この室内には三人の子供がいた。

一人はクロウ。

今彼女に呼び掛けた少女は、レイン。少し癖毛なのか白髪がくるくとカールしている。

そしてもう一人、部屋の隅でうずくまっている少年がいた。この少年も白髪で、名前はルオン。

初めてクロウが二人に会った時、髪の色の色のせいもあって二人は兄弟かと思った。

実際二人は仲が良いらしく、楽しそうにしていることこそ少なかったがこの二人が離れているところをクロウはほとんど見たことが無かった。

もつとも三人は普段この部屋からほとんど出ることはできなかつたから当然といえば当然なのだが。

スプラウツの子供はそれぞれ数人ずつこのような狭い部屋に閉じ込められていた。

出られるのは基本的に、深術や戦闘の訓練をさせられる時だけ。

「ねえ……寒くない？」

白髪の少女がこんなことを言うのも無理はない。

三人に与えられた衣服は何処かから着古しを調達されてきた様なものばかりで、生地が薄くなっていた。

今はもうすぐ冬だというのに、この部屋には暖炉などは一切無い。

子供三人が何とか眠れるベッドがあるだけ。それも、大人なら多分二人用。

窓もなく壁と屋根だけはしっかりしているせいか凍死するほど寒くは無かったが、快適とは言えなかった。

「私は大丈夫だけど、レインこそ大丈夫？」

クロウは二人より年が上なのである程度この環境に慣れていたが、ルオンとレインはそうはいかない。

見ればレインは震えていた。

(どうしよう……私じゃ部屋を暖かくすることはできないし)

クロウに火属性のデイクープスの適正はなかった。寄り添って温かくなるのを待つのが関の山で、それ以上の事は出来ない。

彼女が悩んでいると、突然ボツと音をたてて空中に鮮やかな火が燃えはじめた。

こんなことができるのは、この部屋の中ではルオンだけ。

すぐに部屋の隅でうずくまっている少年の方を向き、二人は礼を言った。

「ありがとう……」

「ありがとう、ルオン」

レインが微笑むと、ルオンは少し困ったような表情を浮かべた。

「……うん」

こういう時どんな反応をしたらいいかルオンは分からないらしい。

クロウも同じだ、人に礼を言おうとしても面と向かってはつきり言うことができない。

レインは二人に比べてはきはきと喋るほうで、その明るさに正直クロウは救われていた。

一人きりならこんな何も無い空間と、戦闘の毎日ではとつくにおかしくなっていただろう。

ルオンの火のおかげで、部屋の中が少しずつ暖かくなる。

しばらく三人で暖まっていると部屋のドアが開いた。

それは三人が共に居られる時間の終わりでもあった。

クロウは内心がっかりしてため息をつきたい気分だったが、せめてルオンとレインの前では年長として気丈に振る舞おうとそれは顔には出さない。

「出る」

クロウ達と異なり、比較的きちんと身なりを整えた銀髪の青年が部屋の外で手招きする。

この青年の名前をクロウ達は知らなかった。

ただみんなにシビルと呼ばれている、だからクロウ達もそう呼んでいる。

それが名前かファミリネームか、そもそも本名なのかすらクロウ達には分からなかったが、そんなことは考えもしなかった。

ここではそれが当たり前のことだったからだ。

みんなあるのは呼び名だけ。

シビルに連れられて三人は廊下を歩いた。

等間隔に並んだ扉と、元は白かったであろう灰色の壁だけが並ぶ無機質な空間。

今はまだ何とか周りが見えるが、日が暮れば明かりの無いこの建物の中はどこも真っ暗闇になる。その様はまるでどこかの監獄の様だった。

シビルはクロウ達の方を見ていなかったが、この狭い建物内で逃げようとしたりすれば命は無いことはクロウも分かっていた。

彼もその為に帯剣している。

もつとも、クロウは小さな二人を置いて逃げよう等と考えた事はなかったが。

「入れ」

青年が廊下の部屋の一つを開きルオンとレインが無言で部屋に入る。

二人が扉をくぐったのを確認してシビルは再び扉を閉めた。

それからさらに廊下の奥、一番端の部屋まで青年はクロウを連れて歩く。

いつもクロウは一人だけ一番奥の部屋に連れてこられた。

シビルは今度は無言で鍵を回し扉を開く。

「……………」

ここで青年の仕事は終わりだ。

クロウもそれは分かっており、静かに扉をくぐる。

彼女が部屋に入るとすぐに背後で扉を閉める音、鍵が閉められる音が聞こえた。

この部屋にあるのは二本の松明と、目の前にある鉄格子。

他の部屋以上に暗いこの部屋は、壁の松明が無ければ何も見えない。

しかし、あまりの暗さに目が松明の光だけを拾ってしまい、壁から離れた場所はむしろ何も見えない空間になっていた。

その暗闇の向こうに何がいるか、クロウはもう大体分かっている。

目では何も見えなくても、そこに居るであろうあらゆる危険を予想するクロウ。

一瞬の判断の遅れが命取りになる事は身をもって知っていた。

「……………始めるぞ」

低い老人の声が響き、目の前の鉄格子がゆっくり開き始める。

鉄格子が軋む音と微かに獣が唸るような声が聞こえる。

そして鉄格子が開ききるより早く、クロウに向かって巨大な獅子が飛び出してきた。

これがスプラウツがクロウに与えた訓練。

『殺すか、殺されるか』用意されているのは常にそういう状況だった。

初めてここに連れてこられた時クロウはそれで死にかけた。

犬の様なモンスターに引きずり倒され、何も分からないまま血が流れた。

クロウはその時の事を可能な限り思い出さない様にしている。

思い出したくなくても、嫌でもその時の感覚が甦るからだ。

治癒術で体は元に戻ったが、記憶は消えない。

クロウはためらいもなく部屋中の『闇のデュープス』を集束させ、その獅子に向ける。

彼女は獅子に対して敵意は持っていなかった。あるのは殺さなければならぬという義務感だけ。

こうして訓練を重ねる度、クロウは徐々に何も感じなくなっていた。

というより自分の心が恐怖で壊れてしまわないように、無意識に何も考えない様にしていた。

ズバツ――

直後、肉が切り裂かれる嫌な音と共に、部屋全体に大量の血液が飛び散る。

無言のまま彼女は頬に少し付いた血を拭い去った。

「流石だな、クロウ」

しわがれた声がクロウに呼び掛ける。

それを発した老人をクロウは道端の石でも見つめるような目で見る。

老人の名はバルロ。

全てのスプラウツの子供の深術の師であり、体術の指導者であり、誰よりも強く、子供たちにとって彼の言葉は絶対だった。

クロウに対して直接手をあげたことは無かったが、だからといって優しくなかった訳では決してない。

地の深術に長けた彼は、スプラウツで逆らう子供がいれば容赦なく制裁を加えた。

こうして一人で訓練をさせられたり、特別な扱いを受けていたクロウに対してもその厳しさは変わらない。

クロウは自分が特別扱いされる理由が理解できなかった。

初めの頃は自分の中に眠っていた力に驚き恐れたこともあったが、今は彼女は自分が特別だと思わなくなっていた。

それで生活が変わるわけではなく、訓練を積み重ねれば積むほど闇のデープスを使うことはクロウにとって当たり前になっていった。

ただ、いくら使っても風や水の属性を使う時と全く違う気味の悪い感覚が走ることは変わらなかったが。

「……終わり？」

「今日は術を使用さえすればそれで良い。明日は早い、すぐに戻って寝るがいい」

訓練は始まりと同じように突然終わる。

クロウは部屋に入る前より一層暗い面持ちで来た道に戻った。

(……明日か)

彼女は町——国を滅ぼすため、反乱を起こそうとしている町だとクロウは聞いていた——の殲滅の為明日からこの建物を出て村に向かう事になっていた。

町の名前はカトマス、カースメリア大陸と中央大陸の貿易の中継地点の一つだった。

(……また人を殺すの？自分と同じ人間を？)

例えこの生活にすっかり慣れてしまっているとしても、クロウにはまだ迷えるだけの良心が残っていた。

だから未だにフレットの様に前線で直接人と戦う任に就いたことはなかった。

明日の作戦で彼女が担う役目も町を最後に土の底に沈め、証拠を消すこと。

直接人と戦うことはない。

それだけでも感謝しておこう……そんなことを考えながらクロウは部屋に戻ってきた。

流星に二人はまだ戻ってきていないようだった。

クロウは部屋の隅に置かれている古びたベッドの一つに腰掛け二人を待つことにする。

一人ではする事も無かった。

比較的早く二人も戻ってきた。

「ただいまー！」

「おかえり」

戻ってくるなりレインは明るくあいさつしたのでクロウもそれに合わせて、少しだけ明るい声を作る。

が、翌日のことを考えるとお互いそれ以上言葉は続かなかった。

「明日……だし今日は早く寝ようか」

何とか場を和ませようと精一杯明るい声でレインが言う。

「そうだね」

「うん」

その気遣いを無駄にすたくなかったクロウとルオンも同意する。

三人は狭いベッドに潜りこんだ。

「……」

先程から沈黙が続く。

お互い眠れないのは分かっていたが、何を話せば良いのか分からなかった。

こういうときいつも最初に口を開くのはレインだった。

「ねえ、私たちのしていることって……正しいと思う？」

その質問にクロウは少し驚いた。

スプラウツに所属する子供のほとんどは自分達のことについて疑問など持たないよう徹底的な教育を施されている。例外はバルロに殴られないクロウ位だ。だからレインもそうだろうとクロウは思っていたが、どうやら違ったらしい。

一度、彼女達がスプラウツの目的をシビルに尋ねた時返された答えは「国の為、人の為」だった。

「どうしてそう思うの？」

「人の為ならどうして私たちは隠れているのかな、って」

「……見られてはいけないから？」

ルオンの一言にまた沈黙が続く。

「そうとは限らないでしょう？ 私たちに危険が及ばないためかもしれないし」

彼に罪悪感を持たせるのが嫌で、クロウはそう否定する。

「そうだね、考えても仕方ないか。正しいかどうか確かめる手段なんて無いんだから」

レインがそう答えてから三人はもう話さなくなった。

眠くなったわけではないが、それぞれに考えていた。

自分達は今、何をしているのかを。

第十一話 墓標

カトマス殲滅当日

クロウ、ルオン、レインの三人は他の五人の子供と共に山の中を歩いていった。

山の斜面が急な事もあり、木々の間をかき分ける進みは遅い。先頭にはシビルが立っていた。

その後ろに、まるで今から遠足にでも行くように楽しそうな顔をしている紫の髪の少年が一人。

他の子供達も基本的に服装はちぐはぐだったが、彼はひと際丈の余ったダブついた服を身につけていた。

彼の名前はフレット。

雷の深術が得意だとクロウは聞いたことがある。よくは知らなかったが、これからのことを考えるとそんな呑気な表情をしていられる神経が彼女には信じられなかった。

それ以外の子供達にはやや疲労の色がある。定期的に休息を取っているとはいえ、ほぼ一日山道を歩いたのだから当然の事だった。

「着いたぞ」

先頭の青年の一言で子供達の間的气氛が緊迫したものに変わる。

全員立ち止まり、眼下に広がる町を見下した。

まだ昼だというのに町には人通りがまったく無い。

その静寂の中、攻撃は唐突に始まった。

「撃て」

「双極の焰よ、我に力を——スパイラルフレア」

あらかじめ決められていた通り、合図と共に赤毛の少女が詠唱を始め、螺旋を描く炎を一直線に眼下の町まで放った。

風の深術を混ぜられたそれは木々を焼き払い、枝を吹き飛ばしながら進み、町で一番大きい倉庫のような建物にぶつかり爆発した。

激しい振動音からしばらく経つと、爆発の衝撃で穴が開いた倉庫から武装した町民が戸惑った様子で何十人も飛び出してきた。

数十mの距離がある子供達の居場所は下からはすぐに気付けない

らしい。

(武器を持つてる、ってことはやっぱり情報は本当だったってこと)
だから自分は間違っていない、必死にクロウは自分にそう言い聞かせた。

(とにかく今はそんなことを考えている場合じゃない。だから集中しなきゃ)

予定ではクロウとレインは後方支援、フレット、ルオン、それに赤毛の少女達が向かってきた町人を迎撃することになっていた。

「はっ、滅せよ雷の刃——サンダーブレード！」

まだこっちの事もほとんど認識していない町民達の最中に、フレットが発動させた剣の形をとった雷が落ちる。

雷は触れたもの達を焦がし、悲鳴を上げさせた。

仲間達がいきなり倒れたのを見て、残った人々も自分達が攻撃を受けている事によくやく気付き、斜面の上の襲撃者達に殺到する。

「氷塊よ、舞え——アイスストーネード」

次いでルオンが起こした氷と竜巻に向かってきた町民の一部も吹き飛ばされた。

深術による猛攻を続けると町民の何割かは町の方へ逃げ出したが、尚も一部は向かってくる。

あと少しで町民の先頭が、ルオン達に達するということで、子供達も接近戦に切り替えた。

フレットは素手のままだが、自分の周囲に雷の鞭を作り手足のように操っていた。

ルオンは弓を使い、相手との距離を離そうとする。

クロウはこの間に準備を始めた。

なるべく多くのディープスを集束し山の斜面を崩せるだけのエネルギーに変えるという自分の役目を。

闇のディープスが全員の頭上に球の様に集まり始める。

「はっはは」

フレットには武器が無くても関係無い様で、町の大人たちは彼に近づくとさえできずに手から武器を弾き飛ばされ焼かれていった。

「全員退け！」

クロウがディープスを制御ギリギリまで集束したのを確認して、シビルは全員を山の上のほうへ登らせた。

（あとはこれを解放するだけ——）

「うああああつ！」

突然、一人のスプラウツ側の少年の足に町民の誰かから放たれた矢が刺さり倒れた。

終始スプラウツが主導権を握っていたこの戦いで、怪我人はまだ出ていなかったが、ここに来てレインが動いた。

レインの役目は治癒術を使うこと。

「待つてて、すぐ助ける！」

そう言うのと、他のみんなとは逆に山を下り始めた。

（！今ディープスを解放したらレインまで……まだ抑えていな——）

クロウはその時、今にも手から零れてしまいそうな大きな力を支えていた。

集中を失えばその力は暴走する。彼女がそう思っていた力がふつと消えた。

誰かが自分の上から重いものを取り去ったかの様に、彼女の手の中から感覚が消失する。

クロウは一瞬何が起こったのか分からなかった。

「はは、ははははは。すっげーな」

大きな黒い雷が落ちて地面を砕き、目の前で爆発が起きて何も見えなくなった時クロウはやつと気付いた。

フレットが集束させたディープスを解放したのだと。

術に変換する前の段階のディープスを、フレットが自分の物として集束^{コレクト}して。

普通ならそんな事はまず出来ない、術士がコントロールしているディープスに他の術士が干渉する事など。

けれど制御ギリギリの状態を保っていたクロウにはそれを防ぐ余裕が無かった。

その力はすさまじく、足元の地面すべてが振動しているのがその場にいる全員に分かる。

目の前で山崩れが起きているのだ。

「レイン……う？」

微かなクロウの呟きは地鳴りによって打ち消されてしまった。

彼女はどのくらいそうして立っていただろう。

気が付くと辺りの景色はすっかり変わっていた。

辺り一面全てが土と木で埋まり、町民もカトマスの町もレインの姿もどこにも無かった。

「嘘……」

クロウの全身から力が抜けていった。

あまりにあつさり、悲鳴すらなくレインの姿は消えた。

クロウはその場に膝をついて、うなだれた。

「レ……イン？……レイン？」

信じられないと言う様子でルオンは、普段発することが無いくらい大声で叫んだ。

気が狂ったようにただ叫び続けるルオンに、クロウはどんな優しい言葉もかけてあげられなかった。

そんな二人の様子を見ていたのか、いなかったのかフレットが笑い始めた。

シビルがその首を締めあげる。

「貴様……なぜこんなことをした……」

それでもフレットは笑っている。

「いや、別に予定どおりだろ？あれ以上待って逃げ出されたり、ここまで到達されてたら間に合わなかったんだぜ？」

「二度と、二度とするな……」

それ以外のメンバーは撤退しはじめ、最後にクロウとルオンだけが残された。

「ここにいつまでもいるのは危険だ、お前達も早く退くぞ」

シビルの声は、クロウ達の耳に入らない。

ルオンもクロウも返事をしなかった。

現実を受け入れられず、誰のことばも聞こえなかった。

シビルにもそれが分かったのか、ルオンの手を掴むと強引に立たせて連れていこうとし、クロウにも手を伸ばす。

が、シビルは違和感を感じてその手を止める。

「……レイン」

クロウは正気を取り戻していた。

ゆつくりと立ち上がり、詠唱する。

「吹き荒ぶ魔狼の咆吼……無数の槍となり砕き尽くせ——ブラッディハウリング」

クロウを中心に無数の闇の狼が次々に荒れた大地を突き破り、広がっていく。

シビルはルオンを連れてとつさに下がる。

そうしていなければシビルは闇に引き裂かれてしまっただろう。

「何の真似だー！」

シビルが怒ったように叫ぶ。

「私は……もうあなた達のところには戻らない」

広がっていく闇の中心からクロウも叫び返す。

「こんなことをして何になる！スプラウツを抜けてどうする？」

広がっていく闇から一歩ずつ離れながら、シビルはさらに叫ぶ。

「私はレインを見つめる。もう、あなた達のところには戻らない！」

シビルは下がり続けたが言葉が届くのももう限界だった。

これが最後だと思しながら、シビルは全力で叫ぶ。

「スプラウツの他にお前の居場所などない！どこにいこうといずれお前は必ず孤立する！」

一瞬の沈黙。

「それでも構わない！二度と私の力で人は殺させない！」

「チツ、仕方がない。全員一旦退くぞ！町民の生き残りの確認は後だ」

クロウを連れて帰るのは無理だと判断したのか、シビルはルオンを担ぎ撤退を始めた。

そしてクロウは一人になった。

闇の中心で一人、ひたすら大地を破壊させ続けた。

次々に現れ、いとも容易く大地を砕いていく闇の狼の群れ、そしてその中心に一人立つ少女に近づこうとする者は居なかった。

——あるいは生き残った町の人間の中に、彼女の姿を見た者が居たとしてもクロウはそれに気付きもしなかった。

どれ程の時間そうしていたのか。彼女は長かった気も、すぐだった気もした。

クロウはようやく砕け散った大地の残骸からレインの体を見つけた。

狼達は次々に大気へと還っていく。

そして、クロウはレインと二人だけになった。

彼女は歩いてレインの傍に行くと、その場に屈み軽くその手を握る。

横たわる少女のその手にもはや温もりは無く、彼女の知るかぎり誰よりも優しく、時に明るかった少女の目にもう光はなかった。

(せめて……レインが安らかに眠れますように)

クロウは生まれて初めて祈った。

そして、レインの目を閉じさせてやった。

「ごめんね」

彼女の目から自然と涙が零れた。

この涙が彼女を癒す力を持っていたらどんなに良いだろうと、クロウは思ってしまう。

そう思っても、そんな力は彼女の涙には無かった。

どれほど悲しんでも、悔やんでもレインはもう戻ってこない。

一方通行の力はレインの命を奪う事は出来ても、それを呼び戻すことはできなかった。

クロウは斜面にレインを埋めて、なるべく綺麗で大きな石を置き簡単なお墓を作った。

いつかこんな簡素な墓は無くなってしまいかもしれなかったが、せめて何かを残したくて彼女は石を彫る。

その後、クロウはゆっくりとその場を立ち去ると、どこへともなく彷徨った。

その場所から、スプラウツから、少しでも離れるために。初めこそ空腹も疲れも感じなかったが、歩くうちそれは堪え難くなっていた。

林の中を歩いた様な、川の中を歩いた様な、どこをどう歩いたか彼女は自分でも覚えていなかった。

思考も感覚も、疲れと虚無感が全てになっていき、そうして体力が尽きかけた頃、彼女はようやく民家を見つけた。

(あと少し……)

しかし、気が抜けてしまったのかあと一歩で戸口という所で、クロウの体力はついに限界を迎え倒れた。

(私……このまま死ぬのかな)

意識が段々と遠ざかる中、彼女はそんなことをぼんやりと思った。

次に目を開けたとき、最初にクロウの目に入ったのは木でできた屋根だった。

(ここは、スプラウツじゃない?)

彼女はしばし記憶が混乱し、天井の木目をじっと見つめている内に倒れるまでのことを思い出す。

自分が自棄になっていた事と、そうなった理由を。

(レイン……)

自分の意識の混濁が現実逃避だと気付いて、クロウは自己嫌悪に陥りそうになる。

「気が付いた?」

クロウがベッドの横を見ると、少女が少し不安そうな顔で彼女の方を見ていた。

少女はクロウが初めて見る服装——頭から被るのでもなくボタンで止めるでも無い、一枚の布を縛って着ている様な変わった服装をしていたがそれは彼女の風変わりな黒髪に似合っており、その表情に敵意は無かった。

それを確認すると同時にクロウは、自分がベッドに寝かせられていたことに気付く。

「あの、ここは？」

クロウは警戒心を捨てたわけではなかったが、不安そうな少女をあまり威嚇しない様になるべくそれを隠して声をかける。

その努力の甲斐あってか、少なくとも相手も自分と然程変わり無い少女だと安心したのか、黒髪の少女も笑顔に変わりクロウに話し掛けてくる。

「ここは私たちの村だよ、すぐにご飯ができると思うから待ってて」
いまいち返事になっていないとクロウは思ったが、とりあえず安全らしいことは理解する。

それに安心したというか力が抜けて、クロウはふうつとため息を吐いた。

(しばらくはここに居ることになりそうだね)

目の前の事に集中するにはあまりに疲労が重なりすぎていたクロウは、一先ず自分の置かれている状況を受け入れる事にした。

クロウがここに来てから二週間。

拾われた子の家は娘、母、父の三人暮らしだった。

初めはどうしても馴染めずほとんど喋らなかったクロウだが、比較的年の近いハクのお陰で少しずつ家族と行動を共にするようになっていた。

クロウはとりあえず今『家出している』ということにし、あまり詮索されたくないと身元は誤魔化していた。

「おはよう、クロウ」

今日の朝も彼女が借りているベッドに黒髪の少女――ハクが彼女を起こしに来る。

「おはよう」

重たい目蓋をこすりながら、クロウもハクに挨拶する。

最初の内は興味半分、怖さ半分の様だった彼女は時間が経つにつれすっかりクロウに懐いていた。

「今日も朝ご飯を食べたら裏山に行くって、クロウはどうする？」

それを聞いてクロウは少し悩んだが、すぐに頷く。

この村に住む人間は皆、裏山での採集から食料を得て自給自足で他の町から孤立して生活していた。

それに髪、髪の色がみんな黒のものばかりだった。

自分のは濃い紫の髪で、さほど周りとの違いは気にしていなかったが、村の知らない人間はクロウのことを見て驚いた表情をするものもいた。

「勿論、迷惑じゃなければだけど」

遠慮がちにクロウが聞くと、ハクは気にせず笑顔で応えた。

「今は少しでも人出がほしい時期だから、クロウがいればお母さんもお父さんも大助かりだよ」

屈託の無い笑顔につられてクロウも少し笑う。

「そう、なら良かった……」

朝食を食べるとハクの一家は家のすぐ裏手にある自然の豊富な野山に入ってしまった。

今日は茸や木の実の採集が目的だ。

クロウも片手に鎌を持ち、背中に籠を背負って野山を進む。

この山は本当に自然が豊富で、茸も木の実もすぐに集まった。

「見てみてクロウ！あれはベニテングダケっていつて綺麗だけど毒きのこなんだよ」

真っ赤な毒きのこを見て興奮するハクを母親がたしなめる。

「ほら、ハクあまり変なものに触って病気になるいでね、クロウちゃんも」

「は〜い」

そう返事をしたハクはクロウの手を引き、ベニテングダケのそばから去る。

「あの、引っ張るなどは言わないけどあんまり走ると転ぶよ、ハク？」

「平気平気！——って、うわわあ」

注意するのとほとんど同時に木の根に足を引っ掛けて地面にダイブしかける彼女を、クロウはしっかりと支える。

「ほら、平気だったでしょ？クロウがいるもん」

「私、刃物持つてるからそんなにアテにされると困るよ……とにかく、気をつけてね」

何もかも当たり前前の様だが、クロウにとってこんな風に心配し合えたり、楽しくしゃべり合えたりする——家族というものはとても新鮮で暖かかった。

傍から見たらぎこちないものであっても、それでもクロウは誰かの監視も無く一緒に過ごせる時間に、今まで感じた事の無い気持ちを感じていた。

(……こんな妹がいたら楽しかったかも)

ハクに手を引かれながら歩き、クロウはそんなことを思った。

太陽が南中になり昼になる頃、ハクの父親が作業の手を止めた。

「大分集まったことだし、そろそろ戻って昼食にしようか」

「そうね、じゃあ引き返しましょうか」

普段なら家族はこんなに早く作業を切り上げたりはしなかった。

正午でやめるのは、クロウが汗だくで今にも倒れそうだったからだ。

そう思うとクロウは申し訳ない気持ちでいっぱいだったが、同時にどこか嬉しくもあつた。

四人はハクの父を先頭に來た道を引き返す。

「最近あんまり見ないけど、帰りは鹿とか居ないかなあ」

ハクが口にしたその時、

グオオオオツ!!

——突如茂みを咆吼が駆け抜けた。

一家全員が身を固くし、身構える。

目を凝らすと数頭の熊型のモンスター、エッグベアが目を光らせこちらに向かつて歩いてきていた。

「エッグベア!? みんな、村まで走って戻るんだ!」

その言葉を引き金にクロウ達四人は全速力で走りだす。

獲物が逃げたことに気付き、モンスター達も走りだす。

ハクはクロウに近付き、腕をぎゅつと掴んでくる。

普通は山の中とはいえ、モンスターなど見かけることは少ない。ましてや複数など尚更だ。

近頃はモンスターが増えているという噂をクロウも耳にしたことはあったが、本当に遭遇するとは思っていなかった。

ハクも、皆もきつとそうだったのだろう。

幸い、村までの距離はそう遠くなく、何とか逃げ切ることができた。大急ぎでハクの両親は村中の家の扉を叩いて回る。

「すみません!!誰かいませんか?モンスターが!!」

ハクの両親は必死で叫び、叩き続け、

そのせいでハクに近づいていた影に気が付かなかった。

「きゃああー!」

エッグベアの爪が動き、ハクの服が裂け、白い腕が露になる。

それに気付いた村人達が助けようと動きだすのが、クロウにはスローモーションのように見えた。

村人達は間に合わない。

このままではハクは殺されてしまう。

(もう、私のせいで誰が死ぬのも嫌……一撃で、確実に仕留める!)

クロウはためらわなかった。

クロウの目が黒く染まり、周囲の殺気が瞬間的に高まる。

「引き裂け刃よ——シャドウエッジ!」

クロウの言葉と共にエッグベアの足元に闇のディープスが集まる。

それは三日月型の刃になり急上昇して、エッグベアを引き裂いた。

「——ブラッディクロス!」

刃に続き、地面から次々と黒い粒子が吹き出す。

その一つ一つは黒い粒子にしか見えなかったが、全て闇のディープスが固形化したもので、高速で吹き出すことでエッグベアの全身を貫いた。

そしてそれは空中で拡散してエッグベアの血液と混ざり、十字架を形作った。

——断末魔の悲鳴を上げることすら許されず、エッグベアだった肉体は地に落ちた。

一瞬のことで誰も言葉を発しなかった。
が、やがてハクが静寂を破った。

「今の……クロウが……？」

「うん……それよりハク怪我は——」

クロウは最後まで言い切ることができなかった。

直後に、町の何人かが上げた悲鳴にかき消されたからだ。

そのほとんどは聞き取れなかったが、一つだけ彼女の耳に届いた単語があった。

「化け物」

その意味を理解すらできないうちに、今度はクロウは両手を複数の大人に掴まれ、近くにあった木に縛り付けられた。

クロウは意味が分からなかった。

どうしてこうなるのか？

ただハクを助けただけで。

「ハク……怪我は無い？」

縛られながらもクロウはハクの身を案ずる。

だがハクは答えなかった。

「ねえ、大丈夫？ハク！」

語気を強めてハクに再び尋ねると、ハクは怯えたように一歩後ずさってクロウを見た。

(どうして答えてくれないの？)

何でそんなに怯えるの？

そんな目で私を見ないで……

私を恐がらないでよ……)

目の前のハクの態度に衝撃を受けていたクロウは、別な男が持ってきた棒を見て現実に取り戻された。

それで何をするのだろう、とぼんやりとした疑問が頭に浮かんだ。

次の瞬間、彼女の右頬に鈍い痛みが走り今の棒で殴られたことを理解する。

(……どうして……？)

私が、……私が何を？

確かにハクの身を守るためとはいえ、少しやりすぎだったかもしれない。

でも、だからといって私が村中を敵に回すほどのことじゃないでしょう？

殺さなければ、ハクが殺されていた。

痛い、

痛い……やめて

私を殴らないで)

痛みでどれだけ殴られたかも分からなくなったとき、突如、クロウを殴る手が止まり、沈黙が辺りを覆った。

何事かと思い、クロウは自分をよく見てみる。

何度も殴られあちこちにアザが出来、服も一部がはだけていた。

そして気付く、みんな自分の右腕を見ているのだと。

それはあまりに異様だった。

初め、それを見た者は目を疑うだろう。

普通の少女の白い肌が右腕と肩の所で途絶えている。

そこには『何も』見えなかった。

透明ではない、あらゆる光がそこからは見いだせなかった。

クロウの右腕には『闇』が同化していた。

「きゃあああああ！やだ、化け物!!」

ハクの——短い間ながら家族とさえ思った少女の叫びを聞いてクロウはすべてを理解した。

自分はハク達のように平和な世界で生きている人間とは違うのだと。

自分に歯向かう生き物を殺しても何とも思わない自分と、ハク達のような人間は違うのだと。

そう思った途端、クロウの瞳から涙が溢れた。

「う……うっ」

嗚咽を堪えることはできなかった。

殴られても、流れだす事のなかった感情がクロウを強く打ちのめした。

(私は誰とも違う)

他人と相容れない存在なんだ)

それを、クロウはハクの叫びで理解した。

(私はひとりだ)

いつまでも

多分、死ぬまで……)

そう思うと、クロウは急にどうでもよくなった

目の前の相手が剣を振り上げるのが、彼女には見えた。

(私、死ぬのかな)

死んだら……またレインに会えるかな？

そうしたら、ひとりじゃない？)

そんなことを考えながらクロウは瞳を閉じた。

第十二話 If you're 『CRYING』, I want to be beside you.

瞳を閉じてクロウは剣が振り下ろされるのを待った。

全てがどうでもよくなった割には剣が振り下ろされるまでの時間はあまりに長かった。

それとも自分は斬られて、もう死んだのだろうか？と、クロウは疑問に思う。

死を受け入れた余裕からか微かな興味でゆっくり瞳を開けたクロウの目に、自分のすぐ前に転がった剣が飛び込んでくる。

そして、さつきまでは居なかった異形の物がいた。

また別なモンスターが飛来したらしかった。しかし、その体軀はエッグベアなどとは比較にならない。

彼らですら大人二人を優に上回る巨体だというのに、それが片脚で握りつぶされてしまいそうな巨鳥だった。

大きさだけでは無い。

獯猛な獣の様でいて、それでいてまるで暗殺者の様な冷たい殺気。その黒い鳥は何かが致命的に野生の動物とは違っていた。

クロウは何故自分の前にそんな鳥がいるのか分からなかった。

しかし、その瞳がどれだけ攻撃の意思に満ちていても。

今は彼女には全てがどうでも良かった。

何処かから悲鳴が聞こえる

強い風と冷気がクロウの顔にかかる

それから再び悲鳴

その繰り返し

やがて目の前に再び巨鳥が現れ、クロウは辺りが静かになったことに気付く。

辺りにぼんやり目を向けるとそこはひどい有様だった。

無数の人形の様な物がばらばらに散乱している。

意外なほど血は少なく、現実感があまりない。

それが人間であったことは間違いないが、凍り付き、粉々になつて
いる物もあるそれをクロウは人間とは認めたくなかった。

ふと、目の前の『闇』が自分を見据えている事にクロウは気付く。

「私も……殺すの？」

鳥は答えない。

意思はあっても、会話は出来ないのだろう。

どんなに受け入れているつもりでも、クロウの身体は無意識に震え
た。

黒い鳥はクロウに近づくと、驚いた事に敵意も見せず彼女の異形の
右肩に止まった。

その巨体で全体重をかけられたら腕などあつさりもがれてしまい
そうだったが、不思議とクロウはそんな圧力は感じなかった。羽を広
げているわけでも無いのに、宙に浮いているかの様に重さも感じな
い。

が、代わりに奇妙な感覚が起こった。

クロウが、自分の右肩に感じる生き物とは思えない冷たい感触。

それはおかしいことではない。

ただ同時に、クロウの中には『自分の肩を掴んだ感覚』もあつたの
だ。

一瞬彼女の目の前が真っ白になる。

そして感覚的にこの鳥は自分には決して手を出さない事を理解す
る。

つまり、

これが、『自分』だという事を彼女は理解した。

……ああ、そうかとクロウの中で積み上げられてきた小さな違和感
が溶けていった。

闇のデープスを自在に操れた理由、それが自分の力だと実感が湧
かなかつた理由。

自分の肩の状態と何か関係があるのだろうかとかクロウは何となく

思っただけに、どうやら実態は彼女が考えていたよりずっと異常なものだったらしい。

何故そんな力が自分の中にあるのか、鳥が自分の中に居るのかはクロウには分からなかった。

でもそんな事はもうクロウは、どうでも良かった。

先程までの「どうでも良い」は『生きる事』への諦めだったが、今の彼女は『人である事』を諦めていた。

（私はこの村にいた皆とは違う。私はこんな滅茶苦茶な化け物だった）

もうどこにも否定のしようも無い位、クロウはそれを思い知った。

「やっとなかったか？」

磨耗しきったクロウの心は、もう不意にフレットが現れても驚かなかった。

フレットは惨劇に興味を示すでもなく、むしろ楽しそうにクロウに語りかける。

「他の奴らとは違う俺達の居場所はあそこにはしかないんだよ」

クロウは答えなかった。

返事の代わりに自分を縛っていた紐を『闇』に切り裂かせる。

先程はクロウの意思と関係なく村人を虐殺していたが、ちゃんとコントロールも出来る事を確認する。

クロウの頭の中から、レインの死で強く願ったはずの誰かを殺したくないという思いは消えかけていた。

ハクと短い時間を共に過ごして手に入れた、温もりも。

だから、クロウは最後に自分の元に残ったその鳥に名前を付けた。

「——ラーヴァン、だっけか」

意味も忘れかけられた古代語の単語で、漆黒を意味する。

古代語など博識な子供達の噂にほんの少し出て来たのを聞きかじった程度で、色の名前くらいしか知らなかったが。

クロウはそれが相応しい気がした、黒い鳥の事も自分自身の事も正しい意味など自分が知る事は一生無いのだろうと諦めて。

そしてクロウは、ハク達の生きていた村を捨ててラーヴァンと一緒に

にスプラウツへ戻る道を歩き出した。
村には誰もいない、クロウが行く場所に残るのは。
どこまで行っても死体だけだった。

「——私自身、それをあの日から信じていたのかもしれない。

だから再びスプラウツから逃げて、エツジ達に会って、人を殺さなくていいハクと暮らしていた頃のような生活に慣れていって……

再びこの町で人殺しと呼ばれて、ますます分からなくなった。

エツジ達と一緒に居たら、またいつか裏切られるのではないかって)

不安に押し潰されそうで、どこまでもどこまでもクロウは走った。

誰にもついてきてほしくなくて、

これ以上傷付きたくなくてクロウは走った。

気が付くと彼女の周りに町は無く、森の中を走っていた。

町を出て山の近くまで来てしまったのだろう。

「ハア……ハア」

荒くなった息を整えるため、クロウは少し歩調を緩める。

冷静になって周りを見てみると辺りは薄暗く、油断するとどの方向から来たのかも分からなくなってしまいそうだった。

(やっと誰もいなくなった……)

少しふらつく頭でそう考えると、急に彼女を疲労感が襲ってきた。

ザツ——

「!」

背後から誰か追ってくる。

その音に思わずクロウは、重い体を無理矢理走らせていた。
とにかくその『誰か』から離れたくて彼女は速度を上げる。

自分が速度を上げたのに、背後の足音は更に迫ってくるようだった。

(来ないで……)

クロウは必死になるあまり、思わず目をつぶりかける。それで気付いた。

自分の身体が走りながらまた震えていることに。

四年前自分が信頼していたハク達に殺されかけた時のように。

今追い掛けてきているのはエッジだろうと、クロウは頭では分かっていた。

けれど、彼女は立ち止まって振り返るのが恐かった。

今振り返ったらそこにいるのがいつものエッジでは無いような気がして。

自分が信じていた人間に裏切られること、クロウはそれが一番恐かった。

本当は今、自分を殺すためにエッジは追い掛けてきているのではないか。

今までののは全て演技ではないか。

ありえないと思っても、クロウはそんな考えを振り払えなかった。しかし、もう体力が限界だった。

向こうに背後から追い付かれるくらいならいつそ正面から対峙しよう、とクロウは振り返る。

彼女が立ち止まると、背後の足音も停止した。

クロウは思い切って振り返り、相手の目を睨み付ける。

そこに居たのはやはりエッジだった。

それを確認しても尚、クロウはエッジの目だけを睨み続けた。

いつものエッジならすぐに目を逸らすだろうとクロウは思っていたが、目の前のエッジは顔を背けなかった。

一瞬、彼女はそれが恐かった。

「……大丈夫か、クロウ？」

「……」

クロウは答えられなかった。

今の彼女は恐れを振り払うために必死でエッジを睨みつけることしかできなかった。

「クロウ……どうして泣いてるんだ？」

「ッ！うるさい！」

一瞬震えそうになった声を制止するために奥歯を噛んで、クロウはエッジに向かって怒鳴った。

にも関わらずエッジは彼女にゆっくり近づいた。

「来るなッ!!」

クロウは頭を左右に振って目を固く閉じ、必死でエッジを——いや全てを拒絶した。

(いつか裏切られたり、傷つけられたりするなら私は誰もいらない！) そうやってクロウがずっと目を閉じていると、何かが寄り添う気配がした。

彼女が恐る恐る目を開けると、すぐ目の前にエッジの顔があった。

「！」

咄嗟にクロウは両手でエッジを押し退けようとしたが、エッジは離れなかった。

「何？離れてよ！私は、一人で……一人で」

一人で大丈夫と言おうとしたのか、何を言おうとしたのかクロウは自分でも分からなかった。

「ごめん……俺クロウの事何にも分からないけど。そばにいてあげるくらいならできるかなと思ったから」

時折見せる真剣な眼差しをしながら、エッジは少しだけ微笑んだ。

「怖いのか、悲しいのか、辛いのか、こうしてクロウが泣いている理由も震えている理由も俺には分からないけど。でも一人はダメだよ、心が閉じてどんどん暗いところへ落ちていくから」

どこか説教じみた言葉にクロウは反抗する。

「分かった風な事言わないでよ。私は、……そうやって近づいて来られるのが一番嫌なの」

「じゃあ、俺のことは居ないものと思っても、嫌っても良いよ。その上で俺が勝手にしてる事だ」

その一言でクロウはエッジを押し退けようとするのをやめた。

(こいつは……本当にいつも私につきまといっ、)

何もできないくせにそばにいて

でも、多分それがこいつの優しさなんだ)

ただ、側に居るだけなのに、その他人の暖かさがあまりに鮮明で、何か——ずっと押さええていた感情の渦がクロウの中から一気に流れ出した。

「……泣いても笑わない、顔見ないから」

「う、うっ、うわああああああ」

エツジに軽く抱擁されながら、クロウはひたすら声をあげて泣いた。

すごく悲しいはずでも、少しだけ泣くのが心地いいとクロウは思った。

一人じゃないということがどれほど救われることか。

ハクと過ごしたときも、レインと居た時にもクロウは気付けなかった。

長い時間ずっと失くしていたからようやく気付けた事だった。

一頻り泣いて落ち着くとエツジも自然と手を離す。

「落ち着いたか？」

「うん……大丈夫」

なんとか返事をして、クロウは手の甲で目に残っていた涙を拭う。

「よし、じゃあ、町に戻るか？」

クロウが黙って頷くとエツジも頷き返してカトマスの方へ歩き始めたが、二、三步あるくと急に足を止めた。

「わ、つとでつかい石だな。危ないから気をつけろよ、クロウ」

足元にあつた丸い大きな石を避けるエツジ。

「……その前振りの後で引つかかったりしないよ」

普通に話すのが照れくさかった分も込めてクロウは思いっきり嫌味を言った。

「急に立ち止まってごめん、じゃあ町に戻ろう。二人もきつと心配してるしさ」

「うん……」

それだけ言うと二人はまた歩き始めた、今度は立ち止まったりせず

二人の足元に落ちていた石には、寄り添って眠る三人の子供の様な形が彫られていた。

エツジがクロウを連れて宿に戻るとアキとクリフが首を長くして待っていた。

「ずいぶん時間が掛かったな、なあなあ！何かあったのか？」

「遅かったですね、何かありましたか？」

興味津々のクリフと心配そうなアキは対照的だったが、二人とも待っていたことには変わり無い様だ。

「ちよつと買い物に時間がかかっちゃって……」

エツジの言い訳はある意味本当だった。

あの後、クロウを追い掛けることばかりに気をとられていたせいで買い物の袋をどこかに置き忘れていたことに気付き、回収に時間が掛かってしまったのだ。

「……」

エツジが二人に言い訳をしているとクロウは一人離れていった。

それに気付いてエツジが呼び止める。

「クロウ、何処に行くんだ？」

呼び止められたクロウは振り返って疲れたように返事をした。

「……少し休むから先に部屋に戻ってる」

エツジは頷いて追及は避け、疲れている様子のクロウをそつとしておくことにした。

「そういえば、部屋分けてどうなってる？」

エツジが尋ねるとアキが答えた。

「二部屋ですよ。私とクロウさん、エツジさんとクリフさんです」

「そうか……」

エツジは内心クロウとアキが同じ部屋なのは少し不安だったが、最近は二人が口論になっていない（会話もしていなかったが）事から大丈夫だろうと思いを直した。

翌朝。

幸いエッジが心配していたようなことは何も無かった。

クロウも疲れていたのか、それとも何とか「rb・蟠>わだかま」りが消えたのかは定かではなかったが、無事だったことに変わりはない。

四人は久々のまともな食事とベッドで疲れを癒し、また旅を続ける準備ができていた。

宿を出ると一気に匂いがあふれ、凪いでいた空間の空気から風の吹く開けた屋外へと切り替わった事を彼らは実感する。

気持ちも新たにエッジ達は目的地、王都シントリアに向けてまた歩き――

「ちよつと待ったああああ!!」

いつぞやの怪しい三人組が土煙をあげながら迫ってきた。

漆黒の――何だっただろうかとエッジとクロウは頭痛と共に記憶を辿る。

「う」

「……はあ」

エッジとクロウのうんざりした反応を見て、アキ達が首を傾げる。

「知り合い、ですか？」

「いや、知らない」

「向こう、完全に知ってるぞ」

普段ならアキとの会話を避けるクロウが即答し、クリフがそこへツッコんでいる間に漆黒の翼は目の前に来てしまった。

「おい貴様等!」

その喧嘩腰の呼び掛けを受けて、クリフが三人組を威圧する。

「ああ?何だテメエ等」

(ビクッ)「ふ、ふん…実はだな」

一瞬ペースを崩されたようだったが、再び平静を装ってグロ―リーが話し始める。

「この間は不意打ちなど少々卑怯だったかと思い、深く反省した」
「した」

何故かバッドも最後だけ繰り返すのは気になったが、その言葉は意外なものだった。

(案外いい奴らなのかな?)

「そ・こ・で、私と1対1で決闘しろ!」

少し見直しかけていただけに、エッジは自分の耳を疑った。

何故そうなるのかと。

「リーダーはこの間卑怯な真似をした分と、やられっぱなしな分の借りをまとめて返したいんだよ」

「漆黒の翼の名誉は、この栄光のグローリーが守ってみせる!」

「リーダー!!」

「……栄光のグローリーって意味被ってるよね」

クロウが冷ややかな目を向ける。

そのやりとりに呆れながらも、クリフが荷物を下ろしグローリーに尋ねる。

「なら俺が相手になってやるよ、あとで泣き付いてくるんじゃないぞ」

それを聞いたグローリーが不適に笑う。

「何を馬鹿なことを、貴様こそ地面に這いつくばる覚悟は良いか?」

「はっ、せいぜい今のうちに吠えてな。じゃあ行くぜ!」

まだ、いまいち状況を理解できていないエッジ達を差し置いて、決闘(漆黒の翼曰く)は開始されてしまった。

第十三話 リョウカ、雨の日の邂逅

「でやああっ！」

とりあえず勢いだけという感じでグローリーはぶんぶん剣を振り回す。

「よっ、ふっ！」

それをクリフは上半身を反らしたり、後ろに跳んだりして避ける。格闘戦を得意とするだけあって、その身のこなしは軽い。

一見クリフが刃物に押されてギリギリの戦いをしているようであり、躲すリズムは一定でクリフには十分な余裕が見えた。

「どうした？避けているだけでは勝負にならないぞ！」

「ああ、そうかよ！」

グローリーが挑発しながら剣を横に薙ぐと、クリフは後ろに大きく宙返りしてそれを避け間合いを空ける。

ざり、と地面を滑る音をさせながらクリフは着地し、両拳を合わせた。

「じゃあ準備運動はここまで。で、そろそろ本気で行かせてもらおうぜ！」

そう言うと同時にクリフの体の周囲がうつすらと青く光り始める。

「なんだい？あれは」

誰もサツドのその問いには答えられなかった。

エッジ達も初めて見るものだ。

「あの光……深術じゃない」

「え？」

クロウの呟きにエッジが驚く。

「感じは似てるけど、少なくともあいつの周囲からは、どの属性のデープスの高まりも感じられない」

どういふことかとエッジは首を傾げたが、クロウ程の違和感を感じなかった。

何か剣を扱う自分の方が慣れ親しんだものの様にエッジには思えた。

「そ、そんな見かけ倒しが効くと思うな！」

グローリーは自棄になったように、がむしやらにクリフに突っ込む。

「どうかな。さあ、かかってこいよ！」

今度はクリフも自ら向かっていく。

「でやあ！」

グローリーが振りかぶった剣を縦に振り下ろす。

クリフはそれを相手の横に回りこむように跳んで避け、相手の側面から両掌を叩きつける。

「轟裂破ごうれっぱ！」

途端に見えない力に弾かれたかのように、グローリーが吹き飛ぶ。

そのまま受け身もとれず彼は地面をずると滑り停止した。

（強いけど、ここまでは以前見た戦い方と変わり無い、あの光は一体何の為に？）

エツジはてつきり何か自分を強化する術の様なものなのかと思っただが違うようだった。

「く、くそっ！まだ負けんぞ！」

グローリーはよろよろと立ち上がりながら吠える。

「あー……えっと、悪いけど次で終わりだ」

「フ、そんなこと、やらせるか！こがはざん虎牙破斬！」

グローリーはここにきて剣技を使いだした。

素早く跳びあがる彼の切り上げがクリフの肩をかすめる。

「チツ」

だがグローリーの攻撃はまだ終わらない。

さらにさつきかすった一撃以上の速度で、空中から切り下ろしを放つ。

「終わりだ！」

それに対して何を思ったか、クリフは左掌をグリッドが振り下ろしてくる剣の範囲に差し出した。

「クリフさん何をしてるんですか!？」

アキが悲鳴をあげる。

いくら革のグローブで守られているとはいえ、振り下ろされる剣を食らえばただではすまないだろう。

今にも剣がクリフの左手に触れるという瞬間、クリフの体の周りの青い光がより強く輝いた。

「――『豪』」

剣が掌に触れるか触れないかというほんの一瞬の間に、大気に振動が走り――

直後、グローリーの剣は粉々に砕けた。

「なっ……」

「そんな……」

「馬鹿……な」

それは完膚なきまでの決着だった。

漆黒の翼の三人は三度の負けが相当ショックだったようで、全員目に見えて肩を落とす。

「勝負有りだな、漆黒の翼――だっけ？」

青い光が消え平然としているクリフを見て、あわやクリフの手が斬られると思っていたエツジ達は呆然としていた。

「どう、やったんですか？」

何とか口を開いたアキがクリフに質問する。

「ん、何が？」

「今、どうやって剣を砕いたんですか？」

それを聞いてクリフも不思議そうな顔になる。

「あー、気合いかな？」

「気合い……ですか」

釈然としない説明だったが、クリフはそれ以上説明する気もないようだった。

「さて、悪い！余計な時間を食っちゃったな。じゃあ行くか」

そう言って、決闘の前に地面に投げ捨てた荷物を拾って肩に担ぐ。

「ま、待てー！」

声をかけられ面倒臭そうにクリフは振り返る。

「あーあ？」

「つ……次は負けん！覚えておけー！」

それだけ言うと、漆黒の翼は脱兎のごとく去っていった。

「あんなのそうそう忘れられそうにねえけど」

「いつまでそうしてんの、行くよ」

クロウがもう足止めはうんざりだとばかりに言いつて先に立ち、

そしてエツジ達はようやく、本当にカトマスに向けて歩き出した。

雨。

ザー、という音をずっと同じようにたてながら降ってくる。

雨の音を聞いていると、自分が一人であるような気になる。

話し声がしないだけで、すぐ近くにエツジさん達がいるのに……。

どうしてだろう？

「あれ？」

予定通り、一行は人気の無い道を選びキラー山脈に沿って王都シントリアを目指していたが、突然降ってきた雨の為洞窟で雨宿りしていた。

「どうかした？」

突然、沈黙を破ったエツジに隣にいたクロウが声をかける。

「いや……誰かこっちに來るみたいだから」

「え？」

クロウは疑う様に洞窟の外に目を凝らす。こんな雨の中、しかもこんな道もないような所を偶然通りかかる人が居るのは信じられなかったようだ。

「どうした？」

洞窟の少し奥で、壁に寄り掛かっていたクリフとアキも洞窟の入り口まで来る。

「誰か来る」

エツジ達が見たところ女性のようなだった。

黒髪に、体の周りの不思議な布、異国の花の模様の服——年齢こそアキより上だが、その雰囲気はどこことなくアキに似ている。雨の中を一人静々と歩くその姿は、どこか幽霊を思わせた。

エッジ達がぼんやりしている間に、その女性も雨宿りの為に洞窟の中へ入ってくる。

「良かった、すぐに雨宿りを出来る場所があつて」

女は微笑んでみせながら、その場で髪についた水滴を払った。

「あなた達は旅人？こんな街道を外れた道を行くなんて何か訳有りかしら？」

冗談めかして言いながら、笑顔は絶やさない。

が、エッジ達は一瞬どきりとした。

「俺たちは少し変り者でな、舗装された道よりも自然のままの道の方が性にあつてんだ」

クリフが機転を利かせ、平静を装って答える。

(誰が変り者よ)

クロウはその回答に内心舌打ちする。

「フフフツ、面白いわね——あら？」

女性はクリフの言葉にまたしても軽く笑うと、アキの方を見て何かに気がついたような表情になる。

「……」

仲間達には心なしかアキが一瞬、目を逸らしたように見えた。

「久しぶりね、『アキ』」

呼び掛けた声の調子にほんのわずかな違和感を覚えながらも、アキも仕方なく視線を合わせ相手の名前を呼ぶ。

「お久しぶりです、リョウカ……さん」

この再会も、雨の意地悪ないたずらだろうか？

アキはそう思った。

互いを知っているらしいアキと、リョウカと呼ばれた女性の様子に蚊帳の外の三人は戸惑う。

「アキちゃん、知り合いか？」

「ええ」

アキが何か言葉を発するより早く、リョウカと呼ばれた女性は視線をアキから外さずに答えた。

彼女はしばらくそのまま微笑みを浮かべてアキを見ていたが、やがてその目をエツジ達に向けて質問した。

「あなた達はこの子の仲間？」

「そうです」

かすかに顔を背けるクロウを確認しつつも、平静を装いエツジが返事をする。

「そう……それは良かった。仲良くしてあげてね、この子あまり友達がないから」

あまりに嫌味なく言ったので引つかからなかったものの、その内容には微かに棘があった。

「あの聞いても良い、ですか？」

エツジが質問するが、目の前の相手の気品についての敬語になる。

もつとも、そうで無くても敵意も無い年上の女性を相手にしたならエツジは同じ様にしただろうが。

「何かしら？」

彼女はゆつたりした動作で軽く首を傾げる。

「リヨウカさんは、アキとどういう関係ですか？」

一瞬、沈黙がありエツジは聞いてはならないことを聞いてしまったかと思うが、すぐにリヨウカは笑顔で答えた。

「そうね……少しだけ縁の深い知り合いついていうところかしら」

呟くとリヨウカは視線を外し、黙り込んだ。

その表情がこれ以上その事を聞かれたくないと告げていたので、エツジ達もただ雨が止むのをそれぞれに待った。

雨が止んだのは日が沈みかける頃だった。

「これじゃもう今日はあんまり進めねえな……」

クリフが残念そうに言うも、こればかりは仕方がなかった。

進めるところまででも何とか進もうと出発しようとするエツジ達に、リヨウカが声をかけてきた。

「あら、もう行くの？」

そう言う口調はどこか楽しげだ。

アキはあまりリヨウカと口を利きたく無さそうだったので、エツジが別れを告げる。

「先を急ぐので、あなたはどうするんですか？」

「私は今日はここで野宿することにするわ」

「そうですか……気を付けて」

エツジの言葉を聞くと、リヨウカは興味深いものでも見つけたかのように彼の顔をじっと見た。

しばらくそのままだったが、やがてまた微笑みを浮かべ言葉を返した。

「——フフツ、ありがとう」

そこでエツジ達はリヨウカと別れ、洞窟を出ると王都に少しでも近く、野宿ができる場所を探し始めた。

結局、あまり洞窟から離れることはできなかった。

一行はクリフが作ったリゾットを夕食にすると、それぞれまた明日も続くであろう旅路に備え、眠った。

一人を除いて。

「……」

アキは他の三人が寝たであろう事を確認して慎重にその場を離れ、来た道を引き返す。

しばらくそのまま歩き、昼間雨宿りした洞窟に足を踏み入れると止まった。

「あら？今更、私に何の用かしら」

暗闇から声が聞こえ、続いてアキのよく見知った顔が姿を表す。

その顔は、昼間エツジ達に見せた優しい微笑みとなんら変わりはないものだったが、アキはそれが見た目通りのものではないことをよく分かっていった。

「どうして、こんな所にいるんですか？」

リヨウカとは対照的にアキの顔は険しい。

「外の世界に自由にはばたける鳥はあなただけじゃないということよ。ただの気紛れ、それじゃいけないかしら？」

「まだ……恨んでいるんですか？」

一瞬の沈黙、それからリョウカはほんの少しだけ悲しそうな表情をした。

「置いていかれた者の気持ちなんて、あなたには分からないでしょう」
再び沈黙、今度はアキが何も言えなかった。

「……ごめんなさい私、もう戻りません」

帰ろうとするアキを背後からリョウカが呼び止める。

「待ちなさい、『ジェイン・アキ』」

その声の調子に違和感を感じ取り、アキは顔だけ振り替える。

そこには両手を広げてアキの顔を真つすぐ見ている、リョウカの姿があった。

——アキ以外の人間には分からないかもしれないが、それは彼女が戦闘態勢に入った証だった。

それを見てアキは辛そうに言葉を発した。

「どうしても退いてくれないんですか？」

そんなアキの様子を意に介する事無く微笑みを浮かべるリョウカ。

「私が『タリア』で、あなたが『ジェイン』である限りね」

アキも傘を開き、戦闘態勢をとる。

が、どうしても自分から攻めることができない。

「攻めて来ないの？なら仕方ないわね——伸閃衝」

リョウカが右手を勢い良く突き出すと、その勢いそのままに腕に絡み付いていた布が、まるで生きているかのようにアキに向かって伸びる。

咄嗟にアキは目の前に傘を広げてガードする。

——ガキインという音と共に、アキの両腕に痺れるような衝撃が走る。

「くっ……」

その一撃は布ではありえない程の重さを持っていた。

例えるなら岩がぶつかってきたかのような。

「フッフ、まだまだよ——双打衝」

今度は舞うように左右の布を交互に素早く繰り出す。

アキは流石にこれは受けきれないと判断し、傘を相手の動きに合わせて受け流すように動かし弾く。

その度にまるで鉄と鉄がぶつかっているかの様な音が響く。

二人の一撃が重いには理由があった。

両者の武器は共にディープスの力を効率よく使用できる様作られたものだ。

すなわち振るときは軽く、しかし攻撃する瞬間あるいは防御の瞬間だけ傘や布に「地」のディープスを集中させることで硬く、重くする事で本来武器としては使用できない服飾類を武器としていた。

アキは相手の攻撃を弾ききると一旦後ろに跳び、間合いを空ける。そして周りから、火のディープスを集束させ始めた。

リョウカもすぐその意図に気づき、同じように水と闇のディープスを集束させ、氷のディープスにする。

アキは相手に気付かれても構わずに、火のディープスを傘に集中させる。

「詠技——」

「詠技——」

アキが必殺の一撃を発動させようとすると、リョウカも同時に動いた。

「——蓮華——」

「ひょうが
氷河」

アキが目の前に突き出した傘から、爆発が起こる。

そこから吹き出した炎は離れた位置にいたリョウカにも届く勢いだ。

しかしそれは同じように作り出された、地面から伸びる透き通った無数の氷の突起にぶつかり、大量の蒸気を発生させるだけに終わった。

「いつまで経っても、これじゃ私に届かないわよ?」

攻撃をまだ受けていないリョウカは余裕がある。

そこに、一瞬の隙が生まれた。

(今なら——!)

まだ霧が晴れない今なら不意打ちをかけることができる。そう思
い、アキは今使用したばかりの「火」のディープスを傘に再集束させ、
全力で跳び上がった。

「奥義——」

洞窟の天井ぎりぎりをかすめて思い切り勢いをつけ、リヨウカに向
かって落下する。

（上から!?!）

まさかこれだけ距離が離れているのに、上から攻撃がくるとは思わ
ず、また蒸気のせいもあり、リヨウカの反応が遅れる。

——D・RC変化——
ディープス リコレクト

「落炎散華!」
らくえんさんか

傘から炎が噴出し、アキが落下する軌道を赤く染める。

「ぐつ、うー!」

その一撃をすんでのところでリヨウカは布で弾くが、反動でそのま
ま後方に吹き飛ばされる。

直後にアキが着地すると同時に、衝撃で粉塵があたりにも舞う。

アキはそこで一旦攻撃の手を止め、呼吸を整える。

（油断したわね）

アキは多少の距離なら傘と風のディープスを使って「飛ぶ」ことが
できる。

リヨウカはそれを忘れていた。

粉塵が消えてきたところでリヨウカは立ち上がり、まだ攻撃してこ
ないアキを見てまた軽く微笑む。

「……あなたを相手に手加減しようとしたのは間違いだったわね」

リヨウカがそう言うのと腕に巻き付いている布の先端が分かれてい
き、まるで蜘蛛の脚のようになった。

「フツツ、今度は何分保つかしらね」

「……」

二人の間に張り詰めた空気が流れる。

そして一瞬後、二人はまた同時に動いた。

互いに走って距離を詰める。

「裂駆閃！」
ちようせんぶ
蝶旋舞

アキは走ってきた勢いそのままに、最大限のリーチで突きを放つ。一方のリョウカは、走りながら急に右に回転した。

その動きに合わせて布がリョウカの周りに広がり、これも右に回転する。

連続する金属音のような音が響いたかと思うと、傘は次々に襲い掛かる布に大きく弾かれ、アキはバランスを崩してしまう。

そこへ——
「かはっ……い！」

一瞬の隙を見逃さず、アキの胸に布の重い一撃が叩き込まれる。

そのままアキは後方に吹き飛ばされ、洞窟の壁に背中を打ち付けられた。

息が詰まるような感覚を覚えると、アキは顔をしかめその場に崩れ落ちた。

「う……」

その様子を見たリョウカがアキに向かって語り掛け始める。

「あなたに分かる？ 私達の苦しみが」

アキは軽く咳き込んでいるだけで返事をしない。

「苦しい？ あなたがジエインなんかにつくから、そうなるのよ」

その言葉でようやくアキがゆっくり立ち上がる。

「けほっ……それが、言いたかったんですか？」

何とかリョウカを見ながらアキは言葉を紡ぐ。

「そうね、できれば家に連れ帰ってお父様に謝罪させたいところだけど……」

「あんな人に、謝るつもりはありません！」

感情に突き動かされるまま突如アキは走りだすと、今の自分に残る全ての力を込めて突きを放った。

——ガキイン

その渾身の一突きは、リョウカの腕から伸びる四本の布に軽々と受けとめられてしまう。

さらに、スルスルと残りの四本の布が伸びてきてアキの体を縛り付ける。

「くう……っ！」

「あなたが正面から戦って、私に勝てるわけが無いでしょう？」

勝敗は着いた。

もはやアキに抵抗するすべは何もなかった。

「さて、じゃあこのま——」

「アキー」

リヨウカがこの後アキをどうしようかと考えていると、突如洞窟に第三者の叫びが響いた。

アキも驚いて声のした方に顔を向ける。

「エッジさん……」

そこには息を切らせて、洞窟に現れたエッジの姿があった。

「アキから離れろ」

いつになく怒りを宿した瞳でエッジが要求する。

それをリヨウカはひどく冷めた目で見つめた。

「急に入ってくるなんて、あなたは何？」

エッジは昼間の穏やかな様子とはまるで違う、相手の態度に少し戸惑ったが表情には出さなかった。

「その子の仲間だ」

仲間、という言葉にリヨウカは目を細めるとアキの顔に目を向けた。

アキは俯いてエッジともリヨウカとも目を合わせないようにしている。

「仲間……フフツ、フフフフツ！」

リヨウカはさも滑稽だというように笑うと、アキの拘束を解き地面に落とした。

「フフツ面白い、今日はこれで退いてあげるわ。あなたもせいぜい気をつけなさい、その子を本当に仲間だなんて思っているならね」

ただ、と去ろうとしながらも一度立ち止まってアキに最後の言葉を残した。

「私はまだ、あなたを許したわけじゃないから」
アキとエツジは、リョウカが去っていくその様子をただ見つめるこ
としか出来なかった。

第十四話 王都シントリア

リョウカと出会った夜からアキの様子は変わった。

もともと口数の多い方ではなかったが最近はずいぶん暗い表情で押し黙り、誰かに話し掛けられても目を合わせず曖昧な返事しかしなかった。

それが王都に近づいているせいなのか、この前のリョウカとの一件のせいなのか、あるいはその両方なのかは誰にも分からなかったが、間違いなく全員に分かることはアキが周りと距離を置こうとしていることだけ。

それが分かっていてもエツジ達にはどうしようも無く、王都への最後の道程はとても静かなものだった。

そうした旅が何日か続いたある日の夕方、遂に四人が待ち望んだ光景が見えてきた。

「おい、見えるか？」

先頭を行っていたクリフの言葉に皆、顔をあげる。

エツジの目にもそれは見えた。

人とモンスターとの両方を拒絶するかの様な高い壁。

それに囲まれた整然と並ぶ家屋と夕日に赤く染まる尖塔の数々。

それら全てが左右対称。

復興の途中段階で不自然な造りだったカトマスや、暮らす人々の生活に合わせて建物が増え結果として大きくなっていったカースメリア大陸の町等とはあまりにかけ離れており、まるで一つの絵画の様でさえある。

その光景はエツジにとって、今まで暮らしてきた辺境の村と同じ世界にあるとは思えない不思議な光景だった。

「あれが……シントリア」

自分達が目指してきた場所、このメンバーでの旅のゴール——つまりそれは四人の別れも意味する——そう思うとエツジは少し寂しくなった。

皆気持ちは同じなのか、それとも、夕日に赤く染められた町並みに見惚れているのか、しばし四人はその場で足を止めた。

「そろそろ行くこうぜ、日が暮れるまでに町に入らねえと門が閉まっちゃう」

「ああ」

クリフが最初に皆に声をかけて王都の門へ向かい、三人もそれに続いた。

こういう時何気なく先頭に立って皆を導いてくれるのはいつもクリフだった事に、エツジは今更ながらに気付いた。

シントリアの街の門につく頃には日は殆ど沈みかけていた。

この国最大の都、シントリアに入るにはどうやら今までで一番厳しそうな門番の間を通らなければならぬらしい。

エツジ達がほんの少し前に出るのを躊躇っていると、アキがすつと前へ進み出た。

「この方達は私の連れです。通してあげて下さい」

その一言だけで、エツジ達が拍子抜けするほどあっさりと言番は道を空けた。

(この街の警備はそんなにいい加減なのか、それともアキが特別なのか?)

以前にも似たような事があつたとエツジは思い出す、あの時はクロウだった。

(結局、俺はみんなのことをほとんど知らない。一緒に旅をしても俺達は他人なんだな)

当たり前のことかもしれないが、エツジは無性にそれが悲しくなつた。

「じゃあ……ここでお別れですね」

門をくぐるとアキが皆を振り返り言った。

「まあ、短い間だったが楽しかったぜ。お前等、ガキだけでトラブル起こしたりするなよ!じゃあな」

そう言うときクリフはあつという間に夕暮れの雑踏に消えていった。

クリフがいなくなると賑やかな空気が消え、街全体が沈黙したかのような錯覚を覚える。

「……」

振り返ると、この三人が旅していた間はいつもこういう空気だった事を全員今更ながらに思い出していた。

「お二人はこれからどうするんですか？」

こういう沈黙を破るのはいつもアキだった、気を遣い過ぎだと感じることもエツジはあったが。

「あなたには関係ないでしょう」

相変わらずクロウはアキを信用していない様だった。

「そうですね、ごめんなさい。エツジさんはどうするんですか？」

クロウの事を聞くのは諦めたのか、アキは今度はエツジに同じ質問をぶつけた。

「え？俺は……」

実を言えばここに来たままでは良いが、エツジにはこれといって目的があつたわけでは無かつた。

そもそもエツジが村を出たのは「クロウを放っておけ無かつたから」だけ。

しかし、クロウの行く先々に付き纏う『スプラウツ』という連中のことは何も解決しておらず、エツジはこのままクロウを一人で行かせるのは不安だった。

「宿は？」

「え？」

不意にクロウに思考を遮られ、エツジはやや間の抜けた声を上げてしまう。

「エツジ、一人でここに何日も滞在できるだけのお金があるの？」

その通りだった。

エツジは村を出てから、クロウやアキ、クリフ達とお金を出し合つて辛うじて宿に泊まってきたのだ。

食費も含め、エツジはこの旅の中でほとんど金銭に関わっていなかったもので、そんな事もすっかり忘れていた。

返答に困るエツジを見て、クロウは呆れたように溜め息を吐く。

「……もういいよとりあえず宿を探そう」

そう言うと、茫然とするエツジに背を向けて数歩あるいて、再び振り向いた。

「野宿して王立騎士団に捕まりたいなら、好きにすればいいけど」
そう言うと、本当に今度こそエツジを置いていきそうなペースで歩き始める。

「あ、ちよつと待てよ。ごめんアキ、じゃあ」

「ええ——さようなら」

慌ててエツジもアキに謝り、クロウの後を追い掛ける。

二人の後ろ姿が見えなくなるまで、アキはそれを見つめていた。

一人残されたアキは、暗い表情で歩き始めた。

もうすぐ日が沈むという時間、すれ違う人達は皆自分の家に帰るのだろう。

アキも同じように自分の『家』に向かっている。

よく手入れされた道の両脇に並ぶ木々の間を抜け、王都シントリアの中心部へと足を運ぶ。

そこに並ぶ家はいずれも小さな城のように整ったものばかりで、住んでいる人間の身分の高さを伺わせる。

その中でも一際大きい家があり、アキはその家の前で立ち止まった。

派手な色の屋敷が多い中で、飾り気が無く暗い色のその建物は一際人を拒んでいる様に見える。

——ジェイン家。

アキの『家』であり、アキが最も帰ってきたくない場所だった。

否、正確には二番目に帰ってきたくない場所。

他人から見れば一番か二番かなど大した違いではないかもしれない。
いい。

でも、アキにとってはその差がとても重要だった。

その差こそが、彼女がここに帰ってくる理由なのだから。

「ただいま……」

家の中にいるメイド達に聞こえないように静かに玄関の扉をくぐ

り、アキは音を立てないよう慎重に階段を上った。

そのまま自分の部屋の扉を少しだけ開き、中に滑り込む。

そこには彼女が見知った人影があった。

「お久しぶりです、シビルさん」

相変わらずの上品とは言いがたい格好で、シビルはアキの部屋の中にいた。

「長旅大変だったな。それで、アイツはどうしてる」

アキに労いの言葉をかけると、シビルは本題に入る。

「彼女達はこのシントリアに滞在するつもりらしいです」

アキの言葉にシビルが少し不思議そうな顔をする。

「『達』？アイツが……まあ良い、いずれにしろこのシントリアがアイツの目的地なのは間違いないか」

そこで一呼吸置き、シビルは残念そうに先を続ける。

「アキ、悪いがもう少し働いてもらうことになりそうだ……この街ではお前が一番よく動ける」

それはアキが心のどこかで覚悟していたことだった。

出来ればやりたくは無かったことではあったが、

(——でも仕方がない、だって私はジェインなんだから)

「なあ」

「何？」

エッジの呼び掛けに、クロウはやや不機嫌そうに答える。

今、二人は王都シントリア全体の中でも端、それも城門や店がやや遠いはずれの位置にある安宿の一室に居た。

二人はそれぞれのベッドの上で、思い思いの格好で座っている。

「クロウはこのシントリアを指して旅をしてきた。それは知ってる、けど、この街に来てクロウは何をするつもりなんだ？」

その問い掛けにクロウはしばらく俯いたまま反応しなかった。

どう答えるか決めかねているようだった。

「本当に聞きたい？聞いたらあなたまで危険にさらされるかもしれないとしてっ。」

言いながらクロウはエッジの目を真つすぐに見た。

「前にも同じようなことを聞かれたよな。答えは変わらない」

答えが返ってきててもクロウは真意を量ろうとするようにエッジの目をじつと見ていた。

が、やがて視線を外し話を続けた。

「そう……私は明日、王城に行こうと思ってる」

王城――

四つの大陸のうち、二つの大陸を統べる大国アクシズⅡワンドの中心。

いわばこの世界の中心と言っても過言ではない場所。

「どうして?」

「スプラウツの存在を公の場に引きずりだして、潰すため」

エッジは少し驚いたがクロウの目は真剣だった。

「それは……それは、そんなに上手くいくのか? 証拠だって何も無いんだろ?」

「無計画すぎるっていうのは自分でも分かってる……でも、私にはもう他に頼れるものがない」

他に頼れるものが無い――

その言葉にエッジは軽く反応し、半ば条件反射的に答えた。

「じゃあ俺も行く」

自分も同行するというエッジの言葉にクロウは軽くため息をついた。

「どうせ、止めても無理矢理ついてくる気でしょう?」

「ああ、多分」

「そう、良いけど身の安全なんて保証できないから。下手したら二人仲良く牢屋行き……まあ、とにかく明日だね。じゃあおやすみ」

クロウはそう言ってベッドに潜り込むと、そのままエッジの前で静かに眠りに着いた。

翌朝。

エッジ達は早朝から謁見を申し込む為、王城へと向かった。

王城の入り口に立つ兵士に名前と謁見したいことを伝えると「正午頃まで待つことになるから、しばらく適当に街を散策すると良い」と、いうことだった。

「随分早く会えそうだね」

何となく眩いたらしいその一言に、エッジは不思議そうな顔になる。

「そうなのか？ 昼頃までなんて結構な時間だと思ったけど」

エッジの隣を歩いていたクロウの足が一瞬止まる。

続いて呆れたような、非難するような表情をエッジに向けた。

「……本気で言ってる？」

「冗談、のつもりはないけど」

クロウの目が更に険しくなる。

「普通、こういう場合は事前に謁見を申請して何日か、下手すれば数週間待つことになったっておかしくないんだよ」

そこまでクロウが言っつて、二人はふと同時におかしいことに気付いた。

「それなのに、何で俺達はこんなに早く王に謁見できるんだ？」

「たまたま王都の治安が良く平和だったから……なんて思うのは少し人が良すぎるかもね」

二人は同時に黙り込んだ。

しかし、エッジはいくらスプラウツでも王城の中までは手出しできないだろうと思った。

基本的に今まで聞いたところだと、スプラウツはあくまで深術の専門集団であり、しかも表だつて活動はできない。

彼らが動けば少なからず「スプラウツの存在そのものの危機」というリスクを負う事になる。

そんな危険を冒してまでクロウを捕まえるつもりなのか、それともクロウの行動を読んでなりふり構わず強硬手段に出るつもりなのか。

隣を歩くクロウの表情からどう思っているのか読み取れることは、エッジには出来なかった。

正午。

二人は生まれて初めて王城の中に入った。

王城は外観も凄いと思ったがいざ内部へ来ると巨大なステンドグラスや、精巧な彫刻を施された柱にエッジ達は圧倒された。

内部は人が少ないわけでは無かったが、警備にあたっている王立騎士団の人間がほとんどのようだった。

何だかひどく場違いな場所に来てしまった気がして、エッジは落ち着かなかった。

しばらく直進すると、山道の時とは比較にならないサイズの、尚且つ山道の物より立派な観音開きの扉があった。

「ここだね」

「ああ」

二人で一呼吸置くと、扉を押して中に入った。

中は一つの部屋だとは思えないほどに広かった。

トレントの自警団の詰め所なら三つは入りそうだ。

等間隔に並ぶ柱の側に騎士が二人ずつ向かい合って立っており、その物言わぬ人の列の向こうに玉座があった。

玉座には白い髭と長髪を蓄えた老人——アクシズワンド国王が座っていた。

その両脇に玉座より一段低い椅子があり、王の左手の位置には黒髪で片目に眼帯をした壮年の男性が控えており、右手の椅子は空席だった。

王と壮年の男性は、共にアキヤリョウカを思い出させるような変わった服装をしていた。

恐らくシントリア特有の文化なのだろう。

二人が玉座の前に進み出ると、クロウが頭を下げたのでエッジもそれに倣った。

「お初にお目にかかります、国王陛下」

国王はクロウの挨拶に対して返事はせず、二人が顔を上げるのを待って声を掛けてきた。

「そなた達はまだ子供のようだが、一体何の用事で参られたのかな？」

王の声は正しく弱々しい老人のもので、とても一国を統べる主の威厳は感じられなかった。

子供扱いされた事にクロウは微かに顔をしかめたが、次に言葉を発したときにはその表情は消えていた。

「本日はお話ししなければならぬことがあつて参りました」

「何かな？申してみよ」

口ではそう言ったものの、国王は興味を示したようには見えなかった。

「陛下は各地で孤児がさらわれて集められていることはご存じですか」

国王は首を横に振った。

「そうして集められた子供達に深術や戦闘技術を教育し、私設軍を作っているものが——」

クロウの言葉は背後から聞こえた大きな物音に遮られた。

エツジとクロウが振り返ると、つい今し方くぐってきたばかりの大きな扉を開いて誰かが入ってくる所だった。

騎士が侵入者を止めようとするが、隻眼の男がそれを制した。

侵入者は騎士に目もくれず玉座の間に入ると王に一礼し、よく通る声で言葉を発した。

「陛下、謁見を中断させる非礼をお許し下さい」

入ってきたのはアキだった。

呆氣にとられるエツジの横で、クロウが唇を噛んだ。

第十五話 エツジ対アキ

「何でアキが……」

混乱してエツジが呟いたが、アキは表情を変えずにクロウを真直ぐに見ながら近づいてきた。

剣や傘での一撃がぎりぎり届かない間合いまで近づくと、アキは再び声を発した。

「この二人はセオニアの間者。アクシズワンドの内情を探り、陛下を惑わすために送られてきた敵国の人間です」

全く身に覚えのないことをアキに言われ、エツジは咄嗟に反論しようとする。

「違う、アキ俺達は——」

が、言葉を待たずにアキはエツジ達に向かって赤い傘を広げ、大人一人を軽々と吹き飛ばす突きを放った。

咄嗟に二人は横に飛び、その一撃を避ける。

避けられたと分かるとアキは伸びきった腕をすぐに引く。同時に体を回転させながら一歩前に踏み出し、そのまま今度は横に薙ぎ払うように追撃をかける。

「っ!!」

武器での戦闘が不得手なクロウに代わって、二度目の攻撃をエツジは辛うじて抜剣して受けとめる。

横薙ぎに練り出された一撃は、石斧に匹敵する威力を持っておりエツジの表情を歪ませた。

王の前で、まるで剣舞をするかのようにエツジとアキは幾度も激突する。

武器の威力で上回るアキは自分から積極的に攻撃をしかけ、エツジは直撃を受けないように動きながら捌くので精一杯だった。

広い空間の中で、互いの武器がぶつかりあう音が信じられない程に響く。

それでも騎士達は動く気配すら見せない。

(こんな馬鹿な……何故誰もアキを止めようとしらないんだ？ 仮にも一

国の王の前でこんなことが認められるはずがない！」

彼女を押しきれないと判断したエツジは後ろに跳び、力の均衡を崩す。

アキは急に抵抗がなくなつたためたたらを踏み、バランスを崩す。

「魔神剣」

その一瞬の隙を見逃さずエツジは斬撃をアキに向けて放つ。

が、アキの反応は早く、重い一撃を放つたはずの傘を軽々と正面に持ち替え飛んできた斬撃を防ぐ。

「裂爪斬！」

「裂駆閃！」

次の動きに移つたのは二人同時だった。

エツジの放つた獣の爪痕の様な斬撃を、鈍い音を立てながらアキの突きが弾き返す。

続くアキの横風ぎの追撃を剣で上へと弾きながら、エツジはアキに肉薄した。

アキの武器はリーチが長い分、接近してしまえば相手の動きに対応できない。

両腕を上段に振りかぶっているような形でがら空きになつたアキの胴体に、エツジは左手に一瞬で集束させた雷のデイクラスを放つた。

殺傷能力こそ無いに等しいが相手を痺れさせるには十分な量だ。

しかし、空気中に放たれた雷のデイクラスは、突如吹き上がった風に乗って空中に飛び上がったアキを捉えられず霧散する。

（飛んだ!?）

驚いて見上げると、アキが傘に吊られるように空中に浮いていた。

それを確認するのとはほぼ同時に、アキは傘を自分の真下——エツジに向けた。

「落花散！」

エツジが辛うじて剣を構え直したところに、アキが急降下してきた。

床を砕きかねないような勢いで落下してきたアキの攻撃を、エツジ

は受け切れず剣の防御を弾かれ、床に叩きつけられる。

「ぐあつ」

力では完全にアキが上回っていた。

そして、不意を突いてのエッジの反撃も通じない。

剣こそ未だ手に持っているものの、エッジがアキに勝てないのは明らかだった。

「何で、こんなことを」

上体を何とか起こし、エッジはアキに再び問い掛ける。

だが、アキの目は彼を見ることなく玉座の隣の隻眼の男に向けられた。

「父上、今のうちにこの二人を」

「ああ、よくやったアキ」

当たり前のように短いやりとりをすますと、隻眼の男が周りで今まで傍観していた騎士達に身振りでもエッジ達を捕らえるよう指示を出す。

(父上……まさか)

突然、エッジの頭の中で今ままで心の何処かで燻っていた疑問が驚くほどくつきりと一つの像を結んだ。

「……ジエイン？」

「王都の権力者が裏で絡んでるらしいから」

「……私がいなければあんなことには」

「見つけた」

何故、クロウはアキの名前を聞いただけであれほど敵意を剥き出しにしたのか。

何故、『孤氷』のルオンはアキとクロウが戦いだしたときに現れ、すぐに去っていったのか。

何故、アキが急に手のひらをかえす様が変わってしまったのか。

——それは、アキがスプラウツを作った人間の娘だから。

そしてあの国王の横にいる男が、スプラウツを影で動かしている人物。

エッジは認めたくなかった。

アキが初めからスプラウツの側の人間だったとは。

が、エッジの理性は自分の仮設が正しいことを肯定していた。

呆然としている間にも騎士達もエッジとクロウを取り囲む。

こうなったらもう捕まるしかない。エッジが観念すると、不意にクロウが短く口を開いた。

「逃げるよ」

そうやってエッジの手を引き、無理矢理立たせる。

「暗澹あんたんたる闇よ、我を導く翼となれ——」

何をやろうとしているのかは分からなかったが、上級深術さえ上回る程の量の闇のディープスが集束されていくのをエッジは感じた。

「出でよ——ラーヴァン!!」

突如、闇の塊が形を変え一羽の巨大な鳥の姿を形づくる。

その様子に二人を囲んでいた騎士やアキまでも驚愕の表情を浮かべる。

エッジもこんな深術は見たことが無かった。

全員が硬直していると鳥が翼を広げ、直後全員の視界全てが黒く塗り潰された。

(これは、ディープミスト?)

話には聞いたことがある、一時的に対象の視界を奪う闇の深術。

だが、この背筋が凍るような冷たさと範囲の広さは明らかに通常の深術士の使うそれではない。

何が何だか分からない内に、エッジはクロウに手を引かれるまま走り始めた。

(一体、どうなってるんだ)

足が竦む様な闇の中でエッジは自分の体さえ見えず、手のひらに感じるクロウの手の感触だけが全てだった。

二人は一寸先も見えない闇の中を走り続ける。

エッジにはクロウがどうやって進む方向を決めているのか分からなかった。

が、今のエッジの頭の中は他の事で一杯でそんなことを気にする余裕はなかった。

一度に色々なことが起こりすぎて、頭が対処できていなかった。もう城を出てかなりの距離を走ったのではないかと思われる頃、不意に視界が明るく開けた。

そこはどこかの人気のない裏通りの路地の様だった。

エツジが振り返ると先程まであたりを包んでいたはずの闇はどこにも見えず、今までのことは全部夢だったのではないかと思ってしまう。

しかし、遠く——おそらく王城の方からざわめきが聞こえ、自分達はまださつきまでの現実の続きにしていることを教えてくれた。

「とりあえずしばらくは追手も来ないはずだから、今の内にこの町を出るよ」

口ではそう言うものの、クロウの顔には悔しさがありありと見えた。

「でも堂々と門から出るわけにもいかないだろう？ どうやって脱出するんだ？」

それに応えてクロウが口を開きかけると、突然人気が無かった路地に若い男の声が響く。

「ずいぶん不用心だね、隠れてるつもりならもっと周囲に気を配った方がいいよ」

「！」

咄嗟に二人は身構え、声のした方を振り向く。

そこには少年が立っていた。

エツジより幾つか年が上なのかやや背が高く、薄緑色の髪で首元にスカーフを巻き付けた旅人らしい服装をしており、この状況に不釣り合いな楽しそうな笑みを浮かべていた。

背中には奇妙な大型の剣の鞘らしき物を背負っているが、それほど見ても剣二本の鞘だった。

「誰？」

突然出現した少年にクロウは警戒心を顕にする。

「僕はただの旅人さ。それより……さつきの黒い霧を出したのは、君だね？」

クロウの方を向いて問い掛ける。

否、それは問い掛けではなく断定だった。

間違いないクロウがやったのだという。

(何なの？…いつ…)

今までに会ったこともない相手に自分の『力』を知られていることにクロウは不安を覚える。

「もしそうでも、あなたには関係ないでしょう？」

はつきりと拒絶の態度をとられても、その少年は笑みを崩さない。

「残念ながら関係はあるよ。僕は君を何処かに行かせるわけにはいかない」

「！——クロウ、下がれ」

突如目の前の少年から発せられた殺気に、エッジは剣を抜きクロウの前に割って入る。

エッジの反応は早く、緑の髪の少年が動きだすよりも早く剣を抜いていた。

だが、それでも遅すぎた。

「真空破斬」
しんくうはざん

「うっ!？」

刹那、少年の腕が神速で動いた残像が見え、一瞬遅れてクロウの痛みに呻く声が聞こえた。

よく見ると少年の手には、緩やかに湾曲した長い剣を二つ合わせた様な三日月型の奇妙な武器が握られていた。

「やっぱり、ね」

エッジの背後のクロウを見つめ、少年が小さく呟く。

慌ててエッジも振り返り、クロウの無事を確認しようとする。

「クロウ！大丈夫——」

言い掛けた言葉が途中で途切れる。

一瞬、エッジは自分の目がおかしくなったのかと疑った。

クロウの服の右肩の部分が破れていた。

だがそこに見えるはずの肌は無く、ただぽっかりと空いた穴の様に見えるだけだった。

まるで一切の光をそこだけが拒んでいるかのように。

クロウはエツジに見られたことに気付くとはっとした表情になり、咄嗟に肩を左手で隠して顔を背けた。

「クロウ……それ」

呆然とするエツジにクロウは答えず、顔を背けたまま唇を噛んだ。エツジは緑の髪の少年に向き直ると、今度はその少年に問い掛けた。

「お前はいったい何なんだ？クロウの何を知ってるんだ？」

「僕からしてみれば君のほうが何なのか聞きたいんだけどね」

緑の髪の少年は微笑みを崩さず逆に聞き返した。

「これから俺達をどうするつもりだ？」

「その子は僕が連れていく。君は——そうだね君次第かな？」

自分が連れ去られるというのに、クロウは俯いたまま顔を上げようとしない。

エツジは無言で剣を構え、緑の髪の少年を睨み付ける。

「それが君の答えだと取って良いのかな？」

緑の髪の少年も腰を低くし、長い奇妙な剣を体の後ろに構える。

「一応言うけど、君は勝てないよ」

最後に本当に戦う意志があるかを問う様に、緑の髪の少年はエツジに言う。

「……分かってる」

「じゃあ、むぎむぎ命を捨てる事は無いんじゃないかな？」

エツジは引かなかった。

「仲間の為なら、命なんか惜しくない」

「え？」

エツジの言葉にクロウが驚いて顔を上げる。

これ以上何を言っても無駄だと悟ったのか、緑の髪の少年も真剣な表情になる。

「そう、じゃあ行くよ」

言うのと二人は同時に飛び出し、刃物と刃物がぶつかる金属音が響いた。

(くっ……なんて力だ)

少年は見かけからは想像もできない様な力で剣を押し込んでくる。対するエッジはといえば先程までアキと戦い、その後ずっと走り続けた疲労が蓄積されている。

それらが相まって、エッジの足が震える。

「ッ！轟雷装！！」

エッジの剣に急速にディープスが集束され、放電が起こる。

我流の技だったが、今のエッジが持つ唯一の切り札だった。

緑の髪の少年はそれを見て一旦、間合いをとる。

「逃がすか！」

それを追うように雷を纏った剣を振るい、エッジは魔神剣の斬撃を飛ばす。

(――行け！)

急速に武器にディープスを集束する轟雷装により、一回分の『ストック』は済んでいた。

――D・RC変化――

魔神剣・雷牙

斬撃が発光し、急速にその速度を増す。

三日月の様な剣を握った少年は、それを軽く跳びながら横転するこ
とでかわす。

相手を捉え損ねた斬撃は近くにあった建物の壁の一部を破壊する。

「まだまだ!!」

避けられたのを見ると、エッジは剣を虚空に向けて振り上げる。

敵を捉え損ねた雷牙の残滓、剣に集まり続ける雷のディープス、その両方を束ねてエッジは二回目のD・RC変化技を繰り出す。

――D・RC変化――

降雷剣

エッジの前方に無数の雷が落ち視界を白く塗り潰す。

しかし、それより早くラークの姿はエッジの視界から消えていた。

(何だ……!?このスピード普通じゃない)

「裂空落斬」

頭上からふつと影が落ち、エッジは反射的に剣を頭の上に持ち上げる。

直後、少年が独楽のように縦に回転しながら剣と共に降ってきて、エッジの雷を纏った剣と接触し激しく火花を散らした。

「ぐ、あ」

今度こそ堪え切れず、エッジはガクリと膝をつく。

少年もその衝撃に気付いたのか、空中でエッジの剣を払い除け、その反動を使ってエッジから離れ着地した。

「じゃあ頑張ったけどこれで終わりだね、せめて苦しまないように殺すから」

そう言うと敵は、膝について動けないエッジに向かって飛び出す。

「エッジ!!」

暗い路地にクロウの悲痛な叫びが^{こだま}が響いた。

宝珠編 主要登場人物

パーティーメンバー

エツジ・アラゴニート

「俺はまだ何もしていない、彼女の信頼に本当の意味で応えられる様な事は何も」

性別：男

武器：長剣

年齢：15才

身長：163cm

見知らぬ少女を咄嗟に助けてしまった事から半ば成り行きで旅に出て、王城でアキに裏切られた事で犯罪者として追われる身となる。様々な人間の思惑に触れ、窮地に立たされながらも、一貫してクロウの側に居る味方であろうとする。

その必死の思いだけを貫いてきたエツジはやがて、無意識でしか無かった自分の戦う理由と向き合う事になる。

剣と、風・雷の深術を武器に戦う深術剣士。

クロウ

「エツジとなんて会わなければよかった」

性別：女

武器：スローイングダガー

年齢：16才

エツジと共に王城で追い詰められ、大勢の前で「力」を使ってしまった事でエツジと共にアクシズⅡワンド王国全体から追われる身となる。

自分の秘密を知っても変わらず、何の思惑も持たず自分に味方してくれるエツジとの間に少しずつ信頼関係を築き、閉ざされていた感情が解放され始める。

が、それは同時に戦う事の罪と改めて向き合う事でもあり、激しさを増していくスプラウツとの戦いの中でクロウは自分の戦士として

の在り方に苦悩する事になる。

本人の適正は水属性と風属性それに初歩的な治癒術のみの深術士セキユアラだが、強力な閥属性の深術の力も行使する事が出来る。

ラーク・テンネシア

「皆の為だよ、この世界の皆だ」

性別：男

武器：三日月形のダブルブレード

年齢：18才

身長；166cm

王城から逃げ出す最中でエッジ達が出会う相手。

常に微笑を浮かべており、考えが読めない。

クロウの力の事を知っており、異常な身体能力と圧倒的な剣技を武器とする。

利害の一致でクロウを守るエッジに手を貸すが、必要以上の事ははぐらかしその表情とは裏腹に冷淡な一面も併せ持つ。

折りたたんだ二本の剣を繋げた極めて大型の剣と、そこから繰り出される飛ぶ斬撃を用いて戦う。

「シン」の一族としての能力により、全速力で動くとき常人の目には消えた様に映る程の速度で移動する事ができる。

反射や知覚能力も高く、傷の治りも早い。単純ながら接近戦闘では無類の強さを誇り、特に詠唱を要する深術士にとっては天敵に等しい。

反面、ディープスの扱いはほとんど出来ず、属性技も深術も使えない。それゆえ大概の深術は回避・妨害できるものの、単純な威力での争いとなると単独で深術に対抗する手段は持っていない。

リアトリス・フロライト

「エッジは弱い訳じゃないよ」

性別：女

武器：杖

年齢：19才

身長：165cm

ラークと目的を同じくする一族の少女。

エツジの幼馴染だと自称し、その生い立ちも知っている。

基本的にラークの決定に従うが、彼と違い優しい性格で、エツジやクロウの事を積極的に助けようとする。

その為、時に感情の欠如したラークのやり方に異を唱える事もある。

七色に輝く水晶のような特殊な術を使い、破る事が出来ない程の強力な防御術を扱う。

セキユアラ深術士としての能力は一級品で、攻撃術のバリエーションこそ少ないものの防御術においては圧倒的な才能を持ち、全属性の特性を把握した上で瞬時に最適な判断で味方を守る。こと、守りにおいては世界最高峰の「天才魔術師」

ジェイン・アキ

「私がクロウさんを裏切ったから……何をされても文句は言えません」

性別：女

武器：和傘

年齢：14才

身長：153cm

旅の途中、王都に居る父親に会う為という理由でエツジ達の旅に同行する。

エツジ達を裏切るが、その後エツジ達を放っておく事ができず何の命令も無くクリフと共にシントリアを飛び出す。

傘を武器として身の丈に似合わない力強い一撃を振るう。

一度は追いつき謝罪の機会を得るが……。

クリフ・セイシャル

「お前にとつては無駄に見えても、ここだけは引けねえんだ」

性別：男

武器：格闘術

年齢：23才

身長：183cm

馬の町マーミンで正気を失った賞金稼ぎとの戦いに協力した事から旅に同行してきた青年。

自分の目的の為にエツジ達とは別行動を開始し、徐々にその目的が明らかになる。

王都で何かを探していた筈だが、落ち込むアキを見つけエツジ達を追いかける旅に同行する事にする等お人好しな所は変わらない。

素早い身のこなしと、独特の「気」を用いた様々な体術を武器として扱う。

その他の登場人物

ジェイン・リュウゲン

「お前という人間には死んでもらうぞ」

性別：男性

年齢：49才

眼帯をした隻眼のアクシズⅡワンド王国宮宰、実質的に議会を二分して王国の実権を握っている。アキの父にして、孤児を集めてスプラウツという私設軍ともいえるべき組織を作り上げた張本人。自身の欲望の為に暗躍する。

レスパー・シビル

「アキ、悪いがもう少し働いてもらうことになりそうだ」

性別：男性

年齢：26才

ジェイン・リュウゲンの配下としてアキやスプラウツへの連絡役を担う青年。

タリア・リョウカ

「あなたと父親の思う通りになんてさせない、絶対に」

性別：女

武器：衣

年齢：20才

身長：172cm

「アキと何らかの因縁を持つらしい女性。

彼女と同じ民族の出身で黒髪、深術は使えず詠技という特殊な技を使う等アキと共通点も多い。

クロウと比べ、どちらかというところジェインという家よりアキ個人に執着する。

体の周りにゆったりと巻きつけた布を自由自在に操り、鉄の様な硬度に変えて戦う。

ブレイド・アズライト

「我が魂に誓って」

性別：男

武器：長剣

年齢：21歳

身長：175cm

若くしてアクシズⅡワンド王国騎士団第三師団長の地位に着く、王国最強の騎士。

その年齢に不釣り合いな地位の陰にはジェイン・リュウゲンの後押しと、とある一人の天才の前例があったと言われる。

フレア・L・セオニア・アリーズ

性別：女

年齢：18才

「大丈夫……クリフが戻ってくる時には起きるから」

アクシズⅡワンド王国の西、セオニア王国アリーズ家の王女。

自分の屋敷に閉じこもりきりの彼女に関しては様々な噂が流れる。

第十六話 アキの旅立ち

エッジの耳に自分に向かって一歩ずつ迫ってくる足音が聞こえる。これが自分が聞くこの世界の最後の音なのだろうと彼は思った。

(結局、最後まで何もできなかった)

クロウを守ることも、助けになることも。

そして、何が何だか分からないまま死んでいく。

あまりに滑稽でエッジは自分でも微かに笑ってしまう。

「ごめん……クロウ」

この世で最後の自分への嘲りの笑みと、僅かな悲しみが宿る眼差しでエッジは最後の時を待つ。

足音が彼のすぐ目の前まで迫り、刃の切っ先が視界に入る。

エッジはそこで時間が停止した気がした。

胸を貫く寸前で刃が停止したからだ。

何故かと思い彼が顔を上げると、さっきまで余裕の笑みを浮かべていた敵の顔に動揺が見て取れた。

「そのペンダント、何処で？」

エッジは一瞬、何を問われたのか分からず困惑する。

「え？」

武器を突きつけたままの少年は落ち着いた声で、もう一度エッジに問い掛ける。

「君が首に掛けているそのペンダント、どうしたのかな？」

エッジが自分の胸元を見ると、肌身離さず身につけている黄金色の石が付いたペンダントが服の内側から外に出ていた。

「これは、貰ったんだ」

そう言いながら、エッジは無意識に右手でペンダントを覆う。

「誰に？」

「俺の……母さんに」

エッジの顔が暗くなるが、少年はそれで納得がいったのか先程までの穏やかな顔に戻る。

「フフフツ、なるほどね」

何がおかしいのか楽しそうに笑うと少年はエッジに突き付けた剣を納め、代わりに手を差し出した。

「立てる？」

「……」

だがエッジは今危うく殺されかけた相手の手をとる気にはなれず、剣を杖代わりにして立ち上がる。

「僕はラーク・テンネシア、突然斬り掛かったりして悪かったね」

突然態度を変えた相手を少し警戒しつつ、エッジも名乗る。

「俺はエッジ・アラゴニート、一緒にいるのはクロウ」

「よろしくエッジにクロウ。さて、君たちが追われている以上いつまでも此処にいるわけにはいかないね」

戸惑うエッジを尻目にラークは、急いでこの場を離れようとばかりに早足で歩きだす。

「ちよつと待てよ、一体お前は何なんだ？」

ラークはくるりと振り返ると、余裕を崩さず——しかし早口で答えた。

「説明するのに時間があるからその話は後にしよう。今はこの街が出るのが先決だよ、僕についてきて」

信用して良いものか迷ったものの、他に街を出る当てがあるわけでもないのでエッジはついていくことにした。

体重を支えていた剣を地面から引き抜き、鞘に納めてへたり込んでいるクロウを振り返る。

「大丈夫か、クロウ？」

クロウは肩の辺りを押さえており、さっきの穴のような闇はエッジの目には見えなかった。

彼と視線が合うと、クロウは軽く目を伏せ視線を逸らす。

「エッジ、私は……」

何か口にしようとするが、途中で言葉が途切れる。

それを見たエッジは敢えて続きを待たずに手を差し出した。

「立てそうか？ほら」

クロウは俯いた顔の前に差し出された手を見て一瞬、微かに驚きと

不安がない交ぜになった表情を浮かべた。

そして軽く、それからしつかりとその手を握った。

「うん……大丈夫」

手を助けにしてクロウは立ち上がる。

「これ、貸すから」

まだ、片手で肩を隠しているクロウにエッジは自分の外套を脱いで着させた。

「あ……うん」

「じゃあ急いであいつを追い掛けよう」

クロウは軽く頷いて、二人はラークを追って走り始める。

似合わない外套を着て走るクロウの顔から曇りは消えていた。

ラークが立ち止まったのは城門の無い東側の城壁だった。

改めて内部から見上げると呆れるほど高く、人の力では登れそうに無い。

「こんなところからどうやって脱出するんだ?」

「そうだね、あれがいいかな?」

ラークは辺りを見回すと、城壁と競い合うようにして立つ教会の塔を見つけて言った。

「……まさかあそこから城壁に飛び移るなんて言わないよな」

「じゃあさうしようか」

エッジは半ば冗談のつもりで言ったのだが、ラークは恐ろしいことにさりとそう返した。

「ふざけているなら付き合うつもりはないけど?」

きわめて不機嫌そうにクロウは掴み所の無い少年を睨む。

「まあ、実際あの塔に登ったりしたら日が暮れるからね、だから——」
ラークがそう言うのとエッジとクロウはラークの脇に抱えられ、宙に

浮いていた。

「え?」

突然の浮遊感に二人が戸惑う間もなくラークは城壁を蹴り、反対側の塔を蹴り、稲妻のようにジグザグに宙を駆けるとあつという間に城

壁の頂上に着地した。

「はい、到着」

二人を城壁の上に立たせると、当たり前のように気楽にそう言う。エッジとクロウは一瞬驚きで声も出なかった。

「今の、どうやって?」

恐る恐る下を見て、その高さに身震いしながらエッジが問う。

「壁を蹴っただけど」

相変わらず自分が言っていることが当たり前のようにラークは言う。

「そうじゃなくて——」

「分かっている、君が言いたいのは『そんなことは生身の人間では無理だ』ってことだよな?」

少年は今度はふざけているのではなく真面目に答えた。

「あ、ああ」

「そうだね……悪いけどその話も後にしようか、いつまでも城壁の上に立っていると誰かに見つかるからね」

「でも、どうやって?」

エッジは城壁の外側を見下ろして疑問を口にした。

登ることができても、城壁の外側にはさっきのように高い塔や足場になりそうなものは何も無い。

「上に昇るのには労力があるけど、下りるのには何も特別な力は要らないよね?」

何を、と意味を問う間もなくラークは身を翻すと城壁の遙か下に落ちていった。

「俺達はどうやって下りろっていうんだよ!」

慌てるエッジの手をクロウが引いて言った。

「……掴まって」

「え!?ちよつと、クロウ!!」

止める間もなくクロウはエッジを引っ張って、城壁から宙に踏み出した。

エッジも半ば引きずられる様にして落下を始める。

風の轟、という音が耳に嫌に大きく聞こえ、地面が急速に迫り、エツジは今にも自分の全身を打ち砕くような気がした。

「暗澹たる闇よ、我を導く翼となれ——飛翔せよ、ラーヴアン!!」

クロウが早口で叫ぶと落下している二人の真下に闇が集束し、巨大な翼を持った鳥となって二人を受けとめた。

その様子を地上から見ていたラークは驚きもせず、目を細めてそれを観察した。

「あれが……アスネイシスの宝珠の力」

その眩きは、空を飛ぶ二人には全く聞こえていなかった。

「これは、王城の時の」

自分に乗せて羽ばたくその存在が信じられず、先程までの落下の恐怖も忘れてエツジは軽く背中を撫でてみた。

鳥のようだが、生きものだとは思えなかった。

何の暖かみも感じられず、とても滑らかで微かに冷たい。

「これは？」

「私はラーヴアンって呼んでる、私の一部……みたいなものだと思う」
自分自身よく分からないというようにクロウは自信が無さそうに言う。

「一部？」

「ラーヴアンと私は感覚を共有してる。例えば今この瞬間私はラーヴアンに乗って空を飛んでいる感覚と、私とあなたを乗せて飛んでいる感覚の両方を同時に感じている」

「つまり、ラーヴアンはクロウが動かしてる深術みたいなものなのかな?」

クロウはその言葉に少し困ったような表情になる。

「半分当たりで半分違う、確かにラーヴアンは私の意志に従うけど、ラーヴアンはラーヴアンで意志を持つてる。……いつも私の意志どおりに動いてくれるわけじゃない」

エツジには正直なところディープスが意志を持つということが理解できなかつたが、ラーヴアンについては何となくイメージが出来る。

すぐに理解できる事でも無さそうだったので、エッジはとりあえずそれ以上の追及は避けた

「じゃあ、そろそろ降りるよ。あいつも待つてるみたいだし」

下で何をするでもなく見上げているラークの方を見て、クロウはラーヴァンの高度を下げた。

同じ頃、ラーヴァンによる黒い霧が晴れた謁見の間では、騎士達がクロウ達を追ってほとんど出ていってしまい、アキが国王、父親と共に取り残されていた。

「陛下、父上。私はもう下がってもよろしいでしょうか？」

「ああ、下がっていい」

父から短く、素っ気ない返事を返されたアキは浮かない顔で二人に軽く一礼し、王城を後にした。

王城の外には先程までの騒ぎの余波でざわめく人々、そしてエッジ達を捕えようと奔走する騎士達が居たがアキはそれを意に介さずとぼとぼと歩いた。

(これで……これで良かったんでしょうか)

アキは自分のした事が間違っているとは思わなかった。

二人を陥れる形になったとはいえ、あんな危険な力を持つクロウが野放しでいる事は危険すぎる。

もし、スプラウト以外の組織や犯罪者の手にその力が渡れば、それはこの国に住む人々にとって大変な脅威になる。

アクシズワンド、セオニア、レーシアの三国の微妙な緊張状態を崩さないためにもクロウを捕らえる事は必然だった。

なのに――

(二人の顔が、頭から離れない)

個人の犠牲や多少の痛みは国が動くのに仕方がないことだと思っていた。

それは仕方の無いことで、その責任を背負うのが貴族としての自分の役割だと思っていた。

しかし、いくらそう言い聞かせても、自分を疑わずに心配してくれ

た時のエツジの顔や、時折目が合った時のクロウの戸惑いの表情が頭から離れなかった。クロウは自分の事を敵だと見抜いていたが、そこにあつた感情が敵意だけではなかった事にアキは気が付いていた。

これで二人は犯罪者になつた。

でも、あの二人があんな普通の人だと知る人間は、いるのだろうか。アキが沈んだ気分では歩いていると、不意に誰かがアキの肩を叩いた。

「騒がしいけど何があつたんだ？」

「クリフさん……」

肩を叩いてきた相手がクリフだと確認すると、アキはまた目を伏せた。

「何かあつたのか？アキちゃん」

元気がないアキにいつになく真剣な表情になるクリフ。

「……さっきの黒い霧を見ましたか？」

「ああ、俺が見てすぐに消えちまつたけど、何だつたんだろうな。あんなでかい王城が丸ごと見えなくなるなんて」

「あれはクロウさんが出したものなんです」

クリフはそれを聞くと、驚きの表情を浮かべた。

実際に目にしたアキですらまだ信じられない部分があり、クリフが信じられないのも当然だった。

「あいつが一人でやったのか？そんな馬鹿な」

「信じられないかもしれませんが事実です」

そこでしばしクリフは間を置き、アキの様子を観察した。

「何でそれが分かるんだ？」

「それは目の前で——私がクロウさん達にあんなことをさせてしまったから、私が二人を騙したからこんなことに」

沈黙が流れた。

アキはクリフが何か言うのを待つように黙り込み、クリフはそんなアキを黙って見つめた。

「……アキちゃんが好きでやらせたわけじゃねーんだろ」

「それはそうですけど、でも関係ありません！」

「じゃあアキちゃんのせいじゃねえよ、何でも自分が悪いって決めつけんなって」

クリフの物言いにアキは少し苛立ち、やや強い言葉で言い返す。

「私が何をしたか知ってるわけでもないのにどうしてそんなことが言えるんですか！」

クリフは怯まず、先程までと同じ調子で言う。

「アキちゃんが何をしていたかなんて分からない。でも、アキちゃんなんでも自分が悪いと思ひ込み過ぎなんだよ、色んな人間の迷惑や行動が積み重なって生まれるのが結果だ。人間一人のせいで何もかも決まってしまう事なんて、そうそうねーよ」

無意識に全て自分のせいだと決め付けていた心理を指摘され、アキは黙り込む。

クリフもしばらくアキの様子を見ながら黙っていたが、しばらくして再び口を開いた。

「そんなにエツジ達のが気になるんなら、追い掛けようぜ」「え？」

クリフの提案に驚いて、アキはクリフの顔を見る。

「悪いと思ってるんだろ？だったら謝ればいいじゃねえか」

「それはそうですね、二人は今アクシズワンド国全体の敵にされようとしています。クリフさんが一緒に来たら」

「良いんだよ俺は、どうせ気ままな旅人だからな、それに仮にも同じ釜の飯を食った仲間を見捨てられるかよ……まあ、クロウとはなかなか上手くやれねえけど」

クリフはアキの言葉を遮り、有無を言わず同行する意志を示す。

アキもこれ以上クリフに何を言っても変わらないと思い、クリフに頭を下げて言った。

「じゃあまた暫く、よろしくお願いします」

「ああ、こつちこそまたしばらくよろしくな」

二人で旅をすることが決まると、二人はそれぞれ準備の為に一旦別れ街の出口で落ち合うことにした。

同じ頃王都のタリア家には慌ただしく身仕度を整えるタリア家当主キサラギと、リヨウカの姿があった。

「父上、どこへ？」

「王城へ行く。私が不在の間にジェイン・リュウゲンがまた何かをしたに違いない」

その名を聞くと、リヨウカの顔が微かに歪む。

「今、ジェインが何かを企んでいるとしたらレーシア大陸でのジェインの配下のものの動きと何か関係あるのでしょうか？」

「分からない、推測だけで動くわけにはいかない。だが少なくとも現状で王立騎士団を動かすことまでは出来ないはず」

「ですが、もし『スプラウツ』が実在するなら」

リヨウカの言葉にキサラギは首を振る。

「仮にそうでも今は様子を見るしかない。下手に動けば外交問題にも発展しかねない。そうなればそれこそジェインの思う壺だ」

「そうですね、お気を付けて」

身仕度を整え、部屋を出ていこうとするキサラギにリヨウカはそう声をかける。

「ああ」

父親が部屋を出ていくと、リヨウカは小さく呟いた。

「……ジェイン・アキ」

その目に映るのは静かながらも、紛れもない怒りの色だった。

第十七話 サークスの魔術師

「随分仲が良いね」

二人がラーヴアンから降り、クロウが巨鳥を消すとラークはまずその声をかけた。

「は？」

言われてすぐに怒りの籠もった視線を彼に向けるクロウ。

「そんなに睨むなよ、クロウ」

エッジは成り行きとはいえ、行動を共にする事になった以上はなるべく穏便に事を進めようとクロウを窘める^{たしな}。

だが、クロウはその態度を変えようとしな。

「助けられたとはいえ、仮にもさつき殺されかけた相手なのによくそんなことが言えるね」

「それはそうだけど」

確かにエッジもまだ完全にラークを信用した訳ではなかった。

急に戦いをやめた理由も、自分達を助ける理由も分からない——この少年の意図はまるで分からないのだから。

しかし、ラークはそんなことは気にしないででも言う様に笑った。

「いいよすぐに信頼しなくても。君達がどう思おうと僕は僕の役目を全うするまでだからね」

「役目？誰かの命令であなたは動いているとでもいうの？」

エッジもそれは不思議に思った。今のところクロウの力を知り、それを必要とするものがあるとすればそれはジエイン家——アキ達やスプラウツしか彼も思いつかない。

だが、ラーク達がジエイン家の配下なら、敵であるエッジを殺すのをやめた理由がない。

何よりそれならクロウを王都から逃がすはずがない。

「誰の命令でもないよ」

二人には、その意味がよく分からなかった。

エッジとクロウは顔を見合わせる。

「分からなくても良い、いずれ君にも分かることだろうしね」

そう言いながらラークはエツジの方を見た。

「え？」

エツジはますます訳が分からなくなる。

「続きはまた後でね。まだ王都に近すぎる、ひとまずここを離れよう」
「待って、私達が今どういう状況に置かれているか分かっているの？」

クロウの疑念は当然だった。

ラークはさも自分達の事を知っている様に出てきたものの、二人には何の説明もしていない。

「分かっているよ。君達以上に、ね」

最後の部分はおどけているともとれるような言い方をしながら、ラークは会話を終わらせた。

クロウは不愉快極まりない様子だったが、エツジは何か自分の知らないことをあの剣士が知っているのが落ち着かなかった。

「……とりあえず行こう、クロウ」

クロウはラークの後ろ姿から目を離さないまま、その言葉に軽く頷いた。

王都を脱出してから数日。

ラークがどこに向かっているのかは、二人には分からなかった。

中央大陸の地理が全く分からないエツジは勿論、多少は詳しいクロウもラークの目的地は分からない。

それでもラークは迷い無く足を進めるので、二人は仕方なくはラークから少し距離を置いてついていった。

「ねえ……エツジ」

右肩の黒い痕が見えない様にエツジから貸りた外套を押さえながら、クロウは遠慮がちに口を開いた。

「ん？何だ？」

「エツジにとつて仲間って何？目的を同じくするもの？それとも、互いの利害が一致するから一緒にいるもの？」

彼が自分のことを仲間と呼んだときからずっと、クロウの中に引っ掛かっていた疑問。

彼女にとって仲間はスプラウツで、飽くまで目的のために一緒にいるものでしかなかった。

だからこそエツジの言葉にクロウは不意を突かれた。

「仲間の為なら、命なんか惜しくない」

そこまでしてエツジが守りたい『仲間』とは何なのか。

エツジにとって自分は何なのか、クロウは知りたかった。

「俺にとって側にいてほしいと思う人たち、かな？」

(側にいてほしい?)

「どうして私が入ってるの？」

「それはうまく言えない。でも、仲間ってそんな理由がなきや駄目なのか？」

エツジの言葉は明確な答えになっておらず、クロウは少し苛立った。

「だって、理由もないのに命をかけるなんて！そんなの……無駄だよ」
(意味もなく死のうとするなんて、そんなのは馬鹿だ。生きたくても生きられない人だっているのに)

クロウは喉元まで出かけた続きを飲み込む。

だが、エツジは首を振って否定した。

「意味はある。俺にとって仲間は何よりも大切なものだから」

「そんなのおかしい、それじゃ理由と行動が反対じゃない。自分が死んだら大切な何も無くなるのに」

「逆に聞くけど、クロウは会う人全てにそうやって一緒にいる理由を考えているのか？」

「それは——」

クロウは咄嗟に答えることが出来なかった。

スプラウツにいる間は、クロウはよく誰に対しても理由を考えていた。バルロの様な厳しい人間に従わなければいけない理由、フレットの様な味方の命すら厭わない残酷な人間と一緒に居る理由を。

だけど、ルオンやレインと一緒にいた頃、ハクと一緒に暮らした短い時間。

自分はそんな事を常に考えていただろうか。ここ最近の自分は考

えていただろうか、とクロウは分からなくなる。

「俺は何の為に守るのかとか……そういうのは言葉で現わすような理由はいらないと思う。守りたいから守る。馬鹿みたいかもしれないけど俺はそれで十分だと思う」

それは打算でも何でもないエッジの純粋な気持ちなのだろう。

その考えはとても馬鹿馬鹿しい、としかクロウには思えなかった。論理的では無く、感情的で。

以前の彼女なら否定していた様なその考えに、しかし、今のクロウは縫りたいと思ってしまうた。

彼女に対してそんなことを言ってくれる人間は今まで居なかった。人殺しを当たり前前にこなす様になってからのクロウに、エッジの言う様な『仲間』等居なかった。

だから、クロウは周囲を拒絶して傷つかない様にしていれば生きていけると思っていた。

だけど、違ったらしい。

本当は心はずつと自分を認めてくれる場所を、人を求めていたのだと彼女は初めて理解した。

だから、自分の力のことを知ってもエッジが隣にいてくれることがクロウは嬉しかった。

「相変わらず戦闘では役に立たないくせに、口だけはよく働くね」

「え、何だよそれ。静かに聞いてたと思ったらそれかよ」

皮肉を言ったクロウにエッジは苦笑する。

そのさつきまでの様子と急に変わった彼が可笑しくて、クロウは思わず笑ってしまった。

「あははっ、だって事実だから」

すぐにエッジの顔が少し驚いた表情になって、彼女はしまったと思っただ。

「あ……」

「クロウが今みたいに笑うの初めて見た」

自分が慌てるのを余所にまるで子供の悪戯を見つけたように無邪気に笑うエッジを見たら、クロウは何だか悔しくなった。

「別に……！勝手にしょ」

我ながらも少しマシな切り返しは無いのかとクロウは思う。

しかし、咄嗟に出てくる言葉というのはそんなに気の利いたものではないのだということを知った。

同時に、この借りはいつか必ず返してやろうと心に決める。

そんなやりとりをしていると前方のラークが立ち止まって二人に声をかけてきた。

「楽しそうなところ悪いけど、目的地に着いちやったよ」

「誰が楽しそうよ」

クロウの口から零れかけた悪態は目の前の光景に途中で途切れることになった。

「これって、」

まずエッジとクロウの視界に入ったのは、色とりどりのテントの集合。

そして馬車と焚き火と人々の楽しそうな声が聞こえる。

作り付けの建造物が何一つ無い、一時的な仮設のものだろうにそれは小さな町にも負けない人だかりを作っていた。

「サーカスは初めてかな？」

そう言っつて首を傾げてみせたラークは、聞こえてくる声に負けなくらい楽しそうな笑顔だった。

「サーカス？」

不思議な響きにクロウは思わず聞き返す。

「サーカスなんて俺は初めてだ。クロウもそうなのか？」

そう聞かれても、クロウにはそれが何なのか分からない。

「サーカスって何？」

彼女の反応が予想外だったのか二人は驚く。

尤もラーク方の表情の変化は驚きより面白がっている様にも見え、クロウはそれが少しむかついた。

「私がサーカスを知らないのがそんなにおかしい？」

「いや、そういうわけじゃないけど……」

「フフツ、別に」

エッジは困ったように、ラークは相変わらず何処かからかっている様な笑い方でほぼ同時に答えた。

何だか話せば話すほど惨めに思えてきたクロウは早く会話を終わらせたくて話を戻す。

「で、サーカスって何なのか説明してよ」

「サーカスって言うのは見せ物かな？人が芸をしたり、動物に芸をさせたり……俺も話に聞いただけで実際に見たことはないけど」

（何だか卑怯な気がする）

人が知らないのを驚いた割にエッジも詳しくは知らないらしかった。

クロウは納得いかない様子で彼を睨む。

「口で説明するのは難しいから、実際に見てみた方が良いんじゃないかな？ちやうど今やっているみたいだしね」

そう言うところラークは特に大きく、先程から幾度か歓声が聞こえるテントの方を示してみせた。

入り口だと思われるところから帆布をめくって中に入ると、円形に並び頭上を見上げる人たちがまぎれ目に入った。

その人の多さと内部の広さに圧倒され、クロウは何処か居心地の悪さを覚えた。

だが、周りと同じように上を見上げた時彼女はそんな感覚を一瞬忘れてしまった。

空中を人が舞っている。

何かに乗っているわけでもなく、吊されているわけでもない。人が何の支えもなく飛んでいる。

どうして、と思う間もなくその団員はブランコに乗った別の団員にキヤッチされようやくこれはブランコなのだとクロウは気付いた。

「……すげえ」

彼女と同じようにサーカスを初めて見たエッジも、隣で思わず感嘆の声を漏らした。

（でも本当に飛んでるみたい）

クロウがラーヴアンに乗って飛ぶ時とは違った。

彼らは本当に浮いているわけでは無いにも関わらず、笑顔で自由に飛んでいる。

それは本当に飛べる彼女以上に、自由に飛んでいるようにクロウには見えた。

不思議でも何でもないのに、クロウはその空中ブランコから目を離すことが出来なかった。

しばらくして、空中ブランコが終わると団長だろうか一人の初老の男が円形の客席の中心に進み出てテント中に響く声で言った。

「では次で最後になります。最後に私たちの一座の妖精、魔術師リアトリス・フローライトの舞を見て頂きます」

魔術師とは深術士セキユアラのことだろうか、それなら何故踊りなのか。

エツジは紹介に疑問を持ちながらも、次に何が出てくるのだろうかという期待も膨らませていた。

次にテントの中心に出てきて深く一礼したのはエツジやクロウより少し年上の少女だった。

二つか三つしか離れていないようにも思えたが、これだけの観客を前にしてなおその動きに落ち着きを感じさせるせいかなエツジの目にはずっと大人にも見えた。

動くとき綺麗な明るいオレンジ色の髪が揺れて、エツジは一瞬それを目を奪われる。

エツジの髪もオレンジだったが、ずっと暗くてくすんだ色だ。

リアトリス、と呼ばれた少女はその場で歌い始めた。

しん、と静まり返った空気の中に彼女の声は隅々まで届き、聞いていると耳元で彼女が歌っているような錯覚にとらわれる。

それは静かな旋律だった。

歌詞は分からない。

聞き取れないというより、エツジ達の知らない言葉だった。

遠くなったり近くなる様にたゆたう歌声に合わせて、リアトリスはゆっくり踊り始めた。

彼女の服の裾がそれに合わせて柔らかく舞う。

その踊りはとてもシンプルな動きで、舞というよりリズムに合わせて無意識に動いているだけにも見えた。

と、リアトリスがぐるりと回ると辺りにパッと光が散った。

エッジが初め見間違いかと思ったそれは、消えることなく宙を舞い始めた。

(……蝶?)

それは光の蝶だった。

リアトリスの周囲を飛んでいるそれは、色を変えながら虹のように七色の輝きを放っている。

彼女が更に何度も回り始めると、光の蝶はその数を増しその全身を包み込んだ。

そう思った直後、光が弾けるように蝶が飛び立ち今度はテント中を光で埋め尽くした。

いつの間にか蝶はその数を数百に増していた。

無数の、それでいて無音のはばたきは決して歌を邪魔することなく、まるで夢の中に迷い込んだ印象を受ける。

何処から聞こえるか分からない歌と、視界を埋め尽くす七色の輝きで、エッジは自分が何処にいるのか分からなくなった。

ふと、彼は隣にいるクロウとラークの表情を伺ってみる。

クロウもエッジと同じなのか、目を見開きテントの中の光景に見入っていた。

一方ラークは相変わらずで、その笑みは普段とほとんど変わり無かった。

(ラーク……何でここに俺たちをここへ連れてきたんだろう)

彼の考えが分からない。

でも、今は考えるのはやめようとエッジは思った。

今は素直にクロウと同じように、彼もこの舞に心奪われていたかった。

舞は最後に蝶達が一際強い輝きを放ち視界を白く染めてから、何事も無かったかのように消えて終わった。

まだその興奮さめやらぬところで、急にラークが肩を叩いた。

「そろそろ出よう。顔を覚えている人こそいないかもしれないけど、君達はあまり目立たない方がいい」

そう言つてエッジとクロウをテントから引つ張りだす。

『人目につくべきではないと分かっているなら、何故わざわざサーカスに寄つたのか』、そんな疑問を口にする間も与えずラークは二人を引つ張つていき、観客達がいたテントとは違うより地味なテントの中に連れ込んだ。

「こんなところに勝手に入つていいのか？」

中はそこそこ広く、衣裳や小道具等があることからサーカスの人間のものであることは明らかだ。

関係者以外が入つたら怒られそうな場所に、エッジは尻込みする。

「大丈夫だよ。僕達は」

どういう意味かエッジが尋ねようとする、不意に外が騒がしくなった。

どうやら公演が終わつたらしい。

団員と鉢合わせしたらどうしようかと彼が慌てっていると先程まで観客の前で踊つていた魔術師、リアトリスが入つてきた。

「わ、ラークか、驚かせないでよ」

自分より先にいた訪問者に驚いたようだが、特に怪しむ様子もない。

先ほどまでの舞台上の上での凛とした姿と違う砕けた口調は、エッジ達に年齢の近さを感じさせた。

改めて近くで見ると、ひらひらとしていた生地細かいレースの模様がエッジ達にも見てとれる。

「ごめんね、ちよつと彼に報告しなきゃいけないことができてね」

ラークは笑顔でリアトリスに謝る。

その様子から二人が親しい間柄なのが見て取れた。

「その二人は？」

初対面のエッジとクロウの方を見ながら、リアトリスは友達のことを聞くように気軽に聞いてきた。

「ごっちはエッジ・アラゴニート、もう一人はクロウ、名前だけ言えばいいかな？」

リアトリスの目がエッジの方を向き、一瞬戸惑ったように数回まばたきをするとすぐにその表情は思わぬプレゼントを見つけたような嬉しそうな表情に変わる。

「エッジ……エッジ・アラゴニート！」

まるで知り合いに会ったような反応。

だけど、エッジは彼女を知らなかった。

だから、次の一言で彼の思考は停止した。

「久しぶり、エッジ。元気だった？」

彼女の笑みにエッジはどう反応すれば良いか分からず、何か言おうとしても声が出なかった。

第十八話 シンの一族

エッジはよく状況が飲み込めなかった。

彼は助けを求めるようにラークとクロウの方を見る。

目が合うとラークは首を傾げてみせ、何のことか分からないと示す。

クロウの方は目が合うと何故か不機嫌そうにエッジを睨み、それから視線を逸らした。

エッジは少しパニックになりながら再びリアトリスの方に顔を戻す。

リアトリスは相変わらず親しげな微笑みを浮かべたままだった。

「もしかして忘れちゃった？小さい時だったからね……仕方ないか」

リアトリスはそう言うのと少し悲しそうな表情になった。

「ち、ちよつと待ってくれよ！話がまったく見えない。何で俺は君と会ったことがあるんだ？」

「傷付くなあ本当に覚えてないんだ。まあ、いいけど。でも分かるでしょ？あなたも私も『シン』の一族だから」

何気ない様子で放たれた言葉に、エッジの思考が停止する。

「……………え？」

シン。全く聞き覚えがない言葉。

それに自分がその一族だという事実。

エッジの疑問に答えて発せられたはずの答えは、彼には理解できなかった。

その横でクロウもまた何の話か分からない、という顔をしていた。

ラークの変化の無い表情からは、何を考えているのか窺い知ることが出来ない。

相手が『シン』という単語に対して示した反応を奇妙に思ったのかリアトリスの表情が困惑に変わった。

「エッジ……もしかしてシンが何だか分からないの？」

少女の反応に申し訳なさを感じながら、エッジは頷く。

その返事を見て、リアトリスはラークの方に向き直った。

「ラークはエツジがシンだつて分かった。だから連れてきたんでしょう?」

エツジとクロウはその言葉に驚いてラークを見る。

彼はここに来るまでそんな事は一言も言わなかった。

「確証は無かつたけどね。ペンダントはしてるけど何故かシンのことを知らないみたいだし」

「ラーク……」

自分が知らない自身のことを二人が知っている。

エツジはそれにますます混乱し、目の前のやりとりが信じられなかった。

「それにその子」

リアトリスが今度はクロウの方を見る。

彼女はそれに対して警戒するように睨み返す。

「体のデュープスの割合が普通じゃない。まるで——」

そこまで言い掛けて、リアトリスは何か気付いた様に不意に口をつぐむ。

「気付いた? 僕がここにきた理由」

涼しい顔でラークは笑う。

リアトリスは信じられないという顔でラークに視線を移し、それから再びクロウを見た。

「まさか、その子が?」

「幸か不幸か……一部だけみたいだけどね」

ラークがリアトリスの考えを肯定するが、彼女の方はそれでもまだ信じられないという表情のままだった。

「とにかく私だけに話しても仕方ないからエルドの所に行こう」

エルド、というのが誰なのか(または何なのか)エツジ達には分からなかったが、リアトリスとラークは場所を変える様だった。

テントから出ていく二人をエツジが追おうとすると、リアトリスに止められる。

「エツジはここに居て、その子をちゃんと見ててね。しばらくしたら二人を呼びに来るから」

なんで、と聞こうとしたがリアトリスは大丈夫とでもいうような微笑みを浮かべてラクと共に出ていってしまおう。

取り残されたエッジは途方に暮れた。

ラクとリアトリスが出ていってテントの中には静寂が戻ってきた。

置いていかれてエッジが呆然としているのを眺めて、クロウは質問した。

「エッジ」

「え？ああ、何だ？」

クロウは何故か苛立っていた。

それが何故なのかも判然としないまま、彼女はその苛立ちをエッジにぶつけた。

「さっきのリアトリスって誰？」

「誰って言われても、俺のほうが聞きたいくらいだよ」

そんなの嘘だ、とクロウは反射的に思う。

それでは何故向こうはエッジのことをあんなに知っているのか説明がつかない。

「大体『シン』って何？その一族とか、私のこと見ただけで普通じゃないとか：エッジも本当はあいつらと仲間で何か企んでるんじゃないの!？」

「違うー！」

彼女が思った以上にはつきりと不満は表に出てしまう。

一度口を開いてしまうと勢いは止まらず、クロウはついエッジにまで疑いを向けてしまった。

エッジはクロウの目を正面から見据えてすぐに否定する。

しばらく二人はその場で睨み合う。

先に目を逸らしたのはエッジだった。

「俺だって……分からないんだ」

エッジの目は嘘をついていない。

クロウも本当はもうそれは分かっていた。いや、理解はできてい

た。

けれど、彼女は不安にならずにはいられなかった。

エツジまで自分の知らないところで裏切っているんじゃないかと考えただけで、クロウは急に恐くなった。

しかし、一度声に出してしまい落ち着いてみると、クロウは勝手にエツジを疑って怒鳴った自分が情けなく思えた。

「…………ごめん」

「クロウが謝ることじゃないだろ？多分、俺が分かってなきやいけないことを分かってないだけなんだから……」

そこで会話は途切れる。

エツジが自分だけで何かを考えこむように押し黙ってしまったからだ。

(混乱して、本当に今困っているのはエツジの方のはずなのに)

クロウは今言ってしまった言葉への後ろめたさから、彼に何も言うことができなかった。

(ごめん)

クロウは心の中でだけ、もう一度エツジに謝った。

二人が沈黙していると、リアトリスが戻ってきた。

「エツジ、それとクロウちゃんもちよつと来てくれる？」

子供扱いされていると感じたのか(実際リアトリスはクロウより年上ではあったもの)クロウは顔をしかめる。

「私を呼ぶ時に変な接尾語つけるのやめてくれない？」

普段ならエツジはそんなクロウの態度にため息を吐くか、苦笑いするのだが今はそんな気分にはなれなかった。

「じゃあ、クロウ。あなたも一緒についてきてくれる？」

リアトリスはクロウの態度に不快感を表すことなく、微笑さえ浮かべて彼女は要求に応える。

ラクと話していた時の険しい表情とは別人の様なその仕草に、クロウは訝しげな視線を向ける。

「ほら、エツジもぼーっとしてないで行こう？」

「あ…………ああ、ごめん」

エッジはまだ混乱していたが、リアトリスの笑顔には自然に気持ちが少し軽くなる。

二人はリアトリスに従って今までいたテントを後にした。

案内されたのはさつきまでより大きめのテントだった。

さつきのテントが衣裳などを置く楽屋なら、ここは何か大切な話をする為の会合場所といった趣だ。

籠のように編んで作られた円筒形の椅子が、丸いテント内に等間隔で並べられている。

テントの入り口から見て一番奥にサーカスの司会をしていた初老の男が座っており、その隣にラークが座っていた。

近くで見てエッジは、この男性もリアトリスと同じ色の髪であることに気付く。

エッジ達が入ると、リアトリスが改めて紹介した。

「エルド、この子がラークがつれてきた子。名前はクロウ。もう一人は分かるかもしれないけどエッジ・アラゴニート」

エルドと呼ばれた男性はリアトリスと同じく公演用の衣装のままだったが先程までの演者としての堂々とした態度とは違う、少々威圧的ですからある鋭い目で観察してきたのでエッジは反射的に礼をする。

クロウはエッジとは逆に男性を睨み返した。

「確かに体の闇のデュープスの割合が極端に高い。通常なら間違いなく精神か肉体に異常を来すバランスだ……だがアスネイシスには到底及ばない」

彼もまたリアトリスと同じように、一目でクロウの何かを理解した様だった。

「やはり分割されていた、と考えるのが自然なんじゃないかな」

エルドはラークの推測を聞いて頷き、直後に深刻な表情で両手を顔の前で組んだ。

五十を過ぎていると思われるエルドと、少年のラークが対等に話している光景は少し奇妙だったがエルドは起こる様子も見せない。

「さつきから何なのあんた達は？私の何を知ってるの？」

怒鳴りこそしなかったが、クロウは怒りが滲んだ声で聞いた。

エツジも聞きたかったことだが、蚊帳の外として扱われていることにクロウの様な怒りは感じなかった。

むしろ、エツジは自分もクロウに責められているような気がした。

「多分、いきなり話しても分からないと思うから順を追って話すね。二人とも焰螺旋えんらせんの神話は知ってる？」

リアトリスの質問にエツジは頷く。

が、クロウは首を横に振った。

「知らない。でも今そんな話何の関係があるっていうの？」

「良いから聞いて、大事な話だから。昔二つの世界があつて、二つの世界にはそれぞれ神様がいた。風が吹き荒れ闇に閉ざされ荒れた地の広がる世界の神イクスフェント。目も眩むような閃光と炎と水が荒れ狂う世界の女神アエスラング。二人は互いにその対照的とも言える違いに惹かれ合い恋に落ちたの。そして既にそれだけで完結していた互いの世界の要素を分け合つて今のような世界を作り、二人の世界が離れ離れにならない様に紅く輝く柱で二つの世界を繋ぎ止めた。これが話の題にも使われている焰螺旋えんらせん——ここまでは良い？」

エツジは再び頷く。

トレンツにいた頃エツジは何度か聞いたことがある話だった。

今初めて話を聞いたらしいクロウも彼の隣で頷く。

リアトリスは話を続けた。

「でも二つの世界はもともと一度完成されていたもの、分け合った要素はあるべき姿に戻ろうとした。風はイクスフェントの世界に、火はアエスラングの世界に、というようにね。だから新たに造り上げた世界にはその姿を保つための新たな則のりが必要だった。そこで二人は世界の要素を集中させ六つの珠に変えたの。その六つの珠は世界が今の姿を保つために意志と名前を与えられた。火の宝珠シーブレイムス、水の宝珠フラツティルージュ、風の宝珠クレンティンド、地の宝珠グランディアス、光の宝珠サンクオーリスト、そして闇の宝珠アスネイシス。その六つの宝珠の力で二つの世界は安定し、神は世界を見守るだけに干渉を留めるようになり、今では人々は神の名を自分達の住む世界の名前として記憶に残すのみとなった」

ここでまたリアトリスは一息つく。

「その話は何なんだ？全部知っている通りの話だったけど、焰螺旋えんらせんや宝珠なんてものはこの世界に無いのはみんな知ってる」

エツジが反論するとリアトリスはゆっくりと首を振った。

「それは違うよ。焰螺旋えんらせんも、宝珠も、もう一つの世界イクスフエントも全て実在する……本当にエツジは知らないの？」

逆に聞かれてエツジは不意を突かれる。

その言い方は、まるで初めて聞いたことなのに「覚えていないのか」という様だった。

しかし、そんなもの聞いたことある訳は無かった。一人で漁村に育ったエツジには聞かせてくれる家族も居なかったのだから。

エツジは首を横に振って知らないことを示した。

「六つの宝珠の力は世界を安定させたけど、それは生き物の近くに置いておくにはあまりに強い力を持ち過ぎていた。だから二人の神はそれぞれ宝珠を守る為に特別な力を与えた種族を生んだ、それが私達シン。私達は六つの宝珠と世界のバランスを守り続けるために創られた存在なんだよ」

エツジは信じられなかった。

あまりに途方も無い話で彼には実感が湧かない。

自分が普通の人間ではなくしかも、お伽話だと思っていた宝珠やもう一つの世界が実在する等。

急には認められなかった。

一通りリアトリスから解説が終わったと見たのか、今まで黙っていたクロウが口を開いた。

「肝心の話がただだけど、それで私があなた達と何の関係があるの？」

そろそろ我慢の限界という様子のクロウに、ラークが言った。

「まだ気付かないかな？その宝珠の一つ、闇のアスネイシスの一部が君の肩にあるんだよ」

「！」

反射的にクロウの指が、エツジが貸したままの外套を肩の辺りで強く握り締める。

そんな彼女の様子に気付いたのか、エルド多少雰囲気を和らげて声をかける。

「心配しなくていい。私達は君に危害を加えるつもりはない。アスネイシスそのものでもある君を守ることも私達の役目なのだから」

それでもクロウは、エルドやラークに対する表情を変えない。

それは無理もない事だとエツジは思った、仲間だと言われた彼自身も信じられないのだから。

「ラークの話だと君達はシントリアで騒ぎを起こして、アクシズⅡワンド国全体に追われているらしいな。当分は私達と共にいる方が安全なはずだ」

それは正論だった。

実際、このままエツジ達が行く宛ても無い旅を続けてもいずれ王立騎士団か、スプラウツ——最悪両方から見つけられるのは目に見えている。

相手は王都の貴族。

犯罪者の烙印を押された子供二人を信じてくれる人間などほとんど居ない。

なら、得られる助けはどんなものであれ受けておくべきだった。

「クロウ、今はこの人の言う通りにした方が良い」

「エツジ……」

彼の提案にクロウは驚き、それからしばし沈黙した。

が、しばらくして軽くため息をついて言った。

「仕方ないみたいだね、しばらくはここにすることにする」

クロウが承諾したことで、エルドもここで初めて微笑を見せる。

「ならすぐに君達がここで生活できるよう準備をさせよう。何か分からない事があったらリアトリスに聞けば良い」

呼ばれたリアトリスも、張り詰めた空気を吹き飛ばすように明るい声で俺たちに呼び掛ける。

「じゃあ、今日から私が二人の世話係ってことかな？よろしくね！」

こうしてエツジとクロウは、リアトリス達のサーカスに匿ってもらうことになった。

第十九話 強さ、増す思い

二人がサーカスに来て三日がたった。

初めは次々にサーカスの人間を紹介されたり、無数にあるテントの中を案内されたり色々と面倒だったが、慣れてしまえばここでの生活はそれほど悪くは無いとクロウは感じていた。

ただ、問題なのは――

「おはよう！いつも早いね、クロウ」

一通り、紹介やら案内は終わった筈だったが自称『世話係』の邪魔者リアトリスがしつこく付き纏ってくる事だけが唯一クロウの悩みだった。

「毎朝毎朝、勝手に人のテントに入ってきてこないでよ」

起きて早々のハイテンションにクロウは辟易する。

リアトリスは私の生活リズムまで把握しているらしかった。

初めて見た時の公演衣装では無くもう少し動きやすそうなワンピースを着て、下ろしていた髪も縛って朝から慌ただしく動き回っている。

忙しいのであれば自分の事など放っておいてくれれば良いのにと、クロウは思う。

「だって私はあなた達の世話係だから、きちんと規則正しい生活してるか見守るのも私の仕事だよ」

「私はそんなこと頼んでない」

「私がやるって決めたの、二人ともここでの事分らない事ばかりだろうし。だから、困ったことがあったら何でも言ってみてね」
「……」

人の意見を聞く気があるのだろうかとかクロウは真剣に疑問に思う。
「さて、朝食まではもうちよつと時間があるからできたらエツジを起こしておいてくれない？私は朝食の準備を手伝ってくるから」

（勝手な事言つて……）

突然現れ、それだけ頼むと来た時と同じ様に素早くリアトリスは去っていった。

いつそ朝食が出来るまでこの部屋にいて、頼みを無視してやろうか

ともクロウは思う。

そんなことを思いながら彼女はもう一度ベッドに倒れこむ。

が、横になって落ち着いてみると名案を思いついた。

(そうだ、エツジを起こせばいいんだ)

自分が冴えていると少し得意になりながら、上機嫌でクロウはエツジのテントに向かった。

サーカスに来てから三日が経ち、エツジはようやくこのことが少し分かってきた。

このサーカスは全員がシンの一族であり、サーカスはあくまで各地を移動する為の隠れ蓑であること。

自分のことを知っているのはリアトリスとエルドだけで、シンの一族が全員エツジを知っているわけではないこと。

そして、ここにいる人達は協力して生活していること。

個人の事情ではなく、一つの共同体としてみんなの為にみんなが動く。

それがシンの一族だからなのかまではエツジには分からなかった。

だが、幼い頃母親と過ごした短い時間しか家族のいる暮らしを過ごさなかった彼にとつて、ここでの暮らしは楽しかった。

顔を合わせればみんな挨拶してくれ、食事はただ食べる行為ではなく団欒の場だった。

ただそれだけ、言葉にしてみればほんの少しの違いでしかない事の積み重ねが今は一番新鮮で心地よかった。

「エツジ」

彼がまだベッドの中でまどろんでいると、誰かが呼ぶ声はその耳に届いた。

薄くエツジが目を開くと奇妙なものが目に入る。

水。

球状のそれはガラス玉の様にも見え、宙に浮いていた。

(何で水が浮いてるんだ?)

寝呆けた頭でエツジは不思議な光景の原因を考える。

雨は室内で降るんだっただろうか、とおかしな方向に思考は向かう。

「起きろ、エッジー！」

エッジの頭がまだ結論を出さないうちにクロウの声が響き、それを合図にするように水は彼の顔めがけて落ちてきた。

破裂音に似た水が叩きつけられる音と同時に、その冷たい鮮烈な刺激に彼は一気に目を覚まされた。

それに続いてクロウの楽しそうな笑い声。

そこでようやくエッジは今の水がクロウの深術だったことに気付く。

「何するんだよ、クロウ」

エッジが恨みがましく入り口の方へ目を向けると、そこに笑い続けるクロウがいた。

「あつはは、やっと起きたね、おはよう」

起こしてくれるのは有り難かったがクロウはまともな人の起こし方を知らないのだろうか？とエッジは思った。

「おはようじゃないだろ、朝から人を全身ずぶ濡れにしといて」

「すぐに起きないエッジが悪いんでしょ。私はちゃんと名前を呼んだよ」

「う……」

確かにそれは事実ではあった。

しかし、だからといって人の頭に朝からシャワーを浴びせるのは何か間違っている気がエッジにはした。

が、寝起きの頭ではエッジはそれ以上言い返す事が出来なかった。

「あと少しで朝食だから早く起きた方が良いよ、じゃあねー」

悪戯に成功してよほど気分がいいのかクロウは上機嫌で去っていき、エッジは納得できないまま仕方なく身仕度を整え始めた。

「お早よう、エッジ君」

「あら、朝から元気が無いわね。もっとシャキツとしなさい？」

エッジがテントを出ると誰かとすれ違う度に親しげに挨拶された。

それに彼は普段なら笑顔で応えるのだが、今日はあまり上手くないかなかった。

朝食は晴れてる日は大抵屋外だ、一か所のテントでサーカスにいる大勢が同時に食事できるスペースは無い。

みんな火を囲むように思い思いの場所に椅子を持ってきて座っていた。

エッジはクロウとリアトリスが並んでいるのを見つけて、その近くに座った。

「クロウがリアトリスと一緒に食事するようになるなんてな」

エッジがそう言うと、途端にクロウは彼を鋭く睨んできた。

「どこに行っても、こいつが付いてくるから」

そんな事だろうな、とはエッジも思っていた。

クロウから仲良くしている訳ではないと、分かっていたもののつい苦笑する。

「おはよう、エッジ。それにしても二人とも呼び辛いから私のことはリアって呼んでつて言ってるでしょ？」

「おはよう……リア」

エッジはリアトリスにあいさつを返しながら照れくさそうに笑う。年上の相手を愛称で呼ぶのはエッジも少なからず抵抗があった。

しかし、呼ばなければつとと言われる続ける気がしてエッジは何とか呼ぶ努力をしていた。

クロウはエッジとリアトリスの会話の何かが面白くないのか、座り直して二人に背を向けた。

「もう、拗ねないでよクロウ」

「……別に拗ねてない」

振り返りもせず二人に不機嫌な声が返ってくる。

その様子がおかしくて、エッジとリアトリスは顔を見合わせて笑った。

朝食が終わると、辺りが少しずつ騒がしくなる。

今日のサーカスの公演の準備が始まったのだ。

リアトリスも準備があると言って、二人と別れた。別れ際にクロウは大きいため息を吐いた。

「そんなにリアトリスのことが嫌いか？」

「当たり前、朝から晩までしつこく付き纏ってきて鬱陶しいよ。公演の間はあいつが居なくなるから却って静かで清々する」

エツジはまたそんなクロウの様子を見て、何度目か分からない苦笑を浮かべた。

最近のクロウは少し変わったと、エツジは思っていた。

出会ったときよりよく笑うようになった。

その分不満を漏らす回数や怒る回数も増えた気がするが、前より表情は豊かになった。

リアトリスに対しても不満を漏らしてはいるが、クリフやアキの時ほど険悪なものではない。

嫌々ながらもちゃんと会話している。

それはリアトリスがいくらクロウに邪険に突っ放されても許しているおかげもあるが、それだけでは無いとエツジは思う。

前とクロウは変わった。

「……エツジ何でさつきから私の方を見て遠い目をしてるわけ？」

「いや、何でもない」

エツジは、それと比べて変化の無い自分に焦りを覚えた。

以前と同じ弱いままの自分自身に。

(俺も、変わらなきゃいけない)

「今日は暇だからサーカスを見物でもしに行く？ どうせ裏からこっそり見れば私達に誰も気付かないし——」

クロウの誘いも今のエツジにはほとんど耳に入らなかった。

「ごめん、クロウ。俺ちよつとやる必要があるから一人で行って」

「え？ちよつとエツジ！」

エツジはクロウの言葉を振り切るように駆け出した。

それを見ながらクロウが不機嫌さと残念さが入り交じった表情で小さく呟いたことに、彼は気付かなかった。

「……ばーか」

エツジはあちこちで派手な衣裳を来た人がいる中で、特に地味で人の流れから少し外れた所にあるテントを見つけて中に入った。

そこにはいつもの微笑みを浮かべて、突然現れたエツジに驚きもしないラークがいた。

「かなり急いで来たね？どうかした？」

エツジはまだラークのことは完全に信じきれないでいた。

しかし、他に頼める相手は居なかった。

「ラーク、俺に剣の稽古をしてくれ」

相手は驚きはしなかったが、エツジの目をまっすぐ見て聞いた。

その覚悟を見定める様に。

「良いよ、君が本当にやれるなら」

「全く」

自分でもよく分からない苛立ちを感じながら、クロウは一人でサーカスのテントに裏から入った。

周りには出演者や動物が大勢居たが、皆彼女を見て一瞬は驚くものの止めるようなことはしなかった。

とてもサーカスをのんびり楽しむ気分ではなかったが、クロウは何となく辺りを見回してみる。

客席には多くの期待に胸を膨らませた観客がひしめいていた。

それを見ていると何故かクロウはますます苛々してきた。

（何でこういう私が誘った時に限ってあいつは勝手にどこかに行くんだろう）

——ふと、何かを見つけた気がしてクロウは無意識に観客席に目を凝らす。

「何で……」

そこにいたのはよく知った顔だった。

「ジェイン」

王都で私達を裏切ったアキと、別れたはずのクリフがサーカスの観客席にいた。

クロウは自分の目に映っているものが信じられない。

二人はサーカスの観客に混じって呑気に見物している。

一見するとそう見えたが、よく観察すると二人は言葉を交わしながらも周囲の人の顔を確認していた。

誰かを探しているかのよう。

(何であいつらがここに——！)

高ぶる感情を何とか抑え、クロウは冷静に考える。

こんな人込みの中で目立つ行動はできなかった。

一先ず、今は様子を見ようと心に決めた。それからどうするか考えればいい、と。

二人は人探しをしながらもサーカスを見る気もあるのだろうか。

観客席を動かず、あくまでついぞといった感じで辺りの人間を見ている。

しかし、何が目的か分からない以上油断は出来なかった。

クロウを見つけた途端サーカスの見物を放棄する可能性も十分にあった。

なるべく気付かれないように位置を調整しながら、クロウは二人の動きを監視し続けた。

エッジはラークと、普段生活しているテント群の外の林の近くで向かい合っていた。

剣の稽古をつけてもらう為に。

「じゃあ、いくよ。準備は良い?」

そう言つてラークは、二つに折り畳まれていた三日月の様な形の剣をダブルブレードとして展開する。

「ああ、いつでも」

エッジもそれに応えて背中の中長剣を抜く。

「じゃあ、遠慮なく——裂空落斬」

ラークは助走もなく地を蹴ると、ただその一回でエッジの頭上に跳び、独楽のように縦に回転しながら落ちてきた。

エッジは一度受けて、その威力も軌道も知っていた。

神速のラークの動きを左に動くことで、辛うじてかわす。

軌道を知つていてもエツジにはそれが精一杯だった。

避けられたと分かるとラークはくるくると回転しながら剣を両手から片手に持ちかえ着地し、再び地を蹴ってエツジに突進してきた。

「ッー」

ラークほど素早く体勢を整えられないエツジは避けられず、勢いのついたその一撃を両手で握った剣で正面から受けとめることになった。
こそうはざん

「虎爪玻斬」

耳障りな金属音を響かせながらラークは剣を滑らせる様に動かして飛び上がり、追い打ちをかけてくる。

エツジは手から離れそうになる剣を片手で辛うじて掴み直す。

続いて上から下にもう一度、ラークの剣が獣の爪の様に振り下ろされる。

その軌道はその剣の形と同じ三日月の軌道を描いた。

「あ……い」

ラークの続け様の猛攻に耐えられず、剣はエツジの手を離れて地面に叩きつけられた。

エツジはまたしても何も出来ない無力さが悔しくなった。

そこへ、剣も収めずラークが責める様に言った。

「エツジ、僕は聞いたよね？本当にやれるのかって……正直、期待はしてなかったけど」

その言い方が馬鹿にされているように感じて、彼はラークに抗議しようとした。

が、いつに無く真剣なラークの顔と続くその声に動きを止める。

「——やる気が無いなら僕は君に剣を教える気は無い」

エツジは思わずその勢いにたじろいでしまう。

「やる気ならあるさ。ただ、やる気だけじゃ」

「いや無いよ、僕と初めて戦った時の君はこんなじゃなかった」

そう言われて、エツジはシントリアの路地裏で初めてラークに会った時のことを思い出す。

ラークに勝てないことはあの時のエッジも分かっていた。しかし、あの時のクロウを放っておく事が彼には出来なかった。自分の肩を必死に隠すクロウの姿がすごく孤独に見えたからだ。誰にも頼れず、一人で何かを抱え込んでいるような状態のクロウを見捨てれば、クロウはずっとそのまま動かなくなってしまうそうだった。

そう思ったから、エッジはラークと戦った。
戦うしかなかった。

「あの時の君は僕に必死になって向かってきていた。だけど、今の君にはそれが無い」

エッジは否定できなかった。

本当に、本当に追い詰められた時以外で他人と命のやりとりをしようとはエッジは考えもしなかった。

「エッジ、僕を斬ってみて」

唐突に発せられたラークの言葉にエッジは耳を疑う。

「え」

相手の反応に対してラークは真剣な表情のまま、もう一度繰り返す。

「避けないから、僕を斬って」

聞き間違えではないと分かっても、エッジは剣を握ったまままだ動けなかった。

「ラーク……何言ってるんだよ」

「君は今まで自分がシンだと知らなかったらしいね。だから、なんとなく戦ってきたのかもしれない。だけど、僕に剣の教えを乞うというのならそれ相応の覚悟をしよう。人も斬れないシンに剣を教えなくても足手纏いにしかならないからね」

ラークの言いたいことはエッジにも分かった。

人を斬れないなら、いくら剣の技術を教えても意味が無い。

まず一番問題なのは迷い——それを無くせということ。

「でも、そんなことしたらラークは」

「僕の事はいい、死ぬ事は無いと保証する。君が選べるのはやるか、や

めるか、そのどちらかだけだよ」

エツジに選べるのはやるか、やめるかだけ。

やめるなど選べるわけが無かった。

ラークも、クロウも色々なものをかけて戦っている中で、自分だけ戦わないなんて甘えをエツジは選ぶ事が出来なかった。

アキやルオンの様な敵対する側の、彼より年下の子供ですらみんな何かを背負って戦っているのだから。そう考えてふと、エツジはマーマンでアキが言っていたことを思い出す。

「私のせいで怪我をさせてしまった」

あの頃からずっとエツジ達を騙していて、敵だった筈なのに彼女はエツジにそう言った。

今になって思い返せばルオンが突然襲ってきたのは、ジェイン・アキの身に危険が迫ったからで、アキを守るためだった訳だとエツジにも分かる。

しかし、アキはそれを自分のせいだと責めていた。

関係の無いエツジを巻き込んだことに一人で責任を感じていた。

アキはその責任に苦しみながらも最後まで誰にも話す事無く自分の役割を遂げ、エツジとシントリアで戦った。

クロウも自分一人で平気な様に振る舞っているが、実際は押し潰されそうになるくらい無理をして色々背負い込んでるのをエツジは感じていた。

(みんな、辛いんだ)

戦っている人は、皆。

一人だけ逃げる事など出来ない。エツジは覚悟を決めた。

「やるよ」

地に落ちたままだった剣を拾い、エツジは震えないように両手でしっかりと握る。

ラークがいつもの表情で、黙ってそれを見守る。

彼は、恐くないのだろうかとエツジはふと思う。

エツジよりずっと戦闘に慣れているラークが、斬られることがどういふことか知らない筈は無かった。

しかし、ラークは怯える素振りも見せずに黙ってエッジを見守っていた。

(ここでやめるのは、ラークも裏切ることになる)

斬ったらどうなるんだろう、その不安が次々にエッジの頭の中に見たくもない光景を描く。

「それでも……俺はッ！」

エッジはためらいを言葉と剣で振り払うように、思い切り両腕を振った。

長剣が斜め上に一閃し、深紅の鮮血がその軌道をなぞるように飛び散った。

その向こうでラークがゆっくり仰向けに倒れていくのが見えた。

たった一瞬、本当に短い時間だけだったがエッジは思考が麻痺した。

どさっ、というラークが地に落ちる音で彼は今自分が何をしたのか改めて気付いた。

慌てて剣を収め、エッジはラークに駆け寄る。

「ラーク!!」

みるみるうちに広がっていく血は傷が深い事を示している。

その癖、かすかに開いたラークの目は妙に落ち着いていた。

「フフッ……この方法はあまりやらない方が良かったかな。服がぼろぼろだ」

「何言ってるんだよ！服のことなんて言ってる場合じゃないだろ！すぐにリアトリス達を——」

急いで駆け出そうとするエッジの腕をラークが掴んで止めた。

「僕なら大丈夫だから」

微笑みながらも彼の腕は放さず、ラークが本気で言っていることが分かる。

「大丈夫って……その傷でそんなわけ」

エッジは言葉を失った。

血のあふれ出る勢いが急速に弱まったからだ。

傷口を見ていると、遂には完全にそこから出る血は止まってしまっ

た。

続いて傷が両端から塞がっていく。

エツジが気が付くと、ラークは血だらけで服が破れている以外は斬られる前の状態に戻っていた。

傷が治ると、ラークは何事もなかったかのように立ち上がる。

「さて、じゃあこれから君は僕の弟子だ。僕が君に剣を教える以上、シンの一族はこの世界の守護が目的でその為に僕らの力も命も存在しているって事をしつかり覚えておくことだね——もう、君に逃げることは許されない」

呆然としているエツジにそれだけ言うと、ラークは自分のテントの方へ去っていった。

自分はおそらくして今取り返しのつかない一步を踏み出したのかもしれないと、エツジは感じた。

しかし、それでもエツジは力が欲しかった。

誰かを守りたいと言っても、気持ちだけでは何も変えられないのだから。

第二十話 コレクトバースト

結局サーカスが終わるまでアキとクリフは観客席を動かなかった。リアトリスの舞が終わると二人は他の観客と共にテントの外へと向かう波に紛れて、クロウは見失いそうになる。

クロウは思わずテントの裏側から外に飛びだし、物陰から観客の波に目を凝らした。

(このままじゃ見つけれられない)

人が多い上に、隠れながらでは思うように探せなかった。

クロウは自分が追われている立場であることに苛立った。

(これもジェインの、あいつらのせいだ！)

どンドン流れていく人込みを見ていることしかできず、その中に出ていけない彼女は齒痒かった。

ようやく人の流れがなくなると、幸か不幸か二人はまだその場に残り何か立ち話をしていた。

すぐに物陰を飛び出してクロウは二人に近づいた。

「クロウさん！」

「こんなところにいたのかよ」

二人は彼女が突然現れたことに驚いたようだが、クロウはそんなことより少しでも早くサーカス以外の人間の目の届かないところに移動したかった。

「……場所を変えようか、ここだと目立ちすぎる」

それだけ言ってクロウが踵を返すと、二人は少し躊躇ったがすぐに彼女の後をついていく。

クロウは二人を連れて公演用の大きなテントから、普段みんなが暮らしている小さなテント群の方へと移動した。

あちこちからシンの一族の人の気配はするものの、少なくともこの周辺にはサーカスの外の間人は来ない。

「……」

三人で歩くと微妙な沈黙が続く。

少し前まで共に旅していた。

しかし、アキとクロウが最後に会ったのは王城で戦った時だった。クリフはその時いなかったが、こうして一緒に現れた以上何も知らないとは限らないとクロウは疑っていた。たった一日。

その一日でクロウと二人は互いを仲間とは呼べなくなった。

それが形の上のものでしか無くても、急な関係の変化に気持ちの整理はそれほど早く追い付かない。

ある程度公演用のテントから離れるとクロウは歩みを止め、二人に向き直った。

「なぜ今あなた達がここにいるの？」

クロウの問い掛けに二人はすぐには答えなかった。

アキが何か言いそうになるが、なかなか言葉は出てこない。

そんな様子を見兼ねたのか、クリフが仕方なくという感じで口を開く。

「アキちゃんがお前に謝りたいんだとよ」

(謝りたい?)

クロウが拳を握り締める。

「あの……私」

「今更謝るくらいなら最初から私達を騙したりしなければ良い！」

クロウは周囲の闇のディープスを集束し、彼女の全身を締め上げた。

「――！」

突然首と体を締め付けられ、アキは言葉も発せられないまま目を大きく見開く。

「おい、待てよ！アキちゃんはここまで――」

「うるさいー！」

掴み掛かる勢いで、クリフがクロウに向けて一歩踏み出す。

それを止める為クロウは彼の足元に闇の刃を発生させ、急上昇させた。

牽制とはいえ当たれば命は無い、クリフはそれを見て立ち止まる。

「お前……」

クリフを睨み付けてから、クロウは再び目の前の仇敵ジェインに目を向ける。

アキは恐怖と不安に染まった怯えた小動物のような目でクロウを見ていた。

（今更そんな目を私に向けるならあんたは私達を裏切るべきじゃなかった。罪悪感があるなら初めからそうやって、何も出来ないままにいるべきだった）

クロウは静かな怒りをもって、彼女の目に応えた。

「少しでもあんたを許そうと思った私が馬鹿だった……」

クロウはアキの締め付けを解放する。

「さようなら、ジェイン」

崩れていくアキの体の周囲に、クロウは闇のディープスで複数の槍を作りだす。

一瞬で終わらせる為に。

「やめろ!!」

クリフが叫びながら、自分の身の安全も構わずクロウに突進する。

「ブラッディ——」

「結晶化!!」

リアトリスの声が響き、槍がジェインの体を貫く寸前、大量のディープスがアキの周囲に障壁を作り出す。

クリスタルのような微かな七色の輝きを放つそれは、槍とぶつかると鈴のような音をたてたが、碎ける事無くクロウの術を全て弾いた。

（私の術を、正面から全部防いだ？）

クロウがしばし驚いている間にその術を使った本人はクロウとアキの間に割って入り、崩れ落ちたアキを庇うようにきつく抱き寄せた。

「やめて、クロウ！こんな子供に……」

そのリアトリスの周囲でディープスが急速に集束され時折光の粒子になって見える事で、クロウはリアトリスがコレクトバーストを使った事に気付く。

普通は深術を使う時、まずディープスを集束コレクトしそれを火や水に変換

して術として使用する。

コレクトバーストは無意識下で体全体を常に集束状態にする技術だ。

常に集束され続けるディープスを、術者は変換することのみに集中し普段より強力な深術を短時間で使用することが出来る。

極めて高度な技術で、体力の消耗も激しく、深術の訓練を徹底的に施されたスプラウツでも使えるのはほんの一握り。

だが、それでもクロウの閨属性の術はコレクトバーストだけで防げる様な威力では無い筈だった。

「突然、すごく強いディープスの流れを感じたから来てみたら……どうしてこんなことをするの、クロウ」

問われてもクロウは答えず、アキを見つめた。

リアトリスの腕の中で彼女は震えていた。

呼吸を一時的に止められたせいか、目に涙を浮かべ咳き込みながら何かを呟き続けていた。

「ごめん、なさい……ごめんなさい……」

呟いているのが謝罪の言葉だと分かってもクロウは何も言わなかった。

(ただ謝るだけの言葉で何かが許される訳が無い)

それでも、なお謝り続けるジエインがクロウにはどうしようも無いくらい惨めに思えた。

「そんな奴を庇いたければずっとそうやってれば良い」

クロウはそんなアキや、それに味方しようとするクリフやリアトリスに嫌気がさしてその場を去った。

ひとまず危険が去ったと判断したのか、リアトリスはコレクトバーストを止めてアキに語りかけた。

初対面の相手でも、リアトリスにとっては命がかかっているなら誰であつても関係ない様だった。

「大丈夫？ どうしてあんなことになったの？」

しばらくアキは涙を流すだけだった。

その涙が生理的な理由だけではないのは、もう明らかだった。

「私が悪いんです、私がクロウさんを裏切ったから……何をされても文句は言えません」

それを聞いてもリアトリスはまだ納得できない顔をしている。そこへクリフが声をかけた。

「アキちゃんが全く悪くないとは言わねえけどあいつも流石にやりすぎだ。それを全部自分のせいにするのはやりすぎだと思っぜ、俺は」
「でも、クロウさんが許せないなら、私はそれを受け入れるしか……」
もう何度も同じ様なやりとりを繰り返したのか、クリフも軽くなめいきをつくるとアキを説得するのをやめ、何処かへ歩き去ろうとする。
「ちよつと、あなたもどこへ行くの？この子の仲間じゃないの？」
「アキちゃんは頑固だからな、この調子じゃ俺が何を言っても聞かねえ。だから、俺はもう一人の頑固者の方を何とかしてくる……悪いけどアキちゃんを頼む」

クリフはそう一方的に頼むと、すぐにクロウを追い掛けにいつてしまった。
「え、ちよつと!？」

後には涙を流し続けるアキと、リアトリスだけが取り残された。

クロウは苛立ちながら行き先も考えずに歩いた。

公演を終えてあちこちで話しているサーカスのみんなの声も今は耳障りに感じて、彼女の足は自然と人気が無い方へ向かった。

(ジエインは勝手だ。

私達は遊びや馴れ合いで旅をしていたわけじゃない。

私達がしていたのはルオンのような敵と突然戦かう事になったり、犯罪者として国に捕まる危険のある旅だ。

そこに自分を守ってくれるものなどない。

自分で選択し、戦い、切り抜けていくしかない。

度合いの違いこそあれ、ああして敵として戦った以上ジエインだってそれは同じはずだ。

なのに、自分のしたことを後から間違っていたと思ひ、今更許しを求めらるなんてそんなの甘えだ。

一度きりしかない選択に私達は常に命をかけているのだから。

例えばそれが生んだのがどんな結果であろうと、後悔しようと、私達に二度目の選択は無いのだから)

クロウはテント群の外縁部に辿り着くと、その場にあつたテントによりかかった。

ここのサーカスは一定周期で移動するものの、居住空間でもあるためかなり骨組みが丈夫だった。

(……私がそう感じるのは私が普通じゃないから?)

ふと、落ち着くとそんな疑問が微かにクロウの頭を過る。

クロウがこんな危険な旅をしているのは、それしかできないからだ。

命のやりとりと、策略の渦巻く世界——ずっとそこで生きてきたクロウにはそれが人生で。

それ以外の生き方なんてどうすればいいのか彼女には分からなかった。

でも、そうじゃない人生もあるのだと。

最近それが本当にクロウは分かるようになった。

レインやルオンと一緒にだった時の様に戦いの中のものではなく、ハクの村にいた時のように綱渡りのような脆いものでもない、純粹に誰かを信じられる世界。

自分の周りにそういうものが存在しているのだと。

(私がジェインを許せないのは、私とジェインが生きてきた世界が違うから?)

そこまで考えてクロウは首を振る。

仮にそうでも、彼女は自分がジェインを殺そうとしたことが間違っているとは思えなかった。

正しいか正しくないかを考えても、人は簡単に生き方を変えられない。

もし、アキやリアトリスが生きてきたのがクロウとは違うもつと平穏な人生で、彼女と考え方が違っていてもクロウは二人にはなれなかった。

(私は私でしか無いんだから……これ以上考えても無駄だよ)

「こんなところにいたのかよ、全く」

不意にクロウの後ろからクリフの声がする。

あの後、自分を追いかけて来たのだと彼女は理解する。

「謝れ、って言うつもりなら帰ってよ。私は何も間違っていないつもりだから」

振り向かずにクロウは言葉だけを返す。

「やれやれ、アキちゃんといいお前といい、何でそう頑固なんだよ……いくら言っても聞かぬー」

いつもの調子になり始めたクリフにクロウは後ろを向いたままもう一言付け加えた。

「あと、説教も聞く気分じゃないから」

それでも尚クリフは話し続ける。

「でもよ、お前もアキちゃんも色々あったんだろ？その歳で戦いに慣れてるし。お前のことは好きじゃねーけど、苦労してんのは分かる。いや、好きじゃねえって言うのも違うか……単に俺が苦手なだけだな」

「急に何？あんたがそんなだとなんか違和感あるんだけど」

いつになく思いやりのある言葉に、何か違和感を感じてクロウは振り向く。

「別に恨みとかねえけど……悪い」

クロウは振り向くと、背後に立ったクリフが青い光を纏った右手を自分の目前に突き出していることに気付いた。

「！」

「――『絶』」

頭部を殴り付けられたような衝撃と、急速に体から力が抜けていく感覚をクロウは覚え、直後彼女の意識は闇の中へと落ちていった。

「雷神剣」

「こつちだよ」

エッジが突き出した剣をラークは、空中を滑るように回転しながら

ジャンプしてよける。

エッジはその動きを見ると、すぐに剣に雷のデイクスを再集束（リコレクト）させる。

「――降雷剣！」

まだ空中に居るラークに向け、エッジが剣を高くかざす。

直後、無数の雷が二人の視界を白く塗り潰しラークを襲った。

「断空剣」

ラークが神速の突きで起こした風で雷は散らされ、視界が晴れる。

空中で技を受けてもラークの方が反応が早く、次の動きに移ったのは二人ほぼ同時だった。

「真空破斬！」

「真空破斬！」

二人の剣によって生じた風の刃が、両者の間の空中でぶつかりあう。

風の刃は互いに干渉し、不揃いな風に変えた。

ラークはその風に乗ってエッジから少し離れた位置に着地し、構えを解く。

「フフツ、やればできるね」

そこでエッジも深く息を吐いて、緊張していた体をほぐす。

「言われた通りに動いただけだろ？ 次の動きが分かっていたら何とかな……」

「でも、すぐに真空破斬をコピーできるとは思わなかったよ――威力はちょっと劣ってたけどね」

エッジはその少しわざとらしい言葉に苦笑する。

「必死でやったからな、大体できなかったらどうする気だったんだよ」

『最後の動きでラークに教えられた技で同じ技を相殺する』、エッジはその通りにしたのだが失敗したらどうなったかなど考えたくもなかった。

「大丈夫だよ、命に関わる怪我なんてさせないから。当たってもちやんと二、三日で治るよう加減したよ」

にこやかに、しかし本気で言っているラークにエッジは軽いため息

をつく。

ラークの訓練は決して甘くはなかった。

少し気を緩めるだけで怪我に繋がる。

エッジは今まだ軽い怪我だけでなんとかこなせているもの、体力と集中力のいる訓練だった。

(それでも俺はもうただの負けなんて繰り返さない、今度はクロウやみんなに迷惑をかけない)

エッジは再び深呼吸をして、疲れた体と心を少しでも回復させようとする。

その様子に気付いたのかラークが微笑む。

「フフツ、休憩しようか？無駄に怪我だけ増えても意味が無い」

「ああ、ありがとう」

エッジは素直に感謝して、両膝に手をつく。

稽古をこなせはしても、やはりまだ完璧についていけるとは言えなかった。

そこへ、突然リアトリスが誰かの手を引いてひどく慌てた様子で現れた。

「ラーク！大変、クロウの——アスネイシスのディープスの感じがどんどんサーカスから遠ざかってる！」

それが何を意味するのか考える間に、エッジはリアトリスと一緒に現れたのがアキだと気付く。

「え？」

アキはひどく落ち込んだ様子で泣いた後の様に目が赤く、彼のことも目に入らないようだった。

(どういふことだ？……何が起きてるんだ？)

エッジは何かとても嫌な予感を感じる。

「落ち着いて、どういふことか説明してくれるかな？」

相変わらず慌てた様子は見せないが、ラークは真剣な表情でリアトリスに質問する。

「何か……この女の子と一緒に来た男の人がこの子を置いてクロウを探しに行つて、そうしたらクロウが急にここから離れていく感じがし

て、どうしよう」

そこでようやくやく、エツジはクロウがさらわれた可能性があることに思い至った。

(そんなー！)

ラークは眉一つ動かさず、リアトリスに続けて聞いた。

「それはどっちだか分かる？なるべく正確に」

リアトリスは近くの街道から離れた茂みの方を指す。

「あっち……多分、海に出る方向だと思う」

それを聞くとラークは手に剣を持ったまま、リアトリスが指した方向へ驚異的な速度で駆け出す。

その動きはあまりに突然で、エツジは完全に出遅れた。

「待ってくれ、俺も一緒に！」

ラークの後を追おうとする彼をリアトリスが引き止める。

「エツジ、ラークにはついていけないよ。ここで待とう」

「でもー！」

確かにリアトリスの言う通りではあった。

ラークは一瞬にして視界の端の茂みを超えて見えなくなり、その速度はエツジの体力が万全の時でも到底追いつけない程、異常なものだった。

「分かった……」

しばし沈黙が流れると、黙っていたアキがうつむいたまま口を開いた。

「クリフさんが、クロウさんを連れていったんですか」

エツジはその言葉に驚く。

クリフがクロウをさらったかもしれないこともそうだが、アキとクリフと一緒に現れたという事も驚きだった。

「クリフも一緒だったのか？」

エツジとアキの会話の様子を見て、よく分からないという表情でリアトリスが質問する。

「二人は知り合いなの？さっきの人も」

「ああ」

エツジはリアトリスに今までの旅のことを説明しはじめた。
なるべく冷静に。

そうしていないと彼は、ここからどんどん離れていつているクロウを追って走りだしてしまいそうだった。

情報ステータス 世界観・用語2

アエスラング

エッジ達の暮らす女神のいた世界。

かつては光に満ちた空の下に、炎と水の渦巻く生物も陸地も存在しない世界だったが、イクスフエントから風、闇、地の要素が入ってきた事で陸ができ、海が生まれ、多くの生命が生まれた。

しかし、未だに根本的な世界としての属性は変わっておらず、イクスフエントに流入していった光、火、水のディープスは常にアエスラングに引き寄せられている。それを防ぐ為、六つの宝珠が各属性のディープスの流れに干渉しており、万が一宝珠が無くなると世界は元の姿に還ってしまう。

今の世界は六つの宝珠の内一つ——闇の宝珠アスネイシスを欠いた状態で、五つの宝珠が辛うじて流れをコントロールしている。それゆえ緩やかに均衡が崩れつつあり、大半の人間は気付いていないものの凶暴化した生物の増加や環境の変化などを招いている。

イクスフエント

御伽噺とされている、神の居た世界。

かつての姿は一切の物が見えない程の暗闇の中で岩の間を吹き抜ける風の音だけが存在する世界だったが、アエスラングから火、光、水が入ってきた事で今のアエスラング同様生命の溢れる世界になっている。クロウの元へと渡った闇の宝珠は元々こちらの世界にあった物。

こちらの世界もアエスラング同様に風、闇、地のディープスを引き寄せ続けている。

本来は焰螺旋えんらせんと呼ばれる二本の天高く伸びる炎の様な柱でアエスラングと繋がっていたが、その繋がりにはエッジ達の時代より遙かに前の時代に絶たれており、これが焰螺旋えんらせんの神話が風化しイクスフエントの存在と共に御伽噺となってしまうた大きな要因の一つになっている。

宝珠

伝承に語られる世界の均衡を守る六つの珠。

各属性の大気中のディープスが高濃度で圧縮された塊であり、アエスラングに光・火・水の宝珠、イクスフェントに闇・地・風の宝珠が置かれる事で本来のバランスに近い配置となり、互いの世界のディープスの流れを最小限に留めている。

その為、闇の宝珠がアエスラング側に来てしまったことはそれ自体危険な状態である。

通常の深術士が百人束になっても及ばない程のディープスを操る能力を秘め、その余りに強大な力が人間に渡るのを防ぐ為「シン」と呼ばれる一族が代々人の手から守り続けている。

シンの一族

生まれた時から宝珠と世界を守る事を宿命づけられ、その為の力を与えられた一族。

装飾品等に加工した石を携帯し互いを認識しており、アエスラングのシンの一部はサーカスの一座として行動する事で集団として怪しまれずに行動している。

エッジはこの石を知らずにペンダントとして身につけており、それによってラークはエッジがシンの血を引いていると気付いた。

『コレクトバースト』

通常の意識的な集束コレクトが最も意識を集中させやすい手を使い、その延長をイメージして大気中のディープスをコントロールするのに対して、コレクトバーストは身体全体を集束状態コレクトにする事で通常の集束と比較にならない効率でディープスを集め続ける技術。

使用时には全属性への干渉により、術者の周囲に虹色の光の粒子が見える。

使える人間の限られる高度な技術であるが、その効果は大きく

◎術の準備の時間が減る事による、詠唱時間の短縮。

◎通常時の術に、更なる量のディープスを上乘せする事による術の威力の向上。

◎既に術として変換されているディープスすら分解する事による、相手の術への防御能力。(ダメージを完全に無くせる程ではない)が、得られる。

しかしその分体力の消耗も大きく、使用出来る時間はそれほど長くない。使える深術士セキユアラにとっては正しく切り札である。

第二十一話 再びの旅立ち

クリフは道無き道を走っていた。

肩に意識の無いクロウを担ぎ、ひたすら海へと。

走りながら指を口にあて高い音を鳴らす。

「急げよ、あんまりのんびりしてるわけにはいかねえ」

口笛は辺りに響き、しばらく何も起きなかった。

が、やがてクリフに並走する様に周囲から蹄の音が迫ってきた。

それは二人の男だった。

旅人らしい服装でクリフと同じ革製の防具を手足に着けている。

長髪の一人は二頭の馬の手綱を持っており、クリフに向かって叫んだ。

「クリフ、馬に乗れ！」

「ああ、言われなくてもそうするぜ」

そう答え、クリフは並走する馬に飛び乗る。

すると、今度はもう一人の短髪のオールバックの男が我慢できない様子で口を開いた。

「その子があいつらの秘密兵器ってヤツを持つてるのか？」

「それは分からねえ、だが少なくともこいつは何か普通じゃない深術が使える」

クリフの説明を聞いて、彼の仲間二人は困惑した表情を浮かべる。

「深術士セキユアラではどんなに優秀であっても、せいぜい数十人分の戦力でしか無いだろう。そんなものがアクシズワンドの秘密兵器のわけが」

長髪の男が論理的に疑問を呈する。

「嫌、こいつのはそんなもんじゃない……こいつがデーブミストを使った時、シントリアの王城全てとその周囲が全て闇に包まれた。多分本気なら、あれ全部がこいつの攻撃範囲だ」

そこで話を聞いた二人の表情が驚きに変わる。

感情がそのまま顔に出た短髪の男の方が信じられない様子で聞き返す。

「王城って……あの馬鹿でかい城の範囲を一人でか!？」

クリフは頷く。

「とても人間業とは思えないな、ここで目を覚まされると厄介だ。船に急ごう」

「——悪いけど、行かせられない」
「！」

突如背後から聞こえた声に、三人は振り向く。

そこには馬にも乗らずに、地を蹴り迫るラークの姿があった。

「馬なしでだど!?何だこいつは」

驚く三人を意に介さず、ラークは確実に距離を縮めていた。

それを止めるため、短髪の男がわずかに馬の速度を落としラークとクリフの間に飛びこむ。

「くそつ、何なんだよ——！」

「邪魔をするな」

瞬間、赤く血が舞った。

横にすり抜けるように動きながらラークが振るった刃に、短髪の男の首から血が噴き出した。

駆け続けたいた馬は乗り手を失って急速にその速度を落とし、駆け続けるクリフ達から瞬く間に遠ざかった。

「バズ!!」

クリフに呼ばれた男の行動も空しく、尚も距離を詰めるラークを見るとクリフは長髪の男にクロウを預けた。

「マイロ、そいつを絶対セオニアに送り届けろ！」

そう言うときクリフは馬を飛び降りる。

マイロと呼ばれた男は頷くとクロウを自分の馬に乗せたまま離れていき、クリフが降りた馬は少し走って停止した。

クリフは着地するとすぐに振り返り、向かってくるラークに両掌を叩きつけた。

「轟裂破ごうれつぱ！」

ラークはその一撃を剣の腹で受け止める。

(こいつ、受け止めた?)

相手を吹き飛ばせると確信して放ったクリフの一撃は、想像以上の

力で止められた。

「お前……よくもバズを！」

叫びと共にクリフの体の周囲が青く光りはじめる。

凄まじい剣幕で怒鳴るクリフの鼻先で、ラークは微かな微笑みさえ浮かべた冷たい眼で言った。

「戦場で隙を見せるのは死を意味するんだよ」

「お前、アクシズワンドの人間か？お前達は人の命を何とも思っ
てねえのかよ!!」

そこで、ラークは微笑みを消した。

「分かってないのは君達の方だ。世界を守る為に必要なことを……ア
スネイシスは渡さない、彼女を返せ！」

ラークは拮抗していた均衡を押し切ると、クリフの頭上に飛び上
がった。

「裂空落斬」
れつくうらくざん

「ッ!？」

高速で独楽のように回転しながら落ちてきた斬撃を、クリフは両手
を交差させることで辛うじて受け止める。

(切れない——防具に鉄が仕込んであるのか)

落下の勢いと重さも相まって、それはクリフの腰を少し沈ませた。

それを見るとラークは剣をバネにクリフの両腕を押し退けて着地
し、地を蹴ってまだ体勢の整わないクリフに斬り掛かった。

「真空破斬」
しんくうはざん

「——『発』！」
はつ

ラークが気を纏った剣をクリフに向けようとした刹那、クリフの体
から青い光が奔流の如く放たれラークは木の葉のように吹き飛ばさ
れた。

そのまま木々の枝を折り、あちこちに裂傷を作りながらラークは飛
び、無数に生い茂る木々の一本に背中を打ち付けて止まった。

「ぐ……っ」

その隙に、クリフは自分の馬に飛び乗り走り去る。

ラークはしばらく木に打ち付けられた格好のままだったが、やがて

裂傷が塞がり悔しそうな表情でゆっくり立ち上がった。

「あの男、『気』をあそこまで使いこなすのか」

かなりの距離を吹き飛ばされたせいで逃げられたことと、相手の力量を読み違えたことで勝てなかったことにラークは自分の腑甲斐なさを悔いる。

しかし、いくら悔いてもアスネイシスの力を持った少女が連れ去られた事実は変わらなかった。

「それで、シントリアからクリフと旅をしてきたのか」

その頃、残ったエツジ達は今までの事を互いに話して整理していた。

ほとんど関係を理解していなかったリアトリスには、二人が今までの旅のほとんど全てを話すことになった。

「謝る為だけに旅をしてきたの？」

驚いた様子で尋ねるリアトリスの言葉に頷き、アキが呟いた。

「私は気付けたはずです……クリフさんが私についてくる理由が無いって」

アキはクリフの行動に責任を感じている様子で、申し訳なさそうに顔を伏せる。

「過ぎたことは仕方ない、それよりクロウがどこへ連れていかれたのか考えないと」

エツジはアキを責める気にはならなかった。

それよりもエツジは、クロウの事が心配で気が気では無かった。

「海の方に逃げたって事はやっぱり船で別な大陸に逃げるつもりなのかな？ラークが追い付けると良いんだけど」

エツジはそれを聞くと、思わず大声を出してしまった。

「別な大陸って、そんなことになったら追い付けなくなる！やっぱり俺もラークを追い掛ける」

走りだしかけるエツジの腕を、リアトリスが掴んで止める。

「待って！今からそんなことしてもどうにもならない……そんなに慌てるなんてエツジらしくないよ」

そう言いながら、リアトリスは心配そうな目を彼に向けた。

エツジはそれを見て苛立ち、少し乱暴にリアトリスの手を振りほどく。

（——俺らしいって何だ、今本当に助けが必要なのはクロウの方だ！）
初対面で幼馴染の様に振る舞われていた事の小さな違和感と今の不安が噴出してエツジは一瞬そう思い、リアトリスに向かって怒鳴りそうになるのを辛うじて堪えた。

それでも尚、彼を心配そうに見るリアトリス、そしてアキを見てエツジは深く息を吐いて気持ち落ち着けようとした。

「ごめん、俺だって無駄なのは分かってる。でも、クロウを……クロウを一人にしたくないんだ」

少し前まで一緒にいて、旅に出てからエツジは彼女とほとんどずっと一緒だった。

エツジがラークに剣の修業をしてもらったことにしたのもクロウが居たからだだった。

クロウが変わってきたから、少しずつでも自分一人で何かを抱え込まない様に、

普通に笑うように。

クロウがどうやって生きてきたのか等エツジは知らなくても、

ブレカスの林の中でたった一度だけ見せた涙と悲しい叫びはそれまでの辛さが悲痛な位伝わってきたから、

エツジは本当に『仲間』として笑えるようになってほしかった

「……まだ届く距離に居るのに、何で俺はこんなに無力なんだ」

何もできない焦燥感と不甲斐なさに、エツジは力なくうなだれた。

そんなエツジの肩に置かれるリアトリスの手の温もりが、クロウには決して届かないことが彼は無性に悲しかった。

しばらくするとあちこち服が破れ、血が付着した姿でラークが戻ってきた。

幸い怪我はないようだがラークがクロウを連れ戻せるかも、というエツジ達のわずかな期待はあえなく消えた。

もつとも、クロウのディープスの気配が感覚的に分かるというリアトリスは分かっていた様だったが。

だが、ラークも決して成果が無かったわけではなかった。

「彼女をさらったのはセオニアの王族の配下だ。恐らく海から船でセオニアに渡るつもりだね」

淡々とした口調でラークは言った。

断言したラークにエツジは尋ねる。

「どうしてそうだと分かるんだ？」

彼の質問にラークは手に握っていた何かをエツジ、リアトリス、アキに見せた。

「奴らの一人が彼女を『セオニアに送り届けろ』と言っていたし、それとは別な一人がこれを身につけていた」

握られていたのはブローチだった。

「それは、セオニアのアリーズ家の紋章です」

アキの補足にラークは頷く。

「どうやって手に入れたの？」

リアトリスのそれは何気ない質問だったのだろう、相手が身につけていたものをどうやって手に入れたか。

「僕が斬ったあいつらの仲間を調べていたらこれが出てきた」

エツジ達は驚き、リアトリスはその答えにはっ、と息を呑んだ。

「じゃあ……殺したの？」

ラークは少し怒った様な厳しい目をリアトリスに向けた。

「リア、僕達の役目を君は理解しているよね。僕達は目の前の相手の命より、宝珠のことを優先しなきゃいけない」

「うん、それは分かってる……けど」

ラークの言葉に同意しながらもリアトリスの表情は晴れなかった。「とにかくこれから奴らを追い掛けなきゃいけない、可能な限り早く。彼らがセオニアに向かうのは絶対ではないし、着いたらどうするかも分からない。それに、アスネイシスの力を持つ彼女を奴らがいつまでも抑えておけるとも思えない」

確かにラークの言う通りだった。

エッジとアキはクロウがスプラウツからも逃げだした事を知っていた。

「セオニアにはどうやって行けば良いんだ？」

「船だ。スオール港から海上都市ヴィツアナを経由する」

「じゃあすぐに出発しよう」

今にも歩きだしそうなエッジとラークを、ほとんど会話に合わなかったアキが呼び止めた。

「私も、行きますー！」

勇気を振り絞って言ったであろうアキを、ラークはしばし値踏みするように睨み付ける。

アキはわずかにたじろいだが、無言でラークの目を見つめ返した。

「確か君はジェイン・リュウゲンの娘だったね……君が少しでもおかしな真似をすればどうなるか分かってるよね？」

その返事に、リアトリスが横で驚く。

「連れていくの？ラーク」

「仮にもジェイン・リュウゲンの娘ならその立場が役に立つ機会があるかもしれない。もし僕達の邪魔になることがあれば僕が斬る」

アキを仲間ではなく、単に利用価値のある人間として見ているラークの言葉にエッジは何も言わなかった。

彼女を庇いたくなる気持ちと、何処かアキを連れていくことを認められない気持ちとが混ざってエッジは何も言えなかった。

「……私も行く」

しばし考えた末、リアトリスも同行を申し出る。

「君はあまり旅に慣れてない、戦いにもね。それにシンの中でも特にディープスに敏感な君がいなければ、このサーカスが残りのアスネイスを探るのがより困難になる」

アキの同行に対しては反対しなかったラークが、リアトリスに対してはきっぱり同行を拒否した。

「でも私、エッジとクロウだけに大変な思いをさせたくない！」

エッジはその言葉で、ここに来てからのリアトリスとクロウとのやりとりを思い出して胸が痛んだ。

「君の役目はアスネイシスを探すことだ、戦うことじゃない」

リアトリスの必死の言葉にもラークは耳を貸さなかった。

そこに、別な声が割って入った。

「連れていってくれないか、ラーク」

エッジ達は声が出した方を振り返り、このサーカスの団長でシンの一族の族長も兼ねるエルドがこちらに歩いてくるのに気付いた。

「彼女が離れていくのを私も感じた。今後の対応をラークと話そうと思っていたが、もうほぼ決まっているようだな」

「エルド……」

困惑と少しの怒り——彼がそんな表情を浮かべるのは珍しかった——が混じった表情でラークはエルドを見た。

「私でもアスネイシスは感知できる。リアトリスに世界を自分の目で見させる好機でもあるし、それにリアトリスが彼女の傍を離れなければ今回のような事は起きなかった筈だ。責任を果たさせることも大切だろう」

リアトリスは自分の責任を指摘され、俯いた。

「ごめんなさい……」

根負けしたのか、ラークは軽くため息をついて言った。

「君は甘いね、エルド。危険な目に合わない保障は出来ないけど、それでもいいんだね？」

エルドは頷く。

「私、足手纏いにならないよう頑張るから」

本当は不安もあるのだろう、微かに震えながらリアトリスは拳をしっかりと握り締めてラークに言った。

「君達にアスラングとイクスフェントの加護があらんことを」

クロウの為、エッジとアキそしてラークとリアトリスの四人で、もう一度旅が始まった。

王都シントリア——

タリア家の整った邸宅の中で慌ただしく、乱暴ともいえる勢いで旅の支度をする一人娘の姿があった。

「もう何日もジェイン・アキの行方が知れないというのは本当なの？」
止めようとする家の手伝いの者達を振り切りながら、リヨウカは玄関ホールに向かった。

そこに、タリア家の当主キサラギが急いで現われた。

「リヨウカ、今度は何処へ行くつもりだ？」

父に呼ばれたリヨウカは振り返って言った。

「ジェイン・アキの行方が知れないというので搜索です。またリユウゲンが何を企んでいるかも分かりませんし、先日の王城を襲撃した二人組の搜索に派遣される第三師団のアズライト団長と共に中央大陸の西側を見てきます」

それを聞いて、キサラギは顔をしかめた。

「確かにお前を家に閉じ込めてばかりいたのは悪いとは思っているが、だが自由に出入りを許してからのお前の様子は何かおかしいぞ」

「私はただ、アクシズワンドの為を思っているだけです……では」

リヨウカはそこで再び玄関に足を向ける。

その背中にキサラギは眩くように疑問を口にした。

「……トウカの為か？」

リヨウカはその言葉に反応して、足を止める。

「お前の気持ちは分かる、だがいつまでもトウカのことを引きずって
も——」

「私は、あの子の為にやってるわけじゃない!!」

キサラギの言葉を遮り、リヨウカは扉を叩きつけるようにして出て
いった。

第二十二話 港町スオール

ひどい揺れを感じた。

上下に——いや上下だと思った瞬間、今度は地面が傾いているのだと気付く。

そこでようやく船に乗っていることに気付いた。

私はひどく揺れる甲板に一人で立っている。

(確か……シントリアに行くためにエツジ達と船に乗っているんだっけ)

不意に船が大きく揺れて、その場に踏みとどまられなかった私はそのまま倒れ船の縁から投げ出される。

ゆっくり落ちていく一瞬の中で、誰かが自分に手を伸ばすのが見えた。

それはエツジだった。

私もそれに応えて手を伸ばす。

しかし、互いの指先が触れた途端それは滑り、それぞれの腕は空を切る。

私はそのまま海に引きずられる様に、暗い水の中へ落ちていった。

目が覚めて、周囲の様子を確認した時、クロウはまだ夢の中にいるのかと思った。

夢の中と同じようにひどい揺れを感じたからだ。

彼女はベッドに寝かされていたらしかった。

簡素な造りの部屋で、クロウに見覚えは全く無い。

まだ彼女は状況が飲み込めなかった。

クロウは吐き気を感じてベッドに顔を伏せる。

「目、覚めたか？」

今一番聞きたくない不愉快な声を聞いたことで、クロウは怒りと同じ時に自身が気を失う前のことを思い出す。

「ツ——ブラッディランズ！」

クロウは闇のディープスを槍に変換して、クリフに向けて突進させ

た。

「うわっ！」

彼女の調子が狂う声を出し、クリフは素早い身のこなしで槍をすべ
て避けた。

対象を外した槍は木製の壁を破壊し、部屋の天井に穴を空け、床を
貫く。

——と、空いた穴から水が溢れだした。

同時に潮の匂いが強くなる。

「シャドウエッジー！」

クロウはそれにも構わず更に追撃をかけた。

闇の刃をクリフの足元から急上昇させる。

この前のような牽制ではなく、相手の身体を引き裂くように。

「ぐっ……あー！」

強引に身体を動かし避けた為、クリフは近くの壁に身体をぶつけ
る。

それでも避けきれなかったらしく、二の腕から血が噴き出す。

「マーシレス——」

「やめろ！船と一緒に沈みたいのかよ!!」

クロウはそこでようやく攻撃を止めた。

クリフはしばらく彼女を警戒して観察したが、もう追撃が来ないと
分かると力を抜いてあちこち破損した壁に寄り掛かる。

二の腕からは血が止まら無い様で、もう片方の手で庇うように押さ
え付けていた。

「今この船は海上都市ヴィツアナと中央大陸の間の海をセオニアに向
かってる。俺と仲間で、お前を送り届けるために」

クロウは吐き気と戦いながらも、クリフの態度に疑問を感じた。

「……何でそれを私に話すの？」

いきなり捕まえられたにも関わらず、クロウは全く拘束されていな
かった。

今も深術で彼を殺そうとしたクロウに対して、クリフは反撃しよう
ともしない。

——クリフの行動から彼女はまるで敵意を感じなかった。

「どこに向かうかも分からない船に乗ってんのは嫌だろ？それよりこれ直さねえと本当に沈んじゃう」

誘拐された時点で嫌も何も無い気がクロウはしたが、クリフは出血する腕を押さえながらどこかへ出ていってしまった。

部屋には彼女だけが残される。

今なら逃げられるかもしれないとクロウは考えを巡らす。

この部屋を破壊して外に出て、ラーヴァンで飛んで……。

飛んで何処へ行くのだろうか、彼女は悩む。

クロウ自身驚いたことに、真つ先に思い浮かんだのはサーカスだった。

あんなに鬱陶しいと思っていた筈なのに、今は何故かリアトリスが毎朝起こしに来るあのテントに戻りたいとクロウは思っていた。

(戻りたいと思う場所なんて無かったのに)

よりにもよってその最初があんなうるさい場所になるとは、クロウは思わなかった。

そこまで考えると自分でも少しおかしくなって、クロウは皮肉な笑みを口元に浮かべた。

今この船から逃げられても、中央大陸とセオニアの間の中の辺りかも分からない。

その上、今やクロウはあちこちから追われる身。

宛てもなく飛んでいるうちにシントリアの騎士団か、スプラウツかに見つかるのが関の山。

今のクロウの選択肢は、ここでおとなしくしているしかない様だった。

「アキ、って呼び方で良い？」

エッジ達四人はサーカスを離れてスオール港に向かう道の途中にいた。

一応マントで顔を隠しながらだが、今は街道を進んでいる。エッジが見つかる危険性を無視してでも、早く進みたいというラー

クの意向だった。

「え？はい、良いです」

しばらく黙々と進んでいたのだがリアトリスが不意にアキに話し掛け、アキはそれに少し戸惑った様子で答える。

「やっぱり最初の呼び方って大切かなって思っただけ。私はリアトリス、リアでいいから」

そう言っただけ、リアトリスは屈託のない笑いを浮かべた。

「はい……リアさん」

リアトリスはアキの遠慮がちな返事に不服そうな顔をする。

『さん』もなし、何だかそれだと距離を感じるから」

「え、でも」

首を縦に振らないアキにリアトリスは、少し強く迫った。

「リアー！」

そのリアトリスの様子に気押された様に、アキは反射的に口にする。

「リア、さん」

しかし駄目だった。

育ちの良いアキの長年の経験は、年上を呼び捨てにする事を許さないらしい。

「もう、違うよー！」

二人がそんな風に話しているのを見て、ラークはエツジに言った。

「楽しそうだね、あの二人」

クロウをさらわれた直後のラークには鬼気迫るものがあつたが、時間が経っていつものマイペースな調子に戻りつつあつた。

アキと険悪な雰囲気になるのではないかとエツジも初めは思ったが、思いの外和やかな雰囲気で旅が進みそうだったのでそのことについては安堵していた。

「ああ、そうだな」

ただ、エツジはこの空気に馴染めなかった。

一緒に笑おうとすると、クロウの事が彼の頭の片隅を過る。早く進まなきゃいけない、という思いがエツジの中で募る。

ラークはしばしば彼の顔をじっと見つめていたが、やがて微笑みを浮かべて言った。

「不安？前に進むことだけに集中しないと」

「え……」

エツジは思っていたことを見透かされた事に動揺し、すぐに答えられなかった。

「集中も大事だけど、適度な余裕も持たないとすぐに潰れるよ……君の師匠として言うけど」

それはエツジも分かっていた。

ただ、実行しようとするとなかなか出来ない。

「余裕、って言ってもラークこそ、リアとアキを信頼してないんだろ？そんなのんびりしてていいの？」

エツジは質問し返すことで、自分の考え事から意識を逸らした。

「リアトリスのことは信用してるよ、連れてこない方が良いと思っただけでね。ジェイン・アキは信頼しろ、っていう方が無理だよ、それは君だってそうだろう？」

エツジはまた答えられなかった。

まだアキのことを以前のように信頼できていない自分が彼の中に居た。

でも、クロウを助けるのに協力したいというアキの言葉をエツジは疑いたくはなかった。

「ただ、ある意味では少しは信頼してることになるのかな？」

付け足すように言ったラークの言葉の意味がよく分からず、エツジは首を傾げた。

「彼女は僕の問いかけに頷いた。それが間違いなくジェイン・リュウゲンの意志に反し、また危険だと分かっているもね。彼女には何かジェイン・リュウゲンとは違う意志を持って動いている面が見える……僕はそれに賭けてみようと思った」

そこで言葉を切り、とびきりの笑顔を見せて最後に言った。

「まあ、それだけ、だけどね」

今のエツジにはよく分からなかった。

アキを信用するかしないかも、どうすればうまく気を抜けるかも。エッジが黙々と歩き続ける傍でリアトリスはアキにまだ呼び方の話をしていた。

サーカスを出て数日。

街道のゆるやかな坂の下に港町が見えてきた。

「随分、大きい港町だな」

エッジが今まで見た中ではかなり大きい町だった。

二つの腕の様に伸びた岬の間に無数の栈橋や船が点在し、港町全体を高い柵が囲っている。

流石に王都シントリアほどでは無いが、菜の町シリアンと同じくらいの広さがある。

それでいて、シリアンよりずっと活気があり人の往来も多く見える。

「これで驚いてたらヴィツアナに着いた時引つ繰り返るよ」

ラークが口にしたこの港の次の目的地の話にエッジは困惑した。

「そんなにか?……やっぱり海上都市っていう位だからかなり大きいのか」

旅に出てから、自分が知らなかった世界に驚いてばかりのエッジには想像もつかなかった。

「海上都市ってとっても綺麗な街なんですよ?」

やや興奮した様子でリアトリスも会話に加わる。

彼女もそこへは行ったことが無いらしかった。

「ヴィツアナは一応セオニア国の領土ですけど、アクシズⅡワンドとセオニアの貿易の中継点として栄えています。外観も海の色に映える様な建築物が多く、整備が行き届いた壮麗な街です」

リアトリスの質問にアキはそう解説する。

アキは時々十四歳と思えない程頼りになる時があった。

「へえ、着くのが楽しみだな。アキは行ったことがあるの?」

無邪気にはしゃぐところを見ると、エッジにはリアトリスの方がずっと子供にさえ見える位だった。

「一度だけ、シビルさんに——知り合いに連れて行ってもらったことがあります」

言いながらアキは口の端に微かな笑みを浮かべた。

「そうなんだ、羨ましいな。私はほとんどサーカスから離れた事が無いし、大体中央大陸とレーシア大陸しか分からないから」

エツジは、何気ないリアトリスの言葉がふと気になった。

（レーシアってことは……リアトリスやラークはレーシアの出身なのか？）

今いる王都シントリアのある中央大陸の東、閉鎖的で火山を擁する、三国の内唯一の連合国家。

アキもリアトリスの発言にほんの少し意外そうな顔をする。

「リア、そろそろ話は終わりにしようか。街も近いしね」

そこへラークが自然に、しかし有無をいわさない調子で言った。

「あ……ごめんね」

苦笑いを浮かべて見せたりアトリスだったが、エツジには二人がわざと今の話題を終わらせた様にも思えた。

《港町 スオール》

柵の内部に入ってしまうと町の広さはあまり気にならなくなった。

あちこちに雑然と並んだ建物が視界を阻み、遠くの景色よりむしろ近くの建物が目を引く。

さつきまで見下ろしていた町の中にいるのだと思うと、エツジ達は何だか急に模型の町の中に小人として入り込んだような錯覚を覚える。

「それで、ヴィツアナ行きの船は何処に行けば見つかるんだ？」

あまりに船の数が多く、エツジには見当もつかなかった。

流石にアキやリアトリスも少し困った表情になる。

しかし、ラークはためらう事無く人込みの中へと歩みを進めた。

あまりに早い行動に、エツジは思わず呼び止めた。

「ラーク、どの船だか分かるのか？」

すると、振り返ってラークは言った。

「アスネイシスが盗まれて十五年になるからね、僕も全く探さなかつ

たわけじやないさ」

「え？」

エッジが更に疑問を口にするより早く、ラークは再び背を向けて人込みの中を縫うように歩き始めた。

三人はラークを見失わないよう慌てて後を追い、いつしかエッジの疑問は無意識の内に消えていった。

王都シントリア。

その西側の門の内側にアクシズワンド王国騎士団が整然と列をなしていた。

王国騎士団は青銅色の甲冑に身を包んでいる。

皆が一樣な格好をしている中で、先頭に立つ団長だけは背の高い兜を被り意匠の異なる鎧を身につけていた。

普段、城の周囲や城門でしか見られない騎士団の姿が道を埋めるさまは周囲の者に不安を与えた。

タリア・リヨウカはそこへ臆する事無く近付き、団長の男に話し掛けた。

「約束通り、私も搜索に同行させてもらえるのでしょうか？アズライト団長」

団長は首だけでリヨウカを振り返った。

今は兜で顔は見えないが、その素顔は団長としてはあまりに若い、端正な青年である事をリヨウカは知っている。

「ああ、タリア・キサラギの息女の達ての頼みとあつては仕方ない。ただ、私達もあまり護衛に人員は割けない、足手纏いにはならないで欲しい」

その答えにリヨウカは不適な笑みを浮かべた。

「フツツ、貴方ほどではないけれど、自分の身は守れるつもりよ」

が、その笑みはゆっくりと消え、真剣な表情へと変わった。

「でも、本当に良いのかしら？私の様な部外者が一緒でも」

「騎士は常に民の為にあるものだ、私はそう思っている。私の責任で君の同行を了承する」

この団長は国の指導者よりも、まずアクシズワンドの民に忠誠を誓っている様にリョウカには思えた。

それは弱者の味方とも言えるが、裏を返せば必ずしも国に忠実ではないとも言える。その上アズライトはあまりに若い。

ずば抜けた剣の資質と人望があるからこそ今の地位にいるが、それはジェイン・リュウゲンが推したからでもあった。

恐らく、セオニア、レーシアとの戦いに備えて。

アズライトのおかげで捜索に同行できるとはいえ、リョウカは複雑な思いを抱かずにはいられなかった。

「……それに、今度ばかりは私も私情を挟んでいないとは言い切れないからな」

アズライトが小さく呟いたさっきの言葉の続きは、リョウカの耳には届かなかった。

リョウカと団長とのやりとりが終わると、第三師団は進み始めた。

西へ、スオール港へと。

「この船だよ、僕達が乗るのはね」

そう言っただけは目的の船を示すと、後から来た三人に笑いかけた。

エツジ達は、というと船が見つかった安堵よりも疲労が大きかった。

「ラーク……歩くの速すぎるよ」

「せめて、俺達がついてきてる事を確認してくれよ」

「けほっ……」

一度、反対に進んできた人の波に流されそうになった為ラークを見失い、走って追い掛けたエツジ達はへとへとだった。

「ふふっ、でもこうして無事に着けたんだから大丈夫だよ」
(何がだよ)

エツジは心の中で呟いたが、口に出す気はなかった。

「さて、この船はいつ出発するのかな？」

誰かに聞こうとラークは辺りを見回す。

が、何故かこの船の周囲には誰も居ない。

「——おかしいね」

いくら何でも、船に誰も居ないと言うのはおかしい。

不思議に思いながらしばらくその場に留まっている彼らに、一人の男が近づいてきた。

「あんたら、この船に乗りたいたいのかい？ だったら当分は無理だ」

無理とはどういう意味なのか、エツジ達は困惑する。

「何かあつたんですか？」

アキが尋ねると、男は困った様子で話し出した。

「ヴィツアナへの航路の途中に危険なモンスターが出たらしくてな、そのせいで船が通れなくなってるらしい。向こうにある船が見えるか」

男はそう言つて遠くを指差した。

彼らは目を凝らしてそつちを見る。

「何？……あれ」

思わず、といった感じでリアトリスが洩らす。

港に一つ黒い影がある。

船体の様だが奇妙なのはそれが陸の上にある事だ。

目を凝らすと、普通と違う事は他にもあつた。

何かが貫いたような無数の穴が空いた船体、歯形のついた帆、何より全体に付いた強い圧力をかけられたような跡。

それは、モンスター達に襲われたという船の残骸だった。

第二十三話 牙を剥く海

「どうしましょう、これから」

アキが部屋に居る全員に聞く。

エツジ達は船に乗れず、仕方なく港の近くで宿を一部屋取つていた。

「モンスターの群れ、何とか通れないかな？俺達なら倒せるかもしれないし」

エツジが言うとすぐにラークが答えた、その表情は険しい。

「単数と群れは違うし、何より船を出してくれる人がいなきゃどうにもならない——とは言え、急がなきゃいけないのも事実だけどね」

ラークに言われなくても、実際は難しいことはエツジも分かつていた。

分かつてはいても、つい気が急いだ。

「俺、船を出してくれる人がいないか町を探してくる」

「エツジ！あまり目立たないでね」

彼は背中にリアトリスの言葉を受けながら、部屋の扉を開けて外へ向かった。

エツジが出ていくと、三人の間にしばしの沈黙が流れた。

元々仲間のリアトリスとラークはともかく、アキはまだラークと話をするのが苦手としていた。

「何か最近のエツジ、前と違うよね」

呟くようにリアトリスが言うと、ラークが首を傾げた。

「さあ、僕はリアみたい以前から彼を知ってるわけじゃないから」

「私もそんなに長い間一緒に居たわけじゃないけど。でも、クロウが連れていかれてからのエツジはすごく焦ってる」

何処か不安げにリアトリスは感想を漏らした。

ラークはまたしばし黙っていたが、不意にアキの方を向いて言った。

「君はどう思う？」

「えっ？」

今までラークとほとんど言葉を交わした事が無かったアキは、驚いた様子でラークを見つめ返した。

「あ……私もそう思います。エッジさん、以前はこうでは無かったです」

アキのたどたどしい返事を聞いてラークは頷いた。

「やっぱりエッジにとって彼女は特別、ってことか。前からこうだったのかな?」

続けて問われ、アキは慌てて答えた。

「私もお二人のことをそんなに知っているわけじゃないですけど……会って間もない頃からエッジさんはクロウさんの事をいつも気に掛けていたように思います」

「そう」

それを聞いてラークは何かを納得した様だったが、リアトリスはその様子に困惑した。

「ラーク、どうかしたの?」

リアトリスが聞くと、ラークはすぐにいつもの微笑を浮かべてみせた。

「別に大したことじゃないよ。ただ、エッジの目的はやっぱり『アスネイシスを持つ者』ではなく『クロウ』だってことを再確認しただけだから」

笑顔のラークとは対照的にリアトリスは驚き、慌てた表情になった。

「ラーク!でも、エッジの想いは今は私たちの目的に適ってるでしょ?」

「そうだね。きつと、この旅でエッジは持てる最高の力を発揮してくれる、心配はしてないよ」

リアトリスはそれを聞いてようやく安堵した様子を見せる。

アキは途中から二人の会話を聞き、会話が終わっても不安そうな顔でリアトリスとラークを見比べていた。

が、

「……そうだね、今はまだ」

小さく呟いたラークの言葉に、アキが気付くことはなかった。

「船を出してくれる人、見つかった」

エッジが宿に戻ると三人は一斉に彼の方を見た。

「早かったね。で、こっちの条件は何かな」

この状況で普通に船を出してくれるはずが無いと分かっているのだろう、ラークはすぐに話を進めた。

「海上でモンスターを退治することと、前払いで四万ガルド」

その金額に、仲間達は驚く。

もつとも、ラークの表情はあまり変わらなかったが。

「四万ガルドって……それで頼んだの？」

エッジは頷いた。

リアトリスの言う通り四万ガルドは通常の料金のほぼ十倍近かった。

「時間が無い、船があるだけでも幸運だよ」

素直に賛成するラークとやや不安げなリアトリスの間に、アキがおらずおすと割って入った。

「確かに今はそうかもしれないませんが、もしヴィツアナで追い付けなかったらその先追う為の旅費が無くなってしまうです」

エッジはそこで説明を補足した。

「船の持ち主もヴィツアナに帰りたいらしいから、ガルドは無事に着けばほとんど返してくれる」

ラークはそれを聞いて微笑んだ。

「失敗したら一緒に海に消えるだろうから保険の意味は薄いと思うけどね。でも、契約に返金が含まれてて良かったよ、手間が省けた」

エッジ達はラークの言葉に固まる。

「……いや、待ってくれ無理矢理でも返してもらうつもりだったのかよ」

「エッジ、そこまでの料金の上乗せはね、犯罪だよ」

そもそも正規の船旅で無い以上そういう問題では無い気がしたが、エッジはとりあえず当面の方針には影響が無さそうだったのでそれ

以上の追及はしなかった。

次の日。

エツジ達は、スオールの港からヴィツアナに向けて出航した。

甲板にいる船の乗組員達はもちろん、アキやリアトリスの顔にも緊張が浮かんでいる。

エツジも同じだった。

もしかしたら二度と陸には上がれず、海に沈んでいくかもしれないのだから。

何度も四人で作戦を練ったものの、やはり緊張だけは取り除けなかった。

(でも、やらなきや。クロウはこの海の間こうにいるんだから)

そう思うと、またクロウの側に行かなければならないという焦りがエツジの心の中に沸き起こり、彼は無意識に胸のペンダントを握り締めた。

と、不意に甲板が騒がしくなる。

「海を見ろ!!」

船員に言われた通りエツジ達も海面に目を凝らす。

人の腕ほどもありそうなヒレが、白い飛沫を飛ばしながら四方八方から船に迫っていた。

船員達はパニックを起こし、喚き始めた。

船を出す事に同意したのは全員では無い様だ、だからこそその大金だったのだろうか。

エツジはその喧騒に負けないように大声でアキに呼び掛ける。

「来るぞ、アキ!!」

「はー」

直後、海面にあつた影が全て水上に飛び上がり、人を頭から飲み込めそうなくらい凶悪なサイズの魚がびっしりと並ぶ歯を光らせて船に向かって突撃してきた。

空を裂き、船に迫る飛魚型のモンスター。

アキはその姿を見るより早く、エツジの掛け声で目を閉じて精神集

中を始めていた。

ディープスが集まり、彼女の周囲に微かな風を生む。

アキは準備が終わり目を開けると冷静にモンスターの数を確認した。

(9……10、11)

その間にも、既にモンスター達は歯の一本一本を見分けられるほどに甲板に近づいていた。

飛ぶ勢いをそのままに、獲物を海に引きずり込むつもりの様だ。

が、それは適わなかった。

「詠技——」

傘を右手から左手、左手から右手に持ちかえながら、アキは自分の周囲で傘をくるくると回転させ、最後に腰を低く落としながら思い切りそれを横に風ぐ。

「——翠風——」

アキを中心に風が吹き出した。

それは船に迫っていたモンスター一体、一体に見えない帯として正確に伸び、モンスター達を絡めとって上空へと巻き上げた。

「エツジさん——」

今度は、エツジが呼び掛けに応える番だった。

すぐにエツジは雷のディープスを集束する。

(これを分裂させて、船の周囲に網を作るように……)

久しぶりに使う深術に意識を集中させ、エツジは集めた雷のディープスを船の周りに半球を描く様に広げた。

「——スパークウェブ——」

船を覆うように電流が半球状の壁を作り、落ちてきた飛魚型のモンスター達は次々に感電し、放電音を残して海の中へと落ちていった。

最後の一匹が海に沈み、深術の光が消えると辺りは一転して不気味な静寂に包まれた。

「終わった、のか？」

甲板の船員の誰かが呟いた。

だが、それをすぐにラークが否定する。

「違う」

直後に足元が揺れ、船体が傾く。

「下から!？」

見えない敵の攻撃に、リアトリスが顔をしかめる。

恐らくモンスター達がスオールの港で見た船のように、船体に穴を空けようとしているのだろう。

「船が沈むのは困る、ねー!」

言いながらラークは高く跳び、身を翻して剣を振るった。

剣から放たれた衝撃で船の間近に水柱が上がる。

船体がまた揺れ船員の悲鳴が上がったが、ラークは意に介さず言った。

「リア、今のうちに船に防御を」

海中に対してはエツジやアキは有効な攻撃手段が無い為、二人はリアトリスが何をするのか黙って見ていることしか出来なかった。

「分かった——ジュネレイト結晶化!」

風が起こった、そう錯覚するほどに大量のデープスが船の外縁に向かって一斉に動いた。

一つの属性ではなく、赤、緑、青……と全ての属性のデープスが一つの壁となって船を包む。

その壁は水晶のような結晶で見透かせるほど澄んだ色だったが、その色は絶えず変化して七色の神秘的な輝きを放っていた。

「綺麗、ですね」

思わず、という風にアキの口からため息が漏れた。

エツジも同じように、身に迫っている危険をしばし忘れ七色の障壁を見つめる。

が、それも長くは続かず、障壁から微かな振動と何かが壁にぶつかるような鈍い音が響いてきた。

さつき海面の下にいたモンスター達が攻撃を再開したようだ。

「海中じゃ仕留めきれなかったか」

ラークが顔を顰める。

今はリアトリスが造った障壁のおかげで船はダメージを受けずに

済んでいるが、同時にラークもほとんど何も出来ない。

エッジ達に焦りが生じ嫌な沈黙が流れると、リアトリスが静かに詠唱を始めた。

「刹那の輝き、其を瞳に映す者を貫かん——」

船の上空、七色の壁よりも上に白い光が強く輝いた。

「——レイ!!」

光が一点から矢のように降り注ぎ、海面を貫いた。

障壁の振動と鈍い音が止み、攻撃が終わったことが分かる。

海面を見渡すと、ノコギリザメ型のモンスター達が浮かんでいた。

恐らくこのモンスター達が船体に穴を空けようとしていたのだろう。

見えない襲撃者を倒したことを確認して、リアトリスは障壁を消した。

リアトリスが深術を使うのを初めて見たエッジは称賛の言葉を掛けようとして、リアトリスの顔に疲れと大粒の汗が見えたことに驚いた。

「リア、大丈夫か？」

振り向こうとはせず、それでも唇の端に笑みを浮かべてリアトリスは言った。

「大丈夫。さっきの壁、まだあんまり長く張ってられないんだ……すぐ疲れちゃうから」

二人の会話に気が付き、アキも心配そうな顔でリアトリスのそばに寄る。

「後は私達だけで何とかしますから、リアさんは休んで下さい」

「ありがとう、でも私だけ休むわけには——」

不意に、今までで一番強く船が揺れた。

船の上で多くの者が倒れかけたが、幸い船から落ちた者はいなかった。

「次から次に、この海はどうなってるんだよ！こんなにバラバラのモンスターが連携を取るなんて」

再び騒つき始めた船の上でエッジは叫ぶ。

アキがそれに対して推測を述べる。

「以前の貨物船の荷に余程気に入るものがあつたか、あるいは水中内の食糧事情がそれほどまでに切迫しているか……ここ最近のモンスター凶暴化は私達の常識が通用しなくなりつつあります」

二人がそんな原因の分析をしている間に、ラークは戦場の分析をする。

「港にあつた船の残骸を覚えてる？あの船には複数種のモンスターにやられたらしき跡があつた、食い千切られたような帆と鋸で空けられたような穴、それから——」

叫び返していたラークの言葉を荒波の音が消し去った。

海面がせり上がり、ヌメヌメとした『何か』が姿を現す。

同時に吸盤のついた大木のように太い足が、いくつも船体に向けて振り下ろされた。

今まで凌いで来た事が無駄になる様な一撃。

「!!——ッ^{ジエネレイト}結晶化——」

周囲からディープスが細かな光の粒子となつてリアトリスに吸い込まれ、リアトリスは船の上部に一瞬で、さつきと同じ障壁を展開した。

船をバラバラにしかねない勢いで振り下ろされた足は、七色の輝きに阻まれて船に到達することはなかった。

突如海面に現れた巨大なイカ型のモンスターは、思わぬ妨害にあつて一旦足を海中に戻した。

直後、障壁が消えリアトリスがふつ、と倒れこむ。

エッジとアキは、あわてて駆け寄りリアトリスを支えた。

その様子を横目で確認すると、ラークは目の前の巨大なモンスターに目を向ける。

「船全体を締め付けた様な跡……船が沈んだ直接の原因はこいつだね。海上に姿を現してくれて良かった」

そう言つて、剣を掲げると、アキの詠技と七色の壁に使われていた風のディープスを集束した。

ディープス リコレクト
— D · R C 変化 —

「龍爪旋空破！」
りゅうそうせんくわは

振り抜いた剣から放たれた衝撃と風は、モンスターの周囲からも風を呼び次々にその巨体を切り裂く。

力を失ったモンスターの体は倒れこみ、巨大な水柱をたてた。

「最初からみんな海の上に出てきてくれたら簡単だったんだけどね」

甲板からの歓声と悲鳴を聞きながらラークは呟くと、リアトリスの様子を見にエツジ達のそばに向かった。

第二十四話 色の水晶

「海の上っていうのも結構悪くねえだろ？」

甲板の上。

水の上で潮風しか無くても久しぶりの新鮮な空気は、少なくとも狭い部屋に閉じ込められている時よりはマシなものだった。

もつとも、船酔いしているのは変わらない為、クリフに連れ出された私の気分は最悪なままだった。

「何で私をここに連れ出したの？」

クリフを殺しかけてから、私はあの部屋にずっと閉じ込められていた。

目的地に着くまでそのままだろうと思っていたが、クリフは予想に反してまたも私を連れ出しに来た。

「理由？あんまりずつと吐き続けられても困るからだよ、外の景色見れば少しは気も紛れるだろ」

それには答えない。

確かに彼の言うことはあながち間違っておらず、多少は吐き気もマシになっていた。

しかし、無くなったわけではなく、こんな事で自分をさらった相手に礼など言いたくは無かった。

が、何気なくクリフの腕に目をやるとそこにはまだ自分が付けた傷があり、何故だか少し胸が痛んだ。

クリフは沈黙を気分が悪いせいだと取ったのか、海の向こうを顎で示して話を続けた。

「あれ、何だか見えるか？」

私は示された方を見た。

この変化の無い景色以外に気分転換になるものがあるなら何だつて大歓迎だった。

初めは普通の水平線と空にしか見えない。

が、目を凝らすといくつかの小さな点が海上で光っているのが見えた。

「何か、光ってるヤツのこと？」

私の答えに頷き、クリフは言った。

「あれは塔に太陽の光が反射してんだよ。ヴィツアナはこの辺りの水晶を利用して街を飾ってるからな」

確かに無数の点をよく見つめると、ぼんやりと尖塔が見える。

空と海の色に溶け込む様な青い塔だった為、言われるまで気付かなかった。

「ああいう綺麗なの作れるんだから凄いやな、人って」

しみじみと遠くに見える海上都市に思いを馳せるようにクリフは言った。

私もしばらくヴィツアナの光を見つめる。

確かに綺麗だとは思った。けれど、私にはどうしてもそれが街に住む人の自己顕示欲の表れのように思えて心に響くほど美しくは感じられなかった。

「……綺麗な建造物なんて、見た目だけだよ。人がいっぱい居る街は嫌い」

吐き出すように私は自分の心をそう言葉にした。

クリフはしばらく黙ってこちらを見ていた。

居心地の悪い沈黙が続き、私はそれに耐えかねてまた部屋に戻って自主的に閉じ込めようと彼に背を向ける。

そこへ、クリフが言葉をぶつけた。

「確かに誰だって心は水晶みたいに綺麗じゃ無いかもしれねえ……けどな、どんな奴だってそうやって生きてんだ」

そこでクリフは一呼吸置き、言った。

「他人が嫌いだからって美しいものまで否定するのは勿体無えんじやねえか？お前だってそういう人間の内の一人なんだよ」

クリフは最後の方は元氣付ける様に言うのと、私にこれ以上会話するつもりが無いのを感じたのか離れていった。

が私はそれに対する答えが見つからなくて、足を止める。

（そうだ、私なんて生きる為に何人殺してきた？自分が生きる為だけに大切にしていたものも、大切にしてくれた人の思い出も。全部踏み

にじる様な、そんな私の心が一番汚い。でも、そんなこと——」
「分かってる」

本当は自分が全部分かっていた。だから、わざと目を逸らしていた。

ちゃんと見つめたら、狂ってしまうくらい辛いから。

しかし、クリフの言葉で私はまた目を逸らせなくなった。

彼の言ってることは間違ってる。それで余計腹が立った。

私はやっぱりクリフが大嫌いだった。

どの位そうして立っていたのか分からない。

「——アクシズⅡワンドの船だ！」

不意に誰が叫ぶ声が私の意識を現実を引き戻した。

船の周囲の海を見渡すと進行方向、ヴィツアナの方角に王国騎士団のものらしい船が見えた。

甲板が騒がしくなり、あちこち人が忙しく駆け回り始める。

何人かは私に気付いて驚いた顔をしたが、私が逃げようとしないうことを確認するとすぐにどこかへ走っていく。

海の上で逃げ場が無い自分より、目前に迫る敵の船の方が緊急だと判断した様だった。

恐らくそれはいつでも私が飛んで逃げられる事に気付いていないからだろうが。

ふと、走り回る人間の中にクリフがいるのが目に入る。

まだ私はずっと甲板にいる事に気付いていない訳ではない筈だが、こちらには目も暮れない。

自分を完全に蚊帳の外に置いている。それがまた妙に私を腹立たせた。

私はクリフに近付き、肩を引いて無理矢理こつちを向かせた。

「何だよ、悪い、今お前に構ってる暇は——」

「この船の進路、このまま進めれば良いの？」

余計なことは挟まず、聞きたい情報だけを聞く。

飽きた様な、苛立った様な顔でクリフはこちらを見た。

「確かにそうだけどお前、前方の船が見えねえのかよ、あれにセオニアの船だって気付かれたら……」

最低限の確認が済み、私は右手を振り上げた。

「暗澹あんたんたる闇よ、我を導く翼となれ——ラーヴアン、デイープミスト！」

私の手から登って行った黒い一筋の靄が黒い巨鳥になる。

ラーヴアンが漆黒の翼を広げ、すぐにそれは周囲の海を覆い尽くす闇になった。

調整でこちら側の船の周囲はある程度の距離まで見通しが利く様になっていたが、前方に見えていたアクシズⅡワンドの船の船員は自分の手も見えていない状況の筈だった。

向こうの船上でパニックに陥る船員一人一人の動きが、私にはラーヴアンを通して手に取るように分かった。

こちら側の船でも、突如出現した真つ黒な霧に船は騒ついていた。

何人かは捕まえていたはずの私がやった事に気付き迫ってきたが、クリフがそれを制する。

「これで、あいつらに見つからずに進めるでしょ？」

ひどく驚きながらクリフは、自分の方を見た。

「これ、お前がやったのか？……いや、だけどこれだと俺達もどう進めば良いか分からねえし」

さつきとは打って変わって慌てるクリフに、私はなるべく感情的にならない様に冷静に言った。

「私にはこの霧の中がどうなっているか全部分かる、方角なら私が指示する」

そこでようやくクリフは落ち着きを取り戻し、代わりに困惑した様子で聞いた。

「俺達に手を貸してくれんのか？」

すぐには答えられず、私は少し考えてから言った。

「今は他に行けるところが無いからあんた達に手を貸す。でも私はいつでも裏切れる、私は仲間じゃない……それを忘れないで」

最後の方は半ば自分自身への言い訳だった。

協力していいのか、否か。まだ頭の中でも整理がつかないままだった。

「ああ、分かった。それで？どっちに行けば良いんだ」

まだ心が定まらないまま迷いを隠して私はクリフにアクシズⅡワンドの船の位置を伝え、それをクリフが指示として船員に伝達する。

（私は……私に行く場所なんてあるのかな）

その問いを言葉にすらできないまま、私は海の上の黒い霧の中にひとり置き去りにされた様な気がした。

海上でモンスター達と戦った翌日。

リアトリスは船室のベッドの一つに寝かされていた。

隣のベッドには付きつきり様子を見ていたアキとエッジが腰掛けていている。

二人はリアトリスが微かに動きを見せる度に駆け寄ろうとしては、目を覚まさない事に気付いて何度も座り直していた。

「……ん」

時間が経ちリアトリスがようやく目を開けると、二人はすぐに駆け寄って心配そうにリアトリスの顔を覗き込んだ。

「大丈夫か？リア」

エッジが尋ね、まだ少しぼんやりとしているリアトリスは二人の顔を確認して困ったように笑った。

「あれ？私、どうして寝てるのかな」

無事なのを確認して二人は安堵し、すぐにアキが答えた。

「リアさんは船の上に障壁を張って守ってくれて、その直後に倒れたんです」

それを聞いてリアトリスは申し訳なきそうに言った。

「そっか……私、力使いすぎて倒れちゃったんだ。ごめんね」

謝るリアトリスに、アキは少し怒って言った。

「私達に任せて下さいって言ったのに、どうしてこんな無茶をしたんですか」

リアトリスはエッジの顔を見て、アキの顔を見て、それから可笑し

そうに言った。

「だって、二人とも危なっかしいんだもん、二人に任せて私だけ黙って見てるなんて出来ないよ。それに、私の方がお姉さんだしね」

そう言っただけで微笑むリアトリスはいつものリアトリスだった。

「だからって、私達の為にそこまで無茶しないで下さい……私達だって心配しますから」

リアトリスが無事なことに安心したのか、アキは言い終わると彼女のベッドに顔を伏せて泣きだしてしまった。

「そんなに泣かないで、私なら大丈夫だから」

困った顔をして、リアトリスは助けを求めるようにエッジの顔を見た。

「俺だって心配した、アキにもそれだけ心配させたって事だよ。少し反省して、これからは無理しないでくれ」

リアトリスは観念したようにため息を吐き、アキの頬を伝う涙をそっと拭った。

さらに、何か声を掛けようとしてリアトリスはそこで気付いた。

彼女がベッドに突っ伏したまま、微かな寝息を立てている事に。

「アキって時々すっごく大人びてる時があるけど、こういう所はまだ子供なんだね」

リアトリスはアキの寝顔に微笑んだ。

「昨日リアアが倒れてから一睡もしないで側に居たんだ。きつと、安心したんだよ」

そう言いつつ彼も欠伸をする。

「もしかして、エッジも？」

凶星を指され、エッジは苦笑する。

「ああ、何か眠れなくて」

リアトリスは隣のベッドを指差した。

「ちゃんと寝ないと体壊すよ、エッジも少し寝たら？」

「そうだな、少しだけ寝るよ」

言っただけで、ベッドに潜り込むとエッジもあつという間に規則正しい寝息を立て始めた。

リアトリスはその様子を見、自分のベッドに突っ伏したアキに毛布をかけてやると、笑った。

「……やっぱり二人とも私がいないとすぐ無理するんだから」
そう言ってリアトリスは傍で眠るアキの頭を撫でた。

リアトリスが目覚めた事で旅はいつも通りの調子に戻った。

アキとリアトリスは船の端から海を眺めたりしながら、二人でいつも楽しそうに話している。

エッジはラークとの剣の訓練を続けながら、それ以外の時は一人でいる事が多かった。

ラークは、たとえばエッジは彼の姿をあまり姿を見かけなかったが、それはいつもの事なので特に詮索する気にはならなかった。

エッジは気になることがあつてリアトリスを探していた。

着実に剣の腕が上がっているとラークに言われながらも、彼はまだ何かが足りないと感じていた。

少しずつ自分が強くなっているのはエッジにも分かる。

しかし、まだまだ足りなかった。ラークにも弧氷のルオンにも敵わない。

(このままじゃまたクロウを助けられない)

そんな焦燥に捕われている時、エッジの心に浮かんだのはリアトリスが使う不思議な深術だった。

自分もリアトリスと同じ『シン』だというのなら、使える可能性があるかもしれない、と。

リアトリスはすぐに見つかる。

いつもの様に船の縁から海を見ていた。

「リア、聞きたいことがあるんだけど」

彼女はエッジの声に気付くと、海に向けていた目をそちらに向けた。

「何？エッジが私に何かを聞きたいなんて珍しいね」

エッジは頭の中にあるいくつかの疑問を整理してから尋ねる。

「この前、船を守る為にリアはいくつかの属性のデュープスを同時に

集束して使ったよな？あれって俺にもできるのかな？」

リアトリスの目が覚めてから見せる事が増えた、困った表情を浮かべながら答えた。

『クロマティッククリスタル』の『色』の水 晶』の事、だよね」

「クロマティック、クリスタル？」

エツジが初めて聞く単語だった。

おうむ返しに言った彼にリアトリスは頷く。

「私達、アエスラングのシンはそう呼ぶの。全ての色、全てのディープスを束ねた一番強い形だから」

一旦そこで口を閉ざすと、リアトリスは真剣な顔でエツジの目を見た。

『色』の水 晶』は扱うのが大変なの、体力と集中力がすごく多く必要で……エツジも私が倒れたの見たでしょ？」

エツジはリアトリスが大粒の汗を流しながら、『色』の水 晶』を使っていたことを思い出す。

「ああ、見た。それでも教えてほしいんだ」

一瞬の間があり、リアトリスは自分を真剣な目で見るエツジの顔をじっと見た。

「今のエツジには、『色』の水 晶』の使い方は教えられない」

エツジは驚く、まさかリアトリスにそんな風に断られるとは思っていなかった。

「今のエツジは気持ち先走りすぎて、自分が出る事と出来ない事の区別も考えられなくなってる。エツジ、力っていうのはね、それ相応の心が無い人間が持つと危険なの。ラークはエツジに簡単に剣を教えることにしちゃったけど、私は今のエツジに深術は教えられない」

エツジはしばし呆然とした後、必死で食い下がった。

「何で……俺はどんな辛い訓練でも耐えてみせる！倒れても構わない、だから——」

「だからだよ」

「え？」

エッジは不意を突かれて、言葉が出なかった。

「今のエッジに『色クロマティッククリスタルの水晶』の使い方なんか教えたらエッジは本当に倒れてでも使うでしょ？ そうなったら私達は、戦いの最中に倒れている人まで庇わなきゃいけない」

「それは……」

そこで、リアトリスは恐いくらい真直ぐだった瞳を僅かに揺らした。

「私が目を覚ました時、エッジは私に無理をするなって言ったよね？ それはエッジだって同じだよ。エッジがもし死んだりしたら誰がクロウを助けるの？」

エッジには返す言葉が無かった。

自分がどれだけ焦って、周りが見えなくなっているか彼は気付かなかった。

クロウのことばかりを心配するあまり、自分の周りの人間にどんな迷惑がかかるかも考えていなかった。

「そうだな、ごめん……俺もう少し今、自分が出来ることを考えてみる。出来ないことも。だから」

エッジは右手の小指をリアトリスに差し出した。

リアトリスは不思議そうな顔で首を傾げる。

「約束だ、俺は自分の出来ることをする。で、リアは俺たちの為に無茶をしない」

差し出された小指を見て、リアトリスは苦笑いした。

「約束って、私もするの？」

エッジは笑って言った。

「当たり前だろ、人に倒れるような無茶するなって説教する人が、無茶して倒れてるんだから。このぐらいいしなきゃ信用できない」

リアトリスも渋々、右手の小指を差し出して彼の指と絡ませた。

二人はそのままぎゅつと指を結び、それから解いた。

「困ったな、これじゃ本当に倒れたり出来ないね」

「約束しなかったら、またあんなことするつもりだったのか？」

茶化すようにエッジが言うと、リアトリスは誤魔化すように笑っ

た。

リアトリスはいつもこうして笑っていたが、出会ってから短い期間気が付かないうちにどれだけ彼女に助けられていたのか。

エツジはそれ以上言葉には出さなかったが心の中で彼女に感謝した。

※世界観・用語2の情報が更新されました。

アエスラング

エッジ達の暮らす女神のいた世界。

かつては光に満ちた空の下に、炎と水の渦巻く生物も陸地も存在しない世界だったが、イクスフェントから風、闇、地の要素が入ってきた事で陸ができ、海が生まれ、多くの生命が生まれた。

しかし、未だに根本的な世界としての属性は変わっておらず、イクスフェントに流入していった光、火、水のデープスは常にアエスラングに引き寄せられている。それを防ぐ為、六つの宝珠が各属性のデープスの流れに干渉しており、万が一宝珠が無くなると世界は元の姿に還ってしまう。

今の世界は六つの宝珠の内一つ——闇の宝珠アスネイシスを欠いた状態で、五つの宝珠が辛うじて流れをコントロールしている。それゆえ緩やかに均衡が崩れつつあり、大半の人間は気付いていないものの凶暴化した生物の増加や環境の変化などを招いている。

イクスフェント

御伽噺とされている、神の居た世界。

かつての姿は一切の物が見えない程の暗闇の中で岩の間を吹き抜ける風の音だけが存在する世界だったが、アエスラングから火、光、水が入ってきた事で今のアエスラング同様生命の溢れる世界になっている。クロウの元へと渡った闇の宝珠は元々こちらの世界にあった物。

こちらの世界もアエスラング同様に風、闇、地のデープスを引き寄せ続けている。

本来は焰螺旋えんらせんと呼ばれる二本の天高く伸びる炎の様な柱でアエスラングと繋がっていたが、その繋がりにはエッジ達の時代より遙かに前の時代に絶たれており、これが焰螺旋えんらせんの神話が風化しイクスフェントの存在と共に御伽噺となってしまった大きな要因の一つになっている。

宝珠

伝承に語られる世界の均衡を守る六つの珠。

各属性の大気中のディープスが高濃度で圧縮された塊であり、アエスラングに光・火・水の宝珠、イクスフェントに闇・地・風の宝珠が置かれる事で本来のバランスに近い配置となり、互いの世界のディープスの流れを最小限に留めている。

その為、闇の宝珠がアエスラング側に来てしまったことはそれ自体危険な状態である。

通常の深術士が百人束になっても及ばない程のディープスを操る能力を秘め、その余りに強大な力が人間に渡るのを防ぐ為「シン」と呼ばれる一族が代々人の手から守り続けている。

シンの一族

生まれた時から宝珠と世界を守る事を宿命づけられ、その為の力を与えられた一族。

装飾品等に加工した石を携帯し互いを認識しており、アエスラングのシンの一部はサーカスの一座として行動する事で集団として怪しまれずに行動している。

エッジはこの石を知らずにペンダントとして身につけており、それによってラークはエッジがシンの血を引いていると気付いた。

ラークの高い身体能力や治癒能力。↑New

リアトリスの高度な『色クロマティッククリスタルの水クリスタル晶』の使用もシンである事に由来する能力である。

『コレクトバースト』

通常の意識的な集束コレクトが最も意識を集中させやすい手を使い、その延長をイメージして大気中のディープスをコントロールするのに対して、コレクトバーストは身体全体を集束状態コレクトにする事で通常の集束と比較にならない効率でディープスを集め続ける技術。

使用時には全属性への干渉により、術者の周囲に虹色の光の粒子が見える。

使える人間の限られる高度な技術であるが、その効果は大きく

◎術の準備の時間が減る事による、詠唱時間の短縮。

◎通常時の術に、更なる量のディープスを上乗せする事による術の威力の向上。

◎既に術として変換されているディープスすら分解する事による、相手の術への防御能力。（ダメージを完全に無くせる程ではない）が、得られる。

しかしその分体力の消耗も大きく、使用出来る時間はそれほど長くない。使える深術士にとっては正しく切り札である。

『色』の水晶セキユアラークロマティッククリスタル ↑ New

リアトリスが使用する。七色の障壁。

通常よく使用される深術障壁と異なり、全属性（この場合派生を含まない六属性を指す）のディープスからなる。

特殊な結合からなるディープスの最も強固な形態であり基本的に破壊する事はできない、クロウの闇の宝珠の力を用いた攻撃すら寄せ付けない程の圧倒的な防御能力を誇る。

反面、自然には存在しない物質である為その存在は術者の集中力の乱れだけで簡単に揺らぎ、維持し続ける為に多大な体力と集中力が必要となる。

その為、実質的に防御できる時間が短く、リアトリスは状況に応じて通常の深術障壁と使い分けている。

造りだす際には通常の深術と同様に一定の詠唱時間がかかるが、壁というものの性質上急を要する事も多く、リアトリスはコレクトバーストを併用する事でよくその時間を大幅に短縮している。

しかし、この方法は通常の『色』の水晶セキユアラークロマティッククリスタルの使用以上に負担が大きく、通常の七、八倍程のペースで身体を消耗を引き起こしてしまう。

第二十五話 狂う心

海上都市——ヴィツアナ。

遠くから見るのと、実際に歩くのではやはり印象はまるで別物だった。

小さく見えていた尖塔はその根元から見上げると天に届くほど高かったし、無数の煌めきでしか無かった水晶も手で触るとその滑らかさと冷たさが私にも伝わってきた。

水路が街中に走っていて、ここが海の上にある街なんだと改めて実感させる。

建物も濃淡の違いはあるものの青く、まるで海そのものからこの街が浮上した様な不思議な感覚に陥る。

船の上ではただひたすらに気分が悪いだけだった潮風さえも、ここですら新鮮に感じられる気がした。

それでも——私はほとんど感動を感じなかった。

(……歪だ)

水路の上に架かる橋、その欄干の端に付いた装飾の水晶。

そこに映る自分の歪んだ顔を見て、ぼんやりとそんなことを思う。

いくらか後方をクリフとその仲間がつけてきている。

苦勞して捕まえた獲物を逃がすようなことはしたくないのだろう。

にも関わらず自分が街を自由に歩かされているのは、どうせクリフが自分の仲間達に何か言ったのだろうと私は一人結論を出していた。

あれでもクリフは仲間達に一目置かれている様で、それを利用して私をやたらと外に出そうとする。

この街には一時的に立ち寄っただけらしかった。

目的地はセオニア本土の様で、この散歩が終わったらまた吐き気との戦いに戻るのだろうかと思うと心は晴れなかった。

ため息を吐いて水晶の飾りから手を離し、私は宛もなく歩き始めた。

彼女はこれから何処へ行くかも、自分がどうなるのかも刺して興味が無かった。

どうせ私が居なくなつて誰も悲しまないんだからと考えて、ふと思
う。

(……エツジも悲しまないかな)

考えても意味が無い事が浮かぶ。

私はまた溜め息を吐き、周囲の事を気にも止めず歩き続けた。

「よお、元気か？・クロウ」

不意に聞き覚えのある声がすぐ横から聞こえた。

私は咄嗟に身構え、そつちを向く。

そこに立っていたのは、街の通行人の中に溶け込んでしまうような
普通の少年だった。

赤みがかつた紫の髪になんともやる気の無さそうな顔、服は案外
きつちりしているのにぐちゃぐちゃに着崩しているせいで見るもの
にルーズな印象を与える。何より丈が長すぎて彼の細身の体に合っ
ていなかった。

しかし、クロウはそのやる気の無い瞳の奥に底知れぬ狂気が宿って
いることを知っている。

「フレット、何でセブンクローバーズのアンタがこんな所にいるの？」

その質問に、フレットは笑った。

「まさか海上であれだけ派手に深術を使つといて、俺たちが気付かな
いでも思つたか？」

私は唇を噛む。

気付かれないと思つていたわけでは無かったが、ここまで早くスプ
ラウツに見つかると思つていなかった。

「シビルから聞いたぜ、この間まで弱そうなヤツと一緒にいたんだっ
て？」

エツジのことだろうか、私はフレットから目を離さないまま推測
する。

会話から一転していきなり斬りかかってくるなんて事も、こいつに
関してはあり得ない話では無かった。

後方のクリフ達が騒ぎださないかを確認しながら答える。

「そんなこと聞いて何になるの？」

にやにやと口元に笑みを浮かべながらフレットは続けた。

「そいつどうした？何で一緒に居ないんだよ。どうせ、またお前が殺したんだろ？」

一瞬、思考が停止した。

そして、それが安い挑発だと分かっているにも反射的に言い返していた。

「違う！私は殺したりなんかしてない！」

益々にやにや笑いを大きくしながらフレットは言った。

「じゃあ、また捨てられたんだろ？『気持ち悪い』って『化け物だ』って。だからお前また一人なんだろ？」

頭の中に過去の光景が蘇った。

ハクが彼女を拒絶した時のこと。

クロウを村中が拒絶した時のこと。

そして、彼女が——自らの手でハク達村のみんなを殺した時のこと。

「違う——違う違う!! エッジは……エッジは違う!!」

フレットは大声で笑った。

既に顔中が歪むくらい笑って、その身を揺らしていた。

「まあ、どうでも良いんだけどな。どんな理由であれ、お前は一人、ずっとずっと独りぼっちなんだからよ！」

(違う。)

違う違う違う！)

「っ、ああああああ!!」

周りの道に亀裂が入った。

次いで、私を中心に制御も出来ない量の闇のデイクスが飛び出した。

槍、刃、刺……それらはでたらめな形になりながら飛んでいく。

近くにあった小さな建物に線が走り、そこから綺麗に切れて倒れた。私がちちんと認識できたのはそこまで。

建物の崩れる鈍い音、水晶や硝子が割れる鋭い音、そして何かが落下した水音があちこちから聞こえた。

悲鳴が聞こえる。走り回る靴音も。

それら全ての音は、私にはひどく遠かった。

「お前が抜けてから張り合い無かつたんだぜ？どいつもこいつも弱くてさ……けどお前が抜けて良いこともあった」

パニックになった街の中で、当たり前の様に喋っているフレットの姿は奇妙だった。

走って逃げていく人々を背に、彼はゆっくり歩を進める。

フレットが両腕を振ると、両方の服の袖から長い金属性の『爪』――『爪雷』の二つ名の由縁でもある爪の様な刃が飛び出した。

「こうしてお前と戦えるからな」

私は激情に任せて自分の前方に槍を作り出し、フレットに向かって飛ばした。

フレットは体を捻りながらそれを躲し、同時に捻る力使って刃を振るった。

「雷旋牙アー！」

エッジの魔神剣とは比較にならない三本の電気を帯びた衝撃破が、真直ぐ向かってきた。

足元から三つの闇の刃を上昇させ、私はその攻撃を防ぐ。

迎撃が済むと私はすぐさまフレットの立っている足元の歩道にデーパースを集束した。

「ブラッディハウリング!!」

黒い狼の群れが這い出し、フレットの立っていた所を中心に歩道の石が弾け飛ぶ。

足元に集まるデーパーズに反応していたフレットは、横に転がる程の勢いで跳ぶことで発動を避けていた。

「認めるよ、どうせ俺もお前も人間扱いなんかされない」
地を蹴り、フレットはこちらに接近してくる。

距離が詰まるのは自分に不利だった。

(だけど、その分だけ回避が難しくなるのはお互い同じ)

「イレイズブリリアンス!!」

無数の闇が私の前で『点』になった。

空間の中に、絵に落ちた染みの様なものが散らばる。

その一つ一つから細い線が走った。

数百、数千の線がフレットに向けて一直線に伸び、貫こうとする。フレットは慣性を殺そうともせず、その最中へ突っ込んできた。

「お前が生まれながらの『化け物』なら、俺はスプラウツが『兵器』として育てた最高の戦士だからな」

フレットは電気を帯びた刃を振るい、自分の正面の術を相殺する。残りの線がフレットを貫くと確信した瞬間、フレットの周囲の空間が揺れ七色の光が発生した。

(コレクトバースト!?)

周囲のデイープスを無差別に集束するコレクトバーストは、例えばそれが術に変換された状態のものでもある程度分解できる。

フレットはそれを利用して、彼の周囲の線を元のデイープスに分解した。

相殺しきれなかった線がフレットの肩や足を貫く。

それでも表情を変えず、平然と私に肉薄する。

背筋を寒気が走った。

「どうせ変えられないなら、楽しんだ方が得だぜ? クロウ」

目の前でフレットが、スパークの見える鉤爪を振りかぶる。

私は咄嗟にコレクトバーストの補助まで使って、可能な限りの閻属性のデイープスを集束し強引に圧縮した。

「デュアル・インディグネーション」

「っ、ビッグバン・デトネーション!!」

フレットが振り下ろした一撃と、私の強引な圧縮が引き起こした術の爆発がぶつかった。

閃光が走り、私の体が軽々と吹き飛ぶ。

瞬く間に目に映る景色が飛んで青い線になり、今度は急停止。

その後になってようやく全身の痛みと、爆音が届いた。

あまりの激痛に体を動かすことが出来ず、私は叩き付けられた仰向けの体勢のまま歩道に横たわっている事しか出来なかった。

しばらくすると、見る影もなく荒れ果てたこの区画の騒めきが聞こ

えてきた。

あちこちで誰かが誰かを呼ぶ声がした。

見つかって安堵する声、見つからず探し続ける声。

どの声も心から心配して探していた。

しかし、その中に自分を探す声は無い。

私が探したい声もない。

あるわけがなかった。

(私……は、私には……)

フレットの言う通りだった。

私は一人なんだ。

ずっと、ずっと。

死ぬまで。

だったら、いつそのまま死んだ方が楽なのに……。

そんな考えを何度も頭の中で反芻しながら、私は意識を手放した。

第二十六話 少年の剣と王の剣

「ようやく着いたね。海上都市ヴィツアナ」

何とか船旅を終え、エツジ達はセオニアへの入り口——海上都市ヴィツアナに到着した。

この大都市が初めてだというリアトリスは欄干から身を乗り出している。

「すごい！街全体が一つの彫刻みたい！」

確かにリアトリスの言う通りで港に始まり、街路、橋、水路、民家の一つ一つに至るまで全てがデザインに組み込まれているかのようで、陽光に煌めく街は海からせり上がった一つの氷山の様だった。

水晶自体が希少であり目にする機会はなく、こうして街のあらゆる場所にそれが使われているのを見ると正しく別世界のようなだった。

その光景に一度は来たことがあるというアキも——ラークでさえも見入っていた。

船を降りる時、船長は感謝と称賛のことはを並べながら約束どおりガルドを返してくれ、ラークが笑顔でそれを受け取る。

セオニアへの航路の中継地であるこの街にクリフ達が立ち寄った可能性は高かった。

そこまでは良い、がここで手がかりを得られなければこの先もう追いつけるチャンスはほとんど無い。

「よし、じゃあ別れて探そう。どんな形でも良いから何か手がかりになるものを」

エツジはリアトリス達にそう言うと、すぐに間近の道へと駆け出す。

「あ、エツジ！——大丈夫かな？クロウが心配なのも分かるけど、自分が追われてる身だつて事忘れないと良いけど……」

残されたリアトリスは不安な顔でエツジの去った道に目を凝らす。それとは対照的に落ち着き払ってラークは笑った。

「エツジのことなら心配いらないよ、彼はちゃんと役目を果たしてくれるさ。僕らは僕らのやるべき事をやろう」

「うん」

そう言われても、リアトリスはまだ少し不安そうだった。

（何処にいけばいいんだ？）

次第に苦しくなる息に抗って走りながら、エツジはそう自問していた。

きよろきよろと左右を見渡しながら彼は路地から路地へと駆け回り、クロウの影が見当たらないかと探す。

しかし、それで見つかるわけもなく途方に暮れそうになったエツジは近くにいた女性を呼び止めた。

「この辺りで紫色の髪、俺と同じくらいの歳の女の子を見ませんでしたか？」

買い物帰りだろうか竹で編んだ籠を提げたその相手はエツジの勢いに驚き、それから不審げに尋ねてきた少年を見た。

「あんたもあいつらの仲間なのかい？」

「あいつら……心当たりがあるんですか？」

エツジは手がかりが見つかったかもしれないと逸る^{はや}気持ちを抑えて聞いた。

「つい何日か前に街の真ん中で深術を爆発させた奴らがいたんだよ。それをやったのがあんたの言ってるような子供達だった気がするよ、最近はあるな子供まで深術なんてものが使える世の中になっちゃまったのかねえ」

エツジは急いでその場所を聞き出し、まだ何かぶつぶつと小言を言っている女性を後目に走りだした。

走りながら彼の頭の中では嫌な想像が次々とよぎっていた。

（『子供達が深術を街中で爆発させた。』その一人がクロウだとしたら、クロウはスプラウツと戦闘になったんだ！それもそんな大きな被害が出る程強い相手か、複数の相手と）

今更ながら人数などをもっと正確に聞いておくべきだったとエツジは思ったが、もう遅かった。

いずれにしろ、現場の近くならもっと多くのことが分かるだろうと

思いなおして彼はその事件の現場へ急ぐ。

更に数回道を聞き、走り続けると不意にエツジは開けた場所へ辿り着いた。

左右にあつた壁が無くなり、視界が一気に広くなる。

エツジは一瞬、言葉を無くして立ち止まった。

「何だ……これ」

爆発があつたというのは聞いて、エツジはある程度の周囲の被害は想像していた。

だが、その光景は想像の上をいつていた。

視界が開けたのはそこが広場だったからではなく、周囲の建物が礎だけを残して無くなっていったからだだった。

建物があつたところには瓦礫が散乱し、中にはバターをナイフで切つたかの様な奇妙な断面を晒しているものもある。

そして、何より歩道を中心に大きな窪みがあつた。

割り貫いたかの様なそれは滑らかで瓦礫一つない。

その異様さからエツジは爆発の中心はここで、周囲の建物はその煽りを受けて破壊されたに過ぎない事を悟った。

これが戦闘の跡なら、クロウは本当に無事なのだろうかとエツジは不安になる。

（いや、そもそもこれが人間同士の戦いの跡なのか……？）

彼はしばし呆然としていたが、背後からの騒がしい甲冑の音で我に返った。

「そこのお前、少し話があるのだが」

エツジが振り返ると、目の前に青銅色の鎧に身を包んだアクシズワンドの騎士二人の姿があつた。

彼の顔を確認するなり二人の騎士の表情が変わり、剣に手を伸ばす。

咄嗟にエツジは雷のディープスを手の中で集束し、二人の顔の前で解放した。

バチツという放電音と共に光が炸裂し、騎士達はよろめく。

エツジはその隙を突いて二人を突き飛ばし、さつき来た道を逆に駆

けた。

どこかで悲鳴があがり、そこから連鎖するように周囲が騒がしくなる。

(騎士に見つかった。このままラーク達と合流したらみんなまで危ない)

しかし、だからといってエッジは隠れてやり過ごせるとも思えなかった。

そもそもここは海上都市、船さえ用意できていない現状ではこの街から出ることもすら出来ない。

(どうすれば……)

エッジが決め兼ねていると、目の前の路地から騎士が数人現れて道を遮った。

(迷っている暇は無い、か)

彼は背負った鞆から剣を抜いた。と、同時に頬に冷たい何かが触れる。

雨が降ってきた様だった。

同じ頃、ヴィツアナの宿の一室で部下からの報告を聞き、宿を出ようとするアクシズⅡワンド王国の騎士アズライト団長とリヨウカの姿があった。

「見つかったのは一人だけと言ったわね、他に仲間は居ないのかしら」

問い掛けたリヨウカに、アズライトは微かに首を横に振る。

「分からない、合流したならまとめて捕まえれば良い。そうでないならエッジを捕まえて聞き出す。君は本当にエッジがジェイン・アキの行方を知っていると思うのか?」

聞き返され、今度はリヨウカが首を横に振る。

「さあ、何となくよ。それに、気になる事が少しあつてね」

アズライトは訝る様な眼差しをリヨウカに向けたが、相手がそれ以上自ら口を開く気配が無かったので諦めて兜を着け、外に向かう。

宿の外に出ると水滴がアズライトの鎧を打つ音が通りに加わった。

リヨウカがそれに続くと普段身に纏っている衣がひとりでに動き、

リョウカを雨から守った。

どこからどう見ても普通の布であるにも関わらず、不思議とそれが水を吸う事は無かった。

「……便利なものだな」

「形が定まらない布は、斬ったり突いたりしか出来ない剣よりずっと色々な場面で役に立つものよ」

リョウカの皮肉に軽く溜め息をついてから、アズライトは改めて気を引き締め歩きだした。

エツジは少しずつ疲れていた。

途中で遭遇した騎士達と何度か戦闘になり、それをあしらっている内に彼は道が分からなくなっていた。

既に剣を鞘に納める余裕もなく、血の付いた剣を持って走る彼を見ると街の住民達は慌てて逃げた。

雨足も少しづつ強くなっており、濡れた体はどんどんエツジから体力を奪っていった。

一步一步が重くなる、それでも彼は移動し続けなければならなかった。

一ヶ所に留まっていたらすぐに捕まってしまう。

エツジはまた追い付かれないように速度を上げて走り始めた。

しかし、雨で人通りも減り離れていく人間ばかりだったせいで、彼は目の前の人影に気付かずにつつかってしまう。

エツジはすぐに悲鳴が上がるだろうと覚悟した。

が、ぶつかった相手が発した言葉は、悲鳴でも怒号でも無かった。

「エツジ?」

彼はその声で初めて相手の顔を確認した。

「リア……?」

エツジがぶつかった相手はリアトリスだった。

彼女は突然現れた仲間の様子に呆然としている。

エツジがその隣を見ると、アキとラークも一緒だった。

「ごめん、騎士団に見つかった」

意図せずとはいえ、ラーク達と一緒になくなってしまったものはしょうがなかった。

エツジは素直に今の状況を告白した。

「そうみたいだね」

彼の言葉を聞いて気付いたのか、さつきから気付いていたのかは分からないが、ラークは剣を抜いて近くの路地に向かって斬撃を飛ばした。

直後、その路地からタイミングを合わせたかの様に騎士が飛び出し、突然の攻撃に反応することも出来ないうちに倒れた。

「音で大体位置は分かる。けど、これはちよつとまずいかな」

一人は倒したものの、今度は別の道から大勢の騎士が迫ってくるのが四人の目に見えた。

更に、周囲の路地からも騎士が合流してこつちを目指している。

「囲まれてるからね」

そう言いながらもラークは表情を崩さない。

しかし、それを聞いたリアとアキは焦りを隠せなかった。

「そんな、このままじゃみんな捕まっちゃう！」

「一か八か戦いますか？」

アキの問いにラークは首を横に振った。

「いや、リア達は手を出さなくていい。ここは僕とエツジで何とかするから、リア達はフードで顔を隠していてね」

元はと言えば自分のせいであるエツジは反対しなかったが、その提案にアキは反対した。

「でも、この人数を相手に二人だけで戦うなんて危険すぎます！」

それに対して、ラークは微笑んで言った。

「君こそ、ここで騎士達を相手に戦ったりしたら帰る家がなくなるよ」

「でも……」

まだ、納得できない様子のアキを無視して、ラークはエツジに言った。

「エツジ、僕が二人を守るからそつち側で暴れてくれるかな？」

頷き、エツジは迫ってくる騎士達の方へ向き直った。

「駆け抜ける疾風——」

風のデュープスを今出来る限界の量まで集束すると、エッジはそれを真直ぐに放った。

「エアブレイド！」

通りの中心を風の弾が走り先頭を走っていた騎士達を吹き飛ばすが、後続の者達はわずかに後退するだけで終わった。

「轟雷装！」

術で一時的に相手が怯んでいる間に、エッジは剣に雷のデュープスを纏わせて敵の群れの中に飛び込んだ。

「雷神剣！」

前方に居た騎士の一人に彼は突きを放つ。

その騎士は受けとめるが、剣と剣が触れると同時に雷の追撃が落ち相手はふらつく。

エッジは即座に間合いを詰め、『気』を込めて思い切り剣を叩きつけた。

「獅子、戦吼！」

青い獅子の『気』が噴出し剣を叩き付けた勢いそのままに騎士が後ろに吹き飛び、他の騎士を巻き込んで倒れる。

ラクとの修行で身に着けた技だった。

それで前方の騎士は一時的に足止めできた。

だが、更に周囲から騎士がエッジに向けて殺到する。

(もう一回……)

エッジは『気』と雷のデュープスを剣に集めると、地面を蹴って飛び上がった。

轟雷装は一時的に雷属性のデュープスを剣に集め続ける事で、短時間でのD・RC変化を可能にする技だった。

エッジの剣が紫に輝く。

——D・RC変化——

「獅吼爆雷陣ッ！」

落下の重さに乗せてエッジは石畳に剣を叩きつけた。

その一点から『気』と雷のデュープスが膨れ上がり、彼の周囲に向

けて噴出する。

あと一步の所まで近付いてきていた者達は空中に舞い上げられ、落下地点にいた騎士も巻き込んで通りに伸びて動かなくなった。

エッジは荒くなつた息を整え、次に向かつてくるものを確認する。

だが、今の一撃で警戒したのか彼の剣の届く範囲に近付いてくるものは無かつた。

反対側のラークの方をちらりと見ると、そちらでも同じ様に騎士達は手を出せずにいる様だつた。

静寂と緊張感が辺りを包み、騎士達の甲冑に当たる雨音と無数の息遣いが妙に近く感じられた。

「下がれ」

不意に若い男の声が静寂を破り、騎士達の人垣が割れて一人の騎士が進み出た。

その騎士は一人だけ意匠の異なる鎧と兜を身につけており、雰囲気からも格の違いが伺えた。

だが、それだけではなくエッジは何か嫌な感覚が背筋を走るのを感じた。

「誰だ?」

現れた騎士は兜に手を掛け、それを外した。

兜の間から、エッジと同じ色の暗いオレンジの長髪が零れる。

隠れていた端正な青年の顔が顔わになった。

「兄の顔を忘れたか、エッジ?」

第二十七話 ラーク・テンネシア

雨が強くエッジの顔を叩きつける。

その冷たい感覚が妙に鮮明で、彼は目の前の現実が逆にぼんやりと遠退いている様な気がした。

(兄……?)

その兄名乗った騎士は視線をラークの方に移し、驚きながら言った。

「そこにいるのは、ラーク・テンネシアか？」

ラークの方も気付いたらしく、面白いものを見つけたとでもいう様に相手に微笑む。

「久しぶりだね、ブレイド。それともアズライト団長って呼んだほうが良いかな？」

何処か楽しそうなラークとは対照的に、団長——ブレイドの表情は険しかった。

周りの騎士達は二人の関係性が窺えず、手を出せずに行った。

「なぜお前まで……いや、それより本当にお前はラーク・テンネシアなのか」

二人が何を話しているのエッジには分からなかった。

分かるのはただ、彼に兄がいた覚えなんか無いということだけだった。

「嘘だ」

エッジの口から漏れた言葉で、不意に会話が止み周りが緊張するのが分かる。

目の前のエッジと同じ髪の騎士が、彼の様子を心配する様に声をかけてくる。

「……エッジ？」

しかし、膨れ上がったエッジのやり場の無い憤りは止まらなかった。

「俺に、俺に兄なんて居ない!!」

エッジはほとんど考えずに、目の前の『兄』に剣を向けていた。

「嘘を吐くなああああああ!!」

彼が思い切り振り下ろした剣は真直ぐにブレイドの兜に向かった。目の前で雷のデュープスの光が弾け、剣から激しい火花が散った。ほんの一瞬、彼の視界が白く染まる。

その光が消えると、エツジの一撃を受け止めた『兄』の顔が目の前にあった。

それは憐れみと静かな怒りを宿した瞳で、エツジの心の中に正面から踏み込んできた。

「罪人になっただけではなく、兄弟の絆さえ捨てたのか！エツジ！」

エツジはその言葉に迷った。

迷ってしまった自分をみつけてしまった。

(俺は……)

エツジはこの男を知っている。

だけど、それを認めるということは――

「つああああああああ!!」

エツジはほとんど意識もせずに頭を押さえて剣を払った。

切っ先も定めず放ったそれは簡単に弾かれ、剣はエツジの手を離れて道に落ちた。

剣が手を離れるとすぐに、背中から強い衝撃が走り剣の持ち主である彼自身も冷たい道に叩きつけられる。

エツジの膝や顔、あちこちを石畳に打ち付けられ、熱を持って痛みます。

しかし、それより彼は頭が痛かった。

外からの痛みでは無く、エツジの頭は内側から直接痛む。

(それに息が苦しい、息が出来ない)

「ラーク？待って！まだエツジが――」

リアトリスが叫んでいるのが僅かにエツジに聞こえ、すぐに風の音に掻き消される。

続いて周りの騎士達が慌ただしく駆けていく音。

それから、急に静かになった。

ラーク達の声も、戦いの音もしない。

そしてエツジは取り残された事を悟った。

雨の音が、水の音がだんだんと彼の意識に侵食してくる。

芯まですぶ濡れになったエツジの体はひどく冷たかった。

相変わらず彼の頭痛は止まらない。

そして何より息が、まるで水の中にいるかのように、エツジが息を吸っても楽にならない。

彼の頭の片隅に何か嫌な予感——漠然とした恐怖が芽生える。

それに抗う間もなくエツジはその嫌な感覚の中に落ちていった。

エツジが騎士の一人の手によって昏倒させられたのを確認した直後、ラークと戦っていた騎士達が次々に吹き飛ばされた。

すぐに目の前の弟からそちらに目を向けたブレイドは、残りの三人に逃げられると悟る。

ラークはフードを被った二人の仲間を両脇に抱えるようにして走りだすと、壁を蹴って屋根の上上がり、あっという間に見えなくなってしまうた。

(ラーク・テンネシア、相変わらず人間とは思えない動きだな。本当に何も変わっていないのか)

ブレイドは今、目の前で起きたことが信じられなかった。

だが彼には立ち尽くしている時間は無く、団長としてやらなければならぬことがあった。

内心の動揺はおくびにも出さず、ポカンと口を空けている兵士達にすぐ指示を出す。

「後を追うな。すぐに全ての港を封鎖するんだ」

それも間に合わないかもしれないが、彼は今は良しとすることにした。

一番の目的は果たせたのだから。

王城襲撃の容疑者で、たった一人の弟を見つけるといふ目的を。

ブレイドは石畳に横たわる弟の苦しそうな顔に視線を移すと、心配と後悔が入り交じった表情を微かに浮かべた。

「うつ……ラーク！何する気？」

ラークは街の建物の上から港に停泊していた小船を見つけると、見張りの男を蹴り倒し、抱えていたアキとリアトリスを船に下ろす。

ラークの腕から解放されるとすぐにリアトリスは抗議の声をあげた。

が、それを意に介さずラークは船を出す用意を始める。

「逃げるんだよ、この街から。今を逃したら僕達は完全にこの街の中に閉じ込められるからね」

そう言いながら素早く係留用の綱を切るラークを、二人は信じられない思いで見つめた。

「でも、エッジさんは？」

その問いかけに、ラークはいつもの調子で平然と答えた。

「置いていく」

「え」

その何の躊躇いもない答えにアキは呆然とした。

「置いていくって……本気なの!?ラーク！」

アキとは反対にリアトリスはラークに食って掛かった。

「騎士団の目的はあくまで王城襲撃犯のエッジとクロウの筈。その一人を捕まえた以上関係もわからない僕らを無理に追って来たりはしない、少なくともあの団長はね。だから今はエッジの心配をするより逃げるべきだよ」

そう言っただけ微笑むラークに、リアトリスは声を震わせながら言った。

「……最初からそのつもりだったの？クロウを探す時間を稼ぐ為にエッジを囮に使うつもりだったの!？」

段々と声を荒らげるリアトリスを前にしても、ラークは表情を変えない。

「飽くまで保険のつもりだったけどね。ブレイドが来ていなければここまで上手くもいかなかっただろうし」

リアトリスは遂にラークの襟元を締め上げ、船の甲板にラークを叩き付けた。

「エッジは、クロウを助ける為だけにここまで必死でやって来たんだよ！それを分かかって、ラークは何でこんなつ……こんなエッジを道具に使うような事ができるの!？」

自分を押さえ付けている腕を振り払うと、ようやく微笑みを消してラークは言った。

「リア、僕達の役目はこの世界を存続させることだ。僕達はその為に命を与えられた存在なんだよ。役目を全うする為なら、行いの善悪なんて関係ない」

静かな、しかし断固たる意思を持った声にリアトリスはたじろいだ。が、納得はできない様子だった。

そんなリアトリスにラークは更に続ける。

「エッジが例えシンの責務を知らずに育ってきたとしても、これは彼が生まれたときから決まっている使命なんだよ」

リアトリスは答えなかった。

「君もエッジも感情的すぎる。その感情はいずれ君達自信を押し潰すよ。僕達はアスネイシスを守らなきゃいけない、それを忘れないことだね」

黙々と船を動かす準備を再開するラークに二人はそれ以上何も言えず、三人の間にしばし奇妙な沈黙が流れる。

ラークが岸を蹴り、瞬く間に海上都市が離れていく時になってようやくリアトリスが口を開いた。

「感情が邪魔だつて言うなら……エッジはクロウに会わなければ良かったって……あの二人は心を通わせなければ良かったって」

今度だけはラークは答えなかった。

第二十八話 目を覚ました現実

世界が揺れている。

もう何度目かも分からないその感覚で私は意識を取り戻した。

「……」

どうやらまた船の中のいつもの部屋に寝かされているらしい。

爆発でボロボロになった体には、クリフの仲間がしたのか最低限の治療が施されていた。

服の方はひどい有り様だったが。

こうしてまた無事に船に乗っているという事は、フレットも爆発で動けなくなったのだろうかと疑問に思う。

(違う……あの時、咄嗟の反応が遅れた私の方がダメージが大きかった。きつとあいつはこれ以上私と戦えないから何もしないで帰ったんだ)

仲間よりも、相手の生死よりも、自分が楽しいことが大事。

フレットはそういう奴だった。

試しに体を起こそうとすると背筋を貫くような痛みが走り、私はベッドから起き上がるのを諦めた。

改めてベッドに体を預けると船酔いと体の痛みの両方が彼女を襲ってきた。

だがその現実の痛みより、私の心は他の痛みでいっぱいだった。

「お前は一人、ずっとずっと独りぼっちなんだからよ」

意識を失う前、フレットがいった言葉。

(私は……、一人なんだ)

何だかずっと見ていた温かい夢から覚めたようだった。

私はたくさんの人達を殺した。

初めは、私に手を出そうとする相手をラーヴアンが止める間もなく殺してしまっただけだった。

けれど、それは初めだけ。

スプラウツで過ごす内に、私はラーヴアンを制御することを知り、自分の一部であることを自覚するようになり、それからは自分の手で

ラーヴァンの力を使ってきたんだ。

今の私はもうスプラウツの道具としてしか生きられない。

私は、みんなとは違いすぎるんだ。

ハク、ルオン、レイン。

自分を人として認めてくれる人達は皆いなくなる。

見ず知らずでありながら妹の様に懐いていたハクは、私の正体を知って拒絶し、ラーヴァンが殺した。

無口でも優しくかったルオンは、レインの死に直面して心を失った。

スプラウツで共に育ったレインは、私の一番優しくかった友達は、彼女の力を利用したフレットの術で殺された。

きつと、自分に何の力も無かったらハクも、レインも死なずに済んだ筈だった。

私は他の人と一緒にいてはいけない。

私はみんなと同じじゃない獣なんだから。

今度だって今までと同じ。

エツジと私は元々一緒に居られなかった。

私はずっと一人だったんだから、元に戻るだけ。

それだけのこと。

ただそれだけ。

(でも……どうせなら、もう一回サーカスを二人で見たかったな)

最後にエツジと居た時の事を思い出す。

私がサーカスを見ようと誘ったのに、エツジは急いで何処かへ行ってしまったんだった。

実はあれでお別れだったのに、私の誘いを無視するなんて最後まで本当に――

何かが頬を流れていった。

(涙……?)

一度、気付いてしまうともう止めようも無いくらいそれは後から後から溢れてきた。

(悲しいわけない、今までだって平気だった。今度だって同じはず。だって私は……人間じゃない、人間じゃないんだから)

しかし、いくら否定しても流れる涙は止まらなかった。
こんなことなら、エツジとなんて会わなければよかった。
最初から出会わなければこんな気持ちになんてならなかった。
最初から出会わなければ……また会いたくなることも無かった

「……エツジ」

小さく呟いた名前は誰にも届くこと無く、ただ私の胸を強く締め付けた。

「エツジ、それじゃあ。母さんをよろしく頼むぞ」

どこか聞き覚えのある声のエツジに聞こえた。

目の前に彼と同じオレンジ色の髪の少年と、くすんだ茶色の髪の男が大きな荷物を背負って立っていた。

少年の方はまだ幼さが残る顔で今のエツジより三、四歳下に見えた。

隣の男は三十代程だろうか。

何故かひどく疲れた顔をしていて、これから旅に出るにも関わらず既に心配事があるかの様だった。

おそらく親子であろう目の前の二人はトレンツの村の外れ——村から出ていく者皆が通る場所——に立っていた。

今まさにここを離れようとしているのに、彼らの目は村の光景を焼き付けるように見つめ続けていた。

それが誰か分からないのに何故だかエツジはその光景に見覚えがある気がした。

二人はとても長い間そうしていたがやがて諦めたように父親らしき男の方が向きを変え、慰めるように少年の肩を抱いて村を去って行った。

エツジはいつまでもその後ろ姿を見ていた。

(あれは……誰だ?)

思い出せない……いや、違う。少年の方は分かる……あれは、さっきの——)

「――！」
混乱して意味をなさない声をあげそうになるのを何とか飲み込んで、エツジは飛び起きた。

どうやら彼は宿の一室に寝かされていたらしかった。

雨の中を戦いながら走り続け、ずぶ濡れになっていた体を更に石畳に叩き付けられたせいも、エツジの体は重くあちこち痛んだ。

しかし、武器こそ取り上げられているものの彼は拘束もされず部屋の中にも誰もいない。

まだ、エツジは体の芯からずぶ濡れの様な寒気はしたものの雨は拭き取られており、濡れた服も着替えさせられていた。

部屋の隅で暖炉の火が暖かく揺れており、さつきまで彼が着ていたジャケツトやズボンもそこに干されていた。

（俺は犯罪者として捕まったんじゃないのか？）

普通、騎士団に捕まった人間というのはこんなに扱いが良いものなのだろうか？ エツジは首を傾げる。

彼がそんな事を思っていると、部屋の外から声が聞こえてきた。誰かが話しながらこの部屋に近付いてきている様だった。

「――どういふ事？ さつき捕まえた奴と一緒にシントリアに帰るって――！」

一人は女性で何か興奮している様子だった。

エツジはどこか聞き覚えのある声のような気もしたが、早口でよく分からない。

そして、それに答えたもう一人は、先程エツジの兄を名乗った騎士だった。

「そうだ、エツジ・アラゴニートはシントリアに移送する。どの道セオニアまですぐに追うことは出来ない……貴女だって分かっているはずだ、条件を破りここから国境を越えれば国際問題になる」

「でも、ジェイン・アキはその国境を越えてセオニアに逃げたのよ！ あなた達の追っている王城の襲撃犯達と一緒に――！」

騎士のため息が聞こえ、短い間があった。

「ジェイン・アキが彼らと一緒にだった確証は無い。貴女がジェイン家

の人間を快く思っていないのは知っているが、それだけでは我々も動くことは出来ない……ともかく話はこれで終わりです」

揉めている様だったが会話はそこで終わり、扉が開いた。

部屋に入ってくるブレイドの後ろに一瞬この部屋の見張りの騎士がエッジには見えたが、ブレイドと入れ替わるように彼は部屋の前から去っていった。

ブレイドは鎧こそまだ着けていたが、今度は兜を初めから被っておらずエッジと同じ色の長髪も顔もはつきり見える。

改めて近くで見ると、エッジは確かに自分が数年たったらこんな顔になるのだろうかという気もする。

しかし彼よりブレイドは鼻が高く、ずっと端正な顔立ちをしていた。

雨の中で対峙した時と表情にさしたる変化は無かったが、エッジは今しがたの夢のせいかな険しい表情の中にもどこか暖かいものが感じられる様な気がした。

「ブレイド……」

呼び掛けると言うより、気を失う前までの記憶を確かめる様に、エッジは相手の名前を口にする。

「思い出したか？俺の事を」

自分の名前を呼んだ事から弟が落ち着いたと判断したのか、ブレイドも幾分穏やかに答える。

「思い出した、のかな」

『ブレイド』という響きにエッジは懐かしさは感じるが、さつき見た夢の姿以外彼に兄がいたという記憶は無かった。

正直な話、突然現れたとしか思えないのが本音だった。

(そういえばリアトリスと初めて会った時も、彼女は俺を知っていたのに俺は覚えてなかった。あの時はてつきり、小さい頃に会ったせいだと思ってたけど)

——もしかして、自分には何か忘れている事があるのだろうか。

エッジはその可能性に思い当たる。

彼が床に視線を落として答えないでいると、温かい湯気が漂ってきて

た。

エッジが顔を上げて見てみるとブレイドが温熱筒（中にティーパースを引き付けやすい鉋物が入っており、深術が苦手な者でもお湯を沸かせる。保温には向かない）を使ってお茶を淹れていた。

「落ち着けば、何か変わるかもしれない」

それだけ言ってエッジの前にあるテーブルに紅い液体の入ったカップを置くと、ブレイドは黙ってその反対側の椅子に座ってしまった。

弟にお茶をすすめるでも無く自分の分のカップに手をつけようともしない。

エッジにも気遣ってくれているのは分かるが、何処かぎこちなかった。

恐らく、ブレイドも自分に対してどう接して良いのか分からないのだろうとエッジは思う。

（再会していきなり弟に『兄なんていない』って、言われれば無理もないか）

まだ納得はいつていなかったものの、仮に目の前の男が兄だとして考えるとエッジは少し申し訳なく思う。

「エッジ、母さんの事は覚えているか？」

突然の質問に少々面食らったが、エッジは答える。

「え？まあ、少しだけ。一緒に暮らしてる時には幸せだった気がするけど、俺がはつきり覚えている頃にはもう……」

テーブルを挟んだ相手の顔が少し険しくなる。

「では、母さんが死んだときの事は？」

エッジはますます戸惑った。

覚えてもない事をなぜ根掘り葉掘り聞こうとするのだろうか。

「覚えてないよ、だってそれは俺がずっと小さかった時の事だろう？」

沈黙が流れた。

そして、ブレイドは最後にもうひとつだけ尋ねた。

「じゃあ、そのペンダントはどうしたんだ？」

エッジは息が止まりそうになった。

何故かそれは聞かれたくない事——思い出したくない事だった。無意識にエツジは首から下げているペンダントを強く握りしめる。

「これは……」

弟の様子が変わったのを見て、ブレイドは何かを納得した様だった。

「エツジ、母さんが死んだのは確かにお前が小さかった時だ。けれど、お前が小さかったから忘れたんじゃない」

その続きは聞きたくなかったのに、今のエツジには耳を塞ぐ気力も無かった。

「お前の目の前で母さんは死んだ。そのショックでお前は塞ぎ込んで記憶を閉ざしてしまったんだ。あの時は一時的なものかとも思っていたが……未だに記憶が戻っていないなかった様だな」

自分にも責任があると思っっているかの様に、ブレイドの声には辛そうな響きがあった。

突然の話に呆然としながら、エツジはどこか他人事の様時に時折あった違和感の理由に納得していた。

「俺達がシントリアに越していった後で無ければ、お前にあそこまで辛い思いをさせる事は無かっただろう。母さんが死んだ後ですぐにトレンツに行ったが、お前は荒れて部屋からも出てこなくて会えなかった。それから、ボブさん達から時折手紙で様子を聞いてはいたが俺が騎士になってから今まで会うことも出来ていなかったから……俺のことが分からなくても無理はない」

再び沈黙が流れた。

エツジはまだ実感が湧かず、それがつまらない義務か何かの様に今聞いた事無感情に整理していた。

ブレイドは弟が怒るのを恐れているのか、あるいはまだ何か思い悩んでいるのか押し黙っている。

エツジにはブレイドを責めるつもりなど全く無かったが、今すぐそれを言葉にするには考えなければならぬ事が多すぎた。

気が付くと遠くの雨音が聞こえるようになっていた。

さつきからずっと鳴っていた筈なのに、今になって初めてそれは

エッジの耳に届いた。

目の前で冷めた紅茶の湯気がゆっくりと消えていくのを、エッジはただ黙って見つめた。

第二十九話 その剣は誰が為に

どれだけ二人で黙っていただろう。

気まずさもあつてエツジが長く感じたのかもしれないし、意外に短い時間だったのかもしれない。

「ところで、お前が行動を共にしていた少女のことだが」

本題に入る様に、先程までの優しい声から少し厳しい声になって兄が話します。

エツジは思わずクロウの名を口にしかけたが、黙って続きを待った。

「まだ何者かはつきりしていない。けれど、あの年齢であれだけの術が使えるのは幼い頃から戦いの術を教え込まれたきた子供としか考えられない。恐らくは孤児か、親から離されて育てられたのだろう」
エツジに対し探るような目をブレイドが向けてきたが、彼は何も表情にすら出ずまいと目を合わせないようにした。

「ここから先は完全な推測だが。エツジ、お前はあの少女のそんな境遇に自分を重ねたのではないか？」

「……」

思いもしなかった言葉だったが、しかしエツジには返す言葉もなかった。

「エツジ、お前は本当に彼女の仲間か？今のままならお前は下手をすれば死罪になる」

死罪。

それはとても重い響きとなって、エツジの耳にまわりついた。

既に捕まってしまった以上、この先エツジの運命は他人の手の中にある。

判決が下れば、それを受け入れるしかない。

彼の頭の中が一気に真っ白になる。

「だが、もしお前が彼女に利用されただけならあるいは罪が軽くなる余地はあるかもしれない。それにまだ小さかったお前を一人、村に残した俺にも責任がある。無論、厳しい戦いになるだろうが、お前の命

「ただなら助けてやれるかもしれない」

エツジは思わず疑う様にブレイドの顔を見つめる。

その目は本気だった。

まだエツジはブレイドを兄だと思いう事は出来なかったが、こんな絶望的な状況でも自分の味方をしようとしてしてくれているのは嬉しかった。

「もう一度聞く、お前はこの国に悪意を持って王城に現れたのか？」

エツジはその質問に迷った。

もちろん、国王を暗殺しよう等考えてもいなかった。

けれど、ここでもし無実だと言えば罪をクロウに着せて逃げるようなもの。

エツジは完全に否定する事が出来なかった。

「違う……違うけど、彼女は俺の友達だ」

その答えにブレイドは顔をしかめた。

「エツジ、これはそんな感情的な事を言って解決する問題ではない。この街の破壊の跡を見なかったのか？彼女は野放しにするには危険過ぎる存在だ、お前が庇おうと庇うまいと既に彼女には捕まる以外の道は残っていない。たとえ彼女の境遇が同情すべきものだとしても、放置すれば傷付くのは罪のない善良な人々になる。単なる同情で深入りすればお前自身も全てを失う事になるんだぞ」

エツジはその言葉を聞きながら今までの事を振り返る。

初めてクロウと出会った時から彼が今まで時折感じていた気持ち。

彼女の目の奥に孤独を感じた時の胸が強く締め付けられる様な感覚と、絶対に彼女を一人にしてはいけないという義務感にも似た感情。

それは、つまりエツジ自身の辛い記憶を思い出さないようにしていただけたかった。

その時、エツジの耳に泣き声が蘇る。

いつも辛い感情を表に出さないようにしているクロウが、たった一度だけさらけ出した本心からの泣き声。

(……そうだ、どうして気が付かなかったんだろう。あの時は何か本

当に辛いことがあったんだとしか思わなかったけど、クロウは自分が信頼しない人間には自分の気持ちなんて言わないし、ましてそれを表に出すことなんて絶対に無い)

エッジの無意識の、自分勝手な押し付けの善意であったとしても、いつの間にかそれは一方通行ではなくなっていた。

今もそうだという確証は無かった。

もしかしたら、本当にその一時だけだったのかもしれない。

それでも、その一回だけでもクロウが信じてくれたなら、エッジの答えは決まっていた。

「……ブレイドの言う通りだ」

エッジは静かに、ブレイドの言葉に同意する。

目の前でブレイドが安堵しかけたが、弟の表情から何かを感じたのか慎重な様子で言葉の続きを待つ。

「俺は自分の辛さだけしか見てなかった。彼女に自分の過去を重ねていただけだったんだ」

ブレイドは目の前の弟の一挙手一投足から目を離さない。

エッジは机を挟んだブレイドの更に後ろ、入り口の扉をちらりと見た。

ブレイドは話を聞かれないように見張りを遠ざけていた様子だった。

で、あるなら部屋の外に出ることが出来れば、見張りはいない筈だと見当をつける。

暖炉の側にはエッジが今まで着ていた服があったが、それはもう諦めるしか無かった。

今着させられている服はどう見ても寝間着か何かで動くのには向かない、外がまだ雨ならすぐにグシヨグシヨになるだろう。

考えをまとめながら、エッジは我ながら何て無謀な事を考えているのだろうかと思う。

武器もないというのに、目の前の武装した騎士を越えて逃げる事を考えているのだから。

エッジに自信は全く無かった。考えを目の前の兄に見透かされて

いるのでは無いかと心臓が高く鳴り続ける。

けれど不思議と彼に迷いは無かった。

「俺はまだ何もしていない、彼女の信頼に本当の意味で応えられる様な事は何も！」

クロウの気持ちに応えなければいけない、その思いだけで言葉と同時に椅子をはね飛ばしてエツジは扉へと踏み出す。

しかし、二歩も行かない内に彼は立ち止まらなければならなくなつた。

ブレイドもまた立ち上がり、重い鎧を着けているとは思えない動きでエツジの首に剣を突き付けていた。

エツジがいつも使っているものより細めの長剣が、間近で危険なほど鋭く輝いているのが嫌でも彼の視界に飛び込んでくる。

「あくまで犯罪者の仲間になる。それが俺の問いに対する答えか」
残念そうな声でブレイドはそう言う、けれど剣は全くぶれない。

エツジは剣に気を付けながらゆっくり顔をブレイドの方に向ける。
「ブレイドの言うことも分かる……いや、多分ブレイドの方が正しいんだ。このまま彼女を放置しておけば大勢の人に危害が及ぶかもしれない」

弟がそれを認めると、兄はすぐに怒りの声をあげた。

「それが分かっているながら、何故お前は大勢を危険にさらす方を選ぶ！既にこの街での事件で家を失った者や、死んだ者までいるんだぞ」
流石にその言葉には多少エツジの意志も揺らいだ。

彼が現場を見たのは短い時間で、怪我人が出たのは想像できても死者まで出ているとは思っていなかった。

「でも、このままブレイド達が彼女を捕まえようとしたらどうなるんだ？彼女は積極的に誰かを襲ったりする様な人間じゃない。けれど、もし追い詰められて今回みたいに戦いになったら死ぬかもしれないのはブレイド達じゃないのか!？」

それを聞いても、ブレイドの態度は変わらなかった。

「それでも構わない、少なくとも捕まえる事さえ出来ればそれ以上の被害は出さずにすむ」

兄の目は本気だった。

しかし、退く気がないのはエツジも同じ。

「そんな事にはさせない、俺が彼女の側について誰も殺させない」

なおも食い下がるエツジに、ブレイドはかぶりを振って聞いた。

「なぜそんな不確実な方を選ぶ、お前一人で全てを食い止められる保証など何も無いんだぞ」

エツジは首元の冷たい刃を強く意識しながら大きく、ゆっくりと息を吸い込んだ。

もしかしたら、次に発する言葉で最期になるかもしれないと覚悟して。

「確かに、危険は排除する方がより確実かもしれない。でも、誰もが『より確実な方』を選んだら彼女は一人きりになってしまう。ひと一人を、友達を無視してその上に成り立つ平和の中で普通に生きる事なんて俺には出来ない。だから……斬りたければ、斬って良い」

エツジは、冷たい汗が背中を流れ落ちるのを感じ、手を強く握りしめて覚悟を決めて動いた。

剣を握る兄の手に力が込められるのを視界の端に捉えながら、彼は兄の剣に背を向けて扉に走った。

たった一步が、エツジにはとても長い時間に感じられる。

彼の背中に剣が降り下ろされた様な冷たい感触が走る。

けれど、それは恐怖から来る錯覚だった。

剣は降り下ろされなかった。

エツジは廊下に飛び出す。

なぜブレイドが斬らなかつたか考える暇は無かった。

まだ異変に気付いていないのかエツジの近くに騎士達の姿は無い。

しかし、ここは宿の二階、逃げようとしても階段を下りた途端捕まるのは目に見えていた。

(なら——)

「待てー」

部屋から飛び出して来たブレイドにエツジは左手を掴まれた。

柔らかい生地の間着に金属の籠手が食い込む。

「逃がす訳にはいかない、ここで逃げたらお前は……」

エツジは自由な右手に雷のディープスを集め、ブレイドの胸に押し付けるようにして解放した。

呻き声を上げて、ブレイドが手を離す。

「俺の心配なら要らない。悪いブレイド、出来ればいつかまた違う形で」

今の衝撃からか返事はなかった。

しかし、さつきといい今といい兄がエツジに手加減をしているのは明白だった。

ブレイドはただ、胸を押さえながら弟を睨み付けていた。

今の音に気付かれたのか階段の方が騒がしくなる。

エツジはもう一度右手に雷のディープスを、そして左手には風のディープスを集束コレクトした。

その雷の方を廊下の外側の大きな窓に向けて解放する。

ばりばりと大きな音がして、ガラスにヒビが入る。エツジはそこに間を置かずに体当たりした。

「エツジ!!」

二階の高さから外へと飛び出そうとする、エツジの背後からブレイドの声がある。

エツジは固く目蓋を閉じながら窓の木枠やガラスがぶつかる痛みを感じ、足元が無くなる感覚に恐怖を覚えるのを必死に抑えた。

彼と、周りのガラスが重力に捕まって落下を始める。それを感じるのと同時にエツジは風のディープスを足元に向けて解放する。

つむじ風が起こり、周りのガラス片が上へと巻きあげられ、手の甲や頬を切られる。

エツジの体も落下の勢いを弱め、そして少し浮き上がる。
(風が強すぎた!?)

一瞬、木の葉の様に舞い上げられ地面へと叩きつけられる想像が彼の頭をよぎる。

けれど、それは杞憂だった様で上昇はすぐに止まり、緩やかな落下に転じて俺は何か宿の外の細い道に着地した。

それに少し遅れて巻き上げられたガラス片が降ってくる。
弱くなつてはいるもののまだ雨が降っており、薄い服の生地はほとんど水を吸ってエツジの体温を奪う。

普通ならどこかで休むべき所だが、今のエツジにはそんな時間は無かった。

宿の二階と入り口の方からも声がする、すぐにでもこの場を離れなければならなかった。

辺りを見回すと、エツジから一番近い路地の入り口まで七歩はある。

彼はすぐにそちらへ向きを変え駆け出すが、その間にも見つかるのではと気が気では無かった。

宿から離れられた訳ではない、間近に無数のアキシズⅡワンドの騎士達が居る。

角を曲がる前に、今彼が居る道の先から騎士が歩いてくるがしやがしやという音が聞こえた。

エツジは角を曲がっても走り続けたが、鎧の音は遠くならない。入った路地は狭く、いくつも左右に分岐しているのが見えた。

エツジの背後の物音は少しずつ歩調を上げてきている様だった。足音に気づいたか、狭い路地に逃げたと分かったのかもしれない。

(すぐに曲がらないと……)

姿を見られて確信を持たれたら終わりだった。

そう思っていると、エツジは足音が一つでは無いことに気づいた。

(右か左かよく分からない——いや、もしかして両側から既に騎士が来ているのか?)

そんな焦りが、彼の集中力を削いでいたのかもしれない。

次の角を曲がって目の前の人影に気付いたときには、エツジは両腕を強く掴まれ拘束されていた。とても人間のものとは思えない力だった。

「あら、こんな天気なのに散歩なんて奇遇ね」

目の前で微笑むその顔は以前アキに襲いかかってきた女性、リョウカだった。

第三十話 蜘蛛の糸

相手が騎士では無いとはいえここで足止めされれば捕まるのは時間の問題だった。

しかし、抵抗しようにも相手の力が強すぎる。

エッジが落ち着いて見ると、彼の腕を掴んできたのは人の手では無く薄い色の布だった。

その冷たく硬い感触はまるで鉄のようなのに、エッジの腕に巻き付いている部分以外はゆったりとリヨウカの体に巻き付き、微かに風で動いているのさえ見える。

「う……………」

拘束されたまま、エッジは冷たい壁に背中を叩きつけられる。

「それで？さつき騎士団に捕まったあなたが、こんな所で何をしているのかしら」

「何でそれを」

「あなたが捕まったとき、私もその場に行ったのよ。まあ、気を失った少し後だったから気付かなかっただろうけど」

淡々と説明しながら、うんざりした様子でリヨウカは軽いため息をつく。

「で、そんな事はどうでも良いわ。あなた、以前ジェイン・アキと一緒に居たわよね？この町であなたが一緒に居たのは気味の悪い剣士の男とフードで顔を隠した二人。その二人の中にもジェイン・アキが居たんじやない？」

探るように冷たい目で彼女は、エッジに顔を近付けてくる。

彼女はとても背が高かった。

アキやシントリアで時折見かけた黒髪の人特有の不思議な雰囲気加里ウカにもあり、無意識にエッジの鼓動が早くなる。

心臓が高鳴ると同時に落ち着かない気持ちも増し、彼は真っ直ぐに目を見て嘘をつく事が出来なかった。

「……………どうかな」

リヨウカはその答えでは納得しなかった様だ。

エツジを睨み付ける目が鋭くなり、腕を締め付ける布の「枷」の力が強くなった。

どうやら自分の指先一つ動かす必要なく、まるで手足の様に布を動かせるらしかった。

と、騎士の足音が再び近付いてきて、エツジは心臓が止まりそうになった。

リヨウカも気づいたらしく、軽く舌打ちをする。

次の瞬間、エツジは腕を強く引つ張られ宙吊りにされた。

「な——」

かと思うといきなり視界が塞がり、エツジは全身をぐるぐる巻きにされた。

あつと言う間に全身をきつく縛られ、手の方は指一本動かせない。

一応、足の先の方だけは動かせるもののそれだけでは何も出来ない。

エツジは間近まで迫ってきた鎧の音を聞いていることしか出来なかった。

騎士はリヨウカに気づいたらしく、足を止める。

(ここまでか)

やはり、一人で逃げられる程甘くは無かつたらしい。

どの道、ここで見付からなかつたとしても港が封鎖されている。

初めから、この街を出る事など出来なかつたのだとエツジは思い知らされた。

「リヨウカ様、こんな所におられたのですか？」

いくぶん驚いた様子で騎士がリヨウカに話しかけてくる。

「ええ、せっかく交易の中心地に来たのだから、シントリアに戻る前に散歩がてら少し買い物ね」

先ほどまでの冷たい雰囲気嘘の様に、彼女は明るい声で返す。

リヨウカが話したり、動いたりする度にエツジの体は軽く揺られた。

視界が遮られている分、彼の意識はより会話や揺れに集中する。

「この雨の中、そんな大荷物を抱えてですか？確かに幾分小雨には

なつてきましたが、あまり濡れるとお体に障りますよ」

リヨウカの返事はエツジには聞こえない。

表情か、身振りで応えたのかもしれなかった。

「それより、王都襲撃の容疑者が逃げ出した様なのです。この辺りは危険ですから私が宿までお送りしましょう」

布越しに聞こえる声はエツジの耳に幾分くぐもつて聞こえたが、体が密着している分リヨウカの声は多少聞き取りやすい。

既に状況を把握している事を考えると、やや大袈裟にも取れる位リヨウカは驚いた。

「本当に？もしかして逃げた容疑者っていうのは、この雨のなか不自然な薄着で走っていた少年かしら？」

エツジはいよいよ、リヨウカから騎士に引き渡されるのを覚悟した。

「その少年ならさつきあつちへ走って行くのを見たわよ、もしかしたら北東の港へ向かったのかも」

彼は耳を疑った。

(何でそんな事を……?)

今のが嘘などと知るよしも無い騎士は驚いたのだろう。

鎧をがちやつかせるのが聞こえた。

「それは本当ですか……！ご心配なく、後は我々にお任せ下さい。

リヨウカ様は早く安全な方へ」

「ええ、あなた達も気を付けて」

甲高いピイイイという笛の様な音が後ろから、周りへと伝わっていく。

恐らく何かの合図であろうそれが聞こえると同時に、エツジの体も大きく揺れた。

どうやらリヨウカが早足で歩き出した様だ。

騎士の鎧の音は反対方向へどんどん離れていく。

エツジの体は大きく揺れ縛られた布からずり落ちそうになったが、動けないので掴まる事は出来ず、彼は可能な限り動かないようにして道に転げ落ちないように祈るしかなかった。

時折、騎士達のエツジを探す大声が聞こえ、それは移動しても変わる事が無かった。

エツジを背負ったまましばらくリヨウカは早足で歩いてきた様だったが、徐々に歩くペースが落ち周りの声が少し静かになったかと思うと、いきなり彼を拘束していた布が生き物の様に離れる。

エツジは何が起きたか把握する間もなく、固い石畳に投げ出され足首に衝撃が走った。

辺りは先程より更に狭く曲がりくねって見通しは悪いが、やはり路地の様だ。

「あなた、重いわよ」

息を切らせながら、リヨウカはほとんど独り言の様に愚痴る。

彼女はエツジを解放はしたものの、いつでも拘束できる位の距離へと壁の側まで彼を追い詰める。

エツジは痛む足首をさすりながら、壁に寄り掛かる様に座ってリヨウカに質問した。

「何で、こんな事を？」

彼女のおかげで助かったとはいえ目の前の相手が自分の為だけにこんな危険な事をするとは到底思えず、どうしてもエツジの言い方はきつくなる。

そんな声の調子が勘に触ったのかりヨウカもトゲのある声で返す。

「答えは簡単、さっきの質問にこたえてもらう為よ。嫌だと言ったら貴方を拘束してさっきの騎士達に引き渡すわ」

さっきの質問、アキの事。

捕まる事だけを考えていて、エツジは半ば忘れていた。

「……」

そんな事を言われても答えられる筈が無かった。

答えた所でエツジを見逃したらリヨウカにとって不利になるだけだ、わざわざ逃す筈がない。

黙っている相手の様子を見て、リヨウカは薄ら笑いを浮かべる。

「——なんてね、もう聞く必要は無いわ。貴方はアキと一緒にだった」

エツジは啞然として何も言えなかった。

何故分かったのか焦る。

「もしそうでないなら、すぐに『一緒じゃなかった』とか言つて関係のないあの子を庇う筈なもの。前に会つた時、私達の戦いに割り込んできてあの子を庇つた貴方ならね。返答に迷うっていうのは、隠そうとしてる証拠よ?」

首を傾げながらリヨウカは、エツジの表情を探るように覗き込む。焦りが伝われば彼女の読みを肯定しているのと同じだと気付き、エツジは慌てて無表情を装う。

リヨウカはそんな様子を面白そうに観察している。

こんな相手にエツジは今まで会つた事が無かつた、一方的にいつの間にかペースを握られている。

「で、提案なんだけど」

エツジが驚いている事に気をよくしたのか、やや上機嫌でリヨウカは提案する。

「この街から逃がしてあげる、と言つたらどうするかしら?」

「——見ませんでしたか、ありがとうございます」

そう言つてラークはフードで目を隠したまま会釈すると、会話を終わらせた。

相手の男は酒を飲み始めたばかりの所を邪魔され大変不愉快そうだったが、ラークは丁寧に頭を下げたその場を去る。

酒場の中にはもう、彼が話を聞いていない相手はいなかつた。

宝珠の欠片を持つクロウを追つてアキ、リアトリスと三人でセオニアに入ることが出来てからもう五日。

ラークは人の出入りの多そうな所や馬車の御者などを中心に片っ端から話を聞いて回り、町を一つ移動していたがクロウを見たという情報は無い。

とはいえ、全く宛も無い旅をしている訳では無かつた。

クロウをさらつた内の一人が身に付けていたブローチ、そこに書かれていたセオニアの王家アリーズ家の紋章から、ラーク達は王の住む首都ウオーギルントを一つの目的地としていた。

アキとリアトリスは時折必要な物を買いつつしながら話を聞く程度で、それ以外は宿から出ていなかった。

セオニアの中で海の向こうのサーカス団員に気付くものは居ないかもしれないが、アキが誰だかは知られる訳にはいかなかった。

アクシズⅡワンドの実質的な主導権を二分し軍備増強を推し進めるジェイン家に敵意を持つものは多く、その娘がこんな所にいると知れたら無事ではすまない。

ラーク自身も、アキと一緒に旅を続けるのはリスクが高いことを承知していた。

(何故同行を許している？もう役に立つ訳では無いのに)

アクシズⅡワンドにいた内は戦力としても数えられその立場も役に立つ事があるかもしれないとラークは考えていたが、海上都市ヴィツアナから脱出する時はエッジと一緒に置いてきた方が確実に動きやすかった筈だった。

それどころかエッジ以上に相手が確実に食い付く筈ですらあった。

それなのに彼女を連れてきたのは――

(リアに影響され過ぎたか……弟子にも)

エッジは生きているだろうかとラークはふと思う。

すぐに死ぬことは無いだろうが、彼が一人で逃げ出せる可能性もまた無いに等しかった。

一生、彼を見捨てた時の事を忘れる事は無いだろうとラークは苦々しく思う。

彼は浸りかけた感傷を頭の中から振り払った。

自分自身の胸の痛みなどラークにとって重要ではなかった。

今、大事なのはクロウを探し出すことだけだった。

再び自分のやるべき事に神経を集中し、馬車の駅の方へ向かおうとしていると気になる声がラークの耳を捉えた。

妙に耳に障る無邪気な声。

「――人を探してるんだけど、肩ぐらいの長さの紫の髪で痩せてて目付きが悪い子。知らない？まあ、あの子無口だからねー」

少女の声のようだった。

少し遠く、普通なら会話なんて到底聞こえない距離だろうがラークには聞こえた。

あまり人通りも多くなかったので、彼が聞き込みはしていなかった方向。

少女も人を探しているようだが、明らかに上手くいつていない様で盛大なため息を吐いている。

しかし、たまたまなのだろうか。その特徴はあまりにクロウと似ていた。

「知らない？なら、良いや……あーあ、何で私がこんな所で人探しなんかしなきゃいけない訳」

声の主は諦めたのか、あまり舗装されていない乾いた土を踏む音がする。

ラークはさり気無い様子を装いながら、足音を頼りに声の主を追う。

いくつめかの建物の角を曲がり、目に飛び込んできたのは燃えるような赤毛だった。

声の主は少女で建物の影を選ぶように移動している様だったが、その影の中でなおその髪は生き物のような輝きを放っていた。

ふと、赤い髪の少女は足を止め、くるりとラークの方を振り向く。二人の目が合いラークは冷たい目を向け、少女の方は跡をつけられない事に気付いて眉をひそめた。

そして、赤毛の少女の方は何か凶悪な悪戯を思い付いた子供の様に笑みを浮かべると、右手でラークを指差し言葉は発さずに口を動かしてみせた。

「ばーん」

熱に気付いた時には遅く、ラークが反射的に顔を庇うのとそれは同時だった。

ラークの体は炎に包まれた。

第三十一話 共『逃』

「ラークさん……遅いですね」

宿の一室、アキとリアトリスの二人はいつもの様に情報収集に出掛けたラークの帰りを待っていた。

国境を越えセオニアに来てからというもののラークは二人に極力外に出ることを禁じていた。

そして彼自身は一人で出ていき、夕方に帰ってきてその日得た情報を二人に話して自分の部屋に戻るといふ行動をしている。

アキとリアトリスの仲は悪くは無かったが、ヴィツアナでエツジが抜けてから会話は減り、ずっと部屋の中に缶詰め状態でいた事で会話は更に減っていた。

食事も部屋に運んでもらうか買いだめした食料で済ませ、部屋の外に出るときはフードで顔を隠す——そこまでさせて、一人で行動し続けるラークにアキは疑念を抱かずにはいられなかった。

「何故、ラークさんは何でも一人でやろうとするんでしょうか」

ずっと聞こうか迷っていた事ではあったが、沈黙に耐えきれずついアキの口からは疑問が出る。

ラーク自身ではなくリアトリスに言うのは筋違いかもしれないが、リアトリスには何処かラークを信頼している様に感じられる節があり、アキにはそれも疑問だった。

エツジを見捨てた事に本気で怒るような彼女が、平然と敵の命も味方も切り捨てる様なラークを何故信じるのかが。

「何でも自分がやらなきゃ、って思ってるんだよ。ラークには責任があるから」

重い口を開いて、リアトリスはそう答えた。

ヴィツアナから逃げてから、ラークが話に出るとリアトリスの表情は暗くなる。

「責任？」

「そう。でも、私はラークが背負う必要のないものまで背負おうとしてる気がする」

同情しているような、諦めているような声でリアトリスはそう答えた。

「……今のラークは、何かに憑かれてるみたいだよ」

ぼつりと漏らしたその眩きが、アキにはリアトリスの本心に思えた。

ラークは熱を間近に感じた。

全身が燃えているのだから当たり前だ。

痛みへの防衛本能から意識が遠くなりかけて、彼は耳元で聞こえるゴウという音がどこか違うところで鳴っているかのように感じる。

夕方の静かな通りでの突然の出来事に、ラークの近くにいた人々から悲鳴があがる。

騒ぎが起きる事自体は彼にとって好ましく無かったが、運はラークに味方した。

駆け付けた年配の女性が桶に汲んであった水を打ちまけたのだ。

ラークの体を包んでいた炎は収まり、井戸から水を汲んできた当人らしき少女は周りとは別な意味で悲鳴をあげた。

周りが見えるようになってすぐに、ラークは術を放った張本人を目で探したが既に去った後だった。

彼女は振る舞いこそ子供の様だったが、仕掛けた『いたずら』の結果を見届けたりせず、迅速に姿を眩ます冷静さにラークは『慣れ』を感じずにはいられなかった。

炎が消えると慌てていた人々も徐々に落ち着き、代わりにラークに視線が集まりだす。

仕方なくラークはよろけた様に装って近くの路地に逃げ込み、そこからすばやく更に角を曲がった。

間を置かず身体の火傷が治っていくのを感じて、ラークは壁にもたれる様にしてうずくまりマントで顔や腕の隠せる範囲を隠した。

怪我がすぐに治るのは戦いでは大きく役に立つが、良いことばかりでは無い。

特異な身体は人の興味を引き、同時に恐怖を感じさせるからだ。

目立ちたくないラークやリアトリス達にとっては一番困る事だった。

傷が治ると、ラークはすぐにマントを翻して足早に歩き出す。

ラークにとって怪我はただの痛みでしかなく、今はもつと大事な事があつた。

クロウへの追っ手が間近に迫っている可能性があつた。

リヨウカが何気ない様子でエツジの前の大通りを歩いていく。

降り続く雨のせいか、街全体が厳戒態勢なのか、大都市の通りには不気味な位静まり返っていた。

リヨウカは向かい側の路地のひとつに着くと、左右を確認してエツジの方に目配せする。

彼は急いで、しかしなるべく足音を立てない様に心がけながら路地を出た。

大通りに出た途端壁が無くなり視界が開けて、エツジは自分がサーカスの中心に立ったかの様に感じる。

右からも、左からも、後ろからも、彼は自分が見えていない全ての方向からありもしない視線を感じた。

足元の水が跳ねる音を少しでも減らしたくて、エツジは大きい水溜まりをなるべく避ける様蛇行しながら進む。

が、路地から見つめるリヨウカの目が険しくなるのを見て彼は仕方なくまっすぐ走る。

靴にも服にも水が跳ねて大きな音を立てたが、服の方は元々ずぶ濡れだったのでさほど変わらなかった。

何とかリヨウカの所までたどり着き、エツジはほっと胸をなでおろす。

と、近付いてくる足音——それも鎧の音に気付いてエツジの背筋が凍った。

リヨウカが彼を背中に隠すように動き、エツジは急いで物陰にしゃがみこんだ。

何に使うかよく分からない網が、エツジの隣で異臭を放っていたが

それを気にする余裕は無かった。

「おい待て！止まれ、動くなそこにいるのは分かっている……ん？」

リヨウカの側まで来たのがエッジの位置からでも微かに見え、彼は相手がこちらに気付かない事を祈った。

先程出くわした騎士と同様、相手がリヨウカである事に気付いた様だが今度の男は高圧的な態度を変えなかった。

「お前は無理矢理に着いてきたタリア家の。なぜこんな所にいる、さっさと宿に戻れ」

その言い方はリヨウカの癪に障った様で、彼女の返事にはトゲがあった。

「私が何処に行くかをあなたに決められる覚えは無いわ、それより今はそれどころじゃないのでしよう？この街から逃げられる前に逃走犯を捕まえたら？」

沈黙が流れ、殺気——そう呼んで差し支えがない位その騎士の怒りを二人は感じる。

「貴族つてやつはどいつもこいつも本当に自分が中心だと思っていないな！せいぜい脱走犯に出くわさない様祈ってな」

そう言い捨てると、騎士はリヨウカを押し退けるようにして何とエッジの方に向かってきた。

あと、ほんの数歩で見つかってしまう。

エッジは雷のディープスを集束コレクトしようとするが、それでは不自然な音を立ててしまうことに気付き慌てて風のディープスを集めるのに変える。

(間に合え……！)

これで風を起こしても、相手が音に気付かなければ終わりだった。

小石でも何でも転がってくれる事を祈って、エッジは自分達とは反対の方向から大通りに向けて風を起こした。

カンッ、カンカン——

予想したより、勢いよく石が転がってエッジは縮み上がる。

しかし、頭に血が上った男にはちようど良かったようだ。はっ、とリヨウカの方を振り返り今にもエッジを見付けそうな所で足を止め

る。

リヨウカが怯えた顔で、自分と同じ様に驚いているのを見て騎士はすぐに来た道を引き返していく。

そのあまりの勢いにリヨウカも反射的に道をあけ、直後に男の怒声が響いた。

その剣幕からエツジは、もし見付かったらどうなっていたか考えずにはいられなかった。

リヨウカが路地の奥へと手を引いてくれなければ、もうしばらくはその場に立ち尽くしていたに違いなかった。

「何をぼーっとしているの。折角稼いだ時間が無駄になるじゃない」再び鳴り響く呼び笛の音は先程より近かった。

今は一瞬の遅れも命取りになる。

「でも、ありがとう。気を逸らしてくれて助かったわ」

エツジはその言葉に驚いた。

「そんなの……追われてるのは俺なんだし、それに、その、あんだだつてわざと驚いた振りしてくれただろ？」

「でも私一人じゃ出来なかった、でしよう？」

走りながらリヨウカは事も無げに答える。

「それは、そうだけど」

エツジはどうも、この相手と話すのは苦手だった。

すぐに返せる言葉が無くなってしまふ。

苦し紛れに、彼はさつき気になった事を聞いてみた。

「そういえば変な臭いのする網があつたけど、あれ一体何なんだろう」言つた途端、リヨウカの手がピクリと動いたのを感じた。

「あれは、水を綺麗にする為のものよ。水からゴミを掬う、ゴミ網……まさか触つてないわよね？」

思い切り睨まれ、エツジは慌てて首を横に振る。

そして、リヨウカに適当に話を振るのはやめようと思った。

「それよりこの街から出る方法なんだけど、海路しか無いのに港は全て封鎖されてるのよね」

突然左に曲がり、進む方向を変えながらも速度は落とさずリヨウカ

は言葉が続ける。

「多少荒っぽい方法になるのは避けられないし、どのみち船も無い。だったら、いつそ船もあいつらのを奪っちゃった方が良いと思うんだけど、どうかしら？」

しばらく彼女の言葉の意味を考え、エッジはどれだけ勝算があるのか考える。

「出来るかな、そんなこと」

今のエッジには武器もなく、動きづらい服に、体力もなく万全の状態には程遠い。

軽い調子で言ったもののリョウカもそれはよく分かっていた様だ。

「正直、分からないわ。でも、こうなった以上出来なければ私達二人とも終わり。どうなろうと最後まで付き合ってもらうわよ」

既に助けてもらった身で、エッジは今更運命を共にすることに是非も無かった。

「ああ、分かってる」

話に集中し過ぎて、十字路で誰かと鉢合わせしない様に細心の注意を払いつつ手短かに二人で作戦を練る。

一度、袋小路に入ってしまった以外は何事もなく港にたどり着く。

しかし、港の船のほとんどは警備されていなかった。

唯一、見張りが付いているのは周りの船とは異質な船の一団が停泊している周りだけ。

それを見て、エッジはやはり気持ち揺らぐ。

「やっぱり普通の船を奪った方が確実じゃないか？俺も全く船の経験ない訳じゃないし」

彼自身、少し弱気になってきているのが分かる。

今や寝間着は服としての意味をなさない位に濡れ、昼間にも関わらず寒さで凍える程だった。

「ダメよ、騎士団が乗ってきた船じゃないと逃げ切れない」

それはエッジもさっきから聞いていた。

とはいえ、相手は武装した騎士。

それが七人いる。

エツジの深術なら武器が無くとも、三人くらいは倒せるかもしれないが二度も術を発動する暇を相手が与えてくれるとは思えなかった。それに三人というのも万全の状態、十分な隙があつての話。

隙はともかく、今の自分の状態ではエツジは一人でも倒す自信はなかった。

「でも無理だよ……俺の術じゃ全員は倒しきれない」

リヨウカは少し考えて、自分がいつも身に纏つて武器にしている外衣をエツジに羽織らせた。

先程まで鉛のようだったのに、実際に彼が着る側になるとほとんど重みを感じない。

なぜこんな事をするのか真意を測りかねてエツジはリヨウカの方を見る。

「宵よいの地衣ちじろも、これが集束を補助してくれるわ。いつもより簡単に強力な術が使えるはず。大切なものよ、慎重に扱いなさい」

思わず『そんなものは借りられない』エツジはそう言いかけたが呑み込む。

それしかないのだ。

「分かった」

黙つてリヨウカも頷き、二人で改めて船を守っている騎士達を見る。

重い沈黙があり、そしてどちらからとも無く声を掛け合った。

「行こう」

「幸運をね」

船を守る騎士達にとってそれは歯がゆい状況だった。

王城襲撃犯の素性も目的も不明。全く手がかりがない中で、黒い鳥の少女の噂を聞いてはるばる海を渡ってきて偶然にも捕まえる事の出来た共犯者、その少年が逃げ出したというのだから。

船の守りの重要性が分かっている、最小限の人数でしかヴィツアナに入れなかった騎士達は無意識に逃げている少年の事を考えてしまつていた。

だから、突然響いた女性の悲鳴に全員が一斉に動いてしまったのも仕方のない事だった。

「誰か、助けて！武器を持ってるわ！」

建物の影で襲われたのか、騎士達から女性の姿は見えなかったが声ははつきり聞こえた。

すぐに全員が声の方へ走る。慎重な数人は船の守りの事も忘れず声の主まで半分程の距離の所で足を止めたが、その短い間七人の注意は完全に前方に向いていた。

そして、それはずつと物陰でタイミングを見計らっていた少年には十分な隙でもあった。

自分達が何にどうやって襲われたのか知る間も無く、騎士達の記憶はそこで途切れた。

第三十二話 水の都との別れ

エツジはリョウカと二人で決めていた通り近付けるギリギリまで騎士たちに近付き、チャンスを待っていた。

リョウカの叫び声が聞こえ、騎士達の注意がそちらに逸れる。

まだ彼が見たのは数回でしかなかったが、リョウカの演技力には驚かされる。

事前に計画を聞いていたエツジも一瞬、何かあったのか不安になる様な悲鳴だった。

本当に敵でなくて良かった——とエツジは思っていた所だったが、今は一時的な協力関係にあるだけなのだ。

なるべくなら、彼にとつてリョウカは敵に回したくはない相手だった。

騎士たちがリョウカの方に動くのを見て、エツジは物陰から半歩前に出る。

早すぎれば見つかってしまうし、遅すぎればリョウカが罠をやっている事がばれてしまう。

リョウカはくれぐれもそうならないように、と彼に念を押ししていた。

エツジは騎士達の一挙手一投足に気を配りながら、何の術を使おうか考える。

普段、相手が多いときに使うのは風属性の術。

もし、多人数相手に力加減を誤ってしまっても殺傷力が低く安全だからだ。

けれど、今の彼の出来る最大の力でも、七人も倒せるかは怪しい。

少しでも威力が欲しい今、エツジが使うべきは一番得意な雷属性の術だった。

(でも、宵の地衣の力が未知数な以上もし……もしも、想定以上の力が出てしまったら……俺は、人を殺すことになるのか?)

迷いが振りきれないまま幸運か不運か騎士たちが全員リョウカの方へ踏み出し、背後に回るのに十分な隙が生まれた。エツジは半分何

も考えずに道の真ん中まで進み出てディープスを集束する。

集束しはじめて、すぐに彼が感じたのは違和感。

彼が集めた以上の量のディープスがエッジの手の中に集まっていた。

まるで自分以外の人間がすぐ隣で一緒にディープス集めている様な感覚、それでいて集まったものはエッジのコントロールを離れた訳ではない。

これなら大丈夫かもしれないと衣に微かな安心感を感じつつ、同時にエッジが抱いていたもうひとつの不安は更に大きくなる。

この威力では、本当に――。

(今更、俺に迷う権利なんて……！)

ガクガクと震える手を抑えて、必死にクロウの為、自分の選択の為だと言い聞かせエッジは術を放つ。

空気が渦を巻き雷の弾が放たれる直前、距離と方向を再確認する為に騎士達の後ろ姿を見て彼は気付いた。

平和を守るため努力する彼らから命を奪えば、クロウの側で、クロウが誰も殺さない様になると言った自分の言葉は意味を失う事を。

気休めでしかないかもしれないが、エッジは放たれる雷の弾の方向を扇状に分散させ、手元に留める事に成功した残りのディープスを杭のように術の進行方向に二ヶ所撃ち込んだ。

結果、雷の弾は一回り小さく三つに別れ騎士たちが振り向く間もなく彼らの身体を貫いた。

ガラガラと鎧が音を立てた後、エッジは誰も立ち上がらない事を確認する。

彼は騎士達が起き上がって来ることも不安だったが、全く動かないのも不安だった。

「私も少し危なかったわよ」

エッジと同じように倒れた騎士達の様子を見ながら、リョウカが姿を見せる。

騎士達は全員気絶しているらしい。

正直、エッジの心身は共に限界近く謝る気力も無かった。

謝罪を求めた訳では無いのかりヨウカもそれほど気にする様子はなく、彼女が船に向かうのを彼は足を引きずる様にして追った。

ヴィツアナで怪我を負ってから、クロウは完全に心を閉ざしてしまった。

クリフとも口を利かず、誰かと目が合えば睨み付ける。

食事を運ぶ係もクリフの様に怪我をするのを恐れて、なるべくクロウに見られない様にドアから手を伸ばして皿と盆だけを置いていく様になった。

その為、クロウがドアの側に置かなかった空の食器は回収されず、苛ついたクロウが改めてドアの近くに移動させるまでそのままだった。

長い船旅が終わりクリフがそれを告げに現れた時も、クロウはそんなひどい状態の部屋のベッドの上で一人膝を抱えていた。

「ひでえな……これは、よくこんな部屋に居られるな」

いつもと同じように、クリフは返事がなくともクロウに話しかける。

「いい知らせだけ、ようやくお前の嫌いな水の上とおさらばだ。一応、常に見張りが付くことになるけど、危害を加える気はねえから安心しろ」

沈黙。

じつ、と自分の方を睨み付けたまま動こうとしないクロウに対して、クリフも目を逸らさず返事を待つ。

「……行かない、って言ったら？」

「はあ？こんな部屋の方が良いなんて本気で言わねえだろ。俺はそんな事したくねえけど、これ以上わがまま言われると俺もそろそろ他の奴らを押さえきれねえ。荒っぽい事にはしたくねえんだよ」

暗い面持ちでクリフがそう言うと、クロウはふん、と鼻を鳴らした。「不満がたまっても、結局動けないんじゃないの？誰もこんな化け物に関わって死にたく無いだろうから」

その返答にクリフは目を丸くして、クロウに歩み寄る。

「そんな事思つてねえよ！お前だつて、ここにいたんじやどうにもならないつて分かつて——」

「思つてるよー！」

クリフがクロウの左手に触れると同時に、氷が砕けるような音と木が挟られるガツという音が響いた。

クロウの力任せに降り下ろされた右手が黒い槍の様になっており、ベッドと床を切り裂いていた。

クリフが見ている前で槍はゆっくり消え、クロウの手は元の形に戻つたが濃い闇のディープスの冷氣に直に当てたせいで赤く、痛々しい色をしていた。

「あんたが思わなくても、この船に乗つて他の奴は全員私を化け物だと思つてるよ……手なんか繋がなくてもちやんと下りるから、出てつて」

クリフは手を離し、しばし何も言えなかつた。

「待つてるからな」

それだけ言つてクリフは出ていき、クロウは再び一人になつた。

クロウが部屋から一步出ると、目を伏せていても嫌でも視線を感じた。周りで話していた声が一瞬止んで、代わりに先程までと違うさきやきが行き交う。

最初にこの船に運び込まれた時クロウは気を失つていた為どこから乗り降りするのかは知らなかつたが、何度か甲板に出た事はあつたのでとりあえず彼女は甲板に向かう。

さほど広くない通路で人を珍獣を見る様な目で見る人間達とすれ違ふのはクロウにとって不愉快だつたが、仕方なかつた。

甲板に出してしまうと、陸があるので降りる所はすぐ見つかつた。

当然、といえれば当然だつたが船はおよそ港とは言えないような人気の無い浅瀬に接岸していた。

ここがクリフの言つていたセオニア大陸だろうとクロウは見当を付ける。

舷梯から降りる時、下に海が見え、クロウは揺れに目眩がしたが何とか陸に足をつける。

クリフは約束通り彼女を待っていた。

クロウの姿を見て挨拶をしてきたが表情はやや固い。

彼女は返事をせず、船酔いでの気持ち悪さを表情に出さない様子しようとしたが、しかめっ面がよりひどくなっただけだった。

クロウが船から降りると、クリフ以外の乗組員もそれを囲む様に次々降りてくる。

その様子にクリフが顔をしかめたのでクロウが輪の中に閉じ込められる事は無かったが、彼女の後ろには人の壁ができた。

囲まれて窮屈な思いをするよりはマシかもしれないが、視界に入らない分クロウは後ろからの視線を痛い程感じた。

「じゃあ行くぞ、しばらくは道らしい道がねえから気を付けてついて来いよ」

そんなことには慣れていた。

なるべく跡を辿られたく無いのだろう、彼女が船を振り返ると残った船員たちが早くも出航する準備を始めていた。

突然、クロウは背中を突かれ息が詰まる。

動かない彼女に痺れを切らした誰かが小突いたらしい。

よろけただけで済んだがクロウの心には怒りが込み上げた。

「……やめてよ」

それは警告だったが、クロウが後ろに並ぶ顔を一人一人見つめても誰も表情を変えない。

怒りが込み上げ、彼女自身意識しない内に周りに僅かながら黒い霧の様なものが漂う。

きつと今の自分の目はまた黒く染まっているだろうとクロウは思った。

が、彼女は頭を振って仕方なく歩き出した。

こんな事でいちいち腹を立てても仕方ない、と。

エツジとリョウカの二人は船に乗り込んだ。

船は故郷で見慣れてはいたが、たった二人で（というかりョウカ曰く一人でも）動かせる等という船はエツジも初めてだった。

周りのそびえる様な船と比べると二人が乗り込んだ船は小ぶりで、それほど大勢は乗れそうに無く十人もいれば満員になるだろう。

妙に装飾も凝っていて、他の騎士団の紋章がついている船とも明らかに雰囲気が違う。

特に奇妙なのは船体の形で、三角形を細く引き伸ばした様な鋭角的な形をしている。

「準備は良い？確認だけど、ジエイン・アキとあなたの仲間はこのヴィツアナに寄ったって事はセオニアに向かったのよね？……また誤魔化すのは無しよ」

今までの反応からエツジはリョウカに釘を刺される。

「ああ、直接向かったかどうかまでは分からないけど、最終的な目的地がセオニアなのは間違いない」

とはいえ、次に具体的にどの町を目指すのか等はエツジも聞いていなかった。

あるいはラークはこの様な事態を想定して、わざと彼に目的地を教えていなかったのかもしれない。

エツジが騎士団に捕まっても情報が漏れないように。

それどころでは無かったというのも有るが、エツジはラークやリアトリス、それにアキの事はあまり考えない様にしていた。

ラークは、わざとエツジを囮にしたのだろうと彼自身気付いていた。

あの状況では全員で逃げるのは不可能だった、ラークの脚力がいくら異常でも抱えて逃げられのはせいぜい二人。

そこで自分を選んだのは、やはり戦力的にだろうか？とエツジは考える。

そういえば、ラークはブレイドの事を知っていた。

彼の兄だということも知っていたのか？リアトリスとアキは大丈夫だろうか？一度考え出すとキリが無かった。

「物思いに耽るのも良いけど、まだ逃げ切った訳じゃないのよ？」

彼女の言葉にエツジは現実を引き戻される。

「ああ……」

「じゃあ、出すわよ」

水晶玉の様な物の前に座って、リヨウカはそれに両手をかぎす。

その珠は半透明ではあるものの、きれいに透き通ってはおらず木陰の水面の様に暗くよどんだ色をしていた。が、リヨウカの動きに反応して青い透き通った海の様な色に変わる。

直後、フォンという音を聞いた様な——否、体を通り抜けていくデイープスの気配をエツジは感じた。

と、エツジは右の方で術が発動するような気配を感じる。次いで今度は左手の方で、足元で、手首の側で、リヨウカの側で……目が回る程無数の、深術が発動する直前の様な気配がして彼は落ち着かない。畳まれていた帆が勝手に広がったのを見てエツジは目を丸くした。

「キョロキョロしてないで、早く掴まらないと危ないわよ」「え?」

エツジは船が傾いた様な気がした。と、思うと風を受けた訳でもないのにいきなり船が加速してエツジは船底に叩き付けられた。

いつもなら大した事は無くフラフラしながらも立ち上がっただろうが、今日の彼は立てなかった。

倒れてしまうと不意にエツジは自分の身体の重さを強く感じ、とても起き上がれる気がしなかった。

頭が熱いのに、寒い。

エツジは熱がある様だった。

船の揺れでぐるぐる転がって行く様な感覚を感じながら、彼は「だから言ったのに」という呟きを聞いた気がした。

※世界観・用語2の情報が更新されました。

アエスラング

エッジ達の暮らす女神のいた世界。

かつては光に満ちた空の下に、炎と水の渦巻く生物も陸地も存在しない世界だったが、イクスフェントから風、闇、地の要素が入ってきた事で陸ができ、海が生まれ、多くの生命が生まれた。

しかし、未だに根本的な世界としての属性は変わっておらず、イクスフェントに流入していった光、火、水のデープスは常にアエスラングに引き寄せられている。それを防ぐ為、六つの宝珠が各属性のデープスの流れに干渉しており、万が一宝珠が無くなると世界は元の姿に還ってしまう。

今の世界は六つの宝珠の内一つ——闇の宝珠アスネイシスを欠いた状態で、五つの宝珠が辛うじて流れをコントロールしている。それゆえ緩やかに均衡が崩れつつあり、大半の人間は気付いていないものの凶暴化した生物の増加や環境の変化などを招いている。

イクスフェント

御伽噺とされている、神の居た世界。

かつての姿は一切の物が見えない程の暗闇の中で岩の間を吹き抜ける風の音だけが存在する世界だったが、アエスラングから火、光、水が入ってきた事で今のアエスラング同様生命の溢れる世界になっている。クロウの元へと渡った闇の宝珠は元々こちらの世界にあった物。

こちらの世界もアエスラング同様に風、闇、地のデープスを引き寄せ続けている。

本来は焰螺旋えんらせんと呼ばれる二本の天高く伸びる炎の様な柱でアエスラングと繋がっていたが、その繋がりにはエッジ達の時代より遙かに前の時代に絶たれており、これが焰螺旋えんらせんの神話が風化しイクスフェントの存在と共に御伽噺となってしまった大きな要因の一つになっている。

宝珠

伝承に語られる世界の均衡を守る六つの珠。

各属性の大気中のディープスが高濃度で圧縮された塊であり、アエスラングに光・火・水の宝珠、イクスフェントに闇・地・風の宝珠が置かれる事で本来のバランスに近い配置となり、互いの世界のディープスの流れを最小限に留めている。

その為、闇の宝珠がアエスラング側に来てしまったことはそれ自体危険な状態である。

通常の深術士が百人束になっても及ばない程のディープスを操る能力を秘め、その余りに強大な力が人間に渡るのを防ぐ為「シン」と呼ばれる一族が代々人の手から守り続けている。

シンの一族

生まれた時から宝珠と世界を守る事を宿命づけられ、その為の力を与えられた一族。

装飾品等に加工した石を携帯し互いを認識しており、アエスラングのシンの一部はサーカスの一座として行動する事で集団として怪しまれずに行動している。

エッジはこの石を知らずにペンダントとして身につけており、それによってラークはエッジがシンの血を引いていると気付いた。

ラークの高い身体能力や治癒能力。

リアトリスの高度な『クロマティッククリスタル色』の『水晶』の使用もシンである事に由来する能力である。

『コレクトバースト』

通常の意識的な集束コレクトが最も意識を集中させやすい手を使い、その延長をイメージして大気中のディープスをコントロールするのに対して、コレクトバーストは身体全体を集束状態コレクトにする事で通常の集束と比較にならない効率でディープスを集め続ける技術。

使用時には全属性への干渉により、術者の周囲に虹色の光の粒子が見える。

使える人間の限られる高度な技術であるが、その効果は大きく

◎術の準備の時間が減る事による、詠唱時間の短縮。

◎通常時の術に、更なる量のディープスを上乗せする事による術の威力の向上。

◎既に術として変換されているディープスすら分解する事による、相手の術への防御能力。(ダメージを完全に無くせる程ではない)が、得られる。

しかしその分体力の消耗も大きく、使用出来る時間はそれほど長くない。使える深術士にとっては正しく切り札である。

『色の水晶』

リアトリスが使用する。七色の障壁。

通常よく使用される深術障壁と異なり、全属性(この場合派生を含まない六属性を指す)のディープスからなる。

特殊な結合からなるディープスの最も強固な形態であり基本的に破壊する事はできない、クロウの闇の宝珠の力を用いた攻撃すら寄せ付けない程の圧倒的な防御能力を誇る。

反面、自然には存在しない物質である為その存在は術者の集中力の乱れだけで簡単に揺らぎ、維持し続ける為に多大な体力と集中力が必要となる。

その為、実質的に防御できる時間が短く、リアトリスは状況に応じて通常の深術障壁と使い分けている。

造りだす際には通常の深術と同様に一定の詠唱時間がかかるが、壁というものの性質上急を要する事も多く、リアトリスはコレクトバーストを併用する事でよくその時間を大幅に短縮している。

しかし、この方法は通常の『色の水晶』の使用以上に負担が大きく、通常の七、八倍程のペースで身体の消耗を引き起こしてしまう。

『宵の地衣』↑New

とあるモンスターから取れる、特殊な素材で作られているリョウカが身に纏っている衣にして武器。

ディープスの集束を補助する力があり深術を扱う程ディープスの扱いに長けていないリョウカは、この補助を得て地のディープスを瞬時に集束・分散して衣を手足の様操っている。

全属性のディープスの集束を補助するが特に、地属性・氷属性・闇

属性の使用に高い適正を持ちこれが名称の元になっている。

詠唱破棄↑New

深術の構成「術を使用する為に必要な量のディープスの集束」^{コレクト}、「集めたディープスの変換、発動」、「両者の橋渡しとして術者が集中を高める詠唱」という三つの段階の内、最低限の構成要素「集束」、「発動」のみで術を発動する技術。

理論上はどんな術でも発動可能であるが、「変換、発動」のプロセスは単なる変換ではなく術としての一連の動きを作るプログラム行為であり、またそれに合わせ「集束」の段階も単にディープスの量を確保すれば良いというものではなくこの『動き』に最適な配置をする必要がある為、実際には「術者が瞬時に頭の中で構成可能な術、その為のディープスを確保できる術」しか発動できない。

現実的に大半の術士が可能なのは初級程度までであり、それも何百回と身体が覚える程繰り返し使った末にようやく可能になるものもある。そもそも「詠唱」自体が「集束」と「発動」の時間を少しでも短くする為に術者が言葉などでリズムを取りながら両者を平行して行う集中状態なので、それを無くすというのは並大抵の事ではない。

クロウはその圧倒的なディープスの物量で闇属性の上級術すら詠唱を破棄して使っているが、しかし彼女自身は他の属性の術の詠唱破棄は使えない為、ディープスの量はともかく「瞬時に頭の中で構成出来ていない」レベルの術を使用していることになる。その為、これはクロウ自身の中に眠る闇の宝珠の意思が代替して「発動」を補助しているものと思われる（人間がほぼ構成不可能な速度で術を組み立てている為）。

第三十三話 識別名を持つ子供達

どれくらい寝てしまっていただろうか、目を覚ましたエツジは疑問に思った。

彼が体を起こしてみると、喉の痛みと頭痛ははつきりとしたものに変わっていた。

しばらくは十分に動けないだろうと溜息ながらにエツジは思う。

少なくとも戦闘の様な激しい運動は難しそうだった。

二人を乗せた船は変わらずに高速で走り続けていた。

発進した時と比べたら揺れは大分落ち着いている——と、いつてもそれは小型船としてはの話でクロウがいたら閉口する揺れではあったが。

エツジが操舵を続けていたりリヨウカの方を見ると、無表情を装っては居るが彼女も少し疲れている様だった。

いつ追手が現れるかも分からない状況下、寄る辺の無い海上でたった一人、船を操り続けるプレッシャーと戦い続けていたのだから無理もない。

「大丈夫か？代わるよ」

エツジがそう声を掛けると、彼女はずっと前方を見据えていた目をちらりと彼の方に向け、すぐに視線を前方に戻して言った。

「あなたこそ寝てなさい、そんな状態で船を任せて転覆するのはごめんよ」

リヨウカの弁は正論だった。

が、自分だけ何も出来ない状況をエツジは歯がゆく思う。

せめてもの気持ちとしてエツジは、気を取り直して狭い船内で何か出来る事が無いか探す。

「じゃあ、何か手伝える事は無いか？」

「なら食べるものを持ってきて。どこかに残ってるはずよ」

エツジはそう言われて、リヨウカがずっと何も食べられなかった事に気付いた。

ようやく彼女の力になれそうな事を見付け、エツジは二つ返事で引

き受ける。

「分かった」

船の上はあまり広く無かった為、戸棚はすぐに見付かった。

揺れの多い船内の為か、引き戸は回転錠の様な物できっちり閉められていたが幸い鍵は必要なく、エッジが手で回すだけで簡単に開く。しかし、中に入っていたのはずっしりと重い銀色の容器ばかりであり、これが本当に食べ物なのか彼は確信が持てなかった。

とりあえず彼は、操舵席に座るリヨウカの所へそれを持っていく。

「ええ、それよ……缶は騎士団以外ではまだ普及してないのね」

リヨウカは銀の容器を確認して頷きながら、後半は一人言の様に呟く。

いざ持ち出したものの、エッジはその容器の形状に首を傾げる。

「で、どうやって開けるんだ？開けられそうな所が無いけど」

「さあ？」

さも当然の様にリヨウカも首を傾げ、エッジは困惑した。

「え？」

「決まった開け方なんて無いわよ。釘で穴を開けようが、深術で壊そうが中身が出せればそれで良いんだから」

エッジは思わず疑いの眼差しをリヨウカと銀の缶に向けてしまうが、彼女の表情は至って真面目だった。

「それが面倒だから、あなたに頼んだんじゃない」

リヨウカは皮肉めいた笑みを浮かべる。

エッジは喉まで文句が出かかったがそれを飲み込み、缶と格闘を始める。

何か道具が欲しい所ではあったがエッジは剣を取り上げられて持つておらず、それどころか旅立つ時からずっと使ってきた道具や服は全て無くしていた。

そこで彼は、はっと気付き胸元を探る。

首にずっと掛けていたペンダントだけはちゃんとそこにあった。

ほっと安心して、エッジが再び缶を開ける作業に取り掛かるとリヨウカが尋ねる。

「ねえ、あなた。私やジェイン・アキ、シントリアの貴族をどう思う?」
唐突な質問にエツジは面食らいながらも、缶を船の甲板に叩き付けてみた。

缶はびくともしなかった。

「どうって言われても、俺が知ってるのはアキやあんただけだから『貴族だからどう』っていう風には考えた事無かったかな」

答えになっているのかエツジには分からなかったが、彼は偽らない正直な所を答え、缶の端の何処かに爪が立てられないか試みながら続ける。

「アキは良い子だっていうのは分かるし、あんたが居なきや絶対ヴィツアナからは逃げ出せなかった。だから少なくとも貴族に悪い感情は持ってないよ」

その返答にリヨウカは顔を曇らせる。

まるで自分が信用される事を快く思わないかの様だった。

「それはあなたが私やジェイン・アキと個人的に関係があるからそう感じるだけよ、貴族に対して抱いている感情じゃないわ」

「それは……」

そう言われるとエツジは何も言えない。

事実として彼がすぐに思い描ける顔は、リヨウカとアキだった。

エツジは手で開けるのを諦めて、缶を置く。

暗い顔のまま、リヨウカはとある貴族の話語り始めた。

「以前、王都でこんな事件があったわ。シントリアの学校に通う為に田舎から出てきた子が、スピードを出した馬車に跳ねられて亡くなったの。馬車に乗っていたのは教育方面を取り仕切る貴族だった。その事故の後、彼はどうしたと思う?」

エツジは首を横に振った。

リヨウカは微かな嘲りの笑みを浮かべながら続けた。

「裁判の場、遺族の前で謝罪し、堂々と言ったわ『この身と残りの人生を子供達の未来の為に捧げ償う』とね」

「でも、実行しなかった?」

リヨウカは首を振った。

「いいえ、それから彼は熱心に働き続けたわ。貧しい子ども学校に通える様にし、教科書を見直し……まあ、とにかく色々だね」

そこまで話してリヨウカはため息をついた。

エツジにはまだ今一、話が見えなかった。

「それで一体何がいけなかったんだ？」

「彼が乗った馬車はそれからスピードを緩めることは無かったのよ。それどころか、自分が起こした様な事故が起きない様にする為の努力は何もしなかった。彼の担当が教育であって、交通の整備などは管轄外だったのを理由にね」

エツジは絶句した。

罪を償う為にそこまでしようとする人間が、何故そんな簡単な事に思い至らなかつたのか分からなかった。

「彼は自分が貴族として何が出来るか追い求めたけど、自分も一人の人間である事を忘れてしまったのよ。残されたその子の家族はどう思ったでしょうね」

しばらくエツジはショックのあまり、何の返事も出来なかった。

「でも、それはその男だけの事だろ？アキやあんたはそんな事——」

エツジの言葉を、リヨウカは表情を変えずに厳しい声で遮った。

「私もジェインも実感の伴わないまま人々の暮らしを動かそうとしてる点では同じよ。何もその男一人だけが問題な訳じゃないわ。誰が選んだわけでもなく、資質に沿って役職に就くわけでもない、貴族なんて人間は皆ね」

エツジは彼女の言い方が奇妙な気がした。

自分自身もその一員でありながら、彼女の言い方はまるで貴族という仕組みそのものを憎んでいる様に聞こえる。

「……こんな時でも、あの子の肩を持つのね」

ぽつりと、今更気付いたかの様にリヨウカは言う。

それがアキの事だと悟って、エツジは顔を上げた。

「信じてる、それだけだよ」

エツジの返答をリヨウカは気に入らなかった様だった。沈んでいた様子から一転して、皮肉な笑みを浮かべる。

「信じる？・現にそのジエイン・アキに一度裏切られて、それが原因でこうして追われる身になったんじや無かったかしら？聞いてるわよ、あの子が城であなた達をセオニアの間者だと摘発したって」

エッジも否定は出来なかった。

彼自身、正直に言えばまだアキへの信頼は完全に戻った訳ではなかった。事情があつたのだと信じてはいても、彼女が何を思っていたのかは明かされぬまま。けれど、ラークやリアトリスの様な一族の使命でもなく、自分達を助けに来てくれたのもまたアキだけだった事をエッジは忘れてはいなかった。

一度離れて冷静になってみて、今更ながらアキがどれだけ複雑な思いを一人で抱えていたのかエッジは考える様になっていた。

「まあ、良いわ。いずれ裏切られて、あなたも思い知らされるんだから」

「そんな事にはならないよ」

リヨウカは不機嫌そうに鼻を鳴らし、それきり会話は無くなった。結局、開かなかつた缶は深術で吹き飛ばすしかなく、エッジとリヨウカはかなりの部分がパンくずになった保存用のそれを食べた。

セオニアのとある町外れ。

人目につかない森の中で燃えるような赤毛の少女と、いつもの様に丈の余った服をだらし無く着崩したフレットが言い争っていた。

少女は猫科じみた真朱の瞳を吊り上げ、怒りの感情を顔にする。

「あんたがヴィツアナで勝手な事しなければ、私はこんな所まで来なくてすんだのよ」

鞭を手に不機嫌な少女とは対象的にフレットは興味なさそうに岩の上に仰向けに寝そべてだらり、と右腕を垂らしている。

「俺が受けた任務はあいつを探す事だぜ。遠くから見たら似た奴なんて結構居るんだし、戦ってみないと本人かどうか分からないだろ？」
呆れた顔で、少女の方は盛大にため息をつく。

与えられた任務はきつちりこなすタイプの彼女は、フレットの行き当たりばつたりの行動に頭を痛めていた。

「だからって、そんな本気の戦いしなくても良いでしょ？片手動かないなんて馬鹿じゃないの」

動かずに垂らしたままの右腕をそのままに、頭だけ少女の方に向けるフレット。

「俺は楽しければ良いんだよ、それに向こうはもつと大ケガだった筈だぜ。俺より弱いのに指図すんな『爆発セルフィー』」

その言葉に、少女——セルフィーは頬を朱に染めて怒る。

「誰が爆発よ！私の識名は『紅蓮』ぐれんだって言ってるでしょ！」

うんざりした表情でフレットは彼女から視線を外し、空の方を向いて小声で呟く。

「……その反応が『爆発』だって言ってるんだよ」

気付く様子もなく、セルフィーは捲し立てる。

「大体、その騒ぎ起こしたせいで私たちも動きにくくなったでしょ。何かクロウ捕まってるみたいだし、警戒されたじゃない」

面倒臭そうにフレットが髪を搔く。

「あいつがあんな奴らに本気で捕まるわけないだろ。その気になれば居ないも同然の筈だ、俺たちにとってもな」

「私だって捕まえてる奴らの強さなんか心配してないわよ。見つけにくくなったって言ってるの！」

セルフィーはピシヤリと鞭を鳴らしてフレットを睨み付けるが、彼は目を合わせようとしなかった。

彼のその態度にセルフィーも怒って実力行使に出る。

左手で赤い何かを懐から取り出すとフレット目掛けてそれを撒く。キラキラ光る「何か」は撒いた側から次々に火のディーパスを吸い込んで赤い玉になり、宙に浮かぶ。それはちようど、シントリアに伝わる提灯の様だったが目にしたことすらないセルフィー達が知る筈も無かった。

ほぼ同時に、彼女の右手の鞭が飛び最も手前の赤い玉を打つ。

「ふっ飛べ、フレット！」

フレットがその行動に反応し起き上がるのをセルフィーが確認した直後、赤い玉があった位置から爆発が起きる。

炎に飲まれ彼の姿は見えなくなった。

「馬鹿。少しは思い知った？」

幾分気が晴れた様な顔のセルフィーだったが、背後からの何かを引つ掻く様な音に慌てて振り向く。

「馬鹿はお前だ」

動かない右手の代わりに左手の武器だけをセルフィーに突きつけ、フレットが立っていた。

全く無傷で——とはいかなかったが服以外はダメージらしいダメージも無い様子で。

ちらりと、爆発があつた方を彼女が振り返ると地面にフレットの鉄の鉤爪のものらしき跡があつた。

「右利きの癖に、まだそんなデタラメな動きを……」

思つたような結果が得られず、先程にも増してセルフィーの機嫌は悪くなる。

「お前の相手なら片腕で十分だ」

得意になる訳でもなく、興味無さそうにフレットは言う。

二人は睨み合つたまま動かず、フレットも突き付けた武器を下ろさうとしなかつた。

「何をしている」

と、突然の声に二人は対峙するのを止め、声のした方に向き直る。

深術を使うところを見られたならその相手は消す——互いに喧嘩をしていようとも、染み付いたその行動はどちらも変わらなかつた。

しかし、現れた人間を見て二人は警戒から緊張へと態度を変えた。

「勝手な争いは慎め、と言っている筈だ。それもスプラウツを統制する側の名有り同士で争うとは、馬鹿共め」

「バルロ」

現れたのは老人だつた。

歳は六十程だが、真つ直ぐに伸びた背は未だ高く威圧感がある。

スプラウツでは『純白』のネイティールを除けば唯一の成人で、セブンクローバーズの中でも異質な存在だつた。

『巖岩』のバルロ、スプラウツに居るものなら全員がその意味をよく

知っている。

バルロはフレットの鉤爪のリーチより更に一步離れた距離まで近付いた。

セルファイーは彼の怒りとその威圧感に身を固くする。

「ま、待ってバルロ、私は」

彼女の言葉を無視し、バルロは二人を『殴った』。

バルロは近付いた訳ではない。

彼の拳は届いていないにも関わらず、二人は地に叩きつけられる。

「つ……バルロてめえ！」

痛みに顔を歪めるもフレットはすぐに起き上がって、怒りを露にする。

セルファイーは震えて起き上がらなかった。

「やめろ、と言った」

明確な殺意を向けられながら、老人は微動だにしない。

「殴って人を従わせようって態度が気に入らねえ。俺に命令すんなよ、俺はもうあんたより強い。誰の指図も受けない」

「私に刃を向ければスプラウツには居られないぞ」

その返答をフレットは鼻で笑う。

「別に良いさ、強い奴と戦えるならどうでも良い。今はクロウとだつて戦えるんだ」

全く聞く耳を持たないフレット。

しかし、バルロはそれでもなお、虫でも観察するような目で彼を睨み続ける。

「何の為に名有りが七人もいると思っている。私達二人を相手にしても勝てるつもりか？」

未だに立ち上がらない傍らの少女を見てフレットが笑う。

「こいつが戦える訳無いだろ」

「セルファイー、フレットを攻撃しろ」

隙だらけのフレットの体をいきなり炎が包む。

突然の事に驚き、フレットは腕を振り回すが火は消えない。

「ぐ、この……セルファイー！」

怒鳴りながら左手の鉤爪で、少女の方に向かってめちやくちやな攻撃を繰り出す。先程まで無かったはずの岩に弾き返される。

「怒鳴っても意味はない、お前の方が強くともあの子が恐れているのは私の方だ」

セルファイは両目に涙を浮かべ、さっきの位置から動いていなかった。

恐怖が彼女を縛り付け、同時に支配する。それは恐れを知らないフレットには、決して理解できない感覚だった。

「それ位でいい、使い物にならなくなっても困る」

再びバルロがセルファイに指示を出すと、明らかに火の勢いが弱くなる。

フレットがそれに気付いて地面を転がると、火は消えた。

「やはりお前では駄目だ、フレット。クロウは私達が連れ戻す、お前は大人しくしている」

地面に伏せたフレットは憎々しげに毒づく。

「くそ、覚えてやがれ、バルロ」

これ以上は戦いにはならないだろうと判断したのか、セルファイがフレットから離れつつ尋ねる。

「それで、私……いえ、私達はこれからどうしたら？」

倒れたフレットからセルファイへ、バルロが視線を移すとそれだけで彼女は身をすくませた。

「奴らの向かう方向は見当がついてきた。このまま首都のウォーギルントに向かい、そこから人数を増やして探索を再開する。このまましらみ潰しに探して後手に回り続けるより早い」

戸惑いを顔に浮かべながら、セルファイは遠慮がちに質問を続ける。

「スプラウツは……四人もクロバーズが不在の状態で大丈夫、なんですか？」

「ネイデールが居る、お前の心配することではない」

老人に睨まれセルファイは縮こまったが、疑念は残った。

ネイデールはスプラウツの主要なメンバーではあったが、誰も彼

女の事をよく知らない。

十代またはそれ以下の年齢の者がほとんどの中で二十代後半の彼女の姿は異質であり、何時からメンバーなのかも判然としない。

自室にこもっている事が多く、セルフィーでも顔をよく思い出せない程だ。共に戦った事もないので実力も分からない。

「あれで本当に仲間なんて言えるの……？」

バル口に聞こえない程の小さな声で、セルフィーは呟いた。

※セブンクローバーズの情報が更新されました。

深術のエキスパートとして育てられた孤児の集団。

その中心的活動を担う精鋭にして、同時に味方同士の監視者でもある七人の深術士^{セキユアラー}。

人数が多いのは裏切りや命令違反を冒そうとしたメンバーが飛びぬけた実力を持っていても複数人で対処し、従わせる為。

各自がセブンクローバーズとしてそれぞれ識別名称を持っているがあくまでコードネームであり、成立してからそれほどの年月が経過していない為、本人の能力と名前が一致している者が多いが『流連^{りゅうれん}』の様に二代目である場合は本人の能力等とは無関係に前任者の識別名称を引き継ぐ事になる。

また、全員が自身の最も得意な一属性の使用に特化している。

『爪雷^{そつらい}』

名前：フレット

武器：鉄製の鉤爪

特化属性：雷

才能：並外れた身体能力

戦う事に喜びを見出し、誰よりも危険な少年。

術士としての素質もさることながら、近接戦闘のみでも正規の騎士を圧倒する年齢不相応の身体能力を持つ。

実力はともかくとして性格面に多大な問題があり、命令の有無に関わらず単独行動が多い。

また、戦いそのものに喜びを見出す性格ゆえに強敵との戦いをわざと引き延ばしたり、見逃す事もある。

それ故に実力とは反比例して仲間からの信頼は薄い。

『巖^{げんがん}』

名前：バルロ

武器：???

特化属性：地

才能：観察と経験による弱点の看破

子供達を鍛え上げた全員の師であり、統制者でもある老人。
元は軍人で、岩で殴られる恐怖をもって全ての子供をコントロールしている。

この人間なくしてスプラウツは集団として機能しない。スプラウツの中心と言っても過言ではない人物。

他のクローバースと比べると突出した戦闘能力を持っている訳ではないが、全員の弱点を熟知し裏切りを想定して身内との戦いに特化している為、直接戦った場合クローバース全員を打倒しうる手段を用意している。

『紅蓮』

名前：セルファイ↑New

武器：鞭、？

特化属性：火

才能：???

燃える様な赤い髪の少女。↑New

感情的で激し易く『爪雷』からは本来の識別名称を無視して『爆発セルファイ』と呼ばれている。自身の実力が『爪雷』には及ばないと自覚しているものの、術士として一流であるというプライドを持っている。その為興味の無い事にはやる気を出さない『爪雷』とは反りが合わず、喧嘩が絶えない。

『』

名前：

武器：

特化属性：

才能：

『流連』

名前：???

武器：？

特化属性：風

才能：なし（武器との関係あり）

二代目。前任者とは属性以外共通点なし。

他のメンバーと比べ成ってから日が浅く、実力的にも劣るが、それ故認められた事を喜び調子に乗りすぎている所がある。

『弧氷』

名前：ルオン

武器：弓

特化属性：氷

才能：『爪雷』には劣るものの高い身体能力

感情の大部分を喪失した少年。

弓という単独戦闘を苦手とする武器を持ちながら、空中で正確に弓矢を操るボディバランスと素早い跳躍力を持ち、氷柱を発生させる属性技「扇氷閃」と合わせて単独行動でも十分詠唱時間を稼ぎ戦闘する能力を持つ。

術の詠唱速度・威力・弓の扱い全てにおいて安定した能力を持つもののクローバース全体の中では尖った能力を持たない様に見えるが……

スプラウツの中では監視無しでも命令違反をせず、単独行動もこなせる貴重な人材。

『純白』↑New

名前：ネイティール↑New

武器：??

特化属性：光

才能：??

クローバースでは『巖岩』を除いて唯一の成人。↑New

味方であつても姿を見たものが少なく、部屋にこもっている時間も長いが『巖岩』からの信頼は厚く、他の全員が拠点を留守にしている場合単独で『巖岩』の役目を引き継ぎ、子供達の統制者の役目を担う。

第三十四話 追跡開始

《葉の町 スイローナ》

エツジは宿に寝かされていた。

セオニアの中の町に着くなりほとんど力が入らなくなり、彼はリョウカに引きずられる様にして宿に連れてこられた。

それからずっと、エツジは部屋に閉じ込められている。

彼は一度扉を開けようとしてみたが、外から鍵がかかっていた。

食事は運ばれてくるので困ることは無かったが、その時の従業員の自分への距離の置き方が明らかに普通ではないのでエツジは何とも言えない気分だった。

一人で会話の無い時間が続くと、クロウを追う事とブレイド達から逃げなければならぬ事とで焦りばかりが彼の胸の中に募る。

逃げるのに使った船は見つかってしまっただろうか？リョウカは何をしているのだろうか？

嫌な考えや疑問ばかりが必要以上にエツジの頭の中でぐるぐる回る。

休まざるを得なかったお陰で体調は良くなってきたが、意識がはっきりして余計なことを考える時間はますます増えていった。

風邪は治ったもののエツジの身体は確実に鈍っていた。

少しでもそれを解消する為エツジが運動していたある日、数日ぶりにリョウカが戻ってきた。

「ちやんと動ける様にしたのね、良かったわ」

「今まで何処に行ってたんだ？ずっと宿にも戻らずに」

エツジの質問にリョウカが首をかしげる。

「あら、戻ってたわよ？私の部屋は隣なもの」

その答えに彼は力が抜ける。

「だったら、顔くらい見せてくれよ」

「ああ、暴れだすかもしれない病人って事にしてたから。あんまり部屋に近付かない様にしたの」

従業員のエツジへのおかしな態度はそのせいだったらしい。

「どういう話にしてるんだよ」

「仕方ないでしょう。また脱走されたり、無理して治るのが遅くなったりされたら困るもの」

いかにもエツジがそういう事をするだろう、と言わんばかりに唇を尖らせるリヨウカ。

(いや、実際宿を脱走してこんな状態なんだけど)

エツジは自業自得の面があるのを認め、文句を言いたいのを堪えて気を取り直す。

「それで、何してたんだ？」

「せっかちね、久しぶりだから仕方ないかもしれないけど」

そう言うのと、いきなりリヨウカは服と剣をベッドの上に投げた。

「あ……」

そういえば、どちらも無くしたのだったとエツジは気付く。

「必要でしょうか？それと」

リヨウカは備え付けの机に近付くと、上にこの国——セオニア王国の地図を広げた。

「多分だけど、あなたの仲間とジェイン達の居場所が分かったわよ」

その言葉にはエツジも流石に驚く。

いくら時間があつたとはいえ、そんな事が出来ているとは彼も思わなかった。

「どうやって？」

エツジが聞くと、少し得意気に笑ってリヨウカは説明し始めた。

「良い？まず、ジェイン達は私達と同じ様に大した準備もないままヴィツアナからこのセオニアに船で来た。どこかで必ず町に寄らないと旅はできない。で、帆船の接岸から徒歩で行ける範囲の町って言う、私達がいること、ここ……こここの町の三ヶ所」

話しながらリヨウカは地図に印を付けていく。

海上都市ヴィツアナの西側の街に三つの印がつく。

「この町に騎士団が追ってるあのクロウって子を探してる人間がいなか探したの。向こうも手がかりが無いなら町で情報収集はせざるを得ないでしょう？」

「それでどこだったんだ？」

ここでリヨウカは微かに眉を寄せる。

「それがこの三ヶ所何処にも手がかり無しだったのよ、足がつきやすいと判断したのかしらね。正直ここから更に移動できる町となると多すぎて絞り込めないわ。でも……」

そこで不意に彼女はエツジの顔を覗き込んでみると、微笑んだ。

「セオニア王家の紋章を追ってる、って聞いてたから王の居るウォーギルト方面に絞って探してみたの。そうしたら、ここでそれらしい情報が見つかったわ」

リヨウカの指が今現在二人がいるスイローナから西へと動いていき、一つの街の上で止まった。

「バンガル、ここでラクとかいう騎士団と戦っていた男と、赤髪の子を見たっていう情報があるわ。二人ともクロウを探していたらしいからあなたの仲間よね？」

エツジは一人で色々考えていた悪い想像よりはるかに上手いききそうで、話を聞きながら内心ほつとしていた。

が、赤髪の子と聞いた途端、一気に嫌な予感が彼の頭を支配する。

赤い髪の間人は、エツジの仲間には居ない。

「急がないといけないかもしれない、その赤い髪の子は俺の仲間じゃない」

その言葉にリヨウカの顔も険しくなる。

「どういうことかしら？ 私達と、騎士団と、あなたの仲間の他にまだあのクロウって少女を探している人間が居るの？」

「それは……」

エツジは答えるべきか悩んだ。

スプラウツの事は、リヨウカにとってはいわば自分の国の闇。下手に知らない方が良いかもしれないと彼は思ってしまう、特に彼女の行動力を目の当たりにした今は。

しかし、リヨウカは言い淀んだ相手の反応を見逃さない。

「何か知ってるわね……まあ良いわ、すぐに話しそうも無いし続きは馬車の中で聞くことにしましょう」

「馬車？」

当たり前でしょう、という顔でリョウカはエッジを見る。

「そう、歩いて行ったら折角の手がかりが無くなっちゃうでしょう。ほら早く着替えて、先に宿の前で待ってるわ」

「ちよ、ちよつと待った！今の情報といいどうやってそんなに色々手に入れたんだ？」

部屋から出ていこうとしていたリョウカは、振り返って微笑を浮かべた。

「そんなの、これに決まっているじゃない」

彼女は片手で丸を——『お金』を作ってみせた。

着替えてエッジが乗ったバンガル行きの馬車の中、乗り込んだのはリョウカと二人だけだった。

貸し切り状態らしいが普通はあと六、七人位乗れる位の広さがあるので車内はかなりがらんとしていた。

「何か、この服落ち着かないな」

「文句言わないで、流石に更に服を買うお金は無いわ」

そうは言われてもエッジは人から服を選んで貰った経験がほとんど無く、その上あまりに今までの服と違いすぎた。

まず、マントがない。

旅をする上では毛布がわりに、雨風をしのごのに、と重宝していたので少々心許なかった。

それに上着も左右非対称で妙に長く、異国の服なのだろうがズボンの裾は広がって何だかスカートの様にも見えた。

「……この手袋、指に穴空いてるのは」

「流行りらしいわね、この国の若者に多いみたい。あまり国外の服で目立つのも困るでしょう。あ、そうそう」

戸惑っているエッジに、リョウカは以前借りた宵よいの地衣ちごころもを手渡してきた。

「これも預かっている」

「でも、これ、武器にもなるんじゃないのか？」

頷き、リヨウカは細い指で衣の生地を確かめる様に撫でる。

「これは職人の作った特別な物で、見る人が見れば誰のものか分かってしまう位貴重な物なのよ。万が一でも危険は冒せないわ」

エツジは首をかしげる。

「でも、身に付けなくても自分で持っていた方が良いんじゃないか？」
頬笑みを浮かべたままリヨウカは謎かけをする様に首を傾げてみせる。

「何でだと思おう？」

エツジは少し考えた。

「戦力で考えるならリヨウカが持っていた方が良いだろうから、戦闘以外だと……これをリヨウカが持っていることによるトラブルを回避する為？」

しかし、リヨウカは『見る人が見れば持ち主も分かる』と言っていた事を思い出す。

リヨウカは笑みを崩さないままエツジの言葉の続きを待っている。

「騎士団に追い付かれた時、リヨウカがこれを持つてると困るって事か？」

その答えに彼女は感心したように頷く。

「馬鹿じゃないみたいね。でも、お人好し過ぎるわ。私達が二人で行動してる時に私の武器をあなたが持つていたらどう見えると思う？」

そこでようやくエツジは納得した。

「俺に協力したなんて事になったらリヨウカも同罪になるもんな。分かった預かるよ」

そこで初めて彼女は困惑した顔を見せる。

「分かってる？私はあなたに誘拐の罪を着せようとしてるのよ。貴族である自分の立場を守る為なんて下らない理由で」

正直に言えばエツジも気は進まなかった。

しかし、ここまで来られたのはリヨウカのお陰だった。

「二人とも捕まるよりはマシ、だろ？」

エツジがそう言って笑いかけるとリヨウカは信じられないという風に首を振った。

「変よ、あなた……」

そう呟くと、エッジに衣を預けたまま席に座り直して黙り込んでしまった。

てつきりクロウを追っているのが誰かと聞かれるかと彼は思っていたが、忘れているのかりヨウカはそれ以上聞いてこなかった。

ちょうど良い機会なので話を逸らす意図も兼ね、エッジは自分から気になった事を聞いてみる。

「リョウカは、ブレイドの事知ってるか？」

彼女は初め、なぜ聞かれたのか分からなかった様だがすぐに合点がいった様に頷く。

「ああ、あなたは彼の弟だって言ってたわね。ええ、それほど懇意にしている訳でも無いけど、全く知らない仲じゃないって所かしら」

兄についてエッジは聞きたい事が沢山あったが改めて他人に尋ねると、どんな言葉を選べば良いのか悩む。

「どういう人だった、かな？ブレイドは」

「兄弟なのにもまるで他人の事を尋ねるみたいな聞き方ね」
責めるような響きをもって彼女は言う。

「小さい頃に別れて、それからあんまり覚えてないんだ」

エッジも記憶喪失のせいで、つい言い訳めいた口調になってしま
う。

その点に関してはリョウカは深く追求しなかった。

「そうね、強い人よ。あの年齢で団長を任されているのは伊達じゃな
いわ。シントリアの闘技大会で二回連続で優勝しているし、もうアク
シズIIワンドが誇る最強の騎士と言っても良いかもしれないわね」

エッジも対峙したときの動きから実力は分かっているつもりだっ
たが、改めてその様な評価を聞くと戦慄が走る。

今更ながら彼は自分がどれだけ無謀な戦いを挑んだのか思い知る。

ブレイドは全く本気では無かったのだろう、と。

「団長にしては珍しくどんな立場の人の言うことにも耳を傾けるから
人気もあるわ……まあ、煙たく思う人も少なくないみたいだけど、
ジェイン・リユウゲンのお気に入りだから表立って攻撃する人はそう

そう居ないけどね。ただ、最近はあなたの事ばかり気にかけていたわ、よほど心配していたのね」

「そう、か」

エツジはそれ以上聞けなかった。

この話題も話したくないのかりヨウカも話さない。

それからの道はこのセオニアの国の事や、これから向かうバンガルの事等を二人はぽつりぽつりと話した。

言葉はやり取りしていても、二人は互いの顔も見られなかった。

第三十五話 友と意地にかけて

あと少しで到着、誰かのそんな声が聞こえて私は顔を上げた。

しかし、見える景色は生い茂る樹ばかりで今までと代わり映えしなかった。

こうして男達に連れられて歩き出してから変化と呼べるようなものはほとんど無い。

私は再び下を向こうとした。

と、不意に今まで一行の中に居なかつた使いらしき男が現れ、先頭を歩いてきたクリフの所に近付き何事かを耳打ちした。

それ自体は見慣れた光景だったが、それを受けたクリフの反応は違っていた。

いつもなら頷いて礼を言う彼が、立ち止まって黙り込んだのだ。

使いはクリフに一礼して木々の中へと去り、クリフの代わりにマイロと呼ばれる男が使いに礼を言ったが彼もまた険しい顔だった。

何かあつたのは間違いなさそうだがそれは彼らにとつて、だ。

私は興味をなくして視線を足元に戻した。

《丘陵の首都 ウォーギルント》

森が開けると目の前に丘と丘に挟まれた街があつた。

外壁があるのだが、丘のある部分だけ途切れており完全には街を囲んでいない。代わりなのかそれぞれの丘の上には見張り台があり、兵の姿があつた。

建物の高さが中央大陸やエッジの住んでいたカースメリアと比べて低く、丘に挟まれて窮屈に暮らしている様に見えた。

整然と左右対称に並べられた街並みに城が溶け込んでいたシントラリアや、立派な塔が数多く立ち、水晶の輝いていた水上都市ヴィツアナとは随分違う。大きさはともかく、とてもこの国の首都には見えなかった。

街の全景を見た後、私は習慣通り下を向いていた。

その間に私はいつの間にか門を超え、人気のない通りを歩かされながら街の奥へと向かっていった。

どうやら、奥に見えた街で一番大きな城に向かっていているらしい。城……というより屋敷と言った方が近いかもしれない。

街壁の内側にこそあるものの、堀も高さも無い。しかも背後に例の丘、つまり壁の穴がある。およそ戦いに備えているとは言い難く、城らしいのは辺りの民家と違う尖った屋根の形と立派な門くらいで、ここに住んでいる人間はまともな神経をしていないと思った。

「半年ぶりか……」

「早い方だったな」

珍しくクリフが一人言を漏らし、それを聞いていた最も彼と一緒にいる事が多い男——マイロが相槌を打つ。

私はいよいよ長い牢獄での生活の覚悟を決める段階に来ていた。

それか、再び人殺しを求められるか……。

が、クリフはなかなか門をくぐろうとしない。

「クリフ……?」

「悪いけど、王様に報告しといてくれ。俺も後で顔出す」

そう言うとクリフはいきなり私の腕を掴んでこの場を去ろうとする。マイロは突然の行動に反発した。

「どういうつもりだ、どこへ連れていく」

「こいつを預けるのは決まっていただろ。これからどう扱うかの話し合いななんてこいつに聞かせたくない。それに……すぐにでも出発してえんだよ」

何かを悟ったようにマイロは引き下がった。

私はクリフの腕をすぐにでも振りほどきたかったが、今面倒になって長引くのは嫌だったので我慢した。

「フレアには?」

「戻ったら会おうさ」

「……」

意外なことにそれ以外のメンバーからも反論はなかった。

クリフはそのまま私の手を引いて来た道に戻っていく。

皆の目の届かないところまで来ると私はクリフの手を乱暴に振りほどいたが、何も言われなかった。

私がついてくると信じているように無言で街の中を歩いていく。驚くほどあっさりど、私は自分の足で歩ける状態になった。

こいつは私が逃げられないと思っっているのだろうか？

私の力を分かっているのだろうか？

呆れというか、侮られている憤りに近い感情が込み上げるが、会話が面倒な私は機会を待つことにして嫌々クリフの後をついていく。

逃げることを考えなかったというより、とりあえずその方が楽だった。

さっきの屋敷からずっと大通りらしき広い道を歩いていたが、到着する直前になってクリフは狭い道に入った。

表の通りには比較的きれいな家が多かったが、裏通りは少々壁の汚れが目立つ所が増える。

その中の特に大きな家の前でクリフは止まった。

あまり良い予感はない。

その背中に向かって私は問いかけた。

「私を売り飛ばしてもするつもり？」

「そんなことはない」

振り返らないまま答える。

感情を押し殺すようなひどく静かな声だった。

とうとう私の態度に我慢の限界が来たのかもしれない。

それなら上等だ、偽善ぶった表面だけの同情なんて私にはもう要らなかつた。

「じゃあ船に続いてまた監禁ってわけ？ ああ、気絶させてる間に目が覚めたらまた知らない場所って事」

さっきまで沈黙を貫けていたのが嘘のように、私はまくしたてていった。

いつも私の言う事なんてまともに取り合おうともしないこいつに、思い知らせてやりたかつた。

「ここまでの事はすまなかつた……」

その一言に、私の感情は爆発した。

「何それ……こんなところまで連れてきておいて、今更そんな謝罪で

済ませる気なの!？」

声が裏返るくらい大声で叫んだ私は、きつと端から見たらヒステリーを起こした様にしか見えなかっただろう。

それを自覚しながらも自分を抑えられなかった。

もうこれで終わるんだと思った。

怒りをぶつけようとしないうつこの煮えきらない態度も、やたらと関わってきて無意味なことを強いるお節介も。

「そんな風にお前は自分を守ってきたんだな……全てを拒絶しなきや生きられない位に辛い時間を」

唐突なクリフの言葉に私は言葉を失う。

『分かった風な事を言うな』と、言おうとしたが言えなかった。

「俺がついていくのはここまでだから安心しろ……元気だな」

「待——」

まだ頭の整理がつかないうちに、クリフは一方的に会話を終わらせて建物の扉を開いた。

最後まで一度も振り返らないまま。

そして、私たちは歓声に飲み込まれる。

「クリフ——」

何人ものか分からないくらい同時に声が聞こえ、視界に広がる子供達に取り囲まれた。

予想だにしなかった歓迎だ。

ただ、あくまで歓迎されているのはクリフの様で、子供達は私とクリフの間にも割って入ってくる。

別にこの中にいたくもなかったの、私を押し退ける流れに逆らわずに輪の外に出る。

「お前ら元気そうだな、特にラムは元気すぎてまた太ったんじゃねえか?」

自分を囲む子供達を見回しながら、全員に呼び掛ける。

さつきまでの暗さは微塵も感じられない。

「そんな訳無いだろ!太ってねえよ!」

手を挙げて返事したやつは喋るハムにしか見えなかった。

「背も伸びたみたいだから、それでチャラか……っか、半年でもみんな随分背のびたな。そろそろ俺の肩くらいまで来た奴もいるんじゃないか？」

ここに居るのは10代前半か、もっと若い子供ばかりのようで確かに一番背の高い子どもで私と同じくらいだった。

悔しいが私がちょうどあいつの肩ぐらいの背だ。

「ところで、チリアいるか？」

「いるよ」

返事をしたのは丸い感じの女性だった。

しかし、ぶよぶよの動きの鈍いタイプではなく、太い腕にはしっかりと筋肉があり体力はありそうだ。

クリフよりも一回りか、二回り位年上に見えたが、はっきりした声はそれだけなら二十代に間違えそうな程若々しかった。

「いつも急で悪いな、新しい子供を連れてきた」

彼女と、他の子供たちの視線が一斉に自分に向けられる。

私は反射的に目をそらした。

「その子がクロウだね。何、ここに来る子供なんて大体急ぎ。四つ子に比べればなんて事ないよ」

「ねえ、クリフ今日は遊んでいくでしょ」

用事が終わったと見るや、五つぐらいの女の子がクリフの腕にしがみつく。

「悪い、すぐ出るんだ」

突然しがみついていた子供にも嫌な顔一つせず、クリフが申し訳なさそうに答える。

私からすれば丁寧過ぎるくらいの対応だと思ったが、子供達からは一斉に不満の声上がる。

よほど好かれているらしい。

「チリア、押し付けるみたいですまねえな」

真面目なトーンでクリフは監督者らしき女性に謝る。

「良いさ、押し付けるつもりが無いなら。次はいつ頃来られるんだい？」

それは何気ない質問だったと思う。

「……さあな」

だからこそ、私はその妙な間が気になった。

女性も子供達もその答えに特に興味を示さなかったから、それが彼のいつもの反応だったのかもしれない。

けれど何か胸がもやもやする。

じゃあな、と何食わぬ顔で出ていこうとするクリフの背中を黙って見送ることが、私には出来なかった。

彼がドアを潜るのを追って、すぐに私も外に出る。

そして、見送りに出ようと私の更に残るからぞろぞろとついてくる子供の気配を感じ、その鼻先でやや力任せにドアを閉ざす。

その音でようやく私に気付いたらしく私の方を振り向く。

「何しに行くつもり？」

「お前が見送りに出てくるとは思わなかったぜ」

単純に意外だった、という顔で私の顔を見る。

けれど、今はそれが誤魔化しにしか見えなかった。

「何しに行くつもりか、答えて」

「それは……」

答えに言い淀む、話したくない事情があるに違いない。

いつもならはぐらかされる所だが、私の真剣さにか、あるいは後ろめたさからか、重い口を開いた。

「仲間の仇をとりに行く、お前を追ってきた緑の髪のヤツだ」

悪い予感が当たる。

「ラーク……」

初めて会ったとき、いきなり私に斬りかかってきて、エッジまで殺しかけた相手。

エッジは敵ではないと認めていた様だけど、私は信用していなかった。

あいつなら間違いなく、敵として現れた相手は容赦なく殺すだろう。

認めたくはないが、万が一向こうに殺す気があれば私でも何も出来

ずに死んでいた。

「死ぬよ?」

取り繕う言葉は無かった、それだけで十分の筈だと思ったから。
なのに……。

「かもな、そうなつてもお前の面倒はチリアがみてくれる。初対面でいきなりは信用出来ないかもしれないねえけど、いい人だ。ぜってー大丈夫だよ」

こいつは、私の言葉を何でもないみたいに笑いやがった。

「私の事なんか聞いてない、あんたが死ぬって言うてるの!」

苛立ちのままぶつけた言葉に、またも意外そうな表情をされる。

「なんだ……心配してくれんのか?」

違う。

こんな頭に来る奴の為に、私が心を痛めるなんて思われてるなら心外だ。

「意味もなく命を捨てるなって話! そんなの、自殺と変わらない!」

自分でも驚く位大きな声になった。

でも、私の言葉なんてまるで届いていないみたいにクリフは表情一つ変えない。

「お前にとつては無駄に見えても、ここだけは引けねえんだ。ここで引いたらバズに顔向け出来ない」

「死んだ人間なんて放っておきなよ! どうせ分からないんだから」

「例え分からなくても俺が知ってる、自分で自分を許せない」

いくら言つても全然聞かない。

私が黙つたのを見て、クリフはそのまま背を向けて去ろうとする。
ここで止められなければ、これが最後になる。

引き止めなければならぬ。

……言いたくなかったけど、このまま居なくなれるよりマシだ。

「私は、あんたの事大嫌い」

クリフが足を止めた。

「ああ、知ってるよ」

「でも……死んでいいなんて思っていない。ここに居る子供達だつてそ

うなんじやないの？それだけ必要としてくれる人が居るのに、あんたはそれを無視して勝手に死ぬつもりなの!？」

今度の沈黙は長かった。

クリフは真剣に考えているようだった。

でも、結局。

「自分勝手なのは分かっている。でも、これは俺が自分に課したやらなきやいけねえ事なんだ」

そう言って自身の胸に手を置く。

「これが俺。そんな俺でもみんなが愛してくれるっていうなら、死ぬ最後の瞬間まで俺は幸せな奴だった、って事だ」

そう笑った。

何でもないことみたいにあっさりと。

もう、私は耐えきれなかった。

「……そんなに死にたいなら勝手に死ぬ！」

何故か目元が熱くなり、クリフの顔をまともに見ることが出来なくなつて下を向く。

そして、今度こそ何も言わずにあいつは去っていった。

私が望んでも手に入れられなかったものを簡単に捨てて。

それがどうしようもなく悔しくて涙が零れた。

第三十六話 ラーク対クリフ

《黒葉こくようの町 バンガル》

「確実に近付いてるわ、ここにあなたの仲間が居たのは間違いなさそう。馬車には乗ってないみたいだから、もう追いつける範囲かもしれないわよ」

「そうだな……」

バンガルに着いてすぐにエツジとリヨウカは情報収集を開始し、思った以上にスムーズにラークらしき人物の話聞いていた。

結構な騒ぎになっていたらしくすぐに目撃者が見付かったからだ。

「何よ、順調なのに浮かない顔ね」

比較的上機嫌だったリヨウカに不満そうな顔をされるエツジ。

「こんな騒ぎを起こすなんてラークらしくないと思つて。これじゃ俺達以外にもすぐに見付かる。それに、赤い髪の子供の話もここに来てから全然聞かない」

エツジの疑問にリヨウカはさして興味を示さなかった。

「そうね、追っている相手が離れていて、なりふり構っていられなくなったのかもしれない。それと、聞いた情報が全て正しいとは限らないわよ。私達に真偽の判定なんて出来ないんだから、証言の多い情報の事だけを考えた方が確実だと思うけど」

リヨウカの言い分は正しかった。

ただ、それでも赤髪の子のことは気になった。

誰かの見間違ひなら、『燃える様な赤い髪』なんて特徴伝わってくるものだろうか？

そんな事を考えていたエツジは、近付いてきた相手に気付かなかつた。

「エツジ……さん？」

聞き覚えのある声。

エツジは、はっと声の主を探す。

アキが目の前にいた。

顔面蒼白で、信じられないものを見たという顔で呆然と彼を見つめ

ていた。

「……アキ」

「ジエイナー！」

アキに気付いたリヨウカは、隠す事もない殺気を露にする。

エツジは、リヨウカを制するためには彼女とアキの間に移動する。

いくら、武器を自分が預かっているとしても、今のリヨウカは人目もはばからず飛びかかる勢いだったからだ。

と、アキはいきなり彼女らしからぬ強引な動きでエツジの右手を、両手で強く握ってきた。

「お願いですエツジさん！私がおかを頼める立場でない事は分かっています。謝る意味が無いことも分かっています。でも……今だけ、助けて下さい。お願いします」

言いながら彼女は深く、深く頭を下げる。

握りしめられた手に冷たいものが落ちてきてエツジは気付いた。

アキは泣いていた。

「あまりに勝手なんじゃない？ろくに事情も説明しないであなたはまた——」

「待ってくれ、話を聞こう」

リヨウカの反応は当然のものだと思っただが、けれどエツジはそれを遮る。

今の今まで正直、会ったときアキやラク達の事を許せるかエツジは不安だった。

しかし、今こうして実際に彼女の姿を見て最初に彼の頭に浮かんだ感情は安堵だけ。

エツジが言いたかったことも山程の疑問も彼女の必死の頼みにかき消された。

「大丈夫、謝らなくていいから。何が起きてるのか教えてくれ」

アキは目を丸くして顔を上げた。

目を赤くしてぼろぼろと泣くその顔はあまりに悲痛だった。

エツジは後ろからリヨウカの「お人好し」となじる声が聞こえたが、今は気にならなかった。

「クリフさんが……」

その一言で、彼の脳裏に最悪の想像が浮かんでぞわりと鳥肌がたった。

「そうか、君が出てくるのも当然だったね。僕らを追っている側より、追われている側の方が僕らの居場所を掴める」

剣を構えるラークは、ごく自然に目の前に現れた敵にそう話しかけた。

木々で視界の悪い山の斜面、戦いやすい場所でも無いが、本来道では無いので他に人気はない。

戦場としての条件はそれで十分だった。

「良いのか？アキちゃんを一人で行かせて」

クリフは棘のある声でラークに尋ねる。

「良くは無いな。リア、彼女をお願いできるかな？」

居なくなつたアキを追うのをリアトリスに頼むラーク。

「が、リアトリスは動かなかつた。」

「ごめん……できない。アキは心配だけど、ラークが死ぬか、誰かを殺す所なんて離れるわけにいかないよ」

そう言う彼女の顔は今にも倒れそうだった。

離れたくても離れることなど出来ない、というのが正しいだろう。

「そう、分かつた。じゃあ、下がって」

特に反対もせず、ラークはそう言ってクリフだけを見据える。

「お前だけは、これ以上進ませるわけにいかねえ」

「そうだね、僕にとつても君は今一番厄介な敵だよ。今度は負けない」
クリフは、今までのどんな表情より敵意を剥き出しにして青いオーラを纏う。

ラークの表情はいつもと変わらない、ただ背中に背負った二本の鞘から剣を抜き、一本の三日月形の剣として展開する。

しかし普段より少ない口数は全てを物語っていた。

始まりに合図はない。

ただ、二人は同時に動いた。

クリフの突進で瞬く間に間合いが詰まり、首を狙ったラークの剣がクリフの腕で弾かれる音が響く。

それを皮切りにして、リアトリスの目では追いきれないほど激しく二人はぶつかり合う。

剣を持たないクリフは両腕と両脚に仕込んだ鉄製の防具で剣を受け止め、反撃する。

対するラークの半月型の長剣は、その身の丈ほどもある長さの為にクリフの様に細かくガードする事は出来無い為、体全体を使って受け流す様な大きな動きになる。

(くっ、何で押し切れない?)

一見互角の戦いだが、それは異常だった。

ラークが横薙ぎに繰り出してきた剣を、クリフの左腕が上に弾き、同時に右腕が真っ直ぐラークの顔目掛けて振るわれる。

それに対して、ラークは弾かれた剣を体を軸に一回転させるような動きで対応する。

いくら武器を扱う事に慣れていようと、それだけの大振りな動きが格闘術についてこれるはずが無い。

密着した間合いは格闘術の距離、ここまで接近させて戦っている時点で長剣にとっては既に不利なのだ。

だからこそクリフは真っ先に突進し、それを止めようとラークはリーチ差を活かして先に攻撃した。

にも関わらず、二人の攻撃の速度は互角。

『クリフが反対の腕でパンチを繰り出す速度と、ラークが体を一回転して防御から攻撃に転じる速度』で互角なのだ。

圧倒的に有利な筈の距離で、クリフは幾度も防御する事さえ強いられていた。

「このー！」

二人が同時に攻撃をしかけ、クリフの蹴りの軌道とラークの斬撃の軌道が交差する。

ぶつかり合った反動で二人は互いに一步下がり、密着していた間合いが離れる。

今まで互角だったのはあくまで、クリフに有利な距離での話だ。
それが離れると言う事は――

(まずい！)

クリフは全力で体を反らせる。

その動きをなぞる様に、空中を斬撃が飛んで行く。

服を掠めて行ったそれは、背後にあった木の表面を直接斬り付けたかの様に刻む。

気を刃に乗せることで飛ぶ斬撃は、空中を進む内に威力が落ちるのが常だ。

距離減衰の少ない深術と合わせた技でない限り、一撃で人を殺すような威力はない。

魔神剣が初歩に分類されるのもその為。

わざわざ気を込めてまで威力の落ちる刃を飛ばす位なら、気に乗せた刃で『技』として直に斬りつけた方が遥かに強い。

だから、飛ぶ斬撃が撃てようが撃てまいが、どんな武器でも自分の得意な武器の間合いを維持して戦うのが基本なのだ。

だが、ラークの攻撃は『飛ぶ』をモはや越えていた。

ラークは、刃を振るうのと同時に離れた位置を切り裂いていた。

(冗談だろ、これじゃ剣が伸びてるのと変わらないじゃねえか！)

勢いを緩めることなく続く攻撃に、クリフは剣の動きを予測して身を屈め、翻し、飛ぶ。

完全に避けたつもりでも、クリフの左腕には痛みが走り血が飛んだ。

何とか再び間合いを詰めなければ死ぬ。

しかし、詰めることが出来ない。

焦りがクリフの正常な思考まで奪おうとする。

(まだ死んでたまるか！)

こんな斬撃の嵐に向かって、しかも木々の多い場所でそれを使うのは避けるべき展開だった。

だが、他にそもそも選べる選択肢がない。

躊躇うことなく、クリフは青い気を足の裏に集中させ一度目の疑似

詠唱を完了させた。

『瞬』

足の下から猛烈な反発が起こり、全てがクリフめがけて突進してくる。

樹の突進を避けるため右足で横に飛び、即座に左足でラークへ方向を修正する。

直後目の前に迫ったラークに完全な勘で左拳を突き出すのと、ラークの剣がその肩をかすめたのは同時だった。

クリフの攻撃は顎を直撃し、ガクンとラークの顎を仰け反らせる。

——瞬間的な超加速、『瞬』。

相手からすればクリフの姿は完全に消えた様に見えるだろう。

しかし、それはクリフも同じであり、ひとつ方向転換を間違えれば木にぶつかって自爆し、ほんの少し拳を出すのが遅ければ自分から左腕を捨てに行ったことになっていた筈だ。

これ以上の好機はない。

クリフは伸びきった左腕を引きながら、右脚の回し蹴りで相手の意識を刈り取るうとする。

狙いは頭、相手はまだ視界が戻ってすらない。

しかし、その一撃は少々乱暴に剣で受け流され、かわされた。

ラークは顎に攻撃を受けながらも、その勢いに逆らわず流される様に自分から後ろに下がっていたのだ。

それによって、蹴りの威力は大きくそがれた。

剣を下から上に払ったのは勘だろう、きちんと見えて反応していた今までの動きと比べると精細が欠けていた。

何という相手だろう、とクリフの背に嫌な汗が流れる。

さっきの一撃は完全に不意を突いていた、並みの相手なら仕留められる位の直撃だ。

にも拘らず、一瞬の躊躇すらなくこの相手はそれすらも計算に入っていたかの様に冷静に対処してくる。

流石に追撃は来ない。

今の攻防はラークも防ぐだけで精一杯だったのだ。

しかし、すぐに離れかけた間合いを詰めなければ、クリフは再び一方的に攻撃を受け続ける事になる。

だが、間合いを詰めても押し切ることは出来ない。

もう、クリフには選択肢が無くなり始めていた。

(本当に勝てるのか?)

嫌な疑問が胸に浮かぶ、闇雲にそれを払うように雄たけびを上げてクリフは突撃した。

体勢を立て直したラークの目が再び、クリフを捉える。

その目には怒りも無ければ驚きもない。

ただ、無言で初めと同じ至近距離での戦いに剣で応じた。

「こつちで、本当に合ってる?」

全速力で山の中を駆けながら、エツジはアキに尋ねた。

彼は間に合うか、とは聞けなかった。

彼女自身がそれを一番不安に思っているのがよく分かっていった。

「多分……すみません、山歩きには疎くてどうしてもはつきりとは」

アキは心底申し訳なさそうに謝る。

「よくそれで、助けを求めようなんて思ったわね」

アキの頼みを聞くという時点で既に嫌がっていたリョウカは不満を隠しもしない。

「今は止めてくれ、リョウカ。命がかかってるんだ」

「ええ、探してる本命でも無い誰かの命がね。今、一つでも余計な事に首を突っ込めば死ぬのは貴方なのよ。自分が追われているのを忘れないで」

エツジも忘れたわけではなかった。自分が死ねばクロウを助けられないのも分かっていた。

それでも彼は、今ここでクリフとアキを見捨てるという選択肢は微塵も選ぶ気にならなかった。

それはクロウに誰も殺させないと決意した彼自身を裏切ると変わらなかつた。

「それに、これは師弟の問題でもあるんだ。ラークを止めないと」

「はあ、とあからさまに大きなため息をつくりヨウカ。

「これだけの速度で走りながらよくそれだけの余裕がある、とエツジは正直感心する。

「裏切ったやつを師匠なんて言わなくて良いのよ、そんな最低な人は放っておきなさい」

「その最低な奴から剣を習って強くなったのが俺なんだ」

真剣な顔でリョウカは悩む。

「付いて来る相手を間違えたかしら……まあ、どう生きるのも貴方の人生だものね」

説き伏せるのは諦めてくれた様でエツジはひとまずほっとする。この分だと、手も貸してくれそうには無かったが。

と、普通の山にはありえない金属のぶつかり合う音がエツジの耳に入る。

「これ……」

まだ戦っている、少なくとも今はまだ手遅れではない。

エツジ以外の二人も気付いた様子で、いよいよ会話は無くなる。

この音が途切れたら、それは本当に最後かもしれない——その緊張感から、音が途切れない事だけを祈ってエツジ達はスパートをかけた。

第三十七話 決着

「はあ……はあっ——『発』」

決め手を欠いたクリフは、二回目の擬似詠唱を完了させ体から純粹な力の奔流を放つ。

それは爆発に近かった。前回ラークを吹き飛ばし戦いを終わらせた技だ。

至近距離からのそれをかわす方法など存在しない。

「がはっ!？」

しかし、真横に向かって吹き飛んだのはクリフの方だった。

ラークはクリフが技を出そうとしたのを見るなり、背後の地面に自分の武器を突き立て、それを支えにして『発』の勢いを推進力に変えた強烈なカウンターの回し蹴りを放ってきたのだ。

まるで、初めから分かっていた様なその対応に反応することなど出来なかった。

「心外だね、他にも技はあるだろうに前回と同じ技でかかって来られるなんて」

「う……ぐ、あ」

自身のありつたけの力を込めた一撃の力を側頭部に受け、クリフはまともに立ち上がることもすら出来なかった。

「気の扱いに関しては君の方が上手だね、僕じゃ威力を緩和するので精一杯だ」

淡々と語りながら、ラークは地面から武器を引き抜き、倒れたクリフの元へと歩みを進める。

その動きに、ここまで黙ってみていたリアトリスが短い悲鳴を漏らす。

「君は戦うことには慣れてるけど、殺し合いはしたことが無いんだね。残念だよ、君ならきつと経験を積み強くなれた」

剣を持ってクリフの足元までたどり着く。

「冗談じゃねえ……お前と同じ、人殺しになっていくなんてごめんだ」
「そう、でも殺意はあったね。君は生かしておくには危険すぎる」

ゆつくりと構えられた剣が、クリフの顔の上で停止する。

「最後に何か言い残すことは？」

「ねえよ……殺人鬼になんて」

侮蔑を込められた言葉にもラークは反応を示さない。

「分かった。じゃあ、お別れだ」

「ま、待って、待ってよラーク！」

突然かけられた声にラークは、首だけをリアトリスの方に向け尋ねる。

「何？」

静かだが、あまり長く待つつもりは無いとその瞳は告げていた。

「その人は仲間の仇を討とうとしてただけで……ラークの事は殺せない、って自分でも言ってたじゃない」

「慣れていないだけだよ、初めの一人が僕になってもおかしくはない。間違いで人を殺す可能性は誰にだってある」

リアトリスは首を横に振る。

「そんなの、誰でもじゃない。キリがないよ、殺す必要ない」

リアトリスの言葉に、ラークは残酷な問いで返す。

「ここで、殺さなかったせいでクロウを取り戻せなかったら？ そうなったらどうなるか僕より、リアの方が想像できるんじゃないかな」

「それは……それは」

目の前で人が死にかけていたらそれを助ける。

遠くで人が死ぬ可能性があるなら、それを阻止しようとする。

しかし、命を天秤にかけどちらかを助けるとしたら選べない。

それがリアトリスだという事をラークは理解していた。

答えが返ってこない事で終わりだと判断したらしく、ラークは剣を振りかぶった。

「待て、ラーク！」

二度目の制止がかかり、ラークは再び剣を止める。

今度の声の主には流石の彼も少し驚いた様だった。

「エッジ？」

息を切らしながら、迫ってくるその姿はもう会う事は無いだろうと

思っていた弟子そのものだったからだ。

傍らにはクリフの姿を見て真青な顔で去っていたジェイン・アキと何故かタリア・リヨウカの姿まである。剣を止めるには十分だった。

「エッジ……無事で……？」

リアトリスは目の前で起きていることを忘れた位の驚きを表していた。アキはまだ油断できない状況にラークの剣から目を離すことが出来ず、リヨウカはこの場にいる全員を観察し、傍観に徹している様だった。

「ラーク、殺すのを待ってくれ。クリフなら、俺達と協力できるかもしれない」

「事情はジェイン・アキから聞いたみたいだね。でも、どうしてそう思うのかな」

驚いたのは一瞬だけ、ラークはすぐにさっきまでの無表情な笑顔に戻る。

「クリフはクロウを道具にする様な扱いを黙って見過ごす人間じゃない。クロウを助ける目的はきつと同じはずだ」

しばし、沈黙。

エッジが本気か品定めする様に、ラークはエッジの瞳を見つめたまま黙る。

が、ラークが次に口を開く前にクリフがその考えを否定した。

「……悪い、エッジ。俺を助けようとしてくれるのはありがたいけど、それは無理だ」

エッジは驚いて一歩前に出、音を立てて剣を構えなおすことでラークがその動きを制した。

「俺もクロウを助けてやりたい、それは事実だ。けどな、それはあいつを戦いの道具なんかにさせない為だ。こんな命すら道具みたいに扱う様な人間には渡せねえ。こいつにクロウの居場所を知らせる位ならここで死んだ方がまだ」

「どうあっても協力するつもりはないか、やっぱりダメみたいだね」

エッジは、首を振って大声で二人を否定する。

「何でそうなるんだよ！二人とも同じ様にクロウを助ける為にここま

でやってきたのに、何でそんな簡単に命を諦められるんだよ！」

「同じじゃないよ。僕が動くのは強大な力を人間に渡さない為、彼が動くのはクロウ個人の為だ。そもその目的が反するんだよ僕達は」

ラークの瞳は揺らがない。

ただ柔らかに細められたままだ。

エツジは、その目は何も映していない様な気がして背筋が凍った。

「誰のためなんだよ、それは」

「皆の為だよ、この世界の皆だ」

とても真つ当な理由だった。

実際、多分正しいのだろう。でも、エツジには何かが引つかかった。

「それは……『ラークの思い描く誰のためでも無い』って事だろ？」

初めて、ラークの表情が変わった。

ようやく大事な事だと気付いたかの様に真剣に。

「それはおかしいと思う。そんな理由で人を殺すなら、それは誰のためでもない。ただ、人を殺すために殺してると変わらない！」

「僕が、ただの人殺しだと……そう言いたいんだね」

ラークにしては珍しく、感情がにじんだ言い方だった。

そのまま怒りに任せて剣を振り下ろしてしまおうのではないかと思うくらい。

構えられた剣は動かない。振りかぶられる事もなく、クリフの首に迫る事もない。

そして、ラークは剣を収めた。

リアトリスが信じられない様子で声をかける。

「ラーク、良いの？」

「……そこまで言うのなら、見てみるよ。このままの行く末を。本当にここで彼を殺す必要がないかどうかをね」

ゆつくりと、クリフのもとから後ずさりして離れるラーク。

全員が動くのをしばしたためらい、それからリアトリスとエツジが駆け寄った。

「大丈夫ですか？見える範囲の傷は治しますが、目まいはすぐには引きませんからじっとして下さい」

「……」

自分を治そうとするリアトリスと目も合わせようとせず、クリフは口を開かない。

「ごめん、俺がもう少し早く来ていればあるいは」

その言葉をクリフは遮る。

「エツジが謝る事じゃねえよ。そもそも俺が……くそっ」

言いかけた言葉は誰も追及しなかった。

代わりに、今まですつと状況を静観していたリョウカが口を開く。

「いきなり出てきて邪魔をするようで悪いんだけど、それで結局誰と誰が一緒に行くことになったのかしら？」

穏やかな言い方をしていたが、長く一緒にいたエツジには苛立っている事が分かった。

その質問に対して、ラークが厳しい目を向ける。

「その通りだね、確かに今後の事ははっきりさせないといけない。けれどタリア・リョウカ、それはそもそも君が何故こんなところにいるか分かってからだ。シントリアの貴族の娘はみんな放浪癖持ちなのかな」

「あら、名乗ってもいないのによくご存知ね。一目で分かるってことは中央大陸出身かしら。それともシントリアの騎士のお友達？」

ラークの笑顔の皮肉に対して、リョウカも試すように問いで返す。

「自覚の無い有名人は困るね、今挙げた人間以外にも君の事を知っている人間は大勢いるよ。散歩にしては遠出が過ぎるって事もね」

ラークとリョウカ、お互い歩みよる様子は微塵も感じられない。

が、次に来る展開を予期してかアキは安堵していた表情を固くした。

「勿論用事が無ければ来ないわよ。ねえ、ジエイン・アキ？」

リョウカの事を知らないリアトリスは、彼女の言葉に困惑した表情を浮かべる。

明らかにその声が、アキに対する敵意を含んでいたからだ。

「……言っている意味がわかりませんが」

つぶやく様に言うアキもまた、珍しく怒りをにじませていた。

「分からない？ジェインの人間が何の企みもなく敵国に来るわけが無いって言ったのよ」

声高に言いながら、リヨウカはアキの顔を指差す。

「あなた達の目的はクロウという子を助ける事だと言ったわね。その子を陥れて国中から追われる様な身分にしたのは誰だったかしら？仲間の振りをしながらそういう準備を平然と進めていたのは誰だったかしら？あなた達、本当にこの子がクロウを助けようとしているなんて信じている訳じゃないわよね」

リヨウカは確かめるように、一人一人の顔を見回しながら喋る。少なくともラークはリヨウカの言葉を否定する気は無いようだ。

アキは顔を真っ赤にしながら、しかし誰の顔も見ないで俯く。

「私は、信じてるよ」

その空気を破る様に発せられたリアトリスの一言にリヨウカはキツ、と振り返る。

リアトリスはクリフに術をかけながらも、いつになく厳しい視線でリヨウカを睨み返す。

「ばかだっと思って思いかも知れないけど、私アキの事好きだから。アキが自分の口から否定しない限り、私は誰が何を言ってもアキの言葉を信じる」

驚いた様子でアキはリアトリスの方を見た。

「俺は、ずっと信じてるなんて言えないけど、それでもアキは仲間だから。アキが出した答えならそれを受け入れる。例え敵になるとしてもそれは敵になってから考えればいい事だ。仲間の時から考える事じゃない」

エツジもそう続ける。

万全では無いはずのクリフも、上半身を起こしてリヨウカの方を見る。

「……俺もエツジも、アキちゃんずっと一緒に旅してきたんだ。ここでいきなり出てきたお前に何を言われたところで今更変わる気なんてねえよ」

アキの目から、涙がすつと落ちた。

リヨウカは唇を噛んで、忌々しそうに言う。

「エツジ、あなたのお人好しも相当だと思っていたけど、あなたの仲間もみんな大概ね……ここまで甘いと思わなかったわ」

ふう、とラークがため息を漏らす。

「それは僕も同感だね」

リヨウカはアキの顔をにらみ、今にも飛び掛りそうな殺気を放つがそれ以上の事はしなかった。

「意地でもあなたを連れ戻すつもりだったけど、ここで全員を敵にしても勝ち目はないわね。馬鹿馬鹿しい、これだけ苦労してここまでたどり着いて無駄足だったなんて」

自分の行動を自嘲するように呟き、リヨウカはアキを威圧する様に目の前に立った。

アキは身じろぎしながらも、見上げる形でリヨウカの顔を睨む。

「けど、あなたと父親の思う通りになんてさせない、絶対に。忘れない事ね」

そう捨て台詞を残すと、リヨウカはそのままアキの横を通り過ぎてバンガルの方へと引き返し始めた。

その背中には決然としていたが、エツジには寂しそうに見えてわずかに良心が痛んだ。

リヨウカはきつとそういう同情を望まないだろうが。けれど、エツジをここまで連れて来てくれたのは間違いなく彼女だったのだから。

第三十八話 立ち止まり、道は続く

「さて、僕は少し先にいくよ。また後でね」

「クリフさんから話を聞かないと行く先も定まらないのに、そんなに一人になりたいのかな」

まるでリヨウカの事もクリフとの戦いも無かったかの様に、誰の返事も聞かずにラークは消えた。

まだ戸惑いながらもリアトリスは、ラークの居なくなった方向に向かってそう呟く。

「……ありがとうございます、皆さん」

気兼ねする相手がいなくなった事で緊張の糸が切れたのか、小さな声でアキはエツジ達みんなに礼を言った。

「私は聞かれたことに、思った通りの答えを返したただけだから」

リアトリスは笑って言った。

ラークが平時浮かべているものとは違う、暖かい笑みで。

「礼なんて良いって」

敗北したばかりのクリフもアキ同様あまり元気が無かったが、一応そう返した。

それからアキはエツジに向き直って、改めて頭を深く下げた。

「私は、エツジさんに嫌われて当然の人間です。……一度ならず二度まで裏切って、逃げた。その上で助けてくれたエツジさんにはどんな感謝をしてもし足りません、ありがとうございます」

その謝罪を聞いてリアトリスは目を伏せて沈黙を守った。

エツジは言葉が出なかった。

恐らく海上都市での行動はアキの意思など全く無いラークの独断だったのだろうと彼も気付いていた。

けれど、誰よりそれを後ろめたく思っただけ自分を責めていたのはアキだったのかもしれない。

「謝らなくていいよ、俺も今の今まで正直に言えばどこかアキ達を信じられない気持ちがあった。多分怖かったんだな、本当にアキやリアトリスに裏切られるのが。アキはこうして俺を信じて、頼ってくれた

のに」

口にだしてみたら、本当に情けない理由。

何て馬鹿だったんだろうとエツジは自分を殴りたくなった。

「だから、アキが謝る事なんてないよ。ありがとう、俺を信じてくれて」

アキは目を丸くして言葉をなくすと、どう反応して良いか分からない様子で後ろを向いてしまった。

「エツジ、私も……謝らないと」

「いいよ、リアの事も俺は信じてるから」

リアトリスはまだ謝りたそうな顔をしていたが、エツジは聞かなかった。

「……ありがとう、エツジ」

正直に言えばエツジは自分でも少し照れ臭かったので、それ以上会話を続けられなかった。

王国騎士団第三師団長、ブレイド・アズライトは完全に孤立していた。

王都を大混乱に陥れた元凶を一度は捕らえておきながら、それを実の弟だという理由で逃した。

——それが彼に対するシントリア全体の評価であり、ブレイドはそれに言い訳一つしなかった。

そこへブレイドを師団長へと推したジェイン・リュウゲンを快く思わない者達の思惑と、異例の若さで師団長であった事への不審が重なり、彼は牢へ繋がれていた。

本来なら騎士団の人間が外部の人間達に裁かれる等と言う事は無い。

しかし、王城襲撃が行われた日の黒い霧はあまりに広範囲であった為、普段陰謀論など相手にしない市民達も一連の事件に関しては危機感をもっていた。それゆえ世論はブレイド・アズライトが師団長の地位を維持し続ける事を良しとしなかった。

そんな理不尽な扱いの中にあってもブレイドは部下達に「誰が次の

師団長になっても従うように」とだけ伝え、黙って全てを甘受していた。

ブレイドはこの扱いを覚悟していた。
そして、理解もしていた。

どれだけの誹謗中傷を受けようが、王を襲撃した犯人の仲間とみなされようが、これは序の口に過ぎないのだと。

エツジ本人が捕まっていたなら、この程度の扱いでは済まなかった。

だから、それを助けようと考えた時点でこの結末は当然覚悟しておくべきものだったのだ。

そんな彼の元に、隻眼の男ジエイン・リュウゲンが現れた。

「失敗したか、お前の私や国への忠誠も所詮価値としては弟以下という事か」

「足りなかったのは私の力です。その様な事は決してありません」

その言葉を、リュウゲンは否定も肯定もしなかった。

ただ、形式的に交わす事を決めていたかの様に。

「誓えるか」

迷いなど無く、ブレイドは答える。

「我が魂に誓って」

その言葉にリュウゲンは胸を打たれる様子も無く、淡々と受け答えを続けた。

「では、出してやる」

その言葉にブレイドは困惑する。

「私にどんな覚悟があろうと、誰も納得しないでしょう。いくら貴方でも私を独断で解放することなど……」

「納得させる。その代わり、お前という人間には死んでもらうぞ」

その意味を理解する事は出来なかったが、揺れる事ないリュウゲンの瞳を信頼と受け取り、ブレイドは疑問をはさむ事無く頷いた。

「負けたんだな、俺は」

「……うん」

クロウが居るといふ首都ウオーギルトの場所を教えて貰って道もはつきりし、落ち着いたところでクリフはポツリと呟いた。

確認する様に言われたので、エッジもつい否定する事が出来ず頷いてしまう。

「俺、こう見えても仲間の中じゃ一番強いんだぜ？だから、敵討ちするなら俺しか居なかった。でも……駄目だった」

クリフは自嘲する様に笑う。

「全力なのに通じもしなかった。あげく情けをかけられて、結局こうして敵の案内までしてる。馬鹿だな、クロウに怒られるのも当然だ」
滅多に弱音など口にしなかったクリフだったが、一つこぼすと堰を切ったようにとめどなく言葉があふれてきた。それなのに彼は笑う。

それがエッジは余りにいたたまれなかった。

「違う、勝負の決着が全てだったのに俺がわがままで割って入ったんだ。ラークに協力させたのは俺だから、それにまでクリフが後ろめたさを感じる事なんてない」

「いや、エッジは助けてくれたんだ。結局のところ、エッジが居てくれなかったらそれこそ真正銘の無駄死にだった」

「それは……」

今度は否定できなかった。

実際、エッジもここでクリフに死んで欲しくなかった。

「ありがとな、助けてくれて。こんな大馬鹿を」

「俺はそんな風に感謝される様な人間じゃない。ただ、皆から離れて、やりたい事に気付いたんだ。その一つがクリフを死なせない事だけだ……自分の為だよ」

一瞬その答えにクリフは目を丸くしたが、それから心底おかしそうに大笑いした。

「——はははは！それが本当なら、お前すげえよ、エッジ」

「え……何が？」

エッジには何が何だか分からなかった。

分からないといえば、後ろからぶつかってきた柔らかいものが何かも彼には分からない。

と、思うなりいきなり耳元でリアトリスの声がして、エッジはどきりとした。

「良かった、本当に仲が良いんだね二人とも。クリフさんってもうちよつと怖い人かと思っちゃった」

「リ、リアー！いきなりなんでくつついて来るんだよ！」

エッジは慌てて抗議するが、リアトリスは聞こえていないかのよう嬉しそうに彼の首に腕を回したまま離れない。

元々彼女は幼馴染であるエッジとの間に距離を作らない方だったが、一度彼の死を覚悟していたせいか再会で一時的に嬉しさが頂点になっっている様だった。

「そんなことはねえ……と思うぜ、自分で言うのもあれだけどよ。さつきは悪かった、回復までしてもらったのにろくに礼も言えなくて」

「そんなのいいですよ。ラークがあんな事した状況じゃ信頼してっていう方が難しかったし」

真剣な表情で謝るクリフ。

彼女の方も、クリフがそれ程怖い相手ではないと分かったので気にしていないようだ。

「それにしても仲良いんだな。恋人か？エッジ」

その流れのままに真顔でふとそんな事を言われ、エッジは一瞬頭の中が真っ白になった。

「ち、違うって！どつちかかっていうと……ええと」

エッジはとつさに言葉が出て来ずに、自分とリアトリスの様な関係を何と言うんだったかと混乱する。

そんな彼を他所に、くつついたままのリアトリスは慌てる様子もないうーん、と悩む。

「どつちかかっていうと姉弟きょうだいかな。エッジのお兄さんのブレイドと、私と、エッジの三人で子供の頃よく一緒に遊んでたし」

「へえ、そんな関係だったのか」

リアトリスの口からブレイドの名前が出てエッジは、はっとする。「覚えてるのか？ブレイドの事も」

え？、と不思議そうな顔でリアトリスは首をかしげる。

「もちろん！三人で毎日森に入って遊んだからね、危ないこともたくさんあったけど。崖から落ちそうになったり、森の深いところを探検して怒られたり」

そう言われてエツジもぼんやりと思い出す。

彼の忘れていた記憶はこういった拍子に少しずつ戻ってきていた。

「ああ……それは覚えてる。何でそんな森深くまで行ったのがばれたのか分からなくて、俺が慌てて謝ったんだよな。そしたら——」

「そうそう、服が破れることを怒られてただけだったのに、勝手に危ないところに行った事までばらしちゃって余計怒られたんだよね。遊ぶのに夢中で服の事にも気付かないなんて、今思えばなんて間抜けだったんだろうね」

その時の事がよみがえって来てエツジは思わず顔が綻んだ。

それはリアトリスも同じな様で、二人はしばし顔を見合わせて笑った。

「ブレイドだけはエツジが口を滑らせる前に気付いてたから頭を抱えてたっけ。あの頃から一番しつかりしてたよね。まさか、騎士団に入って、あんなに偉くなるとは思ってなかったけど」

そう言われてエツジは兄の立場になって少し考えた。

再会した弟にあんな事を言われる気分はどんなものだろうか。

（そうだ、本当ならブレイドとは普通に再会を喜んで、祝いの言葉一つだって言っただけだっただけだ）

「……折角再会できたのに、俺ブレイドにひどいことしかしなかった」「エツジ？」

彼の言った意味がよく分からなかったリアトリスは困惑した表情になる。

「母さんが死んだ時の事とか、ショックで俺色んな事忘れちゃったみたいで、混乱して『兄なんかいない』って言っちゃったから」

リアトリスはそれを聞いて目を丸くしたが、エツジを責める様なことは一言も言わなかった。

「そういえばエツジ、私と再会した時も様子おかしかつたもんね……」

そっか、ごめん、私こそ無神経だったよ。今の今まで気付きもしなかった」

うな垂れるリアトリスの様子がいたたまれなくなつて、エツジは反射的にリアトリスから離れ彼女に正面から向き合つて否定した。

「リアトリスが謝る事なんか何も無いよ。俺が弱かつただけだから」

彼の言葉にリアトリスは、首を横に振つた。

「エツジは弱い訳じゃないよ。何でもそうやって抱え込むから限界が来ちゃうだけ。私より、ブレイドの方がそれは分かつてるから、大丈夫」

「……そうかな?」

「そうだよ、二人ならきつとまた前みたいに仲の良い兄弟に戻るよ」

エツジは今はとても、そんな風には思えなかつた。

次に顔を合わせたとしても彼は退けない、兄も退かない。きつと、また戦いになるとエツジは確信していた。

それでも、リアトリスの言葉は彼にとってほんのわずかでも希望だつた。

いつか、何もかもが無事に終わったならエツジも普通にブレイドと兄弟として居たかつた。

ブレイドの事は答えが出なかつたが、目指すべき進路は決まつた。

(セオニアの首都ウォーギルント、そこにクロウが居る)

第三十九話 日常という異常

私はチリアに与えられた一人部屋で生活をしながら、静かに毎日を通り過ぎていた。

何となくは分かっていたが、ここは孤児院の様な所らしい。

正真正銘、子供たちを育てるだけの施設らしく、私は当たり前のように自由を与えられていた。

無理矢理、誘拐されてきた事も、ひどい扱事も全てが嘘の様だ。

流星に監視すらされていないと考える程私はお人よしではなかったが、そんな事はどうでも良かった。

クリフが出て行ってもう一週間以上になる。

何の報せもなく、あいつも戻ってこない。

ずっとあいつの事ばかり考えていたわけではないが新しく与えられた環境、何もする事が無い環境に戸惑っているといふクリフの事を思い出してしまふ。

もつとも、厳密に言えば『する事がない』というのは間違いかもしれない、私の他の小さい住人達は朝から忙しく動いている。

まず、朝起きて洗面所を奪い合うようにして顔を洗い、洗濯物をかごに押し込む。終わったものから次々に食卓につき、パンにかぶりつき、牛乳を飲む。

そして、食事を終えた者から自身の部屋に戻るなり、外に遊びに行くなり思い思いに散っていく。

そんな戦場の様な朝の中心にいて、仕切っているのはチリア。

顔を洗う手順を飛ばしたものは容赦なく彼女の手で食卓から弾き出され、洗面所に戻される。

皿を置きっぱなしにして、どこかへ去ってしまった者にも怒声が飛ぶ。

彼女の澄んだ鐘の様な大声は、騒がしい子供達の中にあってもよく響く。

チリアは外に遊びに行く子供たちからは必ず行き先と、帰る時間を聞いていた。

聞きそびれた場合は年長の子に追わせ、帰ってきたときに雷を落とす。

そういうのを何度も繰り返すうちに子供たちは自分から行く先を告げるようになり、年長になる程他の子供の面倒をみる様になっていく。

……よく出来た管理体制だと関心しながら、人気の無くなった洗面所からそんな光景を横目で見つっ顔を洗うのが私の日課だ。

出来れば食事も一人でしたかったが、長々食べている子供がいつも数人居るので食事の時はそいつらと一緒にだった。

閉じ込められている訳でもないのに、自分だけ特別扱いして部屋まで運んできて貰う訳にもいかない。

幸い、一番混む時間さえ避ければ、離れて座るのは容易い程度には食堂は広がった。

一定の間隔で置かれた円形の木のテーブルの一つに座って、今日も一人で黙って朝食をとる。

他に残っている子供は二人。

一人はいつもやたら散らかして食べる少年で、パン一つでも他の子の数倍のカスを散らかしてやたら時間をかけて食べる。

もう一人は静かな女の子で、こっちはあまり見ないのだが今日は何故かまだ残っている。

チリアも私が自分の皿を受け取るまでは居たが、散らかしている少年を注意すると洗濯しに去っていった。

誰がいるかだけ軽く確認した後は特に興味もなく、私は自分の皿だけを見た。

とにかくさつさと部屋に戻りたいので、皿のベーコンサンドイッチと卵と牛乳とほうれん草のソテーを順に片付ける。

料理自体は美味しいと思う。

私たち……エッジやアキや自分はあまり料理が上手くなかったの
で、嬉しかった。

(まあ、クリフが作った時だけはマシだったけど)

こんな時でも、思い出させるなんて心底イラつく奴だ。

もつとも、もう死んでしまったかもしれないが。

食べ終えた皿をもつて席を立ち、洗い場に向かう。

と、さっきの女の子がまだ座ったまま事に気付く。

そのこの下品な子供みたいに食べ続けているならまだしも、こっちは座ったまま皿を見つめて立とうとしない。

「何でまだ座ってるの」

私に話しかけられて、目の前の女の子は身を震わせて怯える。

そして、目も合わせないまま小声で呟く様に答える。

「……ほうれん草」

見れば、その野菜だけ皿に残っている。

その答えの意味がよく分からず、彼女の皿に手を伸ばす。

「食べないなら捨てるから、貸して。それも一緒に洗う」

私の行動に焦った様にいきなり顔を上げる。

「食べないと怒られる」

なら、と私は皿を進める。

「じゃあ、食べて」

そこで再び、その少女は先ほどまでと同じように固まってしまう。

「何、食べられないの?」

「食べられ、なくはない」

「じゃあ、食べて」

再び進めると、少女は泣きそうな顔でほうれん草をにらみ付けた後、それを口に入れた。

「時間かけても状況は変わらないんだから、次からさっさと食べちゃいなさい」

少女が涙目で頷いたの確認して私はその皿もすぐに回収し、洗い場を見てため息をついた。

「悪いねクロウ、助かるよ」

「何が?」

「そうして皿を洗ってくれる事がよ」

言われながら、私は汚れを落とした皿をまた一枚箆にあげる。

洗い場に置いただけで去っていく子供がたくさん居たので、皿が山

積みになっていたのだ。

「毎日同じ皿を使ってるでしょう、明日この汚れた皿が自分のところに回ってくるなんて嫌だから……全部人任せなんて、みんな危機意識が過ぎるよ」

私の返答の何がお気に召したのか、チリアはおかしそうに笑う。

「危機意識、とはまた随分極端な言葉を使うね。皿洗わなかった位で死なないよ」

「食器の洗浄をあまりに疎かにしたら病気になったり命に関わることだってあるよ。旅をしている時だったりすれば尚更」

チリアは優しく微笑む。

「ここでそこまで汚れを放置しておく事なんて無いから、そこまで心配しなくても大丈夫だよ」

私は納得いかなくて、ついムキになった。

「それはチリアが洗っているからでしょう?」

「それは、まあ……そうだねえ」

苦笑しながらも今度は認める。

子供の仕事を押し付けられて嫌じゃないんだろうか。

「面倒だって思わないの?」

私が先に洗った皿を布巾で拭きながら、チリアは答えた。

「面倒だよ、皿洗いも、洗濯も、買い物も、掃除も何もかもね。生きていくのに楽な事なんてそうそう無いさ」

それはそうかもしれないが……子供たちの分までやってやる説明にはなっていない。

「だから、何人分でも変わりないって事?」

チリアは先生が生徒に教えるときの様にゆっくり首を横に振ってみせる。

「違うよ、いきなり子供が全部やるには面倒すぎるから、出来る様になるまではあたしがやるのさ」

よく意味が分からない。

「それでも、チリアがやる必要なんてないんじゃないの? 親でも無いのに」

「親でなくても、そうやって育ててくれる誰かはどの子にだって必要なんだよ。それが普通は親だっていうだけでね。それに」

胸を張ってチリアは私に念を押した。

「私はここに居る皆の母親だよ」

「そう……」

冗談なのか、本気なのか、どんな反応を返していいのか分からなかった。

ちようど皿洗いも終わったので、私は逃げた。

ただ、チリアの言葉一つ一つに胸がざわついた。

二階の部屋に戻り、後ろ手にドアを閉めてため息をつく。廊下からどたどた慌てて走る様な音がした。

別に子供の走る音などここでは珍しくも無いのだが、何か気になって今歩いてきたばかりの廊下を覗く。

静まりかえって、誰もいない。

……いや、静か過ぎる。

今残っている子供達は大体が部屋で遊んでいる筈だし、走って外に向かったにしては玄関の音もしない。

それに、何より私が部屋に戻ったことで慌てて逃げた様に感じた。怖がられているのは自覚しているし構わないが、部屋や私を調べている何者かがいるなら知っておかなければならない。

手っ取り早く闇のデイクラスを建物中に撒いて調べる手もあるが、私は足を使って調べることにした。

一応、不要とは思いつつも曲がり角を警戒しながら辺りを搜索すると、探していた相手はすぐ近くにいた。

二階の廊下の端に、うずくまって震えている少年がいる。

何故逃げ場のない二階の行き止まりになど逃げたのだろう、と愚かさに呆れかけ、思い直した。

——これは、戦うことしか考えていない人間の感覚だ。そこから外れているからといって、間違いだと否定する権利なんてない。

エツジが、時間をかけてそれを教えてくれたから。

「どうして逃げたの？」

厳しい言い方をしないようにしようとは思ったが、優しい言い方も分からず、結局冷たい言い方にしかならない。

相手はますます震え、両手で必死に頭を抱えて小さく縮こまった。そこで、ふと気付いた。

少年の右腕には傷がある。

鋭利な刃物で切り裂かれた様な、時間が経ってもはつきり分かる様な傷が。

それには見覚えがあった。

「術を覚えなければ、戦わなくて良いなんて思っていないわよね？ 覚えがないなんて選択肢はないわよ」

「素質がある人間しか集められないんだから」

「さあ、痛いのが嫌なら。言う事を聞きなさい」

……思い出す事さえなかった記憶が浮かんできた。

きつと、それだけ自分はどうでも良いと思っていたに違いない。

その傷を付けたのは私だ。

殺してないならどうでもいいと思っていた。

術をきちんと使えない子供ならどの道生きていく事さえ許されないのでから。

結局のところ痛みで教えなければ、その子が死ぬ。

それが人の死を目の当たりにし続け、生き死にだけを基準にした私の「道徳観」だった。

そんな考え方で、良心の呵責すらなく彼を傷を付けたのは自分。

怯えられるのは当然だ。

命からがら、逃げてきた思い出したくも無いであろう悪夢が目の前に現れたのだから。

『黒翼』……か。つまらない名前」

未練も何もなかったけど、今更ながら管理者としてセブンクローバーズの自分に与えられていた名前を思い出す。

私が何の興味も無い立場でも、この少年にとっては私は未だにセブンクローバーズの一人なのだ。

少年は私の眩きなど耳に入らないようだった。
いや、きつと何を言っても耳に入らないだろう。
離れることしか、私に出来る事はない。

「……次から行き止まりじゃない方へ逃げなさい。でないと私に捕まるわよ」

反応はない。

私が居る限り、この子が立ち上がる事はないだろう。

私はそれ以上その子に干渉せず、来た道に戻って、自分の部屋の戸をそつと扉を閉めた。

気が付くと私は虚空を見つめたまま、ただ立ち尽くしていた。

何が助かるっていうの？チリア

私なんか居ない方が良く

置いておく価値なんてない

最後の最後に私をこんなところに連れてくる為だけに努力してたなんて

やつぱりあんたは馬鹿だよ、クリフ

「私、やつぱり化け物だよ……ねえ、ラーヴァン」

自分の影を見つめて、右肩を抱いて私は一人で笑った。

※セブンクローバーズの情報を更新されました。

深術のエキスパートとして育てられた孤児の集団。

その中心的活動を担う精鋭にして、同時に味方同士の監視者でもある七人の深術士^{セキユアライ}。

人数が多いのは裏切りや命令違反を冒そうとしたメンバーが飛びぬけた実力を持っていても複数人で対処し、従わせる為。

各自がセブンクローバーズとしてそれぞれ識別名称を持っているがあくまでコードネームであり、成立してからそれほど年月が経過していない為、本人の能力と名前が一致している者が多いが『流連^{りゅうれん}』の様に二代目である場合は本人の能力等とは無関係に前任者の識別名称を引き継ぐ事になる。

また、全員が自身の最も得意な一属性の使用に特化している。

『爪雷^{そつらい}』

名前：フレット

武器：鉄製の鉤爪

特化属性：雷

才能：並外れた身体能力

戦う事に喜びを見出し、誰よりも危険な少年。

術士としての素質もさることながら、近接戦闘のみでも正規の騎士を圧倒する年齢不相応の身体能力を持つ。

実力はともかくとして性格面に多大な問題があり、命令の有無に関わらず単独行動が多い。

また、戦いそのものに喜びを見出す性格ゆえに強敵との戦いをわざと引き延ばしたり、見逃す事もある。

それ故に実力とは反比例して仲間からの信頼は薄い。

『巖^{げんがん}』

名前：バルロ

武器：???

特化属性：地

才能：観察と経験による弱点の看破

子供達を鍛え上げた全員の師であり、統制者でもある老人。
元は軍人で、岩で殴られる恐怖をもって全ての子供をコントロールしている。

この人間なくしてスプラウツは集団として機能しない。スプラウツの中心と言っても過言ではない人物。

他のクローバースと比べると突出した戦闘能力を持っている訳ではないが、全員の弱点を熟知し裏切りを想定して身内との戦いに特化している為、直接戦った場合クローバース全員を打倒しうる手段を用意している。

『紅蓮』

名前：セルファイ

武器：鞭、？

特化属性：火

才能：???

燃える様な赤い髪の少女。

感情的で激し易く『爪雷』からは本来の識別名称を無視して『爆発セルファイ』と呼ばれている。自身の実力が『爪雷』には及ばないと自覚しているものの、術士として一流であるというプライドを持っている。その為興味の無い事にはやる気を出さない『爪雷』とは反りが合わず、喧嘩が絶えない。

『黒翼』↑New

名前：クロウ

武器：スローイングダガー

特化属性：闇

才能：体内に持った闇の宝珠の欠片

スプラウツを脱走する前のクロウ。↑New

彼女はエッジ達には自分もまた子供達を管理し教育する側であった事を告げなかったが、これがクロウが脱走する事が出来、また抜けた後も執拗に追われ続ける最大の理由である。

宝珠の力を使っている状態のクロウは、術士としての資質のみで考えれば全てにおいて最高クラスの能力を所持しており、全ての術の詠

唱を破棄し、『爪雷』すら及ばない威力の術を用い、数kmの範囲の視界を闇で閉ざしたまま内部の状態を正確に把握し相手をピンポイントで攻撃する事も可能。

通常時にクロウがこれらの能力を使用すると相応の負担が身体にかかる（目の色の変化はこれに因るもの）が、体内の闇の宝珠の欠片の意思IIラーヴァンを黒い巨鳥として実体化させた状態ではその負担が無くなり、上記の能力が制限なく使える様になる。

能力だけなら間違いない最強のクローバーズであったものの、本人が人を殺す事を無意識に嫌っていた為広範囲に効果が及ぶ様な術は滅多に使用せず、黒い霧による感知を活かした情報収集や最小限の殺害に抑える暗殺等を主としていた。

自ら望んで戦いに赴く事で最強の座に位置する『爪雷』とは対極であり、能力的にはクロウが勝るものの無意識に力を抑えてしまうため、殺人を楽しみさえする彼には対人戦の能力では一步劣る。

『流連』

名前：???

武器：？

特化属性：風

才能：なし（武器との関係あり）

二代目。前任者とは属性以外共通点なし。

他のメンバーと比べ成ってから日が浅く、実力的にも劣るが、それ故認められた事を喜び調子に乗りすぎている所がある。

『弧氷』

名前：ルオン

武器：弓

特化属性：氷

才能：『爪雷』には劣るものの高い身体能力

感情の大部分を喪失した少年。

弓という単独戦闘を苦手とする武器を持ちながら、空中で正確に弓矢を操るボディバランスと素早い跳躍力を持ち、氷柱を発生させる属

性技「扇氷閃」と合わせて単独行動でも十分詠唱時間を稼ぎ戦闘する能力を持つ。

術の詠唱速度・威力・弓の扱い全てにおいて安定した能力を持つもののクローバース全体の中では尖った能力を持たない様に見えるが……

スプラウツの中では監視無しでも命令違反をせず、単独行動もこなせる貴重な人材。

『純白』

名前：ネイティール

武器：??

特化属性：光

才能：??

クローバースでは『「r b：巖岩>げんがん」』を除いて唯一の成人。

味方であつても姿を見たものが少なく、部屋にこもっている時間も長いが『「r b：巖岩>げんがん」』からの信頼は厚く、他の全員が拠点を留守にしている場合単独で『「r b：巖岩>げんがん」』の役目を引き継ぎ、子供達の統制者の役目を担う。

第四十話 『紅蓮』のセルフィー

スプラウツを統括する『巖^{げんがん}』のバルロは苛立っていた。クロウの搜索が思うように進んでいなかったからだ。

最も可能性の高そうな王城内を、ジェイン・リュウゲンの協力者も利用しほぼ探し終えても見つからない。

クロウの力を知った上でセオニアが誘拐をしかけたのなら、必ず管理の行き届く場所に置こうとする筈、とバルロは踏んでいた。

しかし、きちんと警護された施設のいずれにも居る気配は無かった。

(街の中に放置しているとでも言うのか……馬鹿な)

そうなれば厄介。搜索すべき範囲は一気に広がる。

ただ、一つだけ彼が気になる場所があった。

町の中にある孤児院と思しき施設。

もしやと思つてバルロは一度子供を侵入させたのだが、その時は即座に孤児院の女性に看破されてしまった。

しかし、そこに居るなら今まで見つからなかったのは納得がいく。

何故そんなところに置いているのかは彼も腑に落ちなかったが。

(試してみる価値はある、か)

やや大きめだが、ありふれた邸宅——そう偽装した拠点の一つで、バルロは考えをまとめ始めた。

「そういえば、セルフィーの報告にあつたクロウを追っている奴らも首都に近づいていたか……」

ふと、思い出して呟く。

確か以前ジェイン・アキが護衛代わりに『孤氷^{こひょう}』を使っていた時に戦闘になった相手だったが、それを退けられたのは同じ名有りの『黒翼^{くろよく}』クロウが居た時の話だ。

そのジェイン・アキも今回なぜか独断で行動を共にしている様だが、特に守れという指示も出ていない。

もとよりリュウゲンの娘であるという以上の利用価値を持たない子供。

こちらを裏切ってこの先障害になるなら、いつそ早々に始末してしまった方が安全だ。

データの無い人間も二人増えている様だが、容易に接近を感付かれる様な間抜けはセルフィーの敵では無いだろう。

もつとも、それだけ形振り構わずクロウに執着する者たちも他にいない。

野放しにせず、こちらも先手を打って対処した方が良いだろう。

クロウの脱走から始まる一連の混乱にも随分振り回されたが、そろそろ片を付ける時が来た。

「もうすぐなんだよね？」

「ああ」

ラークとクリフは事務的に目的地が近い事を確認する。

クリフとの協力を認めた後、ラークはしばらく誰ともろくに話さなかった。

いつもの様に先頭に立って行動し続ける事もなく、どこかぼんやりしている様でさえあった。

それがようやくいつもの調子に戻りつつあり、今の様に再びクリフと険悪なムードになる事が増えた。

二人の間にある溝が深い事は全員が理解していたので、誰もなかなか口を開けずウォーギルントへの距離が近づくのに反比例して会話は減っていた。

とはいえ目的地が目前に迫ったここに至っては改めて確認しなくてはならない事があり、リアトリスが口を開く。

「クリフさん、セオニアの仲間の人達は協力してくれるでしょうか？」
その問いに悩むクリフ。

「前にも言ったが、俺が説得すればすぐ戦闘になる事は回避できると思う。けど、クロウをここからアクシズIIワンド領内に連れ帰るつもりなら、それは多分認められねえ」

ラークは本気で悩んでいる様子も無く、考え込んでみせる。

「困ったね、やっぱり力づくしか無いかな」

「……エッジの為にここまでお前と戦う事はしないで来たが、俺の仲間に出そうとしてみろ。俺は死んでも止めるぞ」

クリフの殺気のこもった視線を受けて、ラークは微笑む。

「それは可能な限り避ける。そういう方針だったよね、エッジ。何か考えはある？」

エッジは正直話を振られるとは思っていなかったなので戸惑った。

ラークが方針の意見を求めること等初めてかもしれない。

「クリフ、セオニアの王様はどんな人なんだ？」

「そうだなあ、よく話を聞いてくれる人だぜ。それに可能な限り譲歩して、少しでも色んな人の希望を叶えようとしてくれる。王としては若干お人よし過ぎるところもあるんじゃないかと思うけど。けど、それでも王だ。敵国に戦力をみすみす渡す様な事は絶対許さない」

当然と言えば当然だったが、そういう人物なら可能性はあるかもしれないとエッジは淡い希望を抱く。

「そうか……うん、なら、一応。行動の順序くらいなら。策って呼べるようなものじゃないけど」

へえ、とラークが目を細め、エッジはその目を睨み返す。

「王様を説得するつもり？」

「いや、まずはクロウと話をしようと思う」

「クロウさんと？」

不思議そうな顔をするアキにエッジは頷く。

「結局、それが一番早道になると思う」

皆まだエッジに質問がありそうだったが、それは遮られた。

ラークがいきなり、リアトリスとアキの頭を押さえてその場に伏せさせたのだ。

それとほとんど同時に、風を伴った炎の弾が二人の居た場所を通過した。

「敵!？」

完全に不意を突かれた事に焦りつつ、剣を抜くエッジ。

「君の仲間かい？いきなりのご挨拶だね」

「こんなやり方の不意打ちする奴はいねえよ、ほとんどな」

クリフとラークも武器を構え追撃に備える。そこへ、街道から少し離れた茂みの方から無邪気な笑いが響いた。

曇りの無い、それでいて明らかに敵だと分かるこの状況に不釣合いな少女の笑い。

「あはははー何その反応？そんな武器構えるだけで、壁も張らずに詠唱もしないなんてまともな術士いないの？」

アキとリアトリスも起き上がり、笑い声の方を見る。

近づいてきたのは子供達だった。燃える様な赤毛の鞭を握った少女と、それを守る様に両手を突き出して立つ四人の子供達。その子供達が張っている光の壁が前面を守っている。

「気をつけて下さい、スプラウツの子供です。深術に関してなら騎士団の深術士セキユウラー以上の」

その言葉が癪に障ったのか、途端に赤毛の少女の声のトーンが落ちる。

「ああ……やっぱり裏切ったんだ、ジエイン・アキ。もう仲間じゃないんだし、年上への口の聞き方がなっていないから、要らないね」

興味無さそうに少女は右手を振り上げて呟く。

「死んじゃえ」

深術を唱えてくるとばかり思っていたエッジ達はその行動に戸惑った。

詠唱が無い。

それでは術を撃てても、人を殺せるような威力にはならないはずだった――

「みんな、伏せて！」

リアトリスの剣幕に反射的に全員が見上げると、上から拳程の赤い小さな光が落ちてくる所だった。それが風船の様に膨らんでいき、エッジ達の目の前で子供の頭位の大きさになる。

それを確認した瞬間、彼らの視界は炎で塗りつぶされた。

「あーあ、発動する前に潰せば大した威力出なかったのに……まあ、素人にそんな期待してもしようがないか」

派手な光にため息をもらしながら少女はにこりと笑うが、その光が

消えてもエツジたちが無事な姿でいるのを見て表情が固まる。

「術を開始してからも集束コレクトを続けて、短時間で威力を底上げするなんて……この子普通じゃない。今の上級深術級だよ」

その言葉にエツジは戦慄する。同じ時間で彼が集束コレクトできるディープスはせいぜい下級深術級。

相殺できないまでもそれで威力を弱めようと考えていたエツジは、それが如何に甘い考えだったか思い知る。

赤毛の少女はさつきまでの余裕から一転して、怒りを剥き出しにしていた。

「どうやって? コレクトバーストも使わずに、私のエクスプロードを破るなんて。バルロヤクロウでも無いのに!」

リアトリスはショックを受けた様に少女の視線を受け止めただけで答えなかった。代わりにラークが答える。

「サーカス一座の天才魔術師は伊達じゃないよ。リアトリス・フロアライトは、守りなら世界最高の術士の一人なんだから」

「ラーク!」

その呼び名が好きではないのか、リアトリスは複雑な表情をする。

「……自分では絶対言わないけどね」

赤毛の少女はリアトリスを睨みつけながら、地面の状況を観察する。

(炎の跡が五人の居るところだけ、鋭角的に欠けてる……爆発の方向を逸らす攻撃術と、障壁との併用。それも瞬時に炎属性と見抜いて冷気の閥属性のディープスで最速の効率で、か。気に入らない)

少女は周りの四人の子供に命令する。

「攻撃よ。障壁は維持しつつ、撃って!」

四人の内二人は手を突き出した姿勢のまま動かず、残りの二人が詠唱を開始し交互に炎の弾を撃ちはじめる。

先ほど不意打ちで使ってきたのと同じ、風を伴った炎だ。火属性のディープスだけを使った術より温度が低い代わりに、速度が速い。

殺傷力としては劣るが、急所に受ければ十分危険な術。

リアトリスが即座に、光の壁をエツジ達全員の前に張ってそれを防

ぐ。

先程の攻撃に比べれば数こそ多いものの、二体一でもリアトリスは押される様子も無い。

そこへ、赤毛の少女は奇妙な赤い石を二つ投げつけて追撃する。

見る間にその石は先程と同じ光に変わり、炎をまとって大きさを増していく。

防げない様な攻撃を前にしても、リアトリスは冷静に壁を維持し続ける。

「リア、今日は色クロマティッククリスタルの水晶は——」

「大丈夫、使わないよ」

他の仲間が止める間もなく、ラークはリアトリスの障壁に守られていない方へ飛び出す。

「真空破斬しんくうはざん」

剣が振るわれるのと同時に、直接触れていない赤い光が二つとも両断される。

二つの赤い光は先程の様に大爆発を起こすことなく、光の壁に当たって他の炎弾と共に消えた。

『『その石』が壊れると術はきちんと発動しないみたいだね、ヒントをくれてありがとう』

ラークの挑発に赤毛の少女が舌打ちし、彼を指差す。

(石?)

エッジがよく見ると、地面に赤い宝石の様な石の欠片が落ちていた。

温熱筒に使われているのと同じ炎のディープスを集めやすい石だ。それを術の核として利用して、集束の速度を上げていたらしい。

ラークはそれを破壊したのだ。

「馬鹿ね。その攻撃を防いでも一人で出てきたらただの的よ、また黒焦げにしてあげる」

エッジ達全員に向けられていた炎の弾が全てラークに向けられる。

さらに赤毛の少女が指を鳴らし、ラークの足元から炎が吹き上がる。

しかし、指を鳴らし終えた瞬間、もうラークの姿はそこに無かった。

指示されるまま動いていた子供達の表情に焦りが浮かぶ。

「正面じゃない、壁を張りなおして！」

赤毛の少女が子供達の向きを無理矢理変えさせるのと、障壁の側面に回りこんだラークが剣を振るうのは同時だった。

鮮血が舞い、敵の子供のうち一人が倒れてリアトリスが目を逸らす。

赤毛の少女がラークを追い払うように右手を振り、それ以上の追撃をさせまいと炎がラークを遠ざける。

残った三人の子供達は、仲間が倒れた事に怯えていたが赤毛の少女に叩かれ無理矢理光の壁を作らされる。子供達の正面だけに張られていた壁はやや小さく分割され、今度は彼らを中心に三方向に張られた。

ラークのスピードを目の当たりにして、攻撃の手を減らし一先ず全員で防御に回るつもりらしい。

「エツジ！君達は今のうちに先に行くんだ。ここで仕掛けて来たという事は、向こうも先にクロウを確保しようとしている可能性がある」
注意を引き付ける様に剣を振り、攻撃を続けながらラークが叫ぶ。

「大丈夫ですか？いくらお二人でも、彼女達は危険な相手です」

アキの不安そうな言葉に、リアトリスは真剣な表情のまま口元だけでも笑みを浮かべて見せる。

「私とラークなら大丈夫。エツジもアキも、クロウを助ける為にここまで頑張ってきたんでしょ？ここで間に合わなかったら意味が無いよ、行って」

エツジ、アキは頷くと、リアトリスの障壁から飛び出す。そこを狙って飛んできた炎弾はアキが開いた傘で流れる様に弾かれた。

一瞬クリフは躊躇いを見せ、リアトリスを振り返る。

「俺は、残っても——」

「超近接戦闘しかできない君じゃ足手まといだ、助けは要らない」

言いかけたところで、クリフの言葉は即座にラークに遮られる。

「お前の為じゃねえよ！ちゃんとその娘守れよ！」

怒って言い返し、クリフもエツジ達と走り出す。

赤毛の少女はエツジ達の行く手を阻もうとしたものの、自分以外の三人の子供全員を防御に回した事でラークとリアトリス二人から攻撃を受け、結局目の前の相手にだけ集中せざるを得なくなる。

「……二対四で私に勝てるつもり？」

赤毛の少女のプライドは、この展開を許さなかった。

「君達こそ」

「私達のコンビネーションを甘く見ない方が良いよ」

ラークと共に、リアトリスも不敵な笑みを見せる。彼女のその態度は虚勢でしかなかったが、その信頼は確かなものだった。

第四十一話 『黒翼』対『巖』

私はあれからも当たり前前の様に、孤児院の一員として暮らしていた。大した変化もなく、誰とも会話しない様になるべく一人で。

変化といえばチリアに話しかけられるのを段々煩わしく感じる自分が居た。

前はそんな事を感じなかったのに、今は一人で居たかった。一人が良かった。

だから、周りの事なんて全部無視してるつもりだったのだが、気が付くと私はその異変に立ち止まっていた。

「まだ二人が帰ってきてない？本当に、どこにもいないのかい？」

たまたま、部屋から出た時チリアの珍しい焦った声が聞こえた。

もうすぐ夕飯になる時間。一番年長の子供達が用事で遠出でもしていなければ、まず全員揃う時間だ。

それでもまだ帰らない子供がいるらしく、チリアが外から帰ってきた子供を集めていた。

夕飯の準備中だったらしく、彼女は片手におたまを持ったままだ。

「ラムが知らない子供と一緒に居るの見たって言った」

知らない子供。

その言葉は私の中で嫌な予感を膨らませた。

「これ以上遅くなったら暗くなる。私が探しに行くよ」

チリアは今にも飛び出しそうな勢いだ。

「待って」

私は周りが見えていない彼女を呼び止めた。

「クロウ？」

私が出てくるとは誰も思っていなかったのだろう。彼女は目を丸くし、他の子供は怖がって一歩下がる。

「これ以上帰ってこないなら、私が探しに行く。チリアは夕飯の支度があるでしょう」

「あんたはこの街に詳しくないだろう？それに、あんたも女の子だ。暗い時間に外を歩かせる訳にはいかないよ」

引き下がったって良い場面なのに、私は引かなかった。

「私の心配なら要らない、大丈夫だから」

それでも、チリアは納得しない。

そこへ、だれかが玄関の方を振り返って声をあげた。

全員がそつちを振り返る。

子供が一人帰ってきていた。

私には名前が分からないが、朝食の席で見た事があるような気がする。

元気のある男の子だった気がするが、今はその顔が恐怖で青ざめている。

「何があっただんない？」

異常を察したチリアは慎重に、優しく少年の前にしゃがんで尋ねる。

「……『クロウを街の東に連れて来い』」

まるでその言葉だけ刻み付けられて再生するように、感情の無い声で少年は言った。

その言葉で、私は何があったか理解し、そして孤児院を飛び出した。背中からチリアの叫びが聞こえたが、立ち止まらなかった。

外に出るのはクリフに連れてこられた日以来だ。当然、街の様子なんてほとんど分からない。

それでも、沈みかけた夕日の方向で方角は分かる。

夕日を背にして、私はまっすぐ走った。

自分でも驚いている、何でこんな事をするのか。

でも、そんな疑問をきちんと考える気にもならない程、私の頭の中は怒りに染まっていた。

「う……ハア……ハア」

ろくに運動もしていない体はあっさり音を上げる。息が上がって、とても全力では走り続けられない。

ラーヴァンを実体化させる事も頭に浮かんだが、その考えをすぐに振り払う。

街中であんな術を使うわけにはいかない。

歩いては走つてを繰り返し、何とか走りながら街の東門にたどり着いた。

そこには本来居るはずの門番はおらず、十数人以上のスプラウツの子供を従え、《巖のバルロ》が立っていた。

「人質なんて、随分汚い手を使う様になったわね、バルロ！」

バルロは怒るでもなく、理解できないという表情で私を見る。

「……何故来た？」

ここに至つてそんな発言をする相手に、私は拳を強く握り締める。

「はあ？自分で呼び出しておいて今更何言つてるわけ」

目の前の老人は憐れむように静かに私を見た。

「ああ、伝言はした。だがあくまで揺さぶりをかけるのが目的だ。お前なら当然、『東を避けて逃げる』だろうと見張りをつけていた……不要になったがな」

老人の言葉には明らかに失望が伺える。

自分の中の何かが醒めていくのを感じた。

私は今、以前の自分なら絶対しなかつたようなミスをしてしまっている。

「人質は、放しなさいよ」

知らず、声が震えた。

老人はため息をつく。

「元よりそのつもりだ、誘拐事件として騒ぎになつては困る。無事に離せば子供の戯言、証拠も無く耳を貸すものなど居ない」

何の興味もなく、バルロはあっさり孤児院の子を解放する。

解放された少年は道に崩れる様に転んだ。

何かにつまずいた訳ではなく、明らかに恐怖からだった。

その様子だけで何をされたかは大体想像がつく。

「相変わらず子供を何とも思っていないのね」

「静かにしてもらっていたただけだ、そう言うお前は随分腑抜けた。まあいい、それでもお前の力には十分利用価値がある」

当然の様に私を連れ戻せるつもりで居る事に私は腹が立った。

確かに私は前より弱くなつたかもしれない、けれどそれでも術士と

バルロと同じ術だが、同じ威力を出すのに倍以上時間がかかっている。

私はラーヴァンを実体化させるのを止め、自分の内側に意識を集中する。実体化させなくても力は使えるのだ。

「ブラッディランス」

私の背丈と同等の黒い槍を打ち出し、上から迫る岩を破砕する。

「ふん……」

そのまま放物線を描き、自らの頭上へと迫る一撃を煩わしそうにバルロは殴った。

当然ラーヴァンの力を借りた私の術と、下級以下の深術武器では威力が全く違う。

ほとんど軌道を変えずに槍は落下したが、その僅かな衝撃で生まれたズレと反動を利用して老人は槍を躲す。

「術が当たったか確認するのは大切だが、その間動きを止めてはならんと教えた筈だ」

これは一対一の戦いではない。

槍の行方に無意識に気が向いて足を止めた私に、バルロの取り巻きの子供達の集中砲火が飛んでくる。

「アクアエッジ」

「ファイアボール」

「ストーンザッパー」

「デルタレイ」

水の刃に、火球に、礫岩れきがんに、線を描いて迫る光の球。

術としての威力なら最低クラスだが、これだけ集まればバラバラな分下手な中級深術より厄介だ。

「イレイズブリリアンスー」

一つ一つなら目に見えない程小さな黒い点、それを無数に自分の前面に生み出す。

数千にも上る数のそれらは肉眼でも見るのがやっとだったが、攻撃として放たれた瞬間景色を切り裂く線へと変わる。

術の威力としては中級程度、いや建物などの物体を壊そうとすれば

それ以下の威力しか出ない術だ。

しかし、人間はそんなに丈夫ではない。

その細い線が一本でも急所を貫けば致命傷になる。

威力の弱い

術は無数の穴が開けば霧散する。

これは対術士用の深術だ。

向こうが撃ってきた下級の術は全て私の術に貫かれて消える。

こちらの『線』も大分数が減ったが、敵の子供を三人倒すには十分だった。

残りはバルロが岩の壁で守った為倒せない。

間に合わない判断した子供の前には、バルロは初めから壁を張らなかつた。

(本当に、人の命を何とも……)

怒りがこみ上げる。

同時に胸が苦しくなる。

そう思いながら平然と子供達の命を奪う自分は何だ。

今まで私が当たり前みたいにやってきた事は……。

「これで、今度は邪魔できないでしょう」

バルロが岩の壁を解除する前に、私も右手を振って頭上に闇のデープスを放つ。

一分一秒を争う状態だったので靄とも壁とも言えない中途半端な密度の物になったが、下級術一回位は防げるはずだ。

「あんたん暗澹たる闇よ、」

私は再びラーヴァンを呼び出す詠唱をする。

今度はもう邪魔できない。

岩の壁で視界を塞がれている分、向こうは対応が遅れる。

詠唱に入ってからまだ術を撃ってこない子供達も、私の詠唱時間内にこのタイミングで二発以上術を撃って妨害できる可能性は低い。

仮に撃ってきたとしても、そもそも術が私の元に届く前にラーヴァンを出してしまえば関係ない。

今度こそ詰めを確信した瞬間、私は自分の足元に集まるデープスを感じた。

(足元……!?)

私は急いで詠唱を中断して横に跳ぶ。

「ロックブレイク」

直後に子供の声がして、私が今居た場所から人の背丈ほどの岩が立て続けに隆起する。

まともに食らえばそれで勝負がついていたに違いない。

普通、術士同士の戦いで相手の足元を狙うなど下策も良い所だ。

詠唱の段階でディープスを発動場所に集めるが、ディープスの変化に敏感な術士は自分の間近に集まるそれにすぐ気付く。

当然の様に発動前に移動されて、簡単に回避される。

つまり詠唱時間を要するにも拘らず、まず当たらないのだ。

だから、基本的に深術士同士は戦う時お互いの足元は狙わない。

その思い込みが、私の思考から「足元を直接狙ってくる」という可能性を消していた。

しかし、そんなのはあくまで一対一のセオリーだ。

向こうは一人の詠唱時間を無駄にしたところで、数の利でいくらでもカバーが利く。

足元からの攻撃に対して壁は張れず、こちらは避けるしかない。

初めから術で詠唱を潰すのが目的なら、この方法は理に適っている。

「ロックブレイク」

別な子供の声と共に再び足元に集まるディープスを感じ、私はまた走って避ける。

避けた側から第二、第三の術が飛んでくるので私は方向転換しながら走り続ける事を余儀なくされる。

とてもラーヴアンを呼び出す詠唱など出来ない。

ロックブレイクは詠唱に時間のかかる中級深術だ。

バルロは初級深術を使わせる子供を前列に、中級クラスは後方に配置してずっと準備させていたらしい。

「ロックブレイク」

「くっ！」

遂にはバルロまでもが同じ術で攻撃してきた。

時間差で次々に私を攻撃し、詠唱時間の隙を数の差で埋める事で延々と同じ術による攻撃をループさせる。

私の行く先が、直前まで立っていた地面が、次々振動と共に牙剥く岩塊に変わる。

初めからこれが狙いだったようだ。

瞬く間に石畳の街路は、戦争後の荒地の様な状態に変わる。

このままではまずい。

「ブラッディランス！」

先程と同じ大型の槍を、今度は最短距離で一直線に飛ばす。

風を切る音が、打ち出した側の私の耳まで届く。

こんな単純な攻撃はいくら速くてもバルロには簡単に避けられるだろう。

だが、詠唱を続ける子供達は別だ。

絶叫が響き渡る。

胸を貫かれた子供達が次々に倒れ、同時にまるで私の右腕がその子供達を貫いた様な嫌な感覚が唐突に走る。

倒れ行く子供の絶望した顔と目が合い、私は、

私は……

バルロが大きくため息を吐くの聞いた。

（しまっ——）

足元から迫るディープスの高まりに総毛立ち、私は両手で身体をかばった。

どうしようもない衝撃が私を跳ね飛ばす。

厳しき岩の慈悲など何も無い一撃。

術の守りを持たない私の軽い体重など、羽根も同然だった。

意識だけは妙にはつきりしたまま、ただ客観的に宙から地面を見つめ、

再び岩が私を受け止めようとしているのを見たところで私の意識

は飛んだ。

第四十二話　どんなに離れても君に手を伸ばす

リアトリスとラークを残して来たエッジ達三人は、ウォーギルントの街の中に入っていた。

クリフが居なかったらまだ門の所で止められていただろう。門番は彼の姿を見るなり、あっさり道を空けた。

既に太陽はかなり傾き、夕日が沈みかけている。

「とりあえず、俺は孤児院を見に行く。何もなければそこに居るはずなんだ」

「分かったそっちはクリフに任せる。俺は一人でも街の中を探してみるよ」

エッジの言葉にクリフは顔を曇らせる。

「大丈夫か？ 効率は上がるけど、敵に遭遇したら助けられねえぞ」

クリフの心配はもつともだった。

合図を深術で打ち上げる事は可能だったが、視界の開けていない街の中では見逃す可能性も高かった。

初めての街の中で一度別れたら合流が困難になる事を理解した上で、エッジはクロウを見つけたら優先した判断を下す。

「敵を見つけたらすぐ逃げるよ。クロウが戦ってたら、一緒に戦えば何とかなる」

「私も、エッジさんと一緒に行きます」

クリフは反対の様だったが、二人の目をじっと見た末、言葉を飲み込んだ。

「……気をつけるよ、本当に敵に見つかったら逃げるんだぞ」

「分かってる。死んだら、クロウを助けられない」

クリフが突き出した拳に、エッジは同じもので応えた。

それを合図にクリフは身を翻すと、最後の夕日が赤く染める街の中へ消えていった。

「俺達も行くこう、こっちだ」

「エッジさん、何か宛てがあるんですか？」

驚いた様子でアキが質問する。

「東の門へ向かおう、街の外縁部を通って」

「どうしてですか？」

急がなければならぬ状況なのを感じていた二人は走りながら話す。

「スプラウツが目立ちたくないなら、まず街の中心部は避けられると思うんだ。それにクロウを無事に確保できたなら、なるべく早くアクシズⅡワンド領内へ連れ帰りたい筈。単純に最短ルートで考えたら——」
「街道が整備され、いま私たちが通って来た南門。次いで反時計周りに南東、東の門ですね」

後を引き継いでくれたアキの言葉に、エツジは頷く。

「もちろん確実じゃない。でも、確率としては一番マシだと思う」

「分かりました、そうしましょう」

走りながら喋るのは結構きつく、そこからはどちらも無言で走った。

意識を失っていたのはそれほど長い時間では無かったのか、私はまだ道の真ん中で自分の血の中に横たわっていた。

背中が、肩が、およそ全ての骨が痛い。

太股の外側から熱く血が流れ、それを服が吸って気持ちが悪い。頭がぼうつとして、出血と共に感じる自分の鼓動に意識が集中する。

向こうの攻撃は止んでいた。

恐らく、私が動かなくなっただのを見て反撃がないか様子を見ていた……そんなところだろう。

もちろん、私が僅かにでも反撃の意思を見せれば容赦なくまた意識を飛ばされるだろうが。

視界が霞む今の状態ではただ的にされるだけだ。

もう普段通りの詠唱をしても術を使えるか怪しい。ラーヴァンを実体化させずに詠唱破棄して力を使う事も出来ないだろう。

私は、負けた。

「振り、ではなく本当に気絶していた様だな。さてどうするか」

私は痛みで動かせない身体の代わりに、口だけでも歪める。

「……好きに、したら。私はあんたになんて従わないけど」

言ったそばから背中に鋭い痛みが走り、視界が半回転して、私は地面に叩きつけられた。

痛みで思わず声が漏れる。

こんなのを続けられたら、体も心もたない。

「お前は道具だ。理解できないなら、思い出すまで体に刻むとしよう」

正直、負けて私は何もかもどうでも良くなっていた。

とはいえ私は剣士とかじゃないから、痛みにそこまで強い訳じゃない。

こんな拷問まがいの事を延々続けられれば心が先に折れて、服従するしかないだろう。

でも、誰かの道具にされるのはもう嫌だった。

もう、戦う事にも殺すことにも疲れた。

適当に逆らい続けて、限界になったら、

最後の力を振り絞ってこの命を終わらせよう。

後は、どうするのが一番痛くないか考えるだけで良い。

(ああ……つまらない人生だったな)

対象が自分なら、深術を外すことはない。

外の世界から得なければいけない情報が何も無くなったので、私は目を閉じた。

バルロにまた岩を叩きつけられるかもしれないが。

もう、どうでもいい。

「クロー！」

そんな私の閉じた世界を、聞こえるはずの無い声が引き裂いた。

同時に、耳障りな岩と鉄のぶつかる様な音が聞こえ、一度に色んな事が起きた。

私の横たわっている地面が隆起して襲い掛かってくるのを感じ、動かない私の体を誰かが持ち上げその攻撃から遠ざける。

岩に足を取られて転びそうになったその誰かはそれでも足を動かさず、落とさない様に私を強く抱き寄せた。

ぼんやりしたまま目を開けて最初に目に入ってきたのは、私を飛んでくる術から守って傘で戦うジェイン・アキの後ろ姿。

それから、すぐ間近にある真剣なエッジの顔。
絶対二度と目にする事が無いと思っていた顔。

山ほどの文句と、きちんとしたお別れと、他愛もない普通の話と……。

もし会えたら言いたい事があつた筈なのに、何も出てこなかった。
代わりに反射的に出た言葉は、

「な……んで、馬鹿。何で、来た！」

ここに居たらエッジも巻き込まれる。

私がここで一人で死ねばそれで全部終わりだったのに、これでもう私が死んでもエッジは殺されてしまう。

だというのに、こいつは焦りもしない。

「クロウ、ラーヴァンを出してくれ」

こんな状況なのに、こいつは勝つつもりだ。

しかし、今の自分の状態では――

「ごめん、今……普段の詠唱じゃ出せない。……普段は三節からだけど、一節からだから倍はかかる」

その間私は防御も、攻撃も、移動すらできない。

私が万全の状態でもできなかった事をエッジとアキだけで、お荷物の私を守りながらなんて……。

「時間を稼ぐ、俺を信じて唱えてくれ。他の事は何も考えなくて良い」
私は驚いて目を大きく開く。

そうしている間にも目の前でアキが、防ぎきれなかった術を回避する為に横に跳び、目標を捕らえ損ねた氷の刃は石畳に刺さって消え

る。

エッジは両手に私を抱えて武器も構えられないまま、新たな術が飛んでこないか警戒する。

猶予はなかった。

出来るなんて信じてなかったけど、どうせ死ぬならやれるところまでやってやろう。

「分かった」

私は頷き、体をエッジに預けて目を閉じた。

「混沌こんとんより生まれし雛ひな、明あかき世界に寄よる辺べ無なし……」

「セルフィーを倒した訳では無いだろう。味方を捨ててここまで来たか」

落ち着いて目の前に増えた敵を確認した老人は、自ら間合いを詰め手甲で攻撃してくる。

その打撃をアキが傘で受け止め、鈍い金属音が響く。

エッジとアキは相手をにらみ返した。

「……貴方を見てよく分かりました。クロウさんが私を恨むのも当然ですね」

「俺達は捨てない、誰一人」

老人はつまらなそうに笑って、再び拳を打ち込みアキの防御を崩す。

その一瞬の隙を突いて老人は更に間合いを詰め、傘による防御よりさらに内側へ『拳』を打ち込んだ。

「うっ！」

頭を殴られ、アキが倒れこむ。

「判断に感情論を持ち込むな。貴様らはここで死ぬ」

そう言つて、老人はエッジを真っ直ぐに指差す。

「ジェイン・アキは無視して、その男を殺せ。死なない程度にクロウも巻き込んで詠唱を潰せ」

言うなり、デルタレイの光線が飛んできてエッジの足を掠める。

とつきの反応で直撃には至らなかつたものの、それだけでもエッジはバランスを崩す。

「落炎散華！」
らくえんさんか

そこへバルロの追撃をさせまいと炎を纏った傘による突きが襲い掛かり、老人は手甲を交差させて受け止める。

「まだ、私は倒れていませんよ！」

「裏切り者の相手は私一人で十分だ」

老人はアキの攻撃を冷静に捌く。

アキもそれに対して、普段滅多に人に対しては使わない炎を纏った状態で応戦する。

「されど瞳閉ざし内なる影に落ちるなら、生出せし姿は一つ……」
ひとみと

どれだけ揺れが伝わろうが、クロウは詠唱を止めない。

しかし、術を避けられたのはそのデルタレイが最後だった。

立て続けに飛んでくる炎の弾に、避ける場所などどこにもない。

エツジはクロウを地面に降ろし、心の中で謝った。

（ごめん、使わないつもりだったけど……借りるぞ、リョウカ！）

本来自分のものではない武器でも、今は躊躇など出来る場面ではなかった。

エツジはここまで完了させていた初級術一回分の詠唱を、無理矢理中級クラスまで引き上げる。

懐から取り出した『宵の地衣』よいちいもを握りしめ、彼は襲い来る炎に向かって叫んだ。

「ガステイー、ネイル！」

火球が次々に裂け、その跡が空中に長く、見えない爪痕を描く。

極限まで圧縮した風の刃は単発だが吹き飛ばす力も、切り裂く破壊力も圧倒的だ。

（本当にすごい、完全に別な術も出せるのか）

自分で詠唱していたウインドカッターの何倍もの範囲に及ぶ攻撃に、エツジは改めてリョウカの武器の強力さを実感する。これなら、何とか凌ぎきれると彼が確信した瞬間。

——今までと異なる、突き上げる様な手振りでバルロが子供達に指示を出した。

アキがはっ、と気付いた様に傘を後方に向け風のデーパーズに乗っ

て上へ飛ぶ。

エッジも背後に下ろしたクロウの真下に集まるディープスの気配に血の気が引く。

「……足元への警戒がなっていないな、本当に」

「ロックブレイク」

セキユアラ 深術士でないが故の反応の遅れか、アキは空中で隆起してくる岩に足を捉えられ転がる様に着地する。

そして、身動きがとれず無防備な状態のクロウにも同じ術が発動する。

「詠唱が間に合わなくて残念だったな」

「ロックブレイク——」

「はあああああつ！」

術の発動直前。

限り無く実体に近いディープスの高まり、クロウを中心とするその渦の中にエッジは飛び込んだ。

雷のディープスが開放された光が走り、岩は次々にエッジとクロウを避ける様に隆起する。

「何!?!」

ここで、初めてバルロは驚愕の表情を浮かべた。

全ての深術は必ずディープスを指定の位置へ集める「集束」と、集めたディープスを実体に変換する「発動」のプロセスを経ている。

理論上、その間の一瞬にディープスへの干渉が起これば「集束」された位置と「発動」する位置には、ずれが起こる。

だが、それは狙って起こす様なものではない。

早すぎればディープス開放程度の影響は集束に負けて意味を成さず、遅すぎても術が直撃する。

何の躊躇いもなく瞬時にその選択肢に辿り着き、術の効果範囲の真っ只中に飛び込んだとしたらそれは正気の沙汰では無い。

しかし、偶然ではなかった。

深術の構成を理解していないなら、そもそもその行動があり得ない。

『この少年は、一瞬でもタイミングが前後すれば自殺になる事を承知で飛び込んだ』

その事実がバル口に戦慄を抱かせた。

「暗澹あんたんたる闇よ、我を導く翼となれ……」

かすれ掛けた声に、ありつた力の力を込めてクロウが叫ぶ。

「——ラーヴァン!!」

夕日の赤い町並みを塗りつぶして、視界を埋め尽くすような闇が降りる。

立ち尽くす老人と子供達の間から、安堵の顔を浮かべるアキの周囲から、空から、道から、影から、闇が一箇所を目掛けて流れ込む。

その中心に居たエッジとクロウは見る間に包まれ、姿が見えなくなる。

その間にも妨害の術が飛ぶが、二人を包む黒い繭に全て弾き返される。

周囲の闇が晴れた時、それは一羽の巨鳥の姿を成していた。

今戦場になっていた範囲全てに影を落とし、人の拳ほどの大きさの眼が鋭くバル口達を睨む。

クロウはそれを成し遂げられた事が信じられなくて、口許を皮肉げに歪めて荒い呼吸で微笑んだ。

「……本当に、どこまで馬鹿なのよ。私が勝てると疑いもしないなんて」

その背の上、広がる黒い翼に切り取られた二人だけの夕日の中に、エッジとクロウは並んでいた。

第四十三話 シンの一族対セブンクローバーズ

上空という優位に立って、クロウは反撃に出る。

「ラーヴァン、ブラッディランス」

バルロはその言葉より早く、ラーヴァンが実体化した時点で撤退を始めていた。

生き残った子供達と共に街の外へと走り去るその背中に向け、黒い槍が飛ぶ。

クロウが自分で出した時は一本だったが、ラーヴァンが発動した術では五本が同時に出現した。

それを阻む様に岩の壁を次々に出現させ、更には直接槍に向けてぶつけるバルロ。

彼に吸い込まれていく虹色の光から、コレクトバーストを使っているのが分かる。

先程までなら防げていただろう黒い槍は、しかしそこで勢いを増し、岩を粉々に貫いて黒い筋を宙に残した。

「――ペネトレイトッ！」

クロウの一声で、五本の槍は全て貫通する。

槍の一本がバルロの脚をかすめて倒れさせ、残りは逃げていく子供達を避ける様に飛び去っていった。

「クロウ、子供達は」

「分かってる……」

子供達を殺さないよう警告しようとするエッジをクロウが制する。

地に伏したバルロの頭上に緩やかにラーヴァンが近づき、クロウはその頭上から声をかける。

「形勢逆転だね、バルロ」

「その様だな」

巨鳥の影の中にあって、諦めた様に老人はその身を起こす。

その動きは初めて年齢を感じさせた。

「これで分かったでしょう、私を連れ戻すなんて考えない方がいいつて」

その声の調子に皮肉はあっても、殺意が無い事に気付いたバルロは憤りを見せる。

「貴様……殺さないつもりか」

「勝つ為に必要なら殺す、けどあんたを殺すことが目的な訳じゃない」
その返答にバルロは不愉快そうに眉間に皺を寄せ、何も言わずにクロウに寄り添っていたエツジを睨んだ。

「貴様の名は？」

「俺？エツジ、エツジ・アラゴニート」

自分に質問が飛んでくると思っていなかったエツジは驚きながらも、相手の目を真つ直ぐに睨んで答える。

「覚えておく」

エツジの名前を聞くと、老人は戦いの跡に目を向けた。

「……どの道これ以上は気付かれる、か」

老人は二言、三言何かを呟くと手を荒れ果てた街路に向けた。

砂が渦を巻き風を起こすと飛び散った瓦礫を道に穿たれた穴へと集め、元と同じではないものの少なくとも戦いがあつたとは思えない「ただの街路」と呼べるような外見に戻った。

それも深術の使用ではあつたが、クロウは黙って見逃した。

後に残るのは子供達の亡骸だけになる。

「騒ぎを起こすのは互いに望むところでは無いだろう。その始末は貴様らに任せる」

子供達の亡骸を『それ』呼ばわりした事にアキもエツジも拳を握りしめたが何も言わない。

二人とも話を通じる相手では無いのはもう分かっていた。

バルロはそれだけ言うのと攻撃を受けた方の脚を引きずりながら街の外の林の中へと去っていった。

その姿が見えなくなるとクロウは無言で隣にいるエツジの服の袖を握り締め、屈み込む。

同時にラーヴァンの羽ばたきが勢いを無くし、黒い巨鳥は崩れ落ちる様にその高度を下げ二人を道へと投げ出した。

そのまま力なく道に倒れ込んだクロウの身体をエツジが支える。

「クロウ！」

「クロウさん！」

エッジ達が改めて見ると、クロウの姿は酷いものだった。血の中に寝そべっていたせいで服が血にまみれ、肌が直に見えるところには打撲の痣がある。

出血そのものは止まってきており然程でも無い様だったが、直ぐに手当てした方が良い状態なのは間違いないかった。

「……何で助けに来たの？」

その自分の状態を差し置いて、クロウは二人に尋ねた。

「私は、助けてもらおう価値なんか無い人間だよ。そこに倒れてる子達を殺したのも私……ただの、人殺しの化け物だよ」

エッジは首を横に振った。

「そんな事気にしなくて良い、今は傷の手当ての方が先だ。自分では治癒術使えないか？それならリアトリス達を探すか——」

クロウは凄まじい形相でエッジを睨む。

『『そんな事』？エッジは、……あんなに誰かを傷付ける事を否定してたエッジが、人殺しをそんな事だつて言うの？』

アキはその剣幕に押され半歩後ろに下がる。

「今も変わらないよ、どんな子供にだつて死んで欲しくないっていう気持ちは……でも、クロウ自身が一番その重みに苦しんでる時まで怒ったりしない」

クロウは驚きに目を見開き、エッジから目を逸らした。

「あんたは……私の考えてる事が分かるの？」

エッジは厳しい表情でクロウの足を止血しながら、口元だけ笑顔を作る。

「誰のでも分かる訳じゃない。でもクロウは優しいから、そんなクロウが人を殺すのは嫌なんだ……アキ、クリフが見てるかどうか分からないけど合図を上げよう。合流できたらリアトリス達の所に急いで戻らないと」

「はい、炎なら私に任せて下さい」

エッジの答えにクロウは顔を逸らして、目元を隠したまま呟く。

「……馬鹿、私が優しいとかお人好しにも程があるよ」

アキは二人から数歩離れて、傘を閉じたまま暗くなつた空に向ける。

その先端に赤い光が玉の様に集まって空に上り、いくつもの炎の花びらになつて弾けた。

日の沈んだ空に光るそれを見逃すことはそうそう無いだろう。

「私がそんな事しても喜ばないだろうけど、あの子達出来ればちゃんと埋葬してあげたい」

倒れた子供達の方に目を向けながら、声のトーンを落としてクロウは言った。

「そうだな……」

きちんとその亡骸を見ていなかったエッジも改めてその姿を見つめ、クロウに同意する。

罪の無い子供と、クロウとが殺し合わなければならぬなんて間違っていると思ひながら。

「くっ、何よ！何なのよ！あんた達は！」

最後に残つた赤毛の少女の仲間を、ラークが切り伏せる。

一人になつた少女は追い詰められ、ラークとリアトリスを睨み付ける。

二人は相手の叫びに反応を示さなかった。

リアトリスは頑なに戦いから視線を逸らさない事だけに集中し、

ラークは他の敵に対するのと同じ様に赤毛の少女に止めを刺そうとする。

「調子に、乗るな！」

少女の手から空中に、先程使つたのと同じ赤い石が無数にばらまかれる。

その一つ一つが提灯の様に宙に浮かんだまま赤い光の珠となつて停止し、少女の周りに幻想的な領域を作り出す。

「——接華浮燈の陣！」

領域内で剣を振りかぶつたラークが、光の珠の一つに触れる。

瞬間、爆発が起こりラークを陣の外まで吹き飛ばす。

「ラーク！」

リアトリスの悲鳴を受けながら空中で身を翻したラークが地面を踏みしめながら着地し、ざり、という音を残してその姿が掻き消える。

「っ!？」

赤毛の少女は目で追いきれない相手の動きに、感覚だけで鞭を自身の背後に叩きつける。

鞭は赤い光の珠の一つを捉え、爆発させる。

そして、ラークは再び吹き飛ばされた。

「くっ……」

ラークは少女の陣を展開してからの異常とも言える反応速度に攻めあぐねる。

いくらラークの傷の治りが早くてもダメージが無いわけではない、連続して攻撃をしかけるにも限界があった。

「面倒かけてくれたね……今度こそ殺してあげる」

陣による防御でラークの近接戦闘を封じ、赤毛の少女は止めとばかりに上級深術の詠唱を始める。

それをさせまいと、リアトリスが上空へ光を放つ。

「刹那の輝き、其を瞳に映すものを貫かん——レイ！」

強い光が空の一点から発せられ、その直後そこからいくつもの白い光が矢の様に赤い光の珠目掛けて降り注ぐ。

それを見て赤毛の少女は勝ち誇った笑みを浮かべる。

「私じゃなくて炎熱石をピンポイントで狙えるその技量は大したものだけど、残念だったね！」

赤毛の少女が右手をくるりと回すと光の珠はさっと並びを変え、リアトリスの術を回避する。

「さあ、これで終わり。冥土の土産に見せておいてあげる、これからあんたらが落ちる地獄の炎を——」

直後、少女の周りを守る赤い光の珠の一つが弾けて、核になっていた鉱石が砕け散る。

一つが弾けると、そこからは立て続けだった。

リアトリスが降らせた白い光の雨が生き物の様にその軌道を変え、次々に赤い光を射抜く。

「な……んで、私の動かす位置を読んだの？……全部、一つ残らず？あつ！」

守りを全て破壊した光の雨は、そのまま赤毛の少女の身体もかすめる。

『「其を瞳に映すものを貫かん」……レイは、最初の光で標的を識別して自分で追尾するんだよ」

呆然とする少女にリアトリスは理由を明かす。

赤毛の少女は信じられないと首を横に振った。

「追尾型の深術……？そんなのある訳無い！だって、深術は」

少女の言葉はそこまでだった。

話している間にラークが近付いてきた事に気付いて恐怖の表情を浮かべる。

ラークが剣を構え、リアトリスは固く目をつむった。

「い、や……嫌だ死にたくない！」

悲鳴があがり、剣が空を切る音が響き、

金属と金属のぶつかり合う音にそれらは遮られた。

「何やってんだセルフィー、五人相手にする筈が二人相手に負けてんじゃねーか」

恐ろしい速度で割り込んできた影は鉄の鉤爪でラークの剣を受け止め、呆れた声でセルフィーと呼んだ赤毛の少女を罵倒する。

「虎爪破斬」

「つと、雷旋牙！」

ラークは突然の乱入者にも顔色を変えずぐさま剣を振るい、鉤爪の少年も両手のそれで応戦し両者は激しく切り結ぶ。

ラークの剣は二本を繋げた分の重さがある大型の物だったが、乱入してきた少年の鉤爪も一本一本が肉厚で先端は鋭利なものほとんど打撃武器の様な造りになっており、二人の攻撃の重さは互角だった。

帯電しているのか鉤爪は剣と衝突する度火花を散らす。

「フレット……」

助かった事に実感の湧かない様子でセルファイは二人の戦いを見つめた。

乱入者——フレットは相手を押しきれないことに舌打ちして片方の鉤爪に雷のデイクスを集束させ、それを纏った一撃をラークに叩きつける。

深術が使えず、先程の爆発のダメージが抜けきっていないラークは剣で防御するもののその一撃に押され後ろに下がる。

「二人ぐらいさつさと倒せよ。ほら、こうやって——」

その隙を突き、フレットはリアトリスに突進する。

「術士先に殺せばそれで終わりだ」

リアトリスは慌てて光の壁を目の前に貼り、フレットの行く手を塞ぐ。

それを、無造作に叩き割るフレット。

ガラスの砕けるような音が響く。

「!?」

リアトリスは驚愕し、次々に光の壁を作り必死に防御しようとするが全て破壊される。

一枚防御を破壊されるたびに壁を貼るスペースが少なくなり、つまづきそうになりながら彼女は後退する事を余儀なくされる。

辛うじてではあるものの凌がれた事にフレットは眉をしかめ、スパークが見える程に大量の雷のデイクスを武器に集めて思い切り振りかぶった。

『色クロマティッククリスタルの水晶クリスタルを使うべきなの? でも、こんなに距離を詰められたらあれでも短い時間しか凌げない』

リアトリスは一瞬の思量の末、隙が出来るのを覚悟で後ろに跳びながら三重に光の壁を貼る。

「デュアル・インディグネーション」

フレットに振り下ろされた鉤爪が一枚目の壁に触れ、爆発を起こす。

その衝撃で、残りの二枚の壁諸共リアトリスは吹き飛ばされる。

「きゃあああああ」

接近しての戦闘や運動に慣れていないリアトリスは着地する事も出来ずに転倒する。

そこへフレットは反対の鉤爪を振りかぶり、一步で大きく間合いを詰めとどめの追撃をかける。

「じゃあな」

緑の線が走り、フレットの振り下ろした鉤爪が肉を裂いて血の跡を描く。

「ラーク!？」

「ぐ、っ……!」

フレット以上の速度で飛び出したラークがリアトリスを抱きかかえ、代わりにその背で攻撃を受ける。

ラークはそのまま反転し、リアトリスを支えていない右腕でフレット目掛けて剣を横薙ぎに振るう。

剣の間合いの外にいたフレットは、本能的に危険を感じて剣筋の延長線上にあつた頭を防御する。

「真空、破斬!」

その判断は正しく、斬撃はラークの剣を離れ、フレットの交差させた鉤爪にまで届き火花を散らす。

防御が遅れば首が飛んでいたであろう鋭く、正確な一撃だった。フレットはその一撃を受け止めながら詠唱を開始しており、顔の前で交差させた武器を下ろしながら深術で更なる追撃をかけようとして、止めた。

ラークとリアトリスの姿は既にフレット達の前から消えていた。

※セブンクローバーズの情報が更新されました。

深術のエキスパートとして育てられた孤児の集団。

その中心的活動を担う精鋭にして、同時に味方同士の監視者でもある七人の深術士^{セキコアラ}。

人数が多いのは裏切りや命令違反を冒そうとしたメンバーが飛びぬけた実力を持っていても複数人で対処し、従わせる為。

各自がセブンクローバーズとしてそれぞれ識別名称を持っているがあくまでコードネームであり、成立してからそれほどの年月が経過していない為、本人の能力と名前が一致している者が多いが『流連^{りゅうれん}』の様に二代目である場合は本人の能力等とは無関係に前任者の識別名称を引き継ぐ事になる。

また、全員が自身の最も得意な一属性の使用に特化している。

『爪雷^{そつらい}』

名前：フレット

武器：専雷爪^{せんらいそつ}「スペシャライジング」↑New

特化属性：雷

才能：並外れた身体能力

戦う事に喜びを見出し、誰よりも危険な少年。

術士としての素質もさることながら、近接戦闘のみでも正規の騎士を圧倒する年齢不相応の身体能力を持つ。

実力はともかくとして性格面に多大な問題があり、命令の有無に関わらず単独行動が多い。

また、戦いそのものに喜びを見出す性格ゆえに強敵との戦いをわざと引き延ばしたり、見逃す事もある。

それ故に実力とは反比例して仲間からの信頼は薄い。

巨大な鉤爪の形をした彼の武器は、雷以外の属性のディープスを貯める機能を排することで雷属性の使用効率を格段に上げている。↑

New

この武器では通常の方法で他の属性を使用することは出来ない。

多少の傷を負っていたとはいえエラークとすら互角に切り結ぶ身体

能力を持ち、優れた術士でありながら七人の中では唯一好んで接近戦闘を行う。そのラークにも筋力やスピードでこそ劣るものの、雷属性の爆発を上乘せした技の威力で上回り、用途に応じた術を使いこなす事で高い防御能力を得ていたリアトリスの障壁も、武器と深術両方の特性を併せ持った攻撃で粉々にした。

その実力は紛れも無く七人中最強である。

『巖岩』

名前：バルロ

武器：錬成手甲「岩堵」↑New

特化属性：地

才能：観察と経験による弱点の看破

子供達を鍛え上げた全員の師であり、統制者でもある老人。

元は軍人で、岩で殴られる恐怖をもって全ての子供をコントロールしている。

この人間なくしてスプラウツは集団として機能しない。スプラウツの中心と言っても過言ではない人物。

他のクローバースと比べると突出した戦闘能力を持っている訳ではないが、全員の弱点を熟知し裏切りを想定して身内との戦いに特化している為、直接戦った場合クローバース全員を打倒しうる手段を用意している。

拳を『握る』ことをトリガーとして一定の間合いに岩を形成し、腕の動きと連動させる手甲を武器として使っており、自分から離れた間合いに居る相手を『殴る』事が出来る。↑New

これは、単純ながらも強力な接近戦の手段で、敵との間合いを空ける事に優れている。

また打撃が発生する箇所と拳の間には何も無い為、正確に間合いを把握していない相手には壁などで遮断する事も難しい。

現実主義者で自分がとうに『黒翼』や『爪雷』に力では及ばない事を認めた上で、正々堂々に拘らず数の利や状況、心理的死角を突く事で彼らとも互角以上に渡り合う。

『紅蓮』

名前：セルファイア

武器：鞭、炎熱鉱石↑New

特化属性：火

才能：感知

燃える様な赤い髪の少女。

感情的で激し易く『爪雷』からは本来の識別名称を無視して『爆発セルファイア』と呼ばれている。自身の実力が『爪雷』には及ばないと自覚しているものの、術士として一流であるというプライドを持っている。その為興味の無い事にはやる気を出さない『爪雷』とは反りが合わず、喧嘩が絶えない。

彼女はディープスの位置を正確に把握することに長けており、温熱筒にも利用されているディープスの集束を補助する鉱石を併用する事でその能力全てを攻撃に利用している。↑New

放り投げた赤い鉱石を核にして詠唱無しで術を開始し、術が相手に届くまでの間も集束を続ける事でクローバースでは唯一自力で詠唱無しの上級深術を発動する事が出来る。これは感覚的には『一度投げた石に、後から投げた石を空中でぶつけ続ける様なもの』であり、高い感知能力を持つ彼女以外には真似する事が出来ない。

自分と同等以上の感知の才能を持ったりアトリスを激しく敵視し、またリアトリスの側も防御に特化した自分のスタイルと正反対の彼女の戦い方を危険視している。

◎接華浮燈の陣↑New

単独で彼女が戦闘を行う場合、接近戦が不得手な彼女がそれをカバーする為に使用する切り札。

手持ちの炎熱鉱石の大半を空中にばら撒き、それを「触れると爆発する赤い光の珠」に変換する事で自分の周囲全体を守る領域を作り出す。

性質上、ほぼ全ての炎熱鉱石を消費してしまうため一度の戦闘で使えるのは一度が限界。

一見、珠同士に隙間があるため壁としては機能しないように見える

が、陣の内部は全て彼女の『感知』の範囲内であり小さな異変でも即座に反応してセルフイー自身が爆発を起こす事が出来る。その為ラークのスピードを以てしても突破するのは難しく、相手が強力な深術で一点突破を狙ってきても外縁部だけを爆発させる事で衝撃を半減されてしまう。

また、全ての光の珠は陣を張っている範囲内なら彼女自身が任意で動かせる為、少数が減っても陣は機能し続ける。

総じて防御すら攻撃によって補う、ただひたすら攻撃に特化した彼女の戦い方を象徴する陣。

『黒翼』

名前：クロウ

武器：スローイングダガー

特化属性：闇

才能：体内に持った闇の宝珠の欠片

スプラウツを脱走する前のクロウ。

彼女はエツジ達には自分もまた子供達を管理し教育する側であった事を告げなかったが、これがクロウが脱走する事が出来、また抜けた後も執拗に追われ続ける最大の理由である。

宝珠の力を使っている状態のクロウは、術士としての資質のみで考えれば全てにおいて最高クラスの能力を所持しており、全ての術の詠唱を破棄し、『爪雷』すら及ばない威力の術を用い、数kmの範囲の視界を闇で閉ざしたまま内部の状態を正確に把握し相手をピンポイントで攻撃する事も可能。

通常時にクロウがこれらの能力を使用すると相応の負担が身体にかかる（目の色の変化はこれに因るもの）が、体内の闇の宝珠の欠片の意思IIラーヴァンを黒い巨鳥として実体化させた状態ではその負担が無くなり、上記の能力が制限なく使える様になる。

能力だけなら間違いなく最強のクローバーズであったものの、本人が人を殺す事を無意識に嫌っていた為広範囲に効果が及ぶ様な術は滅多に使用せず、黒い霧による感知を活かした情報収集や最小限の殺

害に抑える暗殺等を主としていた。

自ら望んで戦いに赴く事で最強の座に位置する『爪雷』とは対極であり、能力的にはクロウが勝るものの無意識に力を抑えてしまうため、殺人を楽しみさえする彼には対人戦の能力では一步劣る。

『流連』

名前：???

武器：？

特化属性：風

才能：なし（武器との関係あり）

二代目。前任者とは属性以外共通点なし。

他のメンバーと比べ成つてから日が浅く、実力的にも劣るが、それ故認められた事を喜び調子に乗りすぎている所がある。

『弧氷』

名前：ルオン

武器：弓

特化属性：氷

才能：『爪雷』には劣るものの高い身体能力

感情の大部分を喪失した少年。

弓という単独戦闘を苦手とする武器を持ちながら、空中で正確に弓矢を操るボディバランスと素早い跳躍力を持ち、氷柱を発生させる属性技「扇氷閃」と合わせて単独行動でも十分詠唱時間を稼ぎ戦闘する能力を持つ。

術の詠唱速度・威力・弓の扱い全てにおいて安定した能力を持つもののクロウバース全体の中では尖った能力を持たない様に見えるが……
スプラウツの中では監視無しでも命令違反をせず、単独行動もこなせる貴重な人材。

『純白』

名前：ネイデール

武器：??

特化属性：光

才能：??

クローバーズでは『げんがん巖岩』を除いて唯一の成人。

味方であつても姿を見たものが少なく、部屋にこもっている時間も長いが『げんがん巖岩』からの信頼は厚く、他の全員が拠点留守にしている場合単独で『げんがん巖岩』の役目を引き継ぎ、子供達の統制者の役目を担う。

第四十四話 眠りの王女

リアトリスとラークを逃した事にフレットはため息をつく。

「逃げやがったか。二人まとめてなら少しは楽しめるかと思っただけ、まあ良いか」

「……前から気になってたんだけど、デュアル・インディグネーションのインディグネーションって、あれよね？」

セルファイが口にしたのは、雷属性の上級深術。

発動に相応の時間は要するものの、一回で王都にある巨大な教会が消滅する程の威力の術だ。

「あ？」

「何でその術より弱い技が『デュアル』・インディグネーションなのよ」
フレットはセルファイの質問に呆れたようにため息をつく。

「分かかってねえな、時間かかる術よりすぐ発動できて圧倒的な威力がある近接技の方が場合によっては脅威になるんだよ。敵の前であるもん、そうそう唱えてられるか」

「そうじゃなくて、名前がおかしいって言ってるのよ」

「俺の最強の術と、技の衝撃で二重デュアルだからおかしくねーだろ」

段々ムキになるセルファイを見て、フレットは面倒くさそうな顔をする。

「だから、『インディグネーション』って付ける必要は無いでしょって言ってるの！」

フレットはセルファイから逃れる為にとうとう耳を塞いだ。

「止まれ、ここから先は工事中だ」

「ああ？ どう見ても工事なんかやってねえじゃねえか」

一度孤児院に戻ってクロウが飛び出して行った事を知ったクリフは、すぐに東の門に向かっていった。

しかし、その途中で街の兵士に止められる。

「道が一部陥没しているんだ。どこまで安全か分からない以上見える程近づかせる訳にはいかない」

普通だったら納得していたかもしれないが、クリフは納得しなかった。

こつちに向かう最中、この先から空に上がる合図を見ていたからだ。

「そうか。邪魔した、な！」

クリフはその警告に従い一度背を向けて立ち去る振りをしながら、反転して再び突進する。

「そんな手が通用するか！」

兵士は不意をつかれたりする事無く即座に反応する。

「よ、っと」

その足元に屈み込み、クリフは後ろから掬う様にして相手の足を払う。

「なに、!?!」

重い鎧を着た兵士はそれだけで完全にバランスを崩し、両手を着いて道に倒れた。

「人を捕まえようとすると人間どうしても前に体重が出んだよ、悪いな」

「ま、待てー！」

兵士が何とか身を起こす頃には、クリフはもう追いつけない程遠くに行っていた。

「クリフ！良かった、ちゃんと合流できて」

エツジはクロウを安静にさせる為にもその場から動いていなかったが、クリフと会えたことに安堵する。

「大丈夫だったか!?!お前ら」

街路の脇の植え込みに背を預けて座るクロウの怪我を見て、慌てるクリフ。

「何とか。ただ敵は撃退したけど、クロウの怪我が酷いんだ。すぐにリアトリス達を探さないと」

「あいつらが無事かも確認しないといけねえしな。とはいえまださっきの場所で戦ってるとも限らねえし……」

エツジが今の状況を説明し、クリフがそれを受けて今後の行動をどうすべきか相談し始めた。

二人だけ取り残されたアキとクロウは気まずそうに互いに目を逸らす。

「……あんたは来なくても良かったのに」

先に口を開いたのはクロウだった。

その言葉にアキは悔しそうに服の裾を握りしめる。

「そう、ですよね……私の助けなんて、要りませんでしたよね」

その様子を見て、クロウは言い直そうとする。

「あ……いや、そうじゃなくて」

自分の考えを伝える言葉を探して、クロウは悩む。

「エツジは私と同じ追われる身になってまで人を助けようとする大馬鹿だから仕方ないけど、あんたはこんな事しなければスプラウツを敵に回さなくて済んだのに」

アキは顔を上げると、自分の気持ちを答えた。

「……はじめです、私が引き起こした事ですから。信じてもらえないかもしれませんが、私はエツジさんとクロウさんの力になりたいんです」

「そうだね、私疑り深いから信じるとは言えない……でも、だから、来る理由も無いあんたが来てくれて私は嬉しかった」

アキが目を丸くする。

その凝視に耐えかねたのか、自分の言った事を改めて反芻してなのか、クロウはアキから顔を逸らした。

「それなら私も、ここまで来た甲斐がありました」

アキはそこで初めて、クロウの前で表情を緩めた。

と、クロウが思い出したように聞く。

「そういうええ、あんた足怪我してなかった」

「え、いえ大丈夫です、クロウさんの怪我に比べたら！」

体重を預けていた植え込みの塀から身体を起こし、自分の足の怪我の様子を見ようとするクロウをアキは慌てて制止する。

「いいから見せて、自分の怪我は少ししか治せないけど、人の治せ

る」

岩による傷を確かめ、クロウが治療術をかけ始めたのを見てアキは抵抗をやめた。

打撲によつて青くなつた肌が健康的な色を取り戻し、アキの体から痛みが引いていく。

「ありがとうございます……」

「いいよ、別に。このくらい」

ただたどしく言葉を交わすと、二人はまた互いに目を逸らした。

「よし、決まつたぜ。多少危険はあるかもしれねえけど、俺があいつらを探しに行く」

クリフが、クロウとアキにこれからの行動を伝える。

「正直賛成は出来ないけど、敵の狙いはクロウだ。今の状態で一人にはできないから、一番足の速いクリフにラークとリアの様子を見てきてもらう事にした。クリフに仲介してもらつて先にセオニアに助けを求める手もあるけど、その間に二人がやられたら元も子も無い」

エツジが手短かに説明を付け加えると、クリフはすぐに元来た南門の方へ走ろうとする。

「じゃあ、待つてろ。ちよつと待つて来るからよ！」

「行つて来るから、じゃない」

今まさに探しに行こうとしていたラークが、リアトリスと共に現れクリフを制止する。

エツジとアキは二人が無事だった事にほつと胸をなで下ろした。

「リアさん！無事だったんですね。でも、よくここに居ると分かりましたね」

「忘れた？私はクロウの位置なら気配で感知できるんだよ……まあ、ある程度近くに来るまでは当てずっぽうで歩いたんだけど」

安堵の表情を浮かべる仲間達の様子に、クロウは怪訝な顔をする。

「ラーク、リアトリス……？？？どういう集まり、これ」

その質問にクリフの表情が曇るのを察し、エツジが答えた。

「話すと長いからそれは後で説明する。それよりリア、すぐにクロウの治療をお願いしたいんだけど頼めるか？」

そこでクロウがひどい怪我をしている事に気が付いたのか、リアトリスは目を丸くして取り乱す。

「な、何で皆そんな落ち着いてるの？すごい怪我じゃない、クロウー！」
「いや……出血は止まってるから見た目程ひどくない」

注目されて居心地悪そうにしながらも、リアトリスにされるがまま傷を見せるクロウ。

「そんなわけ無いでしょう！見たところ打撲だけど、こういうのは外出血が無いからって甘く見ちゃいけないんだから。大人しくしてなきやダメだよ」

（いや私、今相当大人しくしてたと思うんだけど）

納得いかない表情をするクロウ。

クロウの事をリアトリスに任せたラークが尋ねる。

「これからどうする、エツジ？」

「セオニアの国王を説得しようと思う。このままクロウを連れて逃げたらシントリアの時と同じだ」

エツジの言葉にラークは驚く。

「……失敗したらそれこそ同じだよ？君はアクシズⅡワンドだけでなく、セオニアまで敵に回すことになる」

ラークの言う事はもつともだった。

前回はエツジとクロウはアクシズⅡワンドの国王に話を聞いて貰おうとして、失敗しているのだから。

あの時はアキの妨害があったとはいえ、無くても上手くいく可能性は低かっただろう。

「それは結果だよ、どう進むかの選択を俺はもうしてる。例えばこの国を敵に回す事になるとしても、俺はその重さから逃げたくないんだ」
「どこまでも君は変わらないね。分かった、任せるよ」

ラークがあっさり承諾した事に、ここまで黙っていたクリフが思わず口を出す。

「良いのかよ、お前は反対なんだろ」

信用していない様子でクリフはラークに問いかける。

「まあね、でもエツジが自分でやる事にまで僕が口を出す権利は無い

よ」

それに、とクリフと睨み合いながら付け足すラーク。

「どの道僕は君達と戦闘になってる。王城に近づく訳にはいかないだろう?」

一見正論ではあっても、クリフは納得いかない様子だった。

そこへ、クロウの治療を終えたりアトリスも会話に加わる。

「じゃあ、私もラークと一緒に待ってるよ。離れるなら私がラークと居た方がまた合流が楽でしょう?」

「俺は当然エツジと一緒に王様に会うぜ。当然、クロウも一緒だからな」

クリフに言われてむっとした表情を見せながら、立ち上がるクロウ。

「あんたに言われなくても分かってる」

一人だけ残ったアキはどちらに入るべきか迷う。

「では、私は……ええと」

そこへ助け舟を出すクロウ。

「どっちでも良いならこっちに来てよ」

「え?」

首を傾げるアキ。

「ほら……こっち、男ばかりだから」

その言葉にリアトリスも反応する。

「私も行こうか?」

「それじゃ合流できないでしょうが」

結局、エツジとクロウ、アキ、クリフがセオニアの国王に会いに行き、ラークとリアトリスは街の外で待つ事になった。

一旦二人と別れ、エツジ達はクリフに案内されるまま王の住居へと向かう。

クロウも一度行った場所であり、何より小高い丘の麓にあったので街のどこからでも城はよく見え、迷う事は無かった。

およそ城とは呼べない程に無防備な城の手前、アーチ型の門の下でエツジ達は門番に呼び止められる。

「待て、クリフ。先にフレア様に会えとの事だ」

「はあ？相変わらざるの親馬鹿かよ、国王……」

「気持ちには分からないでもないが、そういう発言は王の前では慎めよ」
門番に呆れられたクリフはエッジ達を振り返って謝る。

「悪い、王に会う前にちよつと寄り道するぞ」

今の話が気になったのか、アキが尋ねる。

「フレアというのは、国王の御息女様なんですか？」

「ああ、フレアはこの国の王女だよ」

「……アリーズ家の王女」

目を伏せるアキを不審に思いエッジが質問する。

「何かあるのか？その人と」

「いえ、噂を聞いた事があるだけです」

そこでクリフはふつと笑う。

「何だ、知ってたのか」

気まずそうに黙るアキと、それきり何も言わず城の中へと進んでいくクリフの様子にエッジとクロウは首を傾げた。

中は落ち着いた造りになっていた。

シントリアの王城と比べると広さが二回り程狭いせいもあるかもしれないが、無機質な広がりはなく、敷かれた絨毯が靴と石の接触する冷たい音を防いでいる。

城としてどうかはともかく、住居としては間違いなくこちらの方が快適だろうとエッジは思った。

クリフは玄関ホールから左に曲がり、建物の外周をまわるように奥へ奥へと歩いていき一つの部屋の前で止まった。

入り口からするとほぼ建物の反対側で、鎧を着た兵達が入り出していてもここは静かだろう。

「フレア、起きてるか？」

クリフが部屋の中に向けて声をかけ、ノックする。

しばらく待ったが返事は無い。

クリフはそのまま扉を開けて中に入ろうとし、エッジが慌てる。

「え、クリフ！」

エッジが止めようとするのをアキが制した。

「エッジさん、多分……大丈夫です」

「いや、王女の部屋なんだろう？勝手に開けたらダメだって——」

言っている間に扉が開き、エッジは口を閉ざす。

中には大樹を模した形の天蓋が付いたベッドがあり、べにひ紅緋の髪の毛の女性が穏やかな表情で眠っていた。歳はリアトリスと同じ位だろう。

窓は開け放たれており、外の樹によつて弱められた陽光が部屋の中を柔らかく照らし、風が彼女の髪を揺らす。

「……フレア」

王女はゆっくりと目を開き、クリフに気付くと子供の様なあどけない笑顔を見せた。

「あ、クリフだ」

二人の様子を廊下から見守りながら、アキは小声でエッジとクロウに教えた。

「たまたま眠っていた訳じゃありません……彼女は、ほとんど起きている事が出来ないんです」

クリフが現れた事に嬉しそうに喜ぶ王女の姿からは、そんな悲哀は少しも感じられなかった。

第四十五話 『願いの樹』

ベッドに横になったまま、紅^{べにひ}緋の髪^のの王女は無邪気にクリフと話す。

それに応えるクリフの声もどこかいつもより優しくかった。

「最後に会ったのは……一週間くらい前？」

「二ヶ月前だ」

「もうそんなに経つちやっただね、早いなあ」

「待たせて悪かった、どうしてもやらなきゃいけない事があつてな」

分かつている、と王女は頷く。

「今度はどこに行つてたの、また外国？」

「ああ、カースメリア大陸とラーデシア大陸だ」

「アクシズⅡワンド王国だね、またお父様に頼まれた仕事？」

「ああ」

そこで初めて王女は微かに顔を曇らせた。

「……じゃあ、全然自由に旅できなかったんだね」

クリフもその言葉には申し訳無さそうに答える。

「悪い、ろくな土産も用意できなくて」

「あ、違うわよクリフ、そういう意味じゃない。ただ、クリフが楽しく

なかったんじゃないかと思って」

「そうだな……旅の話はあんまり面白いのは出来そうにねえよ」

「それは少し残念だな、クリフの話はいつも楽しみにしてるから」

「じゃあ、せめて出来る分だけでも面白おかしく話してやるよ」

「脚色はしなくて良いからね、クリフの旅の話は面白いけど創作が入ると途端に滅茶苦茶になるんだから」

和やかに話し続ける二人の邪魔をしない様に、エッジはそつと扉を閉じた。

廊下に残ったエッジ、クロウ、アキの間に何とも言えない空気が流れる。

「……起きていられないって、どういう事なの？あんなに元気そうなのに」

クロウがアキに尋ねる。

「セオニアの王家は元々、この地を治める祈祷師の一族だったそうです。その末裔である現王族の中にも時折その資質を持った者が現れ、夢の中でセオニアの大地と一つになりながら国全体を守るのだと……そう、言われています」

「どのくらい、眠ってるんだ？」

「分かりません。ですが、さっきの日付も分からなかった様子からすると」

沈黙が流れた。

エツジとアキが悲しそうな顔をする中で、クロウは一人拳を握り締めた。

「馬鹿、あいつ……仲間の為だなんて言っつて、何で置いていけるのよ」「クロウさん？」

「何でもない、後で本人に言っつてやるから」

エツジは、クロウとアキが普通に会話するようになってきている事に気付いたが流石に追及はしなかった。

とても、何かを喜んだり出来る空気ではなかった。

「ねえ、クリフ」

「ん？」

「一緒に来た人達は新しい仲間の人？」

王女は扉を閉じてしまったエツジ達の事を尋ねる。

クリフはそれに対して返答に詰まった。

「仲間、つて言い切れるなら良かったんだけどな」

「いい子達に見えたけど」

「それはな、けど……」

「この国の人じゃない、から？」

言い切る事が出来ないクリフに、王女は気まずそうに目を伏せる。

「クリフ、無理にこの国にこだわらなくても良いんだよ」

その言葉にクリフは首を横に振って笑顔を作る。

「何言っつてんだよ、嫌なら俺が一箇所をずっと拠点にするわけ無いだろ」

「うん……でも、」

王女は手を伸ばし、ベッドの側に立つクリフの背を押した。

「フレア？」

「あんまり放っておいたら可哀相だから……『願いの樹』に、案内してあげて」

そう言う彼女の手からは力が抜け、少しずつ落ちていく。

「大丈夫……クリフが戻ってくる時には起きるから」

その手をそっと受け止め、クリフは冷えない様にそれを毛布の下へと帰す。

「分かった。じゃあ、また戻ってくるからな」

開いていた窓を閉め、カーテンを閉じて、扉へ向かうクリフ。

その背に向け、王女は少し怯えているような声で言う。

「……必ず起こしてね、無理にでもいいから」

「ああ」

強く答えて、クリフは扉を開いた。

クリフが廊下に出た瞬間、クロウがその胸ぐらを掴む。

「土下座してきなさい、今すぐ」

「……この短い時間でどういう話してたんだよ」

自分を掴む手を振りほどいたりもせずクリフは呆れた。クロウは構わず食って掛かる。

「どうもこうもない。あんたがああ王女様残してラークに戦い挑んだりするから、こっちは頭に来てるのよ」

「バズを、仲間を殺されたんだ。フレアと違って仲が良かったのに、何もしなかったら合わせる顔がねえよ」

クロウの頬に赤みが差す。

「違う、そういう事じゃない！この——」

殴りかかろうとするクロウを見て、エッジとアキが止める。

「落ち着けよ」

「クロウさん、流石に殴るのは」

クロウは二人にまでは抵抗しなかった。諦めたように腕から力を抜き、クリフを放す。

「それより、お前らに見せておきたいもんがあるんだ。ついて来いよ」
すつかりいつもの調子で明るく言いながら歩いていくクリフの背中に、クロウははき捨てる様に言った。

「何で、分からないのよ……」

「ひとまずクリフさんの後を追いましよう」

アキの言葉で三人は彼に続いて元来た屋敷の入り口へと向かう。

クリフが三人を案内した先は屋敷の裏手、ちょうど王女の部屋の窓の外だった。

目指してきたものは明らかだった。

大きな樹がある。

地にしっかりと根を下ろした樹には、無数の傷があった。

一見エッジやクロウの背の届く高さより下に傷は集中していたが、エッジがよく見ると間を空けた遥か上の方にも多い。

「これは？」

アキの質問にクリフは樹を見上げながら言った。

『願ウイッシュユツリいの樹』、この国の人間はそう呼んでる。人の祈りを形にしたものだ」

「願いの樹？」

不思議に思ったエッジは傷をよく観察する。……それは確かに願
いだった。

樹には人のイニシャルと、願い事が彫られていた。

「この国の人間は昔から人間と、自然との繋がりを大事にする。大地から生まれる樹を生命の循環の象徴とし、そこに彫られた願いはまた大地に還って人の元に返ってくると信じてるんだ」

その言い方にエッジが疑問をぶつける。

「何だか、クリフは信じてないみたいない方だな」

「俺は……まあ、元々この国の人間じゃないしな。生命の循環とか心の底から信じてるとは言えねえかな」

迷いながら答え、けれど、とクリフは付け足す。

「叶おうと叶うまいと、その願う気持ちが尊いものだと思う」

それだけは、はつきり言い切った。

今までは黙っていたクロウが口を開く。

「これ、王女様の願い事も書いてあるわけ？」

「ああ。あの上の方の枝の、こっから見た反対側だ」

「何書いてあるか知ってるの？」

クリフは首を横に振った。

「見たことはねえけど、大体は分かっている。あいつはいつも言っているからな……平和な世界が見たい、子供達が安心して生活できる国であって欲しいとかって。いつも他人の事ばっかで、願いも多いから困るけどな」

そう言いながら苦笑するクリフは、何処か楽しそうだった。

答えを聞いたクロウは今までのクリフの行動を振り返る。

(それで、こいつは敵国の武器になりそうな私を誘拐して、孤児院にも足を運び続けているって事。何て馬鹿……)

クロウはエツジに声をかける。

「エツジ、木登りとか得意？」

「え？まあ、手をかける枝があれば登れるけどあの高さまで行くのはあんまり自信ないな」

それを聞いてクロウは二言、三言呟き、ラーヴァンを出現させる。

巨鳥から冷たい風が吹き、樹の枝を大きく揺らす。

突然の彼女の行動にアキとクリフは戸惑う。

「ちよっと見てきて、王女様の願い」

「……ラーヴァンに一人で乗れって言うのかよ、そんなの初めてだから自信無いぞ」

それならと、クロウは先にラーヴァンに乗りエツジに手を伸ばす。

「なら私も一緒に乗って近くまで行くから、エツジは枝に乗り移って」

エツジはクロウの行動に何か理由があるのを察して頷く。

「分かった」

手を取ったエツジも乗せ、ラーヴァンはゆっくりとその翼を動かして高度を枝に合わせた。

エツジは慎重になるべく枝の根元付近を選んで、軽くジャンプする。

二人の行動にクリフは首を傾げる。

「何か意味あるのかよ」

同じく地上に残ったアキにもそれは答えられず、ただ頭上のエッジを見守るだけだった。

エッジは幹に手を添えて身体を安定させながら、樹に彫られた文字をなぞって王女の名前を探す。

「F・L・S・A……これだな」

特に長いイニシャルを見つけてエッジは確認し、そこで止まる。

「クリフ、これ違うよ。クリフが言ったような事は書いてない」

「違う?」

では何が書いてあるのかと、クリフは戸惑いを見せる。

「『クリフが自由であります様に』……確かに、他人のことではあるけど、でも」

あまりにクリフが口にしたものとはニュアンスが違っていた。

クリフは何も言えずに信じられない、という表情で樹を見つめ続ける。

その間にクロウが再びエッジの手を引いてラーヴァンに乗せ、地上へと戻った。

二人が降りると同時に黒い鳥は溶ける様に宙に消える。

「何で俺の事なんて……」

呆然とするクリフにクロウが改めて怒りを滲ませた声で言う。

「こんな大切に想ってくれる人が居るのに、何であんたはそれに気付かないの。国の平和なんかより、死んだ人間の為に戦うより、あんたにはやらなきゃいけない事があるでしょうが」

クリフはしばらく言い返さず、考え込んでいた。自分の立っている位置から直接は見えない、王女の願いが刻まれた場所を睨み続ける。

が、やがて懐からナイフを取り出すと、それをエッジに預けて言った。

「……願い事あるなら彫つとくと良いぜ、それが終わったら王に会いに行く。俺は先に行ってるから」

それだけ言うとクリフは三人に背を向け歩き出す。

「ちよつと！」

「クロウさん、クリフさんにも考える時間は必要です……今は、そつと
してあげましょう」

アキにそう言われてもまだクロウは納得できない様子だったが、一
人で追いかけていく様な事はしなかった。

エツジは話題を変える為に二人を誘う。

「折角だから願ひ事、彫ってみないか？俺も彫るから」

クロウはあまり乗り気ではないようだった。

「私はいいよ。気分じゃないし、願ひ事とか別に」

少し遠慮しながらアキもクロウを誘い、同時に彫れる様に道具を探
す。

「私はやりません。折角だしクロウさんもやってみませんか？クロウさ
んを待たせる事になってしまいますし……エツジさん、何かもう一つ
刃物を持っていませんか？」

その様子を見て、クロウが二人に制止をかける。

「私の分なら探さなくていいよ、これ持つてるから」

そう言いながら、羽根の付いた投擲用のダガーを取り出す。

「じゃあ、やりましょう？クロウさん」

「え……あ、ああ」

クロウはまだ、やるやらない半々位の気持ちで居た様だったが、ア
キにそう言われて断れなくなる。

エツジはその様子を見て微笑んだ。

第四十六話 クロウの望み

三人は思い思いの場所にそれぞれの願い事を彫る。

エッジとアキは樹の下の方に彫ったが、クロウは見られるのを嫌ってかラーヴアンに乗ったまま樹の上の方に彫った。

「じゃあ、王様に会うんだっけ」

ここでやる事が終わり、クロウは確認する様に口に出す。

「その前に聞いておきたい事があるんだ。クロウが何をしたいか」

突然の質問にクロウがやや動揺する。

「な、何？ 願い事に何書いたかなんて教えないわよ」

「そうじゃなくて、これからの事だよ。既にアクシズⅡワンド王国を敵に回している以上、この先セオニアに留まるにしろ出るにしろ俺達は戦いを避けられない。この国の国王を説得する為にもクロウ自身の望みを知っておきたいんだ」

エッジの問いにクロウは虚空を見つめる。

「私の、望み？」

何も出てこない、考えもしなかったという感じだった。

「そんなの答えられない。私には目的なんて何も無いんだから」

そう口にして途方に暮れるクロウにアキが言った。

「クロウさん、目的と望みは違うものです。クロウさんがしたい事、したくない事。それが望みの形です。本当に何もありませんか？」

「私は……」

アキは優しく続けた。

「どんな事でも良いんですよ。何を選んででも……もう私は裏切りませんから。私も、エッジさんもクロウさんの味方です」

その言葉に、クロウは意を決した様に前を見つめた。

「行こう、王様のところ」

屋敷の入り口へ向きを変えて、続ける。

「私の答えは、私が直接王様に言う」

迷いなく歩く彼女の後ろに続き、二人もクリフの後を追った。

クリフは建物の角を曲がった屋敷の入り口で待っていた。

まだ考え込んでいる様子だったが、三人の姿を確認するとその表情を切り替え屋敷の中へ、奥へと案内する。

先程は入ってすぐに左折したところを直進し、屋敷の中心を真っ直ぐに進む。

どこか隔離された印象だった王女の部屋の周辺の落ち着いた様子と違い、こっちの廊下は窮屈にすら感じられる。

絨毯には金の飾り模様が入り、戦いや英雄、名士であろう人物の絵画が視界の両端を塞ぐ。飾られた自然の花ですら、それが収まる豪華な花瓶と一体となって見るものを威圧した。

エツジ達は嫌でもこれから会う相手が国王なのを再認識させられた。

「……………こういうの趣味じゃねえんだけどな」

絵画を横目に見ながらクリフが呟く。

「クリフこういうの嫌いなのか？」

エツジの質問にクリフはああ、と首を横に振る。

「いや、まあ俺も嫌いだけど王様がだよ。本人は嫌いでも臣下が勝手に城の中をこうしちまうんだよ」

そこへ、控えめな声でアキが口を挟む。

「王城は王の住居であると同時に、時に対外的な交渉の場にもなります。あまりに質素であればそれは、第三者からは国民に支持されないとも取られかねません……………ですから、きつと」

クリフも頷く。

「王様だってそれは分かってる。果たすべき責務には誰よりも真摯に向き合う人だ」

そう言いながらクリフは最奥の扉に手を掛け、エツジ達を振り返る。

「入ったら失礼の無いようにな。この奥に居るのは——我が王だ」
軋みを上げながら扉は開いた。

「ねえ、ラーク」

「何？」

「……ここ、お城だよな?」

「そうだね」

「交渉はエツジ達に任せて街の外で待ってるんじゃないか?」

「この城、街の柵の外だよ」

リアトリスとラークは小声で話しながら、警備兵に見つからないように城のすぐ外側まで来ていた。

エツジ達が『ウィッシュユッリー願いの樹』の所へ行くのに通ったちようど反対側だ。

「確かに心配だけど……これじゃ、皆を信用してないのと同じじゃない?」

「信用してるさ、だからこうして方が一の時以外は動かないつもりで居るんだよ」

リアトリスはその返答にため息をついた。

「言っても聞かないもんね、ラーク。それはそうと」

何処か言いづらそうに話題を転換するリアトリスの様子に、ラークは首を傾げる。

「どうかした?」

「ラーク、さっきの戦いでどうして私を庇ったの?」

ああ、と納得しながら笑顔を見せるラーク。

「忘れた? 僕は傷を負ってもすぐ治るんだよ」

「それは致命傷以外でしょう!?!……死んだら治らないんだよ?」

軽く答えたラークに対してリアトリスは一瞬大声になり、それから気付いてすぐに声のトーンを落とす。ラークはその様子に困った顔をした。

「僕が動かなかったら、君が死んでたよ」

その言葉にリアトリスは申し訳無さそうな顔をする。

「ごめん、それは分かっているんだけど……ラークだったらあの際に私を助けずに後ろから敵を倒す事もできたでしょう? 何か、あれはラークらしくない気がして」

ラークは少し考え込み、それから答えた。

「僕はエルドに君の事を頼まれた。イクスフェントの、同じ「シン」の族長の血を継ぐ者として、君を死なせたら彼に合わせる顔が無い」

リアトリスは納得できない表情で首を横に振る。

「ラークは私が同行する事に反対してたじゃない。私が足を引っ張って、ラークが使命を優先したって……エルドはきつと分かってくれるよ」

それに対して今度はラークが否定する。

「君が死んだら意味が無い。そうだったら僕は本当に……エツジの言う「守るものを持たない人殺し」になる」

驚くりアトリスに、ラークは更に言葉を続けた。

「エツジに言われてようやく気付いた。僕は今まで守るべき世界を第一に考えてきた。その為に他のものを天秤にかけては捨ててきた。でも、そうして守ってきたのが誰なのか……僕には答えられなかった」

言葉にしながら、ラークの表情は嫌悪に歪む。

「僕はきつと、リアトリスまで犠牲にしたら考える事もしないまま、世界の為に天秤の傾かなかつた方を殺し続ける。……守るべきものを定められないままに、守るべきだったものまで殺し続ける。僕はまず何を守りたいのか考えなきやいけないんだ」

そう言って顔を伏せたラークに、しばしリアトリスは目を丸くしていた。それからしばし間を置き、彼を元氣付けるように手を握る。

「やつと口にくれたね、悩んでる事。ラークだって、そういうのは言っていないんだから」

まあ、と照れ笑いするリアトリス。

「百年も後に生まれた小娘じゃ、力になれないかもしれないけど……」

その言葉にラークはゆっくり首を横に振った。

「そんな事ないよ。ありがとう、リア」

珍しく、ラークは本当の笑顔を見せた。

扉の中の空間は静謐な空気で満ちていた。

薄青い水晶の天窓から入ってくる光は、元の陽光と同じものとは思えない神聖なものに見える。

四角い空間の両端にはクローウを首都まで連れてきた男たちが白い

マントを身にまとって控えている。シントリアの王城でも騎士達が脇を固めていたが、鎧がない分こちらの方が威圧感は薄かった。

クリフは空間の中央まで進み出ると、右膝について国王に頭を下げる。

「蓮の水鳥・クリフ・セイシャル、只今戻りました」

「おお、クリフか。よく無事に戻ってきてくれた」

陽気に返した国王は栗色の髪 of 男性だった。歳はシントリアの国王とそう変わり無いようだったが、その柔らかな態度のせいかずっと若く感じられる。

「その娘が、お前の言っていた子か？」

クロウの方に目を向けて国王は尋ねる、見つめられたクロウはどう反応しようか迷った様だったがとりあえず頭を下げた。

「はい、闇属性の——」

「よい、自分の事を他人の口から語られるのは不快であろう。娘よ、名は何というのだ？余はトレアス・L・セオニア・アリーズ二世。フレアの父であり、不肖ながらこの国を与える王でもある」

クリフの説明を遮り、セオニアの国王——トレアス二世はクロウに對して名乗る。

クロウは一度口を開くがすぐには言葉にならず、大きく息を吸い直してようやくはつきりした声で答えた。

「クロウです。家の名前も分からないので、ただそう呼ばれています」

「では、特別な深術を使えるというのは本当かな？」

「はい」

トレアス二世はふむ、と目を細める。

「想像する事しか出来ないが平坦な人生ではなかっただろう。あの様な連れられ方では信用出来ないだろうが、ここに居る間は余の客人だ」

「あ、ありがとうございます……」

どう答えていいか分からないという表情でクロウはとりあえず頭を下げた。

「さて、その上で一つ尋ねなければならない。君の心が一体どこにあ

るのかを」

クロウは王のその言葉の真意が掴めず戸惑いを見せる。

「君がアクシズⅡワールドに忠誠を誓う人間であるなら我々は君の敵だ。逆に、君に戦う理由がありアクシズⅡワールドと敵対する道を選ぶなら力を貸してもらいたい。或いはこの国で平和に暮らす事を望むなら、我々は君という国民を守る為に剣を取ろう」

その言葉にクリフや脇に控えていた男達は微かな動揺を見せたが、トレアス二世はそれを片手でなだめる様に制する。

クロウはその王に対して遠慮がちに尋ねる。

「あなたは——陛下はこの国の王様、なのでしよう。私一人の為に戦争になっても良いのですか？」

「王というのはな、己の力に依じて守るものを決めるのではないのだ。守る民の為に王が居るのだよ」

求めるのなら、誰であっても自国の民として受け入れる。王の答えはそう言っていた。

「君も同じだ、何が出来るかで君の役目を決める権利など誰にも無い。大事なのは、君が何をしたいのかだ」

クロウはその言葉に迷いを見せながら、横に居るアキとエッジの顔を見る。二人はそんなクロウを後押しする様に頷いた。

「私は、許されるなら……誰とも戦いたくありません」

ほう、とトレアス二世は目を細める。

「ですが、私の為にこの国が戦争になるのも嫌です。戦いたくないなんて自分のわがままに、他人を巻き込みたくない」

きちんと国王の目を見ながら、クロウは望みの最後の一言を口にす
る。

「このまま、私たちを国の外へ行かせて下さい」

そこで国王は考える表情を見せる。

「ふむ、それは途中で分かれた残り二人の仲間と共になかな？」

その問いに、クロウ、エッジ、アキ、そして誰よりクリフが驚く。

「な……知ってたのかよ」

クリフの狼狽に無言で控えていた男、マイロが呆れる様に口を開

く。

「俺達は諜報部隊だぞ、この街の内部の事すら分からないと思ったのか。いつもいつも、お前は一人で勝手に動きすぎだ」

それと、と付け足す。

「……陛下の前だ、口調が戻ってるぞ」

しまったという顔でクリフは国王に頭を下げる。

トレアス二世はそのやり取りを静観し、終わったのを見て再び口を開く。

「実は今我が国はアクシズⅡワンド王国から警告を受けている。王城を襲撃してきた君達を渡さなければ戦争を開始する、と」

その言葉にクロウは言葉を失い、エツジは小さな声で疑問を口にする。

「騎士団が海上都市から国境を渡って来なかったなら、スプラウツ以外の人間にクロウの居場所は知られていない筈じゃないか？あんな組織の証言が戦争の口実に……？」

アキはそれを否定する。

「いいえ、問題なのはクロウさんがここに居た事です。どんなルートから得た情報であっても、事実である以上後からいくらでも裏付けは出来ます。王城襲撃犯をこの国が庇っているという事になれば……私の摘発でお二人はセオニアの間者とされていますから、それは十分に戦争の口実になってしまう」

最後の方は顔を伏せながら彼女はエツジにそう説明した。

トレアス二世は黙ってしまったクロウに向け、先を続けた。

「君達がこのままセオニアを後にすれば、君の意思に反してこの国は戦争に巻き込まれる。それは余にとっても望む所ではない」

深刻な表情を見せながらトレアス二世は髭をなでる。

「そこで、だ。我々の希望は一致している。ここは一つ、おとなしく捕まっては貰えないだろうか」

その言葉に、エツジ、クロウ、アキは目を丸くした。

第四十七話 白い狂気

「……これで良かったの?」

謁見を終えて四人で玉座の間から出てきた後、クロウはクリフに尋ねた。

「さあな、俺にも分からねえよ。けど、まあ従うさ」

クリフの返答にどこか納得いかない表情をしながら、クロウが念を押す。

「国出る前にちゃんと王女様に挨拶しときなさいよ」

「分かってる……お前、妙にフレアの肩を持つよな」

「あんたの味方はしないの」

その返答に辟易した顔を見せながら、クリフは王女の部屋の方へ向く。

「ではクリフさん、また東門の所で合流しましょう」

アキの言葉に、クロウが思い出した様にクリフに言う。

「ごめん、ちよつと寄りたいたいところあるから……合流はチリアの所で」

「チリア?」

聞き慣れない名前にエツジが聞き返すが、クロウは誤魔化す様に背を向けた。

「行けば分かるから」

エツジとアキは首を傾げた。

完全に日は落ち、ウオーギルトの街は夜になっていたが三人は火の街灯のお陰で迷うことはあまり無かった。

クロウに先導されるまま孤児院の前に着くと、アキはその建物の外観に感想を漏らす。

「……大きな家ですね、余程の大家族の御宅なのでしょうか」

「ここにクロウが知り合った人が居るのか?」

エツジの質問にクロウは曖昧に頷き、説明する。

「この家を建てた家族はもう住んでないよ。空き家を改装して使ってるらしいから……まあ、ある意味今すんでののも大家族だけど」

そう言いながら、クロウは一人戸口の前に立った。

「ちよつと待つて、すぐに済むと思うから」

横目で二人が了承したのを見てクロウは一人中に入った。

数時間ぶりに戻ってきた孤児院の中でクロウを待ち構えていたのは腕組みをしたチリアと、怯えたように彼女の陰に隠れた数人の子供だった。

「クロウ……」

「皆戻ってる？」

チリアは固い表情で頷く。

「戻ってきた子がね、あんたを怖がつてるんだ。あんたが……子供を殺したつて。もし、それが本当なら——」

いつもハキハキと喋る彼女が言いにくそうにするのを遮って、クロウが先に切り出した。

「大丈夫出ていくよ、それを言いに来ただけだから」

「……そうかい」

チリアは固い表情を崩さないままそれを認め、彼女の後ろの子供達はクロウのわずかな動きにも反応しその身をクロウから隠そうとした。

クロウはそれを見て、何も言わずに外へと引き返す。

別れの言葉もなく、扉は閉まる。

外で待つていたエツジ達はあつという間に出てきたクロウと、その暗い顔に不安そうな目を向ける。

「もういいのか？」

クロウは頷く。

「報告だけだから、これ以上用事なんて無いよ」

沈黙が流れる。

と、扉が開く音がそれを破った。

自分の背後から聞こえた音に、訝しげに振り返ったクロウは突然身動きが取れなくなって慌てて抵抗しようとし——それが抱き付いてきたチリアだと気付いて抵抗をやめた。

「チリア？」

「ごめんよ……あんたが皆を助けてくれたんだろ？危なかつただろう

に」

困惑の声をあげるクロウに、チリアは罪悪感の滲んだ声で謝る。

「でも私は皆の、全員の『母親』だから、あんたの家族になってやれない、許しておくれ」

クロウはその言葉に一瞬目を見開き、それから優しく彼女を抱き返した。

「そんなこと無い、チリアは立派な母親だよ」

抱擁を解かれると、思い出したようにクロウは一つ尋ねる。

「右腕に傷がある子、普段元気にしてる？」

「レブかい？元気だよ、手を焼く位さ」

それを聞いてクロウは安堵の表情を見せた。

「それなら良いの……ありがとう、チリア」

チリアは首を横に振る。

「礼を言われることなんて無いよ。何もしてやれないけど……元気でいるんだよ」

そう告げると、チリアはエッジとアキの方を向く。

「あんたらはクロウの仲間かい？この子を頼むよ」

「はい」

「はい」

二人が頷く。迷い無いその態度にチリアは少し安心した様子を見せた。

「良い子達だね」

「……うん」

小さな声で、しかしきちんとその言葉に同意したクロウをチリアは笑顔で送り出した。

王女は眠っていた。先程より深い眠りの中に居るようで、起きる気配は全く無い。

それを起こすのを忍びなく感じたクリフは、このまま出て行くかとも考えるが、彼女との約束を思い出しその肩に手をかける。

かなり強く揺り動かされるまでフレアは反応を示さなかった。

「クリフ……?」

ぼんやりと焦点の定まらない眼で目の前の相手を見た彼女は、それがクリフなのか確かめる。

「ああ、ちゃんと挨拶しに来たぜ」

「……挨拶ってことは、もう行くんだね」

静かに感情を抑えた声で王女はクリフの意図を汲み取る。

クリフはそれに申し訳無きそうに答えた。

「悪い今度は、いつ戻れるか分からねえ」

一呼吸おき、眉をしかめながらクリフは続ける。

「……クビになった。戻れないかもしれない」

その言葉にフレアは目を丸くし、それから何かとても面白い事があつたかの様に吹き出した。

予想とは違うその反応にクリフは困惑した様子を見せる。

ひとしきり笑ったフレアは、涙目になりながら謝る。

「ごめんなさい、自分でもちよつと驚いちゃった。ただ、嬉しくて」

「嬉しい?」

クリフの問いに王女は頷く。

「うん、クリフがこれでようやく元の旅人に戻れるから」

心から嬉しそうに言う彼女に、クリフは辛そうに顔を歪める。

「でも、フレアはこれで……」

「私の事は良いの、クリフ。それであなたが自由になるなら……私は私、クリフはクリフの世界にまた戻るだけ」

最後に少しだけ寂しさを滲ませた彼女の言葉に、クリフはその手を強く握った。

「戻ってくる、絶対だ」

フレアは困った顔をする。

「それじゃ意味が無いじゃない、私はクリフに自由でいて——」

「俺が戻ってきたいんだ!だから戻ってくる、絶対に」

呆気にとられた表情で王女は固まり、それから柔らかく微笑んだ。

「正直ね、私怖かったんだよ。ここにしていると皆が私を置いていつちやう気がして、ある日突然誰も来なくなったら私はずっと一人で一生眠

り続けるんじゃないかって……でも、クリフを待つ為なら大丈夫。また、来てくれるなら私は何も怖くない」

だから、と紅緋^{べにひ}の髪を揺らして優しく王女はクリフの手を押し返す。

「クリフは安心して行ってきた、すぐにまた会えるんだって思えば私の眠りだって悪くないよ」

そう言って、彼女は笑顔でクリフを送り出した。

《丘陵の首都 ウォーギルント 東門》

「王女様にちゃんとお別れ言ったんでしょうね」

「そっちこそ、チリアと別れはちゃんと済んだのかよ」

合流して顔を合わせるなり、クロウとクリフは睨み合う。

先に待っていたラークはその様子を微笑みながら静観し、リアトリスは止めるべきか焦る。

アキは睨み合う二人に聞こえない様に呟く。

「どうしてクロウさんはクリフさんとすぐに喧嘩になるんでしょうか」

「二人とも、他の人とは結構仲良く出来るのに」

リアトリスの相槌にエッジが疑問を口にする。

「……クロウ、出来てるか？」

そんなやり取りがされているのには気付かないまま、クロウが先頭に立つ。

「もう行こう、エッジ、アキ」

「私の事、『ジェイン』って呼ばないんですか？」

いつもと違う呼ばれ方にアキが固まり、他のメンバーもクロウの顔を見る。

突然注目されたクロウは焦りを見せながら弁解する。

「何よ、スプラウツを指揮してるジェイン・リュウゲンと……アキは敵になっただから、両方ジェインって呼び方だと紛らわしいでしょ」

ラークがにこにこ笑うのを見て、クロウは自棄になった様子で全員に背を向ける。

「とにかく、行くわよ！港でしょー！」

憤然と先頭を歩き出すクロウの耳は真っ赤だった。

「おい、いくら許可を貰ったとはいえ、余りあの子供を一人で離すなクリフ」

その後姿を見て、ここまで無言だったマイロがクリフに警告する。彼一人ではなく、この首都までクロウを送ってきた部隊——蓮の水鳥の男達もエツジ達と距離を置いて控えている。

「いくらなんでも、こんな所から演技しなくても大丈夫だろ」

気楽に返すクリフに、マイロはため息をついた。

「それ以前にあの少女がいなくなったら全て終わりなんだぞ。この先俺達は別ルートだ、コルマ港でセオニア正規軍と合流するまで責任を持ってお前が監視しろ」

クリフにそれだけ警告すると、マイロ達は南東の方へと離れていく。

「俺たちも急ごう、コルマ港へ」

エツジの言葉で皆もクロウの後を追って歩き出した。

「残ったのは貴様らを除いて九人か……十一人もやられるとはな」

敗走した『巖^{げんがん}』のバルロと子供達は『紅蓮^{ぐれん}』のセルフィー、『爪雷^{せうらい}』のフレットと合流しアクシズⅡワンド王国へと戻る途中だった。初めこそ老人はセルフィーの敗北に顔をしかめたものの、自身もまた敗れた為か彼女に対しても無断で動いたフレットに対しても何も言わなかった。

「奴らを侮るな……特にあの男は、お前と同じだフレット」

「あ?」

予想外に名前を出されたフレットは、バルロを睨む。

「エツジと名乗っていた。奴には『自分の身を省みる』という思考が欠落している。他者の為にそれを行う辺りお前とは違うが、あの手の人間は何をして来るか分からない。絶対に油断するな」

警告されたのが気に入らないという表情で、フレットは記憶を辿る。

「エツジ……エツジ……ああ、クロウが言っていた奴か。戦力的には最

低な筈じゃなかったか、あれ？」

思い出していますますやる気が失せたという表情でフレットは疑いの眼差しを老人に向けた。それに対して、バルロは怒気をはらんだ声で念を押す。

「油断するなど言った。そういう隙がそのまま貴様の敗因になるぞ」

フレットはその言葉を鼻で笑う。

「はっ、負けるかよ。この世で俺より強い人間が居るとしたらシントリア最強の騎士か、クロウだけだ。厄介だつて言うなら、まずそのエッジとかいう奴から殺してやるよ」

バルロはその返答では不満な様だったが、フレットと平行線の論議を交わし続けるほど愚かではなかった。黙り込んでいるセルフィーにも向けて、確認をする。

「とにかく急いで中央大陸に戻るぞ。ネイティールが留守を守っている限り脱走は無いだろうが、レパートとルオンもレーシア大陸に出ている。あまり長期間クローバーズを奴一人にしておく訳にはいかん」
ネイティールの事など興味が無い様子のフレットは、それに適当な返事をした。

「あら、ダメよ。逃げたりしたら」

冷たい空間に場違いの、少女の様な優しい声が響く。

クローバーズが出払ったスプラウツの中心拠点、無機質な建物の唯一の出入り口。

その前に固まった四人の怯えた子供達の前で、声の主は柔らかく微笑む。

服装も、その透き通った髪も、上から下まで絵に描いた様な真っ白なその女性はどこか現実感が欠如していた。

事実、彼女は脱走しようとしている四人を止めるべき立場であり、この状況とその態度は噛み合っていないかった。

「外の世界は残酷よ、あなた達を決して認めてくれない。だからここに残りなさい？」

そう言いながら女性は無防備な動きで四人に手を差し伸べる。そ

の際を突いて、子供の一人が扉を開いた。
その瞬間、

「——ホーリーランス」

白い槍が、赤い華を咲かせる。

三人になった子供達は悲鳴をあげ、その場に崩れ落ちた。

その子供達にゆつくりと近付いた白い女性は、優しく、優しく彼らの頭を撫でて謝る。

「怖がらせてごめんなさい、でも本当に……外の世界はもっと怖い世界なのよ。その子の様に痛みも無く死ぬ事すら出来ない。きつとあなた達は逃げた事を死ぬほど後悔する」

そして、笑った。

「大丈夫よ、あなた達は絶対、私が守ってあげる」

そのクローバース、ネイテイルの笑顔は一点の曇りも無い——名前通りの『純白』^{じゆんぱく}の笑顔だった。

※セブンクローバーズの情報が更新されました。

深術のエキスパートとして育てられた孤児の集団。

その中心的活動を担う精鋭にして、同時に味方同士の監視者でもある七人の深術士^{セキコアラ}。

人数が多いのは裏切りや命令違反を冒そうとしたメンバーが飛びぬけた実力を持っていても複数人で対処し、従わせる為。

各自がセブンクローバーズとしてそれぞれ識別名称を持っているがあくまでコードネームであり、成立してからそれほどの年月が経過していない為、本人の能力と名前が一致している者が多いが『流連^{りゅうれん}』の様に二代目である場合は本人の能力等とは無関係に前任者の識別名称を引き継ぐ事になる。

また、全員が自身の最も得意な一属性の使用に特化している。

『爪雷^{そつらい}』

名前：フレット

武器：専雷爪^{せんらいそつ}「スペシャライジング」

特化属性：雷

才能：並外れた身体能力

戦う事に喜びを見出し、誰よりも危険な少年。

術士としての素質もさることながら、近接戦闘のみでも正規の騎士を圧倒する年齢不相応の身体能力を持つ。

実力はともかくとして性格面に多大な問題があり、命令の有無に関わらず単独行動が多い。

また、戦いそのものに喜びを見出す性格ゆえに強敵との戦いをわざと引き延ばしたり、見逃す事もある。

それ故に実力とは反比例して仲間からの信頼は薄い。

巨大な鉤爪の形をした彼の武器は、雷以外の属性のディープスを貯める機能を排することで雷属性の使用効率を格段に上げている。

この武器では通常の方法で他の属性を使用することは出来ない。

多少の傷を負っていたとはいえラークとすら互角に切り結ぶ身体能力を持ち、優れた術士でありながら七人の中では唯一好んで接近戦

闘を行う。そのラークにも筋力やスピードでこそ劣るものの、雷属性の爆発を上乗せした技の威力で上回り、用途に応じた術を使いこなす事で高い防御能力を得ていたリアトリスの障壁も、武器と深術両方の特性を併せ持った攻撃で粉々にした。

その実力は紛れも無く七人中最強である。

『巖岩』

名前：バルロ

武器：錬成手甲「岩堵」

特化属性：地

才能：観察と経験による弱点の看破

子供達を鍛え上げた全員の師であり、統制者でもある老人。

元は軍人で、岩で殴られる恐怖をもって全ての子供をコントロールしている。

この人間なくしてスプラウツは集団として機能しない。スプラウツの中心と言っても過言ではない人物。

他のクローバーズと比べると突出した戦闘能力を持っている訳ではないが、全員の弱点を熟知し裏切りを想定して身内との戦いに特化している為、直接戦った場合クローバーズ全員を打倒しうる手段を用意している。

拳を『握る』ことをトリガーとして一定の間合いに岩を形成し、腕の動きと連動させる手甲を武器として使っており、自分から離れた間合いに居る相手を『殴る』事が出来る。

これは、単純ながらも強力な接近戦の手段で、敵との間合いを空ける事に優れている。

また打撃が発生する箇所と拳の間には何も無い為、正確に間合いを把握していない相手には壁などで遮断する事も難しい。

現実主義者で自分がとうに『黒翼』や『爪雷』に力では及ばない事を認めた上で、正々堂々に拘らず数の利や状況、心理的死角を突く事で彼らとも互角以上に渡り合う。

『紅蓮』

名前：セルファイ

武器：鞭、炎熱鉱石えんねつこうせき

特化属性：火

才能：感知

燃える様な赤い髪の少女。

感情的で激し易く『爪雷』そうらいからは本来の識別名称を無視して『爆発セルファイ』と呼ばれている。自身の実力が『爪雷』そうらいには及ばないと自覚しているものの、術士として一流であるというプライドを持っている。その為興味の無い事にはやる気を出さない『爪雷』そうらいとは反りが合わず、喧嘩が絶えない。

彼女はデイープスの位置を正確に把握することに長けており、温熱筒おんねつとうにも利用されているデイープスの集束コレクトを補助する鉱石を併用する事でその能力全てを攻撃に利用している。

放り投げた赤い鉱石を核にして詠唱無しで術を開始し、術が相手に届くまでの間も集束コレクトを続ける事でクローバースでは唯一自力で詠唱無しの上級深術を発動する事が出来る。これは感覚的には『一度投げた石に、後から投げた石を空中でぶつけ続ける様なもの』であり、高い感知能力を持つ彼女以外には真似する事が出来ない。

自分と同等以上の感知の才能を持つたりアトリスを激しく敵視し、またリアトリスの側も防御に特化した自分のスタイルと正反対の彼女の戦い方を危険視している。

◎接華浮燈せつかふしとうの陣

単独で彼女が戦闘を行う場合、接近戦が不得手な彼女がそれをカバーする為に使用する切り札。

手持ちの炎熱鉱石の大半を空中にばら撒き、それを「触れると爆発する赤い光の珠」に変換する事で自分の周囲全体を守る領域を作り出す。

性質上、ほぼ全ての炎熱鉱石を消費してしまうため一度の戦闘で使えるのは一度が限界。

一見、珠同士に隙間があるため壁としては機能しないように見えるが、陣の内部は全て彼女の『感知』の範囲内であり小さな異変でも即

座に反応してセルフィー自身が発火を起こす事が出来る。その為
ラークのスピードを以てしても突破するのは難しく、相手が強力な深
術で一点突破を狙ってきても外縁部だけを爆発させる事で衝撃を半
減されてしまう。

また、全ての光の珠は陣を張っている範囲内なら彼女自身が任意で
動かせる為、少数が減っても陣は機能し続ける。

総じて防御すら攻撃によって補う、ただひたすら攻撃に特化した彼
女の戦い方を象徴する陣。

『黒翼』

名前：クロウ

武器：スロージングダガー

特化属性：闇

才能：体内に持った闇の宝珠の欠片

スプラウツを脱走する前のクロウ。

彼女はエッジ達には自分もまた子供達を管理し教育する側であつた事を告げなかったが、これがクロウが脱走する事が出来、また抜けた後も執拗に追われ続ける最大の理由である。

宝珠の力を使っている状態のクロウは、術士としての資質のみで考えれば全てにおいて最高クラスの能力を所持しており、全ての術の詠唱を破棄し、『爪雷』^{そうらい}すら及ばない威力の術を用い、数kmの範囲の視界を闇で閉ざしたまま内部の状態を正確に把握し相手をピンポイントで攻撃する事も可能。

通常時にクロウがこれらの能力を使用すると相応の負担が身体にかかる（目の色の変化はこれに因るもの）が、体内の闇の宝珠の欠片の意思⇨ラーヴァンを黒い巨鳥として実体化させた状態ではその負担が無くなり、上記の能力が制限なく使える様になる。

能力だけなら間違いなく最強のクローバースであったものの、本人が人を殺す事を無意識に嫌っていた為広範囲に効果が及ぶ様な術は滅多に使用せず、黒い霧による感知を活かした情報収集や最小限の殺害に抑える暗殺等を主としていた。

自ら望んで戦いに赴く事で最強の座に位置する『爪雷』とは対極であり、能力的にはクロウが勝るものの無意識に力を抑えてしまうため、殺人を楽しみさえする彼には対人戦の能力では一步劣る。

『流連』

名前：???

武器：？

特化属性：風

才能：なし（武器との関係あり）

二代目。前任者とは属性以外共通点なし。

他のメンバーと比べ成ってから日が浅く、実力的にも劣るが、それ故認められた事を喜び調子に乗りすぎている所がある。

『弧氷』

名前：ルオン

武器：弓

特化属性：氷

才能：『爪雷』には劣るものの高い身体能力

感情の大部分を喪失した少年。

弓という単独戦闘を苦手とする武器を持ちながら、空中で正確に弓矢を操るボディバランスと素早い跳躍力を持ち、氷柱を発生させる属性技「扇氷閃」と合わせて単独行動でも十分詠唱時間を稼ぎ戦闘する能力を持つ。

術の詠唱速度・威力・弓の扱い全てにおいて安定した能力を持つもののクローバーズ全体の中では尖った能力を持たない様に見えるが……

スプラウツの中では監視無しでも命令違反をせず、単独行動もこなせる貴重な人材。

『純白』

名前：ネイデール

武器：??

特化属性：光

才能：??

クローバースでは『げんがん巖岩』を除いて唯一の成人。

味方であつても姿を見たものが少なく、部屋にこもっている時間も長いが『げんがん巖岩』からの信頼は厚く、他の全員が拠点留守にしている場合単独で『げんがん巖岩』の役目を引き継ぎ、子供達の統制者の役目を担う。

リアトリス同様、希少な光属性を最も得意とする術士。↑New

それだけでも十分特異な才能であるが、クロウの様な例外を除いてまず不可能な中級深術「ホーリーランス」の詠唱を破棄し、咄嗟の発動して見せる等その実力は底が知れない。

セキユアラ深術士の数は騎士団や軍の外部には少ない為、ともすれば迫害にすら遭いかねない深術の才能のある子供達の未来を憂い、その幸福を願う。

不幸な未来や現実を見せない為ならば、躊躇い無くその命を摘む程に。

第四十八話 秘めたる奥義へ

《コルマ港》

「待って、妙なのが居る」

目的の港に入るなり、ラークが全員を制止した。しかし、目立った不審人物は見当たらない。

クリフはラークに疑いの目を向ける。

「そんなやばい奴居るように見えねえぞ、まだここはセオニアの領内だ」

ラークは落ち着いた笑顔のまま、皆の方を向いて言う。

「数人固まつてる旅人達が居るだろう？あれは変装したシントリアの騎士の格好だよ。こつちには気付いてないし襲ってくる気は無さそうだけど」

軽く示された先にはよく居る旅人の護衛らしき帯剣した三人の男達と、一人の女性が固まって立っていた。話しながら誰かを探すように時折人込みに目を凝らしている。

「……何で騎士だって分かるんだよ、変装だとしても格好は普通じゃねえか」

クリフは納得いかない様子だ。

「僕も以前シントリアで騎士をしていた事があるから分かるんだよ。三人とも確かにありふれた傭兵の格好だけど、三人が三人あまりにお手本通り過ぎる。何より、タリア・リヨウカと一緒に居るのがアクシズⅡワンド王国の人間でない筈が無い」

その発言にリアトリスを除いた全員が驚く。が、確かにそれが真実ならブレイドと面識があったのも頷ける話ではあった。

「いくつよ、あんた」

クロウの経歴への疑問をラークは笑って受け流すが、エツジは別な所に疑問を持った。

「ラーク、確かにリヨウカなのか？」

「名前を呼んでたから間違いないよ。てつきりあのままおとなしく帰国したのかとも思ってたけど……まあ、国境まで越えて来た人間が簡

単に諦める訳無かったね」

リヨウカが居ると聞いたアキは、複雑な顔をしながら皆に尋ねる。「どうします？セオニア国内でなら向こうも立場を明かせませんから、目立った動きはしてこないでしょうが。今下手にリヨウカさんに何かを見破られるのは危険な気がします」

全員がしばし考え、エツジが何かを思いついた様にクリフに声をかける。

「クリフ、ちょっと」

「ん？」

近付いて屈んだクリフにエツジが耳打ちし、懐から何かを取り出す。それを見ていたアキは取り出された物に気付くと目を丸くし、それから視線を逸らした。

「……それ、騒ぎ起こさずに上手く行く方法？」

クロウは、エツジが取り出したものを見て尋ねる。

「いや」

きつぱり言い切ったエツジに、クロウはため息をついた。

「ありがとう、何とか逃げ出したまでは良かったのだけれど。あなたが来てくれなかったら不安でとても船に乗る事が出来なくて。ごめんなさい、船で海上都市から連れ去られたせいかしら……我ながら本当に臆病ね」

申し訳無さそうに、リヨウカは変装した騎士達に謝る。

それを見た騎士達は慌てながらそれを否定する。

「いえ、そんな事はありません！……無事で本当に良かった」

騎士達の言葉に安心した様子を見せながら、しかし今度は毅然とした表情でリヨウカは言う。

「ありがとう、でもあなた達に迷惑をかけただけでは帰れません。彼を海上都市から逃がしてしまったのは私の責任でもありません、何かお手伝いさせて下さい……必要なら、再び彼と最後に別れた町まで戻る覚悟もあります」

少し怯えを見せながらも責任を感じている様子のリヨウカを見て、騎士達は顔を見合わせる。

「お気持ちとは分かりますが、ここはセオニアです。我々だけで勝手に内陸部まで調査する権利はありません」

リヨウカは必死の表情で尚も食い下がる。

「責任は私が持ちます。何も見つからなかったなら、私が無理矢理従わせたと言つて下さい」

騎士達は悩む。

と、決めかねる様子の彼らに走ってきた一人の少年がぶつかり立ち止まる。

謝ろうとした少年は、しかし何かに気付いた様子でリヨウカ達に背を向けて一目散に走り去る。

「今のは、まさか……待てー!」

それが、手配中の少年エッジ・アラゴニートである事に騎士の一人が気付く。

「セオニアから更に逃げるつもりか、追うぞー!」

三人の騎士がすぐに走り出し、周囲もその異変に気付いてにわかに騒がしくなる。

「エッジ……?」

彼を探そうとしていたリヨウカもその展開に驚きながら、彼らの後を追う。

港を出て、付近に人が居なくなつたところでエッジは足を止めて、振り返る。

手には『宵よいの地衣ちころも』を握り締めて。

「女性から武器まで奪つて利用するとは……やはり性根から腐つていたか、とても団長の弟とは思えない」

追いついて来た騎士の罵倒を意に介さず、エッジは衣の力を借りて深術を放つ。

「スパークウエブ!」

雷の網が三人の騎士を囲み、抵抗する間もなくその意識を奪う。

躊躇は無い。何度か衣を使い、エッジも加減を掴んでいた。

追いついて来たリヨウカはその光景を見て、エッジを警戒しながら足を止める。

「どういうつもり？ 本当は騎士に恨みでもあるの？」

エツジは首を横に振りリョウカに近付くと、『宵の地衣』よい ちごろもを手渡す。

「これで、真正銘俺に奪われたって言い訳が立つだろ？」

手渡されたそれを見て、リョウカは言葉を失う。

「俺がさっきの深術でその武器を扱いきれなくて、慌てて捨てて逃げた事にすればあんたが持ってもおかしくない筈だ」

そう続けるエツジに対して、リョウカは納得いかない様子で顔を歪める。

「何でこんな事を？」

エツジは笑って答える。

「大切なものだって言ってただろ、助けてもらってあんたに——リョウカに俺が返せるのはこれ位だから」

受け取った『宵の地衣』よい ちごろもをゆっくり握りながら、虚ろな目でリョウカは尋ねる。

「これを見て、ジエインは何か言ってた？」

「少し驚いてたけど、何も言って無かったよ。それと、もう一つこつちが本題なんだけど頼みたい事があるんだ」

その返答にリョウカは俯く。

「……何でそんなに人を疑わないのよ、今の質問だって私がジエイン・アキの居場所を知る為に聞いたとは思わなかったの？」

エツジは首を横に振る。

「隠すつもりなんてないよ。俺はアキも、リョウカも良い人だって知ってるから」

リョウカは顔を上げず、何かに耐える様に衣を更に強く握り締める。

「私は嘘を吐くわよ。例えばここで約束しても、国の為に最善だと判断すれば簡単に反故にする」

エツジはそれでも迷わなかった。

「それならそれで良い。俺の話聞いて、その上でリョウカが最善と判断するなら……それはきつと本当に国の為になる事だよ」

そこからエツジが話す内容に、リョウカはほとんど言葉を返さな

かった。

と、突然二人の会話は遮られる。

「なっ」

「エツジ!？」

エツジが大勢のセオニアの騎士に取り囲まれ捕まったのだ。

騎士の一人はリヨウカに声をかける。

「この少年はアクシズⅡワンド王国からこの国まで逃亡してきた犯罪者なのです。騒ぎがあつたと聞いて急いだのですが大丈夫でしたか？」

問われたリヨウカはしばし捕まったエツジを見て躊躇ったが、それを振り払う様に目を瞑って騎士に答えた。

「大丈夫です。けれど、少し……一人にしてください」

そう言つて、パニックを起こした様に港の方へと走っていく。

エツジの方に集中していた騎士達は、それがシントリアの貴族の娘だとは夢にも思わなかった。

「何？手配していた二人が捕まっただけ？」

セオニアとの開戦に向けて準備をしていたジェイン・リユウゲンは突然の報告に驚いた。すぐに、その報告をしてきた者を下からせ考え込む。

アキを使い、王都での騒動から着実に開戦の準備を進めていたリユウゲンは、この様な事態を想定していなかった。

アクシズⅡワンド王国で処刑する流れとなれば、王都の包囲からも容易く逃げ出したクロウをセオニアが捕らえておける筈は無く、状況証拠で彼女をセオニアの間者だとしておけばセオニアがクロウを取り逃がしても『意図的にセオニアが間者を庇った』として開戦に支障は出ない筈だった。

(替え玉か……？何を考えている、トレアス・L・セオニア・アリーズ)
一見穏やかで、裏表の無い様に見えるセオニアの王によって度々戦争は回避されてきた。

だからこそ、リユウゲンは配下のスプラウツから脱走したクロウの

動きを利用し、念入りに計画を立ててきたのだ。
(しばし、様子を見るしかないか。徹底的に調べ、差し出してきたのが偽者であるならその嘘の代償を支払わせるまで)

港で捕まったエツジは姿が見えなくなる程の騎士達に囲まれて船に乗せられた。

その頃にはすっかり噂になっており、多くのセオニアの人間がその一部始終を見ていた。

陸を離れるまでずっとエツジは船室に閉じ込められ、船の周囲が一面海になったところでようやく出るのを許された。

「半日ぶりだね、エツジ」

すぐ外で待っていたリアトリスが声をかける。

「ああ、わざわざ待って無くても良かったのに」

リアトリスはにこやかに答える。

「ラークに伝言頼まれたんだよ。舳先の方で待ってるって」

「ラークが？」

「やあ、派手に捕まったね」

指定された場所で待っていたラークは右手をあげてエツジを歓迎する。

「どうしたんだ？急に呼び出すなんて」

意図が分からず尋ねたエツジに、ラークはエツジの剣を指差した。

「久しぶりに剣の修行をしようと思ったんだ、エツジ武器を変えたよね？」

言われたエツジはリョウカに買って貰った新しい剣の事を思い出す。

「ああ、そうだった。お願いしても良いか？ラーク」

「じゃあ、とりあえず基本の確認からいこうか。エツジ、魔神剣まじんけんを撃つてみて」

頷き、エツジは剣を構える。

「魔神まじんけ——!？」

勢いよく剣を振るうエツジ。

今までやってきたのと同じ動きで技を出そうとしたエッジは、勢い余って転びそうになる。

その肩を、

「……エッジ?」

笑顔のまま、殺気を放ったラークの手が掴んだ。

「えっと……」

「君は、武器もまともに振るえない様な状態で戦場に立つてたのかい?」

エッジは出会ってから初めてラークの怒りを感じて後ずさる。

「まあ、武器を変えた事自体は責めないよ……前の剣は重すぎてエッジの技を鈍らせてたしね」

「え?」

言われてエッジは今更ながら前の剣はあくまで人間より大型の、モンスターを倒す為の武器だったことを思い出す。

無意識に狩りの延長で戦っていたエッジはそんな事を考えた事もなかった。

「別にあれはあれで一つの戦い方だったから何も言わなかったけど、この先戦うのは大体が人間だ。必要なのはどんな敵も殴り倒す重さじゃない。より早く、確実に、相手より先に刃を届かせる技術が必要になる」

「確実に、か。確かに……そうだよな」

言われたことをエッジは眩きながら頭の中で反芻する。

「今のエッジになら教えられるかもしれない。無闇に使うものじゃないけど見た相手を実際に倒す、秘めたる奥義。必殺の剣を」

「秘めたる奥義……」

ラークは頷く。

「人によっては秘奥義ひおうぎなんて呼んだりもするね。見た相手っていうのは基本的に死んじやうから、なかなか他人のものを知る機会は無いです」

エッジは少しだけ不安そうに、握っている剣を見た。

「俺に、出来るかな」

「出来るよ、大丈夫」

ラークは励ます様にエッジの背中を叩いて、言う。

「とりあえず、その抜けた基本からみっちり叩き直そうか」

その言葉はとても、頼りになりすぎる位の強さで満ちていた。

第四十九話 王都脱走作戦

《王都 シントリア》

王都の西側はその日、落ち着きがない市民達で埋め尽くされていた。

しかし、誰も大きな声で話すことは無い。

それを許さない厳粛な空気が、整然と並ぶ騎士達にあったからだ。

一ヶ月以上経過した今でも市民の心には、王都の中心を飲み込んだ黒い霧と王城襲撃犯の恐怖が色濃く残っていた。

その事件の主犯とされる二人がセオニアで捕まり、しかもその一人が王国最強の騎士の弟であった事。年端もいかない子供達が犯人であった事などが重なり、犯罪者の引渡しとは異例とも言える程の警備と注目の元でそれは行われる事になった。

市民とエツジ達との間は、列を成したシントリアの騎士達によって隔てられていた。

二人を連行してきたセオニアの騎士達はゆっくりと人垣の間を進む。

手錠で動けないエツジとクロウはじつ、と抵抗の様子も見せずただ『その時』が来るのを待った。

「……芝居を打つ？」

セオニア国王、トレアス二世は聞き返したクロウに頷いた。

「そう、我々セオニア王国は君達の身柄をアクシズⅡワンド王国へ渡さなければならぬ。しかし、それでは君達に命を捨てさせる様なものだ。助けを差し向けるから、君達は混乱が起こるのを待つて逃げるのだ」

その言葉にアキが思わず立ち上がる。

「陛下！ その様な事をセオニア国王が自ら口にしたことが知れたら、もうエツジさん達など関係なくなります。二国は全面衝突になる」

必死な表情の彼女にトレアス二世は落ち着いて尋ねた。

「ジェイン家の娘よ、君がここに居る事が知られたとしてもまた同様

ではないかな？……が、その危険を犯して忠告してくれた事には感謝せねばな」

微笑む国王にアキは微かに顔を赤くして黙った。

「確かに、我が国の人間が脱走の手伝いをしたと分かれば重大な問題になる。が、『元々君達に仲間が居て、それが助けに来る』事には何の不思議も無いだろう」

言葉を失うエツジ達の前で、トレアス二世は事も無げにクリフの方を向いて付け足した。

「ああ、それとクリフ。お前は首だ」

すぐに意味が理解できなかったらしく少しの間があり、それからクリフが礼の姿勢も忘れて驚く。

「は？……はあ!？」

クリフのその態度に同僚のマイロから咳払いが飛ぶが、国王は尚も言葉を続ける。

「この子達の力になるのだ。それが出来るのは、お前だけだ」

国王からの申し出に一人で答えて良いのか困った様子のクロウはエツジを振り返った。

目が合ったエツジは頷き、代わりに国王に答える。

「ありがとうございます。必ず、ご期待に応え戦争を回避して見せます」

二人は待った、隙が出来るその一瞬を。

クロウの力を知っている騎士の大半と、シントリアの市民の意識は全て自分達に向いている。

関心の高さによる市民の多さは仇となり、それが起こるまで誰も気付かなかった。

「煙だ！」

最初に立ち上る異変に気付いたものが叫んだ時には、既に煙は複数箇所で上がっていた。

エツジとクロウの周りを囲む騎士達の注意も、辺りを警戒して外に向く。

クロウが動きかけるのを見て、エッジがそれを制する。
まだ早かった。

二人が自力で脱出出来たとすれば、ここまで捕まっていた事が不自然になる。

逃げるのはあくまで、『外からの助けを得て』でなければ駄目なのだ。

「流石は直属つてところだね、騒ぎと目眩ましは十分だ」

「ねえ、私……こういうのあんまり、そのやったことないし加減分かんないよ？」

騎士の列と人混みに隔てられた場所で、ラークとリアトリスも状況を確認しながら動き出す。

不安を見せるリアトリスに、ラークはいつもの笑顔で軽く返す。

「大丈夫、多分リアなら思いっきりやる位でちょうど良いよ。ここからは時間との勝負だ、撃つたらすぐ合流場所に走るんだよ」

そう言って走り出すラークを見て、リアトリスは頭を抱える。

「ああ、もう………なるべく誰も怪我しませんように」

半ば自棄になりながら、リアトリスは唱える。

「けっかいもっ結界以て吹き飛ばせ！——フォトンブレイズ！」

ラークとエッジ達の間を塞ぐ人垣の間に小さな球形の光の壁が生まれる。

炎を内包したそれは、内部からの爆発で一気にそのサイズを広げ人々を吹き飛ばす。

リアトリスがあたふたしながらその光景を見守る前で、ラークは術によって出来たスペースで助走をつけて飛び出しシントリア騎士達の壁を越える。

エッジ、クロウ、セオニア騎士達の間に着地したラークは二人の手錠に繋がれた縄を剣で切った。

呆気にとられるセオニアの騎士達の前で、ラークは二人を抱える。『運悪く』即座に反応して阻止しようとした騎士はラークに蹴られ、甲冑で派手な音を立てながら倒れた。

「ごめんね、この二人は返して貰うよ」

にこやかに言ったラークはエッジ達を両脇に抱えたまま騎士達の頭上を越え、守りの外へ飛び出す。

流石に意表を突けたのはそこまでだった、列を作っていた騎士達が次々に剣を抜いてラークを追い始める。

ラークの異常な脚力は重い鎧をつけた騎士一人一人には負けていないものの、二人を抱えた状態では流石にそれ程距離を空けられず、人と人の間を縫う内に数の差で追いつかれそうになる。

と、走り続けるラークの左からクリフが飛び出し併走する。

「おい！予定よりギリじゃねえか」

「間に合ったね、じゃあパス」

ラークは微笑み、右腕で抱えていたクロウをクリフに押し付ける。

自分が渡されると思っていなかった彼女は腕の中で暴れる。

「ちよつと、何普通に私をクリフにパスしてんのよ！」

「だああ、暴れんな！後にしろ！」

ラークは角を曲がり、路地に人氣が無いのを確認すると軽くなった脚に最大限の力を込める。

クリフも、青い『氣』を纏って技の準備に入っていた。

「じゃあ、行くよ」

「分かってるよ——『瞬』」

凄まじい脚力と、『氣』による加速でエッジとクロウを抱えた二人の姿は一瞬で掻き消える。

後を追ってきたシントリアの騎士達は突然追っていた相手を見失って戸惑った。

「——つと、やっぱ重いと普通より持続時間短えな」

一時的に距離を空け追っ手を撒いたクリフの鼻に、クロウの手錠が無言で叩きつけられる。

「痛ッてえ！馬鹿！体重の話じゃねえよ！そうだけど！」

再び、一撃。

「アキは来てるのか？」

自分の足で立ったエッジが冷静に聴覚の優れたラークに尋ね、ラークは首を横に振る。

「まだみたいだ。それとクロウ、見られない所まで来たからもう手錠壊して大丈夫だよ」

それを聞いたクロウはすぐさま闇の深術で自分とエツジの手錠を切断し、クリフの腕から逃れる。

「……てめえ、ラーク。わざとクロウ渡しただろ」

クリフは鼻を押さえながらラークに恨みのこもった目を向ける。

「黙れセクハラ」

と、話しながらアキとの合流場所を目指す四人の前に、予想外の間が現れた。

唯一その相手が現れる理由を察したエツジが、真っ先にその女性に声をかける。

「リヨウカ！」

「ジェイン・アキはどこ？」

厳しい表情で聞いてきたリヨウカに、エツジ達は警戒の色を見せる。

リヨウカがアキに恨みを持って執着しているのはここに居る全員が知っていた。

「リヨウカ、今は——」

「ええ、分かっている。だから、早く教えなさい」

今はそんな事に拘っている場合じゃない、と言おうとしたエツジの言葉を遮るリヨウカ。

その目は真剣だった。

エツジ達が動かないのを見て、リヨウカは付け足す。

「北の警備を手薄にしておいたわ、そつちから逃げなさい」

エツジ以外の三人は不信の目を向けるが、その直後走ってきたアキの声はその言葉を裏付けていた。

「皆さん、北側の警備に穴があります。少し不自然なくらいですが——」

近づいて来るアキの姿を見てリヨウカは両手を広げて戦闘体勢をとり、アキの側も予想外に現れた彼女の姿を確認して武器である傘を構える。

「リョウカ……！」

エツジの制止にもリョウカは表情を変えず、四人に先に逃げる様促す。

「行きなさい……こんな事言っても信じられないだろうけど、今は私を信じて」

リョウカの言葉でラークは真っ先に走り出し、クロウも迷いを見せたがそれに続く。クリフも仕方なく二人の後を追いつ、エツジも最後にリョウカに向けて叫んで彼らに続く。

「リョウカの事信じるとは言ったけど、アキに今何かしたら許さない」
リョウカはその言葉に微かに目を伏せ、それから大きく息を吸って声を張り上げる。

「見つけた！逃げた奴らはここに居るわ！」

その言葉で、騎士達の足音が確実に対峙する二人の方へ近づいてくる。

それを確認するとリョウカは体に巻き付けた四本の布を鞭の様にしなませ、アキへと突撃した。

アキも地のディーパスを傘に集束して、その一撃を受け止める。

「ツ！私に、罪を被せるつもりですか」

アキの問いかけにリョウカは微笑む。

「あら察しが良いわね」

ぎりぎり、と力で押し合いながらアキはこの状況に違和感を感じていた。

（リョウカさんに、崩すつもりが無い？）

本来リョウカの武器は正面から力押しで戦うものではない。手数と変幻自在の軌道で相手のバランスを崩し、敵を制する武器だ。なのに、わざわざ罅迫り合いとも言える様な状況を作って硬直させている。

アキが疑問を持っている間にも騎士達は集まってきて、リョウカが戦っている相手がジエイン・アキである事に気付いて動揺を見せる。

と、リョウカが『宵の地衣』に冷気を集め、アキをエツジたちが去った路地の方へと突き飛ばす。

リヨウカが使おうとしている技に気付いたアキは傘を構えて防衛の姿勢を取る。

「詠技——氷河！」

冷気の波が次々に氷塊を生み出し、急流の様にアキを後ろへ押し流す。

一見、攻撃に見せかけたそれが追手とエツジ達とを隔てる壁になっている事にアキは気付いた。

「今回だけはエツジの顔を立って見逃してあげる」

アキにだけ聞こえる様な声で言うリヨウカの声には、明らかに怒りがこもっていた。

その言葉に対する答えを持たないアキは彼女の視線を一度受け止め、それから逃げる様に無言で背を向けエツジ達の後を追った。

王都の西側では、セオニアの代表者に向けて怒りを露わにして怒鳴るシントリアの代表、ジェイン・リュウゲンの姿があった。

「王城襲撃犯を逃がしただど!? 貴様ら、わざと逃がしたのだろう? 交渉は決裂だ、これはセオニアの敵対宣言にも等しい!」

何も知らされていなかったセオニアの代表者は途方に暮れ必死に否定するが、リュウゲンの怒りは収まらない。

そこへシントリアの騎士数人に連れられたリヨウカが現れ、そのやり取りに割って入る。

「警備をしていたのはシントリアの騎士も同じでしょう、国を代表する立場として話すならもう少し冷静に状況を分析したらどう?」

開戦派のジェイン家にとって仇敵とも言えるタリア家の娘が出てきた事に、リュウゲンは苦虫を噛み潰した様な表情を見せる。

「キサラギの娘…… 礼儀を知らんな、貴様の様な小娘の出る場ではない」

並の人間なら縮みあがる様な怒りのこもったその視線を、リヨウカは鼻で笑った。

「芝居をしているのはそっちの方じゃない? どういう事かしら、あなたの娘がその襲撃犯と一緒に逃げたのを私と、ここに居る騎士全員が

見たわよ」

リヨウカの言葉に同調する様に、アキとリヨウカの戦いを目撃したシントリアの青銅色の鎧に身を包んだ騎士達が彼女の前に進み出てリユウゲンを睨む。

「な、に？」

言われて初めてその事実を知ったリユウゲンは硬直する。

言葉を失った彼の姿に、騎士達を始めとした市民達の疑惑の目が集中する。

「どういう事だ？」

「戦争の口実が欲しくて自作自演してたのか？」

にわかにも高まる疑問の声を煽る様に、リヨウカは大声で言う。

「そういえば、そもそも王城である二人が『セオニアの間者』だと摘発したのもあなたの娘だったわよね？」

その一言でいよいよ集まった市民達はリユウゲンの敵に回る。

「……でつちあげ？」

「まさか、あんな恐ろしい術を使う子供を飼っていたの？」

「説明しろ！」

「どういう事だ！」

不満の声はいよいよ高まり、彼を責める声はどんどん大きくなる。

「おのれ、タリア・リヨウカ……アキ！貴様ら！」

怒りの表情でリユウゲンは市民達に吠えたが、それは全て彼を疑う声に呑み込まれる。

彼の叫びに耳を貸すものも、逃げ出したエッジ達の方に関心を払う者もこの場にはもうほとんど居なかった。

第五十話 「身」と「心」

《ファマグス港》

リアトリスと合流し、王都から無事に逃げだした六人は王都北東の港、ファマグス港に辿り着いていた。

「どうでしょうか？セオニアに逃げる訳にいかない以上、選択肢はもう東のレーシア連合国しかないけど、乗せてくれる船見つかるかな」

エツジが不安そうに言う。

いつもならどこかから解決策を引っ張ってくるラークも今回は同意見の様だった。

「そうだね、普通に考えてエツジやクロウを乗せてくれる船なんてそうそう無い……奪うしかないか」

物騒な呟きを聞き逃さず、クリフが止める。

「何で普通にそうなるんだよ！完全に犯罪者の発想じゃねえか！」

「いや、この国ではずっと犯罪者だけだね。私とエツジは」

クロウが皮肉を言い、一行はしばし考え込む。

と、

「リアちゃんじゃないか！最近サーカスでの活躍の噂を聞けなくて心配してたんだぜ」

「おじさん！今こっちの港に来てたんだね、てつきりレーシアの方に居るのかと思ってたよ」

「いやあ、ちようど帰りさ。里帰りだったら乗っていくかい？」

「うん、おじさんの船なら安心だね！ありがとう」

戻ってきたリアトリスが事も無げに報告する。

「あ、みんな。船決まったよー」

沈黙が流れた。

「……誰よ、船見つからないとか言ったの」

「うーん、いや。まあ、確かにリアトリスは元々レーシア大陸の出身だから知り合いが居る事自体は不思議じゃないんだけど、こんなにあっさり会えるとは思ってなかったよ」

ラークは苦笑いしながら弁解し、それから気を取り直して続けた。

「その説明にもなるし、ちょうどいい機会だから次の目的地の事も教えておこうか」

一行は船へと歩きながら、ラークの説明を受けた。

「シンの一族の村、ですか？」

一行はレーシア連合国に向かう船の上に移動していた。

アキの言葉にラークは頷く。

「厳密にはアエスラング側の、リアトリス達の一族。「心」の一族の村だね」

「……ごめん、発音一緒だから分からない」

クロウの指摘に応えて、リアトリスが代わりに説明する。

「シンの一族っていうのはアエスラング側とイクスフェント側に二種族居るの。イクスフェントに居るのが強い身体を持った「身」の一族、ラークみたい長い寿命を持つてるの。で、こつちの世界アエスラングに居るのが私達、ディープスと心を通わせる力を持った「心」の一族。今から向かうのは私の生まれた村で、住んでる人達はこの心の一族の人達なの」

ラークはこれまであまりシンの一族の事については説明をしない事が多く、リアトリスが喋りそうになっても横から割って入って話をはぐらかしていた。その為シンの一族が何なのかラークとリアトリス以外の四人はあまり分かっておらず、それは半分一族の血を引くエッジも同じで、特にサーカスに居なかったアキとクリフに至っては二人がシンの一族であるとはつきり聞いたのもこれが初めてだった。

四人は何から聞くべきか悩み、エッジが最初に口を開いた。

「長い寿命って、ラークちなみに今いくつなんだ？」

その言葉にラークはあれ、と首を傾げる。

「言っただけでなかったっけ？今117才、人間の肉体の年齢で言うと十八才くらいだよ」

全員が固まる。

「……それ、そのペースだと寿命千年くらいあるって事か？」

クリフの言葉にラークは横に振る。

「いや、そこまではいかないよ。最初の八年位は人間と同じくらいの

速度で急速に成長して、ある程度生物として成熟してから徐々に変化が緩やかになるんだ。だから寿命は七百才前後、八百才を越えたらかなりの長寿だね」

そこでふっ、と笑う。

「君達より年上ではあるけど、結局の所「身」の一族としては見た目通りまだまだ若造である事に変わり無いし、皆に偉そうに指図できる様な立場じゃない。気を付けてるつもりなんだけど、偉そうに見えたらごめんね」

クロウはそれに対して眉をしかめる。

「ごめん……何か既にその言い方が既に若干偉そう」

「それは性格だからどうしようもないね」

悪びれなく言うその姿に全員呆れた。

「まあ、年齢関係なくラークとは今まで通りってことで」

「わ、私にとってはずっと年上ですからきちんと敬意を払わせて頂きます」

リアトリスがフォローに入り、アキがそれに続く。

少々逸れた話をエツジが戻す。

「それで、つまりこれから向かう「心」^{シン}の一族の村の人に匿って貰うって事なんだよな？」

ラークは同意する。

「そう、ほとぼりが冷めるまでね。确实とは言えないけど、とりあえずアクシズⅡワールド王国とセオニア王国との全面衝突は避けられた筈だし、しばらくはクロウとエツジは隠れる事を最優先した方が良い。僕とリアの使命の事はそれからだ」

使命という言葉にアキが不思議そうな表情をする。

「お二人の使命はてつきりクロウさんを国家の手から守る事だと思っ
ていましたが、違うのですか？」

「間違っ
てはいないよ、でも私とラークの役目はあくまで人間の手から宝珠の力を遠ざける事。クロウが持っているのは確かに闇の宝珠の欠片ではあるけど、まだ残りが見付かってないの。それを探さない
と」

クロウの力を危険視していたクリフは驚きを露にする。

「あんな力が何処かにまだ転がってるつてのよ……」

「闇の宝珠が持ち去られたのは十五年前、そこから今まで大きな変化も噂も無いから少なくとも悪用する様な人間の手には渡っていない」
ラークはそう答えたが、消息が分からない闇の宝珠アスネイシスの事は全員の心の中に引つ掛かりを残した。

《ナペラキ港》

レーシア連合国の南西の港に着いて船を降りると、アキは興味深そうに周囲を観察した。

「何だか随分雰囲気違いますね」

彼女の言葉も当然だった。セオニアや中央大陸の港は概ね石畳が広がっていたが、ここは木の栈橋だ。

そして、港からいくらも行かない所から始まっているのは整備された街道ではなく、人の侵入を阻む密林だった。

「ここは定期連絡船が来る様な大きな港じゃないからね、あまりお金をかけていないんだよ。でもリアの知り合いに乗せて貰えたのは幸運だったかもね、喫水の深い大型船ならここまで近くに来られなかったよ」

ラークの説明にリアトリスが苦笑いして付け足す。

「まあ……ここ使ってるのほとんど私達だしね」

トレンツの村もこのタイプの港だったのでエツジとクロウはそこには驚かなかったが、別な所に驚いた。

「何か、これ——」

「暑い……」

レーシアの大陸に近付く時から気温差は全員が感じていたが、上陸するといよいよ立っているだけで汗ばむ程だった。

そんな二人にクリフが追い打ちをかける。

「残念ながらここから目的地に近付いたらもっと暑いぜ？何しろ火山の目と鼻の先だからな」

エツジ、クロウ、アキの三人はそれを想像してうう、と呻いた。

リアトリスはクリフの説明に意外そうな顔をする。

「クリフさん、レーシアに来たことあるの？」

気温差を気にする様子もなく伸びをしながらクリフは答える。

「一応四つの大陸は全部行ったことあるぜ、隅々までとは言わねえけど」

アキはそんなクリフに羨望の眼差しを向け、ため息をついた。

「それは、良いですね。私は皆さんと旅をするまでほとんど王都から出た事が無かったので驚いてばかりです」

クリフは少々落ち込んだアキを励ます様にありったけの笑顔を向ける。

「何言ってるんだよ、これからだろ？アキちゃんまだ十四なんだから」

「あ、ええ。そうですね、まだまだこれからでした」

不意を突かれた様に嬉しそうに笑うアキ。

そのやり取りをクロウは何処か面白く無さそうな表情で見つめ、エツジにつっこまれる。

「話しかけたければ、話しかけて良いと思うけど」

「は？何言ってるの。別に、私からアキに話しかけることなんて無いし……ちよつと船酔いでぼうっとしてただけだよ」

狼狽しながらクロウは誤魔化すが、エツジはため息をついて言った。

「……やっぱりアキの方に話しかけたかったんじゃないか」

「私がクリフなんかと話したい訳無いでしょ、当然アキに決まっ——

ああ！もう、良いからこんなところでグズグズしてる場合じゃないでしょ、さっさと行こう」

言いかけた言葉を止めて、クロウはエツジから離れた。

リアトリスは笑いを堪えられない様子でエツジに近付いて囁く。

「いつの間にかアキと随分仲良くなったね、クロウ」

エツジはその言葉に頷く。

「元々は別に性格合わない訳じゃないと思うんだ、だから二人が仲良くなれたのは嬉しいよ」

「そうだね。私も、クロウに味方が増えたのは嬉しい」

そう言つて彼女の後姿を眺めるリアトリスの姿は、何故かエツジには少しだけ遠く見えた。

《心の郷 イノアザート》

密林の間の狭い舗装されていない道を抜け、一行はラーク達に説明された「心」の一族の里に着いた。

交差した木の棒で出来た柵に囲まれた村の中には、エツジ達が見たサーカス団のものによく似たテントが幾つも立っておりそれが住人の主要な生活の場であるのは明らかだった。

表向きは代々サーカス団になるものが多い村と言う事になってい
るらしいその村は、一見すれば普通の村でしかなかった。

ただ一つ、大きく皆の視線を引き付けた村の背後にそびえる煙を吐く山——カンデラス火山を除いて。

「ここが、リア達の……心の一族の故郷」

エツジは無意識に首から下げたペンダントを握り締めた。
心の一族だった母親が残した形見を。

到着してすぐラークは一人村の奥へ足を向けると、言った。

「リア、エツジとクロウの事は頼むよ。僕は少し用事があるんだ」

リアトリスは不思議そうな顔をするも、素直に従う。

「分かった、じゃあ皆付いて来て」

一行は彼女に案内されるまま、村の中心部のテントへと案内される。
る。

「ここで匿つて貰おうと思うんだ、紹介するね——」

入り口の帆布をリアトリスがまくるとほぼ同時に、信じられない
反応の早さで中から二人の男女が飛び出して彼女をサンドする。

「おお、リアー！大きくなって！」

「何よ、帰つて来るなら言つてくれれば良いのに！もう！」

一行は突然の事に啞然とする。

夫婦らしき二人にぎゆうぎゆうと挟まれながら、苦笑いでリアトリ
スは説明を続けた。

「私の、お父さんとお母さん」

「はっ、何だよ。俺達があればだけ準備してやったのに、失敗したのかよ」

スプラウツの本拠地。

王都シントリアからの報せを聞いたフレットは、クロウ達を取り逃がしたというその報告をあざ笑う。

バルロは怒りを込めてそんなフレットを睨む。

「口を慎めフレット、報せはそれだけでは無いぞ。まだ次の仕事が控えている」

そう言つて老人はルオンと、彼と共に報告を持ってきた黄緑の髪の少年に尋ねた。

「ルオン、レパート、大気中のデーパープス量の調査結果は確かだな？」

ルオンは無言で頷き、レパートと呼ばれた黄緑の髪の少年も話したいのを必死に堪えていたかの様に早口で答える。

「勿論完璧だぜ！俺の調査した箇所はルオンより断然多い」

老人はその報告を聞いて眉間に皺を寄せる。

「調査の精度を聞いた、走つて一箇所一箇所の調査を怠つてはいないだろうな……まあ、良い多少の誤差はあれ、これなら概ねリユウゲン様の仰つた通りだ」

とりあえず納得すると、老人はその場に集まっている『純白』を除いたクローバーズ全員に言った。

「では、次の仕事だ。『爪雷』、『紅蓮』、『巖岩』、『弧氷』で目標に向かう。目的地はレーシア大陸、カンデラス火山」

フレットは興味無さそうに頭をかき、セルフィーは真剣な表情で、ルオンは無表情で頷いた。

詳細な説明をするバルロの後ろで報告を持ってきた銀髪の青年――レスパー・シビルは暗い表情でレーシア大陸で展開される作戦を聞きながら、そこに逃げたと思われる少女に思いを馳せていた。

(アキ……)

第五十一話 心の郷 イノアザート

イノアザートに着いてから数週間が過ぎた。

リアトリスの両親はきちんと事情を説明するまでもなく、快くエツジとクロウを匿う事を認めてくれた。

——というより、夫婦にとつては愛娘が客を連れて家に帰って来た事の方が重要な用だった。

「いやあ、それにしてもまさかリアが友達をこんなに沢山、それもエツジ君まで連れてこんな所に来るとは思ってたよ」

リアトリスは父——アンビスの言葉に抗議する。

「ちよつと『リア』って呼ぶのやめてって言ってるでしょ！ 恥ずかしいから」

(……あんた他の人にはその呼び方強制してたでしょうが)

クロウは心の中でつつこむ。

「それにしてもファイスの息子がこんなに大きくなって……お父様は相変わらず研究がお忙しかしら」

「あーえつと、多分そうだと思います」

リアトリスの母、ユーファアトリアムの質問にエツジは曖昧に答える。

エツジは父親の事は顔くらいしか思い出せておらず、研究者と言われても何の研究をしているのかすら見当がつかなかった。ブレイドが王都に居るのなら、父親も一緒に住んでいると考えるのが自然かもしれないが。

「あ、ごめんなさい……ファイスが亡くなってから時間が経ったとはいえ、あんまり家族の事根掘り葉掘り聞くのは無神経だったわね」

エツジの顔が暗くなったのを見て、ユーファアトリアムは詮索を止め、自分の娘の側へと近寄る。

リアトリスはその気配を察知して母が何かこっそり尋ねようとしているのを感じて、彼女に自分から耳を近づけた。

「——とところで、誰と付き合ってるの？」

「な、」

耳打ちされるなりリアトリスの目が真ん丸になり、慌てた彼女はテーブルに置かれていた籠と激突した。中に入っていた果物が床に転がり、家の中に居た全員の目がリアトリスに向く。

幸い、あまり外に出られないエッジとクロウに代わりラーク達は様々な仕事や用事をこなしていたので、今家に居るのはエッジ、クロウとフローライト家の親子三人だけだった。

しかし、クロウはその珍しい彼女の慌て方に怪訝な顔をする。

「……どうしたの？」

「な、なんでもないよ！お母さんが変な事言ってるだけだから！」

娘の表現が心外だったのかユーファトリウムは腰に手を当てて、大声で言う。

「何よ、娘がこれだけ男の子家に連れてきたら誰と付き合ってるのか位聞くのは親として当然でしょう！」

エッジとクロウはポカンとし、リアトリスは頭を抱えて果物があつたスペースに顔を伏せた。

「何で二人にまで言うのよお」

エッジとアンビスはそれを聞いて笑い、クロウは興味無さそうにため息を吐いた。

そこでふと思ひ出した様に、アンビスもエッジとクロウの方に視線を移して尋ねる。

「そうだエッジ君、君はやっぱリクロウさんと付き合っているのかい？」

今度はエッジとクロウが固まる番だった。

無視を決め込もうとしていたクロウも困惑した表情で勢いよく振り返り、エッジも咄嗟に否定の言葉が出て来ず互いに赤い顔を見合わせる。

「何でエッジとー！」

「そ、そうだよ……あ、いや何でそうなるんですか」

二人ともこの家に着いてからはなるべく目上の夫婦に敬語で話していたのだが、それも思わず崩れる。

しかし夫婦に気にする様子はなく、それどころか娘と話していた母

のユリアムまでエツジ達の方に寄ってきた。

「あら、だってトレンツの村でエツジ君がクロウちゃんに一目惚れして出てきたんだってリアが言ってたわよ」

二人は思わずぼつ、とリアトリスの方を向き、彼女は慌てて手をぶんぶん振って否定した。

「私、エツジはトレンツの村でクロウと会ったんだとしか言っていないよ!」

「エツジ君は父親やお兄さんと別れてもなお村に一人で残ったんだぞ、クロウさんとの出会いによほど心動かされなければ村を出たりしない筈だ」

「ねえ?」

夫婦は否定されたのも意に介さず、揃って笑みを浮かべる。

(でも、確かに今思えばあの時の出会いが無かったら俺は)

「エツジ、何黙ってんのよ!」

記憶を辿り黙り込んでしまったエツジの腕を、クロウがひっぱたく。

それを見て夫婦はまた、仲が良いなあと笑う。

クロウはわなわなと怒りに拳を震わせながら、しかし世話になってる立場で不満を口にする訳にもいかず頭を抱えた。

(あーもう、何でこのオレンジ髪一家はみんな人の話聞かないのよ! アキでもラークでも良いから早く戻ってきて……)

彼女は心の底からそう願った。

(どういう事だ?これは)

自主的に村から離れた場所やアクシズⅡワンド王国の動向を探っていたラークは、足早にリアトリスの家に向かっていった。

イノアザートは安全な隠れ場所ではあっても、戦士の村ではない。情報を常に探って先手を取る事は必須で、現に今もそれが無ければ完全に後手に回る所だった。

ラークは厳しい面持ちで、リアトリス家の扉を開けた。

「え、リア?ラークさんが彼氏なの?」

「そんな事言っていない!!」

「驚いたな……まさか、あの人と」

「だから言っていないってば！」

扉を開けたラークの耳に飛び込んできたのは、仲の良いフローライト家の喧騒。

「どうでも良いけど、そのラーク帰ってきたわよ」

「あ……えっと」

クロウの指摘で、リアトリスが帰って来たラークに気付く。

なんと説明するべきか困る彼女を他所に、ラークは真剣な声で全員に告げた。

「アクシズⅡワンドの騎士達がこのレーシア大陸に上陸したらしい。第三師団ブレイド・アズライトと、その指揮下の騎士だ」

その言葉で、エッジとクロウの表情が強張る。夫婦も『守り手』としての真剣な表情に変わった。

「こつちに向かっているのか?」

エッジの質問にラークは頷く。

「ああ、でも少し様子がおかしい。ジェイン・リュウゲンまで王都を離れて来ている、騎士も数が少ない。エッジ達を捕まえに来たというより護衛みたいだ」

アンビスが腕組みをして考え込む。

「どう言う事だ、エッジ君達を捕まえに来たのではないのか?」

ラークは冷静に、詳しい説明を続けた。

「おかしいのはそれだけじゃない、セオニア王国の首都で交戦した子供達までリュウゲンやブレイドと行動を共にしている」

その言葉に、クロウが信じられないという表情をする。

「そんな馬鹿な、あいつは……ジェイン・リュウゲンは自分が手を汚さない為に隠れて私達をずっと道具みたいに使ってきたのよ?そんな風に自分から繋がりを明らかにするなんて」

「まだおかしい事はある、アキのお陰で僕らの脱走以降少なからずリュウゲンにも疑惑の目が向いたらしい。その彼が今自分からレーシアに来るのは外交的にも、内政的にも自分の立場を危うくする行為だ。ここまで形振り構わず行動しているなら、最悪の事態を考えた方

が良いかもしれない」

夫婦はまさか、と驚きを露にしたがエツジとクロウにはその意味がよく分からない。

リアトリスは理解しても、信じられないという様子でラークに尋ねた。

「まさか、目的地は……カンデラス火山？」

ラークは頷いた。

「ああ、多分彼らの目的は火の宝珠、シブレイムスだ」

買い物に行っていたアキとクリフが帰って来ると二人にも事情を説明し、全員で何とかテーブルを囲んだ。植物で編まれた夫妻の家の椅子は八人分も無く、ラークとクリフ、それにアンビスの年長の男性達は立つ事になったが。

ラークを中心として話し合いは進む。

「アンビスやユーファトリウム、心の一族の皆の力は借りられない。この村がアクシズⅡワンド王国と敵対すれば、例え火の宝珠を今渡さずに済んでも、この先守り続ける事が困難になる。この村の使命はあくまで隠れて見守り続ける事だ。だから、僕たちで何とかするしかない」

夫婦は申し訳無さそうに俯いたが、クリフが疑問を口にする。

「待てよ、その宝珠を守る為にここに居るんだろ。それで守れるのかよ？」

「宝珠への道はまず見つかったりしない、仮に見つけても入れる筈が無いんだ。だから、本来なら迷いこんだ人間を遠ざけるだけで十分なんだよ。こんな風が大勢が『宝珠がある』と確信して近付いてくるなんて事態は一度もなかった」

エツジが思わず疑問をもちます。

「宝珠が目的じゃないって可能性は無い、か？」

ラークは何とも言えないと悩む様子を見せた。

「あるかもしれない、だからエツジとクロウはこの家に隠れているんだ。僕が火山の様子を見に行く、皆はここに残って——」

クリフがラークの発言を遮って名乗りを上げる。

「何言つてんだ、一人で行く気かよ」

「私も行きます、父が関わっているなら無視はできません」

ラークの視線とクリフの視線が火花を散らしたが、それは本当に短い時間ですぐにラークは二人の同行を認めた。

「分かった、時間が無いし僕も火山の中へ行くのは久しぶりだ。先回りする為にもすぐに出よう」

そう言うと、ラークは玄関に向かいアキとクリフもそれに続いて外に出た。

「私は……ごめん、私も行ってくる」

リアトリスはエツジとクロウの二人の顔を見、両親の顔を見てしばしどちらに着くべきか迷ったものの、意を決した様子で彼女も玄関に向かう。

そんな娘を見た夫妻は、残されたエツジとクロウに謝った。

「すまない、少しだけ出てくるよ」

「すぐに戻るわ、留守番をお願いね」

エツジがはい、と返事をしたのを見て夫妻もリアトリスの後を追った。

ラークやクリフ、アキと比べるとリアトリスはそれ程足が速くなかった。少し遅れて出ただけで彼らの背中はまだ生い茂る密林の中へ見えなくなっていた。

しかし、何と言つても生まれ育った場所だ。道に関してはリアトリスが一番詳しい。

彼女は追いつく事にはそれ程不安を持っていなかった。

テントの並ぶ村を最短ルートで走り抜けて、火山への道が目の前に見えると幸い先を行く三人の背中がすぐに彼女の目に入る。

ほっと安心して一旦息を整えるリアトリスに、背後から父親の声がした。

「行くのか？」

驚いて振り返ると、両親が彼女の後ろに居た。

「あの子が、宝珠の欠片を持っているのね」

「あはは、やっぱり……気付いてたんだ」

母の言葉にリアトリスは乾いた笑いで誤魔化した。母は気分を害する様子も無く胸を張って言った。

「当然でしょう、私達だってあなたと同じ心の一族なんだから。ただ、娘がわざと言わない様にしてる事に触れたりしないわよ」

それに対し、申し訳無さそうにリアトリスは謝る。

「ごめん……私じゃ、使命を果たせないかもしれない」

夫妻は顔を見合わせると、優しく言った。

「あなたはあなたよ、使命が全てじゃない」

「そうだ、自分が信じる事をしなさい」

リアトリスは驚いた顔で両親を見たが、その言葉の意味を理解して笑顔で言った。

「……ありがとうございます」

両親が頷いたのを見たリアトリスは、もう振り返らなかつた。

第五十二話 少女と射手

「置いてかれたわね」

「そうだな……」

ぎゆうぎゆう詰めだった家の中が二人だけになり、クロウはため息まじりに隣に座ったエツジに声をかける。

またもどこか上の空の返事が返ってきて、クロウは訝しげな視線を彼に向けた。

「ずっとそのペンダント握ってるわね」

クロウに気付かれた事にエツジは軽く笑った。

「また少しかだけ思い出したんだ、このペンダントを母さんに貰った時、言われた事」

自分も両親の記憶が無いクロウは黙って続きを待つ。

「いつか意味が分かる日が来るまで持つて居ろって。ただ、大切にしろ、これに縛られるなって」

「それで、そんな大事に持つてたんだ」

クロウの言葉にエツジは首を横に振った。

「いや、それが母さんの最期で、俺ほとんど聞いてなかったんだ。一人になるのだけが嫌で怖くて、現実から逃げて、海に落ちて……村の皆が助けてくれたけど、その時には俺の記憶はもう」

そこで一度言葉につまり、それからエツジは謝る。

「お互い両親の記憶が無かったからかな、俺初めてクロウに会った時自分に似てるって思った。それで無意識に思い出しかけた記憶に蓋をしようとしたんだ。孤独なんてものは無いんだってクロウに言つて、自分に信じ込ませようとした……ごめん、俺はクロウを助けようとなんてしてなかった」

クロウは驚きも怒りもしなかった。

慎重に言葉を選び、返事をする。

「……ウオーギルントで、もう助けてくれたでしょ。謝る様な事じゃない」

「それでも、俺は、俺はそんな大切なものに蓋をして忘れようとしたん

だ」

「忘れてないよ、今思い出したじゃない。今日までちゃんとそのペンダントを持って……エツジはちゃんと覚えてたんだよ、お母さんの事」

それから、拳で軽く落ち込んだエツジの顔を小突く。

「嘘ついて騙してたみたいなの顔してんじゃないわよ、全然変わってないから。初めて会った時も今も、あんたはそうやって他人の事で真剣に悩んでばかり」

クロウにぐりぐりと顔を拳で撫でられ、エツジは顔を上げた。

「確かに、そうだな」

エツジが元気を取り戻したのを見て、クロウも声のトーンを上げる。

「それより、どうすんの。どうせまたここで大人しくしてるつもりは無いんでしょ？」

呆れたように言われてエツジは笑った。

「決め付けるなよ、一応は様子を見てからにしようと思ってた」
それなら、とクロウが立ち上がり胸を張る。

「任せて」

二人はフローライト家を後にすると、とりあえず人目を避ける為に火山への道よりやや西、村の北へ歩いた。

村の端の密林の寸前まで来てクロウは静かに唱える。

「――ラーヴァン」

黒い巨鳥がエツジとクロウの隣に降り、クロウはそのまま目を閉じる。

「薄い霧で周りを探る。クローバーズには私が居るのばれるかもしれないけど、すぐに位置までは特定出来ない筈」

エツジは頷き、クロウの集中を乱さない様無言で待つ。

村の中は静かだった、低い地鳴りのような火山の音だけが不気味に聞こえる。

クロウは微動だにしなかった、その代わりに様々にラーヴァンはその眼を木々の向こうを見透かす様に絶え間なく動かす。

以前「ラーヴアンと自分は感覚が繋がっている」と彼女に説明されたのをエッジは思い出した。

「……向こうで先行してるのはリユウゲンだね、それと護衛の子供達とフレット、セルフィー、バルロ。このままならラーク達が先に間に合いそうだけど、そっちには騎士団が向かってる」

「なら騎士団の気を逸らそう、俺達が囷になればラーク達がその間に火山に向かえる」

そこに居るであろう兄の事をエッジは嫌でも考えさせられたが、それは口に出さなかった。

クロウも目を閉じたまま頷ぐが、ふと気になる事があつたのか眉をしかめる。

「待つて、でもこの地形……まさか、」

そこで、クロウは目を開いた。明らかに焦った様子で。

「まずい、ルオンが一人でいる!」

以前交戦した氷属性の深術を操る弓の少年。

エッジは彼に一度敗北していたが、首を傾げる。

彼の実力は脅威でも、単独でラーク達を脅かす程のものとは思えなかったからだ。

しかしクロウはそう口にするなり、ラーヴアンに自身を掬い上げさせる様にして黒い巨鳥の背に飛び乗った。

「ルオンを止めないと皆死ぬ、エッジは火山への道からラークと合流して。一人で囷役なんかしないだよ」

「大丈夫なのか!?!」

強風を起こしながら飛び立つ彼女に、エッジが大声で叫ぶ。

「こっちは任せて、ルオンは私が止める!」

黒い矢の様に飛び出していったクロウを確認して、エッジも走り出した。

静かに聳えるカンデラス火山へと。

先行したラーク達はリアトリスと合流して、先を急いでいた。

先頭に立つラークが後ろに続く仲間たちに告げる。

「あと少しで火山の内部への道が見えるよ、そこまで行けば入り口の様子も確認できる——ただ案内役はリアと交替、かな」

突然ラークは剣を抜き、くるくると遠心力を乗せて右後方の数十m離れた木々の間へ斬撃を飛ばした。直後に赤銅色の騎士の甲冑がそれに合わせた様に現れる。

金属音が響いた。

「隊長は普通先頭を進まないよ、ブレイド」

「部下を守るのが俺の役目だ」

ラークの先制攻撃は割り込んできたエッジの兄、ブレイドによって受け止められていた。

ブレイドはそのまま、背後の騎士達と共に距離を詰めてくる。その右肩はなぜか鎧を付けず剥き出しになっており、禍々しいデザインの赤い印が肌に刻まれていた。

次々木々の間から現れる騎士の数は少なくとも二十は超えていた。クリフとアキも武器を構える。

しかし、

「リア、二人を宝珠の座へ連れて急ぐんだ。ここは僕一人で良い」

三人は目を丸くする。

「何言ってるの!?!いくらラークでも、一人なんて無茶だよ。それにブレイドの肩にある、あれ……」

信じられない様子で声を震わせるリアトリスの指摘に、ラークも頷き早口で答える。

「ああ、『命令刻印術式』だね。もうブレイドは絶対にあれをかけた人間の命令を破らない。というか破ったら死ぬね、あれは体内に爆弾を埋め込んでる様なものだ」

クリフもそれを聞いて横からラークに反対する。

「馬鹿言うなよ、そんなのお前一人で止められるわけ——」

距離を詰めてくる騎士達が目前に迫り、ラークはクリフの言葉を遮って怒鳴った。

「だから、走れって言うてるんだ!……僕一人では全員を完全には止められない、今少しでも君達が距離を稼がないと全員足止めされて宝

珠を黙って渡す事になる」

気圧されて三人は言葉を失う。

「リア、前に僕がエッジを海上都市で見捨てた時責めたね、僕もあれが正しい行いだなんて思ってた。でも、最善手だった、そして今度は僕の番が回って来た——それだけだよ」

その言葉を最後に、ラークは騎士達に向かって突進した。それを迎撃しようと、ブレイドが前に出る。

が、ラークはブレイドと斬り合うのを避け、真っ直ぐその背後の左翼側の騎士へと向かった。

赤銅色の鎧を着た騎士の一人も反応し、剣でラークの首を狙う。

「こっちだよ」

しかし、ラークはもうその騎士の横を走り抜けていた。

ステップによる方向転換を繰り返し、その度ラークはその速度を増していく。力無く、彼を斬ろうとした騎士は崩れ落ちる。

騎士達は反撃しようとするが、その姿さえ目で追うのがやつとの騎士達は一太刀も浴びせる事が出来ない。

それは、まるで彼らの間を吹き抜ける風の斬撃だった。

「崩龍残光剣！」
ほうりゆうざんこうけん

かかった時間が短すぎた為、倒された騎士達は折り重なるように倒れる。

それでも、全員を足止めするには至らない。

二人の騎士がリアトリス達の所へ到達する。

「クリフ！」

ラークが叫ぶ前に、クリフはもう青い光を纏っていた。

「分かってるよ——『発』！」

アキとリアトリスを庇う様に前に出たクリフから放たれた気の奔流が、二人の騎士を大の字で地面へと吹き飛ばす。

その隙を突いてクリフ、アキ、リアトリスの三人は火山へと走った。

遠く離れた岩陰の上から、走って行くその三人の後姿を見守る少年の影があった。

イノアザートから火山への道は分かりやすい一本道で、遠くからでもはつきり端から端までが見える位開けた場所だった。

白髪の少年はただ無言で矢を番え、届く筈がない——まして相手が気付く筈も無い距離からその矢を、最後尾の黒髪の少女に向けた。

アキの無防備な背中へ、一定の速度でまっすぐ動いていく。

心を氷に、ただ孤立して射る——狙撃手たる『孤氷』^{こひょう}の名を冠する彼にとってそれを狙うのはとても容易い事だった。

「ルオン!!!」

その矢の軌道上に、『黒い翼』が空中に線を残して割り込む。

かつての仲間であるクロウと、彼女が駆る巨鳥ラーヴアンの威圧を間近にしてもルオンは表情を変えず狙いのままに矢を放つ。

「くっ!」

クロウは自分に矢が当たるのを避ける為にローリングを行いながら、アキに向けて飛ぶ矢に黒い槍の深術を連射し辛うじてルオンの矢を打ち落とす。

「……」

狙撃が失敗してもルオンは表情を変えず、二本目の矢を番える。

自分が死んでもおかしくない様な状況でも、彼は狙撃を止めようとしなかった。

「……やめてよ、ルオン」

クロウが懇願する。

しかし、ルオンは反応を示さず弓を引く。

「もうやめてよ、あんなに人を殺すの嫌がってたじゃない……レインが死んだときも、一番悲しんだのはルオンだったじゃない!」

それでも、ルオンはありったけの冷気を籠めて矢を放った。

『クロウは……自分の為なら他人がどうなってもいいの?』

「——私に、初めて人を殺しちゃいけないんだって教えてくれたのは、あんただだったじゃない!!」

クロウは断ち切る様に、右手を勢いよく振り上げた。

ラーヴアンの羽根一つ一つが、獣の牙の様に鋭く伸びていきその姿が異形へと変わる。

「超えられない、絶対の差を見せてあげる——
アンタイダリー・グリードバイト！」

大樹すら飲み込むサイズの両翼が、無数の牙で埋め尽くされた両顎となつて噛み合わさりルオンの放った水の矢を粉々に噛み砕く。

勢い良く身を起こした巨鳥の背から落ちない様、クロウは牙に変質していない首にしがみ付く。

牙の勢いは矢を砕いただけで止まる筈も無く、目標を砕いて尚も伸びる黒い牙は攻撃を躲そうとしたルオンの弓の弦を両断し、弦を離れたルオンの馬手、太ももからも出血が起きる。

それに伴つて、ルオンのポケットから細い紐が切れて地面に散らばつた。

「……これでもう代えの弦も無くなったわよ、これならどうする？」

クロウは冷たく、傷を負つたルオンを睨みつける。

ルオンもしばし宙を見つめて考え込む。

が、やがて素直に武器を下ろしてクロウに背を向けた。

クロウは元の姿に戻つたラーヴァンの背の上からその様子に複雑な表情を見せる。

ルオンは非道なわけではない、判断してそれが最善となれば素直に撤退する。しかし、彼にはもうそこに差し挟むべき感情が、無くなつてしまつていた。

（レイン、ごめん……またルオンを傷付けた。あんたにとっては弟も同然だったのに）

心の中で謝りながら、何も出来ないままクロウは去り行く少年の背中を見つめた。

※セブンクローバーズの情報が更新されました。

深術のエキスパートとして育てられた孤児の集団。

その中心的活動を担う精鋭にして、同時に味方同士の監視者でもある七人の深術士^{セキコアラ}。

人数が多いのは裏切りや命令違反を冒そうとしたメンバーが飛びぬけた実力を持っていても複数人で対処し、従わせる為。

各自がセブンクローバーズとしてそれぞれ識別名称を持っているがあくまでコードネームであり、成立してからそれほど年月が経過していない為、本人の能力と名前が一致している者が多いが『流連^{りゅうれん}』の様に二代目である場合は本人の能力等とは無関係に前任者の識別名称を引き継ぐ事になる。

また、全員が自身の最も得意な一属性の使用に特化している。

『爪雷^{そつらい}』

名前：フレット

武器：専雷爪^{せんらいそつ}「スペシャライジング」

特化属性：雷

才能：並外れた身体能力

戦う事に喜びを見出し、誰よりも危険な少年。

術士としての素質もさることながら、近接戦闘のみでも正規の騎士を圧倒する年齢不相応の身体能力を持つ。

実力はともかくとして性格面に多大な問題があり、命令の有無に関わらず単独行動が多い。

また、戦いそのものに喜びを見出す性格ゆえに強敵との戦いをわざと引き延ばしたり、見逃す事もある。

それ故に実力とは反比例して仲間からの信頼は薄い。

巨大な鉤爪の形をした彼の武器は、雷以外の属性のディープスを貯める機能を排することで雷属性の使用効率を格段に上げている。

この武器では通常の方法で他の属性を使用することは出来ない。

多少の傷を負っていたとはいえラークとすら互角に切り結ぶ身体能力を持ち、優れた術士でありながら七人の中では唯一好んで接近戦

闘を行う。そのラークにも筋力やスピードでこそ劣るものの、雷属性の爆発を上乗せした技の威力で上回り、用途に応じた術を使いこなす事で高い防御能力を得ていたリアトリスの障壁も、武器と深術両方の特性を併せ持った攻撃で粉々にした。

その実力は紛れも無く七人中最強である。

『巖岩』

名前：バルロ

武器：錬成手甲「岩堵」

特化属性：地

才能：観察と経験による弱点の看破

子供達を鍛え上げた全員の師であり、統制者でもある老人。

元は軍人で、岩で殴られる恐怖をもって全ての子供をコントロールしている。

この人間なくしてスプラウツは集団として機能しない。スプラウツの中心と言っても過言ではない人物。

他のクローバースと比べると突出した戦闘能力を持っている訳ではないが、全員の弱点を熟知し裏切りを想定して身内との戦いに特化している為、直接戦った場合クローバース全員を打倒しうる手段を用意している。

拳を『握る』ことをトリガーとして一定の間合いに岩を形成し、腕の動きと連動させる手甲を武器として使っており、自分から離れた間合いに居る相手を『殴る』事が出来る。

これは、単純ながらも強力な接近戦の手段で、敵との間合いを空ける事に優れている。

また打撃が発生する箇所と拳の間には何も無い為、正確に間合いを把握していない相手には壁などで遮断する事も難しい。

現実主義者で自分がとうに『黒翼』や『爪雷』に力では及ばない事を認めた上で、正々堂々に拘らず数の利や状況、心理的死角を突く事で彼らとも互角以上に渡り合う。

『紅蓮』

名前：セルフィー

武器：鞭、炎熱鉱石えんねつこうせき

特化属性：火

才能：感知

燃える様な赤い髪の少女。

感情的で激し易く『爪雷』そうらいからは本来の識別名称を無視して『爆発セルフィー』と呼ばれている。自身の実力が『爪雷』そうらいには及ばないと自覚しているものの、術士として一流であるというプライドを持っている。その為興味の無い事にはやる気を出さない『爪雷』そうらいとは反りが合わず、喧嘩が絶えない。

彼女はディープスの位置を正確に把握することに長けており、温熱筒おんねつとうにも利用されているディープスの集束コレクトを補助する鉱石を併用する事でその能力全てを攻撃に利用している。

放り投げた赤い鉱石を核にして詠唱無しで術を開始し、術が相手に届くまでの間も集束コレクトを続ける事でクローバーズでは唯一自力で詠唱無しの上級深術を発動する事が出来る。これは感覚的には『一度投げた石に、後から投げた石を空中でぶつけ続ける様なもの』であり、高い感知能力を持つ彼女以外には真似する事が出来ない。

自分と同等以上の感知の才能を持つたりアトリスを激しく敵視し、またリアトリスの側も防御に特化した自分のスタイルと正反対の彼女の戦い方を危険視している。

◎接華浮燈せつかふしとうの陣

単独で彼女が戦闘を行う場合、接近戦が不得手な彼女がそれをカバーする為に使用する切り札。

手持ちの炎熱鉱石の大半を空中にばら撒き、それを「触れると爆発する赤い光の珠」に変換する事で自分の周囲全体を守る領域を作り出す。

性質上、ほぼ全ての炎熱鉱石を消費してしまうため一度の戦闘で使えるのは一度が限界。

一見、珠同士に隙間があるため壁としては機能しないように見えるが、陣の内部は全て彼女の『感知』の範囲内であり小さな異変でも即

座に反応してセルフイー自身が爆発を起こす事が出来る。その為
ラークのスピードを以てしても突破するのは難しく、相手が強力な深
術で一点突破を狙ってきても外縁部だけを爆発させる事で衝撃を半
減されてしまう。

また、全ての光の珠は陣を張っている範囲内なら彼女自身が任意で
動かせる為、少数が減っても陣は機能し続ける。

総じて防御すら攻撃によって補う、ただひたすら攻撃に特化した彼
女の戦い方を象徴する陣。

『黒翼』

名前：クロウ

武器：スローイングダガー

特化属性：闇

才能：体内に持った闇の宝珠の欠片

スプラウツを脱走する前のクロウ。

彼女はエッジ達には自分もまた子供達を管理し教育する側であつた事を告げなかったが、これがクロウが脱走する事が出来、また抜けた後も執拗に追われ続ける最大の理由である。

宝珠の力を使っている状態のクロウは、術士としての資質のみで考えれば全てにおいて最高クラスの能力を所持しており、全ての術の詠唱を破棄し、『爪雷』^{そうらい}すら及ばない威力の術を用い、数kmの範囲の視界を闇で閉ざしたまま内部の状態を正確に把握し相手をピンポイントで攻撃する事も可能。

通常時にクロウがこれらの能力を使用すると相応の負担が身体にかかる（目の色の変化はこれに因るもの）が、体内の闇の宝珠の欠片の意思⇨ラーヴァンを黒い巨鳥として実体化させた状態ではその負担が無くなり、上記の能力が制限なく使える様になる。

能力だけなら間違いなく最強のクローバースであったものの、本人が人を殺す事を無意識に嫌っていた為広範囲に効果が及ぶ様な術は滅多に使用せず、黒い霧による感知を活かした情報収集や最小限の殺害に抑える暗殺等を主としていた。

自ら望んで戦いに赴く事で最強の座に位置する『爪雷』そうらいとは対極であり、能力的にはクロウが勝るものの無意識に力を抑えてしまうため、殺人を楽しみさえする彼には対人戦の能力では一歩劣る。

『流連』りゅうれん

名前：レパート

武器：深素銃「始」↑New

特化属性：風

才能：替えの効かない才能をもっていない、実験台として使い捨てて問題ない最低限の実力↑New

二代目。前任者とは属性以外共通点なし。

他のメンバーと比べ成ってから日が浅く、実力的にも劣るが、それ故認められた事を喜び調子に乗りすぎている所がある。

この世界において普及していない最新鋭の武器、深素銃「始」を使用する。↑New

これには世界の始まりに起きたとされる。六属性の圧縮によるビッグバン爆発（クロウもフレットに追い詰められた際、これと似た現象を閻属性の圧縮で強引に引き起こしている）の原理が応用されており、名前の「始」はこれと試作品で有ることに由来する。

トリガーする度に銃の内部に人工的に集束された六属性のデ IPPS が圧縮され、それによって引き起こされた爆発のエネルギーが光弾として発射される。

一発ごとに空気中のデ IPPS を集束して打ち出している為弾数に限りはないが、内蔵の動力には限りがあり稼働時間は最大でも20分。連射し続ければ10分ほど（本来それを考慮して二丁が渡されていた）。

強力ではあるものの六属性の力が均等に発揮される状況下でなければ使用できず、均衡を崩す温度変化に弱い等まだ問題点も多い。

レパートがこの武器の使用者に選ばれたのは、彼が辛うじてクロウバーズの穴埋めが出来るギリギリの実力を持った「数人の内の一人」であった為であり、『巖岩』は彼の事を実験台の駒位にしか考えていなかった。

彼自身も識別名を持たない他の仲間とそれほど実力差が無いことは自覚しており、選ばれた事をチャンスと考え自分の実力を証明しようとする。

決して認められる事など無いのだと気付かないまま。

『弧氷』

名前：ルオン

武器：耐冷弓たれいきゆう「フレキシブルスナイプ」↑New

特化属性：氷

才能：『爪雷』そうらいには劣るものの高い身体能力、狙撃

感情の大部分を喪失した少年。

弓という単独戦闘を苦手とする武器を持ちながら、空中で正確に弓矢を操るボディバランスと素早い跳躍力を持ち、氷柱を発生させる属性技「扇氷閃」と合わせて単独行動でも十分詠唱時間を稼ぎ戦闘する能力を持つ。

術の詠唱速度・威力・弓の扱い全てにおいて安定した能力を持つもののクローバース全体の中では尖った能力を持たない様に見えるが、その真の脅威は「狙撃」。

感情を欠落した彼は無感情に、確実に遠距離から標的を仕留める事が出来、七人中最も遠距離での戦闘を得意とする。

クローバースは個々としては強力な力を持つものの、我が強い者も多い為コンビネーションを欠く事も多い。しかし、ルオンはその戦闘スタイルから全員の能力を邪魔することなく彼らのサポートをする事が可能である為、噛み合った時の脅威は何倍にもなる。

特に、広範囲の索敵を行う事が出来るも殺人に抵抗を示すクロウとの相性は良く、二人が組む事で深術の破壊の痕跡を一切残さず特定の相手を消す事が出来た。

スプラウツの中では監視無しでも命令違反をせず、単独行動もこなせる貴重な人材。

耐冷弓「フレキシブルスナイプ」はルオンの作り出す低温状態に耐えられる事を最重要視して作られており、温度変化によって通常の使

用と、長距離狙撃用のモードを使い分けることが出来る。↑New
その反面で長距離狙撃時の弓としての性能が上がった為に必要とされる力も相当なものであり、ルオンやフレットの様な高い身体能力を持つ人間以外には扱えない。

事実上氷属性の適性と身体能力を併せ持ったルオン専用の武器。

『純白』

名前：ネイデール

武器：??

特化属性：光

才能：??

クローバーズでは『巖岩』を除いて唯一の成人。

味方であつても姿を見たものが少なく、部屋にこもっている時間も長いが『巖岩』からの信頼は厚く、他の全員が拠点を留守にしている場合単独で『巖岩』の役目を引き継ぎ、子供達の統制者の役目を担う。

リアトリス同様、希少な光属性を最も得意とする術士。

それだけでも十分特異な才能であるが、クロウの様な例外を除いてまず不可能な中級深術「ホーリーランス」の詠唱を破棄し、咄嗟の発動をして見せる等その実力は底が知れない。

深術士の数は騎士団や軍の外部には少ない為、ともすれば迫害にすら遭いかねない深術の才能のある子供達の未来を憂い、その幸福を願う。

不幸な未来や現実を見せない為ならば、躊躇い無くその命を摘む程に。

第五十三話 騎士の誇り

突進するラークの軌道を横から割って入った騎士が阻害し、ラークは前傾していた姿勢を起こして軽くジャンプしスピードを殺す。

「足を止めたぞ、今だ！」

その隙を突いて一斉に攻撃に移ろうとした部下を、ブレイドが制止する。

「待て、それは！」

ラークは着地し、その落下の反動をそのままバックステップに使った。

ただブレーキをかけて停止すれば隙が出来る所を、ラークは軽いステップをはさむ事で前方、上、後ろと素早く体重を移動させ次の動作に移る。

それは、影すら捉えられない様な動きだった。

「無影衝むえいしょう」

ラークのバックステップが残像を生み出し、一瞬の停止を隙と見た騎士達はラークの剣で切り伏せられる。

ブレイドの脳裏に、かつて師から言われた言葉が蘇る。

『流れに身を任せ、力を無駄にしないこと』

「互いの距離を離せ！無理に反撃せずまず身を守る事を優先して包囲しろ！」

ブレイドの指示で騎士達は間隔を空け始め、ラークは一人一人を倒すのに移動する距離が長くなり騎士達に防御され始める。

ラークは敵の数を減らすのを優先してブレイドとの戦闘を避けていたが、敵の隊列が整い始めた事で少しずつ包囲され中心に居る彼と対峙せざるを得なくなる。

二人は騎士達の輪の中で激しく切り結ぶ。

「本物の、ラーク・テンネシアか？」

「残念ながらそうだよ、君に剣を教えた」

ブレイドの質問にラークはため息をつく、出来れば会いたくなかったという様に。

その名前に、他の騎士達もざわつく。

「テンネシア……元第七師団の」

「若くして師団長にまで上り詰め、最強と言われながら王都を去った天才騎士か？でも、それは——」

「ああ、十年も前の話だね……奇病でこんな子供の姿をした人間が師団長なのは嫌だろう？」

ラークは自ら騎士達の言葉の後を引き継いで、会話を遮る。

押ししているのはラークだった。スピードで劣るブレイドは防戦に回るものの、しかし普通ならば斬りあう事すら出来ない様なスピードのラークに対してその動きを読んでいるかの様に反応する。

ブレイドはラークの言い訳に納得しないようだった。

「……まだ、グレイス夫妻の事件を調べているのか？」

「どうかな、少なくともこのレーシアでシントリアの事件を調べてはいないんじゃないかな？」

ラークははぐらかして、右腕を身体に巻き付ける様にしてダブルブレイドを大きく後ろへ引く。

ブレイドもそれに応え、自分より身長の高いラークに合わせる様にやや姿勢を低くしながら同じ様に剣を引いた。

「真空破斬——」

「一の太刀、烈火」

瓜二つの構えから放たれた剣は互いの間で衝突し、刃りを赤く染める。

（これは、炎……!?!）

押し負けたのはラークだった。

筋力で勝っていた彼は後ろに吹き飛ばされ、空中で何とかバランスを整えて地面を擦る。

ラークはすぐ後ろに迫った包囲の騎士から距離を取ろうとするが、間合いが開いた筈のブレイドの剣が目の前に迫りはっと顔を上げる。

「二の太刀、疾風」

間合いを無視する様な神速の突きをラークは辛うじて下に受け流しつつブレイドの頭上を飛び越え、ブレイドと、背後の騎士の攻撃か

ら逃れた。

更なる追撃をかけようと、ブレイドは再び一の太刀の構えに入る。その攻撃に対して防御する術を持たないラークは微かに顔をしかめ、防御の構えを取る。

「一の太刀」

炎を纏った横薙ぎの一撃がラークに迫り、しかしそれは空を斬った。

「——同じ技が二回も僕に通じると思ったのかい」

完璧なタイミングで深く沈み込み、ラークは剣を振りきって無防備なブレイドにカウンターの斬り上げを放つ。

「いいや、同じではない」

「がっ!!」

ラークの身体から血が吹き出す、まるで先に通った剣の軌道をなぞるように、

よろめきながら、ラークは食いしばった笑みを漏らす。

「『それ』良いのかい?……騎士として」

ブレイドは無表情に肯定する。

「今の俺は騎士ではない、ただ国と、部下を守る。この千の太刀筋の剣をもって」

ラークははつきり笑った。

「……そんなものを埋め込まれても、か。本当に強くなったね、全く」
言う間にも確実に騎士の輪は狭まる、機動力で空間をこそ最大の武器とするラークはいよいよ力を発揮できなくなりつつあった。

「——獅吼爆雷陣!!」

と、包囲の一部が崩れる。

そこに居たもの全員が驚いて振り向いた先に、エッジが居た。

「大丈夫か、ラーク!？」

仲間に駆け寄ろうとするエッジを、ブレイドの剣が止めた。

エッジも剣で受け止めるも、力の差でじりじりと後ろに押される。

「くっ、引くんだエッジ、君じゃ勝てない!ブレイドは僕が相手をする」

急いで助けに入ろうとするラークを、エッジが制止した。

「いや、これで良い。ラークの方が大勢の騎士を相手に出来る」

ラークは驚いて足を止める。

その隙を突いて彼に斬りかかった騎士は、即座に地に伏せられた。

「……勝てるつもりでいるのか、エッジ」

「まさか、そこまで自惚れてない」

兄の問いかけに、弟はそう答える。

「そうか……ならここで命を投げ出すのが、あの時のお前の答えか」

ブレイドはそう言つてエッジの剣を払いのけ、体勢を崩したエッジに剣を振り下ろす。

「ぐうっー」

辛うじてそれを防ぐも、その一撃に剣をまたも弾かれるエッジ。

躊躇い無く、ブレイドはそこへ連続攻撃をしかけていく。

一見すると捌き切れていないようだったが、しかし何度やってもエッジは身体に剣を受けなかった。

構えを崩されてもエッジは身体のバランスまでは崩しておらず、流れるように弾かれた勢いを利用してブレイドの剣を躲し続ける。その円を描く様な剣の軌道はラークの様だった。

「なるほど、軽い剣に変えて動きが良くなったか」

呟いてブレイドは、ラークを吹き飛ばした時と同じ構えを取る。

「それを正面から受け止めるなエッジ！剣を弾かれる！」

押し寄せる騎士達と戦いながら、ラークはエッジに叫ぶ。

エッジは兄の構えに対し剣先を斜めに下げて、左手を開いたまま剣の柄に添える奇妙な構えを取った。

「一の太刀、烈火」

炎を纏った斬撃を正面から受け止める形になったエッジは、剣こそ離さなかったものの砲弾の様に吹き飛ばされる。

「が、あっー」

背中から落ちて息が詰まりそうになったエッジに近付きながら、ブレイドは失望の声をあげた。

「剣で奇策が通じると思ったか？戦闘中に構えを変えるなど、やはり

お前は戦いを遊び位にしか捉えていない」

ブレイドは再び同じ構えを取った。

それは必殺と言っていい域に達した剣技を持つからこそ初めて許される行動、幾度もの地道な鍛錬の末に積み上げられた剣が彼のその『構え』だった。

「終わりだ、その剣諸共に」

それでもエツジは、身を起こし先程と同じ構えを取る。

あくまで正面から受け止めようとする様に。

ラークはそれに気付いて割って入ろうとするが、それは仕留め損ねた騎士に阻まれ叶わない。

勝負を決めるのにたった一つで十分な技、だからこそその『一の太刀』。

それが、炎を吹きエツジに叩きつけられた。

見ているもの全てがブレイドの勝利を確信する中で、ただ一人ブレイドだけが微かな放電音と異変に気付いた。

「……ラークは術が使えないから気付かなかったかもしれないけど、その技ただ炎を纏ってる訳じゃなくて爆発を推進力にしてる。だから、」

エツジの剣がブレイドの剣を弾き返す。

「——その爆発さえ阻害すれば、攻撃は止められる！」

驚愕と共に、今度はブレイドが防御に回る番だった。

「くっ」

「裂爪斬！」

獣の爪が空間を切り裂いた様な三つの斬撃が、上段からブレイドに叩きつけられる。

ブレイドは剣を横に寝かせる事で、全てを防御した。

「何故、こんなに早く見切れた？」

「他の相手ならダメだった。でも、ブレイドの剣は本質的にはラークと同じなんだ」

エツジは獅子の気をブレイドに叩きつける。

「獅子戦吼！」

「三の太刀、流水」

ブレイドはそれを水流と剣で受け流す。

「深術の力を最大限上乘せする為に、剣自体に込めてる力が軽い。だから、深術のタイミングを崩すだけで威力が通常の剣圧以下まで下がる」

ブレイドは実力差がありながら自分に食い下がってくる弟を見つめた。

「……あんな僅かな時間でそこまで気付いたか、なるほど」

そう言うのと無駄のない動きで、押し込んできていたエッジを後退させ攻めの流れを切る。

「お前の覚悟は分かった、なら俺もそれに応えよう」

ここで初めて、ブレイドは中段の構えを取った。

剣を扱う上で最も基本の形だ。

それ故にそこからの選択肢は多い。

エッジも次の行動を読む事ができず、同じ構えを取って備える。

ラークは確実に騎士達を倒していたが、まだギリギリでありエッジはブレイドを引き付けていなければならなかった。

と、

「掴まって、エッジ！」

ラーヴァンの背に乗ったクロウが割り込んできて、身を乗り出しながらエッジに手を伸ばす。

エッジもそれに応えて手を握り返し、速度を落しながらも飛び続けるラーヴァンに飛び乗った。

突然現れた手配犯に、ブレイドを初めとした騎士達は低空を飛ぶラーヴァンに攻撃を仕掛けようとする。クロウは舌打ちすると、彼らの攻撃を防ぐ為に牽制の黒い槍の深術をばら撒いた。

しかし、槍は赤銅色の鎧に近付くと揺らいで、直撃しても鎧の表面に傷を付ける程度の影響しか及ぼせなかった。

「何の備えもなく来た訳じゃなさそうね、分が悪いわよラーク」

「ああ、そうだね」

戦場の上を旋回し待つラーヴァンの背に、ラークも持ち前の驚異的

な跳躍力で飛び乗る。

それを確認してすぐ、クロウは右手を振り上げた。

「ラーヴアン、デイープミスト！」

濃い黒い霧が辺りを覆いつくし、騎士達には何も見えなくなる。

互いにぶつかり合い、木の根に足を取られている彼らをその場に残して、三人を乗せた黒い鳥は火山の内部へ続く洞窟の入り口へと向かった。

「下手に動くな！まず剣を鞘に納め、それから負傷者の手当てに移れ！」

ブレイドの指示に彼より年上の老練な騎士の一人が、ブレイドを案ずるように尋ねる。

「よろしいのですか、追撃しなければ師団長の肩のそれが……」

「私の事は良い、この『刻印術式』は父が組んでくれたものだ。そう簡単に爆発する事はない」

部下の憂いを一蹴して、ブレイドは闇の中で漠然と火山の方を睨んだ。

「今回の指示には、何か胸騒ぎがする。部下のお前たちを危険に晒す訳にはいかない。どの道『これ』は見せしめだ、それでこの身が塵となろうとも私はそれを受け入れよう」

何の迷いもなくそう言い切ったブレイドに、尋ねた騎士は軽くため息をつく。

「……負傷者の確認を続けます、ですが忘れないで下さい。ここについて来たのは皆自分から志願したもののばかりです。少なくともこの隊に貴方の無事を祈らない者は居ませんよ。王国最強の騎士『千の太刀筋のアズライト』の喪失がどれだけの痛手か皆分かっています」

ブレイドは答えなかった。

（千の太刀筋……騎士として、か。戦い方が騎士らしくないなら、せめて在り方だけでも……）

彼は目を閉じて、自らの剣の柄を撫でた。

第五十四話 炎の華と、麒麟菊

《カンデラス火山内部》

「待て、ここにだ」

騎士団にリアトリス、ラク達が足止めされている間にジェイン・リュウゲンとそれを護衛する『爪雷』、『紅蓮』、『巖岩』と、スプラウツの子供達は火山の内部の洞窟を進んでいた。

黒々した変化の無い壁面が続く中で、それをなぞって歩いていた隻眼のリュウゲンが突然足を止める。

「間違いないのですか？」

『巖岩』のバルロが丁寧な口調でリュウゲンに尋ねる。齢六十に近いバルロにとって、四十後半のリュウゲンは年下であったがその態度には普段子供達に見せる事のない敬意が滲み出ていた。

リュウゲンは頷き、壁面を確かめて呟く。

「神の残しし宝珠の御座へ……シンに連なる我に扉を開け、我が名は――」

壁面の内部をマグマが流れるような光が走り、積み上げた岩が崩れる様に壁はリュウゲンの手が触れた所から消えていった。

「行くぞ」

それに驚くことも無く、リュウゲンは現れた道へと進んだ。

現れた穴は大人二人が十分に並んで歩ける大きさで、リュウゲンから間を空けず付き従う様にしてバルロが、そして他の子供達が恐る恐る続く。

と、最後尾を歩く『紅蓮』のセルフィーが何かに気付いたように顔を上げバルロに報告する。

「来た、数は三人。裏切り者のジェイン・アキと、この間の光の深術士セキユアライと、見たような男が一人」

「フレット、セルフィー迎撃しろ。リュウゲン様に近付かせるな」

足を止める事無くバルロは二人に命令した。

彼女と共に殿を務めていた『爪雷』のフレットは言われるままに踵を返しながら、セルフィーの方へ首を傾げてみせる。

「お前この距離で分かんのかよ」

「クロウみたいに行つてない場所は無理でも、鉱石を置いてくれば感知の距離だけなら私だつて負けてないわよ！」

バルロに聞かれない様急ぎ足で離れながら、むっとした様子でセルフィーはフレットに噛み付く。

フレットはそれに対して面倒臭そうな顔をしながら彼女より先に出了た。

「それは良いけど今度は足引つ張んなよ、『爆発』」

「だから！私は、『紅蓮』だつて言つてんでしようが！私どころかクロウより年下の癖に生意気言つてんじゃないわよ！」

「流石に内部は、外の比ではありませんね……」

穏やかな中央大陸の気候で育つたアキは、額に汗を流しながら口にする。

洞窟内を走り始めてからの僅かな時間で、熱は確実に三人の体力を奪つていた。

しかも内部は徐々に勾配になっており、坂の左右には空洞が広がつて下からマグマの赤い光が覗き、気を抜けば落ちてしまいそうだった。

「大丈夫か？無理にスピード出さなくて良い——つて言いてえとこだけど」

「ごめんアキ、もう少しだから！方が一にも宝珠が人間の手に渡つたら、世界はどうなつちやうか分からない……絶対、渡すわけには」

二人の心配にアキは首を横に振る。

「いいえ、ラークさんの行動を無駄にはしません。何より、父を止めるのは私の役目です」

決然とアキは言い、リアトリスとクリフもそこにアキの覚悟を見てもう何も言わなかった。

と、走る彼らがやや開けた場所に出ると、目の前に燃える様な赤髪のセルフィーと、やる気の無さそうな紫の髪フレットが立っていた。

三人とも一度セルフィーとは交戦していたので、敵である事を悟って足を止める。

「あの時の……」

リアトリスは二人の姿を見て前回戦ったとき成す術無くフレットに殺されそうになった記憶が甦り、声を震わせる。

あの時助けてくれたラークは横に居ない。

「また会ったわね、今度こそ殺してあげるわ。光属性使い」

殺気に満ちた目でリアトリスを睨み付けるセルフィーとは対照的に、フレットはつまらなそうに言う。

「何だ男ってこの間の剣士でも、エッジとかいう奴でもねーのかよ……」

その余裕の態度に、唯一フレットの実力を知っているリアトリスの背に冷や汗が流れる。

(私じゃ相性が悪い。こっちを彼が狙ってきたらアキとクリフさんの足手まといになる)

リアトリスは少し大きな声で宣言した。

「あの子の火の深術は私が防ぐ、二人は鉤爪の男の子の方をお願い」

その宣言にアキとクリフは驚いて振り向き、セルフィーは不愉快そうに目を細めた。

「フレット、手を出さないで……あの女は私が倒す」

あ?、とフレットは首をかしげ、それから笑った。

「じゃあこっち二対一か、良いぜ。お前と組まなくて済むならやり易いしな」

そう言うなりフレットは獲物を狙って飛びかかる猛禽類の様に両手の鉤爪を広げ、その間から放電音がした。

突然豹変した彼の殺気に、クリフとアキも身構える。

「あんな名前は?」

「リアトリス・フローライト」

そう、とセルフィーは右手に握った鞭と左手に持った炎熱鉱石を握りしめる。

『紅蓮』のセルフィー、それが私。喧嘩を売る相手を間違えたこと、後

悔させてあげる！」

言うなり、セルファイは指の間に挟んだ赤い鉱石を時間差で投げつけた。

それらは次々に赤い光を纏って大きくなり、一つ一つが上級深術『エクスプロード』へと成長する。

リアトリスも黙って見てはいなかった。前回の戦いで核となる鉱石を砕けば良いと分かっていたリアトリスは、杖から小さな光の矢を放ってその赤い光を撃ち落とす。

しかし、全てを打ち落とし続けるほどリアトリスは攻撃が得意ではなかった。

一つがリアトリスの迎撃をすり抜け、上級深術として炸裂する。

仕方なくリアトリスは前回同様、闇属性の槍と障壁の併用で防御に回った。

が、セルファイはそこで手を緩めない。

手持ちの鉱石を消費し同じ攻撃を続ける。

「く、ううっ!!」

合間に隙を見てリアトリスは投げつけられる炎熱鉱石を打ち落とすが、どんどん受けに回らざるを得なくなり、障壁の端が欠け熱がリアトリスの服を焼く。

「やっぱり、あんた攻撃は全然ダメじゃない。最初からこうすれば良かった、今度こそ、骨も残さず消してあげる!!」

セルファイの高笑い、洞窟内にこだました。

「こいつ、何だよー！」

「裂駆閃！」

アキが一直線に間合いを詰め、槍の様に和傘を振るう。それをフレットは難なく回避し、空振りした彼女の武器を大きく弾く。

それは一瞬の事でアキには体勢を立て直す暇すらなかった。

「アキちゃん!——『殻』!」

青い気を纏ったクリフが、攻撃動作に移っているフレットとアキの間に腕を伸ばす。気は鋭角的な形を形成し、クリフの腕を鎧の様に覆ってフレットの鉤爪を弾き返した。

そこから生まれた電気が、薄暗い洞窟内を青白く照らす。

「はっ、何だよ歯応えねえな。二人がかりでこの程度かよ」

笑みを浮かべるフレットに、アキとクリフは悔しそうな表情で挟撃を仕掛けた。

「岩砕閃！」
がんさいせん

「轟裂破！」
ごうれつぱ

フレットは岩をも砕くようなアキのスイングを右手で叩き落とし、嘲笑うように左手の鉤爪でクリフの両掌を受け止めた。

「もつと楽しませろよ、ほら」

ジェイン・リュウゲンと『巖岩』のバルロ、それに付き従う子供達はそこへたどり着いていた。

洞窟の奥深く光が届かない場所でありながら、赤く照らされた壁面はくり貫かれた様な綺麗な半球形なのが容易に見て取れる。

その赤い光の中心に三重の巨大な円があった。

岩を削った台座の様でもあり、『それ』を内部に取り込もうとする塔の様でもあるそこに、赤い輝きを内包した水晶の様な火の宝珠シーブレイムスは安置されていた。

宝珠は成人の頭部ほどの大きさで、周囲に目で見える程の濃度のデュープスの流れを纏っている。流れは空気中から絶えず霧のように生まれ、台座の中へ、奥へと吸い込まれていた。

ジェイン・リュウゲンはその台座に近づき直接触れないようにしながら、ここへの道を開いた時の様に手をかざして何かを唱える。すると、宝珠の光が一際強くなり、デュープスの流れが加速する。

それを確認したリュウゲンはまだ動く右目で宝珠を睨み、それからもう一度何かを唱える。

全てを終えると宝珠の輝きは覆われたように陰っていた。台座の内部へと流れていたデュープスの流れも消える。その様子を後ろから見ていたバルロが指示を出し、二人の子供が赤い布を持って進んで宝珠をそれで包むようにして台座から下ろす。

「これがそうなのですか」

「直に触れるなよ、宝珠は意思を持っている。下手に使おうとすれば意識を乗っ取られるぞ」

リュウゲンの説明に宝珠を持たされた子供二人は微かに身震いする。

「すぐに離脱するぞ、目的は果たした」

その言葉で全員が来た道に戻り始める。

宝珠が失われた「座」からは、小さな振動が生まれ始めていた。

フレットと戦っていた二人が、叩きつけられた雷のデープスの爆発で吹き飛ばされる。

「うっー！」

「ぐあつ……」

「アキ！クリフさん！」

「余所見してんじやないわよー！」

リアトリスとセルフイーの術の拮抗もギリギリのところ、リアトリスの防御も今にも破れてしまいそうだった。

フレットはため息をつく。

「終わりか、クロウも居ないんじや話にならねーな」

「誰が、居ないって？」

声と共に洞窟内に激しい風が起こった。羽を畳んだラーヴァンが洞窟内の壁を擦りながら強引に着地し、そこから転がるように降りたエッジとラークが剣を振るう。

「魔神剣！」

「真空破斬！」

面白がるように目を輝かせながらフレットは、二人の斬撃を避けて宙返りする。

その間にアキとクリフは体勢を立て直し、リアトリスはそれを確認して自分の目の前の相手に集中した。

「やっと来たか、全員まとめてなら少しは楽しませてくれるよな？」

ラーヴァンが飛べるだけの空間が無く、クロウは仕方なく巨鳥を大気に還すがその目は真っ直ぐにフレットを睨んでいた。

「ふざけるな、もう負けな。あんたの相手なんて私一人で十分よ」

クロウの眼が真っ黒に染まり、フレットは殺気に満ちたクロウの様子を興味深そうに観察する。そのまま前に出ようとするクロウをエッジが制した。

「待てクロウ、無理に一人で相手することない。数で勝ってる今下手に陣形を崩さない方がよい」

その発言を聞いたフレットは、脱力しながら何かを思い出したようにエッジに尋ねる。

「……もしかして、お前がエッジか?」

エッジは自分の名前を呼んで来た事を不審に感じながらも頷く。

「ああ」

名前を確かめたフレットは凶悪な笑みを浮かべながら、何の前触れも無くいきなりエッジに突進した。

エッジは辛うじて後ろに下がりながら、押されるように彼の攻撃を防御する。

(速い……深術の速度を上乗せしたブレイド程じゃないけど、何の予備動作も無くこのスピード、まるでラークだ)

その信じられない身体能力に、エッジは顔を歪める。

それとは対照的にフレットはやる気を出した様子でエッジと鼻を突き合わせながら言った。

「お前から殺せって言われてるんだ、本当にそんな価値があるのか見せてみるよ」

それが、火山での決戦開始の合図だった。

第五十五話 『混血児』

合流し、五人になったエツジ達は『爪雷』のフレットと混戦になっていた。

アキは人数差を考え一人で『紅蓮』のセルフィーと対峙するリアトリスの助けに向かおうとしたが、それはリアトリス自身によって制止される。

「待ってアキ、これは一対一で始めた深術士同士の戦いなの。この子との勝敗は有耶無耶にしちやいけない。だから、例え私が負けるとしてもアキは手を出さないで」

炎の勢いに押されながらもリアトリスの眼は真剣で、アキは思わず足を止めた。

「リアさん……」

「はあ？ 私に負けても命があるって思ってるの？」

と、いきなりリアトリスの深術障壁の形が変わり鉢の様になる。流れるように炎はその内部を滑って術を放ったセルフィーの方へと向きを変える。

攻勢に回っていたセルフィーは驚きに目を見開きながら、横に転がってその炎を躲す。

「火の深術は全属性の中で一番指向性が低いから……少しの干渉でも簡単に方向が変わる」

「知ってるわよ、火の深術の事なら！」

セルフィーがイラついた様子で、自分の炎とリアトリスの障壁が途切れる瞬間を狙って鞭を振るう。

「い、っ………たー！」

デープスの気配には敏感でも、武器に関してはまるで素人のリアトリスはその攻撃に不意を突かれ痛みを声あげてあげる。

「戦いの事も分かってない、痛みの堪え方も知らない……あんたみたいな奴に私は負けない——接華浮燈の陣！」

前回の戦いで使ったのと同様に赤い鉱石がいくつも空中にばら撒かれ、赤い光の珠へと変わった。

リアトリスはセルフファイが次の術を唱える前に、それらを撃ち落そうとレイの詠唱を開始する。

「残念それは間に合わないわよ、これで準備は終わりだから。見せてあげるわ地獄の炎——秘奥義、」

リアトリスは全ての赤い光の珠が爆発寸前まで膨れ上がり、空間を埋め尽くすのを見た。

「インフェルノドライブ！」

「ッ、ジェネレイト結晶化!!」

流星の様に突撃してくる炎の珠、一つ一つが上級深術『エクスプロード』に成長する真紅のそれらに対してリアトリスは彼女の持てる最大の防御、虹色の光コレクトバーストと『色クロマティックの水晶』の併用で身体全体を覆って防御に回る。

その激突はとても近付けるものではなく、アキは辛うじて業火の向こうのリアトリスの姿を確認し、それから唇を噛んで彼女の姿に背を向けた。

「術は防いでも、熱までは遮断できないでしょう？その囲いの中で焼け死になさい！」

「あ、つううう！」

セルフファイの挑発に対して、必死に熱に耐えるリアトリスの返事は無かった。

「あんたの相手は私だって言ってるでしょう！」

クロウがフレットに向けて一直線に加減無しの深術を放とうと、闇のデープスを集束する。

フレットはそれに対し、至近距離で戦っていたエッジに鉤爪を叩きつけるようにしながら反動を利用してエッジを盾にする様に回り込む。それを見てクロウは慌てて術を中断した。

「ッ！」

フレットはクロウを笑い、彼女が本気を出すのを待つ様に挑発する。

「どうした？撃たねーのかよ。今『エッジ』ごとぶっ飛ばせば俺を倒せ

たぜ」

「調子に乗るな！」

エッジにそのまま攻撃を続けようとするフレットに対し、クロウはその足元からシャドウエッジの刃を上昇させ追い払う。

フレットは彼女の反応を面白がる様子を顔を見ながらその攻撃を難なく躲す。

「ブラッディランス！」

クロウはそのまま攻撃の手を緩めず、なるべく仲間を巻き込まない垂直に近い軌道で黒い槍を降らせた。

前回の海上都市での戦いで距離を詰められると危険だと学習していたクロウは、フレットのスピードから逆算して牽制で自分とフレットとの最短コースを封じていく。

うかつに飛び込めば串刺しにされる為クロウに接近戦を挑む選択肢がなくなつたフレットは、瞬時に判断を切り替え再びエッジに斬りかかった。

「くっ!？」

一撃目は辛うじて剣で受け流すものの、二撃目でエッジは完全に体を崩される。

ブレイドの深術を応用した剣術相手には効果を見せたエッジの防御も、純粋な筋力で圧倒してくるフレットには通用しなかった。

「終わりか、じゃあな」

あつさり、興味無さそうに断じるフレット。

エッジに立て直す時間は無かった。

辛うじて敵の姿を確認しようとしたエッジの瞳の中に、フレットの振りかぶつた帯電する鉤爪が大きく写る。

「れっぽしやう烈破掌」

直後、フレットの余裕の姿は後ろに吹き飛ばされた。

「……よそ見してんじゃねえよ」

クリフの気を纏った掌底で飛ばされたフレットは、武器でブレーキをかけ土煙をあげながら減速する。

「つと、やるじゃねーか」

吹き飛ばされた彼に、更に間合いを詰めたラークの追撃が及んだ。足元を狙ったラークの一閃をフレットはジャンプして避ける。

しかし、空中は移動が出来ない。

その隙を見逃すラークではなく逃げ場がない状態の敵に対して、一閃目の勢いを生かしたまま身体を捻って斜めの斬り上げを放つ。

フレットも流石にそれは避けられず両手の鉤爪を交差して防御の姿勢をとる。

激しい放電が起こった。

ラークと武器が離れてもまだバリバリという音を立てたまま、フレットは着地する。

「魔神剣！」

その右腕を、エッジが放った斬撃が捉えた。

フレットの実力は圧倒的だったが、人数差には流石に勝てずに舌打ちする。

「チツ」

普段フレットが身に着けている丈の余った服が斬れ、そこから剣の赤い跡が覗く。

と、

「な、」

「傷が……」

クロウとエッジが動揺するのも無理はなかった。

直撃を受けた激しい出血が、エッジ達の見ている前で治まっていた。

それは明らかにラークと同じ「身」の一族の様な、特殊な能力だった。

よく見ればその肌は普通の人間と同じではなく、獣の様な毛で微かに覆われていた。

「何だよ……何なんだよ」

子供との戦いに拒否感を持ちながら、それを表に出さなかったクリフもこれには思わず手を止める。

「は、そんなに珍しいかよ。お前ら普通の人間にとっては動物か何か

にでも見えるかよ!」

足を止めたエツジ達に斬りかかるフレットをラークが受け止め、ぎりぎりと同迫り合いになる。

「シンの血が混ざった『混血児』……まだ生きている者が居るか」

ラークは同情と警戒とが混ざった眼差しでフレットを見つめた。

クロウが呆然と呟く。

「フレットが、シンの一族……?」

「ただの子孫じゃない、混血児は『身』と『心』と人間の血が混ざったものに稀に起こる遺伝の異常だ。両方の力を引き継いだ獣の子として恐れられ、大半が狩り尽された……アエスラングとイクスフェントが断絶して数千年、彼を見つけた大人達にとって確かに『兵器』として申し分ないだろうね」

フレットの凄惨な過去を語りながらも、ラークは全く手の力を緩めない。

その態度にフレットは嬉しそうに笑った。

「どうでもいい、こんな糞みたいな世界になんて何も期待してねーよ。ただ、俺はお前みたいに強い奴と戦えれば、それで良い!」

コレクトバーストによる虹色の粒子が、フレットの身体に吸い込まれる。

「ラーク!」

本能的にラークの危険を感じて、エツジが叫ぶ。

「デュアル・インディグネーション!」

普段なら溜めを必要とする技をフレットは同迫り合いをしたまま発動させ、ラークを後ろへ吹き飛ばした。

「詠技——蓮華!」

「『発』!」

「ブラッディランス!」

アキの放った炎が鉄の鉤爪に切り裂かれる。

クリフが時間をかけて練った気の奔流が、コレクトバーストの力を得た雷の爆発であっさり相殺される。

クロウが放った槍の連射が、異常な運動スピードで掠りもせず

される。

「弱え、弱え、遅え！こんなもんかよ！お前らの本気は！」

フレットは哄笑した。

ラークと同等のスピードとパワー、クロウにも迫る勢いの深術。

コレクトバーストを使った『混血児』フレットの力はエッジ達を圧倒していた。

(まずい……！)

エッジが剣を抜刀の様な姿勢で低く構える。

彼は躊躇い無く、ラークとの修行で身に着けた技を使った。

フレットもそれに嬉しそうに気付き、両腕を大きく交差させて鉤爪に雷のデープスを集束する。

(二度目の斬撃で空気を切り裂く、一度の斬撃じゃ空気抵抗で威力が落ちるけど、そこに同じ軌道で連続で斬撃を重ねれば、それは——)

——秘奥義と呼ぶに相応しい、必殺の斬撃になる。

ラークに言われた言葉を頭の中で反芻しながら、エッジはラークから教わった『真空破斬』を連続で放つ。

(一撃、二撃……最後の二撃に最大限の力を込めて)

「連撃にして一撃成す、是は引き裂く風の刃——真空蒼破塵！」

先に放った二撃を追い、それさえも飲み込むように、ラークの技よりも更に巨大な斬撃が一直線に飛ぶ。

「ハハッ、いぜ見せてみるよ——四電双爆破ア！」

それに対してフレットは自分から距離を詰め、両手にデュアル・インディグネーションを重ねた激しいデープスの爆発で迎え撃つ。

両者の激突から空中に向かっていくつも雷の線が伸び、洞窟内に焦げ跡を残す。

その余波で生まれた風は二人以外の仲間達を後ろへ押しつける。

「がああああつ！」

競り負けたのは、エッジの技の方だった。

攻撃の余波が、エッジの手から剣を弾き飛ばす。

「そんな……まだ完成してないの？」

ずっと船の上でエッジが必死に練習するのを見ていたクロウが

ショックを受ける。

(違う、今のは完璧だった。それでも届かない——エツジはこの先だけ剣の修行を積んでも、彼を破れる程にはならない)

ラークは飛ばされた身を起こしながら、これがエツジの限界だという事を悟った。

「ハハッ、何だよバルロ。これが『エツジ』かよ？こんなのに負けたのかよお前、ハハ——」

「——岩^{がんさいせん}砕^{さいせん}閃」

高笑いが途切れ、フレットはがくりと膝をつき前のめりに倒れる。

エツジの秘奥義の隙にフレットの背後に回ったアキが、石斧の様な打撃を彼の後頭部へと叩き付けていた。

「……ええ、確かに貴方は強いです。でも、これは残念ながら決闘ではありません。父が始めた事は、私が必ず止めます」

アキは倒れた少年の姿に耐える様に、自分の武器を強く握り締めた。

そこでようやく一息ついた彼女は、初めて気付いた。

洞窟内全体を揺らす振動に。

(どうなってるのよ……闇属性の障壁ならとづくに溶けてる、熱を持った光属性の障壁なら熱で深術士がもたない筈なのに、あの虹色の壁は熱にまで強い訳?)

『インフェルノドライブ』を放ち続けるセルフイーも、暑さで大量の汗を流し始めていた。

一方のリアトリスも障壁の内部で膝を着き、『色^{クロマティッククリスタル}の水晶』の内部まで進入してくる熱を抑える為に両手に氷の深術を絶えず発動させ続け、今にも倒れる寸前だった。

元々コレクトバーストで『色^{クロマティッククリスタル}の水晶』を詠唱無しで出すのは体力の消耗が激しい。それが一度だけならともかく、今は普段なら発動時以外使う必要のないコレクトバーストを維持し続けなければならずリアトリスの限界は近かった。

徐々に氷の深術の威力も落ち、外側に一番近いリアトリスの手は既

に熱で真っ赤だった。

「っ、このーまだよー！」

それはセルフィーも同じであり、術の威力を維持する為にコレクトバーストを使い続け、コントロールの為に伸ばし続ける手は火傷し始めていた。

「もうやめよう、そこまで必死になる事無いよ。そんな風に自分を傷つけてまで戦うなんて……」

「うるさい、私はあんたみたいな奴に絶対負けない！私は今日まで必死に努力してこの『紅蓮』の名前を手に入れた。その苦しい思いもしてないあんたなんかには負けるなら、私の全部が無意味になる！」

「違う……」

「違わない！血を流す痛みも、才能への羨望も知らない癖に！口々に苦しんだ事も無い癖に——」

「あなたが今日までそんな苦しい思いを乗り越えてまで、『生きてきた』事が無意味だなんて事、絶対じゃない!!」

「……え？」

セルフィーの術が一瞬止まる、リアトリスはその一瞬にクロマティッククリスタル『色の水晶』の障壁を分解した。

破片となった障壁がほんの一瞬だけセルフィーの術を押し返し、リアトリスは危険を承知でそのわずかな隙を突いて彼女の手を氷で拘束した。それ以上その手が、自らの火で傷付かないように。

「辛い事しか無くても……それを乗り越えたなら、あなたにとって一番大事なものは自分でしよう？……手元に残ったものが『称号』だけだからって、それを守る為に自分自身まですり減らすなんて間違ってる」

セルフィーは呆然としていた。初めて、何か知らないものに出会ったかのように。

「あなたはただ、あなたのままで生きていて良いんだよ」

そう言っ、リアトリスは微笑んだ。

そこで、振動は彼らの足場を揺るがす所にまで及んだ。

「待てよ……まだ、俺は負けてない。まだ戦える」

まだきちんと立ち上がる事も出来ないまま、フレットは憎悪をその目に燃やして膝を起こす。それを見たラークは早足で彼の元へと近付く。

クリフがそれを見て、必死に止めた。

「待て殺すなよ！そいつは——」

ラークは容赦なく、立ち上がりかけたフレットの顔を蹴り飛ばした。

「ああ、トドメを刺してる時間は無い。急いで火山を出よう、多分宝珠が奪われてデイープスの流れが狂い始めてる」

そう言うのと、ラークは膝を着いて立てないリアトリスの元へ向かった。

「エッジ立てる？アキも、悪いけど帰りはラーヴアンで無理矢理滑空するつてのは出来そうに無いから走るよ」

怪我をしたエッジと、顔色が悪いアキの手を、クロウが掴んで走り出す。

クリフも倒れたフレットの様子を一瞬見たが、足場に亀裂が入り傾き始めたのを見て仲間達の後を追った。

「……ラーク？え!？」

「急ごう、宝珠が『座』を離れた。ここは危険だ」

突然ラークに担がれ、リアトリスが慌てる。その間にも足元の亀裂は更に増え、リアトリス達と呆然と立ち尽くしたままのセルフィーとを隔てた。

リアトリスは、急いで彼女の手の拘束を解く。

「待ってラーク、この子も一緒に——」

「駄目だ、その子は……敵だ」

そう答えるとラークは足に力を込め飛び出す。

「逃げて、走って！セルフィー!!」

リアトリスが伸ばした手は、信じられない程早く彼女から離れた。

足元が斜めになって、セルフイーはようやく自分が置かれた状況に気付いた。

足場が崩れようとしている、セルフイーは反射的に目の前で崖になり始めた岩に飛びついた。

直後に彼女が立っていた足場は完全に崩れ、まるで長い長い滑り台の上に掴まっている様な状態になってしまった。

そこで、彼女は自分を照らす赤い光に気付く。

その滑り台は、マグマに直結する死の滑り台だった。

「やだ……死にたくない、こんなのやだ」

何とか手を伸ばして、足で斜面を蹴って身体を上へと上げる。

だが、少女は忘れていた。

目の前の、確かに見える岩もまた崩れない保証など何処にも無い事を。

全体重をかけて、身体を上へと運びかけた左手が支えを失ってあつけなく落ちる。

その勢いを止める力は、少女の右手には無かった。

両手が掴まっていた崖から離れる。

「嫌だ……やだやだやだやだ!!」

自分が使う炎の熱さを思い出して、それに身を焼かれる恐怖に少女の目から涙が溢れる。

その手を、誰かが掴んだ。

「え……フレツ、ト?」

信じられない思いで、幻でも見るようにセルフイーは自分の手を掴む少年の顔を見た。

その顔を強く、強く怒りに歪んでいた。

「認めねえ……負けなんて……」

目の前の現実全てを否定する様に、フレツトは手に力を込めて落しかけた少女の体を引き上げた。

「勝負に負けて、味方まで全滅させて完敗なんて認めねえ！死にそうになつてんじやねえよセルファイー!!」

セルファイーは信じられなかった。

確かにフレットは負けを嫌う、けれど仲間を助ける事など一度も無かった。それどころか邪魔になるなら殺す事さえあった。

それでも、まだ自分が生きている事が嬉しくて、セルファイーは礼を言った。

「あの、ありがとう……フレット」

「馬鹿、言ってる場合か走れ!!」

苛立った様子でフレットは、セルファイーの手を強引に引いて来た道を全力で引き返していく。

何度も足場が完全に途切れそうになり、その度にフレットはセルファイーを半ば投げる様にして無理矢理次の足場へ渡った。

(私一人じゃ……こんなの絶対脱出できなかった)

どっちにしても自分は一人では助からなかったのだと悟り、セルファイーは乱暴に彼女を扱うフレットに逆らわず身を任せた。

そのせいか出口の光が見えた時、それはどこか現実離れた希望の様に見えて気が緩んでいた。

最後の最後、上から音を立てて降ってくる落石にセルファイーは気が付かなかった。

フレットが舌打ちして、セルファイーを無理矢理突き飛ばす。岩が微かに傷の残る彼の右腕を直撃して、血が溢れた。

「フレット……めん、私……」

彼を助け起こそうとしたセルファイーの手を、フレットが払いのける。

「真っ平なんだよ、お前のせいでバルロにあれこれ言われんのは」

そう言つて出血を無視し左手でセルファイーの手を握ると、二人で真っ直ぐ外へと走った。

光に向かつて。

「……までに、宝珠を持った奴らとは会わなかったよな」

「洞窟は内部でいくつかに別れてる、必ずしも同じところを通るとは限らない」

外に脱出し疑問を口にしたエッジに、ラークが答える。

「……違うルートで逃げてたとしたら、もうここには」

リアトリスがぼんやりとしながら口にした言葉に、クロウが言った。

「なら、アクシズⅡワンドに戻るんじゃない？急いで追いかければ、何とか間に合うかも」

そう言うと、ラーヴアンを実体化させその背に乗る。

「つて、これに乗る気かよ、全員乗って大丈夫なのか？」

クリフが乗り気では無さそうに言う。

「六人くらい余裕だよ。ただ、アクシズⅡワンド王国内だと私達指名手配されてるし降りするのは町の外……ちよつと離れた開けた場所とかじゃないと無理だけど」

「何で今それ言っただ？」

当然といえば当然の説明にクリフが首を傾げ、クロウが怒る。

「抜けてる奴が居るからでしょ？諜報部隊クビになった間抜けに言われたくないわよ！」

睨み合う二人を差し置いて、アキ、エッジ、リアトリス、ラークが次々にラーヴアンの背に乗る。

「私、これに乗るの初めてです。結構安定してるんですね」

「ああ、俺も乗せて貰ったのは数回だけだけど、生き物みたいな揺れが少ないから案外快適だよ」

「私空の上なんて自信ない……」

「大丈夫、以前エッジが初めて乗った時も問題なかったし、クロウの腕は確かだよ」

クロウは、和やかにラーヴアンの上で会話する彼らを見て不思議な気分になっていた。

ラーヴアンは死の象徴でいい思い出など何もなく、見られれば必ず恐怖か不信の目を向けられていたからだ。

けれど、ここにいる仲間達は誰もそんな様子を見せずただ、空を飛

ぶことへの期待と不安しか持っていないようだった。

(……みんな当たり前前みたいに受け入れてくれてたんだ、私の事)
状況は全然よくない。

宝珠が奪われるという最悪の事態、今船を見つけれなければ世界のバランスは滅茶苦茶に崩れるらしいし、しかもジエイン・リュウゲンなんて思いつく限り最低の人間の手に強大な力が渡ってしまう。

それでも、何故かクロウの胸に不安は無かった。

「よし、じゃあ行くよ！全速力で」

「え、ちよつと待て。俺まだ乗って——」

クロウが皆にかける声さえも少し上ずる。

ラーヴァンが大きく羽を広げ、一気に浮遊する感覚が全員の身体を包む。

「待て待て！何で俺が尾に掴まったまま飛ぼうとしてんだよ！おい！」

先にはきつと困難が山の様にある。でも、

——この仲間達と一緒ならどんな事だって乗り越えられる。

クロウは何故か、そんな気がした。

最終章 『共生体』編 最終章 主要登場人物

パーティーメンバー

エツジ・アラゴニート

「あいつを倒す……力を貸してくれ、アエス・デイ・エウルバ」

性別：男

武器：長剣

年齢：15才

身長：163cm

漁村トレンツから出てきた少年。世界の守護者・監視者である「心」の一族の血が半分混ざっている。兄であるブレイド・アズライトとの出会いを通して自分が記憶喪失だった事を知り、自分の行動が逃避でしかなかった事を思い知らされ一度は旅の目的を失いかけたがクロウの信頼に応える為、仲間を全て失った状態からもう一度立ち上がる。

一族の使命の為ではなく自分の守りたいと思う少女の為、幾度も壁にぶつかりながらそれでも前を向き続ける彼の姿勢は、周りの人間にも大きな影響を与えバラバラの方向を向いていた者達を一つの「仲間」にしていく。

主に雷属性を得意とし、剣と深術の両方を武器として戦う。

クロウ

「これで全部終わりにする。行くよ、ラーヴァン!!」

性別：女

武器：スローイングダガー

年齢：16才

身長：160cm

闇の宝珠の欠片を右肩に持つ少女。物心ついた時から戦いの中に身を置き、それを当然のものとして敵側の幹部の一人『黒翼』として

育つがエッジを始めとした仲間との出会いと、孤児院での経験を経て自分の中にある「誰とも戦いたくない」という望みを自覚する。

その力から多くの勢力に狙われ、運命は彼女を戦いの中心へと巻き込んでいくが、彼女は自分の望みに逃避せずそれを希望として戦い続ける。その先にこそ自分が求めるものがあると信じて。

闇の宝珠の力で他の深術士を圧倒する攻撃能力を持つ。

ジェイン・アキ

「私はエッジさんとクロウさんを巻き込んだ責任から最後まで逃げたくない、止めます『父』を」

性別：女

武器：『明の天傘』

年齢：14才

身長：153cm

スプラウツを陰で操るジェイン・リュウゲンの娘。一度は敵としてエッジ達を裏切るが行動を共にする内にエッジとクロウが悪人ではなく「普通の人間」である事に気づき、エッジ達の仲間となる。当初クロウからは殺し合いに発展するほど恨まれていたが和解し、互いに数少ない友人と呼べる関係になっていく。

他の仲間以上に、ジェイン・リュウゲンを止めなければならないという思いは強い。

和傘を象った『明の天傘』という特殊な攻防一体の武器と「詠技」を扱うパワー型。

クリフ・セイシャル

「子供が生きる場所作んのが、大人だろうが」

性別：男

武器：格闘術

年齢：23才

身長：183cm

セオニア王国の諜報部隊「蓮の水鳥」に所属しアクシズⅡワンド王

国内を調査していた青年。

元々はどの国にも留まらない流浪の旅人だったが、セオニアの王女フレア・L・セオニア・アリーズと出合った事でセオニア側の人間となった。その経歴から、クロウに希望を託したセオニア王に彼女達の方となるよう言われ「蓮の水鳥」をクビになり正式にエッジ達の仲間となる。

「蓮の水鳥」の仲間を殺したラークへの敵意を捨てられずにいる為、仲間として彼に複雑な感情を抱いている。

「気」を操り、それを加速や攻撃等幅広い技に転化して戦う。

リアトリス・フローライト

「仲間を大切に思うこの心だけは……私のもものなんだから」

性別：女

武器：杖

年齢：19才

身長：165cm

宝珠を守る使命を持った、「心」の一族の少女。

常に明るく仲間に接し、その深術で仲間達を守ってきた彼女だが「使命」を果たそうとするその表情が徐々に翳り始める。

彼女がたった一つ、最初からずっとその笑顔の裏に隠してきた事は――。

正確無比なピンポイント攻撃術と、最高位の防御術を扱う補助タイプの深術士。

ラーク・テンネシア

「僕は自分の罪の重さに苦悩したりする様な立派な人間じゃないからね——だから、リアトリスの分まで僕が背負おうと思ったんだ」

性別：男

武器：三日月形のダブルブレード

年齢：117才（外見年齢18才）

身長：166cm

リアトリスと同じ使命を持った、イクスフェント側の「身」の一族

の族長の血を引く青年。長命な身の一族としてはまだ若く、自身の立場から責任感が強すぎる面がある。期せずしてブレイドとエッジ兄弟両方の剣の師となった。

エッジの考え方を甘すぎると切り捨てていたが、一度見捨てた彼が自分の力で道を切り開くのを見てやや考えを改める。以前と変わらぬ最善と考えれば時として非情な判断も下すが、エッジのやり方もまた尊重するようになった。

彼が自分の使命を捨てる事は無いが、自分が常により確実な方法を取る事が結果としてエッジの不確実な判断を支える事にもなるのだとラークは信じている。

一人で多数を相手取る事を得意とする、神速の剣士。

敵陣営

レスパー・シビル

性別：男性

年齢：26才

「構わない、俺は貴族に復讐さえできればそれで良い」

序盤アキと協力していた、スプラウツとジェイン・リュウゲンを繋ぐ男。

スプラウツ側の人間ではあるが、フレットやクロウを始めとしたセブンクローバーズとは折り合いが悪く、リュウゲンの事も快く思っていない。しかし、アキにだけは唯一親身に接し、肉親のリュウゲンに頼れない彼女にとって唯一頼れる存在だった。

ジェイン・リュウゲン

「宝珠を渡せ、デイエルアーク」

性別：男性

年齢：49才

タリア・キサラギと共にアクシズⅡワンド王国の国王を支える宮宰だが、陰で孤児を集めてスプラウツを組織し自分に反対する者を葬り

強引に開戦を推し進める。エッジ達とセオニア国王の行動によって
追い詰められ、火の宝珠を奪取するという行動に出た。

スプラウツ・セブンクローバーズ

『巖岩』

「この身はリュウゲン様の為に」

名前：バルロ

武器：錬成手甲「岩堵」

特化属性：地

才能：観察と経験による弱点の看破

スプラウツの子供達の師にして統制者の老人。子供達を道具の様に扱い、リュウゲンの為に忠誠を尽くし戦い続ける。

地の防御術と、策略でエッジ達を追い詰める。

『爪雷』

「立てよ！戦えよ！死ぬ気で、俺と！」

名前：フレット

武器：専雷爪「スペシャライジング」

特化属性：雷

才能：『混血児』としての能力

エッジと同じくシンの一族の血を引いた『混血児』。その能力から
家族に捨てられ、持って生まれた才能のままスプラウツで育つ。

しかし、彼はそれでも世界を恨む事は無くただ自らの望むままに戦
いと殺戮を楽しみ続ける。世界もまた彼がどうなろうと気にしな
かった様に。

術士でありながらラクと同等クラスの前衛としての能力を備え
る七人中最強の単独戦闘能力を誇り、エッジと同じ雷属性を得意とす
る。

『紅蓮』

「何も無かったからそれに固執した……でも、違う！私は、」

名前：セルファイ

武器：鞭、炎熱鉱石えんねつこうせき

特化属性：火

才能：感知

火属性の深術を得意とする深術士の少女。自分の能力に誇りを持ち、フレットを始めとした優秀な術士に敵意を向けていたが、火山での出来事以降彼との関係に若干の変化が生まれる。

唯一上級深術を詠唱破棄する事が可能で、宝珠の力を持つクロウを除けば術の攻撃力だけなら幹部中で最も高い。

『流連』りゅううれん

「くそつ、くそつ、クソオオオ！もつと強くなりたい、死にたくない、戦いたくない！」

名前：レパート

武器：？

特化属性：風

才能：なし（武器との関係あり）

前任者の穴を埋める為に急場しのぎで空座についた二代目。理由はどうあれ選ばれた精鋭に入れた事を喜んでおり、クローバース最年少のルオンに張り合う様子も見られる。

『弧氷』こひょう

「僕は……」

名前：ルオン

武器：弓

特化属性：氷

才能：『爪雷』そうらいには劣るもの高い身体能力、狙撃

レインという少女と、クロウ、三人で兄弟の様に育った白髪の少年。元々は口数の少ない優しい性格であり、人を殺すことに罪悪感を持っていなかったクロウに初めて疑問を投げかけ彼女の人格形成に多大な影響を与えた。目の前で実の姉同然のレインを亡くしたショック

で感情を失い、冷徹な射手となる。

クロウは彼と戦う事に強い抵抗を持っており、過去二度の戦いでも本気を出せずにいる。

幹部七人中最も遠距離の戦闘を得意とする。

『純白』
じゆんぱく

「私達家族だったじゃない。ねえ、クロウ……」

名前：ネイデール

武器：??

特化属性：光

才能：??

光属性の深術を操る女性。一歩間違えれば反抗的になる子供も多いセブクロローバースの中で、数少ない成人としてバルロと共にスプラウツという組織を動かしている。深術士が危険視される現状を理解しており「スプラウツの外の世界を子供達に見せるくらいなら痛み無く自らの手で葬る」という歪んだ思考回路をしている。痛みの有無に固執し、なるべく痛みの無い殺し方を追い求める。

「人間の力のみでの中級以上の詠唱破棄」をして見せるなどその実力は底が知れない。

その他の人物

タリア・キサラギ

「お前たちが無事で居てくれれば、私はそれで」

性別：男

年齢：42才

ジェイン・リュウゲンと共に国王を支える宮宰、リュウゲンの政敵である彼の存在が辛うじて彼の暴走を押し止めている。リュウゲンはキサラギの妨害を受けず直接の手足として使える組織としてスプラウツを組織した。

タリア・リヨウカ

「貴方は私が止める……私と共にここで死になさい、ジェイン・アキ！」

性別：女

武器：『宵の地衣』

年齢：20才

タリア・キサラギの娘。政敵の娘であるジェイン・アキと敵対する一方で、海上都市で協力して以降エツジ個人には幾度か力を貸し、彼の頼みから一度はアキの王都脱出を手助けした。

アキ同様、職人の手からなる衣型の武器『宵の地衣』を蜘蛛の脚のように伸ばし、「詠技」も同様に扱い戦う。

ブレイド・アズライト

「全てを守る事など人には出来ない。だから、俺は自分の部下を精一杯守る」

性別：男

年齢：21歳

エツジの兄。父親に付いていった為、彼の姓であるアズライトを名乗っている。

ジェイン・リュウゲンに推されて第三師団長の地位に付く。

かつて「天才」と呼ばれた騎士ラークに師事した上で、それに自身の深術の才能を組み合わせる事で独自の剣技へと昇華させており、現王国最強の騎士の呼び声も高い。「千の太刀筋のアズライト」の異名を持つ。

エツジと母をトレンツの村に置いて来た事でエツジが最後の家族を目の前で亡くして記憶喪失になってしまった事に負い目を感じている。

が、その感情から一度は捕らえたエツジを取り逃がす結果を出してしまっており、失敗の代償に『命令刻印術式』を埋め込まれた彼は再び弟の前に立ちふさがる。

決して国を裏切らない冷徹な敵となって。

エッジのスタイルを更に成長させたかのような剣技と深術を組み合わせた技を使う。

ハーデイロン・アズライト

「エッジ、あの娘は悪魔だ」

性別：男

年齢：43歳

エッジとブレイドの父親。体内に埋め込んで機能する術式の研究をしており、ブレイドに『命令刻印術式』を埋め込む役割を買って出た。仕事の為に王都に移り住む際、妻とエッジをトレンツの漁村に置いて来た事を後悔しており、無理を重ねがちな兄弟の身を案じている。

指名手配される以前からクロウの事を知っている。

ジード・カルシート

「その力で救える命があるのに、何もしないでいることなんて俺には出来ない」

性別：男

年齢：102歳（外見年齢17、8歳）

ラークと同じ身の一族の青年。

見守るだけで人々を守ろうとしない一族に反発し、闇の宝珠をイクスフェントからアエスラングへ渡した張本人。

その際、ラークによつて殺されている。

ボブ・ヘイム

「エッジ君、ここは君の家だ。どれだけ離れても、ここはずっと」

性別：男

年齢：55歳

アクシズIIワンド王国の南東の端、漁村トレンツの自警団に所属する男性。

母親を亡くし、家族がいなかったエッジの育ての親の様な存在。

漆黒の翼

グローリー

サッド

バッド

賞金稼ぎ三人組。

序盤でエツジ達を襲った。

レイン

性別：女

年齢：8歳（六年前）

ルオン、クロウと三人で共にスプラウツに居た少女。

同時期にスプラウツに連れて来られ、同じ白髪のルオンにとっては姉の様な存在だった。

カトマス殲滅作戦時に、クロウの術を暴走させたフレットにより命を落とす。

ハク

性別：女

年齢：9歳（六年前）

中央大陸のシントリアの特権階級に多く見られる黒髪の民族の少女。同じ民族ではあるが、彼女達は王都から離れ人里はなれてひっそりと暮らしていた。

一時的にスプラウツを脱走したクロウと姉妹の様に心を通わせるが、ラーヴァンの力がクロウの制御を超えて暴走した事で村の人間全員と共に消えた。彼女が最後に放った「化け物」という拒絶の言葉はクロウの中にトラウマとして深く残っている。

第五十六話 焼失する街

王都シントリアの貴族街、タリア邸。

当主のタリア・キサラギは娘のリョウカに数ヶ月ぶりの安堵の笑みを見せていた。

「先日の脱走騒ぎの時、よくやってくれた……と、言わざるを得ないな。正直あの時の行動には反対だったが」

「お父様は心配性が過ぎるのよ、私だつてもう子供じゃないんだから……でも、まだ油断できないわ。この状況でレーシア大陸に自ら出向くなんて、何も企んでないとは思えない」

娘の言葉に、キサラギは笑った。

「心配性なのはお前もだろう、あの一件でジエイン家の支持者も減り世論も厳しくなった。そうそう簡単には動けない筈。いずれにしろ、全ては彼が戻ってきてからだ……お前は安心して買い物にでも行ってくると良い」

「じゃあ、そうさせて貰うわ」

恭しく父にお辞儀してリョウカは外へ出て行くこうとして、ふと思いつ出したように立ち止まった。

「……大分変わったわね、お父様。私達にお見合をさせようとしていたあの頃とは大違い」

リョウカの表情は穏やかだったが、キサラギは申し訳無さそうだった。

「いや、あんな事が無ければ気付きもしなかった、駄目な父親だよ私は……トウカにも、もっと自由にさせてやるべきだった」

「大丈夫その気持ちはきつと伝わるわ、あの子にも」

励ますように明るく言つて、リョウカは父に手を振って家を出た。

アクシズⅡワンド王国、王都シントリア北東のファマグス港近郊の平地。

そこに黒い巨鳥が風を巻き起こしながらも静かに着地し、空気に溶ける様に消える。

「急ごう、あの船馬鹿みたいに速くてこの港までは追えたけどあいつらもう王都に向かっている。ここからは徒歩で行くしかないから――って、何でもみんな寝てるのよ」

クロウが早口に言いながら仲間達を振り返り、へたり込んでいる彼らを見て眉をしかめる。

「……振り落とされてこっちはマジで死ぬかと思っただぞ」

「それは、空中からいきなり自由落下させられたりしたら誰だって酔うだろ……クロウ」

尾に掴まったままラーヴアンが飛び立って落ちかけたクリフと共に、エッジも抗議した。

が、クロウは事も無げに答える。

「一回空中でラーヴアン分解して、クリフの下に実体化させただけじゃない。アレやってなかったらそいつ死んでるわよ」

「……せめて、やる前に一度言ってください」

アキが青い顔で俯いたまま言い、リアトリスも同意する。

「私夢に出そう……いきなり支えが無くなって、下が全部海になって……落ちて」

ダウンした仲間達の中で一番早く立ち直ったラークが、青い顔のまま状況を整理する。

「あの船は人口の擬珠を積んだ最新型の船だった、普及してる数が少ないから乗れる人間は限られる」

エッジは話を聞きながら海上都市で自分とリョウカが乗った船の事を思い出した。

「恐らく乗っていたのはジェイン・リュウゲン本人だ。宝珠も一緒だとすれば安全を考えてすぐには動けない筈」

クロウはラークの言葉によく分からないという顔をする。

「指示出す奴と、実働部隊のスプラウツが一緒なんだからいつ動き出してもおかしくないんじゃないの?」

その疑問には、リアトリスが答えた。

「宝珠は人間が扱える様なものじゃないよ、クロウが持つてるのは欠片だけ……そのものなんて普通の術士が使おうとしたら制御でき

ずに暴走する」

「じゃあもし、あいつらがそれを知らずに使おうとしたら……」

エツジの言葉の後をラークが引き取る。

「ああ、後を追ってる僕ら共々みんな終わりだね——ここから先は命がけだ、カンデラス火山の宝珠の事を知ってたのと同様に、ジェイン・リュウゲンがその危険性も理解している事を祈るしかない」

「それはそれで、もっと悪いけど」

クロウの言葉と共に、全員何とか身を起こす。

どうなるとしても、エツジ達には既に後を追う以外の選択肢は無かった。

シントリア中心部、王城付近の物陰に『巖岩』のバルロと、火鼠の衣に包まれた火の宝珠シーブレイムスを持つ子供、そして『弧氷』のルオンと、スプラウツの活動を補助する銀髪青年シビルが居た。

ジェイン・リュウゲンや他の護衛をしていた子供達の姿は無く、その場に残ろうとしているのはルオンとシビルだけだった。

バルロがルオンに命令を出す。

「時間までそれに触らずシビルの指示を待て、術を始めたら可能な限り範囲をコントロールしろ」

表情の無いルオンは無言で頷き、それから老人はシビルの方に向き直り尋ねる。

「ルオンを使うのは痛手だが仕方ない。リュウゲン様の直の命令だ、失敗は許されない。見届けるお前にも命を賭けてもらうことになるが、それでも良いのか？」

シビルは、ただ赤い布に包まれた宝珠を食い入るように見つめていた。

「構わない、俺は貴族に復讐さえできればそれで良い」

彼の従うリュウゲンもまた貴族であり、バルロはその発言をした青年を睨んだが彼は気付かなかった。バルロは宝珠を運んできた子供を下がらせる。

「まあ、貴様が納得するのならそれで良い。もう会うことも無いかも

しれんがな」

青年は答えなかった。無言の二人を置いてバル口達はその薄暗い路地を後にする。

(こんな街、記憶ごと消えてしまえば良い)

シビルはそう願いながら、憑かれた様に時間になるのを待ち続けた。

《王都 シントリア》

エッジ達一行は、門が見える所まで来て足を止める。

「見張りの兵をどうする？無理矢理突破するにしても、ある程度宝珠の位置が特定出来てからでない」と宝珠を取り返す前に捕まる」

エッジの懸念に、クロウが応える。

「私が霧で探す、どの道ラーヴァンで無理矢理突破するなら同じ事でしょう」

しかし、飛び出しかけるクロウをリアトリスが止める。

「待つて、宝珠そのものならそれほど移動しなくても私が感知できる。ラークと私が先に行くから、みんなはここで——」

不意にリアトリスが口を噤む。

彼女で無くとも全員が気付いた。

王都の壁の向こうから発せられたにもかかわらず、間近に熱波を感じる様なその異常なデュープスの波を。

買い物途中で、リョウカはふと一軒の菓子屋の前で足を止めた。

シントリア特有の文化を色濃く残した「和菓子」と呼ばれる店の前で、古くからある老舗だ。

彼女の父親はこの菓子を好んでいたが、彼女自身はあまり好きになれなかった。

(ああ、でも……そういえばあの子も好きだったわね)

何となく、彼女はその店に足を向ける。

二人が好きなものなら、或いはいつか自分もその良さに気付く日が来るのではないかと、そんな小さな希望を抱いて。

薄暗い路地の壁に、火山の時と同じ赤い光が反射する。

宝珠を手にした白髪の少年の、感情を失った筈の目が大きく見開かれる。

その目は何も映しておらず、その口は声にならない叫びをあげた。

小さな赤い筋がシントリアの中心から空へと伸び、ゆっくりゆっくり下へと落ちた。

まるで花火の燃えかすの様なそれは、ゆらゆらと漂いながら小さな欠片へと変わり、王城へと落下した一つはその屋根を音も無くバターの様に溶かした。

無数の炎の欠片が、同じ様に街中に落ち、そして、

落下地点は、消滅した。

「これ、宝珠の……」

エッジが呟く。

見上げるほど高い城壁の外からでも、エッジ達には炎が蛇の様に荒れ狂うのが見えた。

その一つが尖塔と接触し、塔は雪のようにあっけなく溶けて見えなくなる。

壁に居た見張りの騎士達も次々に街の中へ走るか、外へ逃げるかして持ち場を離れ始める。

それを見たクロウがラーヴァンを実体化させ、城壁の上へ向けて上昇する。

「待て、クロウ！君が下手に突っ込んで万が一の事があつたら——」
「宝珠を止めればこれは止まるんでしょ？今なら中心もすぐに分かる筈」

ラークが叫ぶも、クロウは止まらない。仕方なく仲間達も門へと走る。

既に逃げる人々の為に門は開け放たれていた。

内部は、想像を絶する光景だった。

クロウも思わず下に降り、その光景を呆然と眺めている。

火の宝珠の力が振るわれて間もないにも関わらず、目の前はひどく開けていた。

整然としていた町並みは失われ炎の蛇が一つうねる度、拭き取ったようにそこにあつた全てが無くなっていき、響き渡る悲鳴が目に見えて数を減らしていく。

あちこちから火の手が上がり、一瞬では何処が中心かも分からない。

壁の内部は炎の赤一色で彩られ、まるで地獄を覗き込んでいる様な錯覚を覚える世界だった。

「何で……っ……、自分の国だよ？戦争の勝利の為ですらない、こんな……こんな、ただの」

リアトリスが自分の杖を強く握りしめる。

「どういう事だよ、こんな事何の意味が」

セオニア王国の味方であるクリフも信じられない様子で街を見つめる。

全員がショックで一瞬立ち尽くす中、アキが一番最初に我に振り返るの北部へ目を向けた。

「貴族街は……父上！」

そつちにまだ残っている家があるのを見ると、アキは突然走り出す。

「父上って、今あんな奴放っておきなよ！これ引き起こしたのだからその父上でしょ？」

クロウの言葉にアキは首を横に振る。

「違う、そうじゃないんです！私……私」

「アキー！」

仲間の制止を振り切って、炎の蛇が残した余波の燻る貴族街へアキは走り去った。

クロウは舌打ちして、街中を必死に観察する。

「あそここの火の手が一番多い……これを発動させてる術士を殺せば被害は止められる！」

「待て、いくらクロウでもそんなの無茶だ！」

飛び出していくラーヴアンに辛うじてエツジが飛び乗り、二人は炎の中心に向かって飛んで行く。

止めようとするラーク達を置いて。

アキは一人走った、よく知る道がどれだけ形を変えていても。

そこにあつたものが何も無くなつていても、無意識に何度も何度も辿つていた道は忘れる筈が無かつた。

ただただ、間に合わないのではないかという考えが彼女の頭を埋め尽くし、時折足をなめる炎の熱さも忘れていた。

ジェイン邸の家屋が半壊しているのを横目に、アキは更に走った。目的地の周辺は比較的無事な家が多かつた、形が残つているという意味では。

嫌な想像を振り払いながらアキは目的の場所に辿り着き、既にその家が火に包まれているのを見て熱に浮かされた様にその中へと足を進めた。

タリア邸、本来なら多くの手伝いの人間と当主キサラギ、娘のリヨウカが居た筈の空間には誰も居なかつた。

玄関ホール、そこから続く広い階段、長く端まで見通せる廊下、ただ爆ぜる木の音と舞い散る灰が充満しているだけだ。

その光景に、逆にアキは軽い安心感を覚える。

誰も居ないなら、犠牲者も居ない。

口元を服で押さえながら、行動の無意味さを恥じてアキは入り口へと踵を返した。

冷静になつてみれば何と愚かな行動だつたのだろうとアキは思った。

誰も居ない空き家に危険を冒してまで飛び込んで――

(誰も……いない?)

ぞわりとアキの背に悪寒が走る。

もし、逃げたのではなく初めから誰も居なかつたのだとしたら?

タリア・キサラギは稀にそうした行動を取る。何か重要な仕事を終え、娘と家族水入らずで休日を過ごす時などに使用人全てに暇を出

す。

(エツジさんとクロウさんの脱走の件で、ジエイン・リュウゲンの企みを阻止したと思って……)

嫌な想像は止まらなかった。

アキは全速力で階段を登り、奥のキサラギの書斎へ向かった。

熱くなった金属のノブを無理矢理回し、中を覗き込む。

「父上!!」

中には落ちてきた梁の下敷きになり、うつ伏せに倒れる男性の姿があった。

アキはその側に駆け寄り、意識を確かめようとして彼の身体に触り、

自分が間に合わなかった事を悟った。

「……リュウカ? 逃げなさい、お前は」

唇を噛んで、アキは謝った。

「父上……私は、」

その声に、キサラギは伏せていた顔を上げる。

辛うじてアキの顔を映したその瞳が驚きに見開かれる。

「トウカ? お前……そうか、お前は無事だったか」

そして、キサラギは苦しそうだった表情を和らげて微笑む。

「ああ、良かった……お前たちが無事で居てくれれば、私はそれで……」

「違う、違うんです……私は、父上に、謝らなければならない事が」

アキが握った父の手から急速に力が抜けていく。

「私は、ただ、あなたに——!」

「大丈夫だよ、トウカ。お前達姉妹ならきつと……」

驚くほど安らかな表情で、タリア・キサラギはその瞳を閉じた。

「待って、待って下さい! ごめんなさい、私は」

必死に、直前までキサラギだったものにしがみ付きながら泣くアキの背後で、扉が軋んだ。

アキは悲しみに顔を歪めたまま、背後を振り向きそこに一人の女性が立っている事に気付いた。

自分と同じ黒髪の、自分の『明の天傘』と対になる『宵の地衣』を纏い、自分と同じ様にいま父親を亡くした、実の姉が。

「お父様……何で」

リョウカは信じられないという様子で叫んだ。滅多に表に出さない感情を全てさらけ出して、ただの子供のように。

「何であんたがっ、『ジェイン・アキ』なのよ！トウカ!!」

自分が呼ぶ事をずっと封印してきた、妹の名前を。

世界観・用語解説3

「身」の一族、「心」の一族

太古の昔、二柱の神から宝珠と世界を守るべく力を与えられた二種族。

アエスラングの種族が大気と心を通わせ高い深術の適正を持つ「心」の一族。イクスフェントの種族が深術を使えない代わりに長い寿命と高い身体能力を持つ「身」の一族であり、両者の総称が「シン」の一族である。

二種族の能力が異なるのは「互いが手を取り合う事」を望んだアエスラングとイクスフェントの願いからであり、またそれぞれの差異に二柱の神の性質の違いを見て取ることが出来る。

『混血児』

身の一族と心の一族、そして人間の血が混ざった者の中に稀に現れる突然変異とも呼ぶべき存在。

高い深術の適正と身体能力、治癒能力を持ち、皮膚の異常で獣の様な体毛が発生する。個々の能力としては「心」や「身」の一族に劣るものの、戦闘に限れば総合的に両者を上回る能力を持つ。

世間一般には「獣の子」として認知され、モンスター等の血を引いたものと考えられて（※実際シンの一族の混血の者に体毛は存在しない為、先祖の中に本当にそれらの血が混じっている可能性はある）殆どが殺され、現代においてはその血筋はほぼ絶えている。

宝珠の「座」

狭義には六つの宝珠を安置すべき地点を指し、広義にはそこからのデイープスの流れを安定させるべくシンの一族によってその地点に作られた台座も含む。

宝珠はただ存在するだけでは機能せず、「座」に在ることで初めてデイープスの流れを通して二つの世界を繋ぐ。

地点ごとに二つの世界で対になっており火と風、水と地、光と闇の宝珠が対応している。その為、二つの世界の間のデイープスの流れによる影響はこれらの地点の周辺が特に強くなっている。

『明あけの天傘あまがさ』と『宵よいの地衣ちじろも』

同一の職人の手により作られた対となる武器。火鼠ひねずみの衣ころもと氷鼠ひねずみの衣ころもと呼ばれる特殊なモンスターの皮から作られており、デイープスの集束を手助けし並の武器とは比較にならない戦闘能力を持ち主に与える、詠技の使用も可能な武器。

タリア・キサラギが娘達の身を守るため姉妹に与えた。姉のリョウカが宵の地衣を、妹のトウカが明の天傘を所持し、タリア・トウカが出奔し『ジェイン・アキ』と名を変えた後も愛用し続ける。

本来姉妹での使用を想定されている為、二つが揃ってこそ真価を発揮する。

命令刻印術式

「他者に命令を聞かせる事」を目的として開発された深術を応用した技術の一つ。通常の深術はその都度術式を組み立てるのに対し、体内に成立した術式を埋め込む事で常時発動し続ける。

しかし、人間の精神はそう簡単に制御できるものではなく、現段階の技術では他人の行動を制御するところまでは至っていない。その為実際は「主が従者を任意のタイミングで殺す事が出来る」機能を持った爆弾の様なもの。

その経緯から忌まれた技術だったがジェイン・リュウゲンはそれを逆手にとり、処罰される寸前だったブレイド・アズライトに見せしめとしてこれを埋め込む事で自分の手駒として彼を獲得した。

ブレイドに埋め込まれたものはエッジとブレイドの父親によって改良されたものらしく、『そう簡単に爆発する事はない』とブレイドが発言している。

第五十七話 「秋」対「涼夏」

炎が、幼い日の思い出が詰まった屋敷を包んでいく。

リョウカは目の前の妹に、躊躇う事無く地のデイクスを集束して
硬質化した『宵の地衣』を叩きつけた。

「くっ!？」

アキの『明の天傘』がそれを辛うじて受け止め、『宵の地衣』から注
がれる冷気と『明の天傘』の熱波がぶつかり合う。

両者の激突はアキの武器が制した。リョウカは舌打ちしながら一
度距離を取り、四つだった布の先端を蜘蛛の脚の様に八つに分けて再
びアキとの距離を詰める。対人形態『車掛の型』、前回と違いリョウ
カは完全に本気だった。

「リョウカは『涼しい夏』、トウカは『冬の華』と書くんだ」

「どうして?」

「交互に来るものだから。二つで対になる様に、姉妹が一緒に居ら
れる様にお前達の母さんが付けてくれた名前だよ」

リョウカの視界の端で、名前の由来を父に聞いた暖炉が崩れてい
く。

(私は、この名前が好きだった)

「トウカは、どう思う?この名前」

「私も好き」

辛い時、二人がうずくまって一緒に話した階段が焼け落ちる。

(あれは嘘だったの?何で名前まで捨てたの?)

「蝶旋舞!」

「岩碎閃!」

リョウカが叩きつけた回転する風車の様な連撃が、アキの炎を纏つ
たスイングと正面からぶつかり金属音を立てながらリョウカの武器

が弾かれる。

(私だつて嫌いだった。私達の話なんか聞かないお父様が……だから、あなたもそれが嫌になつて出ていっただけなんだって思い込もうとした)

しかし、トウカが選んだ家はよりにもよつてタリア家の宿敵のジェイン家だった。守るべき国民を道具の様に扱い、利益の為に全てを利用する男ジェイン・リュウゲン。

まるで最初からその家の人間だったかの様に、アキはエツジやクロウの様な罪の無い人間まで巻き込んでジェイン・リュウゲンに忠実であり続けた。

彼の策で王都に放たれた炎が、家の全てを飲み込んでいく。

「伸閃衝！」

「裂駆閃」

リョウカが突き出した右手から勢いよく飛び出した布が、アキの突進に打ち負けて逸れる。炎を操る『明の天傘』と氷を操る『宵の地衣』炎の中ではその力の差は一方的だった。

それでも、

「まだよー詠技……」

リョウカは武器に氷のデーパースを集束し、溜めを作つて必殺の一撃を放とうとする。

アキもそれを見て同じように武器に火のデーパースを集束する。

(この家だけじゃない、このシントリアには私達と同じ様にたくさん
の家庭があつて……数えきれない人がいて、それを、それをジェイン
は焼き払つた！)

リョウカは止めなければならなかった。妹がこれ以上罪を犯す前に。

エツジの様な、明日の希望を信じて疑わない人間を巻き込む前に。
「貴方は私が止める……私と共にここで死になさい、ジェイン・アキ
！」

アキは思い出していた、自分がこの家を飛び出した時の事を。

(私達の話を何一つ聞いてくれない父が嫌だった、勝手に姉さんと自分の結婚相手まで決めようとして、全部全部縛ろうとして……私が居なくなれば、少しは思い知るんじゃないかって)
そんな子供じみた思いで家を飛び出したアキは、一人の青年に連れられて別な貴族の家に連れて行かれた。

「今までお前が生きてきた名など不要だ、タリア・トウカの名は捨てろ」

家出したアキが、娘として拾われて最初にジェイン・リュウゲンに言われたのはそれだった。

アキは「冬華」という名前は捨てられても、姉と繋がる季節の字だけは捨てられなかった。

「夏と冬、二人で一つ。お母様はロマンチストだったのね」

「同じ間隔で街に来るからなんて、素敵だと思うけど……」

対にはならなくなってもその絆を残したくて、彼女は自分に「秋」という名前を付けた。

「氷河！」
ひょうが

「灼炎蓮華！」
しゃくえんれんげ

火事の中ですら氷柱を発生させる程の冷気が平時を遥かに上回るアキの炎によって霧散し、詠技同士の勝負もまたアキの武器が制する。

「あなたのファミリーネームは何？」

「ジェイン、です」

クロウと初めて会った時、アキは名前を聞かれて誤魔化す事が出来なかった。

自分ではどうしようもない生まれつきの名前では無く、『ジェイン』

は自分の意思で選んだ名前だったから。

(この名前を選んだのは自分、だからその責任から逃げちゃいけないんだと思って……私は、自分の責任を果たしてるつもりで……取り返しのつかない事をした)

火の宝珠から放たれた炎は大気中の火のデンプスの濃度を引き上げ、それに加え『宵』と『明』、対になる武器が揃った事で力を増した『明の天傘』の力は既にアキが制御しきれない域に達しつつあった。(武器同士の間が共鳴が始まった、もう抑えきれない……！)

使い手の意思とは無関係に『明の天傘』は火を吹き上げリョウカの攻撃を尽く退けた。しかし、この環境下では力の差は明らかにも関わらず、リョウカは諦める事なく何度も向かってくる。

その間にも刻一刻と屋敷は確実に崩壊していく。
父親の本棚が盛大な音を立てて倒れた。

「もうやめて下さい、リョウカさん！このままじゃ、貴女も助かりません！」

「構わない、それであなたを止められるなら。それだけがこの悲劇を止められなかった私のせめてもの罪滅ぼしよ！」

リョウカは再び距離を詰めて、手数之差でアキへと攻撃を仕掛ける。

アキはそれを吹き飛ばす様にしてまとめて払いのけた。

「話を聞いて下さい、私は貴女と戦うつもりは無いんです！」

「それは生きて帰せって事でしよう？聞けない相談ね」

無理矢理しがみ付く様にして距離を詰め、八本に分かれた『宵の地衣』全てでアキと物理的な力で押し合うリョウカ。

アキは顔を歪めた。決着が遅れば遅れる程、互いの命のかけ橋が秒単位で落ちていく。

何処かから響いてくる振動が階段の崩れたもので無いのを祈りながら、アキは決断を迫られていた。

(これ以上は引き延ばせない、私は……私はこの人まで踏み越えなきゃいけないの?)

すぐ間近にある姉の存在を感じながらアキは歯を食いしばり、初め

て自分の意思で『明の天傘』の力を解放した。

推進力を得た彼女の武器は、その反撃を予想していなかったリョウカの身体を容易く後ろへ吹き飛ばす。

「くっ……！」

そこで、リョウカは気付いた。

空間に舞う火の粉が火事によるものだけでなく、『明の天傘』から花びらの様に舞っているものである事を。

「別れは必定、舞い散るは命の火……手向けに受けよ、惜別の華」

花びらが渦を巻き、傘を中心に咲く。

アキは声を震わせながら左手を武器に添え、右足を引いて武器を構えた。

「秘奥、義ツ——散華龍炎槍！」

アキが突きを繰り出し、傘から噴出した火はまるで巨大な炎の槍の様に一直線にリョウカを直撃する。

リョウカは通常地のデイープスで操る『宵の地衣』を氷のデイープスで硬化化させ、自身の前面に重ねて必死に防御する。

「あ、ああああああっ!!」

炎の向こうから聞こえる姉の悲鳴にアキは固く目を瞑る。

『明の天傘』から放たれ続ける炎の奔流は一瞬のものでも、とてつもなく長くリョウカを攻撃している様にアキは感じた。

炎が止むとその余波は延長線上にあった壁に穴を空けていた。

リョウカはその場に崩れ落ちる。

まだ彼女は生きていた。

アキはどうしても、実の姉に全力を出す事は出来なかった。

(お願いです、もう立たないで下さい)

しかし、アキの願いとは裏腹に火傷を負いながらもリョウカは、呪の様に眩きながら震える手で立ち上がるとうとする。

「ま、だよ……まだ……」

その頭上で、梁が裂けた。

アキの脳裏にその下敷きになって息絶えた父の姿が蘇る。

梁の落下が始まるより前に、アキは反射的に飛び出していた。

「姉さん——!!」

「ぐっ!この……」

リヨウカは後ろへ大きく突き飛ばされ悪態を吐きながら立ち上がり、武器を構えて左右へ視線を走らせた。しかし、アキが攻撃を仕掛けてくる気配は無い。

リヨウカは困惑した。

(今、何が? 『明の天傘』の秘奥義を受けて私は、意識が遠くなりかけて……それから)

何か叫びと、頭上から樹の裂ける様な音が聞こえたのを思い出し、冷静になってようやく状況を理解する。

アキは自分の足元に居た。

上から降ってきた梁に脚を挟まれて無理な角度で倒れ、頭を打ったのだろう。気絶し完全に動けなくなっていた。

「……何だよ、私はあんたを今殺そうとしてたのよ?」

家を出てからアキは一度もリヨウカの事を姉とは呼ばなかった。

「結局、姉妹揃って詰まらない意地張ってただけだったっていうの……? ねえ、トウカ」

アキは答えなかった。

黙って彼女を見下ろすリヨウカの周りで、タリア邸は最後の悲鳴をあげ始めていた。

「このっ、開きなさいよ!」

『宵の地衣』で妹を包み、『明の天傘』で力任せに塞がった扉を吹き飛ばしてリヨウカは外に出た。しかし、その身は既に満身創痍であり、ふらふらとした足取りは二人分の体重を支えて歩くのでやっとだった。

リヨウカは辺りを見回し、逃げ道を確認して自嘲気味に笑う。

「……まあ、当然よね。あれだけ無駄に時間を浪費したんだから」

南への道は通れる、しかしここは街の北部。そっちは逃げ場のない中心部だ。

一番近い出口、北門への道は炎の壁で塞がっていた。

「ここさえ越えられれば或いは脱出できたかもしれないのにね」

が、リヨウカはそこまで諦めの良い性格では無かった。

意識を失ったままの妹を揺さぶって、起こそうとする。

彼女なら飛んでこの位の炎は超えて行けるからだ。

「起きなさい、トウカ！」

しかし、アキは目を覚まさない。リヨウカは目を細めてため息をつくと、炎の壁に近付いた。

(……なるべく早く目を覚ましなさいよ？この布で守れる時間なんてそんなに長く無いんだから)

無防備な妹の顔を見て軽い微笑みを浮かべると、リヨウカは彼女を自分の『宵の地衣』ごと炎の壁の向こう側に投げようと力を込める。

と、そのリヨウカの腰を抱える様にして、誰かが炎の向こうへと放り投げた。リヨウカは慌ててアキを保護していた布のいくつかを解いて、手を地面に付く様に布を操作して何とか着地する。

リヨウカは何が起きたのかと、今自分が居た炎の壁の向こうに目を凝らす。

そこにはひどくボロボロな状態の、みすぼらしい恰好の銀髪の男が立っていた。

元々着ていた服がそうだったのか、それとも火事の中でそうなったのかは判別がつかない。

「誰？何でこんな事を——」

「お前がアキを嫌っていた事は知っている。だがそれでも実の姉だろう、年長者なら年下の姉妹（きょうだい）を守れ。どれだけ憎んでも、まだ生きているのだから」

リヨウカは値踏みする様に彼を睨み、同時に困惑の表情を浮かべた。

彼の周りにはもう、逃げ道が無かったからだ。

「走れ！そうしてる間にも道が塞がらない保証など何処にもない！」
不服そうな顔をしながらも、リョウカはその見ず知らずの男の言葉に従う。

「最後に聞かせなさい！どうしてこんな事を？」

走りながら、リョウカは大声で尋ね、銀髪の男——シビルは呟いた。
「兄として、だ」

炎に包まれていく彼の、最期の言葉の意味は誰にも分からなかった。

幕間の外伝く過ぎいく秋雨の記憶く

俺は神なんて信じない。

それが与えた王権だか、特権だか知らないがそんなものに何の権利があるというのか。

「くそつ、許さない……何が、何が謝罪だ、罪滅ぼしだ！そんな事で、」
雨が王都の石畳に降り注いでいた。家路を急ぐ人々が更に足を早めて俺の側から散っていく。

俺は俺から逃げる者にも、ずぶ濡れの身体に滝の様に振り続ける雨にも、何も感じなかった。

あるのはただ、あの男への怒り。求めるのは復讐だけ。

そんな俺の前から、逃げない人影があつた。

俺は目前まで迫っても微動だにしない相手に声をかけた。

「お前、怖くないのか」

相手はそこでようやく顔を上げる。

自分と同じ様にずぶ濡れの少女は、そこで初めてこちらの事に気付いたかの様にひどくぼんやりとした表情をしていた。

「……逃げるところが私には無い」

そう口にした彼女の髪は黒髪だった。

国全体では珍しくても、この王都シントリアで黒髪の人間自体は珍しくない。

何故なら、この街の貴族の大半は黒髪だったからだ。

(こいつ、確かタリア家の?)

相手が貴族の娘である事に気付いて俺は頭の中で冷静に目の前の状況を整理し、何か使える事は無いかと考えた。

「立てるか?行く所が無いなら俺に付いて来い」

差し伸べられた手に戸惑いながらも、その少女は恐る恐る手を伸ばして、

男の——シビルの手を掴んだ。

王都シントリア、ジェイン邸。

「何だ騒々しい」

次々屋敷内を玄関ホールへ走る者達の足音に耐えかねて、当主のジエイン・リュウゲンは苛立たしげに騒ぎの元へ顔を出す。

玄関ホールには無数の使用人と、屋敷の外を守っていた専属の警備まで集まって、強行に進入してきたであろう、ずぶ濡れの銀髪の青年を止めていた。

「何をしていた、そもそも家に入れないのが仕事だろうに」

そう毒づいてリュウゲンはふと、彼らは奥へ入ろうとする青年を止めているだけで追い返そうとしていない事に気付いた。不審に思ったりリュウゲンが更に眼帯をしていない右目で観察すると、青年の後ろにひどく大人しい黒髪の少女の姿を見つけて微かに驚きを露にする。

「……その男、何の用だ」

家の主に直接声をかけられた青年は抵抗するのをやめ、血走った目をリュウゲンに向ける。

「この子を保護して欲しい、あんたにとっても悪い話じゃないはずだ」
「それと引き換えに生活の足しを得たい、か」

家を持たない貧民が自らの家に入ってきたのかと考えた隻眼の家主はため息をつく。

しかし、青年の答えは予想外だった。

「違う、俺を雇って欲しい」

その言葉をリュウゲンは鼻で笑った。

「何？ 貴様の様な学も無い奴にやれる仕事など無い。その娘は預かって金をやるから失せろ」

青年は動かなかった。

「金なら要らない、雑用だろうが何だろうが何でもする。どんな事でも」

それを聞いて初めて、リュウゲンは顔色を変えた。面白がる様に確認する。

「何でも……そう言ったな？ その覚悟本気だろうな」

頷いた青年の怒りのこもった瞳を見て、リュウゲンは哄笑した。

シビルと、貴族の少女はそこで別れた。

少女はほつとする訳でも、不安そうにする訳でもなく黙って成り行きに任せていた。

「貴様は、キサラギの娘だな？」

額に厳しく皺を刻んだまま、リュウゲンは政敵の娘を睨んだ。

「タリア・トウカです」

顔を上げずに、小さな声で少女は答える。

「名前などどうでも良い、ここに保護を求めてくるという意味は理解しているだろう……今までお前が生きてきた名など不要だ、タリア・トウカの名は捨てろ」

少女は黙って頭を下げ、その言葉に恭順の意を示す。俯いた彼女の顔には表情が欠如していた。

シビルの弟は頭が良かった。

アクシズⅡワンド王国の田舎に居るには勿体ないと誰もが口にする秀才で、狭い村の中で彼はいつも可愛がられていた。

生憎と兄である彼はあまり頭が良くは無く、弟が生まれてその才能を發揮するようになってからはとかく比較されがちだった。

しかし、シビルが弟を疎ましく思った事は無い。

勿論比較されるのは不愉快で彼はそんな事を言う人間を嫌っていたが、それで何の責任も無い弟に当たるのは自分の事をまともに見ようとしないう人間達と同類になる様でシビルは嫌だった。

弟もそんな兄を慕っていた。

いつかそんな弟を王都シントリアの学校に入れるのが彼の夢で、それだけが、誰にも評価されない彼の唯一の心の支えだった。

「どこへ連れて行く気だ、こんな道を外れた山奥に連れて来て」

「お前の一つ目の仕事場だ」

「という事は、まだ他にもあるのか」

汚れるに任せていた服を着替えさせられたシビルがため息交じりに言った言葉に、案内していた男が眉をしかめる。

「お前、『何でもする』と言ったそうだが？」

「分かっている、何の説明も無くて先が見えない事にうんざりしただけだ」

案内する男は背の高い草に足を取られかけながら舌打ちする。

「愚痴が多いヤツだ」

王都から北へ歩き続け、辿り着いたのは白い——少なくとも元は白かったであろう無機質な建物だった。

窓が無い奇妙な造りで、貴族の別荘にしてはあまりに外観に整備が行き届いておらず漆喰が剥がれている所も目立つ。

周囲に街は無く、交通の便も悪いこんな場所に何故ジエイン家はこんなものを作ったのかシビルには全く理解できなかった。

「開けるぞ」

まるで中に猛獣でもいるかの様な注意と共に扉が開かれる。

薄暗いホールが、二人を出迎えた。

窓が無い分なのか気密性が高いらしく空気が淀んでおり、入口の扉を閉めると中は無気味な程静まり返っていた。

と、いきなり物騒な金属音が二人の元に響いた。

(工場？いや、訓練所……か?)

目的の場所はその方向らしく、廊下を進むとシビルの疑問の正体はすぐに明らかになった。

しなやかな動きの背の高い一人の少年と、白髪交じりの老人が模擬戦を行っていた。

と、言っても二人が手にする武器は真正銘金属であり、布で覆われたりしておらずまともに当たればお互い怪我は必至だった。

しかも、——

「流連弾！」
りゅうれんだん

「ふん」

少年の指一本一本にはめられた指輪の周りを緑の風のデーパースが回転し、拳大まで成長するとそれは次々に遠心力のままに撃ちだされる。

『風』というにはあまりに強力な、砲弾の様な攻撃。

それを、対する老人は床から出現させた岩塊で防ぐ。

「深術?」

シビルはその光景に目を丸くする。

深術を使える人間は基本的に軍属がごく少数の傭兵位しか使えないもので、彼も実際に目にするのは初めてだった。

言い換えれば使えるだけでそれが仕事になる程の強力な武器だという事でもある。

「怯えるな、この建物内に居る人間は全て深術使いだぞ」

ここまで彼を案内して来た男の言葉に、シビルは戦慄した。

（建物全て……この大きさ全部に居るとしたら何人だ? 三十、四十——それ以上……?）

もしそうだとしたらそれはもはや「軍隊」と呼べる力に等しかった。シビルが立ちつくしている間に、二人の戦いは終わった様だった。どちらも怪我らしい怪我はしていない。

勝負というより、力や動きの確認をしていただけの様だった。

「識別名を持つ者として十分な力が付いてきたようだな、ルクター」

「まだ二人だ。四つ葉クローバーとしての名前なんて意味が無いんじゃないか」

戦いを終えた老人と、ルクターと呼ばれた少年はそう会話する。

穏やかな会話に反して、二人は互いを牽制する様に睨み合っていた。

「心配せずともじきにフレットも加わる事になる、資質で言うならクロウも文句は無い。この先成熟した子供が増えれば統率する側も相應の人数が必要になる」

「まだ戦いに出るのは俺だけの筈だ、他の子供は——」

「黙れ、他の奴らに実力が足りないからそうしているだけの事。使えるようになればお前以外の子供も戦わせる」

風を操る少年は不服そうに顔をしかめたが老人は一方的に会話を終わらせ、シビルに目を向けた。

「そいつか、シビルというのは」

老人に厳しい目で睨まれ言葉に詰まったシビルは、案内して来た男に小突かれる。

「おい、挨拶しろ」

「あ、ああ……レスパー・シビルです」

歯切れの悪いシビルの答えに老人の目はますますきつくなっていたが、元々期待していなかったのか鼻を鳴らすと彼に説明した。

「お前にもこれからこのスプラウツに居る子供の管理と、連絡役を手伝ってもらおう」

「スプラウツ？」

『植物の芽』だ、ちょうど良い名前だろう。もう一つの仕事もあるそうだが、それでこちらが疎かになる事の無い様にしろ」

もう一つの仕事、二つ目の時点で既に先行きが不安なシビルにその言葉は重くのしかかった。

(二つ目の仕事って、これかよ)

隣を歩く無言の少女——トウカに目を向けてシビルは内心溜息をついた。

(まあ、俺が連れて来たんだから当然と言えば当然か……)

二人はアクシズⅡワンド王国の王都シントリアの中心部を連れ立って歩き、貴族街を目指していた。

身なりを整えられたのもこの為かと、彼は納得する。

昼間からこんな大都会の真ん中を貴族が歩くなら、確かに汚い格好では人目を引く。

「トウカ、だったか。お前」

「アキです」

「はっ」

確かにうる覚えではあったものの、明らかに記憶と異なる名前を名乗られシビルは困惑する。

「タリア家の人間としての名は捨てろと言われました……今の私は、ジェイン・アキです」

返答を口にする彼女は彼と出会った日と同じ様に、死んだような目をしていった。

「そうか」

シビルは興味なさそうに返事して、改めて地図を確認した。

二人はアニハース家を目指していた。

彼はそれがどんな家なのか知らなかったが、ただリュウゲンの口ぶりから快く思っていない事は理解できた。

シビルもそんな事に興味は無い。

貴族は皆、ジェイン家の人間も含めて彼にとっては憎む対象でしか無かった。

「地図を渡すその家に指定した時間に行って挨拶して来い」

「挨拶って言われても……俺貴族のマナーなんて何も」

「必要ない、行けば分かる」

指示を出された時の事を思い出してシビルは改めて憂鬱になる。

何をどうしろというのか、彼には全くわからなかった。

その不安から落ち着かず、神経質なほどに何度も道順を確認していた為皮肉にも二人は迷うことなく真つ直ぐ目的地に着いてしまう。

そのまま指定された時間になるのを待って、二人は高い鉄柵の外側からその屋敷を眺める。

ジェイン邸が王都全体でも最も大きい屋敷であつた為二人とも屋敷の大きさには慣れてしまつていたが、一方でジェイン邸には鉄柵は無かつた。

「これどうやって入るんだ……お、おーい！」

困つた彼は躊躇いながらも屋敷に届く様に大声で呼びかける。

その横で、アキが門に付いていた小さな黒い鈴を鳴らす。

「それじゃ聞こえねえだろ」

「いえ、これは……家の中の鐘と深術で連動していますから、これだけで十分伝わります」

「連動？」

「地面の中を掘って地属性で接続するものと、風属性で窓などから伝達するものがある……聞いた事があります。変わった所では非効率ですが装飾目的の水属性の物も——」

「分かった、もう良い」

淡々と説明していたアキはシビルに遮られて再び口を閉ざした。アキの言ったとおりだったようで、いくら呼んでも出てこなかった手伝いの人間らしき人影が屋敷の中から二人の方へと歩いて近づいてくる。

「こんにちは、本日は特にお約束があるとは伺っておりませんがどういったご用件でしょうか」

「えーと、あ。この、こちらはジェイン家の娘のジェイン・アキで……」

しどろもどろに説明しながら、シビルは内心舌打ちする。

(何が『行けば分かる』だ、あの野郎……！)

相手の女性は努めて冷静に話を聞いていたが、シビルの方はそもそも明確な目的等最初から持っていない為説明する事など出来ない。

「リュウゲン様から挨拶する様に言われて来たんです……それでアキ様もお連れしたのでこのまま帰る訳には」

どうにか食い下がり、一応家紋を見せて彼女が本物であると理解してもらえた事で門を開けてもらう事が出来る。

しかし、ここから先本当に挨拶する事など無いシビルは、むしろ追いつ返された方が楽だとさえ思っていた。

と、何か違和感のある破砕音が屋敷の方から聞こえた。

その音に三人の間に緊張が走る。

「今の、カヅキ様のいらっしやる方から……私、安全を確かめに行かなければ」

そう口にするものの彼女の手は震え、足はすくんでいた。

護衛の為に雇われた訳ではないのだろう。

見兼ねたシビルは護衛として持っていた剣の柄を握りしめて、名乗り出た。

「俺が見てくる、あんたはここに居ろ」

「私も、行きます……」

アキは明らかにについて行きたいとは思っていない様子だったが、彼と離れてはいけないという義務感から張りつめた面持ちのままシビルの後に続く。

二人は手伝いの彼女の言葉から、二回で一番大きな部屋を目指す。幸いにして扉に鍵は掛かっていなかった。

扉を開くと嫌でもその異常が二人にも分かる。

整った部屋に似つかわしくない市場か何かの様な生臭い匂い、と何かが焼ける匂い。

そしてその匂いを放っている、この部屋の主だった男の姿。

「い、やあああああ！」

その光景にアキは目を見開いて悲鳴を上げる。

しかし、部屋の中に居たのは死体だけでは無かった。

フードをかぶった小さな人影が悲鳴に反応し、瞬く間にアキに肉薄してナイフを振り上げる。

その武器から微かな放電音と紫の光が走った。

「止めろフレット！その子は仲間だ！」

どこかシビルには聞き覚えのある声が響いた。

直後、部屋の中に居たもう一人のフードをかぶった少年の手から風の弾が放たれ、ナイフをアキに向けた青年を壁に縫いつける様に拘束する。

生きた風の枷は、拘束された小さな人影の服を激しく揺らし続ける。

「すまない、怖がらせたね——退くぞ、フレット」

「お前……スプラウツの」

風の弾を使った少年にシビルは見覚えがあった。

ルクター、とそう呼ばれていた実力者。

彼は急いで味方の拘束を解き、二人揃って窓から飛び降りていった。

殺されかけたアキはシビルに縋る様にしがみ付く。

シビルは二階から飛び降りた二人が無事なのか考える余裕も、アキの事を意識する余裕も無かった。

（部屋が荒らされてる……何だこれは、あいつら深術で人殺しやつてるのかよ）

アキの悲鳴を聞いて来たのか、アニハース家の手伝いの女性も慎重な足取りで現れる。

彼女も部屋の様子を確認して短い悲鳴を上げ、その場に崩れ落ちる。

「そんなカツキ様……これは、泥棒がやったのですか？……どうしてこんな」

荒らされた部屋の様子と、本気で涙を浮かべるアキの様子から彼女は微塵も二人を疑う事は無かった。

ただ、一人全てを理解したシビルは自分の頼まれた仕事の本当の意味を理解した。

(ジェイン・リユウゲン、俺達を囮に使ったのか。最初からこれを手伝わせる気で、情報が漏れない様に詳しい事伝えなかったのか)

自分の雇い主がどれだけ危険な人間か、そしてやはり憎むべき最低な貴族の一員である事をシビルはこの時ようやく理解した。

彼の弟の名前はアガスタ。

王都に来たその日、学校への入学が決まったその日の帰り道。

シビルの弟は速度を出し過ぎた貴族の馬車に命を奪われた。

その日から、シビルにとって貴族は全て憎むべき対象になった。

アニハース家の惨劇は結局物取り目的の強盗殺人人として処理された。

人が死ぬ現場を間近で見ってしまったからアキは前にもまして塞ぎ込み、口数が少ないというより恐怖で喋れないという様子に変わっていた。

(それで『何とかしろ』、か)

アキの世話係を任されていたシビルに自ずと仕事は回ってきた。

金は十分に渡されていた為、彼は半ば八つ当たりの様に意味も無く移動費を使いアクシズⅡワンド王国の最西端ともいべき海上都市ヴィツアナへとアキを連れだした。

水晶が彩る海上の都市は観光名所としても有名だったので許可は

あつさり下りた。

(正直これで何とかなるとは期待して無かったが……)

シビルの予想に反してアキはこの街に来てから目に見えて顔色が良くなっていた。

青い尖塔に映る細長く伸びた町の景色を興味深そうに見上げ、潮風に黒髪を躍らせる。

いつもより少しだけ明るい声で彼女はシビルに礼を言った。

「ありがとうございます、シビルさん。ここまで連れてきてくれて」

「大袈裟だな、貴族様はどこにだって好きな時に行ける金があっただろ」

彼の言葉にアキは目を伏せて首を横に振った。

「いいえ、私この街はおろか……王都から出たのも初めてです」

「何？」

シビルは疑う様に目を細める。

「タリア家に居た頃は家の外に出るのも家の中での生活の時間も全部決められていましたから自由な時間なんてどこにも無かったんです。だから今、すごく楽しいです」

青年の顔を見つめてアキは笑った。

「私、シビルさんのこと誤解してました。本当にありがとうございます」

その屈託のない笑顔に、シビルは今までの自分の行動を恥じた。

(そうか、こいつも貴族の——貴族の大人達に色んなものを奪われて……)

彼女のその姿はシビルの中で、弟の姿と重なった。

「誤解じゃない、俺はお前の思う様な人間じゃない」

アキは軽く首を傾げる。

「そんな事ありません、シビルさんは優しい人です」

疑う事を知らない様なその少女を見て、彼は貴族を憎んでも彼女だけは傷付けてはいけないと、そう心に誓った。

炎の中でシビルは目を覚ました。

(夢、ああ……そういえば、アキ達はちゃんと脱出できたのか?)

彼は辺りの光景を確認して現実に戻り、自分が柄にも無く過去の光景を思い出していた事に気付く。

既に彼の周囲は炎と黒い煙に包まれ逃げ場は無くなっていた。

彼とルオンが宝珠の力で王都に放った炎は大勢の人間を巻き込み、王城を消滅させ王都シントリアを壊滅させていた。

シビルの弟を奪った街を。

「はは、燃えろ……燃えろ全部、こんな街」

炎の中で咳き込みながら彼は自分を、貴族を、全てを嘲る様に笑った。

ひとしきり笑って、彼はその場に倒れこむ。

既に空気中の酸素はシビルから正常な呼吸を奪っていた。

(俺は結局復讐を捨てる事が出来なかった。でも、アキお前は違う。お前にはこれからの未来があるんだ……だから、生きろ。姉妹きょうだい一緒ならきつと……)

自分の復讐に焼かれた空を見上げて、彼はそこへ手を伸ばして問いかける。

「アガスタ……俺は、一つくらい兄らしい事が出来たか?」

銀髪の青年の姿は業火の中へと飲み込まれ、消えていった。

第五十八話 煉獄の炎

エッジとクロウが火の宝珠へと向かい、アキが走り去った後、残されたラーク、リアトリス、クリフの三人は仕方なく火から逃れ一旦安全な王都の外へ逃げようとしていた。

大分数の減った市民達と彼らを守る騎士達も何人かが三人と同じ街の外縁部へ辿り着き、共に門へと急ぐ。

「あと少しです、落ち着いて！」

「何なんですかこれは……セオニアが攻めて来たの？」

「お母さん……お兄ちゃん……」

「今は生き残る事だけを考えて下さい！速度を落さないで！」

と、脱出しようとする彼らの右側から視界を埋め尽くすほどの炎が、焼け野原となった大地の上をすべる様に迫ってきた。

「そんな事、させない！」

全員が飲み込まれると判断したリアトリスが、クリフとラークを守る様に飛び出し光の壁を三人と逃げる市民達全員の前に展開する。

上級深術ですら簡単には破れない強固な守りがそこに居るもの全てを包み、

宝珠の炎はそれを存在しないかのように容易く溶かした。

「え……」

「リア!!」

ラークが叫ぶと同時に彼女を抱えて跳び、クリフも『瞬』で追隨して迫る一面の炎から辛うじて逃れた。

「このまま脱出しよう」

振り返らずに言ったラークに、クリフも暗い表情で頷く。

「……ああ」

「待って、まだ逃げる人が……」

リアトリスがラークの手を離して後ろを振り返る。

そこには、人は居なかった。

「そん、な……私」

呆然と立ち尽くすリアトリスの手をラークが引く。

リアトリスも逆らう事無く足を動かし、クリフと三人で門をくぐる。

しかし、彼女は諦めたというより自分が今何をしているのかも分かっていない様子だった。

「最初から『色クロマティックの水晶』を使えば良かった……」

自分を強く責める様にリアトリスが言った言葉をラークが否定する。

「あの範囲を全部カバーしようとしたら一瞬しか持たなかった、リアは正しい判断をしたよ」

「でも、誰か助けられたかもしれない……私がちゃんと宝珠の力を理解してれば、間違えなければ、私が代わりになってでも皆を助けられたかもしれないのに」

たくさんの人が一瞬で死んだ。

それを防ぐ手段を持っていた。

その二つの思いがリアトリスの心をナイフの様に抉った。

「私が死ねば良かった。誰かを守る為に力を与えられたのに、何で私こんな……自分だけ助かって」

走りながら顔を伏せる彼女を、見ていられなくなったクリフが横から口を出す。

「そんな事ねえよ！俺達だって何も出来なかった……」

ラークもそれに同意した。

「君のせいじゃないし罪を感じる必要なんて無いよ。火の宝珠の暴走は僕が止める」

街の外にでて足を止めた二人は驚く。

「止めるって……そんな事出来るのかよ」

ラークは頷いて、二人の方を振り返った。

「クロウだけに任せておくのは危険すぎる。宝珠の力に対抗できるのは、宝珠だけだ」

ラークの言葉に、リアトリスは目を丸くした。

「まさか……」

「ああ、光の宝珠サンクオーリストの力を借りる」

時間が無い、とラークはそう答えて二人をその場に置いて走った。
街の東の森へ。

「しっかり掴まって！エッジ！」

荒れ狂う炎の中を、巨鳥の背に乗ったエッジとクロウがその中心を
目指して飛んでいた。

炎の蛇の一つが迫ってくるのを見て、クロウがラーヴァンを大きく
傾けて急降下する。

「前からもう一つ来る」

「分かってるー！」

辛うじて鞭の様に迫ってきた炎を躲した直後、今度は正面から二人
に向かって狙いすました様に別の炎の蛇が迫る。

ラーヴァンが脚の鉤爪に闇のディープスを集束^{コレクト}し、巨大化させて正
面からそれを迎え撃つ。

勢い良く黒と赤が空中で激突し、ラーヴァンの勢いが受け止めら
れ、炎の蛇も鉤爪に裂かれて出鱈目に熱を放射する。

「こ、のっー」

ラーヴァンから更に黒い槍が次々に放たれ、ラーヴァン本体とせめ
ぎ合っていた炎の蛇に穴を空けて散らす。ラーヴァンは辛うじて炎
の妨害を破って前へ進んだ。

「……どんどんきつくくなるわね」

額に汗を浮かべながら、クロウが呟く。

中心に近付くにつれ炎は避けきれない程に勢いを増し、ラーヴァン
の力を以てしても街中を荒らす炎の蛇の一つを相殺するのが精一杯
だった。

「もう少しだ、中心部に多少空間がある。術士が死なない様にそこだ
けはきつと無事なはず」

エッジが励ます様に言った言葉に、クロウは皮肉の笑みを浮かべ
た。

「その手前が、一番きつそうな炎の壁だけどね」

火の宝珠の中心は植物の種子の様になっていた。

中心の空間を覆う様に炎が球形になり、そこから無数に伸びていく炎が蛇の様に街中を焼き払っている。

「こんな中で術を使い続けるなんて、術士はどんな精神してるんだか……」

中心部の上空に着いて、エツジは炎の球の内部にいるはずの術士を探して目を凝らした。

「壁は完全じゃないみたいだな、所々不安定で隙間がある」

「そうだね、これならそこを狙って集中攻撃すれば。術を使ってるやつだけ殺せる」

殺す、という単語にエツジは微かに目を伏せるが何も言わなかった。

クロウは人を殺すことに良心の呵責を感じていない訳ではなく、ここで躊躇えばそれ以上に多くの人が死ぬことを分かっているから迷わないだけだと、エツジも分かっていた。

クロウが右手を振り上げてラーヴァンに命じる。

「ブラッディランス！」

黒い槍が五本、十本、立て続けに中心部に向けて降り注ぐ。

炎は揺らぎ隙間を捉えるのは簡単ではなかったが、槍を相殺する度少しずつ穴は広がり中心部への突破口が見え始める。

「あと少しだな……」

エツジの言葉にクロウも力を込めて右手を降り下ろす。

「ペネトレイトッ！」

黒い槍が勢いを増して炎の壁を貫通し、内部に居た術士の姿がクロウ達の目にも映る。

「——!!」

貫通した数本の槍が中心に居る術士を避ける様に軌道を変えて地面に突き刺さる。クロウがそこで攻撃を止めた事で一時的に穴の開いた炎の壁が再び元に戻る。

エツジにも術士の姿は見えていた。以前交戦した白髪の少年『孤氷』のルオン。様子を見ていて不審に思ったエツジがクロウに声をかける。

「クロウ？」

「ごめん、知り合いだから殺せないなんてそんなの我が儘だつて分かっているけど、私あいつは殺せない……何か他の方法を考えてもいい？」

ラーヴァンを操る為の前に乗っていたクロウは、恐る恐るエッジを振り返る。

「分かった、何とかしてルオンも助けられる方法を考えよう」

「良いの？……ここからなら簡単に術士を倒せるのに、中心部に行こうとしたら意味もなく命がけになるんだよ？」

エッジは少し間を置いて、それからこやかに言った。

「クロウ、誰かを助けようとするのが我が儘だなんて言わなくて良いよ、俺はそもそも足手まといにしかないのに付いてきたんだ。ここで俺が反対して止めるなんて……それこそ我が儘だ」

ふっ、とクロウもそれにつられて笑う。

「いつもいつも、あんたは命賭けるのに躊躇なさ過ぎ」

「先に危険な方選ぼうとしたクロウには言われたくない」

刻一刻、街は崩壊している。

ラーヴァンの力でも、無事に済む保障は無い。

それでも、そんな状況だからこそ、

二人は顔を見合わせて笑った。

「じゃあ、見せてやる——馬鹿二人分の意地を」

クロウの言葉と共に、ラーヴァンは炎の中へと急降下した。

「ブレイクスルー^{一点突破}、ブラッディランス!!」

防御だけでは炎を防ぎきれないと判断したクロウは、ラーヴァンの前面に黒い槍を束ね「攻撃」として炎の壁に穴を空けようとする。

炎の壁と接触した瞬間、それは槍とぶつかって激しく拡散し視界を光で塗りつぶした。

ラーヴァンもその強力な流れに阻まれ速度が著しく落ち、進んでいるのか完全に停止しているのかさえ分からない。

「あッー」

「く、これ……」

その熱も尋常では無かった。

防いでいるはずなのに、二人にも痛みがあり炎の中に既に飲み込まれてしまったかのような錯覚に陥る。

そうして何の成果も得られない間に、目に見えてラーヴアンの前面の槍が数を減らしていく。

クロウは慌てて代わりの槍を生み出し続ける。

しかし、それでも槍の数は次々減っていく。

(駄目だ、力が違いすぎる……穴を空けるとか防ぐとか、そんな考え通
用しない)

クロウは覚悟を決め、炎の向こうのルオンにまで攻撃が届く勢いで自身の扱える全ての闇のデュープスを前面に向ける。

拮抗が崩れ、ラーヴアンが前進した。

少しずつ、少しずつ。

しかし、その間にも槍は見る見るうちにその形を保てなくなって滅り、また生成され槍ではなく壁となる、均衡は一瞬でも気を抜けば崩れてしまいそうだった。

その刹那、微かに崩れたバランスからほんの僅かな炎が零れ、クロウの腕に触れた。

「あ——ッ——」

気の遠くなる様な熱さがクロウの視界を揺らし、鮮烈な痛みで一瞬クロウの意識が遠くなる。

彼女はそれでも即座に立て直し、ラーヴアンの前面に槍を生成し続けるのはやめなかった。

が、それはラーヴアンが前に進み続けるのには十分でも、

二人の命を散らすのには十分過ぎる程の炎が壁を破る時間を作ってしまった。

(なぜ、こんな所に騎士が居る?)

ラークは不審に思いながら、森の中を駆け抜けていた。

シントリアから逃げ、行き場をなくした者と出くわす位の事は予想

していた。だからこそ、身軽に動けるように彼は一人でここまで走っていた。

しかし、シントリアの騎士達の何人かは明らかにここで「待機」しており、一度などラークの事を捕えようとしてきた。

ラークは疑問に思いながらも、あえてそれを深く考える事はせず光の宝珠サンクオーリストのある祠を目指した。クロウが死ねば、闇の宝珠は世界から失われ例え火の宝珠を取り戻しても世界のバランスは元に戻らず崩壊する。

その阻止が最優先として、ラークはひたすら前へと進んだ。

祠、と言つてもそこに空間がある事は「シン」であるもの以外には分からなかった。

あるのはただ一面に広がる岩肌の壁。

その一点に手をついてラークは呟く。

「神の残しし宝珠の御座へ、シンに連なる我に扉を開け、我が名は、
ディエルアークⅡハルディ・ヘルトガード」

岩の壁全体が白く発光し、その光に溶ける様に壁は初めから無かつたかの様に姿を消してラークの前に道を開く。

ラークは早足で進みながらも一度足を止めて同じ行動をし、入口を隠してから奥へと進んだ。

《エミス洞穴》

入口を閉じ、外と切り離されても洞窟内は明るかった。

光の宝珠から流れる光のディープスが壁面を走り、幾何学的な直線となつて内部を照らす。

ラークはその光景に目を奪われる事もなく前へ進もうとするが、ふと違和感を覚えて足を止める。

洞窟内が明るくなっていた。

そして、外界と遮断され無音の空間に、森の生き生きとした音と、一人分の足音が入ってきた。

ラークは剣を抜き、背後から近づいてくる者と対峙する。

「宝珠を渡せ、ディエルアーク」

刀を手を持ったその眼帯の貴族は、ジェイン・リュウゲンだった。

第五十九話 終息、それは

外から差し込む自然の光と無機質な壁の光が、洞窟の中で交差する。

ラークの鋭い眼差しと、眼帯に覆われていないジェイン・リュウゲンの右目が互いを牽制する。

「君の前でその名前を名乗った事は無い筈だ」

「では初対面か？ 渡せ、とそう言った筈だ」

リュウゲンは答えるつもりは無い様だった。全ての相手にそうする様にただ、ラークに命令する。

しかし、ラークは剣を納める様子も無くリュウゲンと対峙したまま動かない。

「力づくで無ければ伝わらないか」

リュウゲンは手に持った刀に力を込め、踏み出す。

が、振り上げた手は止まり、刀が音を立てて落ちた。

「――時間が無いんだ、僕が貴族なら斬らないと思ったのかい？」

声を上げる間もなく、リュウゲンは人形の様にはたりと前のめりに倒れる。

ラークはそれを確認して彼に背を向けると、洞窟の奥へと飛び出して行った。

リュウゲンは動かない、彼から流れる血が一面を池の様にしていく。

それが、スプラウツを操ってきたジェイン・リュウゲンの最期だった。

切断された眼帯が地に落ちる。

その下から現れた彼の左目は、

クロウと同じ、闇に染まった色をしていた。

エミス洞穴の最奥は、カンデラス火山同様に半球形の空間になっていた。入り口からここまで壁面を走っていた幾何学模様の光は、中央の三

重の円形の台座に集まっている。

そこに置かれている光の宝珠サンクオーリストの光は雲の様に生き生きと動いていたが、その輝きは自然のものではない無機質なものであった。

それを映した壁面は奇妙な昼の空の様な、存在しない星空のような、不思議な光景を作り出している。

ラークは急いでそこへ駆け寄ると、手を宝珠にかざして言った。

「ヘルトガードの名において楔を解き放つ、光より闇へ流れる軌跡を天空の焰と描け……力を貸してくれ、サンクオーリスト」

宝珠の光が強くなり、その雲の様な流れが加速する。

壁面を走る幾何学模様の中を光が蜘蛛の様に走り、セキユアラ大気が深術士でないラークにも分かる程に震えて大きく動き、その変動はエミス洞穴全体、そして森を抜けて、炎が荒れ狂う王都シントリアにまで及んだ。

——ディープス リコレクト
——D・RC変化——

「浄破、滅焼闇!!」

炎が、エッジとクロウの二人を飲み込もうとしていた。

その寸前、ラーヴアンの闇の槍と火の宝珠の炎が互いを打ち消す事で空气中に溢れていたディープスをエッジの剣が吸いこみ、黒い焰となる。

D・RC変化は使用者の能力とは無関係に、扱うディープスの量で威力が決まる。

エッジは両者の力を利用する事で、クロウが防ぎきれなかった炎を撃ち払った。

「ごめん、助かった!」

「いい、それよりルオンを」

二人を乗せたラーヴアンは炎の壁を抜けた。

クロウが身を乗り出して、火の宝珠を操り続ける少年に手を伸ばす。

彼の瞳は何も映しておらず、その手は自らの意思で離せないかの様に赤い輝きに貼りついていた。

クロウは火の宝珠を無理矢理、彼の手から叩き落とす。

クロウの手が宝珠と触れた瞬間、彼女の頭の中を炎の景色が埋め尽くした。

視界が塞がれクロウはパニックに陥りかけるが、自身の中から別な力が清水の様にその光景を振り払ったお陰ですぐに平静を取り戻す。(こんなもの、ずっとルオンは使ってたの?……ラーヴァンに守られてる私でもこんなに影響があるのに)

一旦エツジとクロウは地面がむき出しになった街の石畳に降りた。術士がいなくなっても、街全体にまで及んだ程の規模の深術は消えず炎の勢いは衰えない。

クロウは白髪の少年に駆け寄る。

「ルオン、戻ってきて。お願い……」

少年の見開かれていた目は幾分緊張を緩め、ただ虚ろに宙を見ていた。

と、大気が変わったのを感じてエツジとクロウは顔を上げる。

炎は未だに中心だったこの場所を取り囲んでいたが、それを三人から遠ざける様に白い光の壁が形成されていく。

彼らの周囲だけではなく、街中で同じ事が起きていた。宙を荒れ狂っていた炎の蛇が光で繭の様に覆われ地へと落ちていく。

辛うじて生き残っていた人々を守る様に、リアトリスが使った光の障壁によく似た壁が作られ火の勢いをみるみる削いでいく。見た目は似ていても、その壁は決して炎に負ける事は無かった。

エツジとクロウには何が起きたのか分からなかったが、少なくともこれ以上被害が広がる事は無いのを感じとって二人は安心する。クロウが手を握るとルオンもそれを軽く握り返し、彼の呼吸は安定していた。

「ルオンはまだ大丈夫、すぐに戻ろう」

ほっとした様子でクロウはエツジを振りかえり、エツジは少し曖昧な表情で笑った。

「ああ……」

エツジの態度にクロウは何か違和感を覚え、彼の挙動を観察する。

クロウの視線が右腕に移るのを見たエッジは、反射的に右手を後ろに隠す様に回した。

「待って、エッジ」

クロウが厳しい声で言っただけで彼に近付くと、エッジが隠した右手を前に出させる。

「痛、」

エッジの右手は直接炎で焼かれた様に、真っ黒になってしまっていた。

クロウは動揺する。

「何で？……さっきの炎直接浴びたの？私全然気付かなかった……」

エッジは痛みを堪えながら、それを否定する。

「違うよ、大丈夫。あの技出すのに俺の武器だけじゃディープスを扱いきれなかったから、余剰分を右手に再集束リコレクトしたんだ」

クロウが目丸くして、それから怒鳴る。

エッジがやった行為は、自分の右手を燃やしたのも同然だった。

「何してんのよ！」

「いや、炎に吞まれたら二人とも死んでただろ？命と右手じゃ秤になんてかけられない」

エッジの言葉に、クロウは詰まりながらも反論する。

「じゃあ……隠さないでよ！処置が遅れて本当に手遅れになったらどうする気？」

エッジはそれを突かれると少し困った様な表情を浮かべて言い訳する。

「いや、ほら。ちゃんと後でリアトリスに言っただけで治して貰うつもりだったから」

クロウはすぐに自身に出来る初歩的な治療術でエッジの手を治し始める。彼女の術でエッジの痛みは引いたものの、完全に変質してしまった皮膚はあまり元に戻らなかった。

クロウは悔しそうに口元を引き結ぶ。

「それは、私の術なんて頼りにならないかもしれないけど、それでもさすがに何もしいよりはマシだよ」

「迷いは人を弱くする、俺が弱かったらクロウが前を向いていられない。だって俺が怪我したりするって知ったら、クロウ絶対気にするだろう?」

そんな事ない、とそう言い返そうとして、クロウは出来なかった。自分の中には確かにそういう弱さがある、と彼女は認めざるを得なかった。

「……かっこつけ無いでよ、馬鹿」

俯くクロウの手を、傷ついた手でエッジは優しく握った。

「これ、あいつがやったのか……」

街の外で一部始終を見守っていたクリフが、傍らに共に残ったリアトリスに呟く様に尋ねる。

リアトリスはまだ暗い表情だったが、多少落ち着いていた。

光の宝珠の力で街の炎が収まってからは少しずつ、少しずつ生き残った人達が街の外へ出てきていた為助かった実感が辺りの人の中に生まれ始めていた。

痛みと喪失感是谁にとっても耐えがたかったが、今この瞬間だけは皆の中にはまず安堵があった。

「間違いないと思う、これほどの力は他に無いし。あんな術は人の手が及ぶものじゃないよ」

リアトリスは再び、先程の術を使った時の事を考える。

「人一人の力って何て無力なんだろうね。宝珠の力を前にしたら……人間もシンも強いも弱いも無いんだって思い知らされた」

彼女の言葉にクリフもまた表情を暗くする。

「俺もだ」

彼もまた無力さに拳を握りしめた。

と、二人の前にボロボロになった姿の女性が現れる。

「あら……よりによって貴女だけ?」

「え?」

リアトリスがいきなり声をかけられて困惑し、声をかけてきた相手の記憶を辿った。

そして、彼女が背負っているのが氣を失ったアキであることに気付いてようやくリアトリスの中で記憶が繋がる。

「あなたは、セオニア王国で会った……」

「リヨウカよ、タリア・リヨウカ、この子の姉。仲間でしょう？連れて来てあげたわよ」

自分から名乗ると、長く熱い空間を歩いてきたリヨウカはアキを下ろして崩れ落ちるように膝をつく。

「え、姉……って、え？え？」

以前アキに敵意を剥き出しにしているところを目にしていたリアトリスは混乱する。

「大丈夫かよ」

倒れ込んだ彼女を見かねたクリフが助け起こそうとすると、リヨウカは彼を疑わしげな目で睨んだ。

「誰よ、貴方」

「いや俺も居ただろその時！」

リヨウカは真剣に考え込み、それから結論が出たらしく言い切った。

「あの時真っ先にその娘が反論してきたのは覚えてるけど、貴方の事は覚えてないわ」

「ええ……」

クリフは助け起こそうとした手を止めて、呻き声のような声を出し、リアトリスが慌ててフォローする。

「えつと……ほら、あの時クリフさんラークの足元に倒れてて、その後も私達が治療してたから死角だったんだよ！」

落ち込むクリフの横で必死に励ますリアトリスを尻目にリヨウカが続ける。

「いえ、二回も会って覚えてないんだから影が薄いだけじゃないかしら」

「そんなに俺……って、待て二回ってちゃんと覚えてんじやねえか！」

頭を抱えるクリフがはっ、と気付いて突っ込む。

リヨウカはそれを聞いて意地悪げな笑みを浮かべる。

「あら、エッジ達と会った回数で鎌かけただけかもしれないわよ？」
う、と呻くクリフ。

以前の様に本気で敵意を向けられている訳ではない為リアトリスは食って掛かったりはしなかったが、どう接して良いか分からない様子であたふたとリョウカに「やめて下さい」と頼み、リョウカはそんな二人の様子を面白そうに観察する。

そこへ、エッジとクロウもぐったりしたルオンを連れて現れる。

「あんたらうるさ過ぎ、まあラーヴァンで探してあんまり目立つわけにもいかないしすぐ見つかって良かったけど」

「みんな……アキも良かった、無事で」

周りにも負傷した人間は大勢居た為、エッジとクロウが指名手配犯であることは気付かれていない様だった。

エッジが全員の顔を確認して、居ない人間に気付く。

「ラークは？」

リアトリスがエッジを安心させる様に答える。

「大丈夫、さっきの光はラークが上手くやった証拠だから無事だよ」

エッジもそれを聞いてほっ、と胸をなで下ろす。

「良かった、じゃあすぐに迎えにいこう」

その言葉にクロウが後ろからエッジの頭を小突く。

「馬鹿、なんでそうなるのよ。あんた怪我してるでしょうが、リアトリスに診てもらうのが先」

リョウカもそれに続いて頼む。

「ごめんなさい、いきなり押しかけてきて迷惑だと思っけどトウカもお願い」

「ごめん、リア。それからこの子も」

突然全員に頼られリアトリスは誰からみて良いか迷った様子だったが、特にリョウカに対して引き受ける意思を示す為に笑顔を作った。

「えっと、リョウカさんもひどい火傷じゃないですか……大丈夫です全員治して、きつとその間にラークもすぐに帰ってきますから」

何であれやるべき事があるのは今のリアトリスにとっても良い事

の様だった。

念の為、目立たないように森の中へ少し移ってから彼らはそれぞれの傷を癒し始めた。

エミス洞穴の内部、光の宝珠の前で青年は一人佇んでいた。

「相変わらず本当に躊躇いが無いな、でもお陰で全ては上手くいった。君なら必ず光の宝珠の力を使うと思っていた」

力を解放され、白い輝きを放つ宝珠を眺めてその青年は微かな微笑みを浮かべた。

「この世界の宝珠はあと一つ、何処にある？ディエルアーク」

答える声は無い。

ただ、彼の足元には血だまりがあり、その中で必死にもがくラークの姿があった。

第六十話 目覚め

「ねえ、良かったの？」

火の消えた王都シントリアからリアトリスに案内されるまま歩く森の中、クロウが念を押す様に尋ねた。

エツジは何が不安なのか分からず首を傾げる。

「何がだ？」

「火の宝珠、簡単に渡して良かったの？」

術士としてルオンが手にしていた宝珠は直接手にする事が出来ず、ルオンの近くにあった赤い布でくるんで運んでいた。が、皆の怪我の治療をしている間にリアトリスの知り合いらしい心の一族が現れた為、彼らに渡していた。

そのルオンは目こそ開いているものの未だきちんと意識を取り戻していない様子で、クリフに運ばれていた。

宝珠が使われたとなれば、リアトリスやラーク以外の一族が動くのも当然らしい。リアトリスもそれ程問題には思っていない様子で答える。

「うーん、まあ確かにラークに相談してからでも良かったかもしれないけど、私達はクロウと離れる訳にはいかないから。あまりずっと宝珠を持っている訳にはいかないよ」

その答えに納得いかなそうなクロウを、興味深そうにリョウカが観察する。怪我は治ったものの意識が戻らないアキを、彼女は以前エツジを運んだのと同じ様に宵の地衣を使って運びながら付いてきていた。

彼女は『アキが意識を取り戻してから話す』と自分の事を多く語らなかつたがアキの姉だと名乗ったリョウカをエツジ、クロウ、リアトリス、クリフの四人は誰も追いつ返そうとはしなかつた。

「意外ね、貴女はもう少し誰でも疑ってかかる様な性格かと思つてたわ」

クロウはリョウカの言葉に、は？と声に出して睨みつける。

「だって、そのリアトリスという子もさっきの人達も同じ一族なので

しよう？でも、貴女はその子がさつききの宝珠を持つ事には特に抵抗していない……彼らは駄目でも、その子は信用しているのね」

リアトリスが少々驚いた様子でクロウの顔を見つめる。

「……そうなの？」

「違う——っっていうか、泣きそうな目でこっち見ないですよ！ほら、もう着くんでしょ！」

リアトリスの目が潤むのを見て戸惑ったクロウは逃げる様に先陣を切って森を抜ける。

「うん、ここがエミス洞穴、あれ？でも待って、この気配——」

案内していたリアトリスが目的地に着いた事を宣言しようとして、異変に気付いて口をつぐむ。

エッジ達の前には岩肌と、確かにエミス洞穴らしき奥へと続く入り口があった。

しかし、その前には予想に反して二つの人影がある。

一人は見知らぬ緑の髪青年、そしてもう一つは引きずられた様な血の跡の上で倒れ動かない……

「ラーク!!」

エッジが叫び、クリフが目を見開く。

その声に青年が気付いて振り向き、エッジ達全員を観察する。その目はこの惨状に似つかわしく無い程ひどく冷静だった。彼が手に持った唯一の武器らしき刀は不自然な位返り血が少ない。

「ああ、君の仲間かディエルアーク」

ディエルアーク、青年はラークをそう呼んだ。

ラーク自身誰にも名乗った事の無い名前を何故目の前の青年が知っているのか、誰にも分からない。

ただ、一人クロウだけはその青年を見た瞬間から一つの確信を持っていた。

彼女は自身の中から溢れ出る衝動を抑える事が出来ず震える。「この相手と戦ってはいけない」、その言葉が彼女の脳裏に浮かび、身の危険に彼女の中のラーヴァンが狂った様に暴れだそうとする。

殺さなければ、殺される。

その確信から逃れる為にクロウは憑かれた様に今まで一度もしなかった事をした。

「そんな、だって、この気配……」

彼女の横で、リアトリスは信じられないという表情で呆然としてい
る。

動かなかったラークが、息も絶え絶えに警告する。

「駄目だ、逃……げろ、クロウ……」

「ブラッディハウリング!!」

クロウは、無抵抗の相手に何の加減も無い深術を放った。

触れば裂ける程度のものではない、人の体などひとたまりも無い狼の群れがクロウの周囲から現れ青年へと殺到する。

普段の彼女なら絶対に使わない様な威力の術。

それを、青年は詠唱を破棄した闇属性の術を片手で放って無造作に弾き飛ばした。

「こいつは……君が持っていない残りの宝珠の欠片を、全て持っている……!」

「敵として生かしておくにはやはり危険すぎるか」

青年はクロウの顔もまともに見ないで呟く様に言って、クロウが使うのと同じブラッディランスを彼女目掛けて立て続けに放った。

「ッ、ブラッディランス」

唐突な反撃にクロウは同じ術で相殺する。

否、つもりだった。

彼女の放った槍は空中で相手の術とぶつかったにも関わらず、まるですり抜けるかの様にあっさり穴を空けられて霧散する。

そのまま、回避も出来ないまま彼女の右肩を槍が捉える。

「あ——」

殺される、その未来が明確に確定する程の力の差だった。

痛みと共に自身の身体から血が吹き出すのを遠く見守るクロウの耳には、彼女の名前を呼ぶ仲間達の声も届かなかった。

ただただ、ラーヴァンが狂った様に彼女の体を動かそうとし、敵意と闘争本能が彼女の頭を黒く塗りつぶしそして、

そこでクロウの意識は途絶えた。

空気が渦を巻く。

冷気が、全員の肌を冷たく刺した。

その異常なディープスの動きは、ラーヴアンが実体化する時の感覚に近かった。

しかし、

「何これラーヴアン……？」

リアトリスが違和感を覚えたのかクロウの姿を探す。

が、そこには先ほどまで居たクロウの姿も、実体化したラーヴアンの姿も無い。

直後、激しい闇属性のディープス同士の激突が起きた。

一度、二度、三度。

瞬きの内にそれは繰り返されて余波が無差別に地をえぐり、仲間達は思わず後ずさる。

(一体、何が起きてるんだ?)

エツジは必死に状況を整理しようと、突然クロウに襲い掛かってきた青年を見る。

ラークに似た緑の髪をした青年は、エツジ達に見向きもせず何かと戦っていた。

彼もまた相手の姿を捉えられていない様だったが、表情に焦りは無い。自分の周りに球形の黒い障壁を展開して、相手から斬撃らしき攻撃を受ける度視線を動かして冷静に敵の姿を見極めようとしている。

そこで、クリフが気付き声を出す。

「あれ、クロウなのか……？」

言われてエツジも必死に、幾度もただ障壁に叩きつけられる見えないう襲撃者の軌跡に目を凝らす。

何か巨鳥の影のようにも見えるが、ラーヴアンより遥かに細身で確かに人間の様にも見えた。が、そのシルエットはあまりに人と違いすぎた。

少なくとも、目で追えない程の速度で動くそれは「鉤爪」を持っていた。

と、その影が一度距離を空け、上空で静止する。
エツジは自分の目が信じられなかった。

上空から、緑の髪 of 青年を見下ろすそれは間違いなくクロウだった。

しかし、その背は人として立つ事を忘れた獣の様に丸まって、獰猛な闘争本能を剥き出しにした瞳は真つ黒に染まっている。

何より違うのは、その色だった。

人としての姿を変えてしまう程の闇のディープスが実体化して、彼女に翼と長い鉤爪と鎧の様な物を与えている。

その姿に停止した仲間達にリアトリスの警告が飛ぶ。

「皆避けて、今のあれはクロウじゃない！」

言われた直後、黒い槍が降り注いだ。

今までクロウが使っていたものとは速度が桁違いでほとんど視認すら出来ない。

青年は眉をしかめながら、彼女の方に障壁を集中してその攻撃を防ぐ。

間一髪、リアトリスが危険を察して事前に発動準備していたクロマニティッククリスタル『色の水晶』が展開され、エツジやリョウカ、クリフとそれに倒れているラークを守る。

「こんな無差別に……やめろ、クロウ」

仲間はまだ攻撃をしかける彼女にエツジは懇願する様に言ったが、既に彼女の姿は再び見えなくなっていた。

「ダメだよ、エツジ……クロウの心が感じられない、完全に闇の宝珠に呑み込まれてる」

リアトリスが必死な表情で杖を振って構え直し、その先端を障壁の中に閉じこもる青年に向ける。

『敵』が居なくなればきつとクロウも元に戻る……ラークを殺そうとしたこの人を倒せば……っ！」

その手が明らかな恐怖からガタガタと震える。

火の宝珠の力を目の当たりにした今、リアトリスは誰よりも宝珠の力を理解していた。

「無茶だ……逃げろ、リア……」

ラークが顔を上げられないまま、声を振り絞って彼女の行動を制止する。

が、青年はその彼女の行動に気付き、片手をエツジ達全員に向ける。

「君達も邪魔か。確かに君達は『ジエイン・リュウゲン』にとつても目障りな敵だった、ここで殺しておこうか」

リュウカがその名前に反応し、アキを下ろして両手を広げ戦闘態勢を取る。

「あなたも、あいつの仲間なの」

「仲間も何も、あの時俺の前に立ち塞がったのは君だっただろう？タリア・リュウカ」

当然の様に答える青年の言葉に、リュウカの表情が何かに気付いて青ざめる。

「何を……いえ、どうして……どうして貴方がリュウゲンの刀を持っているの」

答えず、青年は掌を軽く振る。

闇の障壁は維持して繰り返されるクロウの攻撃を防ぎつつ、彼はその動作だけでクロウと同じ槍を計十本、エツジ達それぞれに向けて放った。

「させないー！」

リアトリスが光の球体をその軌道上に作り出す。

当然の様に槍はリアトリスの術を破ったが、その際に軌道が変わった槍は一つとしてエツジ達を捉える事は無かった。

『『発』——！』

その隙に接近したクリフが、青い気の奔流を闇の障壁にぶつける。

破壊力に乏しいその攻撃は障壁を割る事こそ出来なかったが、激しく揺らす。

「魔神剣！」

エツジも離れた間合いから斬撃を飛ばす。

その間にもクロウの見えない攻撃は続き、ずっと展開され続けた障壁に微かな罅が入る。

「……大規模な破壊をするつもりは無かったが、仕方が無い。終わりにしよう」

青年は罅に目を向けると、目を閉じて詠唱を開始した。

その瞬間、エッジ達全員の身体が引つ張られたかの様子がくりと揺れる。

「何だ、これ……何で身体の動きが」

エッジが戸惑いの声を漏らす。

「こんなの有り得ない……これ、ただの集束コレクトなのに」

リアトリスは杖に縋りながら、絶望した。

術士の力量によって、空気中のデープスを集める力は変わる。しかし、どこまで優秀な術士でもその範囲は空気中で実体化していないデープスしか影響を受けないレベルだ。物質化している人間の体内のデープスにまで影響する程の集束コレクトなどリアトリスは想像する事さえ出来なかった。

「ぐっ……何だよ」

「トウカ……」

「っ……」

全員まるで重力に押さえ付けられたかの様に動きがとれなくなる。宙を飛んでいたクロウも例外ではない様で、その動きが目に見えるスピードに落ちた。

誰も、回避など考える事も出来ない。それ以前に、集まっていく闇のデープスの量はラーヴァンの力さえ遙かに超えており、逃げ場など無い事が全員に分かる。

青年の詠唱の力は、先程ようやく切り抜けた暴走した火の宝珠の力と同等のものであった。

「『デイグルフェイズ』」

青年の声が死刑宣告の様に響く。

それと同時に虹色の光がリアトリスに吸い込まれ、再び外に飛び出して全員の前に七色の水晶の壁を作った。

「『結晶化!!』」

青年の術で何が起きたのかは誰にも分からなかった。

ただ、『色クロマティッククリスタルの水 晶』が今まで聞いた事もない、耳障りな金属音の様な悲鳴を上げていた。

普通なら上級深術を受けても微動だにしない虹色の壁が、勢いに押される様に後退する。

カチカチと、全員の歯がなった。

冷気が容赦なく熱の高低にも強いはずの『色クロマティッククリスタルの水 晶』の壁を超えて、エツジ達の体温を奪う。

虹色の壁は既に輝きを失っていた。

当然といえば当然かもしれない、壁の外側には何の光も無かったのだから。

何も見えず、術は終わらない。

ただ、障壁と術の衝突する悲鳴の様な音が続く。

その中に、小さな音が混じる。

鈴の鳴る様な、ガラスが砕け散る様な、

「ダ……メ……止められない……」

リアトリスの弱り切った震え声と共に、エツジは決して砕ける事のない『色クロマティッククリスタルの水 晶』が砕ける音を確かに聞いた。

第六十一話 担い手なき深海の剣

エッジは目を開けて、自分が夢を見ているのかと思った。

視界に飛び込んできたのは自分達を覆いつくす闇でもなければ、倒れた仲間達でも無く、どこか懐かしい天幕だったからだ。

この景色をどこで見たのだったか思い出そうとしている彼の元へ、年配の女性の声がかげられた。

「エッジ君も目を覚ましたのね、良かった」

寝かせられたベッドの上でゆっくり首を動かしたエッジは、声のしたほうを確認する。

そこに立っていた女性もまた見覚えがあり、エッジの記憶の糸が繋がる。

「リアのサーカスの……」

ここで生活していた時よく彼に挨拶してくれた女性は柔らかく微笑んだ。

「そう！頭もちゃんと働いているみたいだし、これで後二人ね」

そこでエッジは、自分が置かれている状況を理解して慌てて跳ね起きた。

何も夢ではなかった。王都で火の宝珠の暴走を止めた事も、クロウの姿が変わった事も、青年に全員が殺されかけた事も。

エッジはすぐに、まだ目を覚まさないという仲間の所へ案内してもらった。

眠っているのはクロウとルオンだった。

二人は以前クロウが生活していたテントにベッドを増設して、並んで寝ていた。

エッジの記憶の中のルオンは虚ろな目を開いたままだったが、今はその目は閉じられ蒸された布がかけられている。長期間開いたままの状態で眼球を傷つけない為らしい。

それより、おかしいのはクロウの様子だった。

体のあちこちに当て木と包帯が巻かれ、クッションで手や脚が高く上げられている。

何より、右腕を中心とした凍傷の様な怪我が酷かった。

「これ……どうしてこんな、他の皆は無事だったのに？」

エツジが困惑して、連れて来てくれた女性に尋ねる。

「この子あちこちに打撲を負ってるのよ、何かで無理矢理引っ張って動かされたみたい。その上で闇の宝珠の力とあなた達の間割り込んで、それで……」

語りながらサーカスの時クロウの事も面倒を見てくれていた彼女は目を伏せ、エツジの表情も暗くなる。

それに気付いたのか、女性は元気付けるように少し声の調子上げて彼に言った。

「大丈夫よ、私も、心の皆も、治癒術の得意なリアトリスも居る。傷は残ったりしないわ、もう一人の子も身体自体は健康だから、二人とも必ず目を覚ますわよ」

「はい……お願いします」

エツジは頭を深く下げた。

「トウカ……私的事、どうして敵だって言わなかったの？ここなら貴女の仲間が大勢居る。追い出すのは簡単な筈よ」

早々に目を覚ましていたリョウカは、妹のアキと二人でサーカスのテント群から離れて話をしていった。

二人はそれぞれに置かれていた木箱に腰掛け、視線を合わせない様に互いに少し目を逸らしていた。

交わす言葉はぎこちなく、会話の合間に沈黙が度々混ざる。

「そんな事、する理由がありません……助けてもらった側で」

リョウカは首を横に振る。

「それは違うわ。最初に助けてもらったのは私……私が他人に借りを作るの嫌いなもの知ってるでしょう。借りを作るのが嫌だから助けただけ」

どこか自分でそれを嘘だと感じながらも、リョウカはそれしか言えなかった。

アキも姉に返す言葉が見つからずに俯く。

沈黙が続く内に、リヨウカは思い出した事を口にする。

「それに、私の力じゃないのよ。貴女を助けたのは知らない男だった」
え、とアキが顔を上げ、リヨウカは続ける。

「誰だか知らないけど、いきなり現れて私達を助けてくれたのよ。自分だって逃げ場無かった癖に……貴女の名前を呼んで、私に説教して——って」

リヨウカはそれに気付いて言葉を止める。

アキが呆然としたまま涙をこぼしていた。

「シビルさんです……それは、多分。家出した私を助けてくれた人です……私、何も返せていなかったのに」

リヨウカは実の妹が目の前で初めて見せる弱さに困惑して、どうして良いか分からずに立ち上がった。

「ちよ……ちよっと」

アキはリヨウカの事が目に入っていない様だった。虚ろな目で宙を見つめ、泣き続ける。

何も出来ないリヨウカの脳裏を、その『シビル』という青年に言われた言葉がよぎった。

『年長者なら年下の姉妹きょうだいを守れ。どれだけ憎んでも、まだ生きているのだから』

リヨウカは意を決したように息を大きく吸って、緊張した面持ちで言った。

「い、いつまでも泣いてんじゃないわよー」

姉の突然の大声に、アキは驚いて顔を上げる。

「ほらーこれ、食べなさい！……ちよっと形は崩れちゃったけど、味はそんなに変わらないわよ」

リヨウカが突き出したのは和菓子——その中の饅頭と呼ばれる菓子だった。

「昔はよく泣いたらこれで泣きやんでたでしょう？気まぐれで買ったけどやっぱり好きになれないからあなたにあげる。シントリアがあるんな事になって、これの店も燃えちゃったから多分最後の一つよ、大事に食べなさい」

リヨウカはなるべく柔らかい言い方にしようとするも、ついついその語尾はきつくなる。

半ば握りしめる様に差し出されたそれに、アキは泣く事も忘れて戸惑っていたがやがてその表情が苦笑いに変わる。

「……もうそんなに子供じやないですよ」

菓子を受け取って、アキは潰れかけたそれを口に運んだ。

そこで再び会話が途切れ、リヨウカは一度入れた気合が揺らぐ。

「ごめんなさい、こんな時にそんなものを渡す事しか出来ないダメな姉で」

リヨウカの謝罪に、アキは菓子を頬張ったまま首を激しく横に振った。

「私がエッジさん達を騙そうとしていた時から、姉さんはずっとこの国の為に頑張っていたのに。私が何も考えていない子供だったから、こんな事に……!」

リヨウカはそれを強く否定した。

「それは違うわ、トウカは途中からきちんとジェインのやろうとした事を止めようとしてたのに、私がつまらない恨みを捨てられずにあなたの足を引っ張ったのよ」

二人は抱えていた思いをぶつけ合って、互いの言葉を反芻する様に黙った。

何度目かの沈黙の中でリヨウカが先に口を開く。

「……謝って済むなんて思っていない、だからせめてこの先は私があなたを守る。私の命に代えてでも」

アキは何か返そうとして、言葉が出てこなかった。

甘味を噛みしめながら、彼女はふと父に言われた最後の言葉を思い出す。

『大丈夫だよ、トウカ。お前達姉妹ならきつと……』

アキは父の安らかな顔を思い出し、再び涙を流した。

「エッジ」

他の仲間を探していたエッジは、ラークの声に呼びとめられてキョ

ロキヨロと彼の姿を探す。

「こつちだよ」

ラークは座りこんで、サーカスの公演に使うらしき鉄柱によりかかっていた。

いつもの彼らしくない大人しい様子にエツジが疑問を持っていると、ラークは自分から説明する。

「意識は戻ったんだけどね、まだそんなに動けないんだ」

当然と言えば当然だった。

エツジが最後に見た時一番怪我がひどいのはラークで、身シの一族としての治癒能力が無ければ一番回復が遅くて然るべき身体の筈だった。

「あの時、あいつは完全に俺達を殺すつもりだった……どうして俺達は助かったんだ？」

謎の深術『デイグルフェイズ』からクロウが仲間達を庇った話をエツジは聞いていたが、そこから意識を失った自分達が何の追撃も受けなかった理由に疑問を持っていた。

「君の事だから、サーカスに居る時点で『誰に』助けられたかは分かっているんだろう？ 疑問は『どうやって』か。そう、僕達は心の一族の仲間に助けられた。あの時直前に君達が彼らに託した火の宝珠シ―ブレイムスの力を使ってね」

エツジは驚く。

「あんな危険なものを使ったのか……!?!」

ラークもそれを否定せず、笑う。

「普通なら心の一族でも使うなんてことはまず無い、でも彼らは危険を承知で五人がかりで限定的に力を解放する事で辛うじて宝珠の力を制御したんだよ――で、エルドに盛大にお説教を食らったっていう訳さ。彼らの行動が無かったら僕達は全滅だった」

エツジは助けてくれた心の一族の人達に頭が上がらないと思いつながらも、同時に別な疑問を持った。

「でも、その話なら助けてくれた皆も制御するので精一杯だったはずだ。それで、倒せたのか？」

ラークは真剣な表情で首を横に振る。

「彼は火の宝珠を相手にするととなつた途端あつさり逃げたそうさ。僕らの事は始末できれば始末しておく、ついで位にしか考えていなかったらしい」

エツジは信じられなかった。

燃え盛る王都の炎、クロウの力を以てしても凌ぐので精一杯だったあの力を前にしてそれだけの余裕があった男の事が。

「……知り合いなんだろう、ラーク。あれは誰なんだ」

ラークはしばし答えに窮する。それはとても珍しい反応だった。

彼自身、本当に『何か分からない』かの様だった。

「彼の名前なら分かるよ、多分。彼は身の一族を裏切つて闇の宝珠を持ち出し、イクスフェントからこのアエスラングに落とす……その時、僕に殺された男ジード・カルシート」

エツジの思考が停止する。

殺された。

だったら、あれは何だというのか。

「待ってくれ、何かの間違いじゃないのか？ 瀕死の状態で、こつちの世界に来て……身の一族なら傷の治りだつて」

「エツジ、彼はこの世界に来ていない」

ラークはエツジの言葉を切り捨てた。

「彼の死体を置いて僕は闇の宝珠を追つてこの世界へ来たんだ、僕より後に向こうの世界からこつちへ来た者は居ない」

エツジは絶句する。

ラークは、淡々と続けた。

「正直あれが誰なのか僕には分からない、あえて名前を付けるなら『ジード』だというだけでね。分かるのは彼の圧倒的な力と、彼がまだ残りの宝珠に何らかの関心があるという事だけだ……誰であろうと止めるしかない」

ラークは鋭い眼差しで言い切る。

「止める、つて……」

エツジにはそれが信じられなかった。

というより、倒す方法が思いつかなかった。

エツジの知る中で最も強力な深術を扱うクロウの全力が通じず、最も強固な守りを誇るリアトリスの『色の水晶』が破壊された。

それでも、恐らくあの『ジード』は本気を出してすらいらない。

今まで絶えず考え、状況を冷静に見極める事で答えを出し戦いを切り抜けてきたエツジの思考そのものが「戦ってはいけない」という答えを出していた。

「一つだけ望みがある、僕らシンの一族には宝珠が悪用された最悪の事態に備えて、託されてきた切り札がある……それを使う為に今、何とかこの長のエルドを説得しようとしている所だ」

ラークはそう言って、重そうに身体を起こした。

「切り札って」

エツジが尋ねようとする、ラークはいつもの微笑みを浮かべて誤魔化した。

「剣だよ……名前は、アエス・デイ・エウルバ。でもそれはまた今度だ、その内話すよ」

(アエス・デイ・エウルバ……?)

それだけ言うと、ラークはエツジの傍をゆっくりと去っていった。まいった。

エツジはまだ聞きたい事があったが、諦めてクリフとリアトリスを探す事にした。

「二人とも居ないな……」

エツジはそれからあちこちを探しサーカスで知り合った人に聞いて回り、知り合いが多いリアトリスの居場所を聞く事が出来て今居るテントの中に足を運んだのだが、彼女の姿は無かった。

元々サーカスの一員として生活していた時間が長い彼女は元気になるなり、あちこち手伝って回っているらしい。

(それにしても本当にあちこち移動してるんだな……まあ、元気なのは間違いないみたいだから良かった)

このテントは見た所物置の様だった。サーカスの一団は移動する

関係で、定期的に物を動かす為そこまで乱雑な物の置かれ方はされていない。

特に用事もなかったのでエツジは外に出ようとするが、ふとその中に気になるものを見つけ足を止める。

（あれ？何だろ、これ。他の物は全部出しやすい様にきちんと積んであるのに）

整理整頓された中であって一つだけ、まるでわざと取りにくい奥に置いたかのような箱がある。

閉じ忘れたのか、微かに開いたその隙間からは鎖が見えている。

そして、それに拘束される様に入れられたそれは、剣の柄の様にエツジには見えた。

直前に聞いたばかりの話进行を思い出して、エツジは興味を引かれてそれに近づく。

箱を手にとって引つ張り出し、何とか他の荷物の上に乗せて開くとその剣の全容がはつきりと見て取れた。

それは随分大型の剣だった。

まず目を引くのは中心に埋め込まれた大きな青い水晶の様な鉱物、そして魚類のヒレを思わせる様な奇妙な形の鏢。

その周囲を棘の様な奇妙な飾りが覆い、薄青いオーラがその剣を包んでいる。

そして刀身には見慣れない文字が彫られていた。

『f e i u s f q a d m e i o』

見れば見る程、エツジはこの剣が「それ」なのだと思わずには居られなかった。

エツジはエミス洞穴の前で対峙した、『ジード』の事を思い出す。クロウと彼の戦いを成す術なく、見ている事しか出来なかった自分自身を。

その力の差を埋める事が、この剣なら出来るとラークは言った。

（もし本当にそんな事が可能なら、俺があいつを倒す……力を貸してくれ、アエス・デイ・エウルバ）

剣にそれが伝わる様にと、エツジは半ば願かけのつもりでそう願

ながら目を閉じて右手で剣を握った。

ほんの一瞬、冷たい感触がエツジの手に伝わるがすぐにそれは消えた。

それは奇妙な感触だった。

剣だというのに、重さを微塵も感じず。

持っているのか、持っていないのか分からない位だった。

エツジは目を開けて改めて剣を観察した。

特に変化は無い。

剣は変わらずそこにあり、同じ様にオーラをたたえていた。

けれどエツジはそこに、何か違和感を感じた。

何か――

「エツジ!!」

リアトリスの悲鳴がエツジの耳を突き刺し、彼女の手がアエス・デイ・エウルバを掴んでエツジの手から無理矢理引き離す。

否、そこでエツジはようやく先程の違和感を感じた原因に気付いた。

そこに、エツジが突き出していた筈の右手は無かった。

痛みも何もない、ただ手首から先が空気に溶ける様に形を失い、実体を無くしていた。

「――」
リアトリスが何かを早口で呟き、エツジの手があつた場所を必死で握る。

そこには、時間が巻き戻ったかのようにきちんと元の右手があつた。

「物音がしたからまさかと思って来たんだけど、あと少し遅かったら本当に間に合わなかった……エツジ、これに二度と触ろうとしないで」

荒い息でリアトリスは懇願する様にエツジに言った。

「この剣は深海の剣アエス・デイ・エウルバ……別名を、全てを飲み込む深海の蒼。絶対に使っちゃいけない、禁忌の剣だよ」

第六十二話 建国の伝説

エッジは呆然と確かめる様に自分の右手を握った。彼は今しがたそれが消えてしまった事が未だ信じられなかった。

「エッジ、今ここであつた事誰にも言わないで。私がした事も全部。……この次この剣に触ったら助けられるとは限らないから、本当に絶対触らないで」

リアトリスの強い言葉に押されるままエッジは頷き、ふと気付く。

「……リアはその剣に触つても平気なのか」

エッジに指摘されたリアトリスは、全く平気では無さそうな表情で自分の手の中の蒼い剣を見下ろす。

「子供の時たまたま触れたの、その時は何だか知らなくて……でも、出来れば触りたくないよ」

リアトリスは深海の剣を箱に戻すと、蓋を閉めてテントの奥へと押しやった。

そのままリアトリスはその記憶を振り払う様に剣に背を向ける。

「もうこれを使おうなんて考えないで。行こう、ラークがこの剣の事エルドと話してる」

エッジを引き摺る様にして、リアトリスは強引に物置のテントの外に出た。

エッジはリアトリスに連れられるままに族長のテントへと連れて行かれる。

アキとリヨウカも来たばかりの様で、ラークから説明を受けていた。

心の一族のサーカスを率いるエルドは円形に並べられた椅子の一つに座り、黙つてなり行きを見守っている。

「剣？ たった一振りで何が出来るっていうの？」

リヨウカの疑わしげな声に対して、ラークは微笑む。

「君もシンントリア出身なら、話位は聞いたことがある筈だよ。最上級深術——国を食らった大蛇の話と、それを下した剣の話は」

リヨウカの目が丸くなる

『水影術師団』の事を……まさか、クサナギノツルギ?」

その単語に、エルドも軽く反応を示す。

ラークは微笑みは崩さないままそれを肯定する。

「君達がクサナギノツルギと呼ぶそれは『天空の剣』。僕らが使おうとしているのはそれと同等の力を持つ『深海の剣』だよ」

何気無い様子でリヨウカに説明した事を警告する様に、エルドが厳しい声を出す。

「ラーク」

注意されたラークは、エルドを睨み返す。

「決まりは分かっているつもりだ。それでも……あれを相手するならどうしても禁忌の剣の力が居る」

エルドも引かない。リアトリスと同じ橙の瞳が険しくなる。

「それは否定しない。が、一族以外の者に剣の事を話すのは別だろう。これは我々シンの一族が対処すべき問題だ」

話の内容が分からないアキとリヨウカはエルドの言葉に少々萎縮するが、ラークは冷静に反論した。

「深海の剣に担い手は居ない。力を引き出せないあの剣だけでいま奴と戦おうとしたら、戦士でないこのサーカスの皆やイノアザートの者達まで駆り出す事になる」

エルドは顔を伏せた。そうなれば、大勢の犠牲は避けられないからだ。

ラークは、隣に立つアキやリヨウカを指しながら続ける。

「僕達と同じ血を引くエツジは勿論、ここまで協力してくれた彼らは皆戦闘に秀でている。彼等の協力と深海の剣があれば、無用な犠牲は防げる筈だ」

エルドは髭の生えた顎に手を当てて考え込んだ。皆表情を固くして彼の返答を待つ。

長考の末、エルドは頷いた。

「良いだろう、ただし分かっているだろうが禁忌の剣の事までは保証できんぞ。使えるかどうかはお前達次第だ」

そこで唐突にエルドはラークに向かって微笑んだ。

『無用な犠牲は防げる』か、ラーク。族長の血を引くものとして欠けていたものを一つ見つけられた様だな」

ラークは不意を突かれ、戸惑った顔を見せる。

ここまで黙っていたリアトリスは、彼のその珍しい反応を見て吹き出した。

「ふふ」

「……その笑いはどういう意味だい、リア？」

横目で彼女を睨むラークに対してリアトリスは「何でもないと軽く笑った。まだ先ほどのショックを引きずっているのか、その表情の変化は小さなものだったが幾分元氣を取り戻したようにエツジには見えた。

彼女の笑顔を見たエルドは微かに緩めた表情を今一度引き締め、リアトリスに——孫娘に尋ねた。

「エミス洞穴に現れた男が真に宝珠の力を持っているなら、この先は命がけの旅になる……それでもお前はこの旅を最後まで続けられるか？」

リアトリスは祖父と目を合わせると、微かな迷いを見せた。

『クロマティッククリスタル色』の水晶』を破られたから……私は役に立たないかもしれないかもしれまん」

エルドはその言葉に、彼女を観察する様に目を細める。

『クロマティッククリスタル色』の水晶』を物理的な方法で破壊する事は出来ん。維持するお前の力が、宝珠の力に負けたか……」

リアトリスは祖父の言葉に困惑の表情を見せる。

エルドはそのまま続けた。

「七色の光が壊れる事は無い、破られるのはお前だ。お前に「守る意思」がある限りまだやれる事は残っている」

リアトリスはしばしその言葉の意味を考えていたが、やがて強く頷いた。

「……ここまで来て私だけ逃げるなんて出来ない。私は最後まで旅を続けます」

その返答を聞いた心の一族の族長は今度はエッジやアキ、リヨウカに目を向ける。

「君達も同じか？知らずに育った使命や、何者かも知れぬ強大な敵との戦いに命を賭けられるか？」

「はい」

「ええ」

「勿論」

三人も同様に頷きバラバラの言葉で、しかし等しく同じ返事をする。

それを見てエルドは今度こそ納得したのか、いつかクロウを追ってエッジ達を送り出した時と同じ言葉を口にした。

「君達にアエスラングとイクスフエントの加護があらんことを」

そして、一言付け加える。

「——それはそうと、君達が待ち望んでいた者が目を覚ました様だぞ。彼女本来の意識の方がな」

エッジは目を丸くして、安堵する。

「……クロウ」

皆が彼女の見舞いに行こうと動き出す中で、テントの外で話を聞いていたクリフはそつとその場を立ち去った。

スプラウツの本拠地。

クロウに続いてルオンが居なくなり五人になったクローバーズのうちの一人《流連》のレパートに、《巖岩》のバルロはある物を託していた。

老人の手から受け取ったそれをレパートは興奮を抑えきれない様子で、食い入るよう見つめていた。

「——深素銃「始」、お前に先代の様に武器無しで戦う技術は無いが、これを使えばお前でも多少は《流連》の名に相応しい戦いが出来るだろう」

バルロの説明も半ば耳に入っていない様子で、レパートは手の中の二丁の武器を大切そうに撫でた。

「ああ……感謝するぜ、バルロ」

そう言つて上機嫌で去る少年を、普段ならため息を漏らすであろう老人は静かに見送る。

スキップで静寂の支配する無機質な廊下を進み、自室へと戻ろうとするレパートを女性の声が呼び止めた。

「馬鹿な事を考えているならやめておきなさい」

黄緑の髪少年は舌打ちして、背後を振り向く。

「ネイデイル……」

そこには純白の女性が彼に背を向けて立っていた。まるで、すれ違いざまに声をかけていたかの様に。

レパートは水を差された事に機嫌を損ねながら噛み付く。

「何だよ、俺が最新式の装備を貰ったからってひがんでんのかよ」

ネイデイルは振り向かない。

ただ、その不思議な声で素っ気無く言った。

「クロウはあなたが考えている程甘い相手じゃない、自分の命を大事にしなさい」

警告された事を侮りと取ったのか、レパートは怒りを露にする。

「煩い、俺はもうお前達ともクロウとも同格のクローバーズなんだ。

この武器でそれを証明してやるよ」

憤慨しながら武器の手入れに向かったレパートの背中を、小さな眩きだけが追う。

「……痛みが無いと人は学習しないのかしら」

無人の廊下に、再び静寂が戻った。

「クロウ！」 エッジが帆布を捲り、

「クロウさん！」 アキがそれに続き、

「怪我大丈夫？まだ動いちゃダメだよ！」 リアトリスが駆け寄る。

クロウはベッドで固定された身体で天井を見たまま呟く。

「うるさい」

それから彼女はのろのろと、自分の腕を確認し、男にやられた傷を確認し、それから隣のベッドにルオンが寝ているのを見て安心したよ

うに息を吐いた。

「何だ……私もまだ生きてるんだ」

飛び込んできた三人は嬉しそうな顔を見せ、遅れてきたリヨウカとラークは皮肉を言う。

「仲が良いわね、安静に出来そうに無いくらい」

「良い所に気付くね、僕もそう思ってたよ」

リヨウカは興奮する妹をクロウから引き離し、クロウはラークと視線を交わして目を細めた。

「心配はしてなかったけど、一番大怪我だった割に元気そうね。あんたが無事ならクリフも含めて全員無事なんですよ」

ラークは柔らかく微笑みながら、クロウに言い返す。

「覚えて無いだろうけど、君の方が大怪我だったからね」

そこで、クロウは表情を引き締めると尋ねた。

「……それでどうなったの、あいつ」

一瞬の沈黙が降り、全員の表情が暗くなる。

リアトリスが遠慮がちにそれを破り、説明を買って出た。

「それは私が話すね、クロウのことも含めて全部」

それから少しずつリアトリスは全てを語った。

闇の宝珠を持った男の事、クロウに起こった変化の事、シンの一族に助けてもらった事、ルオンの状態の事……そして、対抗策の深海の剣の事を。

全てを聞いたクロウはしばし考え込む。

他の皆も同じで、得た情報を改めて各々の中で整理していた。

最初にエツジが口を開く。

「それで、どうする？…これから」

皆も顔を上げてその意味に気付く。

クロウを助ける為、戦争を阻止する為、アクシズⅡワンド王国から逃げる為、宝珠を追う為、ここまで次々襲いかかる困難に対処する為エツジ達は手を結んできていたが、ここに来てその指針は途絶えかけていた。

「あの男の居場所も目的も、現状だとまだ分からない。それに、今のままじゃ出会っても返り討ちにあう……」

全員を再び沈黙が支配しかける中、ラークが一つ提案をした。

『『ジード』の事はどうにも出来ないけど、もう一つの方なら……手掛かりがあるかもしれない』

リアトリスが首を傾げる。

「もう一つ……?」

「クロウのあの状態の事だよ」

全員が驚いてラークを見た。

エッジは何処にそんなものがあるのかと質問する。

「分かるのか?あれの事」

ラークは首を横に振る。

「宝珠の力の事や、それを使った場合何が起こるかは正直僕には分からない。けど、分かるかもしれない人間なら心当たりがある。『刻印術式』という体内に埋め込むタイプの深術の研究をしている研究者が居るんだ」

そう言うとラークは、エッジの顔を見つめた。

「名前はハーデイロン。ハーデイロン・アズライト、君とブレイドの父親だよ」

※世界観・用語3の情報ステータスが更新されました

「身」の一族、「心」の一族

太古の昔、二柱の神から宝珠と世界を守るべく力を与えられた二種族。

アエスラングの種族が大気と心を通わせ高い深術の適正を持つ「心」の一族。イクスフェントの種族が深術を使えない代わりに長い寿命と高い身体能力を持つ「身」の一族であり、両者の総称が「シン」の一族である。

二種族の能力が異なるのは「互いが手を取り合う事」を望んだアエスラングとイクスフェントの願いからであり、またそれぞれの差異に二柱の神の性質の違いを見て取ることが出来る。

『混血児』

身の一族と心の一族、そして人間の血が混ざった者の中に稀に現れる突然変異とも呼ぶべき存在。

高い深術の適正と身体能力、治癒能力を持ち、皮膚の異常で獣の様な体毛が発生する。個々の能力としては「心」や「身」の一族に劣るものの、戦闘に限れば総合的に両者を上回る能力を持つ。

世間一般には「獣の子」として認知され、モンスター等の血を引いたものと考えられて(※実際シンの一族の混血の者に体毛は存在しない為、先祖の中に本当にそれらの血が混じっている可能性はある)殆どが殺され、現代においてはその血筋はほぼ絶えている。

宝珠の「座」

狭義には六つの宝珠を安置すべき地点を指し、広義にはそこからのデイープスの流れを安定させるべくシンの一族によってその地点に作られた台座も含む。

宝珠はただ存在するだけでは機能せず、「座」に在ることで初めてデイープスの流れを通して二つの世界を繋ぐ。

地点ごとに二つの世界で対になっており火と風、水と地、光と闇の宝珠が対応している。その為、二つの世界の間のデイープスの流れによる影響はこれらの地点の周辺が特に強くなっている。

『明の天傘』と『宵の地衣』

同一の職人の手により作られた対となる武器。火鼠の衣ひねずみころもと氷鼠の衣こほねころもと呼ばれる特殊なモンスターの皮から作られており、デュープスの集束を手助けし並の武器とは比較にならない戦闘能力を持ち主に与える、詠技の使用も可能な武器。

タリア・キサラギが娘達の身を守るため姉妹に与えた。姉のリヨウカが宵の地衣を、妹のトウカが明の天傘を所持し、タリア・トウカが出奔し『ジェイン・アキ』と名を変えた後も愛用し続ける。

本来姉妹での使用を想定されている為、二つが揃ってこそ真価を発揮する。

命令刻印術式

「他者に命令を聞かせる事」を目的として開発された深術を応用した技術の一つ。通常の深術はその都度術式を組み立てるのに対し、体内に成立した術式を埋め込む事で常時発動し続ける。

しかし、人間の精神はそう簡単に制御できるものではなく、現段階の技術では他人の行動を制御するところまでは至っていない。その為実際は「主が従者を任意のタイミングで殺す事が出来る」機能を持った爆弾の様なもの。

その経緯から忌まれた技術だったがジェイン・リュウゲンはそれを逆手にとり、処罰される寸前だったブレイド・アズライトに見せしめとしてこれを埋め込む事で自分の手駒として彼を獲得した。

ブレイドに埋め込まれたものはエッジとブレイドの父親によって改良されたものらしく、『そう簡単に爆発する事はない』とブレイドが発言している。

『???』↑New

クロウが、同じ闇の宝珠を持った青年と対峙した時に陥った状態。通常、大気中の闇のデュープスが集まって実体化していたラーヴァンが、まるでクロウと一体化した様な姿を持つ。

獣同然の反射速度と目で捉えられない程の速度、そしてクロウ自身が封じていた「加減の無い闇の宝珠の力」を常時振るう為通常時の彼女とは比較にならない戦闘能力を持つ。

クロウの自我は無く、ラーヴアンの防衛本能としての意識が全ての行動をコントロールする。

羽で移動を、鉤爪で攻撃を、そして外殻部で運動を制御し、クロウという『容れ物』をラーヴアンの意志が強制的に動かす。彼女の生命のみが守れば良い為、その身体へのダメージは考慮されておらず（身体を幾重も深術の膜で保護しているもの）瞬間移動にも近い移動スピードは、彼女の身体に痣になる程の多大な負担をかける。

『クロウ』という人間の人格が消失している為、敵対しないものを意図的に狙う事こそないものの、扱う深術のレベルから敵味方無差別の戦い方をする。

この状態のクロウと仲間全員の力を以ってしても、『ジード』には及ばなかった。

『ジード』↑New

クロウを圧倒し、ラークを瀕死状態に追いやった青年。

彼女が持っていない闇の宝珠アスネイシスの残り全てを所持しており、クロウ側が本来の三割に満たない力なのに対し彼が所持する欠片は七割強で単純な出力でクロウと倍以上の力の差がある。

王都で猛威を振るった火の宝珠の力がきちんと制御されていないにかつたのに対して、彼は完全に力を使いこなしている為実質的にそれ以上の「限りなく本来の宝珠に近い」力を持つ。

その姿はラークの同族にして、シンの一族の裏切り者「ジード・カルシート」と酷似しているが彼は既に死亡している。

最上級深術↑New

禁術とも呼ばれる、ごく一部の人間にしか使えない上級深術クラスすら更に超えたクラスの深術。歴史上にも使えた人間がほとんどおらず、複数人でしか発動例がないものもある。

また、この術を使った者も当人が最も得意とする属性一つしか使えず、初めて発動された時期や文化圏もバラバラな事からその名前も大きく異なる。

扱われるディープスの量が桁違いな為、熱に関係する火・光・闇属性の術は周囲（特に術者）への危険性から発動時間が極めて短い。

更に、光属性と闇属性のディープスは熱と共に空気中に分解されやすい性質を持つため、他の属性と異なり通常は上級深術であってもその場に残らないが、最上級深術の場合その規模の大きさから術全体の体積に対する表面積の比が小さいため空気中への分解が緩やかになり、完全に分解されるまでに長い時間を要する（分解のペースは一定ではない為、データも少なく術の持続時間については正確な情報は無い）。

分解が早い風属性の深術も完全に消えるまでにかかなりの距離を要し、海を超えた隣の大陸まで強風が吹いたという記録がある。

いずれも限りなく天災に近い術であり、通常の戦闘に用いられる様な術ではない。

なお、あくまで「人間の限界」でしかない為、六属性の宝珠はいずれもこれと同等以上の力を秘めている。

・風の最上級深術……カミイブキ神息吹

記録上は存在しながら、長い間分類されていなかった術。地の最上級深術として扱われていた時期も存在する。情報が少なく、その時の様子を示した文献には『一瞬にして大地が割れ、爆発した』という程度の情報しかなく、この術が発動したとされる位置には巨大なクレターがある。

これが、風の最上級深術に分類される様になったのは、「術者とされる者が残した名称が風を連想させる『神息吹』であったこと」、「広範囲の同心円上でほぼ同じ頃に強風の記録があること」、「地の最上級深術が別に存在し、全くの別物であったこと」等が挙げられる。

現代ではその跡は湖となっており、息吹の御湖（いぶきのみこ）という名が付いている。地属性の深術と誤認されていたところは違う名称の湖だった

・火の最上級深術……（記録なし）

炎の天才術士が操ったとされる最上級深術。複数人での発動か、命を犠牲にしての発動が普通の最上級深術の使用者の中にあって、彼は地脈の流れをきちんと理解し発動場所をそれに合わせる事で負担を

最小限に抑え、個人で複数回この術を発動する事が可能であったとされる。

焰螺旋の再現のように天に昇る火の柱を生み出し、上空で爆発を起こすことで術者との距離を調整し範囲内のものを一瞬にして灰とする。

しかし、実際に発動されたのは一度だけであり、その一撃はとある術士の命を犠牲に放たれた同じ最上級深術、神息吹によって相殺されている。

その衝突によって術者がダメージを負ったという記録は無いが、それ以降彼がこの術を使う事は決して無かった。

・地の最上級深術……エンプリファイド・レイジ

最も穏やかに始まり、最も危険な領域に到達する最上級深術とされる。広範囲の大地そのものに作用し、その全体を揺らす。しかし範囲が広い分、術が発動しても直後の揺れはほとんど認識できない。が、この術の真の危険性は大地を揺らす事ではなく、「何度も繰り返す事でその揺れを増幅する事」にある。振動を繰り返す事でその威力は通常の地震に匹敵するものになり、最大威力ではアエスラングまたはイクスフェントの大地全てが崩壊する。

これを発動出来たのは「放浪の三人組」だとされ、三人全てが異なる大陸で一番の術士であったという。その彼らも発動できたのは一度限りであり、三人の呼吸が少しでもずれれば振動の繰り返しはそこで途切れてしまうので、実際に理論上の最大威力を出すのは困難であったと推測される。

後年の研究者達によればその時代、術士として並び立つものの無かった彼らの行動原理は「何か面白いことを起こす事」であり、一度の発動でも彼らはその成果に十分に満足していたと言われる。むしろ最上級深術発動後の彼らは再び禁術を発動する事よりも、この実績を後世に残す為に活動していた為、この術だけ残っている参考資料が多い。が、自分達の活躍を誇張して書かれたものがあまりに多かった為、逆に与太話として一蹴され最上級深術として認められたのが大きく遅れたのは皮肉としか言い様が無い。

・水の最上級深術……終の水竜つひ すいりゅう

別名、「国を食らった大蛇」。数千年前の黒髪の少数民族からなる『水影術師団』という深術士の集団が用いた、アエスラングの歴史上最悪の『人災』。基本的に最上級深術というの一人の術士の限界を超えた術であり、一度の使用で命を落とすか一生に一度しか撃てなかったと言うのが普通である。しかし、この集団は『一つ一つでは機能しない、百人単位で同時に使用して初めて一つの術として機能する』術式を持ち、連発こそ出来なかったものの天災クラスの術を自在に何度も操る事を可能としていた。

その力に抗えるものは存在せず、迫害される存在でしかなかった黒髪の少数民族は二つの大陸をその支配下に置き、自分達を「世界の中枢を担うもの」と称し残る二つの大陸をもその手中に収めようとした。が、それは一振りの剣を持った青年によって阻まれる。当時の出来事は次の様に記録されている。

「天まで届く水の流れの中にあつて、その青年は点でしかなかった。黒髪の術師たちは彼に気付く事さえなかったらう。しかし、青年の振るった剣は一振りで荒れ狂う水の竜の動きを止め、二振りで竜を真つ二つにした。その剣を、恐れた術師達はこう呼んだ。天より現れ、蛇を下す剣——クサナギノツルギ、と」

クサナギノツルギと呼ばれる剣の力で『水影術師団』の暴走は止まったものの、彼らの行動の結果は今日のアエスラングにも多大な影響を残した。二つの大陸に跨るその領土は「アクシズⅡワンド王国」として名を変え、その頂点に位置する貴族階級は今もこの黒髪の少数民族が占めている。

彼らの末裔の一人タリア・リヨウカはこういった経緯を理解しており、多くの犠牲の上に成り立った貴族・王族というシステムを快く思っていない。

クサナギノツルギ↑New

伝承の中で水の最上級深術を打ち破ったとされる剣。その正体はイクスフェントの身の一族に与えられた切り札『天空の剣』。

通常シンの一族は人間同士の争いに関わる事を禁じ、宝珠の力が人間の手に渡ることのみを阻止する為に行動する。

が、宝珠そのものとは別に世界には「時に地脈と呼ばれる、二つの世界の宝珠間でやり取りされる強いダイーパスの流れ」が存在し、終の水竜の術式は南東のカーズメリア大陸に流れる「水の宝珠 フラツデイルージュ」の力を使っていた為、その事態を「一部であれ宝珠の力が人の手に渡った」ものと考え危惧したイクスフェント側のシンの一族が『天空の剣』の使用に踏み切った。アエスラングとイクスフェントの繋がりが絶たれたクライング本編の時代には登場しないものの、作中にはこれと対になる『深海の剣』が登場する。

第六十三話 『流連』のレパート

今後の方針が決まったもののクロウはまだ意識が戻ったばかりで怪我は完治していなかった為、一行はあれから更に数日彼女の回復を待っていた。

ベッドの上に寝かされたクロウは最早日常となった隣のベッドの光景に目を向ける。

「また手握ってるの？」

「うん……」

リアトリスは脱け殻の様なルオンの様子を度々見に来ていた。

怪我人ではあっても敵であった彼の所へそれほど頻繁に足を運ぶのは彼女一人。クロウはそれを不思議に思っていた。

「何でそんなにルオンの様子見に来るの？」

白髪の少年は未だ目を覚まさない。安らかな寝息を立てるその様は目は閉じて眠っている様だった。

リアトリスはクロウの質問に遠い目をする。

「クロウは——その、こんな事聞かれるの嫌だと思うけど、どんな気持ちだった？」

「何が？」

クロウは何を問われているのかよく分からず首を傾げる。

リアトリスは眠っているルオンの顔から、クロウに目を移して続ける。

「戦わされる事。カンデラス火山でもセルフイーに言われた『私は知らない』って。本当にその通りだよ、私こんな風に感情を失った抜け殻にされちゃう子が居るなんて想像すら出来て無かった……クロウの事も、何にも分かって無かった」

クロウは黙る。

怒るべきなのか、励ますべきなのか、クロウもまたこういう事を聞かれた時どう反応するべきなのか知らなかった。

リアトリスは沈黙を機嫌を損ねた証と取ったのか、誤魔化す様に笑みを浮かべて立ち上がる。

「迷惑だった……よね。邪魔してごめん、私もそろそろ出発の準備しないと！クロウはギリギリまで寝てて良いからね」

荷物をまとめるのを忘れていた事を今思い出したかの様にリアトリスは、バタバタとテントを出ていく。

残されたクロウは考え込んだまま、隣で眠る共に育った少年の顔を見つめた。

「これが当たり前なのかな。私には分からないけど……ねえ、ルオン。外の世界にはこんな風に私達みたいな人間でも心配してくれる人が居るんだよ」

クロウは彼の横に立ってかけられた弓を見る。

彼の氷の様にうっすら青みがかかった、鳥の彫られた弓。

ラークを中心として他の仲間達は敵であるルオンを危険視し、彼が目覚めるより早く出発しようとしていた。その際、彼の所持していた武器も処分しようとしていたのだが、クロウはそれを止めた。

彼女自身も正直に言えば、ルオンに武器を持って欲しいとは思っていないかった。が、ルオン自身が何を大切にしていたかは誰にも分からない。

(私達に与えられる物なんて武器位だもんね……)

彼女にとつての相棒がラーヴァンである様に、ルオンにとつての相棒がもし弓であるならクロウはそれを取り上げる事など出来なかった。

クロウは自分の武器である投擲用のダガーを掴むとベッドから立ち上がる。休んでいて良いとは言われたものの、出発を間近にして彼女は自分だけ寝ているつもりは無かった。

身体の調子確かめながら身支度を整えた彼女は、テントを出る前にもう一度ルオンの方を振りむいて、『彼女』の事を思い出した。

(レイン、あの時言われた事ようやく答えが出た気がするよ)

自分達がスプラウツでしている事が正しいかと聞かれ、当時のクロウは返答を濁す事しか出来なかった。

しかし、今の彼女はおぼろげながらその答えを得ていた。

(私達が命じられるままに誰かを殺したり、戦ったりした事は多分間

違いだった。けど、そうして生きて手に入れた今は間違いじゃないのかもしれない……そう思わせてくれる人が、まだこの世界には居るんだよ)

「だから、『またね』ルオン」

少年が再び目を覚ます事を信じて、クロウはルオンに別れを告げた。

クロウを除いた仲間達、エッジ、アキ、クリフ、リアトリス、ラークは全員出発の準備を済ませて集まる。布に包まれた深海の剣はリアトリスが持っていた。

そして、リヨウカもそこに加わる。

王都での戦い以降、考え込んでいる事が多く口数の少なかったクリフが彼女に尋ねた。

「命がけの旅だぞ、本当についてくるのか?」

彼の気遣いを不要だと言う様に、リヨウカは毅然とした態度で答える。

「トウカ——アキは一緒に行くのでしょうか? なら、命がけなのはやめる理由にならないわ」

アキはその返答に、姉を心強そうな目で見つめた。

クリフは今度はラークに尋ねる。

「……お前は反対しないのか」

ラークは首を横に振る。

「止めはしたよ、けどその上で力になってくれるって言うなら今の僕達に拒む理由が無い。勿論、信用するかとは別問題だけどね」

クリフは納得いかない表情をするが、リヨウカは特にラークの発言を気にする様子は無かった。

「それで構わないわ、貴方達の立場からしたら信用する方がおかしいもの」

アキは何か言いたそうだったが、何も言わなかった。

代わりに、エッジが進み出て彼女に手を差し出す。

「俺は信じるよ、リヨウカの事」

リヨウカはそれに対して複雑そうな表情を浮かべる。

「……そうだろうとは思ってたけど、警戒位しなさい。そんな事じゃいつか後ろから刺されるわよ」

呆れているような心配しているような声でエツジに忠告するリヨウカに、クロウの声がかけられる。

「無駄だよ、エツジがそんな事言われた位で止める奴なら、そもそも私やあんたを仲間にしたりにしてない」

ちようど、リアトリスは彼女を呼びに行こうとしていた所だったので、必要が無くなつてその場で手に持った剣の包みを持ち直す。

ラークは全員が揃ったのを見て、改めて行く先を確認する。

「クロウも、もう大丈夫みたいだね。なら、話は早い。僕らが目指すのは『刻印術式』の研究者ハーデイロン・アズライトの発見だ。彼がシントリアから避難しているなら、近隣のハスレ、ブストルのいずれかに居ると思う」

そこでリヨウカが早速疑問を呈する。

「待って、あの炎を見ていたでしょう？ エツジの前でこんな事を口にするのは難だけれど、そのエツジ達の父親がもう亡くなっていたらどうするつもり？」

ラークはそれを否定せず頷いて、続けた。

「確かにそうだね。けれど僕は、そう可能性の無い賭けでも無いと思う……心の仲間から受けた報告によると、彼のような研究者が住んでいたブロックと貴族街は被害が少ないんだ」

その言葉にリヨウカは何か思い当たったのか、考え込む。

アキも言われて、初めて思い出したようだった。

「そういえば……私が貴族街に入ったとき、確かにあの辺りの被害は少なかつた気がします」

クロウは首を傾げる。

「それっておかしくない？ あの規模の深術で無事だった所があるなんて。街の中心から火の宝珠の力は使われたのに」

エツジもその意味を考えるように腕を組み、ラークは少々逸れかけた話を戻した。

「とにかく、助かっているならラーヴァンの事も何か分かるかもしれない。どんな些細なものでも僕達は情報が欲しい。仮に彼がもうこの世に居なかったとしても、王都の研究資料を探せば何か分かるかもしれない。どの道目指す方向は、ほぼ同じだ」

皆不安はあっても、とりあえず誰もその方針で異存は無い様だった。リアトリスがラークの説明を補足する。

「情報収集に関しては、サーカスやアエスラングに散らばってる心の一族のみんなも手伝ってくれるの。だから、人手もそれ程心配は要らないよ」

エツジは父親に関する記憶はまだほとんど戻っていなかったが、父の安否の話が出た時は流石に表情が曇った。

しかし、全員で進む方向が決まった今彼はそれを引きずる事はしなかった。

エツジは、みんなを鼓舞する様に声を出す。

「じゃあ、行こう。どの道、今他に出来ることは無いんだ。どんな結果が出るにしろ精一杯やろう」

「フレット！ 貴様、何をやってた。レパートが無断で外に出るのを黙って見ていただと？」

バルロが激怒するのを尻目にフレットは興味無さそうな顔をしていた。

その右腕は火山で負った怪我が未だ癒えておらず、包帯で吊っている。

「……監視しろなんて言われた覚えはねえぞ。大体あいつも俺らと同じクローバースだから無闇に干渉するなつったのはお前じゃねえか」
バルロは、手甲でそんなフレットの顔を殴り飛ばす。

彼の口から血が飛び、それを見ていたセルフィーは息を呑んだ。

「互いの裏切りや脱走の監視は名有りの最重要任務だ！ そんな事も忘れたのか！」

そう吐き捨てると、彼はフレットを置いてその場を去った。

倒れ伏した彼に、セルフィーは恐る恐る近付いて声をかける。

「……大丈夫？フレット」

「うるせー、触んな……こんな怪我してなかったら叩き潰してやってるのによ」

フレットは彼女に差し出された手を拒絶する様に言い、セルフイーは怪我の原因が自分である事に罪悪感を感じて目を伏せる。

「ごめん……」

「チツ、お前もお前だ」

フレットは舌打ちすると、彼女を置いて自室へと歩き去る。

赤毛の少女はどうしたら良いのか分からない様子でその場に立ち尽くした。

全てを見ながら、その中には加わっていないかったクローバーズ『純白』のネイティールは呟いた。

「結局行ったのね、レパート」

「最初はどこから行くんですか？」

サーカスを出て早々にアキが尋ねる。

彼女は以前対立していたのが嘘の様に、仲間内でまだ孤立しがちなリョウカのそばを離れなかった。

「とりあえず近いところから順に、ハスレから行くのがやっぱり順当じゃないか？」

それに対して、この辺りの地理に詳しいリョウカは何とも言えない表情をする。

「そうね、ただブストルにも言える事だけれど、ハスレは王都に近いだけあって大きな街よ。加えてシントリアからの距離も近い。避難してきた人々が押し寄せているとするなら、男性一人が居るか居ないか探すのはかなり難しいわよ」

そんな後ろ向きな考えを否定する様にクロウが言った。

「関係ないよ、これだけ人数いるんだし居るなら絶対見つける」

アキとエツジはその発言に少し意外そうな表情をする。

今までの彼女ならあまり口にしなない様な言葉だったからだ。

と、そんな彼らの足が止まる。

耳障りな子供の笑い声が響いて、風が彼らの歩く街道の砂塵を巻き上げる。

「……スプラウツか」

エツジがそう推測して剣を抜く。

砂塵が晴れた所には、黄緑の髪をした生意気そうな少年が奇妙な武器の柄の様なものを二つ持って立っていた。

クロウはその自信満々の相手の顔を確認して眉をしかめる。

「誰、あんた」

問われた少年——レパートは名乗りを上げる。

「俺は、セブンクローバース。『流連』のレパートだ！そして、これからお前らを倒す男だ！」

言いながら、手に持った物体に空いた穴をクロウに向ける。

「この深素銃「始」があれば、俺に敵なんか居ねえ！」

彼が引き金を引いた瞬間、彼が「銃」と呼んだ物体から光が飛び出しクロウの頬に赤い線を残す。

彼女はその速度に驚きながら反撃に出ようとするが、レパートが再び引き金を引こうとするのを見て彼の攻撃する先が読めず仕方なく閨属性のデュープスで障壁を張って防御に回らざるを得なくなる。

「ハッ……！」

エツジやクロウだけでなく、それ以外の仲間達も次々戦闘態勢に入るのを見てレパートは笑みを浮かべる。

——同じ頃、クロウが寝ていたテントの中。

本能的に戦闘の気配を感じてか、偶然か、『孤氷』のルオンは目を覚ました。

第六十四話 凍った記憶

「セツシブバレット！」

「エッジ、クリフさん、ラーク下がって！」

レパートの『銃』の攻撃を前にしてリアトリスは防御手段を持たない三人を、自身の展開した光属性の障壁で守る。

銃の攻撃は虹色の光の軌跡を空中に残し、見たところ深術の一種の様であったが威力自体は防げない様なものではなかった。

しかし、

(攻撃が小さすぎて見えない……！)

クロウは苛立つ。

リアトリスとクロウは深術障壁を展開する事で身を守っていたが、同時にその状態では敵の二丁の拳銃の銃口を見定める事が出来ず、エッジ達は反撃できずに居た。

ただ一人、アキを除いて。

「裂駆閃！」

突進と防御を同時に行うアキの『明の天傘』の攻撃に銃弾を弾かれ、レパートはやむなく回避し彼女の側面に回りこむ。

「いくらその武器が丈夫でも隙だらけだぜ！」

アキは自分に向けられた銃口を横目に見て即座に反応する。

「飛天翔」

上空へと飛び上がったアキを捉え損ね、レパートの銃撃は空を切った。

「チツ、うざってえ！」

レパートは空中で静止した彼女へ銃口を向け、彼女もまた傘の先端をレパートへ向ける。

「ツインバレット」

「落花散！」

一直線に急降下した明の天傘の一撃に、深素銃「始」の攻撃は軽々と弾かれた。

それによってレパートはバックステップしながら再び回避を余儀

なくされる。

苛立ちを露にしながら、彼は再び技の直後の隙を突いてアキを狙う。

流石に急降下の着地の直後では動きが一拍遅れ、アキは自分に向けられた銃口から何とか次の敵の動きを予測しようと睨む。

と、その両者の間にリヨウカが割って入る。

「蝶旋舞」

突進した彼女の周囲をくるくると回転する宵の地衣が、アキを狙ったレパートの攻撃を弾き飛ばす。

アキはリヨウカの行動に微かな驚きの声を上げた。

「姉さん……！」

「何も攻防一体の武器は、トウカだけじゃないわよ」

そう微笑んで、リヨウカは再び蝶旋舞で体の周囲を布で守りながらレパートに突進する。

姉妹の直線的な攻撃の連続で回避を強要され続けるレパートは、今度ではリヨウカの背後から彼女を狙った。

「後ろ貫ったぜ」

「馬鹿ね、定形を持たない守りが宵の地衣の真価よ」

余裕を見せながら背中を見せたまま言ったリヨウカの周りで衣は即座に方向を変え、繭の様に彼女を包んでレパートの銃から放たれた虹色の光を弾き飛ばす。

リヨウカの武器の方向転換の速度はアキのそれを上回っていた。

しかし、アキは自分を庇う様に突進してきた姉の行動にやや焦った様に声をかける。

「下がってくださいー！」

リヨウカの武器は全周囲をカバーするがそれは完全ではない。布同士の間には若干の隙間がある。

限りなく点に近い銃の攻撃に対してリヨウカの武器がそれ程相性は良い筈は無く、彼女の「余裕」はそれを誤魔化す為のものでしかない事にアキは気付いていた。

が、リヨウカはそんな妹の言葉に皮肉めいた笑みで返す。

「なら、あなたも下がらなさい。明の天傘の大振りな攻撃だけじゃ危険すぎるわ」

そう口にするリョウカの脇を、銃の光が防御をすり抜けてかすめる。

少しコースがずれていれば、彼女の身体は撃ち抜かれていただろう。

「——守ると言ったでしょう、命に代えてでも」

その目に退く意思は微塵も無かった。

「くっ！」

エッジは二人が敵のペースを崩したのを見てリアトリスの光の障壁から外に出て攻撃に移ろうとするが、的確なレパートの牽制に阻まれ再び壁の内側に引っ込むのを余儀なくされる。

レパートが両手に持つ二丁の未知の武器は防御の固いアキとリョウカにこそほとんど実力を発揮していなかったが、その連射と攻撃範囲は凄まじくエッジはおろか、ラークとクリフも下手に動けず이었다。

レパートは感情的な態度とは裏腹にアキやリョウカに突進される度、無駄撃ちをせずエッジ達の方に牽制射撃を行っている。

それに加えてレパートは初級程度ではあるものの、風属性の深術ウインドエッジを詠唱破棄してエッジ達の隊列を崩しに来ており、エッジ達はその度一度回避して再び彼の射線から逃れなければならなかった。

エッジとクロウも壁越しに深術で反撃するものの、アキとリョウカを巻き込まない様にしながら障壁越しの限られた視界で放てる深術では決定打にならなかった。

かといって、二人が前線で戦ってペースを崩してくれて互角の状況では安易に二人を下げる訳にもいかず、人数差にも拘らず戦況はこう着していた。

(お互い決め手が無い……このままじゃ)

エッジは焦りを募らせながら、僅かな変化や隙も逃さない様に必死に状況を観察し続けた。

戦いの気配に目を覚ましたルオンは青い弓を掴み、治療されていたサーカスを抜け出して無言で森の中を進んでいた。

狙撃手である彼は地形等から大よその戦場の当たりをつける事には慣れていた。

ルオンは右目の周囲にごく小規模の深術を使い氷でレンズを形成すると、すぐに戦況を把握した。

「……長距離」

眩き、ルオンは手袋越しの自分の弓に氷のデープスを集束する。

瞬く間に、武器は素手で触れれば肌が張り付いてしまう程の超低温状態に突入した。

弓そのものに氷のデープスを集束しても矢に何らかの効果が現れる訳ではない。

これは、弓の性能を引き出す為のものだった。

弓は温度変化に影響されやすい武器であり、季節によってもその性能が変化する。

夏場であれば本来の性能を発揮することは困難であり、冬場にこそ弓は最大の威力を発揮する。

そして、真冬より更に低温の状態でなら……。

勿論普通の弓なら耐えられない。しかしルオンはそれを自身の得意とする氷の属性と、専用の武器で可能にしていた。

——耐冷弓「フレキシブルスナイプ」。

本来であれば耐えられない程の低温状態に置く事で通常時の倍以上の射程距離を発揮するその武器を構えて、彼は淡々と仲間を助ける為に狙いを定めた。

『流連』のレパートが敵と交戦しているのを確認し、彼と乱戦を繰り広げる二人の少女を確認し、障壁の内側で援護をしているオレンジの髪の少女、リアトリスの無防備な背中に視線を移した所でルオンの狙いは止まる。

戦況を見て、一番狙いやすいのは間違いなく彼女だった。

ルオンの中で幾度も『巖』のバルロに言われた言葉が蘇る。

「サポートの後衛も重要な戦力だ、前線で戦うものだけでは戦いは立ち行かない。常に敵の後衛に注意し、味方の後衛を守れ」

(……何でそんな事)

それは、ルオンが後衛を欠いた戦いの後に改めて弓を使い始め、躊躇い無く人を射る様になった頃に言われた言葉だった。初めて仲間を、レインを失った時に。

名前の無かった彼の、姉同然だった彼女を。

同時に連れて来られた日、同じ白い髪だというだけで一緒に扱われた彼女。

雨が降っていたから「レイン」と名づけられた彼女と、ただ適当にそれに合わせて「ルオン」と名付けられた彼自身。

何の意味も無い名前でも、彼にとってそれは姉弟の絆同然の大切なものだった。

遠い日、恐怖で震えた彼の手を握ってくれた彼女。

うなされた時、側に居てくれた彼女。

彼が守りたくて、守れなかった仲間。

「僕は……仲間を、守る」

放たれた矢は木々の間を抜け、放物線を描いてまっすぐにオレンジの髪を捉えた。

「……………え？」

リアトリスは自分の髪を数本裂いて横をすり抜けていった冷たい風に振り向くが、背後には立ち並ぶ木々だけで誰も居なかった。

直後、前方から上がった小さな悲鳴にリアトリスは慌てて視線を目の前の敵に戻す。

矢が掠ったレパートの左手の銃が動かなくなっていた。

彼は狂った様に引き金を引くが、その銃は一切反応を示さない。

目に見えて焦る彼に向けて、更に立て続けに矢が降り注ぐ。

それを必死に避け、残った右手の銃で撃ち落としながら彼は吼えた。

「くそつ、あいつ的の判別も出来ねえのかよ！」

クロウもそれを行っている人間に気付いて、彼の名を口にする。

「ルオン……う？」

「ぐあ、うー！」

隙が出来たレパートの脚をエツジの放った魔神剣が捉え、レパートは立っていられなくなり屈み込む。

「くそ、負けるか！」

レパートは詠唱破棄した深術をアキに向け、彼女一人に的を絞って攻撃した。

「あ、っ！」

体勢を崩された状態で銃の攻撃を腕に受け、アキの左腕から血が飛ぶ。

それを見たクロウの目の色が変わる。

「俺だってクローバーズなんだ、敵を倒して俺の力を証明してやる！」
リョウカが割って入ろうとするのも間に合わなかった。しかし、アキの額に向けて放たれた銃の光は、唐突に上から降ってきた黒い霧に吸い込まれて消える。黒い霧は一つではなく、四方向からレパートを飲み込むように頭上から降ってきた。

「……あんた、もしかして命令受けてないの？自分が殺したいから殺そうとしてるだけ？」

「何だ、何だよこれ！何で銃が効かねえんだよ！」

レパートがパニックを起こして乱射した光は、黒い霧を貫通する事も出来ずに飲み込まれていく。

「そんなに殺し合いがしたいなら、望み通りにしてあげる——マールレススパート！」

クロウの声と共に、黒い霧がその密度を増した。

膨れ上がった雷雲の様なそれに隠れて、瞬く間にレパートの姿はエツジ達の目から見えなくなる。

上級深術、マールレススパート。

物理的な破壊力を持たない代わりに、回避が極めて困難な範囲攻撃。

単に視界を塞ぐだけのディープリミストとは違い、刺すほどの冷気を持ったそれに触れた瞬間レパートは自身の右手が凍り付いていくのを見て、自分の体が固まっていく恐怖に絶叫した。

『巖』のバルロはレパートが無断で行動した事に腹を立てていた。「役立たずめ、何の為にあの武器を与えたと思っている……」

彼の呟きに応える様に『純白』のネイティールが現れ、尋ねる。

「捜しますか？恐らくはクロウと戦いに行つたものと思われませんが」

唐突に声をかけられた事に驚く様子も無く、バルロは首を横に振る。

「今頃はとうに負けているだろう、奴に他の名有りと競るだけの力など無い。だからこそあの試作品「始」を与えたのだ。本来であればきちんと戦闘情報を収集させるつもりだったが、それが叶わない以上武器だけ後で回収できれば良い」

口にしながらか諦めたのか、やや落ち着きを取り戻してバルロは続けた。

「次の『流連』を探すでしょう、奴の代わりなどいくらでも居る」

「あ、ぐあああ、あああ！」

悲鳴をあげながら、レパートは身をよじる。冷気で彼は目を開けている事も出来ず、ただただ暗闇の中で逃げ場を求めた。

「……終わりだよ、さようなら」

彼の声を聞きながら、クロウは無表情に止めを宣告した。

※セブンクローバーズの情報が更新されました。

深術のエキスパートとして育てられた孤児の集団。

その中心的活動を担う精鋭にして、同時に味方同士の監視者でもある七人の深術士^{セキコアラ}。

人数が多いのは裏切りや命令違反を冒そうとしたメンバーが飛びぬけた実力を持っていても複数人で対処し、従わせる為。

各自がセブンクローバーズとしてそれぞれ識別名称を持っているがあくまでコードネームであり、成立してからそれほど年月が経過していない為、本人の能力と名前が一致している者が多いが『流連^{りゅうれん}』の様に二代目である場合は本人の能力等とは無関係に前任者の識別名称を引き継ぐ事になる。

また、全員が自身の最も得意な一属性の使用に特化している。

『爪雷^{そつらい}』

名前：フレット

武器：専雷爪^{せんらいそつ}「スペシャライジング」

特化属性：雷

才能：並外れた身体能力

戦う事に喜びを見出し、誰よりも危険な少年。

術士としての素質もさることながら、近接戦闘のみでも正規の騎士を圧倒する年齢不相応の身体能力を持つ。

実力はともかくとして性格面に多大な問題があり、命令の有無に関わらず単独行動が多い。

また、戦いそのものに喜びを見出す性格ゆえに強敵との戦いをわざと引き延ばしたり、見逃す事もある。

それ故に実力とは反比例して仲間からの信頼は薄い。

巨大な鉤爪の形をした彼の武器は、雷以外の属性のディープスを貯める機能を排することで雷属性の使用効率を格段に上げている。

この武器では通常の方法で他の属性を使用することは出来ない。

多少の傷を負っていたとはいえラークとすら互角に切り結ぶ身体能力を持ち、優れた術士でありながら七人の中では唯一好んで接近戦

闘を行う。そのラークにも筋力やスピードでこそ劣るものの、雷属性の爆発を上乗せした技の威力で上回り、用途に応じた術を使いこなす事で高い防御能力を得ていたリアトリスの障壁も、武器と深術両方の特性を併せ持った攻撃で粉々にした。

その実力は紛れも無く七人中最強である。

『巖岩』

名前：バルロ

武器：錬成手甲「岩堵」

特化属性：地

才能：観察と経験による弱点の看破

子供達を鍛え上げた全員の師であり、統制者でもある老人。

元は軍人で、岩で殴られる恐怖をもって全ての子供をコントロールしている。

この人間なくしてスプラウツは集団として機能しない。スプラウツの中心と言っても過言ではない人物。

他のクローバーズと比べると突出した戦闘能力を持っている訳ではないが、全員の弱点を熟知し裏切りを想定して身内との戦いに特化している為、直接戦った場合クローバーズ全員を打倒しうる手段を用意している。

拳を『握る』ことをトリガーとして一定の間合いに岩を形成し、腕の動きと連動させる手甲を武器として使っており、自分から離れた間合いに居る相手を『殴る』事が出来る。

これは、単純ながらも強力な接近戦の手段で、敵との間合いを空ける事に優れている。

また打撃が発生する箇所と拳の間には何も無い為、正確に間合いを把握していない相手には壁などで遮断する事も難しい。

現実主義者で自分がとうに『黒翼』や『爪雷』に力では及ばない事を認めた上で、正々堂々に拘らず数の利や状況、心理的死角を突く事で彼らとも互角以上に渡り合う。

『紅蓮』

名前：セルファイ

武器：鞭、炎熱鉱石えんねつこうせき

特化属性：火

才能：感知

燃える様な赤い髪の少女。

感情的で激し易く『爪雷』そうらいからは本来の識別名称を無視して『爆発セルファイ』と呼ばれている。自身の実力が『爪雷』そうらいには及ばないと自覚しているものの、術士として一流であるというプライドを持っている。その為興味の無い事にはやる気を出さない『爪雷』そうらいとは反りが合わず、喧嘩が絶えない。

彼女はデイープスの位置を正確に把握することに長けており、温熱筒おんねつとうにも利用されているデイープスの集束コレクトを補助する鉱石を併用する事でその能力全てを攻撃に利用している。

放り投げた赤い鉱石を核にして詠唱無しで術を開始し、術が相手に届くまでの間も集束コレクトを続ける事でクローバースでは唯一自力で詠唱無しの上級深術を発動する事が出来る。これは感覚的には『一度投げた石に、後から投げた石を空中でぶつけ続ける様なもの』であり、高い感知能力を持つ彼女以外には真似する事が出来ない。

自分と同等以上の感知の才能を持つたりアトリスを激しく敵視し、またリアトリスの側も防御に特化した自分のスタイルと正反対の彼女の戦い方を危険視している。

◎接華浮燈せつかふしとうの陣

単独で彼女が戦闘を行う場合、接近戦が不得手な彼女がそれをカバーする為に使用する切り札。

手持ちの炎熱鉱石の大半を空中にばら撒き、それを「触れると爆発する赤い光の珠」に変換する事で自分の周囲全体を守る領域を作り出す。

性質上、ほぼ全ての炎熱鉱石を消費してしまうため一度の戦闘で使えるのは一度が限界。

一見、珠同士に隙間があるため壁としては機能しないように見えるが、陣の内部は全て彼女の『感知』の範囲内であり小さな異変でも即

座に反応してセルフィー自身が爆発を起こす事が出来る。その為
ラークのスピードを以てしても突破するのは難しく、相手が強力な深
術で一点突破を狙ってきても外縁部だけを爆発させる事で衝撃を半
減されてしまう。

また、全ての光の珠は陣を張っている範囲内なら彼女自身が任意で
動かせる為、少数が減っても陣は機能し続ける。

総じて防御すら攻撃によって補う、ただひたすら攻撃に特化した彼
女の戦い方を象徴する陣。

『黒翼』

名前：クロウ

武器：スローイングダガー

特化属性：闇

才能：体内に持った闇の宝珠の欠片

スプラウツを脱走する前のクロウ。

彼女はエッジ達には自分もまた子供達を管理し教育する側であつた事を告げなかったが、これがクロウが脱走する事が出来、また抜けた後も執拗に追われ続ける最大の理由である。

宝珠の力を使っている状態のクロウは、術士としての資質のみで考えれば全てにおいて最高クラスの能力を所持しており、全ての術の詠唱を破棄し、『爪雷』^{そうらい}すら及ばない威力の術を用い、数kmの範囲の視界を闇で閉ざしたまま内部の状態を正確に把握し相手をピンポイントで攻撃する事も可能。

通常時にクロウがこれらの能力を使用すると相応の負担が身体にかかる（目の色の変化はこれに因るもの）が、体内の闇の宝珠の欠片の意思⇨ラーヴァンを黒い巨鳥として実体化させた状態ではその負担が無くなり、上記の能力が制限なく使える様になる。

能力だけなら間違いなく最強のクローバースであったものの、本人が人を殺す事を無意識に嫌っていた為広範囲に効果が及ぶ様な術は滅多に使用せず、黒い霧による感知を活かした情報収集や最小限の殺害に抑える暗殺等を主としていた。

自ら望んで戦いに赴く事で最強の座に位置する『爪雷』そうらいとは対極であり、能力的にはクロウが勝るものの無意識に力を抑えてしまうため、殺人を楽しみさえする彼には対人戦の能力では一步劣る。

『流連』りゅうれん

名前：レパート

武器：深素銃「始」↑New

特化属性：風

才能：替えの効かない才能をもっていない、実験台として使い捨てて問題ない最低限の実力↑New

二代目。前任者とは属性以外共通点なし。

他のメンバーと比べ成ってから日が浅く、実力的にも劣るが、それ故認められた事を喜び調子に乗りすぎている所がある。

この世界において普及していない最新鋭の武器、深素銃「始」を使用する。↑New

これには世界の始まりに起きたとされる。六属性の圧縮によるビッグバン爆発（クロウもフレットに追い詰められた際、これと似た現象を閻属性の圧縮で強引に引き起こしている）の原理が応用されており、名前の「始」はこれと試作品で有ることに由来する。

トリガーする度に銃の内部に人工的に集束された六属性のデンプスが圧縮され、それによって引き起こされた爆発のエネルギーが光弾として発射される。

一発ごとに空気中のデンプスを集束して打ち出している為弾数に限りはないが、内蔵の動力には限りがあり稼働時間は最大でも20分。連射し続ければ10分ほど（本来それを考慮して二丁が渡されていた）。

強力ではあるものの六属性の力が均等に発揮される状況下でなければ使用できず、均衡を崩す温度変化に弱い等まだ問題点も多い。

レパートがこの武器の使用者に選ばれたのは、彼が辛うじてクロウバーズの穴埋めが出来るギリギリの実力を持った「数人の内の一人」であった為であり、『巖岩』は彼の事を実験台の駒位にしか考えていなかった。

彼自身も識別名を持たない他の仲間とそれほど実力差が無いことは自覚しており、選ばれた事をチャンスと考え自分の実力を証明しようとする。

決して認められる事など無いのだと気付かないまま。

『弧氷』

名前：ルオン

武器：耐冷弓たれいきゆう「フレキシブルスナイプ」↑New

特化属性：氷

才能：『爪雷』そうらいには劣るものの高い身体能力、狙撃

感情の大部分を喪失した少年。

弓という単独戦闘を苦手とする武器を持ちながら、空中で正確に弓矢を操るボディバランスと素早い跳躍力を持ち、氷柱を発生させる属性技「扇氷閃」と合わせて単独行動でも十分詠唱時間を稼ぎ戦闘する能力を持つ。

術の詠唱速度・威力・弓の扱い全てにおいて安定した能力を持つもののクローバース全体の中では尖った能力を持たない様に見えるが、その真の脅威は「狙撃」。

感情を欠落した彼は無感情に、確実に遠距離から標的を仕留める事が出来、七人中最も遠距離での戦闘を得意とする。

クローバースは個々としては強力な力を持つものの、我が強い者も多い為コンビネーションを欠く事も多い。しかし、ルオンはその戦闘スタイルから全員の能力を邪魔することなく彼らのサポートをする事が可能である為、噛み合った時の脅威は何倍にもなる。

特に、広範囲の索敵を行う事が出来るも殺人に抵抗を示すクロウとの相性は良く、二人が組む事で深術の破壊の痕跡を一切残さず特定の相手を消す事が出来た。

スプラウツの中では監視無しでも命令違反をせず、単独行動もこなせる貴重な人材。

耐冷弓「フレキシブルスナイプ」はルオンの作り出す低温状態に耐えられる事を最重要視して作られており、温度変化によって通常の使

用と、長距離狙撃用のモードを使い分けられることが出来る。↑New
その反面で長距離狙撃時の弓としての性能が上がった為に必要とされる力も相当なものであり、ルオンやフレットの様な高い身体能力を持つ人間以外には扱えない。

事実上氷属性の適性と身体能力を併せ持ったルオン専用の武器。

『純白』

名前：ネイデール

武器：??

特化属性：光

才能：??

クローバースでは『巖岩』を除いて唯一の成人。

味方であつても姿を見たものが少なく、部屋にこもっている時間も長いが『巖岩』からの信頼は厚く、他の全員が拠点を留守にしている場合単独で『巖岩』の役目を引き継ぎ、子供達の統制者の役目を担う。

リアトリス同様、希少な光属性を最も得意とする術士。

それだけでも十分特異な才能であるが、クロウの様な例外を除いてまず不可能な中級深術「ホーリーランス」の詠唱を破棄し、咄嗟の発動をして見せる等その実力は底が知れない。

深術士の数は騎士団や軍の外部には少ない為、ともしれば迫害にすら遭いかねない深術の才能のある子供達の未来を憂い、その幸福を願う。

不幸な未来や現実を見せない為ならば、躊躇い無くその命を摘む程に。

第六十五話 例え誰かを殺してでも

マーンレススパートの範囲は見る間に拡大した。

ひと一人を包む程度だったそれは家を飲み込むほどに成長し、濃度を増したそれは直に触れる事さえ出来そうなまでの濃さになる。

敵の間近で戦っていたアキとリョウカはそれに巻き込まれない様、後退する。

出口の見えない闇の中で、レパートは動かなくなった右腕を振り回しながら目前に迫る死を振り払おうとした。

そんな彼の無事な方の手を、エッジの手が掴んだ。

「!? な、エッジ?」

自分の放った術の中に飛び込んだエッジの姿を見て、クロウは慌てて術を中断させる。

黒い雲が晴れて遮断されていた暖かな空気がエッジとレパートを包む。肩で息をしながら二人はその場に崩れ落ちた。

が、直後にレパートの周りで生まれたつむじ風が砂塵を巻き上げ彼の姿だけを隠す。

「逃がす訳無いでしょう!」

「ダメだ!」

レパートに逃げられる前に黒い槍で敵のあらゆる逃げ道を塞いで止めようとするクロウの行動を、エッジが厳しい声で制止する。

「何言ってるの、今逃したらこいつは——っ」

一瞬クロウが止まった隙に、エッジ達全員を砂塵が吹き抜ける。

視界が晴れた時、レパートの姿は何処にも無かった。

リアトリスはすぐにアキを治療する為に駆け寄り、クロウはエッジに食って掛かった。

「何してんの! あと少し私が術を中断させるのが遅れたら死んでたんだよ? その上で更に敵を庇うなんて、どうかしてる!」

エッジはゆっくりと立ち上がる。

その服の端々は真っ白に凍り付いていた。

「クロウが殺しちゃ、ダメだ。無理矢理戦わされてる子供を」

エツジはクロウの瞳と睨み合う、クロウは気に入らなかつたらしく眉間のしわが深くなる。

「無理矢理？あいつは命令も受けてなかった。遊び半分で戦いに来たんだよ、今見逃したところでまた同じ事の繰り返しだよ」

エツジは首を横に振り、クロウと真正面から言い合った。

「命令を受けてなくても、彼に選択肢は無かつたんだよ。セオニアでクロウは言っただろ『誰とも戦いたくない』って。戦わされてるだけの子供と、クロウとを殺し合いなんてさせられない」

「私の望みなんてどうでもいい！そんな事の為に、エツジやアキ達を死なせられる訳無いでしょう？」

『そんな事』じゃない！クロウの望みはそんな、叶えられない高望みじゃない」

「高望みだよ、私みたいな人殺しに今更そんな望み抱く権利なんて無かつたんだから」

クロウはエツジに背を向けて、どこかへ足を向ける。

「待つて、どこ行くの？」

リアトリスの質問にクロウは彼女の方を見ないまま、感情を抑えた低い声で答えた。

「……さっきの狙撃してきたのルオンだよ、だから私が様子を見てくる。敵か味方かはつきりさせておいた方が良いでしょう？」

そう言うって、返事も待たずにクロウは仲間達の元から離れた。

「追いかけてないのか？」

クリフは彼女を心配して追いかけてようとするが、アキがそれを止めた。

「今は、少し時間を置いた方が良いでしょう。クロウさんが大丈夫だと言うなら、私達は待ちましょう」

アキの治療が終わってリアトリスは彼女から離れ、リョウカが入れ替わる様にアキの隣に移動した。その姉の様子に軽い出血だけだったアキは照れ半分に苦笑いするも、彼女の表情が真剣なのを見て大人しく左腕の状態を見せた。

エツジはクロウの残した言葉に悩んだまま立ち尽くしていたが、そ

んな彼に助言するようにラークが声をかける。

「エツジ、これ以上クロウの事に深入りしない方がいい。この先君が辛くなるだけだ」

「……どういう意味だよ」

エツジは言葉の意味がよく理解できず、困惑した表情で聞き返した。

ラークはほんの一瞬思量した様だったが、エツジと隣に来たリアトリスにだけ聞こえる声で言った。

「この先、彼女を死なせなければいけなくなつた時。君が耐えられなくなる」

一瞬、エツジの頭が真っ白になる。

けれど、ラークとリアトリスの表情がその可能性を本気で考えているものだと知って、エツジは戦慄した。

「死なせる、って。何で……」

「一番初めに説明したはずだ。宝珠を元の形に戻さなければ世界は崩壊する、そしてその欠片をクロウが持っている。だったら、元の形に戻す為に何をしなければならぬと思う？」

エツジは必死に頭を働かせる。

クロウが持つ宝珠の欠片を取り出さなければ、宝珠は元に戻らない。

そんな当たり前の事をどうして今まで考えてこなかったのかとエツジは自分自身に苛立った。

「でも……元々クロウは普通の人間だろ？宝珠の欠片が埋め込まれただけの物なら、取り外せば良いだけでクロウを殺す必要は無い筈だ」話を聞いていたリアトリスが横から説明する。

「エツジ、どうして私達の髪とか目は一人一人違う色だと思う？これは、身体の中に皆が持つてる『属性』が表面化したものなんだよ。だから普通は髪の色と瞳の色は大体同じだし、それが変わることなんて有り得ないの」

言われてエツジはその意味に気付く。

彼女が術を使う時、瞳が黒く染まっていた事に。

リアトリスは説明を続けた。

「でも、クロウは違う。闇の宝珠の力を使う時、明らかに身体の属性が変化する程の負荷がかかっている。それに、この前の姿……多分、宝珠の欠片を取り出すなら身体への影響が出るのは避けられないと思う」
言いながら目を伏せる彼女に、エッジは震えながら尋ねる。

「知ってたのかりアは？クロウを……死なせる事になるかもしれないって」

「知ってたよ、クロウと初めて会った時から」

口にしながらか、自嘲の笑みを浮かべるリアトリス。

「全部知ってたよ、クロウの身体のディープスのバランスがおかしい事も、いずれはクロウから宝珠の欠片を取り出さなきゃいけない事も、そんな事をしたらクロウの身体がどうなるか分からないって事も……でも、考えない振りしてたの」

彼女はエッジの事を見つめて、思い出す様に続けた。

「エッジの事見てたらね、本当にクロウを助けられる様な気がして……クロウを守る事が宝珠の欠片を守ることになるんだって自分に言い聞かせて、私は目を塞いでたんだよ」

エッジは彼女の言葉にショックを受けながら、尋ねた。

「それでもリアは、クロウを助けたいと思ってるんだろ……？」

リアトリスは首を横に振った。

「——私は世界とクロウとどちらかしか助けられないなら世界を取るよ、私はシンだから。例えクロウを殺す結果になったって、私は世界を守る」

絶句するエッジに対して、リアトリスは柔らかく微笑んで付け足す。

「エッジはクロウの側に居てあげて？私じゃ最後までクロウの味方でいてあげられないから」

呆然とするエッジを置いて、リアトリスとラークは彼の側を離れた。

エッジは味方を失った様な感覚を感じながら一人立ち尽くす。

「……」

木の陰で隠れて聞いていたクロウは顔を伏せたまま今度こそルオンのところへ向かった。

「くそっ、何だよ、何だよこれ……！」

クロウの深術に触れ、右手が氷像のようになってしまったレパートは左手にまだ使える銃を握りしめ、凍った右手を庇うようにして森の中を逃げていた。

視界の悪い中で彼は枝を見つけてはそれを慌てて避け、足元の石を見つけてはそれにつまずかない様足を動かし続けた。

しかし、その焦りから彼は木の根に足を取られて地面を転がる。

痛みから彼は自分の手が欠けた恐怖にパニックになり、右手を二度もなぞる様にしてようやく無事なのを確かめた。

「何でこんな事になったんだ……俺は、こんな事したかった訳じゃないのに」

スプラウツの本拠地に戻れば治癒術を使える術士がいる。

そこへ辿り着けばきつと治して貰えると、そう願う事で恐怖を抑えながら彼は逃げ続けた。

クロウと、戦わなければいけない現実の両方から。

クロウが見つけた時、ルオンは驚く程静かにその場に立っていた。既にフレキシブルスナイプも構えておらず、以前の様にクロウに対して攻撃しようとしめない。

彼女の姿を見つけたルオンは、仲間として当たり前の様に敵意の無い声でクロウに言った。

『火の宝珠を使え』っていうのが最後の命令だった。でも、もう命令が無い」

その瞳はひどく遠くを見ており、何をして良いのか分からないと迷っている様にも見えた。

クロウはそんな彼の様子に胸を痛める。

「だから、仲間を守る。けど、レパートも仲間なのに。どうして僕は――」

「ルオン……」

呆然と、ルオンは手の中の弓を見つめた。

俯く彼の首筋に目をやったクロウは、そこに獣の様な体毛があるのを確かめてカンデラス火山でのフレットとのやり取りを思い出す。

「何をしたら良いのかな、クロウ。僕は……次、何をしなきゃいけないのかな」

それは迷っている人間の言葉ではなかった。

ただ、ただ機械の様に疑問も持たずに、ルオンは誰かに命令されるのを待っていた。

クロウはいたたまれなくなって、自分よりずっと小さな彼を抱きしめる。

「もう良いんだよ、ルオン。悪い夢は終わったの。だから、これからはあなたがやりたい事をやって良いの」

クロウの腕の中でルオンは首を傾げる。

「それは命令？やりたい事が無くても？」

一瞬クロウは当然望みはある筈だと思いつ込んでいた自分の考えを恥じて撤回しようかと考えるが、すぐに思い直して頷く。

「そうだよ、やりたい事を見つけるの。何が何でも……出来ないなんて絶対許さない」

ルオンは考え込み、それから答えた。

「じゃあ、とりあえず仲間を守る。クロウは、仲間だよな？」

はっ、とクロウは顔を上げる。

「……当たり前じゃない」

何の銜いも無く自分の顔を見つめる彼に応えてクロウは笑った。

(レイン、ルオンの事は私がちゃんと守るから)

今は亡き少女にクロウは心の中で誓った。

「傷大丈夫か？アキちゃん」

「心配性ね、あの位のかすり傷で」

「いや、あんたの方が心配してただろ！」

未知の敵を相手に真っ先に最前線で戦ったアキを気遣うクリフの

様子に、リョウカが呆れた様に突っかかる。

「妹の心配をするのは当然でしょう、あまり私の妹に近付かないで。あと名前にちゃん付けしないで」

辛辣な当たり方をする姉をアキは制止する。

「クリフさんは心配してくれてるだけです、呼び方くらい気にしませんから」

それを聞いたリョウカは口元に笑みを浮かべて、クリフを睨む。

「ほら嫌がつてるじゃない」

「じゃあ、なんて呼べば良いんだよ。呼び捨てにしろつてのかよ」

「クロウのことは呼び捨てにしているでしょう？二歳下だけで私の妹を子ども扱いしないで、あと兎に角近付かないで」

ラーク達の間で交わされていた話を知らないまま騒々しく会話を繰り返す三人を見つめながら、リアトリスは尋ねた。

「ねえ、ラーク……エッジ今居ないよね？」

「ああ」

鋭敏な聴覚を持つラークが保証する。

「何でクロウだったのかな、何で人の体に宝珠を埋め込むなんて事したのかな」

ラークは彼女の弱音を責めなかった。

「宝珠の力は人が手にするには大きすぎるものだ。例えクロウに埋め込まれなかったとしてもどこかで必ず別な形で犠牲になる人間は出た筈だよ。だから、僕達は人の手から宝珠を遠ざけなきゃいけない」

リアトリスは頷き、それから付け足した。

「うん、分かってるよ。大丈夫。ただ、……——ああ、駄目だね私、こんな事口にしたらまたラークが辛いだけだって分かっているのに」

リアトリスはラークの肩に縋る様に顔を伏せた。

「私クロウを死なせたくない……クロウが生きちゃいけないなんて思いたくないよ」

ラークは決してその言葉を否定しなかった。

第六十六話 本能共鳴技

《王都へ続く街 ハスレ》

二大陸を統べるアクシズⅡランド王国、その中心である王都シントリアは高い城壁に囲まれていた。

そうして人の生活圏とモンスターの生活圏とを隔てなければ、都市機能を維持できないからだ。

特にここ数十年程で凶暴化した動物——モンスターの数は増加傾向にあり、きちんとした城壁を維持できない漁村トレンツ等の田舎では村を守るための狩人や賞金稼ぎ、といった何らかの自衛組織が必須だった。

王都のすぐ隣であるこのハスレも例外ではなく、王都より街の規模そのものが小さい為一回りサイズは落ちるものちよつとやそつとで乗り越えられそうに無い城壁で囲まれていた。

「すごい人だな……」

「シントリアから避難して来た人達をまだ収容しきれてないんだね、多分貿易の中継地のブストルの方も同じだよ」

人込みの中であらうにかはぐれない様、門を目指しているのはクリフとラークの二人だった。

それ以外の仲間達も手分けして、シントリアから順に最も近いハスレ、ブストルそしてその周辺の街——とエッジの父ハーディロン・アズライトを探している。

その中でラークは特に気にする様子も無く淡々と役目をこなしていたが、クリフは今ひとつ集中できていない様子だった。

そんなクリフを見ていたラークは不思議そうに尋ねる。

「どうして僕と組むなんて言い出したんだい？」

クリフはすぐに答えなかった。ここに来て自分達の並ぶ審査待ちの列の先頭に目を凝らし時間を気にする様子を見せるが、彼にとっては残念ながら遅々として列は進む様子が無い。

仕方なく、クリフは目を合わせないようにしながらラークに質問した。

「……何で、アキちゃんやリョウカが同行するには反対しなかったんだよ」

ラークはその言葉に苦笑いする。

「質問してるのは僕なんだけど」

クリフはその力の抜けた様子に対し、むっとした顔で返す。

「良いから答えろよ」

そうだね、とラークは少し真剣な表情になって顎に手を当て考え込む。

「前にも言ったけど反対する理由が無かった。リスクがあるとするなら彼女達が僕らの戦いに巻き込まれて命を落とす事だけど、あの姉妹はそれを分かっている。仮にも家族であった人間が関わっていた事だから他の人間の手だけに任せるのは嫌なんだろうし……その命がけの覚悟に口を出すことなんて無いよ」

その返答にクリフの表情はますます険しくなった。

「俺の事も、信用してないんじゃないのかよ。敵だったんだぞ」

「でも、今は仲間だろう?」

脱力したまま首を傾げるラークに、クリフは反射的に声を荒げた。

「何でお前はそんな風に当たり前みたいな顔して……仲間殺された事忘れてねえ俺が馬鹿みたいじゃねえかよ!」

彼の大声に周りの人々が一瞬静まり返り、それからクリフの殺気すら放つ表情を見て再び目を逸らす。

ラークは周囲の人々に笑みを振りまいて自分達が危険ではない事をアピールした。クリフも流石に一度大声を出して冷静になったように、深呼吸をする。

その上でなお自分を気遣う様子さえ見せるラークに対して、クリフは一番最初の質問の答えを口にした。

「……頼みがあるんだ、お前に。ちよつと時間良いか?」

「良いよ」

クリフの真剣さを感じ取って、ラークもここまでハスレの街へ入る為に並んだ時間を放棄する決断で答えた。

「何なのよ、多すぎ——ブラッディハウリング！」

クロウの放った魔狼の群れが、止めどなく襲い掛かってくる人に似た形に進化した鳥型モンスター、ハーピイの群れを瞬く間に蹴散らす。

その視界を埋め尽くす攻撃の隙を突いて、物量で術の隙間を運良く掻い潜った固体がクロウへと飛び出してきた。

「扇氷閃」

盾となつて前に立っていたアキより、クロウが次の術で咄嗟に反応するより早く、青い矢が次々にそれを貫き、三本目でようやくハーピイは動かなくなった。

クロウは油断無く押し寄せる敵を警戒しながら、その矢を放った彼に礼を言う。

「助かった、ルオン」

「いよいよ」

ルオンは無表情に次の矢を番え、周囲を見回す。

「この数……さっきの固体はリーダー格だったのかもしれませんが。取り逃がしてからの襲撃の数が異常です」

ブストルへと向かうチームはアキ、クロウ、ルオンの三人だった。

突然仲間に加わると言い出したルオンをすぐには信用できないというリヨウカとラークの言葉から、クロウが彼と組む事を名乗り出てそれを追う形でアキが加わり三人で行動している。

リヨウカはこれに多少反対意見もある様子だったが前衛後衛戦力のバランスを考慮しても比較的バランスの取れた編成だったため代替案も出ず、結局妹のアキの説得に折れる形で彼女もこの三人での行動を認めた。

その三人は突然現れた他よりも二回りも大型のハーピイの襲撃を一度受け、クロウのブラッディランスでこれを退けたものの、幸か不幸か直撃なら一撃で仕留めていたであろうその一撃はその威力ゆえに掠り傷でも撤退の判断をさせてしまった。

それからまだ一時間も経たない内にもう三度、同型のモンスターの群れに三人は襲われていた。

クロウが考え込む。

「それにしたって、あまりに襲われるから街道に移動したのにこんな人の出入りが多い場所まで群れで来るとかいくらなんでも好戦的過ぎない？」

このモンスターたちの行動は明らかにおかしかった。それに強さも以前と比べ物にならない。

ルオンの矢の直撃を三本も束ねてようやく仕留められる等考えられない事だった。

アキが推測を口にする。

「カンデラス火山から火の宝珠が離れた事と、先日の光の宝珠を使った事で大気のバランスが一層乱れてそれがモンスターの凶暴化を招いているのかもしれない」

クロウが驚く。

「こんな急に？」

「……十五年前、確か闇の宝珠が持ち出されたのがその頃だとリアさんは言っていました。そもそも凶暴化したモンスターの数が増えたのもその頃です。前例があるなら、環境の変化に順応しようと生物が変化する事自体はそれほどおかしな事ではありません。より過酷な環境なら……より強く凶暴になるのは」

その推測にアキとクロウの表情が暗くなる。

「今まではあんまり実感なかったけど、思った以上に世界のデーパーのバランスってやつまずい状態なのかもね」

クロウは言いながら、自分の服の上から右肩をなぞる。

と、反応を示さず黙って聞いていたルオンが素早く顔を上げた。

大気を切り裂く悲鳴にも近い声、叫び。

それが前後同時だった。

「まずいです、クロウさん！」

「くそっ、挟まれた……！」

三人が気付くのは少し遅かった。

前面からはアキへと二体のハーピイが。

そして、辛うじて背面をクロウが振り返ったときには、もう先ほど

取り逃がしたボスの猛禽類のような鉤爪が彼女へと振り下ろされる
ところだった。

クロウは咄嗟に手に握り締めていたスローイングダガーと、空气中
の閻属性の残存デイクラスでD・RC変化を放とうとした。

その瞬間、クロウは今まで感じた事の無い感覚を感じた。

時間がスローモーションで流れる様な感覚、そして。

「え——？」

背後にいるアキの動きが手に取るように分かる感覚。

それと同じものをアキも感じていた。

閻属性のデイクラスを集束していたクロウの武器からアキの明の
天傘へと光が流れ、アキの武器にも空气中から閻属性のデイクラスが
集束される。

二人はそれに導かれるように感覚のままに動いた。

「黒龍」

「——雨林弾！」

クロウが敵とは無関係な真上へスローイングダガーを投げる。

それを、アキの傘の先端から放たれた閻のデイクラスが捉える。ア
キはクロウが動き出すより早く『既にそのダガーに狙いを定めて』い
た。

まるで海栗の針の様に、その一点から無差別な鋭い黒い針が降り注
ぐ。

前後から挟撃してきたハーピーは断末魔の声をあげながら、縫い付
けられるように地面へと落ちた。

アキが真上を向けダガーを打ち抜いた傘はそのまま三人を黒い雨
から保護する。

全ては一瞬のことで、ルオンも、それを実際にやったクロウとアキ
も何が起こったのかわからなかった。

（何……今の？いつものD・RC変化と違う、武器からアキの意識
が流れ込んでくるみたい……）

クロウは力を失って本物の羽根の様に空から手元に落ちてきた、そ
れを模したダガーを見つめ、ようやくモンスター群れの脅威が去っ

た事も忘れてしばし立ち尽くす。

アキも同じ様に自身の武器に異常が無いか点検する。

ルオンは相変わらず無表情のまま、二人に代わって周囲を警戒する。

そんな三人に呼びかける声があった。

「おーい、みんな大丈夫？」

手を振りながら近づいて来る声の主に、今まであまり反応を見せなかったルオンが微かに感情を表に出す。

「……リアトリス」

明るい少女はローブを揺らしながら近付いてくると息を切らせながら、今しがた戦っていた三人の身を順に案じた。

その後ろには彼女と行動を共にしていたエッジとリョウカの姿もあった。

「怪我してない？ 治せない傷があったら言って、すぐに治すから」

アキは一先ず今あったことは棚に上げて笑顔を見せ、ルオンはリアトリスと目が合うと何処か居心地悪そうに目を逸らした。

クロウがリアトリスの行動を遮って尋ねる。

「大丈夫、それより聞きたいことがあるんだけど」

微かに目を伏せてリアトリスはクロウに触れようとした手を引つ込める。

「あ、ごめん……な、何？」

気を取り直したように表情を取り繕うリアトリスに、クロウは一瞬複雑な表情をしたがそれは追及せず今しがた起きた出来事を説明した。

「武器が……？」

エッジはクロウから手渡されたダガーを観察する。

特に変わった所はなく、使い古された武器はきちんと空を裂くいつも通りの形を保っていた。

クロウの言った様な「他人の意識が流れ込んでくる」という感覚も無い。

「うん、多分宝珠が座を離れた事がもたらした環境の変化だね……少

なくともモンスター凶暴化の方はほぼ間違いない。世界全体のバランスが崩壊に近付いてるんだよ、生物全てがその環境に順応しようとしてる」

リアトリスがアキの仮説を肯定する。

ダガーを見つめながらリアトリスの言葉を聞いていたエッジは、考えながらそれを纏めている様にゆっくり口にする。

「生物全て……こうは考えられないかな、俺達人間は基本的に弱い種族だ身体能力だけならとても野生動物の進化したモンスターには敵わない。武器やデンプスを扱ったり、協力する事でようやく戦える」

だから、とエッジはダガーをクロウに返す。

「もし、環境の変化が「全ての」生物に影響を与えているなら……俺達が受けた影響がこれなんじゃないか？」

この手の考察には興味があるのかりョウカも腕を組み、肘に手を当ててエッジの言葉を反芻する。

「生物としての防衛本能の共鳴、群れとしての機能があまり無い人間の進化の方向性としては妥当かもしれないわね。……本能共鳴技とでもいうわけ？突飛な発想だけど父が研究者なだけあるわね、あなたにも素質があるんじゃない、エッジ？」

感心した様なからかう様な中間のニュアンスでリョウカがエッジに微笑む。

そういえば、とアキが気付いた様に合流して来た三人に尋ねる。

「合流予定より早いですよね、エッジさんのお父上は見つかったんですか？」

そうそう、とリアトリスが肯定する。

「エッジのお父さんらしき人が見つかったって心の一族の皆から伝言があつたの」

アキがそれを聞いて嬉しそうに胸をなで下ろす。

「よかったですね、エッジさん！お父上が無事で」

エッジはまるで自分の事の様に喜ぶ彼女の様子に一瞬戸惑うが、先日火災で彼女が実父を亡くしている事を思い出した。

「あ……うん、そうだな。無事で良かったと、思う」
曖昧な返事をするエツジにクロウが横から突っ込む。

「あんまり嬉しくなさそうね、会いたくないの？」
アキの様子を気にして、エツジは慌てて否定する。

「いやーそういう訳じゃない……ただ、父さんの事は全然思い出せてないから、会ってどうしたら良いか分からなくて」

リアトリスがそんなエツジを励ます。

「大丈夫、エツジならきつと大丈夫だよ！家族なんだし」

楽観的な彼女とは対照的に、リョウカが横から冷やかに口をはさむ。

「そういう無責任な発言は良くないわよ、家族だから複雑な場合だつてあるでしょう」

指摘されたリアトリスは少々気圧された様子で一時口をつぐむが、すぐに言い返す。

「それは……確かに、そうかもしれません。けど、毎回不安にさせる様な事言うのも良くないじゃないですか」

「全員お気楽過ぎるのも困るでしょう、良いのよ一人位こうでも」

喧嘩している様な、リョウカが適当にからかっている様なやりとりをしながら二人は先に歩きだし、アキもそんな姉を止めようと慌てて後を追う。

残ったクロウは、エツジにやや躊躇いがちに声をかけた。

「この前の事だけど……」

「え？」

エツジは一瞬どの事だか分からず聞き返す。

クロウは目を合わせずに補足した。

「レパートと戦った時の事、私は自分の姿勢を変える気無いよ。エツジやアキや、仲間が殺される位なら私は例え子供でも敵を殺す」

エツジは黙った。

ただ、とクロウは付け足す。

「でも、エツジが自分でどうにか出来るなら、私もそこまでは手を出さない。だから、」

そこで初めてエッジの目をまっすぐに見て、クロウは言った。

「早く強くなってよ、エッジ——待ってるから」

それが先に歩いているという意味か、エッジの成長をなのかは分からなかったが、エッジは口元に笑みを浮かべながら頷いた。

「ああ、勿論」

決意を新たに仲間達の後を追おうとしたエッジはふと自分はずっと見つめている視線に気付いて、共に最後まで残っていたルオンに尋ねた。

「俺がどうかしたか？」

ルオンは感情の読めない瞳でエッジの顔を穴の空く程見つめながら質問した。

「いつもこう？」

「何が？」

「エッジの周りは女の子ばかりなの？」

今更ながらその事実気付いたエッジが顔を赤くして停止している間に、ルオンはすたすたと彼女達の後を追って行った。

第六十七話 『共生体』

「何だい？話って」

ラークを呼び出して、クリフは森の奥深くへと移動した。

単に誰かに話を聞かれないためというにはあまりに長く歩いたが、クリフが自ら足を止めるまでラークは何も尋ねなかった。

「……まず、これ見てくれ」

詳細な説明もしないまま、クリフはいきなり戦闘時と同じ青い光を纏う。

普段は技を使うとき以外ぼんやりと靄の様に見えるその「気」の流れが、突風に散らされる雲の様に加速する。

「——はあっ！」

クリフの気合いと共に、それは球形に変わると爆発し周囲の石を大問わず吹き飛ばして、幾つかを空中へ巻き上げる。

全周囲攻撃『発』——範囲と威力を併せ持ち、彼の技の中でも主力の技の一つだった。

と、更に宙に浮いた小石の一つ目掛けてクリフが掌を突き出す。

「せいっ！」

再びの彼の気合と共に、小石は粉々に弾け飛ぶ。

武器破壊技『豪』、それを見たラークが微かに驚きを表す。

「その技、確か溜め時間が必要だった筈だよな？」

「ああ、普通はな……けど『これ』やってる間は違う」

自分から溢れ出る『気』の奔流を示してクリフは言う。しかし、その強力な技を扱っているにも関わらず彼の顔は険しい。

意を決する様に瞼を閉じて深呼吸すると、クリフはそのままもう一度技を連続して放った。

「『瞬』、『殻』——」

クリフの姿が一瞬ラークでも捉えられない程の速度で急加速し、直後に鎧の様に青い『気』で体を覆おうとして間に合わず樹に激突して崩れ落ちる。

それと同時に彼の身体から溢れ出ていた光も空中に霧散する様に

消えた。

「ぐっ、この……」

全てを観察していたラークは何となくクリフの意図を感じ取る。

「確かに強力な技だね。で、今まで使わなかった理由はそれ？」

クリフは痛みを堪えて勢い良く打ち付けた肩を自身の「気」で治療しながら、荒い息で頷く。

「ああ……一つ一つの技をきちんと制御できなくなる、加えてこの短時間だけで通常の数戦分体力を消費する」

「リスクと効果が見合わないか、確かにこれを実戦で無闇に使うのは自殺行為だ」

でも、とラークは首を傾げる。

「どうして僕にこれを？」

クリフは敵意にも似た張り詰めた表情のまま、その質問に答えた。

「この先敵はもつと強くなる……俺らの中で一番速いのはお前だ。自分の技も使いこなせないままの俺じゃ戦えない、これをきちんと使えるようにする為にお前の力を貸してくれ」

相手の顔を睨みつけながら口にしたクリフの言葉の最後の方は頼みというより、半ば脅迫めいた強さがあった。

ラークも以前殺し合った時と同じ様に、その視線を正面から受け止める。

二人はしばしそのまま睨み合った。

「いいよ、仲間が強くなる事に不都合も無い」

クリフは礼は言わなかった。

代わりにただ軽く頭を下げ、話は終わりとばかりに来た道を引き返す。

ハスレの町の外部へ戻った二人は他の仲間達からの報告を受けて、彼らと合流した。

「この街、結構王都から離れてない？避難っていうには遠すぎる気がするけど」

エッジの父が居ると情報が入った街は王都のかなり西、キーラー山

脈の稜線の端に位置する高台の街だった。

「って、お前単に登るの疲れただけだろ？もう三回目だぞ、それ言うの」

「うるさい、体力馬鹿のあんたと一緒にしないでよ」

クリフの指摘にクロウはむくれる。

長い上り坂で彼女の息は明らかに上がっていた。

「もう良い、飛ぶ」

「それは駄目」

「合流する時に散々飛んだでしょう」とリョウカ。

「こんな街に近付いたらもう飛んでもすぐ降りなきゃいけないからあんまり変わらないよ」とは、ラーク。

仲間達から一斉に突っ込まれたクロウはそこまで反応が返ってくると思っていなかった様子でうっ、と詰まって弁明した。

「冗談だって……」

はあ、とため息をついて歩き続けるクロウをアキが「元気出してください」と慰める。

その間にも上り坂には終わりが見えてきた。

《臨みの街 ワニープス》

坂を抜けて開けた視界の先にあるのは他の街からは見られない絶景だった。

普段の高さであれば個人の視点から見られる景色には限りがある。比較的開けた場所でも一つの街の全景を見るのさえ困難だ。

が、この街からの眺めは違った。

遠く王都の焼け跡から、周囲の街へと網の目の様に広がっていく街道から、隣の街へ続いていく様までが立体的な地図の様に一望できる。クリフ達のセオリア大陸ほど緑豊かではないものの、地形の高低差と発展した交通網はまた別の魅力があった。

確かにこの街であれば避難先としては遠くても、静かで研究などには邪魔は入らないのかもしれない。

「エッジのお父さんが住んでるって噂があるのは街のはずれの方の空き家だよ」

いよいよ父と対面するという段階になって、エッジの足取りは重くなっていた。

リアトリスに案内されるまま歩き、目的の家に着いた時にはエッジはルオンと共に全員の最後尾に居た。

「ごめん下さーい」

リアトリスの挨拶に、低い男の声が答えた。

「誰だい、君は……リアトリス？驚いたな、トレンツによく遊びに来てくれていた頃以来だな」

話しかけてきた少女の姿に男は目を丸くする。

年齢は四十代程、飾り気の無い茶色のコートに、くすんだ茶色の髪。疲れている様に見えるその男の髪は、確かに「心」の一族のリアトリスの様な明るい色の髪と間を取るとエッジの様なくすんだオレンジ色になりそうだった。

「お久しぶりです、ハーデイロン」

丁寧に声をかけて来たラークの姿に、エッジの父は驚きのあまり手に持っていた本を机に置くと慌てて玄関まで進んで来た。

「ラーク……テンネシア、君は年を取らないのか？何故ここに——いや、待ってくれそこに居るのはエッジか？」

最後尾に居ても父からは隠れきれなかったらしく、ハーデイロンは息子の姿に気付いて言葉を失う。

「あ……と、父さん」

「エッジ、シントリアの火災には巻き込まれていなかったんだな！ブレイドから話は聞いている、お前の立場は確かに厳しいものになったが大丈夫だ。お前を死刑台送りになどさせるものか」

どう接していいか分からないエッジが戸惑う間もなく、父は安心した様子で息子の肩をしっかりと掴んだ。

と、何気なくエッジの仲間達に目を向けたハーデイロンの視線がクロウと合う。

クロウの方はやや鋭い目で相手を観察したがすぐに目を逸らしたが、エッジの父の方は彼女の存在が何か引つかかる様子で眉にしわを寄せる。

再会の喜びが去って落ち着いたのか彼は注意深くエッジの他の仲間達にも目を向け、感情を感じられないルオンの存在や、ジェイン・リユウゲンとタリア・キサラギの娘達まで居る事に気付いて不穏な気配を感じた様だった。

「聞きたいことがあるんです。人の体内に大量のデープスを埋め込んだ時起こる事について」

ラークが本題を切り出す。

ハーデイロンの表情は一気に暗くなった。

「……そうか、そこに居るのが手配犯のクロウか。私の専門分野は『刻印術式』あくまで埋め込むのは術式だ、悪いが力になれそうに無いな。エネルギー源たるデープスを人体に埋め込む研究は私の専門じゃない、その分野の第一人者はもうこの世に居ない」

思わずアキの口から驚きの声が漏れた。

ハーデイロンの表情が不信感から、何かを悼むものへと変わる。

『共生体』、それがあの夫妻が生み出す筈だったものの名前だ。人の身体に高濃度の第三属性元素デープスを埋め込む事で、限られた人間しか扱えない深術を誰もが使えるようにする……そう、そうなる筈だった」

そこで一度彼は言葉を切る。

「あの二人が最初の実験体とした実の娘に殺されなければな」

「娘に殺された？……そんな、その人は実の親を殺すなんて何でそんな事を」

リアトリスの言葉に答える様にエッジの父は右手を上げると、クロウを真っ直ぐに指さした。

「世界で最初にして唯一の『共生体』。お前がグレイス夫妻を、お前の両親を殺した」

沈黙が降りる。

ショックを受ける仲間達は彼とクロウを見つめたが、当のクロウはこれと言った反応も示さずに顔を伏せたままだった。

皆が口を開くのをためらう中でエッジが父の言葉に反感を顕わにした。

「待ってくれ、クロウが殺したなんて何で断言できるんだよ。俺達の仲間に、順序立てた説明もなくいきなりそんな事を口にしないでくれ」

息子の反論にハーデイロンは一瞬戸惑った様子だったが、すぐに厳しい表情で言い返す。

「状況から考えれば明らかかな話だからだ。その娘にディープスの移植手術が行われた直後、グレイス夫妻は死んだ。現場の破壊の痕跡は『共生体』^{シンビオート}の力が振るわれたものに他ならなかった」

「そんなの、ほとんど事故じゃないか！クロウが自分の意思で引き起こした事じゃない」

「それはあり得ない、その少女は自分の意思で両親を殺——」

「——良いよ、エッジ！」

言い争う親子を、クロウが止めた。

一瞬、思わず二人は黙る。

「……良いよ、別に。私の両親は自分の子供を実験台に使う様などうしようも無い人間で、その娘も人を平然と殺す様な人間だったから夫婦そろって自業自得で死んだ……それだけの話だよ。こんな人殺しの話より大事な用事があった筈でしょ、居ると邪魔なら私は出てくから話を続けて」

彼女はそう言うのと仲間達に背を向けて、逃げる様に走って外へ出て行った。

「クロウー」

「追うな、エッジ」

引き止めようとする息子の腕をハーデイロンが掴んだ。

エッジは反感を覚えた様子だったが、黙ってそれを振り払うに留める。

一度途切れてしまった本筋に戻す為にラークが質問を替える。

「専門では無くても、近しい分野の研究の筈ですよ。グレイス夫妻と親交もあった筈です」

それを指摘されると痛いらしく、ハーデイロンの表情はなんとも言えないものになった。

「ああ確かに……私の『刻印術式』は深術をきちんと学んだ事のない人間でも術を使えるようにする為のもの。体内に埋め込んで機能させる事も、誰もが深術を簡単に扱える様にするという目的に於いても、私達は非常に近しかった。だからあの事故以来研究する者がほとんど居なくなつた『共生体』^{シンビオート}の研究者の代わりに、ジェイン・リュウゲンは私を辺境から呼び寄せた」

「ジェイン……？」

予想していなかつたその名前に、アキとリュウカが反応する。

当時の事について彼の説明は続いた。

「事故から数カ月が経っていたが私は彼に、さっきの娘の状態の検査を依頼された。正直戦々恐々だったが調べてみてはつきり分かつたよ。彼女の身体の中の闇のデープスは完全に彼女のコントロール下にあり安定している、彼女の意思と関係なく暴走する事などあり得ない。あの子供は間違いなく自分の意思で両親を殺している」

ハーデイロンは質問をしてきたラークの顔を見てしばし考え、それから諦めた様のため息をついた。

「シントリアに越したばかりの頃、騎士だった君には随分世話になつたな。今ブレイドが騎士になれたのも君の指導があつたからこそ……どこまで力になれるか分からないが良いだろう、何が聞きたいんだい？」

ラークは気にする様子もなく、軽く微笑むと簡潔に尋ねた。

「『共生体』^{シンビオート}になつた人間の意識が、埋め込まれたデープスの側に乗つ取られたんです。何が起きたのか分かるかな？」

ふむ、とハーデイロンは考え込む。

「先程も言ったが、彼女の身体の中のデープスのバランスは安定している。インペルメアブル鉱石という特殊な鉱石で被験者の意識はデープス集合体の意識から保護されいるから本来はそんな現象はあり得ない」

が、と彼は付け足した。

「――浸食^{カロード}、被験者側がその保護を破つて意図的に力を強引に使い続ければ意識の逆流が起こる可能性はある。それが何かのはずみで行

き過ぎれば『共生体』の『過剰浸食』が起こって、被験者とディープス集合体の意識が逆転する」

つまり、とエッジが呟いた。

「……今までの力の使いすぎで、クロウは身体をラーヴアンに乗っ取られる様になったのか」

ラークは続けて聞く。

「制御する事は可能なのかな」

「一度そうなってしまうと難しいだろう、被験者を保護する鉱石自体はカーズメリア大陸で採れるが『共生体』の手術を行える技術者はグレイス夫妻だけだ」

「その鉱石の事とか、もう少し詳しく教えてくれるかな」

「メモを作ろう、少し待ってくれ」

面識があったらしいラークが代表してエッジの父から細かい説明を受け、その間ずっとエッジは父から距離を置いていた。

用事が全て済んだ段階になり仲間が次々礼を言つて家から出ていく段階になって、エッジはようやく父と対面した。

「二つだけ言っておく……エッジ、あの娘は悪魔だ。このまま関わら続ければいずれお前の身を滅ぼす」

エッジは父の言葉を無視して、兄の事を尋ねた。

「ブレイドの肩の『命令刻印術式』、作ったの父さんだって聞いた。外せないのか？」

「……あれは少し特殊な改良を施してある、何もせず旧型の危険な爆弾紛いなものを付けさせる訳にはいかなかったからな。『ブレイド自身が国の為』と信じている行動をする限り作動する事は無い。が、それでも危険な術式には変わりないし止めるのは困難だ。半径二cmの中心点のみを機能停止させれば止まるが、それ以外の部分は無理に刺激を与えると回路が作動して爆発する」

本当はそんなものを埋めたくは無かったのだろう、エッジの父は苦渋の決断を未だ後悔している様だった。

「ブレイドも心配していたぞ。あいつはお前の為に全てを捨ててまで

助けようとしている」

「大丈夫、ブレイドの事は俺に任せてくれ」

父の表情が叱ろうとする様に、罪悪感を感じている様に複雑に歪む。

「エツジ、ジェイン・リュウゲンの圧力に応じてファイスとお前を置いて行った事、すまないと思っっている。それでお前を孤独にしまった事も……だが、その為にお前は変わってしまった、ブレイドもだ。そんな風にお前達兄弟が命を賭ける必要は無い」

エツジはその制止には応えなかった。

代わりに、決意を固めた表情で父の目を見据える。

「心配しないでくれ……父さん言ったよな、クロウの両親と親しかつたって。クロウも、その娘の彼女も優しい子だよ、俺がそれを証明してみせる。クロウの事も、ブレイドの事も皆俺が助けるから」

そう言って微かに微笑むと、エツジは父の制止を振り切って仲間達の後を追った。

第六十八話 「クロウ」・グレイス

クロウは何度か夢見たことがあった。

自分の両親と、家族で暮らすことを。

何処かからある日親がやって来て、自分を見つけてくれることを。

大体の Spraウツの子供達が一度は見る夢。

しかし、ハクの一件があつてから彼女はもうそんなものはとつくに諦めていた。

自身の右肩を見たら正常な人間がどんな反応をするかを知って、クロウは薄々答えを悟っていた。

が、流石にその親こそが自身の身体を怪物に変えた張本人だとは彼女も考えたことが無かつた。

(私が生まれる前から、もう決めてたのかな)

だとしたら、自分は実験台にされる為に産まれたのではないかとクロウは思った。

化け物になる事、人殺しの力を手に入れる事、その前提が無ければ自分という存在は生まれる事さえ無かつたのかと。

(……戦いたくないなんて、やっぱり私が持つべき願いじゃなかつた)「クロウさん」

自分の名前を呼ぶアキの声に、彼女は顔を上げた。
相手の緊張した面持ちを見てクロウは首をかしげる。

「どうしたの？研究者の話で落ち込んでるんだったら気にする事無いよ。ああいう身勝手なヤツは何処にでもいるし、リュウゲンが関わってたからってアキには何の関係もー」

「そんな事気にしてません、私が今心配してるのはクロウさんの方です」

クロウはその言葉に笑って、仲間を待つ為に座り込んでいた街路から立ち上がる。

「私の心配なんて要らないよ、聞いてたでしょ？私は最低の研究者が作った実験の道具なんだよ、人間扱いする必要なんて無い」

アキはショックを受けた様に息を飲む。

「違います、クロウさんは……そんな人じゃ」

「人じゃないよ、忘れたの？私があんたを殺そうとした事」

エッジとクロウを裏切った後、サーカスで再会した時の事をアキは思い出す。

その記憶も、今言われた言葉も振り払う様にアキは激しく首を横に振った。

「違いますークロウさんの怒りは人が抱いて当たり前のもの、クロウさんが大切にしている感情の証明です」

その言葉に、戸惑った様子でクロウはアキを見つめる。

彼女がクロウに対してここまで感情を顕にしたのは初めてだった。

『ジェイン・アキ』、この名前が私は大嫌いでした。自分とあの男を親子として繋ぐだけだったこの名前が……でも、今は違います。クロウさんが私を認めてくれて、仲間として呼んでくれた名前だから。今は自分として受け入れられる、何度だって呼んで欲しい」

アキは慣れない大声を出し続けた為に、落ち着くよう一度大きく息を吸った。

「どんな自分だって受け入れられるんです、クロウさんが自分をただの実験台だと諦めてしまうなら私が言えることは有りません。でも、私は……そんなの嫌です」

「アキ……」

まるで自分の事のように落ち込むアキに、一人で育ってきたクロウは何を言えば良いのかまるで分からなかった。

二人が話し終える頃にちょうど仲間達が揃う、一番最後はエッジだった。

父親と喧嘩した直後のその表情は怒ってこそいなかったが険しい。

彼は仲間全員に提案する。

「みんな、ちよつと気になる事があるんだ。シントリアに行つて調べたい事がある」

クリフがその言葉に早々に疑問を呈した。

「シントリア、ってあそこほとんど全滅だろ？」

リアトリスも街の惨状を思い出して顔を曇らせる。

「そうだよ、あの街で無事なところなんて……」

そこまで聞いて、リョウカもエッジ同様以前耳にした情報に思い当たるとる。

「——研究者の住宅街と、貴族街。二つは隣接してる……なるほど、ジエイン・リユウゲンがわざとそこを火の宝珠の攻撃対象から外したと考えたわけね、何か重要な研究データがあるから」

エッジは頷く。

『共生体』の研究にリユウゲンが関わっていると聞くまでは思い付かなかったけど、それならあそこだけ無事だったのも不思議じゃない」

なるほど、と納得した様子でその意見に傾きかける仲間達の中で、ラークが一人反対の声を上げた。

「残念だけどそれは無駄だよ、その場所はもう随分前に僕が何度も調べた。火事が起こるよりずっと前にね」

「そんな……」

アキが落胆の声をあげ、仲間達は落胆の空気に染まる。

エッジはそれでも諦めなかった。

「それでも、どうしても調べたいんだ。ごめんみんな、何の確証も無いのにこんな事言うの自分勝手だって分かっているけど、それでも俺クロウと家族の話さっきのだけで全部だなんて思えない。リユウゲンの事も気になる……何より、俺の知ってるクロウは絶対そんなこと望まない」

当事者のクロウは顔色を変えず、何も言わなかった。

反対も賛成もしない彼女と同じ様に、他の仲間も声をあげない。

硬直した空気を破る様にリアトリスが恐る恐る声を上げた。

「私なら、私なら何か分かるかもしれない……絶対とは、言えないけど」

全員の注目を浴びた彼女はやや緊張した面持ちになり、クロウと目が合ってその目を伏せた。

ラークが背中に乗って、エッジ達はシントリアを目指す。

「ラークがあっさり賛成するなんて思わなかった」

エツジの少し嬉しそうな声に、ラークが答えた。
風を切りながらなので会話は自ずと普段より大声になる。

「以前の僕の調査は僕一人でやったものだ、リアなら確かに何か見つけられるかもしれない」

ほとんど人が居なくなつたとはいえ、念の為ラーヴァンは郊外の森の近くに着地させる。

エツジ達はそこから徒歩で、ほとんど城壁だけになってしまった街へと向かった。

《崩壊した王都 シントリア》

内部に入ってからリアトリスは真剣な表情でラークと二人きりで相談すると、クロウだけを連れてグレイス夫妻が住んでいたという家に向かおうとした。

エツジも同行を申し出て、リアトリスがそれを承諾し三人で向かう事になった。

街の中は火の宝珠が暴れ回っていた時の地獄の様な雰囲気は無かったが、代わりに元の昼の陽の中で見ると無事だった頃との落差を彼らに思い知らせた。

そんな廃墟の中を、リアトリスは振りかえる事なく二人の先を脇目も振らずに進んでいく。

「リア、どういう事なんだ？リアなら分かる事があるかもって」
彼女の様子は何処かいつもと違って、エツジは遠慮がちに声をかける。

今に限らず、「クロウを殺してでも世界を救う」と宣言してからのリアトリスはクロウが傍に居ると何処か動きがぎくしゃくしていた。

「……私ね、セキユアラ厳密には深術士じゃないの」

え、と深術士の中で育ってきたクロウが驚きの声を漏らす。

「コンパツシヨナイザ交深術士って、本当はそういう呼び方するものなの。まあ、知らない人から見たらほとんど一緒なんだけど、詳しい人から見ると少し変わって見える事もあるからサーカスでは誤魔化す為に「魔術師」って紹介してたんだ」

話しながら、三人はその家の前に辿り着く。

やや、煤けていたもののその家は想定より立派な造りを保っていた。

貴族街と同じブロックにあるだけあって、比較的王都では研究者の地位は高かった事を窺わせる。

エッジとクロウの視線からその疑問に気付いたのかりアトリスが解説する。

「ジェイン・リユウゲンは元々『共生体^{シンレオント}』や『刻印術式』の研究に協力的だったの。少なくとも十五年前の頃までは今みたいに開戦を強硬に推し進めたりしてなくて、エッジやクロウのお父さん達にも研究に専念できる環境を与えてたみたい。……全部ラークの話の受け売りだけだね」

三人は扉を開けると家の内部に入った。

明かりがない室内は真っ暗かと思われたが、先日の火災で空いたのか天井の穴から光の直線が差し込んでおり、その光景は何処か絵画的だった。

空間は広く、一部屋で生活空間と研究スペースが一体となっていた様だ。

壁はほとんど本棚が埋めつくし、広い机の上は雑然としている。

奥に置かれた椅子かベッドかも判別出来ない様な器具を中心として、あちこち刃で切り刻んだかの様に損傷が酷い。

「で、どうやって調べるの——って、リアトリス?」

然して興味無さそうに尋ねようとしたクロウは、リアトリスの顔を目にして動揺する。

家に入るなり彼女は涙をボロボロと溢していた。

クロウの反応に自分が泣いている事によく気付いたのか、リアトリスは慌てて涙を拭う。

「ごめん、急に。ただ、こんなの初めてだったから。この場所ほど強く人の感情が残ってるのを感じた事無い」

二人はその言葉に困惑し、エッジがその意味を尋ねる。

「どういう意味だ?」

リアトリスはそこにかつて触れた人の痕跡を確かめるように、壁に手

を触れながら言った。

「二人は疑問に思ったことない？ 私達人間がディープスを操れるのは何でなんだろうって……ううん、人間だけじゃなくて時には深術を学べない筈の他の生き物でもその力を扱えるのは何でなんだろうって」突然の質問に今まで何気なく深術を使ってきた二人は首を捻る。

「ディープスってというのはね『属性』を司る元素なの。熱く燃える物、固くて丈夫な物、万物の在り方を決める元素は私達の中にもあつて私達の『在り方』を決めるの……笑うこと、悲しむこと、怒ること」

その説明はまるで——と思つてエツジは自分やリアトリスが何と呼ばれていたのかを思い出した。

「ディープスっていうのは『心』なんだよ。私達、心の一族のコンパッソノナイザー交深術士は心で術を制御するの。だから、本当に強い思いが込められた物からならほんの少しだけ感情を読み取れる……でも、そんなの稀だし読み取れるものがある確証なんて無かつた」

でも、とリアトリスは言葉を詰まらせる。

「……には……には信じられない位に色んな思いが溢れてる、恐怖と、願いと、たくさんの愛情」

最後の単語にクロウは顔を背けた。

リアトリスは無言で目を閉じながら少しずつ壁や埃を被つた本棚を辿つていき、何かを感じる事が出来ないエツジも手で本等の明確な情報を得られそうなものを中心に家の中を搜索し始める。

クロウは二人の様に物には手を触れようとせず、ここが自分の家であつた事を認めていないかの様だつた。

幾度も立ち止まり、戻りを繰り返しよほど集中力を使うのか時折強く瞼に力を込めながらリアトリスはゆっくりと感情の痕跡を辿る。

その足は少しずつつ家の奥へ、破壊の跡が残る方へ向かつていき、彼女は倒れた本の山を掻き分け始めた。

慎重に一冊ずつ動かしていつて、リアトリスはその中から目的の物を見つけたのか手を止める。

「これ」

短く言つて彼女が震える手で持ち上げたのは日誌か何かの様だつ

た。

「これが一番、色んな思いが強い……何かあるとしたら絶対これだよ」
クロウはそれでもまだ気が乗らない様子だった。

「良いよ、私字読めないし」

「俺も全く読めなくは無いけど、そういうちゃんとしたのは少し時間がかかりそうだな……」

二人に代わってリアトリスが黒く変色した表紙を開く。

『記録者 ガザニア・グレイス ACSS3627年 地海の月 gr
an. 6……もうすぐ私達の娘が生まれる』

エツジは微かに驚いた。

「リア、読めるのか？」

彼女はページから目を離さずに頷く。

「私は心の一族の皆が教えてくれたし、勉強する時間もあつたから……本の保存状態があんまり良くないから集中しないと間違えそうだけど」

そう言いながらリアトリスは指でなぞりながら慎重に読み進める。

『娘、と分かったのは今日の事だ。名前の候補をいくつかサシードと二人で考えた。二人の名前をとってサニア、シントリアの文化に肖あやかってツバキというのも良いかもしれない、控えめな優しさや誇りを意味するそうだ。そういう優しい子になって欲しい』

クロウはそれを聞いて怒りを覚えた様に拳を握りしめる。

「もう良いよ」

リアトリスが戸惑った様子で辿っていたページから指を離す。

何故彼女が止めるのか分からなかったようだ。

クロウは日記から目を逸らしたまま言った。

「名前見たでしよ……それは私の話じゃない、私を捨てた奴が何考えてたなんて……聞きたくない」

続きを読み上げるべきかリアトリスは躊躇う。

エツジがそんなクロウを説得するように、言った。

「ここまで読む限り、この人はちゃんと娘に愛情を持つてる人だつたと思う。何か事情がある筈だ、それが何か分かるまでは読ませてくれ

ないか？クロウが辛い様な事書いてあったら、すぐに読むのやめるから」

クロウは反対せず、ただぼつりと一人言の様に呟いた。
「何であんたら二人とも……」

エッジもリアトリスの横に並ぶと、拙いながらも一緒に読もうと彼女の指の先の文字を追う。

「俺にも見せてくれないか？リアほど速くは読めないけど、どんな事が書かれてるか注意する事くらいは出来ると思うから」

リアトリスは拒まず、二人は慎重に文の続きを追った。

『地の月 deas. 15 ファタルシス諸島に落ちてきたという例の物体を見ることが出来た。これもジェイン家の協力あつての事、彼には感謝しなくてはならない。噂通り、あの物質は高濃度の闇属性の第三元素結晶だった。自然界であんなものが生まれたなんてとても信じられない。これが空から落ちてきた時には焰螺旋の様な光も観測されたという、まるで神話の再現だ。あの物質を私達の研究に使うことが出来るなら、ディープス結晶体の体積と深術の出力不足の問題両方を解決することが出来るかもしれない、もしそうなれば残る問題は被術者の身体の保護だけ』

文章の途中に出てきた単語にエッジは引っ掛かる。

「焰螺旋？それって確か……」

聞き覚えがある言葉から知っている知識をたどる彼に、リアトリスが助け船を出した。

「そう、このアエスラングの大地とイクスフェントを繋ぐのは天を貫く焰螺旋だけ。だから十五年前のあの時、一瞬だけど焰螺旋は空に再生されたの……ほとんどの人は何かの見間違いとかだと思つたみたいだけどね、でもそれが落下した宝珠の欠片の調査のきっかけになった」

なのに、とリアトリスは言葉を詰まらせる。

「この研究者の人達とジェイン・リュウゲンが調査した時点でもう宝珠は欠片だけになってた。闇の宝珠と一緒に消える寸前の焰螺旋に乗って落ちて来たラークはその時怪我でしばらく目を覚まさなくて、

起きてから騎士団に入って王都の内部を必死に探してたけど見つからなかった。自分が意識を失ってる間に宝珠を失った事、ラークはすごい責任を感じてみたい」

それでか、とエツジは何となく納得する。

初めて会った頃からラークが常にどこか焦っていた理由を。

リアトリスは話しながらページをめくり、重要な所を抜粋して読んでいく。

『火の月 sea b. 6 私達の娘が生まれた。綺麗な紫の髪をしている、その手は想像していたよりずっと小さい。これから私はこの子をちゃんと育てていけるだろうか、この瞬間にも「ここ最近動けなかった分の研究の遅れを取り戻さなければ」と考えている様な私に。私達夫婦はどうしようもない位に研究者だ、この子に何をしてあげられるだろう……。研究の事と言えば、インペルメアブル鉱石による例の黒結晶（見たままだが仮称としてすっかり定着してしまった為、件の第三元素結晶をこう呼称する）の遮断に成功した。まだまだ完成には程遠いが完成への道が見えてきた、私達の共生体シンビオントの研究が』

そこからまたかなりページを飛ばして、エツジとリアトリスは淡々と続く研究と日々の記録の中に小さな異変らしきものを見つけた。

リアトリスがそこを読み上げる。

『闇の月 neis. 15 ジェイン・リュウゲンが黒結晶を渡せと言ってきた、サシードが跳ね除けたが彼は諦めた様子が無い。調査の頃から感じていた事だが、ここ最近の彼は何かおかしい。取りつかれた様に私達の手元にある黒結晶に執着している。もしかしたら、住居を変えた方が良くかもしれない、彼に見つからない場所に。共生体シンビオントの完成はあと少しだというのに』

そこから続く文章は、少しずつ様子が変わっていた。

書きなぐりながらもある程度一定だった文字の列に乱れが、エツジとリアトリスからも見て取れる。

ページをめくるリアトリスの手も緊張に震えた。

『闇の月 neis. 17 アルが……。私達の仲間が、殺された。私達とリュウゲンの間に割って入っただけで……。彼は、リュウゲンは明

らかに人間では無い力を手にしている、まるで——正気を失った彼からこの子だけは守らなければ、まだ名前も付けられない私達の娘。でも、どこへ逃げられるというのだろうか……アルが稼いでくれた僅かな時間で』

次の日付は、同じ日だった。

ひどく乱れた字は、もはや列をなしていない所もあった。

『闇の月 neis. 17 時間が無い、逃げる場所もない。サシードと二人で決めた……この子は、恨むだろう私達の事を、この子は苦しむだろう。それを分かった上でこんな重荷を背負わせようとする私達を……それでも、親はこの子が生きる事だけを望むのだ、身勝手にも……後出来る事はこれだけ、例え伝えられなくても、いつかこの子に伝わる様にこうして記録を残す』

次の文を口に出すリアトリスの声は震えていた。

『この子の名前はクロウ』

クロウは目を見開いた。

『どれだけ他人に嫌われても自分の為に生きていける様に。どれだけ疎まれても、遅く生きていける様に、この名前に私達の願いを託す』

次の文章は初めて見る文字だった。

ここまで一度もこの本に記録を書いていなかったクロウの父親の文字だった。

『記録者 サシード・グレイス 私達は娘に黒結晶を埋め込んで共生体にする。一度共生体^{シンビオート}にしてしまえば、この子の命を奪う事は出来なくなる、無理に奪おうとすれば黒結晶は大気中に霧散する……これで見ユウゲンがこの子を見逃してくれるかは賭けだ……それでも、私達は願う——何があってもこの子が、クロウが生きる事を』

そこで記録は途切れていた。

後には白紙のページだけが続いている。

エツジは何も言えなかった。

クロウはもう日記の内容から耳を塞ぐとはしていなかった。ただ、感情を表情に出さないようにしながら呟く。

「……何だクロウって、本当の名前だったんだ」

リアトリスは尚も必死な表情で、白紙のページの先に何か書かれていないかページをめくり続ける。

最後のページまでめくり、何も書かれていないと分かった彼女はしばし呆然とした後、今度は再び周りの本の山をひっくり返し始めた。

そんな彼女を、クロウは止めた。

「もう良いよ」

「良くない、まだクロウが両親を殺した訳じゃないって証明できてない。まだ、まだ見て無いものがある筈。クロウが殺す訳無い。だって！」

それでも手を動かし続けるリアトリスの手を、クロウは右手で掴んだ。

「どつちでも変わらないよ、私の両親は結局この力に殺された」

クロウは言いながら自身の右肩を左手で押さえる。

「ここまで来たのに、ごめん」

リアトリスは項垂れ、エッジは慌ててフォローする。

「リアのせいじゃない。クロウが殺したわけじゃないって俺が言い出したことなのに、証拠になる様なもの何も見付けられなかった……」
謝る二人に対してクロウは首を横に振る。

その表情は先程までより穏やかだった。

「ううん、私……ちゃんと愛されてた……それが分かっただけで十分だから」

だからもう良い、と微笑むとクロウはリアトリスに尋ねた。

「その日記、貰っても良い？」

頷いてリアトリスは日記を手渡し、受け取ったクロウはしばしそれに触れていた両親の手を想像する様にその感触を確かめた。

「じゃあ、行こう。ここにはもう何も無いよ」

そう言って次へと気持ちを切り替えようとする彼女の表情に迷いは少しもなかった。

※世界観・用語3の情報ステータスが更新されました

「身」の一族、「心」の一族

太古の昔、二柱の神から宝珠と世界を守るべく力を与えられた二種族。

アエスラングの種族が大気と心を通わせ高い深術の適正を持つ「心」の一族。イクスフェントの種族が深術を使えない代わりに長い寿命と高い身体能力を持つ「身」の一族であり、両者の総称が「シン」の一族である。

二種族の能力が異なるのは「互いが手を取り合う事」を望んだアエスラングとイクスフェントの願いからであり、またそれぞれの差異に二柱の神の性質の違いを見て取ることが出来る。

『混血児』

身の一族と心の一族、そして人間の血が混ざった者の中に稀に現れる突然変異とも呼ぶべき存在。

高い深術の適正と身体能力、治癒能力を持ち、皮膚の異常で獣のような体毛が発生する。個々の能力としては「心」や「身」の一族に劣るものの、戦闘に限れば総合的に両者を上回る能力を持つ。

世間一般には「獣の子」として認知され、モンスター等の血を引いたものと考えられて(※実際シンの一族の混血の者に体毛は存在しない為、先祖の中に本当にそれらの血が混じっている可能性はある)殆どが殺され、現代においてはその血筋はほぼ絶えている。

宝珠の「座」

狭義には六つの宝珠を安置するべき地点を指し、広義にはそこからダイープスの流れを安定させるべくシンの一族によってその地点に作られた台座も含む。

宝珠はただ存在するだけでは機能せず、「座」に在ることで初めてダイープスの流れを通して二つの世界を繋ぐ。

地点ごとに二つの世界で対になっており火と風、水と地、光と闇の

宝珠が対応している。その為、二つの世界の間のデイクスの流れによる影響はこれらの地点の周辺が特に強くなっている。

『明の天傘』と『宵の地衣』

同一の職人の手により作られた対となる武器。火鼠の衣ひねずみころもと氷鼠の衣こほねころもと呼ばれる特殊なモンスターの皮から作られており、デイクスの集束を手助けし並の武器とは比較にならない戦闘能力を持ち主に与える、詠技の使用も可能な武器。

タリア・キサラギが娘達の身を守るため姉妹に与えた。姉のリョウカが宵の地衣を、妹のトウカが明の天傘を所持し、タリア・トウカが出奔し『ジェイン・アキ』と名を変えた後も愛用し続ける。

本来姉妹での使用を想定されている為、二つが揃ってこそ真価を發揮する。

命令刻印術式

「他者に命令を聞かせる事」を目的として開発された深術を応用した技術の一つ。通常の深術はその都度術式を組み立てるのに対し、体内に成立した術式を埋め込む事で常時発動し続ける。

しかし、人間の精神はそう簡単に制御できるものではなく、現段階の技術では他人の行動を制御するところまでは至っていない。その為実際は「主が従者を任意のタイミングで殺す事が出来る」機能を持った爆弾の様なもの。

その経緯から忌まれた技術だったがジェイン・リュウゲンはその逆手にとり、処罰される寸前だったブレイド・アズライトに見せしめとしてこれを埋め込む事で自分の手駒として彼を獲得した。

ブレイドに埋め込まれたものはエッジとブレイドの父親によって改良されたものらしく、『そう簡単に爆発する事はない』とブレイドが発言している。

『共生体』シンビオント ↑ New

ガザニア・グレイスとサシード・グレイスの夫婦が研究し作り出そ

うとしていた生命の形。

被術者の生命活動に支障を来たさないよう高濃度のディープスを持った存在を埋め込む事で、生まれ持った素養が無くても誰でも深術を扱える様になる。

本来であれば、体内の「属性」を司るディープスのバランスは繊細なものであり無暗に高濃度のディープスが入りこむと間違いなく生物としての機能に異常を起こす。その為、カースメリア大陸原産のインペルメアブル鉱石という石の保護壁によって被術者と高濃度のディープスとの間はディープスの逆流が起こらない様に遮断されている。

クロウと闇の宝珠の欠片はこの唯一の成功例。

当初の想定では微生物や深術を扱う生物の器官の一部などの生体組織を埋め込み(名称はこれに由来する)、その能力も日常生活を補助する程度の深術の使用に留まる予定だった。が、唯一の人間の成功例であるクロウは現代の人間の手では作る事が出来ない超高濃度のディープス結晶体・アスネイシスの欠片を埋め込まれ、それによって本来の想定を遥かに上回る力を発揮している。

反面、埋め込まれたアスネイシス側の力が強すぎる為鉱石による遮断が「宝珠の側からのディープスの流れを遮断する」事しか出来ておらず、クロウの方から無理に力を使おうと宝珠側にアクセスすると少しずつ鉱石による保護壁が壊れていく。

『共生体過剰侵食』↑New

クロウが、同じ闇の宝珠を持った青年と対峙した時に陥った状態。通常、大気中の闇のディープスが集まって実体化していたラーヴァンが、まるでクロウと一体化した様な姿を持つ。

獣同然の反射速度と目で捉えられない程の速度、そしてクロウ自身が封じていた「加減の無い闇の宝珠の力」を常時振るう為通常時の彼女とは比較にならない戦闘能力を持つ。

クロウの自我は無く、ラーヴァンの防衛本能としての意識が全ての行動をコントロールする。

羽で移動を、鉤爪で攻撃を、そして外殻部で運動を制御し、クロウという『容れ物』をラーヴァンの意志が強制的に動かす。彼女の生命のみが守れば良い為、その身体へのダメージは考慮されておらず（身体を幾重も深術の膜で保護しているもの）瞬間移動にも近い移動スピードは、彼女の身体に痣になる程の多大な負担をかける。

『クロウ』という人間の人格が消失している為、敵対しないものを意図的に狙う事こそないものの、扱う深術のレベルから敵味方無差別の戦い方をする。

この状態のクロウと仲間全員の力を以ってしても、『ジード』には及ばなかった。

本来であればどれだけ危険な状態に置かれても『共生体』^{シンレオント}として完成されたクロウの身体はこの状態になる事は無いが、スプラウツで幼少期から強制された度重なる深術の使用の為に能動的にアスネイスの宝珠の欠片にアクセスし続け、「瞳の色が黒く変化する」程に侵食が進んでしまったクロウの意識は完全にラーヴァンと繋がる様になってしまいこの状態になる可能性が生まれてしまった。

『ジード』

クロウを圧倒し、ラークを瀕死状態に追いやった青年。

彼女が持っていない闇の宝珠アスネイスの残り全てを所持しており、クロウ側が本来の三割に満たない力なのに対し彼が所持する欠片は七割強で単純な出力でクロウと倍以上の力の差がある。

王都で猛威を振るった火の宝珠の力がきちんと制御されていなかったのに対して、彼は完全に力を使いこなしている為実質的にそれ以上の「限りなく本来の宝珠に近い」力を持つ。

その姿はラークの同族にして、シンの一族の裏切り者「ジード・カルシート」と酷似しているが彼は既に死亡している。

最上級深術

禁術とも呼ばれる、ごく一部の人間にしか使えない上級深術クラスすら更に超えたクラスの深術。歴史上にも使えた人間がほとんどお

らず、複数人でしか発動例がないものもある。

また、この術を使った者も当人が最も得意とする属性一つしか使えず、初めて発動された時期や文化圏もバラバラな事からその名前も大きく異なる。

扱われるデュープスの量が桁違いな為、熱に関係する火・光・闇属性の術は周囲（特に術者）への危険性から発動時間が極めて短い。

更に、光属性と闇属性のデュープスは熱と共に空気中に分解されやすい性質を持ったため、他の属性と異なり通常は上級深術であつてもその場に残らないが、最上級深術の場合その規模の大きさから術全体の体積に対する表面積の比が小さいため空気中への分解が緩やかになり、完全に分解されるまでに長い時間を要する（分解のペースは一定ではない為、データも少なく術の持続時間については正確な情報は無い）。

分解が早い風属性の深術も完全に消えるまでにかかなりの距離を要し、海を超えた隣の大陸まで強風が吹いたという記録がある。

いずれも限りなく天災に近い術であり、通常の戦闘に用いられる様な術ではない。

なお、あくまで「人間の限界」でしかない為、六属性の宝珠はいずれもこれと同等以上の力を秘めている。

・風の最上級深術……神息吹^{カミイフキ}

記録上は存在しながら、長い間分類されていなかった術。地の最上級深術として扱われていた時期も存在する。情報が少なく、その時の様子を示した文献には『一瞬にして大地が割れ、爆発した』という程度の情報しかなく、この術が発動したとされる位置には巨大なクレターがある。

これが、風の最上級深術に分類される様になったのは、「術者とされる者が残した名称が風を連想させる『神息吹』であつたこと」、「広範囲の同心円上でほぼ同じ頃に強風の記録があること」、「地の最上級深術が別に存在し、全くの別物であつたこと」等が挙げられる。

現代ではその跡は湖となっており、息吹の御湖（いぶきのみこ）と

いう名が付いている。地属性の深術と誤認されていたころは違う名称の湖だった

・火の最上級深術……（記録なし）

炎の天才術士が操ったとされる最上級深術。複数人での発動か、命を犠牲にしての発動が普通の最上級深術の使用の中にあつて、彼は地脈の流れをきちんと理解し発動場所をそれに合わせる事で負担を最小限に抑え、個人で複数回この術を発動する事が可能であつたとされる。

焰螺旋の再現のように天に昇る火の柱を生み出し、上空で爆発を起こすことで術者との距離を調整し範囲内のものを一瞬にして灰とする。

しかし、実際に発動されたのは一度だけであり、その一撃はとある術士の命を犠牲に放たれた同じ最上級深術、神息吹によって相殺されている。

その衝突によって術者がダメージを負つたという記録は無いが、それ以降彼がこの術を使う事は決して無かつた。

・地の最上級深術……エンプリファイド・レイジ

最も穏やかに始まり、最も危険な領域に到達する最上級深術とされる。広範囲の大地そのものに作用し、その全体を揺らす。しかし範囲が広い分、術が発動しても直後の揺れはほとんど認識できない。が、この術の真の危険性は大地を揺らす事ではなく、「何度も繰り返す事でその揺れを増幅する事」にある。振動を繰り返す事でその威力は通常の地震に匹敵するものになり、最大威力ではアエスラングまたはイクスフェントの大地全てが崩壊する。

これを発動出来たのは「放浪の三人組」だとされ、三人全てが異なる大陸で一番の術士であつたという。その彼らも発動できたのは一度限りであり、三人の呼吸が少しでもずれれば振動の繰り返しはそこで途切れてしまうので、実際に理論上の最大威力を出すのは困難であつたと推測される。

後年の研究者達によればその時代、術士として並び立つものの無かつた彼らの行動原理は「何か面白いことを起こす事」であり、一度

の発動でも彼らはその成果に十分に満足していたと言われる。むしろ最上級深術発動後の彼らは再び禁術を発動する事よりも、この実績を後世に残す為に活動していた為、この術だけ残っている参考資料が多い。が、自分達の活躍を誇張して書かれたものがあまりに多かった為、逆に与太話として一蹴され最上級深術として認められたのが大きく遅れたのは皮肉としか言い様が無い。

・水の最上級深術……終つひの水竜すいりゅう

別名、「国を食らった大蛇」。数千年前の黒髪の少数民族からなる『水影術師団』という深術士の集団が用いた、アエスラングの歴史上最悪の『人災』。基本的に最上級深術というのは一人の術士の限界を超えた術であり、一度の使用で命を落とすか一生に一度しか撃てなかったと言うのが普通である。しかし、この集団は『一つ一つでは機能しない、百人単位で同時に使用して初めて一つの術として機能する』術式を持ち、連発こそ出来なかったものの天災クラスの術を自在に何度も操る事を可能としていた。

その力に抗えるものは存在せず、迫害される存在でしかなかった黒髪の少数民族は二つの大陸をその支配下に置き、自分達を「世界の中枢を担うもの」と称し残る二つの大陸をもその手中に収めようとした。が、それは一振りの剣を持った青年によって阻まれる。当時の出来事は次の様に記録されている。

「天まで届く水の流れの中にあつて、その青年は点でしかなかった。黒髪の術師たちは彼に気付く事さえなかっただろう。しかし、青年の振るった剣は一振りで荒れ狂う水の竜の動きを止め、二振りで竜を真つ二つにした。その剣を、恐れた術師達はこう呼んだ。天より現れ、蛇を下す剣——クサナギノツルギ、と」

クサナギノツルギと呼ばれる剣の力で『水影術師団』の暴走は止まったものの、彼らの行動の結果は今日のアエスラングにも多大な影響を残した。二つの大陸に跨るその領土は「アクシズⅡワンド王国」として名を変え、その頂点に位置する貴族階級は今もこの黒髪の少数

民族が占めている。

彼らの末裔の一人タリア・リヨウカはこういった経緯を理解しており、多くの犠牲の上に成り立った貴族・王族というシステムを快く思っていない。

クサナギノツルギ

伝承の中で水の最上級深術を打ち破ったとされる剣。その正体はイクスフェントの身の一族に与えられた切り札『天空の剣』。

通常シンの一族は人間同士の争いに関わる事を禁じ、宝珠の力が人間の手に渡ることのみを阻止する為に行動する。

が、宝珠そのものとは別に世界には「時に地脈と呼ばれる、二つの世界の宝珠間でやり取りされる強いディープスの流れ」が存在し、終の水竜の術式は南東のカーズメリア大陸に流れる「水の宝珠 フラツディールージュ」の力を使っていた為、その事態を「一部であれ宝珠の力が人の手に渡った」とものと考え危惧したイクスフェント側のシンの一族が『天空の剣』の使用に踏み切った。アエスラングとイクスフェントの繋がりが絶たれたクライング本編の時代には登場しないものの、作中にはこれと対になる『深海の剣』が登場する。

イクステイ・リンクアップ・リンクアップ
本能 共鳴 技 ↑ New

闇の宝珠に続いて火の宝珠までもが一時「座」を離れた事で、世界のディープスのバランス崩壊が加速した事による環境の変化。それが全ての生命にもたらした変化でモンスターが凶暴化し、その危機に単独で対抗する力を持たない人間の防衛本能が生み出した能力。

人間の局所戦闘における最大の強み「武器を扱う能力」と「集団として戦う」の二つが最大限に引き出されたもの。

発動者の武器にディープスが集束コレクトされるのをトリガーとし、付近に居る味方の武器へとディープスが流れ込みそれを媒介として両者の瞬間的な意識の共有ディープスがなされる事で高度な連携が可能となり「二人で同時に放つD・RC変化」ともいべき技を放つ。

防衛本能に作用して感覚的に発動する為、相手に対する僅かな不信感でも抱いていると発動せず「無意識のレベルでも絶対的な信頼を置

いている」者同士でしか発動できない。

また、^{ディープス}D・^{リコレクト}RC変化と密接な関係がある為これを使用できない
リアトリスは発動する事が出来ない。

エツジはおおよその原理を推察していたが第三元素の知識がなかった為、意識の共有がなぜ起こるのかと、そこに関わっているディープスの性質までは理解出来なかった。

第一構成元素 ハイエス↑New

第二記憶元素 サークライツ↑New

第三属性元素 ディープス↑New

「はじめに形が生まれた、次にそこに色が付いた、そして完成した時。そこには『既に』意味があつた」

この世界の全てのを成立させている三つの要素。

普段エツジ達が術や技で扱っている「ディープス」はこの中の「属性」を司る第三元素に該当する。その為集められたディープスはそれ自体ではただの「属性」でしかなく、第一元素ハイエスによって「実体」が与えられて初めて形を得てその効果を世界に及ぼす。

具体的には火のディープスを手に集束^{コレクト}した場合それだけでは熱くならないが、ハイエスで実体化して術や技として使用した瞬間にそれは「火」という形をもつて熱を発生させる。

第二元素に関しては分かつている事が少なく、基本的に第一元素や第三元素の様に深術や物理現象にはほとんど影響を及ぼさないものの全ての物質に含まれている事は分かつており、「記憶」を司り物事の連続性を確立させていると推測されている。

この事からそれぞれに第一元素は世界を「形づくるもの」、第二元素は「意味を与えるもの」、第三元素は「彩るもの」とも呼ばれる。

^{コンパッション}交深術士↑^{ユナイザー}New

リアトリスの様な術者の正式名称。

通常の^{セキユアラ}深術士との大きな違いは、その術の組み立て方。

^{セキユアラ}深術士は基本的にディープスの制御が緻密では無いため大雑把に

深術に必要な量のディープスを集め、それを実体化させるハイエスで縛り付ける様に固定する事で動きをコントロールし深術を使用している。

それに対して、交深術士コンバツシヨナイザーは空気中のディープスそのものと心を通わせる事で直接ディープスを制御して動かし、それを実体化させる補助としてのみハイエスを使用している、云わば「生きた深術」使い。

これにより「術を発動させる前段階で全ての動きを決めている」セキユアラ深術士では不可能な、「発動後のコース変更」、「術者が直に見えない海の中の相手への攻撃」等を可能にしている。

その半面で交深術士コンバツシヨナイザーの術は、術の主体が術者では無く目的のみを伝達された「ディープス」である為「空气中に特定の図形を描く」、等の一つ一つの動作に目的の無い操作は不得手。

総じて、深術に合わせてディープスを使うのが深術士セキユアラであり、ディープスに合わせて深術を使うのが交深術士コンバツシヨナイザーである。

第六十九話 動き出す運命

『巖岩』のバルロは待ち続けていた。

王都を火の宝珠で壊滅させてから姿を現さないジェイン・リュウゲン——彼が唯一忠誠を誓う相手を。

彼に関しては混乱に乗じて逃げたのだという噂も、火事で命を落としたのだという噂も流れていたが、バルロはどちらも真実ではないことを知っている。

だから、予定の日を過ぎてもバルロは彼を待ち続けていた。

彼が居るスプラウツの中心拠点には残るクローバースが全員待機していた。

『爪雷』のフレット。

『紅蓮』のセルファイ。

『流連』のレパート。

『純白』のネイディール。

そして、彼『巖岩』のバルロ。

無断で同じ名有りのクロウに戦いを挑み早々に武器を片方壊したレパートはバルロによる「制裁」を受け、当分は独断行動を起こす事など無いと彼は見ていた。

しかし、スプラウツという組織が出来てからこれほど目的が無い期間が続く事は初めてであり、それ以外のメンバーはその空白が長引くほど士気を乱し待機状態には限界が近付きつつあった。

クロウ達を完膚なきまでに叩きのめした闇の宝珠を持つ青年『ジード』が彼の元を訪れたのはそんな時だった。

「待たせたなバルロ」

突如何食わぬ顔で現れた、刀を持つ見慣れぬ青年に老人は怒りを露にする。

「何者だ、ここはジェイン・リュウゲン様の研究施設。用が無いもの訪れて良い場所ではない、去れ」

静かな口調にも有無を言わせぬ意思が感じられたが、『ジード』は意に介する様子も無く落ち着いて刀を差し出す。

「ジェイン・リュウゲンは死んだ、だから俺がここに居る」
「何を言っている、貴様の様な若造が——」

言いかけて、バルロは差し出された刀に気付いた。
そこに刻まれたジェイン家の紋章に。

ジードは気分を害する様子も無く、冷静に堂々と話した。

まるで、バルロの前でそうしていた「ジェイン・リュウゲン」本人の様に。

「この刀を覚えている筈だ、これはお前が忠誠を誓う相手の証。体面の為に騎士団に代わって解体されたアクシズⅡワンド軍、そこで行き場を無くしたお前に居場所を与えた「リュウゲン^俺」の」

『ジード』が語る自分の過去に、バルロは目を丸くする。

それはスプラウツ創設時の出来事、それを知っている人間は彼自身とリュウゲン本人しか居なかった。

「何故、お前がそれを」

「俺の話をどう取るかはバルロ、お前の自由だ。しかし、リュウゲンが死んだ事実は変わらない、確かめたいというなら亡骸の場所も教えよう。だが、主人が死にその意思を継ぐ者がここに居るこの状況でまず何をすべきか……お前はそれが判断できる人間の筈だ『巖岩』のバルロ」

しばしの間バルロは微動だにしなかった。

彼は『ジード』の瞳を子供達が一瞬ですくむ勢いで睨み続け、青年もそこから一步も引かず澄んだ瞳でその視線を受け止める。

あまりににらみ合いが続き、埒が明かないと判断したのか先に折れたのは『ジード』の方だった。

「この刀、お前に預ける」

渡された刀を老人は黙って受け取り、そこに付いている微かな血痕に気付いて呟いた。

「……本当に、亡くなったのですね」

目を閉じ、その刀を硝子細工のように慎重に捧げ持ちバルロは青年に膝を折った。

「この身はリュウゲン様の為に、たとえ主の命尽きようとも」

『ジード』は柔らかく微笑む。

「計画通り、火の宝珠と光の宝珠の力は解放された状態になった。残る水の宝珠を探して欲しい、今までと違い手がかりはほとんど無い、頼めるか？」

「宝珠というものが今までと同じ様に高濃度のデープス結晶体ならば、レーシアの時同様大気中のデープス濃度を計測していけばいずれ見つけられるでしょう。時間はかかるでしょうが、クローバーズを中心として探索させます」

一度相手を認めると、バルロの動きは迅速で、『ジード』はそんな彼を信頼していた。

「頼む」

バルロは早速子供達の招集にかかった。

頼みがある——クロウはそう言って、リアトリスを呼び出した。

エッジ達はクロウの身体の事について情報を得たものの、『ジード』の次の動きが分からず一度落ち着いて王都から南の離れた街で休息を取る事になっていた。幸いラーヴアンで飛行すれば落ち着いている地域まで移動する事はそれ程難しいことではなく、(クロウの飛ばし方は相変わらず容赦が無かったもの)一行は東の間落ち着いた時間を過ごす事が出来ていた。

ラークは次の方針がある様だったが目的地へ急いでいる様子は見せず、クリフと二人で修行と称して宿から姿を消していた。

エッジもエッジで一人で剣の修行をしている様子で、アキとリョウカは姉妹二人で何処かへ出かけており、ルオンは一人部屋で武器の手入れをしている。

クロウとリアトリスが二人だけになるのはそれ程難しいことではなかった。

人気の無い川辺でリアトリスは相変わらず何処かぎこちない様子でクロウに笑いかける。

「どうしたの？クロウが私に頼みなんて珍しいね」

その違いはクロウの方も気付いており、その表情は浮かなかつた。

「まあね、『ジード』とかいうあいっに私は手も足も出なかった。あいっつと戦うのに私は今のままじゃ駄目だから……ただその前に」

クロウはリアトリスの心に直に問いかけるように、彼女と目を合わせて言った。

リアトリスは彼女の真剣な表情に押されて半歩下がる。

「まだ私を殺すかどうかって悩んでるの？」

リアトリスは一瞬息を飲むが、すぐに動揺を押し殺してクロウの顔を睨んだ。

「知ってたの？」

厳しい声で言いながら、リアトリスは手を震わせた。

クロウはそれを無視して答える。

「ついこの間から、だけどね。正直驚いたよ。あんなに私に世話焼いてくるあんたがずっと私を死なせること考えてたなんて」

それを聞いてリアトリスは笑った。その笑みはクロウが今まで一度も見ることが無い程、嘲りに歪んでいた。

「そうだよ。私は初めて会った時から宝珠を身体に埋め込まれてるって事がどういう意味なのか知っててクロウに近付いたの。一緒にご飯を食べてたのも、朝起こしに行ったりしてたのも、全部きちんとあなたを監視下に置いておく為。その方が都合が良かったからだよ？『ジード』が持ってた残りの宝珠の欠片を取り返すのにも、全てが終わった後であなたの体内の欠片を回収するのにも」

堰を切った様にリアトリスは喋り続けた。

今まで気付かなかったクロウを嘲笑う様にか、

或いは自分自身を嘲笑う様に。

クロウはそれを笑わなかった。

怒りもしなかった。

「側に居れば死なせるのにも簡単だ、って私本気でそう思ってたんだよ？酷い女でしょ？エッジみたいに最後まで守るつもりなんて微塵も無いのに、仲間の振りして騙してたんだよ？あははは……いつからクロウを殺そうと思ったたら、手がこんなに重く感じる様になっちゃったのかな、簡単だった筈なのに」

隠そうとしていた震えが全身に出て、リアトリスは声まで震わせた。

とてもまともにクロウの顔を見ることが出来ず彼女は顔を伏せる。「ごめん……ごめん、クロウ。私なんて謝ったら良いか分からない。守る振りして、仲間の振りして、ずっとクロウを騙してた。いつか見捨てる癖に……ずっと」

その感情のまま自身の顔を傷つける様に爪を立てかけたリアトリスの手を、クロウがそつと止めた。

「馬鹿だね、リアは」

どこか可笑しそうに言ったクロウの反応が予想と違い、リアトリスは顔を上げる。

クロウは朗らかに笑っていた。

「そんなに辛いんだったら、最初から私の事なんて見捨てればよかったのに」

リアトリスは目から涙を零しながら首を横に振る。

「そんな事できないよ！だって私は……私はクロウの事……」

「それでもリアは悩み続けてくれた、あの日記を探す為に必死になってくれた。それだけで私には十分だよ。例え最後にリアに殺される事になっても私は恨んだりしないよ」

信じられない様子でリアトリスは目の前の少女を見つめた。

自分を殺すと言った相手を許して微笑む十六歳の少女を。

「あ、でもだからって簡単に殺されたりはしないからね。私は私で生きる為にあんたと戦うし、どっちが勝ってもその時は恨みっこなしだよ。それより本題の頼みなんだけど——」

「クロウ！」

リアトリスは自分より小さな彼女を強く、強く抱きしめた。

「それでも仲間だからね、私。クロウの為なら何だって力になるから」
「待って、今私そのせいで死に掛ける」

呼吸困難になりかけてクロウがリアトリスの腕を叩く。

それでも彼女が離してくれなかったので、クロウは改めてもう一度頼んだ。

「ねえ、あの……頼みがあるんだけど……」

その言葉にリアトリスはようやく彼女を解放して、笑顔で応えた。

「いいよ、何でも言っただけよ！」

薄っすらと涙の残るその笑顔はいつも通りの、本物のリアトリスの笑顔だった。

「せやあつー！」

「遅いよー！」

敵との間合いを瞬時に詰めるクリフの体技『瞬』、自分の速度を超えその突進をラークは軽々と飛び越えて彼の背後を取る。

そのまま着地した右足を軸にくるりと回転して方向転換し追撃に入ろうとするラークに対して、クリフは慌てて技を切り替える。

『発』！

気の奔流がクリフの周囲で爆発を起こし、彼の周囲のものを全て退けた。

しかし手ごたえが無く、間合いを詰めてきていた筈のラークの姿が無い事にクリフは気付く。

クリフが顔を上げると、ラークは先程の位置から動いていなかった。

そのまま無防備な状態を晒したクリフに対し、ラークが振るった剣から斬撃が飛ぶ。

「うわ、ツー！」

自分の頭に向かってきたそれを避けようとしてクリフは尻餅を着く様に倒れた。

それと同時に、クリフから放たれ続けていた青い気の急流が霧散する。

「今のは『発』で反撃に転じるには少し早かったよ、防御の『殻』で間を繋ぐなり、そのまま落ち付いて『瞬』を維持したまま間合いを離しても良かったんじゃないかな」

クリフは頭を掻きながら頷く。

「それは分かっているけどよ」

ラークはその態度に何か違和感を覚えて目を細める。

「何か余計な事考えて無いかい？」

指摘されるとクリフは眉間にしわを寄せ、土埃を払って立ち上がる。

「……考えてねえ、やっぱもつと先まで予め考えとかねえと動きが間に合わねえな」

その返事には少しの間があつたが、ラークはそこは敢えて突っ込まずにアドバイスを続けた。

「君の高速移動は普段の速度との差が激しい、次の動きを考えるのは大事だけどそれだけじゃ絶対間に合わない。感覚だけで瞬時に制御できる様には今は使用の回数を重ねよう」

「ああ、じゃあもう一回頼む」

再びクリフの周囲を青い気の急流が包み、ラークも回避に移りやすい様重心に合わせてやや低めに剣を構える。

二人は同時に動き、その余波で周囲の木々から葉が散った。

残ったクローバーズ五人は一か所に集まっていた。

普段あまり全員揃った場に姿を見せない『純白』のネイティールもバルロの指示で来ており、皆の輪から少し外れた所で壁を背に落ち着いた表情で立っていた。

『爪雷』のフレットは唐突に表れた青年『ジード』の事を疑う様に睨んでは居たが、それほど問題にもしていない様子で興味無さそうな顔をしている。

『紅蓮』のセルフイーは、そんなフレットが未だに負ったままの右腕の怪我をちらりと横目に見て顔を逸らす。

『流連』のレパートは酷い痣の残る顔のまま、怯えたようにただただ無言で俯いていた。

全員が揃ったのを確認して、『巖岩』のバルロは主と認めた『ジード』に頷いて見せる。

『ジード』は一人一人の顔を見ながらゆつくりと話した。

「君達がセブクローバーズ、識別名を持った子供達か。君達に頼み

がある、水の宝珠フラツデイルージュユを見つけて欲しい」

「ああ？」

宝珠の名前を知らないフレットが威嚇する様に頼み事してきた青年を睨む。

バルロはそんな彼の様子を咎めようとしたが、『ジード』は気にする様子も見せず続けた。

「火山の時に運んでもらったのと同じものだ、探し方もあの時と同じ。……検索範囲は比較にならないが頑張っしてほしい。これが最後だから」

その言葉にクローバーズ全員が微かに戸惑った表情を見せた。

バルロさえそれは聞いていなかった様で困惑する。

「それはどういう意味ですか？」

「そのままの意味、今言えるのはそれだけだ。後の細かい搜索の指示はバルロお前に任せる」

『ジード』はそう言って一方的に会話を切り上げ、彼らの前を去っていった。

バルロは彼に頭を下げ、それぞれの適性を考慮して名有り以外の子供達も混ぜながらそれぞれの搜索範囲を彼らに指示し始める。

自ずと他の子供を従えるのに不向きなフレットは単独行動にされ、セルフィーやネイディールの担当する子供達と範囲は増える。

指示を聞きながらも、セルフィーは先程の言葉の意味を考えたいた。

(最後……もし、本当に最後なら私は)

リアトリスと戦ってから彼女の中では小さな疑問が渦を巻き始めていた。

「それから、ネイディールお前の担当はこの中央大陸の南部だ、それで中央大陸は全てになる。それが済めばデータを参考に他の大陸に移る」

『純白』のネイディールは自分の担当を聞き、最後に『黒翼』のクロウが目撃された地域である事を思い出して口元に笑みを浮かべた。

(どこをどう探すかは私の自由よね……ねえ、クロウ?)

その笑みはとても、とても無邪気だった。

第七十話 七人目のクローバーズ

「ひどい目にあった……」

八人で借りている部屋に戻ってくるなり、ぐったりした様子でベッドに倒れこんだクロウの姿にエツジとアキが顔を見合わせる。

ルオンもその大きな音に、手入れしていた耐冷弓「フレキシブルスナイプ」から顔を上げた。

アキが首を傾げて疲れた様子の彼女に尋ねる。

「私達が買い物に行っていた間何してたんですか？」

「あー……いや、大したことじゃないんだけど。ただ、リアが」

詳細を言おうとせず、歯切れの悪いクロウの言葉が引掛かったのかルオンが呟く。

「リア？」

そこで、エツジとアキも気付いてエツジが尋ねる。

「あれクロウ、リアトリスの事『リア』って呼んでたっけ？」

あ、という表情で顔を上げるクロウ。

その勢いでエツジと目が合ってしまった、目を泳がせる。

「え、いや……前からみんな呼んでるじゃない。私も合わせる様にしたよと思うただけで」

エツジとアキはその反応ではあまり納得できない様子だったが、ルオンは自分が倒れていた間ずっと側に居た彼女の呼び名を初めて聞いて反復する。

「リア……」

何度も繰り返され、クロウの耳が若干赤くなる。

彼女は照れを隠す様にルオンに怒った。

「ちよつとルオン、繰り返さないでよ！」

「何で？」

小首を傾げるルオンにクロウが念を押す。

「何でもよー」

そのやり取りを見ていたアキがふつつ、と笑う。

「仲が良いんですね、まるで姉弟きょうだいみたいです」

ルオンはその言葉に無関心だったが、クロウの表情はほんの少し暗くなる。

「姉弟きょうだい、か。確かに一緒に育ったけど私はルオンの姉にはふさわしくないよ……ああ、でも私を姉みたいに扱ってくれた子は一人だけ居たっけ」

ふと思い出してクロウは穏やかな表情になる。

その変化を見てエツジが尋ねた。

「どんな子だったんだ？」

クロウは思い出に浸る様に宙を眺めながら答えた。

「そうだね、アキみたいな黒髪で明るい子だったよ。絵を描くのが好きで、元気で、見ず知らずの私を家族みたいに慕ってくれた……」

そう言って彼女は目を閉じ、言葉を切る。

アキは続きを尋ねた。

「それで、その人はどうされたんですか」

「死んだよ、私が殺した」

クロウが何気ない事の様にあっさり言う。

エツジとアキは目を丸くして、それから謝った。

「ごめん……」

「すみません、そんな聞かれない様な事を」

二人の反応を見て、クロウは気にしていない様子で付け足す。

「ううん、むしろもう受け止められる様になったから、こうやってようやく口に出せる様になったんだよ……私のした事は変えられないけど、二度と忘れない様に」

そこまで言って、今度は彼女の方が謝った。

「ごつちこそ、ごめん。暗くさせたね」

エツジは首を横に振った。

「そんな事無い、いつでも聞くよ」

アキも領いてエツジと同意見である事を示した。

そこへ、クロウと先程まで一緒だったリアトリスも部屋に戻ってくる。普段のローブでは無くもっとラフな生地の一部屋着を着ており、上気

した肌や下ろされた濡れた髪を見るに湯浴みをしてきた所らしかった。

「あ、クロウ。疲れたって言ってたけどこっちに戻ってたんだ。汗大丈夫？ 私先に入ってきちやっただけど、気持ち悪かったらクロウもお風呂入ってきたら良いよー」

「あー後で良い、今は寝る」

そう言いながら枕に顔を伏せるクロウをアキが叱る。

「駄目ですよクロウさん！そのまま寝たらベッドが汗臭くなっちゃいます」

「大丈夫、私のじゃなくてこの宿のベッドだから」

「だからですー！」

顔を上げないまま脱力したクロウの腕をアキが引つ張る。

と、不意に宿の外で異常な物音がした。

金属とガラスがぶつかる様な音、そして樹の倒れる音。

長い間スプラウツに身を置いていたクロウとルオンはすぐさま、武器を手にして顔を上げる。

「今の……」

「クロウ」

ルオンの声がけにクロウが頷き、二人はそのまま音の正体確かめようと部屋を飛び出した。

「アキ、俺達も行こう。二人だけにはさせられない」

「はい、勿論です」

止める間もなく四人が次々出ていってしまい、外に出られない格好のリアトリスは部屋に一人取り残された。

「え、あ、みんなー！」

「何だ、今の……」

「練習相手には丁度良い、なんて言ってる相手でも無さそうだね」

訓練が一区切り付いて、宿屋へ戻ろうとしていたラークとクリフは深術による突然の攻撃を間一髪で避けていた。

クリフだけでなく常人を遥かに超える反射神経を持つラークです

らその不意打ちを寸前まで避けられず、飛来した光の槍は側にあった樹に大穴を空けて倒してしまった。

突然、クリフが唐突に木々の中へと飛び込んでいく。

「待て、不用意に飛び出してどこへ——」

ラークの制止も聞こえない様子で彼は入り組んだ木々の中へと入っていつてしまう。

宿の裏手には小さな森があり、そこから先は街の外になっていて方向を誤ればどこまでも視界の悪い場所が続いていた。

と、不意にラークは目の前に女性が立っていた事に気付く。

(いつの間に……)

女性はその肌も、髪も、服も上から下まで真っ白だった。

都会の中心でしか見ない様なレースの多い服に身を包んでおり、ほんの僅かな砂埃でもあつという間に汚れそうな服装をしているにも関わらずその服には一点の汚れも無かった。

およそ戦いとは無縁、そう見える彼女は多面鏡の様な奇妙な杖を振り上げて口元に笑みを浮かべた。

「ホーリーランス」

何の警告も口上も無い。

唐突に三本の光の槍がラークの顔面を狙う。

ラークはそれをバランスを崩しながらギリギリの所でかわし、剣を抜いた。

白い女性は笑みを浮かべたままそれを黙って見ている。深術士セキユエラーであれば、致命的である筈の至近距離で。

ラークが袈裟がけに振るった剣を女性は軽く一步下がる様にして避けた。

そこから突き、横風ぎ、逆袈裟と立て続けに振るわれる彼の剣も同様だった。

武器を手にした剣士であっても対応するのが困難な速度であるのに、女性はまるで風の中の木の葉の様にラークの剣を避け続けた。

「……」

ラークは一度手を止め、女性は一步下がる。

「どうかした？」

白い女性は笑う。

(何かがおかしい、さっきの深術も、今のこっちの攻撃も……なにか感覚がずれた様にこっちの反応が遅れる)

ラークが攻撃してこないのを見て、女性は背を向けゆっくり歩き出す。

あまりに無防備なその姿にラークは一瞬攻撃するのを躊躇したが、すぐに間合いを詰めて突きを繰り出す。

それを女性は後ろを振り向きもしないままにふわりと避けて森の中へと歩き続ける。

ラークはまたも避けられた事に違和感を感じながらも彼女の後を追った。

先程走り出したクリフと同じ様に、一人で。

エッジ達四人が宿の裏手に辿り着いた時、既にそこには倒れた樹しかなかった。

その根元の槍が貫通した焼けた後を見て、クロウとルオンは自分達と同じ「名有り」の相手だと確信する。

「光属性の深術、ロクに見た事すら無いけど、あいつか『純白』の」「ネイデール」

スプラウツを束ねるバルロが、絶対の信頼を置く唯一のクローバーズ。

それを知っている二人に緊張が走る。

「エッジ、アキ。今度のは同じクローバーズでもこの間の引き継いだばっかりの『流連』とは訳が違う、気を引き締めて私達から絶対に離れないで」

同じ幹部であった二人の険しい表情を見て、注意されたエッジとアキも頷き慎重に四人は森の中へと向かった。

ラークはネイデールに追いついていた。

先程までと同じように、目と鼻の先に迫られているにも関わらず彼女はそれを気にも留めない。

ただゆつくりと両腕を広げ、隙を作ってラークを挑発する。

「甘く見られたものだね、崩龍残光劍」
ほうりゆうざんこうけん

ラークは先程までとわざと速度差を付け、一気に最高速まで加速してネイデールに斬りかかる。

ネイデールはその動きに対して広げた両腕を交差させると、口元を歪めた。

「――バニッシュメント」

ラークの剣は空を切った。

白い羽の様に光が舞い、彼女の姿は完全に消失する。

それと同時に背後から光の槍で刺され、ラークの脇腹が激しく出血する。

「ぐ、っ！」

すぐさまラークは振り返りながら剣を振るうがそれは空を切った。

姿の無いネイデールの声が響く。

「あら、消失と攻撃は完全に同時だったから絶対反応出来ないと思っただけけど。よく致命傷を避けたわね」

ラークは歯を食いしばって痛みに耐えながら、気付く。

「さっきの光の槍も、僕達の前に表した姿も「音」が無かった。剣が当たった筈でも手応えが無い……君の能力は、幻影か」

ネイデールの高笑いが聞こえる。

「ええ、そうよ。たとえば固まっている四人組にお互いの映像を見せれば、全員を孤立させる事だって出来るわ。あなた達は確かに揃えばそれなりの驚異だけど、個々の力ならクローバーズ私達に及ばない。どこに居るかも分からない朝霧の中で、串刺しになって死になさい」

普段なら声だけで相手の位置を特定出来るラークだったが、まるで狭い空間で反射している様に音があちこちから聞こえ敵の位置が分からなかった。

周囲を見回し、ようやく白い女性の姿を再び見つけラークは剣を構えて対峙する。

「種が分かって尚、その手品だけで勝てるつもりかい？」

「いいえ、もう終わっているわ。私が得意なのは何も幻影だけじゃな

い。何より、」

ネイディールが目を閉じて、指を鳴らす。

ラークの周囲に張られていた偽りの平穏な森の景色が消えた、白い女性の姿も無くなる。

「いつから私がそこに『居る』なんて思っていたのかしら？」

ラークが立っているのは彼を狙って空中で制止する光の槍に取り囲まれた、その中心だった。

(みんな、いつの間に?どこへ行ったんだ?)

エッジは一人で森の中を走っていた。

何度か人の気配を感じて立ち止まり周囲を見回すものの、それは全て気のせいでエッジはいつのまにか孤立していた。

(何かおかしい、あの状況でクロウ達が何も言わずに離れる筈が無い……なのに何で、いつどこで?)

エッジは今度の敵に、言い様の無い胸騒ぎを感じていた。

自分の離れている間に仲間が戦っている事が心配でエッジはその足を速める。

しかし、景色は無気味な程に平穏だった。

木々、そこから伸びる根と枝、所々にある岩に、木々の間から降ってくる木洩れ日。

走る間にエッジが避ける障害物はあまりにいつも通りで、味方の気配も敵の気配もない。

と、不意にエッジは目の前の木に寄りかかる少女に気付いた。

敵と交戦したのか、その近くには見慣れない武器——鏡をいくつも繋げた様な杖が刺さっている。

そして、眠る様にぐったりして血の中心に居るその少女は、

「クロウ!!」

エッジはすぐに飛び出し、彼女に駆け寄る。

生気の失われたクロウの顔を血が伝い、彼女の下に赤い楕円を描いていた。

明らかに危険な量の血が流れていることにエッジは冷静さを失う。

「クロウ、大丈夫か!？」

手の触れる距離まで来た瞬間エッジの耳に女性のクスリと笑う声が届き、目の前のクロウの口元が歪んだのを見て転びそうになりながら反射的にエッジは足を止める。

——ザク。

固いものが裂ける様な嫌な音を遠くで感じて、エッジは仰け反った。

それが自分が後ろから刺された事による現象だと彼が理解するのに時間がかかる。

「あなた……優しいのね、ごめんなさい痛かったでしょう?」

嘘の様に大量に溢れる血の熱さと、左肩が無くなる様な痛みでエッジはようやく自分の置かれた状態をきちんと理解する。

とても、目の前の「クロウ」だった女性が話す言葉を聞く余裕など無かった。

「あ、がああああ、あ!」

「痛み無く死んで貰うつもりだったのだけど、まさかクロウの事をそこまで心配すると思っていなかったから驚いてしまったわ」

言いながらネイデイルは優しくエッジの顔を撫でる。

「目を閉じて、深呼吸して、それで楽にしてあげるから……天へと誘うてん堕おちる輝かがやき、ホーリーランス」

エッジはそんな事はとても出来なかった。

呼吸するのさえ精一杯で苦痛に喘ぎながら上を向き、彼は白い光が自らの頭上に落とされようとしているのを理解した。

「——ネイデイルッ!!」

と、周囲の景色に無数の「穴」が空く。

エッジと周囲とを隔てていた幻影は次々に飛んでくる黒い槍で粉々に粉碎された。

叫び声と共に本物のクロウが走って現れ、エッジにとどめを刺そうとしていた光の槍にむけて右手から闇の槍を放つ。

「ブラッディランス!」

黒が白を貫き、エッジの頭上に白い光の粒子が散った。

そこで彼女はエッジの大怪我を見て息を呑み、その表情を怒りに歪める。

クロウの様子とは正反対に、ネイディールは嬉しそうに笑った。

「ああ、良かったやつと会えた。久しぶりねクロウ」

クロウは当然喜ぶはずも無く、吐き捨てる様に言った。

「会った事さえほとんど無いでしょ、あんたなんか知らない。そのふざけた術ごと潰してあげる！」

彼女の剥き出しの殺気を気にする様子も無く、ネイディールは無邪気に、無邪気に回る。

その様子は先程までエッジ達に見せていた姿と違い、少女の様だった。

「酷いわね、折角の再会なのに……って、あ。そっかこの姿じゃ分からないか」

唐突に砕けた話し方で言うと、ネイディールは回りながら自身の周りに展開していた「幻影」を解いた。

何をしているのかと警戒するクロウの前で白い女性の姿が消えていく。

本物のネイディールはずっと背が低かった。クロウよりもっと低く、ごく質素な服に身を包んでおり、その髪はアキと同じ様に黒髪で――。

「そんな、何で……何で」

クロウは目を見開いて、声を震わせた。

彼女は目の前の光景を受け入れることが出来なかった。

「会いたかったよ、クロウ」

クロウを化け物と否定した少女。

自分が殺したと思っていた少女。

ハクが、クロウの目の前に立っていた。

第七十一話 白ト、クロ

ルオンは気が付くと一人で走っていた。

直前まで横にクロウ達の姿を確認しながら走っていた事にルオンは首を傾げる。

(おかしい……)

周りの環境に違和感を覚えた彼は、弓に矢を番えながら詠唱を開始する。

「扇氷閃」
せんひょうせん

三本の矢を放射状に飛ばして、ルオンは三か所の落下地点に氷塊を発生させる。

「豪華噴出、イラプション」
ごうかふんしゅつ

そのまま氷塊の下の大地を加熱し、ルオンは全ての氷塊を蒸気へと変えた。

同時に右手でなぞる様にして、右目の前面に氷のレンズを形成し空間を観察する。

(空気の流れが変、『障害物』があるみたいに蒸気が逸れてく所がある) ルオンの手の中で「フレキシブルスナイプ」の温度が急速に下がっていく。

冷気で最大限まで威力を上げた弓で、ルオンはその『障害物』目がけて渾身の一撃を放つ。

「――氷屑の破者」
ほらいっしんしゅつ

ガラスの割れる様な音を立てて、矢は空間を切り裂き青い軌道を描いた。

「つぐー！」

痛みから来る声を押し殺しながら、ラークはそれでも足を止めない様に動き続けていた。

周囲から彼に向かって絶え間なく光の槍が飛来する。

しかもその内のいくつかは実体が無く、またいくつかは明らかに直前まで槍が見えなかった所から飛んできた。

(「幻影」を全部消す振りだった、か……確かに全部消す道理は無い)

極度に反射神経と瞬発力をすり減らす状況下で、ラークはあちこちに傷を負っていた。

何より最初に受けた脇腹への直撃が治りきっておらず、彼の動きを鈍らせる。

そんな今にも倒される寸前の彼を、ルオンの矢が救った。

横から突如現れた矢は、攻撃による衝撃を想定していなかったネイデールの光の槍を蹴散らす。

「平気？」

いつも通りの会話をする様な軽さで、助けに来たルオンはラークに尋ねる。

「ああ、助かったよ。それより……」

ラークの方も荒い息で、素直に礼を言う。

しかし、彼は休む様子は少しも見せなかった。

「クロウ達の方が心配だね」

「ああ」

二人は互いを案ずる言葉も、余計な会話も挟まずすぐに他の仲間達の方へと向かった。

「ふざけないでよ、ネイデール……こんなもの見せても私は、騙されないわよ」

口にしながらクロウは目の前のハクは幻影ではないと薄々分かっていた。

景色や人間の幻を光で作り出すのがネイデールの深術ならば、像を作るのはあくまで彼女。

知らないものは作れない。

ネイデールがハク本人でないなら、姿を知っている筈がなかった。

しかし『ハク』はそれを怒る様子もなく、優しく言った。

「私を偽物だと思ってるんだね、でも私は正真正銘本物だよ。ちゃんと覚えてる、あの日の事」

クロウの思考が停止する。

ハクは楽しい思い出を語るように話した。

「一緒に裏山に行ったんだよね、転びそうになった私をクロウが助けてくれて……でもその後、私達は熊に襲われた。それで、クロウが」それは紛れもなく「あの日」の事だった。

クロウの脳裏にその時の光景が甦る。

ハクとその両親に襲い掛かったモンスター。それを彼女が殺した
こと。

そして、ハクに、村の人間全てに「化け物」と拒絶され――。

「やめて、やめて！」

クロウは反射的にその日の記憶を遠ざけようと叫び、目を閉じる。とても平静にそれを聞く事が出来ない位、その経験はクロウの中でトラウマになっていた。

クロウは次にハクが口にする言葉が恐ろしかった。

自分を嫌っている彼女が口にする恨みの言葉が。

そんな震えるクロウの目から滲んだ涙を、ハクの手がそっと拭う。

「大丈夫だよ、全部分かってるから」

「え……」

クロウと最後に分かれた時、ハクがその目に映していた彼女への恐怖や拒絶は欠片も無かった。

小さな少女の目の中に黒い瞳の中にあるのは同情と、理解の色。

「あの時クロウは私をモンスターから助けてくれたんだよね、ありがとう。ごめんね」

クロウの手から力が抜けた。

安堵が彼女を包みそれ以外の事を忘れさせる。クロウは考える前にハクを抱きしめていた。

「良かった……ハクが、生きててくれて本当に良かった」

ハクも嬉しそうに微笑んで、彼女を抱き返す。

そして、言った。

「――そう、なのに酷いよね。私の親も、村のみんなも誰もクロウに感謝しなかった」

クロウは何か、違和感を感じてハクから離れる。

彼女の表情は先程までと何も変わっていないかった。

優しく、優しく微笑んだままハクは続ける。

「酷いよね、許せないよね。自分達と違う力があるからってクロウを殺そうとしたんだよ」

「ハク……？」

クロウが恐る恐る彼女の名前を確かめる様に呼ぶ。

目の前の少女は間違いなくあの日の優しい少女だった。

そして、

同時に間違いなく『純白』のネイティールだった。

「だから、クロウは殺したんだよね？深術士わたしたちを迫害する人達を、大丈夫全部分かっているから」

言いながらハクはいたずらっぽく笑って、地面に刺さっていた杖を引きぬく。

「だから、今度は私がクロウを助けてあげる。待っててね、クロウの周りにいる『深術士敵じやない人達』を、クロウを騙して迷わせる人達をみんな殺してあげる。そしたら帰れるよ？水の宝珠を探してからになっちゃうけど、一緒に帰ろう私達の家スプラウツに」

「待って……」

制止しようとして震えたクロウの言葉は届かない、ハクは傍で血を流して倒れているエッジの事を思い出したらしく息を飲んで顔を曇らせる。

「あ、つい話に夢中になってこの人の事忘れちゃった。ごめんね、この人は良い人なのに苦しませちゃった。待ってて今楽にしてあげるから」

笑ってハクは詠唱を開始する。

クロウは動けなかった。

(止めなきや、戦わなきや、エッジが死ぬ……なのに、)

指の一本まで、クロウの身体は反応を示してくれなかった。

「やめ、て……」

クロウの身体に危険が迫っていない為、ラーヴァンも反応しない。
「てん天へと誘ういざな墮ちるお輝き、」

「やめてー！」

終わる寸前の「ホーリーランス」の詠唱が、クロウの脳裏にエッジの死の光景を映し、彼女の身体の硬直を解いた。

それでも手を伸ばすのが精一杯でとても術を放つ事など出来ず、クロウの伸ばした手のその先でハクの放った光の槍がエッジ目掛けて落下する。

しかし、彼女の代わりにそこへ割り込んでくるものがあつた。

「——リヨウカさん、目の前の岩の周り、全部偽物です」

「分かったわ——詠技、闇蜘蛛！」

八本の黒い布が鋭利な蜘蛛の脚の様に次々に景色を突き破つてきた。

エッジへと墮ちる所だった光の槍もそれによって蹴散らされる。

乱入者の存在にハクは微かに苛立った表情を浮かべ、元の「ネイデール」の姿に戻っていた。

「まだ生きてるわよね？二人とも」

「エッジ……待ってて、すぐに助けるから」

穴の空いた「幻影」の景色の間からリアトリスとリヨウカが現れて敵と対峙し、ネイデールも彼女達に杖を向けた。

両者は少しの間睨み合ったが、ネイデールは彼女たち二人だけでなく更にいくつも足音が近づいてくるのを察して後ろへステップしながらその姿を消そうとする。

リヨウカが反射的にそれを逃すまいと追撃をかけようとするが、横から深術の気配を察知したリアトリスに突き飛ばされる。

「——バニッシュメント」

「ッー」

ネイデールの声が響き、リアトリスが振り向きざまに張った障壁が後ろからリヨウカを串刺しにしようとしていた光の槍をすんでの所で防ぐ。

「大丈夫か、お前ら!?」

クリフも仲間達を助けに現れる。

リアトリスとリヨウカは慌てて周囲を見回したが、ネイデールの

気配はどこにも無かった。

彼女が展開していた光のスクリーンと幻影は消えていき、後には倒れたままのエッジと呆然と崩れ落ちたクロウが残された。

「エッジ！返事して、エッジ！」

「クソつ、骨までやられてる、このままだと左腕動かなくなるぞ」

「止血するわ、治療術は悪いけどお願い」

「血が止まらない。もう一回走査かけて、動脈の傷ついてる部位を優先して治療術をかけます！」

仲間達が必死にエッジの傷を治すのを、初歩的な治療術しか使えないクロウはただ見ている事しか出来なかった。

「……あ、れ？」

「気が付いた？」

エッジが目を覚ましたのは半日後、夜中の事だった。

ベッドの傍にじっと座っていたクロウ以外の仲間達は皆眠っており、起きているのは二人だけだった。

彼女の姿を見てエッジは慌てて身を起こそうとし、痛みに顔をひきつらせる。

「無理しない方が良い、左腕が取れかけたんだよ」

暗い部屋の中で、宿の窓ガラスにランプの明かりが反射して二重に映る。

額に冷や汗を浮かべながら、エッジはクロウの顔をもう一度見た。

「それよりクロウは大丈夫なのか……？」

「私は大丈夫、怪我はしてない」

彼女の返事を聞いてエッジは安心した表情を見せる。

「良かった……」

「そんな大怪我の時に何で私の心配するのよ」

力が抜けたようにゆっくりとベッドに倒れこんで、エッジが答える。

「やられる直前かな、クロウが血を流して倒れてるのを見せられた……それで隙を作ってこの様だよ、情けない」

クロウはその答えを聞いて、その時まるで力が入らなかった拳を強く握り締める。

「ごめん」

「何で謝るんだよ」

エツジは笑ったが、クロウは笑わなかった。

「昨日話した私が殺した子の話覚えてる？……あの子、生きてた。スプラウツにずっと保護されてたの、それで……それでクローバーズになつてた。全部私のせい」

突然の話にエツジも流石に驚く。

聞きたい事もあったが、クロウの空気を察してエツジも質問は止める。

「次あいつが出てきたら、私が一人で相手をする……もう誰も、怪我させない」

脳裏をかすめたかつてのハクの笑顔を、クロウは振り払った。

「あいつは、ネイディールは私が倒す」

「クロウ……」

思いつめた彼女の表情にエツジは何も言えなかった。

それと、と良い知らせもある事をクロウは付け足す。

「次の目的地決まったわよ、私と会った時ネイディールが言ったの『水の宝珠を探してる』って。リアトリスとラークからその場所聞いてちよつと驚いたけどね」

何に驚いたのかよく分からずにエツジは首を傾げる。

「最後の宝珠の場所はカースメリア大陸、貿易拠点マーミンのそばの洞窟」

クロウは懐かしむ様に、少しだけ嬉しそうに言った。

「私達がクリフと一緒に初めて戦った場所だよ」

※セブンクローバーズの情報が更新されました。

深術のエキスパートとして育てられた孤児の集団。

その中心的活動を担う精鋭にして、同時に味方同士の監視者でもある七人の深術士^{セキコアラ}。

人数が多いのは裏切りや命令違反を冒そうとしたメンバーが飛びぬけた実力を持っていても複数人で対処し、従わせる為。

各自がセブンクローバーズとしてそれぞれ識別名称を持っているがあくまでコードネームであり、成立してからそれほどの年月が経過していない為、本人の能力と名前が一致している者が多いが『流連^{りゅうれん}』の様に二代目である場合は本人の能力等とは無関係に前任者の識別名称を引き継ぐ事になる。

また、全員が自身の最も得意な一属性の使用に特化している。

『爪雷^{そつらい}』

名前：フレット

武器：専雷爪^{せんらいそつ}「スペシャライジング」

特化属性：雷

才能：並外れた身体能力

戦う事に喜びを見出し、誰よりも危険な少年。

術士としての素質もさることながら、近接戦闘のみでも正規の騎士を圧倒する年齢不相応の身体能力を持つ。

実力はともかくとして性格面に多大な問題があり、命令の有無に関わらず単独行動が多い。

また、戦いそのものに喜びを見出す性格ゆえに強敵との戦いをわざと引き延ばしたり、見逃す事もある。

それ故に実力とは反比例して仲間からの信頼は薄い。

巨大な鉤爪の形をした彼の武器は、雷以外の属性のディープスを貯める機能を排することで雷属性の使用効率を格段に上げている。

この武器では通常の方法で他の属性を使用することは出来ない。

多少の傷を負っていたとはいえラークとすら互角に切り結ぶ身体能力を持ち、優れた術士でありながら七人の中では唯一好んで接近戦

闘を行う。そのラークにも筋力やスピードでこそ劣るものの、雷属性の爆発を上乗せした技の威力で上回り、用途に応じた術を使いこなす事で高い防御能力を得ていたリアトリスの障壁も、武器と深術両方の特性を併せ持った攻撃で粉々にした。

その実力は紛れも無く七人中最強である。

『巖岩』

名前：バルロ

武器：錬成手甲「岩堵」

特化属性：地

才能：観察と経験による弱点の看破

子供達を鍛え上げた全員の師であり、統制者でもある老人。

元は軍人で、岩で殴られる恐怖をもって全ての子供をコントロールしている。

この人間なくしてスプラウツは集団として機能しない。スプラウツの中心と言っても過言ではない人物。

他のクローバーズと比べると突出した戦闘能力を持っている訳ではないが、全員の弱点を熟知し裏切りを想定して身内との戦いに特化している為、直接戦った場合クローバーズ全員を打倒しうる手段を用意している。

拳を『握る』ことをトリガーとして一定の間合いに岩を形成し、腕の動きと連動させる手甲を武器として使っており、自分から離れた間合いに居る相手を『殴る』事が出来る。

これは、単純ながらも強力な接近戦の手段で、敵との間合いを空ける事に優れている。

また打撃が発生する箇所と拳の間には何も無い為、正確に間合いを把握していない相手には壁などで遮断する事も難しい。

現実主義者で自分がとうに『黒翼』や『爪雷』に力では及ばない事を認めた上で、正々堂々に拘らず数の利や状況、心理的死角を突く事で彼らとも互角以上に渡り合う。

『紅蓮』

名前：セルファイ

武器：鞭、炎熱鉱石えんねつこうせき

特化属性：火

才能：感知

燃える様な赤い髪の少女。

感情的で激し易く『爪雷』そうらいからは本来の識別名称を無視して『爆発セルファイ』と呼ばれている。自身の実力が『爪雷』そうらいには及ばないと自覚しているものの、術士として一流であるというプライドを持っている。その為興味の無い事にはやる気を出さない『爪雷』そうらいとは反りが合わず、喧嘩が絶えない。

彼女はデイープスの位置を正確に把握することに長けており、温熱筒おんねつとうにも利用されているデイープスの集束コレクトを補助する鉱石を併用する事でその能力全てを攻撃に利用している。

放り投げた赤い鉱石を核にして詠唱無しで術を開始し、術が相手に届くまでの間も集束コレクトを続ける事でクローバーズでは唯一自力で詠唱無しの上級深術を発動する事が出来る。これは感覚的には『一度投げた石に、後から投げた石を空中でぶつけ続ける様なもの』であり、高い感知能力を持つ彼女以外には真似する事が出来ない。

自分と同等以上の感知の才能を持つたりアトリスを激しく敵視し、またリアトリスの側も防御に特化した自分のスタイルと正反対の彼女の戦い方を危険視している。

◎接華浮燈せつかふしとうの陣

単独で彼女が戦闘を行う場合、接近戦が不得手な彼女がそれをカバーする為に使用する切り札。

手持ちの炎熱鉱石の大半を空中にばら撒き、それを「触れると爆発する赤い光の珠」に変換する事で自分の周囲全体を守る領域を作り出す。

性質上、ほぼ全ての炎熱鉱石を消費してしまうため一度の戦闘で使えるのは一度が限界。

一見、珠同士に隙間があるため壁としては機能しないように見えるが、陣の内部は全て彼女の『感知』の範囲内であり小さな異変でも即

座に反応してセルフイー自身が爆発を起こす事が出来る。その為
ラークのスピードを以てしても突破するのは難しく、相手が強力な深
術で一点突破を狙ってきても外縁部だけを爆発させる事で衝撃を半
減されてしまう。

また、全ての光の珠は陣を張っている範囲内なら彼女自身が任意で
動かせる為、少数が減っても陣は機能し続ける。

総じて防御すら攻撃によって補う、ただひたすら攻撃に特化した彼
女の戦い方を象徴する陣。

『黒翼』

名前：クロウ

武器：スローイングダガー

特化属性：闇

才能：体内に持った闇の宝珠の欠片

スプラウツを脱走する前のクロウ。

彼女はエッジ達には自分もまた子供達を管理し教育する側であつた事を告げなかったが、これがクロウが脱走する事が出来、また抜けた後も執拗に追われ続ける最大の理由である。

宝珠の力を使っている状態のクロウは、術士としての資質のみで考えれば全てにおいて最高クラスの能力を所持しており、全ての術の詠唱を破棄し、『爪雷』^{そうらい}すら及ばない威力の術を用い、数kmの範囲の視界を闇で閉ざしたまま内部の状態を正確に把握し相手をピンポイントで攻撃する事も可能。

通常時にクロウがこれらの能力を使用すると相応の負担が身体にかかる（目の色の変化はこれに因るもの）が、体内の闇の宝珠の欠片の意思⇨ラーヴァンを黒い巨鳥として実体化させた状態ではその負担が無くなり、上記の能力が制限なく使える様になる。

能力だけなら間違いなく最強のクローバースであったものの、本人が人を殺す事を無意識に嫌っていた為広範囲に効果が及ぶ様な術は滅多に使用せず、黒い霧による感知を活かした情報収集や最小限の殺害に抑える暗殺等を主としていた。

自ら望んで戦いに赴く事で最強の座に位置する『爪雷』そうらいとは対極であり、能力的にはクロウが勝るものの無意識に力を抑えてしまうため、殺人を楽しみさえする彼には対人戦の能力では一步劣る。

『流連』りゅうれん

名前：レパート

武器：深素銃「始」

特化属性：風

才能：替えの効かない才能をもっていない、実験台として使い捨てて問題ない最低限の実力

二代目。前任者とは属性以外共通点なし。

他のメンバーと比べ成ってから日が浅く、実力的にも劣るが、それ故認められた事を喜び調子に乗りすぎている所がある。

この世界において普及していない最新鋭の武器、深素銃「始」を使用する。

これには世界の始まりに起きたとされる。六属性の圧縮によるビッグバン爆発（クロウもフレットに追い詰められた際、これと似た現象を閻属性の圧縮で強引に引き起こしている）の原理が応用されており、名前の「始」はこれと試作品で有ることに由来する。

トリガーする度に銃の内部に人工的に集束された六属性のデ IPPS が圧縮され、それによって引き起こされた爆発のエネルギーが光弾として発射される。

一発ごとに空気中のデ IPPS を集束して打ち出している為弾数に限りはないが、内蔵の動力には限りがあり稼働時間は最大でも20分。連射し続ければ10分ほど（本来それを考慮して二丁が渡されていた）。

強力ではあるものの六属性の力が均等に発揮される状況下でなければ使用できず、均衡を崩す温度変化に弱い等まだ問題点も多い。

レパートがこの武器の使用者に選ばれたのは、彼が辛うじてクロウバーズの穴埋めが出来るギリギリの実力を持った「数人の内の一人」であった為であり、『巖岩』は彼の事を実験台の駒位にしか考えていなかった。

彼自身も識別名を持たない他の仲間とそれほど実力差が無いことは自覚しており、選ばれた事をチャンスと考え自分の実力を証明しようとする。

決して認められる事など無いのだと気付かないまま。

『弧氷』

名前：ルオン

武器：耐冷弓たいれいきゆう「フレキシブルスナイプ」

特化属性：氷

才能：『爪雷』そうらいには劣るものの高い身体能力、狙撃

感情の大部分を喪失した少年。

弓という単独戦闘を苦手とする武器を持ちながら、空中で正確に弓矢を操るボディバランスと素早い跳躍力を持ち、氷柱を発生させる属性技「扇氷閃」と合わせて単独行動でも十分詠唱時間を稼ぎ戦闘する能力を持つ。

術の詠唱速度・威力・弓の扱い全てにおいて安定した能力を持つもののクローバース全体の中では尖った能力を持たない様に見えるが、その真の脅威は「狙撃」。

感情を欠落した彼は無感情に、確実に遠距離から標的を仕留める事が出来、七人中最も遠距離での戦闘を得意とする。

クローバースは個々としては強力な力を持つものの、我が強い者も多い為コンビネーションを欠く事も多い。しかし、ルオンはその戦闘スタイルから全員の能力を邪魔することなく彼らのサポートをする事が可能である為、噛み合った時の脅威は何倍にもなる。

特に、広範囲の索敵を行う事が出来るも殺人に抵抗を示すクロウとの相性は良く、二人が組む事で深術の破壊の痕跡を一切残さず特定の相手を消す事が出来た。

スプラウツの中では監視無しでも命令違反をせず、単独行動もこなせる貴重な人材。

耐冷弓「フレキシブルスナイプ」はルオンの作り出す低温状態に耐えられる事を最重要視して作られており、温度変化によって通常の使

用と、長距離狙撃用のモードを使い分けることが出来る。

その反面で長距離狙撃時の弓としての性能が上がった為に必要とされる力も相当なものであり、ルオンやフレットの様な高い身体能力を持つ人間以外には扱えない。

事実上氷属性の適性と身体能力を併せ持ったルオン専用の武器。

『純白』

名前：ネイデール

武器：投影杖「アサギリ」↑New

特化属性：光

才能：多角的な空間・映像の理解、並列詠唱待機↑New

クローバーズでは『巖岩』を除いて唯一の成人。

味方であつても姿を見たものが少なく、部屋にこもっている時間も長いが『巖岩』からの信頼は厚く、他の全員が拠点を留守にしている場合単独で『巖岩』の役目を引き継ぎ、子供達の統制者の役目を担う。

リアトリス同様、希少な光属性を最も得意とする術士。

それだけでも十分特異な才能であるが、クロウの様な例外を除いてまず不可能な中級深術「ホーリーランス」の詠唱を破棄し、咄嗟の発動をして見せる等その実力は底が知れない。

深術士の数は騎士団や軍の外部には少ない為、ともすれば迫害にすら遭いかねない深術の才能のある子供達の未来を憂い、その幸福を願う。

不幸な未来や現実を見せない為ならば、躊躇い無くその命を摘む程に。

彼女は光によって映像を作りだし、敵を分断したり、自身の姿を隠す「幻影」を作り出す。↑New

攻撃系の術の詠唱時間そのものは平均並みであり、実は他のクローバーズと違い即座に敵を仕留める詠唱破棄は使えない。

時折見せる中級以上の術の詠唱破棄は、幻影で詠唱している所を隠してあたかも即座に使ったかの様に見せているもの。

しかし、彼女の場合この詠唱待機が他者のそれと大きく異なる。

普通ならば詠唱を完了した術一つの発動のタイミングを遅らせ任意のタイミングで放つだけのものだが、彼女の場合「一度詠唱を完了し待機に入った時点で次の術の詠唱が開始」出来、いくつもの術を詠唱待機状態にしておくことが出来る。

これにより事前に多数の術を準備しておき、幻影と合わせて敵を自分の優位な場所へと誘い込み罠にはめる様に苦しむ間も与えずに一気にとどめを刺す戦闘スタイルをとっている。

心理戦に長けており「敵が大切な人間を心配している隙に後ろから串刺しにする」、「術士が苦手な筈の近接戦闘をしている振りをして詠唱時間を確保する」等の方法を堂々と使用する。

その為、クロウが無意識に行っている「人間や仲間を傷付けない為の手加減」という唯一の欠点を最も的確に突いており、能力上の相性で彼女にとって最悪と言つていい天敵。

手にしている無数の鏡を繋ぎ合わせたかのような杖、投影杖「アサギリ」は周囲の映像をそのまま複製しネイティールの作った光のスクリーンに投影する事で彼女が「幻影」を作る効率と完成度を高める特殊な武装。これの補助を併用する事によってネイティールは空間に絵を描き足す様に自分が隠したいもの、付け加えたいものの像だけを素早く作り出す事が出来ている。

その為武器としての攻撃能力は無く、彼女以外の人間が手にしてもただの杖でしかない。

総じて対人に最も特化した能力を持ち、スプラウツが誇る最強の二人、個として完成した強さを持つ『爪雷』、術士として最高の資質を持つ『黒翼』、とは全く異なった方向性のクローバース最後の切り札。

その正体は、クロウがスプラウツを脱走した時に彼女を助けた少女ハク。↑New

クロウとは一時期、姉妹と呼べる程の仲の良きを見せていた。

普段見せている成人女性の姿は幻影であり、万が一にもそれを悟られない様バルロは彼女をほとんど他のクローバースと接触させておらず、また他の識別名持ちと同席している時なども多くの角度から映

像を見られて見破られない様彼女は壁際に居る事が多い。

最後にクロウと別れた時、彼女の力を目の当たりにしたハクはクロウを「化け物」と拒絶していたが、彼女と同じ深術士としての才能が自分にもある事を自覚した事でハクは「クロウが深術士としての力で自分を助けようとしてくれていた」事を思い出す——そして、そんな自分達を村の人間達が殺そうとした事を。

「自分が信じた優しいクロウは本当だった」

「悪いのはそれを傷付ける深術士以外の人間達。だからクロウは自分の村の人間を殺した」

「今度は自分が彼女を守ろう、醜い世界から。自分達を傷付ける世界から」

そうして彼女の価値観は歪んでいき、彼女の時間はその日で止まってしまう。

そう思わなければ彼女は「自分の大切な家族を、姉も同然のクロウが殺した」という事実を受け入れる事が出来なかった。

「家族もクロウも皆で一緒に暮らしたかった」という本当の願いを自分が今も変わらずに抱き続けているのだと気付かないまま、ハクは『純白』のネイティールとして殺戮を続ける。

第七十二話 止まれぬ魂

エッジ達一行は海の上を黒い巨鳥、ラーヴアンの背に乗ってゆつくりと飛んでいた。

普段のクロウの飛ばし方はスピード重視で乱暴だったが、今はエッジの左肩の大怪我に配慮している。

穏やかな潮風と控えめな太陽の光は優しく、波の音と強い潮の香りの刺激を除いて空の上は至って平和だった。

「懐かしいな、マージンか」

「はい、あの時の出会いがずいぶん前の事に感じます。私……こんな風にずっと皆さんと旅が出来ると思っていませんでした」

クリフとアキが思い出を語ると、ふとクロウが気が付く。

「待って、よく考えたらあんた街を助けるのに一人で狂った賞金稼ぎ達倒そうとしてたわよね。私達すごい無駄足踏んだんじゃ……」

頭を抱えるクロウに、エッジが横からフォローを入れる。

「そんな事無いだろ、四人で戦ったから無事に済んだ。何よりクリフが仲間になったくれただろ」

「その後、私そいつに攫われたんだけどね」

クロウに非難の目を向けられ、クリフを冷や汗をかきながら顔をそらす。

今となつては過去の事、とアキやリアトリス、ラーク達はその様子を微笑ましく見守っていたがその話を初めて聞いたリヨウカがピクリと眉を動かす。

「待って、貴方女の子を攫ったの？」

「ああ……まあ、結果だけいうとそういう事になるな。クロウに限らずアクシズⅡワンド王国の深術士セキユアラの集団の事はセオニア王国でも噂になってたんだ。こいつの力を知ったらそれを敵国に放置しとく訳にかねえだろ。何より、そんな武器として扱われる様な環境に——って、聞きながら無言でアキちゃんを俺から遠ざけるのやめろ！」

リヨウカは汚いものを見る様な目でクリフを睨みながら、妹をしつかり抱いて庇う様に彼から遠ざける。

アキは腕の中で苦笑いする。

「姉さん、クリフさんにもセオニアでの立場があつた訳ですし、クロウさんを傷付けようとした訳では」

「トウカ、甘やかashiちゃダメよ、それが起こつたのが私達のアクシズⅡワンド領内ならまだその罪は生きてる、法律通り牢屋に入れましよう」

「ねえ、その法律でいくと手配犯の私とエッジ死ぬんだけど」

クロウの突っ込みにアキも冷静に補足する。

「加えて言うなら、姉さんが海上都市で行つた手配犯の逃亡の手助けと、騎士団の最新鋭の船舶の強奪も重罪ですよ」

リヨウカは不敵な笑みを浮かべる。

「あらそんな事したかしら、証人がその手配犯のエッジしか居ないんじゃない件出来ないわよ」

「リヨウカさん……」

どこまで本気が分からない彼女の言動に、リアトリスが苦笑いを浮かべる。

「さあ、離れなさい幼女趣味」

「誰がだ！クロウに興味ある訳ねえだろ！」

クリフの言い方が気に入らなかつたのか、当のクロウはスローイングダガーを握りしめる。

が、ふと何かに気付いた様子でいきなりラーヴァンを急旋回させる。

いきなり自分達の乗っている巨鳥が傾いて、バランスを崩した仲間達は当惑の声や悲鳴を上げる。

「どうしたんだ、クロウ」

彼女の表情からいち早く異常を察したエッジが剣に手をかける。

クロウは余程集中しているらしくすぐには返事をせず、再びラーヴァンが急降下する。

そこで、肌を切るものが風だけで無い事に仲間達も気付く。

「これ……水？」

上空で水滴が触れる事など珍しくも無い。

しかし、明らかに今一行に降り注いでいるのは自然に空気中に生まれたものでは無かった。

そこでふと上を横切っていく影を見上げたアキの顔から血の気が引く。

直前まで一行が飛んでいた所を、いくつもの牙が通過していく。

鱗を広げ、水の軌道を残しながら人を頭から飲み込めそうな飛魚型のモンスター達が飛んでいく。

その様は気味の悪い生きた銀色の虹のようだった。

ラークが見覚えのあるその姿に気付く。

「スオールと海上都市の間に居たモンスターか、南のこつちにも居たか」

「でも、前戦つたのはこんな高くまで飛べなかった。水を噴射する深術が使えるようになってる」

リアトリスがディープスの使い方を分析する。

クロウが今回避したモンスターの群れを一瞥して黒い槍を何本か撃ち出すが外し、次の群れが下の海上から迫ってきて顔をしかめる。

「ごめんルオン、全員乗せて飛びながらじゃ攻撃出来ない。迎撃お願い」

頷き、焦りも見せずは無表情のままルオンは矢を番える。

「直線で向かってくるなら、ただの的——氷屑ブレイクシュートの破者」

青い輝きが襲い来る虹の中心を貫き、一つに纏まっていた魚の群れを一気に散らす。

その一撃は敵の勢いを大きく削いだが、一部は空中で水の深術を推進力にして立て直しバラバラの群れが襲ってくる。

「！」

その反撃にルオンも少し慌てて弓を狙撃状態から通常状態へ戻して数体を撃ち落とす。

ラークも剣を抜き、「真空破斬」で迎撃するが落としきれない。

「盾華・紅葉！」

「氷装華・桔梗！」

炎を吹きだして範囲を広げたアキの『明あけの天傘あまがさ』と、氷を纏って羽

根の様に仲間達を覆ったりリョウカの『宵の地衣』が、次々叩きつけるモンスターの牙を防ぐ。

味方が作ってくれた時間を利用してリアトリスが光の盾をラーヴアンの周囲に張り巡らし、一行は束の間息をついた。

「もうこれ……完全に「捕食」とかいようなものを度外視して人間襲ってきてるよな」

遠距離攻撃の出来ないクリフは見守ることしか出来ず、危険が迫る度に身を縮めていたがようやく落ち着く事が出来て脱力する。

「人間はこの世界の生態系にお世辞にも馴染んではいけないもの。私達が他の生き物の居場所を狭めていると言っても過言では無いし、人間が居なくなれば他の生き物にとって世界は平和になるでしょう。尤も今襲ってきてる理由はこの黒い鳥を「大きな獲物」と勘違いしたか、逆に「危険な敵影」と警戒されたか……いずれにしろそこまで考えていないでしょうけどね」

リョウカがアキと共に詠技の準備をしながら彼の言葉に答える。

エッジも次に攻撃が来た時に備えて剣を抜こうとするが、左肩の強烈な痛みはその手を止める。

それを隣で見ていたクロウが釘を刺す。

「まだ治って無いでしょ、大人しくしてなよ」

「でも、皆戦ってるのに……」

「クリフだって戦って無いから、良いから今は休んでな——」

クロウの言葉の途中で、大きく障壁が揺れる。

「飛ぶだけじゃない、あのモンスター攻撃深術まで使って壁を壊そうとして来てる」

リアトリスがそれに対して新しい対深術障壁を張ろうとする中、荒い呼吸のままにエッジが手を伸ばして雷属性のディープスを集束する。

「巡らす雷網……」

身体の中のディープスが活発に動いたことと、無理に動いたせいでエッジの左肩から服の外まで血が滲む。

エッジは痛みを耐えて歯を食いしばる。

クロウが厳しい声で怒った。

「何してるの止めて、本当に一生左腕が動かなくなるわよ！」

と、空気の流れが変わりエッジの身体に虹色の粒子が吸い込まれるのを見てクロウは目を丸くした。

(コレクトバースト? 何で、エッジは使えなかった筈じゃ……!?)

「ッ、捕らえて、焦が、す!——スパークウェブ!!」

通常時の深術の使用では起こらない、エッジに周囲の空気が吸い込まれる様な感覚を仲間達は感じる。

紫の光がエッジの右手から走った。

雷がリアトリスの光の障壁を更に上回るサイズで細い網を形成していき、爆発する様に大きく広がって飛魚型のモンスター達を空から叩き落とす。

その断末魔の悲鳴と、ジリジリと耳の奥に響く様な放電の音が全員を包んだ。

それが終わるとモンスターの攻撃は止み、エッジの周囲の虹色の光も消えた。

いきなり終わりを告げた戦闘と、突然の強力な深術に仲間達は一瞬言葉を失う。

エッジが痛みからゆっくり前のめりになったのをクロウが慌てて支える。

彼はほとんど意識が無い様だった。

「何で……誰かエッジにコレクトバースト教えたの? 今まで一度も使って無かったのに」

クロウは困惑するが、リアトリスはエッジに治癒術をかけながら首を横に振った。

「ううん、使ってたよ。雷属性だけを集める「轟雷装」っていう形だったけど、あれが出来るなら全属性を集束するコレクトバーストだつて使える様になつてもおかしくない」

「エッジはいつも剣を使って、その補助として深術を使ってたからね。剣が使えない状態になつて今まで閉じていた能力の蓋が開いたんだ」
ラークの補足に、エッジと同じ深術士であるクロウは信じられない

という顔をした。

「そんな事有り得ない……誰にも習わずに、訓練もせずいきなり使えるようになるなんて」

「それを言うなら、エッジはそもそも深術自体誰にも習わずに感覚だけで剣術の片手間に習得してる。本人の言葉通りなら三年くらいでね。例えハーフであってもエッジはやっぱり心の一族の一員なんだよ」

ラークの言葉を聞きながら、クロウは自分にもたれかかるエッジの服を強く掴んだ。

「でも……今習得したって余計身体に負担かかるだけじゃない。何でもこいつはそこまで」

クリフが彼女のその質問に答える。

「お前が居なかった時言ってたぜエッジ、人を助けるのは『ただ自分のやりたい事』だ、って。だから絶対止まらねえんだよ」

(……それがどれだけ自分を傷付ける事でも?)

クロウは自分の腕の中に居る筈のエッジが、少しずつ遠くへ向かっている気がした。

ブレイドを始めとした騎士達はレーシアから帰還して王都が焼失していた事で一時混乱状態に陥っていたが、隊長であるブレイドの指示で生存者の捜索と救助、そしてそれ以降は周囲の街で受け入れられなかった難民の援助、誘導と寝る間も無く働き続けていた。

そんな状況が続く中で一人の老練な騎士が部下からの報告書に目を通していたブレイドに進言する。

カンデラス火山に赴いた時にも彼の傍に居た騎士であり、長く彼を支える理解者だった。

「師団長、シントリアがあのような状態になってから今まで師団長はよくやってくれました。ある程度この活動にも慣れてきましたし、もう我々だけでも大丈夫です」

思いもしなかった言葉にブレイドは、文字の列を追っていた目を止める。

彼の目の下には隈が出来ており、ろくな睡眠も取らずに疲労を溜めているのは明らかだった。

「何を……やるべき事はまだ山の様だ。私一人離れる訳にはいかな
い」

「この国の王はもう居ません。議会も無ければ、貴方が仕えたジェイン・リュウゲンも居ない。その肩の重荷を下ろしても責める者は居ませんよ」

言われてブレイドは、自身の剥き出しの右肩に刻まれた赤い刻印を撫でる。

それは彼の主であるジェイン・リュウゲンが望んだ時、或いは彼自身
が国に背いた時爆発によって彼の命を奪う様に出ていた。

「……確かに、こんな危険なものを持った人間がずっと皆の側に居る
訳にはいかないか」

傍らで自分を見守る騎士に聞こえない様呟くと、ブレイドは報告書を
を彼に預けて言った。

「ありがとう、ケイン。私にはどうしても一つ、やらなければならぬ
事があると思う」

「……無事で」

ブレイドは頷くと、剣を手に一人立ち上がった。

第七十三話 兄の正義、弟の理想

「——よし、もう動いても大丈夫だね！」

「あの、治療してくれたのは本当に感謝してるんだけど、いくら何でもここまでしなくても良かったんじゃないか……」

無事に海を越えてからエツジはクロウ、アキ、リアトリス（そしてクロウに言われた通りに協力したルオン）達の常時監視体制の下で傷が完全に治るまで部屋に閉じ込められた。

その為、彼はリアトリスが明るく治療の終わりを宣言した時も苦笑いせざるを得なかった。

早速部屋を出ようとしたエツジに、腕組みをして壁に寄りかかったリョウカが面白いがる様な笑いを浮かべて話しかける。

「前にも似た様な事があったわね」

「ああ……あの時はただの風邪で暴れ出す事にされたっけ」

「そうだったかしら？でも、前回も今回も動けない状態で大暴れしたせいで悪化したのは事実よ。これからはもう少し自分の身体の事も考えなさい」

「心配してくれるんだ」

「ええそうよ、貴方が自分で出来ないからね」

でも、と付け足す。

「一番心配してたのはあの子よ、あんまり心配かけ過ぎない様にしなさい」

「え……アキが？」

意外そうな声をあげたエツジに、リョウカはため息をつく。

「灯台もと暗し、かしら。お互い距離が近い様でこれなんだから苦労するわね」

何を言われているのか分からない様子で困惑するエツジに対して、リョウカがやや厳しい表情で忠告する。

「良いからクロウにもう一回ちゃんとお礼言っておきなさい」

「あ、ああ」

ほとんど勢いに押される様に返事をして、エツジは今しがた自分が

後にした部屋の中を振り返る。

そこには徹夜続きでうつらうつらと頭を揺らして椅子に座るクロウの姿があった。

リョウカはそれだけ言うのと去っていった。

エツジは一瞬躊躇したものの、半分寝ている様子の彼女に声をかける。

「クロウ」

「ん……ああ、結構元気そうじゃん……顔色だいぶ良くなったし」

声を掛けられてようやく気付いた様子で、クロウはいつもよりゆっくりとした話し方で喋る。

少し嬉しそうな彼女に対してエツジは声をかけておきながら何と言ったものかと考える。

「その……ありがとう、ずっと看病してくれて」

は？とクロウは笑う。

「何それ、治したのはほとんどリアだよ、お礼なら向こうに言っておきなって。私はただ見てただけ」

クロウは言いながらようやくやく休む事が出来、ベッドで早々に眠りについた彼女の方を示す。

そこでようやくエツジも、リョウカが言った事を少し理解する。

「うん、だから……感謝してる」

「……聞いてた？」

クロウは呆れた様な表情でエツジを睨む。

「ああ、寝ても良かったのにずっとリアトリスの手伝いをして、俺の面倒見てくれてたんだろ？」

エツジは心からの感謝を込めて、笑顔でもう一度言った。

「心配してくれてありがとう」

クロウは言葉に詰まって目を丸くすると、そのままベッドに顔を伏せた。

「えっと、クロウ？」

「寝る」

「え、でもどうせならちゃんとベッドに行った方が」

「徹夜続きでとにかく眠いの、良いから出てって」

「でも、耳赤いぞ。もしかして熱あるんじゃないか？無理して体調崩したならちゃんと休んで——」

「良いから出てけ！」

顔も上げないままクロウにスローイングダガーを投げつけられて、エッジは仕方なく退散した。

—————

「ここ隣町だったんだ、てっきりもうマーミンに着いてるのかと」

「二応ね。向こうが正気を失つてたとはいえ私やクリフやあんたで賞金稼ぎ達に怪我させてる訳だから、報復とか有り得ないとは言えないし」

最後の宝珠、水のフラツデイルージュを指してエッジ達一行は徒歩で馬の町マーミンに向かっていた。

普通に人の行き来がある街道なのでエッジとクロウはフードを被って歩いている。

「そういや、その宝珠があるのってあいつらが根城にしてた洞窟なんだろう？あの時賞金稼ぎの奴らの様子がおかしかったのって」

「うん、多分クリフさんの考えてる通りだよ。宝珠を通して二つの世界は繋がってるから、その周辺は特に大気中のディープスのバランスの崩れが著しいの。そんな場所にずっと居たら人間の精神はおかしくなる」

なるほど、とリアトリスの説明に納得するクリフ。

「きちんと目を向ければ世界がおかしくなり始めてる予兆はあったんですね、ここまで悪化する前から」

「これからもっとひどくなるよ、十五年の時間とシーブレイムスの暴走でアエスラングはとつくに限界だ。遠からずその正気を失った人間は世界中に現れる事になる」

アキの言葉にそう返したラークの表情は険しい。

「スプラウツ……だったわよね。既にジェイン・リュウゲンも居ない今、彼らは王都を壊した上で別な宝珠まで探して何を考えているのかしら」

「分からない、ただ破壊に使うつもりにしろ、他の事に使うにしろ、あんな事二度と起こさせる訳にはいかない」

そのリョウカとラークの真剣な表情はどこか似ていた。

ふと、二人の様子を見ていて思ったのかアキが零す。

「姉さんとラークさん、初めの頃はお互い信用していないみたいで少し心配でしたけど、上手くやれているみたいで良かったです」

「ん、気が楽なのよ。お互い利害の一致だけで繋がっている相手だから、裏切るにしたって簡単で」

「そうだね、必要な時だけ手を組めるのは有難いかな」

二人がにこやかに返したのを見て、他の仲間達の顔が引きつる。

「裏切らない方向で考えないのか……？」

「そうだよ、折角一緒に旅しているのにも相手に裏切られる事考えてるなんて……」

通行する傭兵らしき旅人とぶつかりかけて、それを避けながらエツジとリアトリスは呆れる。

「今彼が裏切る事は無いわよ、私を宝珠に近づけたくないならもう少し早い段階で切ってる筈だし、他に私が居る事で邪魔になる様な相手と手を組む様子も今の所無い。シンの一族の仲間というのも私達がこの戦いに加わる事に肯定的だったしね」

「そうだね、敵の陣営の残りの戦力がはつきりしない今限られた戦力の僕達が仲間割れするのはリスクが高すぎる。もし彼女が裏切る事を考えているなら少なくとも妹のアキを巻き込まない様にする筈だし、スプラウツや『ジード』と戦う事を考えているなら一番適している味方は現状僕達だ。彼女は今裏切らないよ」

即座にお互いの裏切りを否定する二人に、クロウがため息をつく。

「信頼してるんだか、して無いんだか分からないわね、あんた達」

「そういういい加減なものに頼るのが一番良くないのよ、特にエツジ」名指しでリョウカに言われたエツジは曖昧に笑う。

ふとその言葉が気になったのかルオンがこっそりクロウに尋ねる。

戦闘時には必要最低限の会話はするものの、それ以外では彼は人見知りの様でほとんどクロウとだけ話していた。

「……人を信頼するのは良くないの？クロウ」

「あれは悪い大人の見本だから」

「そうだよ、ルオンはあんな風にならなくて良いからね」

会話が耳に入ったリアトリスもラークの方を見ながらその意見に賛同する。

ルオンは彼女に話しかけられてびつくりした様だったが、リアトリスはそれに気付かない。

『あんな風に』ってどういう意味？」

「あ……いや、今は主にラークに対してでリョウカさんの事じゃ」

「うん、主にとって事は君も入ってるね」

「へえー？」

「うう、ラーク……私が悪かったから冷たい目で睨まないで下さいリョウカさん」

姉の悪乗りにアキは溜息をついた。

「そういう意地悪するから悪い大人だって言われるんですよ……姉さん」

歩きながら会話を続ける仲間達の中でエツジはふと足を止め、それを訝しく思ったクロウが尋ねる。

「どうしたの？エツジ」

「……ごめん、傷がまだ少し痛むみたいで。ちよつと休んでいいかな」

仲間達は誰も反対せず、すぐに全員で街道を外れて座れそうな所を探す。

《崩壊遺跡群》

「来たか」

エツジは仲間達に嘘を言って一人離れ、先程すれ違った旅人と二人で向き合っていた。

街道を少し逸れた森の中で、以前は何か建造物があったのか石造りの崩れた壁が二人の立つ開けた空間を囲っていた。

「どうして、俺達が居る場所が分かったんだ？ブレイド」

エッジの言葉で傭兵らしき旅人はフードを外す。

騎士の変装の下から現れたのは、エッジの兄ブレイドだった。

変わらずに『刻印術式』は禍々しい赤い光を放っていたものの、その表情に敵意は無い。

「いや、分からなかった。父からお前達が宝珠の事を調べている事は聞いたが、追えたのはせいぜい王都までだ」

そう言いながら、ブレイドは周りの景色を眺めた。

エッジとブレイド兄弟二人が育ったカースメリア大陸の景色を。

「今の俺にはお前の考えてる事は分からない、ただ俺達の育った村が懐かしくなって自然とこっちに足が向いた」

「俺を呼び出したのはどうしてだ？」

ブレイドは弟に視線を戻す。

「以前俺に言った事を覚えているか、『自分が彼女の側にいて、誰も殺させない』。それは実現できたか？」

セオニアでの事を思い出しながら、エッジは返答を躊躇う。

彼が追いつく前の事とはいえ、重傷を負いながらクロウは子供達と殺し合いの末その何人かを殺していた。

自分がもう少し早く助けに入って居れば——と、エッジは思わずには居られなかった。

「七人……襲ってきた敵だけど、それだけ死んだ」

「そうか」

ブレイドもその犠牲を悲しむ様に目を伏せる。

「王都での火災の時は何をしていた？お前とクロウという少女が上空を飛んでいたのを見た者が居る」

「二人で火事を中心に居た術者を止めようとした。その時は、誰も殺して無い」

必死で主張するエッジの言葉を、ブレイドは静かに聞いた。

「あの規模の火だ、お前達二人の行動が無ければ今頃王都は跡形も無かっただろう。犠牲者ももっと増えていた筈だ。礼を言う」

エッジはその感謝を素直に受け取れなかった。

それを自分の行動の「成果」として考えて良いのか、彼には分から

なかった。

今度は兄の方が話し出す。

「お前の行動は間違いなく多くの人を救っている。しかし、お前達は王都で一度黒い鳥を出現させ、混乱を招いた指名手配犯だ。大半の者は、お前達が王都を破壊した元凶だと考えている」

クロウが疑われているのはエッジも悔しかったが、同時にそれが現実である事も理解していた。

ブレイドは尋ねる。

「この先も恐らくこの状況は変わらない。お前がどれだけ努力しても、犠牲を減らしても、人を救っても人々は誰もお前達に感謝しない。それでもお前は、戦い続けるのか？」

「ああ」

エッジは自信を持って顔を上げ、答える。

彼はその答えだけは迷わなかった。

「世界全てに憎まれても、この先どんな敵が目の前に立ち塞がっても？」

「ああ」

「……そうか」

そう言つて、ブレイドは剣を抜いた。

「ならその前に『刻印術式』を持った俺が立ちはだかる事もまた必然だ。剣を抜けエッジ」

兄の右肩の赤い模様をエッジは観察した。

(半径2cmの中心点……あれだけを破壊すれば、ブレイドは自由になる。でも、ほんの少しでも外したら)

エッジも背負った剣を鞘から抜き、手にする。

「ブレイド、本当に戦うしかないのか？」

「お前がああ少女を守りたいと思う様に、俺にも守らなければならぬものがある。俺は退かない、お前が退かない様に」

ブレイドは地面と水平に、剣を大きく後ろに引く。

エッジも同じ構えで剣を引く。

ラークから剣を習った二人の流派は同じだった。

「一の太刀、烈火！」
「真空破斬！」

赤い斬撃と真空の刃が、二人の間で激突した。

第七十四話 兄から弟へ

「う、っ！」

力で完全に負けたエッジは後方へ大きく吹き飛ばされる。

元が同じ技でも、そこから改良された「一の太刀、烈火」の威力は「真空破斬」のそれを遥かに上回っていた。

(前回の対策が効かない……！)

「始動を潰す観点そのものは良い。だが、お前が俺の太刀筋を見切れなければ意味が無い」

エッジは唇を噛んだ。

前回と同じ軌道で同じ技が飛んでくると思い込んでいた自分の思い込みを。

そして同時に、訓練を積み重ねた末に作られた太刀筋を変えて尚威力を損なわない兄の剣に改めて実力差を感じさせられる。

千の太刀筋のアズライト——その異名は伊達では無かった。

「くそっ、魔神剣！」

エッジは斬撃を飛ばし、それと同時に走り出して連続攻撃を仕掛ける。

「獅子戦吼」

先に放った魔神剣が届くのとほとんど同時に、直撃すれば人一人を吹き飛ばす青い気の放出をエッジは肩からの体当たりでブレイドに叩きつける。

両方を防ぐ時間など無い連撃。

「三の太刀、流水」

その空を駆ける斬撃が、獅子の気が、たった一太刀の水を纏った剣で切り払われる。

一つの動作で二つの技を潰され無防備な状態を晒したエッジに、そのまま返す手でブレイドの切り上げが迫る。

斬られない為にそれを辛うじて防ぐエッジには体勢を崩されるのを防ぐ術も、後ろに飛ばされるのを回避する選択肢も無かった。

「ぐあっ、っ」

エッジはそのまま仰向けの体勢で転倒させられる。
彼はすぐに立ち上がる事が出来なかった。

ブレイドはそこに追撃をかけず、ただその様子を見ている。

「剣で俺に勝てるつもりか？本気でかかって来い」

「うるさい、まだ……これからだ」

「いい加減にしろ！」

「何？」

ブレイドは自分の剣をまっすぐ倒れたままの弟に向けて言った。

「俺は騎士だ、この剣に全てを賭けて戦う騎士だ。だがお前はそうじゃない、お前に出来る事は本当にそれで全部か？お前に出来る全てでかかって来い。それがどんな戦い方でも、俺はそれを卑怯だとは思わない」

「ブレイド……」

エッジは一度目を閉じて深呼吸し、立ち上がる。

そこからは先程までの力みは消えていた。

「巡らす雷網、」

「二の太刀、疾風」

弟が詠唱を開始したのを見て、兄は即座に風の深術に乗って距離を詰め突きを放つ。

エッジは詠唱を中断せざるを得なくなり、後ろに下がりながらその突きを右上に受け流す。

ブレイドも流されるままでは無く流された剣に炎を纏わせると切り返し、袈裟懸けに振り下ろした。

「獅子戦吼！」

エッジはそれに対して後ろに体重を掛けながら、獅子の気を放つ。

青い獅子の気は先程と同じ様にブレイドの剣に両断されるが、エッジはその反動でブレイドでは無く自分を大きく後ろへ飛ばした。

それによって仕切り直し、エッジは再び詠唱する。

「捕えて焦がす！」

(先程の続きから——スベルキープ詠唱維持まで出来る様になっていたか)

二度に分けて完了したエッジの詠唱が、ブレイドを雷のデーパーズ

で包囲する。

「スパーク、ウェブ！」

「ねえ、エッジ遅くない？」

「ん、そうか？用足しだろ」

クリフの返答に、クロウは呆れた様な表情を見せる。

「あれでもエッジ怪我人なのよ？何かまだ体調悪そうだったし、私一応探してくる」

「あら、もう寂しくなったの？待っている側としては三秋の思いかしら」

リョウカにからかわれたクロウはむすつとしながら仲間から離れて、投げ遣りにラーヴァンを呼び出す。

「もういい。ラーヴァン、ちよつとディープミスト出して」

「エッジ、体調大丈夫かな……おかしいなあ、エッジの怪我絶対もう痛まない位まで治したと思っただけど」

黒い霧と感覚を共用してクロウがエッジの行方を探り始めるのを遠目に見て、リアトリスも別な事を心配する。

（あれ近くにいない、どこ行っただら）

周囲の何処にもエッジが居ないことにクロウは困惑する。

そのまま彼女は意識を少しずつ外に伸ばし、近くの遺跡の跡の様な所に彼が居るのを見つけて安堵する。

（遺跡探索？あいつそんな趣味あったっけ——）

と、雷のディープスが大きく炸裂し、クロウはエッジが一人では無い事に気付く。

（誰かと戦ってる!?まさか、あいつわざと嘘ついて）

何かエッジ自身の作為的なものを感じたクロウは一人遺跡群の方へと走り出した。

「零の太刀、残光——白長須！」

ブレイドの剣が白い光を纏い、その軌跡が全て形を持った光の刃になる。

彼の周囲を囲う様に作られた光の籠は、ブレイドの最後の斬り上げと共に上へと一齐に生き物の様に飛び上がりエッジの「スパークウエブ」を突き破った。

そのまま辛うじてジャンプしてエッジの術から脱出したブレイドは、一度呼吸を整える。

「やっと少しだけ本気を出したな、ブレイド」

「俺はずっと本気だ」

エッジは剣を低く構え直す。

（スパークウエブで駄目なら、今の俺に威力で崩せる技はない。だつたら——）」

「連撃にして一撃成す、是は引き裂く風の刃——真空蒼破塵！」

三つの斬撃を一つに束ねて、エッジは秘奥義を放つ。

ブレイドもそれに対し、最も威力の高い技で迎え撃つ。

「一の太刀、残光・烈火」

爆発による推進力を得た突進、火の深術の威力を併せ持った斬撃、そしてその軌跡が形を持つての追撃、その三つでエッジの秘奥義は打ち破られる。

しかし、エッジは既にそれを見ていなかった。

初めから破られる事を前提にして動いていた彼には兄が烈火の構えを取る時間と、技同士がぶつかる時間の僅かな足止めだけで十分だった。

空気中の全ての属性のデープスが集束され虹色の光となって彼に吸い込まれる。

「ライトニング！」

「——！」

エッジが剣を持った右腕を振り上げコレクトバーストで大幅に詠唱時間を短縮した雷の初級深術が、一瞬無防備になった兄の身体を打つ。

「——連なれ、ウィンドカッター！」

それだけで仕留められないと確信していたエッジは相手が怯んだ隙を見逃さず左腕を振り、コレクトバーストを維持して更に追撃をか

ける。

「く、二の太刀、疾風！」

弟の放った風の刃を、風の深術に乗った兄の神速の突きが突き破る。

そのスピードはエッジのウインドカッターを無効化しただけに止まらず、二人の距離を瞬く間にゼロにしてエッジに回避を余儀なくさせる。

「ぐ、っ！」

バランスを崩したエッジは右手を地に着きながら、辛うじて後ろに下がる。

彼の手と接触した地面は微かに光った。

今度はその隙を突いてブレイドが反撃する。

「零の太刀、残光——飴鷲」

掬い上げる様な下からの突きが見極め辛い曲線の軌道を描いて、光の刃を生みながらエッジに迫る。

受けられないと判断したエッジは、コレクトバーストの集束量増加を利用して剣を持たない左手に瞬時に雷のディープスを集める。

「閃光動作、」

雷が閃く。

いくらコレクトバーストを併用しているとはいえ、一瞬で集めたディープスではほとんど攻撃力は出せずブレイドの攻撃を止める事は出来なかった。

しかし、ブレイドの攻撃は空を切る。

「——偽・無影衝！」

空振りした直後のブレイドにエッジのカウンターの斬撃が迫り、ブレイドはそれを辛うじて防いだ。

（ライクの技、あれ程のバックステップからの速度が出せない分を目眩ましとそれにタイミングを合わせる事で再現したか……！）

ブレイドはエッジの技を、そう分析する。

二人は鏝迫り合いになり、ここしかない判断したエッジはもう一度兄の肩で禍々しい光を放つ『命令刻印術式』を観察した。

一人一人を殺す力を持つ呪いの印、作動したとなればエッジも無事では済まないだろうそれを。

(斬撃じゃ中心点だけを破壊できずに爆発する、初級深術でも多分難しい——でも、突きで剣の先端からピンポイントで雷のデイクスを流し込めば！)

エッジは後ろに下がって均衡を崩しながら、右手を引いた。

それを逃がすまいと前に踏み込んだブレイドは背後から迫る気配に気付く。

「ライトニング・マイン！」

先程エッジが手を着き「設置」した地面の一点から、エッジの右手の動きに連動する様に雷の線が一直線に走る。

ブレイドはそれを躲す為に無理矢理身をひねり、そこに僅かな隙が生まれる。

「雷神、剣！」

エッジはその一瞬の隙に、雷を纏った突きを放った。

ブレイドもそれを何とか防ごうと崩れた体勢から剣を振るう。

ほんの僅か、両者の剣の間で切っ先が触れた程度の接触が起こりエッジの剣先が中心点からずれる。

(しまっ——)

爆発させれば兄が死ぬ。

その迷いから、僅かな時間エッジは剣を止める。その隙を見逃す兄ではなかった。

息を切らせたクロウも遺跡群へと辿り着く。

そして、その光景を目にした。

止まった剣をブレイドが払いのけ、エッジの剣は宙を舞う。

「終わりだ、エッジ！」

兄の剣が弟へと振り下ろされる。

「エッジ!!」

叫んだクロウには、その瞬間のエッジがどんな表情をしているのか分からなかった。

第七十五話 漆黒の翼、再び

武器を失ったエッジへ兄の剣が振り下ろされようとしている最中、彼はそれを少しも見ていなかった。

クロウの叫びも耳に入らない。

ただその目は一度破壊に失敗した兄の『刻印術式』だけを見据えていた。

（まだコレクトバーストは発動してる、剣が無くてもディープスは使える！この一撃だけ、この一回だけで良いんだ……！）

エッジは右手を、宙に舞っている自身の剣に向けて伸ばした。

「来い……ライトニング！」

使えた事など一度も無い「詠唱破棄」、唯一の勝機をかけてエッジは空気中のディープスに命ずる。

天空からエッジの剣へ、雷が落ちる。

そしてその剣先から更に細い電流が、ブレイドの『刻印術式』へと走った。

刻印の禍々しい赤い光が強くなり、中心点を焦がした紫電の光とぶつかり合って兄弟二人の視界を奪う。

助けに入ろうとしていたクロウも、その目も眩む輝きに立ち止まった。

「……何故、一度剣を止めた」

振り下ろされたブレイドの剣は、エッジの頭のすぐ上で停止していた。

兄の肩に埋め込まれ、彼にジェイン・リュウゲンの命令を強制していた刻印は光を失い唯の黒い跡になっていた。

「あのまま突きを放っていれば、俺の『刻印術式』が作動してお前の勝ちだった」

「言っただろ、『誰も殺させない』って。どんなに僅かでも殺さずに済む方法がある限り、俺は人は死なせる選択肢は選ばない」

「死を目前にしても変わらぬ覚悟、か……」

ブレイドは剣を納めた。

その目が真っ直ぐに、優しく弟を見据える。

「お前の覚悟、見せて貰った。忘れるな今の戦い方を、お前に出来る全部を」

兄の手が、弟の髪をくしゃくしゃと撫でる。

エッジもそれに応えて笑い、それから力が抜けた様に地に膝を着いた。

慣れないまま彼がずっと使い続けたコレクトバーストの虹色の光が霧散する。

「エッジ、大丈夫!？」

崩れ落ちた彼を、クロウが抱き止める。

「怪我は？あつたら隠さないで、私でもファーストエイドで応急処置位できるから」

「君が、クロウか」

ブレイドに声をかけられ、エッジを抱いたままクロウは鋭い目で睨み返す。

「あんだ、レーシアで戦った騎士の……」

「クロウ、大丈夫ブレイドは俺の兄さんだ」

その言葉に彼女は微かに驚きを見せたが、しかし今の今までエッジと戦っていた彼をすぐには信用出来ない様でブレイドへの厳しい視線は緩めない。

「それでもアクシズⅡワンドの人間である事に変わりはないでしょ、もしまだ私達を捕まえるっていうなら今度は私が相手になる」

言いながら今にも倒れこみそうなエッジを守る様に、クロウはその腕に力を込めた。

そんな彼女の一挙手一投足をブレイドは静かに観察する。

「良いパートナーを持ったな、エッジ……」

ブレイドはクロウに警戒されるのも構わずエッジに近付く。

「ちよつと——」

「仲間の所まで肩を貸そう、立てるか？」

「あ、おかえり、エッジ、クロ——」

戻ってきた二人に気付いて声をかけようとしたリアトリスが絶句する。

「久しぶりだな、リアトリス」

「ブツ、ぶぶブレイド!? 『命令刻印術式』のせいで敵の筈じゃ、あれ、でも壊れてる……? 何で?」

敵であった彼の登場に幼なじみの彼女以外もざわついたが、ブレイドはそれを意に介す様子もなくエッジを休めるところまで歩かせる。

「その岩まで行くぞ、エッジ」

「ああ」

ブレイドは手近な岩まで歩き、エッジをそこに座らせた。

仲間達もそのやり取りから彼に戦意が無いのを見てとり一先ず警戒を緩める。

一息ついた二人にラークが尋ねた。

「何があつたんだい、兄弟喧嘩?」

「違う、廉潔なる決闘だ」

「大体合ってたか、その答え相変わらず固いというか何というか」

真顔で否定するブレイドにラークは苦笑する。

それとは反対に、リアトリスは二人の状態から少し慌てた様子を見せる。

「決闘って、二人戦つたの? 怪我は?」

「心配無い、相変わらず心配性だなリアトリス」

「当たり前でしょう? 普段は落ち着いてるのに、エッジが絡むとブレイドもすぐ無茶するんだから」

「強いて言うならエッジの消耗が激しい、しばらく休ませてやってくれ」

リアトリスは頷く。

会話を聞いていたリョウカは一時的に共闘関係にあった彼の意外な一面を面白がる様子を見せる。

「あら、弟の事となると熱いのね騎士団長」

「君こそ、口を開けば妹の話ばかりだった気がするが？タリア・リヨウカ」

仲間達と、特にその当の妹からも意外そうな顔をされリヨウカはその頬を朱に染める。

「そうだったんですか？姉さ——」

「そんな事は良いからここへ現れた目的を話しなさい！」

アキの口を無理矢理塞ぎながらリヨウカは話をそらす。

（馬鹿！私とあなたに血縁関係があることがばれたらジェイン家の遺産相続が面倒になるかもしれないから黙ってなさい！）

（姉さんそんな事考えてたんですか!?確かに養子とはいえジェイン家は今や私一人ですけど、それって良いんでしょうか……）

（私達の国は今王都も、王も失って崩壊寸前なのよ？立て直すのにお金はいくらあっても足りないのに跡取り不在で接收されたらどうするのよ！）

ブレイドは質問に答えた。

「心配するな、敵意はない。弟が何をしようとしているのか、それを見定めたかっただけだ。それが叶った今俺には俺でやらなければならぬ事がある。ラーク、リアトリス、タリア・リヨウカ、お前達は何をしようとしているのかはあえて聞かないでおく」

ほんの少し気まずい沈黙が流れた。

（……今の絶対姉さんが騎士団の船奪ったり、エッジさん逃がしたりした事の話ですよ）

（いえ、もしかしたらその後こっそり騎士を騙してセオニア領内で捜索に使おうとしたのがばれたのかもしれないわ）

（ラークも騎士団と戦ったり船盗んだりしたこと謝っておいた方が良いんじゃない）

（大丈夫だよ、リア。ブレイド言ったことは絶対守るから）

ブレイドは座ったままのエッジと、その傍らに寄り添いずっと警戒の目を彼に向けてきていたクロウを振り返った。

「エッジ、全てを守る事など人には出来ない。だから、俺は自分の部下を精一杯守る。見失うなよ、お前の守りたいもの」

「ああ。全部終わったらまた会いに行くよ、ブレイドも元気で」

兄は頷いて、最後にもう一度仲間達全員を振り返って言った。

「皆、すまないが弟をよろしく頼む」

「……行っちゃったね、ブレイド。もう少し休んでいけば良かったのに」

あつという間に去っていった彼の後姿を見送ったリアトリスが歩きながら名残惜しそうに呟く。

ルオンがそれを聞いて不思議に思ったのか、自分から声をかける事を躊躇いながらも彼女に尋ねる。

「どうして？あの人、レーシアでリア達と戦ってたの見た。今もエツジと戦った……敵じゃないの？」

「敵、か。そうだね実際私達とブレイドの進む道は違うから、そういう解釈もあると思う。でも、人と人ってそんなに単純じゃないんじゃないかって私は思うんだ」

リアトリスの言葉にルオンはきよとんと首を傾げる。

「二度敵対しからって分かり合えないとは限らない、人の数だけ色々な関係の在り方があって良いと思う。ブレイドは確かに敵だったかもしれないけど、同時に私やエツジの幼馴染みで、アクシズⅡワンドの皆の事を考えてる立派な騎士。でも、ただ『敵』って認識で捉えたらそういうものは全部消えちゃう。それって勿体無いことじゃない？……だって私も、ルオンもみんな世界にたった一人なんだから」

最後まで聞いてもまだルオンはよく分からないという様に考え込んでいた。

それを見たりアトリスは謝る。

「あ、ごめんね。長々喋って。何言いたいのがよく分からなかったかな」

「ううん、少しだけど分かった気がする。ありがとう……リア」

無表情ながら微かに表情を緩めたルオンのやり取りを見ていたクリフも彼に声をかけた。

「ルオンは、あんまりそういうのピンと来ないか？その、兄弟とかそう

いう話」

「分からない、居た事ないから」

えっ、と反射的にクロウが反応する。

「てつきりレインの事——」

口に出してすぐ彼女は口を滑らせたと思ったのか言葉を途中で切る。

しかし、ルオンは落ち着いた様子で首を横に振る。

「大丈夫、クロウ……レインはもう居ないって分かってる。レインと僕が本当の姉弟じゃないって事も」

そう言いながらも彼は少し震えていた。

自分に言い聞かせる事で何とか平静を保っている様だった。

「僕は……一人だから」

「違う！」

「そんな事ねえだろ」

諦める様に言ったルオンの言葉をクロウが感情的に、クリフが励ます様に同時に否定した。

二人とも相手と同時に同じ事を言うとは思っていなかった様で、しばしお互いの発言に困惑する様に視線を交わしたが今はルオンの事を優先して二人とも先を続けた。

「ルオンは一人じゃないよ、私も、リアも……クリフも、アキも、エツジも居る」

「今こうして居る間なら俺達はいつでも話聞いたり、料理したり一緒に出来るんだそんな寂しい事言うなよ。どんな話でも聞いてやるからさ……冒険譚でも、怖かった事でも、恋の話でも何でも来いだ！」
それを聞いたルオンは真剣な表情で悩む。

「何でも？」

「おう！」

クリフの軽快な返事を聞いて、ルオンは真顔で聞いた。

「じゃあエツジは女の子皆と仲が良いけど、クロウとも仲良いの？」

「あ、何だそんな事かよ。そんなの決まってるじゃねえか、というかむしろクロウの方が惚れ——」

笑って答えようとしたクリフの顔にクロウの拳がめりこむ。

「何本人が目の前に居るのにあんたが答えようとしてんのよ！殺すわよ！」

「普通そう言うのは更なる追撃の宣言じゃなくて殴る前に言うもんだろうが！」

「うるさい！というか何で恋人居るのにあんたそんなにデリカシー無いのよ！王女様が苦勞するわよ」

「フレアとはそんなんじゃないやねえよ———というかそんな関係だったら親馬鹿の国王に殺されてるっつーの」

ルオンは二人の喧嘩を呆然と眺めて、それからリアトリスの袖を引いた。

「二人が話聞いてくれない」

リアトリスはすっかりヒートアップしてしまっている二人の様子を見て頭を抱えて溜息を吐いた。

「二人とも……さっきまでの言葉はどこいったの」

クロウが深術を使い始めた辺りでリアトリスは止めに入ろうとしたが、それよりも早くラークが全員に届く声で先頭から叫んだ。

「みんな、マーミンに着くよ」

その宣言にクロウとクリフ以外の仲間達は活気がありながらもどこか牧歌的な「馬の町」が道の先に広がっているのを目にした。

しかし、ほとんど戦闘に突入している二人も次に頭上から響いてきた声には流石に動きを止めざるを得なかった。

「はーはっはっはー」

「待って、何かすごい既視感がある……」

「奇遇だな俺もだ……っーか何か忘れるなって言われた事があった様な気がするけど思い出せねえ」

クロウもクリフも、声のした方を見上げない様にしながら嫌な顔をする。

「俺を敵に回したものはオノが不運を嘆く、バッド！」

「私の後に残るのは敵の嘆きだけ、サッド！」

「勝利の栄光、グローリー！」

クロウは頭を抱える。

「……頭痛してきた」

そんな彼女を無視して、明らかに樹の上から叫ばれているその口上はクライマックスを迎える。

「我ら無敵の、漆黒の翼!!」

第七十六話 水の宝珠の洞窟

なぜか樹上から飛んできた突然の自己紹介に漆黒の翼と面識の無い仲間達は哑然とする。

「馬鹿と何とかは高い所が、つてやつかしら」

と、リョウカが辛辣に口にした。

「濁すべき所言っちゃってる気がしますけど、私も今回はちよつとだけ同意見です……」

リアトリスもそれに同調するが、既に似たようなやり取りを何度も体験したエツジとクロウはただただ頭を抱えていた。

そんなエツジ達の空気にはまるで気付いていない様子で栄光のグローリーと名乗った青年は満面の笑みを浮かべる。

「待っていたぞ、お前達！樹の上で待つのは中々骨が折れたが」

「そうそう、食事も届けて貰って、寝るのもハンモックでね」

「普通に降りて待ちなさいよ……」

クロウが呆れた様に突っ込む。

「だが！そんなのは些細な事！大恩あるお前達に報いる為と思えばこの程度何でもない！」

（大恩……？）

エツジはその言葉が引つ掛かる。

彼等とは戦闘になったことはあっても、恩義を感じられる様な事は何もない筈だった。

「とうっ！」

樹から飛び降りたグローリーはクロウの肩をがしり、と掴む。

「え？」

「何より、我らに憧れる後輩を無下には出来まい、そうだろう！『黒翼』こくよくのクロウ！」

クロウの表情が引きつり、身体が石の様に停止する。

「どこから、その名前……」

「何、報酬を貰った時にシビルという男からな！いやあ、我々に憧れてそんな名前を名乗る後輩が居るとはな！はははははは」

グローリーがガクガクと固まったままの彼女の肩を揺らす。
サッドとバッドも樹の上で感涙にむせぶ。

「ねえ、エッジ……こいつちよつと殺すけど良いよね？」

顔を伏せたままのクロウの周囲で殺気が膨れ上がる。

「ははは、照れるな照れるな黒翼のクロウ！」

「連呼するな！そんなダサイ名前自分から名乗った事一回もないわよ！！」

「クロウ、ストップ、ストップ——」

彼女がブラッディランスを乱射しかけたので、仲間達はそれを阻止する為に尽力する羽目になった。

《貿易拠点 マーミン》

「グローリー達この街の賞金稼ぎのリーダーだったのか」

「その通り！」

落ちていた所でエッジ達は改めて漆黒の翼達に事情を聞いた。

彼等は街外れの洞窟から飾り気のない元倉庫の様な建物に拠点を移しており、仲間達はそこに案内された。

やむを得ず仲間達に意識を失わされたクロウは頭に大きなたんこぶを作つて倒れている。

「うおおおおお——兄貴——」

グローリーに続いてバッドや、かつて正気を失つてエッジ達と戦つた賞金稼ぎ達が歓声を上げる。

「そう、我々三人だけでは止められなかった狂気に落ちた我が同胞たちを止める為、我々漆黒の翼は必死に資金を集めていた。しかし、資金集めは難航しこの街に迷惑をかけるのも時間の問題だった……そんな時！仲間達を止めてくれたのがそうお前達だ！」

再び歓声上がる。

クリフやエッジ達に怪我を負わされた事を恨んでいるものは居ない様だった。

「全員勢いだけで単純というか。いやひよつとしてこれはこれでカリスマなのか？」

「そうですね、漆黒の翼の皆さんの明るさは精神的支柱なのかもしれません」

クリフが冗談半分口にした言葉をアキは真剣に考察する。

「そんな恩人の為だーさあ何でも望みを口にするが良い！聞けばお前達あの洞窟に用があると言うではないか、我々が離れてから魔物の住処となったあの場所に入りたいというならば我が『回転裂駆雑魚専封滅最新ばーじょん喝采劇場』を披露するのも、やぶさかではない！」

「何だその長い名前」

クリフの呆れた顔が視界に入っ居ないのか、グローリーは踏み台にしている樽を力強く踏みながら得意げに笑った。

「心配には及ばんD・RCゲージ一本で出すことが出来、TPも消費しない大変コストパフォーマンスがいい技だ」

アキやリアトリスは彼が何を言っているのか分からずに困惑する。

「ゲージ……？」

「分からないけど、この人がずっと喋っていると良くない気がする」

やや脱線しかけた話をエッジが戻す。

「洞窟に入りたいのは勿論だけど、もう一つ頼みたい事があるんだ」

「おう！何でも言ってみるが良い！」

じゃあ、とエッジは仲間達と視線を交わして答える。

「爆薬が欲しい。洞窟を封鎖出来るだけの量が」

《ストレア洞窟》

「すげえな、本当に全部雑魚倒したのかよ」

「ただ、ものすごく疲弊してらっしゃる様ですけど……大丈夫ですか？」

「ふ……この程度、私達の『回転裂駆雑魚専封滅ばーじょん喝采劇場』の力と仲間達の声援をもつてすれば……」

クリフとアキが感心したり心配するのに対して、ボロボロの姿で洞窟内から出てきた漆黒の翼の三人は胸を張る。

意識を取り戻したクロウはその技名に呆れた様子で目を細めた。

「その変な名前何とかならないの」

「何か問題か？」

「言い辛いでしょうどう考えても」

「ふむ……なら改名して震天裂空——」

「待ってそれダメなやつ」

クロウの指摘に三人は首を捻り、それから気付いた様にその表情が明るくなる。

「ああ、名前の長さか！」

「あんたが使える事がよ」

再び漆黒の翼を睨みつけているクロウを制止しながら、リョウカが賞金稼ぎ達に幾何学模様の走る宝石の板の様な物を手渡す。

「はいはい、その辺にしときなさい。ほら、生体感知術式よこれを動力源との間に挟めば人間が通ろうとした時自動で起爆する。この石板と動力は十分に距離を空けてから設置しなさいよ、繋いだ瞬間人間を感知して爆発したら笑えないわ。人間だけに反応する様に調整して貰うの大変だったんだから」

エツジ達は賞金稼ぎ達の力を借りて水の宝珠フラツデイルージュが眠る洞窟内に大量の爆薬を設置していた。

『ジード』やスプラウツが仮にこの最後の宝珠を見つけて辿り着いても利用する事が出来ない様に。

内部の様子を見てきたラークとリアトリスも合流してくる。

「ひとまず出来るのはここまでだね、中の宝珠の様子を見てきたけど開放状態にはなっていないかった。先回り出来たみたいだしここまでは順調かな」

「爆破なんて物騒だとは思うけど、カンデラス火山での事を踏まえると同様向こうもシンの一族しか開放できない宝珠の力を開放出来るみたいだから仕方ないよね……」

自然の洞窟を破壊する事に抵抗を示すリアトリスを励ます様に、漆黒の翼の紅一点のサッドが言った。

「大丈夫さ、少なくともマーミンの町の人間達にとってここは災いの元凶だ。喜ぶやつこそあれ悲しむ奴なんて居ないよ」

「そうなら良いんだけど」

全員が揃い、クロウ達と共に入り口で待機していたルオンが尋ねる。

「次はどうするの?」

「一つ、僕とリアにはやっておかないといけない事があるんだ。僕達はこのままカースメリア大陸の北端に向かう」

ラークの言葉にリアトリスも頷く。

「やっておかないといけない事?」

『ジード』を倒して奴が持つ闇の宝珠の欠片を取り戻しても一度砕けた宝珠は元には戻らない。核にする為にインペルメアブル鉱石が要る」

エッジはその単語が妙に引つ掛かった。

(鉱石……?その名前どこかで)

彼は記憶を辿るがすぐには出てこない。

エッジが考える間にも仲間達の話は進む。

「そういう事なら、私達も一緒に行きます」

「そうね、宝珠が元に戻らなければ私達の世界が滅茶苦茶になるでしょう。なら私達の国にも無関係じゃない」

アキとリヨウカが同行を申し出たのを皮切りに、他の仲間達も次々名乗りを上げる。

「私も行くわよ、あんたの事だから着いた後で『実はモンスター出る』とか言い出しかねないし。それでラークが死ぬのは勝手だけどアキやリアまで巻き込まれたら目覚めが悪い」

「なら僕もクロウについて行く」

クリフはラークの手伝いをする事に抵抗がある様子だったが、一つに纏まる仲間達を見て笑うと諦めた様に言った。

「俺も行く、ここで留守番してる訳にはいかねえしな」

結局他の仲間達も全員行く事にしたのを見て、エッジが最後にまとめる。

「じゃあみんなで行こう。悪いけどこっちは任せて良いか?」

「おう、大船に乗ったつもりでこの漆黒の翼に任せておけ!『黒翼』のクロウと仲間達よ!」

「だから——その名前で呼ぶなっつってんでしようが!!」

以前マーミンを出た時と同じ様に町の人達と賞金稼ぎ達の厚意でエツジ達は馬車でカーズメリア大陸の北端、イクリスタ坑道を目指す事になった。

クロウのラーヴァンで飛ぶ事も出来なくなかったが一度町から離れなければならない事、目的地の付近に着陸できそうな所が少なかった事等もあり、断るのも不自然だった為一行は素直に馬車に乗り込んだ。

穏やかな旅でクロウの体力も温存できる——と思われたのも束の間。

マーミンを出て間もない所で、御者の悲鳴と共に馬車が乱暴に停止する。

「何だ!?! 敵襲か?」

クリフが壁に額をぶつけながら外の様子を窺う。

「『敵』っていうかこれは——」

いち早く扉を開いて外へ飛び出したクロウが辺りを見回して状況を把握する。

馬車は毛の長い、狼のようなモンスターの群れに包囲されていた。

「野生のモンスターの群れだよね……何か懐かしい光景じゃない? エツジ」

続けて降りてきた彼に対して、クロウは不敵な笑みを浮かべながら初めて一緒に戦った時の事を口にする。

「数が全然違うだろ? あの時の三倍は居るし、多分他のモンスターと同じ様に以前よりずっと凶暴化してる」

「戦力差考えたら似た様なものじゃない、あの時はラーヴァン一時的に離してたしこっちも二人だけだったんだから。少なくとも今の私達は——」

リアトリスの光の壁が馬車を囲み、アキが炎を纏った傘で敵の群れへと急降下する。

間髪入れずにクリフが高速移動で一体を蹴り飛ばしながら先行し

たアキの横に並び、彼女の背後をフォローする。

「もう、二人だけじゃない」

ラークがエツジとクロウを制しながらダブルブレードを展開しながら前が出る。

「二人はリアと一緒に馬車の守りに徹して下がって、下手に力を使つてばれたら御者まで余計な事に巻き込みかねないからね。ここは僕達に任せて」

エツジが頷く。

「分かった、ごめん。悪いけど任せた」

クロウも真つ先に突つ込んだアキの背中へと声をかける。

「気を付けてー！アキ、数が多い」

「大丈夫です、この位。負けません」

頷く彼女と、クリフト、そして馬車へと。

一斉に狼の群れは襲いかかった。

第七十七話 I n s t i n c t !

襲い来るウルフの群れ。

それに対し先行して敵の只中に飛び込んだクリフとアキ、そしてそれに続くラークとリヨウカの四人が応戦する。

背中越しにクリフはアキに問いかけた。

「アキちゃん、武器の再集束リコレクトどの位溜まってる？」

「『いけます』よ、火属性なら」

アキの『明の天傘あまがき』が発熱し、赤く発光する。

そこから光がクリフの手甲へと流れ、彼の武器にも火属性のデーブスが集束コレクトされる。

—本能共鳴技—

「炎穿陣えんせんじん！」

二人が同時に地に叩きつけた武器から、爆発が起きた。

少なくとも他者の目からはそうとしか見えなかった。

アキの武器から吹き上がり二人を半球状に包んだ炎が、クリフの武器から放たれた圧縮された気で拡散される。

意識が繋がった二人の動きはその二つを一呼吸の内に終えた。

高温のピークと同時に最大限に拡散された炎のドームは、二人に牙を突き立てようとしていたウルフ達を吹き飛ばす。

初撃を二人が上手く決めたのを見ながら、後方のリヨウカが地属性のデーブスを集束し始める。

「敵の隊列が乱れたわね、詠技で一気に決めるわ」

「了解、発動時間の確保なら僕の役目だね」

そう言うとりヨウカに接近して来た一体に向かって、剣を展開したラークがひと飛びに距離を詰める。

「ふっ、はっ！」

一太刀目の斬り下ろし、そこから二撃目の逆袈裟斬り。

範囲は狭くとも素早いラークの斬撃は敵を確実に足止めする。

「はあっ！」

そこから一度足を止めての一回転斬り。

彼の手にした一対の刃が敵を切り裂きながらその勢いで押し出す。
「と、っこれもね」

その回転の勢いのままパシリと音を立てて剣を構え直し溜めを作ったラークは、捻りを加えた跳躍で追撃する。

「螺旋裂空斬」

横の高速回転を伴いながらのその跳躍は、ダブルブレードを螺旋の凶器へと変える。

真空の刃を離れた敵にも撒き散らしながら、弾丸の様に確実に一体を仕留める。

と、

「あ」

着地したラークに殺到したウルフ達の牙や爪が、ラークを捉える。

「ラークさん！」

焦った声と共に、アキが赤いものをラークに投げた。

彼はすぐさまそれに気付くと、回し蹴りで敵を振り払い「それ」をキャッチする。

「ありがとう、助かったよ」

彼女から受け取った赤いものを口にしたラークの傷が瞬時に治り始める。

アップルグミ、それは本来体力を回復する滋養強壮薬程度の補助的なものだったが、元々の傷の治りが異常に早いラークの場合はそれで十分だった。

「背後からの攻撃はガード出来ないんだ、ちゃんとステップで避けろよ」

クリフが呆れたように注意する。

「ごめんごめん。でも……これで時間は十分稼げたよね？」

ラークが振り返った先で、リョウカが身に纏った衣を巻きつける様な動きでその右手を天へと伸ばす。

四つに別れた『宵の地衣』の先端が勢いよく捻じれ、リョウカの手先の先で百合の蕾の様になる。

「そういう事、詠技——絶崖！」

直前の動きを逆回しする様に、『宵の地衣』の蕾が回転しながら開く。

その四つの先端と一体化する様に実体化した地属性のデイープスの岩塊が、一回転ごとに遠心力で回転を加速させる。

同時に岩塊は更にその大きさを増し連接棍フレイムの様にその軌道上にあるもの全てをなぎ払う。

「うわっ！」

「おっと」

「姉さん、ちよつと軌道低過ぎ——！」

三人は姿勢を低くしながら回転が最高速に達する前に、慌ててリョウカの武器をくぐってやり過ぐす。

岩塊は一撃一撃で狼型のモンスターを葬っていき、ついでに巨木を一本根元からへし折った。

二十体弱居たモンスター達は瞬く間に三体になる。

その三体の足元で、木の葉が渦を巻く。

「まずい、その突進は防げない！」

「残念ね……私が術士ならそれで正解だったでしょうけど」

四肢の先で発動させた風の深術に乗って、ウルフが三方向から一直線に6 m近い間合いを無くす。

「抱氷ほうひょう」

『宵の地衣』が冷気を纏いながら、リョウカの元へと戻っていく。

「っ、天昇てんしょう」

同時にアキが彼女の背後をフォローしようと『明の天傘』で飛び上がる。

「——蟲殺劇ちゅうざつげき！」

リョウカの衣は突進してきたウルフ二体の突進を背後から絡め取る様に巻き込み、氷のデイープスで硬質化した先端が冷気で身動きできなくなったモンスター達を刺し貫いた。

「——落散らくさん駆——」

その彼女の裏で、地面ごと抉る様にしてアキの急降下が残った一体に止めをさす。

「届かなかったわね。フフツ、あはははは」

敵の返り血が付いた武器を手に高笑いするリョウカを、アキとクリフは冷めた目で見つめる。

「今まで会ったどんな敵より、姉が邪悪な笑みを浮かべているのです
が」

「放っておこうぜ」

と、

一度落ち着いた彼らの周辺に狼の遠吠えが響く。

距離は遠かったが、間違はなくそれは今しがた倒したものと同種の声だった。

ラークが焦った様に四人で守っていた馬車を振り返る。

「くつ、背後からか！」

「まずい、隊列が」

戦闘終了直後で青い気による疑似詠唱を解いていたクリフは走ってエッジ達の馬車の方へと引き返す。

ラークも彼と一緒に戻り始めるが、既に馬車の背後側から続々とウルフ達は襲いかかってきていた。

そのモンスターの群れの前にクロウが立ちはだかる。

「クロウ？俺達は戦うなって……」

「大丈夫だよ、エッジ。こっちは御者から死角だし、一瞬しか使わ
ない」

彼女の目の色が光を失い暗転し、その右手の中で術の威力と範囲とが比例する彼女がほとんど使わない量——広範囲への攻撃が確定する量の闇のデイスが集束された。

それを右肩の宝珠の欠片による力技でより小さく、より薄く、ただ一点へと彼女は圧縮していく。

「雑魚散らすだけならこれで十分でしょ、廻れ——秘奥義、サイスラウ
ンドスライシズ！」

クロウが手放した黒い弾は、今まで掛けられた圧力から解放されるや否や瞬く間に定形を失い反動で爆発しようとする。その無差別な破壊の種を彼女は更に深術で上下から極限まで圧迫し、前方と側面の

みをなぎ払う無数の半月型の刃へと変えた。

空間に黒い線が走る。

一瞬でエッジとクロウの眼前から視界の彼方までを斬り裂いたそれらは二人の遠近感を狂わせ、ただその一撃の下に新たに表れた十体のウルフ達は全滅した。

「改めて見ると相変わらずとんでもないな、それ」

敵を倒したクロウの肩をエッジが軽く叩く。

「……化け物だっと思ってた？」

「え、クロウをか？」

本気で何を問われたのか戸惑うエッジを見て、クロウは笑うと自分からその問いを取り下げた。

「いや、ごめん。やっぱり何でもない」

戦闘が一段落してショック状態だった馬と御者が落ち着くと、彼等は改めて北を目指した。

丸一日移動しただけで空気は急激に冷え込み葉が広い木々が減つて、数の少なかったつんつんとした葉の樹が目立つ様になる。

「カースメリアの北って前から多少冷える地域ではあったけど、こんなに寒かったか？」

そう言いながらクリフが吐いた息はうつすら白くなる。

馬車の中ではローブが配られ、一行はそれだけが頼りだった。

エッジ達は世界中を短期間に回りその気候に合わせた食料や衣類等の備えはしてきたものの、レーシア大陸の様な暑い地域の経験はあってもこの様に寒い地域は無かったのだ。

「空気中の氷のデュープスが増えたからだね。ここから一番近い水の宝珠の地脈の流れと、北西の光の宝珠の影響だと思うよ」

ラークのその解説にアキが首を傾げる。

「サンクオーリストが司る光属性は熱の属性です。それなら間欠泉や、温泉等になりそうな気がしますよ」

「多分、厳密にはここの地脈は光の宝珠と対になる闇の宝珠のものなんじゃないかな、イクスフェントから流入する闇のデュープスの冷気

がここを通ってるんだと思う」

リアトリスの説明に、なるほどとアキは納得する。

「で、その話の続きなんだけど」

ラークの言葉に全員の中で嫌な予感が膨らむ。

「この先のイクリスタ坑道にモンスターが出る」

「やっぱり出るんじゃない！あんた前回普通に知らないフリしたわよね?!」

「冷気の影響か氷を纏った大型の珍しいモンスターらしくて、そいつ一体でイクリスタ坑道はインペルメアブル鉱石が採れる状態だけど実質的に閉山状態なんだ」

「しかも結構凶悪な……!」

飄々とクロウを無視するラークの話で一行の空気は一気に暗くなる。

全員の溜息がもれ、その彼がエッジの隣にさり気無く移動するのを誰も気にとめなかった。

「エッジ、一つ話しておかなきゃいけない事がある」

低いトーンで囁かれたラークの声に、エッジはこれこそが本題であるのを悟る。

「インペルメアブル鉱石はデープスの濃度が高ければ高い程それと強固に結びつく性質を持った鉱石だ、宝珠程の高濃度のデープスであればその結合は揺るぎ無いものになる」

『鉱石を宝珠再生の核とする』、その話と符合する内容だった。

エッジはそれをなぜ自分だけに語るのか疑問に思う。

「そう、この性質をグレイス夫妻——クロウの両親は利用した。もう気付いているんじゃないか？これから僕らが手にする石は、今彼女の意識を保護しているのと同じものだ」

「!」

そこでエッジはようやく理解した。

ラークが彼だけにこの事を知らせた理由を。

「インペルメアブル鉱石があれば理論上、クロウから宝珠の欠片の影響を取り除ける可能性がある。……でもそれはあくまで可能性、僕は

そんなものの為にこの先確実に必要になる貴重な鉱石を消費するのは反対だ」

エッジは黙って、ラークの視線を受け止めた。射る様な真っ直ぐなその目を、正面から。

「僕は世界の為にこの鉱石を使う。君がもしクロウの為に石を使いたいならその時は奪い合い、僕と君とは敵同士だ——その覚悟を持って剣を取れ」

それだけ言うと、ラークは視線を外しエッジの側を離れる。

エッジは最後まで答えなかった。

どうしたいかなんて最初から決まっていた。

ラークもそれを理解していたから、警告して来たのだとエッジは分かっていた。

(どうしたいかは決まってる……だから考えなきゃいけないのは)

『どうやって』

ラークに未だ一人で対抗する力を持たない自分がどうやって勝つか。

その問いに対して出せる答えも、エッジは一つしか持っていなかった。

第七十八話 鉋石砕きの氷獣

《イクリスタ坑道》

坑道内部は薄暗くそして、寒かった。

足を踏み入れるとき一行は寒々とした景色の中に坑道があるのでなく、その暗い入口が冷気を中心である様に錯覚する程に。

「みんな、竪穴に気を付けろよ。踏み外すとどこまで落ちるか分からねえ」

クリフが注意深く足元を確かめながら全員に警告する。

「大丈夫、アキ？私と手繋いで」

「こ、子供扱いしないで下さいクロウさん！」

耳を赤くしながら嫌がるアキの手をクロウが掴む。

「してないよ、でも命に関わるでしょ」

そこへ横からリョウカが割って入り、クロウの手を払いのけた。

「その対策はどうかと思うわよ、苔なんかで足を踏み外したらもう一人も道連れで犠牲が増えるって可能性もあるし」

言いながら彼女はアキの手をがしりと掴む。

「この子と地獄まで生死を共にするのは私だけで十分よ」

(……それどう反応すれば)

反応に困ったアキはとりあえず黙って姉のするに任せた。

「一応私が明かり付けてるし、そうそう落ちないとは思うけど。足もと見辛い人いたら言っただけね」

リアトリスが杖の先端に極小の光の深術を発動させ続け、周囲を照らしていた。

壁面には使い古された明かりが点いて全く見えない程暗くはなく、道幅は大人五人が横に並べる位には広かったので実際の所そこまで歩きにくくはなかった。

皆が足元に注意を払いながらゆっくり進む中で、ラークが足を止めた。

クロウがそれを訝しむ。

「ラーク？」

「あつた、この石だ」

そう言つて彼は薄い碧色の石を拾い上げる。

しかし、鋭角的な断面を晒すそれはかなり小さく砕けてしまつており、ラークの手の中のそれも大半が砂状になつていた。

「それが例の鉱石なの？」

「ああ、これじゃ使い物にならないけどね。それにしてもこの状態……みんな気を付けて、敵は遠くないかもしれない」

ラークは薄暗い道の先を睨んだ。

彼の警告に一向の進みもいよいよ慎重になる。

全員が周囲に警戒を向ける中でエツジはさり気なく、明かりを掲げるリアトリスに近付いた。

「リア、聞いて欲しい事がある」

「ん？どうしたの——」

彼女の返事は大きな音で遮られた。

爆薬で壁が吹き飛ばされる様な瓦解音と共に、一行の目の前の壁が巨大なもの荒々しい突進で突き破られる。

人の背丈の倍程の高さで洞穴内を圧迫するそれがきちんと視認出来るより前に、ルオンが真っ先に反応し矢を射る。

「扇氷閃」
せんひょうせん

三本の矢が足止めに放たれる。

普段なら着地地点を凍りつかせるそれらは敵影に触れると、ただ水色の飛沫を飛ばしただけで弾かれた。

「無効化……!？」

姿を現したのは長い尾と青白い体毛を持った蜥蜴じみた見た目のモンスターだった。

高さだけでも人の倍、薄暗い洞穴の奥まで伸びる体長はどこまで続いているか分からない。

「鉱脈齧りナーリッ！よりよってこいつなの」

リョウカの首筋を冷や汗が伝う。

明らかに興奮状態にあるそのモンスターは身をうねらせながら、触れるものを即座に押し潰す質量で全員にのしかかった。

粉塵が上がる。

「くっ……岩碎閃！」
がんさいせん

自分の身の丈を遙かに上回るその突進をアキが受け止め、地面に轍を残しながら横へと受け流す。

敵は明らかに敵意を持った興奮状態にあり、蛇の様な敏捷さで前肢が振り下ろされる。

「はあああっ！」

アキは『明の天傘』の炎を解放し、何とかそれを同じ様に防ぎ続ける。

炎を見たそのモンスターは微かに攻撃を弱めた。

（やはり、炎には弱い……これなら戦える！）

彼女がそう確信した瞬間、その獣の背が空気中のデーパースを集束して変形した。

洞穴内の温度が一気に下がる。

短時間でその背に形成された無数の氷の棘がそのシルエットを大きく変えていた。

「ここは私に任せて下がちなさい、トウカ！」

警告を飛ばしながら、リョウカがアキの前に出る。

直後、敵の背の棘一つ一つが自律しているかの様に狙いを定めながら撃ち出される。

下がったアキが直前まで立っていた位置に突き刺さったそれらは一瞬にして対象の温度を奪い、転がっていた鉱石がそれを受けて砕け散った。

他の生物であれば即死する程の温度低下だった。

「――！」

その針が、リョウカを直撃し彼女の身体が厚い氷に呑み込まれる。

「姉さん！」

アキが反射的に姉を飲み込んだ氷塊に手を伸ばす。

その手の先で氷が発光する。

「大丈夫よ、私は」

氷を内部から粉々に砕いて、リョウカが無事な姿を現す。

『同じ力』が効く訳ないでしょう」

言いながら彼女は『宵の地衣』で再び全身を覆う。

「この材料の氷鼠の衣は、そもそも鉋脈を次々に食い荒らすこいつの皮なんだから——氷装華・桔梗！」

そう言いながら、彼女は氷のデュープスを高速で集束し味方全員の前に壁を張る。

それと同等の効率で氷獣もまた氷の棘を撃ち出す。

両者の力は拮抗し攻撃は防がれるが、氷の盾もまたみるみる削られていく。

「防御ばかりじゃ埒が明かない、僕が気を逸らす」

そう言うのとラークが大きく跳躍した。

氷獣の巨体の更の上、ごく僅かな天井との隙間へと彼はその身を翻す。

「裂空落斬」

縦に高速回転しながらの彼の斬撃は天井と獣との僅かな空間を利用して、一点を集中的に攻撃する。

ラークの武器から火花が散り、氷獣は尻尾を振り回して彼を振り払う。

ダブルブレードに込めた腕力だけでラークはそこから敵の側面へと飛び去り、着地してその尾をかわす。

「刹那の輝き、其を瞳に映すものを貫かん——レイ！」
「風樂一閃——ガスティーネイル！」

皆が時間を稼いでいる間に詠唱を完了したりアトリスの光の雨が再び放たれた氷の棘を撃ち落しながらモンスターへと突きささり、エッジの放った見えない風の刃が敵の硬質な皮膚と接触し鈍い音を響かせる。

ラークは顔をしかめた。

「傷一つ付かないか」

何ら決定打を与えられない状況を見て、クロウが前に入る。

「任せて、こんなやつ私が……」

深術を詠唱破棄しようとした彼女の瞳が紫から黒へと変わる。

が、何度も繰り返してきたその行動は唐突に彼女の目眩を引き起こし、ほんの僅かに術の発動が遅れる。

「馬鹿、危ねえ！」

「なっ——!?!」

そこへ敵の尾によるなぎ払いが迫りクリフが彼女の前に出てその攻撃を青い『気』で引き受けようとし、クロウは彼に攻撃を当てない為に慌てて術の制御をし直し暴発させてしまう。

結果的に二人は共にバランスを崩すと重なり合う様に倒れた。

モンスターの尻尾はその頭上すれすれを飛んでいく。

(このままじゃまずい、何とか状況を好転させないと)

ラークは必死に考えを巡らせて辺りを観察し、敵の胴体の真下に碧い輝きを見付ける

(こいつを倒す必要は無い、あれさえ手に入れば離脱できる。何とかして鉱石を)

素早く飛び出すと、再び振るわれた尻尾をかいくぐってラークは巨体の下へとその身を滑り込ませる。

無防備な胴体の下へ飛んできた異物に対して、氷獣はその脚で応えた。

「がはっ！」

ラークの腹部へと深々と食い込んだ巨木の様なそれは、彼を壁面へと叩きつける。

更に反動で浮きあがった彼の身体に氷の棘の追撃が降り注いだ。

「くっ……」

ラークは背後の壁に剣を突き立て、壁面を転がる様にその攻撃から逃れる。

その棘を浴びた壁面は瞬く間に白い氷壁へと変化した。

「痛った、何考えてんの？術の発動前に割り込むとか！」

「何言ってるんだ、間に合わなかったらあと少しで死んでたぞ！」

自分の上に倒れてきたクリフに更に怒りをぶつけようとして、クロウは思いとどまった。

それではいつもと同じだと。

「……あんたが子供が戦うの嫌ってるのは知ってる。あんたから見たら私も子供なんだって事も」

クリフも黙って彼女の言う事を聞く。

「でも、元はどうあれ今の私は自分の意思で戦いに立ってるの。あんたが私の境遇に言いたい事はあるのかもしれないけど、対等に思ってくれなきゃちゃんと連携が取れない」

クロウは少しためらって、大きく息を吸い込んだ。

「私を信じてよ、そうしないと私もあんたを信じられない」

クリフは目を丸くして、それからバツの悪そうな顔で謝った。

「悪い、別にお前を信じて無い訳じゃねえんだ……ただ少し下がれ」

「ちよつと話聞いて——」

クリフがその言葉を制する。

「お前いつも敵を倒そうとして前に出過ぎなんだよ、お前が詠唱破棄で接近戦も戦えるのは知ってる。でも、術士である事には変わりねえんだ、物理的な攻撃を受けたら俺らより対応し辛いリスクが大きい」

そう言って、氷獣から彼女を守る様にクリフが立った。

「戦うのと死に急ぐのは別だ、だから直に相手するのはこっちに任せて安全な間合いから攻撃しろよ……その代わり俺の視界外からの攻撃とかは任せて良いか？」

今度はクロウが目を丸くし、それから不敵に笑った。

「誰に言ってるの？尻尾だろうが氷柱だろうが深術で全部叩き落としたりやるわよ」

「分かった、じゃあそっちは任せませー！」

言うが早いのか、クリフは青い気を纏って敵の足元へと突っ込んだ。
「轟裂破ごうれつぱ」

クリフの両掌が氷獣の左前脚を直撃する。

相変わらず傷は付かなかったが、衝撃は確かに伝わったらしくその一撃でラークに向かいかけていた敵はクリフに狙いを変更した。

再びモンスターの背に生成された氷の棘が彼を目がけて雨と降り注ぐ。

「させるか、イレイズブリリアンス！」

百弱の棘に対して、クロウは数千の黒い線の術を詠唱破棄して迎え撃つ。

一つ一つが鋭いナイフの様な貫通力を持った彼女の術は、氷柱を殺傷力の無い細ダイヤモンドダスト氷に変える。

砕かれたそれらは溶けて水滴になり、氷のディープスへと戻っていく。

それをクリフは自分の手甲に、クロウはスローイングダガーに再集束した。

「行くぞ」

「良いよ」

水色の光がクロウの武器から、クリフの武器へと走った。

クロウが四本のダガーを広がる様に投げる、それらはカーブを描きながらただ一点へと集束していく。

—本能共鳴技—
インステインクティブ・リンクアップ
ぜっばれつひょうげき

「絶破列氷撃！」

クリフの突き出した拳と集まったダガーとが同時にただ一点に叩きつけられ、氷獣がやったのと同じ様に視界を覆う程の氷晶が発生する。

自身の邪魔をするそれに苛立つ様に巨大なトカゲは咆哮する。

「氷だから効かねえよ、な！」

氷塊を隠れ蓑にして、敵の顎をクリフがアッパーでかち上げる。

「ブラッディランス！」

それによって晒された柔らかい首の皮をクロウの放った黒い槍が切り裂く。

氷獣はその痛みにのたうった。

「これでお前も攻撃通るんじゃないやねえか？ラーク」

先程やられた腹部を押さえて蹲っていた彼は剣を地面に突き刺し、それを支えにしながら身体を奮い立たせる。

その目には強い意思の炎が宿っていた。

「……言われるまでも、無い！」

口の端から血を零しながらラークが振るった剣は、斬撃を宙に飛ばし正確に堅い皮膚に出来た僅かな傷を攻撃する。

更なるダメージを負った氷獣は怒りの声を上げ、氷の棘を無差別に飛ばして激しく暴れ、仲間達は一時的に退いた。

少しずつではあるが、確実に戦況は傾き始めていた。

(やっぱり今の俺のままじゃ力が足りない……今のままじゃ)

必死になるラークの姿を見て、エツジは先程言いかけた言葉を再びリアトリスに告げた。

「リア、頼みがある」

「エツジ？」

何故戦闘中に再びそれを口にするのかと尋ねかけたリアトリスは、エツジの目を見てその疑問を飲み込む。

彼の目はラークと同じ様に強い意志を宿し、今で無ければ駄目なのだと告げていた。

「あの剣を、深海の剣を貸してくれ」

第七十九話 蒼の力

「深海の剣って、エッジ忘れたの!? 今度腕を失ったら私助けられないよ? それどころか……」

リアトリスは信じられないという表情でエッジに囁く。

一度エッジがアエス・デイ・エウルバに触れた時の事は二人だけの秘密になっていた。

「次に触れたら死ぬかもしれないんだろ、大丈夫分かってる」

「分かっているっ、て……」

エッジは言葉を失うリアトリスから視線を外して、一時的に下がって後衛の所まで来たリヨウカに声をかけた。

「リヨウカ、頼みがある」

「何? 今言わなきゃいけない事なんでしょうね」

戦闘中に喋っている暇は無いと言う様に不機嫌にリヨウカは応える。

エッジはそういう彼女の対応には慣れており、怯むことなく続けた。

「もし俺が死んだら、インペルメアブル鉱石でクロウを助けて欲しい」

リヨウカは本気で怒った表情になり、エッジを睨みつけた。

「嫌よ、死ぬ事を前提にした頼みなんて冗談でもしないで」

「俺が本気かどうかリヨウカなら分かるだろ? こういう事頼めるのはリヨウカだけなんだ」

彼女はやめようとしないう少年の襟元を締め上げた。

「ええ、分かるわよ。何する気か知らないけど、貴方がそこまで口にするって事はどれだけの危険があるのか貴方自身が誰よりも具体的に想定している筈だって事もね。いい加減にしなさい! 特にクロウが絡んだ時の貴方の行動は度を越してらって自分で分かって無いの?」

エッジの態度は変わらなかった。

自分を見下ろす厳しいリヨウカの瞳を、落ち着いた真剣な目で見つめ返す。

「クロウを助けたいたいの俺の我が儘だ、でもその為にまだ力が足りない

い。だから自分の命を賭ける、自分のやりたい事の為だから」

エツジは静かにリヨウカの手を振りほどいて彼女から離れると、再びリアトリスと向き直った。

リアトリスは目立たない麻の布で何重にも巻かれた細長い物体を取り出していた。

エツジはそれを受け取る。

一度直にその力に触れた彼は、布越しでもこれが禁忌の剣である事を肌で感じた。

「ありがとう、リア」

「エツジ……」

同じ様に一度エツジが右手を失うのを間近で見えていたリアトリスは懇願するように彼の名前を呼ぶが、エツジはただ彼女を安心させるように笑って自分のさつきまで使っていた剣を地に置いた。

「深海の剣を使う、もし俺がこの剣を制御しきれ無かったら皆を下げてくれ」

返事は期待せずにリヨウカにそう告げると、エツジは氷獣の方へと向き直って深海の剣に巻かれた布に手をかけた。

リヨウカはエツジがもう止まらない事を悟って下がりながら、唇を噛んだ。

『クロウを孤独にしたくない』エツジ、それが貴方の行動原理だった筈じゃないの？ 貴方が死んだ時もその理想は叶わないのよ。貴方の理想は破綻してる、自身を勘定に入れない様なそんな生き方は人の生き方じゃない……このまま行ったら」

エツジは布を解き、蒼い剣の柄を握った。

（――貴方はいずれ自分を破滅させる）

「こいつ、ここに来てまだ……！」

「クロウさん、クリフさん私の後ろに！――盾華・紅葉」

傷を負い、追い詰められた氷獣の突進が狭い坑道内の空間で三人を捉える。

先頭に立ったアキが『明の天傘』の炎を全開にして盾の様に展開し

その突進を受けた。

「くっ、ううううー！」

後ろの二人を巻き込む様にして、アキは大きく後ろに突き飛ばされる。

最初は炎に怯んでいた敵は、もうその程度では勢いを緩めなくなっていた。

二人と接触してバランスを崩しながらもギリギリでその突進を凌ぎきったアキは、そのまま後ろに倒れこむ。

「氷屑の破者」

「真空破斬！」

氷獣の突進の終わり際を狙った貫通力の高い矢もこの相手を前にしては威力が半減しており、弾かれる。

ラークが放った真空の刃も、岩と金属が接触した様な音と共に厚い皮膚に弾き返される。クロウが深術で負わせた傷の箇所以外では、彼らの攻撃は一つとしてダメージを与えられていなかった。

ラークは舌打ちしながら、自分の方へと飛んで来た氷の棘を避ける。

「こうなったら私が一撃で吹き飛ばす、威力上げる分範囲の制御が甘くなるから皆下がって！」

それ以外に方法が無い事を実感し始めていた仲間達は、彼女の警告を聞いて可能な限り氷獣との距離を取った。

そうしてクロウの前に空いたスペースに、蒼い輝きを手にしたエッジが飛び込んだ。

「エッジ!？」

アエス・デイ・エウルバを手にした瞬間、エッジは以前と同じ感覚を感じた。

剣を握っている筈なのに重さが分からず、指先からあらゆる感覚が——手がそこにあるという感覚ごと抜けおちていく感覚を。

(力を貸してくれなくても良い……ただもう少しだけ持つてくれ)

自分自身の死を間近にしても、エッジの中に不思議と恐怖は無かつ

た。

諦めにも似た静かな決意の中で顔をあげた彼はふと、氷獣——ナリーフと目が合う。

必死で、自分達を倒そうとする獣の目はどこまでもまっすぐだった。

リョウカが口にしていた事をエツジは思い出す。

自分達の皮を剥がれ人間に使われるのがどんな気持ちなのか。

ただ自分の居場所を求めて手に入れた家に人間が踏み行ってきたら、自分だつたらどうするか。

エツジはそれを思うと涙が零れそうになる。

(……………ごめんな)

目の前の氷獣に敵意を持って剣を振るう事などエツジには出来なかった。

しかし、彼が剣を振るわなくてもラーク達は間違いなくこのモンスターを倒す。

ここで手を止めればただ彼自身が死に、クロウはまた一步死に近付くだけなのだと言い聞かせて、エツジは自分の身体を無理矢理前に進めた。

彼の手の中で剣の感覚が戻る。

代わりに何か水の入った筒を振っている様な重さをエツジは感じた。

その「重さ」の移動に合わせて剣の表面を蒼い光が走っていく。

しかし剣先がぶれる訳ではなく、実際に重心は変化していなかった。

エツジが強いデーパーズの流れの様に感じるそれは、限りなく触覚に近い存在感を持っている。

彼は剣を包むその蒼い光を、最も振るい慣れた動きに乗せて放つた。

「魔神剣・「蒼」！」

地を這う衝撃波が蒼い輝きを乗せて奔る。

いつもより速い訳でも無く、激しく砂埃が上がるわけでも無かつ

た。

ただ、それはラークの力を以てしても傷一つ付かなかった氷獣の脚を軽々と両断した。

切れ味鋭い、などというものではない。

その魔神剣は触れた瞬間にその箇所を消滅させていた。

「なっ……」

「エツジさんその剣は……」

一瞬にして戦況を覆したアエス・デイ・エウルバの力に仲間達は言葉を失う。

氷獣は何が起きたのかも分からない様子で倒れこむ。

そうして自身の目の前に落ちてくるナーリーフの頸部に向かって、エツジは歯を食いしばって剣を振るった。

「はああああああっ！」

彼自身が驚くほど容易く、剣は頑丈な皮膚を貫いた。

エツジの手に返る手応えは無く、痛みさえ無かったのか氷獣の瞳は驚きに見開かれたまま動かなくなる。

それから遅れて、巨獣の身体が地に落ち粉塵を上げた。

誰も口を開かず沈黙が流れる。

エツジはしばし剣を抜いたまま氷獣の亡骸を前に立ちつくした。

その静寂を、彼に向けて力強く地を蹴る音が破る。

エツジはその明らかな殺気に咄嗟に振り向き、深海の剣を振るう。

ダブルブレードで彼に斬り付けようとしていたラークは大きく跳躍して、それを躲す。

その行動を目にしてエツジはようやく自身の足元に落ちている碧色の鉱石に気付いた。

ラークは着地すると、再び身を翻してエツジに迫る。

エツジも応戦しようとするが直前の彼の行動が引つかかる。

（何であんな大きな動きで避けたんだ？……まさかこの剣、武器ですら触れただけで破壊するのか？）

身の一族がいくら強力な治癒能力を持っていようと、その仮定が正しいならたった一撃でも致命傷になりかねない。

その考えがエッジの中に僅かな躊躇いを生む。

そんな隙を見逃すラークでは無かった。

エッジが横風ぎに振るった剣のすれすれを飛び越えながら、走ってきた勢いそのままに身体をねじって飛び蹴りを放つ。

「飛燕脚」
ひえんきやく

「ぐっ！」

エッジの側頭部をラークの回し蹴りが直撃し、エッジは地に伏せられた。

手を伸ばすも起き上がれない彼に代わって、ラークが足元の鉱石を拾い上げる。

「僕にとっても、君にとっても最悪な展開は『君が感情に任せて、何の成果も得られずこの石を消費する事』だ。これは僕が保管する」

エッジの殺気だった目を見下ろして、ラークは冷たく言う「背を向ける。」

「……深海の剣を使いこなしたんだね、歴史上その剣に担い手がいた事は無い。君が世界で最初の深海の剣の使い手だ、おめでどう」

振り返らないままラークはそう付け足して、鉱石をしまおうとエッジから離れた。

すぐにインペルメアブル鉱石に気付かなかった事。

ラークを相手に躊躇ってしまった事。

そして、後悔してなおラークを殺したくないと思っっている自分自身を不甲斐なく思っ、エッジはやり場の無い憤りを拳に乗せて地面に叩きつけた。

目的を果たしたにも関わらず、イクリスタ坑道を後にした帰りの馬車の中で一行は重い空気に包まれていた。

エッジもラークも互いに口を開かず、それ以外の仲間も自然と口を開きにくくなる。

リアトリスがエッジの身を案じて彼の隣の席に近付くと囁く様に尋ねる。

「エッジ、本当に大丈夫？もし少しでも異変を感じたらすぐに剣を手

放してね……一度持てても、これからも安全とは限らないから」
言われて彼は頷く。

エツジは今まで使っていた剣と、深海の剣の二本を帯剣していた。深海の剣はまだエツジが完全に使いこなすには重く、それでいてほとんど抵抗なくあらゆるものを斬ってしまう為使いこなすには不安があつた為だ。

エツジが話したくないのを感じたのか、リアトリスはそれだけ伝えるとまたすぐにラークの隣に戻った。

それと入れ替わる様に今度はクロウがエツジの隣に身を寄せて話し掛ける。

「どうしてあんな無茶したの、あそこまでしなくても勝てる相手だったでしょ？それに何でラークと石を奪い合おうとしたの？」

ラークとエツジが事前に交わっていた会話を知らないクロウは困惑した様子で尋ねる。

エツジは目を伏せたまま答えなかった。

クロウは眉を寄せる。

「ねえ、エツジ何か隠して無い？言いたくない事なら無理に話さなくても良いけど、抱え込みすぎてエツジが潰れるのは私嫌だから、その……私が聞いた位で力になれる事なんて無いかもしれないけど、聞いて楽になるんだったら——」

「何でも無いよ、大丈夫」

エツジは口の端にだけ笑みを浮かべて見せ、彼女の言葉を遮った。明らかに不自然な反応を示すエツジにクロウの表情は暗くなる。

けれど彼のその笑顔を前にしてそれ以上の問いを続ける事はクロウには出来なかった。

「エツジ、私が本当に辛かった時エツジと一緒に居てくれただけで私には救いだった。でもエツジが私にしてくれた様に私だってエツジの事が心配なの」

そこまで言ってクロウは少し怒った様に目の前の少年を睨みつけた。

「許さないからね、私の為にあんた一人が傷付くなんて。仲間でしょ

？」

「……」

クロウはそう言って会話を終わらせる。

エツジは微かに目を伏せたまま深海の剣の柄を撫でて、聞こえるか聞こえないか位の声で呟いた。

「大丈夫だよ……」

※世界観・用語3の情報ステータスが更新されました

「身」の一族、「心」の一族

太古の昔、二柱の神から宝珠と世界を守るべく力を与えられた二種族。

アエスラングの種族が大気と心を通わせ高い深術の適正を持つ「心」の一族。イクスフェントの種族が深術を使えない代わりに長い寿命と高い身体能力を持つ「身」の一族であり、両者の総称が「シン」の一族である。

二種族の能力が異なるのは「互いが手を取り合う事」を望んだアエスラングとイクスフェントの願いからであり、またそれぞれの差異に二柱の神の性質の違いを見て取ることが出来る。

『混血児』

身の一族と心の一族、そして人間の血が混ざった者の中に稀に現れる突然変異とも呼ぶべき存在。

高い深術の適正と身体能力、治癒能力を持ち、皮膚の異常で獣のような体毛が発生する。個々の能力としては「心」や「身」の一族に劣るものの、戦闘に限れば総合的に両者を上回る能力を持つ。

世間一般には「獣の子」として認知され、モンスター等の血を引いたものと考えられて(※実際シンの一族の混血の者に体毛は存在しない為、先祖の中に本当にそれらの血が混じっている可能性はある)殆どが殺され、現代においてはその血筋はほぼ絶えている。

宝珠の「座」

狭義には六つの宝珠を安置するべき地点を指し、広義にはそこからダイープスの流れを安定させるべくシンの一族によってその地点に作られた台座も含む。

宝珠はただ存在するだけでは機能せず、「座」に在ることで初めてダイープスの流れを通して二つの世界を繋ぐ。

地点ごとに二つの世界で対になっており火と風、水と地、光と闇の

宝珠が対応している。その為、二つの世界の間のディープスの流れによる影響はこれらの地点の周辺が特に強くなっている。

『明の天傘』と『宵の地衣』

同一の職人の手により作られた対となる武器。火鼠の衣ひねずみころもと氷鼠の衣ひねずみころもと呼ばれる特殊なモンスターの皮から作られており、ディープスの集束を手助けし並の武器とは比較にならない戦闘能力を持ち主に与える、詠技の使用も可能な武器。

タリア・キサラギが娘達の身を守るため姉妹に与えた。姉のリヨウカが宵の地衣を、妹のトウカが明の天傘を所持し、タリア・トウカが出奔し『ジェイン・アキ』と名を変えた後も愛用し続ける。

本来姉妹での使用を想定されている為、二つが揃ってこそ真価を發揮する。

氷獣ナーリーフ↑New

鉋脈齧りの名を持つ巨大なトカゲの様な獣。

氷のディープスを操る能力を持ち、寒い地域の地中に生息する。

長く伸び続ける鋭い牙を持ち、硬い鉋物などを齧る事でそれを削り続けている。

その為しばしば人間が掘り進めた坑道等に現れ被害をもたらし、「氷鼠ひねずみ」とも呼ばれる。

極めて頑丈で並の武器を通さないその皮膚は様々な用途があるが、その固体の希少性と討伐の困難さから高級品として取引される。

命令刻印術式

「他者に命令を聞かせる事」を目的として開発された深術を応用した技術の一つ。通常の深術はその都度術式を組み立てるのに対し、体内に成立した術式を埋め込む事で常時発動し続ける。

しかし、人間の精神はそう簡単に制御できるものではなく、現段階の技術では他人の行動を制御するところまでは至っていない。その為実際は「主が従者を任意のタイミングで殺す事が出来る」機能を

持った爆弾の様なもの。

その経緯から忌まれた技術だったがジェイン・リュウゲンはそれを逆手にとり、処罰される寸前だったブレイド・アズライトに見せしめとしてこれを埋め込む事で自分の手駒として彼を獲得した。

ブレイドに埋め込まれたものはエッジとブレイドの父親によって改良されたものらしく、『そう簡単に爆発する事はない』とブレイドが発言している。

『共生体』
シンビオン

ガザニア・グレイスとサシード・グレイスの夫婦が研究し作り出そうとしていた生命の形。

被術者の生命活動に支障を来たさないよう高濃度のデープスを持った存在を埋め込む事で、生まれ持った素養が無くても誰でも深術を扱える様になる。

本来であれば、体内の「属性」を司るデープスのバランスは繊細なものであり無暗に高濃度のデープスが入りこむと間違いなく生物としての機能に異常を起こす。その為、カースメリア大陸原産のインペルメアブル鉱石という石の保護壁によって被術者と高濃度のデープスとの間はデープスの逆流が起こらない様に遮断されている。

クロウと闇の宝珠の欠片はこの唯一の成功例。

当初の想定では微生物や深術を扱う生物の器官の一部などの生体組織を埋め込み(名称はこれに由来する)、その能力も日常生活を補助する程度の深術の使用に留まる予定だった。が、唯一の人間の成功例であるクロウは現代の人間の手では作る事が出来ない超高濃度のデープス結晶体・アスネイシスの欠片を埋め込まれ、それによって本来の想定を遥かに上回る力を発揮している。

反面、埋め込まれたアスネイシス側の力が強すぎる為鉱石による遮断が「宝珠の側からのデープスの流れを遮断する」事しか出来ておらず、クロウの方から無理に力を使おうと宝珠側にアクセスすると少しずつ鉱石による保護壁が壊れていく。

『シンビオント・オーバーカロード
共生体過剰侵食』

クロウが、同じ闇の宝珠を持った青年と対峙した時に陥った状態。通常、大気中の闇のディープスが集まって実体化していたラーヴァンが、まるでクロウと一体化した様な姿を持つ。

獣同然の反射速度と目で捉えられない程の速度、そしてクロウ自身が封じていた「加減の無い闇の宝珠の力」を常時振るう為通常時の彼女とは比較にならない戦闘能力を持つ。

クロウの自我は無く、ラーヴァンの防衛本能としての意識が全ての行動をコントロールする。

羽で移動を、鉤爪で攻撃を、そして外殻部で運動を制御し、クロウという『容れ物』をラーヴァンの意志が強制的に動かす。彼女の生命のみが守れば良い為、その身体へのダメージは考慮されておらず（身体を幾重も深術の膜で保護しているもの）瞬間移動にも近い移動スピードは、彼女の身体に痣になる程の多大な負担をかける。

『クロウ』という人間の人格が消失している為、敵対しないものを意図的に狙う事こそないものの、扱う深術のレベルから敵味方無差別の戦い方をする。

この状態のクロウと仲間全員の力を以ってしても、『ジード』には及ばなかった。

本来であればどれだけ危険な状態に置かれても『共生体』^{シンビオント}として完成されたクロウの身体はこの状態になる事は無いが、スプラウツで幼少期から強制された度重なる深術の使用の為に能動的にアスネイスの宝珠の欠片にアクセスし続け、「瞳の色が黒く変化する」程に侵食が進んでしまったクロウの意識は完全にラーヴァンと繋がる様になってしまいこの状態になる可能性が生まれてしまった。

『ジード』

クロウを圧倒し、ラークを瀕死状態に追いやった青年。

彼女が持っていない闇の宝珠アスネイスの残り全てを所持しており、クロウ側が本来の三割に満たない力なのに対し彼が所持する欠

片は七割強で単純な出力でクロウと倍以上の力の差がある。

王都で猛威を振るった火の宝珠の力がきちんと制御されていなかったのに対して、彼は完全に力を使いこなしている為実質的にそれ以上の「限りなく本来の宝珠に近い」力を持つ。

その姿はラークの同族にして、シンの一族の裏切り者「ジード・カールシート」と酷似しているが彼は既に死亡している。

最上級深術

禁術とも呼ばれる、ごく一部の人間にしか使えない上級深術クラスすら更に超えたクラスの深術。歴史上にも使えた人間がほとんどおらず、複数人でしか発動例がないものもある。

また、この術を使った者も当人が最も得意とする属性一つしか使えず、初めて発動された時期や文化圏もバラバラな事からその名前も大きく異なる。

扱われるデュープスの量が桁違いな為、熱に関係する火・光・闇属性の術は周囲（特に術者）への危険性から発動時間が極めて短い。

更に、光属性と闇属性のデュープスは熱と共に空气中に分解されやすい性質を持つため、他の属性と異なり通常は上級深術であってもその場に残らないが、最上級深術の場合その規模の大きさから術全体の体積に対する表面積の比が小さいため空气中への分解が緩やかになり、完全に分解されるまでに長い時間を要する（分解のペースは一定ではない為、データも少なく術の持続時間については正確な情報は無い）。

分解が早い風属性の深術も完全に消えるまでにかかなりの距離を要し、海を超えた隣の大陸まで強風が吹いたという記録がある。

いずれも限りなく天災に近い術であり、通常の戦闘に用いられる様な術ではない。

なお、あくまで「人間の限界」でしかない為、六属性の宝珠はいずれもこれと同等以上の力を秘めている。

・風の最上級深術……神息吹

カミイブキ

記録上は存在しながら、長い間分類されていなかった術。地の最上級深術として扱われていた時期も存在する。情報が少なく、その時の様子を示した文献には『一瞬にして大地が割れ、爆発した』という程度の情報しかなく、この術が発動したとされる位置には巨大なクレターがある。

これが、風の最上級深術に分類される様になったのは、「術者とされる者が残した名称が風を連想させる『神息吹』であったこと」、「広範囲の同心円上でほぼ同じ頃に強風の記録があること」、「地の最上級深術が別に存在し、全くの別物であったこと」等が挙げられる。

現代ではその跡は湖となっており、息吹の御湖（いぶきのみこ）という名が付いている。地属性の深術と誤認されていたころは違う名称の湖だった

・火の最上級深術……（記録なし）

炎の天才術士が操ったとされる最上級深術。複数人での発動か、命を犠牲にしての発動が普通の最上級深術の使用者の中にあつて、彼は地脈の流れをきちんと理解し発動場所をそれに合わせる事で負担を最小限に抑え、個人で複数回この術を発動する事が可能であつたとされる。

焰螺旋の再現のように天に昇る火の柱を生み出し、上空で爆発を起こすことで術者との距離を調整し範囲内のものを一瞬にして灰とする。

しかし、実際に発動されたのは一度だけであり、その一撃はとある術士の命を犠牲に放たれた同じ最上級深術、神息吹によって相殺されている。

その衝突によって術者がダメージを負ったという記録は無いが、それ以降彼がこの術を使う事は決して無かった。

・地の最上級深術……エンプリファイド・レイジ

最も穏やかに始まり、最も危険な領域に到達する最上級深術とされる。広範囲の大地そのものに作用し、その全体を揺らす。しかし範囲が広い分、術が発動しても直後の揺れはほとんど認識できない。が、この術の真の危険性は大地を揺らす事ではなく、「何度も繰り返す事

でその揺れを増幅する事」にある。振動を繰り返す事でその威力は通常の地震に匹敵するものになり、最大威力ではアエスラングまたはイクスフェントの大地全てが崩壊する。

これを発動出来たのは「放浪の三人組」だとされ、三人全てが異なる大陸で一番の術士であったという。その彼らも発動できたのは一度限りであり、三人の呼吸が少しでもずれれば振動の繰り返しはそこで途切れてしまうので、実際に理論上の最大威力を出すのは困難であったと推測される。

後年の研究者達によればその時代、術士として並び立つもの無かった彼らの行動原理は「何か面白いことを起こす事」であり、一度の発動でも彼らはその成果に十分に満足していたと言われる。むしろ最上級深術発動後の彼らは再び禁術を発動する事よりも、この実績を後世に残す為に活動していた為、この術だけ残っている参考資料が多い。が、自分達の活躍を誇張して書かれたものがあまりに多かった為、逆に与太話として一蹴され最上級深術として認められたのが大きく遅れたのは皮肉としか言い様が無い。

・水の最上級深術……終の水竜つひすいりゅう

別名、「国を食らった大蛇」。数千年前の黒髪の少数民族からなる『水影術師団』という深術士の集団が用いた、アエスラングの歴史上最悪の『人災』。基本的に最上級深術というのは一人の術士の限界を超えた術であり、一度の使用で命を落とすか一生に一度しか撃てなかったと言うのが普通である。しかし、この集団は『一つ一つでは機能しない、百人単位で同時に使用して初めて一つの術として機能する』術式を持ち、連発こそ出来なかったものの天災クラスの術を自在に何度も操る事を可能としていた。

その力に抗えるものは存在せず、迫害される存在でしかなかった黒髪の少数民族は二つの大陸をその支配下に置き、自分達を「世界の中枢を担うもの」と称し残る二つの大陸をもその手中に収めようとした。が、それは一振りの剣を持った青年によって阻まれる。当時の出来事は次の様に記録されている。

「天まで届く水の流れの中であって、その青年は点でしかなかった。黒髪の術師たちは彼に気付く事さえなかっただろう。しかし、青年の振るった剣は一振りでも荒れ狂う水の竜の動きを止め、二振りでも真つ二つにした。その剣を、恐れた術師達はこう呼んだ。天より現れ、蛇を下す剣——クサナギノツルギ、と」

クサナギノツルギと呼ばれる剣の力で『水影術師団』の暴走は止まったものの、彼らの行動の結果は今日のアエスラングにも多大な影響を残した。二つの大陸に跨るその領土は「アクシズⅡワンド王国」として名を変え、その頂点に位置する貴族階級は今もこの黒髪の少数民族が占めている。

彼らの末裔の一人タリア・リヨウカはこういった経緯を理解しており、多くの犠牲の上に成り立った貴族・王族というシステムを快く思っていない。

クサナギノツルギ

伝承の中で水の最上級深術を打ち破ったとされる剣。その正体はイクスフェントの身の一族に与えられた切り札『天空の剣』。

通常シンの一族は人間同士の争いに関わる事を禁じ、宝珠の力が人間の手に渡ることのみを阻止する為に行動する。

が、宝珠そのものとは別に世界には「時に地脈と呼ばれる、二つの世界の宝珠間でやり取りされる強いディープスの流れ」が存在し、終の水竜の術式は南東のカーズメリア大陸に流れる「水の宝珠 フラツディールージュ」の力を使っていた為、その事態を「一部であれ宝珠の力が人の手に渡った」ものと考え危惧したイクスフェント側のシンの一族が『天空の剣』の使用に踏み切った。アエスラングとイクスフェントの繋がりが絶たれたクライニング本編の時代には登場しないものの、作中にはこれと対になる『深海の剣』が登場する。

イクスフェント・リンクアーツ
本能 共鳴 技

闇の宝珠に続いて火の宝珠までもが一時「座」を離れた事で、世界のディープスのバランス崩壊が加速した事による環境の変化。それ

が全ての生命にもたらした変化でモンスターが凶暴化し、その危機に単独で対抗する力を持たない人間の防衛本能が生み出した能力。

人間の局所戦闘における最大の強み「武器を扱う能力」と「集団として戦う」の二つが最大限に引き出されたもの。

発動者の武器にディープスが集束コレクトされるのをトリガーとし、付近に居る味方の武器へとディープスが流れ込みそれを媒介として両者の瞬間的な意識の共有がなされる事で高度な連携が可能となり「二人で同時に放つD・RC変化」ともいべき技を放つ。

防衛本能に作用して感覚的に発動する為、相手に対する僅かな不信感でも抱いていると発動せず「無意識のレベルでも絶対的な信頼を置いている」者同士でしか発動できない。

また、ディープス・リコレクト D・RC変化と密接な関係がある為これを使用できないリアトリスは発動する事が出来ない。

エッジはおおよその原理を推察していたが第三元素の知識がなかった為、意識の共有がなぜ起こるのかと、そこに関わっているディープスの性質までは理解出来なかった。

第一構成元素 ハイエス

第二記憶元素 サークキュライツ

第三属性元素 ディープス

「はじめに形が生まれた、次にそこに色が付いた、そして完成した時。そこには『既に』意味があった」

この世界の全てのを成立させている三つの要素。

普段エッジ達が術や技で扱っている「ディープス」はこの中の「属性」を司る第三元素に該当する。その為集められたディープスはそれ自体ではただの「属性」でしかなく、第一元素ハイエスによって「実体」が与えられて初めて形を得てその効果を世界に及ぼす。

具体的には火のディープスを手に集束コレクトした場合それだけでは熱くならないが、ハイエスで実体化して術や技として使用した瞬間にそれは「火」という形をもって熱を発生させる。

第二元素に関しては分かっている事が少なく、基本的に第一元素や

第三元素の様に深術や物理現象にはほとんど影響を及ぼさないものの全ての物質に含まれている事は分かっており、「記憶」を司り物事の連続性を確立させていると推測されている。

この事からそれぞれに第一元素は世界を「形づくるもの」、第二元素は「意味を与えるもの」、第三元素は「彩るもの」とも呼ばれる。

コンバッシヨナイザー
交深術士

リアトリスの様な術者の正式名称。

通常の深術士との大きな違いは、その術の組み立て方。

深術士は基本的にディープスの制御が緻密では無いため大雑把に深術に必要な量のディープスを集め、それを実体化させるハイエスで縛り付ける様に固定する事で動きをコントロールし深術を使用している。

それに対して、交深術士は空気中のディープスそのものと心を通わせる事で直接ディープスを制御して動かし、それを実体化させる補助としてのみハイエスを使用している、云わば「生きた深術」使い。

これにより「術を発動させる前段階で全ての動きを決めている」深術士では不可能な、「発動後のコース変更」、「術者が直に見えない海の中の相手への攻撃」等を可能にしている。

その半面で交深術士の術は、術の主体が術者では無く目的のみを伝達された「ディープス」である為「空气中に特定の図形を描く」、等の一つ一つの動作に目的の無い操作は不得手。

総じて、深術に合わせてディープスを使うのが深術士であり、ディープスに合わせて深術を使うのが交深術士である。

深海の剣 アエス・デイ・エウルバ↑New

ラークがクロウを殺してでも世界を守ることを宣言してから、一人でもクロウを助けられる力を求めたエツジが「自滅を覚悟で他人の為にだけに剣を握る覚悟」をした事で手にした、女神アエスラングが心の一族に授けた最終手段。

宝珠を凌ぐ神の力と言っても過言ではない攻撃能力「第一元素破

壊」を持っており刀身そのものは勿論のこと、そこから漏れる蒼い光に触れただけで全ての物質の「実体」を破壊する。

その威力は絶大で力のごく一部にも拘らずこの剣で放ったエツジの魔神剣だけでも、ラークが傷すら付けられなかったモンスターの脚を一撃で両断する程の切れ味を發揮する（通常の魔神剣に深海の剣の力の一部が乗っているだけの状態で、射程距離や攻撃範囲は変わっていない）。

この力は物理的な破壊能力というよりもはや『万物を分解する』という概念そのものであり、世界の法則そのものを捻じ曲げる力。

が、その強力な力の為にこの剣には悪用出来ない様プロテクションがかかっており、自己の欲望や殺意が強すぎると制御する事が出来ず、手にした人間は担い手として認められず蒼い光に飲み込まれて消滅する。

戦意そのものに反応する為、通常では武器として扱う事すら困難な担い手無き剣。

エツジはこの剣を握る事に成功するが……。

第八十話 世界の砂時計

あと少しでマーミンに到着するという所で、一行が乗った馬車は再び停止した。

前回の事を思い出した仲間達はすぐに客車の外へと飛び出す。

「何だ、敵襲か!？」

クリフは周囲を見回すが、どこにも敵影は無い。

ただ、御者は南東の方角を見上げて立ちつくしていた。

仲間達もそれに釣られて空を見上げる。

「あれは……神話の中だけのものではないか?」

「いや、忘れ去られただけで過去に実在していたものだ。遠い昔、世界はこの姿が当たり前だった」

空の色が変わっていた。

薄暗い曇り空の黒い影の輪郭を橙色が縁取っている。

しかしそれは最も大きな異変では無く、あくまで余波に過ぎなかった。

視界の彼方の土地から、遙か上空までを焰の様なものが螺旋を描いて貫いている。

始点が見えない程に遠いにも係わらずはつきり見える規模のそれが、どこまでも細くなっていくのが見て取れるほど上まで螺旋は続いていた。

雲より上へ、どこまでも伸びていくその螺旋は目を凝らせば文字通り空の「果て」まで続いている。

「空の上に……大地?」

ルオンが自身の目を疑って擦る。

しかし、幻覚ではなかった。

クロウも彼の意見に同意する。

「私も、そう見える。あれがイクスフェントなの?でも何で?今まであんな所に見えなかったのに」

シンの一族であるリアトリスがその疑問に答えた。

「二つの世界は焰螺旋で繋がっていた、言い換えれば焰螺旋が無い限

り二つの世界は繋がってないの。だから今までアエスラングの大地の上にイクスフェントは本当に存在しなかったんだよ……そうさつきまではね」

「急ごう、あれが現れたっていう事は——」

ラークの言葉に馬車の中へ戻った一行は何とか御者に「これから通る街道には何の変化もない事」を思い出させて落ち着かせ、現実を引き戻した。

《ストレア洞窟前》

洞窟が見える前から一行には既に不穏な気配が伝わってきていた。

近付くにつれはつきりしてくる、土を蹴る音と地に刺さる武器の音にエツジ達は足を早める。

そうして到着した時、目の前に広がっていたのは戦闘の跡というより一方的な攻撃の跡だった。

集団同士の戦闘では無かった一人によつて倒されたかのように一か所に集中して賞金稼ぎ達が倒れていた。

彼らの指揮をとり、最後まで戦っていたらしいグローリーがエツジ達へ手を伸ばして叫ぶ。

「逃げろー」

辛うじてその言葉を絞り出したらしい彼は、そのまま糸が切れた様に飛び散った仲間達の血の上に倒れこんだ。

「ー」

グローリーが倒れるのを見て、クロウの目の色が変わる。

その一連の様子を宙から男が見下ろしていた。

以前出会った時には無かった鷹を思わせる形の黒い翼を持つその男はもはや人というより神の使いか悪魔の様なシルエットをしており、落ち着いた表情でエツジ達を見下ろすその男は——

「ジード!!」

ラーヴァンを実体化させたクロウは巨鳥に飛び乗ると同時にデープミストを周囲全てに展開し、光を通さない霧が『ジード』に逃げる間も与えず視界を奪う。

「アンタイダリー……っ!?」

「無駄だ」

黒い霧が消える。

『ジード』の右腕がクロウの首を締め上げていた。

ラーヴァンが放った攻撃の直撃を受けダメージを受けたらしき彼の輪郭は、瞬く間に闇のディープスを吸い込んで再生する。

乗り手を失ったラーヴァンは空気に溶ける様にして消えた。

「いくら闇のディープスの霧で視界を奪った所で、俺と君の能力は同じだ」

彼女は返事する事も出来ず目に生理的な涙を浮かべ、足をバタつかせてもがく。

「クロウを離せ!」

エッジが深海の剣を抜き、宙に向けて蒼い斬撃を放った。

『ジード』はそれを難なく躲す。

「安心しろ、俺の力を理解していなかったその賞金稼ぎ達を殺したりはしていない」

そう言つて彼はクロウから手を離す。

「——あつ、ごほっ!っう」

地に落とされ顔を伏せたまま激しく咳き込みながら必死に呼吸するクロウに、エッジとアキが駆け寄る。

『ジード』の明らかに人間のものではない姿を観察したラークは悔しそうに顔を歪ませた。

「そうか君はやはりもう生物ですらなく、宝珠の欠片と同化しているんだね。それで生体感知術式を突破したのか」

「俺は焰螺旋の真下のファタルシス諸島に行く、戦うつもりならそこに来い。逃げるなら俺からお前達には手を出さない」

『ジード』は翼を大きく広げ飛び去ろうとした。

その彼をアキが呼び止める。

「待って下さい『父上』」

『ジード』の動きが止まる。

「その反応、それにあなたが現れたタイミングと、姉さんとの会話、

ジエイン・リュウゲンの後を引き継ぐ様なその行動……やはりあなたが彼を操っていたんですね」

「……」

彼は答えず、アキの言葉の続きを待った。

「戦争を起こそうとしたのはまだ分かりませんが、最終的に自国の利益を考えての事ならそれも考え方の一つだと。でも、あなたはシントリアの人々を殺した。私にはそれにどんな意味が分かりません。かといってあなたが無差別な殺戮をしているとも思えない、それにしてはあまりに回りくど過ぎる」

アキの言葉からは大勢の人を殺した彼に対する嫌悪が滲んでいたが、彼女はそれをなるべく表に出さない様にしようと懸命に押し殺していた。

「君の見立てはおおよそ正しい、俺は大勢の人間を殺そうとしている。が、確かにただ殺すのなら今すぐにでも俺が三国の主要な都市を破壊すれば済む」

『ジード』は静かに彼女の言葉を肯定した。

「だが、そんな事をすれば恨みの連鎖を生む。人々は俺を憎むだけだろう。個人は自然と同等の力を持つても『個』として認識される限り、人の世のあり方を規定するルールにはなれない。人々はそれを圧政としか見なさず受け入れないからだ」

だから、と彼は南西の焰の柱を指差す。

「人間の数を一度減らすのに自然で効率的な方法を選んだ。戦争と、神話の時代の再現を。これで二つの世界は本来の第三属性^{ディープ}元素の流れを取り戻す」

アキは前に踏み出して叫んだ。

「答えになっていません、あなたは何の為にそんな事をするのかを口にしていない！」

「今より平和な世界の為だ、人はあまりに自分達の周囲に目を向けないまま数を増やし過ぎた。自分達の都合で世界中を歩き回っている間、ただ身を守る為に戦う生き物達を殺す事に君達だって目を向けなかっただろう」

そう一方的に言つて、『ジード』は今度こそ飛び立つ。

エッジ達の上で彼の広げた黒い鷹の羽が強い風を起こし、砂を巻き上げた。

「失う痛みを経験していない人間達には他者を思いやる事などできないんだ。親や社会に見捨てられる子供があんなに居る世界がより良い世界な筈が無い。君もそう思うだろう？ク로우・グレイス」

まだ声を出せないク로우が赤い目で上を睨んだ時には、もう『ジード』の姿はなかった。

リアトリスは既に負傷した漆黒の翼と仲間達の治療を始めており、リヨウカとクリフもそれを手伝う為すぐに動き始めた。

三人は彼らの傷の度合いを確かめたり、動けないものに肩を貸したりして町への移動を開始する。

一時的とはいえ親子の様な関係にあつた相手の行動にアキは表情を暗くしてはいたが、ク로우の事を優先し彼女に肩を貸す。

クロウはそれを断つて多少ふらつきながらも自分で立ち上がる。

ただ一人、考え込んでいたエッジが他の仲間を手伝いに行こうとするラークを呼び止めた。

「ラーク、三つの宝珠の力が開放されてこれから具体的にはどうなるんだ」

「元々アエスラングは光と水と火の世界、イクスフェントは闇と風と地の世界だ。属性を制御する宝珠が六つ揃っていない状態でそんな事をすれば世界のバランスが急速に二極化して生物が棲めない環境になる……筈だけど、彼はそこまでするつもりは無いみたいだね。多分モンスターを始めとした生態系が更に変化して、気候にも異常がはつきり出始める。それからこの賞金稼ぎ達が以前そうだった様に精神に異常を来たす人達も出てくる」

ラークはそう説明した。

（それが、そんな事が『平和の為』？）

エッジは力み過ぎて一度鞘にしまうのに失敗しながらアエス・デイ・エウルバを納める。

それ以上握っていれば、エッジは怒りで剣に吞まれてしまいそう

だった。

彼の反応を見て、ラークはぼつりと漏らす。

「君はジードに似てるよ、彼も君みたいに目の前で困っている人間を見捨てておけない性格だった……きつと昔の彼だったら今の自分の言葉に同じ様に憤つただろうね」

エツジは困惑し、それから怒った。

「じゃあ何でそんな答えになるんだよ！人を助けたいのに……その手段が人を減らす事だなんて」

「さあね、彼はシンとしての自分の力の使い道を常に問い続けて、里を無断で離れていたから。その間に何があつたのかは知らない、でも彼はそこで一つの答えに行きついたみたいだ。『宝珠の力はただ隔離するべきものじゃなく、人の世界の為に使つた方が良いものだ』って。或いは……もしかしたら彼の心は僕らに分からないだけで何も変わっていないのかもしれない」

ただ、とラークはまるで目の前に居るのがジードであるかの様に、エツジを見つめて言った。

「エツジ、誰かを助けたいという気持ちは尊いものだと思う。でも人間は同じ思いを抱き続けているつもりでも、いつの間にか在り方そのものは初めと真逆になってしまう事がある。君が大切にするものは人を助けたい気持ちなのか、人を助けるという結果なのか。それを定めていないなら君もいつかジードと同じ道を辿るかもしれない、それだけは忘れないで欲しい」

そう言つて自分に背を向けるラークの後姿を見ながら、エツジは安易にそんな事は無いと断じる事が出来なくなっていた。

(もしかしてラークは、前から俺にジードの影を重ねてたのか?)

言葉だけではエツジはジードが自分に似ている等到底信じられなかった。

けれど、一時期を彼と共に同じ里で過ごしたラークの言葉からは本気で言っている事が伝わってきて、それを感じとつたエツジは嫌でも自分がジードの様になる未来を想像してしまった。

(そんな事にはならない、絶対に)

エッジは表情に考えている事が出来ない様にきつく拳を握りしめ、いつも通りの調子でクロウとその側に居るアキに話しかける。

「大丈夫か、クロウ」

「平気、まだ少し、呼吸は落ち着かないけど。この位なんとも無い」
下を向いたままのクロウの顔をアキが心配そうに覗き込む。

「しばらく休んだ方が良いです、グローリーさん達の治療が終わったら念の為にリアさんに診てもらいましょう」

「……また手も足も出なかった」

喉の痛みよりむしろ、そちらの方がクロウにとっては深刻な様だった。

それを励ます様にエッジが笑う。

「なら次勝とう」

「そうですね皆さんと一緒に戦えば、きっと勝てます」

アキも彼の言葉に乗ってきたのを見て、クロウがむっ、と眉をしかめる。

「ちよつとエッジ。あんたがあまりに能天気だからアキにも伝染し始めたじゃない」

「ええつと、それって悪い事ですか？」

どう反応して良いか分からない様子でアキが困った様に笑みを浮かべる。

「当たり前でしょう——エッジ、あんたのせいでアキまでガンガン死に行くようになったら、どうする気よ」

「俺……そんなに死に行ってるか？」

「うん」

クロウが大真面目な顔で即座に首を縦に振ったのを見てアキが思わず吹き出し、本気で怒っていた訳ではないらしいクロウも笑顔を見せ、エッジも二人につられて笑った。

そして、心の中で思う。

（誰かを傷付けて良いはずなんか無い、傷付けちゃいけないものはここに
あるんだから）

第八十一話 決着の再戦

「大分使いこなせるようになってきたね、これなら一応実戦でも使えるんじゃないかな」

ラークが構えていた剣を納めて、満足そうに言う。

漆黒の翼を初めとした賞金稼ぎの面々の無事を確認した一行はマーミンの街で治療の手配や受け入れてくれる施設を見付けて担送し、治療術の使えるリアトリスとクロウ達は街の治療術士と共に治療を手伝っていた。幸いにして『ジード』が口にした様に彼らの怪我は軽いものが多く、決戦が近いと感じていたクリフとラークは手が空いた時間に二人で郊外の森に足を運び以前の修行を続行していた。

「ああ、付き合わせて悪かったな」

「僕にも相手は必要だからね、そのついでで戦力増強が図れるなら構わないよ」

しかしようやくやく奥義を会得したにも拘らずクリフの表情は浮かない、ラークもそれに気付いていた。

クリフは徐おもむろに伏せていた視線を上げ、拳を目の前の相手の顔に突きつける。

「ここまで付き合ってくれた事には感謝してる……ただ、一つだけ決着つけておきてえ事がある」

ラークも無言で、再び剣を抜いた。

二人の間に張りつめた空気が流れる。

「俺の仲間を殺したお前を、俺はどうしても許せない」

「元々僕と二人きりで修業を始めたのもその為だよ」

クリフは溜息を吐く。

「気付いてやがったのかよ」

「それはまあ、あれだけ僕に対して常に殺気剥き出しだと」

二人は話しながら半歩ずつ後ろに下がってそれぞれの構えを取る。

「で、戦う事は良いのかよ。加減無しの本気だぞ」

「この戦いを避けても君は力を出し切れまいだろうか？そんな迷いを抱えたままの戦力なら要らない」

そう軽く断じながらも、ラークは一つだけ気になった様でクリフに尋ねる。

単純な興味からの質問の様だった。

「一応言っておくとね僕の側は今の君に敵意は無い、だから君は今必要が無い戦いをしようとしている事になる。どうしてそんな事に命を賭けるんだい？」

「そうだな、価値……で言うならそんな価値は無いのかもな。でもな、そう言う事じゃねえんだ。多分俺に何も返るものが無くて俺は自分が助けたいと思った奴を助けるし、戦おうと思った相手と戦う」
「感情的だね、でも思い返してみれば前回からずっと君はそうだったか。あの時は迎撃の為に向かって来たんだと思ってたけど」

青い気を纏って疑似詠唱を開始しながらクリフはステップを踏んで右腕の力を軽く抜き、ラークは低い姿勢でダブルブレードを後ろへ引く。

「じゃあ、いくぞ」

「ああ」

その掛け声と共に二人は同時に動いた。

クリフが突進で間合いを詰め、ラークがその動きを真空破斬で牽制する。

飛んで来た斬撃を身を低くする事で躲したクリフは上半身の捻りを利用しての右アッパーから左のストレートを連続で放ち、先の牽制で相手の動きを制限し動きを読んでいたラークは手首を返す動きでくるりと剣の向きを変え立て続けにその拳を払う。

一合目、二合目で防御に回ったラークは半歩下がリクリフの追撃の間合いを外しながらすくい上げる様に斬り上げを放って反撃に転じ、クリフは止むを得ず攻撃を中断し半身を引く事でその斬撃を避ける。

その勢いそのまま自然な動きで後ろに下がったラークは前回の戦い同様、飛ぶ斬撃で一方的に攻撃を行おうとする。

「真空——!？」

「瞬」

ラークが技の構えに移行した瞬間、クリフが疑似詠唱を完了させ全

身に纏っていた気を足下に集めそこから生まれた爆発的な反発で一
気に間合いを詰める。

瞬く間に自身の顎を打ち抜かんと迫ってきた拳を、ラークは咄嗟に
振り上げた腕で受け止めた。

「へえ……奥義以外も前回と同じじゃないか」

「ああ、確かにお前と俺の実力差じゃ間合いが離れば勝負にならね
えよ。けどお前だったただ斬り付けるのと同じ速度で斬撃飛ばせる
訳じゃねえ。間合いを離してくるタイミングさえこつちが見誤らな
ければお前もその有利を十全に活かせない」

「なるほど——っ、なら僕も戦い方を変えようか」

ぎりぎりお互いの体勢を崩そうと押し合っていた均衡をラークが
後ろに跳ぶ事で崩す。

クリフは慌てて間合いを詰めようとするがラークはそのまま更に
跳んで下がっていき、一度深練体技を使ってしまったクリフは追いつ
く事が出来なかった。

「今度は目で追えるかな？」

ラークは十分に離れた間合いから左足を前に、右足を大きく後ろに
引いて上体を前に倒し突進の姿勢を取る。

クリフの背筋に寒気が走り、彼は反射的に両腕を交差させて防御姿
勢をとる。

「崩龍残光剣」
ほうりゆうざんこうけん

ラークが飛び出したのを確認した時にはクリフの防御は弾かれて
いた。

5 m 近かった間合いが瞬く間にゼロになる。

助走をつけたラークのトップスピードは彼の姿を視認することす
らクリフに許さなかった。

まだ一撃目で崩れた体勢を立て直すことも出来ない内にクリフの
背後で地を蹴る音がする。

彼はその音だけを頼りに右腕の防具で、ラークの二撃目を防いだ。

その表面の革が大きく抉られ内部に仕込まれていた金属板と、右腕
が悲鳴を上げる。

よるめいたクリフの視界の右端に、地を蹴る音と共に方向転換する
ラークの姿が一瞬映った。

(最高速での連続攻撃……全部、直線的な軌道なのに全く追い付けねえ！)

三度目は防げない。

それを確信したクリフは、崩れた体勢のまま再び疑似詠唱を完了させる。

『発』！

青い気が全方位に爆発攻撃として放たれる。

しかしラークの実進にタイミングを合わせ、カウンターとして発動されたそれは空を切る。

「前も言ったよね、その技は強力だけでもっと引き付けてから使わなきゃ意味がないって」

声と共に、巻き上げられた粉塵が収まる。

ラークは『発』の効果範囲外で足を止め、今まさに真空破斬を放つ寸前だった。

クリフは諦めたように笑いながら舌打ちする。

「その反射と減速の早さ、本当頭に来るくらい完璧な対応してきやがって……こんなに早く手詰まりにされるとはな」

斬撃がラークのブレードを離れ、クリフの頭部へと迫る。

回避は間に合わない。

防御しても二撃目、三撃目が飛んでくるのは目に見えていた。

クリフは深呼吸してその攻撃を受け入れた。

「奥義——練毅身、」

彼の身を包んでいた青い気の流れが加速する。内から外へ、彼の生命力を湯水の如く消費する様に。

突風の中にあるかの様なその急な変化は、本来クリフが技を使う一瞬だけ見られるものだった。

その青い急流の中に身を置くクリフの額に、ラークの放った斬撃が到達する。

『残影殻』

岩を斬り付けた様な鈍い音が響き、ラークの攻撃が炸裂した。直撃を受けたクリフの影がゆっくりと倒れこむ。

その『影』を抜け殻の様にその場に残して、本物のクリフが目にも止まらぬ速さでラークへと迫る。

(使ってきたか)

ラークはクリフが奥義発動状態に入ったのを視認した時点で、再び最高速で飛び出していた。

ただし、今度は攻撃の為ではなく回避の為に。

先程までほとんど反応すら出来ていなかったそのラークのスピードにクリフは瞬く間に追いつき、『発』の爆発が直前にラークが蹴った地面を抉る。

今まで疑似詠唱による溜めを必要としていた技全てを瞬時に発動出来る状態になったクリフの力は、単純な総合力ではラークを圧倒していた。

自身を上回る速度で追ってくるクリフの突進を、ラークはギリギリで方向転換してかわし続ける。

反応速度という点においては「気」の力という外的なブーストに依らず、生来の並外れた肉体の速度と反射で動いているラークの方に分があった。

一方のクリフも先程までほとんど見えていなかったラークの動きを完全に追い切れている訳ではなく、幾度も相手の姿を見失いかけながら常時発動状態にした『瞬』の速度差で何とか追い継ぎ。

「真空破斬！」

「くっ、『残影殻』！」

クリフが一瞬相手の姿を見失った切り返しの瞬間を狙ってラークが斬撃を飛ばす。

音で気付いたクリフは間一髪の所でそれを先程の技で防いで、今度はその攻撃からラークの位置を割り出したクリフが反撃に転じた。

互いに気を抜けば相手の動きに付いていけなくなり、僅かにでも動きが遅れば相手の攻撃が即座に自分を仕留める極限状態の高速戦闘。

傍から見れば緑の風と、稲妻の様な青い軌跡にしか見えない二人は何度も木々の間を行き交い火花を散らす。

どちらも決定打を欠く状態ではあったが押しているのはクリフだった。

(完全に向こうのペースか、流石に「奥義」と言うだけの事はある)
終始ラークが方向転換でかわし、それをクリフが後から追う形が続く。

(——でも、その速度で動くのに精一杯で攻め方が単調になってるよ)
ラークがわざと足を止め、その場で身の丈を上回るダブルブレードを両手に持ちかえて周囲をなぎ払う様に回転させる。

全方位へのほとんど同時の攻撃。

速度で上回るクリフがどちらから来るかを完全には読み切れずとも、常にタイミングだけは同じだった点を突いてラークはカウンターを仕掛ける。

「!?」

そこに真っ直ぐ飛びこみかけたクリフは右の拳で青い気を地面に叩きつけて無理矢理ブレーキをかけ、辛うじて踏みとどまる。

しかし、避けられた筈のラークの技は終わっていないかった。

「僕の技はおよそ三種類、突進、回転、遠距離攻撃に大別できる。そう、この技は回転系だ。でもだからって、遠距離攻撃に派生しないとは限らない！」

回転の軸足としていた右足に深く体重を乗せる様にラークは体勢を低くし、左足で地を蹴り落ちかけた回転速度を上げた。

同時に両手持ちしていた剣を片手で持ち直し、乱れていた剣の軌道を水平に変え回転の軌道に揃える事で剣速を更に高める。

「冥爪空裂斬」
めいそうくうれつざん

「ぐあつー！」

『殻』による防御を発動させクリフが交差させた腕から血が飛ぶ。

風が吹き荒ぶ様に、ラークから周囲へと繰り出されるいくつもの斬撃が森の木々を揺らした。

不意を突かれ反応が間に合わなかった事をその血が証明していた。

(いくら奥義で全ての技を瞬時に発動出来てもそれを行うのはあくまで君自身、君がやろうと思っていないことは出来ない。それに……) クリフは『残影殻』による身代わりを使い防御と回避を同時に行い何度も接近しようとするが、どの方向から近付いてもラークの斬撃に阻まれ、その度その場に残像を残して再接近を試みる。

五度目の『残影殻』の使用時、ラークの技の終わり際で、今まできちんと動いていたクリフがバランスを崩しかけた。

激しく彼の周囲で渦を巻いていた空気が、風に散らされた様に霧散する。

(時間切れだね、君の体力はもう奥義を制御できない)

共に修行を重ねたラークは当人と同様にクリフの奥義の性質と、持続時間を十分に理解していた。

決着を確信し、ラークは相手の動きを止めようと剣を構えた。

「まだ、だ……」

クリフの足下で風が起こり、砂煙が上がる。

体力の低下で終わりかけた奥義を、彼は無理矢理もう一度発動させてラークに突進しようとしていた。

「やめろーそれ以上は——」

ラークは思わず制止しかけた。

練毅身には時間制限がある。

より厳密に表現するなら、安全に使用できる限りが。

急激な体力消耗と、使用者の認識を超えた速度は本人が気付かない程早く限界点を超えてしまう。

高速移動中にほんの僅かにでも疲労から足がもつれば、その速度はそのまま頭部を地面に叩き付け使用者の命を奪う。

その危険性があるからこそ、ラークは最初にその使用時間を順守させる所から修行を始めた。

にも拘らず、クリフは守り続けてきたその限界を自ら破ろうとしている。

(本当に死ぬ気なのか？ 僕を殺すまで、止まらないつもりなのか……)

ラークは短い思量の末、覚悟を決めて剣の狙いを定めた。

「良いだろう、君が恨みに囚われて身を滅ぼすというのなら、この先の戦いに君は必要ない——ここで果てる、クリフ・セイシャル！」

不安定な状態になりつつあるクリフの『殻』を破る為、ラークは正面から相対しエッジに教えた真空蒼破塵と同様に真空の刃を瞬く間に一度、二度、三度と重ねて放つ。

それとほとんど同じタイミングで、クリフも残った力を加速と攻撃だけに集中して最低限の防御で飛び出す。

「——刃装空破斬！」

「——瞬発豪斧脚！」

空に放った真空の刃を追う様にラークは踏み込んで加速し、直前の踏み込みで更に全身を捻って回転を加え、飛ぶ斬撃と自身の斬撃を重ね合わせる。

遠距離攻撃、突進、回転、彼の攻撃手段全てを合わせた一撃。

普段ラークが放つ真空破斬が見えない獣の爪跡なら、寸分の狂いもなく重ねられたそれらは研ぎ澄まされた一本の刃そのものだった。

その斬撃を上回る爆発的な速度で、クリフもまた正面から飛び蹴りを放つ。

ラークの様に洗練され磨きあげられたものではない、ただ『瞬』の速度に『豪』の破碎能力と『発』の破壊力を上乘せした一撃。

疲弊した状態のクリフ自身、既に人の運動速度を超えたその蹴りが正確にどこに向けて放たれるのか分かってはいなかった。

斬撃と蹴撃の交差は一瞬で、二人は相手の姿もきちんと視認できない。

ただ二人は経験と感覚のみで互いの位置を探り当て、自身の動きだけに全力を注いで必殺の一撃を届かせた。

ラークの剣は揺らいだクリフの『殻』の防御を貫いて彼の喉元へ、クリフの右脚は上段からラークの胸部へと斧の様に振り下ろされる。

どちらの狙いも正確で、どちらも必殺の威力を持っていた。

或いは再び同じ事をすれば勝敗は逆転していたかもしれない。

ほんの僅かな軌道の交差が雌雄を分けた。

「がっ——っはあ」

キイイン、という耳に響く金属音と共にクリフの右脚がまとった『豪』の武器破砕が剣を根元からへし折り、ラークの身体は遙か後方へと吹き飛ばされた。

骨の折れる音がし、空を仰ぎ見ながら木々の枝を折ってラークは飛ばされ、二度程地面を背中で跳ねてようやく止まった。

(そういうえば前にも……こんな事があったつけ)

ぼんやりと、ラークは初めてクリフと会った時の事を思い出す。

あの時と違ったのはもうそれ以上動けない事。

今の一撃は、身の一族でなければ致命傷になりうるものだった。

呼吸すらままならない自身の身体を顧みて、ラークは自分の敗北を悟る。

「おめでどう……君の敵討は成功みたいだね」

ぼんやりと呟いたラークの言葉をかき消す様に、クリフの笑い声が響く。

地面に膝をつきながら笑うその声はとても朗らかで、荷が下りた様に軽いものだった。

「どうして笑う？まだ僕にトドメを刺してないよ。そういうのは、殺してからするものじゃないのかい」

不思議に思って尋ねるラークに、クリフは面白がる様に答えた。

「はは、いや、こつちだつて肩斬られてあと少しで死ぬとこだったからよ、お互いよく生きてたなと思っ」

最後の言葉に嬉しそうな響きがあるのを感じとって、ラークはこれ以上クリフに戦うつもりが無い事に気付く。

ひとしきり笑って、クリフは穏やかな声で言った。

「俺は馬鹿だから、こうやって戦わないと気持ちに整理が付けられなかった。けどお互い死ぬ気で戦って無事に生き伸びて、俺が勝ったから……もうそれだけで十分だ」

ラークは呆れた顔をして、それからため息を漏らす様にして笑った。

「……やれやれ、本当に……敵わないな」

「武器を、壊した？」

日が傾きかけた所でようやくボロボロになって仲間達の所へ戻った二人を出迎えたのは、青筋を立てたりヨウカだった。

宿の入り口の床に正座させられ、二人は説教を受ける。

「貴方達、私達が怪我人の手当てや受け入れ先の確保で忙しくしている間に、何してたのかしら？」

口調こそまだ穏やかだったが、その端々と時折痙攣するように震える拳が明確に彼女の怒りを物語っていた。

「そろそろ決戦が近いって分かって無いの？訓練で、それもよりによって市場にまず出回って無い様な面倒臭い武器の方壊す様な本気の戦闘するなんて何考えてるの？貴方達」

徐々に口調が早くなる彼女の怒りに焦って、クリフが反論する。

「し、仕方ねえだろ！こっちも本気で反撃しないと死ぬとこだったんだか——あ」

その言葉でリョウカの目に殺意がこもったのを見て、クリフは口を滑らせた事を悟る。

顔を真っ赤にしたリョウカが宿の真ん中で叫んだ。

「死にかけて……？信じられない、何で男ってこうな訳!?その武器の修理のお金と手配は誰がすると思ってるのよ！ちよつとそこに直りなさい！うちの国滅びかけてて今お金無いのよ!!」

止まらないリョウカを前にして二人は顔を見合わせ、それからどちらからともなくつい笑いがこぼれる。

この日、出会って初めてクリフとラークは笑い合った。

第八十二話 セルフィーの答え

「ねえ、フレット……その、まだ右腕痛む？」

遠慮がちに顔を覗き込んできた赤毛の少女に対して、フレットは面倒臭そうに顔を背ける。

『黒翼』のクロウと『孤氷』のルオンが抜け五人となったクローバズ、そして四十数人の子供達。

スプラウツの総勢五十名程の集団は、拠点にしていた収容所じみた建物の外で待機させられていた。

幹部であるクローバズはそこから逃げ出す者がいないか監視する役目を与えられていたが『流連』のレパートはクロウとの戦いから敗走して以降すっかり委縮しており、実際にきちんと警戒しているのは『巖岩』のバルロと輪の外に一人で居る『純白』のネイディールの二人だけだった。

尤も戦いの時以外ほとんど外に出る事などほとんど無かった子供達は唐突に山奥に放り出されて大半が戸惑いの表情を浮かべており、クローバズが揃っている状況で逃げ出そうとする者など居ない。

その為、結果としてセルフィーとフレットにはバルロの目を盗んで会話するだけの余裕があった。

きちんと彼女の顔を見ようとしないうフレットの左手を、セルフィーが掴む。

「フレット」

「うるせえな、あと少しで治るとこなんだから放つとけよ」

そう言っただけで乱暴にセルフィーの腕を振り払いながらも彼の右腕にはまだ火山で彼女を庇った時の傷が残る。

純粹な身シの一族であるラーク程の治癒能力を持たないフレットの傷は完治するのに相応の時間を要していた。

「でも、まだ反応こんな鈍いじゃない。意地張らないで今の内にちゃんと治療しておかないとこの先の戦いで——」

「うるせえな！」

怒りに任せてフレットは傷の残る右腕で自分より背の高いセル

ファイアの襟元を下から掴む。

「心配しろなんて頼んでねえ、今までみたいにしろよ」

「でも、その傷……私のせいで」

以前の様に反発せず尚も自分の身を案じてくる彼女に対して、フレットは困惑した様子で手を離す。

「お前に感謝される為に助けた訳じゃねえ、いい加減にしろ」

それきりフレットはセルフイーに背を向け、セルフイーはどうして良いのか分からない様子でその場に俯いた。

程無くして全員を上から押さえつける様に風が吹きつけ、彼らの頭上に影が落ちた。

スプラウツの子供達が見上げる中で黒い鷹の様な翼を持った青年が舞い降り、バルロは無言で膝を着いて頭を垂れた。

その男、『ジード』は自分に額ぬかづく老人に頭を上げさせると言った。「皆、今まで本当に御苦労だった。特に今回の水の宝珠フラツディルージュの発見のお陰で俺はようやく目的に届く事が出来た」

そこで『ジード』はバルロだけでなく全ての子供達の顔を見回すと、全員に届く声で宣言した。

「スプラウツはその役目を終えた。今この瞬間を以てスプラウツを解散する、君達は自由だ」

誰のものか判別の付かない驚きの声が、あちこちから上がる。

ずっと自由を奪われてきた子供達にとってそれは受け入れられない程に唐突で、誰もそれ以上の反応を示す事が出来なかった。

そんな彼らの心情を察する様に『ジード』は優しく微笑んで、続ける。

「どこに行っても良い、思う様に生きて良い。ただ出来る事なら三つの宝珠から離れた場所を目指すと良い。そうすれば、この先世界が変革しても精神への影響は最低限に抑えられる」

それだけ告げると、現れた時と同じ様に黒い翼を広げて『ジード』はゆっくりと舞い上がり、そのまま南の空へと消えて行った。

しばし、沈黙が流れる。

動く者も声を発する者はなく、残された子供達は与えられた選択肢

にただただ戸惑うばかりだった。

その中で、バルロが重々しく告げる。

「武器の準備をしろ、あの方に逆らう勢力を今度こそ排除する」

「は？待てよ……スプラウツは解散だって、今……」

思わず反論しかけたレパートは怒りをはらんだ老人の厳しい視線を受けて、痛みの記憶に身を竦ませる。

「黙れ。貴様らは皆リュウゲン様に拾っていたただかなければ死んでいたのだ、主命があるうと無かろうとその命は全て貴様らのものではない」

彼の口調は逆らえば無事では済まない事を物語っていた。

戦場に赴く事以上に明確な死の危険を肌で感じて、子供たちは凍りつく。

そんな張りつめた空気を、凜としたネイデールの声が破る。

「申し訳ないけど、私は降りさせて貰うわ」

「何？」

皆の注目が集まりバルロが殺気をはらんだ目を向ける中で、彼女は目を閉じ腕を組んだまま落ち着いた声で言い放つ。

「今までは連れ戻す気があったけど、今度はクロウを殺す気でしよう？それなら私は協力しない」

「貴様！」

警告も無く、いきなり味方に深術で攻撃を仕掛けるバルロ。

しかし、ネイデール目がけて降り注いだ礫岩は容易くその身をすり抜けた。

既に幻影だった事に気付いたバルロは怒りに表情を歪めるが、一度姿を隠したネイデールを見付けだす手段は彼には無かった。

声だけで彼女は最後の別れを告げる。

「これでもあなたには感謝してるのよ……ううん、もう演技する必要もないよね。今までありがとう、さようなら」

後半は「ネイデール」として作った声ではなく本来の少女らしい声でそれだけ言い残すと、それきり彼女の声は聞こえなくなった。

離反の意を示したのは『純白』のネイデールだけでは無く、続い

て『爪雷』のフレットも老人に背を向ける。

「俺は俺で好きにやらせて貰うぜ、じゃあな」

『紅蓮』の名を持つセルフイーや『流連』のレパートもどうするべきか迷った様子を見せる。

しかし、フレットやネイデールの様にバルロに対抗するだけの能力を持たない二人はそれを口に出さない。

何より実力差のある相手から一方的に暴力を受けてきた恐怖が、セルフイーとレパートの身体を金縛りの様に動けなくしていた。

「勝手な事を、どいつもこいつも……」

怒りに震えるバルロの周囲で、ディープスが光の粒子となって七色に視認できるまでになる。

高い感知能力を持つセルフイーは、いち早く彼が何をしようとしているか気付く。

「フレットー！」

「自分で生きる能力も持たない子供など、ただ言われた通りに動いて居れば良いのだ！」

明確な殺意を持って、『巖岩』のバルロは深術をフレットに向けた。

先程ネイデールに向けたものとは比較にならない鋭い攻撃。

背を向けていたフレットは舌打ちしながら、襲い来る礫岩を帯電した鉄の鉤爪で叩き落とした。

「くっー！」

二度の攻撃を弾き切ったものの明らかに以前より反応が鈍い彼は、そこで右腕の痛みから微かに体勢を崩す。

バルロがその隙を見逃す筈は無かった。

「死ね、フレット」

鋭利な刃の様な岩がまっすぐにフレット目がけて放たれ、肉に突き刺さる嫌な音を立てた。

「っ……あ」

ボタバタと致命傷を悟らせる音と共に彼の目の前で代わりに攻撃を受けた燃える様な赤髪の少女に、フレットは目を丸くする。

「セルフイー……っ？」

「ッ、エクспロード！」

彼女の右手が赤い鉱石をバルロへと投げ付ける。

それは空中で発光すると瞬く間に肥大して、上級深術の爆発へと変わる。

予想していなかった反撃に老人は既に発動させていたコレクトバーストの力を利用して、地属性の障壁で防御する。

「逃げたい奴は走れ！ここは、私が足止めする！」

彼女の行動に子供達は戸惑いながら、老人と血を流しながら彼に對峙する少女とを見比べる。

庇われたフレットは信じられない様子で尋ねた。

「何でだよ、お前……」

「これで、貸し借り無しよ……自分でも情けないけど、私はここまで追い詰められなきや怖くて怖くてあいつに逆らえなかった」

震える足を支える様に、膝に置いた拳を握りしめてセルフイーはバルロを見据える。

「何の真似だセルフイー。貴様まで『紅蓮』の名を捨てる気か！」

問われた彼女は自嘲するように微かに笑って、両手一杯に手持ちの炎熱鉱石を握る。

「識名……そうだね、何も無かったからそれに固執した……でも、違う！私は、『紅蓮』なんて名前が無かったってセルフイーなんだから！」

セルフイーは手に持った赤い鉱石を宙へと放った。

その一つ一つに意識を分散し、火のディープスをコレクトし続ける事で彼女はそれら全てを上級深術『エクспロード』へと変えていく。

「冥土めいどに行く前にあんたにも見せてあげる、地獄じごくの炎を——秘奥義ひおうぎ、インフェルノドライブ!!」

焰の珠が大きさを増しながら一斉に突撃した。

拳大のサイズから人の頭程の大きさへ成長していくそれらは、標的への到達時にピークを迎えるように温度を上げていく。

冷たい輝きを放っていた赤い石は術の発動と同時に触れられない程の温度となり、空気を焦がしながら白熱する。

バルロは舌打ちしながら、それを迎撃した。

「閉ざす龍顎、不拔の牙門——秘奥、地顎門！」

全員の足元が大きく震え、老人の左右から地面が隆起し始める。

その勢いは彼の前方に向かって強まっていき、変化に耐えかねてヒビ割れた地面を巨木の様に一対の鐵の塊が突き破った。

人の背丈の倍程もあるその断崖は両側から閉じて炎彈の群れの先端部を押し潰し、バルロに到達する前のまだ爆発に至っていないかった炎熱鉱石を粉々に打ち砕く。

セルフイーの術の第一波を防いだその鐵の塊は閉じるとそのまま鉄の門の様に老人の前に防壁を形成し、流星の如く降り注ぐ後続の炎彈と接触する。

二人の切り札の激突は「地顎門」の発動に引き続いて周囲に揺れを引き起こし、辺り一帯へ熱と焰を撒き散らす。

（く、一番威力が高い初撃を潰された……私の弱点なんてお見通しか）
一気に攻めてもバルロの守りを突破できないと悟ったセルフイーは自分の周りに浮かぶ残りの炎彈を突撃させるペースを落とし、リアトリスと戦った時同様少しでも術を長引かせ敵に防御を解除させない方向に戦術を切り替える。

戦いに圧倒され、その場に立ち止まる子供達に向けてセルフイーは言った。

「ここに残りたいなら残りなよ、自分の意思で戦いに身を置くなら好きにすれば良い……でも、もし逃げたいなら、怖いなら今この瞬間だけはあんた達を縛るものは何も無い。どうしたいかは自分で決めなさい」

最初の一人が躊躇いながら二人の戦いに背を向け、森の中へと消えて行った。

一人が動くところからはあつという間で、次々に戦いの道具として育てられた子供達はバルロの元から去っていく。

バルロの術と対峙したままセルフイーは、自分の背後のフレットに声を掛けた。

「あんたも行きなよ……どうせ自分勝手なあんたの事だから、もうやりたい事なんて決まってるんでしょ」

少年は憤った様に眉間に皺を寄せると、強く拳を握りしめてセルフィーをその場に残し走り去った。

それを気配で理解して、セルフィーはふっと血の滲む口元に笑みを浮かべる。

「普通黙って行く？ 最後なんだから、別れの言葉くらい言いなさいよ……あーあ、本当に……」

『——もっとマシな奴を好きになれば幸せだったのに』

その続きは口に出さず、セルフィーはただ目の前の相手だけを睨みつけた。

「みんな、聞いて欲しい事があるんだ」

改まったエッジの言葉に仲間達は全員彼を振り返った。

漆黒の翼をはじめとする賞金稼ぎ達の治療の目処が着き、一行は『ジード』の待つファタルシス諸島へ向かって出発しようとして貿易拠点マーミンを後にする所だった。

「どうしたの急に？」

クロウが首を傾げる。

「俺は、『ジード』のやろうとしてる事が許せない。何より深海の剣を持つてる俺があいつと戦わない訳にはいかない。けどあいつは強い、人間が勝てると思えない位に。スプラウツもきつと総力戦を仕掛けるくる死と隣り合わせの戦いになる……だから、俺や宝珠を取り戻すのが目的のラーク達はともかく、みんなは無理して戦わなくても——」

「俺は付いてくぜ、最後まで」

エッジの言葉をクリフが遮る。

リラックスした様子で頭を掻きながら彼は言う。

「俺もあいつが許せないから戦う、お前の理由がそうなんだから俺もそれで文句ねえだろ？」

クリフに続いてアキも力強く頷く。

「どちらかと言えばそれは私が聞くべき事です、これは『ジェイン』を選んだ私がしなければいけない戦い。私はエッジさんとクロウさん

を巻き込んだ責任から最後まで逃げたくない、止めます『父』を」
彼女の姉のリョウカもそれに続く。

「忘れていたかもしれないけど、私はそもそもずっとジエイン家を止める為に旅してたのよ？今更帰るつもりなんて微塵も無いわ、家も燃えたしね」

最後の一言を冗談めかして彼女は付け加える。

次々に同道の意を示す仲間達にエッジが驚く中、クロウもルオンの手を握りながら彼の問いに答える。

「私達も同じだよ、私達はずっとリユウゲンの——『ジード』の掌の上での人生しか知らなかったし、それに疑問すら持たなかった……でも今の私達には自分の意思がある、ここまで来て他の人の手だけにこの戦いを任せるつもりなんて無いよ」

ルオンは無言のままだったが、クロウの言葉を肯定する様に微妙に頷いた。

「まあ、つまり結局は今まで通りって事。エッジやリアトリス達だけに戦わせようなんてここにいる誰も思っていないんだから」

最終的に自分達を含めて全員が名乗りをあげたのを受けて、深刻な表情のエッジを励ます様にクロウがそうまとめる。

エッジもそれで少し元気が出た様子だった。

「ありがとう、みんな。余計な時間使わせて悪かった」

「いや、大事な事だろ？大きい戦いの前なら尚更な」

謝るエッジをクリフがそうフォローし、一行はラーヴアンの乗り降りが出来る場所を目指して決意も新たに歩きだした。

「がはっ、あ……っ」

大量の血と共に、セルファイは膝から崩れ落ちた。

それと一緒に自身の力が全身から零れ落ちていったのをセルファイは感じる。

火の勢いは目に見えて弱まり、バル口は岩塊の門の向こうで冷たい視線を彼女の方へと向けた。

(まだまだ、まだ時間が足りない……ここで終わらせる訳には)

セルフイーは懐から非常用の炎熱鉱石を全て取り出して、見つめる。

それは彼女の自衛の為、肌身離さず使わずに持っている様にとバル口から渡されたものだった。

継戦能力の低い彼女にとって鉱石を完全に使い切るといふのは敵前で武器を無くすのに等しく、それは彼女にとって自分の命を投げ捨てるのも同じだった。

(でも、もう……私には必要ないかな)

死を目前にしてセルフイーは不思議に思った。

同時にいつかりアトリスに言われた言葉が彼女の脳裏に浮かぶ。

(何でかな、私『紅蓮』の名前が欲しかった筈なのに、誰より強い術士になりたかった筈なのに……全然後悔する気にならない)

「手元に残ったものが『称号』だけだからって、それを守る為に自身まですり減らすなんて間違ってる」

私が欲しかったものは『紅蓮』の呼び名でも、強さでも無く、私はただ誰かに自分が生きている事を認めて欲しかったんだ。

……気付いたら本当に下らない願い。だから——それが叶えられた瞬間、私は自分の願いが叶った事にも気付かなかった。

「あなたはただ、あなたのままで生きていて良いんだよ」

ああ、本当に気に入らない。あんな奴に全部見透かされてたなんて。

でも、それでも、私の願いを叶えてくれたのはあんただだから、もし次に会えたら——)

セルフイーは最後の力を振り絞ってコレクトバーストを発動した。

「インフェルノ、ドライブ……ッ——フルバースト!!」

大気中からかき集められた全属性のディープスに後押しされ、彼女が闇雲に放り投げた赤い鉱石は七色の軌跡を残しながら突撃する。

それに伴って落ちかけていた彼女の術は力を取り戻し、次々と岩塊へと叩きつけられた。

幾重にも重なった炸裂音と共に崖が崩れる様な地響きが起こる。

鉄壁の外壁から内部へ、内部から更にその先へ。

表面で正確に爆発するよう繊細なコントロールをされていた彼女の赤い術は明確な意思を持ったかの様に乱暴に老人の防壁を溶かし、抉って突き進む。

「馬鹿な、こんな事が——！」

自身の張った側の分厚い岩の門の表面が白熱し、亀裂が入りかけているのを目の当たりにしてバルロの表情が驚愕に歪む。

セルフィーの声にならない叫びが木霊した。

「リア」

歩いている最中、背中からラクに声を掛けられてリアトリスは振り返った。

「さつき聞き損ねたけど、一応君にも聞いておこうと思って」

彼が自分にだけ話そうとしているのを察して、リアトリスは仲間達から少し距離を置く。

「この先はきつと本当に最後の戦いになる、君は相手を殺せるかい？」

リアトリスは頷く。

「子供達を殺したくない気持ちは変わらない、けどその為に戦いの手を止めたりはしない。私が手を止めたら、みんなが代わりに死ぬんだから」

「カンデラス火山で対峙したあの赤い髪の子がもし生きていたら、あの子とも戦う事になるよ？」

覚悟を問う様に急ぎ立てるラクの今度の問いには、リアトリスはすぐに答えなかった。

「そうだね……確かに私セルフィーとは戦いたくない」

自分の胸に手を置いてリアトリスは目を閉じた。

「私、あの子に何にも知らなかったんだなって思い知らされた。セルフィーはすごいよ、辛い環境で育ったのにそれを悲観せずに努力し続けて、自分の弱さを認めた上で前を向く強さを持って……心の力を持っていながら何の苦勞もせず、戦いから逃げてきた私を見て怒るのも当然だよね」

リアトリスはそう言つて苦笑いを浮かべる。

「私が戦わなきゃつて思つたのはきつとあの子のお陰——王都の火災で誰も助けられなかった事も勿論あるけど。次にあの子と対峙する時は例え殺し合いになるとしても、その結末から逃げちゃいけないと思つた」

「そう」

ラークはその答えで満足した様子で表情を和らげたが、リアトリスは最後に一言笑つて付け足した。

「でも、私ね。次に会えた時はあの子と分かり合えそうな、そんな気がするんだ」

一際大きな爆発が「地顎門」だった岩塊を吹き飛ばし、熱せられたその欠片が辺りに降り注いだ。

それは離れていた地点の逃げる子供の頭上にも及ぶ。

「——ホーリーランスー」

それを、白い槍の交差が破碎する。

頭を覆いながら無我夢中で逃げていた子供達の背後に、『純白』のネイティールだった黒髪の小さな少女が空気から溶け出る様に現れた。

「今、何が……」

「足を止めずに走りなさい、後ろを振り向く必要は無いわ」

何が起きたのか混乱しながらもスプラウツだった子供達は恐怖から逃れる為に、少女に言われるまま走り去った。

ただ一人その場に残ったハクは爆発が起こった方向を振り返る。

「それがあなたの答えなのね、セルフイー」

その音を最後に子供達を脅かすものが何も無いのを確認して、ハクは再び姿を消しその場を去った。

爆発の中心、『紅蓮』と『巖岩』の術がぶつかり合った地点は地中の土砂が掘り返され大きく抉られていた。

その凄絶な戦いを目にし、レパートはその場にしゃがみ込む。

命のやり取りの恐怖から目を背けるように、彼はただ両腕で頭を抱えて見開いた目から涙を流して震えていた。

「おのれ……すぐに戦いの準備を整えろ！これ以降わずかにでも命令に従わなかった者は全て反逆者とみなす！」

自身の最大の守りを破られた老人は左肩から腰にかけて火傷を負い、焼け落ちた衣服に身を包んだボロボロの姿でレパートをはじめとした残った子供達を強引に立たせてまとめ上げる。

その鬼気迫る様に押されて、今や十数人にまで減った子供達は慌てて動き出した。

先程までの攻防が嘘の様にスプラウツの拠点だったその場所には静寂が訪れ、その場にはセルフイーだけが残された。

力を使い切って砕け散った無数の赤い鉱石の破片と彼女から流れ出した血とが赤い華を地面に形作り、その中心に横たわる少女はもう動かない。

その表情は今まで彼女が浮かべたものの中で最も穏やかなものだった。

第八十三話 双雷激突

フレットは背後にセルフィーを残して暗い森の中を走り続けた。時折枝を折り服に引っ掛かるのも構わず彼はどこまでも止まらなかつた。

彼女に言われた様にやる事が定まっていた訳でもなく、ただただ逃げる様に彼は信じられない様な速度で駆け続ける。

（何でだよお前……プライドが全部みたいだった癖に、何でそんな簡単に諦められんだよ……）

無尽蔵に思えるほどの体力を誇る息が切れる程にフレットは走り続け、立ち止まった所で彼はようやく自分が何かを握りしめている事に気付いた。

恐る恐る、彼はその掌の上にあるものを確認する。

それはセルフィーが武器としていた赤い石だった。

何の拍子か、或いは故意にか、使われずに無事な形を保ったその石を見つめてフレットは呟く。

「……お前から突つかかってこなきゃ俺だって」

紅玉の様なその輝きからは答えは返ってこない。

もう会えないのだという事を悟って、彼はその赤い石から上へと目を移した。

冬が近づく寒空は、雲に覆われようとしていた。

「セルフィー……」

何も無いその空をいつまでも見つめ続けるその少年の表情は、何かとても大切なものを無くしてしまったかの様に空虚だった。

「クロウ、聞きたいことがあるんだ」

「何？ラーヴァンの空の便なら今日はもう閉店よー、何か最近飛ぶだけでも消耗が酷くて」

「疲れてるのは分かってるよ。そうじゃなくて……その、ネイディールって言ってたあの子の事。聞いても良いかな」

寒くなってきた中で久々の晴れた空の下、エッジ達は徒歩で《貿易

拠点 マーミン》から南《菜の町 シリアン》を過ぎて更に南下して
いた。

その道すがらエッジの発した質問にクロウは曖昧な声を出しながら何でもない風を装おうとしたが、諦める様にため息を吐いた。

「ああ——いや、そうだよ。ちやんと話す事からも逃げてるのに『私が倒す』なんて言えないか」

覚悟を決めた様子でクロウは語り出す。

「エッジや皆が見たあの全身真っ白な女の姿は偽物だよ。本当のネイデイルはアキと同じ位の歳のハクっていう子。すごく短い間だったけど私はあの子やその家族と一緒に暮らしてた」

エッジがその言葉を訝しむ。

「どうしてそんな子がスプラウツに？確か、身寄りの無い子供が集められたのがスプラウツだった筈じゃ」

クロウはそれに答えるのを躊躇った。

何度か深呼吸してようやく絞り出した言葉はひどく抑揚が無く、彼女の顔は真っ青だった。子細を思い出さずに済ませたいらしく一息に続ける。

「エッグベアの群れが襲ってきたの。それを迎撃するのに私が宝珠の力を使っちゃって、私はハクの家族やその村の人達に袋叩きにされた。その時殺されると思った私はラーヴァンの力を制御できなくて村の皆を……」

それ以上をクロウは口にしなかったが、エッジは何があったのかを大体察した。彼女がずいぶん前から宝珠の力を全て解放する事に恐怖を抱いている事に彼は気付いていた。

「その直後にフレットが私を連れ戻しに来て、その時多分ハクもスプラウツに連れていかれてたんだと思う。……あの子を歪ませたのは私なんだよ」

絞り出す様に言ったクロウの言葉に、しばし二人の間に沈黙が流れた。

エッジは真剣な表情で考え込む。

「ラーヴァンは宝珠の防衛本能みたいなものなんじゃないかな、だか

らクロウに危険が迫ると暴走するんじや」

「仮にそうだとしても、私と会わなければあんな事にならなかったのは変わらないよ」

険しい顔のままのエッジを見てクロウは自分の発言を後悔した様子で付け足す。

「あ、ごめん。心配してくれるのが嫌な訳じゃないんだけど」

「分かってるよ、ありがとう」

エッジが怒っていないのを見て、クロウはほっとした様子だった。

ただエッジはまだ引つ掛かることがあるらしく、再び考え込む。

(それで生き残ったのがその子一人……か)

と、仲間達が歩調を緩めたのを見て二人はまた一つ目的地に近付いた事に気付く。

大きな山が視界を遮り、その中心を貫く様に街道は伸びて隘路になっていった。

そのの通行を管理している小さな山門——シリアン山門が彼らの視界に入ってくる。

そこはエッジとクロウが二人だけで旅をしていた時に反対側から通行してきた場所だった。

クロウが目を細めて傍らのエッジに問いかける。

「覚えてる?ここ通った時の事」

「ああ、村を出て初めて見る外の建造物だったからよく覚えてる。あの時は……確か喧嘩してたんだっけか?」

「そうだったかな、私は勝手に付いてきたエッジの事まだ全然信用してなくて話す時はずっと警戒してた気がする」

「話す時は、というかあの頃は全然喋ってくれなかったぞ」

エッジの表現が不服だったらしく、クロウは反論する。

「えー、最低限の受け答えはしてたでしょ」

「それ相槌だけだろ?」

二人は軽く笑って、ふと他の仲間がまだ足を止めたまま山門を見つめていることに気付く。

「待った、何かおかしい」

「門番が居ない？」

悲鳴が山門の方から聞こえてきて、二人は同時に飛び出す。近付いて見て、二人は何故門番が居なかったのか理解した。

門番とここを通ろうとした人間の死体がいくつも転がり、気持ちが悪くなるような血の匂いが狭い隘路に充満している。

エツジとクロウは顔をしかめて服の袖で鼻を覆った。

と、反対側から夫婦と娘らしき小さな女の子が何かから逃げる様に走ってくる。

悲鳴は彼らが発したものらしく、その背後には唸りを上げる雷で形成された刃が迫っていた。

三人の家族は振り返り、崖に挟まれた狭い視界を覆い尽くす様なその光景に立ち尽くす。

その家族の脇を、蒼と黒の光が一閃する。

「――魔神剣・「蒼」――」

「――ブラッディランスー――」

彼らの命を奪おうとしていた雷刃は蒼い剣閃に両断され、黒い無数の槍に穴を空けられて霧散する。

親子は雷を打ち払った攻撃が飛んできた方向を見て、そこに立つ蒼い剣を構える少年と漆黒に染まった瞳の少女の姿を確認し目を丸くした。

「手配書の」

死体の仲間入りを免れた家族は再び悲鳴を上げて、二人の脇を走り抜け一目散に逃げ去る。

「クロウ……」

「子供が逃げられたなら良い、それより――これは何の真似よフレツト!!」

彼女の叫びに応えるように、気だるそうな少年が笑顔で近付いてくる。

「よお、クロウ。バルロの野郎はこの先だ、道を通り易くしといてやっただぜ」

ぎり、とクロウは歯を食い縛る。

「何の目的でこんな事を」

怒りに燃える彼女とは対照的に、フレットは気楽なお喋りでもする様に話す。

「ああ、この辺で暇潰してれば会えるんじゃないやねえかと思っただけ」

「それが……通りかかっただけの人間片端から殺して吐く台詞か！」

クロウが降り下ろした右手の軌道を起点として三本の黒い槍が形成され、真っ直ぐ打ち出される。

しかし、脱力していたフレットは身を屈め、最小限の動きで軽々とそのブラッディランスをかわしてクロウに急接近する。

「っ、クロウ！」

エッジが焦った声を出す。

（詠唱時間ゼロなのに当たらない、発動してから到達するまでの時間だけで避けられてる）

クロウは落ち着いて、接近してくる敵を見据えた。

（リア達に聞いた、私の意識が吞まれてた時の槍はもつと速かった、もつと強かった……今の私と能力が違う訳じゃない。私が怖がつて力を制限してるから弱いんだ）

再度、クロウは水平に二つの術の起点を作り出した。

黒い靄の様に空気から槍が滲み出そうとする。

（動く相手でも関係ないくらい、もつと強く、もつと速く……！）

「ブラッディランス」で形成されていた槍の代わりに、空間が歪む。

「——ディストーションランスッ！」

「！」

視界にノイズの様に走る黒い歪みが瞬時にフレットまで到達する。形成された瞬間には飛び出し、視認出来ない速度で飛ぶその黒い槍は「歪み」という形でしか認識できなかった。

ブラッディランスとは桁違いの貫通力とスピード。

フレットは先程と異なりギリギリの様子でその術が何かきちんと判別できるより前に反射的にそれを武器で防ぎ、彼はその威力に後ろへ大きく吹き飛ばされた。

帯電していた彼の武器がスパークすると共に術が弾かれ、接触到

よって速度が落ちた事で見えていた者の目にはあたかもそこで初めて黒い槍が出現した様に映る。

フレットの接近を阻止して、有利な距離を保ったクロウは冷たい声で警告する。

「まだ続けるなら今なのであんたの身体を射抜く」

「ハッ、術の切れが格段に良くなってるじゃねえか、海上都市で戦った時とは別人だな」

心底楽しそうな様子でフレットはそう口にする。

「お二人とも、大丈夫ですか？」

クロウとフレットが睨み合う間に、アキ達をはじめとした他の仲間も追いついてきた。

それに顔をしかめる所かますます嬉しそうな様子で、フレットは両手の鉤爪を構える。

「良いね、それでこそ待ってた甲斐もあるってもんだ。全員束になって掛かってこいよ！」

唐突に高まった彼の殺気に仲間達も身構える。

その張りつめた空気の中で、戦闘に立つクロウの前にエッジが進み出て仲間達を制する。

「一つだけ、聞きたい事がある」

「あ？」

水を差されて不愉快そうにフレットはエッジを睨む。

一昔年が近く同じ属性を得意としてはいても彼はエッジの事をほとんど認めてはいない様だった。

「スプラウツにネイティールっていう子が居るよな、光の深術で虚像を作る」

「それがなんだよ」

フレットはイラついた様子で急かすが、エッジは落ち着いていた。

「その子の村にお前が急に現れたのは本当か？」

「ああ」

フレットは馬鹿にした様に笑ったが、エッジは続けて尋ねる。

「いくら光属性の資質を持っているとはいえ、人の目に誤認させる程

の像を作るなんて並大抵の資質じゃない……そんな才能を持った子が村人全員が命を落とす様な状況でたまたま一人だけ生き残って、たまたますぐに現れたお前に保護されたって言うのか？」

ここに来てようやく何かを悟った様子で、フレットは笑みを浮かべる。

エッジは怒りを滲ませながら最後の質問をした。

「スプラウツがその子の才能に気付いたのは、モンスターに襲われる事件があるより前だったんじゃないか？」

「エッジ……？」

クロウは困惑した様子で、傍らのエッジを見る。

フレットは声をあげて、さも可笑しそうに笑った。

その反応を見てエッジは魔神剣を放ち、フレットは横に跳んでそれを避ける。

「やっぱりお前が、モンスターをけしかけてクロウ達を襲わせたのか」「え？」

エッジの言葉にクロウが目丸くして言葉を失う。

フレットは感心した様子で尋ねた。

「ハハハハッ、まさかこんな時間に時間が経ってから気付く奴が居るなんて思わなかったぜ。何で気付いた」

「エッグベアは群れを作らないんだよ、何らかの脅威に対して対抗する時数匹が共闘する事があるだけだ……例えば人間の様な外敵が居る場合に」

再び深海の剣を振るうエッジ。

「元々脱走したクロウの後を追って監視してたお前達は、その過程でネイティールの力に目を付けたんだろ？生き残りだから保護した訳じゃなくて、最初からスプラウツに連れて行くつもりで！」

「だったら何だよ！許せない、とでも言うつもりか？エッグベアを追いつけたのは俺でも、俺らが手を出したのはそこまでだ。隣の人殺しは庇っておきながら俺らのしたことは許せないとでも言うのかよ！」

怒りに任せて単調な軌道になったエッジの深海の剣を掻い潜ってフレットが帯電する鉤爪を振るい、エッジは後退を余儀なくされる。

一度呼吸を整え、周りに転がる倒れた人々を見てエッジは何かを決意する様に言った。

「みんな、ここは俺一人に任せてくれ」

クロウとアキが即座に反対する。

「待つて、こいつはおかしい奴だけどそれでもクロローバーズの筆頭にあげられる実力は本物よ。あんたが一人で敵う様な相手じゃない」

「そうです、エッジさん。前回の戦いを忘れたんですか!?五人がかりでようやく止められた敵ですよ」

仲間達が反対するのは対照的に、フレットはあつさりそれを認める。

「俺は別に構わないぜ、ただお前が負けたら残り全員と戦うだけだ」

「分かったそれで良い」

エッジは深海の剣アエス・デイ・エウルバで魔神剣を放つ態勢に入り、フレットも同様に専雷爪スペシャライジングで遠距離攻撃を放つ態勢に入る。

「待つて、エッジ——」

「魔神剣・蒼！」

「雷旋牙ア！」

クロウの制止の声を無視して二人は一度離れた間合いから技を撃ち合う。

フレットの右手の三本の鉤爪から放たれた衝撃波は、三本の筋と成って地面に鋭利な傷跡を残して突き進む。

その中心をエッジの放った蒼い輝きが貫き、蹴散らされる様にしてフレットの雷旋牙はかき消された。

深海の剣の威力に舌打ちするとフレットは重い両手の鉤爪を広げて遠心力で回避する様に横に転がって、エッジの魔神剣から逃れる。

その時間を利用してエッジはすぐさま初級深術の詠唱を開始する。

「ライトニ——」

「させるかよー！」

エッジが気付いた瞬間には目の前にフレットの顔があった。

背筋に走った悪寒に従ってエッジは詠唱をやめて、深海の剣を横風

ぎに振るう。

フレットは冷静にバックステップで剣の間合いを外した。半ば発動しかけていたエッジの術のディープスは霧散し、紫の粒子が空中を舞う。

辛うじて稼いだ一瞬の時間を使ってエッジは重りにしかなかった通常の剣を鞘ごと投げ捨てる、自ら接近戦に切り替え連続攻撃をしかけた。

あらゆるものを切断する深海の剣を持つエッジの攻撃は、仮に防がれても相手の武器と接触した時点で即座に相手の武器を破壊する。

その圧倒的に不利な状況で、フレットは自身の武器の重さをもっともしない身軽な動きでエッジの剣戟を全てかわす。

当てようと躍起になるエッジの目の前で、フレットはにやりと笑うと宙返りしながら空中に逃れた。

不意の動きをエッジは追いきれず、フレットには武器を大きく振って技を繰り出すだけの空間が生まれる。

「雷^{らいせん}旋^{せん}牙^が」

「くっ!？」

飛来した三本の衝撃波をエッジは咄嗟に顔の前で構えた深海の剣で防御するが、それだけでは縦に伸びるその攻撃を相殺しきれなかった。

やや前に残り気味だった左脚と腰の辺りの服が裂け、そこから少量の血が滲む。

「隙あり、だぜ」

「っ、させるか!」

エッジが僅かに怯んだ間に着地したフレットは今度こそ至近距離から攻撃を仕掛けようと再び距離を詰め、エッジもそれを迎え撃つ。

帯電したフレットの左の鉤爪が振り下ろされ、エッジの深海の剣が斜めに切り上げられる。

雷が描く弧と、深海の剣が空中に残す蒼い軌道が交差した。

アエス・デイ・エウルバの分解能力は容易くフレットの武器を斬り裂き、切り離された鉤状の先端部は纏っていた雷を失い地に落ちる。

しかし、焦った表情を見せたのはエッジの方だった。

あらゆるものを触れただけで切断するというのは、言い換えれば「相手の武器を受け止める事が出来ない」という事に他ならない。

フレットは武器の先端を失った代わりに、エッジの防御をすり抜けてその間合いの中へと潜り込む。

彼は勝ち誇った表情で踏み込み、振り下ろした左を返す手でエッジの剣を握った右手を払いのけた。

欠けた武器の先端部が、深海の剣の柄を捉えてエッジの手から弾き飛ばす。

「がっ——！」

無防備になった腹部をフレットに蹴りつけられ、エッジはその場に蹲る。

その一撃だけでも並みの大人を遥かに超える力だった。

担い手を失った深海の剣はカラカラと力を失って、地面を転がる。

「なめてんのかお前……それ使い慣れた武器じゃねえだろ」

目の前で蹲ったエッジから視線を外して、フレットは詠唱を開始した。

その目は、二人の戦いを見守っていた仲間達に向けられる。

それに気付いたエッジが咳き込みながら止めようとする。

「!やめろ、まだ俺は」

「徒爾なる弱者殺ぎ落とせ——サンダーブレード!」

下から上へ通常の雷と逆の順番でディープスの雷光が伸びていき、

最後に三つに分かれて十字架の様な、或いは剣の様な形を形成して地面へ落ちる。

地面に突き刺さった雷の剣はその一点を焼き、大地との衝突の勢いで実体化した雷のディープスを周囲に撒き散らした。

爆発の一番近くにいたりヨウカから悲鳴が上がる。

エッジは怒りに燃えた瞳でフレットを睨んだ。

「お前の相手は俺の筈だ、皆に手を出すな!」

それに対して、フレットもまた見下した様な怒りの視線をエッジに落とす。

「ならお前が立てよ！戦えよ！死ぬ気で、俺と！」

怒声に駆り立てられ、エツジが立ち上がる。

自身と相対した武器を持たない少年に対してフレットは言った。

「さっきお前が自分で捨てた方の剣拾え、それが『お前』の全力だろ。武器に頼んな」

エツジは一瞬躊躇ったが、フレットは動かない。

武器を拾うまで待つつもりだった。

エツジは深海の剣では無く、通常の長剣の方を手を取った。

「……轟雷装」

疑似的なコレクトバーストの効果を局所的に使用し、エツジは握った長剣に雷を纏わせる。

それはD・RC変化の使用までの時間を短縮し斬撃に雷の威力を付加する、彼自身が編み出した技だった。

「バルロやクロウの買い被りか、それとも本当にお前にそれだけの力があるのか……見せてみるよ、お前の本気を」

フレットが両手に装備した鉤爪も一際強くスパークする。

エツジが踏み込み、フレットも踏み込む。

どちらからともなく仕掛けた二人の武器の激突の放電音は、山門全体に響き渡った。

第八十四話 其の雷の名前

剣を持ち替えた事でエッジは辛うじてフレットの攻撃を捌けるようになっていた。

円のような動きで筋力差のある敵の動きを受け流すエッジ。単純な技量だけならエッジはフレットを上回っていた。

しかし、受け流せているのは辛うじてであり反撃することも出来ないまま防戦一方の状態が続く。それほど迄に二人の動きには速度の違いがあった。

「それで防げてるつもりかよ！」

「くっ！」

押され続けるエッジは、思い切つて後ろにバックステップした。

が、離れた間合いはフレットの一步の踏み込みで即座に詰められる。

しかし、それこそエッジの読み通りであり、すぐに反応してくる事を見越して跳んだ瞬間に剣を上段に構えていたエッジは突進してきたフレットを待ち受ける形で構えた剣を振り下ろす。

「裂爪斬れつそうざん！」

獣の爪跡の様な三本の斬撃が放たれる。

「残念」

エッジの剣に手応えは無かった。

彼の放った技はただ地面を抉る。

(下がられた……!?!このタイミングでなんて反応)

急な方向転換をしながら、今度はフレットが両腕の武器を交差させるようにエッジに斬りかかる。

エッジは振り下ろした剣を何とか引き上げその攻撃を防いだ。

否、厳密にはただ位置を合わせるのが辛うじて間に合ったという方が正しかった。

二人の武器から激しいスパークが走り、エッジは一方的に後ろに吹き飛ばされる。

ここまで静かに見守っていた仲間達だったが、エッジの劣勢を見て

クリフとラークが沈黙を破った。

「まずいな、実力差がありすぎる」

「ああ、前回彼と戦った時とは比較にならない位エッジも成長してるけど、それでも力も、速さも、術の威力まで全て向こうが上だ」

クリフは顔をしかめる。

「もし勝てるとしたらそれ以外、か」

そう口にはしたものの、彼もラークもそれ以上先は続けない。

それがどれだけ可能性の低い事であるかは二人とも分かっていた。

クロウも不安から口元をきつく引き結ぶ。

彼女は戦いが始まった時こそ自身の過去にスプラウツの思惑が少なからず関与していた事にショックを受けていたが、今はエッジの事を心配する気持ちの方が大きくなっていった。

（やめて……こんな思いする位なら、どんな怪我をしたって自分で戦った方がマシだよ）

いざとなれば罵倒も覚悟で割って入るつもりで、彼女は戦いの動き一つ一つを集中して見守る。

押されるエッジは剣に溜まり続けるディープスを雷として実体化させつつ、右手に気を集めて飛び上がった。

——D・R・C変化——

「獅吼爆雷陣！」

落下の勢いを乗せた獅子型の気が剣から噴出する。

それが剣に宿っていた雷を押し広げ、周囲に紫電の陣を形成する。

「デュアル・インディグネイション！」

フレットも右手の武器を大きく振りかぶって全力で雷のディープスを集束し、力技でそれに正面から対抗する。空気が摩擦する様な音が鉤爪の間から加速度的に広がった。

二人の技が同時に放たれる。

技の規模こそエッジの方が大きかったが、フレットは一点に力を集中する事で互角に張り合う。

小規模な爆発と共に獅子の気の反発力がフレットを押し返し、一方で同時にエッジの陣もかき消える。

時間をかけて溜めた技と、即座に発動した技。その違いがありながら二人の技の威力はほぼ同じ。

衝突自体は一見互角でも、その差は大きかった。

「少しはやるじゃねえか、じゃあ二発目はどうだ!？」

フレットは余裕の笑みを浮かべながら、同じ技を続けて発動しようとする。

武器に溜まり続ける雷のデ IPPS を一時的に使い切ってしまったエッジにそれを迎撃する力は無かった。

追い詰められたエッジは剣に雷属性を集める「轟雷装」を解除し、身体全体にデ IPPS を集める上位技術コレクトバーストに切り替える。

空気中にバラバラの状態で散在していた全ての属性のデ IPPS が、エッジの身体という一点を目がけて集まる事で急激に濃度を増し、七色の光の形で可視化され吸い込まれていく。

エッジはその中から風属性の緑色の光を選び出し、自身の剣へと集束した。

空気が武器を中心につむじ風のように渦を巻く。

彼が取った兄と同じ構えを見て、ラークが微かに驚いた顔を見せる。

(それはブレイドの――)

「風の太刀……」

剣先をやや低めに構えたエッジの剣に対して、フレットがバリバリと耳障りな放電音と共に今度は左手の武器を叩きつけた。

「デュアル・インディグネーション」

「――偽・流水!」

風の回転方向と剣の動作の向きを揃えた受け流しが、最小限の力でフレットの攻撃を右へと弾き飛ばす。

しかし水属性に適性を持たないエッジが本来と異なる風属性で出したせいもあり、動作そのものはブレイドの技より素早かったもののフレットの鉤爪から出た雷撃の余波にエッジの衣服の所々が焼かれた。コレクトバーストの防御効果により、既のところで身体へのダメージ

メージは免れる。

凌いだ時間を使ってエッジはすぐさま追撃の為に詠唱を開始した。
「そんなもん、させる訳ねえだろ！」

フレットがそれを許す筈もなく半ば体当たりする様に攻撃をしかける。

「く、っ！」

エッジはほんの僅かな時間で詠唱を自分から中断しその突進を剣で受け止めた。

体勢を崩されながらも、エッジは剣から離れた左手を地面に付ける。

「設置——」

コレクトバーストの力で集束された雷のデープスがエッジの手を伝い、触れられた地面が微かに発光する。

彼は後退し続けながら詠唱を囀りにフレットに何度も追撃をさせ隙を見ながらその動きを繰り返していたが、一際強いフレットのなぎ払いがエッジの剣を払い除けエッジの額に傷を付けた。

流れ出た血が目流れ、エッジの集中を削ぐ。

それをチャンスと見たフレットが、両手の武器の重さを最大限遠心力として振るえる様に武器を構えた。

「巻き込め、雷旋輪！」

触れれば範囲内のものを瞬く間にミンチに変えるであろうその回転が、青白い雷で綺麗な正円を描く。

「——閃光動作」

しかし、その攻撃は空を切る。

直前でエッジによって放たれた閃光が一瞬だけフレットの視界を奪い、間合いを見誤らせていた。

その隙に彼は今度はラークの「無影衝」を模した動きで距離を取る。
フレットは苛立ちを覚えながら同時にその迷いの無さに冷や汗をかいた。

（こいつ、なんて判断の早さだ。自分が押し負ける事を何とも思っ
てねえ……いや初めから押し負ける事を計算して動いてるのか？）

自分の力が劣る事をはつきり自覚しながら、一步も怯まず向かってくるエッジの姿にフレットは認識を少し改めさせられる。

ラークの技を疑似的にコピーした「偽・無影衝」の動きでエッジは間合いを外したもののカウンターの斬撃は繰り出さず、間合いを維持したまま合図を出す様に左手を振った。

「ライトニング・マイン——五角陣！」ペンタゴナル

発光していた五つの地点から雷の線が一斉にエッジの手元へと走る。

詠唱もせず、コレクトバーストの力で残して来た程度のディープスの威力は初級術にも満たない。

しかし、視界の外からのその攻撃は確実にフレットの身体を貫いた。

「うあ!？」

エッジはその隙に再び詠唱を開始する。

「駆け抜ける疾風、」しつぷう

「そ、んなもの……間に合わねえって学習してねえのかよ！」

並外れた回復能力を持つフレットは歯を食いしばって痺れから立ち直り、術を放つ為に集中状態に入ったエッジへと斬り掛かる。

が、フレットはそこで違和感に気付いた。

(詠唱が早い！これは、スベルキープ詠唱維持か)

「エアブレイド！」

人の背丈と同等の風弾が一直線に飛び、フレットを直撃する。

風弾表面の鋭い風はカミソリのように彼の肌を裂いた。

フレットはその場に踏みとどまろうとするが術の威力はそれを容易く上回り、彼の足は地面に二筋の轍を残すだけの役割にとどまる。先程までの接近戦と変わって、今度はフレットのほうが為す術無く吹き飛ばされた。

エッジが決めた立て続けの連撃に、見守っていた仲間達もしばし言葉を失う。

雷属性を近接技に回す為エッジが放ったのは殺傷力の低い風属性の術だったが、それでも中級深術の直撃を受けたフレットはダメージ

に苛立ちながら言った。

「お前、これだけの力があるのに何でもっと戦いを楽しまねえ」

エッジは投げられた言葉を理解出来ず、表情を険しくする。

「俺は、自分が楽しむ為に戦ってる訳じゃない」

その返答をフレットは鼻で笑う。

「戦うのは他人の為、か？お前それを正しいとは思っていても、『楽しいとは思って無い』だろ？心の底からやりたい事ならそうじゃねえ筈だ」

フレットは両方の鉤爪に最大限の雷のデープスを集めてエッジに向かって飛び出した。

その一撃目をエッジは剣で受け止めるが、フレットの専雷爪「スペシャライジング」から放たれた雷は武器だけでは受け止めきれず、エッジの右腕を焼く。

コレクトバーストが無ければそれ以上のダメージを受けていたに違いなかった。

「ぐ、あぁっ！」

電熱で意志とは無関係に腕が跳ね、たまらずエッジは後退する。

「お前のそれはただの逃避だ！」

迫るフレットの二撃目に対して詠唱は間に合わず、「ライトニング・マイン」のストックも無いエッジは正面から剣技で迎え撃つ事を選択した。

ラークから教わった秘奥義の構えを取るエッジ。

しかし、以前と同じ構えでもそこから放たれる攻撃は違っていた。
「連なる刃は獲物を食らう——真空双刃衝！」

三つの斬撃を同じ軌道で重ねる事で必殺の威力を持たせていた「真空蒼破塵」の最初の二撃を、エッジはV字に広げる様にしてずらして撃つ。

「必殺の威力が無い秘奥義なんて、秘奥義でも何でもねえよ！」

フレットは範囲が広がった代わりに威力が下がったエッジの斬撃を、「デュアル・インディグネーション」で容易く打ち破る。

しかし、

「――『喰雷』！」

互いの大技の直後。

術を詠唱しても間に合わない、魔神剣の様な技でも届かない一瞬。エッジの左手からコレクトバーストの集束能力強化で集められた雷が閃く。

「な!？」

それに触れたフレットの身体が微かにのけ反る。

生物である以上例えそれが致命傷に至る様な威力で無くても、電撃を受けた瞬間のその反応を止めることは混血児であるフレットでも出来なかった。

ごく短い、けれど絶対的な隙。

「……そう、俺にあの必殺の剣を使いこなすだけの力は無い。だからこれは『必殺』じゃなくて『必中』の剣だ」

初撃の範囲を広げる事で敵の回避の選択肢を減らしたエッジは、コレクトバーストの雷撃と併用する事で確実に攻撃を当てられる状況を作り出す。

「威力不足でも、直撃なら話は別だろ！」

最も威力の高い三撃目の斬撃が空を切る。

それは真つ直ぐにフレットの胸を捉えて吹き飛ばす、この戦いが始まって初めて一方に本格的な傷が付いた。

しかし、フレットはそれでも尚エッジの力を否定する様に強引に反撃する

「がああああ……、このチマチマした雷の使い方しやがって――本当の雷撃ってのは、こうするんだよッ！」

血が噴き上がり、後ろへ倒れこみながらフレットは力任せに武器で地を抉り衝撃波を飛ばした。

「!」

流星にエッジもそれを捌くだけの余裕はなく、足に攻撃を受けたエッジもまた後ろにバランスを崩す。

二人は同時に、仰向けに倒れこんだ。

エッジの周囲で発生していた七色の光が揺らぎ、無理な体力消費を

続けた事でコレクトバーストが終了する。

フレットも流石に今受けた傷を即座に回復する事は出来ず、二人は荒い息のまましばらく雲一つない青空を仰いだ。

「お前……何で俺と一対一で戦おうと思った？」

フレットがふと尋ねた。

「お前はクロウを傷付けた」

エッジの回答に、フレットは気の抜けた様に笑い声を洩らす。

「は、はははははは！ 下らねえ、俺と同じ様に化け物のあいつがそんなまともな心持つてるかよ！」

エッジは表情をしかめたが、一頻り笑うとフレットは続けた。

「けど、正義だのなんだのもつと下らない理由振りかざされるよりは、ずつとマシだ……なあ、お前本当にクロウを守りたいならこういうのはどうだ？ この戦い、お前が死んで俺が勝ったら俺が代わりにお前らの仲間になってやるよ」

「え？」

思いがけない提案にエッジは驚いた声を上げる。

「お前の好きな自己犠牲だよ、お前一人が死ねばお前の仲間はより強い味方を得て安全で居られるぜ」

「……」

エッジは考える様にしばし沈黙した。

それを見てアキが警告する。

「エッジさん、もしご自分が居なくなっても良いなんて考えているならやめて下さい」

リヨウカも同意する。

「そうよ、こんな奴が約束を守るとは思えない。貴方がわざと犠牲になる事に価値なんて無いわよ」

外野からの声を聞いて、フレットはエッジに付け足した。

「嘘は言わないで、ここで言った以上約束は守る。なんなら誓ってやっても良い」

考えた末に、エッジは自身の口から答えを告げた。

「断るよ」

フレットはへえ、と面白がる様子に続きを待つ。

「俺はクロウ一人が守れば良い訳じゃないんだ。今お前がしたみたいに余計な犠牲は出したくない。アキも、リョウカも、クリフも、ラークも、リアトリスも、ルオンも誰も傷付けたくない」

その回答をフレットは嘲笑った。

「それは理想論だ」

「そうだよ、理想論だ。だからもし何かを諦めなきゃいけない時が来たら、何を守って何を捨てるかそれは自分で決める」

呼吸が落ち着いたエッジはゆつくりと立ち上がる。

「自分にとって大切な事だから、自分でやらなきゃ意味が無いんだ」

傷は完全に塞がらないまでも、出血が落ち着いて来ていたフレットもまた立ち上がり嬉しそうに笑う。

「……何だ、一番大事な事は分かかってんじやねえか」

互いの技で飛ばされた距離も含め、いつの間にか二人は大きく離れていた。

合図は無くとも二人は互いの目を見て、考えている事が同じなのを知る。

「行くぜ、これが最後の——」

「ああ、最後の——」

「コレクトバーストだ」

今度こそ本当にエッジを認めたフレットもまたここに来て初めて本気を見せた。

二人の周囲で同時に空気が渦を巻き、七色の光となる。

「駆け抜ける雷弾、」

エッジは最後の一撃を深術に賭け、フレットは近接技を選んだ。

「風を纏え、炎を纏え——」

詠唱が進むと共にエッジの正面に雷のデープスが球体を形成していった。

それは同時に風属性と火属性も混ぜ合わされており、エッジが使える三属性全てを束ねた深術でもあった。

しかし、フレットが間合いを詰める速度もまた常軌を逸しており、

早口で唱えるエッジの詠唱は間に合うか間に合わないかのギリギリだった。

「ス・パイラルライトニング！」

「しでんそうばっば四電双爆破ア！」

エッジの術が周囲の空気を巻き込み、雷弾の範囲内へと引き寄せながら放たれた。

フレットはそれに対し、両手の武器に限界まで集束させた雷のデープスを交差斬りで爆発させ迎え撃つ。

エッジの視界一杯に、右向きに回転する青白い螺旋の渦が広がった。

攻撃の威力は術として放ったエッジのものが上回っていた。

決着を賭けた最後の一撃の交差。

焰と風を纏った青白い螺旋が手元を離れ、フレットの攻撃を超えてそのまま空へと昇っていくのをエッジはとても長い時間の様に思っ
て見ていた。

フレットの姿はどこにも見えない。

それがどういう事なのかエッジは考え、術の威力で跡形もなく消えてしまったのかと思ひ当たり、そんな事が本当にあるのかと疑問を
持った辺りで——彼の身体は下から上へと浮き上がった。

揺れた視界の中でエッジは誰かの悲鳴を聞き、ほとんど条件反射の
様に様に剣を振り下ろしたがそれは弾かれカラカラと力無く上へと
飛ばされる。

口から血を吐きだすのと共に今度は足を斬られ、立っていられな
くなったエッジは糸が切れた様に崩れ落ちた。

その頭上から、フレットの高笑いが落ちてくる。

彼の速度と反射が、エッジを上回っていた。

ギリギリまで体勢を低くし、正面から撃ち合わず下から弾く様に
して技をぶつける事でフレットは術を凌いでいた。

クロウの必死の叫びがエッジの耳に届くが、彼女が何を言っている
か聞き取る事は今の彼には出来なかった。

立ち上がる力を無くしたエッジを見下ろしてフレットはひどく高

揚していた。

今にも襲いかかって来そうなクロウの声も、それを止めようとする別な者の声も、自身の足下で目だけで敵意を向けてくるエッジが吐く呪詛も全てが彼には心地よく感じられる。

ふとエッジの瞳が見上げているのが自分では無く、彼の瞳がまだ闘志を失っていないのに気付いたフレットはその視線の先を追った。

上空へと飛んで行き小さくなった螺旋の雷がループを描き、同じく上へと飛ばされた剣を捉える。

そこでようやくフレットはエッジが口にしたのが負け惜しみの呪詛では無く、詠唱の続きであった事に気付く。

エッジの術はまだ終わっていないかった。

「風よ導け……焰よ廻せ……」

不規則に漂っていた剣を風が軌道に乗せる。

小さな火が剣の柄と先端に灯って回転を与え、少しずつその速度を上げていく。

「……剣に宿りて落ちよ雷！」

最後に青白く雷を纏った剣は、落下の加速と合わせて急速にその速度を増してフレットへと一直線に落ちる。

エッジを守ろうと仲間の制止を振り払ってフレットに攻撃を仕掛けようとしていたクロウも、その剣に落ちた雷を見てとある光景を思い出し動きを止めた。

ブレイドとの戦闘でエッジが咄嗟に使っていた戦法。

彼はそれを更に上の段階へと昇華していた。

(これ、まさか――)

処刑の刃の様に触れれば即座に真つ二つにされてしまう雷の歯車を前にして、フレットは大声で笑う。

それは強者との邂逅の喜びの声で、その出会いは彼が求め続けたモノそのものだった。

「良いぜ、お前……最高だーけど」

言いながらフレットはコレクトバーストの力と、手に握りしめた石の力を右手の武器に上乘せする。

セルファイが遺した赤い鉱石。

彼がずっと相手にもしていなかった彼女はいつの間にか彼を置いて成長し、遠くへ行ってしまった。

「切り札持つてるのはお前だけじゃねえぜ、俺達クローバーズとの力の差を思い知れ！」

帯電したフレットの鉤爪が、赤く光った。

武器の温度が急激に上昇し、炎すら纏う。

ただの一度もフレットが呼ぶ事の無かった、名前と共に。

「炎装雷『紅蓮』！」

フレットが放った渾身の斬り上げが、エッジの落とした雷剣と拮抗する。

激突の瞬間エッジの武器の回転速度により金属同士の摩擦の耳障りな音を出しながら、両者の武器は激しく火花を散らした。

純粋な筋力と、落下の加速。

エッジが使える属性全てを束ねた深術と、炎と雷の二重属性技がせめぎ合う。

競り勝ったのはフレットだった。

生物に対してのみ特に高い威力を持っていた雷属性の技は、炎の力を得た事で金属に対しても高い攻撃能力を発揮する様になっていた。

エッジの剣は柄と刀身が溶断され獣の爪で引き裂かれた様な跡を残されて完全に失速する。

剣に集まっていたデープスは光と散った。

「はは、あははははははー！」

フレットは満足そうな笑い声を上げ、エッジはまだ唯一動く右手を剣の残骸へと伸ばす。

打ち碎かれたスパイラルライトニングの、そしてフレットが使用した技の残滓の雷属性のデープス。

その全てを、エッジは自身の武器へと『再集束』した。

「多段追撃、秘奥義——インディグナイト・ジャッジメント!!」

刀身だけになった剣が勢いを取り戻し、逆回転する。

一度散った光が輪になって剣へと吸い込まれていく。

フレットが武器を交差させる事でその攻撃を防いだ瞬間、光の輪は剣の中心に達し炸裂した。

クロウの「デイストーションランス」を弾いた時のダメージか、

或いは本来使用できない属性の技を利用した反動か、

専雷爪「スペシヤライジング」はその研ぎ澄まされた一撃に碎け散り、白い光に包まれた裁きの雷剣は真っ直ぐにフレットの胸を刺し貫いた。

第八十五話 真っ直ぐな想い

「が——ア、は……は」

フレットは悔しさと痛みと怒りに顔を歪め、歯を食いしばる。

胸に受けた攻撃は間違いなく致命傷であり、既に彼は言葉を発する事も出来なかった。

しかし、その痛みの中でフレットは尚も笑いを漏らす。

（ああ、そうか……俺はこいつに勝てた事に一瞬満足しちゃったのか……なのにこいつは諦めなかった、あの状況でも俺を倒すことしか考えて無かった——は、そりゃ勝てる訳無かったな）

エッジと自分との差を感じて、フレットはどこか肩の荷が下りた様に感じる。

ただ、彼にも少しだけ心残りがあった。

（もう反撃できねえのか、身体が動かねえ。もつとこいつと、戦いたかったのに——ああ、うるせえな。今良いとこなんだから邪魔すんじゃないやねえよ、セル——）

握力の抜けたフレットの手から、力を使い果たして粉々になった赤い鉱石がこぼれ落ちた。

戦いが終わって、倒れたまま動けなくなったエッジに仲間達が駆け寄る。

うつ伏せに倒れた彼の身体の前面は腰から肩にかけてぎつくりと斬られており、下手に動かせる様な状態ではなかった。

「大丈夫か、エッジ!? 待ってる、すぐに止血する」

「私は腹部の傷から治療します、それが終わったらエッジの向きを変えて正面からもう一度見ましょう」

すぐにクリフが気の力の簡単な応急処置で出血を抑え、リアトリスが治療術で一番危険な傷から治していく。

治療を受けながら、エッジは力が抜けた様に笑って報告した。

「……勝ったよ」

「こんなボロボロになってまで、一人で戦う必要なかったでしょうが

！」

クロウがエッジの頭の方から近付いて傍らに座り、涙を浮かべながら怒った。

とりあえず出血多量になる心配がなくなったエッジは、ゆつくりと辺りに倒れた人々の死体を見回す。

改めて数えるとそれは実に二十にも及び、「暇潰し」と称するにはあまりに凄惨で如何にフレットが執拗に殺し回ったかを如実に示していた。

「フレットはもう止まれなかったんだよ……きつと、自分自身が死ぬまで意味も無く戦い続けたと思う、だからその役割をクロウや他の誰かに押し付けたくなかった」

そう口にするエッジの目はどこか虚ろで、口にする言葉はまるで独り言の様だった。

クロウはその変化の理由に気付いて明確に涙を溢れさせる。

エッジはうわ言の様な口調のまま続けた。

「フレットは……俺が相手でちゃんと納得してくれたかな」

「馬鹿、こんな時まで、他人の為に笑おうとしないでよ。そんな事続けてたら、本当に笑い方が分からなくなるわよ」

曖昧に笑おうとする彼の額を抱く様にして、クロウは屈む。

「私にあんたには……人を殺してなんて欲しくなかった」

絞り出す様に言って、人を殺した直後にさえ涙を流せないエッジの代わりにする様に彼女は泣いた。

シリアン山門を抜けた一行は、街道の途中にある無人小屋で休息をとっていた。

このカースメリア大陸南方の地域は田舎である事もあり、町と町の間隔が広い為街道沿いにはいくつかこういつた宿泊出来る施設が設置されている。

中は火を起こせる様に四角く区切られた「イロリ」と呼称されるシントリア由来の炉がある他は、旅人が置いていったらしい毛布が数枚あるだけだった。基本的には布団等を持ち込む事が前提とされてい

る為用意されている物は少ない。

こういった場所は見ず知らずの人間同士が顔を合わせる可能性も高い為本来なら避ける所なのだが、エッジはラーヴァンに乗せて運ぶのも危険な状態だったので一行は止むを得ずここを使用していた。

山門の惨状を考えればそれ程おかしな事でもなかったものの幸いにして先客はおらず、期せずしてフレットの「通り易くしてやった」という言葉は現実のものとなっていた。

「きや、ちよ、この毛布！ボロボロだし虫くっついてるわよ!？」

小屋の中に置いてあった毛布を手にしたリョウカが悲鳴を上げて、ばさばさとそれを振り回した。

しばらく使われていなかったらしいそれからは派手に埃が舞い上がる。

「ちよつ、捨てられていった物だから当然です！ホコリを撒き散らさないで下さい、姉さん!」

アキが怒って止めに入るがパニックを起こしたりリョウカは、なかなか毛布を手放さない。

そこへ用事があつて近づいて来たクロウも顔を出し、暴れるリョウカに一步引く。

「ちよつとアキ頼みがあるんだけど——つて、何してんのよ。ここ傍で料理とかもするんだから止めてよ!」

「だって、虫！虫が!」

すっかり気が動転しているリョウカに、クロウは呆れた顔をする。

「……虫ぐらい隙間あるんだから何処にでも入ってくるでしょうが、これだからお嬢様は——セヴァードフェイト!」

ぐるぐると回るリョウカの手から毛布を奪い取ってクロウは懐から取り出したダガーを虫目がけて投げつけ、毛布は勢いよく衝撃波を伴って床に縫いつけられた。

「ほら死んだわよ。それよりアキ、手伝って欲しいんだけど大丈夫?」

「あ、はい。私でよければ」

残されたリョウカは、よく見れば初めから死体だったらしき虫がバラバラになったのを見て悲鳴を上げた。

「嫌————！」

四角く灰を敷き詰めた炉の側にアキを誘ったクロウは、野菜が入った荷物をがそごそと探り出す。

「何をするんですか？今日の食事当番はクリフさんだったので」

「みんな外の見張りとか、薪拾いとか吊いとかで出て行っちゃったでしょ？だから、少しでも早く食事の準備しとこうと思って……ニンジンと、ジャガイモもまだあるわね。何のか分からないけど干し肉もあるし、シチュー位なら出来るかな」

物色しながら材料を麻袋から取りだして、ふと彼女は手を止めた。

「ねえ、エツジと三人で初めて戦った時の事覚えてる？ルオンを相手に」

「え？はい」

唐突な問いにやや戸惑いながらアキは頷く。

「私と会ってからエツジはいつも傷だらけだから、何か一つくらい私と会えて良かった事も作りたいんだよ。……ただ、ほらもう今更隠す事でも無いから正直に言うけど、私料理あんまり上手くないでしょ、だからその手伝って貰ったら少しはマシかな、って」

若干恥ずかしそうにしながらもクロウは正直にアキに理由を話す。

アキもそれを聞いて嬉しそうな顔をした。

「そういう事なら。ただ知っていると違いますけど、私もあんまり上手じゃないですよ」

「というか、男連中もみんな上手すぎるのよ！旅慣れてるだけ知らなけれどそんな理由でクリフが一番、ラークが二番だったら私が三番でもおかしくない筈だし、リアもサーカスは共同生活だったとかで普通に上手だし……出来ないのなんて、リョウカ位」

落ち込んだクロウのつぶやきが聞こえたらしく、小屋の隅で蹲っていたリョウカが反応する。

「ちよつと、聞こえてるわよ！というか私はこんな材料がちゃんと揃わない環境じゃなければ普通に貴女より何倍も——」

「だから、気にしないで頑張ろう」

「聞きなさいよ——」

アキも少し元気を出した様子で微笑む。

「そうですね、この間料理されていたルオンさんもお上手でしたし、一番下手な二人なりに頑張りましょう！」

同じ様な環境で、しかも年下のルオンが自分より腕が良いという事実。

最も気にしていた事を指摘されて、クロウはその場に膝から崩れ落ちた。

二人は具材の下ごしらえを終えて、薪が来たらすぐに調理を始められる用意を整えた。

自身が切った特に不揃いな食材を見て、クロウは苦笑いする。

「本場に戦う以外は何にも出来ない自分が嫌になるよ。いや———いつそラーヴァンで斬った方が上手くいくかな」

「それは、やめた方が良いと思います」

最後の方はやや本気で言っていた彼女をアキが止めた。

二人は鍋に最初に煮る具材を入れる。

「これで、とりあえず出来る事はやったね」

「はい」

そこでふと、クロウはいつの間にか微かに開いていた小屋の扉に目をやって何かに気付く。

フレットの残した言葉が彼女の脳裏をかすめた。

「バルロの野郎はこの先だ」

クロウの見ている前で扉はゆっくりと閉まる。

「ごめん、何か扉のたて付けが悪いみたいだから見てくる。悪いけど居ない間に薪が来たら作り始めて貰ってて良い？」

何も気付いてないアキに悟らせない様少し明るい声でそう言っ、クロウは立ち上がった。

「え？あ、はい分かりました」

少し戸惑いながらもアキは素直にそれを了承する。

「うん……頼んだわよ」

そう言い残して彼女は小屋の扉をくぐり、外へ出た。

小屋の外には人影は無かった。

暮れ始めたオレンジの街道は静かで、行き交う人は見られない。昨今のモンスター凶暴化の影響はこの地方では薄い様子だったが、それでも交通量は減る一方だった。

小屋の屋根に向かってクロウは呼びかける。

「ルオン、誰もここに近付いてくる人間は居なかった？」

持ち前の跳躍力で屋根に上がって周囲を見張っていた少年が、呼びかけに応じて顔を出した。

「居なかったよ、最後にリア達が出て行ってから誰も」

「そう」

（ルオンがそう言うなら本当に誰も近付いてきていない、もし近付けた人間が居るとしたら）

頷いてクロウは改めて辺りを見回し、周辺で唯一ルオンの監視を逃れられる場所——森の中へ歩みを進めた。

《トレーヴオン森林》

クロウが木々の中へ足を踏み入れてまもなく、青白い炎の様な光が目の前に現れた。

それは彼女を導く様に、三步分程の距離を保って揺らめく。

無言で、クロウはその後を追った。

（フレットはこの先の道のりにバルロが待ち受けてると言った、だったらクロウバーズ全員が動く。それならハクも必ずこの近くに居る筈。ここに居るのがあの子ならいきなり襲いかかって来ないのも説明がつく）

森に入るまで「先程小屋で感じた人の視線は気のせいだったかもしれない」とクロウは自分の勘に半信半疑だったが、実際に自分を案内しようとする鬼ウィルオザウイスラ火を見て彼女の予感予感は仮定は確信に変わった。

（今なら戦いを避けられるかもしれない……でも私が動かなかつたらあの子は必ずみんなに襲い掛かってくる）

晴れていた日の光も森の中までは届かない。

クロウの足の下で、湿った小枝の折れる感触がした。

暗い森の中は見通しが悪く、開けた場所にはなかなか出ない。

木々に視界を遮られる状況が続き、このままで本当に会えるのだろうか。彼女が微かな不安を抱き始めた時。

大岩を乗り越えたクロウの目の前に、直前まで居なかった黒髪の少女が立っていた。

「やっぱり、クロウなら来てくれるって思ってた」

いつの間にか鬼火は消えており、森の中は二人だけになっていた。

痩せた黒髪の少女は無邪気に微笑み、甘える様にクロウの胸の中へ飛び込む。

「ハク……」

クロウも一瞬複雑な表情を浮かべるも、それを受け入れて小さな少女の頭を優しく撫でた。

ハクは抱きついたらそのまま顔を上げ、嬉しそうに話す。

「ねえ、私スプラウツを抜けたんだよ」

「え？」

突然言われた事实に、クロウは微かに驚く。

（間違いなく、バルロは決戦の 때가近いのを理解してる筈。なのにフレットと言いつつハクと言いつつ、クローバーズの統制がまるで取れて無い……何かあったの？）

目の前の相手の戸惑いに気付かない様子でハクは話し続ける。

「だからね、クロウがスプラウツが嫌だったらもう戻らなくて良いの。

また一緒に暮らそう？」

「それは……」

クロウは答えを躊躇う。

決して彼女と一緒に生活するのが嫌だった訳ではなく、今領けば何かの取り返しが付かなくなるのを感じていた。

言い淀んだ彼女を見て、ハクの表情が曇る。

「やっぱりあの人達が邪魔するの？クロウの周りに居る深術士セキユアラじゃない人達が」

そっか、と何度か呟いてハクは今ずっとクロウが歩いてきた道の方

を見た。

その目からは急速に光が失われていく。

「……やっぱり先にあの人達を殺さないダメなんだ」

今にもエツジ達を殺しに行こうとする小さな少女の肩を、クロウはしっかりと掴んで引き留めた。

「ハク、止めて！もう人を殺さないで」

「えっ？何で？あ、大丈夫今度はエツジさんは殺さないよ？あの人は優しいもんね、ちゃんと私達深術士の敵だけを殺してくるから」

クロウの剣幕の理由が分からない様子で一瞬ハクは目を瞬かせた。そんな彼女の態度を見て、クロウは首を横に振る。

「違う、違うの……深術士じゃない人でも、どんな人でも簡単に殺しちゃ駄目なんだよ！」

「何で？だってクロウは殺してたよ？私の村の人達は悪い人達だったんだよ、私のお父さんもお母さんもみんな死んだ方が良い人達だったんだよ」

出会った頃とあまりに変わってしまった少女の言動に、クロウは唇を噛む。

変わってしまった原因が何なのかクロウは理解していた。

もっと早くに自身の口から伝えるべきだった言葉を、彼女はゆっくり口にする。

「私は……殺しちゃいけない人達を殺したの。あの時、私があなたの両親を……殺したのは、二人が死んだ方が良い人だったからじゃない。無知だった私が、何の意味もなく私の力の巻き添えにしたの」

クロウは自分で自分の罪を口に出す。

言い訳も誤魔化しもせずに伝えなければ、ハクも自分も前に進めないと彼女は悟っていた。

たとえそれが、どれほどお互いにとって目を背けたい事でも。

ハクはしばし沈黙した。

「何で……？」

黒髪の少女は震える声で切り出した。

その声は今にも泣きだしそうだった。

「何でそんな嘘つくの？……深術士じゃない人は皆私達を差別して殺しに来る悪い人なんでしょう？だから、私のお父さんとお母さんも死ななきゃいけないかったんでしょう？全部嘘なんだよね！」

ハクは必死で「優しいクロウ」に縋り、同時に受け入れられない現実
実に口を戦慄かせた。

クロウは歯を食いしばって、彼女の夢を覚ます。

「嘘じゃ、ない」

ハクの顔から表情が抜けていった。

彼女はクロウに抱きついたまま虚ろな表情で目を伏せ、小さな声で言った。

「……死んじゃえ」

自分の頭上から迫る深術の気配にクロウは反射的に跳び退こうとする。

が、背に回されたハクの腕は、いつの間にか彼女を逃がすまいと捕える様に強い力を込められていた。

クロウは力づくで無理矢理振りほどく様にして、ハクの腕から逃れる。

「ッ!？」

白い光が縦に落ちてきて、クロウの右腕に鋭利な包丁で裂かれたか
の様な赤い線が走った。

殺意に満ちた何の手加減もない攻撃を受け、彼女の背に寒気が走る。

「死んじゃえ、死んじゃえ！クロウなんて大っ嫌い!!」

『純白』のナイティールだった少女の叫びと共に、クロウの視界は数えきれない光槍の穂先で埋め尽くされた。

第八十六話 幻想の白、破壊の黒

「何で？私信じてたのに……私達家族だったじゃない。ねえ、クロウ……！」

「くつ、ブレイクスルー・ブラツディランス！」

自分の周囲全てを覆い尽くす「ホーリーランス」に、クロウは束ねた黒い槍で大穴を空けて脱出口を作り、跳んだ。

直後、彼女が直前まで立っていた場所は剣山の様に光槍で串刺しにされる。

辛うじて逃れたクロウの前で、それを放った黒髪の少女の姿は急速に森の景色に同化してぼやけていく。

ラーヴァンを実体化させずに力を使った為にクロウの瞳は真っ黒だった。

(出血が酷い、深く斬られた……)

瞳の色が元の紫に戻る中でクロウは右腕を押さえて、ハクがどつちへ動いたのかを考える。

しかし、日が傾き落ち始めた森の中は暗く、加えて大岩や木々、丈の高い草といった遮蔽物が彼女の視界を遮っていた。

クロウが考えをまとめられない内に、今度は風を切る音だけが聞こえ彼女は仕方なく再び無詠唱で全周囲に防壁を張って守勢に回る。

防御が不得手な彼女の障壁は長時間維持できるようなものではない。

どの角度から攻撃が来るかと神経を研ぎ澄ましていた彼女は、衝撃が正面から響いてきて黒く染まった目を丸くした。

先程と異なり、今度の槍は全く『見えなかった』。

クロウの振るう「デイストーションランス」が速過ぎて目で捉えきれないのに対し、ハクの「ホーリーランス」は幻影によってその姿を森の景色に同化させる事で見えなくなっていた。

(また正面から攻撃が飛んで来たって事は、ハクは姿を消したただけで動いていない——か、そう見せかける為にわざと正面から撃ってきたか)

クロウが動いたとき時折枝や枯葉が音を立てているのと同じ様に、ハクも慎重に動かなければ大きな音を立てる筈だった。

それに加えてハクが姿を消して間もない事から、クロウは冷静に敵の位置を考える。

(発射方向のフェイクで位置を偽装する必要があるなら、向こうはただそんなにさっきの場所から動けて無い。直線状を全部攻撃出来れば、あとは右か、左かだけ……だったら！)

三度、クロウの瞳の色が変わる。

彼女は右の大岩と、左の樹の陰の両方に狙いを定めた。

「両方同時に薙ぎ払う——サーペンツヴァイト！」

クロウは少し低い密度の黒い粒子でしなやかさを持つ鞭の様な物を複数形成すると、それを二箇所に向けて振るった。

蛇のようにうねるそれはランス系統の術より貫通力では劣る代わりに、軌道上の岩も大木も薙ぎ倒し一気に視界を開く。

「きゃー!？」

それは周囲の景色を映していた幻影をも突き破って、ハクの姿を露にする。

飛んできた枝に足を取られた彼女は慌てて投影杖『アサギリ』で再び姿を消そうとしながら、クロウを睨んだ。

視線が合ったクロウは、自分がかつて姉と慕っていた少女に呼びかける。

「これ以上深術を使わないで。ハクのそれは人を殺す力だよ、そんなもの使い続けたら戻れなくなる！」

その言葉にハクは泣きながら笑った。

「もう戻れないよ、私もクロウも同じ人殺しだもん……行く場所も、帰る場所も私達にはもう何処にも無いんだよ」

「そんな事ない。まだこうして命を大切だと思える心が残ってる限り、やり直せないなんて事無い」

木々をなぎ払った深術でそのままハクを拘束し戦闘を終わらせようとするクロウに対して、ハクはその姿を自身の母親のものに変えて見せた。

「！」

自身が手にかけて女性の姿を見せられ、クロウは一瞬躊躇う。

しかし、それはほんの僅かな時間であり彼女はすぐさま立ち直つて、その女性の姿を拘束した。

否、しようとした。

(しまった、手を止めさせる為じゃなくこっちが本当の狙い……！)

いつの間にか中身の無い抜け殻になっていた光の像は、クロウの術をすり抜けて消える。

その隙にハクは今度こそ姿を消し、クロウは彼女を完全に見失つた。

「く、——デープミスト！」

焦ったクロウは周囲一体に黒い霧を発生させ、闇属性のデープミストとラーヴァンの力を介しての感覚共有で彼女の姿を探し出そうとする。

しかし、周囲の状況を探った彼女はすぐに異変に気付いた。

(また、これ……前戦った時と同じ、周り全部を膜みたいなもので遮断されてそれより先が分からない)

幻影を映し出すためにハクが展開した「スクリーン」はクロウの周りの広範囲を覆っており、攻撃能力の無いデープミストではどうにも出来なかった。

そこへ、どこからかハクの声が響く。

「そんな霧で隠れても逃がさないよ」

数本の糸のような白い光が黒い霧の中を走り、クロウがその意図に気付いた時にはもう手遅れで彼女の身体に糸が触れる。術で接触を防ぐ事も考えたものの、相手の目的が位置の特定である以上直前で防いでも意味は無かった。

クロウは相手の視界を奪った事で互いの状況を五分に持ち込んだつもりだったが、姿を隠しながら戦う事に関してはハクの方が一枚上手だった。

左から攻撃が来るのを感知して、クロウも咄嗟に腕を振って反撃する。

「天へと誘うお落ちる輝き、ホーリーランス！」
「ブラッディランス！」

中空で黒と白の槍が交差した。
二本の槍に切り裂かれて、濃い霧に丸い穴が空く。

クロウは頭部を逸らす事で白い光を躲し、僅かに遅れて動いた髪が数本焼かれて落ちた。

一方で彼女が放った槍はスクリーンに一箇所小さな穴を空けたものの、そこにハクの姿は無い。

森の景色の一部が欠け、その向こうに同じ森が存在するという奇妙な光景が生まれる。

しかし、それは気付いたらしきハクの手によってすぐさま修正された。

偽りの森の景色が再びクロウを包む。

(やっぱり駄目だ、こんな手加減が通用する相手じゃない)

クロウはつい「ブラッディランス」の方を使っていた自分の甘さを悔いながら、改めて自分を囲むように術の基点を配置して全方位に高威力の槍を放って一気に幻影を破ろうとする。

彼女の周囲の空間が歪む。

(これで、景色の幻影を全部破壊する。そうすればハクの位置が分かる……それで、終わる)

しかし、もし槍が直撃するコースに彼女が立っていたら——そう考えたクロウの手が止まった。

幻影に閉じ込められたクロウに外の状態を知る術は無く、どうしても攻撃系の深術を使う必要があった。

かといって「マーシレススパート」や「ブラッディハウリング」の様な範囲攻撃なら、より高い確率でハクを直撃してしまう。

やるしか無いと覚悟を決めて「デイストーションランス」を放とうとしたクロウに、背後から突然呼びかける声があった。

「クロウ……」

戦意の無いやさしいハクの声音に反射的に振り返ってしまった彼女は、目の前に立っていたエツジの姿に目を丸くする。

まるで人を殺そうとした事を見抜かれている様な彼の瞳を見て、クロウは一瞬完全に動きを止めてしまった。

エツジがこの場にいる筈が無い事。

先に呼びかけてきた声はあくまでハクのもので、こんなものは罠でしかない事に彼女が気付いた時には手遅れだった。

ザン、という鈍い音が響いて、白い光の槍にクロウは足を後ろから撃ち抜かれる。

「っ……あああああ！」

立っていられなくなつてうずくまりながらクロウは悲鳴をあげた。動けなくなつた所を見計らうように、更に真上から時間差で三つ光の槍が落ちてくる。

痛みで頭が白くなりかけながらも、クロウはそれを詠唱破棄した黒い槍で破砕した。

ここまで防がれて痺れを切らしたのか、それとも初めから消耗させる目的で攻撃してきていたのか。そこで彼女の周囲の景色は一変した。

クロウの視界全てを最初に見たのと同じ白い槍が埋め尽くす。

百を優に越える数のそれは正確に彼女を狙っていた。

当然、それは普通の術士がこの短時間で詠唱できる術ではない。

大半は見かけだけの幻であるはずだった。

しかし、その中に混ざる本物が例え一本であつてもクロウにそれを見分ける術は無く、その一本で身動きのとれない彼女は死ぬ。

「こ、のっー」

降り注ぐ数百の幻影の光槍に対し、クロウはそれら全てを叩き落す事で対抗した。

幻も、本物も、区別無く、彼女は数百の黒槍で一本残らず正面からハクの術を破る。

とても「ハクがもし物陰に隠れていなかったら」等と考える余裕はなかった。

大半の術がただ幻をすり抜けた事で驚く程静かにクロウの術は包囲を突破し、森の木々の枝を落し、表面を削り、突き刺さる事で初め

て大きな音を立てた。

「っ!?——はあっ……はあっ」

と、そこでクロウはがくりと完全にその場にへたり込んだ。

彼女の瞳が意思とは無関係に黒と紫に明滅する。

ラーヴァンを実体化させない負担が大きい状態で、今まで使った事が無い程連続で宝珠の力の使用を強いられた彼女の身体は限界に達していた。

クロウの中の防衛本能が狂った様に彼女の意識を奪って表に出ようとするが、彼女はそれを必死に抑え込む。

回避も術の使用も出来なくなったクロウの眼に、再び白い槍の雨が映る。

ハクの深術の幻影は詠唱が無い。

それは使用するのに集めるデュープスが、実体のある攻撃系の術より遥かに少ない事を示している。

この短い時間の戦闘で、二人の消耗の差は大きかった。

自身へ落下し始める槍を見て、クロウはチリアが裁縫に使っていた針山を連想した。

生死の淵にあつて、浮かぶのは逆にそういった日常の光景だった。

(私の負け、当然か。始めから相手を殺す気も無い私が勝てる訳無かった)

選択肢が尽きた彼女は諦めながら、どこかこの結果を当たり前に受け止めていた。

(でも、これで良かったんだ。きっと、仇を討てばハクも元に戻れる。みんなも多分襲われない)

自分がかつて両親を奪った少女に殺されるのなら、これも報いなのだろうとクロウは思う。

(アキ、ちゃんとシチュー出来たかな)

途中で任せてしまった料理の事を思い出して、彼女ならきっと律儀にやってくれただろうとクロウは結論付ける。

残してきた仲間に思いを馳せると、彼女の頬は少しだけ緩んだ。

(エッジは怒るかな、アキやリアは泣くかも……でも、きっとみんなな

らちちゃんと乗り越えられる。私が居なくても先に進める、そして――

——そして、自分を欠いたまま『ジード』に挑んで全員死ぬ。

その予感が、諦めきっていたクロウの心を呼び覚ました。

(ああ、駄目だ……私はあいつらの仲間だから)

自分は自分だけではない、みんなの命も一緒に背負っているのだとクロウは初めて気付く。

例えその選択がハクを倒す結果になるとしても、彼女はもう自分の命を投げ出すことは出来なかった。

「死ねない——私はまだ、こんなところで死ぬ訳にはいかない！」

抑え込んでいたラーヴァンの意思を解放し、彼女は自分の意識を手放した。

『ジード』と対峙した時と同じ状態、『シンビオント・オーバーカロード共生体過剰侵食』。

彼女の瞳の奥で眠っていた黒い獣の意思が表面化する。

クロウの闇の宝珠の欠片が手術で埋め込まれた防壁を破り、脈打つ様にその領域を広げて彼女の身体を蝕む。

彼女が詠唱を破棄して術を使っていた様に大気中のディープスが形をとってクロウの身体に翼を与え、その翼は勢いよく加速をつけて彼女を光の槍の雨へと突っ込ませた。

自身の身体を基点とし深術を放射する事で爆発的な加速を得ながら、光の槍の雨が静止していると錯覚する様な速度でクロウは飛んでいく。

掠っただけで致命傷になる様なスピードでクロウは最初の槍とすれ違った。

当然の様にそれは次に飛んでくる槍にその身を投げ出す様な形になる。

が、彼女はそんな事を意に介する様子もなくその速度のまま、翼を畳んで身を翻した。

腕と腰の僅かな隙間を光の槍が通過する。

人間の反射では不可能な反応速度と、術の構成速度。

その二つが、敵に触れる事すら許さない程の圧倒的な運動能力を彼

女に与えていた。

ハクは自身の術が発動して地に刺さるまでの短い時間に空中を走りぬけた黒い閃光を目で追う事が出来ず、クロウの姿が何処にも無い事に混乱する。

「何？……今何が——!?!」

ハクが次の行動に移る間もなく、彼女が何重にも張り巡らせていた幻影のスクリーンが弾け飛ぶ。

光槍の包囲を突破して上空へ出ると同時に、クロウは周囲の空気が歪む程の勢いでディープスを集束して黒い槍の雨を降らせていた。

樹に掠っただけでそれを粉々に「砕いて」しまう程の冷気を帯びた、視認不能な速度の槍。

嵐が直撃してもこれ程にはならないであろう暴風がそのエリアの木々だけを襲い、防御能力を持たない光の集合でしか無いハクの幻影はそんな暴力的な力を前に跡形も無くなっていった。

経験的に自身の身が無防備に晒されることに危機感を覚えたハクは咄嗟に自分と同じ姿の幻影を離れた位置に作り出し、砂塵が治まる前に自分の周囲だけを投影杖「アサギリ」による景色のコピーだけで覆った。

ハクは幻影を即座に作り出す事は出来たが攻撃系の術には全て詠唱が必要であり、獣の如き速度で無造作に深術の力を振るう今のクロウを相手に詠唱する暇はとて無かった。

(どうすれば良いの、こんなの相手に出来る訳無い)

焦るハクは上空から急降下してくる影を目にして、それが稚拙な幻影で隠れた自分に目も暮れず直接「囿」の方へ向かっている事に気付いた。

ハクは、口元に凄絶な笑みを浮かべて詠唱待機状態で設置していた残る光槍のストックを全てその囿に向ける。

どれほど速度差があっても、目標とする地点さえ分かっただけならば彼女にも対抗手段があった。

(終わりだよ……クロウ！)

クロウがその手に形成した鉤爪で幻影のハクを捉える瞬間に重ね

て、ハクはその背後からホーリーランスを放つ。

光が散って、ハクは何が起きたのか理解する間もなく膝をついた。

「え……？」

ぼたり、という水音に気付いて彼女は視線を下げ自分の胸に突き刺さって消えていく光の槍の残骸を見つめた。

真紅に染まった純白の刃が空気に溶けた事で、血液は音を立てて彼女の足元へと流れていく。

「何で……何であなたの方が早いのよー！」

どんな術でも目標を認識し、術に必要な量のディープスを集め、術の形を第一元素ハイエスで構成するプロセスを経ており、例え唱える時間を無くしても発動時間をゼロには出来ない。

それはハクが既に発動していた術が到達するまでの一秒にも満たない時間よりも、後から気付いたクロウが「それら全てを行い、術を発動させる速度」の方が早いという事に他ならなかった。

もうとても人間とは呼べないその動きに、ハクは憎しみの目を向ける。

「許さない……許さない、私の何もかもを奪ったケダモノ」

コレクトバーストの虹色の光がハクの身体に吸い込まれた。

その流れを彼女は術の為に大気中に留める事もせず、どこまでも自身の身体の中へとディープスを溜め込み続ける。

「許さないゆるさない、ゆるさないゆるさない！」

集中する為の自己暗示であり、術に託す思いでもある詠唱を、彼女は言葉の意味も失いながら憎しみの呪詛で埋め尽くした。

幻影によるミスリードも行わない無防備なハクの姿を見つけて、ラーヴァンが意識を乗っ取ったクロウは真っ直ぐに彼女に襲いかかる。

ハクの身体が白く輝き始めた。

彼女が何をしようとしているのか悟って、ラーヴァンの中に微かに残るクロウの意思は必死に抵抗した。

（——！！）

クロウは彼女を止めようとして叫んだ、襲いかかる自分の身体を止

めようともがいた。

しかし、ハクはクロウを殺す為に術の詠唱を続け、クロウの体は黒い雷の様に一直線に鉤爪で彼女の身体を刺し貫いた。

がくりと折れたハクの頭から、最後の一節が漏れる。

「――許されざる冒瀆」

（ハク……）

彼女の身体全てを媒体とした爆発が、天へと高く白い光の柱を登らせた。

二人の激戦で荒れ果てた森のエリアが瞬く間に焼失する。

その中心に居たクロウは、最大出力の深術による加速でそこから逃れようとしていた。

急激な方向転換から肉体を保護する為に深術障壁も並行して展開しているものの、ハクの最期の深術はまるで彼女の憎しみそのものであるかの様に宝珠の力であるそれを容易く溶かす。

文字通り目と鼻の先に白熱する炎を感じながら、クロウは飛び続けた。

彼女の視界の景色全てが意味をなさない線になる中で、常に同じ位置についてくる炎の壁は世界そのものを吸い込んでいる様に見える。

森が無くなり地形が変化する程に拡大した所で白い光の柱は終息し、辛うじて逃れたクロウはどきりと何かを落としたのを感じながら尚もそのまま慣性で少しの間飛び続けた。

彼女の口の中に砂の味が広がる。

（あ、れ……？）

違和感を覚えたクロウは後ろを振り返り、寒気を感じる。

先程落とした「何か」は彼女自身の身体だった。

クロウの身体は浅い呼吸を繰り返したまま死んだような目でうつ伏せに倒れ、全く動かなくなっていた。

（体が――動かない）

一度意識すればはつきりと、クロウは自分が地面に伏せて口が地面に触れているのを感じた。

自分が立ち上がれない様を、彼女は宙から闇のディープスを通して

見せられる。

口の中の砂が不快で彼女は吐き出そうとするが、身体は人形のようにピクリとも動かなかった。

手を着こうとしても腕は動かず、膝を立てようにも脚には全く力が入らない。

そうしている間にも、危機が去った事でクロウと分離したラーヴァンは大気に還って消え始めた。

自分自身がバラバラになっていく恐怖の中でしかしクロウはどうする事も出来ず、闇のデリースが完全に宙に消えた所で彼女は完全に意識を失った。

第八十七話 勝利の対価

クロウが次に目を覚ましたのは見覚えのある小屋の中だった。

時間は夜明け前らしく、薄暗さで認識するのに時間はかかったものの少し前まで居た場所を見間違えたりはしなかった。

左足に大怪我を負っていた為か、小屋に転がっていた古い毛布でしきられクロウの寝ていたスペースは隔離されている。

ぼんやりと彼女は自分の右手を眺め、再び自分が身体を動かせる状態に戻った事を認識した。

(……私は)

言葉を発する事も出来ない程完全に意識をラヴアンに乗っ取られていたとはいえ、一方的に振るった暴力の感覚をクロウはハッキリ覚えていた。

世界の全てを維持しているという宝珠の力。

クロウ達の道の先に待ち受けている『ジード』は、その内の一つをほぼ完全に自らの力としている。

自身の中にある力を引き出せる様になればなる程、彼女は人間離れた自身の力がそのほんの一端に過ぎないという事実を恐怖を覚え始めていた。

つまりそれは、「彼女が出来る事は、ジードもまた全て出来る」という事に他ならない。

(あいつは今まで私達を本気で殺すつもりが無かった。でも、今度の戦いは違う。『ジード』とスプラウツは間違いなく決着を付けに来てる)

『過剰侵食』オーバーロード時のパワーとスピードが、そのまま仲間達に牙を向く様を想像してクロウは背筋が寒くなった。

それだけではなく『ジード』は、クロウでも突破できない『色』クロマティッククリスタルの水晶すら破壊した禁術。そして受けた傷を瞬時に直して原型を留める再生能力を持っている。

当然飛行能力を持った彼が高度を上げれば、武器での攻撃もほとんど届かない。

(本当に、勝てるの……いや、それ以前に正面からぶつかったら絶対に誰かが――)

クロウは仲間達が用意してくれた毛布を無意識に握り締める。

怪我を負った足がなんとか動く事を確認した彼女は、顔を洗って気分を入れ替えようと起き上がってふと気になるものを見付けた。

自分の寝ていた布団に落ちていた数本の髪の毛。

それ自体は寝起きなら何も不思議なものでもない。

ただ、それは明らかに黒髪だった。

クロウの髪は紫で、黒髪の間は仲間内でアキとリョウカしか居ない。

(自分が寝てた所を譲ってくれたのかな?)

或いは側を離れられない程心配させてしまったのかもしれないと思ひ、いずれにしてもクロウは後で謝ろうと決めて立ち上がった。

早朝にしては、身を刺す様な寒さは無い。

過ぎしやすくして良い、などと思ひながらクロウは誰かが汲んで来てくれていた水桶から水を掬おうとして、そこに映ったものに違和感を覚えた。

水面に映った彼女自身の顔はいつもと何かが違っていた。

しかし、揺らぐ水面ではそれが何なのか分からず、クロウは小屋の隅にあつた曇つた鏡の前に移動する。

(あれ……何か、暗い?)

鏡に移った自身の顔を見て、彼女が最初に感じた印象はそれだった。

起きたばかりでまだ何処かぼやけていた頭の芯が覚醒し、クロウは異変の正体に気付く。

髪の色と、能力を使う時以外は紫だった瞳が色を失いかけて黒く変色していた。

そして、周囲が薄暗いのは夜明け前だからではなく――。

「!」

クロウは思わず外套を手にとって、逃げる様にそれで身を隠した。

「ん? 目覚めたのか、クロウ。エッジも立ってる様になったみてえだ

しこれで全員揃うな！」

物音に気付いたらしきクリフの嬉しそうな声が仕切りの向こうから近付いてきて、彼女は慌てて彼を制止した。

「ま、待ってー！」

そのあまりに切迫した声にクリフも戸惑った様子だった。

「あ……わ、悪い。何か邪魔したか」

「いや……こっちこそ、ごめん。すぐ準備して合流するから待ってて」

クリフが小屋を出ていく音が室内に響いた。

大声を出してしまった事を反省しながら、クロウは変色してしまった髪と瞳を隠す為にフードを目深に被って外に出る。

何とか動ける様になったエッジは、小屋の外で折れてしまった剣を見つめていた。

彼が自分より強い相手と戦う為に編み出した秘奥義「インディグネイト・ジャツジメント」。

初撃の深術が避けられても二撃目の剣が落ち、二撃目が破られても再集束による三撃目で止めを刺す。

相手に何度破られようと止まらない不屈の雷剣——切り札を征する切り札とも言うべき技だったが、その分武器への負担は大きい。

或いはフレットの攻撃の前では、最後まで発動せず砕け散ってもおかしく無かった。

海上都市でエッジが兄に敗れて捕まった時失った剣の代わりに、リョウカが買ってくれたやや細身の長剣。

何処にでも売られている、ごくありふれた武器。

（短い付き合いになっちゃったけど、この剣には沢山の事を教わった気がする）

最後まで戦ってくれた武器に感謝しながらそれを鞘に納め、エッジは残ったもう一振りの剣に手を置いた。

禁忌の剣——『アエス・デイ・エウルバ』。

決して使ってはならないという警告を持ったその剣を使いこなせていない事を、彼はフレットとの戦いでも痛感していた。

(それでも、もうこの武器しか無いんだ)

フレットとの戦いで感じた無力さを胸に刻みながら、エツジは顔を上げる。

小屋から出てきたクロウは仲間達に歓迎されながら誰と交戦したのかを報告し、それから少し離れた所に一人で居たエツジに気付いて近付く。

「毎度の事で言うのもあれだけど無事に治ったんだね、エツジ」

「クロウも。……どうしたんだ？そのフード」

「ああ、えつとこれは、まだ少し肌寒く感じるってだけだから気にしないで」

それぞれに一騎討ちを切り抜けた二人は互いの無事を喜ぶ。

他の仲間達同様、クロウの戦いの跡を見ただけで何があったのか知らないエツジはクロウに尋ねた。

「かなり激しい戦いだったみたいだけど、やっぱり相手はスプラウツだったのか？」

クロウは頷きながらもすぐには答えなかった。

「エツジ、私……」

そこで彼女は何かを漏らしそうになりながらも、言うべき言葉はそれではないと思いい直した様子で言葉を飲み込んだ。

「勝ったよ、ネイティールに」

そう言いながら笑みを口元に浮かべて見せた彼女が手を強く握り締めているのを見て、エツジは追及せずには微笑み返した。

「そっか、クロウが無事で良かった」

一行は『ジード』の待つファタルシス諸島に向けて慎重に南下を続けていた。

クロウがまだ本調子では無く、空中で術が不安定になるリスクからラーヴァンに乗っての飛行は止める、という結論が仲間達の中では出ている。

が、当の彼女は「この先で待ち受けているバルロは絶対に正面から正々堂々戦いを挑んでくる様な事はしない」と、一人離れてラーヴァ

ンによる周囲の警戒を続けていた。

そうして一人休まず術を使い続けるクロウに、リョウカがいきなり宵の地衣をかぶせる。

「ほら、体調が悪いなら身体冷やしちやダメよ」

「ちよつと——」

身体の変化を隠そうとしていたクロウは突然の事に慌てて抗議しようとした。

が、リョウカはクロウにしか聞こえない様に耳打ちする。

「押さえもせずにフード被ってるだけだと、強風でバレるわよ。隠したいんでしょ」

予想外の言葉に戸惑いながら、クロウも小声で返した。

「気付いてたの？」

「ええ、倒れてたあなたを運んだのは私だから。他の皆は気付いていない筈よ」

クロウは疑わしそうにでリョウカを見つめる。

「へえ、よく誰にも見られなかったわね」

「ええ、見られそうになったら『貴女を着替えさせてるところだから服着て無い』って言ったら結構皆あっさり離れてくれたわよ」

「は——あ!?!」

思わず裏返った声を出した彼女を、リョウカは面白がる様に観察する。

玩具にされている事に気付いたクロウは顔を赤くしながら、話を戻した。

「で? 本当に黙っててくれるんでしょうね、この目の事とか」

「一応信頼して貰って良いわよ、私も貴女と同意見だから。正面からの戦闘ならともかく、多人数に不意打ちなんてされたら一溜りもない。他の皆——ああ、ラークは違うわね。ともかく皆は反対するでしょうけど今の私達にはどうしても貴女の索敵能力が必要なのよ。だから体調の事は黙ってるわ」

但しと、リョウカは厳しい表情で付け加える。

「力を借りるのは敵を見付けるまでよ、戦闘は私達に任せて貴女は下

「がっついていなさい」

「なつ、一人で見てろつていうの？ 私も戦うわよ」

しかし、クロウに詰め寄られてもリヨウカは首を縦には振らなかった。

「いいえ駄目よ、今回の事でよく分かった。貴女の力は無尽蔵に見えるけど決して無限じゃない。ここで限界を迎えられたら困るの」

クロウは納得がいかない顔を見せたが、しかし「嫌だ」と言えばリヨウカはあっさり手の平を返して裏切りかねないのを知っていたので黙っていた。

リヨウカはそんな彼女を見て満足そうに微笑む。

「エツジ、大丈夫か？」

リヨウカとクロウが会話していたのと同じ頃。

横を歩いていたクリフに話し掛けられたエツジは、はっと顔を上げる。

「ああ……いつもリアとクリフには世話になってばかりだな。もう動けるよ」

申し訳なさそうに言うエツジに対して、クリフは手を横に振って笑う。

「違う違う、体調の事じゃねえよ。何か思いつめた顔してたから」

え、とエツジは思わず戸惑った声をあげる。

それを見たクリフは少し真面目な声で元気づける様に言った。

「俺達の戦う目的は皆違うかもしれないけどよ、お前は一人で戦わなきゃいけない訳じゃねえんだ。あんまり一人で多くを背負いすぎるなよ」

そこでようやく、エツジはどれだけ仲間達に心配をかけてしまったか気付く。

「……ありがとう」

「おう、今回は手出さなかったけど次からはもう少し頼ってくれて良いんだぜ」

クリフは、エツジがフレットを殺した事には触れなかった。

エツジも今問われれば答えられる自信がなく自分からは話題に出

さない。

けれど、ただそうしてクリフが気にかけてくれた事が一番エツジには嬉しかった。

と、不意にラーヴァンと感覚を共有していたクロウが顔を上げ宵の地衣をリョウカに返す。

「ルオン」

低い声で彼女は共に育った少年の名前を呼び、ルオンも無言でそれに応えて弓に矢を番える。

「十時……いや、十一時の方向に五人、二時の方向に四人深術士^{セキユアラ}」

「距離は？」

「大体250」

位置を聞いてルオンは耐冷弓『フレキシブルスナイプ』に冷気を集めて狙撃状態に切り替え、尋ねる。

「それだと仕留められないけど良いの？」

「うん、属性技で右の陣形だけ崩してくれば良い。私が先に深術を撃つと気付かれる」

ルオンが頷いたのを見て、クロウが後続の仲間達に告げる。

「みんな、この先でスプラウツが散開して待ち受けてるから、私とルオンで先制して正面方向に敵を追い込む」

全員がそれを聞いて武器を構えた。

「待ちなさい、クロウ。あなた身体が——」

手渡された宵の地衣を纏いながらもリョウカが彼女を制止するが、その声はルオンが放った矢の音にかき消された。

「氷屑の破者^{ブレイクシュート}」

一行の右前方へ青い一筋の矢が走り、それを追って冷気と衝撃波がガリガリと木々の間と地面を削る大きな音を立てる。

そこへ人間が慌ててそれを避けようと逃げる物音と、矢が直撃した樹が倒れる音が続いた。

左側の敵も動き出し、茂みの陰から詠唱と共に炎弾が一行を狙う。

「く……行けーラーヴァン！」

クロウはそれを意に介さず長時間の索敵のせい、やや荒い呼吸で

右手を振り下ろした。

上空を旋回していた巨鳥が視界外からその翼を鎌の様に変化させて急降下する。

「扇氷閃」

同時に、ルオンが三本の矢をクロウの正面に落とした。

氷柱が仲間達の身代わりをして敵の深術を止め、ラーヴァンが敵の隠れていた茂みを刈り取る。

隠れていたスプラウツの子供達はクロウに追い立てられて一方向へと逃げていく。

「逃がすか……っ」

仲間達もその後を追って行くがいち早く先頭を走っていたクロウが、目眩を感じた様にふらつく。

そこへ籠もった小さな爆発音が響き、銃が放たれる。

「クロウー」

咄嗟に割って入ったルオンが彼女を庇って矢を放つも、その特殊な武器の攻撃は彼の効き腕である右腕を捉えた。

ルオンは痛みにも顔をしかめながらも、待ち受けていた発砲者である少年の方へと弓を向ける。

深素銃『始』——それを持つ少年、『流連』のレパートへ。

「クロウ、ルオン……お前らさえ居なけりゃ！」

「く……い！」

レパートの深素銃の銃口と、ルオンの耐冷弓の矢が正面から向き合う。

「シャイニングレーザー！」

「氷屑の破者！」

二丁の銃を交差させて放たれた光の矢と、冷気を纏って激しく回転する氷の矢。

それぞれの放った技は中間で互いを削り合い、軌道が僅かに逸れた。

氷の矢はレパートの左腕を掠め、ルオンは左肩に直撃を受け弓を取り落として倒れこむ。

それに続いて、突然ラーヴアンが悲鳴の様な声を上げると空気に溶ける様に消え、クロウも彼の後を追う様に倒れた。

「ルオン！クロウ……!?!」

「しっかりして下さい！」

エツジとアキが二人に駆け寄り、そこで倒れてフードが外れたクロウの髪の色が真っ黒になっている事に気付く。

傷でうずくまっているルオンと異なり、クロウは目を見開いたまま意識を失っている様子で、色を失いかけて黒く擦れた瞳は宙を見つめていた。

「クロウも限界が来たか、力が使えないならどの道用済みだったな」

意識が無い彼女に対して冷たい言葉を投げながら、子供達を従えた『巖岩』のバルロも姿を現す。

その言葉にエツジとアキが激昂する。

「お前……!」

「バルロ、貴方は、どこまでクロウさんを道具扱いすれば気が済むんですか！」

老人は鼻を鳴らし、見下す様にアキを見た。

「お前とて初めは同じ様にクロウに接していた筈だ、あの方の言う事も聞けぬ愚かな娘が」

「愚かだった事は否定しません、けれどそれは自分で考えずただ父に——ジエイン・リュウゲンに従っていたその盲従こそがです」

「では、今度は自分の責任で死ぬが良い」

主を否定されたバルロは子供達に指示を出し、十数人の子供達が放った初級深術がエツジ達に降り注ぐ。

倒れたルオンとクロウを助け起こそうとしていた二人は即座に反応することが出来なかった。

「——そんな言い方あるかよ、子供が生きる場所作んのが大人だろうが」

奥義「錬毅身」の青い輝きを四肢に纏ったクリフが、彼らを守る様に割って入る。

炎弾、氷牙、水刃、光波の尽くを叩き落とした手首を振りながら彼

はエツジ達に言った。

「エツジ、ここは俺達に任せて下がれ」

「クリフ……」

逃げる事を躊躇うエツジをクリフは振り返り、軽く微笑む。

「守ってやれクロウを、それはきつとお前にしか出来ない事だ」

「トウカ、貴女も二人を連れて下がらなさい。詠技——氷河」

第二波の深術を放とうとする敵の詠唱を、今度は押し寄せる氷の波が阻む。

「初級深術は詠唱が短いとはいえ、やっぱり深術ね。どうやら宵の地衣の補助がある私の方が早いみたい」

立て続けに子供達の術を防がれ、バルロは怒りも露に割り込んで来たリョウカとクリフを睨む。

「目障りな」

「生憎と私は最初からジエイン家の敵だから、目障りなのは今更じゃない？」

向けられた殺意をリョウカは皮肉で返した。

「みんな……ありがとう、頼む！」

エツジとアキが倒れた二人を連れて下がり、入れ替わる形でリアトリスとラークが前に出る。

クリフ、リョウカ、ラーク、リアトリスの四人は十六人の敵と向かい合う。

「殺せ……あの方の遺志を邪魔する者全て、お前達の命を賭して！」

「何が命だ、子供を生き延びさせる選択も背負えない大人が偉そうにすんじゃねえ！」

バルロが吠え、一斉に詠唱を開始した敵の集団の中へクリフが先陣を切って飛び込んだ。

※世界観・用語3の情報ステータスが更新されました

「身」の一族、「心」の一族

太古の昔、二柱の神から宝珠と世界を守るべく力を与えられた二種族。

アエスラングの種族が大気と心を通わせ高い深術の適正を持つ「心」の一族。イクスフェントの種族が深術を使えない代わりに長い寿命と高い身体能力を持つ「身」の一族であり、両者の総称が「シン」の一族である。

二種族の能力が異なるのは「互いが手を取り合う事」を望んだアエスラングとイクスフェントの願いからであり、またそれぞれの差異に二柱の神の性質の違いを見て取ることが出来る。

『混血児』

身の一族と心の一族、そして人間の血が混ざった者の中に稀に現れる突然変異とも呼ぶべき存在。

高い深術の適正と身体能力、治癒能力を持ち、皮膚の異常で獣のような体毛が発生する。個々の能力としては「心」や「身」の一族に劣るものの、戦闘に限れば総合的に両者を上回る能力を持つ。

世間一般には「獣の子」として認知され、モンスター等の血を引いたものと考えられて(※実際シンの一族の混血の者に体毛は存在しない為、先祖の中に本当にそれらの血が混じっている可能性はある)殆どが殺され、現代においてはその血筋はほぼ絶えている。

宝珠の「座」

狭義には六つの宝珠を安置するべき地点を指し、広義にはそこからダイープスの流れを安定させるべくシンの一族によってその地点に作られた台座も含む。

宝珠はただ存在するだけでは機能せず、「座」に在ることで初めてダイープスの流れを通して二つの世界を繋ぐ。

地点ごとに二つの世界で対になっており火と風、水と地、光と闇の

宝珠が対応している。その為、二つの世界の間のディープスの流れによる影響はこれらの地点の周辺が特に強くなっている。

『明の天傘』と『宵の地衣』

同一の職人の手により作られた対となる武器。火鼠の衣ひねずみころもと氷鼠の衣ひねずみころもと呼ばれる特殊なモンスターころもの皮から作られており、ディープスの集束を手助けし並の武器とは比較にならない戦闘能力を持ち主に与える、詠技の使用も可能な武器。

タリア・キサラギが娘達の身を守るため姉妹に与えた。姉のリヨウカが宵の地衣を、妹のトウカが明の天傘を所持し、タリア・トウカが出奔し『ジェイン・アキ』と名を変えた後も愛用し続ける。

本来姉妹での使用を想定されている為、二つが揃ってこそ真価を發揮する。

氷獣ナーリーフ

鉋脈齧りの名を持つ巨大なトカゲの様な獣。

氷のディープスを操る能力を持ち、寒い地域の地中に生息する。

長く伸び続ける鋭い牙を持ち、硬い鉋物などを齧る事でそれを削り続けている。

その為しばしば人間が掘り進めた坑道等に現れ被害をもたらし、「氷鼠ひねずみ」とも呼ばれる。

極めて頑丈で並の武器を通さないその皮膚は様々な用途があるが、その固体の希少性と討伐の困難さから高級品として取引される。

命令刻印術式

「他者に命令を聞かせる事」を目的として開発された深術を応用した技術の一つ。通常の深術はその都度術式を組み立てるのに対し、体内に成立した術式を埋め込む事で常時発動し続ける。

しかし、人間の精神はそう簡単に制御できるものではなく、現段階の技術では他人の行動を制御するところまでは至っていない。その為実際は「主が従者を任意のタイミングで殺す事が出来る」機能を

持った爆弾の様なもの。

その経緯から忌まれた技術だったがジェイン・リュウゲンはそれを逆手にとり、処罰される寸前だったブレイド・アズライトに見せしめとしてこれを埋め込む事で自分の手駒として彼を獲得した。

ブレイドに埋め込まれたものはエッジとブレイドの父親によって改良されたものらしく、『そう簡単に爆発する事はない』とブレイドが発言している。

『共生体』
シンビオン

ガザニア・グレイスとサシード・グレイスの夫婦が研究し作り出すとしていた生命の形。

被術者の生命活動に支障を来たさないよう高濃度のデープスを持った存在を埋め込む事で、生まれ持った素養が無くても誰でも深術を扱える様になる。

本来であれば、体内の「属性」を司るデープスのバランスは繊細なものであり無暗に高濃度のデープスが入りこむと間違いなく生物としての機能に異常を起こす。その為、カースメリア大陸原産のインペルメアブル鉱石という石の保護壁によって被術者と高濃度のデープスとの間はデープスの逆流が起こらない様に遮断されている。

クロウと闇の宝珠の欠片はこの唯一の成功例。

当初の想定では微生物や深術を扱う生物の器官の一部などの生体組織を埋め込み(名称はこれに由来する)、その能力も日常生活を補助する程度の深術の使用に留まる予定だった。が、唯一の人間の成功例であるクロウは現代の人間の手では作る事が出来ない超高濃度のデープス結晶体・アスネイシスの欠片を埋め込まれ、それによって本来の想定を遥かに上回る力を発揮している。

反面、埋め込まれたアスネイシス側の力が強すぎる為鉱石による遮断が「宝珠の側からのデープスの流れを遮断する」事しか出来ておらず、クロウの方から無理に力を使おうと宝珠側にアクセスすると少しずつ鉱石による保護壁が壊れていく。

『シンビオント・オーバーカロード
共生体過剰侵食』

クロウが、同じ闇の宝珠を持った青年と対峙した時に陥った状態。通常、大気中の闇のディープスが集まって実体化していたラーヴァンが、まるでクロウと一体化した様な姿を持つ。

獣同然の反射速度と目で捉えられない程の速度、そしてクロウ自身が封じていた「加減の無い闇の宝珠の力」を常時振るう為通常時の彼女とは比較にならない戦闘能力を持つ。

クロウの自我は無く、ラーヴァンの防衛本能としての意識が全ての行動をコントロールする。

羽で移動を、鉤爪で攻撃を、そして外殻部で運動を制御し、クロウという『容れ物』をラーヴァンの意志が強制的に動かす。彼女の生命のみが守れば良い為、その身体へのダメージは考慮されておらず（身体を幾重も深術の膜で保護しているもの）瞬間移動にも近い移動スピードは、彼女の身体に痣になる程の多大な負担をかける。

『クロウ』という人間の人格が消失している為、敵対しないものを意図的に狙う事こそないものの、扱う深術のレベルから敵味方無差別の戦い方をする。

この状態のクロウと仲間全員の力を以ってしても、『ジード』には及ばなかった。

本来であればどれだけ危険な状態に置かれても『共生体』^{シンビオント}として完成されたクロウの身体はこの状態になる事は無いが、スプラウツで幼少期から強制された度重なる深術の使用の為に能動的にアスネインスの宝珠の欠片にアクセスし続け、「瞳の色が黒く変化する」程に侵食が進んでしまったクロウの意識は完全にラーヴァンと繋がる様になってしまいこの状態になる可能性が生まれてしまった。

『共生体過剰侵食』の影響は単なる物理的なダメージでは留まらず、一度これを使う度にクロウの体内のディープスバランスは闇属性に偏り、ヒトとしてあり得ないバランスに近づく。↑New

それにより生まれもった個人の『属性』そのものである髪と瞳の色が黒くなっていき、二度目の使用でクロウ自身の体感が『身体』から

『闇のディープスの集合体であるラーヴァン』に引つ張られて深術の発動時に自分の身体のコントロールを失うという症状（身体の感覚を感じながらも動かすことが出来ない）を発生するようになり、触覚も徐々に鈍くなっていく。

ラーヴァン↑New

クロウが操る黒い巨鳥。

大気中の闇のディープスを集める事で彼女はこれを実体化させているが、実際にこれを操っている意思はあくまで右肩の宝珠アスネイシスの欠片。

クロウはこの意思に「黒い巨鳥の器」を与える事で負担なく力を振るう事が出来るようにしている。

が、スプラウツで育った為に侵食が進んだクロウは、特に追い詰められるとラーヴァンを実体化させずに力を使う傾向がありこれが彼女の侵食をより一層進めてしまっている。

元々の宝珠はきちんとした思考を持っていると言われているが、クロウが所持するのは不完全な欠片である為その中の「防衛本能・生存本能」と呼ぶべきものだけが残りラーヴァンとして意思を表している。

『ジード』

クロウを圧倒し、ラークを瀕死状態に追いやった青年。

彼女が持っていない闇の宝珠アスネイシスの残り全てを所持しており、クロウ側が本来の三割に満たない力なのに対し彼が所持する欠片は七割強で単純な出力でクロウと倍以上の力の差がある。

王都で猛威を振るった火の宝珠の力がきちんと制御されていないのか、それに対して、彼は完全に力を使いこなしている為実質的にそれ以上の「限りなく本来の宝珠に近い」力を持つ。

その姿はラークの同族にして、シンの一族の裏切り者「ジード・カルシート」と酷似しているが彼は既に死亡している。

最上級深術

禁術とも呼ばれる、ごく一部の人間にしか使えない上級深術クラスすら更に超えたクラスの深術。歴史上にも使えた人間がほとんどおらず、複数人でしか発動例がないものもある。

また、この術を使った者も本人が最も得意とする属性一つしか使えず、初めて発動された時期や文化圏もバラバラな事からその名前も大きく異なる。

扱われるディープスの量が桁違いな為、熱に関係する火・光・闇属性の術は周囲（特に術者）への危険性から発動時間が極めて短い。

更に、光属性と闇属性のディープスは熱と共に空气中に分解されやすい性質を持つため、他の属性と異なり通常は上級深術であつてもその場に残らないが、最上級深術の場合その規模の大きさから術全体の体積に対する表面積の比が小さいため空气中への分解が緩やかになり、完全に分解されるまでに長い時間を要する（分解のペースは一定ではない為、データも少なく術の持続時間については正確な情報は無い）。

分解が早い風属性の深術も完全に消えるまでにかかなりの距離を要し、海を超えた隣の大陸まで強風が吹いたという記録がある。

いずれも限りなく天災に近い術であり、通常の戦闘に用いられる様な術ではない。

なお、あくまで「人間の限界」でしかない為、六属性の宝珠はいずれもこれと同等以上の力を秘めている。

・風の最上級深術……神息吹カミイブキ

記録上は存在しながら、長い間分類されていなかった術。地の最上級深術として扱われていた時期も存在する。情報が少なく、その時の様子を示した文献には『一瞬にして大地が割れ、爆発した』という程度の情報しかなく、この術が発動したとされる位置には巨大なクレイターがある。

これが、風の最上級深術に分類される様になったのは、「術者とされ

る者が残した名称が風を連想させる『神息吹』であったこと、「広範囲の同心円上でほぼ同じ頃に強風の記録があること」、「地の最上級深術が別に存在し、全くの別物であったこと」等が挙げられる。

現代ではその跡は湖となっており、息吹の御湖（いぶきのみこ）という名が付いている。地属性の深術と誤認されていたころは違う名称の湖だった

・火の最上級深術……（記録なし）

炎の天才術士が操ったとされる最上級深術。複数人での発動か、命を犠牲にしての発動が普通の最上級深術の使用者の中にあつて、彼は地脈の流れをきちんと理解し発動場所をそれに合わせる事で負担を最小限に抑え、個人で複数回この術を発動する事が可能であつたとされる。

焰螺旋の再現のように天に昇る火の柱を生み出し、上空で爆発を起こすことで術者との距離を調整し範囲内のものを一瞬にして灰とする。

しかし、実際に発動されたのは一度だけであり、その一撃はとある術士の命を犠牲に放たれた同じ最上級深術、神息吹によつて相殺されている。

その衝突によつて術者がダメージを負つたという記録は無いが、それ以降彼がこの術を使う事は決して無かつた。

・地の最上級深術……エンプリファイド・レイジ

最も穏やかに始まり、最も危険な領域に到達する最上級深術とされる。広範囲の大地そのものに作用し、その全体を揺らす。しかし範囲が広い分、術が発動しても直後の揺れはほとんど認識できない。が、この術の真の危険性は大地を揺らす事ではなく、「何度も繰り返す事でその揺れを増幅する事」にある。振動を繰り返す事でその威力は通常の地震に匹敵するものになり、最大威力ではアエスラングまたはイクスフェントの大地全てが崩壊する。

これを発動出来たのは「放浪の三人組」だとされ、三人全てが異なる大陸で一番の術士であつたという。その彼らも発動できたのは一度限りであり、三人の呼吸が少しでもずれれば振動の繰り返しはそこ

で途切れてしまうので、実際に理論上の最大威力を出すのは困難であつたと推測される。

後年の研究者達によればその時代、術士として並び立つもの無かつた彼らの行動原理は「何か面白いことを起こす事」であり、一度の発動でも彼らはその成果に十分に満足していたと言われる。むしろ最上級深術発動後の彼らは再び禁術を発動する事よりも、この実績を後世に残す為に活動していた為、この術だけ残っている参考資料が多い。が、自分達の活躍を誇張して書かれたものがあまりに多かつた為、逆に与太話として一蹴され最上級深術として認められたのが大きく遅れたのは皮肉としか言い様が無い。

・水の最上級深術……終の水竜つひすいりゅう

別名、「国を食らつた大蛇」。数千年前の黒髪の少数民族からなる『水影術師団』という深術士の集団が用いた、アエスラングの歴史上最悪の『人災』。基本的に最上級深術というのは一人の術士の限界を超えた術であり、一度の使用で命を落とすか一生に一度しか撃てなかつたと言うのが普通である。しかし、この集団は『一つ一つでは機能しない、百人単位で同時に使用して初めて一つの術として機能する』術式を持ち、連発こそ出来なかつたものの天災クラスの術を自在に何度も操る事を可能としていた。

その力に抗えるものは存在せず、迫害される存在でしかなかつた黒髪の少数民族は二つの大陸をその支配下に置き、自分達を「世界の中枢を担うもの」と称し残る二つの大陸をもその手中に収めようとした。が、それは一振りの剣を持った青年によって阻まれる。当時の出来事は次の様に記録されている。

「天まで届く水の流れの中にあつて、その青年は点でしかなかつた。黒髪の術師たちは彼に気付く事さえなかつただろう。しかし、青年の振るつた剣は一振りで荒れ狂う水の竜の動きを止め、二振りで竜を真つ二つにした。その剣を、恐れた術師達はこう呼んだ。天より現れ、蛇を下す剣——クサナギノツルギ、と」

クサナギノツルギと呼ばれる剣の力で『水影術師団』の暴走は止まったものの、彼らの行動の結果は今日のアエスラングにも多大な影響を残した。二つの大陸に跨るその領土は「アクシズIIワンド王国」として名を変え、その頂点に位置する貴族階級は今もこの黒髪の少数民族が占めている。

彼らの末裔の一人タリア・リヨウカはこういった経緯を理解しており、多くの犠牲の上に成り立った貴族・王族というシステムを快く思っていない。

クサナギノツルギ

伝承の中で水の最上級深術を打ち破ったとされる剣。その正体はイクスフェントの身の一族に与えられた切り札『天空の剣』。

通常シンの一族は人間同士の争いに関わる事を禁じ、宝珠の力が人間の手に渡ることのみを阻止する為に行動する。

が、宝珠そのものとは別に世界には「時に地脈と呼ばれる、二つの世界の宝珠間でやり取りされる強いディープスの流れ」が存在し、終の水竜の術式は南東のカースメリア大陸に流れる「水の宝珠 フラツ デイルージュ」の力を使っていた為、その事態を「一部であれ宝珠の力が人の手に渡った」ともと考え危惧したイクスフェント側のシンの一族が『天空の剣』の使用に踏み切った。アエスラングとイクスフェントの繋がりが絶たれたクライニング本編の時代には登場しないものの、作中にはこれと対になる『深海の剣』が登場する。

本能共鳴技

闇の宝珠に続いて火の宝珠までもが一時「座」を離れた事で、世界のディープスのバランス崩壊が加速した事による環境の変化。それが全ての生命にもたらした変化でモンスターが凶暴化し、その危機に単独で対抗する力を持たない人間の防衛本能が生み出した能力。

人間の局所戦闘における最大の強み「武器を扱う能力」と「集団として戦う」の二つが最大限に引き出されたもの。

発動者の武器にディープスが集束コレクトされるのをトリガーとし、付近に居る味方の武器へとディープスが流れ込みそれを媒介として両者の

瞬間的な意識の共有がなされる事で高度な連携が可能となり「二人で同時に放つD・RC変化」ともいふべき技を放つ。

防衛本能に作用して感覚的に発動する為、相手に対する僅かな不信感でも抱いていると発動せず「無意識のレベルでも絶対的な信頼を置いている」者同士でしか発動できない。

また、D・RC変化と密接な関係がある為これを使用できないリアトリスは発動する事が出来ない。

エッジはおおよその原理を推察していたが第三元素の知識がなかった為、意識の共有がなぜ起こるのかと、そこに関わっているデープスの性質までは理解出来なかった。

第一構成元素 ハイエス

第二記憶元素 サーキュライツ

第三属性元素 デイープス

「はじめに形が生まれた、次にそこに色が付いた、そして完成した時。そこには『既に』意味があつた」

この世界の全てのを成立させている三つの要素。

普段エッジ達が術や技で扱っている「デイープス」はこの中の「属性」を司る第三元素に該当する。その為集められたデイープスはそれ自体ではただの「属性」でしかなく、第一元素ハイエスによって「実体」が与えられて初めて形を得てその効果を世界に及ぼす。

具体的には火のデイープスを手に集束した場合それだけでは熱くならないが、ハイエスで実体化して術や技として使用した瞬間にそれは「火」という形をもつて熱を発生させる。

第二元素に関しては分かっている事が少なく、基本的に第一元素や第三元素の様に深術や物理現象にはほとんど影響を及ぼさないものの全ての物質に含まれている事は分かっており、「記憶」を司り物事の連続性を確立させていると推測されている。

この事からそれぞれに第一元素は世界を「形づくるもの」、第二元素は「意味を与えるもの」、第三元素は「彩るもの」とも呼ばれる。

交深術士コンバッシヨナイザー

リアトリスの様な術者の正式名称。

通常の深術士セキユアラとの大きな違いは、その術の組み立て方。

深術士は基本的にディープスの制御が緻密では無いため大雑把に深術に必要な量のディープスを集め、それを実体化させるハイエスで縛り付ける様に固定する事で動きをコントロールし深術を使用している。

それに対して、交深術士コンバッシヨナイザーは空気中のディープスそのものと心を通わせる事で直接ディープスを制御して動かし、それを実体化させる補助としてのみハイエスを使用している、云わば「生きた深術」使い。

これにより「術を発動させる前段階で全ての動きを決めている」深術士では不可能な、「発動後のコース変更」、「術者が直に見えない海の中の相手への攻撃」等を可能にしている。

その半面で交深術士コンバッシヨナイザーの術は、術の主体が術者では無く目的のみを伝達された「ディープス」である為「空気中に特定の図形を描く」、等の一つ一つの動作に目的の無い操作は不得手。

総じて、深術に合わせてディープスを使うのが深術士セキユアラであり、ディープスに合わせて深術を使うのが交深術士コンバッシヨナイザーである。

深海の剣 アエス・デイ・エウルバ

ラークがクロウを殺してでも世界を守ることを宣言してから、一人でもクロウを助けられる力を求めたエッジが「自滅を覚悟で他人の為にだけに剣を握る覚悟」をした事で手にした、女神アエスラングが心の一族に授けた最終手段。

宝珠を凌ぐ神の力と言っても過言ではない攻撃能力「第一元素破壊」を持つており刀身そのものは勿論のこと、そこから漏れる蒼い光に触れただけで全ての物質の「実体」を破壊する。

その威力は絶大で力のごく一部にも拘らずこの剣で放ったエッジの魔神剣だけでも、ラークが傷すら付けられなかったモンスター一脚を一撃で両断する程の切れ味を発揮する（通常の魔神剣に深海の剣の力の一部が乗っているだけの状態で、射程距離や攻撃範囲は変わって

いない)。

この力は物理的な破壊能力というよりもはや『万物を分解する』という概念そのものであり、世界の法則そのものを捻じ曲げる力。

が、その強力な力の為にこの剣には悪用出来ない様プロテクションがかかっており、自己の欲望や殺意が強すぎると制御する事が出来ず、手にした人間は担い手として認められず蒼い光に飲み込まれて消滅する。

戦意そのものに反応する為、通常では武器として扱う事すら困難な担い手無き剣。

エツジはこの剣を握る事に成功するが……。

第八十八話 落葉

初めから奥義である『練毅身』を発動したクリフは足下に集めた気
の力で急加速し、敵の集団が放った深術の一つと正面から接触する。
球形だった炎が破裂して、彼の腕を焼こうとした。

『残影殻』
ざんえいかく

『殻』の防御でクリフはその身を炎弾から守って覆い、『発』の力で
それを内部から押し返す事で『瞬』の加速の為のスペースを作りだし
た。

残像の様な自分の身体と同じ形の防御壁をその場に残して、彼は瞬
間的にそこから逃れる。

全ての深練体技を同時使用する事で発動可能になった複合技『残影
殻』。

敵の攻撃を受けつつ回避するその技は結果としてその場に残像の
様にクリフの姿を残しながら、次々に深術の雨を掻い潜って彼が間合
いを詰める事を可能にした。

「クロウがみんな一か所に集めてくれたお陰だな、これなら何とかな
る」

クリフは密集して深術を放っていた子供達の首に、意識だけを奪う
『絶』を使用していき瞬く間に五人を倒した。

「相変わらず、一人で先走り過ぎだよ——でもこれで、あと九人」
それに続いてラークも二人の子供に打撃を加え、意識を奪う。

子供達は慌てる時間もなく昏倒する。
あつという間に仲間の数を減らされたバルロは『流連』のレパート
に、突っ込んで来た二人を心素銃で攻撃させる。

「セツシブバレット！」

「下がって二人共——氷装華・桔梗！」
ひようそうか きぎよう

リョウカが二人を庇うように前に出て、宵の地衣を青い華の様に氷
で盾に変える事で二人が後退する時間を作った。

レパートの間合いである10m程の広範囲に銃の連射を撒き散ら
され、クリフとラークは一度下がる事を余儀なくされる。

『殻』の守りが即座に使用できる状態のクリフはともかく、銃に対して有効な防御手段を持たないラークは相性が悪かった。

一度二人を退かせた『巖岩』のバルロは、その素早い動きに既に對抗策を打っていた。

「侵犯拒む境界の絶壁——ストーンウォール」

巨木——一瞬そう見紛う程高く地面が左右でせり上がる。

「うわ、これは流石にちよつと越えられねえか」

「僕と君なら助走を付ければ届かなくはないだろうけど、それだと時間がかかり過ぎて狙い撃ちにされるね」

いきなり変化した地形に対してクリフが漏らした感想に、ラークも同意する。

せり上がって来た岩は城壁の様にスプラウツの両脇の回り込みを防ぎ、二人は一番攻撃の激しい正面からしか攻撃を仕掛けられなくなってしまう。流石にクリフの『残影殻』でも回避出来るルートが無いと接近する事が出来ず、二人にこの人数差で深術と真っ向から戦うだけの力は無かった。

攻めあぐねる二人を敵が待つ筈もなく、再び初級深術の連打が飛来する。

リアトリスは態勢を立て直す時間を作る為それらを障壁で跳ねのけた。

「油断しないで二人とも、クロウの話なら幹部は全部で七人。まだあと一人、セルフィーが何処かに居るかもしれない」

彼女の言葉に、バルロが不快な事を思い出したかのように顔を歪める。

「セルフィーだど？あんな役立たずが居るものか」

「……どういう意味？」

あからさまな罵りにリアトリスの表情が固まった。

「あれなら殺した、貴様らの相手は私達だけだ」

驚きのあまり、リアトリスの張った深術障壁が消えかけ内部の陣の紋様だけが一瞬映る。

彼女はすぐにそれを修正し敵の攻撃を防ぎ続けたが、その表情から

動揺は消えていなかった。

「殺した？何でそんな事が出来るの！仲間だったのに」

「黙れ、貴様らの中身を欠いた感情論には反吐が出る——ロックブレイク！」

前面全てを完全に防御しきるリアトリスに対して、バルロは彼女の足下から術を発動して攻撃を仕掛けた。

リアトリスはそれを避けようともせず、眩いた。

「……地属性は防ぐなら質量を受け流すのを最優先に……『破壊』するなら、一点で叩き割れば良い」

キツ、とバルロの目を見据えて彼女は叫ぶ。

『テイアリングシャッター破壊障壁』

足下から隆起する牙の様な岩塊が実体化する瞬間に、リアトリスは剃刀の様に細い光の障壁をその中心に突き立てた。

たったそれだけの事で、「ロックブレイク」は正常に発動する事なく壊れた積み木の様に崩れる。

バルロは驚愕に目を見開いた。

「あの子の努力を、一生を嘲笑う権利なんてあなたに無い！」

リアトリスが手を振ると、飛来するスプラウツ側の深術が次々に消えていく。

炎の深術は冷気でかき消され、風の深術は軌道を変えられその余波が水の深術の方向を狂わせる。

リアトリスが障壁で防ぐまでもなく、ほとんどの深術が前衛のラークとクリフの所まで到達する事が出来なくなっていた。

「これは……」

「いつもリアは大半の深術の弱点を直感的に見抜いて防いでる、それは言い換えれば深術を破壊する事にもまた長けているって事に他ならない。その気になればリアは大抵の深術を即座に破壊できるんだよ」

リョウカの疑問に、ラークが答える。

リアトリスの攻勢で再び追い詰められたバルロは、レパートを殴り付け腕を引きずる様にして無理矢理前線に彼を立たせる。

「何を呆けている、押し返せ！」

「つ……シャイニングレイザー！」

ルオンを倒した集中砲火をレパートは再び放ち、リアトリスも流石に深術では無いそれを破砕する事は出来ず障壁で防ぐ。

狭い門の様なストーンウォールの狭間、そこを絶えず飛んでくる深術とレパートの銃撃は簡単には突破できなかった。

そんな状況で、ここまで戦況を観察していたリヨウカがリアトリスに尋ねる。

「リアトリス、今の術を空中で防ぐのまだ出来る？」

「はい、でもあの銃っていう武器の攻撃までは」

「それは私がおとくするわ、そつちの二人も援護をお願い」

仲間達が領いたのを見て、リヨウカは宵の地衣を突破力に優れる制圧形態『ほうし鋒矢の型』に変える。

身体の周りに布を巻き付け、大きく深呼吸する様に息を吸い込んで彼女はリアトリスの守りの外へ飛び出した。

「蝶ちようせんぶ旋舞！」

回転しながらのリヨウカの突進が、風車の様にレパートの銃撃を弾き飛ばしながら進む。

一瞬の間があったものの、敵の攻撃は一気に彼女に集中した。

何らかの術を唱えているバルロと銃を必死に連射しているレパートを除いてもまだ敵の子供は七人。

幹部で無い彼らが使用しているのは大半が初級深術であったものの、流石にそれだけの攻撃が集中すればリヨウカも一溜りが無い。

三角形を描く光弾と、歯車の様な水刃が彼女に迫る。

「やせなこ」

それをリアトリスは円錐形の障壁で分解した。

術はその中心を突かれ、自らの推進力で結合を失いバラバラになつていく。

後続の礫岩や氷弾も同様だった。

子供達が放つ深術は尽くリアトリスによって、リヨウカに触れる前に破壊される。

リヨウカはみるみる正面から間合いを詰めていった。

が、間合いが詰まれば詰まる程術が到達するまでの時間もまた短くなり、リアトリスの「破碎障壁」の使用間隔も加速度的に上がっていく。

そこへ、

「真空破斬！」

「『瞬』！」

クリフとラークも続いて深術障壁の蔭から飛び出した。

ラークが真空の刃を連続で放ち、クリフが気による爆発的な加速で一氣に間合いを詰める。

真空の刃一つ一つは深術に威力で劣る為、部分的に勢いを削ぐ程度のものでしかなかった。

が、それをクリフが飛び出すのと同時に行った事で、焦った敵の狙いはリヨウカ、ラーク、クリフの三者に分散する。

クリフが直線的な軌道で迫り、リヨウカにもまた前進され、敵の先頭に立ったレパートは彼らの進行を止められ無い事に焦っていた。

「くそ……くそっ！」

その顔からは血が流れ、明らかに何度もバルロに殴られている。

レパートは戦意を失いながらも、「逃げる事は許されず、背を向ければセルフイーと同じ様に殺される」という事実がどこまでも彼に引き金を引かせ続けていた。

リヨウカを追い越して先陣を切るクリフの急接近にレパート以外の子供達も焦りを見せる。

深術士は詠唱が出来なければ戦えず、間合いを詰められれば戦えない。

勝敗が決まったかに見えたその時、バルロがその詠唱を終えた。

「閉ざす龍顎、不拔の牙門——」

残された唯一の進行ルート、その両脇が再び大きくせり上がりクリフは隘路の中心に立たされる。

ラークの警告が飛んだ。

「まずい、下がるんだ！いくら『殻』があっても両脇から挟まれたら、

その防御ごと押し潰される！」

しかしクリフは下がろうとしなかった。

「悪いラーク、けど俺は……こんな奴相手に退く訳にはいかねえ！」

真つ直ぐに、『瞬』の持てる最大加速でクリフは絶壁に挟まれた谷の中心を駆け抜ける。

「——秘奥、ひおう ちがくもん地顎門」

バルロの声と共に、クリフの両側の絶壁が閉じる。

(駄目だ、間に合わない！)

クリフが隘路を抜けるより早く、バルロの奥義が彼を押しつぶしにかかる。

ラークがダブルブレードを振るって門を攻撃するが、その程度ではびくともしなかった。

「……全く、世話が焼けるわね——詠技、えいぎ すいふう翠風」

リョウカの声と共に一陣の風の帯が谷間を吹き抜けた。

そのほんのひと押しがクリフの追い風となり、僅かに彼を前に進ませる。

クリフのすぐ後ろで「地顎門」が閉じた。

彼の足下で空気が渦を巻き、その腕に堅い物体を砕く『豪』の光が宿る。

レパートが目には涙を浮かべ、半狂乱になりながらクリフへ深素銃を連射する。

が、連続使用で稼動限界が来たのか彼の手の中で銃は弾が出なくなり、カチカチと虚しく音を立てた。

「何でだよ……くそつ、くそつ、クソオオオ！もつと強くなりたい、死にたくない、戦いたくない！」

「黙れ、弾が出なくとも深術は使えるだろう。それも間に合わないならその身で盾になれば、弾除け位にはなるだろう！」

レパートの襟首を後ろから掴んで、バルロは彼を自分の身代りにしようとする。

止めを刺そうとするクリフの跳躍が迫って、レパートは反射的にその目を閉じた。

「お前は、もう戦わなくて良いんだ——待ってる」

かけられた言葉に目を丸くするレパートの上を、クリフが飛び越えバルロへその拳を振りかぶる。

「舐められたものだな、術士なら近接戦闘の武器も持って居ないと思ったか」

バルロが錬成手甲「岩堵」でクリフに狙いを定める。

『練毅身』使用中でも宙に居る彼にそれを回避する事は出来なかった。

「いいや、舐めてねえ！そんなもん正面から受けて立ってやるよ！——瞬発豪破掌！」

間合いの外から先に殴りかかったバルロの動きに連動して、空中に岩の礫つぶてが発生しクリフを叩き落とそうとする。

タイムラグなど無いに等しいその一撃を、クリフの拳は『豪』の力で打ち砕いた。

「ぐ、あああつ!?!」

酷く惨めな声と共に、あつさりとスプラウツを支配していた老人は倒れた。

同時に、時間切れになった『練毅身』が解除されクリフはその場に膝をつく。

意識を無くした自分達のリーダーに、残された子供達は困惑する。

何年もの時間を縛られて来た彼らは、すぐさま自分達が解放された事を理解する事が出来なかった。

その空気を察して、クリフが乱れた呼吸を正しながら周りに居る子供達に語りかける。

「お前らさ、行く所無いならセオニアに来いよ。「蓮の水鳥」のクリフの紹介だつて言えば大丈夫だ」

レパートがその申し出に半信半疑で顔を上げる。

「は……？何言つてんだよお前、今の今まで殺し合いしてて頭の切り替えどうなつてんだよ……」

「良いじゃねえか、こんな何も無いところで時間置いて座ってたら話す気分になるのかよ」

蹲ったレパートと子供達に、クリフは笑って手を差し出した。

「結果が同じなら早い方が良いだろう？」

「全く、無茶して……死にかけて自覚無いかしらね、あれ」

「無い訳じゃないと思うけど、きつともうそれは大事な事じゃないんだよ。彼にとっては」

「そうだね……そうやって後ろじゃなく前を向けるのはクリフさんのすごい所だと思う」

リヨウカ、ラーク、リアトリスの三人も戦いが決着したのを見届けて、彼らのやり取りを少し離れた所から見守る。

そんな彼らにクリフが手を振って呼んだ。

「おーい、こいつら船に乗る金も持って無いって言うんだけど、リヨウカの金で何とかならないか？」

リヨウカのこめかみに青筋が立つ。

「あなたねえ、貴族を財布か何かと勘違いしてるんじゃないの？ウチは全焼して、私とトウカの決闘で完全に崩れたのよ!？」

「最後の自業自得だろ！ちよつと金貸してくれるだけで良いんだって、王様が後で建て替えてくれるだろうから」

「あのねえ、そういうのは普通その当人に一言話通してからやるものよ。あなた大人なんだから金銭の事はしっかりしなさい」

「いや……そうは言ってもこいつらここにずっと居させる訳にもいかないだろう……？」

「何もしないなんて言っていないわ、良いわよ——その代わりお金返って来なかったら貴方に倍にして請求回すからね」

「!？」

しばらくして、バルロが目を覚ます。

「よう、お目覚めかよ」

辺りに子供達はおらず、岩に腰かけたクリフと、杖を握りしめて立つリアトリスの姿だけがあった。

「トドメを刺せ」

倒れたままの老人の言葉に、クリフは彼を睨んだ。

「……殺してなんてやらねえよ、勝ち負けを生き死にとセットでしか考えられない様な馬鹿は、生きてその重さを考えろ」

ふん、とバルロは鼻を鳴らした。

「そっちの娘はそうは思っていないようだが？ 憎い、と顔に書いてあるぞ」

考えを見透かされ、リアトリスは杖に込めた力を強める。

「殺したいよ、それでセルフイーが戻ってくるなら……」

でも、とリアトリスは唇を噛んだ。

「それは言い訳だから。本当はただ残された私が貴方を許せなくて、殺したがつてるだけ。だからこれは私の問題」

目に涙をためながら、怒鳴りそうになるのを堪えて彼女は続けた。

「だからこの殺意を以て私は貴方を許す。この殺意をセルフイーを失った痛みとして抱いたまま、私はそれを受け入れて生きていく」

その言葉を最後に、二人は老人をその場に残して立ち去った。

残されたバルロは倒れたまま一人、服の下の火傷の痕をなぞる。

「最後まで身勝手な事を……だが、」

宙を仰いで、諦めた様に老人は呟いた。

「私はそれに負けたのか」

彼がそうして戦うのを辞めた瞬間。

スプラウツは本当の意味で壊滅した。

第八十九話 At the lake, like 1
a s t n i g h t .

外傷はそれほど深く無かったとはいえ、ルオンとクロウの二人が負傷した事で一行は急ぎ足でファタルシス諸島手前の最後の町へと向かった。

町、というより正確には村。

カースメリア大陸の最南端にあるその小さな漁村に。

《漁の村 トレンツ》

クロウは意識を取り戻すとすぐに跳ね起きた。

そして辺りを見回し、どこか見覚えのある場所に首を傾げる。

「良かった、目が覚めたんだね」

あまり馴染みの無い男性の声。

けれど微かにその声に聞き覚えがあったクロウは、ベッドの脇に立っていた丸い男性の顔を見てようやく思い出した。

「あなたはエッジの……」

「小父だが、そうまあ血縁関係のある伯父の様なものかな」

そう気さくに笑った彼の隣で、エッジは居心地悪そうにしている。

クロウが見覚えがあったのも当然で、そこはかつて彼女が借りた自警団の二階のベッドだった。

「皆は!? 戦闘は?」

戦いが始まる直前に意識を失ったクロウは焦った顔でエッジを問い詰める。

「ル、ルオンが少し怪我したけど、命には別状ない。ちゃんと勝って全員無事だよ」

「そう、良かった」

彼女の剣幕に押されるエッジを見て、ボブが笑い声をあげた。
「ははははは」

唐突な彼の笑い声二人は戸惑って彼を見た。

「いや、いきなりエッジ君が居なくなった時は散々探して、王都のお父さんやお兄さんにまで手紙を書いたが。元気にやっていた様で良かったよ」

「それは、その心配かけてごめんなさい」

エッジは申し訳なさそうに俯いて謝る。

ボブはベッドの上のクロウに尋ねた。

「クロウさん、エッジ君はキミの役に立てたかい？」

問われた彼女は頷く。

「はい、とても……本当にとても」

そうか、とボブは何かを納得した様に目を閉じた。

「それならエッジ君を責める訳にはいかないな。大変な旅だったようだが無事に戻って来られて良かった。おかえり、二人とも」

エッジは素直に安心した様子を見せるが、クロウは目を伏せる。

「私は、いつも彼を危険に巻き込んでいただけで……」

ボブは首を横に振った。

「君はグレイス夫妻の娘さんだそうだね、エッジ君のご両親の仕事仲間だったそうだから何度かお会いした事がある。そういう生真面目な所が君はお母さんによく似ている」

「お母さん、に……？」

思わぬ所から自身の両親の話題を出され、クロウは驚く。

「ああ、だから分かるよ君は優しい子だ」

クロウは何と答えて良いか分からない様子で黙り込んだ。

ボブは今度はエッジの方に向きなおって、言う。

「エッジ君、ここは君の家だ。どれだけ離れても、ここはずっと。いつでも帰っておいで」

「……ありがとう」

エッジは大きく心配をかけて尚受け入れてくれた事への感謝を強く噛みしめて、深く礼をした。

「クロウ、その髪と目……」

「後で話す、それより今はみんなと合流しよう。話しておかないとこ

れからの事」

ボブに礼を言った二人は螺旋階段を下って、詰め所の外を目指していた。

と、クロウが足を滑らせかけエッジが慌ててそれを支える。

気まずい一瞬の沈黙の後、どちらからともなく離れ二人は建物の外に出た。

扉をくぐった途端、強風が二人の顔を強く打つ。

以前から海風はずっと吹いていたが、今吹いているものはその比では無く嵐に近かった。

二人は風上に目を向ける。

南の海の方角——天を突く焰螺旋が伸びるファタルシス諸島の方角に。

海岸に並ぶ漁船や、石弓の様な投網機の更に南。

遙か遠くの島々はそこにあると意識しなければ見落としてしまうくらい細く、二人の目には映った。

しかし、今はそれを見落とす事は無い。

その島々の中心から大きな二本の焰の柱の様なものが伸びているのだから。

が、今その光景が少しずつ変化していた。

海が渦を巻き、島の周囲で渦潮を形成し始める。

その回転はどんどん速度を増していき、同時に空気の流れまで変わり始めた。

渦潮で凹んでいた海面が徐々に上へ上へとせり上がって行き、海水を巻き上げる竜巻となっていく。

それに伴って遠く離れたトレンツに吹き付けていた風も逆流し、今度は海の方角へと流れていった。

雲一つない夕暮れの空に、ファタルシス諸島の周辺は竜巻に囲まれる大嵐の様な異様な光景となる。

「始まった……間違はなくあそこにあいつが居る」

クロウが呟く。

彼女は遠く離れたもう一人の宝珠の所持者を見据える様に、その方

向を睨んだ。

「ジード」

エツジは無意識に深海の剣の柄に触れる。

異変に気付いたらしく、ルオン以外の仲間達も二人の元へと姿を現した。

合流してすぐに、ラークはクロウの身体の変化を尋ねる。

「クロウ、君の変化は」

溜息をついて彼女は澁々ながら認める。

「うん、今まで通りって言いたいところだけど、残念ながらもうあんまり宝珠の力が使えないみたい。使いすぎると意識が身体から闇のデープスの方に行き過ぎて動けなくなる」

「そんな……」

アキが息を呑んだが、他のメンバーは暗い表情ながらも大体の察しはついていた様でそれ程のショックは表に出さなかった。

クロウは今度は自分から提案を口にする。

「それでこれからの決戦の事なんだけど……ルオンを置いていきたくない」

「それは、怪我してるから？」

リアトリスが彼女の意思を汲んで尋ねる。

クロウは頷いた。

「それもある、けど今のルオンは命じられればきつと何処にでも付いてくる。自分の意志でも無い事で命を賭けさせたく無い」

意外にも、最初に賛成したのはラークだった。

「僕は良いと思うよ。そもそも彼はスプラウツの、それも幹部であるクローバーズの生き残りだ。ギリギリの戦いになるのが分かっているこの戦いで不確定要素は少ない方が良い」

「他のみんなも、それで良い？」

それ以外のメンバーからも反対の声は上がらなかった。

クロウは一安心した表情を浮かべる。

そこで今度はアキが提案した。

「では、次は残ったメンバーで作戦を決めないといけませんね。クロ

ウさんのフォローを如何にするか」

「そうね、とりあえず……」

リヨウカがいきなりエッジとクロウの腕を掴む。

「へ？」

「ちよつと!？」

二人が意味をなさない声をあげるのも無視して、彼女はさすがと二人を輪から引き離れた。

「貴方達、絶対対にちゃんと休んでないでしょう。すぐに倒れる問題児二人はどつかでデートでもしてなさい」

抗議も聞かずリヨウカは二人を無理矢理遠くへ追いやった。

「さて、と。じゃあ、全員が使える戦法を全て整理しましょうか。ここまでの戦いで使って無い奥の手がある人も居る筈よ」

エッジ達が居なくなるとすぐに、リヨウカは真剣な表情で言った。

「ここまで使う機会が無かった技、戦いの中で成長し使えるようになった技。」

それらを一つ一つ、彼らは互いに説明する。

「——と、じゃあ決め手になるとしたらリヨウカとアキの切り札だな。で、俺とラークは空中の相手にはやっぱ有効打が無い……か」

一通り全員が説明を終えてクリフが軽く溜息をつく。

「それともう一つ事前に決めておきたい事がある、命の優先順位の話だ」

ラークの言葉に全員の間緊張が走った。

「もし全員を守れない様な状況が来たら、真っ先に僕を見捨てて欲しい」

「もう、何なのよ」

「どうしたんだろう、何か急だった気がするけど……」

いきなり作戦会議から外された二人は行く宛を無くしてとぼとぼと町のはずれを歩いていった。

特にこの辺りになじみがある訳でも無いクロウは、何処も行く所が浮かばず不満を顔に出す。

代わりに考えていたエッジが、思いついた様に顔を明るくする。

「そういえば、この近くに大昔地形が変わる様な深術が使われた跡だあって言う場所があるんだ」

「それって……」

クロウの言葉にエッジは頷く。

「うん、多分最上級深術の痕跡だよ」

《トレーヴオン森林 奥地》

二人は森の中に踏み行つてしばらく歩く。

夕暮れだった空は暗く、夜の色に染まって来ていた。

やがて森の木々が一気に開く場所に出て、クロウは息を呑む。

「湖……う？こんな大きな」

「息吹の御湖いぶきのみこって云うんだ、風で地形が抉れてこういう形になったんだって」

エッジが説明しながら北の方角の黒々とした山を指差す。

「この方向だけ木が少ないだろ？あの山の上から撃たれた術と、この湖を作った術がぶつかったらしい」

「どんな術よそれ、ここからあの山までの範囲って」

冗談だろうという様に呆れた笑いを漏らすクロウ。

「けど、この湖を作った術と互角だったなら有り得ない話でも無いと思うんだ」

エッジはそう言って改めて目の前の湖を見渡した。

澄んだ青い水面が一面に広がっている。

その大きさは一瞬海と見紛う程で、一部に見える対岸で二人は辛うじてそれが湖なのだと思いだせた。

海のそばではあれ程強かった風も木々に囲まれたここまでは届かないのか、湖面は静かに波打つ。

その光景の前では自分達も小さな点でしか無いのをクロウも実感し、思い直した様子で呟いた。

「そうだね。ちよつと座ろっか？歩き通して疲れちゃった」

エッジは頷き、二人は並んで湖の縁に腰掛けた。

「ここって、私がハクと戦ったのと同じ森の中かな？」

「ああ、広い森だから」

そっか、と呟いてクロウは彼女と戦いを繰り広げた北西の方角に目をやった。

今居る場所からは見えなかったが、そこもこの息吹の御湖と同様広範囲で木々が焼失している。

ハクが最期に自分の身と引き換えに発動させた光の柱は禁術に迫る威力を発揮していた。

「ねえ、エツジ」

明らかに問いを含んだ呼びかけにエツジは首を傾げる。

「フレットがモンスターをけし掛けたりしなければハクはスプラウツになんて入らなかつた。死ぬ事も……ねえ、私は悪くないよね？」

真つ直ぐに懇願する様な目をしたクロウに、エツジはどう返事をするのか躊躇う。

確かに彼女の言う事にも一理あつた。

事実としてフレット達スプラウツのメンバーは初めからハクという少女の特異な才能に目を付け、それを狙っていたのだから。

しかし、それでも人を手にかけてた事実を、当事者でも無い自分が「悪くない」等と片付けて良いのかエツジは迷う。

答えに窮するエツジの前で、クロウはふつと目を細めて笑つた。

「——ごめん、嘘だよ」
「えっ？」

「今のはさ、エツジならもしかして頷いてくれるんじゃないかって思つたの。そしたら……それに甘えて逃げるつもりだった」

溜息と共に彼女は言つた。

「ずるいんだよ私は。ハクの人生を狂わせた事も、この手にかけてた事実も全部忘れて逃げたいの。全然優しい人間なんかじゃない」

エツジは黙って聞き続ける。

「でも、もう言わないよ。いつまでもエツジに甘え続けてる訳にはいかない」

「甘えてるなんて、そんな事」

否定しかけたエツジに、クロウは首を横に振つて言つた。

「私は最初からずっと、一人じゃ戦えなかったんだよ。エツジと一緒に戦ってくれたからこそまで来られただけ。なのに私はずっと自分勝手だった……ごめん」

「……」

気まずい沈黙が流れ、クロウは話題を変える。

「エツジはさ、人が傷付くのが嫌いで傷付けるのも嫌いなのに、どうして自分で戦う事に拘るの?」

「それは……」

今度はエツジが悩みながら言葉を考える番だった。

クロウは湖面を眺めて大きく深呼吸しながら答えを待つ。

「そこが一番クロウに近い場所だから」

その答えを聞いて、彼女は吹き出しそうになった。

「真顔で言う? そういう事」

「それは……まあ、そう聞いたならそういう風に聞こえるかもしれないけど」

茶化されたら気恥ずかしくなったのかエツジは顔を逸らし、クロウはからかう様にその顔を覗き込んだ。

「えー? 『そういう風』ってどういう意味?」

「な、何でも良いだろ!」

二人が湖畔で戯れていると、不意に風が凧いだ。

静かに波が消えていき、二人の見える前で湖は鏡面の様になる。

夜空の星々が一面を絨毯の様に埋め尽くし、森の木々と境界がなくなっていく吸い込まれる様な光景に二人は思わず動きを止めて見られた。

「……綺麗だね、世界が壊れかけてるなんて嘘みたい」

エツジも彼女の言葉に同意して静かに首を縦に振る。

と、突然クロウがエツジにその身を預けてより掛かる。

「な、いきなりだとびっくりするだろ」

「へへへ」

クロウも気恥ずかしかったのか彼女はわざと低い声で笑って誤魔化する。

エツジは「仕方が無いなあ」と溜息をついて諦めた。

二人はそのまましばし黙って湖面を見つめた。

エツジは傍らの少女の髪を見て、色褪せて変わってしまったそれに顔を伏せる。

「ねえ、少しだけ周り暗くなっちゃうけど、ちよつと深術使っても良い？」

「大丈夫だけど……？」

「あ——」

戸惑いながらもすぐに了承したエツジに対してクロウは何かを言いかけるが言えず、目を閉じた。

黒い霧が辺り一帯を包む。

エツジに配慮してなのかそれは戦闘時のもの程濃くはなく見通せなくは無かったが、夜空と湖はぼんやりと暗く霞んだ。

「……この景色をずっと覚えておきたかったの、全部きちんと」

微かに困惑する少年の肩に頭を預けて、クロウは閉じた瞳の裏側で闇との感覚共有でその景色を脳裏に焼き付けた。

暗く霞んでしまった本物の視界の代わりに。

(ごめんね。本当はもう、こうしないとちゃんと見えないんだ)

声に出せないその言葉を抱いて、彼女は心の中でエツジに謝った。

第九十話 始まりの場所、運命の地

「ラーク、本気なの？さっきの話」

「ああ、今回の戦い有効打が無く、クリフの様に回復も出来ない僕がまず間違いない一番足手纏いになる」

明朝の出発を前に、最後の夕食を終えた仲間達は思い思いに時間を過ごしていた。

リアトリスとラークはシンの一族同士で、村のはずれの民家と森の間に来ている。

まだ「命の優先順位」の話に戸惑いがある様子のリアトリスに対して、ラークが念を押した。

「君は守りの要だ、君を欠いたら僕らは『ジード』の火力を相手にまともにも戦闘する事すら難しくなる。例え僕が倒れても、誰が倒れても君は自分が生き延びる事を考えるんだ……こういうのは決めておかないと、いざという時動けなくなる。この戦いは今までと違う、真正正銘全員の命がけだ」

「エッジの深海の剣があっても？」

ラークは頷く。

「ああ、エッジは深海の剣の力を引き出せない」

「え……どうして？エッジは剣に認められたんじゃ」

残念そうに彼は首を横に振る。

「確かに彼は剣を握れる様にはなった。如何なる利己的な感情でも抱けば即座に滅ぼされるあの剣を握れる程、エッジは本気で「他人の為に戦う事」しか考えていない。でも駄目だよ、エッジの中に、絶対に深海の剣を扱う妨げになる感情がある」

リアトリスも気付く。

「まさか——」

「エッジが「クロウを助けたい」という気持ちまで捨てない限り、深海の剣は全ての力を発揮しない……そして多分、それは無い」

ラークの言った言葉の意味を理解し、リアトリスも表情を引き締めた。

「じゃあ、どれだけ全員でエツジに攻撃の機会を作れるか……だね」
「他に手段が無くなれば僕が深海の剣をエツジから奪って使う。恐らく僕は死ぬが、あの剣の威力なら一撃でも負わせられれば『ジード』を倒せる……それより一番大事なのはその後だ」

『ジード』を倒した後。

シンの一族として二人が果たさなければいけない使命。

『ジード』から宝珠を取り戻せば、残りはクロウが持っている分だ。彼女を倒して宝珠を完全な形に戻さなければ、例え勝っても世界は緩やかに崩壊し続ける。彼女に——いや、彼女とエツジに僕達は勝たなきゃいけない。あの二人は強い……簡単に勝たせてはくれない」
「分かっている、それでも勝たなきゃ。私も覚悟は決めてる」

ふう、と落ち付く為に大きく息を吐いてリアトリスは付け足した。

「それとね、私もう一つ決めた事があるの」

「何だい？」

ラークは首を傾げて尋ねる。

「私はこの決戦の最後までクロウを守る、他のみんなと同じ様に。例え最後にはクロウを死なせるのが私の使命でも、私はクロウが大切だった事を忘れたくない。この身は使命に捧げたけど、仲間を大切に思うこの心だけは……私のものなんだから」

ふふ、と笑ってラークは決意した彼女の横顔を見守った。

「いよいよ明日ですね」

「ああ、長かったようなあつという間だった様な、もうすぐ全部終わるかと思っても何か実感湧かないな」

アキとクリフの二人は海岸を歩いていた。

あまり近付くと海水で服が濡れてしまう為、二人は波から距離を取っている。

「なあ、一応ああやって全員参加する前提で作戦は立てたけど、今からでも抜けたかったら抜けて良いんだぜ。リョウカと二人でまだこれからシントリアを立て直さなきゃいけないんだろ？」

クリフは落ちていた石を拾うと、海へ向けて投げた。

回転を加えられた石は波の上で二度程跳ねて、沈む。

海の動きはあまり穏やかでは無かった。

「ええ、長い目で見ればここで命を危険に晒すべきではないのかもしれませんが……極論で言うなら、私がこの戦いに参加しようとしているのはきつと子供じみた執着でしか無いのだと思います」

自分の行動を客観的に分析し、自分の行動はアクシズⅡワンド王国の為にならないかもしれないと認めた上でアキは言い切る。

「でもそれはジェイン・アキとして、タリア・トウカとしての結論です。『私』はたった一つでもこの戦いで役に立てる事があるなら皆さんの仲間として戦場に立ちたい——私に出来る他の事を差し置いてでも」クリフは再び石を投げた。

「それで死んじまつたら全部終わりなんだから、この先長い人生を生きるだろう事より大事なのか？」

アキはゆっくり首を振る。

「私はそんな事が出来るほど強く無いんです。例えばここで私が戦いから逃げて誰かが死んでしまつたら、きつと私はそれを背負って生きていく事が出来ない、この先一生私は自分に胸を張る事ができません」

「後悔しない選択、か……確かに後悔すると分かっているなら或いはそつちが正解なのかもな、アキ——」

再び呼び間違えそうになってクリフは頭を抱える。

そんな彼に呆れた様な女性の声が響いた。

「何回噛めば気が済むのよ、全く」

リヨウカがふわりと布を揺らしながら着地する。

どうも海岸に並ぶ漁船の一つに乗って話を聞いていたらしかつた。

「お前、どこに隠れてんだよ」

「一人で考え事してたらそつちが来たんでしよう？」

それにしつと勝手に漁船に乗ってはいけないのでは……、とアキは思ったが何も言わなかつた。

リヨウカは腰に手を当ててクリフを睨む。

「この期に及んで、まだこの子を戦いから遠ざけようとしているの？」

「そういうつもりじゃねえよ。ただ……」

言い淀む彼を見て、リヨウカは肩を竦める。

「やれやれ、本当にあなたにとってはこの子は貴族の『ジエイン・アキ』でも何でも無いのね」

言葉の意味が分からない様でアキはきよとんと首を傾げる。

クリフも何を言われたのかよく分からない様子だった。

リヨウカは説明を続ける。

「貴方はトウカも、それだけじゃ無くエツジもクロウも、スプラウツの子供でさえも皆守るべき『子供』として見てるんじゃないかしら」

クリフは凶星だったらしく、微かに呻く。

「自分でも気付いてはいたのね、いえ分け隔てなく接する事が出来るのは長所でしょうけど。ただ、クロウみたいに自立してる子にはそういうの煩わしく思われる事もあったんじゃない?」

ぐざりとクリフは思い当たる節があった様子で後ずさった。

が、リヨウカはそこで少し表情を和らげた。

「でも、それでこれだけ長く最後まで面倒見ようとしてるなら立派なものじゃない。元々それで放っておけなくて付いて来たんでしょう?子供だけで旅してた三人を」

クリフは黙り、少し考え込んだ。

「少し違うな。それは切っ掛けで本当はそんな立派なものじゃねえ。実際クロウが言ってた様に俺も自国であるセオニアの事情が絡めばそっちを優先してたしな……俺は結局の所、普通に社会を構成して自分の事で精一杯の人間の内の一人でしかねえんだよ」

ただ、と彼は続けた。

「エツジは、そうじゃなかった。あいつは自分自身よりも困っている他人のクロウを取った。それは馬鹿な——途方もなく馬鹿な子供の我儘だ、でもそんなカツコいい事本気で目の前でやられたら応援するしかねーじゃねえか」

彼は鼻を擦って言った。

「俺ら大人がそういう背中押さなくてどうすんだよ」

アキはふふつ、と笑いリヨウカは呆れる。

それでもクリフは胸を張っていた。

「でもようやく分かったぜ、何であんたが俺に対して不機嫌だったか」
「は……？」

リヨウカが眉をひそめる。

「アキちゃんの保護者としての立場取られるのが嫌だったんだな」

彼女の表情が固まった。

アキも冷静に記憶に辿る。

（そういえば、よく考えたら敵だった時から姉さんほとんど私の事しか話して無かった様な）

何とも言えない表情になりながら音もなく妹に離れられ、リヨウカは震えた。

「何よ……良いじゃない別に……」

静かな怒りと共に顔を伏せたリヨウカが呟く。

感覚的に危険を察知してアキとクリフは更に離れた。

「たった一人の妹に置いていかれて寂しかったのよ私は！」

（開き直った……!?!）

リヨウカの周囲で、彼女の怒りを反映するようにゆらゆらと宵の地衣が揺れる。

「アキちゃん——」

「——ええ、逃げましょう」

二人は即座に合意して、リヨウカから走って逃げる。

鬼の様な勢いで彼女はそれを追った。

「クリフ貴方一人っ子でしょ！一人っ子よね!?そんな人に私の気持ちなんて分からないわよ！」

「何だその滅茶苦茶な言いがかり！」

「駄目です、今の姉さんにまともな会話は成立しません。昔からあんなると手が付けられませんでした」

ザクザクと砂を踏みながら逃げる二人を、詠技の詠唱をしたりリヨウカが追う。

海岸線でのその逃走劇はしばらく続いた。

思い思いに夜を過ごした一行は、各自のタイミングで自警団の詰め所の二階で就寝する事になっていた。

トレンツは観光地でもなかった為大人数で同じ部屋を取る事が出来ず、ここで休めるのはボブの厚意によるものだった。

翌朝出発する時に起こさない様に宿へ寝かせていたルオンの様子を見て来たクロウは、一人ベッドで日記をめぐっている。

既にエツジ、リアトリス、ラークの三人は眠っており、戻ってきていないのはアキ達だけだった。

(一体何やってるんだろ……う?)

クロウは不思議には思ったものの、きつとすぐに戻ってくるだろうと気を取り直してページをめくる。

彼女が手にしているのは両親の日記だった。

シントリアで手に入れた唯一の形見を、決戦前にクロウはもう一度見返していた。

スプラウツで戦う事だけを教えられてきた彼女は、字が読めない。だからページを繰っても、リアトリスが語ってくれた以上の内容は分からなかった。

その代わりにクロウは母親の残した文字に手を乗せ、その文字の形を観察する。

ページを進める内、彼女の手は恐怖で震えた。

最後に近付くにつれて文字の列は乱れている。

それは一番最後にだけ綴られた父親の文字も同様だった。

(どんな気持ちだったんだろう、逃げながらこれを書いてた時)

これから自分もその恐怖の大元と対峙しなければならぬのだと思うと、クロウは逃げ出したくなかった。

ただ、それでも彼女はそこに綴られた想いが自分への愛情である事を知っている。

どんなに恐怖でかすれたものでも、例え読めないものであっても、そこに書かれているのは両親から自分に託された「希望」なのだ、クロウはリアトリスに教わった。

(……私に、勇気を下さい)

ふと手の汗に気付いた彼女は日記から手を離して、隣のベッドを見た。

そこには先に横になったエッジが眠っている。

湖までの往復の歩き詰めで疲れたらしく、彼は熟睡していた。

疲労しているのはクロウも一緒だったが、それでも彼女はすぐには眠る事が出来なかった。

そつとベッドから立ち上がって、クロウはゆっくりと慎重にエッジの手に触れた。

微かな振動の様なもの彼女の手伝わる。

それが、今のクロウが直接手で触れて感じられる全てだった。

温度はぼんやりとしてもうよく分からない。

(やっぱり、もう触覚も無くなりかけてる)

手袋越しの様な僅かな感触に彼女はもどかしくなる。

けれど、まだそこにある鼓動を感じる事は出来た。

(消させない、この鼓動を。絶対に)

それだけでクロウには十分だった。

夜が明け、昇り始めたばかりの日光の中でクロウは目を覚ます。

アキ、リョウカ、クリフの三人も含めた全員が眠っているのを確認して彼女は一人部屋を抜け出した。

螺旋階段を下り、ボブに見付かっているのを確認しながらクロウは玄関の扉をくぐる。

そこで大きく息を吸った彼女は、すぐ後ろから声を掛けられて縮み上がった。

「一人で行くんだね」

慌てて振り返ったクロウの背後に居たのはラークだった。

「あんた、起きてたの？」

「生憎と皆より少しだけ耳が良いからね」

気付かれた事に緊張する彼女に向けて、ラークは小さな何かを投げ渡す。

触覚が弱ったクロウは、それを不器用に抱く様にして受け止めた。

腕で挟んでしまったそれを慎重に手の平に乗せた彼女は、首を傾げる。

八重咲きのジニアを象ったブローチ、その中心にある薄碧色の石にクロウは見覚えがあった。

「これ……」

「インペルメアブル鉱石だよ、リョウカに頼んで加工して貰った。それがあれば侵食の影響を抑えて戦える筈だ」

止められるとばかり思っていたクロウは目を丸くする。

「良いの？これ宝珠を元に戻すのに絶対必要なんでしょう？」

「宝珠の力に対抗できるのは君だけだ、このまま全員で戦えばこっち側に必ず死者が出る。僕も君が一人で戦うのが最善だと判断しただけだよ」

いつも通りの笑みを浮かべるラークに、クロウは少しの間何というべきか迷ったが多少の皮肉を込めて礼を言った。

「意外に良いところあるじゃない。一応、礼は言っとく」

「礼なら要らないよ、僕としては君達が相打ちしてくれるのが一番有難いからね」

「あっそ、まあでもこれ作ってくれただけで十分だよ。あんた血も涙も無くてこういう事するのはリアにだけだと思ってた」

可笑しそうに笑いを漏らして、ラークは言った。

「僕は自分の罪の重さに苦悩したりする様な立派な人間じゃないからね——だから、リアトリスの分まで僕が背負おうと思ったんだ。こうやって犠牲を出したり裏切ったりするのは僕の役目だよ」

「まだ死んでないわよ、勝手に犠牲にするな」

クロウも目を伏せて呆れた笑いを漏らし、それから最後に念を押した。

「頼んだわよ、皆に気付かれないで」

「ああ、全部が終わった頃に向かうよ」

ラークも真剣な表情で応える。

それを確認して、クロウは改めて大きく息を吸い込んだ。

「混沌こんとんより生まれし雛ひな、明き世界あかに寄る辺よ無し、されど瞳閉ひとみとざし内うちなる

影に落ちるなら、生せいしゅつ出せし姿は一つ、暗澹あんたんたる闇よ、我を導く翼となれ——ラーヴァン！」

確かめるように一つ一つの言葉を紡いで、彼女は唱えた。

クロウの身体が少し浮かび上がり、それを支える様に黒い巨鳥が現出する。

「じゃあね、ラーク」

その一言を残して、彼女を乗せたラーヴァンは海へ向けて吹き続ける風に乗って飛び上がった。

たった一人でそれを見守るラークに見送られて。

荒れた海上を、彼女は風を切って進んだ。

緊張で痛む腹部を軽く押さえながらも、クロウは不思議と楽なのを感じていた。

地上では階段を下るだけでバランスを崩しそうになる身体も、空中ではむしろ安定している。

それが、いよいよ身体よりもラーヴァンの方の体感が強くなっていくからなのだ。彼女は理解しつつも、今はそんな巨鳥の支えを素直に有難いと思った。

「あんたともこれでお別れかもね……ラーヴァン」

答える声は無かったが、クロウにとっての相棒はそれだけの存在で十分だった。

彼女はいよいよ前を見据え、竜巻に囲まれた中心の焰螺旋を睨む。

近付くにつれ、暴風から飛び散る水飛沫がラーヴァンとクロウを濡らした。

朝の光の中でも、天変地異の様なその光景は異様に映る。

ゆっくりと位置を変える風の渦の狭間を縫って、クロウはまっすぐに決戦の場所を目指した。

「来るか……」

焰螺旋の手前に浮かんでいた『ジード』は、近付いてくる自分と同じ気配に目を開く。

目を開いた彼は、決戦の地に迷い込んだ者が居るのに気付いた。
小さな一羽の鳥。

その姿に『ジード』は手を差し伸べ、とまらせる。
飛び疲れたのか、警戒もそこそこに休むその姿を彼は穏やかな表情
で見守った。

「この世界は人間だけのものでは無いのにな……もう少し待ってい
ろ」

茶色の鳥は青年の手から飛び立った。

出口を求めて飛んだその姿は、島の周囲を回る竜巻の一つに巻き込
まれて瞬く間に見えなくなる。

穏やかなままの彼の瞳は、それを映していなかった。

《ファタルシス諸島中央 焰螺旋》

竜巻の壁を抜けたクロウは、ゆっくりとラーヴァンから降りた。

その勢いで彼女はバランスを崩して膝をつく。

一度ラーヴァンから離れた彼女は、もう自分の手でそこから起き上
がる事も困難だった。

焰螺旋の根元のこの島は開けた何も無い岩肌が広がる。

島そのものの大きさは然程ではなく、半刻もあれば一周できそう
だった。

焰螺旋の根元は地表付近で細かい光となって散っており、世界中の
デープスが緩やかにそこに向かって流れる事で初めて焰螺旋が形
成されているのが見て取れる。

竜巻に囲まれたその様は天然のコロシアムの様でもあり、天を突く
階きざはしに何かを捧げる祭壇の様でもあった。

地に伏せたままのクロウは、両手を着いて上体を起こし頭上の
『ジード』と対峙する。

「ここから全部が始まったんだっけ。あんたがイクスフェントから持
ち込んだ闇の宝珠が割れて片方はジェイン・リュウゲンに、もう片方
は私の両親に渡った。そうだよね？」

「ああ、そうだ。が、何故一人で来た？グレイスの娘」

「さあ、何でかな。絶対に来なきやとは思ってたけど……そこはあんまり考えて無かった」

真意を測り損ねた様子で『ジード』は目を細める。

「正直言えばあんまりあなたのやろうとしてる事には興味が無いんだよ。私は守りたい程この世界を愛している訳でもないし、人を殺すなんて説教出来る立派な人間でも無い。出来る事なら逃げ出したい」「なら何故ここに立つ？」

クロウは拳に力を込めた。

「私が逃げてても戦う奴らが居るから。私は勇者じゃないから世界なんて背負えない、あんたが私の知らない所で何人殺すとしても自分の命を賭けてまで止めようとは思わない……だけど、私の仲間が——大切な人が一人でも死ぬっていうなら、私は命を賭けてあんたと戦う」

『ジード』の冷めた視線を彼女は精一杯睨み返す。

「私がここに立つ理由なんて、それで十分でしょ？」
「なるほど、そうだな」

『ジード』が鷹の様な巨大な翼を広げ、上へ上へと高度をあげ始める。

戦いが始まるのを肌で感じ取って、クロウは最後に一つ尋ねた。

「そうだ一つだけ確かめておきたい事があったの」「何だ？」

日記を見付けた時からクロウが気付いていた小さな矛盾。

ずっと燻っていた疑問を彼女はぶつける。

「私に『クロウ』って名前を付けたの、あんたなの？」

「何を言っている、それはお前の両親が——」

「考えてくれたのは私の両親だよ、それは知ってる。でもそれはおかしい、私にこの宝珠の欠片を埋め込んだ時に両親が死んだなら、私の名前は後で日記を見た誰かが付けた事になる」

「……両親の仇として、俺を怨むか？」

「そういうんじゃないよ、私が殺したんだとしてもあんたが殺したんだとしても、この宝珠の力のせいで私の両親が死んだ事に変わり無

い。ただ、この名前結構気に入ってるから、はつきりさせておきたかっただけ」

そうか、と呟いて『ジード』は一気に高度を上げた。

焰螺旋に沿って上昇し、雲の高さまで達した彼は大気に命令を下す様に手をかざす。

クロウの視界の遙か果てに小さな黒い針の様なもの映った。

一本だけに見えたそれはよく見ると幾つも幾つも増え、これから降りだす雨粒の様に雲の表面を覆い尽くす。

それは全てが、クロウが使用して来たのと同じ黒槍だった。

「あれ一本でも当たったら死ぬとか、冗談きついよ」

彼女もラーヴアンを自分の前面に配置し、ありったけの黒槍を並べる。

「ブラッディランス——」

「ブラッディランス——」

黒槍の雨が、全てクロウに狙いを定める。

クロウもラーヴアンの術を砲台の様に空に目がけて角度調整する。

「千連驟雨」

トレンティアル・サウザンド
トライス・ハンドレツド

「——三 百 連！」

一斉に降り注ぐ黒槍の雨が空を埋め尽くした。

クロウも放つ黒槍を正面一点に集中し、それを押し返す。

だが、それはあくまで正面のみであり、横から、上から、射角の下から更に飛来する槍の圧倒的物量でみるみるクロウの術は折られていった。

(ダメだ、とても相殺しきれない……っ！)

ラーヴアンが槍の直撃を受け、悲鳴をあげる。

それは限界が来た事を示していた。

更に数十の槍が貫通し、形が揺らいでいた巨鳥はかき消される。

あつさりと自分の今までの戦い方を破られて、クロウは黒槍が今まさに自身を串刺しにしようとしているのを認識した。

(どうせ動かなくなるなら、この身体全部あんたにあげる。だからあんなも——持つてる力全部ありったけ、私に寄越せ！)

黒い翼が、彼女の背で鴉の様に大きく広がった。

クロウの瞳の色は元に戻らない程黒く濁り、獣の様な殺気が滲む。

『ジード』もそれを見て身構えた。

「来い、決着をつけよう」

「これで全部終わりにする。行くよ、ラーヴァン!!」

クロウの咆哮と、突き刺さる槍の音が島全体に響き渡った。

第九十一話 Wings of Hope.

クロウの手が、脚が、全身が、筋力によるコントロールの代わりに実体化したデイクスで縛られた。

人体が耐えられない様な加速に備え、幾重にも重なった障壁が多層的に彼女の身体を保護する。

同時に翼が羽ばたき、彼女の全身を起点とした深術の放射が爆発的な速度を生んだ。

彼女の姿がかき消え、数十の黒槍が空を切る。

クロウは真っ直ぐに降り注ぐ槍に向かって突っ込んだ。

幻影では無い、全てが実体を持った凶器の雨。

躊躇なくその中に飛び込んだ事でクロウの服のフードが吹き飛び、遙か眼下の海へ吸い込まれていく。

身につけたものが射抜かれる程間近に槍が迫ろうと、普通なら腕が飛ばされる様な危機を感じる距離で槍とすれ違っても、彼女は致命傷に繋がらない限り全て無視した。

千の槍が降り注ぐ空中を、クロウは『ジード』目がけて雷の様に駆け抜ける。

それに対抗して『ジード』も刀を抜いた。

「スピード、か」

『ジード』の姿も消える。

クロウと同等か、それ以上の飛行速度で間合いを詰めた彼は刀を上段から叩きつけた。

彼女はそれを身を捻ってかわし、その回転の勢いそのままナイフの様に左手から伸びた鉤爪で『ジード』の胸を抉る。

彼の胸から血液の代わりに黒い粒子の様なものが散った。

「な、に……?」

微かな驚きと共に彼は振り下ろした刀を返して、横風ぎにクロウの胴体を狙う。

が、その瞬間にはもう彼女の姿は消えていた。

「がっ、!?!」

今度は完全に無防備な背中を切り裂かれる『ジード』。
飛び散った閻属性のディープスを集束^{コレクト}することで、彼の身体はすぐさま再生され、そこにダメージらしいダメージは残らない。

一方的に連続で攻撃を受けた彼は黒い鷹の様な翼を広げ、姿を捉えられないクロウから逃れる為に持てる限界の速度で飛び出した。

そのすぐ後を追って彼女も姿を現し、追いつがる。

二人の差は縮まらない、術の出力が違う以上明らかに速度は『ジード』の方が上だった。

一度、竜巻の包囲を抜け二人は海上へと移動する。

海面擦れ擦れを飛びながら、彼は反転して攻勢に出た。

方向転換と同時のブラッディランスの連射が、間近からクロウを襲う。

だが、術が放たれた瞬間にはもう彼女の姿はその射線上から外れていた。

反射的にガードした『ジード』の態勢は、直後勢いよく懐へ飛び込んだクロウの一撃で大きく崩される。

「馬鹿な、速度はこちらの方が上の筈……」

「——そうだよ、そっちの方が速い」

彼の眩きに反応して、意識をラーヴァンに乗っ取られた筈のクロウが口を開く。

一度黒に染められた彼女の瞳の色が少し戻っていた。

「だけど、あんた人間の意識を維持するのに精一杯なんじゃない？だからジェイン・リュウゲンの身体を乗っ取って眠ってた……だから必死で生前の形を保とうとする。宝珠と同化した故に、あんたは一瞬でも意識を手放したら戻って来られない。けど——」

大きく飛び上がったクロウが、流れ星の様な軌道を描く。

『ジード』は回避できない事を悟って、その衝撃に備えた。

「私には身体がある、両親から貰ったこの身体が！だから意識を完全に委ねても戻って来られる。例えばパワーも、スピードもあんたに及ばなくても、反応速度だけは私達の方が上を行く！」

落下の勢いを加えたクロウの攻撃と『ジード』の斬り上げが拮抗し、

激突の衝撃で海面が割れる。

押しつけられた海水が高波となって戻ってくるのを避け、二人は一度距離を取った。

距離が空いた事で「ブラッテイランス」の連射で二人は互いの軌道を牽制する。

行き交う無数の黒槍が海上で水柱を上げ、水霧が舞った。

クロウは再びラーヴァンに完全に意識を委ね、距離を詰める。

宙を駆けながら戦いの場を海から空へ、そして再び竜巻を抜けて焔螺旋の間近へ移しながら幾度とない衝突が繰り返されるが、押ししているのは明らかにクロウだった。

彼女の動きを追い切れない『ジード』は、本能的な反射では決して逃れられない様彼女の周囲を完全に包囲する形で術を放つ。

「ブラッテイハウリング」

目の前で開いた黒い門にラーヴァンの意識は反射的に逃れようとするが、全ての方向を塞がれ動きが止まる。

彼女の身体は闇雲に全体に槍を放つ事で逃れようとするも、術の威力の差は大きく破る事が出来なかった。

クロウを引き裂こうと魔狼の群れが殺到する。

と、彼女の右目の色だけが黒から紫に戻った。

「――デイストーションランス！」

分散していた攻撃を一点に集中し、最大出力の槍でクロウは包囲網を破って『ジード』に肉薄する。

そのまま彼女は至近距離から術を放った。

それが宝珠の力を借りたものでは無い事に、『ジード』は気付く。

「アクアエツジ！」

闇属性で攻撃すれば即座に再生される事を学習していたクロウは、彼女自身が得意とする水属性の深術を使用した。

クロウの掌と『ジード』の間で水が弾け、闇のデイープスが拡散する。

闇属性の深術を使用した時と異なりその傷は即座に直されはしなかったものの、威力が足りず少し再生を遅らせる程度の成果しか無

かった。

宝珠の力を借りた術と違い他の属性の術は普通に詠唱時間を要する為、クロウは再び距離を取る。

明らかに防衛本能に身を任せただけのものでは無い、思考を保ったままの戦い方を彼女がしている事に『ジード』は気付く。

(……自分の意思と、宝珠の意思とで術を二重詠唱しているのか)

クロウは感情を残した右目に微かに力を込める、黒く染まった左目の方は攻撃性以外の感情が抜け落ちていた。

その必死な表情を見て『ジード』は尋ねる。

「自分が今何をしているのか自覚しているのか？お前は自分の人間の部分を鑢やすりで削る様に急激にすり減らしているんだぞ」

「構わない。例えば私の目が見えなくなっても、手が何も感じなくなっても、心が全部消えて獣に成り果しても……それでもあいつは私を変わず『クロウ』と呼んでくれる」

彼女は再び翼を広げ、真っ直ぐに飛び出す。

「私が人間として生きた証なんてそれだけで十分よ！」

黒い雷の様にクロウは宙を駆けた。

今までラーヴアンが表に出ていたお陰で感じずに済んでいた『過剰侵食』時の感覚を彼女はとても鮮烈に感じる。

遙か下方の海一面から響く波音は、どれだけの高さに浮遊しているかをクロウに思い知らせた。

急加速と同時に潮風に満ちた冷たい風で彼女は凍えそうになり、耳元は風の轟音で音を拾えなくなる。

先程まで平然と躲していた刀が顔の横を撫でていくだけで、クロウの全身は鳥肌が立った。

振り下ろされた刀を避けて、彼女はそのまま『ジード』の背後を取る。

反転して攻撃しようと急停止すると、クロウの全身は痛みで軋んだ。

「アクアエッジ！」

先程と同じ術が『ジード』の背で炸裂しダメージを負わせる。

しかし傷から拡散した黒いデープスの粒子はすぐさま逆行し、再生を始めた。

「効かないと、分からないのか」

振り向きざまに『ジード』が放った「ブラッドデイルランス」を、クロウは宙返りで避け「武器」を構えた。

「っ……フラップダーツ！」

高速で飛びながら自身の身体の動きと逆方向に腕を振るのは困難で、彼女は思い切り力を込めてスローイングダガーを投げる。

それでも飛び出したその刃は目標に届くのがやつとだった。

『ジード』はそれを切り払おうとする。

— D・RC変化 —
デープス リコレクト

「バックストライク・ショット！」

周囲を漂っていた黒いデープスを吸い込んでダガーが反転し、『ジード』の刀を避けた。

本来敵を後方から不意打ちする筈のその技は、対象に届く前に使用された事で行き場を失いそのまま海面へと落ちていく。

(空撃ち——?)

不審に思った『ジード』は異変に気付く。

クロウが「アクアエッジ」によって付けた傷が残っていた。

「……他の事に闇のデープス消費しちゃえば、再生も出来ないでしょ」

彼女は再びダガーを構え、次の深術の詠唱を開始した。

『ジード』は何も言わなかったが、改めてクロウを警戒する様にその表情を引き締める。

互いの出方を窺う様な一瞬の間。

直後、黒い槍が再び帯の様に空を埋め尽くしクロウへ襲い掛かった。

ただ降らせるだけでは彼女を捉えられないと理解したらしく、今度の『ジード』の攻撃は多方向からクロウを追い詰める。

クロウは迷わず『ジード』目掛けて飛び出した。

上下左右、果ては真後ろ……彼女の視界が届かない方向から槍が

次々に飛来する。

ほんの一瞬の思量すら許されぬ鋭利な刃の檻の中を、クロウは限られた僅かな隙間を縫って躲し続けた。

視界外からの攻撃を察知するのに彼女が許される時間は、最小限の動きで槍を避けている瞬間だけ。

一つ一つの槍をきちんと見ている余裕などとても無い。

それでも彼女は前に進み続けた。

距離を離してしまえば、有効打が無い彼女にはそれこそ勝機は無く、一時の回避の為に足を止めれば更に多くの槍に狙い撃ちされる。

だから彼女は例えそれで更に槍がギリギリの所を掠めていく事になっても前へ、前へと飛んだ。

クロウの腕を槍が掠め、血が流れる。

「吹き上がれ、奔流……」

ダガーを振りかぶりながら、クロウは『ジード』の目前に迫る。

再び彼女が水属性の深術を使おうとしているのに気付いて、『ジード』は回避に移った。

「スプレッドー！」

大きな水流が勢いよく下から吹き上がる。

それは『ジード』を追って軌道を曲げるが、先に動き出していた彼を追い切れず避けられた。

轟々と音を立てていた水柱は二人の頭上で勢いを失って、雨の様に水滴を降らせながら消えていく。

先程直撃し『ジード』に傷を負わせたアクアエッジよりも強力な深術であっても、当たらなければクロウもダガーで傷を負わせる事は出来ない。

再び距離を取る時間を彼女に与えず、一気に畳みかけようと『ジード』は構える。

が、スプレッドの生みだした水の膜が完全に消え視界が晴れた時、クロウは退いていなかった。

その身体に虹色のコレクトバーストの光を纏って。

「捕まえた——！」

水の煙幕が囷だった事に気付いた瞬間には、『ジード』の身体は海面から吹き上がる黒い闇のディープスの渦に押し上げられていた。

黒い左目に殺気を宿したクロウが宝珠の力で放ったその深術は、彼の飛行の最高速にも匹敵する速度で逃れる事を許さない。

紫の右目に全てをこの攻撃に賭ける覚悟を映しながら、クロウは「自分」の術を詠唱する。

「この身が在るは恩寵の印。継がれし力は清廉なる水、唯破壊する呪いの刃……されど全てが、私の証明！」

遙か上空から一筋の光が垂直に落下する。

みるみる大きさを増し速度を増すそれは、白く波を立てる水柱だった。

『ジード』の身体を捕えて吹き上がる黒い奔流と落ちてきた白い瀑布が空と海を結び、一本の黒白の柱を描いた。

闇のディープスの冷気が落下する水柱を氷の刃へと変え、加速する渦がその鋭利な断面へと『ジード』の身体を叩きつける。

「闇属性が効かなくても、衝突のエネルギーなら話は別でしょう!? 秘奥義——プルーフ・オブ・グレイスツ!!」

衝突の瞬間、『ジード』を捕えていた闇のディープスの渦は硬化して石臼の様になり衝撃が空気を揺らした。

止めどなく落ちてくる水が氷の刃として叩き付けられ、その破片が飛び散る。

余波だけで十分に殺傷能力を持ったそれを避けて、クロウは後退した。

「っ、はあ……はあっ」

クロウの周囲の虹色の光がゆっくりと消える。

宝珠の力の行使と、意識を保ったままの二重詠唱、それに加えてのコレクトバーストの同時使用の負荷は大きかった。

その為、彼女は最も自分に効果が薄いコレクトバーストを真っ先に止める。

宝珠で際限なく闇のディープスを扱える彼女の場合、体力と引き換えに「自分」の扱えるディープスの量を倍増させるコレクトバースト

は相性が悪かった。

とどめを刺せたのか確認しようとした彼女は、突然がくりと引き寄せられる様な感覚を覚える。

(まずい、これは……！)

氷の柱を粉々に砕いて、障壁でその身を守った『ジード』が姿を現した。

彼は術を詠唱していた、それが集める術違いのデープスの流れがまるで重力の様にクロウの身体を縛り付け動けなくする。

ここまでの戦闘で彼が使用した術は、例え空を埋め尽くす程の槍の雨でも全て詠唱など無かった。

クロウの脳裏にリアトリスの『クロマティック・クリスタル色の水晶』を破壊した術が浮かぶ。

誰も、何が起きたのか把握する事すら出来なかったその術が。

(まずい、まずいまずい！)

全速力でクロウは『ジード』から離れようとする。

しかし、あれだけの速度を出せていた力を総動員しているにも拘らず彼女の身体はゆっくりと後退するだけだった。

クロウは引き寄せられるのを辛うじて相殺するのが精一杯で、加速の為に身体から照射した深術のデープスも全て『ジード』の正面の魔法陣へと吸い込まれていく。

まるで、蜘蛛の巣に捕らわれた羽虫。

クロウの目の前で膨れ上がり続ける漆黒の塊が形を成し始める。

彼女を縛り付けていた重力の様な力が消え、最後の集束コレクトが終わった。

「避けない方が良い……安心しろこの眠りは速やかだ——『ティグルフエイズ』」

風が止まって静まり返った空気に、死刑宣告の様な言葉が響く。

抑え付けられていた分、一気に飛び出したクロウの視界が何も見通せない闇で覆い尽くされる。

防御も回避も間に合わない。

ただ、飲み込まれると確信した彼女は思わず丸まって衝撃に備え

る。

しかし、その深術はただ目の前を通過したに過ぎなかった。

間近を通過した高周波の音が急速に離れていくのを聞きながら、眼下の光景を目にしたクロウは呆然とする。

水平線の彼方まで海が割れていた。

何かが通過した衝撃で深い亀裂が入った海は、たった一瞬の間に凍り付きその瞬間の波の形をはっきり残している。

クロウがそれを辛うじて受けずに済んだのは、ギリギリまで逃れようともがいた為。

もし僅かにでも敵の詠唱を妨害しようと攻撃を仕掛けたり、防ごうとしていたら即死していた事を彼女は悟る。

「……………ん、な……………」

真正面から力の差を見せ付けられたクロウの身体は、抑えようの無い恐怖で震える。

頭上に落ちた影に気付いた彼女は慌てて、はっと顔をあげた。

首へ目掛けて振り下ろされた『ジード』の刀を真正面から受け止める形になったクロウは、その膂力の差に大きく後退させられる。

動きの鈍ったクロウはそこから立て続けの連続攻撃を受け、防戦一方になった。

一方的に敵の攻撃に振り回されながら、彼女はブラッディランスで反撃を試みる。

五本の槍が次々に彼女の手から飛び出した。

しかし、『ジード』はそれを避けようともせず、ただ受ける。

閻属性の深術で付けられた傷を即座に再生できる彼には、それを避ける必要すらなかった。

悔しそうに顔を歪めたクロウは、ふと小さな異変に気付く。

キィイーン、という音が遠くから凄まじい勢いで迫ってくる。

(まさか、か)

音の方向を振り返った彼女は小さな黒点が、一瞬にして視界の中で拡大するのを目にする。

避ける、という選択肢を取るにはその時間はあまりに短すぎた。

海を切り裂いて飛行する巨大な神槍は大気に尾を引き、氷の轍を残して一直線にクロウに迫る。

遅れている事を承知の上で彼女は全速力で回避行動を取った。

(間に合え……っ！)

槍本体だけでなく、身体をバラバラにされかねない衝撃波からも逃れる為彼女は必死に飛ぶ。

あまりに過剰なその威力の前には、掠る事さえ致命傷だった。

直前までクロウが居た空間を、槍と、衝撃波が通り過ぎる。

そこから放出された冷気のほんの端が、逃げようとする彼女の黒い翼を捉えた。

「っ……あああああああー！」

クロウの身体が一瞬にして凍りつく。

全身を刺されたまま固定された様なその痛みには彼女は叫んだ。

最高速で飛んでいたその身体は、突如飛ぶ力を失った事で錐揉み状態で落ちていく。

全身を冷水に突き落とされた様な感覚に、彼女は正常に呼吸が出来無くなっていった。

内臓まで冷気が達していなかった事が幸いではあっても、それを喜ぶ余裕など微塵もない。

「っ!？」

必死で体勢を立て直そうとする彼女は、自分を狙って飛んで来た「ブラッディランス」に気付いて落ちる速度を加速させる。

飛べない状態で出来る精一杯の抵抗も、完全に攻撃を避けるには至らず彼女の脚は傷付いた。

まともな抵抗も出来ない事に彼女は涙する。

ふと目が合ったクロウは『ジード』がただ自分を上空から見下ろしている事に気付いた。

既に何もせずとも勝敗がつく事を彼は知っている。

(くそっ……くそっ、くそっ！)

彼女の心の中に無力感が広がっていく。

(全部を賭けたのに、私とラーヴァンの力を合わせたのに、それでも届

かない……)

これが宝珠の力の差なのかとクロウは悔しくなる。

諦めずに彼女はもがき続けたが、それでも海面はみるみる迫った。叩きつけられれば待っている明確な死に、クロウの心は真つ白になる。

——だから聞こえたその声は、きっと幻聴に違い無いと彼女は思った。

「今だ、エツジ！」

「——真空蒼破塵!!」

クロウの目の前で、『ジード』の片翼が蒼い斬撃に跡形もなく吹き飛ばされる。

彼女は大きく目を見開いた。

「姉さん！もつと右です！」

「ちよつと、キャッチする寸前で大声出さないでよ！」

それに続いて、柔らかい何かがクロウの身体を優しく抱きとめた。

「クロウ!?私の声聞こえる?しっかりして!」

「大丈夫か?まだ生きてるよな!」

ラークの声。

エツジの声。

アキの声。

リヨウカの声。

リアトリスの声。

クリフの声。

そして、すっかり変わり果ててしまった自分を包む宵の地衣の感触と、治療術で消えていく痛みにも、気功で温められる身体の暖かさ。

それら全てが信じられなくて、クロウは仲間達が乗って来た船の上で呆然とする。

「もう一度だ、エツジ」

「ああ！」

エッジが深海の剣で放った二発目の真空蒼破塵を、残った右の翼だけで『ジード』は回避し、黒い槍をエッジ目掛けて落とした。

「ブラッディランス！」

「魔神剣・「蒼」！」

宝珠の力で放たれた黒槍と、蒼い光を纏った斬撃が衝突した。

エッジの放った技が貫通し、『ジード』はそれを苦々しい表情で再び躲す。

エッジが深海の剣で敵の注意を引き付けている隙に、一行を乗せた船は島の岸に着き仲間達は次々に上陸する。

一度戦意を失いかけたクロウに、アキが声を掛けた。

「ごめんなさい、ラークさんに言われて急いだのにギリギリになってしまつて」

「何、で……！」

クロウは「何故来たのか」、「来たら死ぬと分らなかったのか」そんな言葉を言いかけて詰まる。

否定の気持ちよりも、仲間が来てくれた事の嬉しさの方が彼女の中で何倍も勝っていた。

だから、クロウは言いかけた言葉を誤魔化してラークに怒鳴る。

「あんた！私一人に任せるって言ったわよね？」

「ああ、ごめん嘘だよ。一騎討ちになれば必ず隙が出来ると思つたら、そこを不意打ちした方が良いかなと」

悪びれもせずに言った彼の言葉にクロウは絶句した。

「魔神剣・「蒼」！」

「禁忌の剣か、まずそれから潰させて貰う」

エッジが再び宙に向けて蒼い斬撃を飛ばすが、もう縦横無尽に飛びまわる『ジード』を捉える事はとても出来なかった。

クロウは一度折れかけた決意を新たにして、もう一度大きく翼を広げる。

「それじゃダメだよ、いくらその剣でもあの高さには届かない」

「クロウ……？」

傷を治療する時間を稼ごうとしていたエッジは、体力を消耗してい

る筈にも拘わらず直ぐ様立ち上がったクロウに少し戸惑う。

彼女はその手を、エッジに向かって差し出した。

「だから、私とその剣を届かせる——片方では駄目でも私のスピードとエッジの攻撃力を合わせればきつと出来る」

エッジは頷き、その手を取った。

「私の手を絶対離さないで」

「分かった」

二人が動く中、リアトリスが言った。

「エッジ、クロウ、みんな、私が詠唱する間何とか耐えて！そうしたら後の攻撃は私が全部何とかする！」

仲間達全員が見守る中で、大きな羽ばたきと共に手を繋いだ二人は真っ直ぐ空へと飛び上がる。

蒼く輝く希望を乗せて、黒い翼は『ジード』を目掛けて宙を翔けた。

「行くよ、エッジ！」

「ああ！」

第九十二話 七重結界

「師団長！今度は中央商店街の方で暴動が！」

「分かった、すぐに向かう。風属性と水属性の深術士部隊を優先して事に当たらせる」

中央大陸。

王国の王都シントリア南の街ハスレで、ブレイド・アズライトは部下達と奔走していた。

既に一つ暴動を押さえた直後だったが、騎士達は休むことなく報告があつた場所へと向かう。

南東の焰の柱の周囲で竜巻が観測されてからずっと、彼らは次々に正気を失つた様に暴れ出す人間を抑えるのに追われていた。

「昨日からもう五度目か、しかもペースが上がっている。中継拠点街ブストルやワニープスからの報告も同様か」

再び鎮圧を終えたブレイドは他の周辺の街からの報告を整理する。暴れ方は個人によつてかなり程度の差があり、その理由も元々ハスレに住んでいた住民と王都からの避難民との摩擦から、買い物中での小さなトラブルが原因のものまで様々。

暴行事件ほど問題にはなっていないかつたものの、中にはその場にしてやがみ込んで唐突に動かなくなつてしまう者もあり、正気を失つている人間の総数は二百を超えていた。

（事件の数はそれほど差が無いが、王都からの距離で精神症状が出ているものの数に大きな差がある？）

地図と照らし合わせながら状況を整理していたブレイドは《災厄の町 カトマス》以南の町でほとんど事件の被害が出ていない事に気付いた。

「南へ向かうべきか……住民全てを連れて」

ブレイドが口にした判断に、傍らの老騎士が不安材料を挙げる。

「しかし、師団長。現状での移動は困難です。それに外壁の外には凶暴化したモンスターが居りますが……それでも宜しいのですか？」

「このままの状態が続けばもつと避難は困難になっていく。ゆっくり

と全滅するのを待つか、犠牲者を出してでも移動するか、か」

決断を迫られながら、ブレイドは暗くなつていく空を見つめた。

天を突く炎の柱に向かって、黒雲が流れていく。

今や晴天を保っているのはファタルシス諸島の周辺地域だけで、それ以外の地域の気候は目に見えて変動し始めている。

異変の中心であるその方向を見つめて、ブレイドは今もどこかで戦い続けている筈の弟を思った。

(お前はそこに居るのか……？ エッジ)

セオニア大陸。

首都ウォーギルトの裏通りにある孤児院の前で、そこを預かるチリアはそわそわと石畳を往復していた。

北の王城の方角から走ってきた子供達を見て彼女は、張り詰めていた表情を一気に崩して彼らに駆け寄る。

「何処に行つてたんだい！」

「海が……さつき凄いい音がしたから丘の上からみんなで見たら……海が割れてて……」

子供達は世界の終わりを目にした様に怯えながら、チリアの腕の中に飛び込んだ。

彼らの頭を撫でながらも彼女もまた先程海の方から聞こえてきた音に不安を覚えていた。

まるで国を丸ごと吹き飛ばす大砲が放たれた様な異様な地響きと、固い何かの瓦解音。

もしそれが今自分達のいる場所を直撃していたら、と考えると彼女は怖かった。

と、どこかで怒声が上がってチリアは子供達を反射的に庇う。

「屋内に逃げろチリア、外はどんどん危なくなつてきている」

そんな子供達と彼女の前に、クリフと同じ部隊「蓮の水鳥」に所属していた青年——マイロが現れた。

彼はチリアに孤児院の中に入る様促しながら、子供達を守って周囲を警戒する。

「ありがとう、あんたも気を付けて」

「クリフに頼まれたからな、離れる訳にはいかない……姿が無くても何処までも勝手な奴だ」

マイロにそれ以上負担をかけない様に、子供達全員をしつかり連れながらチリアは孤児院の扉をくぐった。

安全な室内に逃れながら、彼女はそこに居ない少女の事を案じる。
(無事でいるんだよ、クロウ)

蒼い剣の輝きは黒い翼に乗って飛んだ。

クロウの飛行速度でエッジの握った剣の軌道が、空中に蒼い跡を残す。

その遥か眼下でリアトリスが最初からコレクトバーストを発動し、詠唱を開始していた。

「包み込むそよ風……地潤す雨水……堅牢なる岩肌にして、万難絶つ烈火」

二人は彼女の詠唱時間を稼ぐため瞬く間に『ジード』に迫る。

一気に間合いに入って来た自身を脅かす禁忌の剣を、『ジード』は身を振る様にながら方向転換して躲した。

片翼だけになった事で彼の飛行速度は低下していたとはいえ、それを追う二人の内飛べるのはクロウだけ。

重い荷物を負っているのも同然の彼女は曲がる瞬間二人分の重量で遅れ、『ジード』に大きく引き離される。

「エッジ、方向転換の瞬間に足場を空中に作るからそれを蹴れる？」
「ああ、スピードは加減しなくて良い。早めのタイミングでさえ出してくれればこっちで合わせる」

「言ったわね！」

急加速してクロウは再び『ジード』の後を追う。

彼が目の前で方向を変えるのを見てクロウも進行方向に障壁を展開し、一気に向きを変えた。

遠心力でエッジが大きく外に引っ張られて二人の繋いだ手が伸び切った瞬間、エッジも障壁を蹴って進行方向を変え持ち直す。

「まだスピードのロスが大きい。クロウ、もう一步前の位置に作れるか？」

「分かった、その代わりほとんど回転しながら走って蹴る様な形になるわよ」

「大丈夫、それで良い！」

一步間違えれば手が離れてしまう様な速度を出すクロウと、極限まで自分の動きを彼女に合わせるエツジ。

連携で二人の動きは見る見るうちに速くなっていく。

『ジード』の飛行速度が低下した事でそれを上回る飛行速度を手にしていったクロウは、瞬く間に彼との間合いを詰める。

「落ちろ、ブラッディランス——千連驟雨！」

トレンティアル・サウザンド

再び距離を詰められ、『ジード』は深術を頭上からエツジとクロウ目掛けて放った。

彼の手の一点から広範囲の空間に向かって円錐形に黒い槍が無数に飛ぶ。

「エツジ！」

「ああ！」

同じ方向に向かって飛んでいた二人は、掛け声と共に別々に動く。

クロウが大きく後ろに宙返りし、慣性で前へ飛ぶエツジは障壁を駆け上がる様に蹴った。

同時に逆方向に動いた二人の繋いだ手が中心となって、それは急激な回転を生み出す。

「転翔斬！」

エツジが剣を振るうのに集中できる様、クロウは両手で彼の手を掴んだ。

蒼い剣閃の帯が、車輪のように槍の雨を切り裂く。

拡散した深海の剣の元素破壊能力は二人の周囲の槍をまとめて消し去った。

しかし、

「くっ、ブラッディランス！」

「巡らす雷網、捕らえて焦がす——スパークウエブ！」

二人は自分達の方に向かって来なかった黒槍を必死に叩き落とす。それらはエツジがコレクトバーストを使用した雷の包囲を破り、クロウの追撃を振り切つて地表へ落ちていく。

「――陽光差す午天に……時の境界生む宵闇よ……」

未だリアトリスの詠唱は終わっていない。

防御を持たない仲間達の上に、黒槍の雨が降り注いだ。

「ラーク、俺の武器に溜めた分先に使うぞ」

「了解、水属性だっけ？」

迫る避け様の無い深術の雨を見上げて、クリフとラークが並んで武器を構える。

「姉さん、そちらからお願ひしても良いですか？」

「良いわよ、任せなさい」

リヨウカの『宵の地衣』から、アキの『明の天傘』へ栗色の光が走つた。

クリフが身を低くし足払いの様な動きで水の陣を作る。

リヨウカは八の字を描く様に舞い、アキはその場で斧を振り回す様に武器をスイングさせた。

直後、クリフの武器からラークの武器へと青い光が走る。

――本能共鳴技――

「龍虎滅牙斬！」

「双舞・天月！」

水流と共にクリフが放ったアツパーに乗ってラークが跳び、受け取った水のディープスで水柱を飛瀑へと成長させて降下と共に叩きつけた。

同時に、アキとリヨウカが鏡に映した様に揃った動きで武器の軌道を上へと変え、それをなぞる様に岩が実体化する。

交差する様に牙を剥いた大地と、龍の様に渦を巻きながら吹き上がる水流がリアトリスを含めた五人のいる地点を辛うじて守り抜いた。

エツジとクロウは、ほっと胸を撫で下ろす。

アキが上空の彼女に届く様に叫んだ。

「クロウさん、私達全員の武器に溜められるだけのディープスを集束

しました！私達の事は無視して戦って下さい！」

頷いて、クロウは再びエッジと共に『ジード』に攻撃を仕掛けた。接近を阻止しようと彼が放った「ブラッディランス」を、二人の連携の回転斬り「転翔斬」が打ち払う。

エッジの剣の光が撃ち洩らした分の攻撃は、クロウが羽根を広げて「ブラッディランス」で迎撃する。

一対一では回避以外の選択肢が難しかったクロウは、エッジの助力を得た事で最短距離を選択して『ジード』との間合いを詰める事が可能になっていた。

回転の勢いそのままに迫って来た二人の斬撃を『ジード』は既^{すんで}の所で避ける。

一見すると優勢なのはエッジとクロウだったが、二人の表情に余裕は無かった。

二人は離れかけた敵との距離を直ぐ様詰める。

リアトリスが詠唱を開始してから明らかに『ジード』は地上の仲間の方を狙っていた。

その為、エッジとクロウは何とか自分達に注意を向けさせようと猛攻を繰り返す。

地上の仲間達が『本能共鳴技』で防げる攻撃は精々二、三回。

それが分かっていたからこそ、エッジは全員の武器にディープスのストックがある事を知っている。「スパークウエブ」を使用せざるを得なかった。

不意に、逃げる一方だった『ジード』がいきなり反転して接近してきた二人は身構える。

その脇をすり抜ける様にして、彼は急降下した。

「しまっ——」

「くっ、逃がすか！」

エッジが「魔神剣・「蒼」」で追撃をかけようとする。

しかし、明らかに手遅れだった。

(まずい、さっきの術全部が直に降り注いだら！)

「——真なる守りは隔^{へだ}たり^あらに非^あず、其はただ仇成^{あだ}す者のみを退ける」

リアトリスの詠唱も終盤に差し掛かっていたものの間に合わない。「お別れだ、ディエルアークとその仲間達」

エッジとクロウが大半を消し去ったものでも、四人がかりで相殺するのがやつとだった『ジード』の力。

二人の手の届かない所から、彼はそれを仲間達へと向けて放とうとした。

そこへ、彼方から小さな青白い光が飛来する。

小石の様なそれは『ジード』の胸に吸い込まれる様に接触した。

動作を妨害するには程遠い威力の干渉。

しかし、それは黒羽の青年に接触すると開花する様に大きく光を放ち、

彼の全身を氷で拘束した。

その遙か北方の漁村トレンツで村人全員から歓声上がる。

氷のレンズで命中を確認したルオンも軽く息をつく。

少し前、戦いに置いていかれたルオンは海の彼方を目掛けて一人幾度も弓を引いていた。

しかし、耐冷弓「フレキシブルスナイプ」の性能を最大限に発揮させても数km離れた所で高速で飛行する『ジード』を捉えるのは困難で、幾度も矢を放つ内に少年の手は赤くなりかけていた。

何度も何度も目標を外しながらそれでも真剣に矢を放ち続ける彼を見兼ねたトレンツの人々は、漁業用の投網バリスタを一つ改造した。

とはいえ急造のそれは比較的丸い石を弾として飛ばすのがやつとで、ルオンの深術で初速を底上げしても撃ち出すのに大人数の力を要した。

何度も遙か手前で落ち、ファタルシス諸島の周囲の竜巻に叩き落とされた弾が目標を捉えたのを見て、村人達は一丸となって喜ぶ。

ただ一人、今の一撃が偶然に過ぎない事を分かっていたルオンだけ

が険しい表情で次弾の準備をしていた。

「ボブ、ちよつと離すのが遅かった」

ルオンに睨まれたボブは縮こまる。

「す、すまない」

「ははは、こんな小さい子に怒られちまったな！」

「仕方ないだろう！私はこんなもの触るのも初めてなんだぞ！」

村人たちの間で笑いが上がったが、本気でボブを責める者は居ない。

それを見てルオンは少し考えて、言った。

「……でも、今のままで良い」

ボブは戸惑った様子だったが、ルオンが次の狙いを定めたのを見て大綱を引き号令をかける。

「よーし、皆！さつきと同じ様に思いつきり引くぞー！」

「おおー！」

村人達の力で本来引き絞る距離より更に長く大綱は引かれ、それを客観的に判断したルオンが狙いを微調整し深術の詠唱をする。

見ず知らずと言つていい大勢の人間が自分に手を貸してくれるのを見てルオンは思った。

（さつきも全員完全に同時に離せてなかった……けど、それがお互いに打ち消し合ったから真つ直ぐ飛んだ。だったら多分……それで良いんだ）

ふと、彼は『孤氷』と呼ばれた自身の狙撃していた距離を思い出し、その何倍の距離を狙っているのかを考えて可笑しくなる。

ルオンの出した合図で村人が一斉に手を離し、その力を凍って固定されたバリスタの土台が余す所なく弾に乗せた。

氷の力を込められた弾は白い筋を残しながら真つ直ぐに南の空へ翔ける。

彼の心はもう孤独でも無ければ、凍りついてもいなかった。

二撃目の氷弾が『ジード』の身体を直撃し、彼の全身を氷の結晶の中に閉じ込める。

予想もしなかった助けに全員が驚く。

クロウはその攻撃の威力に呆れた笑いを漏らす。

(ここからどれだけ距離あると思ってるのよ、そんなのもう狙撃でも何でも無い。そんな当たるか分からない攻撃に……全力を込めて撃つたの?)

ルオンが全力を込めて発生させた氷も『ジード』はすぐに砕いてしまう。

しかし、その僅かな時間だけでも十分だった。

エツジの魔神剣が届き『ジード』は攻撃を中断して回避に移らざるを得なくなる。

そして、リアトリスはその詠唱の最後の一節を終えた。

(ありがとう、ルオン……あなたが作ってくれた時間、絶対無駄にしな

い!)

「現存せし最後の聖櫃よせいひつここに……七重想結界しちじゅうそうけつかい、リマイン・アーク!!」

紫、黄緑、水色、茶、真紅、白、黒。

実体化するかしないかの薄い七色の光がリアトリスから飛び出し、直線的軌道で仲間達の頭上の空で枝分かれしながら大樹の枝の様な伝達網を形成していく。

まるで植物の成長を早回しする様なその光景。

範囲こそ上空のエツジやクロウまで包み込む程の規模だったものの、明らかにそれはまだ防壁としての機能を備えていなかった。

そこへ、『ジード』が再び深術を放つ。

「それでは間に合うまい……ブラッディランス——千連驟雨トレンティアル、サウザンド」

「いいえ、ここから三十秒、あなたの攻撃は一つだつて通さない」

無数の黒い槍の一番最初のものが触れるのと同時に、リアトリスが張り巡らせた網に真紅の光が走った。

大樹が花開く様に、リアトリスの張り巡らせた網の外縁部全体に瞬時に七色に輝く水晶が形成される。

空を覆い尽くす様な『色クロマティッククリスタルの水晶』の防壁と、黒槍の群れとが接触する音が無数の箇所が発生した。

鈴の様に不思議に透き通った、それで居て鳥肌が立つ様な数の、明確な危険を伝える雨音。

それと共にリアトリスの防御術は『ジード』の術を完全に防ぎ切った。

「みんな、この術が保ってる間が最初で最後のチャンスだよ。お願い、ここで決めて！」

そう口にした彼女の目からは以前『色の水晶』を砕かれた時の恐怖の色は消えていた。

第九十三話 『この剣を使つてはならない』

リアトリスが術を発動してすぐに、彼女を守る様な陣形を取つていたアキとリヨウカは全力を込めて詠技の準備に入った。

ラークとクリフも、少しでも『ジード』が高度を下げた時を見逃さないよう攻撃の体制を取る。

上空で近接戦闘を仕掛けていたエツジとクロウが飛び出すのと連動して、空を覆つていた『色クロマティッククリスタルの水晶』が二人の動きを妨げない様に解除された。

防御壁が無くなった所へ、『ジード』の黒槍が再び飛来する。

「させないー」

リアトリスの光の網に緑の光が走り、今度は狙われたアキとリヨウカを守るようにピンポイントで『色クロマティッククリスタルの水晶』が展開され闇の深術を弾き返した。

「リマイン・アーク」——空全体に伸びるデーパープスの伝達網で『ジード』が無詠唱で放つ術全てを即座に感知し、敵の術と同等の速度で全属性の元素を七色の防壁に編み上げ、味方の攻撃に合わせてそれを再び解除する事で敵の攻撃だけを一方的に防ぐリアトリスの切り札。

コレクトバーストまで併用しながら彼女は敵味方全ての動きに合わせてその術を行使していた。

当然の様に彼女の体力は急激に消耗され、リアトリスは額に汗を浮かべる。

しかし、それによつて全ての力を攻勢に傾ける事が可能になった仲間達の攻撃が『ジード』目掛けて襲いかかった。

「魔神剣・「蒼」！」

クロウと共に上を取つたエツジが、深海の剣の斬撃を放つ。

急降下してそれを躲した『ジード』の視界を今度はクロウの霧が奪つた。

「——マーシレススパート！」

範囲内の敵の動きを鈍らせ、生物の体温を奪い尽くす黒い霧。

生き物ではない属性元素デーパープスの意識集合体である『ジード』に対してダメージは通らなかつたが、その突き刺すような冷気は羽根に干渉して確実に彼の動きを鈍くさせた。

が、クロウ以上の力を持った『ジード』はそれを同じ術で押し返し、翼に降りた霜を吹き飛ばして簡単に無効化する。

二人の放った霧は周囲へと拡散した。

視認による位置確認が困難な状況になっても、闇のデーパープスを手足の様に扱えるクロウと『ジード』は容易く互いの状況を把握する。

「視界を奪う意味は無いと分かっている筈だ」

「一対一ならね、私はもう一人で戦ってる訳じゃない」

自身の知覚域の外側を、クロウの知覚域が依然として遮断している事。

エッジの一撃を回避する為に高度が下がっていた事。

その二つに『ジード』が気付いた瞬間、黒い霧が切り裂かれる。

掌底を砲に見立て、クリフの気の力で高く跳んだラークが身を捻った。

「裂空螺旋斬！」
れつくうらせんざん

弾丸の様に飛び出したラークの気を纏った剣閃で、黒い霧がズタズタに裂けて晴れる。

切り裂かれた『ジード』の翼は瞬く間に再生するがその僅かな時間、

青年の羽は空気を受ける事が出来ず速度が鈍った。

そこへ、急降下したエッジとクロウの深海の剣の一撃が落ちる。

「ぐっ！」

『ジード』の胸が切り裂かれ、黒い粒子は舞ったそばから蒼い光に分解され再生する間もなく空気に溶けた。

一歩遅ければ致命にも近かつた一撃に、彼は至近距離からの反撃で応える。

「濡羽狩」
ぬればがり

リアトリスによって実質的に深術を封じられた『ジード』は滑り込む様にエッジ達との距離を詰め、踏み込みの効かない空中で刀に勢いを乗せる為に直前で自身の左脚のみに制動をかけた。それにより自

身の身体に回転を発生させた『ジード』は武器を振り下ろし、立て続けに流れる様な連撃を繰り返す。

「真空破斬！」
しんくうはざん

「飛燕弾！」
ひえんだん

「裂空螺旋斬」の発動後で落下しているラークが中空から飛ばした斬撃と、地上からクリフの放った気弾が時間差で『ジード』の刀を弾き返した。

それによりエッジとクロウを捉えかけた連撃は辛うじて止まる。

「——結晶化！」
ジエネライト

その一瞬、敵との間に再び空いた僅かなスペースに、リアトリスが伝達網によって詠唱を破棄した『色クロマの水メイツク晶クリスタル』を展開する。

防壁に遮られた『ジード』は急制動をかけてその手前で止まった。

近接攻撃まで封じられた彼は翼を大きく広げて一気に離脱に転じる。

「逃がすか！」

その後を追ってクロウもエッジと共にスピードを上げた。

しかし、一直線に間合いを詰めた二人の追撃を『ジード』はいなす様にして躲す。

片翼になって速度が落ちたとはいえ逃げに徹した青年のスピードはクロウ達とほぼ直角であり、先を行く『ジード』の側に主導権があった。

エッジとクロウは焦りを募らせる。

「クロウ、これ以上高度を上げられ続けたらリアトリスの術の効果範囲外になる」

「分かってる、けど……！」

クロウは幾度も接近しながら攻撃が届く直前のところで敵にコース変更され眉間に皺を寄せる。

「俺が何とか出来ないかやってみる」

エッジはそう言うと、わざと少しだけ敵の移動ルートを外して「魔神剣・蒼」を放った。

自身の上方向ギリギリの所を掠めていったそれに『ジード』は一瞬

高度を落とさざるを得なくなる。

エツジの狙いに気付いた彼は次の攻撃が飛んでくる前に再び上昇に転じ、『ジード』のその行動を読んでいたクロウが牽制の「ブラッディランス」で彼の動きを鈍らせ再び追い続ける。

空に二本の黒い線が絡み合う糸の様な複雑な軌跡を描き続けた。

リアトリスも『ジード』の行く手を遮る形で次々に『色クロマの水晶マティッククリスタル』を展開しエツジ達の補助をするが、両者の常軌を逸した速度の戦いの中ではそれらもほんの一瞬の足止めにしかなかった。

刻一刻と迫る「リマイン・アーク」の制限時間に、地上で何も出来ないクリフとラークは歯噛みする。

ただ、二人アキとリョウカだけが目を閉じて戦場の物音を遮断し、詠技を放つ為のディープスを集め続けていた。

アキの周囲で赤い花、リョウカの周囲で青白い葉を思わせる光が陽炎の様に揺らめく。

普段の戦闘では使用できないほど長時間の集束が、実体化せずとも視認できる程に属性元素ディープスの濃度を高めていた。

「風樂ふうがく一閃いつせん——ガスティーネイル！」

エツジが放った風の刃が『ジード』の直下の空気を切り裂き、それによって生まれた真空が彼を下へと引き込んだ。

沈みこんだ彼を上から更にクロウが鉤爪で叩き落とす。

「リアー！」

「リマイン・アーク」のコントロールが粗雑になる効果限界地点から完全な有効射程内に『ジード』を落とした瞬間、クロウは地上のリアトリスに向けて叫んだ。

高速で飛行していた彼を、リアトリスの術がようやく捉える。

再び高度を上げようとする彼の鼻先で七色の水晶の障壁が出現し、それを見て方向を変えようとする『ジード』の行く手を次々に塞いだ。

「俺の動きを封じるつもりか？だが——」

「聖櫃」の名の通りの完全な包囲はしかし、完成したそばから亀裂が入る。

「ぐ……っ！」

術の維持で手から抜けかけた杖をリアトリスは握り直した。

自身を閉じ込める術が弱まった瞬間を『ジード』が見逃す筈も無く、背中の翼を針山の様に変化させる事で内部から全体を圧迫して障壁を突き破ろうとする。

更に亀裂が増え、上空で崩壊しかける『色クロマティックの水晶クリスタル』の檻をリアトリスは懸命に抑え付けた。

「どうやらここが限界みたいね、これ以上集束する時間は無いみたい」
「はい」

姉の呼びかけに、妹は緊張した面持ちで答える。

地上のリョウカとアキは詠技の最終段階に入っていた。

「姉さん……」

「何？」

もう一刻の猶予も許されぬ中これが最後の会話になるのが分かっているながら、リョウカは躊躇いがちなアキの呼びかけに軽い調子で答えた。

「私を、姉さんと家を捨てて逃げた私を……信じてくれますか？」

妹の問いにリョウカは表情を緩ませる。

「バカね。ずっと信じてるわよ、もういちど一緒に歩くと決めたあの時から」

二人は互いの武器を接触させた。

『明の天傘あまがさ』に蓄えられた火のディープスと『宵の地衣よいちぢも』に蓄えられた氷のディープスが反発し、武器から飛び出す。

弾けた赤と青は二人の周囲を回りながら徐々に実体化していった。リョウカがその中心に立ち、アキはそこから慎重に間合いを測ってその一歩外側で足を止める。

炎と氷が描く二重の円は、一周毎に勢いを増しながらその輪を二人に向けて狭めていた。

交互に巡る光に照らされながら姉妹は互いの目を見て、呼吸を合わせる。

アキが傘を振って自分の武器に溜めたもう一つの属性である「風」を投げ渡し、リョウカもそれを衣で受け取りながら「地」の属性を投

げ返した。

「熱波を翼に——」

「——凍土を刃に」

アキは武器で地属性を受け取りながら、足元まで来た氷炎を避けて跳び上がった。

直後、彼女の真下を通過し自身へと迫る二つのデイープス塊を躲しながらリヨウカは衣を左巻きに自身の身体へ巻き付ける。

次の瞬間、ぶつかり合った二属性が爆発を起こすのと、リヨウカが右へと逆回転しながら爆発の勢いに乗せて「宵の地衣」を伸ばすのに転じるのと、その硬質化した衣にアキが着地するのはほとんど同時だった。

「この身、矢と成す——」

「——この身、弓と成す」

一糸の乱れもない二人の呼吸が、全ての動きを噛み合わせて空の一点を狙った。

二人の頭上で『ジード』を拘束していた「リマイン・アーク」の水晶が限界時間を超えて砕け散る。

「二寸光陰に煌めけ——！」

「——千紫万紅の輝きよ！」

開かれた「明の天傘」が荒れ狂う熱波と冷気を受けて推力へと変換し、風のデイープスの力を得て最大限に伸ばされたリヨウカの「宵の地衣」が真っ直ぐにアキを宙へと撃ち出す。

「鏡詠技・桜花弓鳴閃！」

拘束が解けた『ジード』は砕けた水晶の檻から飛び出した。

黒い鳥の様な翼を広げるその様は、虹色の殻を破る孵化を思わせる。

直前まで身動きが取れなかったとはいえ、その初速は既に青年の姿が霞む域に達していた。

仲間達は間に合わなかったことを確信する。

その一瞬、飛び出す際の隙とも呼べない刹那。

彼女を撃ち出したリヨウカの手元から遙か上空の『ジード』までを

アキが駆け抜け、一筋の軌跡の光が繋がった。

アキの「明の天傘」に限界以上に集束された地属性の余剰デュープスが彼女が推進力とした火と氷のデュープスと結合して硬質化し、細かいガラスの欠片の様に砕けて炎陽えんようの様な——あるいは氷華の様な景色を空に散らす。

地上から空までを一気に貫いたその一撃は、『ジード』の身体をも貫き彼の左腕部を吹き飛ばした。

「ぐ、っあああああああああああー！」

今度のダメージは再生しなかった。

生物では無くただの第二元素の集合体である『ジード』に致命傷というものは無かったが、一度に人としての生前の姿を大きく崩された彼は元の姿を再現する事が出来なかった。

片翼片腕の人と鷹の翼が混ざった様なその姿は、いよいよ人とは呼べないものになる。

「人としての精神が崩れた……？」

彼と同じく心身を宝珠に侵食されているクロウは『ジード』の意思が弱まっていくのを感じ、エツジと共に攻撃の手を止める。

技を終えたアキは広げた傘で落下の速度を制御しながら着地に移り、宝珠を破壊するわけにはいかない仲間達も相手の出方を見守って戦場には一転して静寂が訪れた。

島の周囲で渦を巻く風の音が、思い出したように戻ってくる。

と、不意に人形ひとがたから崩れた『ジード』の輪郭が蜃気楼の様しんきろうに更に歪んだ。

その現象を見て何かを悟ったクロウの顔から血の気が引く。

「みんな、逃げて!!」

狭い島内で逃げ場など無いことくらい彼女も百も承知だった。

それでもクロウは他の言葉を思いつかず、警告を発さない事は出来なかった。

デュープスの集束で歪んだ空間が元に戻り、その勢いで黒槍が今までの倍以上の速度で撃ち出される。

クロウが自身の心の制限を乗り越えた事で使える様になった「デュー

ストーシヨランズ」と同等の威力の術が、幾つも、幾つも、無造作に空を裂いた。

それらは一番近い所に居たエッジとクロウに真っ先に襲い掛かる。

「魔神——」

「エッジ！」

仲間へ向かう槍を一本でも減らそうと「深海の剣」で『ジード』の術を防ごうとしていたエッジを、クロウが庇う様にして翼で包み込む。

中断された攻撃の余波だけでもアエス・デイ・エウルバの蒼い元素分解能力はうねりの様に迫る黒槍の波を次々に消し去るが、エッジが一振りですの術を潰す時間でその倍以上の術が押し寄せた。

それに逸早く気付いたクロウはエッジを術の射線から退かせるが間近から放たれたその無数の線の前には完全な逃げ場は存在せず、攻撃が手薄な所を選んで飛びながら彼女も羽から黒槍の術を撃ち返して対抗する。

しかし、二人の術は互角ではなくクロウは自分の術を犠牲に『ジード』の槍の雨を逸らして辛うじて回避スペースを作るので精一杯だった。

（これ、自分達の身を守る事しか出来ない……！とても皆のフォローなんて）

逃げるエッジとクロウをあざ笑う様に、槍の雨は仲間達へ襲いかかった。

クリフは防御の為に「錬毅身」を発動し、

「リマイン・アーク」の疲労で膝を着いたリアトリスの手をラークが取り、

まだ「桜花弓鳴閃」から着地していなかったアキヘリヨウカが手を伸ばす。

「殻——！」

クリフの身体を覆った気の鎧は黒い槍に容易く貫かれ、彼は「瞬」で後退し僅かな時間を稼ぐ。

「錬毅身」で全ての深錬体技を擬似詠唱なしで使える様になっても

地上に回避スペースが無ければ「瞬」の回避は意味を成さず、「殻」の防御が通用しない以上複合技の「残影殻」も同様だった。

(クソツ、一か八かだ！)

追い詰められたクリフは気を集める範囲をもっと狭めて、自分の技で自分の技を潰すように「内側」へ向けて青い気を圧縮した。

「空間断絶——『決』！」

「ラーク、下がって……まだ、これ位止められる」

手を借りて立ち上がりながら、リアトリスはラークの前に進み出て黒槍の軌道を仲間から逸らそうとした。

しかし、既に『色の水晶』を維持できる体力が残っていない彼女が作った白光の多面体の群れは強度不足で黒槍の起動を逸らす事もできずに碎け散る。

それでも尚続けようとするリアトリスの肩に、ラークの手が優しく乗せられた。

「リアは、よく頑張ったよ」

彼女が気が付いた時、その身体はラークに投げられて高く宙に舞っていた。

たった一人で槍の雨と向かい合おうとする彼の姿に、リアトリスの背筋が凍る。

「真空破斬!!」

ラークが次々に放った真空の刃は正面から『ジード』の術の穂先を捉えて角度を変えさせ、中空のリアトリスに向かっていていた術は全てラークへと向かった。

ふと、彼女と目が合いラークは微笑む。

「後は任せたまよ、リア」

リアトリスは彼の名前を呼ぼうとしたが、その声は彼を飲み込む暴風のような黒い槍の雨にかき消された。

「姉さん！」

遙か上空から落ちてきた妹を辛うじて衣で受け止めたリョウカは、直ぐさま切り替えて黒槍の雨を睨んだ。

「トウカ、明の天傘を貸して！二つの力で防壁を張るわ」

「はいー」

アキは姉の言葉に頷いて自身の武器を手渡す。

「ありがとう」

礼を言っただけを受け取ったりリョウカは、手にした傘と身に纏った衣の両方に全力でデイープスを集束した。

「明の天傘」が赤く熱し、大気中の火のデイープスの割合が減った事で氷を形成しやすくなった「宵の地衣」が幾重にも氷を纏う。

氷の防御を形成するのに余分になった火のデイープスをリョウカは空中に帯の様に解放し、冷気を纏った槍の威力を弱めた。

ひようそうほうか 氷装抱華・べにきぎょう 紅桔梗！

「え……？」

技を放つと同時に向きを変え、自身を庇う様に抱く姉の行動をアキは咄嗟に理解出来無かった。

「宵の地衣」が二人を守る様に覆う。

降り注いだ『ジード』の深術は炎で弱まる様子も見せないまま、その衣が形成する氷壁に突き立った。

「姉さん？」

「――生きなさい、トウカ」

後から後から氷に槍が突き刺さる硬い音の中に、もつと柔らかい何かに刺さる様な音が混ざる。

リョウカの身体が射抜かれる音がする度に、温かい血液がアキの身体にかかった。

「嫌です……離して下さい、姉さん」

自分を抱く腕が震え、少しずつその温かみが消えていく感覚にアキはぞつとして懇願する。

それでも彼女に回された腕は、アキを守ろうと固く離さなかった。

クリフが圧縮した気は彼の目の前にあったものを――空気も、元素も、その「空間」をも押しつける。

一時的に隙間を広げても断絶された空間は瞬く間に元に戻るため「決」は防御としては「殻」より遥かに短い時間しか保たず、空間に作

用させる事に重点を置いている性質上攻撃能力も「発」等に劣っていた。

しかし、クリフの前面の空間を遮断することで攻撃を届かなくするその技は『ジード』の死槍をほんの一部分だけ押し留める。

彼の左右を、押し寄せる波の様な黒槍の群れが通過した。

敵の術の到達に時間差が出来た事で生じた槍と槍の隙間にクリフは飛び込む。

直後に、彼が立っていた地面を「決」で止められていた槍が貫いた。間一髪で『ジード』の術を凌いだクリフはほっと息をつく。

そこで他の仲間に目を向けた彼は、動かないラークの上に乗るリアトリスに気付いた。

「やめてよ、ラーク……自分の身体をクッション代わりにするなんて、された側がどんな気持ちか考えてよ」

手を戦慄かせながら彼女はラークの傷に触れる。

すぐに治る筈の彼の傷は、いつまでも治る気配を見せていなかった。

「本当に人の気持ち考えるの苦手なんだから。今度ばかりは起きたら私だって流石に怒るよ？だから——」

リアトリスは目を閉じたままの彼の頬をなぞった。

「だから、目を開けてよ……ラーク」

身体を貫かれ血を流し続けるラークの姿に、クリフとリアトリスは呆然とする。

しばしそのままだった二人は、押し殺したアキの悲鳴で我に返った。

「あ……ああ」

悲鳴を漏らしている事にも気付かない様子で、彼女は血に染まった自身の両手を見つめて目を見開く。そのアキを抱いたまま力尽きたリョウカは眠る様に静かに目を閉じていた。

「ラーク……リョウカ」

エッジは放心した様に倒れた仲間の名前を呼び、クロウは黙ったまま目を剥く。

自分達の手の届かない地上で倒れた仲間達を見て、二人は自分達の無力さを呪った。

そして、同時に互いの得物を元凶たる敵へ向ける。

「ジードオオオ!!」

後悔をそのまま敵意に変換する様に、無言だったクロウは吠えながらエツジの手を引いて突撃した。

『ジード』とクロウの間で同じ属性、同じ術である「デイストーションランス」が交差し互いを削り合う。

攻撃術を身代わりとする様な強引な攻め方で彼女が間合いを詰め、そこから碎けて粒子となっていく闇のディープスをエツジが左手にリコレクト再集束した。

「クロウ！」

「行くわよ、エツジ！」

二人は『ジード』を挟み込む様に別れながら、空中で手を離れた。離れた二人の手を繋ぐ様にエツジの左手からクロウの右手に黒い光が流れ、意識を伝達する。

クロウの五指から伸びる鉤爪が、受け取った闇のディープスで一本の槍の様に長く伸びた。

——本能共鳴技——
インステイキングタイプ・リンクアーツ

「天羽・霧沙雨！」
てんう きりさざめ

左右から同時にエツジとクロウの連続突きが『ジード』を襲う。

深海の剣の突きがクロウを掠め、クロウの攻撃が生身のエツジを掠めた。

一歩間違えれば互いの致命傷になりかねない挟撃も、二人が完璧な呼吸で合わせることで逃げ場の無い必殺の連携になる。

しかし、

「くっ……！」

『ジード』はそれを残像が見える程の速度ですり抜ける様に躲した。

クロウは「本能共鳴技」が終了するのと同時に落下するエツジを再び傍に引き寄せようと手を伸ばす。

(これでも、駄目なのか)

エッジも彼女の手を取りながら、攻撃手段がまた一つ潰された現実
に冷や汗が背を流れるのを感じた。

技の終了直後で速度が落ちた二人に獣の様な咆哮をあげる『ジ
ド』の反撃が牙を剥く。

「うあつ!?!」

「がはっ!」

集束の動作が無い蹴りが放たれ、不意を突かれた二人は空中で折り
重なる様にその直撃を受けた。

痛みと蹴られた衝撃で二人は一瞬、錐揉み状態に陥るがエッジが咄
嗟に飛ばした魔神剣が『ジード』の追撃を防ぎ、その間にクロウが何
とか体制を立て直す。

リアトリスが最後のチャンスと表現した通り、「リマイン・アーク」
による防御を失った戦線は一気に瓦解し始めていた。

辛うじて踏み止まるエッジとクロウに、宝珠に宿った精神体『ジ
ド』は闘争本能に飲み込まれ、人の表情を失いながらもなお二人に襲
いかかる。

「俺ハ、この世界を変える……宝珠もシンの力も、世界を平和にする為
に在るモノだ!」

人としてのジードが最期に残した叫びを、クロウは正面から否定し
た。

「違う! 誰も平和な世界が欲しいんじゃない。大切な人たちが傷付く
のが嫌だから、失う事が辛いから、例え叶わなくても『平和』ってい
う希望で未来を照らして生きていくの——そんな当たり前の気持ち
も無くした亡霊が、私の仲間に出すな!」

両者の放った深術が空中で弾け、氷の塵を散らしながら大気を震わ
せた。

「エッジ、クロウ! くそっ!」

先程まで一緒に居た姉をなくして放心状態のアキを、リョウカから
半ば引き剥がすようにしてクリフは戦闘の余波から少しでも彼女を
引き離す。

幸か不幸かダメージを負った事で理性を失った『ジード』の攻撃対象は眼の前を飛ぶエッジとクロウの二人だけに向けられていた。

アキはまだ戦いが続いている事を頭では理解しているらしく「明の天傘」を強く握りしめて『ジード』の方へ向けては居たが、力無く崩れ落ちた姉から目を逸らす事が出来ずにいた。

身体が戦う事を選ぼうとしても、心が付いてこない——そんな状態の彼女にクリフも掛ける言葉が見つからない。

「大丈夫だよ」

リアトリスが二人を元氣付けるように言った。

アキとクリフはその言葉に思わずリアトリスの顔を見る。

彼女自身も限界近く疲弊し、ラークが倒れたシヨックを受けているにも拘わらず、その言葉は決意と確信に満ちていた。

「もう防衛術は使えないけど治癒術ならまだ使えるから、私を信じて二人は戦って」

恐らくは最後の力で術を使おうとしているリアトリスの真っ直ぐな瞳を見て、アキは目の端に溜まった涙を拭う。

「はい」

穴だらけになった「宵の地衣」を拾い上げてアキは上空へと顔を上げた。

「リアトリス」

クリフは何かに気付くが、彼女はそれ以上の詮索を断る様に首を横に振る。

「後をお願いしますクリフさん。エッジとアキと、クロウを」

「ああ、任せとけ」

クリフはそれ以上言及せず、二人の治療を彼女に託した。

アキ達が戦線に復帰したのを確認して、彼女は深呼吸すると自身が服の下に身に着けていたペンダントを——身シの一族である証を外した。

(……起きてたらきつとラークは反対するよね、例え「この術」を使っても戦いに戻れる程完全には回復させられない。世界を守る使命にも、シンの掟にも背く事になるけど、それでも私は二人に生きて欲し

いの。私が守りたかった世界は不器用なラークが、やっと姉妹に戻れたアキとリヨウカさんが——皆と生きるこの世界が、私の守りたかった「世界」だから)

「だから、さようなら、ラーク」

リアトリスは倒れた二人の身体に微弱な雷のデープスを走らせて傷の状態を確かめる。二人は既に被術者の生命力に比例する治療術が効果を及ぼさない状態にあった。それでも彼女は通常の走査よりも更に念入りに傷の箇所と状態を調べる。

コレクトバーストまで発動し、リアトリスは空気中から通常の治療術に必要なデープスより遥かに多大なデープスを集めて傷の場所へと移動させる。

傷を自然に「治す」のではなく、壊れた部位を一から「作り直す」為に。

「——再現構成！」

網目の様に細かく編まれた光の束が二人の傷を埋め、それが脈打つように幾度も拡張を繰り返しながら、リアトリスと被術者の第一構成元素^{ハイエス}を吸って少しずつ周囲の部位と同化していく。大気から集められた「属性」に過ぎなかった第二元素^{デープス}は形をとって生命の一部となっていた。

ラークとリヨウカの止まっていた呼吸が再開し、ふらりと術を使用しているリアトリスの頭が揺れた。

「これで……後は……」

二人の命を繋ぎ止めるのと引き換えに今度こそ全ての力を使い果たしたリアトリスも、両者に続いて倒れ込む。

ペンダントを握りしめたままの彼女の手はラークにそれを手渡す様に重ねられていた。

(肩が、外れそうだ……でもこいつだけは！)

幾度目かの「転翔斬」で『ジード』の攻撃を凌いだ瞬間エッジは痛みで肩を押さえる。その瞳に静かな怒りを燃やしながらも身体は確実に疲労を蓄積していた。

クロウも乱れた呼吸でエツジの体重を支える手を両手で握り直す。接近戦では『ジード』を圧倒し防戦に追い込んでいた二人の連携も、今や相手の動きについていくので精一杯になりつつあった。

アキが「宵の地衣」と「明の天傘」の力を束ねて放った赤い光線が『ジード』の翼を焦がすが、『ジード』は瞬く間にアキが追い切れない動きでその熱から逃れ再生する。

（理性を失って反応速度までラーヴアンと互角になってる……このままじゃ）

減り続ける体力に危機感を抱きながらも、クロウは迫る『ジード』の攻撃を捌く為に再びラーヴアンに意識を委ねて全力で動くことを余儀なくされた。

「魔神剣・蒼」ましんけん あお

深海の剣の斬撃は完全に見切られており、エツジは懸命に剣を振るうも『ジード』の突進の軌道を僅かに変える程度の成果しか上げられない。

エツジの反応速度が追いつかない『ジード』の刀に対し、クロウが体勢を入れ替える様にして前に出ながら鉤爪を刀の軌道に重ねて受け流す。

しかし、今の『ジード』はそれだけでは止められなかった。

半身の黒鷹はそこから次の動きへ繋げて身を捻り、黒鳥の少女もそれを読んで同時に空中で回転する。噛み合う歯車の様に舞いながら、『ジード』とクロウは互いの一歩先の動きに対応していく。

受け流された勢いを斬撃に乗せて『ジード』がクロウの腕を断ち切るうとすればクロウはエツジの手を引いてそこから逃れ、

その回避動作の先を狙って至近距離から『ジード』が放とうとした「デイストーションランス」の集束するタイミングに合わせてクロウも闇のデーパースを集束し、同時に敵と同じ術を実体化させる事で自分の槍を砕かれながらも反射角を調整して意図的に『ジード』の槍を自分達の外側へと逸らす。

一瞬の間に人間の思考が把握しきれない生死のやり取りを二人は幾度も繰り返した。が、「本能共鳴技」以外でその速度域にエツジがつ

いて来られない以上、クロウ側はアエス・デイ・エウルバの威力を活かす事が出来ずに攻め手を欠き防戦一方になる。遠方からのルオンの援護も続いていたが、更に反応速度の上があった『ジード』には掠りもしなかった。

そんな中、深術の軌道上からエッジの手を引くクロウの動きを先読みした『ジード』が彼女達二人を捉えた。

二人の身体が同時に刀の突進の先に投げ出される。

「エッジー！」

それに反応できるクロウはそこからエッジの方を逃す事を選んだ。繋いでいた手を離して彼を突き飛ばし、黒い複葉の深術を地上まで五重に展開して受け止めさせる。

エッジは彼女を自分の傍に留めようとしたがその身体は瞬く間に重力に捕まり、クロウの作り出した深術の中心を地上の島へ向けて落ちていく。ほんの一瞬で、彼は飛んでいた空の世界から切り離された。

たった一人で『ジード』の突進と向き合う事になったクロウは、真正面からそれを迎え撃った。

鉤爪を振りかぶりながら、最大の速度で彼女も一直線に敵の懐に飛び込む。

互角の反応速度、遥かに上回る力の相手に対して余りに無謀な接近戦。

その代償は高く付いた。

『ジード』が手にする刀がクロウの胴体の中心に吸い込まれ、彼女の細い身体に収まりきる筈も無いその長い刀身はその背を貫いて鮮血に塗れた。

黒い羽根と赤い血が飛び散り、クロウの身体は力の抜けた人形のように浮き上がる。

「あ……っ……がはっ、ごあっ！」

「クロウーッ!!」

血で咽ぶ彼女の姿に、エッジの心の中で何かが壊れた。

彼が握る深海の剣の周囲の蒼のオーラが呼吸をするように一定の

リズムで明滅し、刀身の表面に新たな文字を形成する。

『f e l u s f q a , d m e l o . f e e l x
m e l o s t a n , i l u s e r e s u n d e z c e n e
n a r m e l o 』

剣に最後の警告文が浮かんだ。

第九十四話 言えなかつた言葉

——ずっと、勘違いをしていた。

心の何処かで、剣を持って戦えば何かを守れると思っていた。隣に立って戦えば、助けられると思っていた。

けれど、実際に剣を振るって出来ることは誰かを傷付ける事だけで、

戦い続けることは際限なく他人の傷を増やしていく事ではなくなり、それは仲間を守る保証にはならないのだと——そんな当たり前の事によろやく気が付いた。

(俺は何の為に戦ってきたんだろう、俺のやって来たことはこんなに無意味で……戦うことは、こんなに虚しいのに)

クロウの作り出した深術で身体が減速し、ファタルシスの大地に背から落ちた衝撃がエッジを現実に取り戻した。彼女がエッジを助ける為に発動させた複葉の様な深術が、彼の目の前で黒い花卉の様に空の中へと溶けていく。さっきまで握っていたクロウの手の体温は、落下するまでの間の風ですっかり消えてしまっていた。

遠目に見たエッジの希望的観測でも否定しようが無い位、クロウが負った傷が致命傷であることはすぐに分かった。

折れかけた心とは反対に、彼の手の中のアース・デイ・エウルバは戦いを強いる様に強く、強く光を放つ。大きなダメージを負った訳ではない身体は、まだ動かすことが出来る筈だった。それでもエッジの実際の動きはとても緩慢で、全ての希望を背負った蒼い剣は今の彼にはあまりにも重すぎた。

ふと、虚空を彷徨いかけたエッジの視線が、遥か頭上で瀕死の状態のクロウと合った。彼女の眼に浮かぶ絶望の色が、霞がかった彼の心を更に深く抉る。

しかし、エッジの視線に気付いたクロウのそこからの表情の変化が、彼の心の砕けず残った部分を奮い立たせた。

(ああ、まだ……それでもまだ、俺にはやる事が残ってた)

地に爪を立てる程に力を込めて、エッジは無理矢理身体を起こす。

(クロウ……俺は、この嘘を貫き通す。ちゃんと最後まで)

もう一度立ち上がったエッジは、深海の剣の重みを確かめる様に振り下ろして構える。そこから立ち上る放射体は剣の動きを追って蒼い焰の様に揺れた。

腹部を押し上げられる形で頭が下になり、クロウは自分の血で窒息しそうになった。必死に咳き込みながら血を吐き出すも、そうすれば代わりに刃が更に食い込んで内臓が煮えたぎる様な痛みが彼女を襲う。

深術も、武器も、仲間も、何一つ助けではくれない死の恐怖にクロウは飲み込まれかける。

(いや、だ。死にたくない……)

必死に顔を上げたクロウの目に、間近の『ジード』の必死な形相が映る。

人の感情を無くし、半身を失い、宝珠に呑み込まれて尚、人だった頃の願いだけを追い続けるその姿が。

クロウはそういう人間を知っていた。

報われない願いの為に必死になって、自分をすり減らしていく——そういう人間をとてもよく知っていた。そんな目の前の男の姿を、クロウはとても憐れに感じる。

——『ジード』の行動はきつと本当に世界を今より「平和」にするだろう。当たり前だ、資源を減らしたりしないまま人の数そのものを減らせばそうそう争いなんて起こらない。仮に起きても、きつと『ジード』は争いが起こらなくなるまで更に人を減らし続ける。

けれど、それは一時のもの。

そして、そこにこいつの居場所は無い。

一度「人を殺す」という手段に頼った『ジード』は、きつと平和になった世界の中でも争いの元になる様な人間を探してさ迷い続けて、人が増えればまた同じ事を繰り返す。

平和な世界を夢見て、永遠に殺戮を繰り返す殺人鬼——それがこの男の末路。

その空虚が、どうしようも無く憐れだと私は思った。

(本当は分かっている、こいつとエツジは多分同じだ。エツジが私を必死に守ろうとするのはたまたま私が目の間に居たからで、目の前に居たのが私じゃなくても、きつと誰でもエツジは助けた……でも、それでも『私にとつては』違うんだ)

ふと、クロウの目が地上のエツジと合う。

彼の生気を失い、希望を失った表情を見て彼女は笑みを溢した。

「ばーか……あんたの方が死にそうな顔してんじゃないわよ……」

眩きはきつと遠く離れた地上には届かなかった。しかし、それでも彼女の笑顔で少年は立ち上がった。

クロウはその勇姿に安堵する。

(エツジ……皆は薄々気付いてたんだよ。何をしたって私は助からないんだって。本気で私が助かるなんて思ってたのはエツジだけ。でも……その偽りの無い嘘が私の心を守ってくれた。私が折れそうな時救い上げてくれた。諦めた両親との絆を繋いでくれた——私にとつて、エツジは光だったんだ)

だからこそ、クロウは確信を持てた。

(エツジは負けない……どんな絶望だって、あいつは引っくり返して進んで行くんだから)

『私の希望は絶対に潰えない』

胸に刻んだその言葉が、クロウの心に最後の火を灯した。

(なら……やる事は決まっている。まだ、言わなきゃいけないことがあるんだ)

既に宝珠の力も使えなくなったクロウは、記憶の糸を手繰った。

リアトリスと二人で修行した時の会話を一つ一つ思い出す。

(「そう、一瞬で形を変える風も、刺す様な暗闇も、流動する水も全部の属性元素を受け入れて、心を通わせて自分の中でまとめ上げて——うん、すごいよ！クロウ」

「空全体に展開できるヤツに言われても皮肉にしか聞こえないんだけど……やっぱり直接触れてる範囲にほんの少し形成するだけで精一

杯、か」

「それでもすごいよ、私が『色クロマティッククリスタルの水 晶』を扱えるのは心シンの力あつての事だし、きつとクロウは——」

瞳を閉じて、彼女は痛みを意識から切り離すために薄く息を吸い込んだ。

クロウの右手の中で、ディープスが虹色に燦めく糸を編む。

「……結晶化」

自身が突き刺した少女の微かな声と共に、身体シの自由が効かなくなり始めた事に『ジード』は気付く。

彼の異形の身体を細い細い虹の糸が絡め取っていた。

揚力のみで浮いている訳ではない身体は空から落ちる事は無かったが、その糸は確実に彼の動きを鈍らせ、『ジード』がどれだけ断ち切ろうともがいても決して切れる事は無かった。

元凶が目の前の瀕死の少女であることに気付いた『ジード』は彼女の身体から刀を引き抜き、止めを刺そうと振り下ろす。既に抵抗する力も残っていないクロウはその動きにされるがまま振り回され空中に投げ出された。

返り血を纏った『ジード』の刀が赤い弧を描く。

「——氷装蓮華・絶炎！」

クロウの首を掻き切ろうとした『ジード』の右腕を、リョウカの武器と自身の武器の力を合わせてアキが地上から放った赤い線が直撃する。矢と見紛う速度で直線を描いたその炎は過ぎ去った余波で初めて炎らしい無軌道な動きを見せながら散り、その勢いで彼の刀を握った右腕は大きく後方へ弾き返された。

その腕を今度はルオンとトレンツの村人達の放った氷弾が捉え、凍り付かせる。

ほんの一時とはいえ武器を封じられた獣は、煩わしそうに吠えてディープスを収束しアキとクロウを狙った。

『ジード』の周辺の空間が歪む。

「——そんな事させるわけねえだろ!!」

クリフの叫びで攻撃を察知して顔を上げた『ジード』の瞳に、赤い
箒星が映る。

「錬毅身」の力を最大限に解放した跳躍でクリフは敵の上を取って
いた。

「発」の反動と「瞬」の初速による上昇力を使い切った彼の身体は、
そのエネルギーを全て落下の加速へ転化しながら真っ直ぐに『ジ
ード』へ墮ちる。

「殻」によって保護されたクリフの身体は、空気との摩擦で赤く染
まった。

重力加速の物理的エネルギーはダメージを与えられなくとも『ジ
ード』に踏み止まる事を許さず、クリフは相手の胸倉を掴んだまま一
気に『ジード』を眼下の島へと連れ去る。

「地表でバラけろ！秘奥義——彗・星・破・碎！」

『ジード』の体が赤い流星となってファタルシスの大地を直撃する。
クリフの振り下ろした拳と落下の衝撃が半球形に地形を陥没させ、
亀裂が離れたアキ達の足元まで広がる。それでも尚ヒビ割れて耐え
きれなくなった部分の地面は連鎖的に崩れ、瓦解音を立てた。

彼が秘匿していた一回限りの空への攻撃手段は『ジード』の胸部を
拉げさせたが、黒い獣はそれを意に介する様子も無く傷を再生しなが
ら起き上がる。

クリフも効かない事は承知だったらしく彼を大地に引きずり下ろ
してすぐに飛び退き、倒れた仲間の名前を呼んだ。

「ラークツ!!起きてんだろ!？」

呼び掛けられた時、既にラークは剣を構えていた。

無数の穴と血の痕跡が残った格好はボロボロで、身の再生能力と
「再現構成」の効力で辛うじて立っている状態だったが、その眼は誰よ
りもきつく敵を睨みつける。

「当たり前だろう、ここで倒れている様な僕なら……生きている意味
が無い」

剣を振るうラークの手の中で、リアトリスのペンダントが揺れた。
「細断、連斬、颯風の如くして微塵も残すもの無し——秘奥義、

千裂蒼破塵！^{せんれつそうはじん}」

一つの軌道に重ねられた真空の刃がエッジの「真空蒼破塵」と同様に、より大きな刃を形成して飛ぶ。

それをラークは、狂気に駆られて舞う様に瞬く間に重ね続けた。足を止め隙を晒しても構うこと無く、幾つも、幾つも。

一つが届くまでの間に次々に放たれるその斬撃は『ジード』の羽を裂き、腕を裂き、千々に裂けたそれらを微塵に裂いた。

しかし、ラークが全ての身体能力を傾けて放ち続けるその嵐の様な攻撃でさえ、僅かな足止め程度にしかならない。

一度バラバラにされかけた『ジード』の身体は斬られた以上の速度で再生しだし、断たれた腕は元に戻り、彼の身を裂いた真空の暴風はただその輪郭を揺らすだけと成り始めた。

それでも、ラークの動体視力にはその時間で十分だった。

彼は後ろを振り返り、深海の剣を握り締める少年に全てを託す。

「エッジ、宝珠は右胸だ！そこさえ避ければ全てその剣で吹き飛ばせる！」

禁忌の剣から立ち上る蒼い放射体は既にエッジの全身を覆わんばかりになっていた。

完全に解放されたその力を手にした少年はラークの呼び掛けで殆ど条件反射の様に飛び出す。

その眼からは既に誰かを守りたいという情熱も希望も消えていたが、それでも義務感に急ぎ立てられる様に彼は駆けた。

クロウの作った『色クロマティッククリスタルの水晶』の網で飛び上がれない『ジード』は再び深術で周囲を掃射しにかかり、クリフやラーク達は後退を余儀なくされる。狙いが闇雲なそれは彼らを仕留めるには至らなかつたが黒槍は際限なく放たれ続け、その嵐は『ジード』と周囲とを断絶してしまう。

その千荊万棘せんけいばんきよくの中を、エッジは唯一人で前へと進んだ。

彼の振り下ろした剣の直線状に、道が開ける。

禁忌の剣の一振り一振りが蒼い焰で黒槍の嵐を容易く切り裂き、押し戻す。

受ければ一溜まりもない致死の一撃が千と降り注いでも、エッジはただ一度の攻撃でそれらの実体である第一構成元素を破壊し尽くし大気へと還した。

追い詰められた『ジード』は手負いの獣の様な咆哮を上げ、切れない虹の水晶網を引き千切ろうと藻掻く。

それに呼応する様に彼の四囲の空気中のディープスが圧縮され、七色の光帯を描いた。

急激な大気の動きに、全員の身体が引き摺られる。

重力じみたその力はそれだけに留まらず、更に引力を増しながら闇のディープスを一際強く引き寄せ始めた。

『ジード』の前面に黒い魔法陣が現れる。

既に彼の口から紡がれる音は言葉を成しておらず、第二属性元素を操る人の心も宝珠に飲まれかけて居たが、其れは間違いなく最上級深術「デイグルフェイズ」の詠唱だった。

島を囲む竜巻の壁。

空へと立ち上っていく緋色の焰螺旋。

そして、その果ての青空までが暗闇に閉ざされていく。

コレクトバーストに依って詠唱速度が早まったその術は、エッジが『ジード』の元へ辿り着くより早く全員の視界を奪い去ろうとした。

意識の無いリアトリスを支えて術の中に吸い込まれない様踏み止まりながら、クリフが危機感を頭にする。

「おいこれ、マジでやばいぞ！」

ラークも剣でフォローしようとするが攻撃しようとするれば直ぐ様引き摺られてしまい、クリフ同様動くことが出来なかった。

「く……急げエッジ！先に発動されたら例え今のアース・デイ・エウルバでも持たない！」

「明の天傘」を大地に突き刺したアキは姉と自身の二人分の体重を支えながら、辛うじてエッジの名前を呼ぶ。

「ごめんなさいエッジさん、動けるのは、もう……！」

光が完全に閉ざされた。

底無しの深淵が、口を開ける。

その冥闇くらやみの中心を目掛けて、エッジは跳んだ。

たった一人きりのその瞬間の中で、消滅の力が手の中で胎動するのを彼は感じる。

エッジはようやく、人の世にこの剣を残した女神の真意に触れた気がした。

(どうして使う事を禁じながらこんな危険な物を女神アエスラングが作ったのか俺には最初よく分からなかった。けど、きつと『この剣を使つてはならない』っていう警告は本心だったんだ……本当はこんな危険な物が使われない事を願いながら、それでも争いを終わらせる「可能性」をアエスラングは人の手に残してくれた。きつとこの剣は——願いだったんだ)

「いけええ……っ、エッジー!!」

真つ暗な空間の中でそれでも彼を信じてクロウの絞り出した叫びが、エッジに届いた。

「アエス！闇を、万物を、切り裂け！——淵源海溝閃!!」えんげんかいこうせん

エッジは剣を振り下ろした。

全ての音が途切れ、吸い込まれていた風と黒が形を成すと同時に水平線の果てまで刺し貫く巨大な神槍を形成する。

しかし、其れが海を割ることはもう無かった。

涙の様な小さな蒼い雫が空から落ちる。

それは暗闇に切れ目を入れ、細い光がファタルシスの地へと差し込む。

エッジの剣閃を真つ直ぐになぞるように滴下する雫は——遙か遠くから始まったが故に雫の様に見えたその蒼い光は、瞬く内に天から地上を繋ぐ斬撃となった。

黒い禁術と、蒼の一閃が交差する。

波に砂城が崩される様に、世界を貫いた神槍は音もなく解けていく。

その場に残存する性質を持っていたその斬撃は海溝の様に打ち出された巨大な槍を完全に飲み尽くして、なおも前進を続ける。異形の

怪物となった青年は最期の力でそこから逃れようと必死に藻掻く。

禁忌の力は『ジード』の集束した闇のディープスを溶かし、

コレクトバーストの七色の光帯を掻き消し、

彼の身体を縛っていたクロウの糸を断って、

平和を願ったジードという青年の残した意志の欠片をこの世から消し去った。

同時にエツジの背後で、力を使い果たしたクロウが飛び散る羽根と共に緩やかに地上に堕ちる。

少年の頬を涙が伝った。

最終話 君を想い続ける物語

落下の速度を和らげるのに全ての羽根を使い切ってしまったクロウに、エッジは急いで駆け寄った。

彼の我を忘れた必死の表情に、仲間達は誰もかける言葉が見付からず黙って見守る。

クロウの腹部からは止めども無く血が流れるが、彼女は仰向けのまま首だけをエッジの方に傾けて微笑んで見せた。

「やったね……勝ったよ、エッジ」

「クロウ、血が……治療を……」

へたり込みながら嚙言うわごとの様に現実的では無い言葉を口にするエッジ。

その服の裾を掴んで、クロウは頼んだ。

「エッジ……お願いがあるの」

まるで末期の様な弱々しいその声に、エッジは頭を抱え耳を塞ぎかけた。

それでも、クロウの言葉はナイフで刺す様に彼の耳に届いた。

「その剣で私を分解して」

エッジの思考が停止した。

何を頼まれたのか、何をしなければいけないのか——そういった思考が一切出来ないままの彼に対して、クロウは身を起こし這って継り付くようにその顔をエッジの胸に埋め、再度頼んだ。

「お願い……時間が欲しいの、もう……痛くて、喋れ……」

彼が返事を出来ないで居る間、それでも目の前のクロウの時間は残酷に磨り減っていく。

血が滲むほどに強く、エッジは禁忌の剣を握り締めた。

皮肉にも今のエッジは、望んでもいない力の使い方が手に取るように分かる。

それが自身の中に消えない疵きずを刻むと分かっているても、エッジには自分を頼る彼女の願いを断る事は出来なかった。

左手でクロウを抱き留める様にしながら、右手で剣を逆手に持ちク

クロウの下の大地へ突き立てる。剣が突き立てられた所を起点として元素破壊の蒼い光が薄く地面の表面をなぞるように広がり、彼女の身体から淡い燐光が立ち上り始めた。

痛みに喘いでいた少女の呼吸が僅かに穏やかになる。

より正確には、クロウの感覚全てが緩やかに消え始めた。

「ああ、本当に……何の痛みも無いんだ……」

力が抜けた様に息を吐き、クロウは顔を上げる。

エッジの姿を手探りで確かめながら、彼女は抱き合うような姿勢でその肩に体重を預けた。

「クロウ……」

「——ありがとう」

懇願する様なエッジの言葉を遮って、クロウは一番初めにそう口にした。

「え?」

唐突な言葉に虚を突かれ、エッジは思わず戸惑った声を漏らす。

「ごめんね、本当は言わなきゃいけないかったのに……意地張って一回も言えなかった」

クロウの声は海風の音と、波の音に消されてしまいそうな程細かった。

謝る少女の言葉に、エッジは何度も首を横に振る。

「言わなくて良い、ちゃんと伝わってるから……!言わなくて良いから生きてくれ!」

「お願い、言わせて……例え口を開かなければもう少し永らえるんだとしても、きちんと皆に言いたいのに」

エッジの背後で黙って見守る仲間達に視線を向け、クロウは言う。

「ラーク、目を覚ましたらリアに伝えて……これで私を殺さなくて良いよ、って」

「ああ、必ず」

その頼みに、ラークは強く頷いて約束した。

「アキ……リョウカと仲良くね。あんな性格だから苦労もするだろうけど、きつと仲良くやれると思うから。それと……勝手だと思っけ

ど、私アキとはもう少し仲良くなりたかった」

「私がこうして家族の決着をつけられたのは、クロウさん達のお陰です。私は——私はずっと友達ですよ」

涙ぐみながらもアキが言い切った言葉に、クロウは嬉しそうな笑みを浮かべた。

「本当？……だったら嬉しいな……私、友達の作り方ってよく分からないから」

続けて話すのが辛いのか、そこで大きく深呼吸して彼女は再び口を開く。

「クリフ、王女様を……自分を待ってってくれる人達を大事にしなさいよ。あんたは……自分が思うよりずっと皆に必要とされてるんだから」

「……分かった、任せとけ」

クリフは言葉に詰まりかけたが、嗚咽を堪えて小さく頷いた。

一人一人に声をかけ終えたクロウはそれから、と付け足す。

「みんな、ルオンをお願い……あの子はただ戦いしか知らなかっただけだから……きつとこの先色んな物に触れて、自分をちゃんと取り戻せる筈なの……その時間を、あげて欲しい」

そこで再びもう一呼吸置いて、クロウは改めて全員の名前を呼ぶ。

既に彼女の身体は薄く透け始めていた。

「エツジ……アキ……クリフ……リアトリス……ラーク……リヨウカ。みんな、ありがとう。ここまで一緒に来てくれて、一緒に戦ってくれて……本当に心強かった」

言い終えて満足そうに息をつくクロウのすぐ傍で、消えいく少女を強く抱きしめながらエツジは泣いていた。

クロウはその背に手を回して、慰める様に軽く叩く。

「エツジは私に全部をくれたよ……仲間ができて……色んな事を知れて……一緒に旅が出来て、私本当に楽しかった……人を殺すことしか知らなかった私を、エツジが人間にしてくれたんだよ」

染々と並べられる彼女の言葉には、確かな実感が籠っていた。

「十六年間、ちゃんと生きていて良かった……何も無いと思ってた自

分に……まだこんな当たり前の感情が残っていた事が、嬉しい」

並べられる感謝の言葉にエッジは唇を噛んだ。

「俺は……俺は、クロウを守れなかった」

悔恨の言葉に、彼女は首を横に振る。

「もう守ってくれたよ」

既に時間は尽きようとしていた。

エッジの手から溢れ落ちる様に、少しずつクロウの感触が消えていく。

「ねえ……エッジ」

残り僅かな時間の中で、少女は唇を少年の耳に寄せて悪戯をする様に笑いながら呟いた。

「――」

それが、クロウの最期の言葉だった。

睦言の様な響きを残して、彼女の声と姿は海風の中に溶けた。

エッジの腕が空を切り、少女が身に付けていたジニアのブローチが落ちる。

呆然とするエッジの目の前でそのブローチの薄碧色の鉱石が『ジード』の残した宝珠の闇のディープスと、クロウの体内にあった闇のディープスとを集束して一つに結び付ける。

ごとりと、という音と共に本来の姿を取り戻した闇の宝珠アスネイシスが復元され、クロウの居た場所に転がった。

島の周囲を囲んでいた竜巻が消えていき、黒く陰っていた空の雲が晴れていく。

穏やかな光が、天の晴れ間から覗く。

旅の目的が達せられ、その結果を目の当たりにしても誰も喜ぶ者は居なかった。

宝珠の黒曜石の様な表面に映る死人めいた自分の顔を見たエッジは、これが自分の選択の結末なのだと悟る。

目の前に転がる宝珠に対し、エッジは憎悪にすら近い感情を抱いた。

（これの為にクロウは死ななきゃいけなかったのか……こんな物なん

かより俺は、俺は！)

禁忌の剣を振り上げて、エッジは激情に任せてその宝珠を砕こうとする。

その瞬間——世界の秩序より自身の感情を優先しようとしている自分の行動は『ジード』と同じである事に気付いて、エッジは手を止めた。

(ああ、そうか……お前もこんな気持ちだったのか)

自分も『ジード』も変わらないのだと悟ったエッジは、あまりの無意味さに深海の剣を取り落とす。

言葉にならない少年の慟哭の音が、ファタルシス諸島の海に響いた。

「——以上が、戦いの顛末です。私が目を覚ました時には既に焰螺旋は消えており、復元した闇の宝珠はラークが回収してイクスフェントに持ち帰っていました」

サーカス団の薄暗いテントの中で、リアトリスは祖父に深海の剣を差し出す。彼女は花の様だったその明るい服装を黒い外套で覆ってしまったっていた。

心の長である彼は喜びも示さず黙って話を聞いていたが、その刀身に新たに出現した文字を見て沈痛な声を出す。

『この剣を使つてはならない。この剣を使えるものが、剣を取る世界であつてはならない』か……あの少年には酷な事をさせてしまったな」

リアトリスは同意しながらも極力感情は表に出さず淡々と報告をする。

「宝珠の力と深海の剣の力だけでは私達はとても勝てませんでした。エッジ・アラゴニートとクロウ・グレイスだったから……勝つ事が出来たんです」

彼女の最後の一言には、感情が滲んでいた。

そんな孫娘の様子を見て深い溜め息を漏らしながらも、老人は告げるべき言葉を告げる。

「リアトリス、シンの掟は分かっているな。如何な戦いの最中であろうと、生命の創造の領域を侵した者を許すことは出来ない。宝珠アスネイシスの件の顛末とこの深海の剣を届けた今回は目を瞑るが、もうお前には『フローライト』を名乗る事は許されない」

既に自身のペンダントを手放し、覚悟をしていたリアトリスは黙って述べられる事実を受け入れた。

「出ていくが良い、ここはもうお前の帰る場所では無くなった」

「はい」

リアトリスは深く一礼して、最後まで祖父と目を合わせないままテントを出た。

日の出前の薄暗がりとその黒衣を紛らわせて、彼女は足早にサーカスの外へと向かう。誰とも顔を合わせ無い為に逃げる様に。

一人の知り合いにも見られる事無くテント群の輪の外へ辿り着いたリアトリスは、ようやく息をつく。

そこで、感情を無くしかけた白髪の少年が彼女を待っていた。

「もうクロウも居ない……これから何処に行けば良いのか分からない」

再び親しい人間を亡くして悲しみに暮れる少年に、リアトリスはぎこちなく笑い掛けた。

「私も同じだよ」

そう言って彼女はルオンの手を引く。

彼が迷わない様に自分が迷わない為に。

「一緒に行こう」

自分の為どこか無理する彼女の姿が、少年の中でいつかクロウに言われた言葉と重なった。

「やりたい事を見つけるの。何が何でも……出来ないなんて絶対許さない」

《丘陵の首都 ウォーギルント》

「おい、お前！」

セオニア王国に帰って来たクリフは、首都の門を潜るなりすごい剣幕で怒鳴りかかってきた少年に首を傾げた。

黄緑の髪の少年——レパートは見上げる程の身長差にも物怖じせず食い付いてくる。

「蓮の水鳥にクリフなんて居ねえじゃねえか！ 伝えたら門前払い食らったぞ！」

「あ」

そこでようやくクリフも、自分の事をきちんと把握しているのは国王と同じ部隊など一部の人間しか居ない事を思い出した。

一時はクローバズとして立ちほだかっていた少年は呆れる。

「お前な！ 俺らはカースメリアから全然知らねー土地通って、大陸二つ渡ってようやくここまで着いたんだぞ！ 門の所で王女とか名乗ってた赤い髪の女が助けてくれなかったら今頃どうなってたことか」

クリフはレパートの言葉を最後まで聞いていなかった。出歩く筈の無い「彼女」の話を聞くが早いか、彼は丘の上の城へ向けて飛び出す。

「つて、お前人の話聞け！」

銃を手放した少年の叫びがその背を追って虚しく響き、昼下がりの街路を通行していた人々が振り返った。

「フレアっ、フレア！」

「おい、大声を出すなクリフ！ 仮にもここは王城で——」

親友の制止も聞かず、クリフはほとんど突き破る様にして王女の寝室の扉を開いた。彼の後ろで同僚のマイロが頭を抱える。いつも寝台に居る筈の彼女が居ない事にクリフは驚き、立ち尽くした。

そんな彼を、柔らかな風が吹き込む窓の外から弾んだ声が呼ぶ。

「あ、おかえりなさい二人共！」

クリフは窓から身を乗り出して、声の主を探す。

一階に位置するその部屋は『ウィッシュユツリー願いの樹』として親しまれる大樹に面しており、紅緋の髪の王女はそこに居た。真紅のドレス姿に似合わぬ木登りをしていた彼女は両手で枝からぶら下がりながら無邪気に挨拶する。

「フレア様！降りて下さい！」

いつもため息ばかりのマイロも流石に慌てて彼女の元へ行こうとし、窓から飛び出そうとしていたクリフと折り重なる様にして城の外の芝生へ落ちた。前転し損なった様に背中から落ちたクリフは痛みに顔をしかめながら、一緒に転がってきた生真面目な同僚を睨む。

そんな二人を見て眠り続けていた王女は笑った。

クリフは初め彼女が元気に起きているのが信じられない様子でいたが、一度転んで落ち着いたのか改めて話しかける。

「何で木登りなんかしてるんだ？もう起きて平気なのか？」

問われたフレアは一旦木登りを諦め、掛け声と共に体重を支えていた手を離す。その行動にマイロが息を呑んだが、彼女は気にも留めない。

「二つ一度に質問されても答えられないよ、クリフ。でもそうだね、この間の天気の大荒れが収まってからかな、もう前みたいに眠ったら何日も日付が飛んだりほしくないみたい。それでいざ起きられるようになってみたらクリフのお友達がどんな願い事をしたのかちよつと気になっちゃって」

クリフは以前エツジ、アキ、クロウの三人がこの樹に願い事を書いていたらしい事を思い出して僅かに顔を曇らせる。

フレアはその変化に敏感に気付く。

「何かあったの？」

クリフはいつもこの国に帰ってきた時していた様に今日までの旅の話彼女に始める。

その話は、今までで一番暗いものとなった。

一通りクリフの語る話を聞いたフレアは暫し黙り込み、考えを整理する様に『ウィッシュツリー願いの樹』の下方に刻まれた無数の願い事をなぞる。

「ねえ、クリフ。私、クロウさんの願い事が何なのか知りたい。まだ身体が少し重いから手伝って貰っても良い？」

彼女が今度は興味本位ではなく、真剣に口に行っているのを感じてクリフは肩を回して快く引き受けた。

「良いぜ」

程なくして、大樹の上方でクリフは少女の文字を発見した。

彼の読み通り枝の影に隠す様にして、ひっそりとその不器用な文字はあった。

アキに教わったものをそのまま真似したのか、それには特徴的な線や大まかな外形こそ近くとも間違っている所もある。けれど確かにそこには「平和」という単語とクロウの名前が記されていた。

短い間とはいえ彼女の力を間近で感じた事のあるマイロは多少の罪悪感を顔に出す。

「平和、か。俺はあの子供の力は戦いの渦中に居る事こそ相応しい様に感じていたが」

その感情はたった今話を聞いたフレアも同様なようで、戦いを望まなかった少女の結末に心を痛める。

「とても立派な子だったんだね」

ただ一人クリフだけが首を横に振った。

「いや、これは多分本当の願いを書くのが気恥ずかしくて、当たり障りの無い事書いたんだと思うぜ」

「それでも……これが、あの子にとって当たり障りの無い願いだったなら」

王女は自分の育った首都の方を振り返った。

起伏が多く平地は少なくとも、緑豊かで穏やかな国。

大樹のそそり立つ丘から吹く風は、多くの人の願いを乗せる様には街の中へ、そしてその先の世界へと駆けていく。

「クリフ。叶えようね、クロウさんの願い事」

「ああ」

動き出したこれからの日々誓う様に言った彼女の言葉を、クリフは短く肯定した。

ザザー……

穏やかに戻った波の音を聞きながら、リヨウカは小さな漁村の外れにある岬に来ていた。

共に戦った少年の後ろ姿に、彼女は声をかける。

「エッジ」

答える声は無い。

少年は小さな墓標の前に座り込んだまま動かなかった。

返事は期待していなかったのか、リヨウカは話し続ける。

「王都の復興が少しずつ始まったわよ、流石に元通りとはいかないし数年は混乱が続くだろうけどまだこの国は死んでない。トウカも……ようやく落ち着いてきたわ、まだ暗い顔してるけれどね」

「ザザー……」

「少しずつだけど、ジェイン・リュウゲンが引き起こした混乱から世界は前に進みだしてる。全部貴方とクロウのお陰よ、本当にありがとう」

エッジの手が、墓標の名前に触れる。

彼女が身につけていたブローチは宝珠の核となってしまう為、そこには鳥の羽根を象った彼女の武器が代わりに埋められていた。

「ザザー……」

「エッジ」

奮い立たせる様に再び呼ばれた名前にも彼は反応を示さない。

「クロウは貴方の為にこの世界を守ったのよ」

「ザザー……」

「立ち上がれ、というのが酷なのは分かってる……それでもあの子も私達もみんな、貴方の時が止まるのを望んではいけないの」

こんな時でさえそれ以上優しい言い方が思いつかない自分自身にリヨウカは頭を痛めた。

続けて掛ける言葉が見付からず、諦めかける彼女の前でエッジはようやく口を開く。

「ブレイドから手紙が来たんだ、王都に来て欲しいって」

その口調がいつも通りに装ったものである事にリヨウカはすぐに気付いたが、黙って彼の言葉の続きを待った。

「だから、王都へ行く。まだ俺が役に立てることがあるならそれをやらないと……俺だって分かってる。俺は生きて、前に進まなきゃいけないんだ。ただ、それでも最後にもここにきてちゃんと覚えておきたかったんだ。クロウがここに居た事を」

少年は俯いたまま、立ち上がった。

そして、涙を浮かべたまま海に向かって顔を上げる。

彼の目の前には、青い海と晴天が広がっていた。

太陽が彼の橙の髪に反射する。

「この先、どれだけの時間が流れても俺はクロウのことと忘れない、彼女が魔女なんかじゃない普通の人間だった事を」

それはきつと割り切る……こと等出来ていない子供の精一杯の虚勢だった。

そう分かっているとしても、リョウカは少年の決意を無言で受け入れる。それこそが過ぎ行く光陰をただ受け入れる側になってしまった自分達が彼に出来るただ一つの事であると感じて。

エツジは岬に背を向け、もう振り返らずにリョウカと共に王都へ向かって歩み始めた。

後に残されたのは墓石と、海の吐息。

かつて少年と少女が出会った場所を臨むそこには、波の音がいつまでも響き続けた。

あの日と同じ、始まりの波音が。

Another Ending 君と生きる夢を見
ていたい

捻れる空気の渦と、世界中から流れてくる暗雲とに囲まれたフアタルシス諸島中央部。

この世の終わりの様な荒波立つ大時化おおしけの中にあつて、焰螺旋の立ち昇るその島だけは台風の中心の様に風が凪いでいた。

その上空で、世界を支える六つの宝珠の内の一つ——闇の宝珠アスネイシスの力を手にし精神だけの存在となった『ジード』と、同じく闇の宝珠の欠片をその身に宿した少女クロウ、そしてその仲間達とが死闘を繰り広げる。

人の域を超えた力を振るう二者の背にはそれぞれに異なる黒鳥を思わせる羽が術に依よつて構成され、その飛翔が戦場を地上から引き離していた。

「消えろ——ブラッディランス千連驟雨」
トレンティアル・サウザンド

『ジード』が自分の支配下にある大気中の闇のデーパーズに命じ、冷気を帯びた黒槍の雨を空から降らせ地上と空中を一掃しようとする。

空気を切り裂いて風切り音を立てる黒槍の表面には、その速度と術自体の帯びた冷気で霜が下りた。

「やせないー」

その大規模な攻撃を、防御術を得意とする交深術士コンパツシヨナイザー、リアトリスが阻む。

彼女は『感知』に使用していた細いデーパーズの糸を宙で撚り合わせ、七色の輝きを透き通った傘へと編み上げた。

仲間達の立つ島の上空を覆い尽くす程の水晶の天蓋は、降り注ぐ槍の刺突に晒され、鈴を挟りながら鳴らすような千の擦過音を立てる。

ほんの一瞬の攻防の間に空の景色は目まぐるしく変化していく。

役目を終えて砕け散る水晶片と黒槍の残骸とを押し退けて、入れ替わるように今度はアキとリョウカの姉妹が放った炎と氷が『ジード』

目掛けて押し寄せる。

「くっ！」

炎の飛ばした水分を追って凍てつかせる様に、氷の生成で乾燥した空気を燃やす様に。

付かず離れず互いを支え合うよう地上から伸びた氷炎は塔の如く隆起し、『ジード』はそれを避ける為に黒い鷹の様な翼で前方に空気を押し出し、反動で素早く後退する。

下がった直後、僅かに動きが鈍った彼の脚に遙か北方から飛来した小さな白い弾が直撃し、身体を冷気で拘束しようとする。

既に一度その攻撃を見ていた『ジード』は身体全体が凍りつく前に被弾した部位のディープスを障壁のように変形させて切り離し、空気中から再び新たな属性元素を集束する事で形を再生しようとした。

「逃がすか！」

防戦に回りつつある相手を見たクロウは、敵を拘束しようと『ジード』と同じ様に冷気を帯びた槍を無詠唱で作り出し四方八方から何本も檻のように突き刺す。

が、『ジード』はそれを拡大させた黒い刀の刃で無造作に風ぎ払って破壊し、更にはクロウの術を構成していた闇のディープスを自身の身体として取り込んでしまった。

八人の仲間達の連携によつて劣勢なのは圧倒的な力を持つ筈の『ジード』の方だったが、最も間近で対峙出来るクロウの力も闇属性のディープスの集合体である『ジード』には通じず決め手を欠く。

「時間が無い。どうする、エッジ？」

一定時間、瞬時に任意の障壁を展開するリアトリスの術「リマイン・アーク」は強力無比ではあったが、一度時間が切れてしまえば二度は発動できない。

焦った表情のクロウは、手を繋いで共に飛ぶ少年に問いかける。

彼女と共に空を翔ける彼の右手には、宝珠の力に対抗できる唯一の武器である「深海の剣アース・デイ・エウルバ」が握られていた。

「考えがある、少しの間だけ手を離して俺を飛ばすこと……出来るか？」

クロウはその提案を聞いて不安げに眉間に皺を寄せる。

「囿になるつもり？ 出来なくは無いけど、放り投げて真っ直ぐ飛ばすことしか出来ないわよ」

エツジはそれで良い、と頷いた。

「向こうはこの剣の元素破壊能力を一番に警戒してる。だから、挟み撃ちにすれば絶対こっちに注意が向く。俺が正面から注意を引き付けなければその間だけクロウは完全に自由になる」

話している間にも『ジード』は二人を引き離そうと降下に転じて進路を変え、クロウもそれを追って速度を上げる。

ずっと離れた海面の音が一気に大きくなり、肌を駆け上がる強風が髪を逆立たせる感覚に二人は目を細めた。

「うん、時間さえ貰えればこっちも策は無くはない、でも——」

躊躇いながらもクロウは、自らが手を引く少年の瞳を振り返る。

飛ぶ能力を持たない彼を空中に投げ出すのは、自殺行為に近い。

それでもエツジは、いつか炎の中に二人で飛び込んだ時と同じ笑みで彼女の惑いに応えた。

「大丈夫だよ、信じて」

「……死なないでよ、エツジ」

クロウは彼の足元に闇のディープスを集束させ、それを確固たる足場として機能する様に座標を固定する。

エツジはそれを蹴って加速し、クロウは彼の手を両手でしっかりと握ると回転の勢いを乗せ『ジード』目掛けて投げた。

エツジが飛び出すのとほとんど同時に、クロウも交差する様な軌道でより上空を目指して一直線に飛ぶ。

翼を持った少女と離れたエツジの身体を支える様に、空気中の黒いディープスが絶えず細かい粒子となって実体化しては推進力を生み出すように彼の後方へと流れていく。

クロウの術によって急激に高度が落ちるのは避けたものの、その実ただ速度を維持するだけの偽りの翼はエツジに自由に動く権利を与えない。

少年は真正面から二回り以上も大きな相手と対峙した。

「二人で向かってくるとは、武器の力を少し過信しすぎたな——ブラッディランス三百連！」
トランス・ハンドレッド

『ジード』は懐に飛び込んでくる少年の姿に足を止めて向き直り、幾重にも重なる「ブラッディランス」の発動でそれを出迎える。

空気から滲み出すように現れた黒槍の群れは、『ジード』目掛けて真っ直ぐ飛ぶエツジを円錐状に包囲した。

それは端から見れば蟻地獄の中心に向かっていく獲物そのもので、地上から様子を見ていた仲間の内の一人であるクリフも堪えきれず声を上げる。

「エツジ！おい、あれ何とか出来ないか!？」

先程と同じ様にリアトリスの命で空に張り巡らされた網に光が走り、水晶の壁を形成していくが、豆粒程の大きさに見えるエツジの所までは届かず壁はその手前で閉じた。

「ダメ、高度が高すぎて私の術じゃ届かない」

複雑な術の行使で憔悴した彼女の言葉に、クリフは何も出来ない自分の拳を怒りで握りしめる。

何も出来ない歯痒さは、宙に居るクロウもまた同様だった。

(エツジ……)

一度囷を任せた以上後戻りは出来ず、彼女は必死に囲まれたエツジの姿を視界から締め出して飛行の速度を上げる。

先程までよりも、もっと速く。

彼女に出来るたった一つの事をする為に。

制動も軌道修正も効かなくなる程に、クロウは自分の限界近い速度まで加速を続け、その姿は瞬く内に戦場から遠ざかった。

「くっ、魔神剣・蒼！」
まじんけん あお

自らの身体目掛けて林立する冷たい黒槍の穂先を、無我夢中でエツジは払い除けた。

型も何もない粗放な動きで彼の剣が振るわれる度、蒼い光が閃いてその直線状の槍を尽く折り、大気へと還していく。

力と力、正面からのぶつかり合いは一見エツジに分があるように思えた。

例え一本で人の肉を貫き骨を断つ程の威力を持った槍であろうと、触れただけで生命を奪うような極低温の霧であろうと、深海の剣の力は容易くそれらの術を実体化させている構成元素ハイエスを破壊し尽くす事が出来た。

けれどそれはあくまで、「触れば」の話。

剣を一度振り下ろせば、次に剣を振るう為にエツジは手首を返さなければならぬ。

そして、元素破壊の力が効力を発揮する剣の攻撃範囲は「飛ぶ斬撃」として範囲が広がっていくように、真正面から見れば「線」ではない。津波の様に押し寄せる黒い槍の嵐を、エツジが防ぎきれぬ道理はなかった。

冷たい感触が彼の脇腹を抉り、剣を握る右手に大きな裂傷を作る。鉄の武器と遜色ない硬度になる程圧縮された闇属性の冷気は、その傷さえ凍りつかせ流れ出る血を塞ぎ止めた。

「うっ——あー！」

利き腕が流れ出た僅かな血と共に一気に触覚を失っていく感覚と、想像を絶する痛みで顔を顰めながらも、エツジはそれでも致命傷を避けるように自分の頭目掛けて飛んでくる術を切り裂く。

その一撃をすり抜けて彼の腹部を、止められなかった「ブラッディランス」が貫いた。

僅かな声はその最初の一撃の時だけで、続く二撃、三撃目が彼の身体に突き刺さった時にはもう何の悲鳴も上がらなかった。

出血があまりに多すぎたのか、冷気で完全に塞がらなかった傷から夥おびただしい血が流れていく。

『ジード』を目前にして、少年の身体は完全に停止する。

動かなくなつた敵の姿に彼は安堵するでもなくただ胸を痛める様に顔を顰め、ため息を吐いた。

「これが結末だ」

担い手を失つた深海の剣は光を失い、音もなく遙か下方へと落ちていった。

「嘘……でしょう」

何かに反射した太陽光に、リョウカが最初に気が付く。

悠遠な天空での出来事の仔細は、地上から見て取る事が出来なかった。

けれど、エツジが決して自分から武器を手放す筈がないという事実と、鏡面の様に強く反射するそれが禁忌の剣であるという事実が、リョウカの最悪の想像を裏付ける。

(——お願い、間に合って)

クロウは必死に願いながら高速飛行の根幹たる、自身を起点とした深術の放射の勢いをもう一段階引き上げた。

身体を幾重にも保護する障壁越しに、彼女の肩峰^{けんぼう}、胸部、大腿、足裏等を中心に閥属性のデープスが集束され、液体の密度で実体化され、噴出する。

絶えず行われるその噴射の反作用は、彼女の身体を瞬く内に一瞬前に居た地点から運び去っていく。

直線的な動きで唯^{ただ}ひたすらに速度を上げるクロウの背で、鴉の様な羽の先端が風を切り、その空気の中に含まれていた水分を冷やして二筋の雲を後方に引く。

速度を大幅に上げた事で加速度的に増大する揚力に合わせて、身体の運動を制御する右肩の宝珠の欠片の意識——大鳥^{ライザン}が翼を折り畳む。速くなればなる程、それに反比例して軌道の変更は緩慢になる。

大きなループを描く航跡雲を後に残しながらクロウは百八十度方向を変えて狙いを定め、同時に「自分」の意識の方をもう一つの術の準備の為だけに集中させ始めた。

彼女が実戦レベルで扱えるデープスの属性は水、風の二つ。しかし、クロウはそれ以外の四つの基礎属性も含めた全てのデープスを同時に自分の手の中へと集束させる。

扱いに手慣れた二属性とは違い、他の属性はなかなか手の中へと集まらない。

クロウは焦る気持ちを抑え、深呼吸と共にリアトリスの教えを思い出す。

深術士の「資質」は個々の得意な属性でしかなく、人は多かれ少な

かれ全ての属性を自分の中に持っているのだ、と。

(苦手な属性を操るには……より強い感情でディープスに訴えかける)

クロウは最も不得手とする火属性から始めた。

内なる炎を呼び起こすのは怒りの記憶、しかしそれは必ずしも怒りが火属性のディープスを司る事を意味しない。飽くまでクロウにとって連想しやすい繋がりがそれであつたというだけ。

そして、彼女にとって真つ先に浮かぶ「怒り」の記憶は、

(こんな時に何であいつの顔なんて思い出さなきゃいけないのよ)

クリフの能天気とも言える大笑。或いは自分を子供扱いしてきた時の顔を想起して、クロウは眉間に皺を寄せる。

とはいえ、その感情は憤怒という様な類のものではなかった。

もつと怒りを覚えた経験などいくらでもある。しかし、この記憶は連動して彼女の様々な思い出を呼び起こす。

例えば、自分以外の誰かと一緒に空を翔けた事。

例えば、一緒に作って食べた料理の味。

宿でアキと遅くまで話していて、リヨウカに怒られた事。

何もかも諦めた時に差し伸べられたエツジの手。

修行の時だけはやたら厳しかったリアトリスの眼。

思い起こせば止めどなく湧いてくる何気ない日常の日々と、離れてみて初めて知った孤独の意味。

そして、自分を認めてくれる仲間のかげがえのなさ。

記憶を一つ辿る度、形の無い心が中身を伴った温度を持っていく。

いつの間にかクロウの手の中は七色の光で溢れていた。

この術——『クロマティック・クリスタル色』の水 晶』を初めて形にできた時、リアトリスは

彼女に言った。

『きつとクロウは、アスネイシスの力なんて無くても凄い深術士セキユアラになれてたよ。全ての属性を同時に扱うのに必要なのはディープスと

——感情の源と心を通わせる事。それが出来るのはたくさんセキユアラの経験や感情を素直に受け入れられる心を持った人だけ……簡単な様で本当に難しい事』

しかし、クロウは頭を振った。

（それは私の才能や力なんかじゃない。だって、私が思い出すのは十六年間も生きてきたのに、この一年足らずの旅の事ばかり）

エッジと出会ってから彼女は「思い出」を知った。

それが自分を変えたのだと、クロウは分かっていた。

（全部エッジがくれたんだ、今こうして戦う勇氣も力も。だから……だから！）

募る焦燥に反して彼女の頭は酷く醒めていて、翼をはためかせ鋭い眼差しで『色クロマティック・クリスタルの水 晶』を纏わせた鉤爪を振りかぶるその姿は、鴉というより最早猛禽類のそれだった。

大気を劈く轟音に気付いて『ジード』が背後を振り返る。

しかし、その時には既に音の速度を越えたクロウは全てを終わらせていた。

「描け、希望の虹橋——オーバーアクセラレーションエッジ！」

堅牢無比な防壁ともなる七色の水晶は、制御不能に近いクロウの速度と合わせて攻撃に転用された事で、「深海の剣」の概念的な破壊とはまた異なる意味で、あらゆるものを切り裂く刃となった。

『ジード』の身体は裂傷から六つに避け、一撃の元に本体である闇の宝珠アスネイシスを抉り出される。

怨嗟えんさの声を上げ千切れた闇のデュープスの人形ひとがたは元の形に戻ろうとするが、クロウの音速飛行の余波がそれらを霞のように蹴散らす方が早かった。

唸りを上げた空気の波は『ジード』の残骸に止めを刺すだけには留まらず、一拍遅れて海面に波紋の尾を引く。

その結末には目も暮れず、彼女は術者の消滅と共に黒槍の軛くわから解放されたエッジの身体が落ち始めるのを抱き止め、眼下の仲間たちの待つ島へと向かった。

「エッジっ……生きてるでしょ、ねえ」

『ジード』から取り返した不完全な宝珠を膝元に置き、クロウは眠る様に目を閉じた少年に呼び掛ける。

血塗れで降りてきた二人の姿にリアトリスやアキは口元を押さえ
て言葉を失い、他の仲間も何も言わなかった。

普通なら駆け寄ってくるはずの仲間達が動かないこと——それが
何を意味するのか理解しながらも、クロウは認められず少年の身体を
揺する。

いつの間にか、重症の人間を相手にしているとすれば強すぎる力を
掛けていることにも彼女は気付かなかった。

「返事してよ……信じろって、言ったじゃない」

泣き出しそうな声でクロウはそう吐き捨てる。

こうなる可能性を薄々感じていたリョウカも、いざ予感が現実とな
ると表情を保つのに精一杯で内心激しく動揺していた。

（もつと早くに気付かせるべきだった。貴方がクロウに生きてて欲し
いと思うのと同じくらい……或いはそれ以上に、クロウもみんなも貴
方に生きてて欲しいと思ってたこと）

涙を隠すため自身の胸に顔を埋める妹を抱かなければならなかつ
た事に、彼女は感謝する。

その小さな身体にさえ頼らなければ、今のリョウカもまた真っ直ぐ
立っていることが出来なかった。

皆がエツジを囲み押し黙る中で、彼の傍らに俯くクロウの喉に、抜
き身の剣が突き付けられた。

誰かが息を飲むのが聞こえ、彼女はゆっくり顔を上げる。

剣を突き付けていたのは、ラークだった。

リアトリスが信じられない様子で声を上げる。

「ラーク、いくらなんでも今は——」

その言葉を遮る様にしてラークが答えた。

「いいや、今しかない。『ジード』の持っていた宝珠の欠片を回収した
今、ここで戦えないなら……僕らはずっと、クロウとは戦えない」

その判断の正しさを証明する様に、ファタルシス諸島上空の暗雲は
晴れなかった。

島の周囲の竜巻は崩れた世界の均衡を思い知らせる様に一層激し
さを増して、海水を巻き上げる。

クロウは自身に剣を向けてくる彼の表情に、初めて見る苦悩の色を見付けて驚く。

もう一度、懇願する様にラークは言う。

「僕達と戦ってくれ、クロウ」

断ることも出来る——今のラークに本気で訴えれば、戦いを先延ばしにすることも出来る事をクロウは何となく感じていた。

（でも……そこまでして皆を危険に晒してまで私だけ生きても仕方ない）

彼女はもう一度動かないエッジの顔に目を落として、それから魂が抜けた様にふらりと立ち上がる。

「……いいよ、やろう」

本気で対峙する二人を見てリアトリスも時が来たのを悟り、杖を握る手に力を込めてラークの側につく。

クリフが何か言いたそうに口を開き、それに気付いたラークは他の仲間達にも声をかける。

「敵になるなら命の保証までは出来ないけど、君達も好きな方について構わない」

どちらについても先程まで味方だった相手を敵に回すことになるという状況に、残った三人もしばし躊躇するが、意を決した様子で「明あまがきの天傘」を構えたアキが進み出る。

「私は、クロウさんの味方をさせて貰います」

しかし、傍に立とうとする黒髪の少女をクロウは制した。

「アキは手を出さないで」

「一人で戦う気なんですか?! 負けたら、死ぬんですよ?」

一緒に戦わせてくれと訴えかける彼女に、クロウは虚勢の微笑みを返した。

「むしろ私が生き残ったら、アキ達の方が危ない……だから、私の為に命を懸けないで」

その笑みを浮かべたまま彼女は、目が合ったクリフとリョウカにも視線で念を押し。

二人もアキに続いて加勢しようと身構えていたが、クロウの意図を

汲んでアキの肩に手を置き下からせる。

そして、輪の中心でクロウは一人になった。

既に術を使う前から髪も瞳も半ば黒く変色している彼女が右手を振ると、それだけでディープスの一部がそれに追従して鞭の様に紫黒の跡を描き、空気までもが彼女の補助をする様に周囲が薄暗くなつた。

(これで良い、元々これが私の現実)

自身を取り囲む皆の鋭い眼差しに、クロウはこの仲間たちと和やかに談笑する時間があつたことを懐かしく思い出す。

(エツジ、ありがとう。最後に物語の勇者になつたみたいなの幻想を私に見せてくれて……エツジが居ないだけで、世界はこんなに鉛色だつた)

ラークが引いた左脚に重心を乗せて突進の姿勢をとり、リアトリスがディープスを集め始めたのを感じ取って、クロウもまた後ろに跳ぶ。

動いたのは誰が先ということも無く、皮肉な程に合った呼吸で三人は同時に動き出した。

ラークは踏み込みで瞬く間にクロウとの間合いを詰め、突きを放つ。もし、彼女が直前に後ろに跳んでいなければ黒い障壁に阻まれる事もなく剣はクロウの左胸を貫通していただろう。

その直後、リアトリスの杖から放たれた小さな光の矢が続げざまに四本、カーブを描いて背後からクロウを狙う。

行動を読んでいたかの様な連携で挟み撃ちされた彼女は、ラークの刺突を防いだ前面の深術障壁を後方にまで拡大展開し自身の全周を防御する。

初級術程度のリアトリスの詠唱破棄を、クロウの分厚い盾は圧倒的な質量差で軽々と弾き返し白光を散らす。

が、クロウが息つく暇もなく、今度はその障壁全体が揺れた。

「点滴穿つが如く降り注げ——シャインングレイ！」

リアトリスの詠唱と共に無数の光の針が寸分違わず一箇所目掛けて降り注ぎ、更にそこへ断続的な斬撃音も混ざる。

黒い障壁は始めこそ弓なりの形状で衝撃をきちんと分散していたが、二人がかりでの一点集中攻撃を受ける内に表面に傷が付き、そこから瞬く内に亀裂が広がる。

クロウは亀裂の箇所を内部から補強し時間を稼ぐが、続けるほどに中の空間が狭まり障壁全体の形状も歪になって、より一層ダメージは全体に広がっていく。

(このままじゃ、破られる……！)

障壁の応力が噛み合わなくなつて完全に崩壊する前に、クロウは自ら障壁の右側を開放し反撃に出ようとすする。

——その瞬間を待ち構えていた様に、そこにはラークが待っていた。

僅かな隙間越しに彼と間で目が合ったクロウは、ぞくりと鳥肌が立つて思わず屈み込む。

障壁の内部、それも今まさにクロウの首があつた位置を刃が通過する。

紛れも無く殺すつもりの一撃だった。

戦う時点で死ぬ覚悟は出来ていたつもりでも、いざ頭を切り離そうとしてくる刃を目の当たりにするとクロウは身体の震えを止められない。

(駄目だ、出てくるな……！私はもうその力を使わない！)

宝珠の欠片の防衛本能を抑え込んで、一旦開きかけた障壁をクロウは再び閉じる事を選択した。

『破砕障壁』
テイアリングシャッター

「なっ!？」

しかし、クロウが壁を閉じるより早く白い障壁がその隙間に割り込み、防御を阻害する。既に障壁が展開されてる箇所に、新たな障壁は展開できなかつた。

クロウの防御に隙を作つたりアトリスは畳み掛ける様に更なる術を発動する。

「吹き飛ばせ——フォトンブレイズ」

障壁の隙間から火のデュープスが流れ込んできて、その周囲を光で

編まれた目の細かい格子が覆う。

クロウはその術に覚えがあった。

爆発の火の勢いで光の壁を押し広げ、周囲のものを蹴散らす深術。

本来は相手をななるべく傷付けない目的でリアトリスが使用する術だが、四方を壁で囲まれた今のクロウにとっては話が違う。

一か八かで自身の展開した防御を全て解除し、クロウはその場から跳ぶ。

が、既に彼女の身体への宝珠の侵食は咄嗟の動きに対応できないほど進行していた。

すぐ背後で爆発が起き、足が纏もつれた彼女は「フォトンブレイズ」と自身の深術障壁との間で潰されるのを逃れた代わりに、前転をし損なったかの様に斜めに岩肌を転がされる。

「うっ、ぐっ！」

事前に練習を重ねたであろうシンの一族二人の無駄のない連携と、手の内を熟知した対応とにクロウは圧倒されていた。

誰かが息を飲む音と悲鳴とが聞こえる中で、彼女は痛みをこらえて即座に顔を起こし状況を把握する。

意外な事に二人はまだ動いていなかった。

背後の彼女を守る様にラクが前、リアトリスが後ろで、反撃を警戒する様に一度攻撃の手を止めている。

クロウは、急に不自然なほど動きが鈍くなったりリアトリスの頬が濡れている事に気付いた。

(今ので私が死ぬと思ったんだ……)

そこで彼女は、ここまでの完璧とも言える自分への対策のもう一つの意味を悟った。

普通なら、人は迷いや躊躇いがあると動きが格段に鈍る。けれど事前に何度も繰り返し返した動きは身体が覚え、思考にあまり左右されずに動けるようになっていく。

訓練というものには迷いを振り払う効果もあるのだ。

二人は数ある戦い方の中からこの様な事前の対応策を選んできたわけではなく、こうしなければ戦えない事を理解していたのだろう。

対策が完璧になるほどリアトリスが迷い続けたのだと思うと、クロウも僅かに胸が苦しくなる。

（私だって戦いたくない、二人を殺して生きるのも、死ぬのだって嫌だ……でも）

もう手遅れだった、何もかもが。

ずっと傍にいてくれた少年と一緒に、クロウの「生きたい」という願望も遠くへ行ってしまっていた。

彼女は顔を上げ、世界を背負うラークの凍り付いた目を直視する。戦う直前に見せた一時の迷いが嘘の様だった。

或いはそれ程に割り切らなければ、罅割れてしまおうと自覚しているのかもしれない。

クロウはただ他人と分かち合えないだけでリアトリスと同様に心を痛める彼を今、初めて孤独だと感じた。

（ごめん、ラーク……その強さに甘えさせて）

傷めた脚を引きずり、クロウは真っ直ぐ右手を構えてそこから「ブラッディランス」を打ち出した。

その明確な敵対行動にラークは即座に対応し、身を翻して黒槍の先を避けながらも今まさに飛来する術の方向へ、クロウの元へと駆け出す。

その突進のあまりのスピードに、クロウは唸りを上げて飛ぶ黒槍が遅いようにさえ錯覚する。

ほんの一瞬後には彼が手に握る刃が彼女の元へと到達するだろう。

（せめて、最期まで戦って生きよう）

最後の相手に選んだラークへ、クロウは覚悟を決めて再び術を向けた。

「擬装魔神剣・黒牙」

——と、風を巻き起こす鞭の様な何かが乱暴に地を削りながら、今まさに決着をつけようとする二人の間に割って入った。

そのあまりの威力にクロウもラークも行動の中断を余儀無くされ、降ってくる土砂から顔を庇う。

砂塵が収まり何が起きたのか見極めようとする両者の目に島の端まで走る地面の亀裂と、その破壊を行った動物の触手とも刃ともつかない黒いものが流れるような動きで主の元へと返っていくのが映った。

身体の一部を変形させて今の技を放つたらしきそれは、少年の輪郭を取る。およそ剣技とは似ても似つかぬ異質な技でありながら、その技の動きと範囲はその場にいる全員が知る「魔神剣」そのものだった。見慣れた人影に、二人だけでなく見守っていた仲間達までもが信じられないという表情を浮かべる。

少年の姿をしたそれは戦意を感じさせないゆっくりとした歩みで、けれど確実にクロウを守る位置へと移動してきた。

「信じて、って言っただろ」

「エ、ツジ……？」

彼の身体はクロウの右肩同様、闇の宝珠の欠片に侵食されていた。致命傷であった筈の腹部の傷があった場所を起点として全身へと樹枝状に細く枝分かれした黒い筋が皮膚と癒着して広がっており、その変化は首を過ぎ顔にまで及んでいる。

リアトリスはすぐに先程までエツジと共に宝珠があった場所を確認し、そこに滲んだ血痕以外何も無いことに気付く。

「そんな……クロウだけじゃなく、エツジまで」

受け入れがたい事実には衝撃を受けながらもリアトリスはラークと共に武器を構え、今度は二人を倒そうとする。

しかし、エツジは戦う姿勢を見せず両手を上げて彼らを制した。

「待ってくれ、もう戦いは必要ない。宝珠なら——ここに在る」

ラークはその真意を計り兼ねて最初は警戒を解かなかったが、クロウの手を取って何かを始めようとする彼の姿からその考えを悟り目を丸くする。

「エツジ、君は……クロウと一緒にアスネイシスの代わりになるつもりなのか？」

ああ、と頷く少年の背後で竜巻の壁がゆっくりと消え始める。それと共に島の上空へと集まっていた暗雲も緩やかに散っていき、その切

れ目から光が覗く。

『ジード』がその力で乱した二世界間の均衡が、少しずつ元に戻り始めていた。

その光景を見守っていたクリフらは一先ず最悪の事態を回避出来た事を悟り微かな安堵のため息を漏らす。シンの二人の表情は険しいままだった。

ラークは一度は自らが剣を教えた弟子に問い掛ける。

「僕らが今ここで戦わなくても、二つの世界のシンの一族は君達が宝珠の力を持つていることを良しとしないだろう。仮に戦いにはならなくても君達はこの先ずっと、人ではなく世界を存続する柱であることを求められる……それでも君は、その道を選ぶのか」

エツジは躊躇い無く首肯する。

「出会った頃から変わらないね、自分の愛する物のためなら自らも顧みず世界さえ敵に回すその厄介な意思の強さ……君は本当にジードそっくりだ」

最後の一言と共にどこか呆れた様に、けれど少しの寂しさを含んだ微笑を浮かべ、ラークは三日月を形作る一对の刃を畳んで鞘に納めた。

リアトリスは驚くほどあっさりと引いた彼に、戸惑いを隠せない。

「良いの？ラーク」

「ああ、まずは族長達に報告しないと。僕も焰螺旋で世界が繋がっている内にイクスフェントに戻らないといけないしね。今は……今だけはそのようしよう」

それが意味するのは戦いの終わりではなく、一時の休息に過ぎない可能性をリアトリスは知っていた。

シンの一族の使命は「宝珠の力を人に渡さない事」——例え『ジード』を倒しても、エツジとクロウの手に闇の宝珠がある限り本当の意味で二人の使命が終わる事は無い。

しかし、それでもラークもまたこの瞬間に自分と同じ想いであることが、リアトリスは嬉しかった。

「うん、そうだね」

ようやく言葉を交わす余裕が出来て、エッジとクロウは互いの黒く染まった姿を間近に見る。

明るい日の光の下で認める彼の姿のあまりの変わり様に、クロウは彼が生きていた事を喜ぶ事が出来なかった。

「エッジ、自分が……何をしたのか分かってるの？」

「ああ、分かってる」

何でも無い事に答える少年に、クロウはせめて少しでも弱みを見せて欲しくて同じ問いを重ねる。

「あんた、人間じゃなくなっちゃったのよ？『ジード』と同じになっちゃったのよ？……何時あいつみたいに心を冒されるかも分からない」「い」

それでも表情を変えず、ただ無事を喜ぶ様に向けられる優しい視線に耐えかねてクロウは拳で彼の胸を叩く。

彼女の手に返ってくる温度は、硝子の様に冷たかった。

「私は……もう眼だつて殆ど見えないのに！触ってるモノが人なのかそうじゃないのかも分からないのに……そんな壊れかけの人間の為に何で」

その拳を手のひらでそつと受け止めて、エッジは俯いた彼女に心からの笑みを返す。

「それでも俺は、クロウに生きていて欲しかったんだよ」

明るい日の下、ようやく世界に生存を許された少女を、新たな魔王となった少年は抱き締めた。

「はい、ラーク。あなたの武器よ」

「ありがとう、リョウカ」

クリフとの一騎打ちの末に壊れてしまっていた武器。

元通りの形で帰ってきたそれをラークはすぐさま鞘から抜き、重心に違いが無いか確かめて満足そうに頷く。

その一方で、突然武器の修理を頼まれたリョウカは、ようやく心労から解放され溜息を吐く。

闇の宝珠アスネイシスの残り全てを持つ『ジード』との再会を経て、一行は最後の戦いに向けて貿易拠点マーミンの宿で準備を進めていた。

このアクシズⅡワンド王国領内で指名手配されているエツジとクロウを擁する彼らはなかなか宿が取れなかったが、王都が炎上した事で辺境のこの町までは搜索の手は届かず辛うじて安息の時を得ている。

「良かったじゃねえか。——あ！漆黒の翼の連中の怪我も大体良くなってきたらしいし、今日は疲れてるリアトリス達の慰労も兼ねてご馳走にしようぜ！」

リョウカの表情が険しくなってきた事に気付かないラークに代わり、クリフがそう提案する。

ラークは久々に触れる愛剣をくるくると振り回すのに夢中の様だった。

彼の横から猷立の気配を感じ取ったクロウが真っ先に右手を突き上げ、クリフにリクエストを出す。

料理当番とは関係なくこの様な気晴らしを兼ねた食事は、今や自然と彼の担当になっていた。

「私オムレツが良い。トマトと何か細かいタマネギと肉入ってるや

つ、ニンジン抜きで」

「そうだな卵も発つ前に全部使い切っておきたいし丁度良いから作ってやるよ」

要求が通って上機嫌のクロウの隣から、エッジが手伝いに名乗りを上げる。

「俺も出来るところまで手伝うよ、この人数分だと材料切るだけでも一苦労だろ」

「お？サンキュー」

そのまま然り気無くクリフに近付いて、エッジが小声で尋ねる。

「本当にニンジン抜くのか……？」

「そんな訳ねーだろ。見た目に目立たなきやクロウは多少なら気付かねえし、そもそも気付いてもアイツいざ出されたら『勿体無い』って結局全部食うぜ」

慎重に彼女の顔を伺う二人を尻目に、当のクロウは鼻歌混じりに部屋を出ていった。

太陽が南中を過ぎる中、何時間も食事も摂らずリアトリスは『ジード』と戦って傷付いた怪我人と向き合っていた。

（この人の傷特に深い……急所は的確に外されてるけど、少し位置が左にずれてたら間違はなく出血多量で助からなかった）

汗が彼女の頬を伝う。

時間が経過すると治癒術で瞬時に傷を治すのは難しくなる。本人の自己治癒力でなおり始めた瘡蓋かさぶたなどは「損傷」ではなく、再生途中のある意味では「健康な部位」であるからだ。本人の治癒能力を利用する治癒術で安易に干渉すれば逆に無駄に身体を疲弊させ、自然な治癒を阻害してしまう。

この為、大勢の怪我人が一度に出た時は初期の治療が最も重要になる。限られる治癒術の使用回数で全ての患者の傷を把握して、優先順位を付けて迅速に処置する——そんな理想的な動きがきちんと訓練を受けていないリアトリスとクロウの二人だけで出来る筈も無かった。結果として数名、治療が遅れる人間が現れる。

今リアトリスが診ている相手はその最後の一人。

漆黒の翼も、怪我した賞金稼ぎの面々も皆感謝こそすれ、誰一人彼女達の事を責めなかった。

それでもリアトリスの胸には後悔が残る。

(もつと先にこの人を治療していれば)

既に初歩的な治療術が用を成す段階では無かった為、リアトリスはずっと手伝ってくれていたクロウを先に帰らせていた。

(『この人数なら私一人で平気』か。いつの間にか随分嘘が上手くなっちゃったな)

笑顔で送り出したリアトリスをクロウは心配こそしたものの、疑いはしなかった。またもや嘘を吐いている事に彼女の胸は少し痛む。

それでもリアトリスはこれを、『心』の力を持って生まれ、仲間の中で一番治療術に長けた自分が負わなければならない責任だと感じていた。

(これ以上あの子が背負うものを増やしたくない)

いずれ自分が命を奪うかもしれない相手でも——否、だからこそ無駄な荷物などクロウに負わせないとリアトリスは密かに決めていた。

アキが冷水を含ませてくれた綿織物で汗を拭い、慎重に一つずつ彼女は治せる箇所から順番に治療を続けた。

ほの暗い深みから不意に光が目を通して少女は我に返る。

木漏れ日の反射する井戸を覗き込んでアキはふう、と溜息を吐いた。夏を過ぎて涼しくなり始めたとはいえ真昼の晴天の下で桶いっぱい重い水を何度も運んでいれば汗も出る。

井戸の遥か下方の地下水から涼やかな風が吹き上げてくるのを暫し楽しんで、アキは最後の分の釣瓶を引き上げた。

(飲み水と、洗濯用に、リアさんが使う分……これで全部の筈)

料理や飲用だけでなく、身を清めたり、汚れた布の洗浄、患部の冷却——と、とかく水は用途が多く必要量も多い。

単純な水運びでもやっている内に、アキは人の生活がいかに水に密着しているかを実感する。屋敷で何もかもやって貰っていた頃の彼

女には縁の無かった作業も、旅を通して大分こなれてきていた。

アキはこうして汗を流すのが嫌いではない。それを姉に話した時は思い切り怪訝な顔をされ共感を得られなかったが。

多くの人の「当たり前」の生活の手伝いが出来る時間は、アキにとって義父の下で謀略に手を貸していた頃より何倍も心安らぐ時間だった。

(私ちゃんと、役に立てていますよね……?)

頭の中でふとそんな自問をし、彼女はくすりと笑った。

井戸と建物を七往復もしたのだから、もう少し自分も自信を持つても良いだろうに、と。つい後ろ向きになってしまうのは変わらないなとアキは自省しつつ、同時にそう考えられるだけ随分前向きになれているとも思う。

気を取り直し、最後のひと踏ん張りのつもりで再び動き出した彼女を不意に眠そうな声が呼んだ。

「それで最後ー?アキ」

桶から水を零さないよう注意しながらアキはクロウを振り返る。

「ええ、丁度これで終わるところです」

いつの間にか随分打ち解けた二人は以前よりずっと砕けた言葉で会話する様になっていた。

「え、本当にもう全部運んじやったの?今日は御馳走だっというから、そろそろ皆のそこ戻って休みなよ。これは私が運ぶか、ら!」

言いながらクロウは桶の横木に手をかけて受け取ろうとし、その重さにつんのめりかけた。

水が少し溢れ、アキは慌てて桶の側面に手を沿わせて直ぐ様平衡な状態に戻す。クロウが落とさないので精一杯だった桶を彼女は軽々支えた。

「だ、大丈夫ですか!」

クロウは水をぶち撒けず済んだ事に一瞬安堵するも、不甲斐なさで二つ年下の少女の心配そうな視線から目を背ける。

「これは私が運びますから、あとちよつとだけ待ってて下さい」

手慣れた様子で重い桶を運び去るアキに、クロウは手を伸ばしかけ

た姿勢のまま瞬く間に取り残された。一見華奢なアキに、クロウにはとても過重な大型の武器を使いこなすだけの体力がある事を彼女は改めて思い出させられる。

(……)まで筋力差があると思わなかった)

その夜、宿の裏手の空間はちよつとした宴会場になっていた。

夜の帳の中に浮かぶ篝火が、仲間達の影を大きく壁上に踊らせる。

他の客にも食事を提供する炊事場を占領する訳にもいかなかった彼らは、普段通り自分たちの調理器具で野外調理を行っていた。他の町であれば出来ない様な大胆な催しではあったが、かつての事件の影響から町全体がエツジ達に友好的なマーミンに至ってはそれは例外。

並べた木箱に平織りの布を敷いただけの簡易テーブルに、真紅のソースが鮮やかなオムレツ、焼けたばかりで小気味良く油の弾ける羊肉、木の実のアクセントが印象的なチョップドサラダに、特に時間をかけて丁寧に煮込まれたブラウンルーのシチュー……等々、クリフが中心となつて作り上げた料理が並ぶ。

リアトリスとアキはそれら一つ一つの料理に目を輝かせながらも取る順番を逡巡し、リョウカはそこに加わつて二人と早口に相談する。火起こしが得意で料理をずっと手伝っていたルオンは、クリフにずっと話しかけられており、どうして良いか分からない様子で何度も皿と彼の顔とに視線を行き来させていた。エツジとラークは色んな料理を少しずつ取つて、どうやって作ったのだろうかと分からないなりにあれこれ意見を交わす。そんな仲間達の隙間を縫つて動き回りながらクロウは飢えたリスの様に黙々と食事に集中していた。

料理の出来栄えは間違いなく最高で、それを味わう皆の表情も自然と解れる。

穏やかな時間が過ぎていく。

他の町より安全であるとはいっても野外での談笑は少なからず人目を引く。そのリスクは全員薄々感じてはいた。

旅人や行商人にエツジやクロウの姿を見られればマーミンの町の門番か賞金稼ぎ達が呼ばれ騒動になるだろう。けれど誰もそれを理

由に宴に水を差す様な事は言わない。

これが或いは最後の休息になるかもしれない事を全員が分かっていた。

「ん、この皿で終わりか？」

あれだけ並んでいた料理の皿を見渡して、その殆どが空になっていることを確認するクリフ。

「あつという間でしたね、みんなすごい……私はもうお腹いっぱいです」

然程大食では無かったリアトリスは一通りの料理を味見して以降、会話の聞き役に回っていた。

「おーい、誰かこの最後の肉食べちゃってくれ」

クリフがそう声をかけると、彼と目が合ったルオンは押し付けられると思ったのか無言で首を横に振り、早々に満足したらしきクロウは手をひらひらさせて断った。

と、最後に残った皿の上でこんがりと焼けたラム肉にほとんど同時に二人が手を伸ばす。

互いの手が触れた所で二人は手を止め、相手を牽制するように睨み合った。

「あら、トウカ。こういうのは姉に譲ってくれるわよね」

「姉さんこそ、こんな時くらい大人の余裕を見せて引いてくれても良いんですよ？」

一瞬引こうとしたアキだったが、リョウカにやや高圧的な態度で来られて反射的に眉を吊り上げて言い返す。

「もう十分食べたんじゃない？」

「それは姉さんだって同じでは？」

「私はただこのままだと片付かないと思っただけよ」

「さつきは『譲って』って言ってましたけど」

普段遠慮がちなアキはリョウカと喧嘩などあまりしないのだが、根本的に負けず嫌いなのは姉妹共に一緒の様で特にこういう二人だけの問題となるとどちらも驚く程子供じみた喧嘩をする事があった。

一人っ子のリアトリス等はそんなアキとリョウカの様子を「互いの

素の部分を出せる家族としての信頼あればこそだから少し羨ましい」と評していたがそんな温かい羨望の眼を向けるのは彼女一人で、他の仲間達はその姉妹喧嘩からさっさと興味を他へ移す。

「——で、えつと……誰か皿洗ってくれるか？」

板挟みになって身動きの取れなくなつたクリフは苦笑いしながら、助けを求めた。

「俺やるよ」

「じゃあ、私も」

エツジが直ぐ様手を上げ、クロウもほぼ同時に名乗りを上げる。

「悪い、じゃあ頼むな」

何とか火花散らすアキとリョウカから皿だけは回収したクリフは器用にその皿を二人の間からエツジにパスして片付けをエツジとクロウに託し、ずっと面白がる様な視線を自分に向け続ける相手を睨んだ。

「……最初に目が合ったんだから手伝えよ、ラーク」

「いやー食べ過ぎちゃつたのか体が動かなくて。料理すごい美味しかったよ、ご馳走様」

どこか面白がる様になつてこり笑う青年にクリフは溜め息を吐いた。

宿の洗い場を借りた二人は手分けしながら三回程往き来して全ての皿を運び終える。

他の客の分の皿も洗う事を条件に借りた為、エツジとクロウはすぐ作業に移つた。

エツジが肉の骨などをまとめて処分しながら油汚れの酷い皿を選び分け、クロウは水甕みずがめに汲まれた水を使い、洗いやすいものから洗つて箆ざるにあげていく。

「お湯使えると楽だよね——けど、こんな田舎に温熱筒なんて無いか」

「俺が深術でやってみるよ」

手は止め無かったが、きよとんとクロウは首を傾げる。

エツジもクロウも火属性の攻撃深術は使えなかった。

「あれ、エツジそんな事出来たっけ」

空气中で先に火属性のディープスを集めたエッジは、それから水に手を浸して金属製の洗い桶の底面に触れる。

水中で遊離状態のディープスを収束するのは難しかった。

「適正が無いわけじゃないんだ、戦闘で普段から使える程安定しないだけで」

武器に再収束リコレクトさせるのと同じ要領でエッジはごく少量の火のディープスを洗い桶に移し、少しずつ水の温度を上げていく。

「そう、じゃあお願い。お湯が沸くまでの間私が洗った皿を拭いて貰って良い？この量だと何回策が一杯になるか分からないし」

「分かった。皿を戻す場所……同じデザインのは同じ所に戻しとけば良いだろうけど、他はどうする？」

「あー、それは仕方ないからとりあえず除けといて後で聞こ」

軽い相談をしている間にも次々に皿が汚れを落とされ、水気を拭き取られて積まれていく。

作業量が多いため、ある程度流れが出来てからは二人とも無言になった。

しばし水と皿の規則正しい音だけが厨房を満たす。

「あつ」

ふと、二人が並んで洗いの作業をしている時エッジが皿を落としかけた。

クロウがそれを咄嗟にキャッチする。

「つと、セーフ。料理はともかく皿洗いは私のほうが上手かもね」

ミスを茶化す様に笑ったクロウに、エッジは礼を言う。

「ごめん、ありがとう」

皿をエッジに返しながら彼女は口元を引き締めてほんの少し真剣な表情になる。

「また考え事？」

「違う、って言いたいけど」

凶星を差されてエッジは言い淀む。

「禁忌の剣の事が、これからの戦いの事が、この間怪我した人たちの事か……何を考えていたかは知らないけど悪い癖だよ、エッジ。ほんの

少し時間が出来ると色々考え過ぎるのは」

反論できずにエツジは苦笑いを浮かべながら頭を搔く。

暇さえあれば他人の事。

本来なら自分の時間であってもそうやって他人の為に割いてしま
うそんな少年の姿を見て、クロウは微かに目を逸らした。

(私にも……話してくれたら)

けれどそれを口にしてもエツジは話さない事を彼女は知っている。

どんなに一緒に居ても彼の苦しみを、クロウは共有できなかった。

エツジはそれを「苦しみ」だとさえ自覚していないのだから。

と、うつすらと蒼い光がエツジの周辺で立ち上った。

それが触れた服の袖は微かな粒子になって分解されかかる。

「っ!？」

その光景を見たエツジは反射的に原因を察知して、肌身離さず帯剣
している二振りの内、特に嚴重に布をかけて目立たない様持ち歩いて
いる方の剣を投げ捨てた。

布が解ける程の勢いで深海の剣は転がり、床と鈍い音を立てる。

その間も所有者の意思に反して蒼い光を発し続けるその剣は、布を
分解して裂き、奇妙な彫刻の様な跡を残してテーブルの脚を一本消滅
させた。

支えを失った卓は大きく傾き、その上に乗っていた多くの皿が雪崩
を打って床に崩れて割れた。宿中を揺らす様な振動が響く。

「何!?これ、エツジがやってるんじゃないよね」

文字通り目の色を変えながら、クロウも無差別に分解能力を發揮し
始めた剣に向き直る。

とはいえ、彼女もこの武器に対しては有効な対処法が有る訳では無
く、エツジ同様その動きを注視することしか出来なかった。深海の剣
は戦闘時程の勢いでは光を放射してはいなかったものの、辺りのもの
を確かめる触角の様に少しずつ蒼い光の帯を伸ばし、確実にその影響
範囲を広げていく。

光が触れた床や壁の表面にはスプーンでくり抜いた様な跡が刻ま
れ、深海の剣の周囲の床板が抉れて沈み込む。第一元素破壊は音も無

く進行し、支えを失った物が落下する二次的な破壊のみが音を立てる。

宿の中の平穏な空間を掻き乱すその異常の広がりには建物の柱にまで到達しかけた。

それを見てエッジは反射的に飛び出す。

微かに光が弱まった一瞬の隙に転がるようにして飛び込み、剣の柄を掴む。

あと一歩遅ければこの宿に居る大勢の人間達が、支えを失った屋根に潰されていたかもしれなかった。

「エッジ!」

強引に飛び込んだ彼が暴走を続ける剣を手にしたまま自分に背を向けるのを見て、クロウは思わず制止しかける。

「外に出る、他の人を巻き込む訳にはいかない」

そう告げて彼女の方を振り返りもせずエッジは屋外へ飛び出した。

クロウはこんな危険を前にしても迷わず「頼る」事より「頼らない」事を選ばれた口惜しさに齒噛みする。

「ばか、『ごめん巻き込む』くらい言えないわけ!」

大きく抉られた痕の残る扉を潜って、彼女もすぐにエッジの跡を追った。

屋外に飛び出したエッジの肌を夜気が打つ。

しかし、彼にはそれを味わう余裕など無かった。

夜の薄ら寒さなど比較にならない冷気を帯びた蒼い光が腕を掠め、エッジはそれを避けて身を振る。

本来なら冷たくなど無い燐光が、鋭利な刃物の様なその殺傷能力で腕をもぎ取ろうとする度に彼の背筋を凍らせて錯覚を起こす。

「はっ……あ」

次の瞬間には身を裂かれるかもしれない恐怖が、エッジの呼吸まで不規則にしていく。

それでも彼はその状況の中で少しでも開けた場所、人家から離れた

場所を探して走った。

必然としてその足は町の外へ、外へと向かうことになる。

日もすっかり暮れたマーミンの街で人気を避けるのはそこまで難しい事では無かった。しかし、街とその外とを隔てる高い柵ばかりはそうもいかない。

(いけるか？今のこの剣の状態で)

彼が思案する間にも光は揺らめく蝋燭の如くふらりと向きを変え、彼に襲いかかった。

エツジは剣身を身体から少し離しながら前転する事でそれを掻い潜る。

彼が再び体勢を立て直して前転から立ち上がった時には、地面の形が変わっていた。

蒼い光は剣の向きとは無関係にある程度決まった方角に流れている様であり、少しでも速度を緩めたり、違う方へと足を向けてしまうと、その度エツジの身体は深海の剣の反攻に晒される。

彼は走り続ける事を余儀なくされていた。

行き止まりを示す整然と並んだ木柵は、もうエツジの眼前に迫る。

門を通って足を止めれば、確実に門番を巻き込む。

引き返す選択肢は論外。

エツジは一か八か暴走状態の武器を振りかぶった。

「魔神剣・蒼！」

きちんとコントロール出来ている時はただ剣閃をなぞる軌道を描く筈のその一撃は、ほとんど暴流の様に柵を突き破った。

飛び越えられる様に上部だけを破壊するつもりだったエツジは歯噛みしながら、直後に空いた大穴からマーミンの外へと飛び出す。

とても周囲の様子を窺う余裕など無い。

こんな時間に柵の外側を歩いている人間が居ない事を祈るしかエツジには出来なかった。

徘徊するモンスターがこの穴を見つけない事も。

「ラーク」

意識の端に棘が刺さった様な感覚を覚えて、リアトリスは食休みを中断させられる。

彼女の呼び声に異常なものを感じ取ったラークも武器に手を添えながら、表情を引き締める。

続くリアトリスの声には微かな恐怖が滲む。

「エッジとクロウに何かあったみたい。深海の剣の力が、多分……制御できない状態になってる」

禁忌の剣をエッジが手にした時から、こういう結末も有り得るのだという事を二人は覚悟していた。

剣が一度でも完全に制御を失えば、それを持つエッジは間違いなく死ぬ。

そもそも宝珠に対抗する力を持つ深海の剣とは本来そういう剣なのだ。

それを持ち続け、且つ武器として使用できているエッジの状態こそ「異常」だった。

だから、何の前触れもなくこういう事態が起きたとしても何の不思議も無い。

ラークは尻込みしかけるリアトリスに案内をさせる為、強く彼女の手を引いた。

「……急ごう。クロウまで巻き込ませる訳にはいかない」

《シリアン近郊の森》

「エッジ！ 足元」

彼を追ってきたクロウが、肩衣がずれるのも構わず警告を発した時には遅かった。

薄暗い森の中で木の根に足を取られたエッジは、走ってきた速度のまま巨木に頭から突っ込んでいく。

「しまった……！」

「くっ、スナイプバースト！」

エッジを挟んでちょうど樹の反対側に立つクロウはいつもの様に

「ブラッディランス」が使えない位置関係に舌打ちしながら、代わりに深術の力を乗せて羽根の装飾の付いたスローイングダガーを抜いて立て続けに違う方向へと投げた。

勢いよく飛び出したそれらは羽根によって風を切り、弧を描きながらエッジを飛び越え、ただ一点に収束する。

武器としては樹皮を傷付ける程度の性能しか持たないダガーが、黒い鋸状の無数の刃を付加され、膨大なディープスの噴射で猛加速する事で太い幹を根こそぎ切り裂く。

辛うじて障害物との正面衝突を免れたエッジは地面に手を付きながらもどうにか体勢を立て直し、クロウによって切り倒された大木を振り返った。

自重を全て地面に叩きつけたそれは周囲の木の枝を弾き飛ばしながら、地面に大きな轍を残し大地を揺らす。

「クロウ、何て無茶を……」

「エッジだってさっき結果的に似た様なことしてたけど？」

周辺への被害と彼女の両方を心配するエッジと、そういった事よりもまずこの危機を乗り切る方を優先しようとするクロウ。

二人は一瞬睨み合ったが、お互いに今は口論している場合ではないと判断し深海の剣の光が流れていく方向を見る。

蒼い光はここに来て幾分落ち着いてきており、そして同時に道標の様に明確な方向を示し始めていた。

二人の視界の先に、月光を反射した白い壁面が微かに映る。

まだ遠いにも拘らず不思議とその輝きは森の暗さで曇ること無く、どこか現実離れして見えた。

「あの建物、だね」

「ああ」

二人は深海の剣が明らかにその建造物に引かれている事を確認する。

その上でクロウが提案した。

「どうする？ その剣があの場合に引っ張られてるのは間違いないみたいだけど、行ったからってこの暴走が収まるとは限らない。何より禁

忌の剣と引き合う様なモノなんてどんな危険があるか分からない——
「引き返すなら今だよ」

それを聞いて試しにエツジは少し剣を身体から離しながら、来た道を引き返してみる。その途端、勢いよく燃え上がる炎の様に深海の剣から立ち上る光は不安定に強くなり、再び所持者を脅かす。

「……どうやら引き返すって選択肢は無いみたいだ」

エツジが白い建造物の方に向き直ると、何事も無かったかの様に剣は落ち着いた。

クロウは尚も尋ねる。

「良いの？……ここにその剣を捨てていくって選択肢もあるけど」

エツジは首を横に振った。

「この剣は俺一人のものじゃない、みんなで『ジード』と戦う為にどうしても必要なんだ」

それだけ言って、少年は迷うこと無く歩みを進める。

そんな答えが欲しかった訳ではないクロウは、しかし一度決めたエツジの意向に異は唱えなかった。

「分かった、付き合うよ」

出だしが遅れた分少しだけ歩調を速め、少女は彼の横を並んで歩いた。

近づくに連れ、その建造物の奇妙さは際立ってきた。

壁面は劣化がひどく長い年月放置されてきた事を物語っているが不思議とその輝きには一点の曇りもなく、まるで鏡面に写った映像か何かの様だった。何よりエツジの住んでいた村が丸ごと入ってしまったいそうなその大きさと、真円に近いその形状はとても家屋にも何人の居城にも——否、およそ二人の知るどんな建物の種類にも該当しなかった。

聳える様な石造りの壁にぽっかりと空いた、通行の為には余りに大きすぎる巨大な大拱門^{アーチ}を潜って二人は内部へと足を踏み入れる。

分厚い壁の下は月光が届かぬ暗闇だった為、トンネルを抜けた二人は反射する一面の月光に暫し目を細めた。

内部は中央部が大きく開けた砂地になっており、その周囲をぐるりとすり鉢状に石造りの段差が囲む。一見するとそれらは階段のようだったがよく見ればそれは一段ごとに区切られ中央部を臨む形で配置された腰掛けであることが分かる。

今二人が抜けてきた分厚い石壁の上部は全てその腰掛けになっており、中央の平らに均ならされた円形の地面以外には何も無かった。

「屋根が無い……」

頭上から直に降り注ぐ星々の光に、クロウはいよいよこれが何の為の建造物なのか分からなくなる。

「劇場、とかなのかな」

エッジも自分の知識の範囲で候補を巡らすものの、どこか間違っている気がした。

戸惑う二人に、聞き馴染んだ女性の声がかかる。

「見世物という意味ではね、但しここでいう所の演目は『闘い』だけだ」

その声で振り返った二人は、他の仲間達が皆追ってきた事にそこで初めて気付いた。

リヨウカの解説は続く。

「この国、アクシズⅡワンド王国の黎明期には武芸や、或いはそんな呼び名も付かない様な獣と人との殺し合いが娯楽とされていた時期があったのよ。勿論今はそんな事が行われてる場所はこの国には無いけどね」

そう言つて視線を向けられたクリフは、むっとして言い返す。

「セオニア王国にだってねえよ」

元々の出身が違うリアトリスも一応補足する。

「レーシアもです」

リヨウカも本気で他国を貶める意図は無く確認も兼ねた冗談だったようで、「そうよね」と微笑んで続けた。

「これは闘技場という施設よ、今となっては風化して歴史に置いていかれた忌まわしい過去の遺物。観客も戦う者も誰も居ないまま放置されたものの一つ……ただ」

そこまで話してリヨウカは一つ引つかかった様で、細い眉根を寄せ
て口を噤む。

その姉の様子を不審に思ったアキが尋ねた。

「何か気になるんですか？」

リヨウカは妹の問いにすぐに顔を上げ、笑顔を作る。

「ああ、いえ。場所がね。一般的にこういうのはもっと、それこそ王都
位人工が多い場所に作られるものだから、ここにあるのは少し不自然
というか……いえ、確かにカースメリア大陸の中でならここは比較的
人口が多い地域ではあるんだけど」

歯切れの悪い彼女の言葉を聞く内に、エツジはこの闘技場を最初に
見た時の違和感の正体に気付いた。

「大きすぎる」——辺り一帯は森で覆われ道さえ存在しない様な場
所であるにも関わらず、それを利用する周辺地域の人口と建物の規模
が釣り合っていない。

数百年以上前のものであるという点を考慮しても、この闘技場の存
在は不自然だった。

そこでふと、話に加わらず周囲を警戒していたルオンが無言でクロ
ウの袖を引き、彼女もそれで気付く。

この無人の闘技場に居る人間が自分たちだけでは無かった事に。

「誰か居る」

低い声で呟いた彼女の視線の先を辿った一行の目に、月明かりの下
で闘技場の反対側に静かに佇む人物が映る。

とても背の高い女性で、その白藍しらあいの髪は星々の灯りを吸った様に薄
いヴェール越しにもその輝きを見て取れる。

均整のとれた身体の線に沿って流れる緑のドレスは彼女の女神の
様に恵まれた体型を強調しながらも、不思議と馴染んでいて違和感を
感じさせず、まるで彼女自身も含めて一つの花であるかの様な一体感
さえあった。

(白い羽根……?)

クロウは一瞬、その女性の足元から舞った様に見えた何かを追おう
と目を眇めるがその時にはもう羽根など影も形も無かった。仲間達

の顔を伺っても誰も気付いた様子は無く、彼女は自分の見間違いだと思っただけで無かった。

緑衣の女性も彼らの存在に気付いた様で微笑みを返す。

「あら、こんばんは」

その笑顔は何処までも慈愛に満ちて、敵意の欠片も無かった。

第二頁 神域

穏やかな声で挨拶をされた一行は返答に窮する。

特に突如禁忌の剣の暴走の危機に晒され、そこから必死に森の中を駆け、不自然な闘技場に辿り着いた事で警戒心が高まっていたエツジは一先ず剣を納めつつも、ヴェールの女性のたおやかな所作に戸惑いを隠せない。

(アエスの暴走は収まつてる……巻き込まなくて良かったけど、たまたまなのか?)

不自然というなら、彼女の手にする物もとても奇妙だった。

壺——否、形状や中身を零さない様に上向きで保持している所を見ると水瓶みずがめの類なのかも知れなかったが——兎に角、子供の頭程の大きさが有りそうなその物体をまるで鈍器か何かを構えるかの様に肩に載せている。

沈黙が長引いて相手に警戒心を抱かせる前に、アキが挨拶を返す。

「こんばんは。あの、何故その様に重そうな物を持つてらっしゃるんですか?」

初対面でするには少々不躰な質問だったかもしれないが、女性は気にする様子も見せず落ち着いた笑みを湛えたまま答えた。

「そうですね、別に態々わざわざこれを持つ必要は無いのです。ただ、この様な場ではつい此これが自然な気がして……感傷だと笑って構いません」

クリフがラークに目配せする。

(壺持つのって感傷的なのか……?)

(僕の方見られても)

失礼な事を聞いてしまったかとアキが慌てて取り繕う。

「い、いえ!とつても素敵なオブジェだと思えます!」

アキが慌てて取り繕った表現に思わず、という風にリアトリスも笑いを漏らす。

戸惑ったり、慌てたりしながらも最初の警戒心を解きつつあるエツジの仲間達の様子を緑衣の女性は穏やかに観察していた。

彼女の物腰が柔らかな為威圧感はあまり無かったが、彼女は女性の

中で一番高身長のリヨウカよりも背が高い。

そこから発せられる気迫というにはあまりに淡く、気のせいで済ませるにはあまりに確信めいた……言い様の無い圧迫間の様なものを、ただ一人クロウだけが感じていた。

(この人間違いなく真つ先に私の方を見た。あの時抜き身の深海の剣を持つてたエツジじゃなく、私を)

クロウは自分が皆の中にとけ込んでいるとまでは思っていなかったが、だからと言って一切の深術の行使もせずに警戒される覚えは無かった。

そんな事を初見で彼女にしてきたのは後にも先にもリアトリスただ一人。

それも心の一族としての感知能力あつての事で、ラークやリアトリスの反応からするとこの女性が「シン」である可能性は低い。

(エツジやフレットみたいは何処かで血を引いてるだけって可能性も考えられるけど、でもハーフのエツジは目の前で私がラーヴァンを実体化させるまで宝珠の力に気付かなかつた……能力には個人差があるとしても、やっぱりさっきの反応は不自然すぎる)

張り詰めたクロウの緊張を、穏やかな青年の声が途切れさせた。

「どうかしたんですか？」

その呼び掛けに緑衣の女性を含めた全員が振り向く。

この闘技場には入場用のものと思しき大拱門アーチが二箇所ありエツジ達が入ってきたのは逆の方——今しがたヴェールを被った女性が歩いてきたのと同じ側からリアトリスと同年代程の青年が近寄ってくる。

「あら、クレスさん」

クレス、と呼ばれた青年は麦藁色の髪を邪魔にならない様に赤いバンドナで縛っており、動きやすそうな革鎧の上から白い板金鎧を纏うことで特に上半身を重点的に防護している人物だった。ヴェールの女性と違ってこちらは明確にエツジ以上に大振りな長剣を帯びており、明確に戦士である事が分かる。

クレスは突然現れたエツジ達の姿に眉を顰める事も無く、首を傾げ

た。

「こんばんは、僕達ここに迷い込んだみたいだね。君達もそうなのかい？」

彼の柔らかな表情にもやはり敵意は無く、それどころかその人懐こい自然な笑顔は、武装しているにも関わらず緑衣の女性よりも親しみやすい印象さえ与える。

クロウはさりげなく隣の少年に耳打ちした。

『剣が安定してる内に離れよう』、と。

エツジは彼女だけに分かるよう小さく頷いて、クレスの問いに答える。

「あ、はい、そうなんです。森の中で迷ってしまっ……」

本当に？と、クレスはヴェールの女性を振り返った。

この二人のやり取りには、お互いに深く踏み入らなくても相手を尊重し合える類の信頼が滲み出ている。

「ええ、外から歩いて来られた様で」

女性は視線を動かさないまま答える。

今度こそ間違いなく彼女はクロウを見ていた。

クレスは苦い笑みを浮かべる。

「そうか、それは困ったね。僕らも案内できそうにないし」

眼の前の剣士が本気で考え込みそうになるのを見て、エツジが慌てて切り出す。まさか初対面の相手がそこまで真剣に身を案じてくれるとは彼も思っていなかった。

「い、いえ大丈夫です！来た道を引き返すぐらいならどうにでもなりますから！」

弾かれた様な勢いで踵を返したエツジは深海の剣の鞘を抱えて走り出し、クロウもそれに倣う。

その勢いは、礼儀正しいアキが思わず制止を掛ける程だった。

「ちよつとエツジさん、クロウさん!? ああつ……もう、すみません」

後ろで束ねた黒髪が大きく暴れ、うなじが見える程深々と頭を下げてアキもその後を追う。

仲間達も会釈したり、ため息を吐いたりしながら続々と慌ただしく

来た道を引き返していくが、背の高いヴェールの女性と赤いバンダナの剣士はそれに気分を害する様子もなく静かに手を振り返した。

「結局何だったんだ？この剣の暴走、急に収まったしここには何も無いし……」

「ひとまず収まったなら良かったじゃん、エッジの精神的なものとかタイミングが原因の暴走だって可能性もあるわけでしょ？」

エッジとクロウは疑問を口にしながらも来た道を戻って、大拱門の出口一歩手前の所で足を止めた。

そこから先は建物の外だ。

二人はどちらからともなく口を噤み、エッジは剣を体から少し離して持つ。

それから、一呼吸おいてエッジが一步を踏み出した。

途端、今まで静まっていたのが嘘の様に深海の剣アエス・ディ・エウルバの鞘から蒼い光が溢れ出す。

勢いよく火花の様に立ち上ったその光は闘技場の壁より遙か上まで伸びる。

「くっ」

心の何処かでそれを覚悟していたエッジは、踏み出した足をそのまま戻して二、三步後退する。

その動きを追う様にして、剣と鞘の間から溢れた光もエッジの手元へと集束していく。

そこへ、リアトリスが息を切らせながら追いついて来た。

「やっぱり、暴走してたんだね」

彼女の深刻な表情を見て、クロウは仲間達がこんな森の奥までついてきたのが偶々では無いことを悟る。

「そっか、リアこの剣の異変に気付いてたんだ。道理でみんな現れるのが早いと思った。つくづく『心』の感知能力ってのは桁違いだね」
クロウは半ば呆れながら褒めるが、リアトリスはそれを無視してエッジに告げた。

すぐにも仲間達が追い付いてくる。

「……エッジ、もしその剣の制御を失うなら、私とラークはそれを力づくでも取り上げるよ。禁忌の剣がエッジの命を奪う前に」

何も、答えることがエッジには出来ない。

今のは嘘だった。

ラークは深海の剣の暴走で更なる被害を出すくらいなら『エッジの命を奪ってでも』それを阻止するだろう。

そして、今エッジにこの破壊の剣を再び御し得ると示す根拠は何も無い。

だから、彼は黙るしかなかった。

リアトリスの後からルオンの小さな白い頭がひよつこりと覗き、それに続いて追い付いてきた仲間達が次々沈黙の上に心配の声を重ねて来るのがエッジには辛い。

そんな嫌な空気を、つい先程の剣士の声が破った。

「そうか、その剣を持っていたからここに来たんだね」

いつの間にかエッジのすぐ目の前にクレスは立っている。

俯いていたせいかわ、声をかけられるまでエッジも気が付かなかった。

「どういう意味ですか？」

アエス・デイ・エウルバの存在を知っているかの様な相手の反応に、エッジは慎重に聞き返す。

クレスの背後でラークも無言で武器の柄に手を掛けた。

自分に向けられる疑念を感じたのか、クレスは先に否定する。

「ああ、いやその由来や名前を知っているわけじゃないんだ。ただ僕の剣がその剣と呼び合っていたから」

(剣が、呼び合う?)

荒唐無稽、と切り捨てるにはエッジの中でここまでの深海の剣の暴走があまりに引つかかった。

クレスは害意が無いことを示す様にゆっくりと自分の長剣を引き抜く。桔梗色の幅広で真っ直ぐな刀身が顔を覗かせる。

青味がかった剣という比較的珍しい共通点も確かにあったが、色味以上にエッジは一目クレスの抜いた剣を見た瞬間、深海の剣と同じ

「圧力」の様な物を感じた。

(いや……これはそれ以上)

本能的に感覚がそう訴えかけるが、同時にエッジの中の論理的な思考がそれを否定する。「万物を分解するという力と同等以上の力などある筈が無い」と。——そう否定しながらも「それが事実として眼前に存在する」と訴えかける感覚が否応なく想像を悪い方へと向かわせる。

その底の知れない長剣をそつとクレスは構えた。

「僕はクレス・アルベイン。この剣はエターナルソード、君の名前は？」

エッジも一瞬躊躇ったが、深海の剣を鞘から抜きそつと相手の剣と合わせる。蒼い刀身の光は何かを待つ様に穏やかだった。

「エッジ・アラゴニートです。この剣は深海の剣、アエス・デイ・エウルバ」

二振りの剣が十字に交差する。

普通なら他人の武器と接触させたりすれば深海の剣はその武器を即座に破壊してしまうが、不思議とエターナルソードに傷は付かず、エッジ自身接触の前から大丈夫だという奇妙な確信があった。

クレスは静かな闘志を以てエッジの顔を正面から覗く。

間近で見上げるクレスの表情は優しげであつても、同時に戦うものとしての強さを秘めており、エッジはややそれに気圧される。

「僕と闘って欲しい。本気、でね」

心の揺れを見透かす様にクレスは念を押す。

エッジはすぐには答えられなかった。

肌が彼との実力差を感じていた。

(俺なんかで相手になるのか?……でも、応えるのが礼儀か)

しばしの逡巡の末、エッジは頷く。

二人は一旦剣を下ろし、闘技場の中央部へと引き返した。

途中エッジは「敵なの?」と視線を向けてきたルオンに笑みを返す。

まだ剣の暴走を心配している様子のリアトリスは、このまま戦いに挑むことに複雑な表情をしていた。

と、先程から静観していた緑衣の女性がエッジとクレスの前に立ってその歩みを止めさせる。

「クレスさん、その戦いに先立ってまず私が少し時間を戴いても？」
今まさに戦いを始めようとしていたクレスは戸惑いながらも足を止め、話を聞く。

「どうしたんですか？グリユーネさん」

「貴方もその二振りを衝突させるといふのがどの様な事か気付いていないのでしょうか。だから、その前に済ませておきたい事が有るのです」

ヴェールと神秘的な雰囲気とを纏った女性――グリユーネは柔らかな笑みと共に啓示の様にクロウを指差した。

「私と戦ってはくれませんか？クロウさん」

クレスを初め皆が、一見戦意の欠片も無さそうな彼女の発言に驚く。

が、当の指名された本人は何と無くこの展開を予想しており、やや諦めの混じった表情でグリユーネの視線を受け止める。

「……分かった」

クロウの答えを聞いたグリユーネはふつ、と落ち着いた相好を崩し、純真な少女の様な笑みを浮かべた。

「ありがとうございます、では決まりですね」

二人は驚く程あっさりとは戦う事を決めてしまいが、これに慌てたのはクレスだった。

「ちよ、ちよつとグリユーネさん本気なんですか？」

突然割り込まれただけでなく、その指名した相手が投げナイフ以外武器らしい武器も持たない少女である事に彼は困惑した様子を見せる。

しかし、グリユーネはそれを杞憂だと諭す様に目を細めた。

「別に殺し合いをする訳ではありません。それに、その娘はクレスさんが心配する程弱くはありませんよ」

そうでしょうか？とグリユーネは同意を求める様に笑みを浮かべながらクロウを見つめ、彼女に顔をしかめられる。

まだ少し納得のいかない様子のクレスは隣にいるエッジを安心さ

せる様に耳打ちした。

「……もし本当に危なかったら僕が割って入るよ」

エツジは、クロウもその対戦相手の女性も両方が心配だったが、両者が距離をはかりながら向かい合ったのを見て、他の仲間やクレス達に倣い渋々観客席と解説された石造りの段差へと足を向けた。

二人以外の人間が下がるまで対峙したクロウとグリユーネの間には緊迫した空気が流れる。

エツジは重苦しい空気に耐えきれなくなり、自身と同じ様に不安げな顔のアキに尋ねた。

「大丈夫かな？クロウ自身も勿論心配だけど、クロウ加減が利かなくなる時があるから」

「私も同意見です、こんな危険を負う必要なんて……」

後ろから、リヨウカが腕組みをしながら溜め息と共にその疑問に答えた。

「貴方達は深術とか基本的に独学で学んできたから馴染みが無いかもしれないけど、武術同様実戦形式の訓練は深術士セキユアラだってやるものよ。一つ一つの術が例え完成されていようとそれを実戦で使いこなすのは全く別の技術だもの。戦況に合わせた選択肢の取捨選択、攻撃を受けるかもしれないストレスのかかる環境下での確実な詠唱、場合によっては術だけに頼らず自分の身体を動かして相手の動きに対応する判断力……必要とされる能力は多いし、詠唱時間なんて隙を生じる技術である以上その判断・先読み等の重要性はとても高い。そういうのを鍛えるには結局実践が一番だもの」

姉の淡々とした解説を聞いてアキが反論する。

「そもそも今ここでそれを行う必然性が無いと言っているんです」

目を吊り上げた妹を前にしてもリヨウカは冷然と続ける。

「あの子が心配なのは分かるけど落ち着きなさい。私だってクロウが何故戦いを受けたのかは分からないわ。ただあの子自身が決めた時点でもう私達が口出しする事じゃないのよ」

それからリヨウカは宥めるなだ様に語調を和らげて、付け足した。

「クロウが自分で助けを求めてきたらその時は助けてあげなさい、それだけで十分よ」

アキもエツジもその言葉で再びクロウの方へと向き直ったが、その顔にはまだ不安がありありと出ていた。

いつでも始めて問題ない様に身構えるクロウの正面で、円形の競技場の反対端近くまで距離を取ったグリューネは水瓶を肩に乗せた彫像の様なポーズのまま動こうとしない。

「何時でもどうぞ」

構えもしない相手にクロウは躊躇する。

「どうぞって言われても……」

仕方なく彼女は水のディープスを周囲から集束コレクトし詠唱を開始するが、無抵抗の相手と大勢が見守る前で自分一人が攻撃しなければならぬ状況に彼女はひどい居心地の悪さを感じた。

「じゃあとりあえず——アクアエツジ！」

小さな見えない程の粒子が寄り集まって水滴となり、そして三つの円盤状の水の塊へと変化して回転速度を上げる。

クロウの合図と共に飛び出したそれらは、それぞれ異なる軌道でグリューネへと襲いかかる。

「……」

が、術を放たれた当のグリューネはそれを何処か不服そうに見つめた。

（何もしてこない？）

クロウは相手が防御どころか身じろぎもしない事を不審に思うが、その理由はすぐに明らかになる。

打撃によるダメージを狙った水の歯車はその悉くことごとくが対象を外して、グリューネの背後の壁を打ち付けた。

彼女が少しでも動いていたら逆にその直撃を受けていただろう。

クロウは自分の甘さに舌打ちする。

（普通の術を使うのが久し振りだからって狙いを外すなんて）

間を置かずクロウは直ぐ様、次の術の詠唱を開始する。

「吹き上げれ、奔流——」

多量のデンプスがクロウの周囲に集まり、ヴェールを被って悠然と佇む女性の周囲へと流れていく。

先程の「アクアエッジ」には発動から到達まで若干の時間差があったが、今度の術は直接対象の周囲で発動した。

「スプレッドー！」

グリユーネの周囲の見えない容器を満たすかの様に水位を上げ、彼女の姿を覆い尽くしたその水流は、中心目掛けて殺到しその衝突の勢いで高く水柱を上げる。

「——本気を出して構わないのですよ？クロウさん」

澄んだ声が響いた。

それと共にクロウの放った水流がまるでカーテンか何かの様に開き、水飛沫を避けて目を閉じたグリユーネが無傷のまま姿を表す。

それを見てクロウは冷や汗と共に確信した。

（やっぱり、さっきの攻撃も外れたんじゃない、間違いなく攻撃が逸らされてる）

自分を穏やかに見つめる女性の翡翠の様な眼を、彼女は急に氷の様に冷たく感じる。

不意にクロウは当たり前の様に自分に話し掛けてくる相手に疑問を抱いた。

（あれ……私……そういえば名乗ったっけ？）

戦いを申し込んできた女性は、手を止めたクロウの姿を観察する様に見つめながら小首を傾げる。

「こちらからも攻撃しないとその気になれませんか？」

グリユーネの細い指の先で、うっすらとその爪が白い光を放つ。

身体に震えが起きる程急激に気温が下がり息が白くなっている事に気付いてクロウは、はっと顔を上げる。

その視線の先でグリユーネがはつきりとその術の名を宣言した。

「アブソリュート」

瞬く間に低温状態になっていたクロウの周囲の空気は、彼女を呑み込んで氷結した。

「――！」
ラークと共にグリユーネの態度を警戒し、固い表情で戦いを見守っていたリアトリスが不意に弾かれた様に立ち上がる。

「クロウ、駄目！その力を人に向けたら――」

大人五、六人が丸々閉じ込められる程分厚い氷塊が、内部から粉々に砕け散った。

その中から何本もの黒槍と共に、本来紫の瞳を漆黒に染めたクロウが飛び出す。

咄嗟に、ほとんど条件反射で宝珠の力を借りたクロウは、自分の周囲の空気を闇のディープスで固める事で隔離し、集束したディープスをそのまま頑丈な黒い槍として放つ事で「アブソリュート」の攻撃を突破していた。

詠唱もなく、無造作に膨大なエネルギーを振るう事で強引に引き起こされた術に対する術でのカウンター――クロウ自身意図せず発動する事になってしまったその力は、氷を突き破るだけに留まらず真つ直ぐにグリユーネ目掛けて飛ぶ。

攻撃から逃れるのに必死でそれに後から気付いたクロウは、焦りに目を見開く。

槍は止まる事なく、風を切る音だけを残して、真つ直ぐに女性の胸へと翔^かへる。

訪れる悲鳴を。

咲く血の華を、誰もが覚悟する。

しかし、そうはならなかった。

グリユーネは胸の前ですつ、と一本横線を引く様に指を動かし、ただそれだけの事で人の命を一撃の下に奪い去る黒槍は軌道を変えられた。

槍は伴った冷氣によって氷片を散らしながらも、玩具の矢か何かの様に綺麗に流され観客席の壁に激突する。

自身の背面の石造りの壁に突き立って凍り付かせた黒槍を意に介する様子もなく、グリユーネはクロウに言った。

「まだ全力ではありませんね」

今しがた宝珠の力を人に向けてしまった時と比較にならない寒気がクロウの背中を走る。

自分がどんな規格外の相手と戦っているのか、クロウはようやく理解した。

「……あり得ない」

何が起きたのかを把握していたリアトリスは目の前で起こった現象が信じられずにへたり込む。

クロウの「ブラッツディランス」はごく少量の水によって軌道を変えられていた。

そもそも闇の宝珠アスネイシスの欠片を宿した彼女の術は正面から受け止める事などまず出来ない。

クロマティッククリスタル

『色』の『水晶』を使えば一応リアトリスにも防御出来たが、それはあくまでディープスの結合の構造的優位に因るもので短時間が限界であり、扱っているディープスの量そのものの桁が違う以上長期戦になれば破られるその場凌ぎでしか無かった。

防御不能——それがクロウの深術の絶対的優位性。例外は同じ宝珠のより上位の力を操る『ジード』のみ。

それをグリユーネは、手に掬える程度の水だけで防ぎきった。

(クロウの闇属性の深術は全てその強力さ故に強い冷気を帯びてる。だから、水が接触したりすればその部分は即座に凍る……でも、それと接触の瞬間の衝撃を利用してあのスピードの槍の軌道を変えるなんて)

理屈は単純でもそれを現実のものとするには、手足の様に術を操る精密さと、クロウの打ち出した黒槍のスピードと同等かそれ以上の速度が必要になる。

誰より術に対する理解が深いからこそ、リアトリスはグリユーネの術の使用に垣間見える力の底知れなさに恐怖した。

「ブリリアントランス」

グリユーネの言葉と共に先端が発光する笹穂槍に似た形状の武器が五本、何処いすこからか前兆無く現れ落下する跡さえ視認いすこさせずに次々大

地に突き刺さる。

それによつてクロウは詠唱を中断させられ、剥き出しの地面を転がる様にして回避を余儀なくされる。

(くっ、詠唱は普通だけど、術の発動時間が極端に短い……その上向この術のディープスが感知できないんじゃない、どうしてもこつちが後手になる)

恐れ——という点では例えリアトリスの様な正確な分析能力を持つていなくとも、直に対峙するクロウもまた同じだった。

自分がどれだけ強力な術を使おうともそれを容易く退けられ続ける重圧は、否応なく彼女にのし掛かる。

もはや加減しよう等という発想はクロウの脳裏に一片も無くなつており、彼女は先程から宝珠の力の化身とも言える巨鳥ライヴァンを実体化させようとしていたが、その度グリーンエネの反撃に先を越され巨鳥を実体化させるのに必要なディープスを安定させる事が出来ずにいた。

一度、巨鳥を実体化させてしまえば威力が向上した深術と、飛行による優位によつて状況を引っくり返せる可能性は十分にあつたが、相手の波状攻撃がそれを許さない。

「サーペンツヴァイトー！」

仕方なく彼女は負担を覚悟で自分の身体を通して闇の宝珠の力を行使し、詠唱を破棄する。

瞳の色を変化させたクロウの命めいで撓しなる二対の鞭が大蛇の様にグリーンエネに襲い掛かった。

先程の攻撃で既に「ブラツデイルランス」の直線軌道を見切られていた彼女は、不規則な軌道の術で相手のピンポイントの防御を封じる。それに対してグリーンエネは飛来する攻撃の軌道が無理に見切ろうとはせず、代わりに自身の前面の広範囲に渡つて水膜を張った。

彼女の後方の観客席や壁面まで全てが覆われたことで、空気と水との屈折率の差によつて揺らぐ透明な景色の境界が生まれる。

殺伐とした闘技場の土煙にそぐわない程清純な水のヴェール。

けれど、その効力は紛れもない本物で、クロウが再度放つた反撃を半球状の形状を少しも損なうこと無く打ち払う。

よく見れば「サーペンツヴァイト」との接触の瞬間水はその箇所だけ確かに凍っていたが、それは本当に一瞬の事で瞬く内に氷は闘技場の壁面の方へと流され水膜は鏡の様な静けさを取り戻す。見た目は穏やかでもその実、グリユーネを護るそれは高速で流動していた。

「……これもダメか」

またも防がれた事でクロウは攻めあぐねる。

手が止まった彼女に向けて、グリユーネが詠唱を開始する。

「虚空を曲げし揺らぎ有る檻よ、解放への楔を打ち込め……」

術のディープスを感じできなくとも、今までで一番長い詠唱にクロウの術士としての本能が警告を発する。

グリユーネの姿は依然として水のヴェールの向こう側。

それを破る手段が今のクロウには思いつかない。

彼女の心臓が気味の悪い速度の拍動を刻んだ。

(防げる？何が、どこから飛んでくるかも分からないのに?)

相手の術の初動を見逃さない様に視線を忙しなく動かしていた彼女は、自分の足が引きずられる感覚に気付いて足元を見る。

自身の扱う実体を持った冷気の集合体である「闇」とは質の違う、引力と触れただけで肌の内部にまで染み付いて変質してしまう様な澱みを孕んだ沼の様な暗闇がクロウの脚を引きずり込もうとしていた。

(しまっ——)

「ネガティブブレード」

グリユーネが口にした術の名と共に闇の底から、術の本格的な始動を示す紫電が走った。

第三頁 時空の剣と、深海の剣

(どうする?これじゃ本当に防御なんて出来ない……!それどころかこの至近距離じゃ攻撃術での相殺もリスクが)

足を取られたクロウは、一秒にも満たない僅かな時間で必死に頭を回転させる。

「クロウー」

彼女の明らかな窮地に客席のエッジも思わず身を乗り出した。

その焦りはクレスも同様であった様で何をするつもりか、彼は届かぬ間合いから自身の剣に手を掛ける。

しかし、既に発動した術に誰の制止も間に合う筈も無く、グリューネの術は正にクロウの足元で炸裂した。

鰐わにの開いた牙が獲物を捉える様な動きで、一度大地から跳ね上がった鋸状の刃が弧を描いて再び地上へと振り下ろされる。

一見避けやすい大振りな攻撃だったがこの刃も付近にあるものを引き付ける引力を強く放っており、掠りでもすれば地面との間に巻き込まれ圧殺されるのは目に見えていた。

「くっ——ビッグバン・デトネーション!」

クロウは咄嗟に自身の両足と地面の隙に向けて宝珠の力を出鱈目に解き放つ事で、無理矢理そこから上へと逃れる。

暗闇が彼女の足を引きずろうとする引力を、過度に圧縮された第二属性元素の爆発によってクロウは振り切った。

しかし、その代償にただ身体を浮かすだけでは強すぎる反動を受け、彼女の身体は木の葉の様に高く宙を舞い円形の闘技場より更に上まで飛ばされる。

「あれ、深術で自分の身体を!?!」

人間離れした動きを見せるクロウの姿に、エッジは深術の応用で身体の動きを加速させたり、技の威力を上げたりしていた兄の事を思い出す。

しかし、それを聞いたラークは険しい表情で首を横に振った。

「いや、あれはブレイドみたいにしつかり反動に耐えられる肉体が出

来上がって、適切に術の威力を調整して初めて出来ること。それをいきなり闇の宝珠の出力でやるなんて無茶だ！」

「ああ、つぐー！」

無理な動きで姿勢を崩したクロウは、脚の筋肉が裏返る様な痛みに空中で思わず呻く。

が、彼女に怯む暇はなかった。このままいけば背中から地面に叩き付けられ自滅するのは目に見えている。

顔は引きつり、息は苦しい。

(……でも、まだ生きてる)

クロウの内からは何故か感じた事の無い高揚感が込み上げた。

この相手は強い。

今の彼女では敵わない程に。

唇から、クロウ自身気付かない内に笑みが漏れる。

後が無い状況に開き直り、遙か眼下の相手が展開している水のヴェールをクロウは落ち着いてもう一度観察する。

(あの水膜……厚さは大したこと無いけど、表面はラーヴァンの術を弾く程速く中心部から外縁部へ向かって流れ続けている。けど、最初の発動から追加で術を発動してる素振りはない……もし、あの水が循環してるだけなら流れを滞らせる事が出来れば)

ふと水膜越しに、中空の彼女とグリューネの視線が交差する。

グリューネの瞳には予想外の動きに対する焦りは見えない。

ただ落ち着いて自分を観察してくるその様に、クロウは試されていく様にした。

(勝ちたい、この人に！)

身体が落下に転じ始めたのを感じながら、クロウは一か八かの反撃に出る。

「凍り付け——マーシレススパート！」

槍でも鞭でも無く、温度を奪う目的で高濃度の黒霧を発生させるクロウ。

闘技場の中央部全体が覆われた事で観客席からは一切が分からなくなるが、闇属性のディープスを自分の手足の様に扱えるクロウと、

水のヴェールで自分の周囲の視界を確保しているグリユーネの二人には然したる障害にならない。

黒霧は水幕と触れ合った途端その表面を白く凝固させ凍らせるが凍結の速度以上に水の流れが速く、水となった部分はそのまま闘技場の壁に叩き付けられて水の流れの一部を滞らせるに留まった。

「それだけでは破れませんよ」

「それでも、流れは遅くなった」

間髪入れずにクロウは追撃をかける。

自身の落下軌道上に三本の黒槍を並べて生み出し、角度を少しずつずらして打ち出した。

一射目の先端が水の防壁に食い込み槍の周囲を氷結させるも、完全に貫通するには至らず水の勢いに負けそうになる。

そこへ立て続けに第二、第三射が前の槍を砕きながら押し込むようにして同じ場所に突き刺さった。

一射毎に水幕の表面が白く円形に凍てつき、同時にひび割れも音を立てて増えていく。

それによって水の流れが緩やかになったことで氷結の速度は加速し、最終的に氷のカーテンと化した水のヴェールは到頭自重に耐え兼ねてクロウの攻撃した箇所から崩れ落ちる。

（これで攻撃が通る）

けれど、相手もただ手を拱こまねいて待つてはいなかった。

グリユーネが防御を失うのと同時に気味の悪い囁き声が、クロウに四方から迫る。

着地したクロウもまた今度は反撃が来るのを予期しており、それを真っ向から迎え撃つ。

「ブラッディハウリング」

虚空から押し寄せる死霊達と地から湧き出す魔狼の群れ、二つの咆哮は互いを呑み込もうとして果たせずクロウの周りを囲う形で拮抗する。

単純な正面からの突破力では宝珠アスネイシスの力を借りたクロウの狼の群れが上回っていたが、グリユーネの呼び出した怨念は一度

蹴散らされても怨嗟の声と共に自分達を食い破った魔狼にしつこく追いつき背後や脇から引きずり込み消していく。

同じ名前の似通った術であっても二人の操る力は大きく性質が異なっていた。

クロウの操る闇は霧、槍、鞭、壁……と一見変幻自在に見えてもその実、全て冷気を帯びた元素の動きを事前に決め、濃度を変え計算して動かしている。彼女の操る「深術」は論理的で規則的な「技術」だった。

それに対してグリユーネの操る闇は術ごとに全く異なる面を見せる。

引力を持って引きずり込もうとしてきたかと思えば、精神を蝕む妖しきを見せ、深術士セキユアラの術では不可能な意思を持った動きで迫る——変幻自在のそれには「闇」というよりむしろ「呪い」という言葉の方が適切だった。

両者の術のせめぎ合いは互いに持続時間の限界を迎えた事で自然消滅する形で終わりを迎えるが、その時には既に二人は次の術の詠唱に移っていた。

「小ちいさこきこ子こよ、滅ほろびびの本ほん懐かいをと遂とげるか……」

「暗あん澹たんたる闇やみよ、我われをみ導みちくつばさ翼つばさとなれ……」

グリユーネの流麗な詠唱に一息遅れて、急ぎ立てる様なクロウの詠唱がそれを追う。

未だ視界晴れぬ状況に観客ギヤラリーは不安を募らせる。

闘技場中央部を積乱雲の様に覆っていた黒い霧は時間の経過で緩やかに観客席へと広がり、全員を冷え冷えとした靄で包んでいた。

徐々に薄くなつてはいてもその分広域へと拡散した闇で、明るい夜空より下は見通す事が叶わない。

時折聞こえる硝子の碎ける様な音や、風が上げた悲鳴の様な奇怪な物音が、見守る彼等の嫌な想像を一層煽る。

それでも皆がじつと静座しているのは、対峙する二人の瞳の中に垣間見えた熱が純粹な決着以外の結果を拒んでいたからだだった。

そうして誰もが霧が晴れるのを待つ中で、ふとクリフが上方の異変

に気付いた。

森の中の闘技場より遙か上空、綿雲よりもずっと高い天辺の空が割れ、一見何もない空気が真の虚空によって断層の様な裂け目を晒す。

「俺の目、おかしくなっちゃったのか？」

「天界の審判てんかい しんぱんここに呼び覚よまさん——ゴツドプレス」

精巧に模された巨大な人の手か、或いは真に異なる理ことわりの中にある神そのものの力の具現か。それに比すればあまりに矮小なクロウの背丈目掛けて、空の裂け目から紅蓮の腕が振り下ろされる。

「——飛翔せよ、ラーヴァン!!」

それに対して辛うじて詠唱を間に合わせたクロウの元から巨鳥が飛び立つ。

空気が形作られる様に出現したそれは寸刻を惜しむよう実体化する間にも上昇を開始しており、少しでも彼女から攻撃を遠ざけようと落ちてくる掌に向かって突進する。

空と地とのちようど中間で両者の術は激突し、その衝撃は巨鳥ラーヴァンと感覚を一部共有しているクロウの息を詰まらせた。

（何て、威力……！純粋な力押しでもここまでなんて）

立場が逆ならば二つの術は拮抗したかもしれない。

先んじて万全の状態で術を発動したのがクロウなら。

相手より上から仕掛けたのがクロウなら。

けれど、現実にその両方で一歩先を行ったのはグリユーネだった。

天から振り下ろされる一撃と、下からの攻撃とでは重力の恩恵が違う。

短い時間で十分な加速を得られなかったラーヴァンの勢いは、質量に勝る神の腕によって受け止められ押し込まれる。

「ゴツドプレス」は物理的な圧力だけで無く高熱まで帯びているのか、接触した部分からラーヴァンを構成する元素が散逸する。

（まずい、このままじゃ……意思の同調が解ける！）

宝珠の欠片の持つデーブスと、空気中から集束した闇属性のデーブスの総量とが釣り合っているからこそラーヴァンはそれを依り代として動くことが出来ている。一定量以下まで実体化した

ラーヴァンの元素を散らされれば、その瞬間巨鳥だったものはただの
大気の集合に成り果ててしまう。

今のまま続ければ確実に押し潰される事を悟ったクロウはラー
ヴァンの形態を变化させる。巨鳥は上昇する為に大きく広げていた
翼を最後の羽撃きと共に折り畳ませ、真上を向かせた嘴から伸びる鋭
利な流線型へとその身を収束させていく。

ラーヴァンの側が、面での衝突ではなく一点への刺突へと攻撃の種
類を変えた事で両者の術の均衡は崩れ「ゴッドプレス」は闘技場へと
再び降下を始める。

黒い矢はさながら意思を持った電離気体の様にその術の中心を引
き裂きながら進んだ。

恐らくは最も力が集中しているであろう「手」の部分を通した事
もあり、ラーヴァンが受けるダメージは減ったものの上級の術同士の
摩擦はそれでも刻一刻とその身を削り、黒い羽根をその通過軌道上に
散らす。

裂かれながらも尚地上に墮ちようとする紅蓮の腕と、焼かれつつも
その中心を翔る漆黒の彗星——鎬しのぎを削り、確実に互いの威力を殺ぎ
ながらも両者の術は未だ必殺の威力を有していた。

不意に巨鳥からフィードバックされる感覚が急速に揺らぎだした
のを感じたクロウは、あと数秒で同調が完全に解けると理解させられ
る。

それでも、彼女の胸の高鳴りは止まない。

一つ戦況を覆される度大きく跳ねる鼓動は最高潮で、今この瞬間
「諦める」という選択肢はクロウの中には存在しなかった。

「降りて！」

突如、術のぶつかり合いを回避する様に巨鳥を下げたクロウの行動
にグリユーネは一瞬勝負を捨てたのかと考えるが、自らへ向けて再び
翼を広げて向かってくるラーヴァンの姿にそうでは無い事を悟る。

二つの術は殆ど同時に落ち、辺り一帯を覆っていた霧を悉く霧散さ
せた。

闘技場の客席の直下、入り口のアーチから繋がる環状の空洞の中。かつては施設の維持に、敗者の運び出しに、或いは戦う獣の移動に使われた廊下に一人佇む女性が居た。針葉か或いは王冠を象った様な鋭利な黒い仮面、夜を纏った様なドレスの陰鬱な色の中で、空の様に澄んだ髪が却って不気味な色に映る。

廃棄されて久しいこの空間に灯りなどは無論無く、埃と共に堆積してきたかの様な鈍い暗闇だけが場を満たしている。

女性はその中で壁の向こうの戦いが見えているかの様にただ一点を見つめていた。

彼女は間近に誰も居ないにも関わらず、まるで相手には聞こえていると確信している様に呟く。

「良いのか、グリューネ？この世界の滅びは確定したぞ」

勝ちを譲られた事を訝るかの様にそう口にして、彼女は闇の中へと消えていった。

「がはっ！あっ……っうー！」

間近に落ちてきた一撃とそれが生み出した地を抉る程の爆風によつて、クロウの身体は三度、四度に渡つて地面を後方へと擦りながら吹き飛ばされる。

途中で相殺を諦めた事で十分な威力を保ったまま地表へと落ちた「ゴッドプレス」は、彼女に直撃するギリギリの所で進路を変えていた。

そうでなければ彼女は今頃古びた闘技場に穿たれた穴の底で息絶えていただろう。

が、威力を保ったまま直撃したのはクロウの放った術もまた同様で、グリューネの居た所にも黒鳥が最後の力を振り絞って行った特攻によつてさながらクレーターの様に中心が大きく窪んだ氷の山が出来上がっていた。

そして、そこに立っていた筈の女性の姿は何処にも無い。

観客席で静観していた仲間達もこれには流石に動揺するが、ただ一人クロウだけは何が起きたのかを概ね理解していた。

(術が当たった手ごたえが無かった。その上、向こうは明らかに手加減してた)

互いの術が墮ちる直前。

二人だけの霧の中で、ラーヴァンの攻撃を受ける正にその瞬間。

グリユーネは確かに微笑んだ。

「それで良いのだ」と肯定する様に。

グリユーネが何処へ消えたのかはクロウにも分からない。

けれど不思議と彼女は清々しい気分だった。

終わった今になってクロウはようやく、こうして全ての力を出し尽

くして他人と競ったのは初めての経験だったと気付く。

(この力は自分の力じゃないと思ってきたけど……なんだ、やっぱり使って負けたら悔しい)

背を地面に預けたまま夜空と向き合う形になったクロウは、そこから降ってきた白い光の羽根を祝福の様に感じた。

「本当にグリユーネさんは無事なんだね」

「多分だけどね……少なくとも私にあの人は殺せない」

先に試合を終えたクロウから場を譲られたクレスと名乗る青年は、重ねてそう尋ねる。

彼もグリユーネと名乗った女性とは会ったばかりで殆ど彼女の事は知らないらしかったが、それにも関わらずここまで彼女の身を案じるのはこの青年の実直さを表している様に思えた。

「不思議だね、根拠なんて無いけど僕もあの人は無事だったという気がするんだ」

そう言つて屈託の無い笑みを向けてくるクレスに戸惑い、クロウは顔を逸らす。初対面の相手から向けられる信頼はどんな形のものであれ彼女には慣れないものだった。

「さて、じゃあやろうか。エッジ君」

そう言いながらクレスは桔梗色の剣——彼がエターナルソードと

呼ぶ長剣を引き抜いた。それと同時にリアトリスに肩を貸して貰いながらクロウも観客席まで下がっていく。

一度獲物を抜いたクレスの気迫は直前までの『優しい好青年』とはまるで別人で、エッジはひしひしとその圧力を肌で感じる。

その緊張は彼だけでは無く、仲間の中でも最も武術に秀でたクリフとラーク、護身術の範囲とはいえある程度武器を扱う心得のあるアキとリョウカ、それに戦闘時以外であまり緊張する姿を見せないルオンにまで及んだ。

自らの手で武器を扱う者全員がクレスの無駄の無い動きから、その実力を感じとる。

クレスの呼び掛けに、エッジは返事をしなかった。

青年は僅かに怪訝な顔をするものの、対峙する少年の表情を見てすぐに納得する。

エッジには既に返事をする余裕など無かったのだ。

誰よりも間近でクレスの圧力と正面から向かい合わなければならなかった少年は、ただ逃げないこと、相手と戦う事だけに全神経を集中させていた。

(良い気合いだ)

エッジの必死な、ともすれば堅すぎるとも言える程真っ直ぐな目を見てクレスはいい門下生を見る様で嬉しくなる。

「いっよ」

今度も返事は無かったが、それでもクレスは何も言わずに斬りかかる様な事はしなかった。

「魔神剣！」

赤いバンダナの剣士が最初に放った技に観客席の仲間達が微かにざわめく。

勢いよく振り上げられ剣が描く正円に近い綺麗な軌道こそ違うものの、その剣から放たれた飛ぶ斬撃は紛れもなくエッジが使う技と同じものだった。

(避けるか? 防ぐ? これはきつと牽制だ、下手に動けば隙を晒す……
だったら!)

迫る「魔神剣」に対してエッジは一番隙が少ないと判断した行動に出る。

「魔神剣・「蒼」！」

地面を擦り上げる様に斜めに振られた剣は、クレスの技と同様に「気」による刃を生み出し地を駆ける。

ただ一つ違うのは深海の剣「アエス・デイ・エウルバ」の力の乗ったその斬撃は、クレスの放ったものよりずっと深い蒼に染まっていた事。

部分的にはいえ分解の力を帯びたエッジの「魔神剣・「蒼」」は相手の放った技を霞の様に消し去り、真っ直ぐクレス目掛けて飛ぶ。

予想外の出来事にクレスは完全に不意を突かれ、間合いを詰めようとしていた前傾姿勢のまま無理矢理防御に移らねばならなくなる。利き腕に近い側で低く構えていたエターナルソードを身体の正面に移動させ、斜めに寝かせる事で身体の重心を動かさなままに、クレスは最小限の動きで翔んできた斬撃を弾ききった。

そこへ、彼と同じく間合いを詰めてきていたエッジの切り上げが迫る。

「！」

再びエッジの攻撃を防いだ剣士の驚きは、斬り掛かれた事に対するものでは無かった。

右下から繰り出され横へと打ち払った筈の蒼い剣の側面が掠っただけで、籠手に傷が付いたのだ。

対するエッジは確実な手応えを感じていた。

(向こうの武器を破壊できなくても、アエスの力が失われた訳じゃない。これなら、いける！)

そうして攻勢に出ようとするエッジの身体がいきなり宙に浮いた。(え……?)

お互いの武器が一度振るわれた直後。

彼を襲ったのは脚だった。

「飛燕連脚！」

一度、二度と続けて繰り出された蹴りはエッジの体を容易く中空へ

と跳ね上げる。

(まずい、防御を……！)

胸と顎を強打され乱れた視界の中で、彼は手を離れかけた剣を握り締め、続くクレスの三撃目の突きを受けた。

地上では踏ん張りが利いて止められる攻撃も、空中ではただエッジを後方へと押し流す。

そのまま尻餅について乾いた地面へと落とされたエッジは、眩暈めまいが治まるのを待つ間もなく迫ってくる赤いバンダナの剣士の姿を認め立ち上がる。

「獅子戦吼！」

「獅子戦吼！」

またも、二人は同じ性質の技を同時に放った。

一旦距離を置いて態勢を立て直そうとするエッジの動きに対して、それを読んでいた様にクレスも同様の技で相殺する。

刃を遠くまで届かせるだけの「魔神剣」とは比較にならない量の圧縮された「気」は、獅子の頭を象った濁流となって相手を吹き飛ばそうとする。人体の重さなど言うに及ばず、生半可な武器での攻撃さえも無力化してしまうその技同士の衝突を制したのはクレスの放った「獅子戦吼」。

「ぐっ！」

相殺で威力を減じさせたおかげでエッジは数歩分ぎりぎりど地面を後退させられるだけで済んだものの、深海の剣の力抜きの単純なりよりよく膂力では鎧姿の青年の方に分があるのは誰の目にも明白だった。

「それなら、これで！」

エッジは二度目の「魔神剣・「蒼」」を放つ。

初撃では大きな効力を上げたその技も、しかしクレスは「魔神剣」で対抗する様な事はせず剣で直接斬り払う。

今度軽々と霧散させられたのはエッジの技の方だった。

エッジは自身の過ちを悔いて、眉間に皺を寄せる。

技を防がれた事自体ではなく、焦って貴重な攻め手を一つ無駄にしまった事がより彼を焦らせた。

きちんと機を使えばまだ通用したかもしれない技も、同じパターンではもう通らない。

そんなエツジとは正反対にクレスは戦い始めた時と変わらぬ澄んだ闘気を燃やしたまま、冷静に対戦相手を見据える。

その手の中で未だその底知れぬ力を見せぬエターナルソードは、月光を反射して不気味な程に輝いていた。